熊本県文化財調査報告　第218集

YANAGI　MATI

柳　町　遺　跡　II

一般国道208号玉名バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2004.3

熊本県教育委員会

平成９年度　調査Ⅵ区・調査Ⅶ区

平成10年度　調査Ⅷ区・調査Ⅸ区

平成11年度　調査Ⅹ区

井戸側・井戸枠検出状況

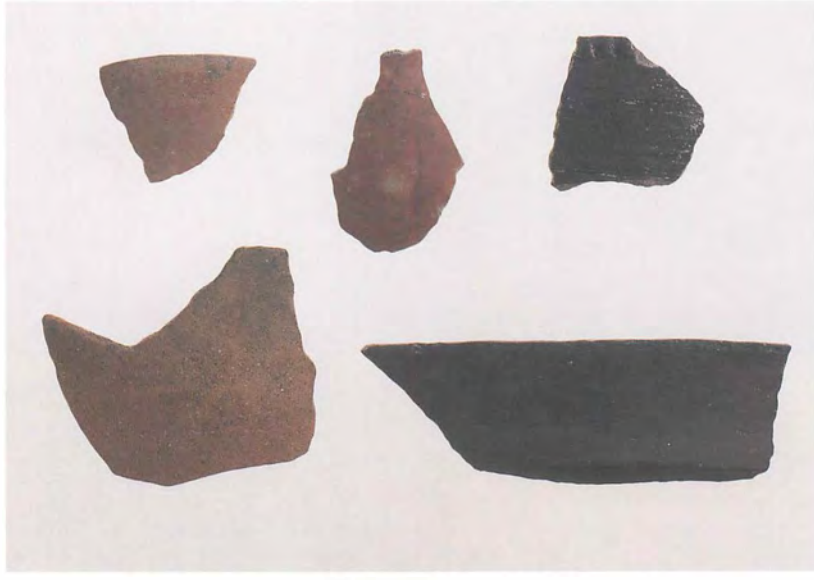
井戸側除去状況

井戸枠・垂木配置状況

井戸側除去状況

調査Ⅶ区　4SE017井戸側・井戸枠調査状況

縄　文



縄文晩期土器

仿製鏡

4SX049出土鏡片

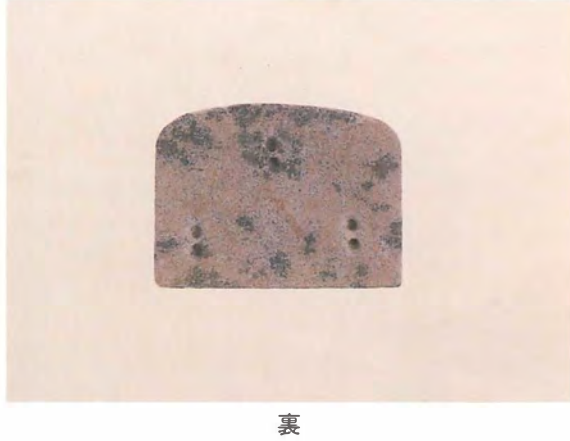
墨

5SE019出土墨

石帯（表）

表

石帯（裏）



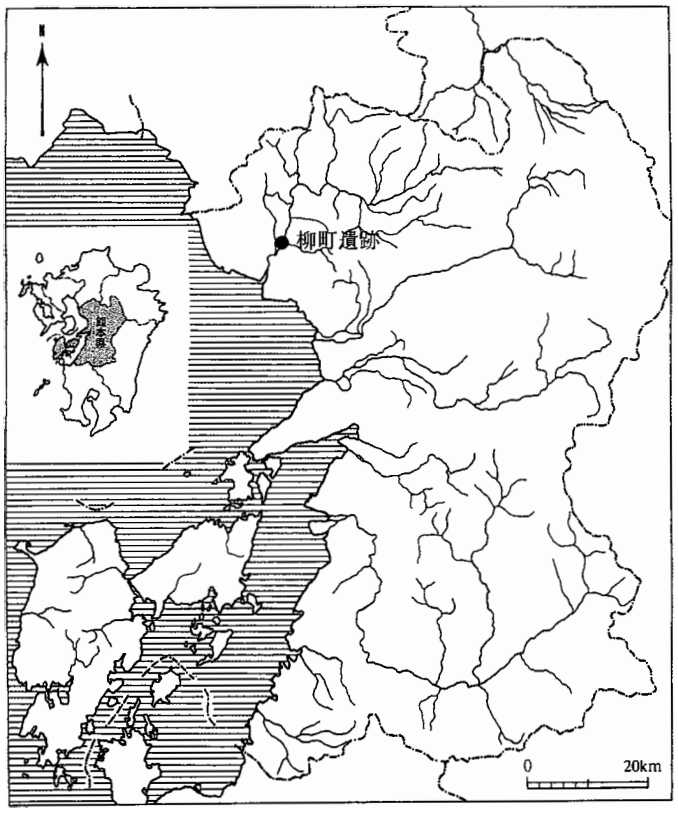
裏

調査Ⅷ区　包含層出土石帯

熊本県文化財調査報告 第218集

柳町遺跡 II

一般国道208号玉名バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



２００４年３月

熊 本 県 教 育 委 員 会

序　　文

熊本県教育委員会では、国土交通省九州地方建設局熊本工事事務所（当時）の計画した一般国道208号玉名バイパス改良事業にともない、玉名市大字河崎に所在する柳町遺跡の発掘調査を実施しました。

その調査成果のうち平成６～８年度までについては平成12年度に『柳町遺跡Ⅰ』として刊行しました。今回はその続編として、平成９～11年度までの柳町遺跡の発掘調査成果を本発掘調査報告書として刊行します。

本文にあるように、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世、近世へと連綿としてつづく集落跡の一部を確認できました。特に、古墳時代初頭の時期と古墳時代末期から古代の初頭の時期にかけて生活痕跡を竪穴住居跡・井戸跡、掘立柱建物跡などから窺うことができました。また、古墳時代初頭の集落を囲むように掘られた大きな溝状遺構を３本確認し、当時の集落景観復元に資料を提供しました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展にいささかでも寄与できれば、喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、多大の御協力をいただいた国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所ならびに貴重なご指導ご助言を賜りました現地指導の諸先生方及び玉名市河崎地区の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成16年３月31日

熊本県教育長　　田　中　力　男

例　　言

1　本書は熊本県教育委員会が国土交通省九州地方建設局熊本工事事務所（現九州地方整備局熊本河川国道事務所）の委託を受けて実施した、熊本県玉名市河崎字フケ、田中、尾畑に所在する柳町遺跡の調査Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ区の調査報告書である。

2　柳町遺跡の調査Ⅶ区は平成９年７月から平成10年４月まで、調査Ⅷ区は平成10年５月から平成11年４月まで、調査Ⅹ区は平成11年７月から平成12年４月までの期間、現地において熊本県教育庁文化課と玉名市教育委員会社会教育課（調査Ⅵ・Ⅸ区を実施）が発掘調査を実施した。

3　発掘調査にともなう遺構の実測ならびに現地の写真撮影は、調査Ⅶ区を高谷和生・坂田和弘・岡本真也・前川真由美・北原美和子が、調査Ⅷ区を坂田・岡本・濱田教靖・隈部香織が、調査Ⅹ区を坂田・出田久斉・濱田・石橋和久が行った。地形測量・遺構実測の一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。

4　調査区全体の４級基準点測量、各区の地形測量、取り上げ遺物データ化作業等は株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店で実施した。

5　各調査区の全体写真は写測エンジニアリング株式会社（Ⅶ区）・九州航空（Ⅷ・Ⅹ区）が撮影した。

6　整理作業は現地調査完了後の平成12年４月から平成15年３月までの３カ年を費やし、多くを熊本県文化財収蔵庫渡鹿分庫で実施した。ただし、木製品等についての作業の一部は柳町遺跡調査事務所内で実施した。

7　土器・陶磁器の実測は竹田知美・横田　愛・隈田章代・中林由紀・西村和美・岩下恵美子・川井田久子・平木智子・益田久子・古閑知子・藤江　望が、その他の土器はダイチプラン・株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。木器の実測は上野眞由美・藤本久美・小山奈美・財部久美子・一柳朱里・藤井ゆき・村上桂子が、石器は平川恵里子が、鉄器・青銅器等は戸田紀美子・藤江が行った。

8　遺構、遺物の製図は西村・戸田・境　美恵子・陶山千鶴子・平川が行った。また写真図版掲載の遺物の写真撮影は池田朋生・村田百合子・坂田が行った。

9　自然科学的分析は古環境研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社パレオ・ラボが行った。

10　出土した木製品等の保存処理及びその樹種同定は株式会社吉田生物研究所が行った。

11　本書の執筆は、第Ⅳ章自然科学的分析を除き、坂田が行った。

12　本書の編集は、坂田が行い、横田、西村、隈田が補佐した。

凡　　例

1　柳町遺跡調査Ⅰ区よりⅩ区までの全調査区位置関係図は2,500分の１とした。

2　現地での実測作業では遺構配置図を調査区毎に100分の１で作成することとし、本書への掲載はⅦ区・Ⅷ区・Ⅹ区とも200分の１とし図中に縮尺を示した。

3　現地での各遺構の実測縮尺は20分の１、10分の１で行った。本書への掲載縮尺は基本的に40分の１、20分の１で行い、図中に縮尺を示した。

4　遺構内より一括して出土している遺物出土状況図には、重要度に応じて平面図中に遺物番号を記しその位置を実線で示した。

5　出土遺物は全て通し番号とした。縮尺は土器では４分の１を基本とし、小型品を２分の１、大型品を８分の１とした。石器では４分の３、木器では10分の１、５分の１、２分の１とした。縮尺は図中に表示

した。

6　出土遺物の解説は本文中に記した。種別・形式・法量出土層位等については、別途一覧表を作成し、巻末に掲載した。

7　出土木製品は『柳町遺跡Ⅰ』(以下「柳町Ⅰ」という。)と同様に本書の遺物番号とともに柳町遺跡木製品番号（TY）を表中に併記した。また、図化分類と処理分類については「柳町Ⅰ」に習う。

8　遺構名称は「調査次数＋略記号＋遺構番号」で表すこととした。略記号は以下のとおりである。

竪穴住居跡（SI）・井戸跡（SE）・土坑跡（SK）・溝跡（SD）・

杭列（SM）・不明遺構及び「～状遺構」（SX）

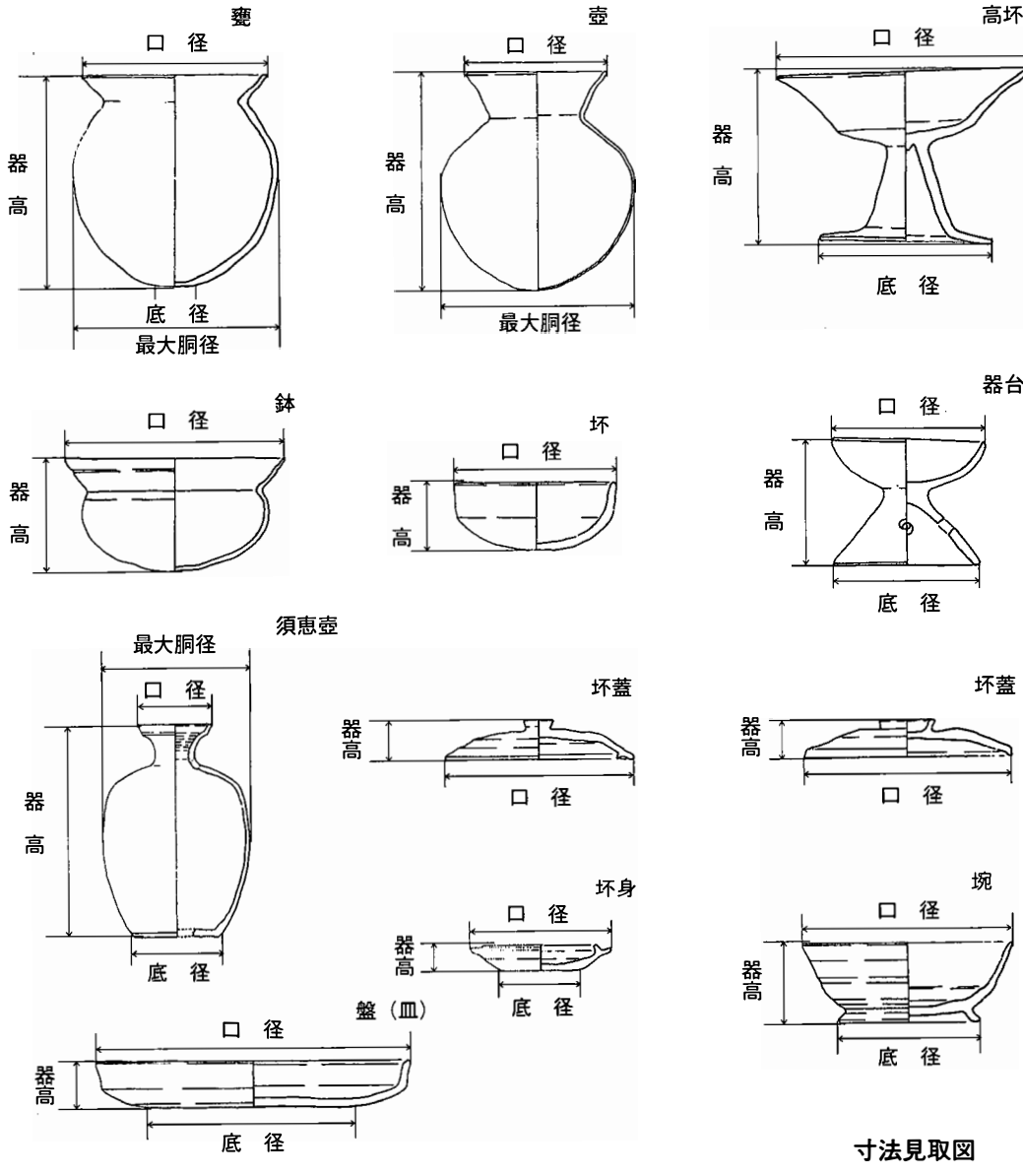
9　柳町遺跡出土木製品については、「柳町Ⅰ」(第５章３節）に一覧表としてまとめているが、その後名称などが変更になったものについてはその都度記載している。その他主な木製品の計測部位などは「柳町Ⅰ」に準じる。土器･石器についての計測部位は左記の模式図のとおりとし、その他の器種はそれに順ずる。

10　出土石器の図化にあたっては下記の注記を図中に記した。

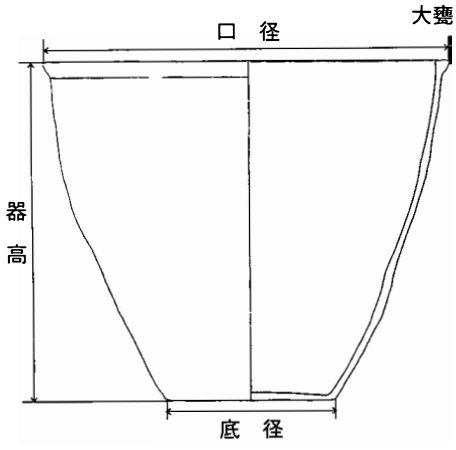
敲打痕　　研磨痕

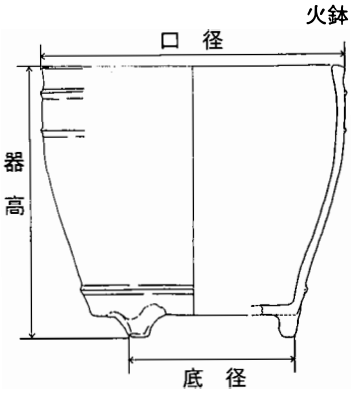
11　図中に表示してあるスクリーントーンについては以下の凡例による。

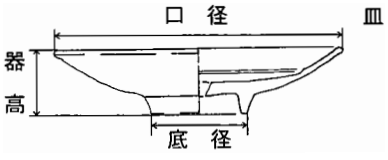
竪穴住居跡焼土箇所　　木製品樹皮部分

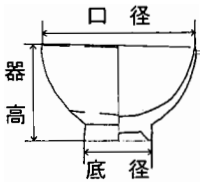


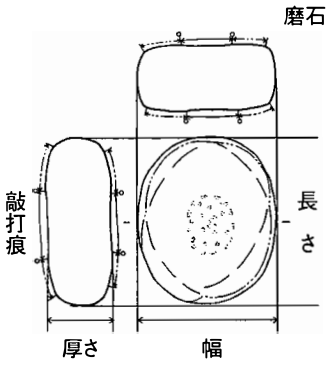
寸法見取図

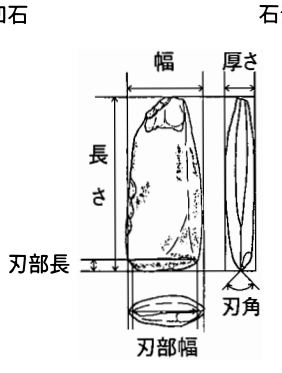

大甕
口　径
器高
底　径

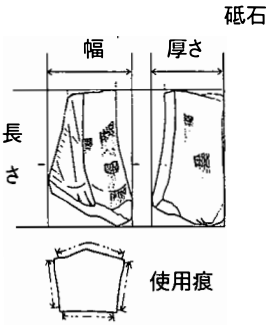

火鉢
口　径
器高
底　径

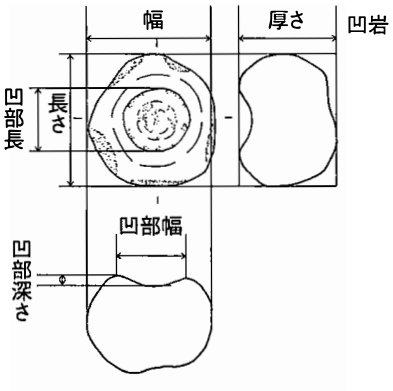

口　径
皿
器高
底　径

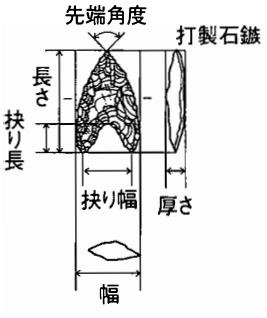

口　径
椀
器高
底　径

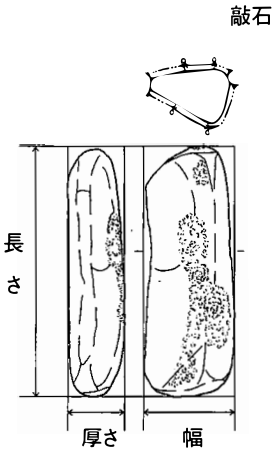

磨石・凹石
敲打痕
長さ
厚さ
幅

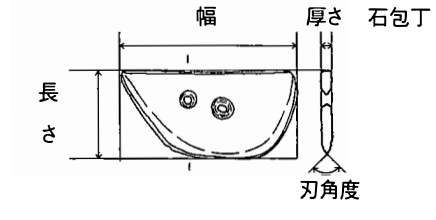

石斧
幅
厚さ
長さ
刃部長
刃角
刃部幅

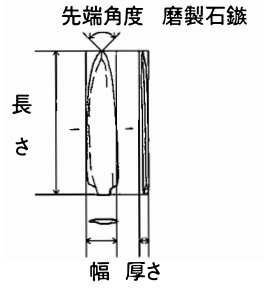

砥石
幅
厚さ
長さ
使用痕


凹岩
幅
厚さ
凹部長
長さ
凹部幅
凹部深さ


先端角度
打製石鏃
長さ
抉り長
抉り幅
厚さ
幅


敲石
長さ
厚さ
幅


石包丁
幅
厚さ
長さ
刃角度


先端角度　磨製石鏃
長さ
幅　厚さ

寸法見取図

本　文　目　次

巻頭カラー

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査体制･調査組織･関係者など　……1

（１）発掘調査作業

（平成９～11年度）……1

（２）整理作業・報告書作成作業

（平成12～14年度）……1

（３）専門調査員、調査協力者等　……1

第２節　調査の経過　……2

（１）調査前協議　……2

（２）調査日記抄　……3

①　平成９年度　……3

②　平成10年度　……4

③　平成11年度　……4

④　平成12年度　……5

⑤　平成13年度　……6

⑥　平成14年度　……6

第３節　調査成果の普及・広報活動　……6

（１）発掘調査説明会（現地説明会）……6

（２）資料公開と貸出・遺跡の発表

資料の貸出　……8

第４節　調査区の設定　……8

第５節　調査の方法　……9

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の層位について　……11

第２節　各区調査内容の概要　……21

（１）第４次調査の概要　……21

（２）第５次調査の概要　……21

（３）第６次調査の概要　……22

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　縄文時代～弥生時代中期の遺構と遺物

……23

（１）縄文時代の遺物　……23

（２）竪穴遺構と出土遺物　……28

（３）自然流路関係遺構と出土遺物　……29

（４）包含層中の遺物　……45

第２節　弥生時代終末～古墳時代前期・中期の

遺構と遺物　……57

（１）遺構の分布状況　……57

（２）竪穴住居跡と出土遺物　……58

（３）掘立柱建物跡　……88

（４）井戸跡と出土遺物　……89

（５）土坑と出土遺物　……107

（６）大溝状遺構と出土遺物　……145

（７）水田に関わる遺構　……212

（８）b－34グリッド内トレンチ出土遺物

……214

（９）c－34グリッド内土器集中部　……216

第３節　古墳時代終末～古代の遺構と遺物　…228

（１）遺構の分布状況　……228

（２）掘立柱建物跡と柱　……229

（３）竪穴住居跡と出土遺物　……237

（４）井戸跡と出土遺物　……243

（５）土坑と出土遺物　……263

（６）４SX038及び関連遺構と出土遺物　…266

（７）道路状遺構と出土遺物　……290

（８）その他の遺構と出土遺物　……295

（９）包含層中の遺物　……301

第４節　中世以降の遺構と遺物　……319

（１）中世の遺構の分布状況　……319

（２）掘立柱建物跡　……319

（３）池状遺構と出土遺物　……320

（４）近世以降の遺構と遺物　……327

第Ⅳ章　自然科学的分析

第１節　柳町遺跡の自然科学分析
（パリノ･サーヴェイ株式会社）……401
第２節　熊本県、柳町遺跡における自然科学分析
（株式会社　古環境研究所）……407
Ⅰ　柳町遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析　……407
Ⅱ　柳町遺跡4SE005(井戸)における花粉分析……414
Ⅲ　柳町遺跡4SE005(井戸)における種実同定分析……418
Ⅳ　柳町遺跡出土炭化材の樹種同定　……420
Ⅴ　柳町遺跡における放射性炭素年代測定結果……423
第３節　熊本県、柳町遺跡における自然科学分析
（株式会社　古環境研究所）……425
Ⅰ　柳町遺跡における放射性炭素年代測定……425
Ⅱ　柳町遺跡におけるプラント・オパール分析……427
Ⅲ　柳町遺跡における花粉分析　……434
Ⅳ　柳町遺跡における珪藻分析　……440
Ⅴ　柳町遺跡における種実同定　……449
Ⅵ　柳町遺跡出土木材の樹種同定　……452
第４節　柳町遺跡出土須恵器・陶器の蛍光Ｘ線分析（パレオ･ラボ　小村　美代子）……457
第５節　熊本県柳町遺跡出土木製品の樹種調査結果
（株式会社　吉田生物研究所　汐見 真・京都造形芸術大学　岡田文男）……466
第６節　熊本県柳町遺跡出土近世漆椀の塗膜構造調査
（株式会社 吉田生物研究所 本吉恵里子･京都造形芸術大学　岡田文男）……488

第Ⅴ章　調査成果の総括

第１節　遺跡の立地と変遷 ……491
第２節　縄文時代～弥生時代の遺構と遺物 …493
（１）遺構（自然流路と堰状遺構） ……493
（２）遺物 ……493
ア）縄文時代晩期初頭の遺物 ……493
イ）縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺物 ……494
第３節　古墳時代の遺構と遺物 ……497
（１）遺構 ……497
①　大溝状遺構 ……497
②　竪穴住居跡 ……499
③　井戸跡と井戸類似土抗について …501
（２）遺物 ……502
①　古墳時代前期の土器 ……502
②　鏡について ……505
③　木製品について ……505
第４節　古代の遺構と遺物 ……506
（１）出土遺構の検討 ……506
a　掘立柱建物跡 ……506
b　竪穴住居跡 ……507
c　井戸跡と祭祀……508
（２）遺物 ……509
ア）土器の分類について ……509
a　須恵器 ……509
b　土師器 ……514
イ）編年について ……515
c　木製品……515
d　墨・硯・小刀・水滴 ……515
e　墨書土器・刻書土器……518
f　「爪形状圧痕」のある土器……519
g　ヘラ記号のある土器……520
h　銙具について ……523
第５節　中世以降の遺構と遺物 ……526
（１）　遺構 ……526
（２）　遺物 ……527
第６節　まとめ ……527

挿 図 目 次

第１図　柳町遺跡全調査区位置関係図 …… 7
第２図　平成９年度～11年度柳町遺跡調査区位置関係図 ……10
第３図　調査Ⅶ区土層断面実測図 ……12
第４図　調査Ⅷ区土層断面実測図 ……13
第５図　調査Ⅷ区土層断面実測図 ……14
第６図　調査Ⅷ区土層断面実測図 ……15
第７図　調査Ｘ区土層断面実測図 ……16
第８図　調査Ｘ区土層断面実測図 ……17
第９図　柳町遺跡Ⅱ基本土層図 ……18
第10図　縄文後期～晩期土器実測図 ……24
第11図　縄文晩期土器実測図 ……25
第12図　5SK067実測図 ……26
第13図　弥生前期土器実測図 ……26
第14図　6SX049（自然流路）実測図 ……27
第15図　調査Ｘ－１区内6SX049実測図 ……28
第16図　調査Ｘ区土層断面実測図 ……29
第17図　h－37グリッド確認トレンチ平面・土層断面実測図 ……30
第18図　h－38グリッド6SX049実測図 ……32
第19図　6SX054堰状遺構実測図 ……33
第20図　6SM055杭列実測図 ……34
第21図　6SX049内流木出土状況実測図 ……35
第22図　6SX049出土木製品等実測図 ……37
第23図　6SX054部材実測図 ……38
第24図　6SX054部材実測図 ……39
第25図　6SX054部材実測図 ……40
第26図　6SX054部材実測図 ……41
第27図　6SX054部材実測図 ……42
第28図　6SX054部材実測図 ……43
第29図　6SX054部材実測図 ……44
第30図　6SX049内出土網代実測図 ……45
第31図　6SX049出土石器類実測図 ……46
第32図　縄文晩期～弥生前期土器実測図 ……48
第33図　弥生前期～中期土器実測図 ……49
第34図　弥生中期土器実測図 ……50
第35図　包含層出土石器実測図１ ……52
第36図　包含層出土石器実測図２ ……53
第37図　包含層出土石器実測図３ ……54
第38図　j－40グリッド出土木製品実測図 ……56.
第39図　調査Ⅶ・Ⅷ区内古墳時代前期遺構配置図 ……57
第40図　調査Ｘ区内古墳時代前期遺構配置図 …58
第41図　4SI007実測図 ……59
第42図　4SI007出土土器実測図 ……61
第43図　4SI007出土土器実測図 ……62
第44図　4SI007出土土器実測図 ……63
第45図　4SI007出土土器実測図 ……64
第46図　4SI007出土土器実測図 ……65
第47図　4SI011実測図 ……66
第48図　4SI011出土石器実測図 ……66
第49図　4SI013実測図 ……67
第50図　4SI013出土土器実測図 ……69
第51図　4SI013出土石器実測図 ……70
第52図　4SI029実測図 ……71
第53図　4SI029出土土器実測図 ……73
第54図　5SI029遺物出土状況実測図 ……74
第55図　5SI029実測図 ……75
第56図　5SI029出土土器実測図 ……76
第57図　5SI029出土土器実測図 ……77
第58図　5SI029出土土器実測図 ……78
第59図　5SI029出土土器実測図 ……79
第60図　5SI033実測図 ……82
第61図　5SI033出土土器実測図 ……83
第62図　5SI035実測図 ……85
第63図　5SI035出土遺物実測図 ……85
第64図　5SI039実測図 ……86
第65図　5SI039出土土器実測図 ……87
第66図　4SB008実測図 ……88
第67図　4SE005実測図 ……90
第68図　4SE005出土土器実測図 ……92
第69図　4SE005出土土器実測図 ……93
第70図　4SE005出土石器実測図 ……94
第71図　4SE005出土木製品等実測図 ……95
第72図　4SE042・4SE055実測図 ……96
第73図　4SE042出土土器実測図 ……97

第74図　4SE055出土土器実測図 ……98
第75図　5SE060遺物出土状況実測図 ……99
第76図　5SE060実測図 ……100
第77図　5SE060出土土器実測図 ……101
第78図　5SE060出土土器実測図 ……102
第79図　5SE064実測図 ……104
第80図　5SE064出土土器実測図 ……105
第81図　6SE053実測図 ……106
第82図　4SK027実測図 ……108
第83図　4SK027出土土器実測図 ……109
第84図　4SK060実測図 ……109
第85図　5SK052・5SK053実測図 ……110
第86図　5SK052出土土器実測図 ……113
第87図　5SK053出土土器実測図 ……114
第88図　5SK061・5SK063実測図 ……115
第89図　5SK061出土土器実測図 ……116
第90図　5SK063出土土器実測図 ……117
第91図　4SK004実測図 ……118
第92図　4SK004出土土器実測図 ……118
第93図　4SD014・4SK015・4SK024実測図 …119
第94図　4SK015出土土器実測図 ……120
第95図　4SK006実測図 ……120
第96図　4SK006出土土器実測図 ……122
第97図　4SK006出土土器実測図 ……123
第98図　4SK006出土土器実測図 ……124
第99図　4SK006出土土器実測図 ……125
第100図　4SK006出土土器実測図 ……126
第101図　4SK006出土石器実測図 ……127
第102図　4SK010実測図 ……129
第103図　5SK032遺物出土状況実測図 ……130
第104図　5SK032出土土器実測図 ……131
第105図　5SK032出土石器実測図 ……132
第106図　5SK036実測図 ……133
第107図　5SK036出土遺物実測図 ……134
第108図　4SK009実測図 ……135
第109図　4SK009出土土器実測図 ……136
第110図　4SK009出土遺物実測図 ……138
第111図　4SK025実測図 ……139
第112図　4SK032・4SK030・4SK037・4SK039・
4SK022・4SK026実測図 ……140
第113図　4SK030・4SK032出土土器実測図 …141
第114図　4SK037出土土器実測図 ……141
第115図　4SK039出土土器実測図 ……142
第116図　4SK022・4SK026出土土器実測図 …143
第117図　5SK037実測図 ……144
第118図　5SK037出土土器実測図 ……144
第119図　4SX049実測図 ……146
第120図　4SX049実測図 ……148
第121図　4SX049出土土器実測図 ……150
第122図　4SX049出土土器実測図 ……151
第123図　4SX049出土土器実測図 ……154
第124図　4SX049出土土器実測図 ……155
第125図　4SX049出土土器実測図 ……156
第126図　4SX049出土土器実測図 ……157
第127図　4SX049出土土器実測図 ……158
第128図　4SX049出土青銅鏡実測図 ……158
第129図　4SX049出土木製品実測図 ……159
第130図　4SX049出土木製品実測図 ……160
第131図　4SX049出土木製品実測図 ……161
第132図　4SX049出土木製品実測図 ……162
第133図　4SX049出土木製品実測図 ……163
第134図　4SX049出土木製品実測図 ……164
第135図　4SX049出土木製品実測図 ……165
第136図　4SX049出土木製品実測図 ……166
第137図　4SX049出土木製品実測図 ……167
第138図　4SX049出土木製品実測図 ……168
第139図　4SX049出土石器実測図 ……169
第140図　4SM053・4SM063・4SM064実測図 …172
第141図　4SM053杭実測図 ……173
第142図　4SM063・4SM064杭実測図 ……175
第143図　5SX040・5SX048・5SX054・5SX056
全体図 ……177
第144図　5SX040上面遺物出土状況実測図 ……178
第145図　5SX040上面遺物出土状況実測図 ……179
第146図　5SX040下面実測図 ……180
第147図　5SX040下面実測図
（含5SX048・5SX054） ……181
第148図　5SX040下面実測図
（含5SX048・5SX054・5SX056）……182
第149図　5SX040出土土器実測図 ……185

第150図　5SX040出土土器実測図 ……186
第151図　5SX040出土土器実測図 ……188
第152図　5SX040出土土器実測図 ……191
第153図　5SX040出土土器実測図 ……192
第154図　5SX040出土土器実測図 ……193
第155図　5SX040出土木製品実測図 ……195
第156図　5SX040出土木製品実測図 ……196
第157図　5SX040出土木製品実測図 ……197
第158図　5SX040出土木製品実測図 ……198
第159図　5SX040出土石器実測図 ……199
第160図　5SX040出土石器実測図 ……200
第161図　5SX051実測図 ……203
第162図　5SX051出土土器実測図 ……205
第163図　5SX051出土土器実測図 ……207
第164図　5SX051出土木製品実測図 ……208
第165図　5SX051出土木製品実測図 ……209
第166図　5SX051出土木製品実測図 ……210
第167図　5SX051出土石器実測図 ……211
第168図　5SX038実測図 ……211
第169図　5SX038出土土器実測図 ……212
第170図　5SX050実測図 ……212
第171図　4SK061・4SK062・4SD065実測図 ……213
第172図　b－34グリッド内トレンチ遺物出土状況実測図 ……214
第173図　b－34グリッドトレンチ内出土土器実測図 ……215
第174図　c－34グリッド土器集中部実測図 ……216
第175図　c－34グリッド土器集中部土器実測図 ……217
第176図　c－34グリッド土器集中部土器実測図 ……218
第177図　包含層出土土器実測図 ……220
第178図　包含層出土土器実測図 ……221
第179図　包含層出土土器実測図 ……222
第180図　包含層出土土器実測図 ……223
第181図　包含層出土土器実測図 ……224
第182図　包含層出土遺物実測図 ……225
第183図　包含層出土石器実測図 ……225
第184図　調査Ⅶ・Ⅷ区古代遺構配置図 ……228
第185図　調査Ⅶ区古代掘立柱建物跡等集中域実測図 ……230
第186図　4SB001・4SB002実測図 ……232
第187図　4SB003・4SB031実測図 ……233
第188図　4SB034実測図 ……234
第189図　4SB034残存柱材実測図 ……235
第190図　4SB036実測図 ……236
第191図　5SB018実測図 ……236
第192図　5SB018柱掘り方内出土石器実測図 …237
第193図　4SI012実測図 ……238
第194図　4SI012出土遺物実測図1 ……239
第195図　4SI012出土遺物実測図2 ……240
第196図　4SI016遺物出土状況実測図 ……242
第197図　4SI016出土土器実測図 ……243
第198図　5SI031実測図 ……244
第199図　5SI031出土土器実測図 ……244
第200図　4SE017実測図 ……245
第201図　4SE017実測図 ……246
第202図　4SE017掘り方内出土土器実測図 ……247
第203図　4SE017上部出土遺物実測図 ……248
第204図　4SE017井戸枠内下層出土土器実測図 ……249
第205図　4SE017出土木製品実測図 ……250
第206図　5SE059実測図 ……252
第207図　5SE059出土土器実測図 ……253
第208図　5SE059出土木製品実測図 ……254
第209図　5SE019実測図 ……255
第210図　5SE019出土土器・木製品実測図 ……256
第211図　4SE043実測図 ……257
第212図　4SE043出土土器実測図 ……258
第213図　4SE043出土土器実測図 ……259
第214図　4SE043出土木製品実測図 ……261
第215図　5SE024実測図 ……262
第216図　5SE024出土土器実測図 ……263
第217図　4SK040実測図 ……263
第218図　4SK040・4SD051・4SD066出土土器実測図 ……264
第219図　5SK057実測図 ……265
第220図　5SK057出土土器実測図 ……265
第221図　5SK058実測図 ……266

第222図　5SK058出土土器実測図 ……267
第223図　4SX038実測図 ……268
第224図　4SX038部分実測図 ……269
第225図　4SX038部分実測図 ……270
第226図　4SX038出土土器実測図 ……271
第227図　4SX038出土土器実測図 ……273
第228図　4SX038出土土器実測図 ……275
第229図　4SX038出土土器実測図 ……276
第230図　4SX038出土土器実測図 ……277
第231図　4SX038出土土器実測図 ……278
第232図　4SX038出土遺物実測図 ……279
第233図　4SX038出土土器実測図 ……280
第234図　4SX038出土土器実測図 ……281
第235図　4SX038出土土器実測図 ……282
第236図　4SX038出土土器実測図 ……283
第237図　4SX038出土遺物実測図 ……284
第238図　4SX038出土土器実測図 ……284
第239図　4SX038出土遺物実測図 ……285
第240図　4SX038出土木製品実測図 ……285
第241図　4SX038出土木製品実測図 ……287
第242図　4SX038出土木製品実測図 ……288
第243図　4SM041実測図 ……290
第244図　4SX056実測図 ……290
第245図　4SX056伴出木製品等実測図 ……291
第246図　4SX056伴出木製品実測図 ……292
第247図　4SX056伴出木製品実測図 ……293
第248図　調査Ｘ－1区内遺構配置図 ……294
第249図　道路状遺構実測図 ……295
第250図　6SX052・6SX050・6SX002出土遺物
実測図 ……296
第251図　4SD050・4SD051・4SD052実測図 …296
第252図　包含層出土土器実測図 ……303
第253図　包含層出土土器実測図 ……304
第254図　包含層出土土器実測図 ……306
第255図　包含層出土土器実測図 ……307
第256図　包含層出土土器実測図 ……308
第257図　包含層出土土器実測図 ……309
第258図　包含層出土土器実測図 ……310
第259図　包含層出土土器実測図 ……311
第260図　包含層出土土器実測図 ……313
第261図　包含層出土遺物実測図 ……314
第262図　包含層出土石帯実測図 ……315
第263図　包含層出土遺物実測図 ……315
第264図　包含層出土遺物実測図 ……316
第265図　包含層出土遺物実測図 ……317
第266図　調査Ⅷ区内中世遺構配置図 ……319
第267図　5SB014実測図 ……320
第268図　5SX022・5SX023・5SK044・5SK045・
5SK046実測図 ……321
第269図　5SX023に伴う杭列断面実測図 ……322
第270図　5SX022出土土器実測図 ……322
第271図　5SX022出土石器類実測図 ……323
第272図　5SX023出土土器実測図 ……324
第273図　5SX023に伴う木製品実測図 ……325
第274図　5SX023に伴う木製品実測図 ……326
第275図　5SX023出土石器実測図 ……327
第276図　包含層出土石器実測図……328
第277図　5SK016実測図 ……329
第278図　5SK016出土木製品実測図 ……330
第279図　5SK016出土木製品実測図 ……331
第280図　5SK016出土木製品実測図 ……332
第281図　5SK016出土石器実測図 ……333
第282図　調査Ｘ－1区内近代以降遺構配置図 …334
第283図　調査Ｘ－1区内近世遺構配置図 ……335
第284図　土坑実測図 ……336
第285図　6SK004・6SK005・6SK030出土土器実測図
……337
第286図　6SK004出土石板実測図 ……337
第287図　調査Ｘ－1区ピット集中域実測図 ……339
第288図　調査Ｘ－2区遺構配置図・土層断面図
……340
第289図　6SX502・6SX504実測図 ……341
第290図　6SX503実測図 ……341
第291図　6SX505実測図 ……347
第292図　6SX506・6SX507実測図 ……348
第293図　6SD501実測図 ……350
第294図　近世陶器実測図 ……351
第295図　近世陶器実測図 ……352
第296図　近世陶器実測図 ……353
第297図　近世陶器実測図 ……354

第298図　近世陶器実測図 ……355
第299図　近世陶器実測図 ……356
第300図　近世陶器実測図 ……357
第301図　近世陶器実測図 ……358
第302図　近世陶器実測図 ……359
第303図　近世陶器実測図 ……360
第304図　近世陶器実測図 ……361
第305図　近世陶器実測図 ……362
第306図　近世陶器実測図 ……363
第307図　近世磁器実測図 ……364
第308図　近世磁器実測図 ……366
第309図　近世磁器実測図 ……368
第310図　近世磁器実測図 ……369
第311図　近世磁器実測図 ……370
第312図　近世磁器実測図 ……371
第313図　近世磁器実測図 ……373
第314図　近世磁器実測図 ……374
第315図　近世磁器実測図 ……375
第316図　輸入陶磁器実測図 ……376
第317図　輸入陶磁器実測図 ……377
第318図　6SX503出土土器実測図 ……379
第319図　6SX504出土土器実測図 ……380
第320図　6SX504出土土器実測図 ……381
第321図　6SX504出土土器実測図 ……382
第322図　6SX505出土土器実測図 ……383
第323図　6SX504・6SX506・6SX507出土土器
実測図 ……384
第324図　包含層出土土器実測図 ……385
第325図　包含層出土土器実測図 ……387
第326図　包含層出土土器実測図 ……388
第327図　包含層出土土器実測図 ……389
第328図　包含層出土土器実測図 ……390
第329図　包含層出土土器実測図 ……391
第330図　包含層出土土器実測図 ……392
第331図　包含層出土遺物実測図 ……393
第332図　6SX504・506・507出土木製品実測図
……394
第333図　6SX505出土木製品実測図 ……395
第334図　X－2区溝状遺構出土漆椀実測図 ……396
第335図　X－2区溝状遺構内出土石製品実測図
……397
第336図　X－2区包含層出土石製品実測図 ……398
第337図　出土銭貨拓影図 ……400
第338図　分析試料採取地点位置図 ……406
第339図　V－26グリッドNo.1トレンチにおける
プラント・オパール分析結果 ……411
第340図　V－26グリッドNo.2トレンチにおける
プラント・オパール分析結果 ……411
第341図　4SE005における植物珪酸体分析結果
……411
第342図　Ⅶ区における花粉ダイヤグラム ……415
第343図　X区分析試料採取地点位置図 ……424
第344図　X区におけるプラント・オパール分析結果
……431
第345図　4SE017における花粉組成図 ……438
第346図　5SX049における花粉組成図 ……438
第347図　5SX051における花粉組成図 ……438
第348図　6SX049における主要珪藻ダイヤグラム
……445
第349図　5SX051における主要珪藻ダイヤグラム
……445
第350図　5SX049における主要珪藻ダイヤグラム
……445
第351図　蛍光X線分析試料採取地点位置図 …456
第352図　蛍光X線分析比較試料採取地点位置図
……456
第353図　試料須恵器の第1－第2主成分分析分布図
……459
第354図　K－Rb分布図 ……459
第355図　Mn－Zr分布図 ……459
第356図　柳町遺跡Ⅶ区・Ⅷ区出土分析試料及び
比較試料実測図 ……463
第357図　荒尾窯跡群丸山窯跡採集須恵器試料
実測図 ……464
第358図　宇城窯跡群萩尾大溜池窯跡採集須恵器
試料実測図 ……464
第359図　大溝状遺構位置図 ……496
第360図　古墳時代の井戸跡並びに類似土坑集成図
……500

第361図　古代の井戸跡集成図 ……507
第362図　古代須恵器分類図 ……510
第363図　古代須恵器分類図 ……511
第364図　古代土師器分類図 ……513
第365図　硯・転用硯・墨集成図 ……516
第366図　墨書・刻書土器集成図 ……519
第367図　爪形状圧痕土器集成図 ……520
第368図　ヘラ記号土器集成図 ……521
第369図　ヘラ記号土器集成図 ……522
第370図　柳町遺跡出土銙具集成図 ……523
第371図　柳町遺跡周辺字図 ……526

表　目　次

第 Ⅳ 章

第１節
表１　放射性炭素年代測定結果 ……402
表２　樹種同定結果 ……402
第２節
表１　柳町遺跡Ⅶ区におけるプラント・オパール分析結果 ……410
表２　柳町遺跡Ⅶ区における植物珪酸体分析結果 ……410
表３　柳町遺跡Ⅶ区における花粉分析結果 ……416
表４　柳町遺跡Ⅶ区における種実同定結果 ……419
表５　柳町遺跡Ⅶ区出土炭化材の樹種同定結果 ……420
第３節
表１　柳町遺跡Ｘ区におけるプラント・オパール分析結果 ……430
表２　柳町遺跡における花粉分析結果 ……437
表３　柳町遺跡Ⅷ・Ｘ区における珪藻分析結果－１－ ……443
表４　柳町遺跡Ⅷ・Ｘ区における珪藻分析結果－２－ ……444
表５　柳町遺跡出土木材の樹種同定結果 …452
第４節
表１　柳町遺跡出土須恵器・陶器胎土の特徴 ……461
表２　丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡表採須恵器胎土の特徴 ……461
表３　柳町遺跡出土・益城郡家跡表採須恵器・陶器胎土の主成分元素、微量元素の分析値 ……462
表４　丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡表採須恵器胎土の主成分元素､微量元素の分析値 ……462
表５　荒尾丸山窯跡表採須恵器観察表 ……465
表６　萩尾大溜池窯跡表採須恵器観察表 …465
第５節
表１　柳町遺跡出土木製品樹種同定表 ……474
第６節
表１　調査資料一覧表 ……488
表２　塗膜断面の観察結果 ……488

第 Ⅴ 章

表１　検出住居跡 ……499
表２　井戸跡及び井戸類似遺構 ……501
表３　掘立柱建物跡 ……506
表４　竪穴住居跡 ……508
表５　井戸跡 ……509

観　察　表　目　次

表１　土器類観察表　……531
表２　土製模造品　……565
表３　陶磁器類観察表　……570
表４　石器類観察表　……587
表５　鉄器一覧表　……613
表６　木製品等観察表　……616
表７　古銭観察表　……625

写　真　図　版　目　次

図版１　調査Ｘ－１区遺構・遺物出土状況
図版２　調査Ｘ－１区遺物出土状況
図版３　調査Ⅶ・Ⅷ区住居跡検出状況・遺物出土状況
図版４　調査Ⅷ区住居跡完掘状況・井戸跡検出・遺物出土状況
図版５　調査Ⅶ・Ⅷ区井戸跡検出・遺物出土状況・完掘状況
図版６　調査Ⅶ・Ⅷ・Ｘ－１区井戸跡・土坑検出・遺物出土状況・完掘状況
図版７　調査Ⅶ・Ⅷ区土坑遺物出土状況・完掘状況
図版８　調査Ⅶ・Ⅷ区大溝状遺構遺物出土状況・完掘状況
図版９　調査Ⅷ区大溝状遺構遺物出土状況・完掘状況、溝遺構・連結土坑完掘状況
図版10　掘立柱建物跡完掘状況・柱検出状況、円盤状板材出土状況
図版11　掘立柱建物跡完掘状況、竪穴住居跡遺物出土状況・完掘状況
図版12　調査Ⅶ区蒸篭形井戸跡検出状況・井戸枠・遺物出土状況
図版13　調査Ⅶ区井形井戸跡井戸枠・部材検出状況、遺物出土状況、井戸跡遺物出土状況・完掘状況
図版14　不明遺構（4SX038）検出･遺物出土状況、井戸跡遺物出土状況（２）
図版15　井戸跡、道路状遺構、池状遺構等完掘状況
図版16　調査Ｘ－２区遺構検出状況・遺物出土状況・完掘状況
図版17　縄文時代晩期～弥生時代中期土器
図版18　弥生時代後期～古墳時代初期土器
図版19　古墳時代前期土器（１）甕
図版20　古墳時代前期土器（２）甕
図版21　古墳時代前期土器（３）甕
図版22　古墳時代前期土器（４）甕
図版23　古墳時代前期土器（５）甕
図版24　古墳時代前期土器（６）甕・壺
図版25　古墳時代前期土器（７）壺
図版26　古墳時代前期土器（８）壺
図版27　古墳時代前期土器（９）高坏・器台
図版28　古墳時代前期土器（10）鉢
図版29　古墳時代前期土器（11）鉢・坏
図版30　古墳時代前期土器（12）小型壺
図版31　古墳時代前期土器（13）小型壺・土製模造品・甑
図版32　古墳時代前期土製模造品・土製勾玉・土玉・砥石・土錘
図版33　古墳時代終末～古代須恵器（１）蓋
図版34　古墳時代終末～古代須恵器（２）蓋
図版35　古墳時代終末～古代須恵器（３）蓋・高台付坏・埦
図版36　古墳時代終末～古代須恵器（４）高台付坏・坏・高坏
図版37　古墳時代終末～古代須恵器（５）壺・鉢類
図版38　古墳時代終末～古代須恵器（６）提瓶・小型壺・緑釉陶器・越州窯青磁・硯・墨書等
図版39　古墳時代末～古代土師器（１）坏
図版40　古墳時代末～古代土師器（２）坏・盤・甕・墨書・石帯・金環
図版41　中世～近世土師器坏・瓦質土器

図版42　中世～近世瓦質土器　捏鉢・火鉢・大甕
図版43　輸入磁器　皿・鉢・瓶・壺
図版44　近世陶器（１）皿
図版45　近世陶器（２）鉢･香炉･瓶･擂鉢
図版46　近世陶器（３）近世磁器（１）
図版47　近世磁器（２）土製人形・土製品類
図版48　土製人形・土製品類
図版49　弥生時代前期木製品・網代
図版50　古墳時代前期木製品（１）
図版51　古墳時代前期木製品（２）
図版52　古墳時代前期木製品（３）
図版53　古墳時代前期木製品（４）
図版54　古代井戸枠、垂木、井戸側
図版55　古代井戸出土木製品・古代不明遺構出土木製品・古代掘立柱建物柱
図版56　中世・近世木製品、ウミガメ甲羅
図版57　鉄滓・鉄器（刀子・鋤先）・貨銭・小刀・キセル
図版58　出土石器　石鏃・石斧・磨石・凹石・磨製石鏃・石庖丁・台石
図版59　石製品　滑石製有孔石製品・石鍋・軽石製模造品・石臼

第　Ⅳ　章

第１節　柳町遺跡出土木製品樹種顕微鏡写真－１－ ……405
柳町遺跡出土木製品種実顕微鏡写真－２－ ……406
第２節　植物珪酸体の顕微鏡写真－１－ ……412
植物珪酸体の顕微鏡写真－２－ ……413
柳町遺跡出土花粉・胞子遺体顕微鏡写真 ……417
柳町遺跡出土種実顕微鏡写真 ……419
柳町遺跡出土木製品炭化材及び木材の顕微鏡写真 ……422
第３節　植物珪酸体の顕微鏡写真－１－ ……432
植物珪酸体の顕微鏡写真－２－ ……433
柳町遺跡出土花粉顕微鏡写真 ……439
柳町遺跡の珪藻－１－ ……446
柳町遺跡の珪藻－２－ ……447
柳町遺跡の珪藻－３－ ……448
柳町遺跡出土種実顕微鏡写真 ……451
柳町遺跡出土木製品樹種顕微鏡写真－１－ ……454
柳町遺跡出土木製品樹種顕微鏡写真－２－ ……455
第５節　柳町遺跡Ⅶ区出土木製品樹種顕微鏡写真－１－ ……476
柳町遺跡Ⅶ区出土木製品樹種顕微鏡写真－２－ ……477
柳町遺跡Ⅶ区出土木製品樹種顕微鏡写真－３－ ……478
柳町遺跡Ⅶ区出土木製品樹種顕微鏡写真－４－ ……479
柳町遺跡Ⅶ区出土木製品樹種顕微鏡写真－５－ ……480
柳町遺跡Ⅷ区出土木製品樹種顕微鏡写真－６－ ……481
柳町遺跡Ⅷ区出土木製品樹種顕微鏡写真－７－ ……482
柳町遺跡Ⅷ区出土木製品樹種顕微鏡写真－８－ ……483
柳町遺跡Ⅷ区出土木製品樹種顕微鏡写真－９－ ……484
柳町遺跡Ⅷ区出土木製品樹種顕微鏡写真－10－ ……485
柳町遺跡Ｘ区出土木製品樹種顕微鏡写真－11－ ……486
柳町遺跡Ｘ区出土木製品樹種顕微鏡写真－12－ ……487
第６節　柳町遺跡出土近世漆椀塗膜構造顕微鏡写真 ……490

巻頭カラー図版目次

1　平成９年度 調査Ⅵ区・調査Ⅶ区

2　平成10年度 調査Ⅷ区・調査Ⅸ区
　　平成11年度 調査Ⅹ区

3　調査Ⅶ区4SE017井戸側・井戸枠調査状況

4　縄文晩期土器・仿製鏡・墨・石帯

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査体制・調査組織・関係者など

平成９年度から11年度までの発掘調査に関わる調査体制、および平成12年度から14年度までの整理作業・報告書作成に関わる組織は次のとおりである。

（１）発掘調査作業（平成９～11年度）

調査主体　　熊本県教育委員会

調査責任者　豊田　貞二（文化課長　平成９～10年度、首席教育審議員　平成11年度）
丸山　秀人（教育審議員　平成９年度）
川上　康治（課長補佐　平成10～11年度）
島津　義昭（課長補佐　平成11年度）

調査担当者　高谷　和生（文化財保護主事　平成９年度）
坂田　和弘（文化財保護主事　平成９～11年度）
岡本　真也（文化財保護主事　平成９～10年度）
出田　久斉（文化財保護主事　平成11年度）
北原美和子（嘱託　平成９年度）
前川真由美（嘱託　平成９年度）
藏冨士　寛（嘱託　平成10年度・現福岡市教育委員会）
濱田　教靖（嘱託　平成10～11年度）
隈部　香織（嘱託　平成10年度）
石橋　和久（嘱託　平成11年度・現九州文化財研究所）

（２）整理作業・報告書作成作業（平成12～14年度）

調査責任者　阪井　大文（文化課長　平成12～13年度）
成瀬　烈大（文化課長　平成14年度）
川上　康治（課長補佐　平成12年度）
小田　信也（課長補佐　平成13年度、教育審議員　平成14年度）
島津　義昭（課長補佐　平成12～13年度、教育審議員　平成14年度）

調査総括　　高木　正文（主幹・文化財調査第一係長　平成11～14年度）

整理担当者　坂田　和弘（文化財保護主事・参事　平成12～14年度）
竹田　知美（嘱託　平成12年度）
中林　由紀（嘱託　平成12年度）
横田　　愛（嘱託　平成13～14年度）
隈田　章代（嘱託　平成14年度）
西村　和美（嘱託　平成13～14年度）

（３）専門調査員、調査協力者等

平成９年度から11年度までの発掘調査に関わる指導助言者ならびに平成12年度から14年度までの整理作業・報告書作成に関わる指導助言者及び調査全般へ協力頂いた先生方は次のとおりである。記して感謝の意を表したい。

発掘調査及び整理報告書作成作業に関わる指導助言者

（平成９年度から14年度まで、敬称略）

工楽　善通　　国立奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長　平成９・11年度
山口　譲治　　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第２係長　平成11年度
狩野　　久　　岡山大学文学部教授　平成９年度
永嶋　正春　　国立歴史民俗学博物館助教授　平成９年度
沢田　正昭　　国立奈良文化財研究所埋蔵文化財センター部長　平成９年度
甲元　真之　　熊本大学文学部教授　平成９・11年度
白木原　和美　熊本大学文学部名誉教授　平成９～11・13年度
故田邉　哲夫　玉名市立歴史博物館長　平成９～11年度
三島　　格　　肥後考古学会長　平成９～10年度
平岡　勝昭　　合志町立歴史資料館専門員　平成11・13年度
下村　　智　　別府大学文学部助教授　平成10・11年度
板楠　和子　　九州ルーテル学院大学人文学部講師　平成10・11・13年度
蒲原　宏行　　佐賀県立博物館学芸課資料係長　平成11年度
西　健一郎　　九州大学文学部助手　平成11年度
石橋　新次　　鳥栖市教育委員会社会教育課主査　平成11年度
杉井　　健　　熊本大学文学部助教授　平成10・11年度
木下　尚子　　熊本大学文学部助教授　平成９・10年度
小畑　弘己　　熊本大学文学部助教授　平成11・12・13年度
隈　　昭志　　山鹿市博物館長　平成13年度
山村　信榮　　太宰府市教育委員会　平成13年度
田崎　博之　　愛媛大学法文学部助教授　平成11年度
家田　淳一　　佐賀県立九州陶磁文化館資料係長　平成12年度

調査協力者　（50音順、所属職名及び敬称略）

網田　龍生（熊本市文化財課）　　池本　利直（熊本県立荒尾養護学校）
国武　慶旭（歴史玉名研究会）
西田　道壱・末永　崇・田中　康雄・中尾　健照（玉名市社会教育課）
兵谷　有利（玉名市立歴史博物館）　　山下　平重（現愛媛県立博物館）
山田　昌久（東京都立大学）　　山崎　純男（福岡市教育委員会）

第２節　調査の経過

（１）　調査前協議

平成６年度から平成８年度までの３年間で第１次調査から第３次調査まで行った。その成果は『柳町遺跡Ⅰ』の記載に詳しいので割愛するが、平成８年度には平成９年度調査区の調査方針が決まっていた。

平成９年度に入って建設省から調査地に近接する宅地に影響の及ぶ可能性があるため、矢板を従来どおりに打つことができず、調査が不可能になる部分が発生するとのことで協議をもった。結果的には影響の可能性が否定できないのでやむを得ず調査範囲を狭めることになった。その後は調査中に排土場の変更などについてその都度建設省と協議した。平成10年度調査の事前協議では、建設省の工事工程の都合で、これまでの

予定調査区割を大幅に変更し、調査面積が柳町遺跡全調査中で最も広くなった。また、そのため調査開始時期を前倒しすることになったが、矢板設置が間に合わないので、矢板なしでも調査可能な地形的に高い部分から調査を開始することにした。宅地に近接する部分の調査は前年度と同様であった。調査面積の多さから調査を平成11年度まで延長する必要が生じ、４月半ばまでの調査とした。

平成11年度調査では、玉名市教育委員会と熊本県が別地点を調査することとした。玉名市教委は平成７年度に調査が不可能だった地点をⅢ－２区として行うこととなった。熊本県教委は前年度の続きでＸ区を行うこととした。ただ、現況の道路部分は調査を行わないこととしたため調査範囲が狭まることと調査Ｘ－１区と調査Ｘ－２区に２分割する必要も生じた。協議ではＸ－２区に走る水路の付替えと矢板を２箇所に分割して設置するように建設省に要望した。範囲の設定でやや難があったがほぼ要望どおりになった。

調査は最終的には平成12年度の４月まで続いた。

（２）調査日記抄

平成９年度から平成11年度までの本遺跡の調査の流れと平成12年度から平成14年度までの整理作業・報告書作成の流れを年度ごとに記す。

①平成９年度

平成９年７月　調査準備。側溝を掘りながら、土層観察し標準土層決定。表土剥ぎまでの深さも確認。側溝とで土層断面観察し､標準土層を決める。また､調査区の平板測量も平行して行う。

平成９年８月前半　側溝切りに併せて表土剥ぎ作業、四隅に釜場設置。釜場に４インチ水中ポンプ設置。

平成９年８月下旬　調査機材（ベルトコンベヤー、ローリングタワー）の設置。熊本県と玉名市の境界設定。

平成９年９月　掘立柱建物跡を確認。古代の遺物多量に出土。鉄製鋤先刃が出土。

平成９年10月初旬　調査指導会議　現場指導：狩野久（岡大教授)､工楽善通（奈文研埋文センター長)､沢田正昭（奈文研埋文センター部長)､永嶋正春（国立歴民博助教授）の各氏に調査現場と出土遺物の検討をしていただく。

平成９年10月　多くの遺構を確認した。掘立柱建物跡や井戸跡を検出し掘り下げを進める。また、井戸からは木製品が出土する。

平成９年11月　Ｙ－29･Ｚ－29グリッドで古墳時代末から古代の遺物が多量に出土する溝状遺構を確認。4SI012の東北部の壁際から円面硯の破片が出土。

平成９年11月末～12月初旬　4SE017は井桁を組みに中に井戸枠をもつ井戸跡であることを確認。

平成９年12月　玉稜中生徒遺跡見学。4SE005から頸部に縄を巻きつけた甕片が出土。

平成10年１月　溝状遺構の4SX038より木製品が出土し始める。古代の青銅製耳環が出土。この遺構での出土遺物は完形が多く特殊な意味合いを持つ遺構の可能性強まる。

平成10年２月　4SE017の井戸枠内で墨書土器が出土。古墳時代の4SI013から炭化した網籠の一部が出土。

4SE017は、井戸枠板外を外し､一木刳り貫きの井戸側が姿を顕す｡遺構をさらに検出。

平成10年２月19日　玉名市内の小中学校校長会現場視察（17名)。

平成10年２月28日～３月１日　現地説明会。取材各社：朝日新聞社、熊日、読売、RKK、NHK熊本放送局、TKU、KKT、KAB。入場者数：１日目181名、２日目223名、２日間で404名。

平成10年３月　4SE043で木簡片２片が発見。文字はない。4SX038内にさらに井戸跡を確認。4SE017の周囲に井戸の覆屋確認。4SX049では底に長方形の掘り込み確認。

平成10年３月27日　本日で外勤は終了。調査機材返却。土層の注記、図面の補正。

平成10年３月31日　　平成９年度の最終日。出土木製品の全体数量の確認。

②平成10年度

平成10年４月　　事務所移転作業。

平成10年５月中旬　　矢板打ち込み作業に関係しない部分の第１次表土剥ぎ。

～６月初旬　　調査区及びその周辺測量（Ｓ＝１／400)。調査機材の設置。

平成10年６月～７月初旬　撹乱部分の掘り下げ及び第一包含層（褐色下層）上面までの掘り下げ。

平成10年７月　　第一包含層掘り下げ、遺構検出作業。遺物は古代が中心。

平成10年８月　　残り部分の第２次表土剥ぎ。並行して調査は進める。

平成10年９月　　玉名市との協議で調査区分割決定。

Ⅴ層上面までの掘り下げ。Ⅳ層（砂層）の掘り下げ。古代の遺構の確認を再度、竪穴遺構はまだ輪郭を確定できない。

平成10年10月中旬　　台風接近。

平成10年10月下旬　　中世の池状遺構の調査にかかる。１区で縄文晩期黒色磨研系土器片が出土。

平成10年11月　　古代の4S031確認。4SX049の続きを検出。井戸跡など他の遺構を検出。

平成10年12月　　5SX022・5SX023の平板図とコンタ入れ終了。4SX049掘り下げ。5SX040掘り下げ開始。ｅ・ｆ－32・33グリッドに大溝状遺構5SX051を検出。

平成11年１月　　4SX049の矢板側は重機で掘り下げる。5SX040の一部に礫群が出土。また、多くの土器類に混じり木製品が出土し始める。底には4SX049と同じく長方形の浅い落ち込みが確認できた。

平成11年２月　　5SX040の掘り下げ。竪穴遺構として5SK032、5SI031・033、5SK052掘削。住居跡だけでなく土坑混じる。4SX049の底面から青銅鏡（内行花文鏡）出土。

調査指導：白木原熊大名誉教授、三島肥後考古学会長、板楠ルーテル学院大講師、田邉玉名市博館長、木下熊大助教授、下村別大助教授。

来跡：山鹿市前田氏。橿考研清水氏ほか。

平成11年３月　　残った遺構の調査を進める。

平成11年３月13日・14日　発掘調査説明会。両日で160名の見学者。

平成11年３月後半　　4SX049より赤色顔料を入れていたと思われる小型壺出土。5SE059は一木刳り貫き井戸側を持つ井戸跡が分かった。調査は終了していないので翌月まで延長することとなった。

③平成11年度

平成11年４月　　前年度の調査の残りを行う。調査員の増員で発掘・実測ともに進める。大溝状遺構・井戸跡5SE019から墨出土。中旬には終了。

平成11年７月上旬　　調査Ｘ区の調査を開始。調査区は２箇所に分けて行う。Ｘ－２区石垣等の除去から表土剥ぎにかかる。

平成11年７月下旬～８月前半　Ｘ－１区表土剥ぎ作業。調査機材準備。

平成11年８月後半　　現場作業開始。Ｘ－１区表面精査作業。周辺地形測量（平板)。

Ｘ－１区で多数の溝状遺構、ｈ・ｉ－37グリッド付近のピット群確認。Ｘ－１区・Ｘ－２区掘り下げ。

平成11年９月初旬　Ｘ－２区(Ｌ－01層)溝掘り下げ、遺構確認。Ｘ－１区グリッド掘り下げ、平面実測図。

平成11年９月９日～10日　帯山中ナイストライ授業で作業体験。

専門調査委員：西九大助手、石橋福岡市職員、蒲原佐賀県職員来跡。

平成11年９月後半　Ｘ－１区（ｇ･ｈ－39･40グリッド）。Ｘ－２区（ｆ－42、ｆ･ｇ－43グリッド）掘り下げ。

平成11年９月末　台風18号直撃。現場事務所及び周囲に影響大。後片付け。

Ｘ－１区。Ｘ－２区掘り下げ。

平成11年10月前半　Ｘ－１区（ｊ－40、ｉ－40グリッド)、Ｘ－２区（6SX501）掘り下げ。

Ｘ－１区。ｇ－39グリッド、ｉ・ｊ－40グリッド掘り下げ清掃。Ｘ－２区。ｆ－43グリッド掘り下げ。

平成11年10月後半　Ｘ－１区掘り下げ。ｆ・ｇ－43グリッド掘り下げ。Ｘ－２区掘り下げ。

平成11年11月　Ｘ－１区溝状遺構掘り下げ。実測。Ｘ－２区、土手状遺構・溝状遺構検出。

Ｘ－１区はグリッドを中心に掘り下げる。

平成11年12月上旬　Ｘ－１区のグリッド掘り下げは、Ⅶ層目。ピット群実測（土層断面)。

平成11年12月後半　Ｘ－１区溝状遺構を確認（6SX049)。そのトレンチの遺構地山から突帯文と丹塗磨研土器検出。

平成12年１月　6SX049の各地点にトレンチを開けて土層を確認。6SX049に弥生前期土器出土。

Ｘ－２区の遺構検出層（文化層）は２層に分かれる事判明。溝状遺構検出（6SX503、504、505)。

平成12年２月前半　Ｘ－１区で有茎磨製石鏃出土。夜臼期から弥生前期に伴うもの。6SX049を渡す杭列検出。

Ｘ－２区で溝状遺構をさらに検出。

平成12年２月後半　Ｘ－１区ｈ－40グリッドで石包丁出土。ｉ－39、ｈ－40グリッド旧地形掘り下げ。6SE053を井戸跡と確認。

Ｘ－２区溝状遺構掘り下げ。

平成12年３月　Ｘ－１区、ｈ～ｉ－37、38グリッド掘り下げ。グリッドごとに弥生前期層まで掘り下げ進める。

Ｘ－２区は、6SX504、506、507の掘り下げ。

平成12年３月18日　現地説明会。

平成12年３月22日　専門調査員（熊本大学甲元教授、杉井助教授）指導。

丹塗磨研の小型壺片は松菊里型のものであるという。(甲元教授)

古墳前期の井戸跡内出土の甕型土器は古墳時代前期中葉か。(杉井助教授)

平成12年３月末　Ｘ－１区6SX054、6SX055、杭列出土。ｊ－40グリッドで層中より木製鋤。6SX054側から網代出土。

調査はまだ終了しないため、平成12年度初めまで調査を延長。

④平成12年度

平成12年４月　前年度末に残った現場作業を開始する。遺構の実測作業と遺物の回収作業である。この作業をほぼ２週間で行った。

平成12年５月　本年度より３年間を予定として柳町遺跡調査Ⅶ・Ⅷ・Ｘ区の調査報告書作成に坂田が着手する。昨年度後半から一部手がけているⅦ・Ⅷ・Ｘ区の木製品については、渡鹿

文化財収蔵庫での収蔵施設がないため、柳町遺跡発掘調査事務所での整理・管理を半年間行うこととした。木製品については木製品実測班を編成しその作業にあたることとした。遺物の水洗作業は一部渡鹿で平成11年度途中から行っていたが、本格的に行うのは今年度からである。坂田は玉名の事務所と渡鹿の事務所を往復しながら作業を進めることとなった。渡鹿収蔵庫では調査Ⅶ区の水洗・接合作業を急ピッチで行う。

平成12年７月　木製品の保存処理を委託へ出す準備を行う。

平成12年８月　木製品の保存処理委託発送。

平成12年10月　玉名市の整理事務所を撤収。機材・遺物などを文化財資料室へ運ぶ。

平成13年２月18日・19日　平成12年度（第５回）柳町遺跡発掘調査説明会「ここまで見えた古代のムラ」をテーマに調査現地で実施した。遺物の展示や調査現場内に多くの見学者を迎えた。

平成13年３月　当初予定していたⅦ区の整理作業は全体的には遅れ気味である。

⑤平成13年度

平成13年５月　年度末から年度始めの間に中断していた、調査Ⅷ区の土器類の接合・復元作業を再開する。遺物の実測も前年度からの続きで調査Ⅶ区から開始した。

平成13年７月　調査Ⅷ区の遺物の整理状況に応じて、実測対象遺物を選別した。

平成13年８月　調査Ⅷ区の遺物実測に徐々に入っていく。部分的Ⅶ区分の石器が残る。

平成13年９月～平成14年２月　調査Ⅷ区の遺物実測は順調に進むが､次年度まで伸びる｡遺構トレースは進む。

平成14年３月上旬　専門調査員：九州ルーテル学院大学の板楠和子氏には墨書土器について、熊本大学埋蔵文化財調査室の小畑弘己助教授に調査Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ区から出土した打製石器・剥片について調査を依頼する。また、白木原熊大名誉教授、隈山鹿博物館長、平岡勝昭合志町歴史資料館長に遺跡について意見をいただく。

⑥平成14年度

平成14年５月　本格的に作業員をいれて本年度の整理作業と報告書作成作業を開始した。３年目である今年が報告書のための作業は最後である。予定よりかなり遅れてきているので今後作業方法の効率化が必要である。

平成14年６月～平成15年２月　調査Ⅹ区の遺物抽出と実測・遺物トレース・文章執筆を進める。

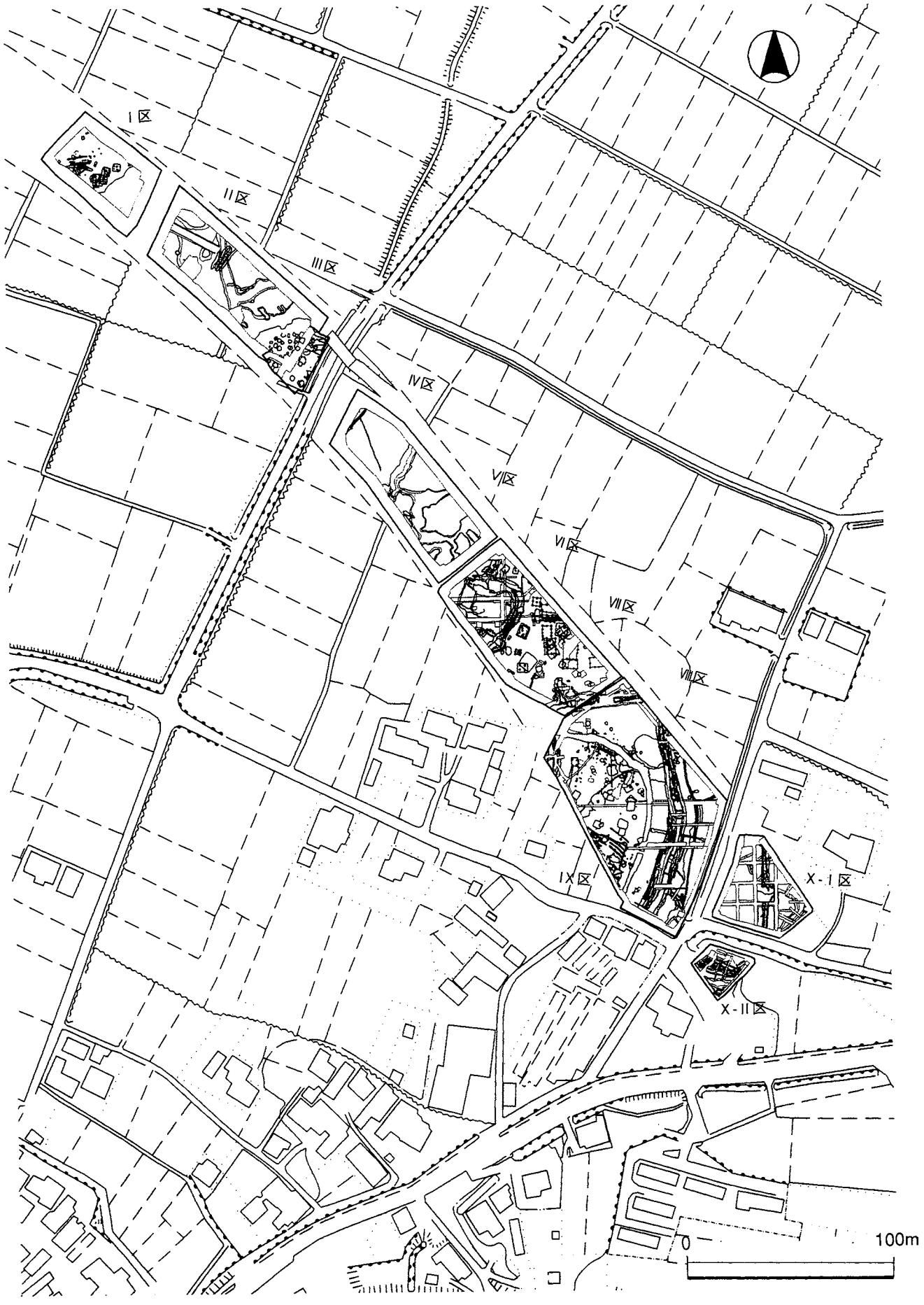
平成15年３月　報告書作成作業が一応終了した｡ただ､文章などが若干次年度に必要作業として残った。

第３節　調査成果の普及・広報活動

建設省一般国道208号玉名バイパス建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査として、平成９年度以降の発掘調査においても、その調査期間中に調査成果の普及と広報のために、発掘現場説明会の開催、報道機関等への情報提供等の活動を実施した。

（１）発掘調査説明会（現地説明会）

発掘調査説明会（現地説明会）は国道バイパス建設に先行して文化財保護部局が実施する、事前の記録保存のための発掘調査であることを地元に十分ご理解いただき、文化財保護の意識向上を目的として年１回で年度終盤時期に実施した。あわせて県内初の資料が多数出土し、重要な資料の公開という視点からも地域住民、玉名市民及び関係機関・研究者を対象として成果の普及を行った。



第１図　柳町遺跡全調査区位置関係図

第４回　柳町遺跡調査説明会『木器が語る古代の村』

実施日時：平成10年２月28日（土）・３月１日（日）10時～16時まで

開催場所：調査現場

参観者数：345名（玉名市内は53.6％）

主な内容：初めて調査現場

調査の様子・出土遺構や遺物のパネル展示

発掘調査の様子・成果のスライドによる説明

出土遺物の展示　弥生土器・土師器（甕、壺、高坏、小型壺など）石器（台石、浮き）木製品（短甲、弓、鼠返、横槌、杓子形木製品、直柄横鍬、建築材等）

同時期玉名市市民会館で「柳町遺跡発掘調査のあゆみ」と題し、パネルや遺物の展示を行った。

第５回　柳町遺跡調査説明会『ここまで見えた古代のムラ』

実施日時：平成11年３月13日（土）・14日（日）９時～５時まで

開催場所：調査現場

参観者数：166名（玉名市内は46.4％）

主な内容：調査の様子・出土遺構や遺物のパネル展示

発掘調査で出土した遺構・遺物

出土遺物の展示　古墳時代土師器（甕、壺、高坏、小型壺など）､古代土師器・須恵器、木製品（井戸枠、横槌、建築材等）

第６回　「柳町遺跡発掘調査現地説明会」

実施日時：平成12年３月18日（土）10時～16時まで

開催場所：調査現場

参観者数：80名程度（アンケート等を集約しなかったので不明）

主な内容：調査現場の見学

出土遺物の展示　弥生土器、土師器（甕、壺など）､石器（磨製石鏃、石庖丁）､木製品等、陶磁器等

（２）資料公開と貸出・遺跡の発表・資料の貸出

①資料公開

ア）企画タイトル：菊池川・八女地方の古代を考える交流講演会

『弥生時代の交流』－最近の発掘調査から－

開催期日：平成12年２月20日（日）

開催場所：熊本県立装飾古墳館

イ）企画のタイトル・内容：「肥後の至宝展Ⅰ－新発見・再発見　菊池川の古代遺跡」

貸出期間：平成15年１月15日～３月16日まで

貸出先：熊本県立装飾古墳館

貸出資料：井戸枠・槽・横槌・天秤棒・糸車形木製品・駒形木製品・横櫛・紡錘車等の木製品

第４節　調査区の設定（『柳町遺跡Ⅰ』第９図全調査区位置関係図参照）

調査区の設定の概要は『柳町遺跡Ⅰ』に述べられているので、簡略して記すに留める。

要調査地区の全域を網羅するグリッド座標網を設定するための起点として、日本国土地理座標系第Ⅱ系によるＸ＝－7020.000、Ｙ＝－39990.000（調査時にはこの点をＸ＝０、Ｙ＝０とした）を使用した。グリッドは調査区全体を網羅できるように、Ｙ軸は起点から東方向へ10ｍごとに区切り、ローマ字（Ａ～ｈまで）を付し、Ｘ軸は南方向へ10ｍでグリッドでのローマ数字（01～44まで）を付した。

平成９年度の基準点としてTY－15（Ｘ＝－7309.083、Ｙ＝－39760.788）、TY－16（Ｘ＝－7326.239、Ｙ＝－39731.026）を、平成10年の基準点としてはTY－20（Ｘ＝－7355.000、Ｙ＝－39729.919）、TY－25（Ｘ＝－7309.877、Ｙ＝－39702.130）、TY－26（Ｘ＝－7346.259、Ｙ＝－39740.808）を、平成11年度の基準点としては、TY－32（Ｘ＝－7385.530、Ｙ＝－39647.808）、TY－31（Ｘ＝－7423.071、Ｙ＝－39612.725）、TY－34（Ｘ＝－7446.150、Ｙ＝－39639.975）、TY－35（Ｘ＝－7465.939、Ｙ＝－39659.009）をそれぞれ設定した。

また調査に際しては、調査次数は柳町遺跡の実質的に調査の始まった平成６年度を起点に第１次調査とし、調査区はローマ数字を用いて併記した。すなわち平成９年度の調査は「第４次調査：調査Ⅶ区」のようによぶこととなる。

年度ごとの具体的な調査区の設定は熊本県教育庁文化課と玉名市教育委員会社会教育課との協議で決めることとした。実際の担当調査区はこれまでの調査地点の連続性や事業割合等を勘案し協議のうえそれぞれに分割した。

この分割によって、各調査区の年間調査計画等をとりまとめ、その計画にそって発掘調査を実施した。また熊本県と玉名市での調査協議は随時行い、調査が円滑に進捗するよう計画した。

第５節　調査の方法

調査はこれまでの調査方法を踏襲し、建設省側に前年度中の協議に基づき「止水鋼矢板」を設置してもらい、表土剥ぎ・釜場の設置と側溝掘削を行った。年度ごとの具体的な調査区の設定は、熊本県と玉名市の状況に応じて分割し、担当地区が交差しないようにした。

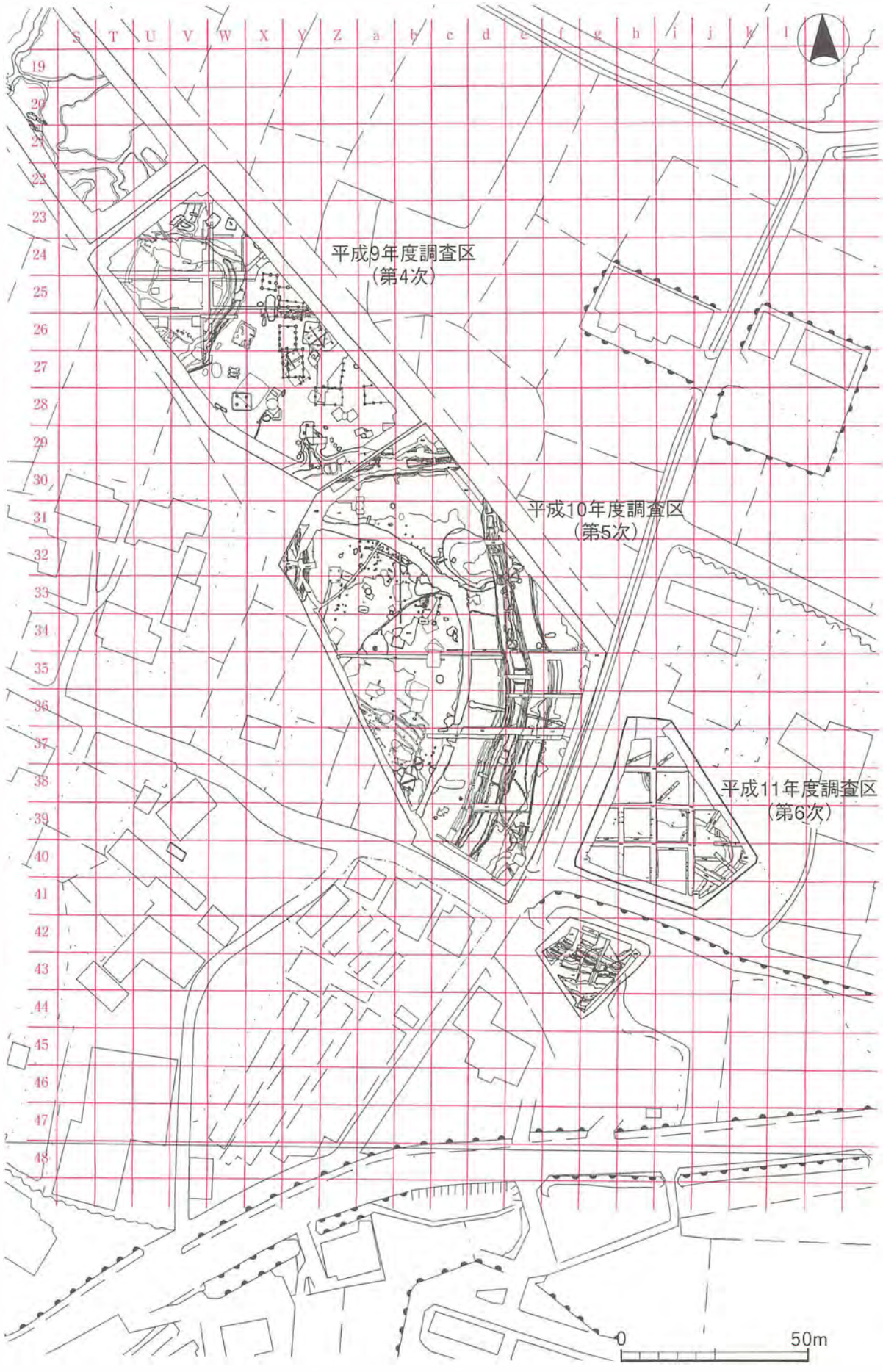
調査に際しては湧水の多い遺跡の調査であることから、調査効率の向上、作業安全面から次の４点に留意した。①大型水中ポンプによる恒常的排水→法面からの浸透水を排水するための排水溝（側溝）と釜場設置②小型水中ポンプによる臨時的排水→調査面下にある浸透層からの浸透水の排水用③ベルトコンベヤーの多用→強粘性で含水率の高い重量土の排土用④運搬用建設機械の活用→調査時に発生する排土の仮置き場への効率的搬出用ダンプ等の利用などである。

調査で出土した遺構については、熊本県収蔵システムに則り、確認した時点で随時通し番号を振り、調査終了後に遺構の性格ごとに記号化することを方針とした。ただ、平成９年度のみは従来の遺構の分類記号で遺構の性格をあらわした。たとえば、SB（掘立柱建物跡）、SI（竪穴住居跡）、SK（土坑）、SE（井戸跡）、SX（その他の遺構、～状遺構も含む）などである。

また調査現場レベルにおいては、この調査区分割により溝・自然流路等の単純な遺構はグリッド軸で分割しての調査となるが、住居跡・土坑等の遺構での分割は好ましくないことから、両者で協議してその帰属を決めることとした。

多量に出土することが予想できる土器類や脆弱な木製品を効率的・迅速に取り上げるために光波側距儀の活用を進めた。取り上げに際しては、調査年次の西暦下二桁の冒頭表示、遺構名称の略記号化、層位の入力を行い、全調査区データで共有化が図れることを主眼とした。ただし、玉名市との共通処理には至らなかった。

さらに民間業者の積極的活用による調査の効率化に取り組み、①広域となる調査区の全ての取り上げデータ集積による一元的管理とデータ処理、②調査完了時の調査区の地形測量図作成等を行った。



第２図　平成９年度～11年度柳町遺跡調査区位置関係図

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の層位について

ここでは今回の本調査で確認した遺跡の層序をまとめる。先に『柳町遺跡Ⅰ』おいて、報告者が記している基本層序があるので、それと今回の層序を比較することから始める。

「柳町１」では現況の標高が約5.5～6.0m から下へ第Ⅰ層～第Ⅻ層までを通しの基本層序として設定している。報告された土地はいずれも現況は水田であった。そのため第Ⅰ層は現耕作土とされている。さらにその下位の第Ⅱ層～第Ⅳ層が近現代の開田整地による堆積層と判断している。この層は土地が現況のように平準化する要因である。第Ⅴ層と第Ⅹ層とされる、この面が古墳期の遺構検出面としている。また古代期の杭列を確認している。調査区によるが第Ⅴ層～Ⅸ層は自然流路の堆積層で包含層として扱ってある。大凡では第Ⅴ・Ⅵ層が古代期、第Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ層が古墳期とされるが、明確な層による時期特定は困難としている。このような一般的な層序を想定してあるが、調査区ごとの層がそのままで現れている訳ではない。調査地はいわゆる沖積平野であり、その層は平野全体で密に地形をとらえなければ本当の対応関係は分からないようである。

次に柳町遺跡調査Ⅶ区・Ⅷ区・Ⅹ区で層序を調査時にどうとらえたかを、各調査区や地点の土層対比図を示し、今回の調査区の標準土層を考えてみたい。

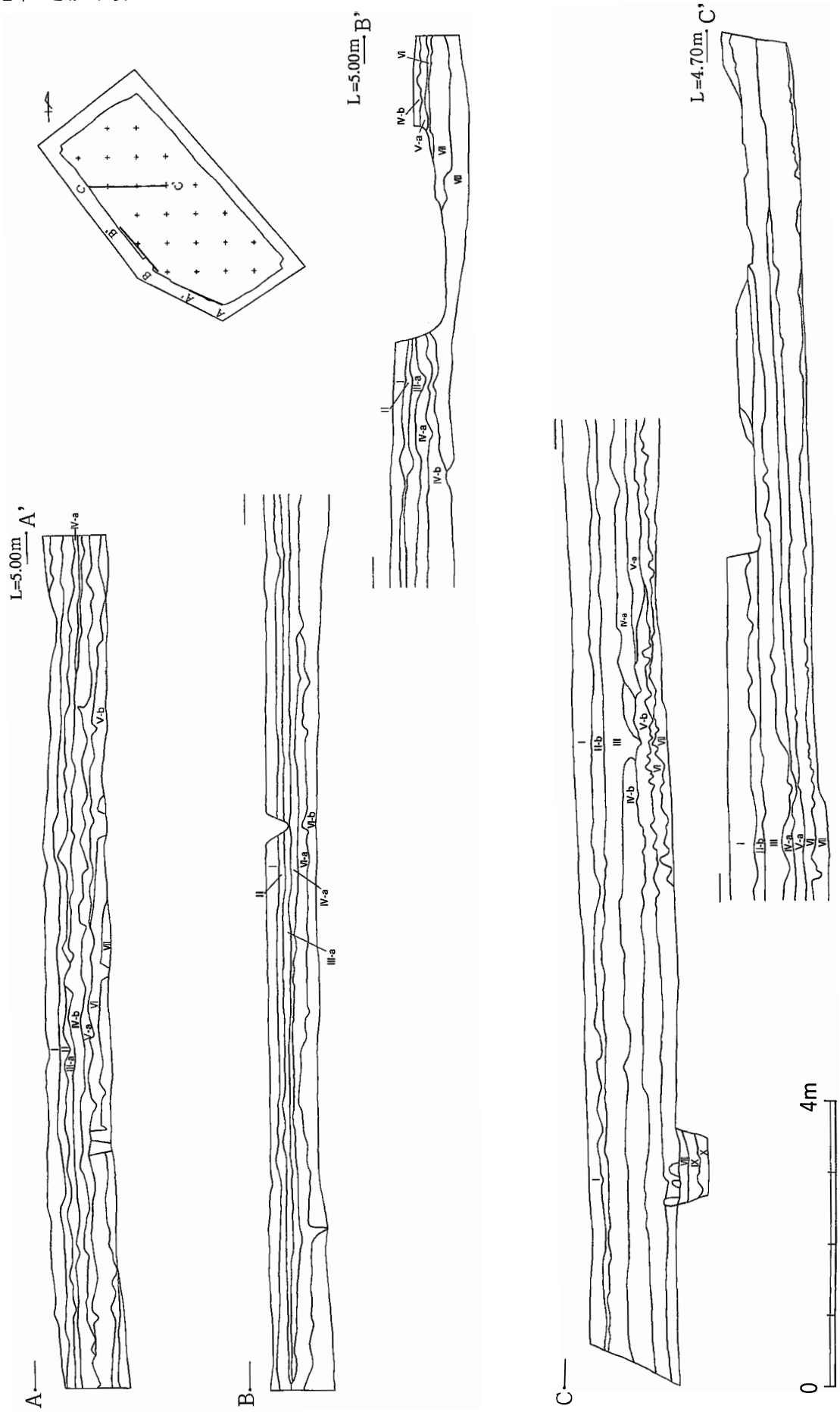
調査Ⅵ～Ⅹ区の調査時までの土地利用状況をみてみると、水田部分と宅地部分とに大きく分かれる。すなわち、水田として現在は一様に見える地形と宅地の立地するそれより一段高い地形である。宅地があったのは調査Ⅷ区ではＹ～ａ－32～38グリッド付近、ｈ～ｊ－36～38グリッド付近、ｅ－42～43グリッド付近で、調査時にはすでに建物はなかったが、その痕跡はみられらた。これらの土地の一部は畑地としても利用されてもいる。この土地利用の違いがどの時期までさかのぼるか、またその違いは土層にどう反映しているのかをここで見ていくことにする。

今回報告する調査Ⅶ区・Ⅷ区・Ⅹ区では、その調査区全てに共通する基本層序を設定することは困難であった。ただ、出土する遺物には共通する時期のものがあり、ある層の関係は想定できる。

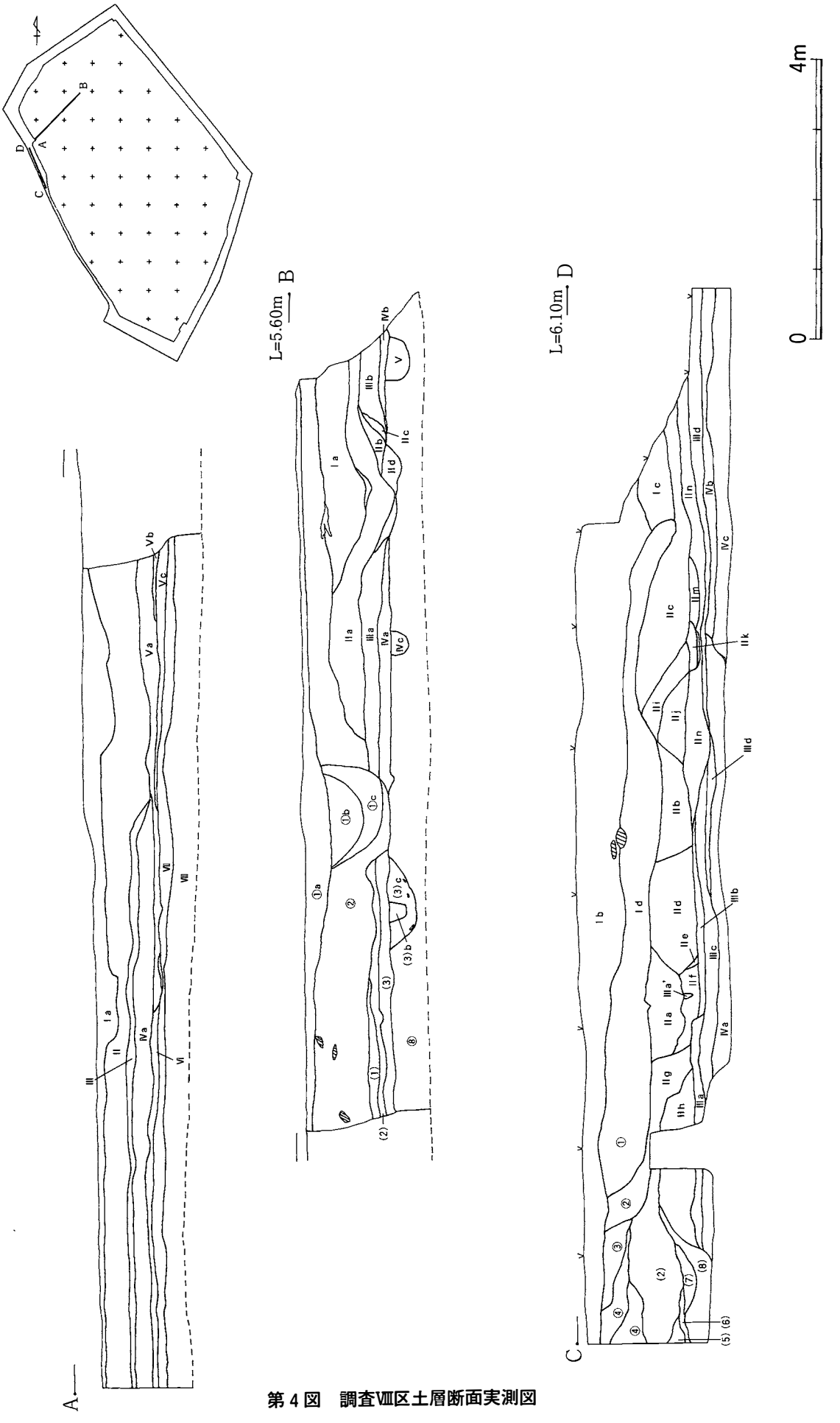
各調査区での土層を記録したものが第３図～第８図である。第３図には調査Ⅶ区のものを、第４図～第６図には調査Ⅷ区のものを、第７図～第８図には調査Ⅹ区のものをそれぞれ図化している。まず、これらの図をもとに調査Ⅶ区、Ⅷ区、Ⅹ区の土層関係をみてみる。

調査Ⅶ区の土層図（第３図）では、Ａ－Ａ’、Ｂ－Ｂ’が調査開始時のもので、Ⅰ層からⅤ層上面までしかとらえていない。Ｃ－Ｃ’はⅠ層からⅤ層までをとらえたものである。一方調査開始前には側溝の断面とＡ－Ａ’、Ｂ－Ｂ’の断面をもとに基本層序をⅧ層まで設定している。

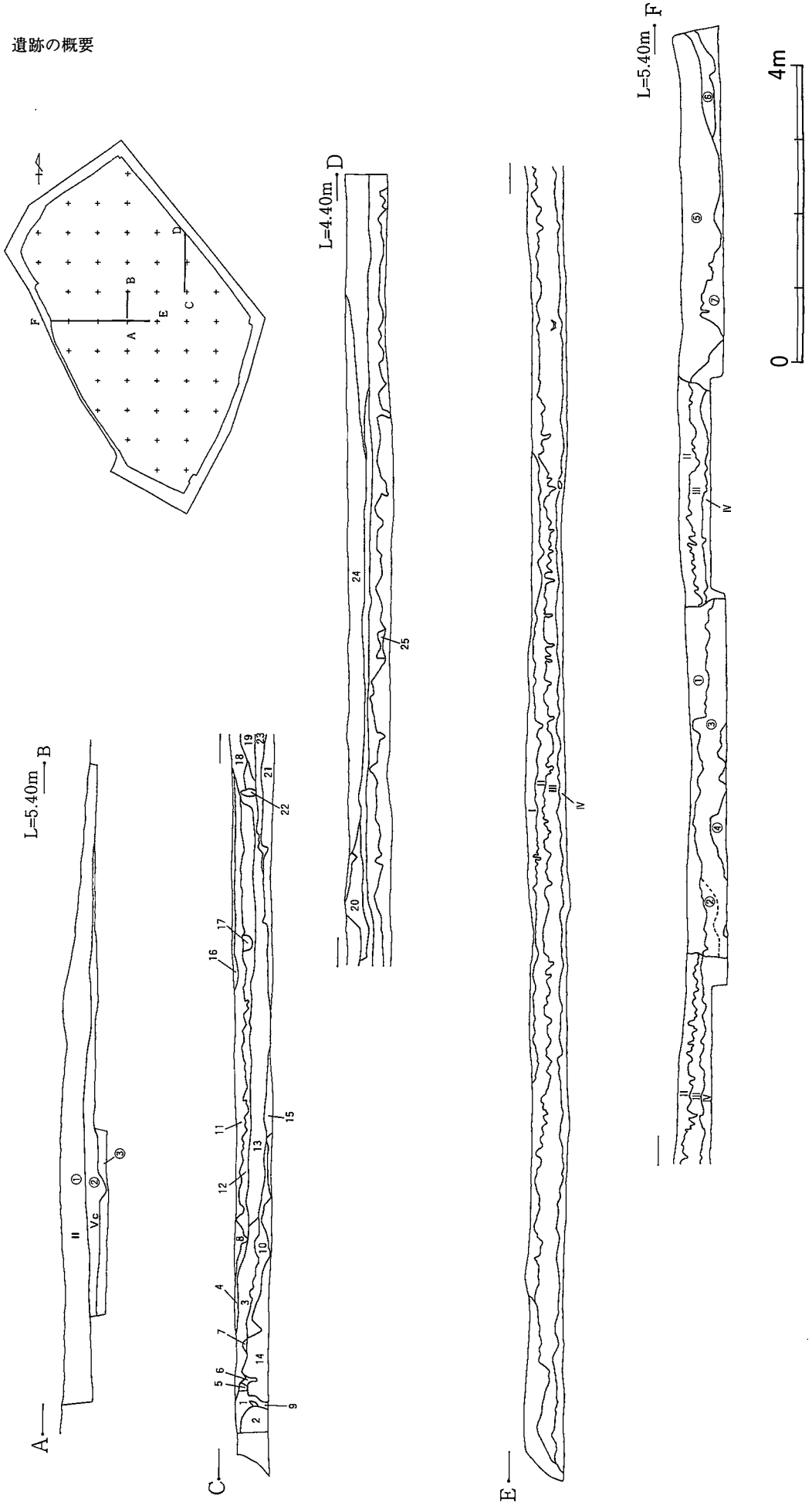
まず、表土は０層とした。現在の水田耕作面である。Ⅰ層は、淡黄褐色を呈する旧水田面である。Ⅱ層は、淡黄褐色土層である。さらに、分割可能な部分もある。Ⅲ層は２つに分層し、Ⅲａ層は黄褐色の砂質層で、摩耗した時期不明の遺物を多少含む。Ⅲｂ層は、暗灰褐色の砂質層で、中世の遺物（土器・銭など）を含むが、中世よりも後の層である。Ⅳ層は洪水などにより生成した層で、層の状況から２つに分層した。Ⅳａ層は暗灰褐色を呈する砂層でやや腐食物が混じり、土壌化の進んだ層である。Ⅳｂ層は、灰色を呈する砂層で、遺物をわずかに含む。本来の流水により運ばれた砂が堆積した層である。このⅣ層は調査区の全体にまんべんなくはない。Ⅴ層は調査区全体から３つに分層した。Ⅴａ層は、暗灰色の粘質土層で、砂粒含むことからⅣｂ層からの漸移層である。遺物としては中世・古代を主として含む。Ⅴｂ層は調査区の北側に集中し玉名市側の調査区にも延びる層で、黒褐色を呈する粘質土層である。古代を中心とする遺物を多く含む。この層は一部に限られる。Ⅴｃ層は暗灰色を呈する粘質土層で、上部に古代の遺物、全体的には古墳時代前期遺物



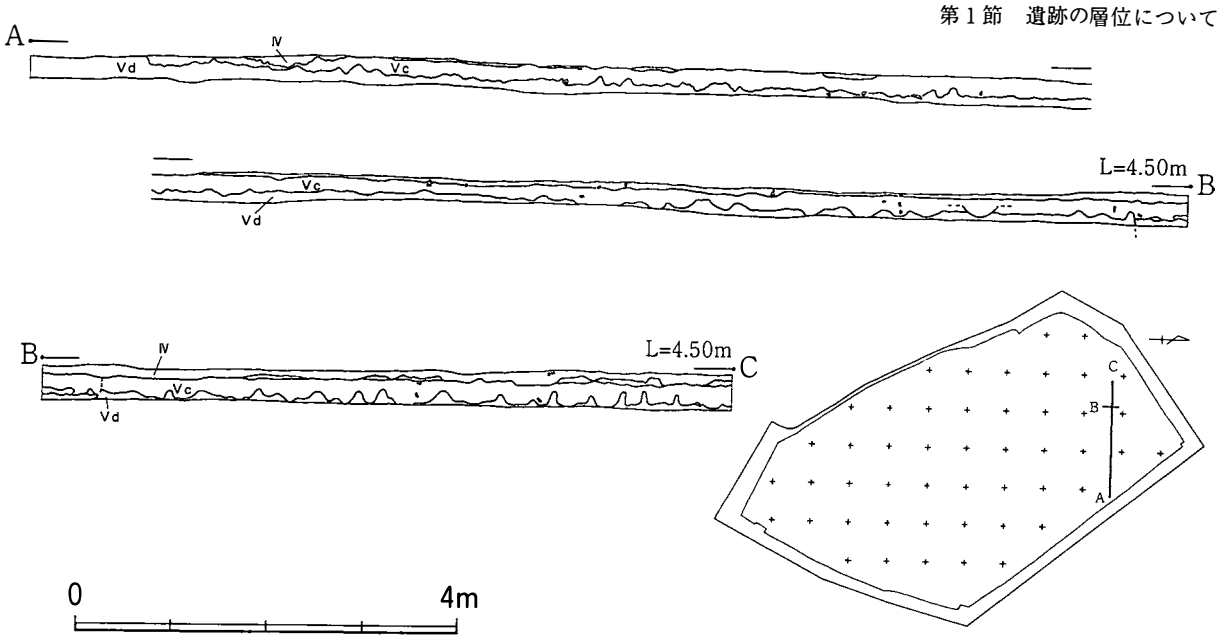
第３図　調査Ⅶ区土層断面実測図



第4図　調査Ⅷ区土層断面実測図



第5図　調査Ⅷ区土層断面実測図



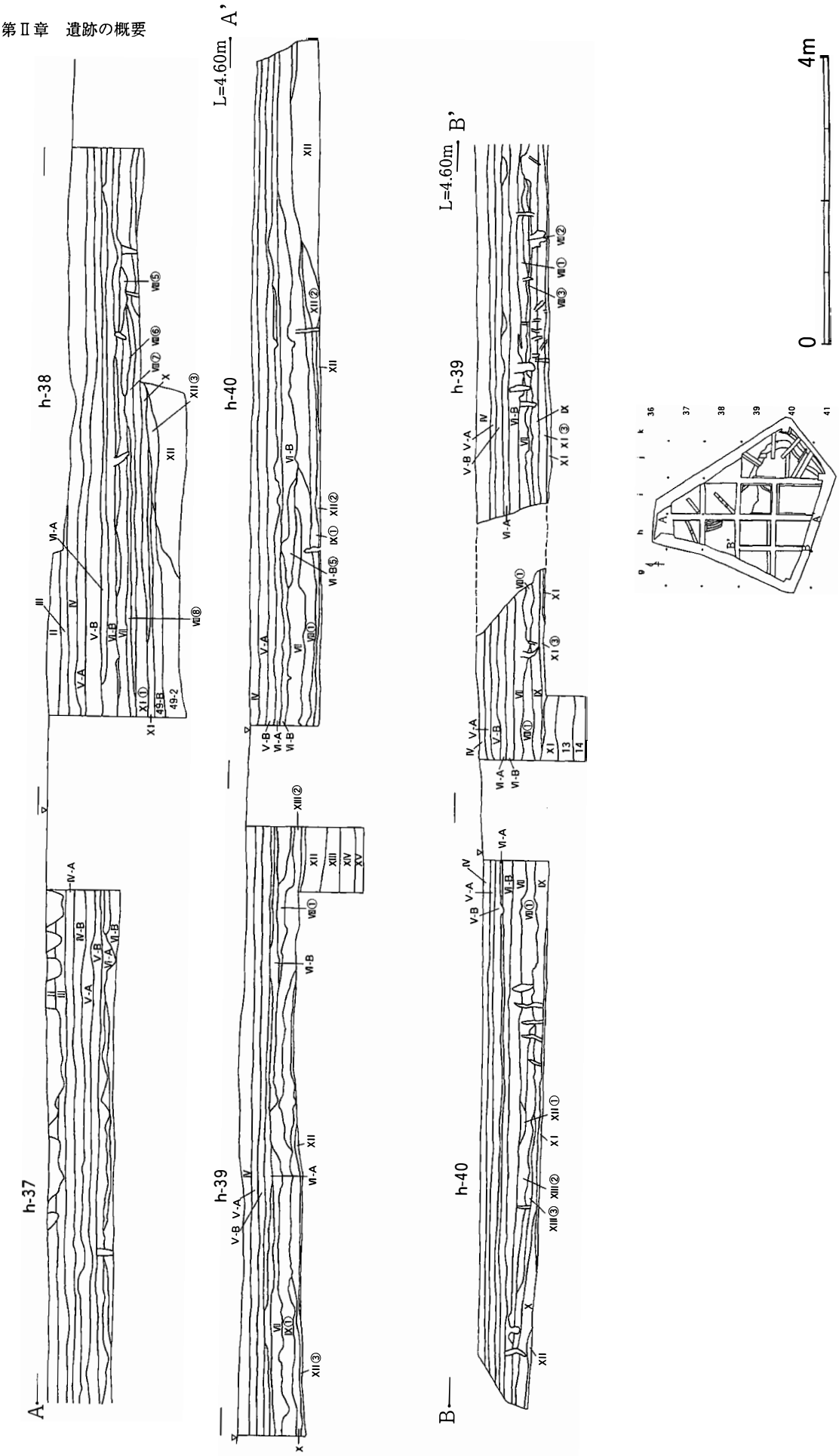
第６図　調査Ⅷ区土層断面実測図

を含む。Ⅵa層は、灰色の粘質土層で、調査区の西側にある。Ⅵb層は、暗灰色の粘質土層で、調査区の西側にある。Ⅶ層は、暗灰色の粘質土層で、調査区の西側にある。Ⅷ層は、暗褐色を呈する層で、調査区の西側にある。Ⅵ層、Ⅶ層は水田層である。

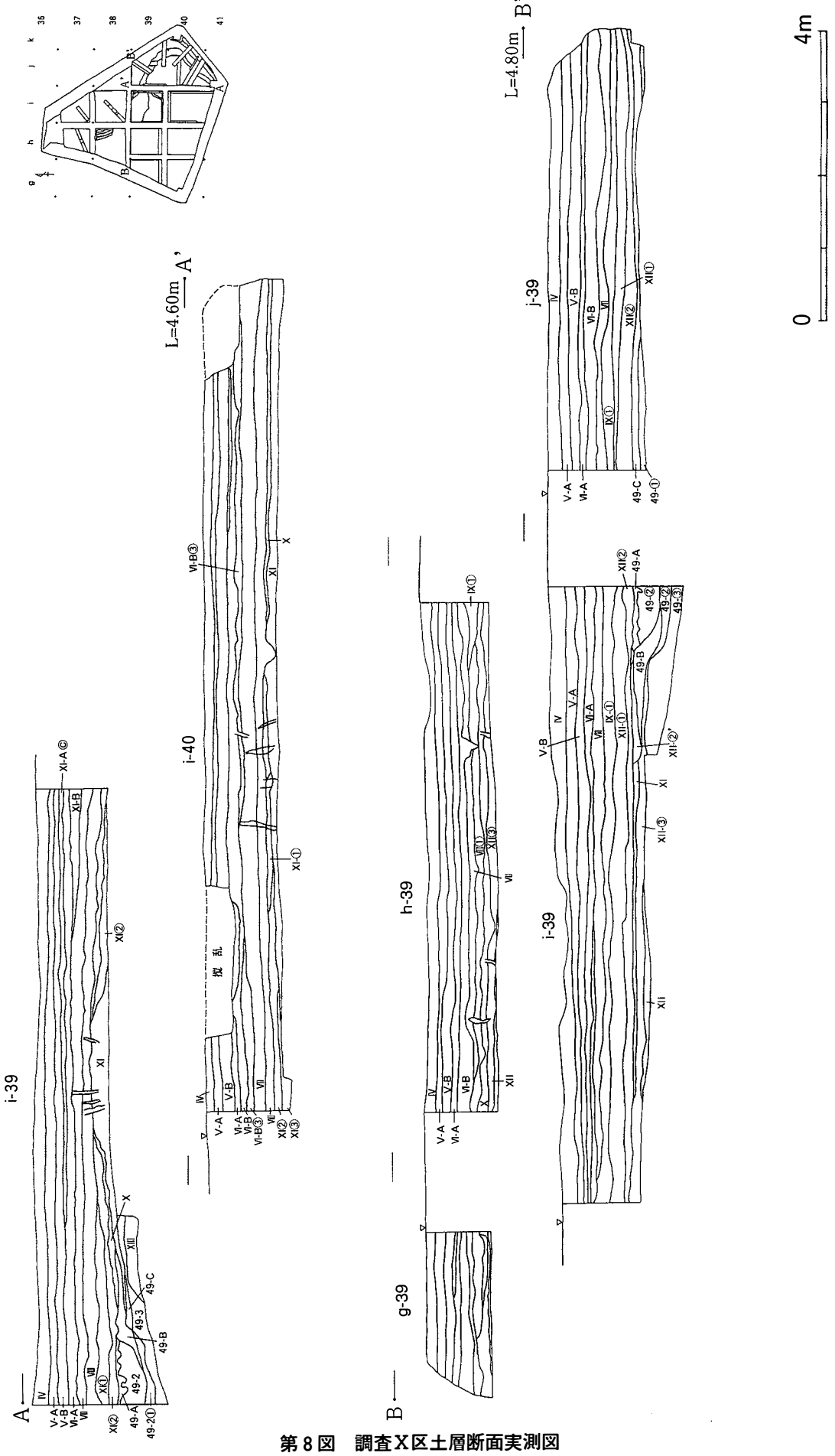
調査Ⅷ区の土層図は第４図～第６図である。第５図Ｃ－Ｃ'・第６図Ａ－Ｃは調査Ⅶ区の層序と整合するが、第４図・第５図Ｅ－Ｆ・Ａ－Ｂに示す西側の一段上がった畑地や宅地になった高地上ではその堆積状況はⅦ区と異なる部分が多い。特にⅦ区のⅣ層に相当する層がなく中世～近世の遺物を含むシルト層が厚くⅤ層の上に乗っている。このシルト層は厚いところでは１ｍほどあった。この層はⅦ区との対比でみると一応Ⅰ層～Ⅳ層に相当するが、厳密に層の対比は困難である。この層は菊池川の氾濫などによって形成された自然堤防と推定している。古代と中世の遺物を下位にわずかに含むことからこの自然堤防の形成時期は中世以降であるが、近世までには形成し終わっていたと考えられる。これは、Ⅶ区からⅧ区の間にある４SX049・４SX038付近を中心に北西－南東方向で大きな洪水によると考えられるⅦ区でⅣ層と呼んだ砂層の堆積があり、これは河川の氾濫によって形成された層とし、形成時期を中世に想定したことと関係している。調査地点による層の状態の違いはそれ以前の土地の起伏により水の流れが変化したために堆積物の違いが生じたためであろう。

このシルト層を除去すると堆積の良好な部分では古代の遺物を含む層が出現し、その途中から竪穴住居跡、掘立柱建物跡などを検出した。この層はⅦ区との対応でいえばⅤa層である。ただ、この層のどの部分に遺構が形成される時期があるのかはつかめていない。さらにその層を20～30cmほど掘り下げていくとⅦ区のⅤc層相当層である古墳時代前期の層に至る。この層は残りの良好な部分では少なくとも50cm近くあった。深い遺構はⅥ層以下の層に到達している。井戸跡や土坑の底部はその層に至る。残念ながらこのⅧ区の微高地の調査では十分に全体を掘り切ることができていない。この層の下には５SB018の堀り方で確認したⅥ層・Ⅶ層があり、特にⅦ層は縄文時代晩期の包含層の可能性がある。ただ、層として普遍的に存在するかどうかはこの調査範囲での調査を行っていないので不明である。

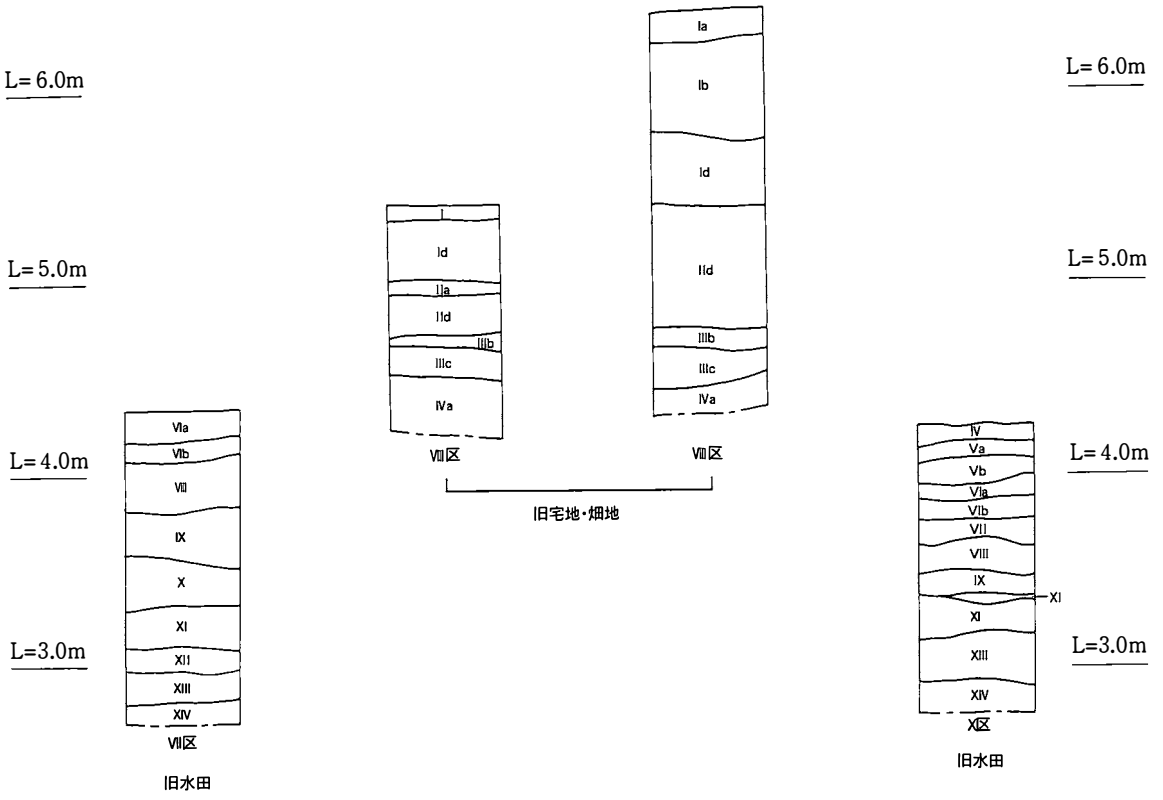
一方、同じⅧ区でも低地の方は先に述べたようにⅦ区の堆積状況によく似ている。ただ、微高地の土層堆積から判断するとⅣ層までは共通する層であるがその下のⅤ層と考えた層はⅤ層でも純粋の層ではなく、洪水によりかなり攪乱された層である可能性が強い。その証拠にⅦ区・Ⅷ区ともに砂層の下位とⅤ層の上面は



第７図　調査Ｘ区土層断面実測図



第８図　調査Ｘ区土層断面実測図



第９図　柳町遺跡Ⅱ基本土層図

かなり遺物の混じりが大きく、層の薄いところではⅤ層の上位に中世遺物が混入している場合もあった。さらに古墳時代の遺物が混入している場合もあった。したがって、Ⅶ区・Ⅷ区の低地のうち遺物包含層が薄く砂層が厚い部分は層の攪乱があり遺物の出土層位が疑わしい場合がある。

５SX054付近の土層の注記を以下に記す。

０層は、にぶい茶褐土（10YR4/3）で、耕作土である。やわらかく空隙が多い。Ⅰ層は、にぶい茶褐色（10YR4/3）を呈し、締まりがなくやはり空隙が多い。砂粒を多く含み、特に金雲母片が多い。2～３mmのマンガン粒を所々に含む。Ⅱ層は、褐色（10YR4/4）土層で、しまりがなく空隙が多い。2～３mmのマンガン粒を所々に含む。Ⅰ層より砂粒が多い。Ⅲ層は、暗灰黄色（2.5YR4/2）砂層で、全体的に少量の粘土も含んでいるが、明らかに砂層である。粒子が細かくローリングを受けた遺物を所々に含む。又、明黄褐の酸化鉄を含む砂が多く全体的に明るい。2～３mmのマンガン粒も所々に含む。Ⅳ層は、黄灰色（2.5YR4/1）砂層で、Ⅲ層よりマンガン粒（２～５mm）が多く色調も少し暗い。所々に明黄褐色の酸化鉄を多く含む砂層がブロック状に入る。Ⅲ層と同様に全体的に少量の粘土を含む。Ｖａ層は、オリーブ褐色（2.5YR4/3）を呈し、Ⅳ層（砂層）とⅤ層（粘土層）との漸位層。砂質土層で、砂の粒子が細かく固くしまる。所々にマンガン粒（２～５mm）や帯状の酸化鉄（幅２～５mm、長さ５mm～４cm）が縦に入る。Ｖｃ相当層は、黄灰色（2.5Y5/1）粘土層で、乾燥すると固くしまるが、水分を帯びると粘性が高くなる。帯状の酸化鉄（幅２～５mm、長さ５mm～４cm）が縦に入る。マンガン粒（２～５mm）も所々に含まれる。遺物包含層である。出土する遺物（古墳・古代）とⅣ層（砂層）の下というところから昨年度のＶｃ層相当層と考えた。Ｖｄ層は、にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土層で、Ｖｃ相当層より固く締まる。つぶすとぼろぼろにつぶれる。帯状の酸化鉄（幅２～５mm、長さ１～８cm）が特に多い。マンガン粒（２～５mm）も所々に含まれるが、

酸化鉄ほどではない。遺物包含層だが古墳時代前半の遺物が多い。Ⅷ区で設定した層である。

Ｘ区は、調査Ｘ－１区とＸ－２区に分かれる。第７図～第８図にみるようにＸ－１区はⅧ区の東側部分(水田部分）との共通性がある。Ⅷ区の東側には古墳時代前期の大溝状遺構があり、そのすぐ東側縁部分には大畦畔もしくは道路のような幅５ｍ近い帯状の無遺構の部分が伸びる。その東側に小溝が走り、さらに水田状の堆積層が始まる。それがＸ－１区まで伸びている。この調査区ではこれまでの古墳時代前期をさらに遡り、弥生前期もしくは縄文晩期終末期の遺物を含む層まで確認した。第７図・第８図にはこれまでの層に加えてＸⅤ層までの層を確認した。Ⅵ層以下はⅦ区やⅧ区で確認した同名の層と同じではないと考える。微高地と低地では堆積の状況が異なるため同じように分層できたとしても同じ層にはならないし、同じ時期の層ということは難しいためである。特にわずかでも層の繋がりがとぎれると沖積平野では同じ層に見えても異なる場合が多い。Ｘ－１区でも同様に層を追いかけていても途中でとぎれる場合が多かった。そこで明らかな違いをもとにおおざっぱな分け方をするにとどめた。Ｘ－２区は近世の遺構とその上の堆積土が多かった。出土遺物が発生した原因である生活跡自体は確認していないが、廃棄しながら土地を造成した工程は埋土の層序から推定すると、ほぼ西側方向にあったのであろう。溝自体は近世以降のものが主であったが、その掘り込まれた層には古代・弥生時代の遺物を含んでいた。さらに最下層ではＸ－１区で確認した弥生時代早期の溝状遺構の続きを確認しているので層的にはここに続きがある。

これらのことを踏まえ、層的にまとめたのが第９図である。

全調査区の標高は約5.5～6.0m 程度であるが、これまでの水田部がほとんどという状況と異なり、今回の調査地には宅地や畑地部分があり、やや起伏のある状況となっている。これまでの調査で、現在ほぼ平坦となっている水田でも調査を進めるとかなりの起伏を確認し、埋もれた微高地が存在することが分かっている。今回は現況で見える微高地が遺跡とどのように関わるかが問題である。一般的に上位から遺跡までの層は、現耕作土もしくは宅地の地表面を０層とし、その下位には水田部では近現代の開田整地による堆積層が、微高地ではシルト層であるⅠ～Ⅲ層が堆積するとまとめられる。

現在みられる地表面、特に耕作地が現在のように整地された時期は明確ではないが、周辺での聞き取りから昭和初期までを含めた近世～現代に整地されたと推定でき、起伏のあった地形を徐々に開削し、平坦化してきたと考えられる。明治35年頃の玉名郡村図や地籍図などをみると、ほぼ現在みるような字堺や地割が読み取れ、現在の状況に近い状態があったことが分かる。ただ、表土剥ぎの途中では、現在の地割と異なる方向の地割が現れる。ほとんど近世のころの層である。したがって、現在の土地の状況は近世のうちに作られたと考えられる。

次に、Ⅳ層であるが、水田部と微高地（宅地、畑地部分）を一様にはまとめられない。調査Ⅶ区、Ⅷ区の水田部分ではⅣ層が場所によって大きく異なる部分があり、それを一概にまとめることは厳しい。調査時には、まとめてⅣa 層、Ⅳb 層とし、砂層と砂質粘土層に分けた。ただ、全体を通じてみるとこれは局所的な様相である。たぶんこの層は洪水などに上流の砂が運ばれ、砂が主に堆積した部分とシルトが混じる部分、さらに粘土も混じる部分が場所で変わって現れているに過ぎない。この砂質土に含まれるのは主に中世の遺物である。古代の土器や古墳時代の土器も混じるが、ローリングを受けたものが多く、この砂質土層に近いのは中世の時期であろう。Ⅳ層は微高地の上ではどうかというと、Ⅷ区の現在の宅地や畑地部分ではシルト層となっている。その一部に中世の遺構と考えられるものも出土しているので、ここでも中世でよいようである。したがって、Ⅳ層は地点ごとに異なる様相は示すものの大きくは中世時期の形成層、もしくはその包含層として考える。

次に第Ⅴ層について述べる。Ⅴ層は基本的に黒褐色を呈する層である。この層も場所により様相が異なる。調査成果から、この層の上面付近が古墳時代末～古代（７世紀末～９世紀）頃の確認面と考えている。層は

調査時にはⅤa、Ⅴb、Ⅴc層の３つに大きく分けていた。Ⅴa層はⅣ層からの漸移層で、砂質気味である。Ⅴb層は古代の遺物を主に含み、限られた範囲にのみ現れる。この層の下位ではやや遺物が少なくなる。Ⅴc層は古墳時代の遺物を含む層である。さらに場所によってはⅤc層類似で、性質の異なるⅤd層も設けた。このうちⅤ層上面で遺構を確認できたのは、Ⅶ区の玉名市調査区のⅥ区と境付近である。ここは掘立柱建物跡が多く出土したところで、玉名市側の調査でⅤ層の上位部分から柱跡の掘り込みがあることを捉えている。それに習って県側の調査区でも確認した。また、掘り下げを進める中で古代の竪穴住居跡も確認している。Ⅴ層の下位付近は古墳時代前期の包含層もしくは遺構確認面が存在すると考えている。Ⅴ層を掘り進める中でこれまでの古代の遺物を中心とする層から、古墳時代前期の遺物を中心とする層に変わっていく。色調自体の変化は乏しいのでいつの間にか変わってしまっている。比較的Ⅴ層が厚く堆積している調査Ⅵ区・Ⅶ区の境やⅧ区・Ⅸ区の微高地上での境付近のベルトで確認したが、わずかな違いしかなく、層自体が薄いところではほぼ同一面に近いところで両時期の遺物が混在する状況であった。古墳時代前期の遺構はこの下のⅥ層上面での確認できる場合が多かった。Ⅴ層中で遺構確認しようとしてⅧ区の微高地で精査を繰り返したが、かなり困難を極めた。特にここは、自然堤防であったようで、何重にもシルトや細砂の堆積が進み、遺構自体のラインを不明確なものとしている。

Ⅵ層以下は、主に調査Ⅹ区において、ⅩⅤ層まで確認している。

Ⅵ層は古墳時代前期の確認層である。また、調査Ⅷ区の東側からＸ－１区にかけては水田跡と考える層が広がっている。明確に水田の検出はできなかった。ただ遺物量の少なさと部分的に見える畦畔の存在がそれを示している。このうちⅪ層、ⅫⅠ層において弥生時代前期の層と考えられる。調査Ⅹ区のⅪ層の上面で自然流路とそれに堰状の杭列遺構を造っている状況を確認した。それに伴う遺物として弥生前期を中心とした突帯文土器等が出土している。流路のため流れ込みということも考えられるが、層的には順に堆積していった状況が確認できているので、この層上に弥生時代前期もしくは早期の生活面があるものと考える。
この下のⅫ層、ⅫⅠ層とあるが、粘質土もしくはシルト層の堆積である。この中から縄文時代晩期の土器類を検出したが、湧水のため十分確認できていない。ここに土器、石器などが流れ込み、包含層的な状況を呈する。

このような土層状況は調査Ⅹ区での確認であるため、Ⅷ区の微高地部分とは若干異なる様相がある。Ⅷ区においてはⅫ層と捉えた層から縄文時代晩期の土器類を検出し、遺構らしき落ち込みも確認している。したがって、微高地上のⅫ層が低地のⅫ層以下に対応しているのであろう。その下層には縄文土器が含まれる湧水面が見られる。

ここまでを大まかに各時期の遺物・遺構の出土状況と土層の関係をまとめると、次のようになる。

現在の層である０層は表土層として、宅地・畑地・水田など様々な利用がなされている。Ⅰ層からⅢ層は、近代～近世の時期の層で、水田利用や宅地として利用があった。Ⅳ層は、中世の時期に形成され、遺構は明確でないが、洪水跡や包含層となっている。Ⅴa層は古代の包含層もしくは遺構の形成された層である。Ⅴb層も包含層で、遺構の形成された層である。Ⅴc層の上面で古代の層が終わり、古墳時代前期の遺物包含層である。Ⅵ層がその遺構確認面である。Ⅵ層～ⅪⅠ層が弥生時代の層で包含層や遺構の形成された層である。ⅫⅠ層以下に縄文時代の層があると考える。

これはあくまでもこの調査Ⅶ区、Ⅷ区、Ⅹ区において県の調査によって想定した層序である。現実的にはさまざまな地形的要素が絡み、複雑な層の変遷がある。また、分層作業自体の困難さがあり、厳密には押さえていない部分もある。

第２節　各区調査内容の概要

ここでは、調査Ⅶ区・Ⅷ区・Ｘ区の調査内容の概要をまとめる。

（１）第４次調査（調査Ⅵ区・Ⅶ区）の概要

調査地：玉名市河崎字フケ

調査期間：平成９年７月14日から平成10年３月31日まで

調査面積：調査全体の面積：約5,000㎡

熊本県：調査Ⅶ区（3,372㎡）

玉名市：調査Ⅵ区（2,128㎡）

調査手順：調査手順の関係より２度の重機による表土剥ぎを経て、まず、調査区の内側に側溝を掘り、そこで土層の堆積状況を確認した。その結果、8層まで確認した。また、玉名市との境をＸ＝260として、北側を玉名市がⅥ区として調査し、その南側を熊本県がⅦ区として調査することになった。調査は土層観察の結果から、Ⅳａ層の上面まで表土剥ぎを行い、掘り下げながら遺構の確認を行っていった。最終的にⅤｃ層の上面に至り、ここで一応の遺構検出面として遺構の検出作業を行った。

出土遺構・遺物：本調査区内の主要な遺構及び遺物は次のとおりである。

○弥生時代末～古墳時代前期

遺構：水田跡（玉名市側が中心、一部県側にかかる）

竪穴住居跡５基、土坑８基、溝遺構１本、井戸跡２基、掘立柱建物遺構１基、水路

遺物：土師器、木製品（木杭、鋤など）

○奈良時代末期～平安時代初頭

遺構：竪穴住居跡１基、掘立柱建物７基、井戸跡（素掘り）１基、溝１基、蒸篭型刳貫枠井戸跡１基

遺物：土師器、須恵器、円面硯、鉄器（鋤先、鉄鏃）､木製品（井戸枠、板材、木杭）、

耳環、墨書土器など

（２）第５次調査（調査Ⅷ区）の概要

所在地：玉名市大字河崎字フケ

調査期間：平成10年５月12日～平成11年４月17日

調査面積：約6,100㎡

熊本県：調査Ⅷ区（約3,300㎡）

玉名市：調査Ⅸ区（約2,800㎡）

調査手順：２度の重機による表土剥ぎを経て、手掘りによる遺構検出及び遺構掘り下げ作業を行い、主に古墳時代前期、奈良時代の調査を行った。

出土遺構・遺物：本調査区内の主要な遺構及び遺物は次のとおりである。

○縄文時代晩期～弥生時代前期

遺構：土坑?

遺物：刻目突帯文土器、丹塗土器

○古墳時代前期

遺構：竪穴住居跡６基、土坑８基、井戸跡２基、大溝遺構３本、溝状遺構１本以上

遺物：土師器、須恵器、木製品（木杭、農具、板材）､手捏土器、ミニチュア土器、青銅鏡破片など

○古代

遺構：竪穴住居跡１基、掘立柱建物跡１棟、井戸跡３基、土坑１基

遺物：土師器、須恵器、獣骨、鉄器（釘、刀子）、木製品（杭、糸車）、墨など

○その他の時代

遺構：池状遺構２基、掘立柱建物跡１棟(?)など（中世）

遺物：中世の青磁、白磁片、渡来銭、近世陶磁器、近世木器など

（３）第６次調査（Ｘ区）の概要

所在地：玉名市河崎字田中・尾畑

調査期間：平成11年７月12日～平成12年４月14日

調査面積：熊本県：調査Ｘ区（面積約2,700㎡）

玉名市：調査Ⅲ－２区

調査手順：調査区を設定上２分割せざるを得ず、Ｘ－１区とＸ－２区として各々調査を実施。重機による表土剥ぎを経て、手掘りによる遺構検出及び遺構掘り下げ作業を行い、主に縄文時代晩期、弥生時代前期、古墳時代前期、古代、近世の調査を行った。

出土遺構・遺物：本調査区内の主要な遺構及び遺物は次のとおりである。

○縄文時代晩期

遺物：縄文時代晩期土器（夜臼相当期）の壺形・甕形土器、丹塗磨研壺形土器（松菊里型）等

○弥生時代前期

遺構：流路状遺構、杭列、堰

遺物：弥生時代前期土器（少量）、木製品、石器（石庖丁、大陸系磨製石鏃）

○古墳時代前期

遺構：井戸跡１基、水田跡

遺物：土師器（少量）、須恵器（少量）など

○古代（平安時代）

遺構：道路状遺構３本

遺物：土師器、須恵器など

○近世

遺構：溝10本、ピット、土坑

遺物：陶磁器（17世紀前半～18世紀）、瓦質土器、近世木器（椀、下駄）など

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　縄文時代～弥生時代中期の遺構と遺物

（１）縄文時代の遺物【第10図・第11図】

縄文時代の遺物のうち後期・晩期の土器は、調査Ⅶ区・Ⅷ区・Ｘ区の各調査区でそれぞれ出土している。出土層は一様ではなく、古墳時代や古代の包含層中にも混じっていた。Ⅷ区とＸ区では縄文時代晩期のみの包含層を確認した。ただ遺物の出土数は多くはなく、遺構も確認できなかった。『柳町遺跡Ⅰ』の記述によれば、調査範囲にあった自然流路中から良好な資料が出土している。

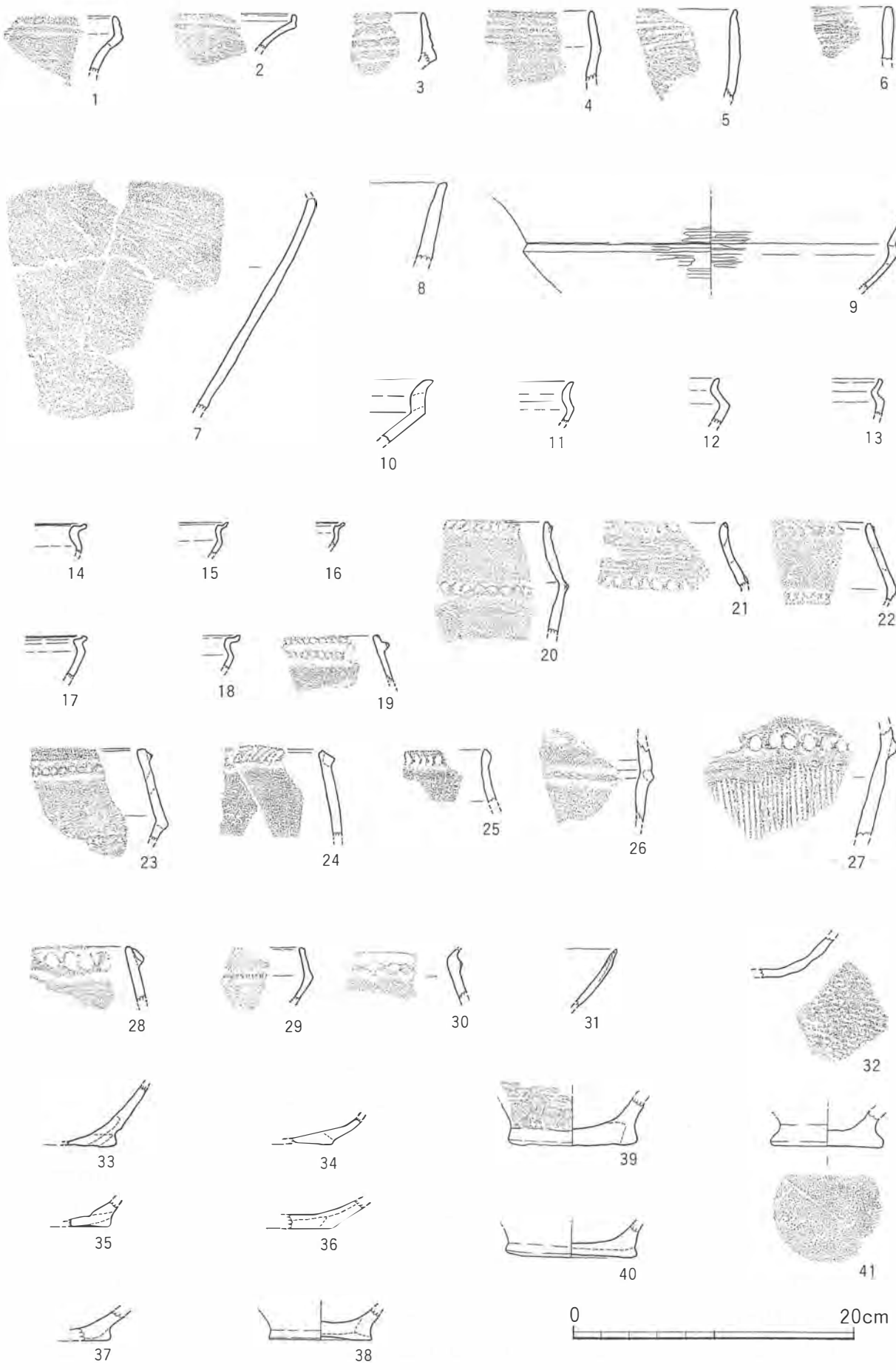
調査Ⅷ区の南西側は菊池川の自然堤防とみることができ、今回の調査では縄文時代の遺構だけでなく、古墳前期の住居跡、井戸跡、古代の掘立柱建物、住居跡、井戸跡などが存在し、良好な生活の場を形成していたことをうかがわせる。縄文後晩期～弥生前期の時期、この付近は調査結果からみるとかなり起伏に富んだ地形をしており近くにの水田農耕の証拠が存在する可能性もある。当時は自然科学的な調査から汽水産の生物が生息していたことがわかっており海に近い河川の縁に形成された自然堤防状の高まりが若干あったものと思われる。

出土した遺物は大部分破片である。出土した場所はⅧ区の自然堤防、流路の中、Ｘ区の自然流路の中である。まとまって出土した場所は少ないが、縄文時代晩期前半から末まで出土している。

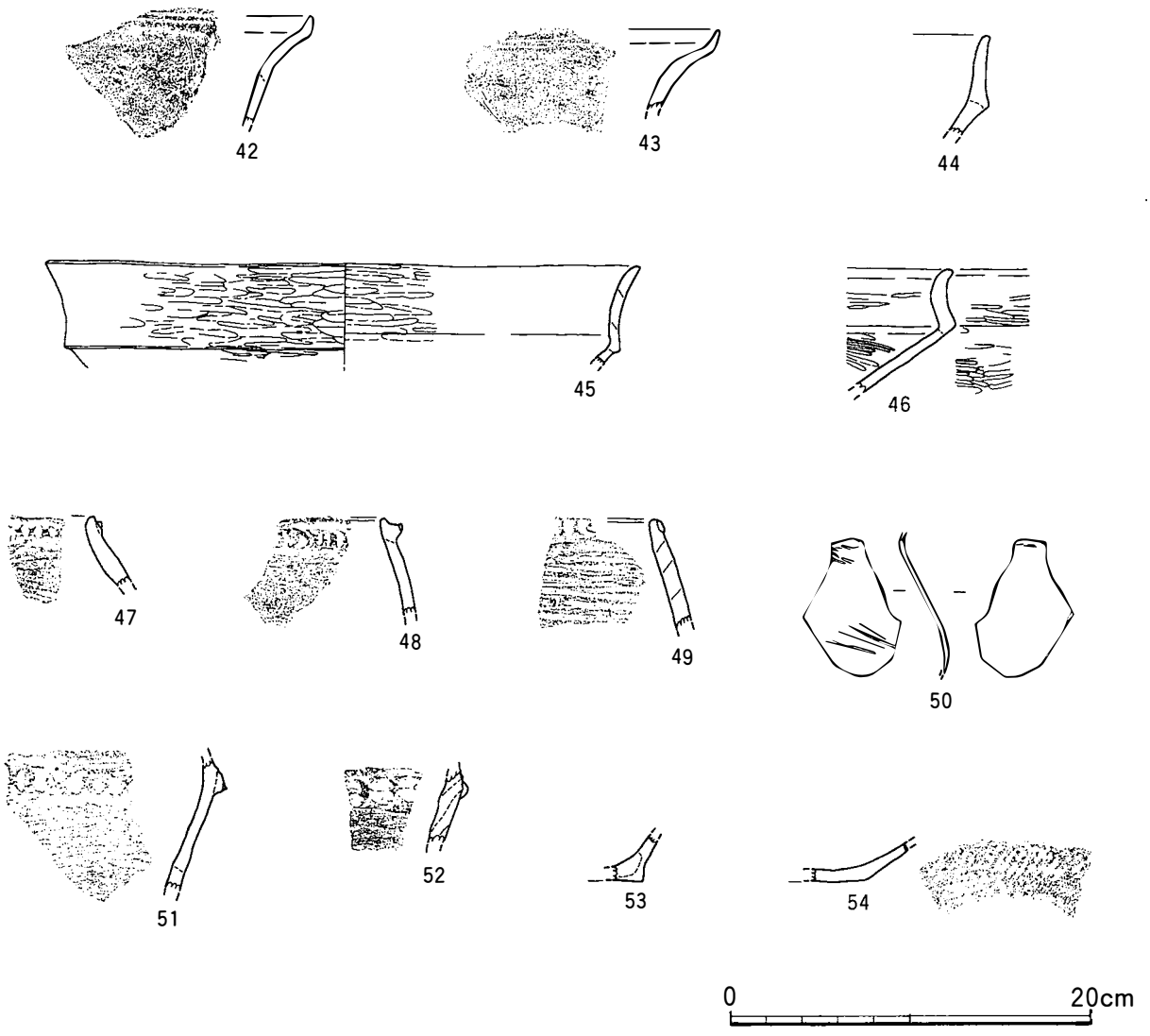
１～５は、天城式、古閑式にあたる深鉢もしくは浅鉢の口縁部である。1はⅧ区ｃ－31グリッド出土の深鉢で口縁部に沈線を二条めぐらす。2はⅧ区Ｚ･ａ－31グリッド一括出土の浅鉢で内外面にミガキが施され、口縁部に沈線を薄く入れる。3はⅧ区ｂ－31グリッドⅤｃ層一括出土の深鉢で口縁部に沈線を巡らす。4はⅧ区ｃ－31グリッド出土の深鉢で口縁部に細い沈線を６条めぐらす。5はⅧ区ｆ－34グリッド出土の深鉢で外器面に貝殻条痕で調整している。7は深鉢の胴部で、外器面は貝殻条痕で調整されている。8はⅧ区ｅ－35グリッドⅤｃ層出土の深鉢である。9はＺ・ａ－31グリッド出土の浅鉢で内外器面とも横方向のミガキ調整がなされている。古閑式の範疇である。

これ以降は縄文時代終末もしくは、弥生時代早期と呼ばれる段階のものである。10～18は黒色磨研系土器の系列に連なるものである。器形はいずれも浅鉢で、大きさの違いから２類、口縁部の特徴から２類に分けられる。大きさを基準にすると10とその他、口縁部では、外へ反り返って終わるもの（10～12）と外へ反りながら内側へ返しのつくもの（13～18）に分類できる。これらの土器はその形態的な特徴から晩期の末の方に入る。10はⅧ区5SX040出土の浅鉢である。11はⅧ区ｃ－34グリッド出土の浅鉢である。12はⅧ区ｅ－35グリッドⅤ層一括出土の浅鉢で内外器面ともナデ調整される。13は、Ⅷ区5SX040のＥ層出土の浅鉢である。14もⅧ区5SX040のＤ層出土の浅鉢で、内外器面ともナデ調整される。15は、Ⅷ区5SX040のＥ層出土の浅鉢である。16はⅧ区ｆ－35グリッド出土の浅鉢で内外器面ともナデ調整される。17はⅧ区5SB018の半裁トレンチから出土の浅鉢で内外器面ともナデ調整される。18はⅧ区砂層出土の浅鉢である。

19～30までが突帯文土器である。19は、Ⅷ区5SX023の最下層出土の甕で、調整は摩耗のため不明である。20～22は二条の刻目文を口唇部と胴部の屈曲部に施すものである。いずれの文様も突帯を付けずに直接刻目を付けるもので、厳密には突帯文にはならないものであるがここで取り上げた。20はⅧ区ｃ－31グリッドⅤｃ層出土の甕形土器である。21はＸ区6SX506床直上層出土の甕形土器である。22はⅧ区ｂ－33グリッド出土の甕型土器である。23・24は口唇部付近に突帯をめぐらし、それに刻目文を施すもので、胴部にはないが、屈曲部に突帯を付けずに刻目文を施すものである。23はⅧ区ｂ－33グリッドから出土した刻目突帯文土器である。25はⅦ区4SX049の２層出土の甕形土器である。26はⅧ区ｂ－31グリッドから出土している。胴部の屈曲部に突帯を巡らし、それに刺突による刻目文を施したものである。これらの土器には器面調整として条



第10図　縄文後期～晩期土器実測図

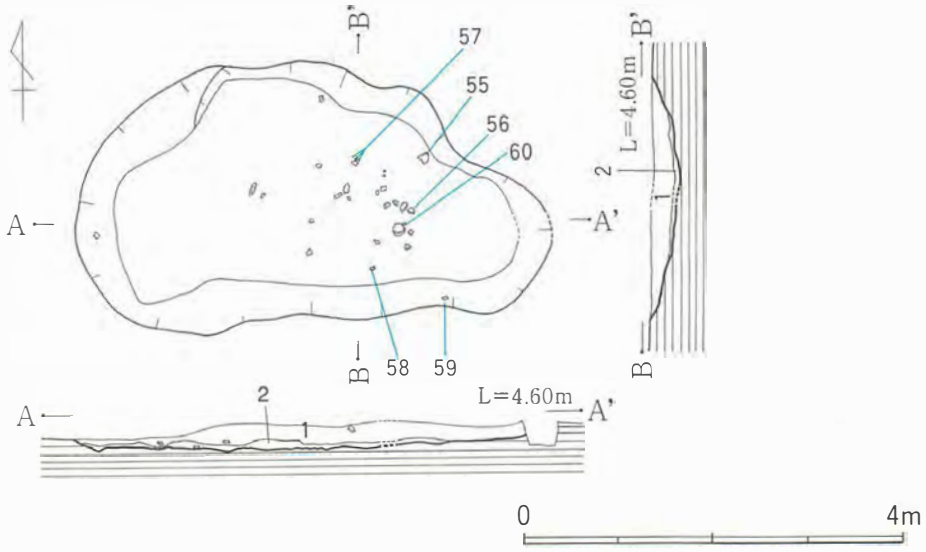


第11図　縄文晩期土器実測図

痕が使用されるものが多い。

28はⅧ区ｃ－33、34グリッドⅤ層出土の甕で内外器面ともナデ調整される刻目突帯文である。29はⅧ区ｃ－34グリッドⅤ層出土の小型甕である。30はⅧ区5SK032出土の甕内外器面ともナデ調整される刻目突帯文土器である。31は、Ⅷ区ａ－32グリッド出土の無紋の浅鉢形土器である。

32～41は深鉢と浅鉢の底部で、いずれも平底でいくらかやや上げ底となる。32は、Ｘ区の6SX049出土の組織痕土器で、浅鉢であろう。33はⅧ区5SK036出土の甕形土器の底部である。内外器面ともナデがほとんどである。34はⅧ区ｂ－32・33グリッドⅣ層出土の浅鉢形土器である。35はⅧ区5SX040のＥ層出土した甕形土器で内器面にナデ調整がみられる。36はⅧ区ｂ－32,33グリッドⅣ層出土で外器面にミガキ、内器面はナデ調整される。37はⅧ区ａ－32､ｂ－33グリッド出土の浅鉢で内外器面ともナデ調整される。38はⅧ区5SX023で深鉢である。内外器面ともナデ調整である。39は、Ⅷ区ｄ－34グリッド出土の深鉢で外器面は貝殻条痕と底面には組織痕が残る。内器面はナデ調整である。内器面には煤が付着している。40はⅧ区5SX023の最下層と２層の接合資料で、深鉢形土器である。内外器面ともナデ調整がなされる。41はⅧ区5SX023の２

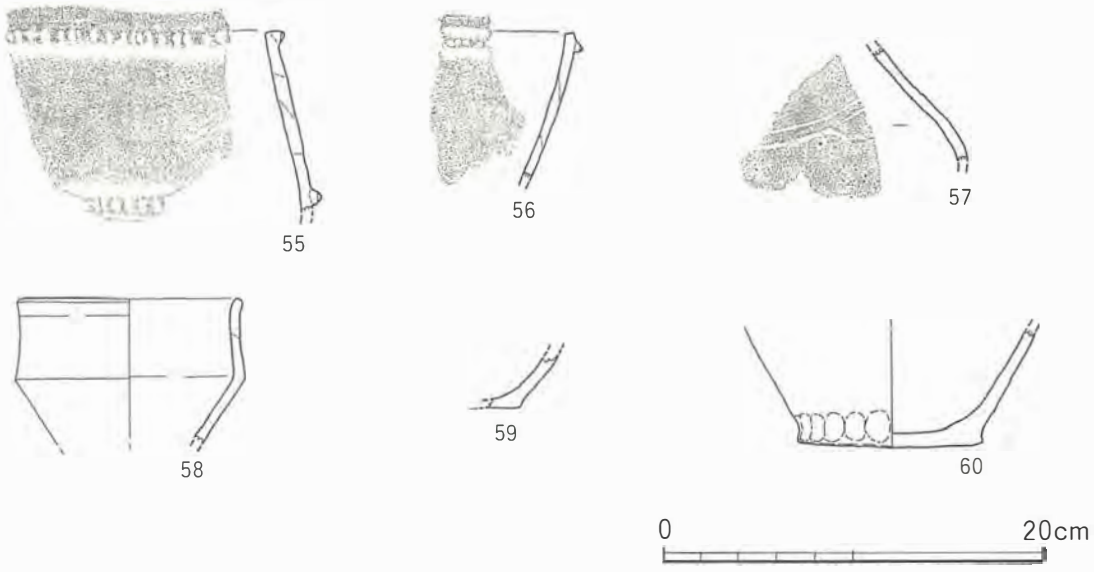


第12図　5SK067実測図

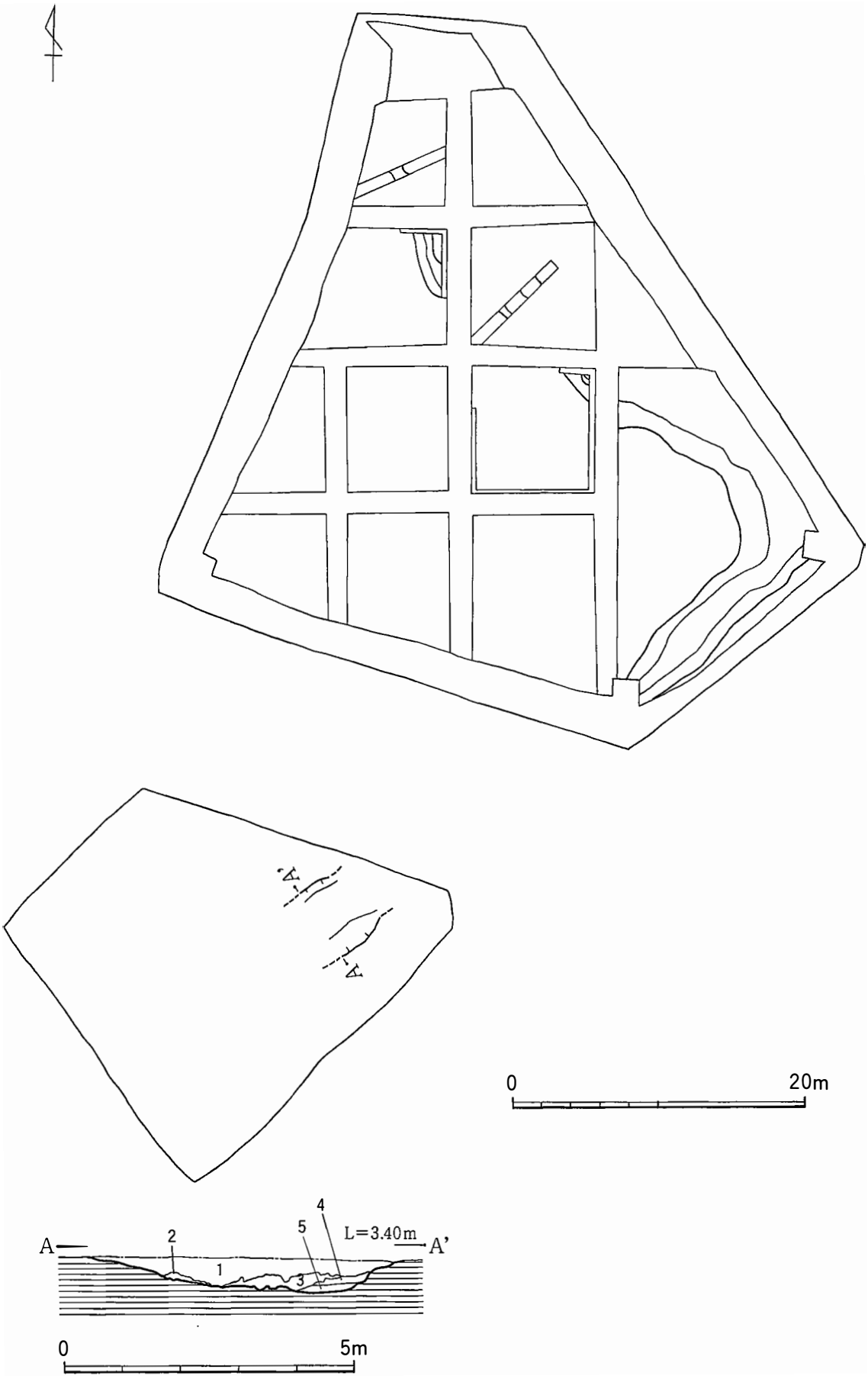
層出土の甕形土器で外器面は横ナデ、内器面もナデ調整される。外底面に木の葉の圧痕がある。

45はX区g－40グリッドⅫ層出土の大型の浅鉢形土器で、内外器面とも横方向のミガキ調整がなされる。49はX区j－40グリッドⅫ層出土の甕で、口唇部に突帯を持たず、外器面は貝殻条痕調整され内器面は横ナデ調整される。貝殻による刻目文土器である。

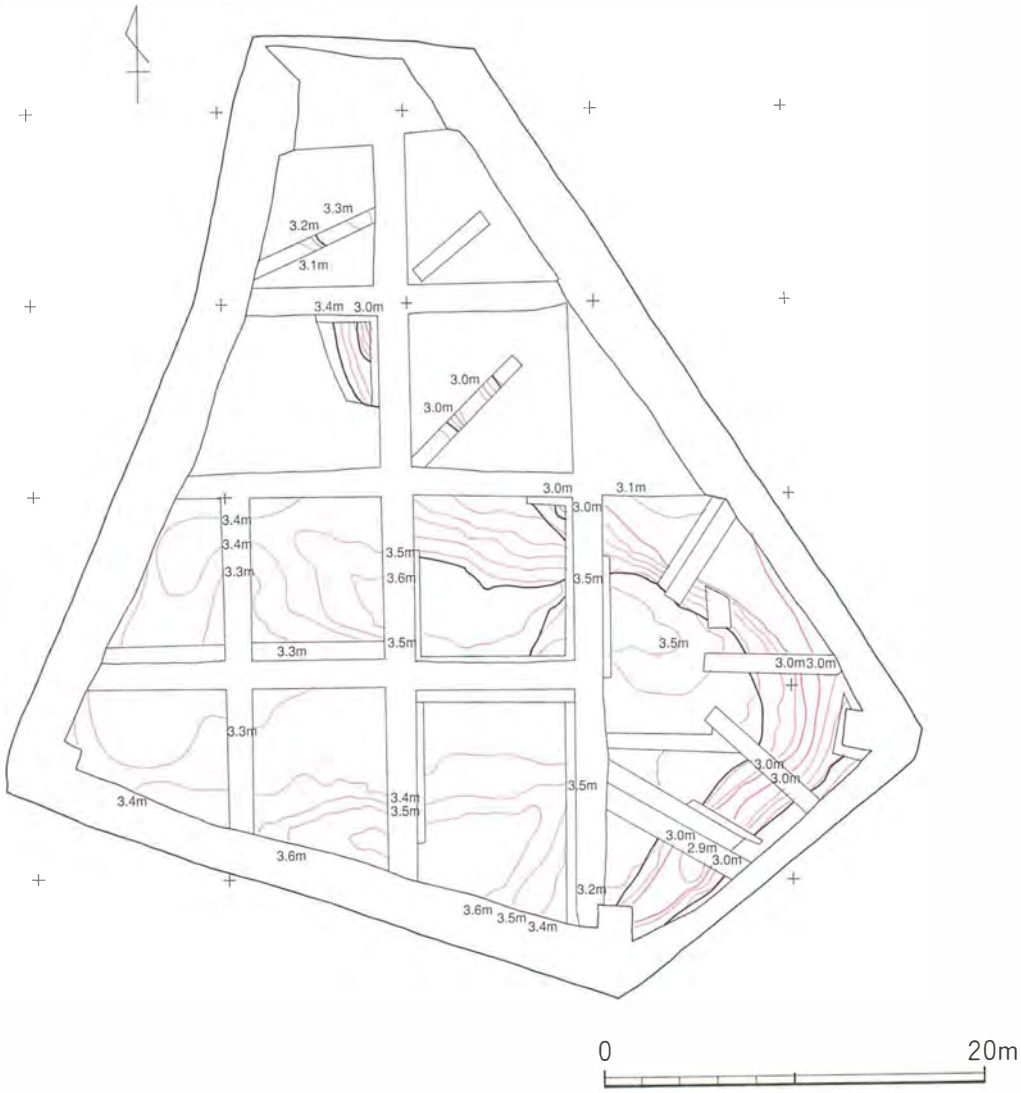
50はX区g－40グリッドⅫ層出土の壺で内外器面ともミガキ調整される。この土器は頸部のくびれが明確でない小型の壺で外器面には赤色顔料が塗布されていた。内器面は黒色を呈し、一部に赤色顔料が残存しており、顔料が入れてあった可能性がある。残存高が10cm弱で全体像はつかみにくいが、頸部がすぼまり、底部が丸くなり、ヒョウタンのような形になるものと推定した。胎土はよく精製され、またよく焼成されている。この土器については、韓国の松菊里出土の土器との類似が指摘される。



第13図　弥生前期土器実測図



第14図　6SX049（自然流路）実測図



第15図　調査Ｘ－１区内6SX049実測図

（２）竪穴遺構と出土遺物

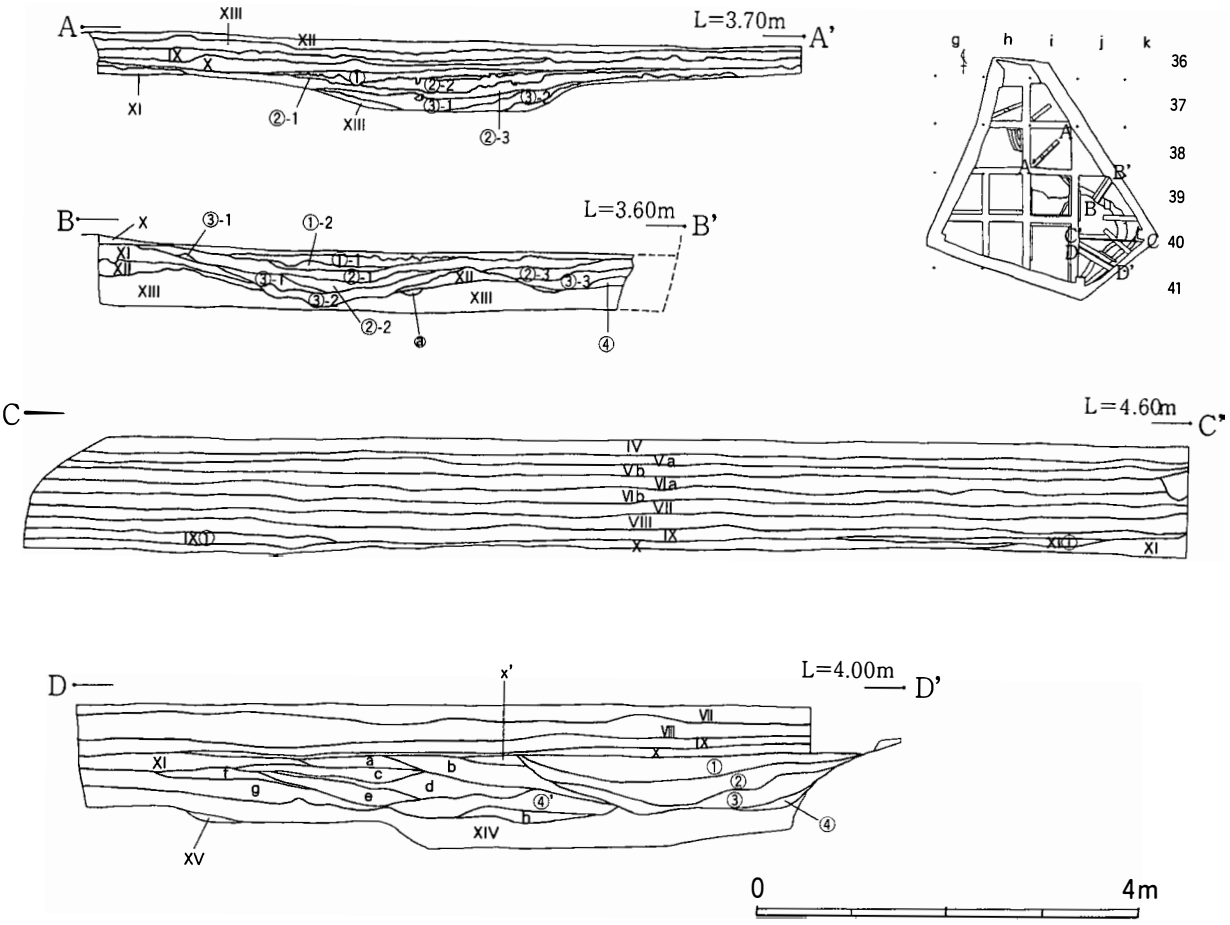
○5SK067【第12図】

調査第Ⅷ区ｂ－33グリッドからｃ－33グリッドにかけて確認したもので、古墳時代前期の遺物が多く溜まっていた土坑（5SK037）から土器を取り除き若干掘り下げたところから突帯文土器が出土した。そこでさらに周囲を精査したところ、長径5.0m、短径2.7m を測る、やや不整形な楕円形状を呈する土坑を確認した。深さは遺構確認面から14cm を測る。遺構内には弥生時代初期の突帯文土器や壺などがまとまって出土した。

埋土は、1層が赤灰色（10R6/1）を呈し、粘質土にやや砂粒が混じった土層で、遺物を若干含み、5SK037の地山の層である。2層が暗赤灰色（2.5YR3/1）を呈し、火を受けて炭化した木材片（１～3cm 程）や焼土片が層中の約４割に含まれ、粘性が強く締まりがある。また、この層中に含まれているのはほとんど刻目突帯文土器に伴う遺物が大部分である。

［出土遺物］【第13図】

多くの刻目突帯文土器があるが、小破片が多かったため図化できたのは僅かであった。55は大型の甕形土器の口縁部で２条の刻目突帯文を持ち、上部の突帯は口唇部につながる。内外器面は横方向にナデ調整され



第16図　調査Ｘ区土層断面実測図

る。56は深鉢形土器で１条の突帯を持ち、口縁が最大径を測り、そのまま底部へすぼまっていく。内外器面ともナデ調整される。58は最大径が胴部の屈曲部にくる小型無紋の甕形土器である。調整はナデである。

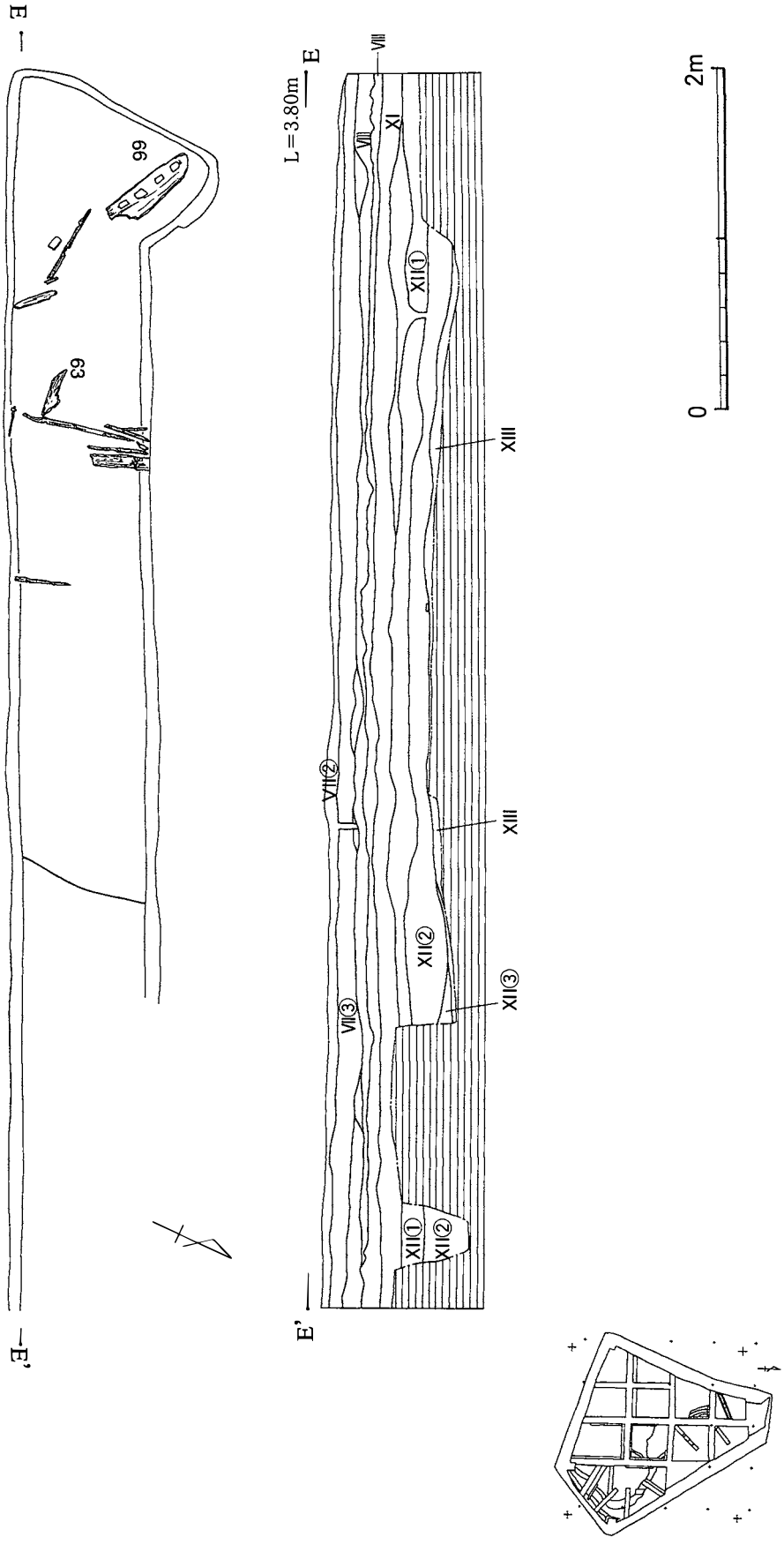
57は壺形土器の頸部付近で、頸部下の胴部に薄く弧状になる二重沈線が施文されている。内外器面ともミガキ調整される。59は壺形土器の底部で、小型のものであろう。内外器面ともミガキ後ナデ調整である。60は平底の甕形土器底部で、底部と胴部の境近くに指押えが残る。

（３）自然流路関係遺構と出土遺物

○6SX049（溝状遺構・自然流路）【第14図～第21図】

この遺構は調査で調査Ｘ－１区、Ｘ－２区にかけて確認したものである。ただ、両調査区全体でこの遺構を確認した弥生時代初期の面まで掘り下げるには至っていないため全体像をつかむことはできていない。出土した遺構をつなぎ合わせた結果、調査Ｘ－１区から調査Ｘ－２区にかけて繋がるものと判断した。これはいわゆる「自然流路」として流水が一定期間あったもので、人工的に掘削されたものとは考えていない。ただ、その流路を当時一つの水路と認識し、利用していたと推測したため遺構とした。

部分的な調査にとどまったが、Ｘ－１区の北側から東西に蛇行しながらＸ－２区まで流れていることが予想できた。全体の推定長は100m 程度であろう。流路の幅は限られた範囲でしか計測できなかったが、5m 程である。



第17図　h−37グリッド確認トレンチ平面・土層断面実測図

調査Ⅶ区・Ⅷ区ではこの流路を確認した層までともに掘り下げを行っていないが、これに類するものがそれらの調査区にもあった可能性は十分ある。柳町１でもこの時期に近い調査Ⅱ区の１号自然流路などの例がある。

この遺構に伴う遺構として6SX054（堰状矢板列)【第19図】、6SX055（杭列)【第20図】などがあり、人がこの「自然流路」に働きかけた証しである。

［層序]【第16図・第17図】

この遺構が時間的に制限された中で調査をせざるを得なかったため十分調査ができたとはいえない。ただ、そのいくつかのトレンチを設定し、層序を確認することでこの遺構の状況をつかむこととした。

第16図、第17図では、X－１区内のe－37グリッド、i－38グリッド、i－39グリッド、f－37グリッドの各トレンチのそれぞれに設けたA－A'、B－B'、C－C'、D－D'、E－E'の各土層断面である。この土層断面の記録には、この遺構と関係する部分がある。ここでは、それぞれの土層の注記を以下に記す。なお、注記を記す場合に使用した層番号は必ずしも同じものを意味しないことを付記しておく。

・A－A'(i－38グリッド・トレンチ７）断面

①－１層は灰色粘土で、やや青味がかり、鉄分の集積が縦縞状にかすかにみられる。②－１層は、暗灰色（N3/0）粘土である。②－２層は、暗灰色（N3/0）粘土で、②－１層より暗く、5mm～1cm 大の白灰色粘土粒が多量に混入し、炭化物を極くわずか含む。②－３層は、暗灰色（N3/0）粘土で、②－２層よりやや暗く、炭化物をわずかに含む。③－１層は、暗青灰色粘土で、炭化物を少量含む。③－２層は、暗青灰色粘土で、③－１層よりやや暗く、アシ等の植物遺体をわずかに含み、炭化物も微量混入する。

・B－B'(i－39グリッド・トレンチ（TR） ６）

①－１層は、灰色粘土である。①－２層は、灰色粘土で、①－１層よりやや暗い。②－１層は、暗灰色(N3/0）粘土で、アシ等の植物遺体が少量残存する。②－２層は、暗灰色（N3/0）粘土で、②－１層よりやや青味がかる。②－３層は、暗灰色（N3/0）粘土で、②－１層、②－２層よりやや明るい。③－１層は、暗青灰色粘土で、植物遺体が微量残存する。③－２層は、暗青灰色粘土で、③－１層よりやや暗い。③－３層は、暗青灰色粘土で、③－１層、③－２層よりしまりがなく、やや明るい。④層は、暗青灰色強粘土で、上層の②③層よりも植物遺体が少ない。ⓐ層は、明青灰色強粘土でブロック状にはいる。

・D－D'断面

a層は、暗黄褐色粘質土である。b層は、暗褐色粘質土である。c層は、暗褐色粘質土である。d層は、暗褐色砂質土である。e層は、暗褐色粘質土にやや青灰色土が混入する。f～g層は、他の地点ではⅫ層としているものと同じかもしれない。ややしまり具合に違いがあり分けた。h層は、暗褐色粘質土に青灰色砂質土が混入している。④層は、暗褐色粘質土である。ⅩⅤ層は、淡黄褐色～青灰色を呈する。ⅩⅣ層は青灰色～暗褐色粘質土と砂質土の互層である。縄文晩期遺物を含む層である。

・E－E'断面

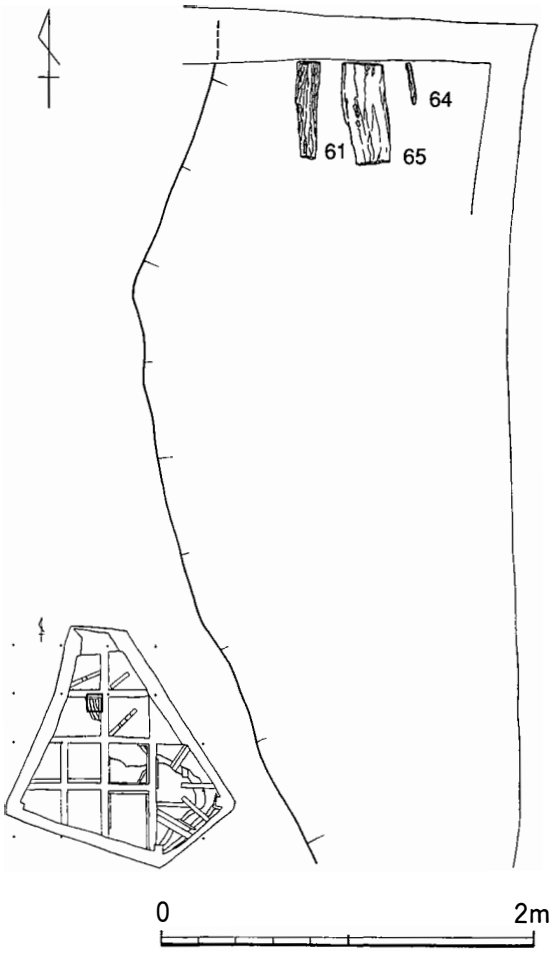
①層は、黒褐色（2.5Y3/2）を呈し、粘りがありしまっている（砂質10%、粘質90%)。炭化物がまばらにみられ、ところどころに木片を含む。②層はオリーブ灰色（2.5GY5/1）を呈し、微量の酸化鉄の集積がみられ、粘質は非常に強い。黒褐色の粘質土が混入している（砂質10%、粘質90%)。③層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、白っぽい粒状の粘質土が混入しており、非常にしまっている（砂質５%、粘質95%)。④層は、黒褐色（2.5Y3/1）を呈し、全体的に炭化物、茶色系の粘土塊が混じり、木片もみられる（砂質５%、粘質95%)。⑤層は、灰色（7.5Y4/1）を呈し、⑧層よりもやや黒っぽい。粘質土（砂質５%、粘質95%)。⑥層は、灰色（7.5Y4/1）を呈し、炭化物・木片を含む。土質は粘性が非常に強くべとべとしている（砂質５%、粘質95%）。⑦層は、オリーブ黒色（5Y3/1）を呈し、木片を含み、炭化物はみられない。粘質は非常に強い（砂

質５％、粘質95％)。⑧層は、灰色（5Y4/1）を呈し、⑤層よりもやや明るい層で、青っぽいオリーブ灰色土がまだらに混じる（砂質５％、粘質95％)。⑨層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、微量の炭化物がみられる。粘質は非常に強い（粘質100％)。⑩層は、緑灰色（5G5/1）を呈する地山層である。弱い酸化鉄の集積がみられる(粘質100％)。

[出土遺物]

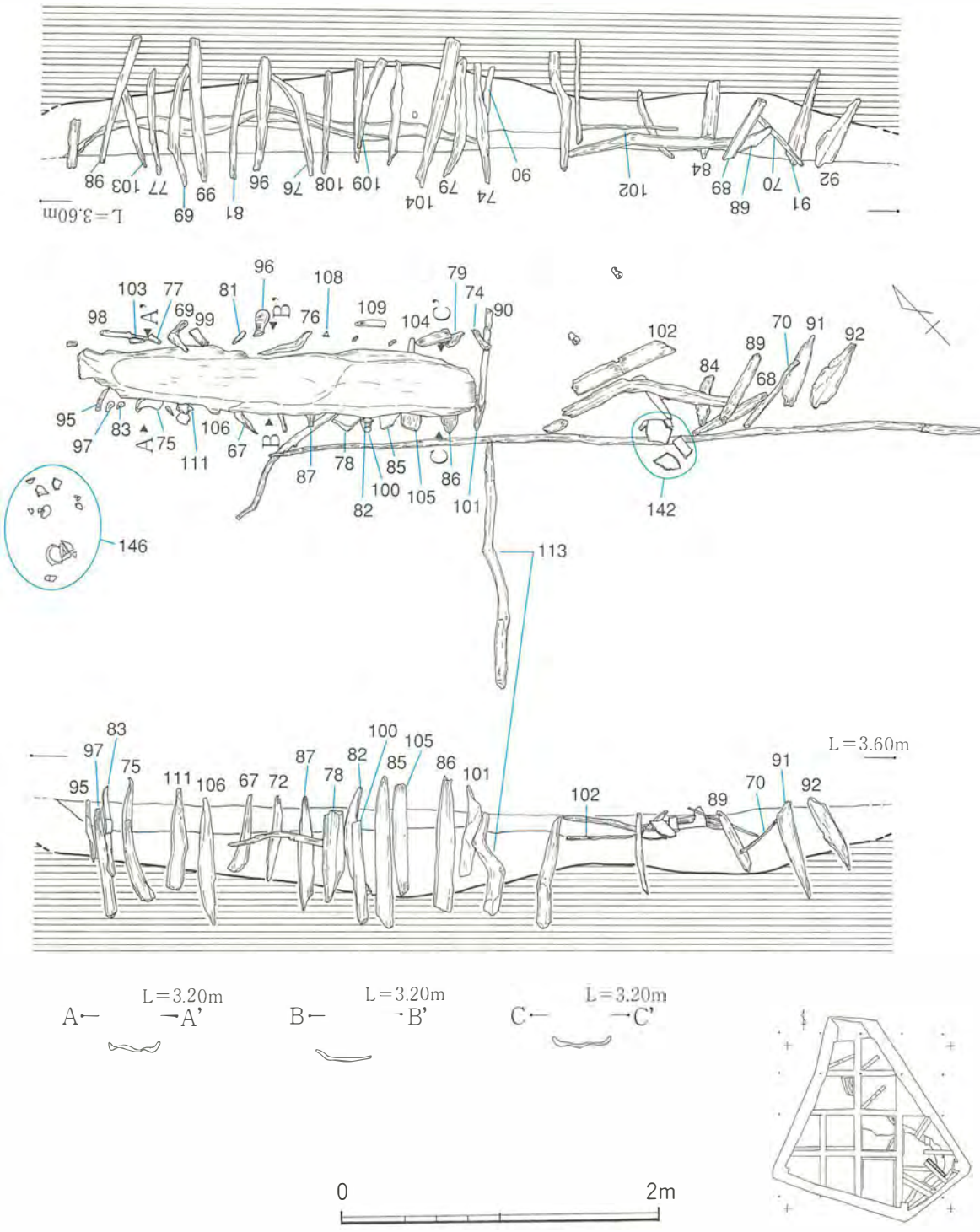
この遺構に伴う遺物は、縄文晩期土器、弥生時代早期土器、網代や木製品、その未製品、木材、石器、石器製作に伴う破片等などがある。

この遺構に伴う土器は第10図６・27・32、第11図42～48、51～54などで甕形土器・壺形土器がほとんどである。6は深鉢で、外器面は条痕とナデ調整、内器面はヘラ工具によるナデ調整される。口縁部に弱い沈線を数本引く。27は外器面が貝殻条痕、内器面が貝殻条痕後ヘラ工具によるナデ調整される甕形の刻目突帯文土器である。胴部に突帯を巡らす。42・43は口唇部に文様帯があり、そこに不規則な沈線が入る。頸部がすぼまり、口縁部が大きく反り返っている。いずれも深鉢である。44は浅鉢の口縁部である。46は内外器面とも横方向によく磨かれている浅鉢形土器である。口縁部が外反し、体部は器壁が薄い。47・48は口唇部に突帯をもち、それに刻目文を施した甕形土器である。51は胴部の屈曲した下位部分で突帯が屈曲部にあり、そこに刺突による連点が施される。52は、やはり胴部の屈曲部で、突帯に刺突による刻み目が施されている。53・54は底部で甕形土器と浅鉢形土器のものである。53は、平底もしくはやや上げ底のもので、縄文晩期のものであろう。54は組織痕土器で、側面にアンギヌの痕跡が残る。平底である。



第18図　h－38グリッド6SX049実測図

この遺構から出土した木製品としてはh－37グリッドからh－38グリッドにかけて掘削したトレンチから出土した第22図66の有孔板状木製品がある。この木製品は長さが58.1cm、幅が16.2cmを測り、やや長めの半月型を呈している。腐食が進行していたため、厚さは1.4cmと薄く、取り上げに苦労した。樹種はブナ科シイ属であった。この他には、第22図61・65の割材がある。61は割材で樹種はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。長さが50cm、幅20cmを測る。65は素材としてこれから製品を作る前に水漬けしていたと推測している。樹種は同じくブナ科コナラ属

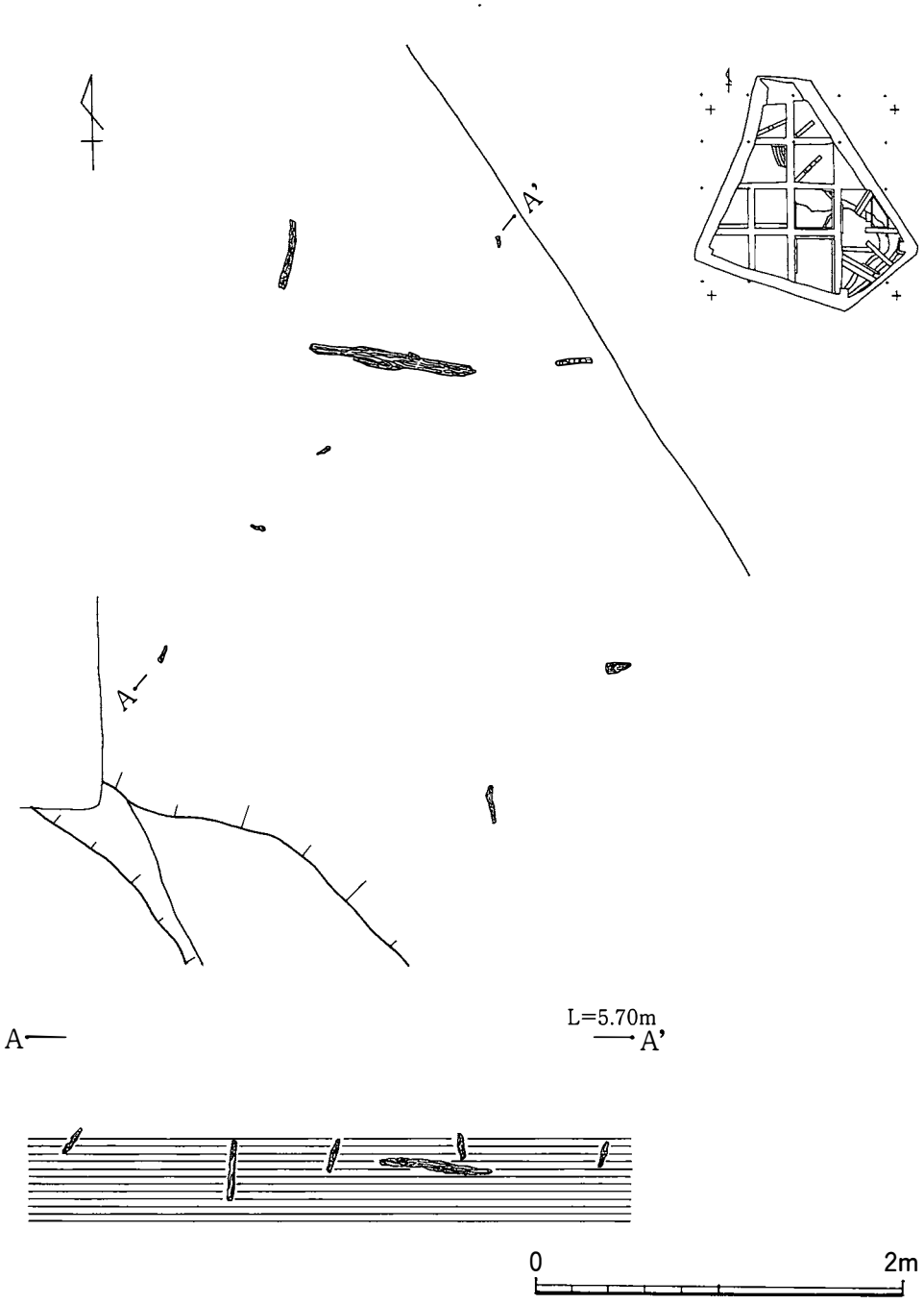


第19図　6SX054堰状遺構実測図

アカガシ亜属である。長さが50cm、幅が25cmを測る。厚さは厚く、10cmを測る。材は柾目取りである。これらは同一の木から取られた可能性がある。

石器類のうち主なものは、第31図に記載した。

115は、大きさ4cm前後の石核である。石材は黒曜石である。多方面から力を加え、小剥片を剥ぎ取っている。縄文時代晩期の石刃を得るためのものと思われる。116も石核で、石材は黒曜石である。平坦面を作り出した石片に対して、垂直方向に敲打を加え、短い剥片を作り出している。これも縄文時代晩期のものであろう。117は、縦長剥片で、長さ3.9cmほどである。石材は黒曜石である。一打点で縦長に剥いでいる。

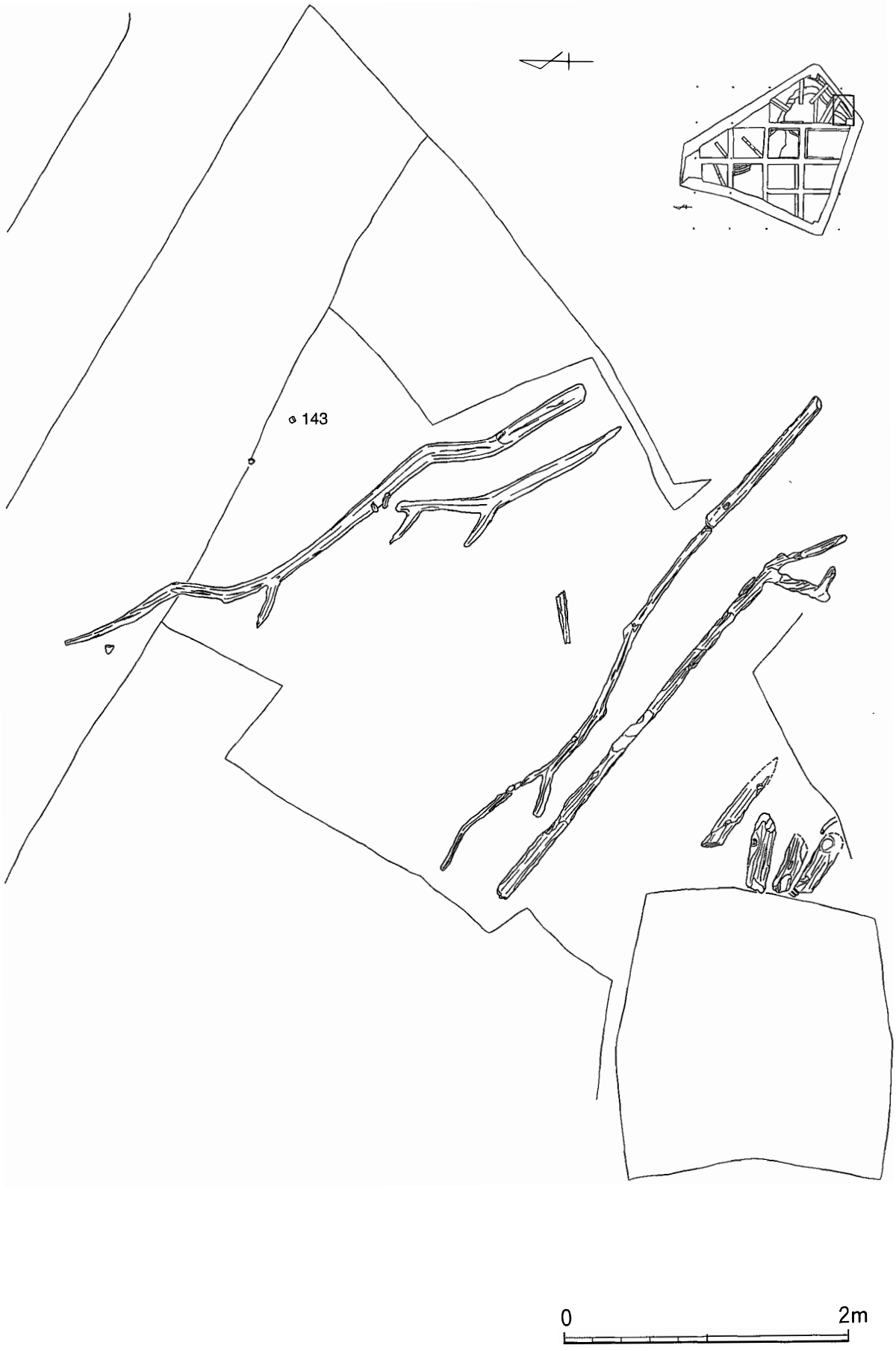


第20図　6SM055杭列実測図

使用痕などは特に認められなかった。118は径3cmほどの小型磨石である。自然の円礫を利用したもので、一面に研磨面がみられる。石材は安山岩である。

○6SX054（堰状矢板列）【第19図】

この矢板列は流路6SX049の流れる方向に対してほぼ垂直に造作されていた。この遺構は、間隔が約50cmを測る2列の矢板状の板材と杭の列の間に土を盛り、その上に板状のものが置かれていた。確認した長さは、5mほどを測る。そのうちの半分までがはっきりと残る。当時の水流を想定できないので遺構の残存状況として、北側方向からみて右岸部分から流路の中ほどまではしっかり残り、矢板列だけでいえばほぼ流路幅い



第21図　6SX049内流木出土状況実測図

っぱいに渡したようになっている。左岸からは径3cmの細長い一木材を矢板列の中程まで下流側に渡していた。これらを一連の遺構とすると両岸いっぱいに渡されたことになる。したがって、この遺構の右岸基部から中央まで、矢板列によって流路を堰き止める状況となり、全体を堰き止める場合もあったと思われる。通常は、矢板列部分から水流を引き込む施設が想定できるが、ここでは、そのような施設は確認できなかった。このようなことから堰というよりも、桟橋上のものであった可能性がある。

［部材］【第23図～第29図】

6SX054の部材として50本余りを図化した。それぞれ材を示すため【第19図】に対応番号を振っている。

部材を仔細に観察すると、材の選択と加工などから、大きく4種類に分類できる。（1）細い一木を利用し、下端は特に加工せず、伐採時のままのもの、（2）半裁丸材で下端は伐採時のままか、ややとがらせ気味にしたもの、（3）ミカン割り材を利用し、下端は伐採時のままで加工を特におこなっていないもの、（4）板状に割ったミカン割材を利用したもので、縦方向の下端を尖らせて打ち込みやすいように加工しているものなどである。

（1）に当たるものとしては、70・71・90・93・94・97・98・100・107・109などである。長さは上部が腐植していることと、もともと長さの異なるものがある。ただ、長さとしては、42cm～86cmほどで、かなりばらつきがある。

（2）にあたるものとしては、73・79・84・89・96・101などである。長さとしては、まちまちで統一性がない。

（3）にあたるものとしては、67・68・69・72・74・75・76・77・80・81・82・83・85・86・87・99・104・106・108・110・111などである。これも長さがさまざまで統一性はない。

（4）に当たるものとしては、78・91・92・95である。板材はミカン割材ながら、かなり幅広いものを利用し、下端は金属器によるかと思われる加工がなされている。

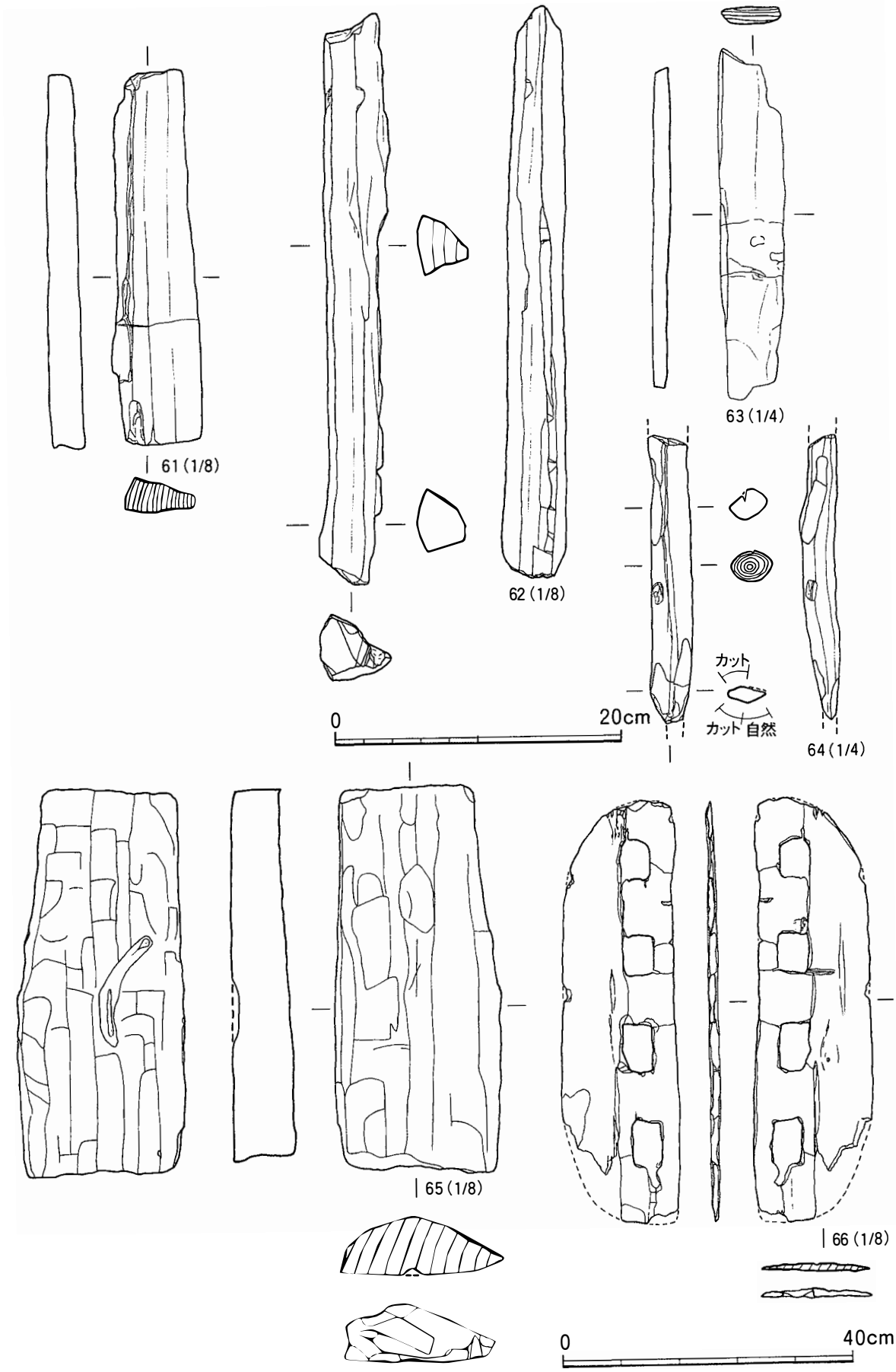
このほかにも、105のように柾目材を利用した板材もある。102は板目取りに取られた板材で、表面には加工痕が残る。杭列の一部ではなく、2列の杭列の上に置かれた薄い板材の上にあったものである。杭列との関係ははっきりしない。この他にも小さな木材が利用されている。

伐採時の状態を残す端部は、石器によるものであろうが、（4）のような加工痕は果たして石器のみでおこなったか疑問である。

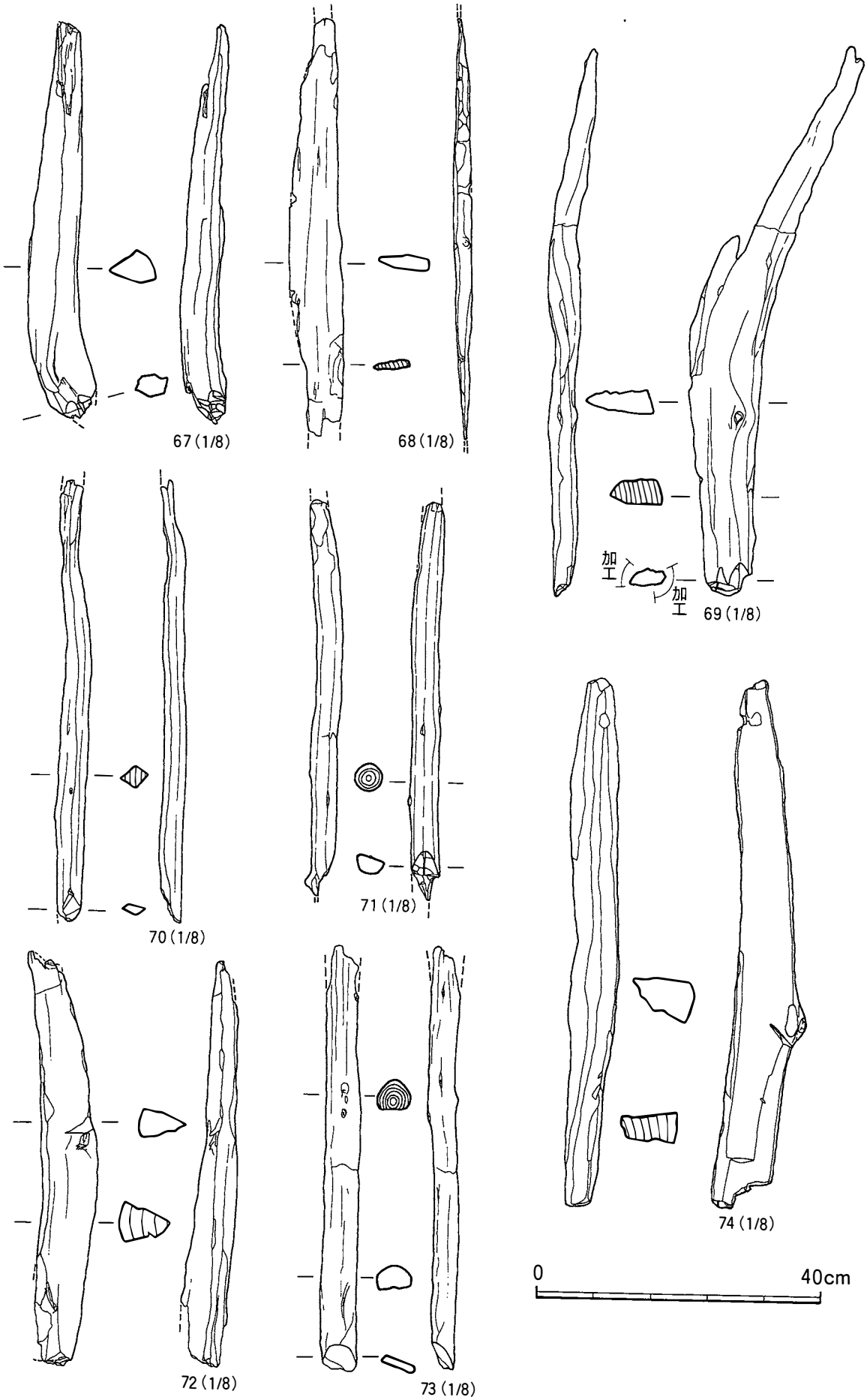
樹種については、いくつかの部材を保存処理にかけた際に同定している。それによると、ブナ科やニレ科のものであった。選択した際にその見かけで同じものを選ばないようにしたので、だいたい他の部材もこの中に含まれるものと考えられる。

［網代］【第30図】

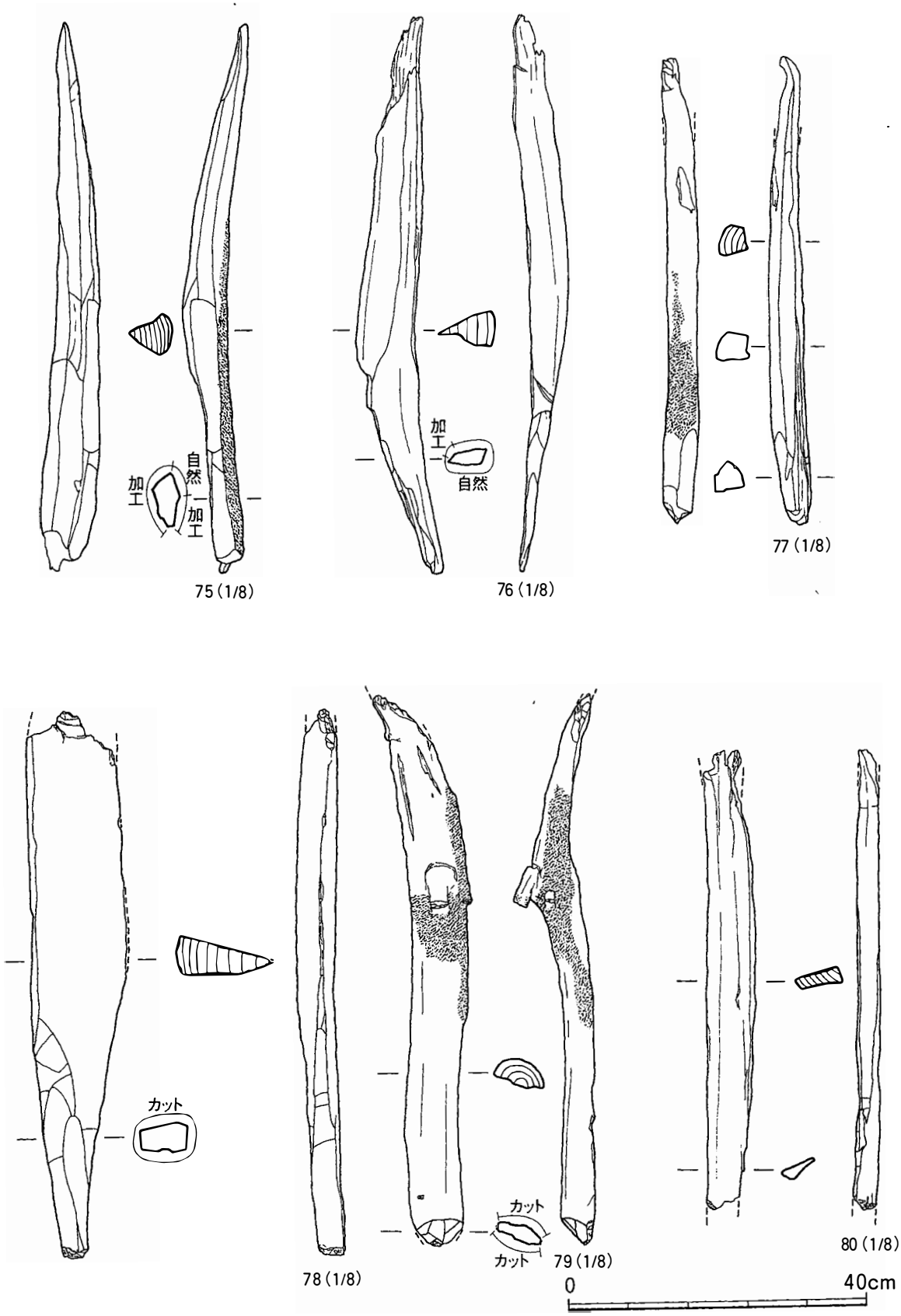
6SX054の北側付近で網代114が出土した。調査期限が迫り6SX054の掘削完了を急ぐあまり、スコップを使っての掘削していた中でこの網代が出土したため、一部をスコップで削ってしまった。このため本来の大きさはつかめていない。また、出土時の記録も出土状況写真のみで、図化はできていないなど不十分である。ただ形状を保つためには下の土ごと取り上げ、その後保存処理を行った。保存処理後に改めて実測を行った。そのため出土時よりも多少歪みのある可能性がある。現在の残存長40cm、残存幅45cmを測る。網代の材料は、一本一本を観察すると断面が半円状を呈し中心には髄がみられることから、ツル性の植物を半分に裂いて利用している。この網代の編み方をみると、基本的には「1本越え・1本潜り・1本送り」であるが、縦方向で10cm間隔ほどのところにツルを斜めにかけて通しつなぎ合わせたようにし、網代自体の強化を図ったのであろう。この網代が何に利用されたか不明であるが、堰状の矢板列との関係があるとすると梁的な利用やさらし場的な利用が考えられる。



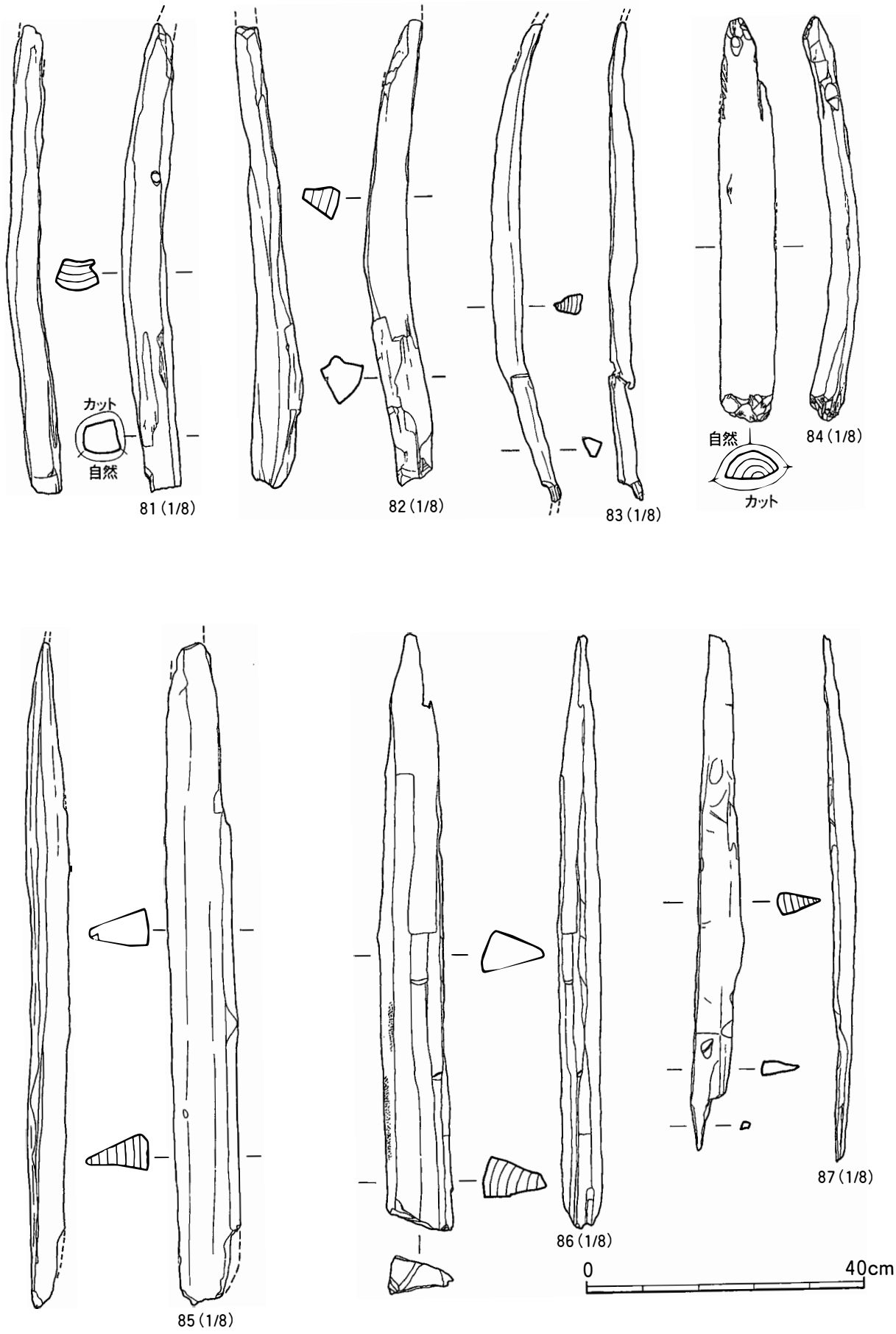
第22図　6SX049出土木製品等実測図



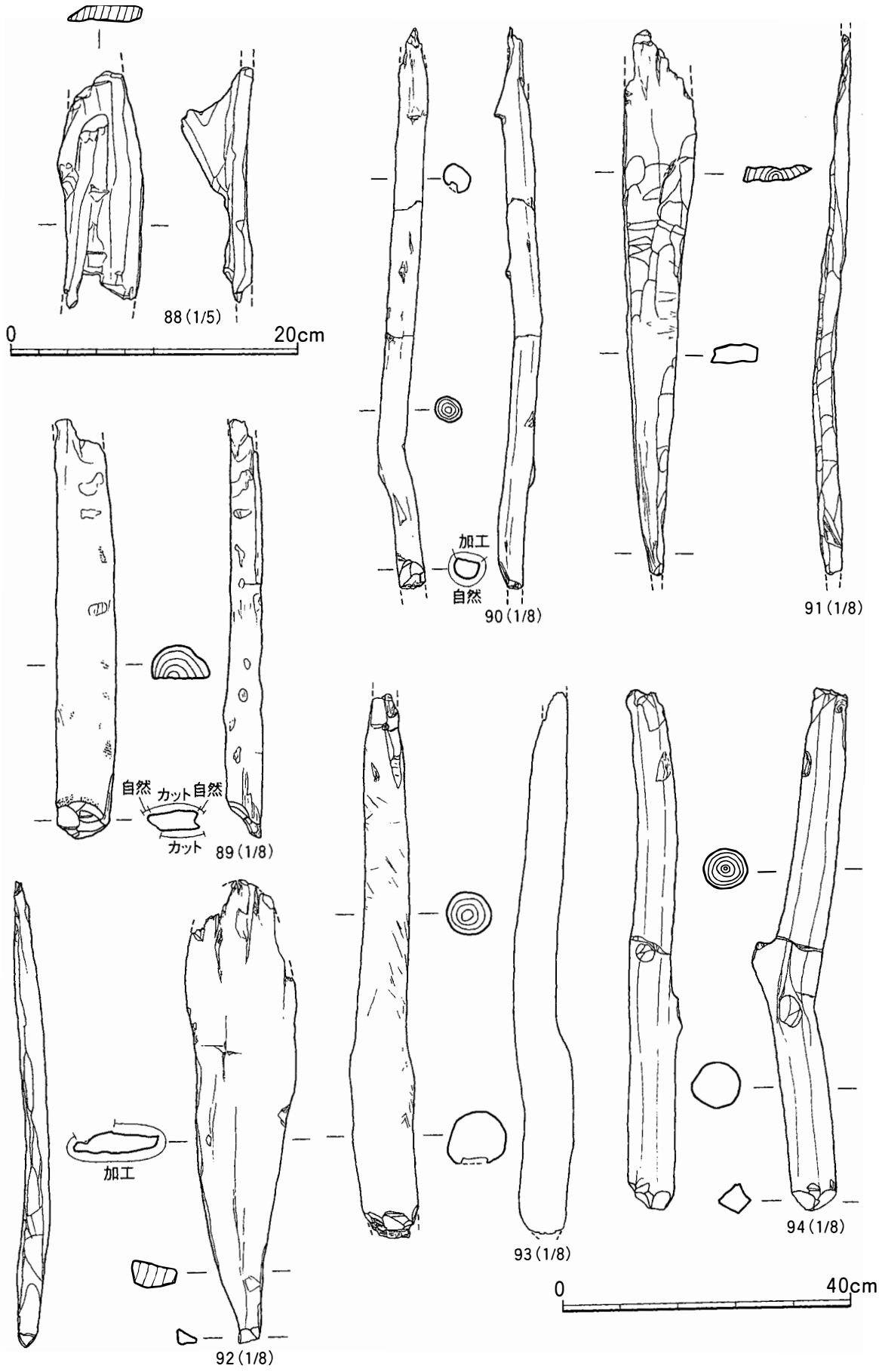
第23図　6SX054部材実測図



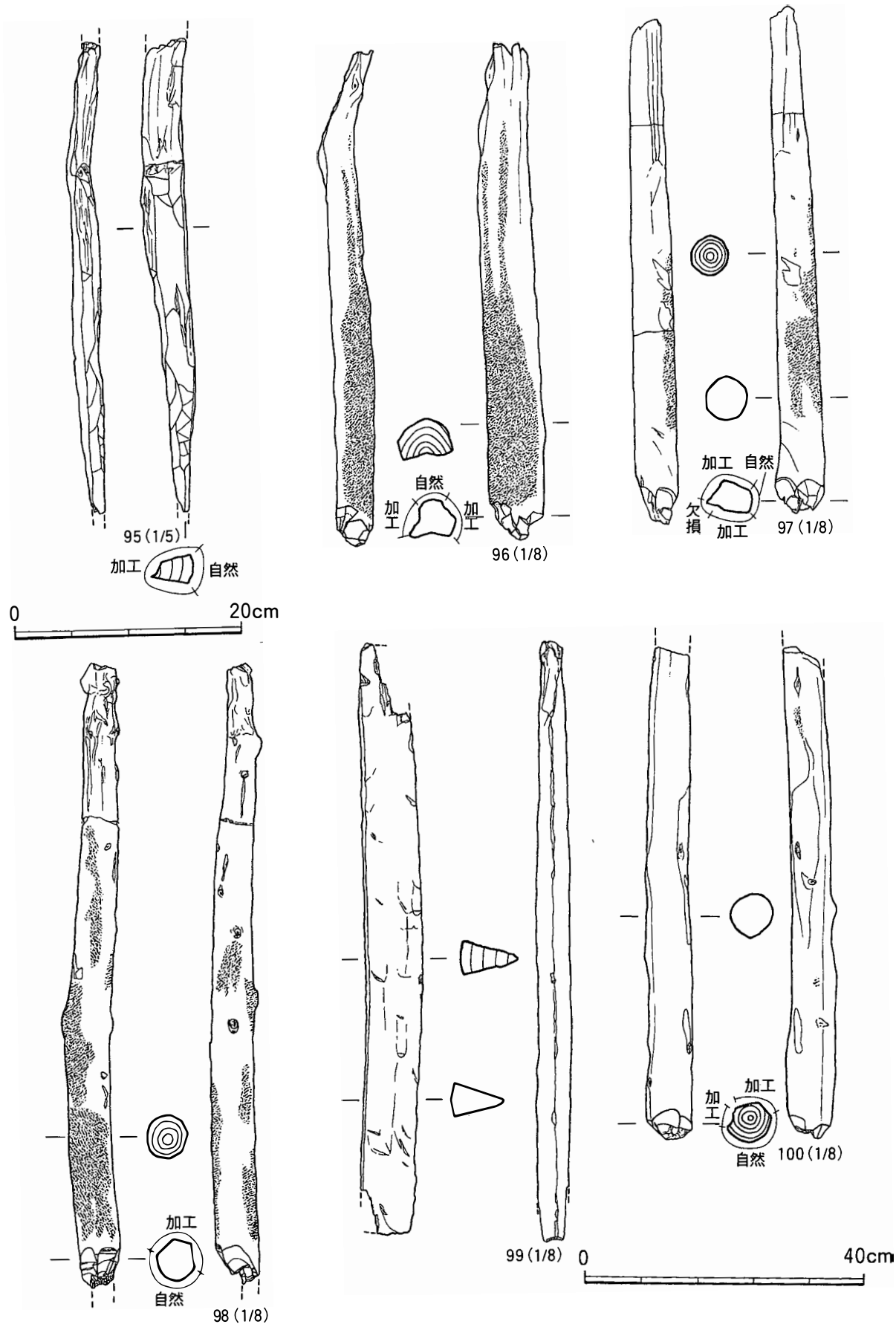
第24図　6SX054部材実測図



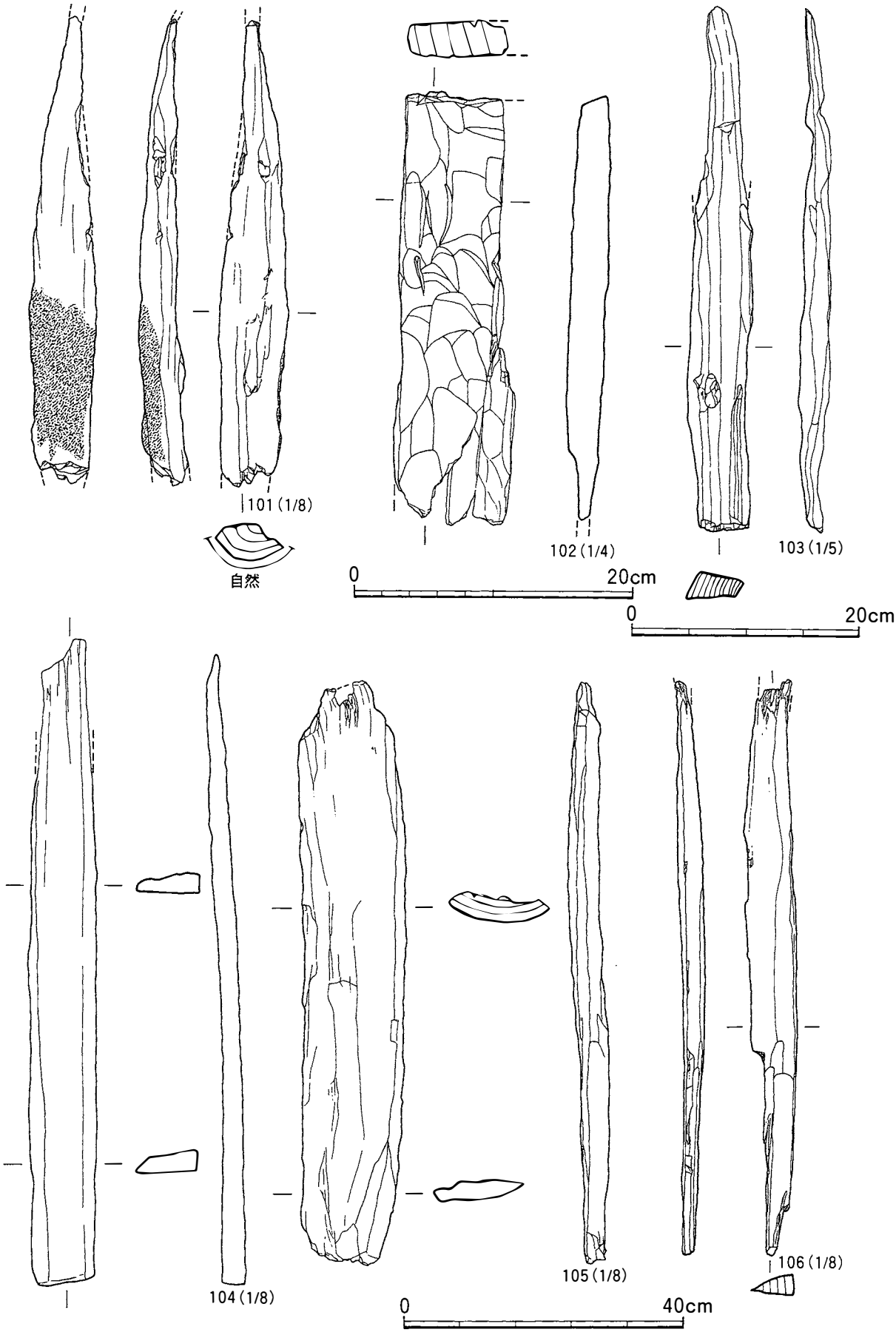
第25図　6SX054部材実測図



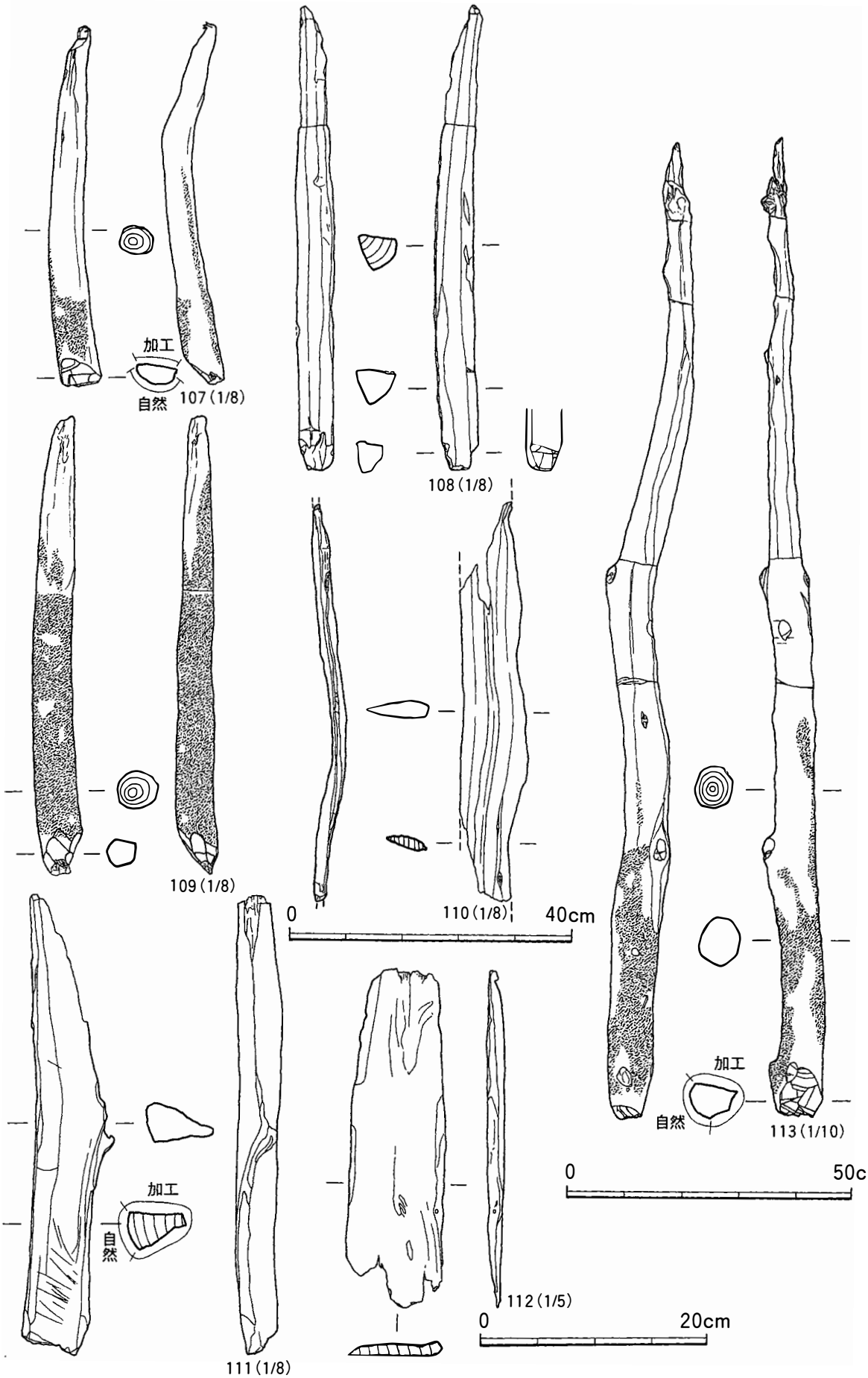
第26図　6SX054部材実測図



第27図　6SX054部材実測図



第28図　6SX054部材実測図



第29図　6SX054部材実測図

第30図　6SX049内出土網代実測図

○6SM055（杭列）【第20図】

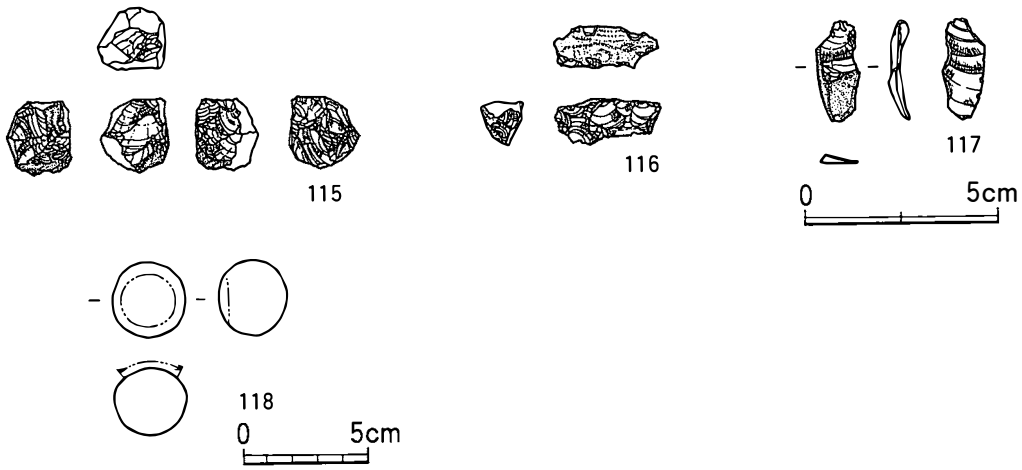
この杭列は6SM049のｋ－39グリッドで確認したもので、杭は５本ある。いずれも上部は腐食が進み当時の長さはわからない。流路に対して直行する方向で打ち込まれている。流れに対する何らかの行為を行うための杭列であるが、役割は不明である。

［部材］【第20図】

５本の杭材はいずれも径5cm 弱の自然一木の一端を切りそろえ利用したものである。この時期の水田跡は確認できないのが流路をせき止め、水流を利用したのか、魚等の水産資源を利用する目的で利用したのかは不明である。ただ、この流路の下限は弥生時代前期と考えられるので、その時期にこの遺構を設けるような人々の活動があったのは確かである。

（４）包含層中の遺物【第32図～第38図】

ここでは、遺構には伴わなかった遺物と古墳時代以降の遺構内に含まれていたもので、弥生時代早期から弥生時代中期にかけての遺物を包含層中の遺物として述べる。



第31図　6SX049出土石器類実測図

・土器【第32図～第34図】

甕形土器29点、壺形土器15点、高坏２点、埦形土器１点、鉢形土器３点、器台１点、脚付鉢１点他を図化した。

119～126、128・129は突帯文土器である。119は口唇部に刻目文を一条施し、胴部はほぼ直に立ち上がる甕形土器である。Ⅷ区e－34グリッドから出土している。器面調整はナデである。120は、Ⅷ区5SB018半裁トレンチ出土の甕形土器で、胴部でくの字に屈曲し、口唇部と胴部の屈曲部に断面三角形の小さい突帯を貼り付け、それに刻目が施されている。器壁は内面貼り付けである。121はⅧ区5SX023の１層からの出土で、口縁部に小ぶりの刻目突帯文を施した甕形土器である。122は5SX040の出土で、大き目の断面三角形の突帯を口唇部近くに貼り付け、その上に刻目文が施された甕形土器である。胴部は外貼り付けである。123は5SX040C の層の出土で、口唇部から突き出た断面三角形の刻目突帯文をもつ甕形土器である。刻目は浅い刺突状でほんの少しの窪みとなっている。124は、二条の突帯文を口唇部と胴部屈曲部に突帯文を貼り付けた甕形土器である。125はⅧ区5SX040のE層出土で、口唇部につまみ出した部分に刻み目、屈曲部の突帯に細かい刺突による刻み目が施された、二条突帯の甕形土器である。126は5SX050の２層出土の甕形土器で、口唇部下に貼り付けた突帯に刻み目が施される。127は、突帯を持たず、胴部がくの字に屈曲した甕形土器である。128はX区g－43グリッドL05層出土で、二条の微隆起の突帯を貼り付けた甕形土器で、突帯部分にわずかな刻み目が見られる。内外器面とも横ナデ調整される。129はⅧ区5SX023出土の甕形土器で、上記の突帯文とは異なり、肥厚した口縁部の口唇部と4cm ほど下位のやや隆起した部分に細かく不ぞろいの刻み目を施された土器で、鉢形に近い形態を呈するようである。

130はⅧ区5SK036出土の壺形土器で、頸部から口唇部近くまで伸びる。口唇部はやや肥厚する。外器面には全体的に煤が付着している。

131から137までは甕形土器の底部である。131はⅧ区a－31グリッドⅣ層出土で、調整は摩耗により不明である。132は、Ⅷ区5SX040のE層・DE層出土で、内外器面ともナデ調整される。底径が狭く、粘土盤を作りその上に胴部を積み上げていったようである。133はⅧ区Z－32グリッド、a－33グリッド出土で、内外器面ともナデ調整である。胴部最下部に指押え痕が残る。134はⅧ区5SX023の１層出土で、外器面は横ナデ、内器面はナデと横ナデ調整である。やや上げ底となっている。他の底部片に比べ、底部形は大きく、縄文時代後期～晩期の土器である可能性が高い。135はⅧ区b－30グリッド出土で、外器面はナデ、指頭圧痕があ

る。内器面は下から上へのナデ調整がある。底部に外側から内側へ穿孔がある。胴部最下位には指押え痕がある。136はⅧ区ｃ－30グリッド出土で、外器面は横ナデ、指頭圧痕が施される。内器面はナデ調整である。底部に意図的な穿孔がある。胴部最下位には指押え痕がある。137はⅧ区ｆ－34グリッド出土で、外器面はナデ調整され、内器面もナデ調整である。底部に穿孔がある。このうち、133・135・136・137は底部径が狭く、底部接地面近くに指押さえがはいるものである。さらに135・136・137は焼成後に内外器面から穿孔されている。

第33図・第34図の138～170は弥生時代前期から中期にかけての土器である。

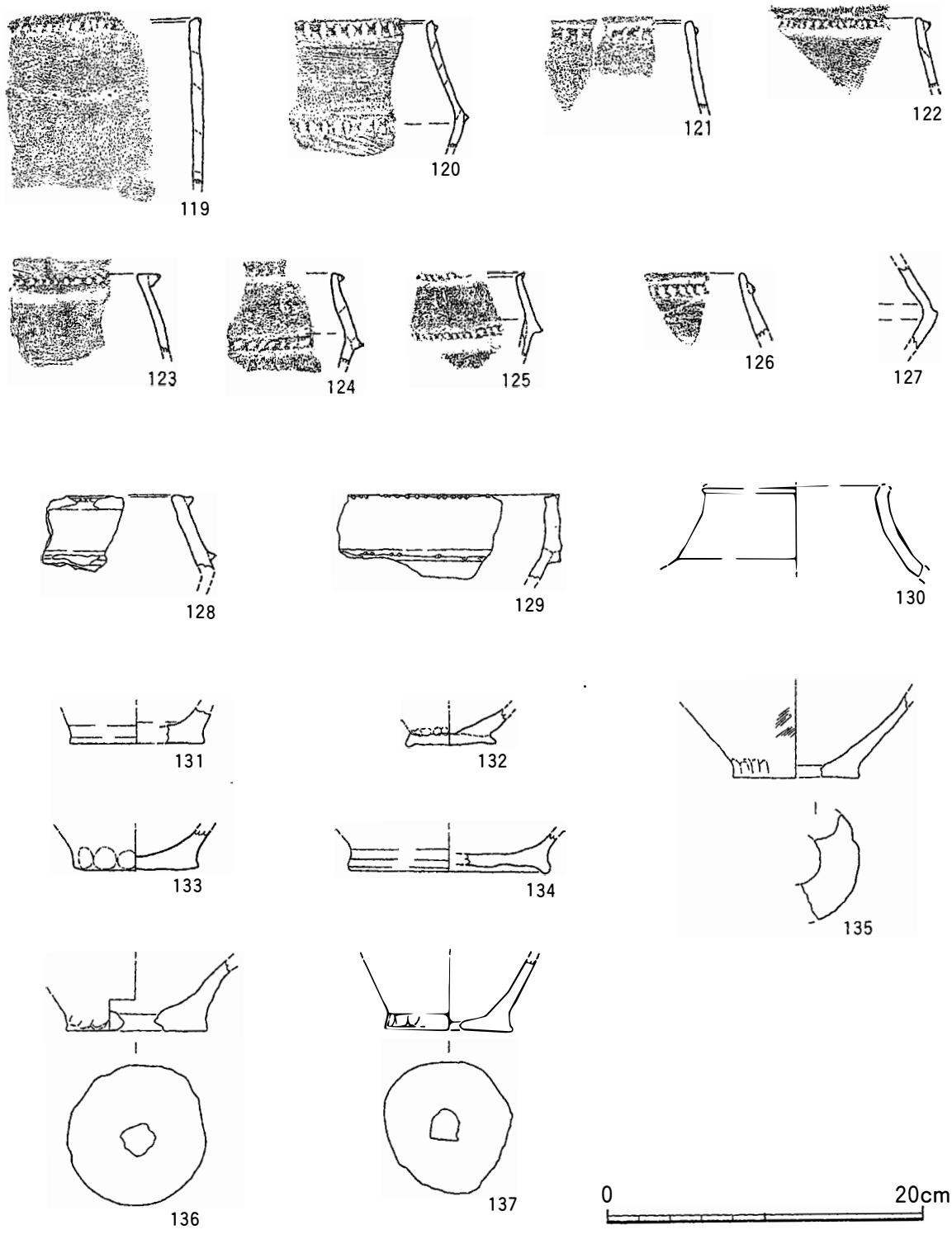
138はＸ区ｇ－39グリッドⅧ層出土の鉢形土器で内外器面とも条痕による調整がなされる。139はＸ区ｉ－40グリッドⅣ層出土の鉢形土器で、外器面は横ナデ、内器面は左上り方向ナデ調整が施される刺突列点文土器である。140はＸ区ｊ－40グリッドⅣ層出土の甕形土器で内外器面とも横ナデされ内器面には指頭圧痕もある。刻目突帯文土器である。141はＸ区ｋ－40グリッドⅦ層出土の甕形土器である。外器面は横ナデ、ナデで、内器面はナデの調整がされる。外器面には煤が付着している。頸部が縮まり始める所に、断面三角形でやや大きめの刻目突帯文が貼り付けられる。刻目は小工具での押さえを連続させている。142はＸ区6SX054②層出土の甕形土器である。口唇部と胴部上位の屈曲部に貼り付けられた刻目突帯文を持つ土器である。口唇部では小さく水平に貼り付けられ、屈曲部でも摘みあげたような作りとなっている。刻み目自体は小さく浅く、しかも密に押さえられている。外器面は横ナデ、内器面には指頭圧痕とナデによる調整が施される。煤が内外器面に付着している。143はＸ区ｉ－38グリッドⅢ層出土の埦形土器で、内外器面とも横ナデ調整される。外器面には丹塗りが施されている。144はｉ－39グリッドＸ層出土の壺形土器で、外器面は横ナデ調整され、内器面はナデ調整である。外器面には２重半円の弧線が描かれる。145はＸ区ｈ－39グリッド・ｇ－40グリッドのⅥ層及びⅫ層で出土した甕形土器である。外器面は横ナデ、内器面はナデが施されている。146はＸ区ｊ－40グリッドⅫ層出土の壺形土器で、外器面はハケ後ナデ、指頭圧痕、内器面はナデ調整である。内器面に煤が付着している。胴張りが大きく胴部最下位には指押痕が残る。断面観察では、底部が盤状粘土で作られていたことが分かる。147はＸ区ｈ－42グリッド第５トレンチ出土の壺形土器で、外器面はハケ後ナデ、内器面はナデ調整が施される。外器面に櫛描波状文が施される。148はＸ区6SX049出土の甕形土器の底部である。外器面はケズリ後ナデ調整を施される。底部の接地面にはアンギヌ状の圧痕が残る。150はⅦ区Ｗ－27グリッドＶａ層出土の甕形土器で内外器面とも横ナデされる。

149～153、156は甕形土器である。いずれも小片のためわかる範囲で特徴を記す。

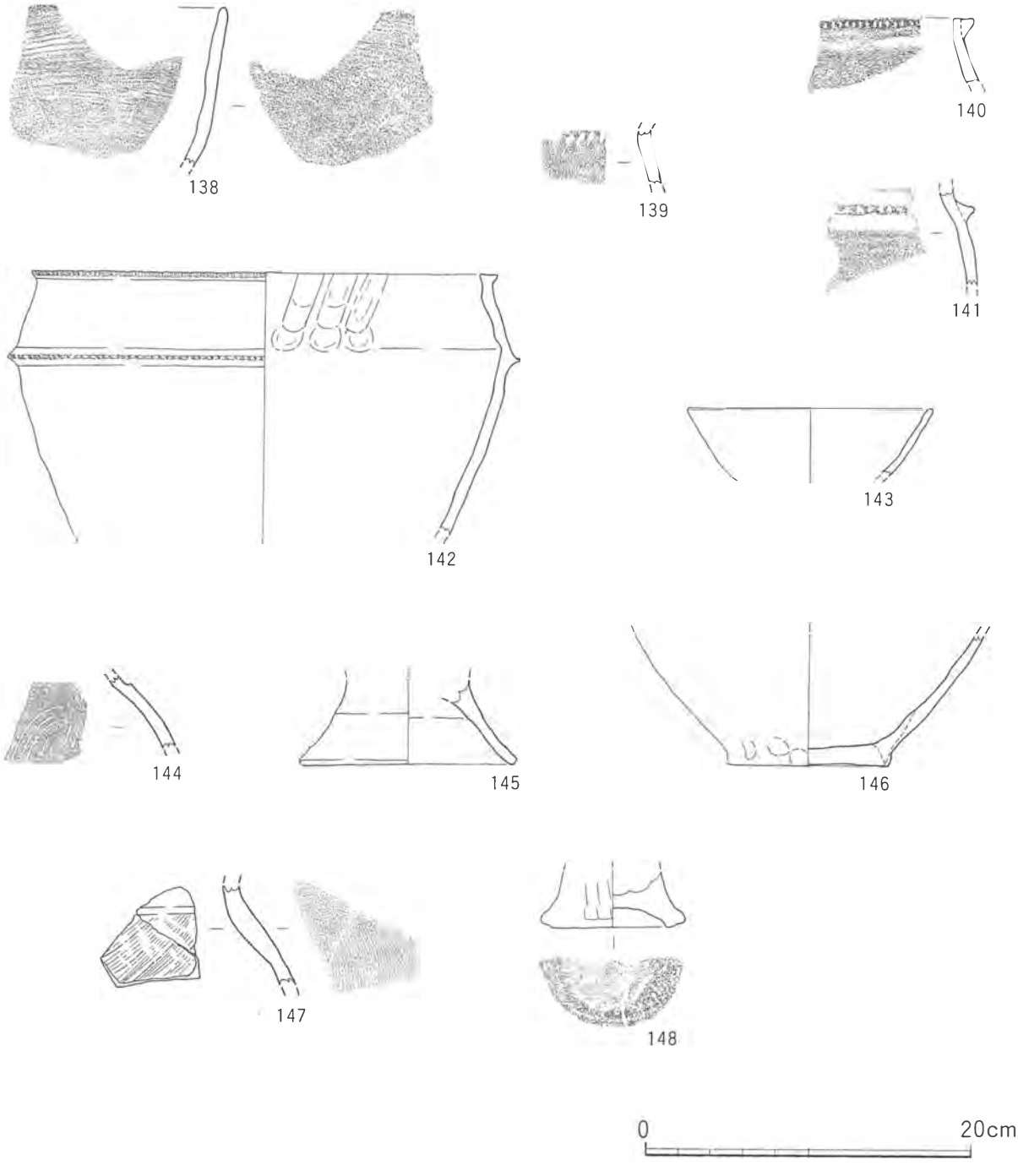
149はⅦ区Ｖ－27グリッドＶｃ層、Ⅳ～Ｖｂ層で出土した甕形土器で、内外器面ともナデ調整である。口縁部が内傾し、さらに上方に向かって断面三角形を呈するもので、上面はほぼ平らで幅が14mm と広い。150はⅦ区Ｖ－27グリッドＶａ層出土で、口縁部が内傾し、149に似るが、口唇部の断面形態が異なる。先端が丸く短く突き出ている。151はⅧ区Ｚ－33グリッド出土である。破片が小さく摩耗しているため調整は不明である。口縁は大きく内傾し、内面の突出が顕著で、上面はほぼ平らで、端部がやや膨らむ。152はⅧ区4SX049のＡ層出土で、内外器面とも横ナデ調整される。内面の突出は欠けているため不明であるが、その傾向がある。上面はほぼ平らで、151に比べ短い。153はＸ区6SX506出土である。内外器面の調整は横ナデである。内面への突出が顕れ、口唇部がやや外へ膨らみ始めている。

154・155・157は壺形土器である。154・155は袋状口縁をなすものである。154が155に比べ頸部が短い。ともに外器面に赤色顔料塗布の痕跡がある。ともに5SX040の出土である。157はⅧ区ｅ－32、33グリッドの出土で、口唇部で内側に屈曲するものの袋状を呈してはいない。外器面に赤色顔料が塗布される。

159～164は甕形土器の底部である。159はⅦ区Ｖ－27グリッドＶｃ層出土の底部である。中実の脚台状で、接地面はやや平らになる。160も159に類似した器形である。5SX023の１層に紛れて出土したもので、中央



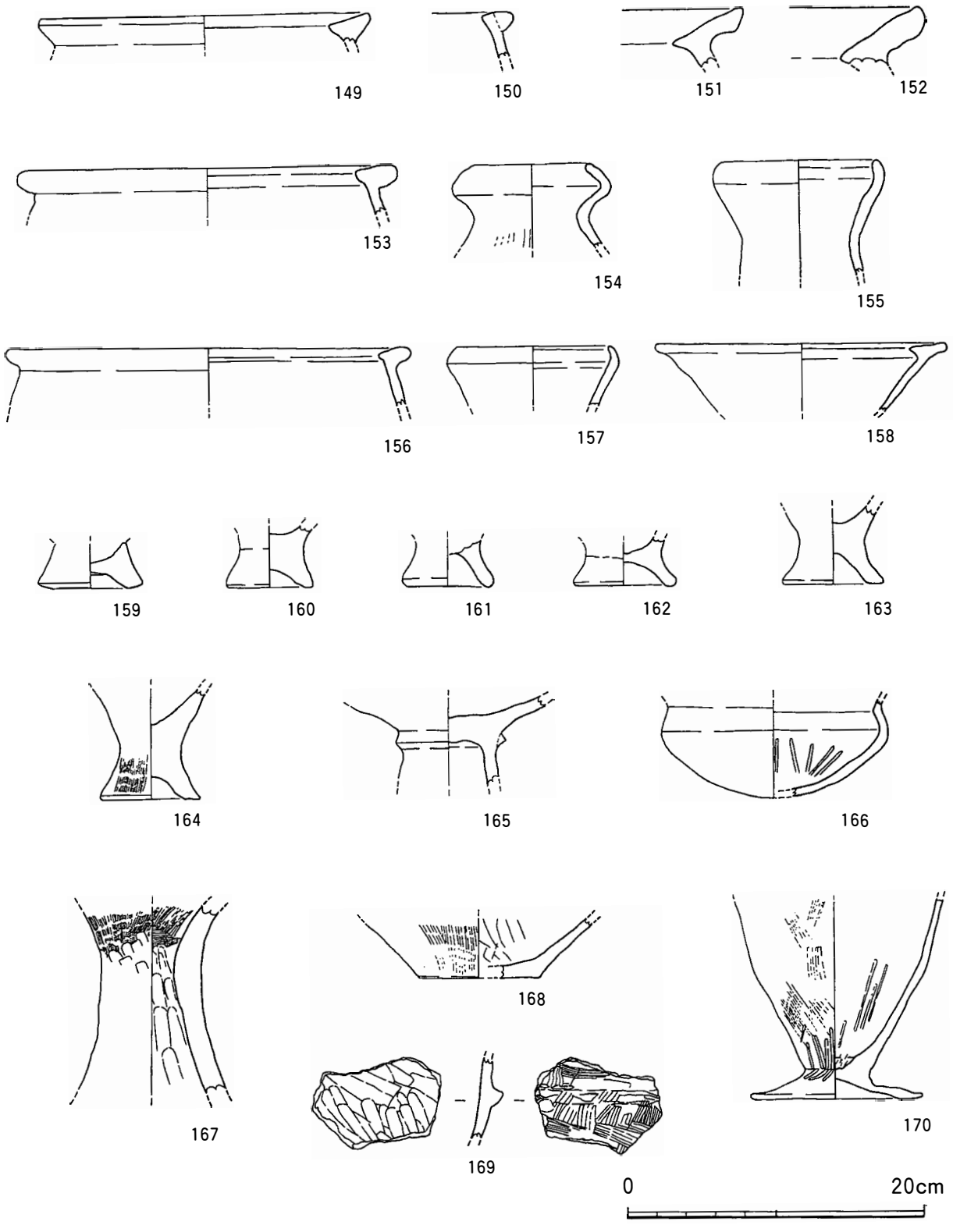
第32図　縄文晩期～弥生前期土器実測図



第33図　弥生前期～中期土器実測図

部が上げ底となる。外器面は横ナデ、内器面はナデによる調整が施される。161はd－34グリッドから出土したもので、復元底径が5.7cmを測り、外器面はハケ目の後横ナデが施される。162はⅧ区b、c－31グリッド出土のもので、底径が6.6cmを測る。外器面は、横ナデ、外底面は指ナデによる調整が施される。163はZ－29グリッドⅤb層出土で、復元底径が6.8cmを測る。外器面は横ナデ、外底面も横ナデが施される。164はY－28グリッドⅤ・Ⅵ層で出土し、底径は6.4cmを測り、外器面がハケ目の後ナデ、外底面はナデ調整が施される。

158・165は高坏である。158はⅧ区5SX055内出土で、坏部は口縁断面が鋤先状を呈し、上面がほぼ平坦になっている。胎土はかなり精製され、やや黄色みを帯びている。165はⅧ区c－33グリッド出土で、坏部下位から脚部上位までの破片である。坏部と脚部の境には断面三角を呈する突帯が巡る。



第34図　弥生中期土器実測図

166はⅧ区4SX049の出土で、鉢形土器である。口縁部は不明であるが、頸部から底部近くまで残る。内器面にはヘラミガキ痕が残る。

167はＸ区6SX504の出土で、器台である。外器面にはハケ目、内器面上位はハケ目、中位以下はヘラ削りらしき痕跡が残る。器壁はかなり厚い。

168はＸ区6SX507の出土で、壺形土器の底部である。底部は平底で安定させている。外器面は縦方向のハケ目調整が、内器面はヘラ削りが施されている。169はⅧ区ｃ－34グリッド出土の壺形土器の胴部付近の破片である。外器面はハケ目調整が、内器面で左上向きのヘラナデ調整が施されている。外器面には黒斑がある。

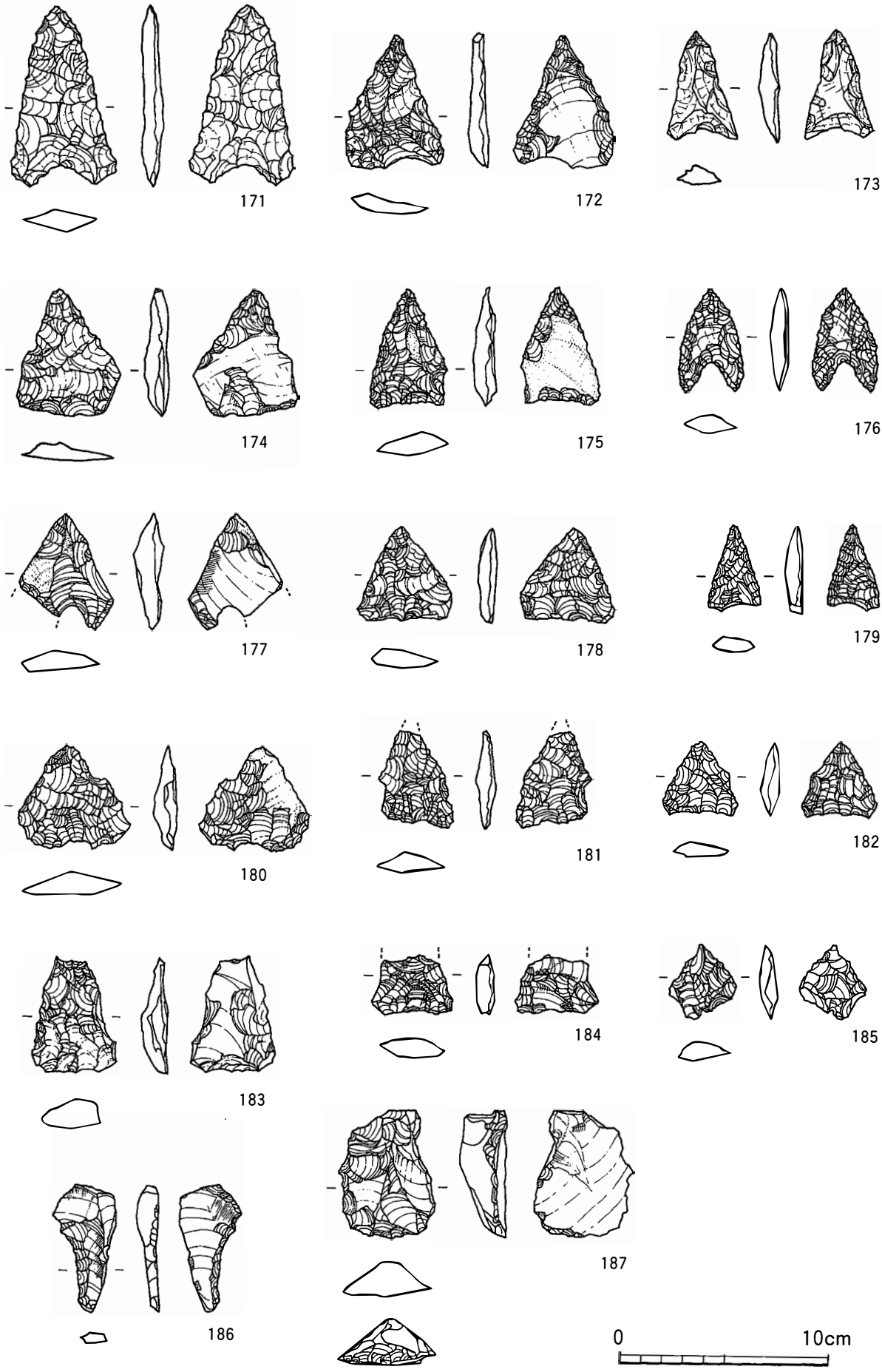
170はⅧ区出土の脚付鉢である。脚はほぼ扁平に近く広がり、安定している。内器面や外器面には縦方向のハケ目で調整される。

・石器【第35図～第37図】

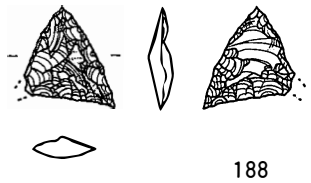
171～185、188～191は石鏃である。大部分が剥片鏃である。出土層位はⅤ層が中心である。これらが縄文時代の石鏃と考えられるので、混入したものであろう。石材は黒曜石が多いが、171・173の安山岩、189のサヌカイトも使用される。また、造りも丁寧に仕上げている一方で、未製品のものも多い。いずれのものも無茎鏃で、基部に抉入のはいる凹基無茎鏃と、基部が直線的なものである平基無茎鏃に分かれる。凹基無茎鏃としては、171～173、176・177、179、189、190、191があり、平基無茎鏃には174、175、178、180～184がある。それぞれバリエーションや破損があるので厳密な分類ではない。

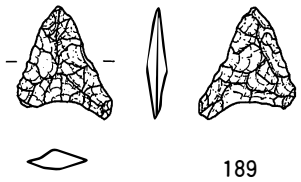
171は、ａ－31グリッドⅤｄ層出土で、安山岩製のものである。基部の先端を折り取ったように作る。縦に長い二等辺三角形を呈する。基部の抉りは浅い。造りは両面からの剥離が丁寧に入る。172は、ｅ－34グリッドL03層出土で、縦横比が小さい二等辺三角形のものである。片面に主要剥離面が残る。造りはやや不整形である。基部の抉りは浅い。173は、ｂ－31グリッドⅤａ層出土で、やや小型の縦長のものである。基部の抉りは浅い。片面に主要剥離面が残る。基部一部は欠損する。174は、ｅ－34グリッドⅤｃ層出土で、三角鏃で基部の一部が欠ける。片面に主要剥離面が残る。175は、ｆ－33グリッドⅣ層出土の完形品で、早くに剥片となっていた石材を使用している。片面に主要剥離面が残るが、作りは丁寧である。基部の抉りはほとんどない。176は、ｅ－34グリッドⅤｃ層出土で、いわゆる鍬形鏃である。177は、ａ－31グリッド出土で、基部一部欠損している。片面に主要剥離面を残し、横広で抉りが深く入る。178は、ｆ－34グリッドL03層で出土した三角鏃である。両面とも丁寧は剥離により仕上げられている。179は、ｂ－32グリッドⅤｃ層出土で、小型の縦長の二等三角形鏃である。基部の抉りは浅い。180は、ｂ－30グリッドⅣｂ層～Ⅴａ層出土で、片面に主要剥離面を残し、辛うじて石鏃の形態を取る。基部の抉りは浅い。181はｃ－30グリッドⅤａ層出土で、二等辺三角形鏃である。先端部と基部の一部が欠損している。両面とも丁寧な剥離が施される。基部の抉りは浅い。182は、Ｙ－32グリッドⅣ層出土した三角鏃である。基部の抉りはない。183は、ｃ－30グリッドⅣ～Ⅴｂ層出土で、片面に主要剥離面を残す二等辺三角形鏃である。先端部が欠損している。184は、ｆ－34グリッドL03層出土で、基部のみ残存する石鏃と思われる。185は、ｆ－34グリッドⅤＹ層出土で、先端部のみ残存している。188は、Ⅶ区Ｖ－26グリッドⅤｃ下層出土で、片面に主要剥離面を一部残す三角鏃である。造りは丁寧である。基部の抉りは浅い。基部の尖りは鋭い。189は、Ⅶ区Ｗ－28グリッドⅤｃ層出土で、サヌカイト製の抉りの大きい三角鏃である。基部が一部欠損している。190は、Ⅶ区Ｙ－27グリッドⅣ層出土の三角鏃である。両面とも丁寧な剥離による調整がなされる。基部の先端は尖り、抉りは浅い。191は、Ⅶ区Ｘ－29・28グリッドⅤ層出土の二等辺三角形鏃である。サヌカイト製で、丁寧な造りである。基部の抉りは浅い。

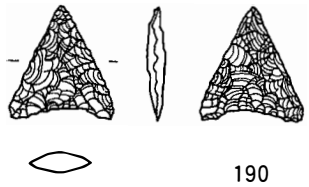
186は当初石鏃の未製品、もしくは欠損品とみていたが、片方の側片から下部へかけての加工痕はみられるが、一方の側片部分への加工痕がほとんどみられず、特に下位部分の加工に中心がおかれていると考え、

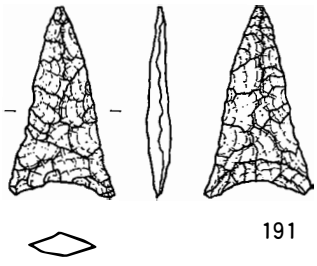


第35図　包含層出土石器実測図１


188

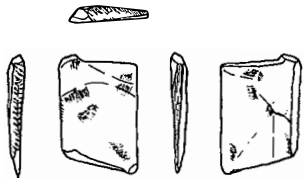

189

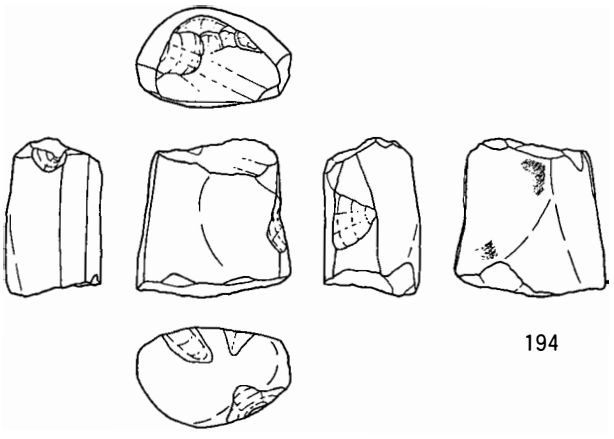

190

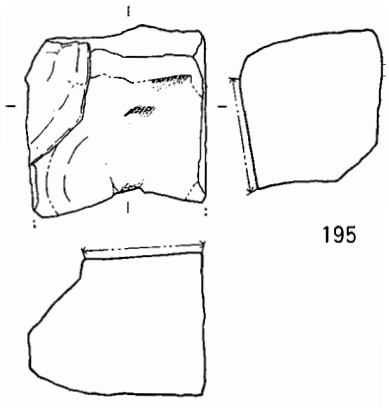

191

192

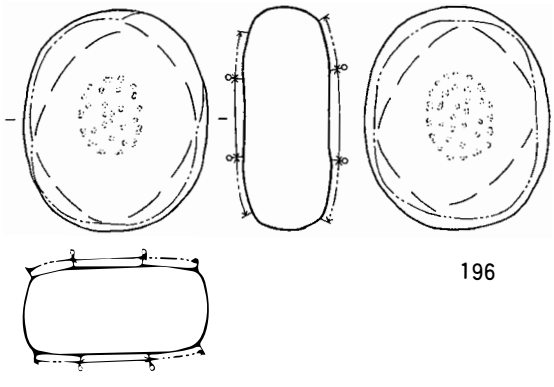
0　10cm

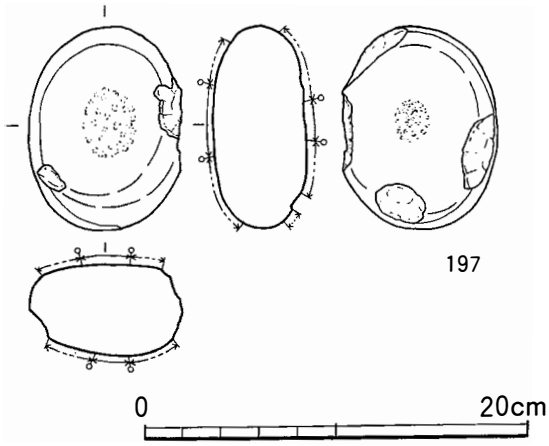

193


194


195

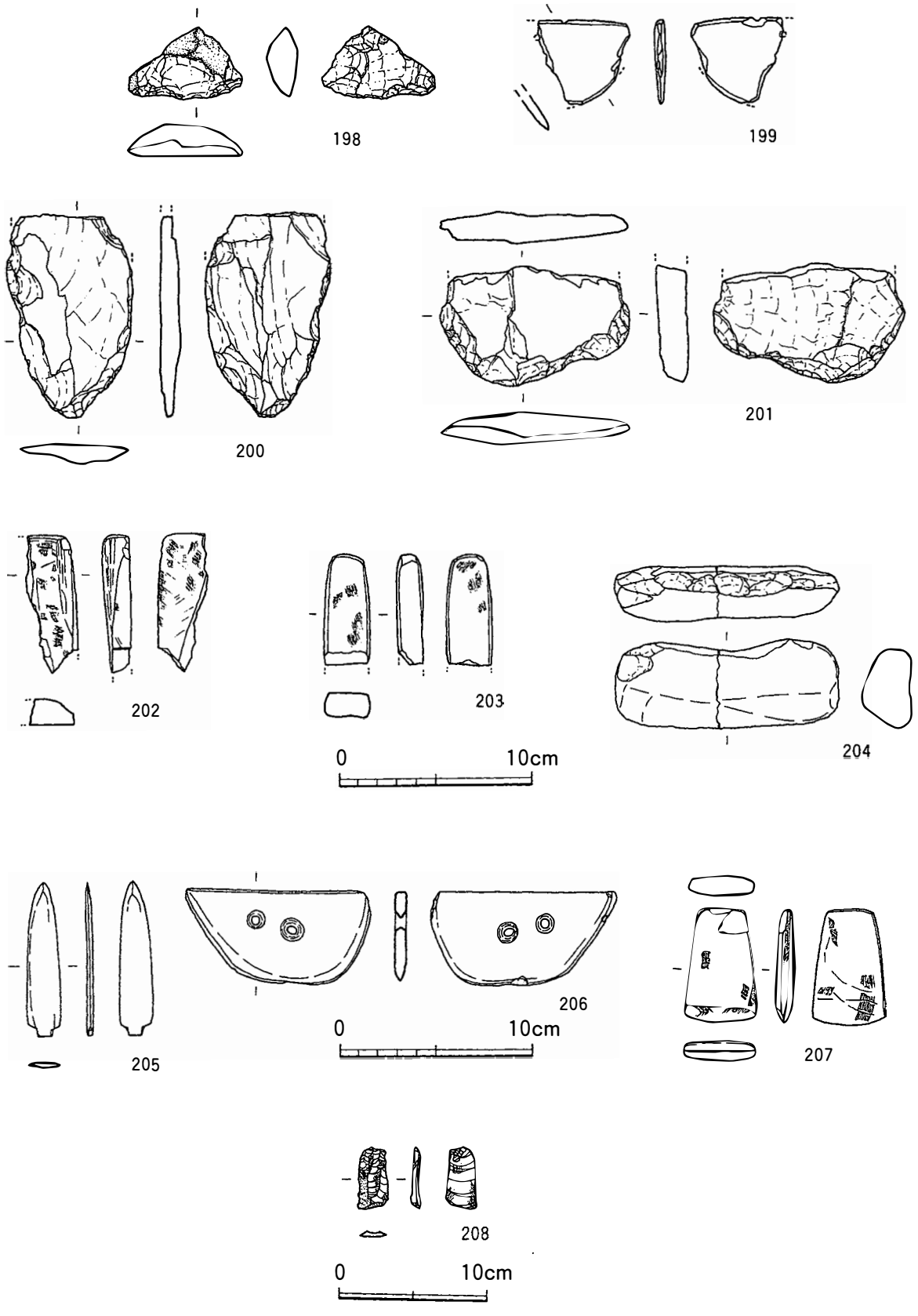
0　10cm


196


197

0　20cm

第36図　包含層出土石器実測図２



第37図　包含層出土石器実測図 3

ここでは石錐（ドリル）としておく。ただし、使用痕は確認できない。石材は黒曜石である。187、192はスクレイパー、193は不明磨製品。194・195は磨製品。196・197は凹石。表裏両面がよく研磨され、どちらも中央付近に敲打痕があり、やや窪んでいる。198・200・201は使用痕のある石材である。スクレイパー的な使用であろうか。

199・206は石庖丁である。弥生時代前期の層で層的にはXI層で確認した。

202・203・207は磨製石斧である。202はⅧ区ｅ－34グリッドⅤａ層の出土である。刃部を欠損しており、全長は不明である。幅は2.25cm、厚みが1.35cm を測る。石材は石英片岩である。203はⅧ区ｆ－35グリッドのL03層出土である。小型のノミ状のもので、刃部を欠損している。石材は頁岩である。207はⅦ区ａ－30グリッドⅤｃ層出土である。長さが5.60cm、幅が3.60cm、厚みが0.95cm、重さ32.70g を測る小型磨製石斧である。石材は粘板岩である。

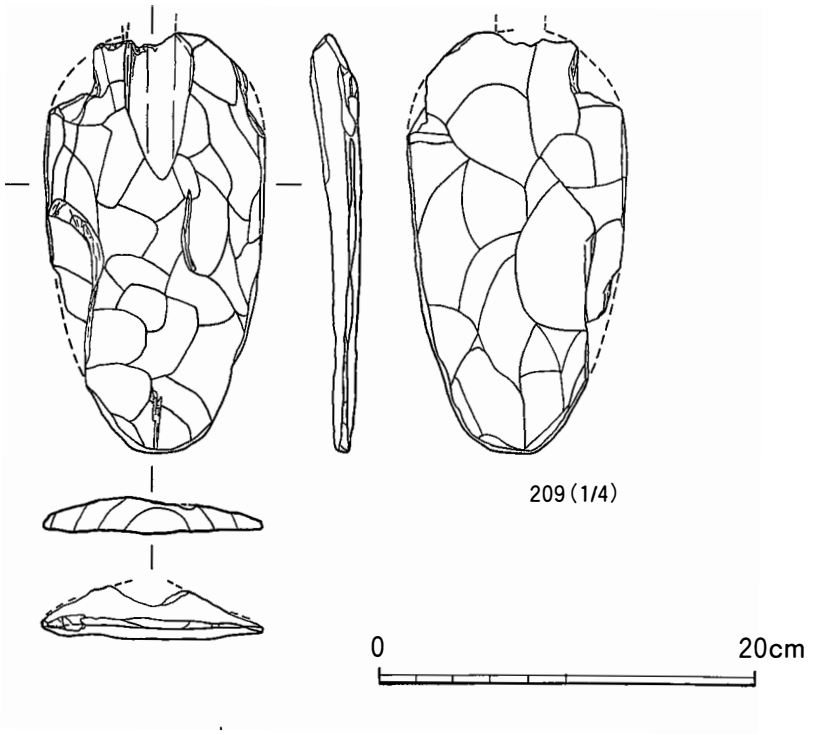
204はⅧ区ｂ－33グリッドⅦ層の出土である。側片に敲打痕があり、摩耗している。敲打器もしくは石錘としておく。長さが11.1cm、幅が4.4cm、厚みが2.7cm、重さが158.16g を測る。石材は砂岩である。

205はＸ－１区ｊ－40グリッドIX層の出土で、朝鮮的要素を持つ磨製凸基有茎鏃である。石材は頁岩である。長さ7.65cm、幅1.7cm、厚み0.3cm、重さ4.9g を測る。かなり風化している。6SX054に近接した位置で出土した。208は縄文晩期の剥片か。この他にも多量の剥片や石核が出土している。特にこの時期の石器及び石器に使用された石核や砕片が多く出土していることはこの調査区の中で縄文時代から弥生時代にかけて利用された石器の利用と制作がなされた可能性は大きい。このことは海に近いこの地での使用は川から海産物にいたる資源利用を措定することが重要である。特に製品は調査において出土量は大きくなく、利用方法がこの付近以外であった可能性がある。なお、未製品、剥片などに関する情報は巻末に付した観察表に記した。

・包含層中出土木製品【第38図】

209は、ｊ－40グリッドでトレンチを掘削中に出土した鋤先で、層的にはXII層に縦に刺さったような状態で出土した。これまで鋤は古墳時代のものしか確認していなかった。そこで当初は古墳時代のものと考えたが、古墳時代前期の層はこの鋤の出土層より50cm ほど上になり、穴を掘ったような痕跡も確認できなかった。そこで、この遺物は弥生時代のある時期（少なくとも中期以降）に、折れたためここに放置されたものと判断し、ここで取り上げることとした。

残存長は21.8cm、最大幅が11.7cm を測る。厚みは最大で2.7cm を測る。上部に表面が欠損した部分があり、穴等も確認できなかったので、ここに柄があったものと推定した。柄と刃部が一体となった一木鋤と認定した。木取りは板目取りである。表面と背面とを比較すると表面にやや盛り上がり、柄もその面の方に欠損が多く見られることから、表面の方に柄が伸びていたようである。使用方法は表面の方ですくって作業するものと考えられる。樹種はアワブキ科アワブキ属であった。



第38図　j－40グリッド出土木製品実測図

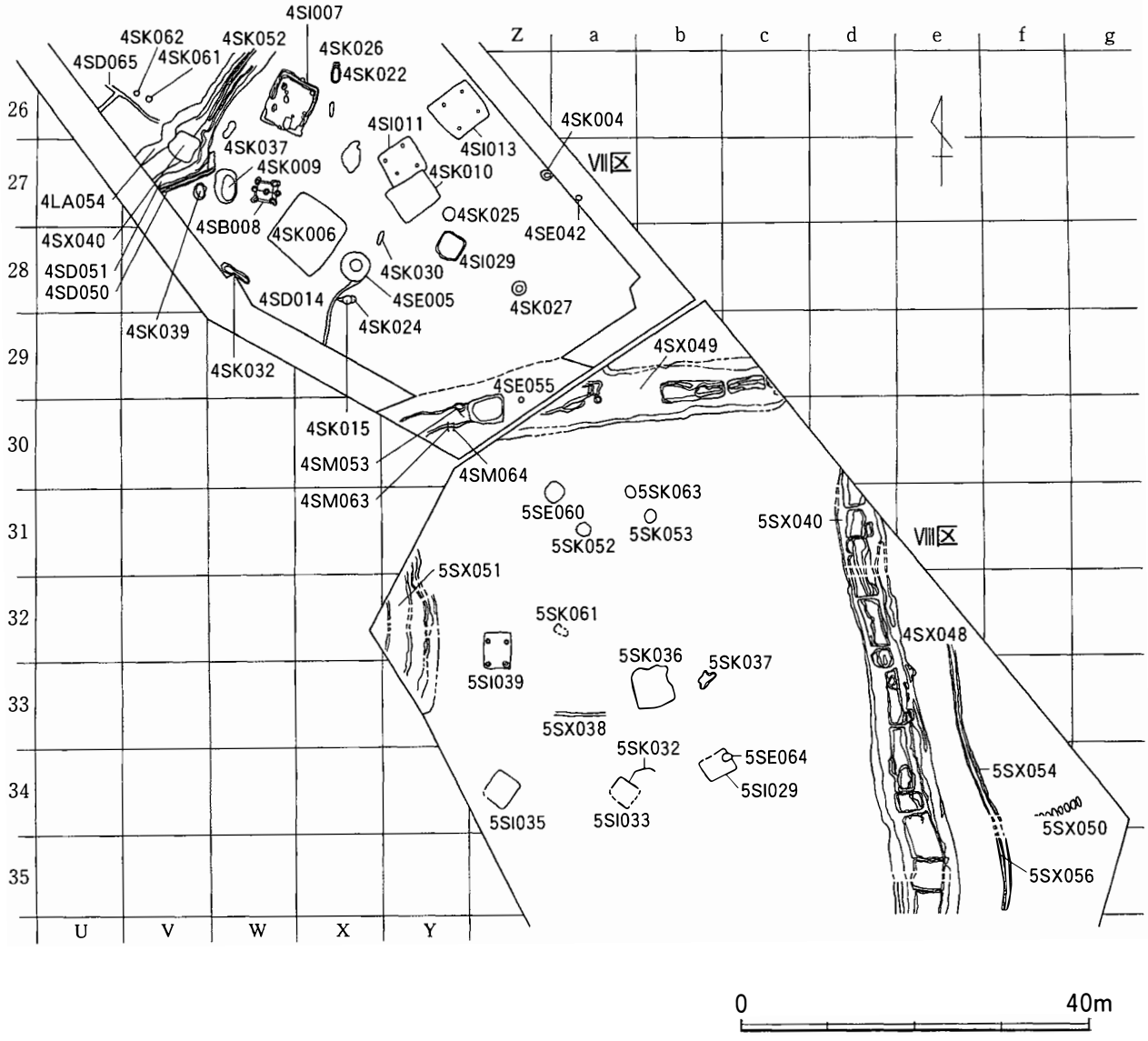
第２節　弥生時代終末～古墳時代前期・中期の遺構と遺物

（１）遺構の分布状況【第39図・第40図】

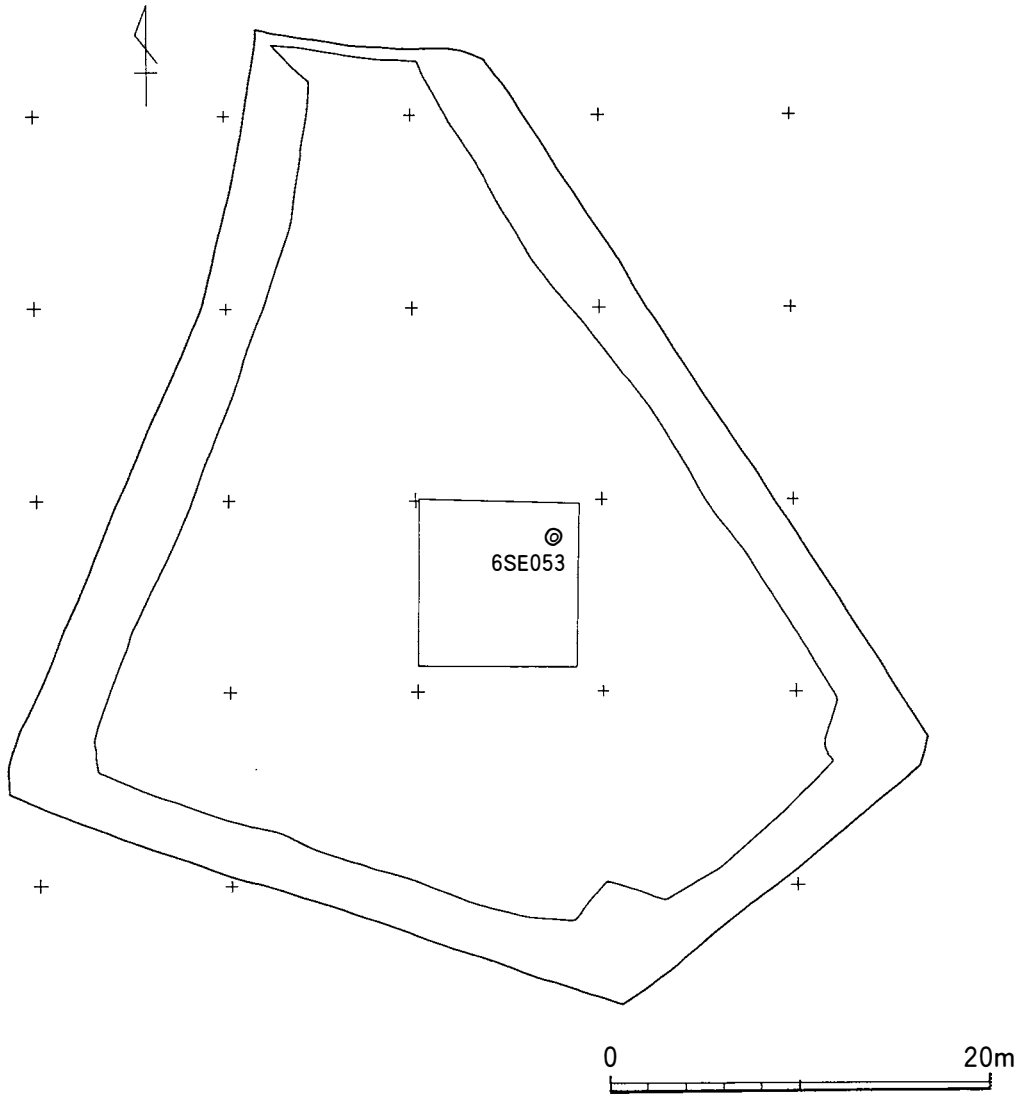
この時期の遺構は調査Ⅶ区・調査Ⅷ区・調査Ｘ－１区から出土している。遺構としては竪穴住居跡が９棟、掘立柱建物跡１～２棟、井戸跡が６基、土坑が21基、不明遺構の大溝状遺構遺構が３条、溝状遺構５条、水田跡などである。

竪穴住居跡は調査Ⅶ区からⅧ区にかけて東西に走る大溝状遺構を境に南北に２箇所に大きく分かれて分布する。特にⅧ区の方が分布数は多く、他の２条の大溝状遺構とともに囲まれているようにみえる。住居跡の切り合い関係になるものがほとんどないため、それぞれの遺構の共時関係と通時関係を十分確認していない。住居跡に関係するものとして井戸跡がある。特に大型のものはⅦ区で出土し、関係する溝や土坑などが出土している。井戸跡はいずれも素掘りのもので、外部施設などは確認していない。土坑の中に井戸跡に類似したものがあり、井戸との関係が想定できる。これら住居跡群と関連する遺構群をまとめて一応この一帯を集落跡としておく。

大溝状遺構は、集落跡の境界を示す可能性がある。また、調査Ⅶ区の北及び北西側水田跡、調査Ⅷ区の東側水田跡と想定した空間が集落の境を形成しているといえる。特に柳町遺跡調査Ⅰ区で確認したほぼ同時期



第39図　調査Ⅶ・Ⅷ区内古墳時代前期遺構配置図



第40図　調査Ｘ区内古墳時代前期遺構配置図

の集落跡の間にはかなり大きく広がる水田跡によって隔てられていると考えられる。

水田跡はⅦ区、Ⅷ区、Ｘ－１区に広がっている。Ｘ－１区には水田跡に１箇所の井戸跡が出土している。ただ、水田跡の畦畔などを明確には確認していないが、部分的に見られる酸化鉄やマンガンの集積は乾田の可能性を想定できる。

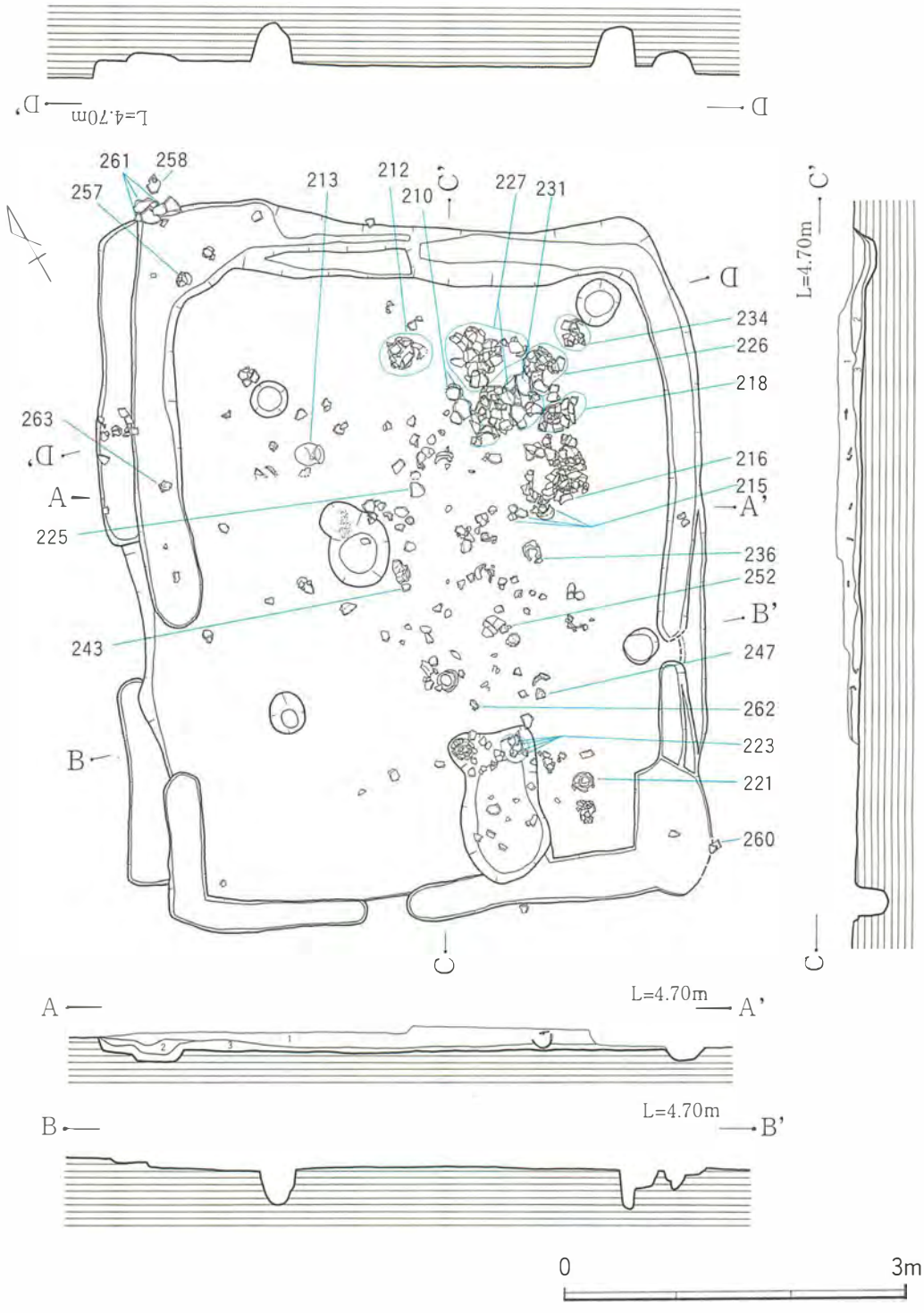
なお、集落跡はこの調査Ⅶ区・調査Ⅷ区以外の調査Ⅵ区・調査Ⅸ区にも広がっており、それについては玉名市教育委員会からの報告がなされる予定である。

（２）竪穴住居跡と出土遺物

○4SI007【第41図】

Ｗ－26グリッドからＸ－26グリッドにかけて検出した。Ⅳ層を除去し、Ⅴ層にかかるとすぐに遺物が多量に出土する地点を確認した。この地点が何らかの遺構と想定し、徐々に掘り下げつつ遺構の輪郭を確認していった。最終的には、平面形が北壁及び東壁辺でやや長くなる長方形を呈し、その規模が長軸6.03m、短軸5.33m、床面積約32.1㎡を測る遺構を確認した。長軸方位はＮ－29°－Ｗであった。

壁高は西壁で最高15cmを測ったが大部分は壁を確認できず、床面近くまで掘り下げてしまった。炉跡と



第41図　4SI007実測図

考えられる落込みは、中心より北西の壁に近い位置にあり、長径65cm、短径60cm のやや不整形な長楕円形を呈し、内部の一部に焼土が堆積していた。深さは浅く、8cm ほどで、スリバチ状を呈する。

床面の南部隅には貯蔵穴状の落ち込みを確認した。

床面には４個の主柱穴を検出した。掘り方は30cm 前後で、いずれにも明確な柱痕跡を認めた。おおむね柱跡から想定される柱の直径は15cm 前後である。いずれの柱穴も床面より約30cm 掘り込まれていた。Ｐ１には木質が残っていた。いずれの柱穴にも焼土・炭化物が入る。構造的には壁は低いものの、4柱の竪穴住居跡を想定できる。

壁際には幅21～73cm、深さ24～41cmの溝が確認され、西壁の一部が途切れている。この溝については、この遺構に伴い、壁にめぐらす壁溝遺構として掘り進めていた。ところが、北側の溝の中に古代の遺物が入り込んでいたため、この溝状遺構が古代のものである可能性もあったが、古代の遺物自体の分布が一部に限られ、4SI007からはずれた位置でも出土していたので、古代の時期の掘り込みもしくは層の攪乱が古墳時代の遺構にたまたま重なったため、同一面に遺物が紛れ込んだと判断した。しかし、調査の際に古代の掘り込み等を確認していないので、判断としては弱い。

埋土は3層に分層でき、注記は以下のとおりである。

1層は、黒褐色（7.5YR3/1）粘質土でVb層と同じ層である。遺物を多く含み、焼土粒・炭化物も多く含み硬くしまっている。2層は、黒褐色（7.5YR2/2）粘質土で、焼土粒・炭化物を多く含む。やわらかく溝の部分でのみ検出した。3層は、黒褐色（7.5YR3/2）のよく締まった土である。細かい焼土粒・炭化物を含む。

［出土遺物］【第42図～第46図】

先にも述べたが、遺物は床面から30cm近く上面からすでに多量に出土していた。大部分は1層中である。このことはこの遺構が廃棄された後に土器捨て場として利用されたと考えられる。

図化した出土遺物は古墳時代の遺物として、甕が25点、壺が5点、高坏が2点、器台が2点、鉢が10点、小型の壺が2点、小型甕が2点、坏が1点である。落ち込みに入るものとして古代の須恵器がある。坏蓋が1点、短頸壺が1点、長頸壺が1点、壺の底部が1点、大甕片が1点である。

まず古墳時代の遺物からである。甕は大きさにより大・中・小の3種類に、口縁の特徴により3種類に分けられる。口縁部が角張るものとあまいもの、折衷様のものである。210～213は完形品である。

212・213・215は口唇部が水平で角張った形態の口縁である。口縁は全体として外へ強く開くが中位でやや張り出しを持つ胴部の最大径は中間よりやや上部にある。228～230も同様の形態である。214は近いがやや口唇部が甘い。216も近い形態であるが胴部の最大径が下に下がる。ただ、外器面に波状文的な沈線が1本巡るところをみると他の様相を想定できる。210・211は先のものと全体的なプロポーションは同じであるが、口縁部の特徴が明らかに異なる。頸部から口唇部に向けて直線的で口唇部はとがり気味で丸くなっている。

217・220・221・222・225は口径が胴部に対して広いため、全体的な印象がほっそりした感じを受けるものである。胴部の最大径は上にあるものと中位に落ちるものに分けられる。

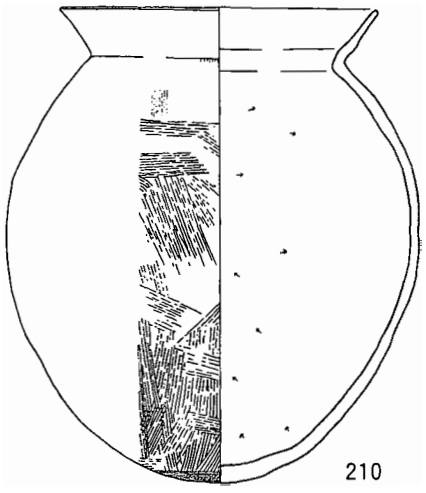
223は212の口縁を持ちながら、胴部の最大径が中位よりもしくはそれよりもやや下になるようである。

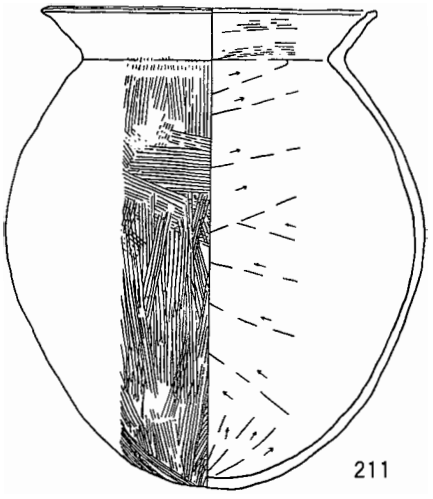
227は口径の広いもので胴部の最大径よりも若干広いものである。

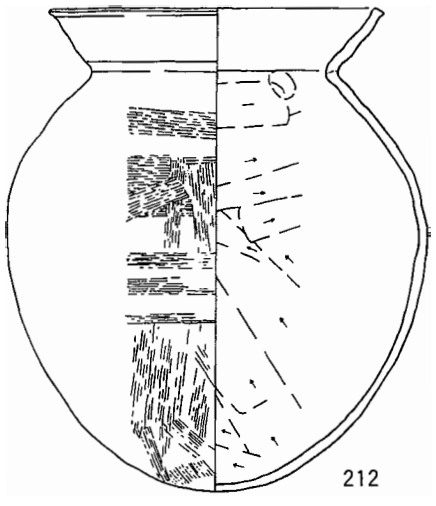
228は口唇部が角張るもので胴部の最大径は中位より上部にあると予想できる。229・230は口唇部が角張り、胴部の最大径がやや低位にあるものである。232は口唇部がつまみ上げられており弱い稜線が内側に入る。

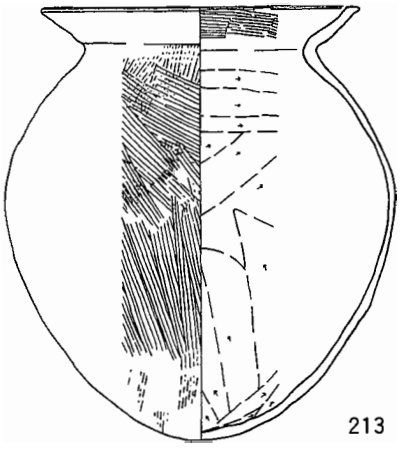
233・235は壺のように口縁部が器形全体からみると長く、立ち上がりやや外側に開き直線的である。口唇部端部は尖り気味である。235から見ると胴部の最大径は胴部の上位にあり、口縁部よりやや広い。内器面底部には指頭圧痕が見られる。

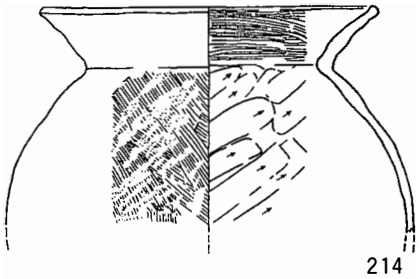
壺は231・234・236・237・238である。231は口唇部が丸く、口縁部はやや外反気味にほぼ直で立ち上がる。胴部の最大径はほぼ中位にある。外器面の調整はハケ目のみである。内器面は右斜めへのヘラ削りである。236も破片であるが同様の形態である。234・237・238は二重口縁壺である。234は、口縁部はやや外反し口唇部は丸まっている。頸部は直に立ち上がる。胴部は中位に最大径がある。外器面はハケ目調整ののちナデ調整を行っている。頸部内器面は小単位のハケ目、胴部内器面はヘラ削りが行われている。238は234とほぼ

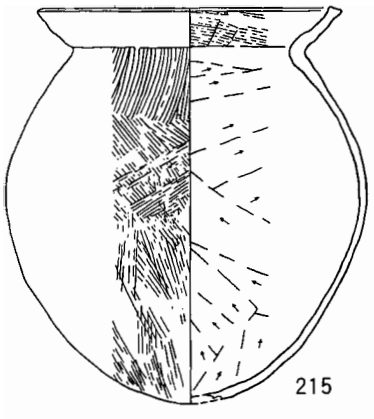


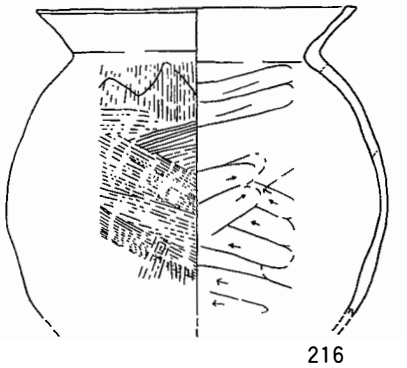


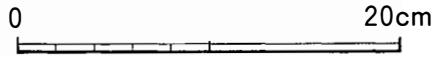




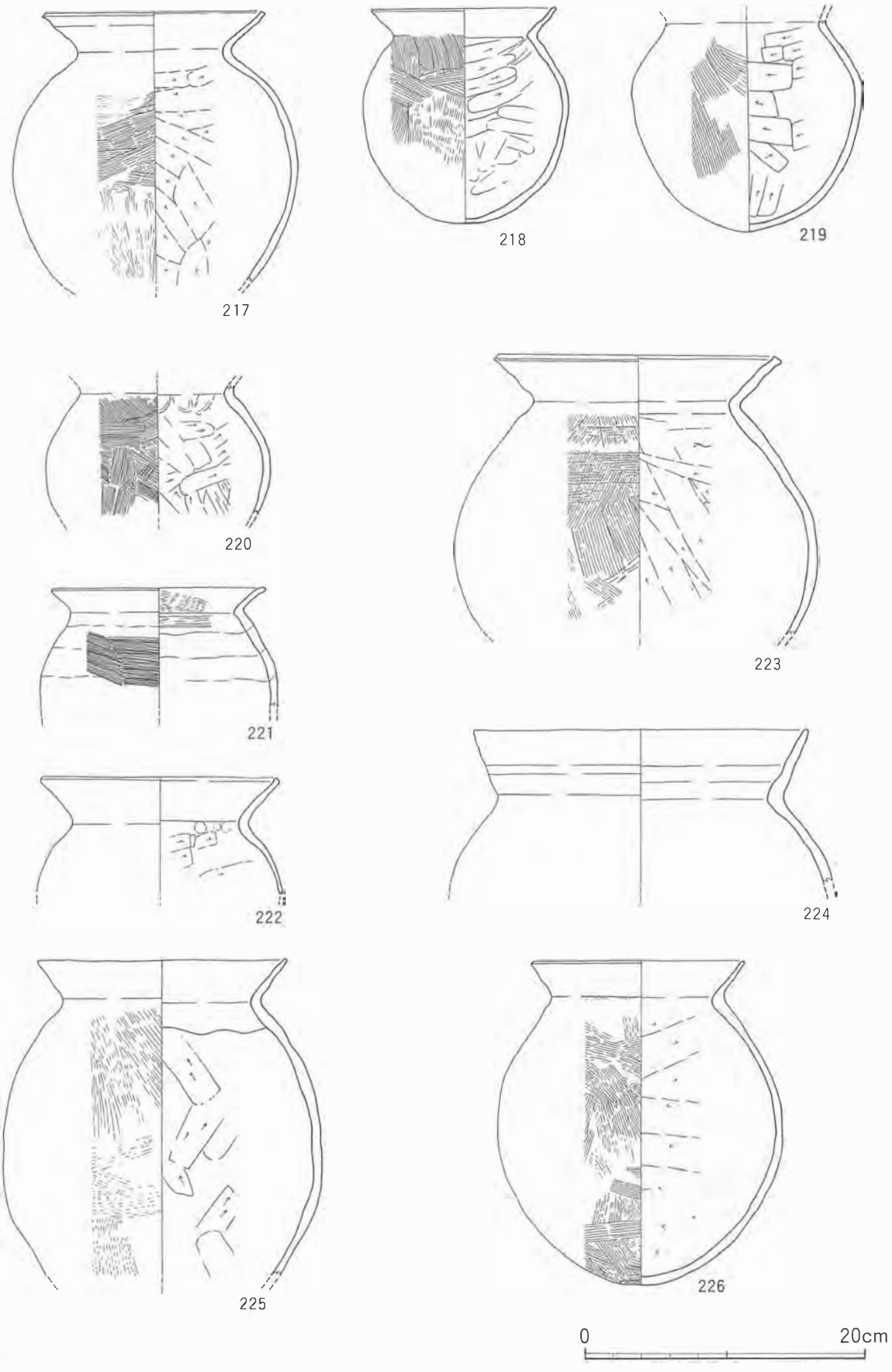




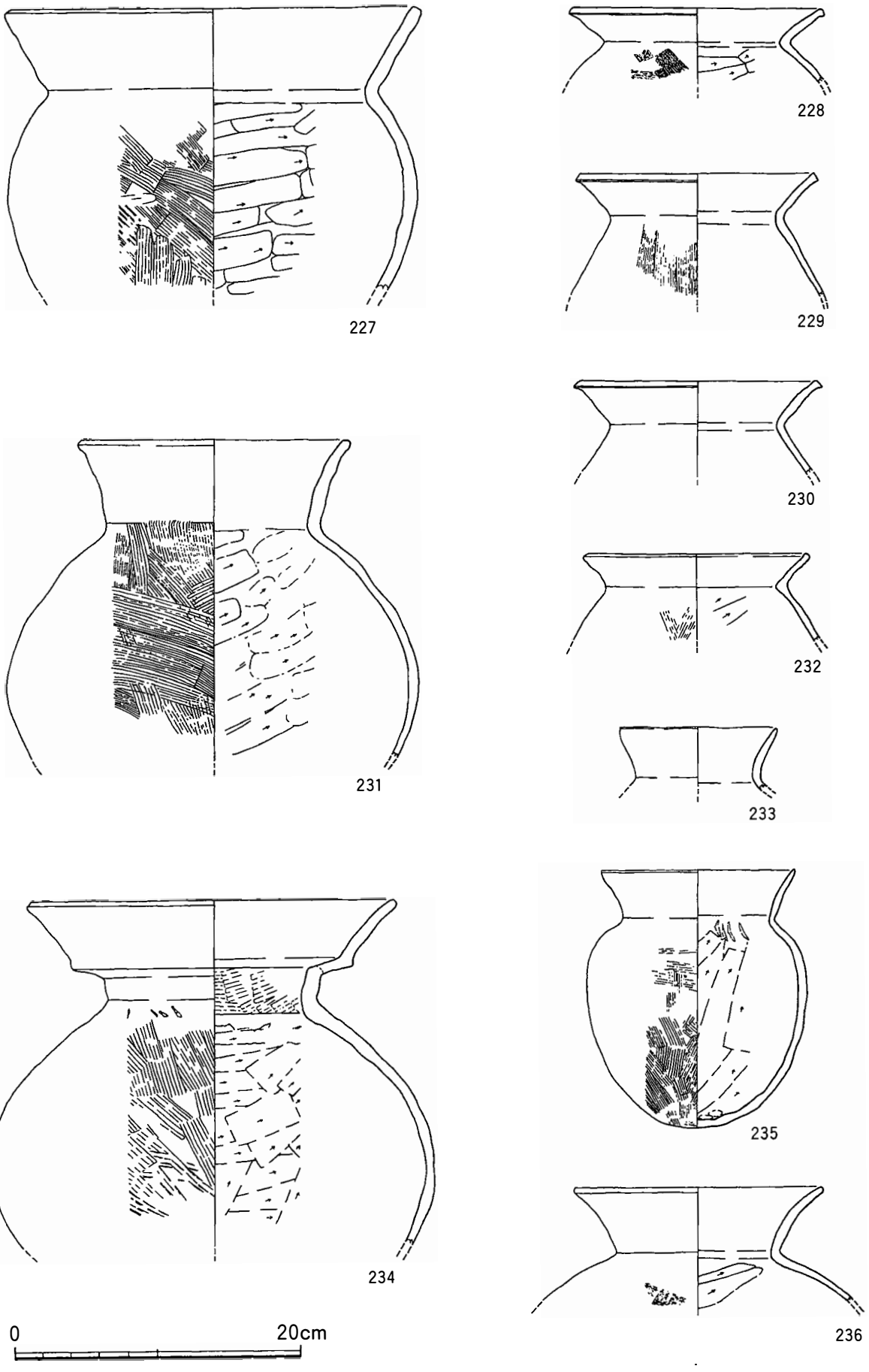




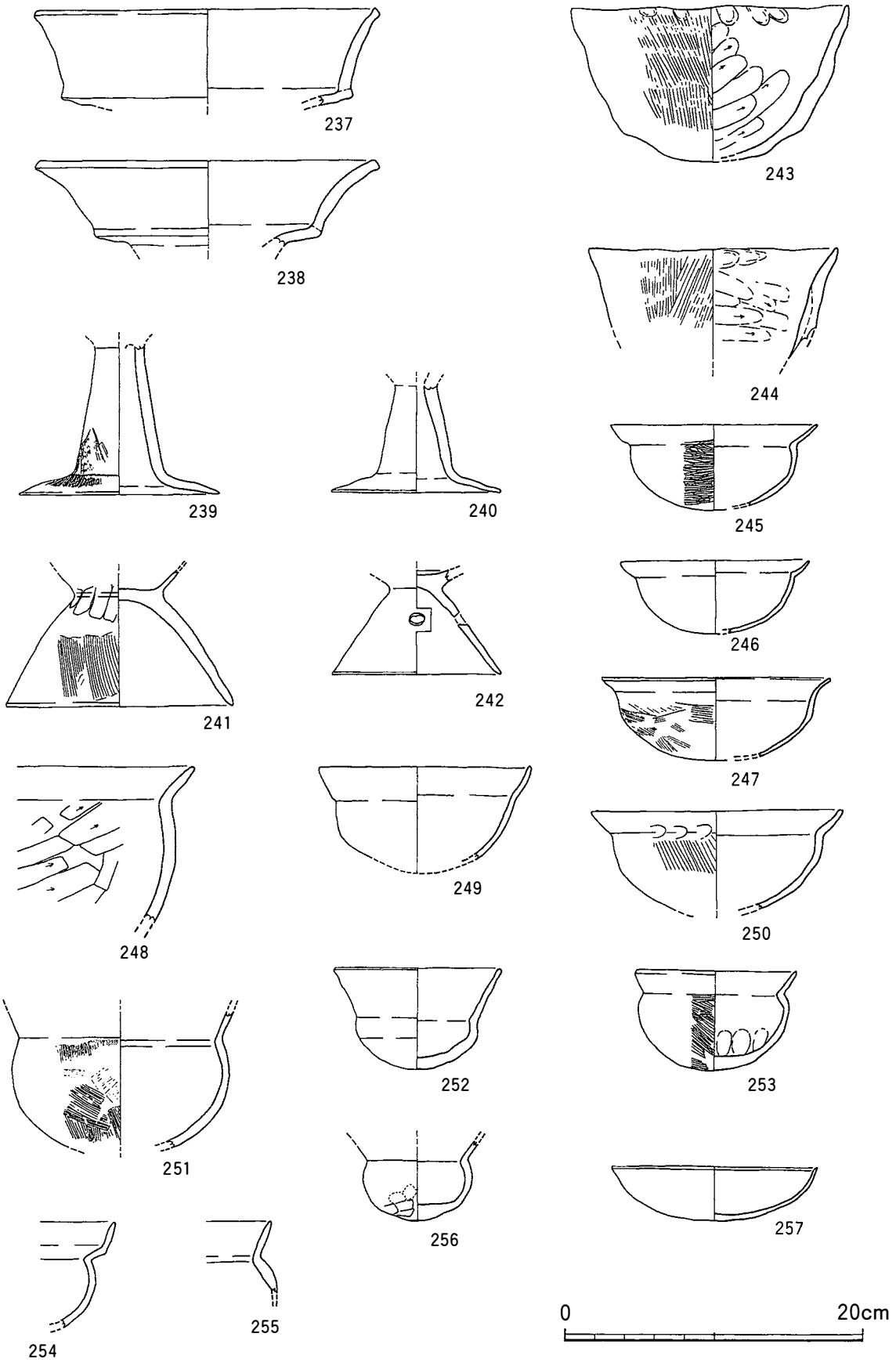
第42図　4SI007出土土器実測図



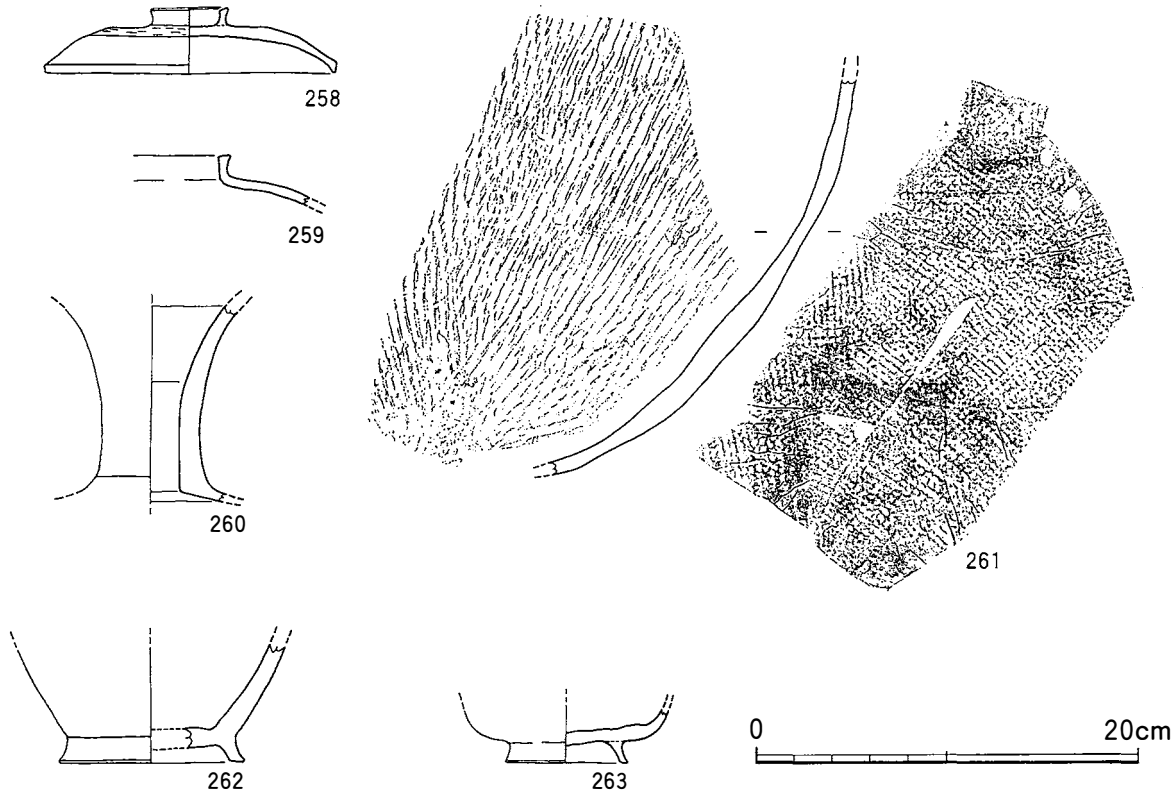
第43図　4SI007出土土器実測図



第44図　4SI007出土土器実測図



第45図　4SI007出土土器実測図



第46図　4SI007出土土器実測図

同一形態であるが、口唇部は角張る。237は口縁部がやや外反しながら直に立ち上がる。口唇部はややつまんだような形である。

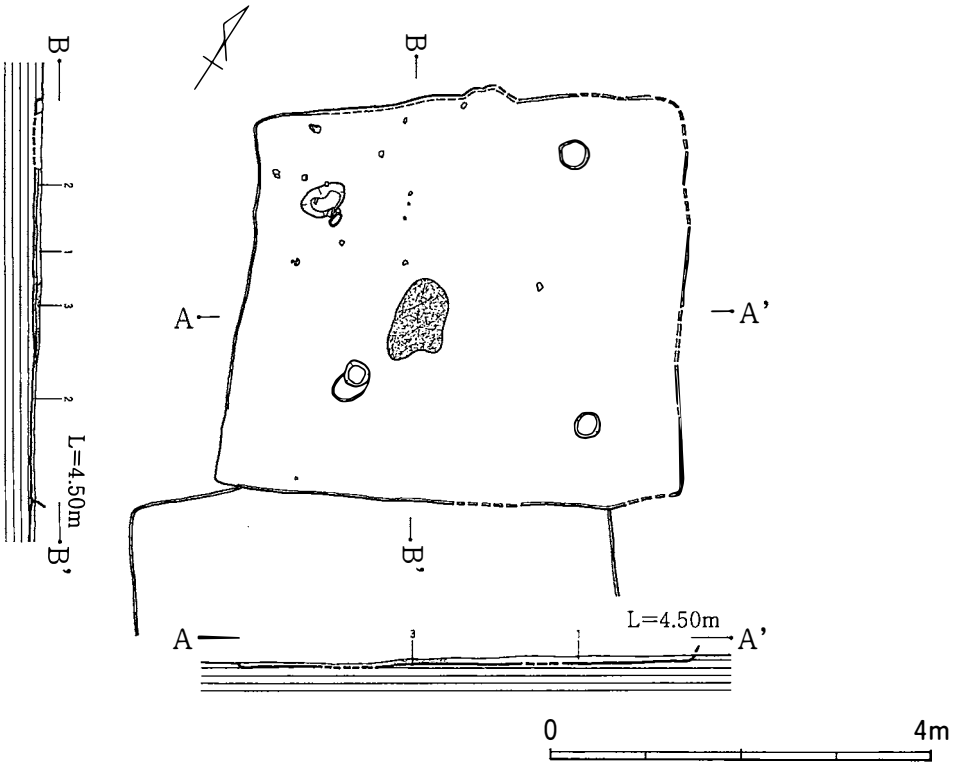
239・240は高坏の脚部である。239は底径に比して脚部長が長く、直に伸びるものである。240は脚部長が短いものである。坏部との結合付近の状況はやや異なる。

241・242は器台とした。241は底径も脚の高さも高い。外器面は縦方向のハケ目調整で、受け部は小さい。接合部はヘラナデである。242は畿内系の器台で脚部に穿孔がある。直線的に開き、脚端部は尖る。

鉢は243～251である。大きさや形態から243・244は同じ形態の鉢である。口径はいずれも復元ではあるがやや違いがあり、別個体である。どちらも手捏的な作りで口唇部は不揃いで器壁の厚みも一定ではない。外器面は縦方向のハケ目が残る。内器面は斜め方向のケズリが施されている。口唇部は指押さえによる調整がなされている。

245～249は口縁部が屈曲する鉢で大きさ・高さと器面調整の違いからいくつかに分類できそうである。この中で248が一番大きなもので、器壁は厚く、甕か鍋に近い。251も鉢としたが、頸部より上部の口縁部がより開く壺の形態に似る。245・246は同一の形態である。口縁が頸部から急激に開くものでやや内湾気味のもので、器壁は薄い。249・250はやや器形が異なるが、口縁部が立ち気味のものである。247は器壁が薄く、頸部の屈曲があまり明確でない。253は小型の鉢とした内器面底部には指押さえによる成形痕が残る。外器面はハケ目が残り丁寧な調整が施される。247・250はハケ目による調整が施される。252・256・254・255は小型壺である。252・256は頸部よりも口縁部の開きが大きく直線的に伸びる。頸部のしまり方やや異なる。254は複合口縁を持つもので甕状の形態を持つ。255は頸部からほぼ直に立ち上がるものである。257は口径が広く浅い高さを持つ坏である。器壁は全体に薄い。

258～263は、溝の付近で出土した古代の遺物である。258は須恵器の蓋で輪状ツマミを持つ。天井部表面



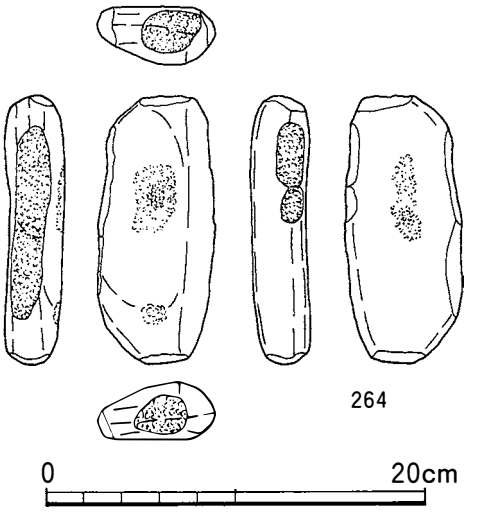
第47図　4SI011実測図

はヘラ削りで調整した後にツマミを貼り付けている。口縁端部は軽くつまみだし、内器面に明瞭なへこみを持たない。器高は高い。259は短頸壺の口縁部である。口縁部は胴部から1cmほど直に立ち上がる。口唇部はやや角張る。260は長頸壺の頸部で、すぼまった胴部から直に立ち上がる。上部でやや外反する。261は大甕の破片である。内器面には平行線の入る当て具痕、外器面には擬格子タタキが入る。大甕の底部近くとした。262は長頸もしくは短頸の壺の底部で、高台を持つものである。高台はかなり端部で開くものである。263は須恵器の埦である。高台がやや長く直に伸びる。坏部は底が丸味をおびる。

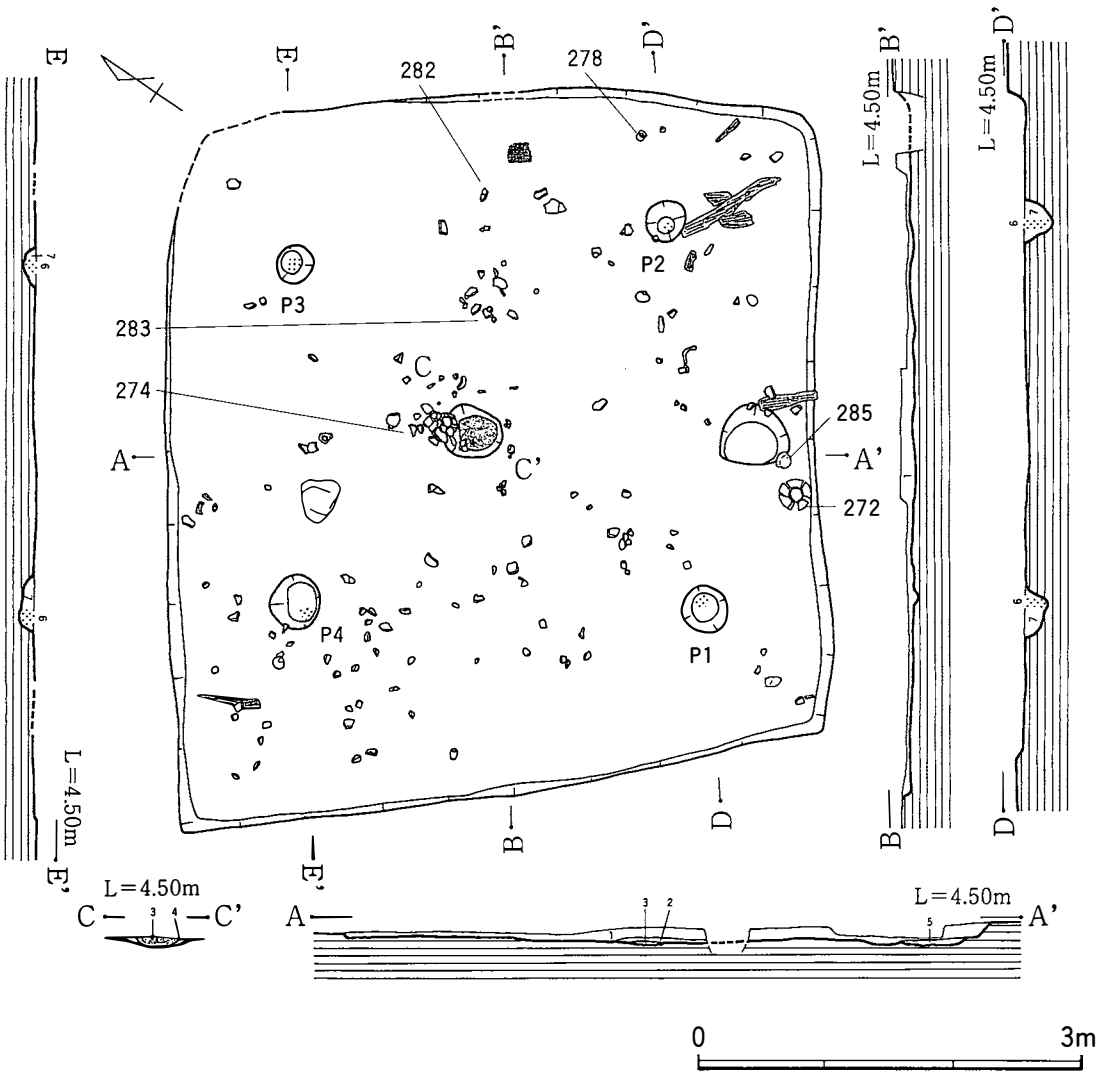
○4SI011【第47図】

Y－27グリッドに位置し、4SX010、4SB034と重複している。住居跡の規模は、長軸4.65m、短軸4.17m、床面積19.4㎡で東西にわずかに長い長方形を呈している。長軸方位は、N－54°－Wであった。確認面がかなり削平された状況であったため、壁高は3～7cmを残している。床面にはPit1～Pit4の4個の柱穴を検出し、この配列から4本柱の竪穴住居を想定できる。中央部からやや南西部よりに不整な長楕円形の焼土の集中域があり炉跡と考えた。明確な掘りこみは確認できなかった。

確認した面が遺構の床面からすぐのところであったため、埋土は3層のみを確認している。1層は、黒



第48図　4SI011出土石器実測図



第49図　4SI013実測図

褐色（10YR3/2）を呈する粒子の粗い、しまりがない。2層は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する１層よりやや粗く、締まっていない。炭化物、褐色土も混ざっている。3層は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、炭化物が混ざり、酸化鉄を多く含む。粒子は粗く、しまりは強い。

［出土遺物］【第48図】

出土遺物は、削平が進んでいたためか非常に少ない。図化できたのは264の石器一点である。4面とも良く使われたタタキ石である。石材は安山岩である。

その他に図化できなかったが、遺構図中にあるものとして、土師器甕の口縁やミニチュアの壺、鉢等があった。また、洪水による撹乱を受けたためか一括遺物の中には古代の甕、坏の破片も含まれる。

○4SI013【第49図】

Y－26グリッドからZ－26グリッドにかけて位置し、4SI012と重複している。住居跡の規模は、長軸5.45m、短軸5.11m、床面積27.9㎡で平面形は、南辺がやや短いもののほぼ長方形である。長軸方位はN－50°－Eである。壁高は、4～13cmを残している。床面の南東部には貯蔵穴状の落ち込みがみられ、床面にはPit１～Pit４の４個の柱穴を検出した。いずれにも柱痕跡を確認した。この配列から４本柱の竪穴住居が想定できる。炉は、中央部からやや北西部よりに設けられ、平面形は、長楕円形で炉内部には焼土が堆積してい

た。

また、4SI012と重複していない部分にはこの住居跡の建築部材が炭化したと見られる炭化物があった。焼失家屋の可能性がある。この炭化部材は壁の方から中心へ向かっていくような配置で出土した。屋根構造は寄棟の可能性がある。

床面の北東部分には網代が炭化したと推定できるものが出土した。遺構実測図に図化したが、ほとんど痕跡のみで取り上げはしたが、単に炭化物として回収できたのみである。

埋土は１層のみを確認し、暗黒褐色（7.5YR3/2）を呈し、焼土・炭化物を多く含み、よくしまっている。炉跡の埋土は上から２層と３層である。2層は褐色（7.5YR4/4）を呈し、多量の焼土・炭化物を含むややわらかい土である。3層は灰褐色を呈する炉の底面層である。4層は地山の層で、黒褐色（7.5YR2/2）を呈する。

［出土遺物］【第50図・第51図】

出土遺物は少なく、破片が多い。焼失家屋と考えれば、出土遺物はこの遺構の時期に使用された可能性が高い。遺物の少なさは屋内にあまり品物がなかったか、焼失後使えるものを持ち去ったものと考えられる。

出土遺物のうち土器は甕７点、壺１点、高坏３点、器台２点、小型壺４点、土製模造品４点、甑１点、石器は３点を図化した。

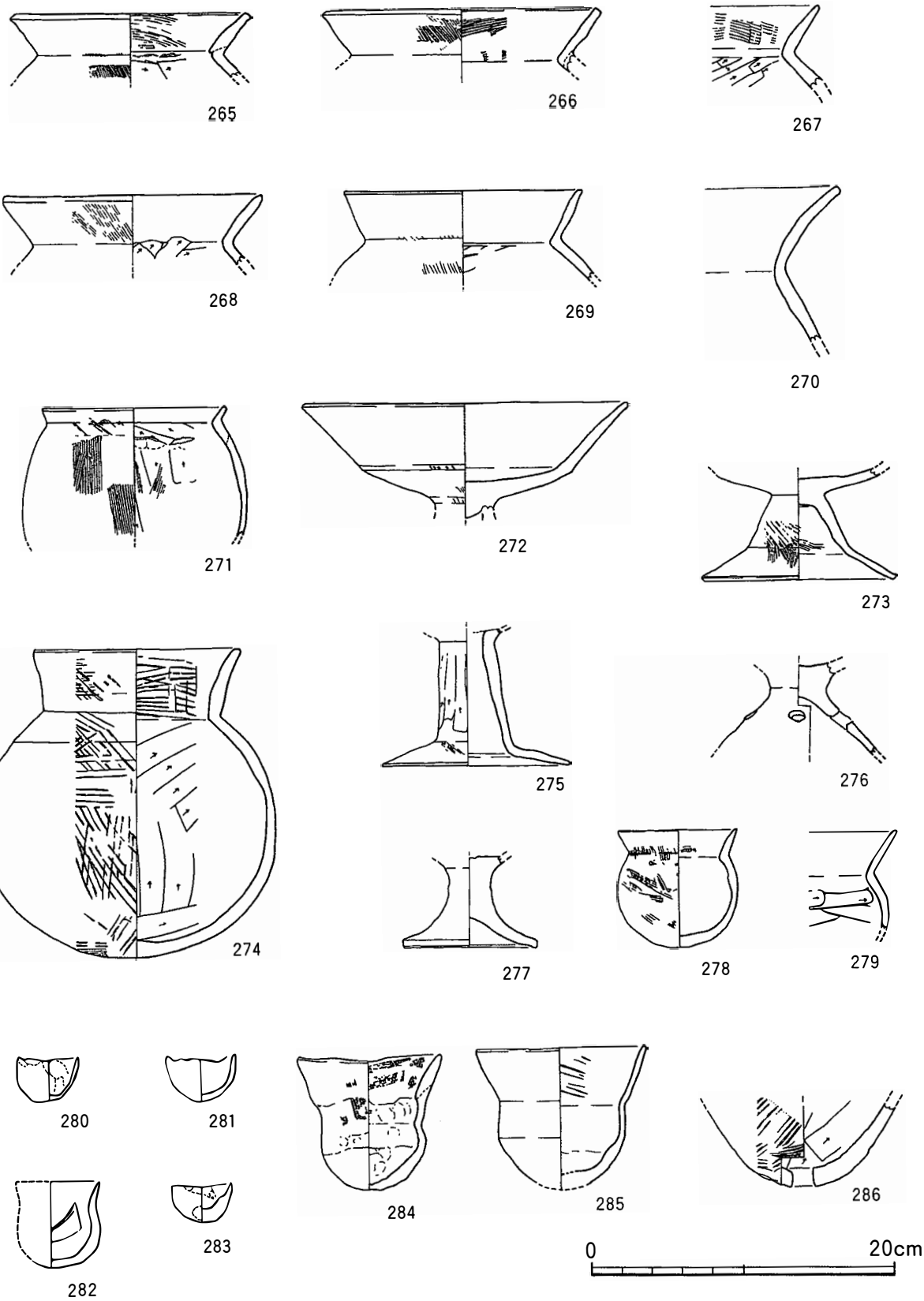
265～269は甕であるが破片がほとんどである。口唇部の特徴から２種類に分けることができる。角張るもの（265・266）と丸くなるものかやや尖るもの（267～269）である。復元口径は14.4cm～17.9cm を測る。調整はハケ目と内器面のヘラ削りである。270は甕にしたが口縁部が頸部から外半しながら伸び、口唇部はやや角張る。全体の器形は壺に近い様でもある。271は口縁部が1cm ほどしかない非常に短いもので、古代の遺物の混入した可能性がある。復元口径が12.0cm、最大胴部径が14.8cm を測る。外器面は縦方向の広め幅のハケ目が施される。

274は壺で、完形である。丸みを帯びた胴部と頸部から直に伸びる口縁部を持つ。壺としては小型の部類に属する。口縁部は頸部からやや外反しながら直に伸びる。口唇部は丸まる。胴部は球形を呈する。外器面はやや目の粗いハケ目が斜め、横、斜め方向の順に施される。内器面口縁には横方向のハケ目、胴部内はヘラ削りが施されている。器壁はさほど薄くはない。口径は13.4cm、器高は20.5cm、最大胴部径は19.4cm を測る。

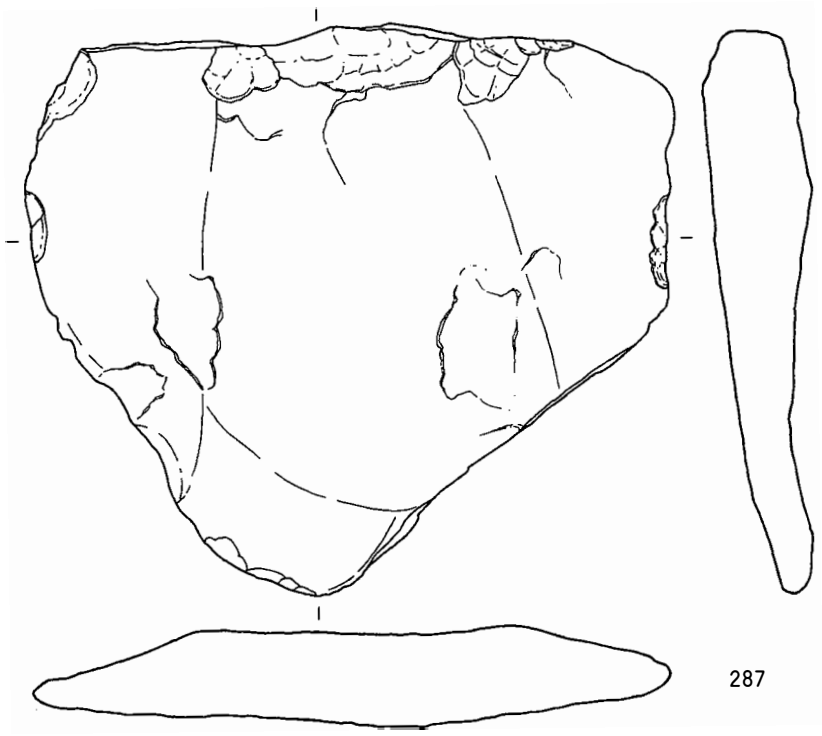
272・273・275は高坏である。脚部は開くものとまっすぐに伸びるものがある。272は、脚部付け根から坏部の破片である。坏部は大きく開き、口径は21.6cm を測る。調整は磨耗して不明である。273は坏部下部から脚部である。脚部は径が大きく短い。中空の脚柱に屈曲した裾部がつく。裾部復元径は12.2cm を測る。外器面にはハケ目、横ナデが、内器面もハケ目が施される。275は坏部との接合部から裾部までいたる脚部である。中空の脚柱部にほぼ平たくなった裾部がつく。外器面は縦方向のヘラ削りが施される。脚柱内器面はヘラ削り、裾部はナデ調整が施される。

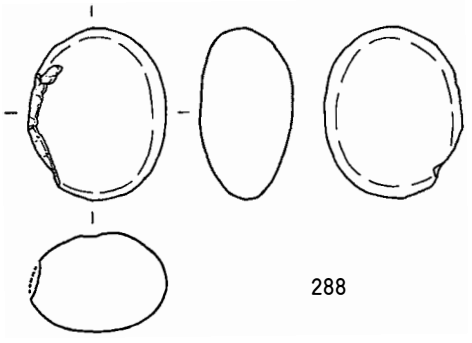
276・277は器台である。276は脚が開き円形の穴を４箇所穿つものである。内器面はヘラ削り後ナデ、外器面はナデ調整である。277は脚の抉りが浅くしっかりとした中実のものとなっている。復元底径は8.8cm を測る。

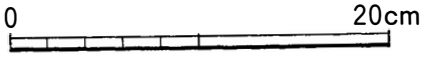
278・279・284・285は小型壺であるが、作りから２種類に分けられる。胴部が張って頸部がしまるもの（278・279）と頸部はしまるもののそれ以上に口縁が広く開くもの（284・285）である。278は口縁部が短くとがる。胴部は球形である。外器面はハケ目調整、内器面は横ナデが施される。口径が7.8cm、器高が7.7cm、最大胴部径が7.9cm を測る。279は口縁部が直に伸び、端部は丸まる。内器面は横方向のヘラ削りの調整が施される。284は手捏で、外器面がハケ目とナデ、内器面は指押さえとナデが施される。口径が9.3cm、器

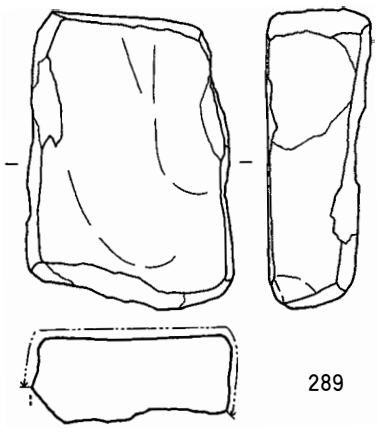


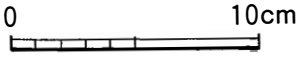
第50図　4SI013出土土器実測図



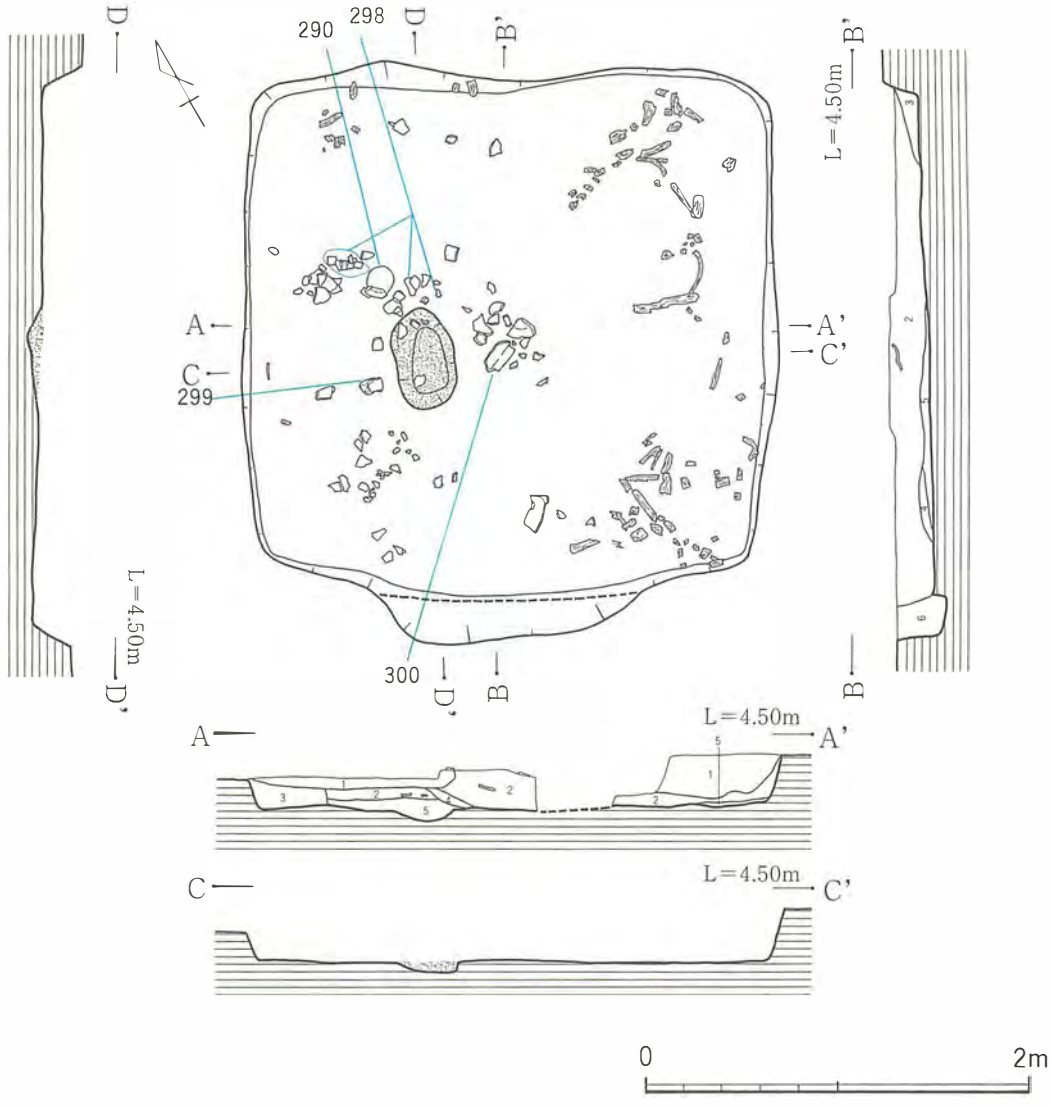








第51図　4SI013出土石器実測図



第52図　4SI029実測図

高が9.0cm を測る。285は、頸部から直に伸びて広がる手捏である。外器面はナデ、内器面はハケ目後ナデの調整である。口縁部径は11.3cm、復元器高は9.5cm を測る。

280～283は土製模造品で鉢形と甕形がある。280・281・283は鉢形の土製模造品で口径が4cm 前後、器高が3cm ほどである。282は甕形の土製模造品である。復元口径が5.5cm、器高が5.8cm を測る。

286は甑の底部であろう。外器面はハケ目調整が、内器面はヘラ削りが施される。器壁は厚く、底部に径1.4cm ほどの穴が開けられている。

石器としては、第51図に示している。287は住居跡の中に座っていたもので台石と考えた。縦が30cm、幅が33.8cm ほどを測る。大きくすわりがよく、表面はやや磨耗している。石材は一応安山岩とする。288は磨石の一種とした。表面は使用によってかなり磨耗している。長さ9cm、幅7.25cm、厚さ5.12cm を測る。石材は角閃石安山岩である。289は表面の磨耗の状況から砥石として利用されていたものと想定した。3面が利用されている。長さ9.7cm、幅8.2cm、厚さ4.1cm を測る。石材は石英安山岩である。

○4SI029【第52図】

この遺構は、Y－28グリッドの北東部に位置し、一部Z－28グリッドにかかる。また、4SB002と重複して

いる。ちょうど住居跡の炉跡にかかる場所に4SB002の柱痕跡が当たっているため、炉跡はやや不正確である。

住居跡の規模は長軸2.9m、短軸2.82m、床面積約8.2㎡でほぼ正方形に近い平面形を呈している。長軸方位はN－30°－Wである。壁高は16～2.5cmを残している。床面中央部北西側に焼土の集中個所が1ヶ所検出され、中央部に炉穴と思われる窪みがあり深さ6cm程である。炉穴には暗赤褐色（2.5YR3/3）を呈する焼土を確認し、焼土塊がいくつかある。部分的に炭化物や灰が入る。また、埋土と床面には焼土、炭化物、灰などが多量に出土し、焼失家屋と思われる。壁上部から中に落込むように炭化材がみられ、残された炭化材の並び方から寄棟造りの上部構造であったようである。柱跡や硬化面は確認できなかった。壁面の一部が張り出したようになっているが、内部の純粋の埋土より薄くなっているので構築時の掘り過ぎか、外部へ向けての施設の可能性がある。

竪穴住居跡とするにはやや小型ではあるが、一応竪穴住居跡としておく。

出土した炭化材を年代測定に出した。β線法による分析で、補正の結果、暦年代はほぼ5世紀の半ばに比定された。

埋土は焼失後徐々に埋まっていったと推定した。1層は黒褐色（7.5YR.3/1）を呈し、1～2mm大の焼土粒子をかなり含み、炭化物も多い。あまりしまっていない。2層は、黒褐色（7.5YR.3/2）を呈し、1層よりも明るく、ややしまる。Vc層と同じものである。3層は、黒褐色（10YR3/2）を呈し、やや締まりのある土である。4層は、黒色（10YR2/1）を呈し、炭化物・灰・焼土などを多量に含み、締まりはない。下面が焼けたようで硬くなっている。5層は、褐灰色（10YR4/1）を呈し、粘性が強い。南側の掘り方ラインの部分にあり、遺構からつきでた部分のみに出土する。焼土は暗赤褐色（2.5YR3/3）を呈し、焼土塊がいくつかある。地山の灰白色土が焼けたものと思われる。部分的に炭化物や灰が入る。

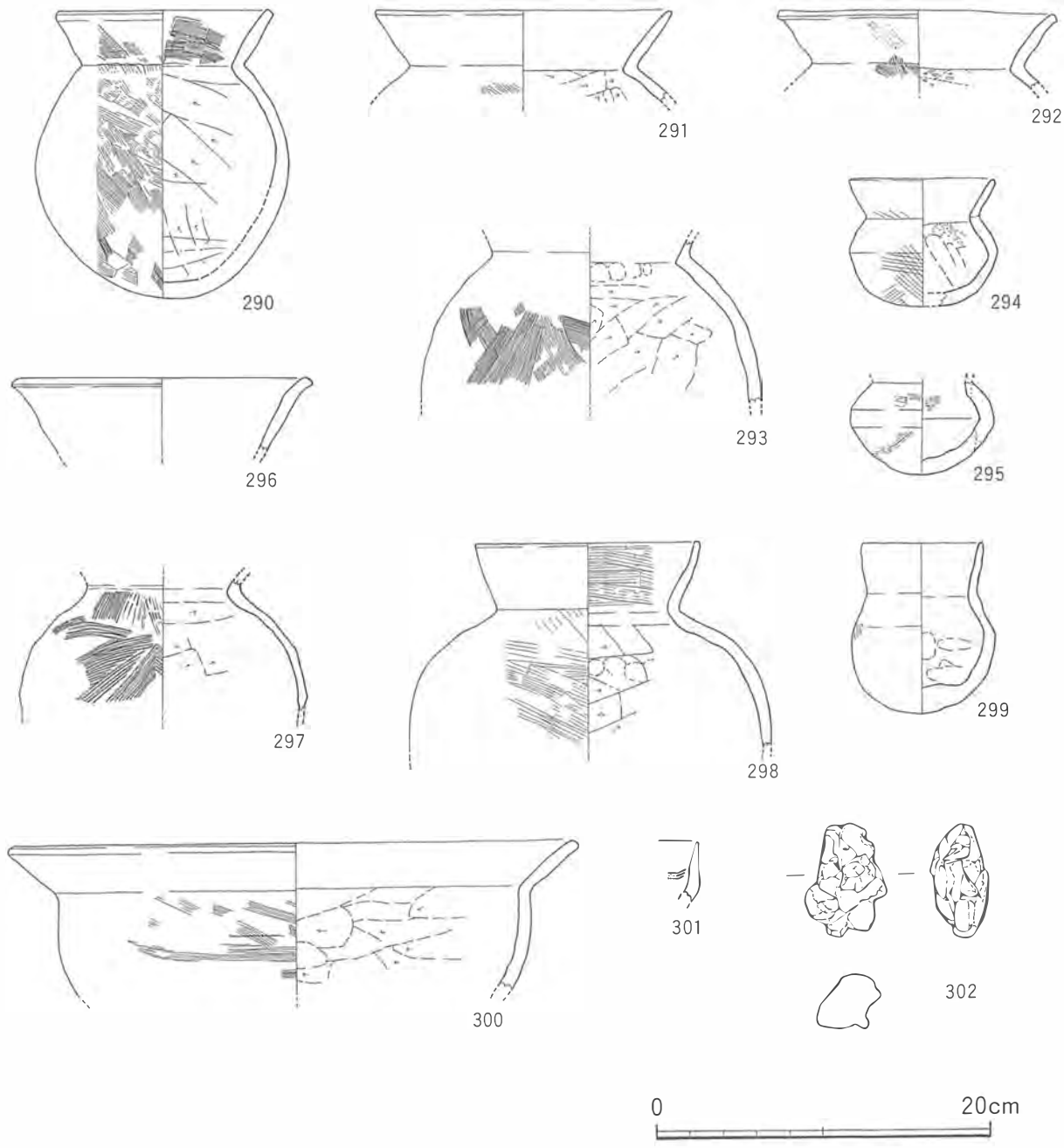
［出土遺物］【第53図】

出土遺物は小片が多く、図化できるものは少なかった。ここでは甕4点、壺3点、小型壺3点、鍋1点、鉢形模造品1点、粘土塊1点を図示した。大部分が破片であるが、遺構に伴う可能性が大きいのは300の鍋、298の壺、そして中型甕の290である。小型壺の299も可能性がある。

290は小型の甕の完形品で口縁部はやや厚く外面に盛り上がりを受け口唇部はやや角張った丸である。器壁が3～5mmとやや厚く、重量もありやや重い。外器面は斜めから縦方向のハケ目が施される。内器面はヘラ削りが施される。口縁部内面にハケ目とミガキが施される。若干畿内的な要素を持つもののほとんど在地系のものであろう。復元口縁径は12.5cm、器高17.3cm、最大胴部径が15.2cmを測る。291・292は甕で290より大型のものである。291は口唇部がやや薄手で尖り気味、口縁部は直線的に伸びるといった在地的な特徴を持つ。復元口径が17.6cmを測る。292は290と同様の口唇部・口縁部を持つことから類似製がある畿内系の特徴を持つものと思える。復元口径は16.6cmを測る。293は頸部から胴部上位の破片である。外器面には斜め方向のハケ目が残る。内器面は頸部に指押さえがあり、胴部はヘラ削りが施される。

296～298は壺である。296は口縁部のみの破片で直に伸びた口縁が口唇部近くでわずかに開き、外器面に屈曲部が見える。復元口径は17.2cmを測る。297は頸部から胴部上位までの破片である。外器面は縦ハケから斜め方向のハケ目調整が施される。内器面は横方向のヘラ削りが施される。298は口縁から胴部上位まで残る破片である。口縁部は内湾しながら直に立つ。口唇部は丸まる。胴部は頸部から大きく開く。口縁部内部には横方向のヘラ削りが施される。胴部外器面は横方向のハケ目の後ナデが施される。内器面はヘラ削りの後指ナデが施される。復元口縁径が13.6cm、復元最大胴部径が22.0cmを測る。

294・295・299は小型壺とした。294・295は丈の低いもの、299は口縁が直にたつもので丈も高い。294は外器面の下位にハケ目が残る。内器面には指ナデが残る。復元口径が8.4cm、復元最大胴部径が8.8cm、器



第53図　4SI029出土土器実測図

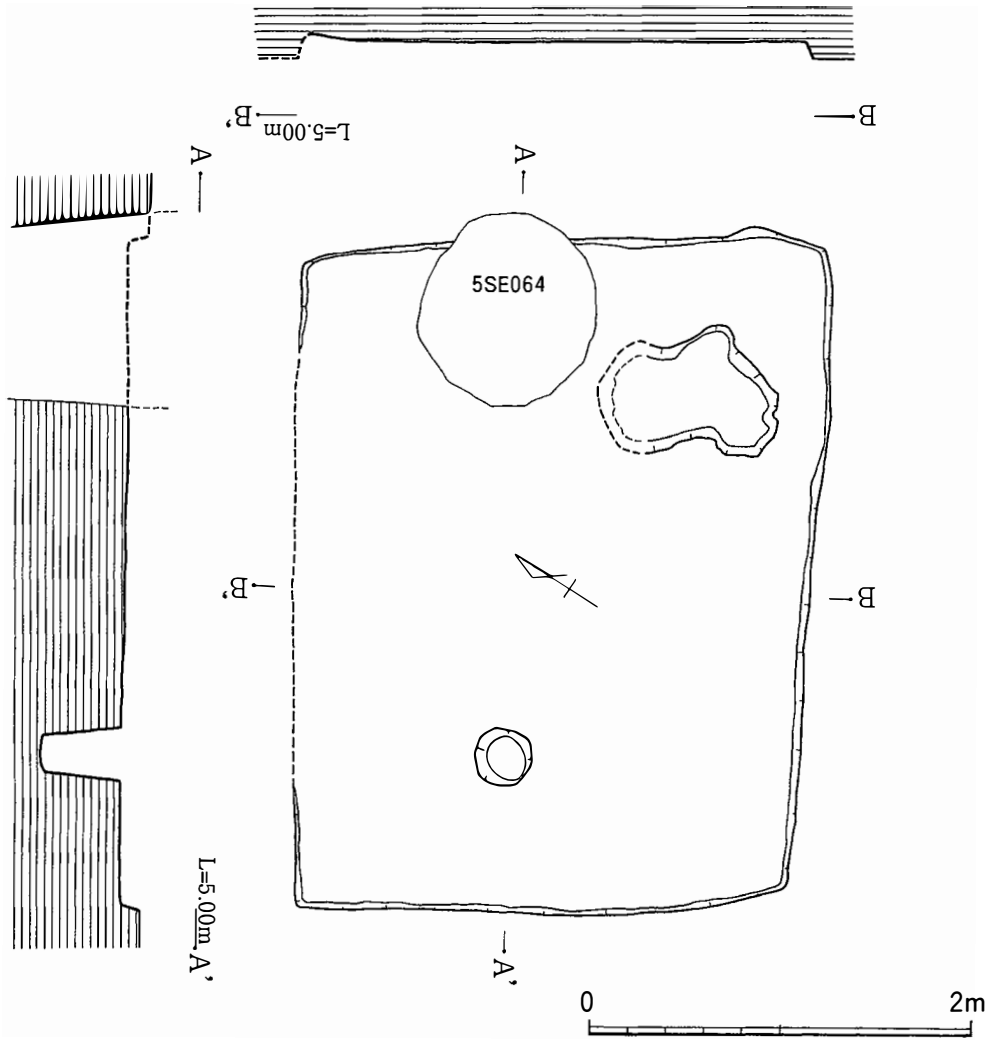
高は7.8cm ほどを測る。295は胴部だけの破片で、外器面はハケ目が残り、内器面はハケ目がわずかに残る。最大胴部径が8.6cm を測る。299はほぼ完形のもので頸部の屈折が余り強くなく、頸部から直に口縁部は立ち上がる。胴部はあまり張り出さない。器壁は厚い。外器面の調整はナデで、内器面は指押さえによる。復元口径は7.1cm、器高は10.3cm、最大胴部径が8.6cm を測る。

300は一応鍋とした。復元口径33.6cm、胴部径29.0cm を測り、口径がより広く丈も低いようである。外器面はハケ目、ナデが見られ、内器面はケズリ後ナデが施される。

301は破片ながら鉢形の土製模造品である。

302は粘土塊で、他にも同様のものがあったが図化していない。大きさは図化したものと大同小異である。凹凸が不規則に入り、指跡はほとんど見られない。これらの土塊は家屋焼失に関係する可能性を指摘しておく。

第54図　5SI029遺物出土状況実測図



第55図　5SI029実測図

○5SI029【第54図・第55図】

この遺構は、完形に近い土器が集中しているところから何らかの遺構が存在するものと考え、遺物集中出土範囲から確認作業を進めた。その結果、その周囲にあった掘り込みの輪郭を確認できた。

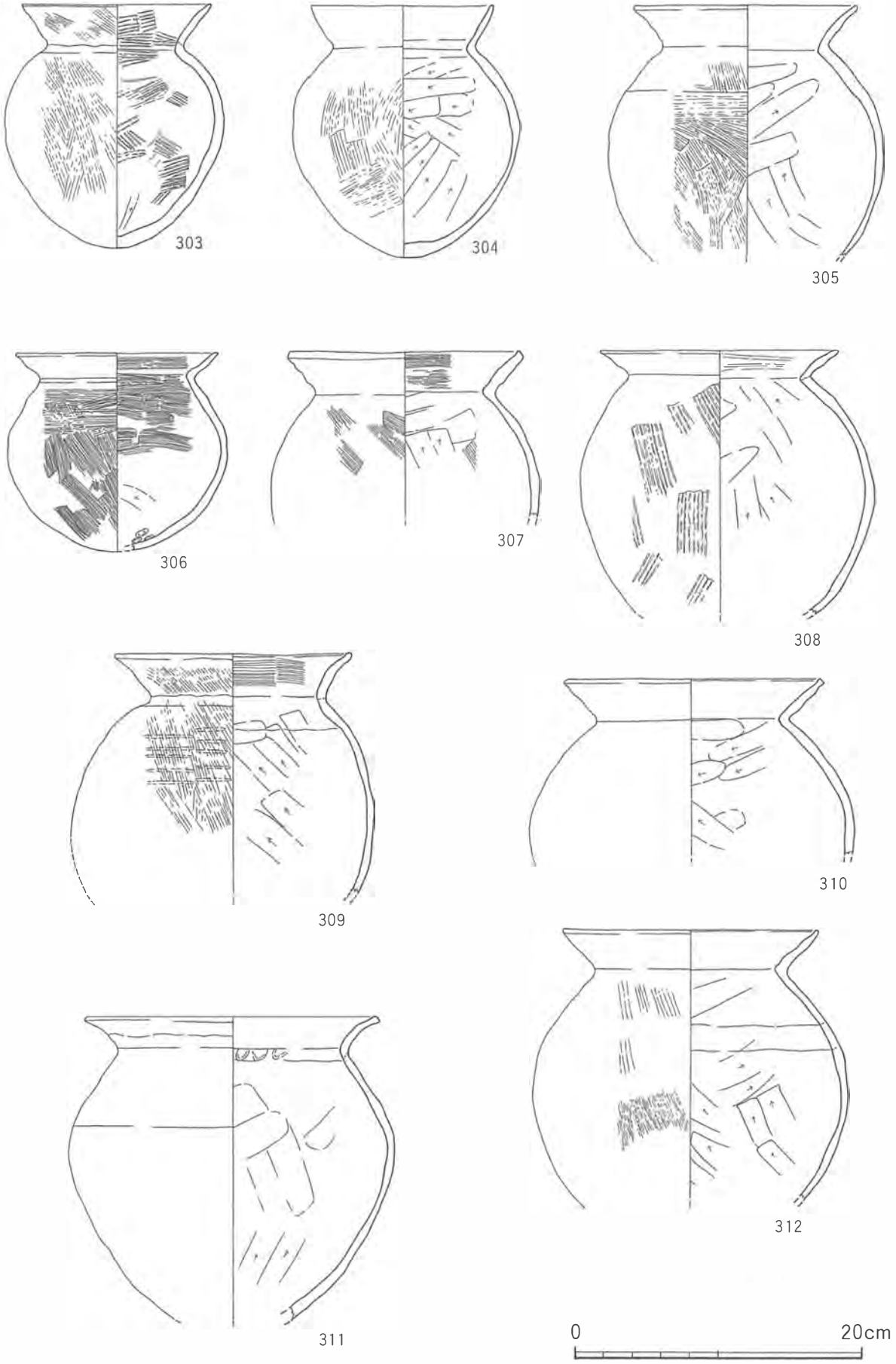
b－34グリッド～c－34グリッドにまたがった地点に位置し、5SX021とも重複している。また同時期の井戸遺構の5SE064も切っている。住居跡の規模は、長軸3.54m、短軸2.72m、床面積9.6㎡で平面形は整った長方形を呈している。長軸方位はN－58°－Wである。壁高は、9～10cmを残している。床面西側には柱穴１個を検出し、東側隅には貯蔵穴状の落ち込みを検出した。

埋土は明確な分層はできなかった。土色は褐色（7.5YR4/3）である。あまり締まりはないが粘質土で少量だけ砂粒子が混じる。

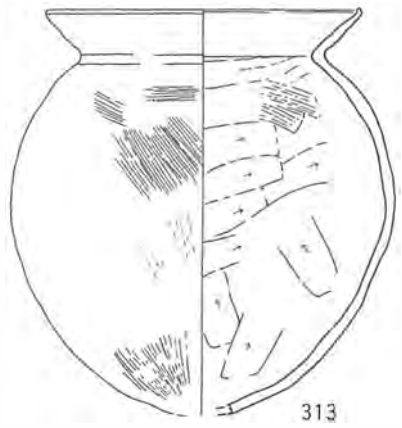
［出土遺物］【第56図～第59図】

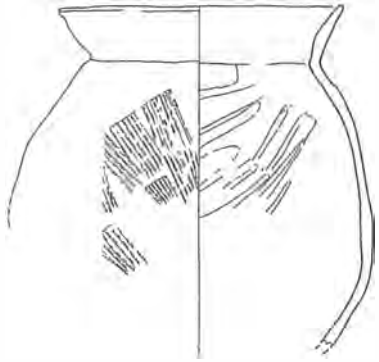
遺物が多く、特徴もさまざまである。図化したのは、甕が17点、壺が７点、二重口縁甕が１点、脚付鉢が１点、鉢が12点、坏が２点である。

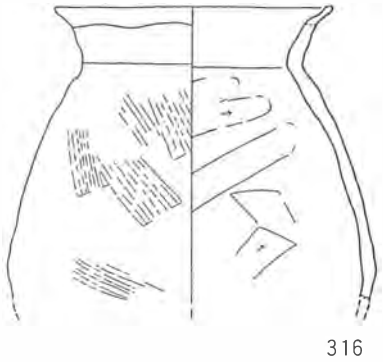
甕は大きく３種類に分けられる。

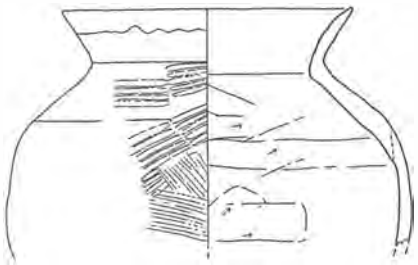


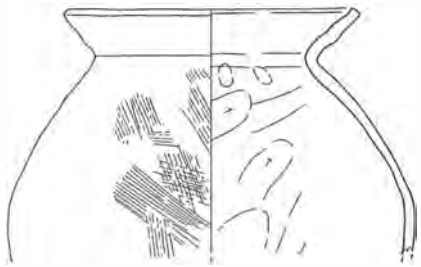
第56図　5SI029出土土器実測図

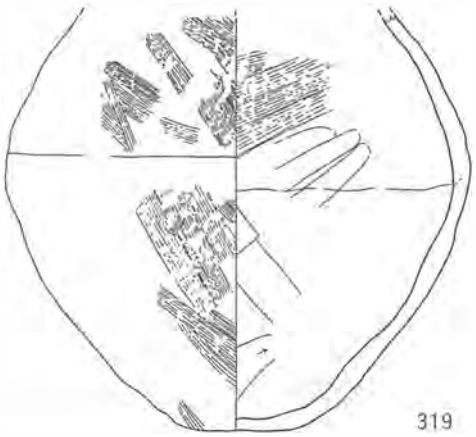


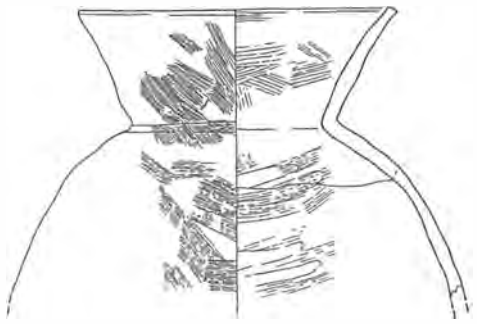




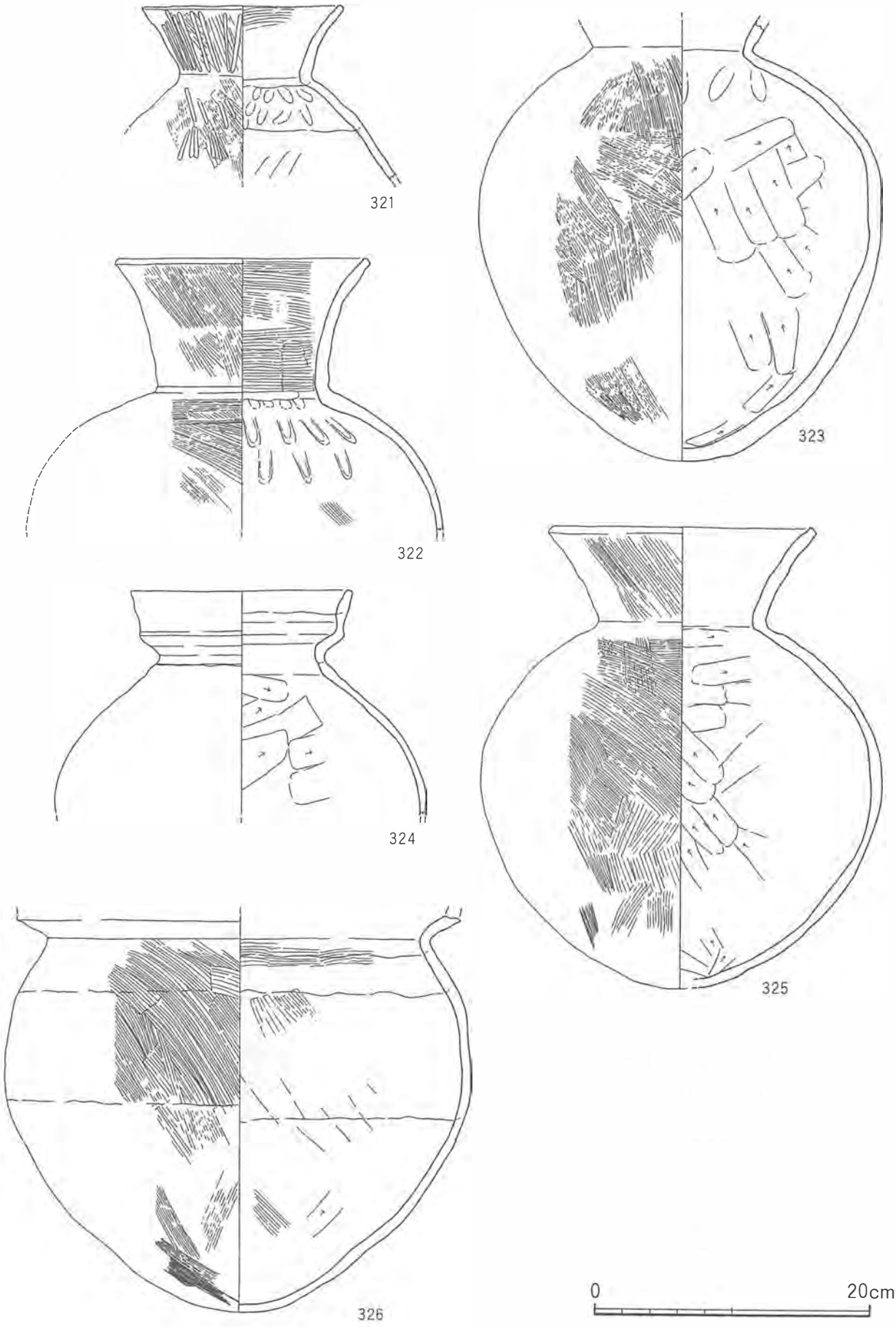




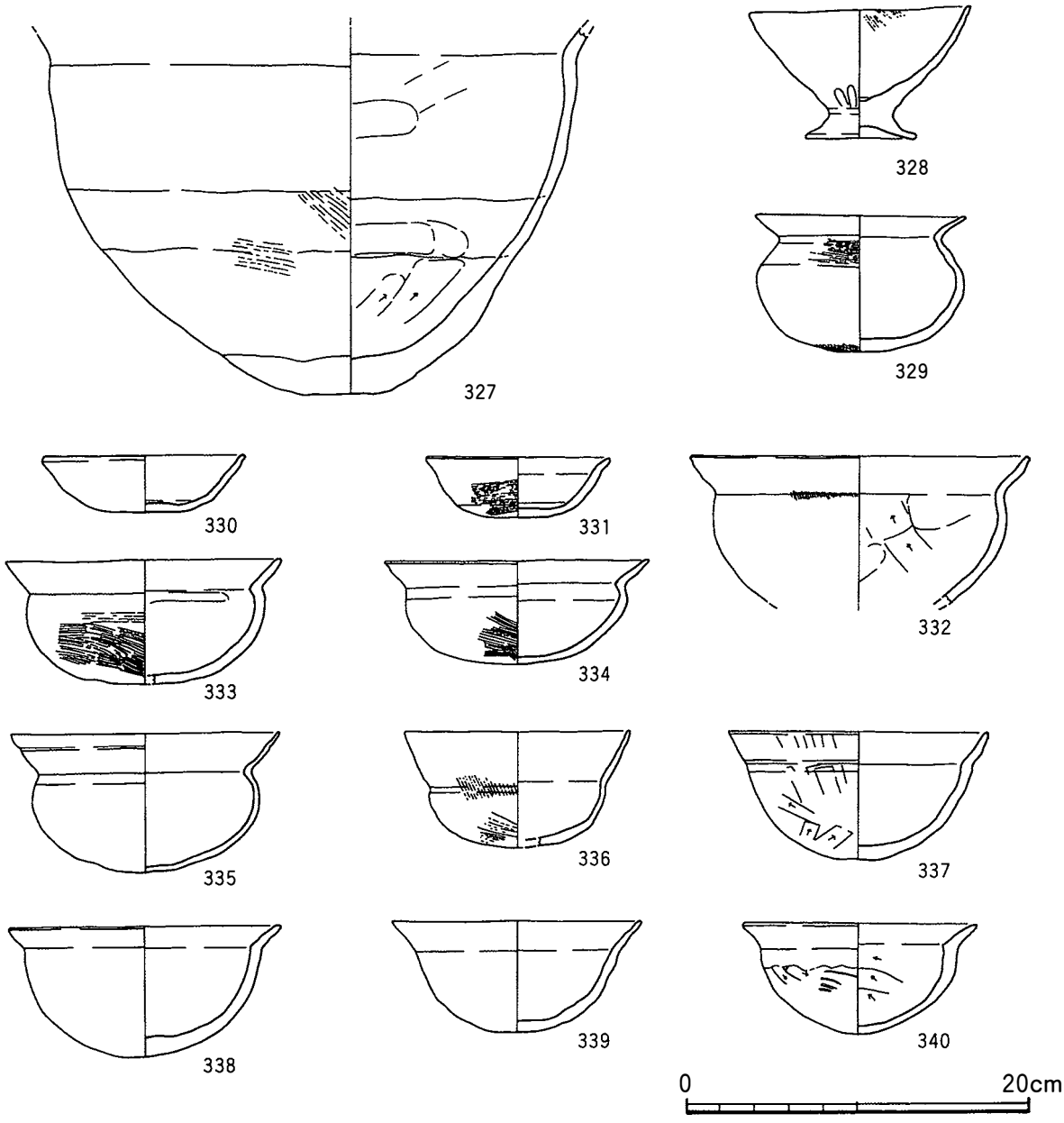




第57図　5SI029出土土器実測図



第58図　5SI029出土土器実測図



第59図　5SI029出土土器実測図

第１のものとしては、303・304・306がある。303は口縁部がほぼ直に伸び広がる。胴部は倒卵形を呈する。外器面には斜め方向のハケ目による調整がなされ、内器面にもハケ目による調整の後ヘラ削りが部分的に入る。口径13.1cm、器高16.7cm、最大胴径は15.1cm を測る。304は口縁部がやや内傾している。外器面には縦方向のハケ目が残り、内器面は下位が斜め方向、上位は横方向のヘラ削りが施される。口径が12.8cm、器高が17.3cm、最大胴部径が16cm を測る。306は、口縁部が広く開き内湾し短く終わる。胴部はつぶれた楕円体を呈し、外器面には丁寧なハケ目調整が施され、内器面には下位にヘラ削り、上位に横方向のハケ目が施される。内器面底部には指押さえの跡が残る。口径が12.8cm、器高が17.3cm、最大胴径が16cm を測る。

第２のものとしては、305・307～314・317がある。305・307～314はほぼ同規模の甕である。305は頸部から急激に開き外反しながら口唇部に至る。口唇部は丸まる。外器面は斜め方向のハケ目、内器面中位で方向が異なるヘラ削りが施される。復元口径が15.5cm、復元最大胴径が19.1cm を測る。307は頸部が短くやや

厚くなり、口唇部はつまみ上げられ気味で角張る。外器面は斜めハケ目がわずかに残り、内器面は胴部がヘラ削りされている。口縁部内に横方向のハケ目状痕跡が残る。復元口径が16.2cm を測る。外器面に黒斑がある。308は、口縁部が短く、頸部から外反して口唇部に至る。頸部外面には弱い高まりが巡る。胴部は卵形を呈する。外器面は縦方向のややハケ間の広いハケ目が残る。内器面は縦方向のヘラ削りが残る。復元口径が16.4cm を呈する。309は頸部が締まり、口縁部は縦に直に立ち上がり途中から屈曲が大きくなり外反しながら端部に至る。口唇部は丸くなる。内器面の口唇部近くに弱い溝状のへこみが巡る。外器面には横に平行のタタキが縦方向のハケ目の間に見える。内器面は斜め上方へのヘラ削りを施している。器形はややひずみがあり、胴部は大きく卵形であるがややゆがむ。口縁径は16.3cm、最大胴部径は20.8cm を測る。外器面には黒斑があり、煤が付着している。粘土巻上げ痕らしき跡が表面に残る。310は口縁部が頸部から急に開き、ほぼ直に伸びて口唇部にいたる。口唇部は角張り、内器面に弱い沈線が巡る。胴部は頸部から張り出す。口縁部径は17.4cm を測る。311は口縁部が頸部から急激に外反しながら伸び口唇部にいたる。口唇部はやや角張る。胴部は倒卵形である。復元口径は19.8cm を測る。外器面の調整は不明であるが、内器面にはヘラ削りが残り、頸部に指押さえ痕が残る。312の口縁部は頸部からやや内湾しながら端部に至る。口唇部は尖り気味にすぼまる。胴部は倒卵形を呈する。外器面は縦方向のハケ目が部分的に残る。内器面は低位から中位までとその上位とはヘラ削りが異なる。また内器面には土器の成形の粘土巻上げの接合痕が残る。復元口径は17.6cm、復元最大胴部は21.6cm を測る。313は口唇部が頸部から直に伸び端部に至る。口唇部をつまみ上げている。外器面にはハケ目が残る。内器面はヘラ削りが主であるが上部にわずかにハケ目が残る。口縁径は16.2cm、最大胴部径は19.9cm を測る。314は作りが丁寧で口縁部は頸部から内湾しながら広く開く。口唇部は尖り気味である。口縁内面には横方向のハケ目調整が施される。胴部は卵形を呈し、外器面は斜め方向に細かいハケ目調整が施される。復元口径が17.2cm、復元最大胴部径が22.3cm を測る。317は口縁部が頸部からやや外反しながら直気味に伸び、口唇部にいたって断面が尖り気味になって終わる。胴部は卵型に近い。外器面は上部にタタキによる調整が施され、下位にはハケ目で調整される。内器面はわずかにヘラ削り痕が残るが大部分はナデ消されている。粘土紐の痕跡が見える。復元最大胴部径21.0cm、復元口径15.0cm を測る。318の口縁部は頸部から直に開き、口唇部は角張り端部をつまみ上げている。口縁途中がややふくらむ。胴部は最大径が中位にある。外器面にはハケ目が斜め方向に施され、内器面には同じ方向のヘラ削りが施される。頸部に指頭圧痕がある。内外器面に黒斑がある。口径は14.9cm、最大胴部径は21.0cm を測る。

第３はその他のもので、やや胴長の315・316・319がある。315の口縁部は頸部から縦に直気味に伸び、口唇部は尖る。胴部はあまり張り出さず、不整形である。外器面は粗く幅広いハケ目が、内器面は細身のヘラ削りが施される。復元口径14.8cm を測る。外器面に黒斑が有る。316は口縁部が頸部から開き途中からさらに外反し、胴部の最大径は下位である。外器面は粗いハケ目が薄く残る。内器面にはヘラ削りが施される。口径は14.4cm を測る。319は胴部のみで頸部より上部は欠損している。胴部が頸部に向かって締まっていくので壺かとも考えたが、外底面に煤が付着していることから甕として扱う。胴部は中部付近で強く張り出し、底部は平底を呈する。外器面には斜め方向のハケ目調整が、内器面には斜め方向のハケ目調整が上位に残り、中位以下はヘラ削りが施される。復元最大胴部径は24.2cm、底部径は5.9cm を測る。

甕形土器でも326は二重口縁を持つ大型甕である。口縁部は欠損する。胴部は丈の低い楕円体を呈する。底部がやや細くなる。全器高は不明であるが、頸部から27.0cm ほどである。最大胴部径は33.7cm である。外器面は斜め方向のハケ目調整、内器面は薄くハケ目が残り大部分はヘラ削りである。内外器面に節合痕が残り、製作過程を示すものであろう。また、内器面には赤彩が部分的に残る。顔料を入れていた可能性がある。

壺形土器は320～325である。口縁形態と胴部の張り方、全体のプロポーションからいくつかに分類可能である。ただ、完形のものは少ないのでやや厳密でない。

320は、胴部上位から口縁部までの破片で、口縁は頸部から外反しながら口唇部に至る。口唇部は角張る。内外器面はハケ目調整が施される。胴部は卵形であまり張り出さないものである。内器面は横方向のハケ目を主として凹線状の調整痕も残る。また、粘土の接合面が残る。口径が16.4cm を測る。321・323・325の口縁部はほぼ同じ形態に属する同系統のものと判断した。口縁部が欠損したものもあるが、外反しながら口唇部へ伸びていくものである。口唇部は角張る。胴部形は球形に近い。321は口縁部がやや外反し、頸部から胴部が広がっている。外器面にハケ目の上にミガキが施される。内器面にはヘラ削りの他頸部下位に指押さえが見られる。また、接合部が見える。口径は14.3cm を測る。323は胴部のみで倒卵形である。外器面はハケ目調整、内器面はヘラ削りが全面に施され、頸部下位にやはり指押さえが見られる。最大胴部径は29.1cm を測る。325はほぼ完形で器高は33.2cm を測る。外器面に斜め方向の交互のハケ目、内器面には下位の斜め方向のヘラ削りと上位の横方向のヘラ削りが施される。口径は18.5cm、胴部最大径が28.9cm を測る。322は上記のものに似るが口縁部が頸部から直気味に伸び、上位で外反し口唇部に至る。口縁部全体の長さも長く伸びる。口唇部はやや丸まる。外器面は斜め方向のハケ目を主とした調整が施される。内器面は口縁部で横方向のハケ目、頸部下位に指押さえ、その下にハケ目、ヘラ削りなど調整が施される。胴部の最大径は上位にある。口径は17.9cm を測る。

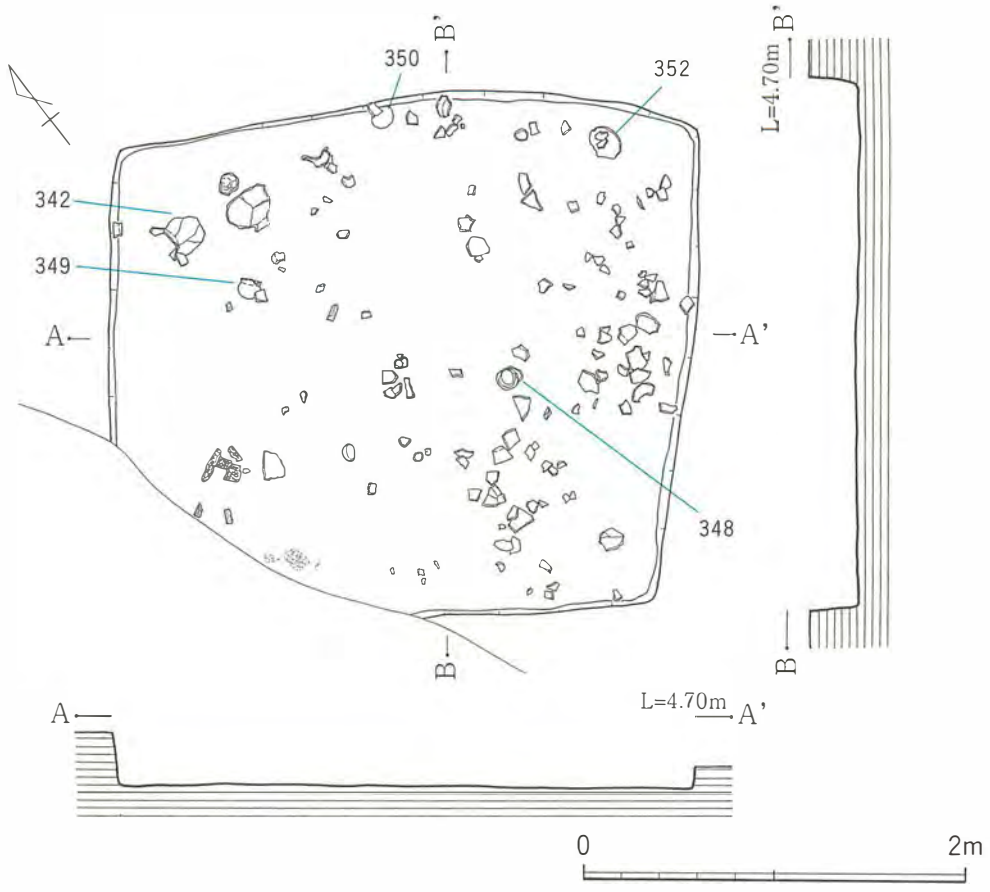
324は二重口縁の壺である。口縁部は頸部からくの字に2cm ほど伸び、屈曲してほぼ直に立ち上がる。外器面は調整が不明であるが、内器面はヘラ削りが施される。胴部の最大径は中位にあり最大胴部径は33.8cmである。口径は15.8cm である。

鉢形土器として、327がある。胴部から口縁へ向けて大きく開く器形のため鉢とした。口縁部は欠損し不明である。器面調整はあまり明確ではないが、外器面にハケ目が少し、内器面にナデとヘラ削りがわずかにみえる。底部はやや平底になり、径が4.1cm を測る。内外器面ともに黒斑がある。

坏形土器は、330・331である。330は体部から口縁部が直になるもので内外器面ともナデ調整によりなる。口径は11.7cm、器高は3.2cm、底径が6.2cm を測る。331は口縁部で外側に外反するものである。外器面にナデ、ハケ目調整が残る。復元口径が10.7cm、器高が3.4cm、復元底径は7.2cm を測る。

328は短い脚の付いた鉢である。鉢部は外側に直に開く。脚はそれを支えるため急激に開く。調整はナデによる。口径が13cm、器高が7.4cm、脚部底径6.2cm を測る。

329・332～340は鉢形土器である。大きく329のように頸部が強く締まり甕に似た形態のものと、その他の頸部から開き口径が最大径になるものに分けられる。332は復元口径が19.8cm と他のものに比べ大きい。外器面にはハケ目、内器面はヘラ削りが施される。外器面には煤が付着している。333・334・338は器高が7.1cm、5.9cm、7.5cm と差があるものの、口径は16.0cm、15.6cm、15.5cm とほぼ同じ径で器形はよく似る。頸基部の屈折は強く、中でも333・334は特に強い。これらは外器面がハケ目調整を施される。頸基部の屈折が大きく口縁が長いものは335・336である。335は胴部が頸基部から大きく広がる。復元口径が15.6cm、器高が8.0cm で復元胴部径が13.1cm を測る。336の胴部は頸基部からほとんどふくらまない。復元口径が13.4cm、胴部径が10.6cm を測る。337・339・340は頸部から口唇部までが短いものである。337は頸部から内湾して立ち上がる。外器面にヘラ削りが残る。口径が15.1cm、器高が7.4cm を測る。339は頸部がほとんど屈折しない。復元口径が14.7cm、器高が6.4cm を測る。340は頸部から口唇部まではさらに短い。屈折ははっきりしている。外器面にはヘラ削り、内器面もヘラ削りが施される。口径が13.4cm、器高が6.4cm を測る。



第60図　5SI033実測図

○5SI033【第60図】

この遺構はa－34グリッドに位置している。住居跡の規模は、長軸6.17m、短軸5.45m、床面積約33.6㎡で、平面形は東西に長い長方形を呈している。長軸方位はN－52°－Eである。壁高は9～26cmを残している。床面には、柱穴・炉等の施設は認められなかった。

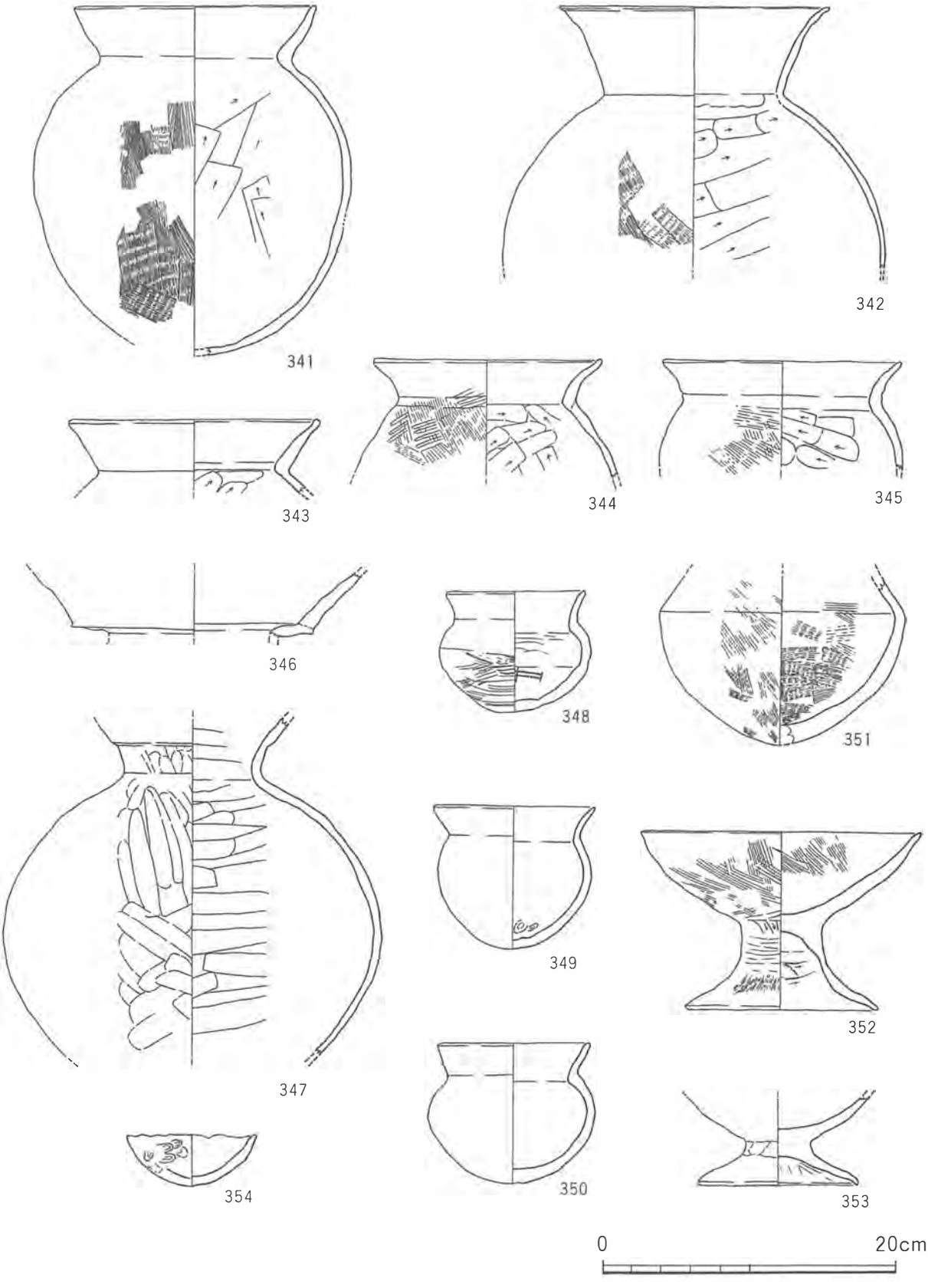
遺構内の覆土は一層で、黄褐色（10YR5/6）を呈し、砂をほとんど含まない粘質土であった。

［出土遺物］【第61図】

小片が多く図化できるものが少なかった。図化できたのは甕4点、壺が4点、小型壺3点、鉢2点、坏形土製模造品が1点である。

341・343～345は甕である。341は口縁部がやや内湾しながら口唇部にいたる。口唇部は尖り気味になる。胴部は倒卵形である。外器面は主に縦方向のハケ目が部分的に見られる。内器面は縦方向のヘラ削りを中心とする。口径は16.2cm、器高は24.2cmほど、最大胴部径は21.5cmを測る。343は口縁部を主とする破片である。口唇部に弱い凹線部が周り端部は丸まる。内器面のヘラ削りがわずかに見える。復元口径が16.4cmを測る。344は口縁部が広く外反しながら開き、口唇部付近でやや内湾気味である。口唇部自体は丸まる。外器面には右上がりのタタキを施した後に縦方向のハケ目が施されている。内器面には縦方向から横方向のヘラ削りが施されている。外器面には煤が付着する。復元口径が15.6cmを測る。345は頸部に稜を持ち、口縁部は外反しながら端部に至る。口唇部は丸まる。外器面は横方向から縦方向のハケ目が施される。内器面は左上がりのヘラ削りが施される。復元口径が16.0cmを測る。

342・346・347・351は壺である。342は口唇部が細く丸まり、口縁部は外反し、それ自体は長い。胴部は胴部の中位を最大径とする。外器面はハケ目調整のちナデによる。器壁は内器面に施された横方向のヘラ削



第61図　5SI033出土土器実測図

りにより薄くなる。復元口径は17.6cm、復元最大胴部径は25.8cm を測る。また、346・347のように二重口縁の壺形土器である。346は破片のため全体像は不明であるが、残存部から判断するとかなり大型のものと思われる。頸部は数 cm 直に伸び、ほぼ真横に広がりさらに屈曲するものである。外器面は中位から下は不定方向のヘラナデ、上はハケ目の後に縦方向のヘラ削りが施される。内器面は横方向のナデとヘラ削りが施される。復元最大胴部は25.6cm を測る。351は胴部中位から下位近くまでの破片である。中位で明瞭な屈曲を持つ。外器面は斜め方向のハケ目がわずかに残る。内器面は丁寧なハケ目調整が施される。胴部の復元最大径は16.4cm を測る。

348～350は小型壺である。348は口縁部が直に立ち、壺に近い。外器面は中位より下位に横方向にハケ目が施される。内器面はヘラ状工具によるケズリや圧痕が施される。復元口径が9.4cm、器高が8.2cm、最大胴部径が10.4cm を測る。349は頸部から口縁端部まで緩やかに開く。胴部の最大径は頸部より狭い。器高も高い。外器面はナデ、内器面もナデ調整が施される。内器面底部には細かい指頭圧痕が残る。口径は10.9cm、器高が9.7cm を測る。350は349よりも頸部の屈折が強く、器高が低い。器壁はやや厚い。口径が10.1cm、器高が9.5cm、最大胴部径が11.5cm を測る。

352と353は脚付鉢である。352は坏部が浅く、緩やかに伸びて口唇部に至る。外器面・内器面ともにハケ目調整が施される。脚部はそれよりやや長く底位付近で急激に開く。外器面はハケ目調整、内器面は横方向のヘラ削りが施される。外器面口縁部に煤が付着する。内底面には使用により摩耗している。口径は18.6cm、器高は12.0cm を測る。353は脚部が接合部から急激に開く。復元底径は10.6cm を測る。

354は坏形の土製模造品である。手捏による成形で指頭圧痕も残る。口縁部径が8.5cm、器高が3.4cm を測る。

○5SI035【第62図】

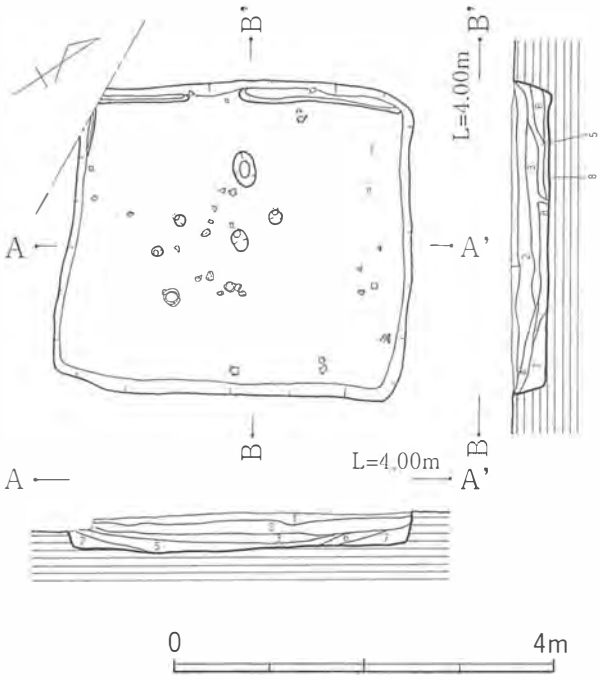
この遺構は Z－34グリッドに位置し、調査区際に出土している。住居跡の規模は、長軸3.58m、短軸3.22m、床面積約11.5㎡で、平面形は北東にわずかに長い長方形を呈している。長軸方位は N－33°－W である。壁高は18～37cm を残している。床面には、2個の柱穴を検出したが、配列は不規則であった。また、西側に周溝状の溝が認められた。炉は、中央部からやや西部よりに設けられ、平面形は長楕円形であった。

当初遺構が見分けにくかったが、壁際を精査して輪郭を出し掘り下げた。埋土は流れ込んでいった状況で深さがあるため数層が確認できた。埋土は大きくは５層に分割できた。以下のとおりである。

１層は暗褐色土（10YR3/3）で粒子が細かい。2層は暗褐色土（10YR3/4）で粒子が細かく、マンガン集積があり、粘土粒もわずかに含む。3層は黒褐色土（10YR2/3）で、黄斑、黒斑が入り、粒子は細かい。4層は黒褐色土（10YR2/3）で、粘性が強く、よくしまる。5層は黒色土（10YR2/1）で粒子が細かく、よく締まり、遺物をわずかに含む。6層は褐色土（10YR3/4）で粘性が強くよくしまる。遺物はあまり含まない。7層は暗褐色土（10YR3/3）を呈する壁際付近の埋土で、よくしまり、地山との差を見わけにくい。わずかに灰色粘性土を含み、やや暗いことで見わけた。8層は黒褐色土（10YR2/2）で、焼土粒子や炭化物粒子を含む部分的な土で、焼土と関係がある。

［出土遺物］【第63図】

出土した遺物は小片が多く、図化できたのは、甕が３点、鉢が１点、鉢形の土製模造品１点、摩石が１点である。甕では、355・356・358があり、それぞれ特徴がことなる。355は立ち気味の直線口縁で胴部の張りが上部のほうにある。外器面は縦方向及び斜め方向のハケ目、内器面は横方向のヘラ削りによる調整が施される。口縁部径が14.3cm を測る。356は口縁部がやや外反しながら直気味に伸びる。口唇部は尖り気味である。胴部はそれほど張らず最大径は中位より下にある。外器面は縦方向のハケ目後ナデている。内器面は



第62図　5SI035実測図

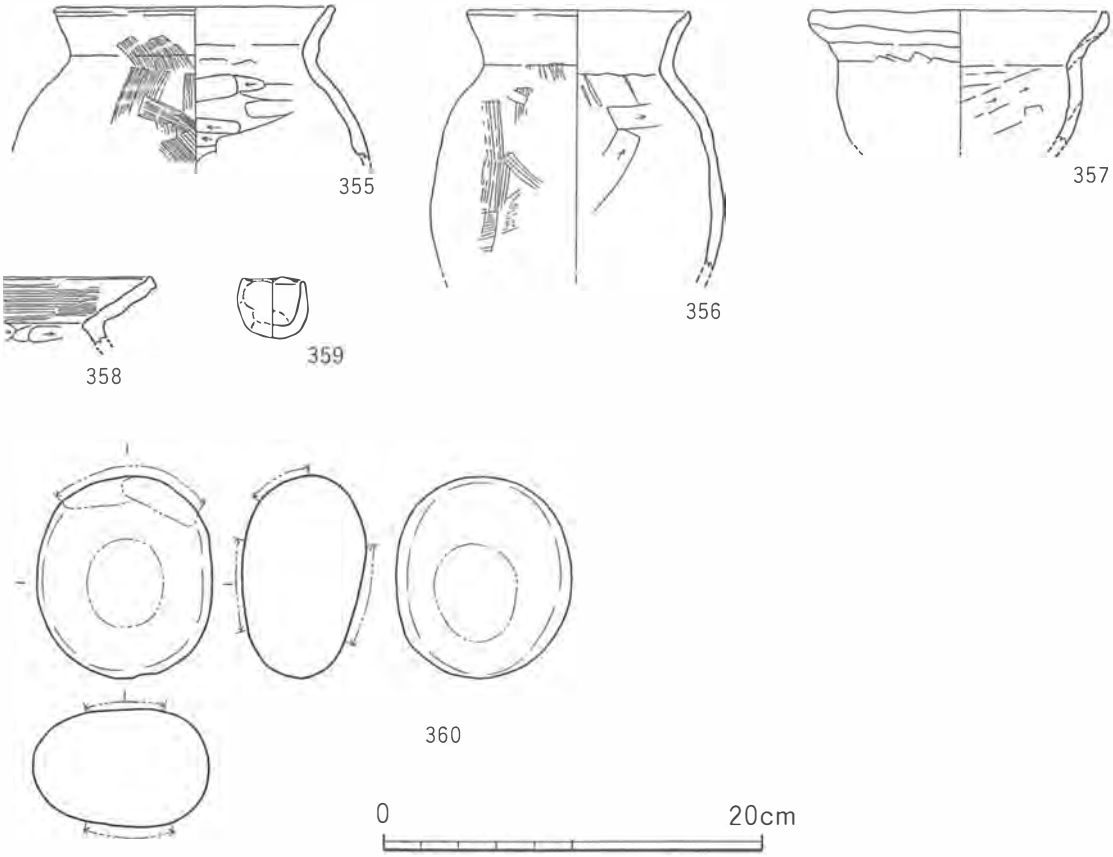
ヘラ状工具痕が残り、斜め方向のヘラ削りが施される。復元口径は11.6cmを測る。口縁部は直線的でやや広がる傾向がある。358は甕の口縁部内側にカキメ状の横ナデが施されている。口縁部外器面には赤彩が見られる。復元口径が15.4cmを測る。

359は鉢形の土製模造品で、手捏によるもので指ナデ調整され指頭圧痕も残る。口径が3.2cm、器高が3.1cmを測る。

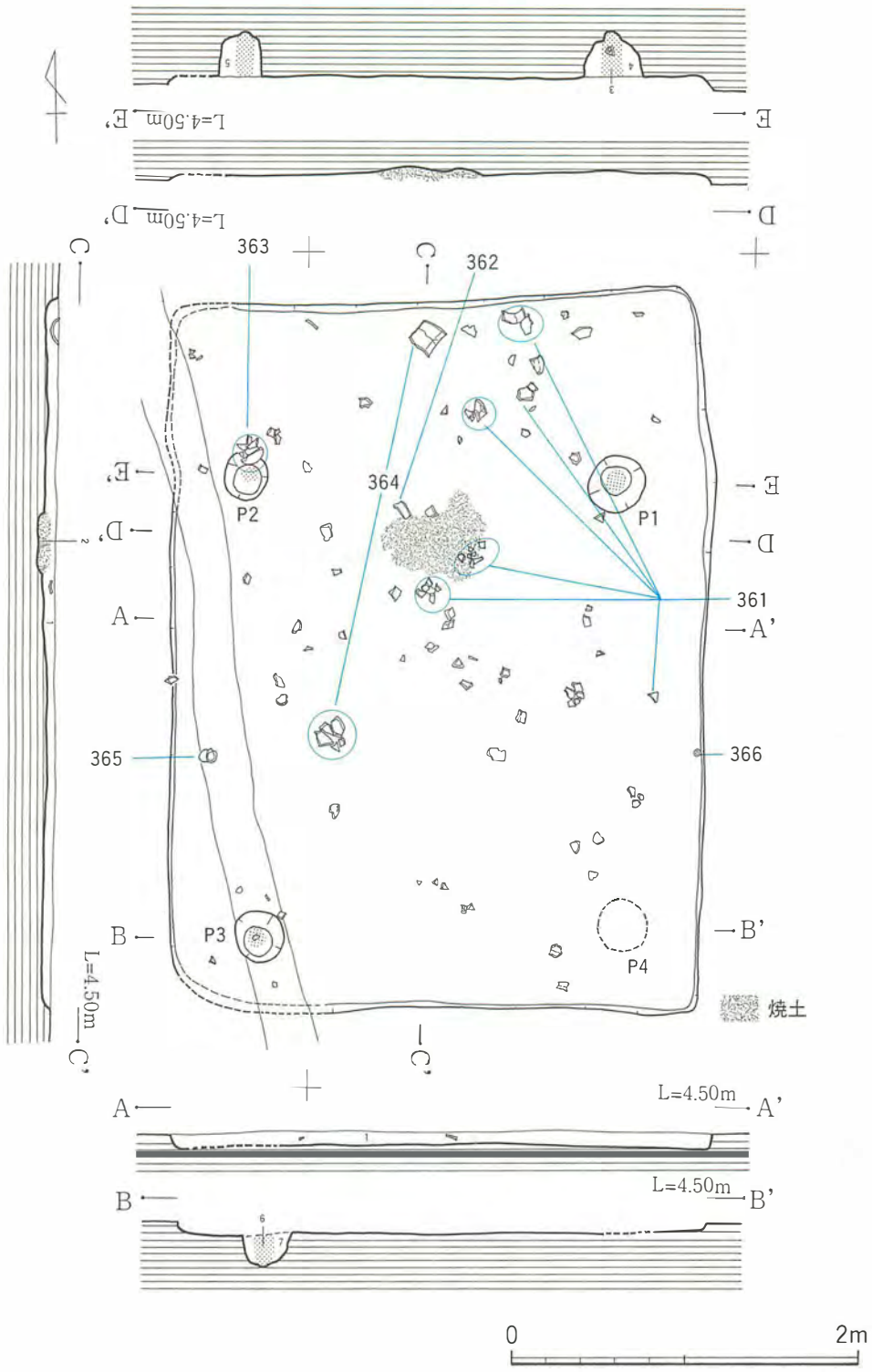
360は典型的な磨石である。よく使いこまれて水平面が３面形成され、表面もなめらかである。長さが10.45cm、幅9.2cm、厚みが6.4cmを測る。石材は石英安山岩である。

○5SI039【第64図】

Z－32グリッド～Z－33グリッドにかけて検出し、溝状遺構に切られている。住居跡の規模は長軸2.04m、短軸1.55m、床面積3.16㎡で、東北方向に長い整美な長方形を呈している。長軸方位はN－0°－Sである。壁高は４～9cmを残している。床面には３個の柱穴を検出したが、推定でP４があると思われ、4本柱の竪穴住居が想定される。床面中央部北側に焼土の集中個所が１ヶ所検出された。なお、溝状遺構の下を、幅22～26cm、深さ10cmの小溝が通っており、住居跡とほぼ同時期のものと思われる。



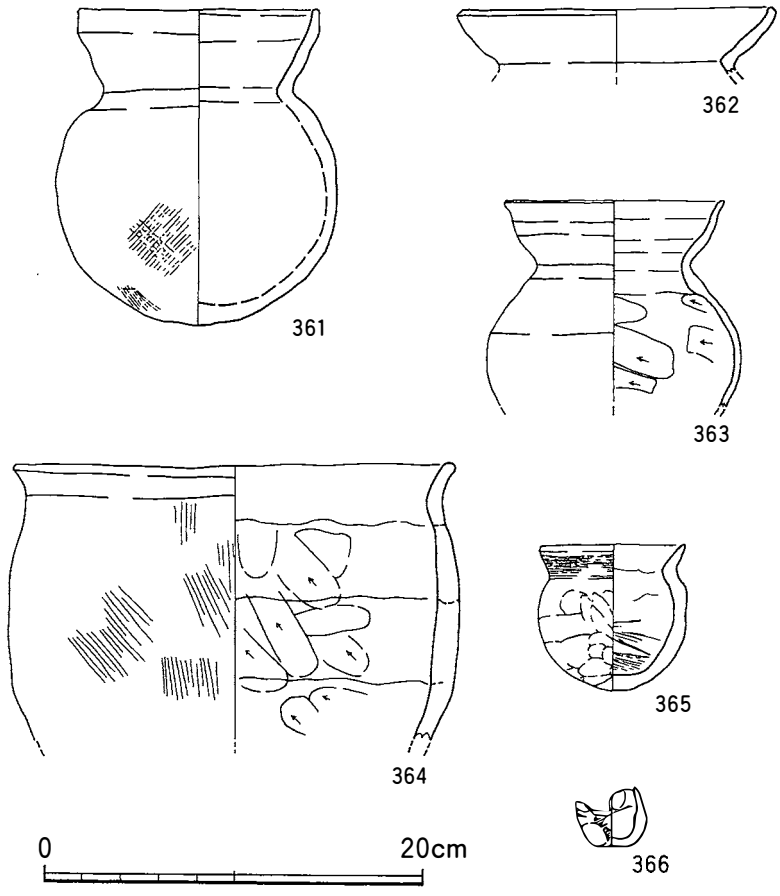
第63図　5SI035出土遺物実測図



第64図　5SI039実測図

埋土は、A－B 間では、1層は黒褐色（10YR3/2）粘土を呈し、固くしまる粘土層で、所々に 2 ～3mm 程度のマンガン粒子、3～5mm 程度の酸化鉄の固まりを含む。2層は赤褐色（5YR4/6）粘土層で、いわゆる焼土層である。締まりはなく、さらさらしている。

D－C 間の土層断面によると、1層が黒褐色粘土（10YR3/2）で、固くしまる粘土層。所々に 2 ～3mm 程度のマンガン粒子、3～5mm 程度の酸化鉄の固まりを含む。2層は、黒褐色粘土（10YR3/2）で、固くしまっており、粘性があまりなく、つまむと簡単に崩れる。3層は、黒褐色粘土（10YR3/1）で、この住居跡の



第65図　5SI039出土土器実測図

埋土よりやや黒っぽい粘土層である。固くしまっており、粘性があまりなく、つまむと簡単に崩れる。2～3mm 程度のマンガン粒子、3～5mm 程度の酸化鉄の固まりを含む。

［出土遺物］【第65図】

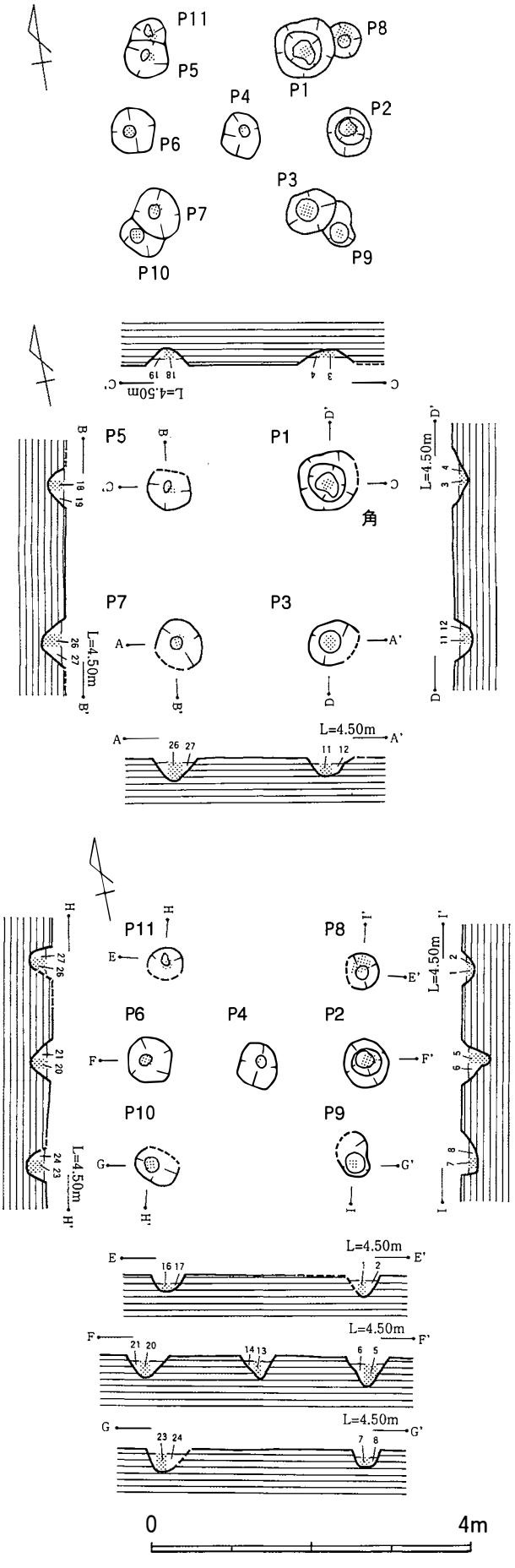
図化したのは、甕が２点、壺２点、小型壺１点、鉢形土製模造品１点である。

362・364は甕である。362は古墳時代前期のもので口縁部の破片である。頸部から口唇部へかけて内湾しながら伸びる。口唇部でやや上につまんだようになっている。復元口径は16.2cm を測る。364は頸部から口唇部までの口縁がごく短く、胴部の張りが弱く直線的であり、この遺構自体の残存率が低く他の時期のものも混じっており、これも古代のものが紛れ込んだ可能性がある。外器面は斜め方向のハケ目がナデ消されている。内器面は斜め上方向へのヘラ削りが施される。復元口径は23.0cm を測る。

361と363は壺で胴部の張りと口縁端部の開きが同じくらいでやや頭が重いような感じを受ける。口縁部は二重口縁のような屈曲を持つ。361は完形で、外器面に斜め方向のハケ目が部分的に残り大部分はナデである。内器面はヘラ削りである。口縁径が12.6cm、器高が16.5cm、最大胴部径は14.6cm を測る。363は口縁部の屈折が緩やかである。外器面の調整は不明瞭で、内器面は斜め方向のヘラ削りを施す。復元口径は11.2cm を測る。

365は小型壺に分類しておくが、形態的には甕の方により近いので小型甕としてもよいのかもしれない。口縁部は短く、尖って終わる。器面調整は外器面がナデとケズリを、内器面がヘラ削りが施される。器形自体は手捏である。口径が7.6cm、器高が7.6cm、最大胴部径が7.7cm を測る。

366は破損して形が崩れているが、鉢形の土製模造品である。指ナデによる手捏である。器高は3.2cm を測る。



第66図　4SB008実測図

（3）掘立柱建物跡

○4SB008【第66図】

遺構は調査Ⅶ区のW－27グリッドで検出した。柱跡の重なりから2棟の切りあいと考えた。本来遺構番号を分けて付けるべきであったが、完全に2棟が別のものではなく、同一地点に建て替えたものと考え、建物の性格も同一のものと考え一つの番号とした。ただ、図ではAとBの建物を想定し、柱の切り合いからBをAが切っているものとした。伴出する遺物が無いので時期は明確でないが、出土状況や他の古代の掘立柱建物跡とは時期差があり、ここで扱うこととした。したがって必ずしも古墳時代前期の遺構とは限らないことを付記しておく。

それぞれのピットの埋土は基本的に掘り方の埋土と柱痕が腐食した後に入り込んだ土である。ただ切り合いもあるようにそれぞれのピットの埋土には若干の違いがある。

確認した面がかなり削平された状況であるため、埋土は少ない。

P1の掘り方埋土は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、多量の酸化鉄を含み、やや締まる。柱痕の埋土は黒褐色（2.5Y3/1）を呈し、締まりは弱く、粘土質のブロック・微量の炭化物を含む。

P2の掘り方埋土は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、締まり強い粘質土で炭化物・酸化鉄を含む。柱痕の埋土は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する粘性土で、締まりは強く、ブロック単位でまとまった酸化鉄を含む。

P3の掘り方埋土は、黒褐色（10YR3/2）を呈し、締まりが有り、酸化鉄を含む。柱根の埋土は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、締まりがある。酸化鉄・炭化物を含む。

P4の掘り方埋土は灰黄褐色（10YR4/2）～黒褐色（10YR4/2）を呈し、締まりはゆるい。粘土ブロック、酸化鉄を含む。やや粘性土部分もある。柱痕埋土は褐灰色（10YR4/1）を呈する粘質土で、締まりは強くはない。少量の酸化鉄・炭化物を含む。

P5の掘り方埋土はにぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する粘質土で、酸化鉄や炭化物の粒子を含む。黒色土も混じる。柱痕の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)

を呈する粘質土で、締まりがあり、酸化鉄を含み、黒色粘土も混じる。

Ｐ６の掘り方埋土は黒褐色（5Y3/1）～オリーブ黒色（5Y3/1）を呈する粘質土、締まりがあり、酸化鉄・炭化物を含む。多少砂混じりの部分もある。柱痕の埋土はオリーブ黒（5Y3/1）を呈する粘質土で、締まりは弱く、酸化鉄を含む。

Ｐ７の掘り方埋土は黒色（5Y2/1）を呈する粘質土で、黄灰色土が混じる。酸化鉄も含み、締まりはあるが弱い部分もある。柱痕の埋土は黒褐色（2.5Y3/1）を呈する粘質土で、黒色土が混じる。炭化物・酸化鉄も含む。

Ｐ８の掘り方埋土は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、締まりがある。多量の酸化鉄を含み、粘質土のブロックと微量の炭化物を含む。柱痕の埋土は黒褐色（2.5Y3/1）を呈し、締まりは弱い。炭化物・酸化鉄を含む。

Ｐ９の掘り方埋土は褐灰色（10YR4/1）～黒褐色（10YR3/2）を呈する粘土で締まり強い。炭化物・酸化鉄を含む。柱痕の埋土は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する粘質土で、強く締まる。炭化物・酸化鉄を含む。

P10の掘り方埋土は黄灰色（2.5Y4/1）～黒色（5Y2/1）を呈する粘質土で黒褐色土や黄灰色土が混じる。締まりがあり、酸化鉄・炭化物粒子を含む。柱痕の埋土は黒褐色（2.5Y3/1）を呈する粘質土で、多少砂混じりで酸化鉄を含み、黒色土も混じる。よく締まる。

P11の掘り方埋土は黒褐色（2.5Y3/1）を呈する粘質土で、締まりは強く、酸化鉄のブロックを含む。柱痕の埋土は黒褐色（2.5Y3/1）を呈する粘質土で、締まりはかなり強い。酸化鉄を含み、黒色土も混じる。

（４）井戸跡と出土遺物

○4SE005【第67図】

Ｘ－28グリッドに位置する最大の井戸跡である。この遺構から南西側に4SD014が付随したように伸びている。掘方の平面形状はややいびつな部分はあるが、ほぼ円形で南北2.7m、東西3.0m を測る。遺構確認面から最下面までの深さは2.5m を測る。断面形態は、最下面が湧水により崩れたため明確ではないが、ほぼＵ字形を呈している。井桁、井筒、水ため等の施設はなく、その痕跡も確認できなかったので素掘りであると判断した。底面の標高は1.8m である。

井戸の埋土は、1層から８層に分層できた。大きくは上層・中層・下層である。上層である１・２層の土器だまり層には焼土が堆積していた。上層が１層・２層、上層下部が３層・４層である。中層が５層・６層である。下層は７層・８層である。

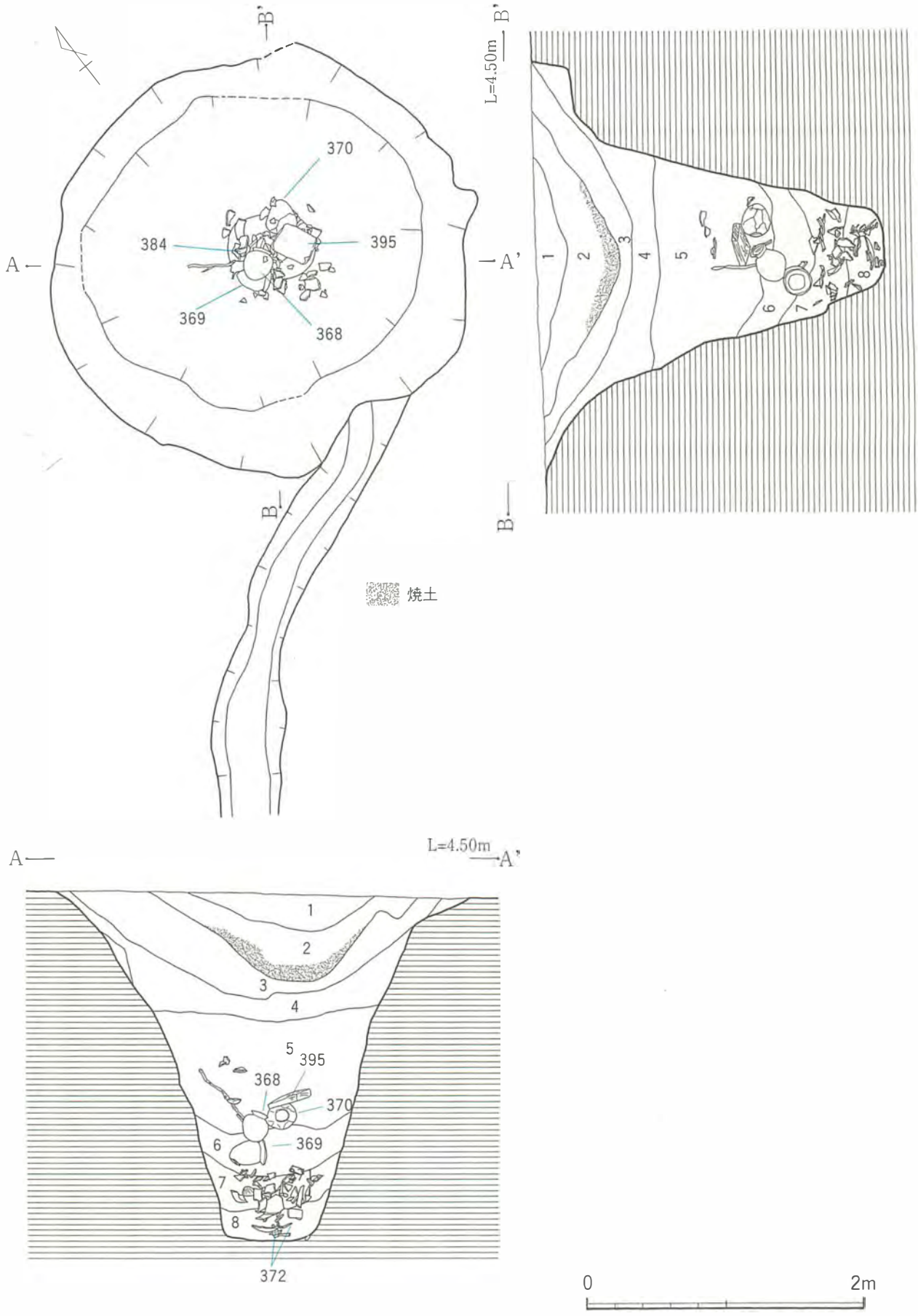
１層はＶａ層相当層で、黒色土に砂粒混じる。2層はＶｂ層に相当層で、黒色土でその下層には焼土が厚く堆積する。3層はＶｃ層相当層で遺物が出土する。4層は灰色粘土層で、遺物を含み、下層にはアシなどの植物遺体が多く含まれる。6層は５層に似ており、5層より青色粘土のブロックを多く含み、酸化した粘土や黄土色の粘土ブロックを含む。その他の粘性の強い灰色粘土層である。7層は下層になるが、かなり細かい土器片がはいり、実測に時間を要した。この層には腐食の進んだ貝殻が４点ほど出土した。カキの小さな殻様のもの、まき貝、赤貝様のものなどである。取り上げたがほとんどが破砕して原形をとどめなかった。

８層上面には藁のような植物繊維を編んだ縄状のものが出土し、その下を掘り下げると、甕が出土しその頸部には縄状の繊維が巻き付けられている状態で出土した【図版４】。甕は破損していたが、最下層近くに出土したことと併せて考えると井戸から水をくみ上げる際に、水くみ桶のように利用したものであろう。

［出土遺物］【第68図～第71図】

井戸の中層からは鍬の泥除けの未製品、木片や土師器、最下層からはカズラ製のタワシ・縄付き土器・貝殻・木片・土器などが出土している。

367から376までは甕である。外器面には煤が強く付着しているものが多い。367は、口縁部がやや内湾し



第67図　4SE005実測図

口唇部は角張る。内面にはハケ目がある。胴部は倒卵形である。外器面は上位が横方向のハケ目、中位以下は縦方向のハケ目の調整である。内器面はヘラ削りが施される。底部は狭い平面が作られる。口径が16cm、器高が27.6cm、最大胴部径が23.7cm、底部径が4.3cm を測る。368は367と形態が類似しているが、大きさは一回り小さくなる。調整痕などもほぼ同様である。底部も狭い平面が作る。底部内面には指頭圧痕が残る。口径は15.5cm、器高は22.1cm、最大胴部径が19.8cm、底部径が3.4cm を測る。369は、口縁部の開きは367に類似するが、口唇部は尖り気味に丸まる。胴部は倒卵形である。口縁部内部は横方向のハケ目が施される。外器面の上部はナデ消されているが、縦方向のハケ目が施される。内器面の下位は縦方向のヘラ削り、上位は横方向のヘラ削りである。器壁はやや厚い。370は胴部のみの破片である。器形は倒卵形である。外器面は上位が横方向のハケ目、中位以下が縦方向のハケ目が施される。内器面は上位から中位は横方向のヘラ削り、中位以下は斜め方向のヘラ削りが施され、底部に指頭圧痕が残る。最大胴部径が22.5cm を測る。371は胴部のみである。口縁部を意図的に打ち欠いたようである。器形はほぼ球形であるが、やや底部が尖り気味である。外器面は細かいハケ目と粗いハケ目が施されているが、その下に右上がりのタタキが見える。内器面には上位にハケ目の上に斜め方向のヘラ削りが施されている。372は二重口縁の甕である。4SK009から出土した土器片と接合する。器高は41.1cm、最大胴部径は37cm、口径は32.5cm、底径は6.3cm を測る。外器面は縦方向のハケ目が施され、外底面にはナデ調整される。底面は狭い平面が作られる。内器面にはハケの痕跡があるが縦方向のヘラ削りが施される。内底面にはナデが施される。外器面には煤が付着している。373は367・368とよく似た口縁部を持つもので、外器面はハケ目、内器面にはヘラ削りが施される。4層から出土している。復元口径は15.0cm を測る。374は７層からの出土で、口縁部はやや開き気味で口唇部が丸まるものである。復元口径は15.8cm、最大胴部径は21.4cm を測る。外器面にはハケ目が残り、内器面にはヘラ削りが見られる。外器面には煤が付着している。375は胴部から底部までの破片である。４層・７層・９層のそれぞれから出土し接合できた。外器面には縦方向のハケ目がよく残り、煤が付着している。内器面にはヘラ削りと底部付近には指頭圧痕が残る。376は374と口縁部は似るが、やや長く、復元口径は19.0cm を測り広く、最大胴部径は21.0cm を測りやや細い。

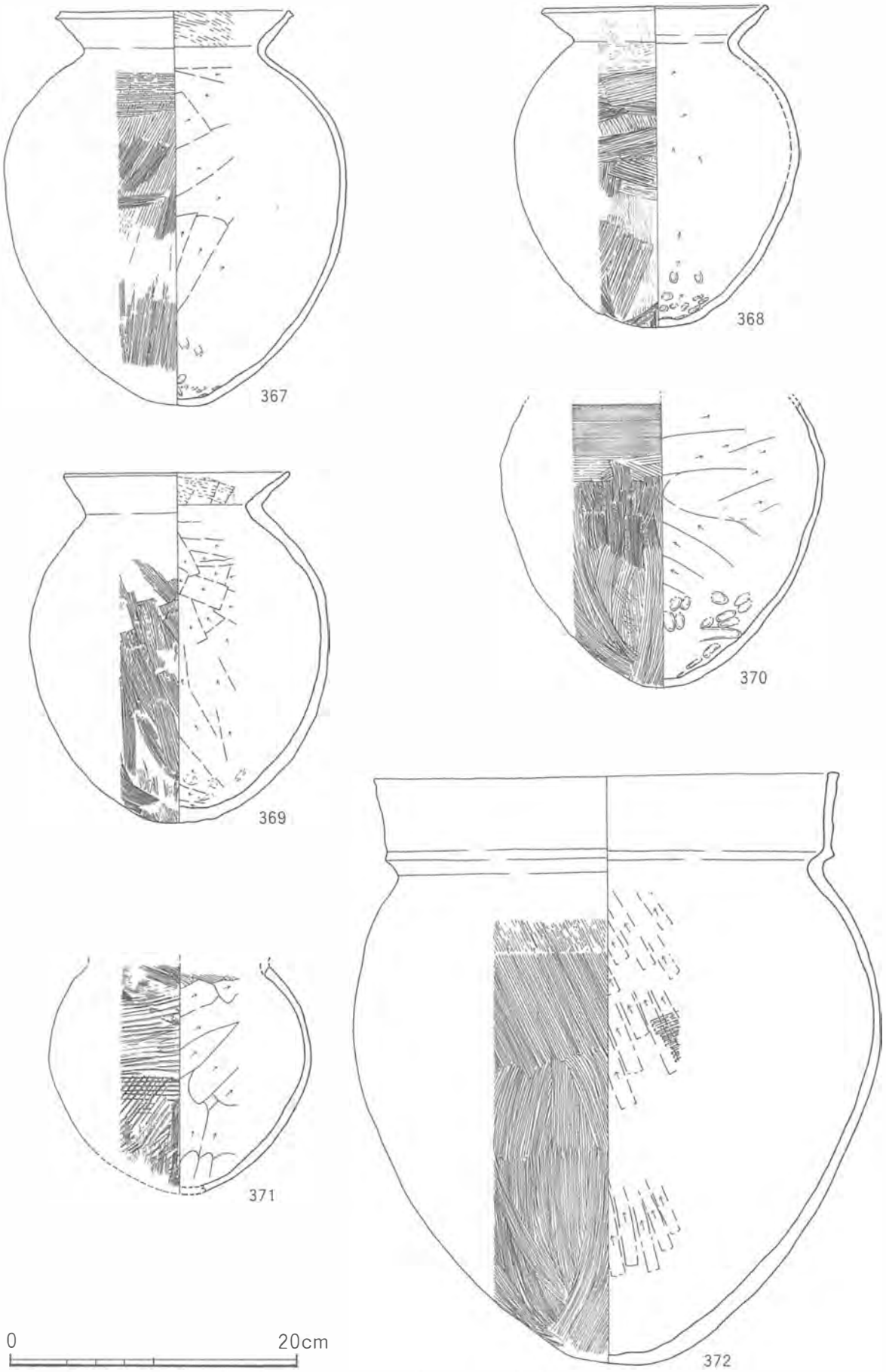
377・378・379は壺形土器である。377・378は口縁部がラッパ状の頸部から直に伸びる直口壺である。377が９層、378が10層から出土している。377の復元口径が14.8cm、378の復元口径が15.8cm をそれぞれ測る。379も直口壺の可能性がある。4層からの出土品である。内器面にはハケ目が残る。外器面には黒斑がある。

380・381・383・382・384は鉢である。380・381は同じ形態の鉢で、内器面に明瞭な稜を持つものである。口縁部は直に伸びる。復元口縁はそれぞれ12.3cm、12.2cm を測る。器高は6.1cm と5.6cm を測る。内器面は板状工具によるナデ調整が施される。380では外器面にハケ目が残る。383は上層の出土で、口縁部が体部より長く直に伸びる。最大胴径より口径が広い。口縁内器面には横方向のハケ目調整が施される。内器面はヘラ削りされ、外器面も体部下部はヘラ削り後ナデが施される。復元口径が14.1cm、器高が8.5cm を測る。382は７層出土の脚付鉢の脚部付近の破片である。内外器面にはハケ目が残る。

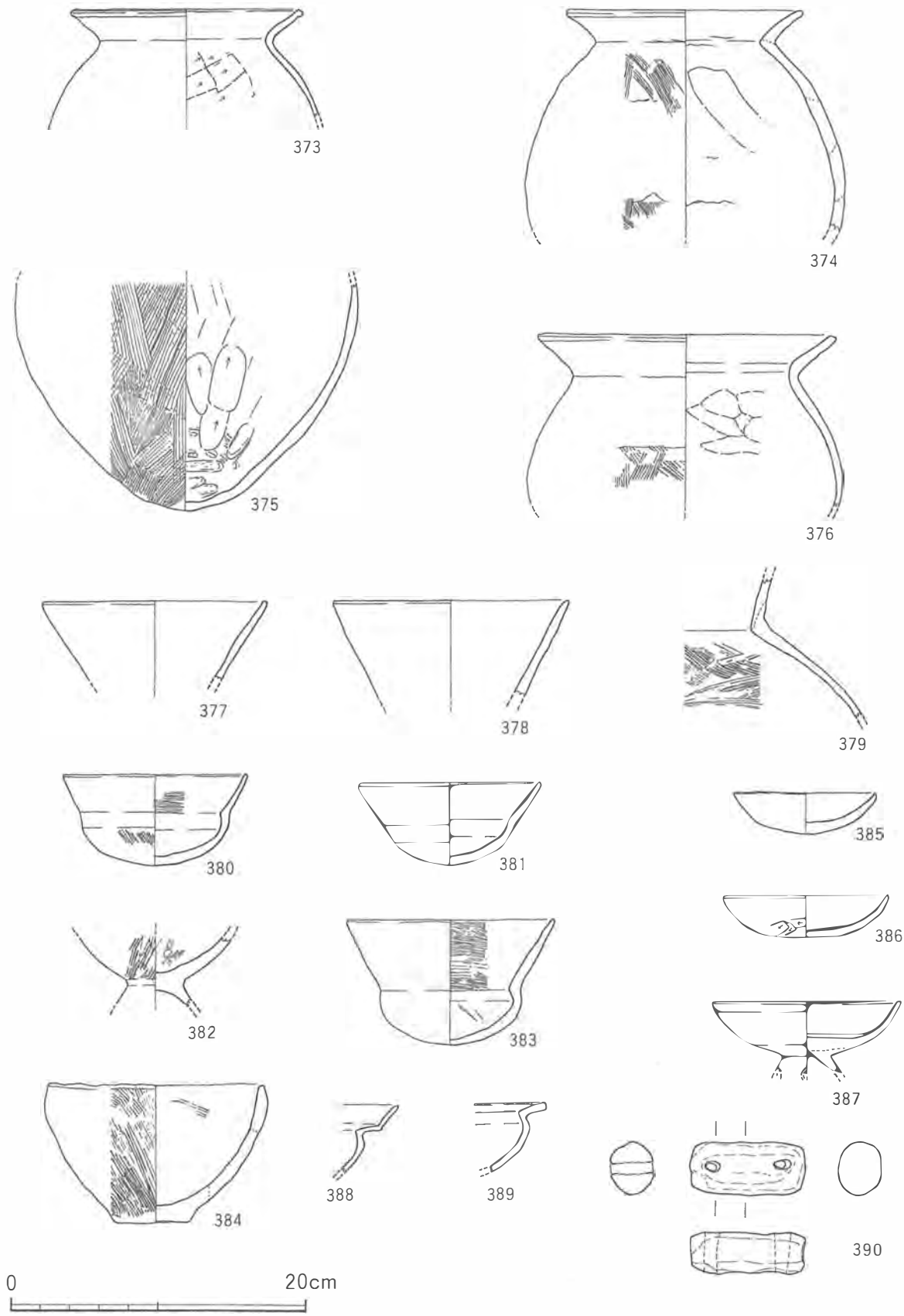
384は中型の鉢で、体部が内湾し、口縁部に至る。底部は平底を呈する。７層からの出土である。復元口径は14.4cm、器高が9.3cm、底径が5.0cm を測る。外器面にはハケ目が残る。内器面にも一部ハケ目が残る。他にはナデ調整が施される。外底面に黒斑がある。

385・386は坏である。385は上層の出土で口径が9.4cm、器高が2.9cm を測る。器表面はナデ調整が施される。386も上層の出土で、復元口径は11.0cm を測る。外底面はヘラ削り後ナデ調整される。他はナデ調整である。

387は高坏である。上層の出土で、復元口径12.4cm を測る。内外器面ともナデ調整が施される。脚部には円形の透かしを持つ。



第68図　4SE005出土土器実測図



第69図　4SE005出土土器実測図

388・389は小型鉢で、いずれも小破片である。388は上層出土で二重口縁のものである。内外器面はナデ調整である。389は３層出土で、内外器面はナデ調整が施される。口縁部は狭い。

390は土錘である。断面は楕円形を呈し、平面形は横長のものである。両端には各一箇所穿孔されている。長さが4cm、幅が2.8cm、厚みが2cm を測る。

391は凹石で、表面と裏面に窪んだ箇所がある。両面を利用したのであろう。ただ、この石器が古墳時代に利用されたかどうかは不明である。

木製品としては、395の鍬の泥除けの未製品がある。大きさは、長さ29.0cm、幅22.5cm、厚さ5.0cm を測る。一木からミカン割りして材を取り出し、長さ29.0cm に切り取り、両端を揃えている。泥除けにまでは加工してはいない。

392は植物を縄状にしたもので、この遺構の底近くで出土した甕形土器369の頸部に巻かれていたものである。他の井戸からも同様のものが出土している。他の遺跡での出土例から考えて、この甕形土器を釣瓶として使用する際に、土器の頸部にこの縄状の紐を巻き付け、さらに釣り上げるものとして利用したのであろう。

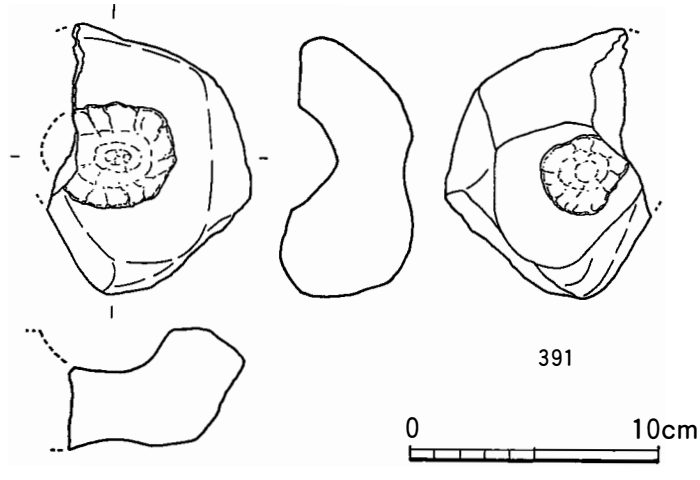
393・394は細かい茎状の植物を折り曲げて丸めたものである。植物は特定できなかった。ものを洗う際にたわしのように利用した可能性が高い。ただ、それを井戸内に捨てるのかという疑問もある。

396は杭状の木材である。下端部分に斜め方向のカット痕があった。部分的に樹皮が残る。

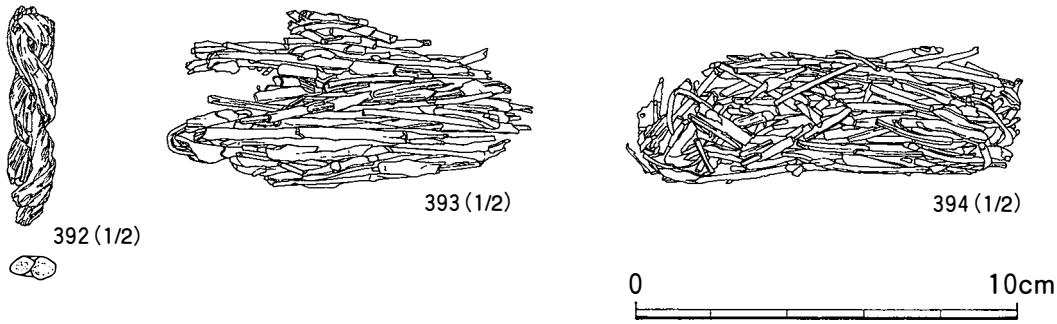
○4SE042【第72図左】

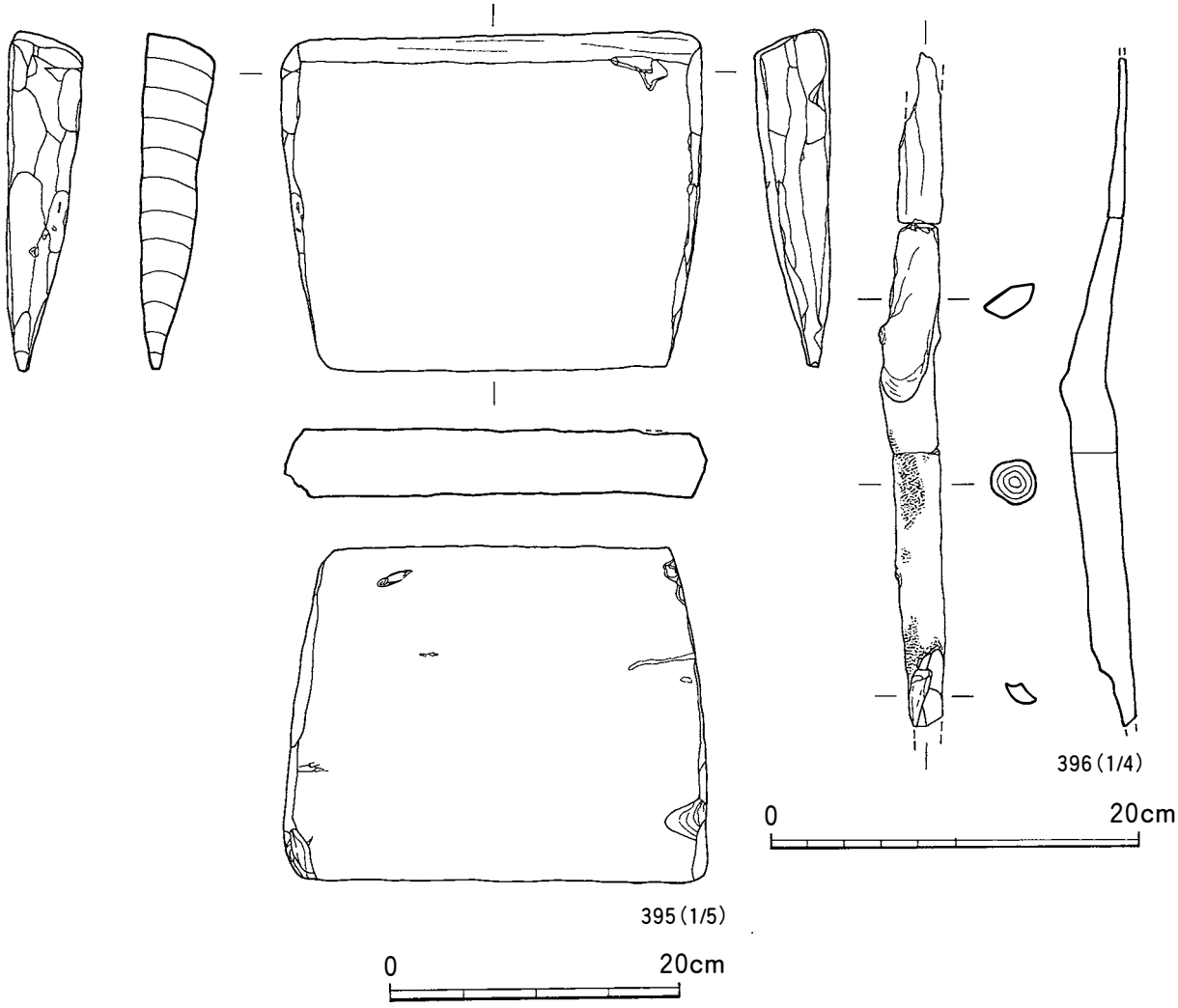
a－27グリッドに位置する素掘りの井戸跡である。遺構を確認したのが遺構の北側が調査区外の為全容は不明であるが、掘形の平面形状は不整円形で東西1.6m、遺構確認面からの深さは1.6m を測る。断面形態は、緩やかなほぼＶ字状を成しており、最下面は尖り先細り形を呈している。底面の標高は2.45m である。

埋土を大きく４層に分層できた。1層は、緑黒色（10GY2/1）を呈し、粘質土で、締まりがなく、細かい木くずを含んでいる。2層は、緑黒色（7.5GY）を呈し、粘性が強く、やわらかい。部分的に（上層と下層）２～3m の炭化物っぽい黒色の粒子を含む。又、全体的に酸化鉄のたて帯やかたまりを含む。3層は、緑黒色（7.5GY）を呈し、粘質土だが２層よりも粒子が多少粗く、より締まり、木くずを含む。4層は、暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）を呈する粘質土層であるが、3層より粒子が粗く、あまり締まっていない。酸化鉄の集積部分がある。

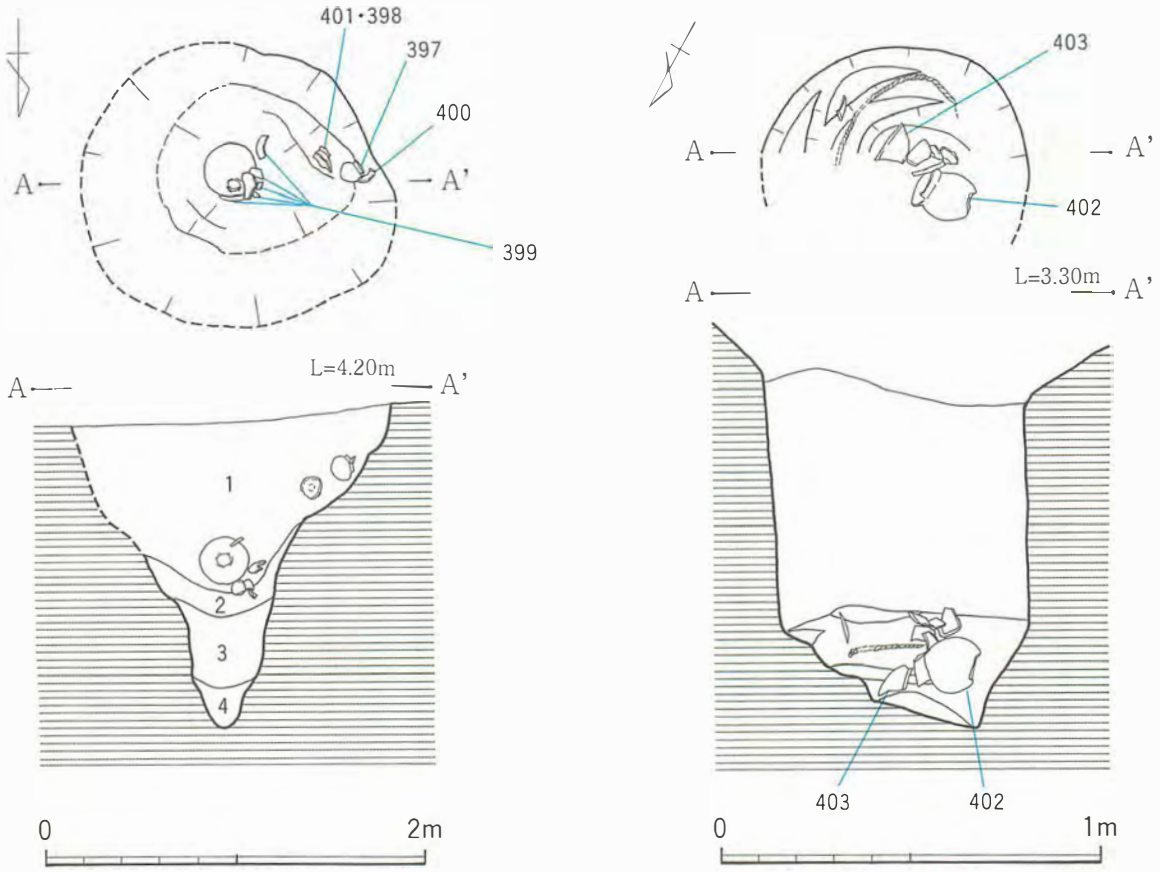


第70図　4SE005出土石器実測図





第71図　4SE005出土木製品等実測図



第72図　4SE042・4SE055実測図

［出土遺物］【第73図】

遺物は井戸の上位と中位で出土している。この間には炭化物の間層がある。

図化したのは、壺が３点、脚付鉢が１点、器台が１点である。

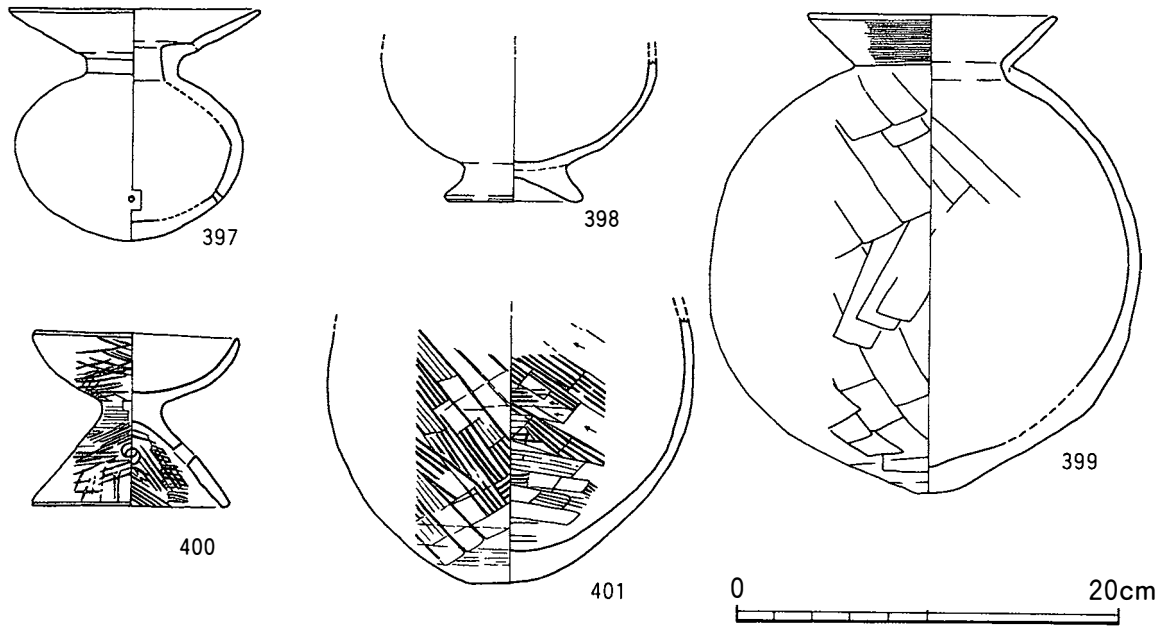
397は完形で落ち込み際に口縁部付近が脱落して出土した。二重口縁の丸底壺で口縁部は頸部から大きく開き、口縁端部は尖り気味である。胴部は横広の球体である。底部に5mmほどの穴があいており、祭祀的な遺物である。口径は13.0cm、器高は12.1cm、最大胴部径が11.9cmを測る。399は壺で、中位で出土し、遺物の出土でいえば最下層にあたる。ただ、外器面に煤が付着しているので甕として利用していた可能性がある。口縁部は短く直に伸びて口唇部は丸まる。胴部はほぼ球形で、底部は小さな平坦部を持つ。外器面は丁寧なヘラナデで調整される。内器面はヘラ削りである。口径は13.1cm、器高は25.1cm、最大胴部径は22.5cm、底径2.0cmを測る。

398は鉢部から底部までで、脚付鉢である。口縁端部が不明である。内器面・外器面はハケ目調整がなされる。底径は6.8cmである。脚部裏側に還元色を呈する。401は甕であると考えられ、内外器面ともに幅広のハケ目調整が残る。内器面には一部にヘラ削りが見られる。器壁は厚めで特に平坦になる部分で分厚くなる。最大胴部径は19.2cmを測る。

400は器台で坏部と脚部よりなる。脚部はほぼ直に開き、穴が４箇所開いている。器面調整として細かい磨きが入る。脚部の内面にはハケ目が残る。口径が10.5cm、器高が9.1cm、脚部底径が10.2cmを測る。

○4SE055【第72図右】

Z－29グリッド～Z－30グリッドにかけて位置するこの遺構は素掘りの井戸跡で、4SX049と重複している。



第73図　4SE042出土土器実測図

4SX049をある程度掘削し終わり、底面を精査中に確認したもので、当初土坑としたが、半裁して掘り下げた結果、井戸跡とした。調査期間の終了間際であったため、遺構の北側部分をトレンチ掘りすることとなり、半裁し残り部分だけを図化している。このため平面上での正確な形態は不明であるが、確認した面では掘り方の平面形状がほぼ円形を呈し、東西径0.7m、遺構確認面からの深さは85cmを測る。断面形態は、ほぼU字状を成しているが、最下面は尖って先細った形をしている。最下面に何の施設もないのでこの位置では素掘りの井戸と考える。井戸の最下層からは、縄がくくりつけられた土師器の甕が出土しており、釣瓶の一種と考えている。底面の最下部は標高2.1mほどである。

埋土は調査状況から十分な記録ができていないが、下層の埋土についてのみ、オリーブ黒色（5Y3/１）を呈し、非常にやわらかい粘質土で、淡緑色の小粒の粘土や塊状の炭化物、砂粒をわずかに含むことが記録できている。

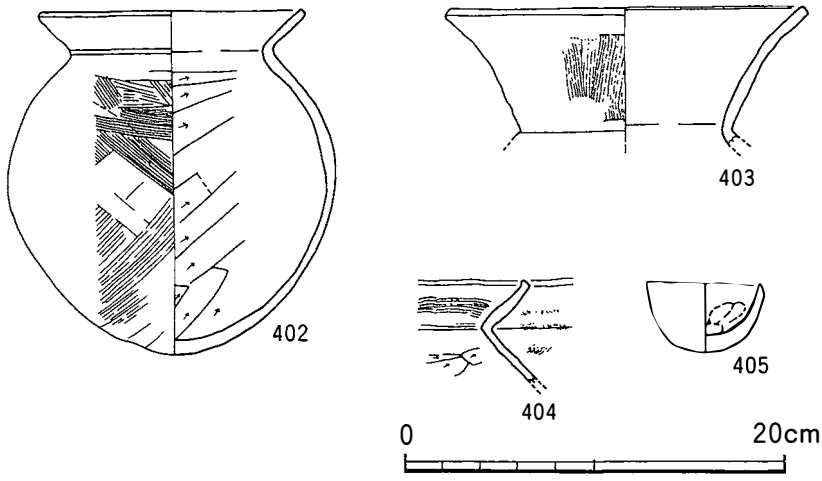
［出土遺物］【第74図】

図化した遺物は、甕が２点、壺が１点、鉢形の土製模造品が１点である。

甕は402と404である。このうち402はほぼ完形で、形態上は中型のもので、頸部から口唇部までの丈が低く、口縁部の開きが大きい。口縁部断面はわずかに内湾傾向があるがほぼ直に伸び、口唇部は角張る。胴部の最大径は胴部の中位よりわずかに高く、やや潰れた倒卵形である。外器面は上位が横方向のハケ目、中位以下は斜め方向のハケ目で調整される。内器面は斜め方向のヘラ削りが施される。器壁は下位が薄いが底部になるとやや厚い。頸部には縄状に撚った植物繊維が巻かれており、埋土中の最下層にあった縄状遺物と併せてこの土器が釣瓶として利用されていたものと考えられる。このことは、同じように4SE007の下層から出土した甕の頸部に巻かれていた状況と共通する。外器面には強く煤が付着していることから実用品を転用した物であろう。口径が13.6cm、器高が17.8cm、最大胴部径が17.0cmを測る。

甕404は上層一括出土で、口縁部が主で、頸部から内湾し、口唇端部を軽くつまみ上げて口唇部内側に明瞭な細い沈線を作る。口唇部外面は角張る。外器面はうすくハケ目が残り、内器面口縁部は横方向のハケ目、胴部は横方向のヘラ削りが施される。

壺403は下層からの出土で、頸部から口縁部までである。口縁部は頸部からやや外反しながら広がり、口



第74図　4SE055出土土器実測図

唇部は角張る。外器面は縦方向のハケ目調整が施される。復元口径は18.3cm を測る。

405は鉢形の土製模造品である。手捏で作られ仕上げはナデによる調整が施される。内器面に指頭圧痕が残る。口径は6.0cm、器高が3.7cm を測る。

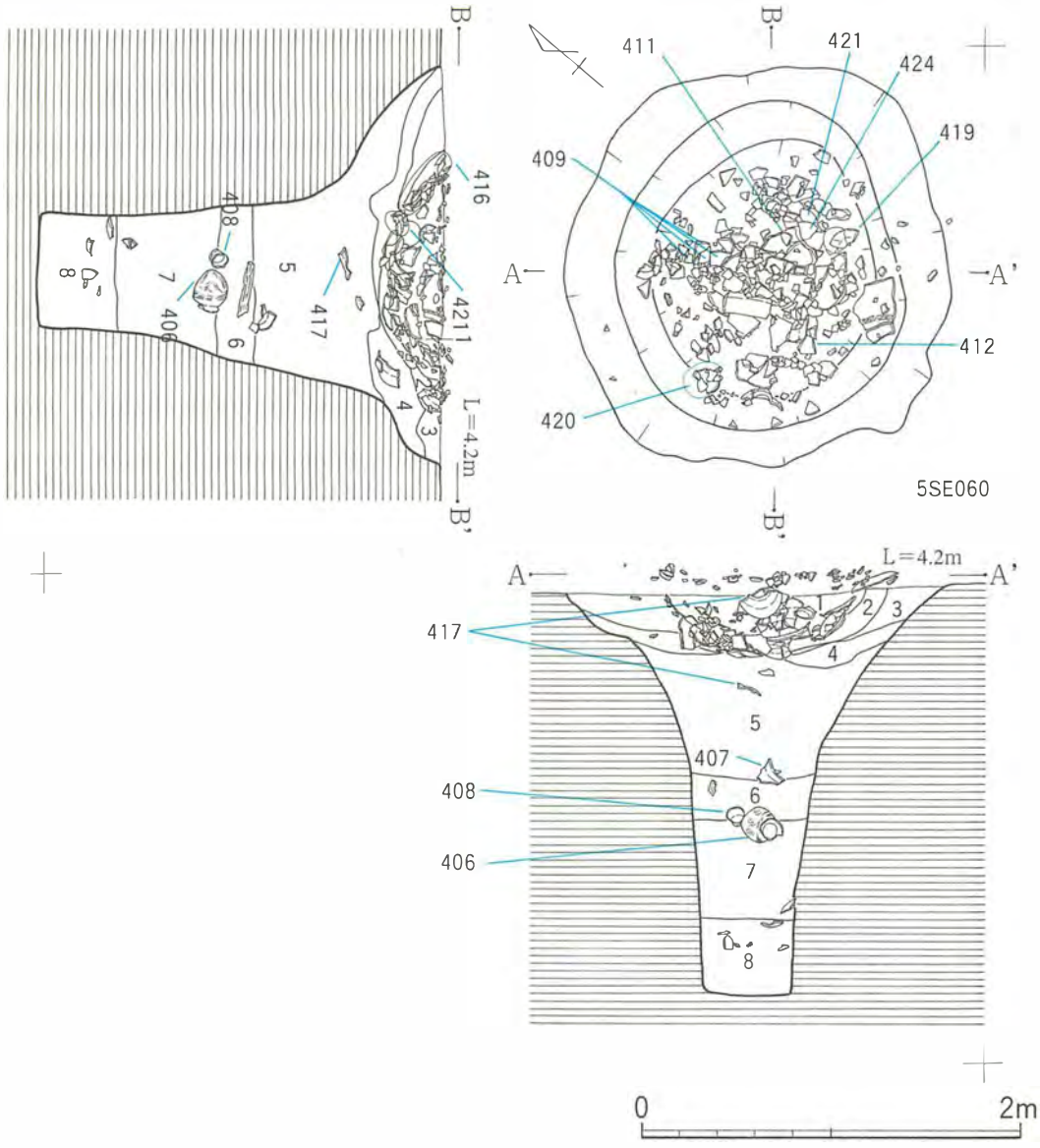
○5SE060【第75図・第76図】

Z－30グリッド、a－30グリッド、Z－31グリッド、a－31グリッドにかけて検出した井戸跡である。検出面の形状はやや不整形な円で、径が2.5m を測る。素掘りの井戸で断面形態は、やや細長いロート状を呈し、遺構確認面からの深さは2.3m を測る。最下層面は標高1.85m を測る。すでに洪水などによる削平があったためか、上部構造を推定できるものはなかった。

検出した当初は遺物の出土が余りに多かったので、浅い土坑と考え調査を進めていたが、多量の土器を除去したところさらに下の方へと掘り込まれていることを確認した。そこでさらに掘り下げたところ、遺構の中位付近で完形の甕を数点検出した。さらにその下に掘り進むと最下層で破損した甕片を検出した。

埋土は８層に分層できた。層は以下のとおりである。

１層は、褐灰色（10YR4/1）を呈し、粘性があり締まりもややあるが、酸化鉄を多く含むため土自体はやわらかい。少量の炭化物（黒色）を含む遺物混入層である。2層は、褐灰色（10YR4/1）を呈し、炭化物を非常に多く含む層である。炭化物には黒色と赤色がある。多量の遺物の大部分はこの２層に集中して出土する。3層は、黒褐色（10YR3/2）を呈し、粘性はあるが締まりはやや弱く、暗赤褐色（5YR3/6）を呈する土をブロック状に含む。4層は、にぶい黄褐色（10YR4/3）を呈し、粘性は少なく、締まりはやや強い。褐色（7.5YR4/4）土をブロック状で多量に含む。そのため３層に比べ、色は明るく、水気、粘性が少なく感じられる。5層は黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、水気、粘性があるが、締まりは弱い。4層同様、にぶい黄褐色のブロックを少量含む。土はやわらかいが重い。遺物は少ない。6層は、オリーブ黒色（5Y3/1）を呈し、水分を多く含みやわらかい層で、木の葉や小枝などの有機物が残存している。有機物の腐食した部分に酸化鉄が集中している。粘性はややあるがあまり締まらない。7層は、灰色（5Y4/1）を呈する粘土層で、とてもやわらかく粘性が強い。部分的に６層と同様、わずかに植物遺体を含むが量的はわずかである。また、約１～2cm 程の緑灰色（10GY5/1）を呈する硬い粘土塊も部分的に含む。砂粒をわずかに含む。8層は、オリーブ黒色（5Y3/1）を呈する粘土層で、この遺構の最下層である。7層よりやわらかく粘性が強い。植物遺体



第75図　5SE060遺物出土状況実測図

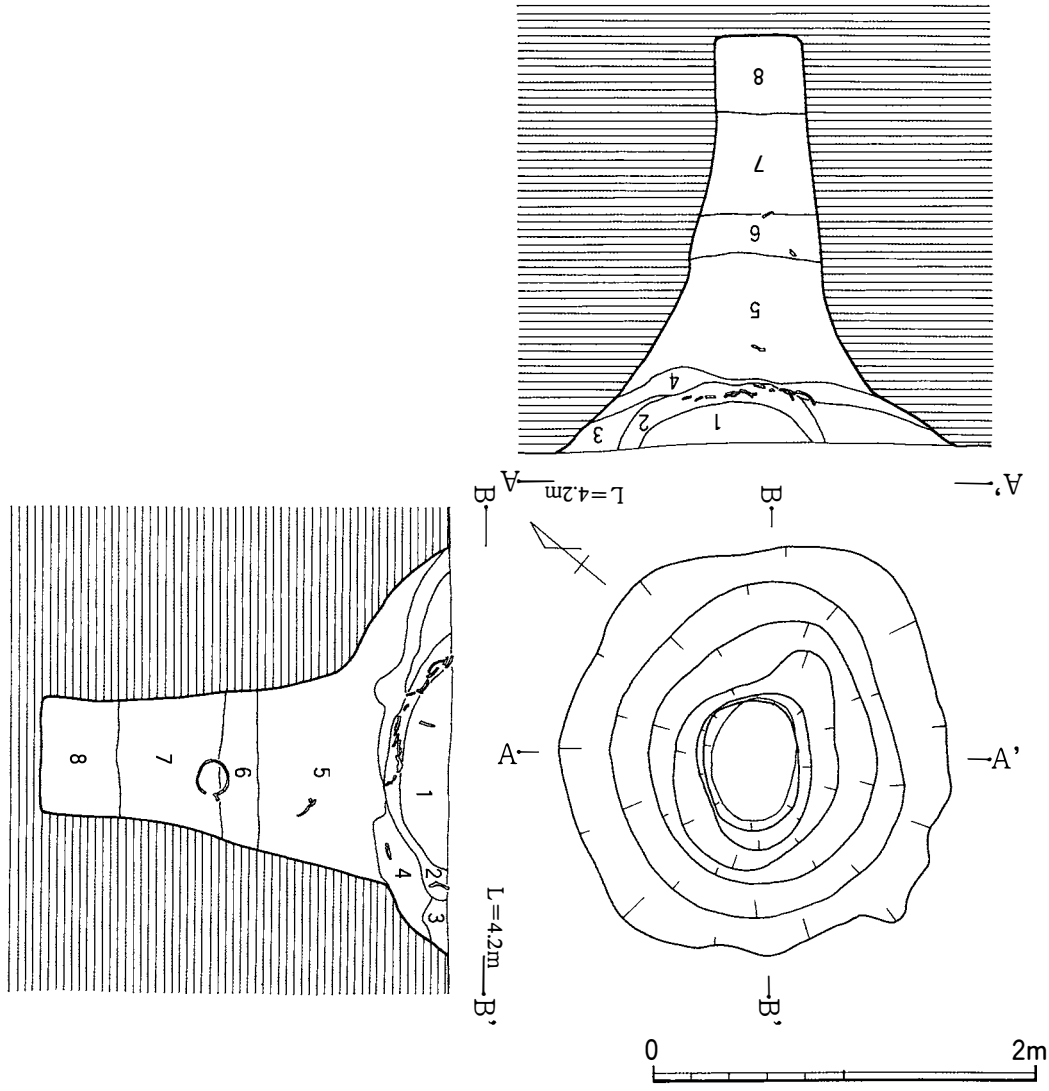
はほとんど含まない。7層と同様約１～2cm 程の軟らかい灰色（10GY5/1）粘土塊を部分的に含む。砂粒を含む。

［出土遺物］【第77図・第78図】

多量の土器が出土しているが、大きく上部、中部、下面からの出土に分けられる。上部の土器はある時期一気に廃棄されたものとして一括性が高い。また中位の土器はこの井戸が廃棄される時、祭祀的な意味での廃棄と考えられ、これも一括のものと推定できる。最下層のものはこの井戸の廃棄前のものと考えられ、必ずしも一括とは考えられないが、上部のものと比較はできる。以下に土器の概略を記す。

図化した土器は、甕が６点、大甕が１点、壺が６点、鉢が３点、高坏が２点、坏形模造品が１点である。

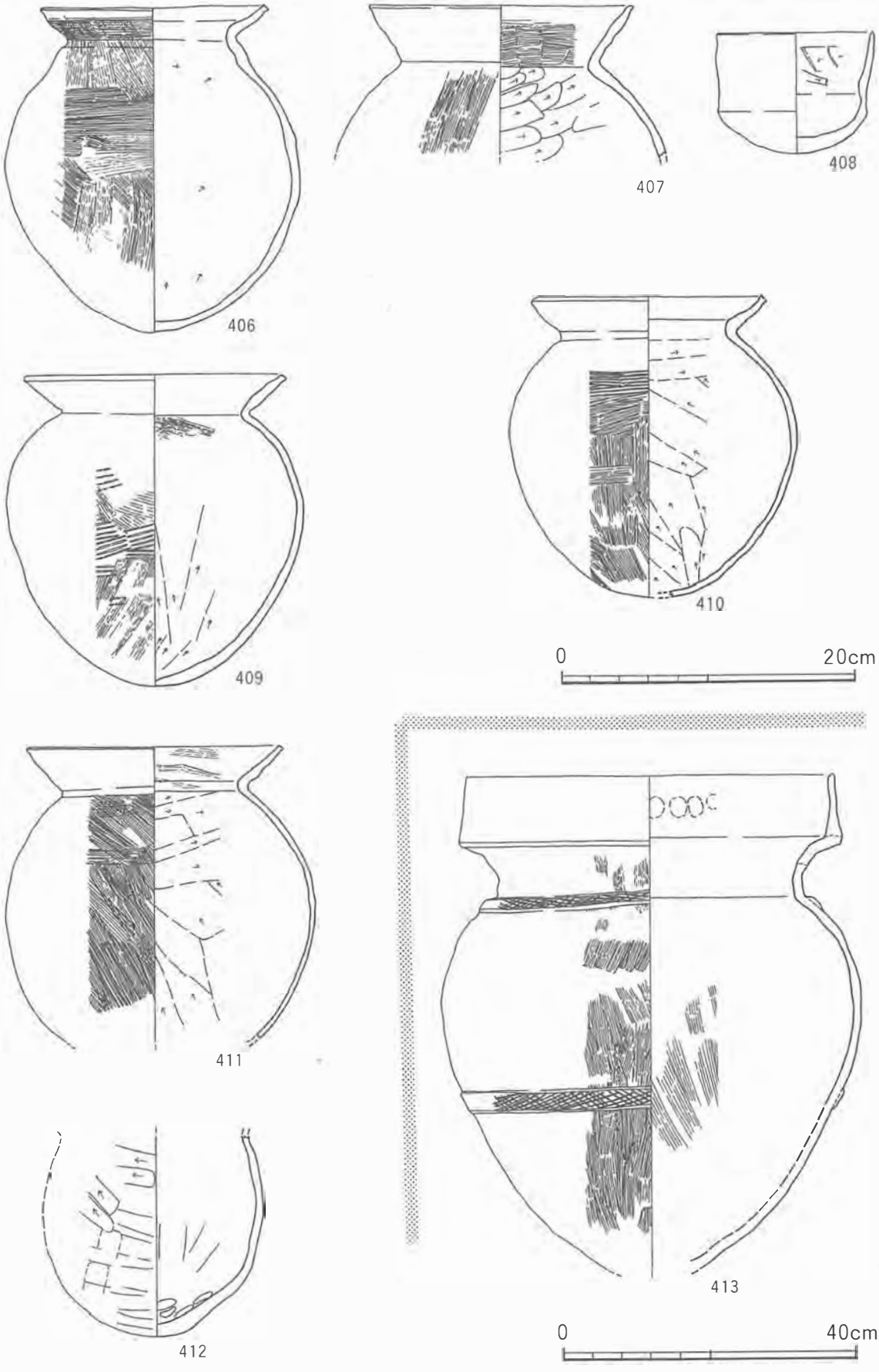
甕は口縁部やプロポーションから３種に分類できる。406･410、409･411、407の３つである。406・410は口縁部断面形が内湾し、口唇部が角張るものである。頸部から口唇部までの長さは短く、口縁部は広く開き高さは低くなる。胴部は両者にやや違いがある。406は胴部が菱形に近い形で、最大胴部径が中位から低位にあり、410は倒卵形気味で最大胴部径は19.5cm を測り上位にある。409・411は口唇部断面が角張るもの



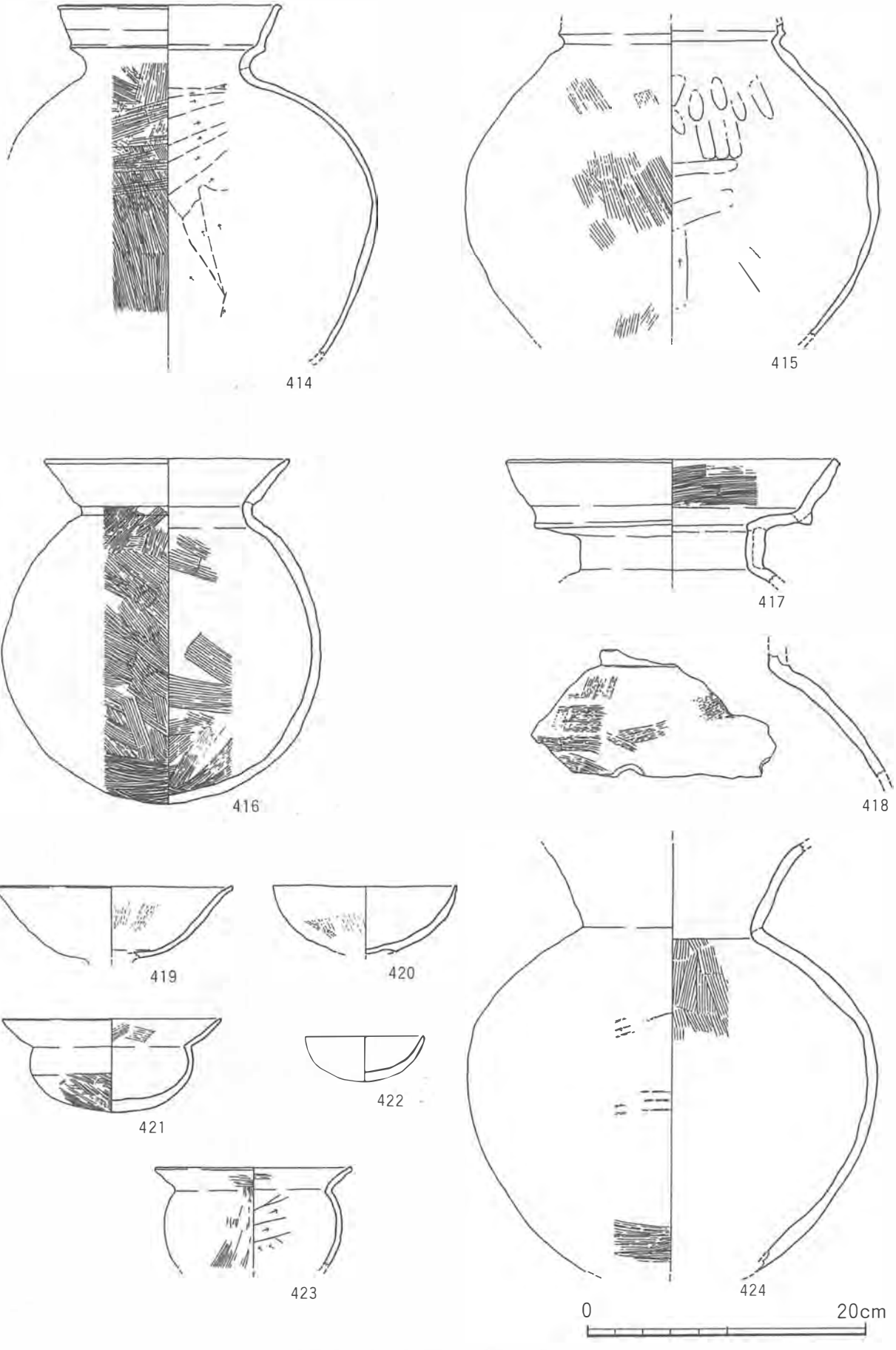
第76図　5SE060実測図

であるが、409は胴部が倒卵形で最大胴部が上位にあるのに対し、411は球形で最大胴部が中位にある。また409は外器面にハケ目調整の下に右上がりのタタキ痕が残り、内器面の上位にハケ目、下位は縦方向のヘラ削りが施されるが、411は斜めのハケ目と内器面は丁寧なヘラ削りのみである。407は口縁部から胴部上位までの破片である。口縁部は先の２種よりも長く、やや立ち気味である。頸部から途中やや厚みを変えながら、口唇部までほぼ直に伸びる。端部は外側につまんだようにして収める。口縁部内器面には横方向の丁寧なハケ目が施される。胴部は外器面に縦方向のハケ目が施される。内器面は斜め横方向のヘラ削りが頸部まで施される。412は一応甕と考えている。外器面はヘラ削りがなされ、内器面にはヘラ削りが弱く見え、底部には指頭圧痕が残る。器壁は上位が薄いものの底部が２cm近くまで厚くなり全体的に粗い調整が施されている。底部自体は平底気味である。

413は二重口縁をもつ大甕で、復元口径50cm、復元最大高90cmほどを測る。外器面には明確な煤は付着していないので、水甕などとして利用されたのであろうか。この半分のみが土器集中層である井戸の上面で出土した。口縁部は頸部が短く屈曲した部分からやや内傾しながら直に立ち上がる。内器面には指頭圧痕がわずかに残る。頸部付け根と胴部中位の二箇所には断面半円状の貼り付け突帯が巡る。突帯の表面には櫛状



第77図　5SE060出土土器実測図



第78図　5SE060出土土器実測図

工具で交叉させながら斜格子状に文様を付けている。外器面は縦方向の細かいハケ目調整が施される。内器面は部分的に縦方向のハケ目が見られる。復元した器形は底部がややすぼまるようになっているが、もう少し本来は張り出していた可能性がある。底部の形状は不明である。

壺には二重口縁壺の414・415・417・418がある。二重口縁壺では大きさや形態はそれぞれ異なる。414・415は口縁の屈曲が弱く胴部に対して口径が小さく、胴部が球形を呈する点でほぼ同じ形をしている。ただ、414は外器面に一部横方向のハケ目があるものの、縦方向のハケ目調整を主とし、内器面は上位が横方向のヘラ削り、下位が縦方向のヘラ削りなのに対し、415の内器面では下位が縦方向、中位に横方向のヘラ削り、上位は縦方向の指ナデによる調整が施されており、調整が若干異なるようである。417・418は接合しなかったが、同一固体の可能性がある。頸部が直に2cm 立ち、そこから横に直角に屈曲し、2cm ほどいきさらに直角に屈曲して直に立つ口縁部をもつ二重口縁壺である。それぞれの屈曲部に接合痕がある。調整はかなり摩耗して不明瞭であるが、外器面には胴部のハケ目、口縁内部には横方向のハケ目が確認できた。416は、壺としているが、屈曲は不明瞭で、甕の分類に入れてもよいようである。ただ、胴部に比してかなり締まった頸部と、そこから短く立ち上がる直部分とその上の口縁部からここでは壺とした。胴部は下ぶくれの球体で、最大胴部径は下位にある。内外器面とも丁寧なハケ目調整が施される。また、424はやや開き気味のラッパ状の口縁を持つ壺で、胴部は倒卵形を呈する。外器面に薄くタタキ痕が残り、内器面には上位に縦方向のハケ目が調整痕として残る。

419・420は高坏の坏部である。419は屈曲が明瞭ではなく、口唇部近くで外側に反る形態のもので、復元口径17.0cm を測る。420は坏状のもので、口縁端部がやや尖る。外器面にハケ目がわずかに残る。口径は13.3cm を測る。

421は鉢で、締まる頸部を持つもので、口縁部がやや内湾気味のものである。外底面にハケ目調整が施される。復元口径15.4cm、器高6.6cm を測る。423も鉢としたが、丈の低い甕状の器形のもので、胴部最大径より口径が広い。外器面はハケ目、内器面はヘラ削りが施される。422は坏形模造品で、表面は丁寧な仕上げである。

○5SE064【第79図】

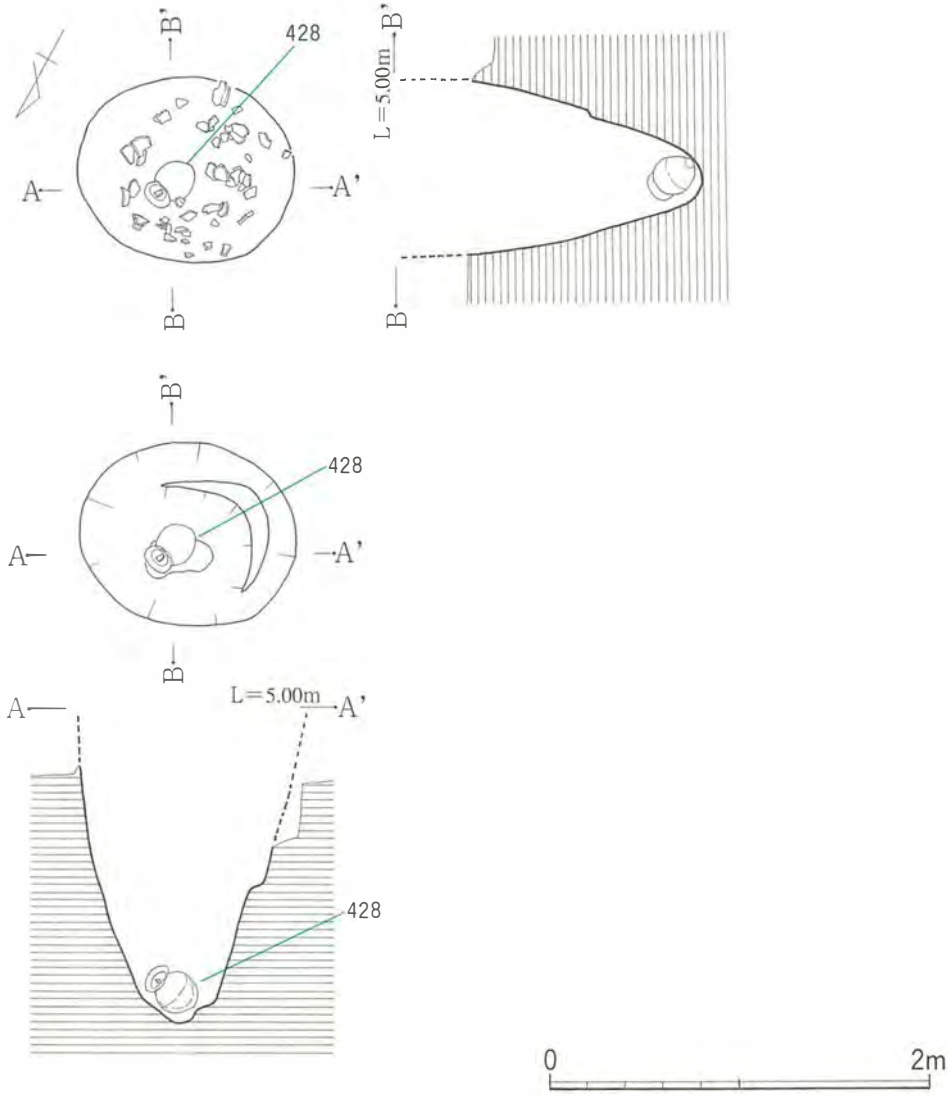
c－34グリッドで検出した井戸跡で5SI029と重複し、遺構の確認状況から住居跡を切っていると判断した。長径が2.24m、短径1.8m、確認面からの深さ2.48m を測る。遺物の非常に多い住居跡5SI029から遺物を取り除いていたとき、遺構の存在に気づいた。この遺構が常に5SI029を切っていた。遺構の最下部の標高は3.98m を測り、他の井戸遺構との高さが随分高く水位の高さが考えられる。

埋土は調査終了間際で早急に掘削する必要があったため分層する暇がなかった。そのため、暗褐色（7.5YR3/3）を呈する層のみを確認している。検出面近くで若干、埋土中に焼土粒（0.5mm 程）と炭化物粒（1mm 程）が混じる。土質は粘性が強く締まりがある。この遺構の時期は出土した遺物から5SI026や5SI029の時期と大差ないと思われる。

［出土遺物］【第80図】

最下層で出土した428以外は、井戸の中位で出土している。いずれも破片が多く、図化したのは高坏が２点、鉢が６点、小型壺が３点、小型甕が１点、壺が４点、甕が１点、鉢形土製模造品が１点である。

428は甕で最下層に廃棄された状態で出土した。この遺物の出土位置から中位の遺物出土層までは1m 以上の高低差があった。そのことからこの土器はこの井戸の廃棄時に伴うものと判断した。他の井戸の例からしてこの土器は釣瓶の可能性がある。完形の土器で、口縁部はやや内湾気味で口唇部は薄くなり尖る。頸部に２段の稜がある。胴部は中位よりやや上部に最大径を持つ。外器面はやや左傾斜の縦方向のハケ目が施さ



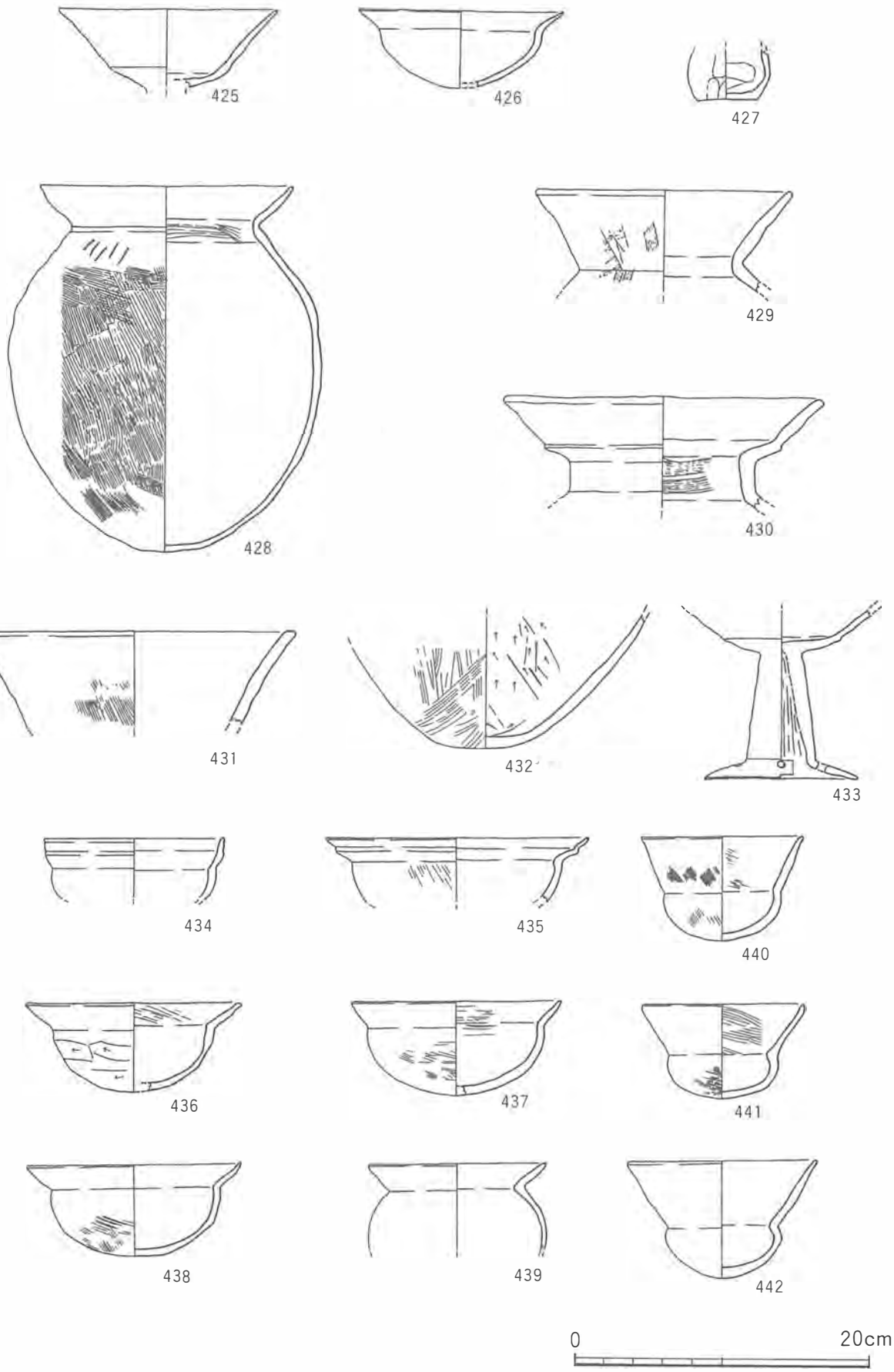
第79図　5SE064実測図

れる。煤がかなり付着する。内器面は頸部付近に横方向のハケ目が入る。胴部内器面は観察しにくいがヘラ削りが施される。口径が17.1cm、器高が24.5cm を測る。

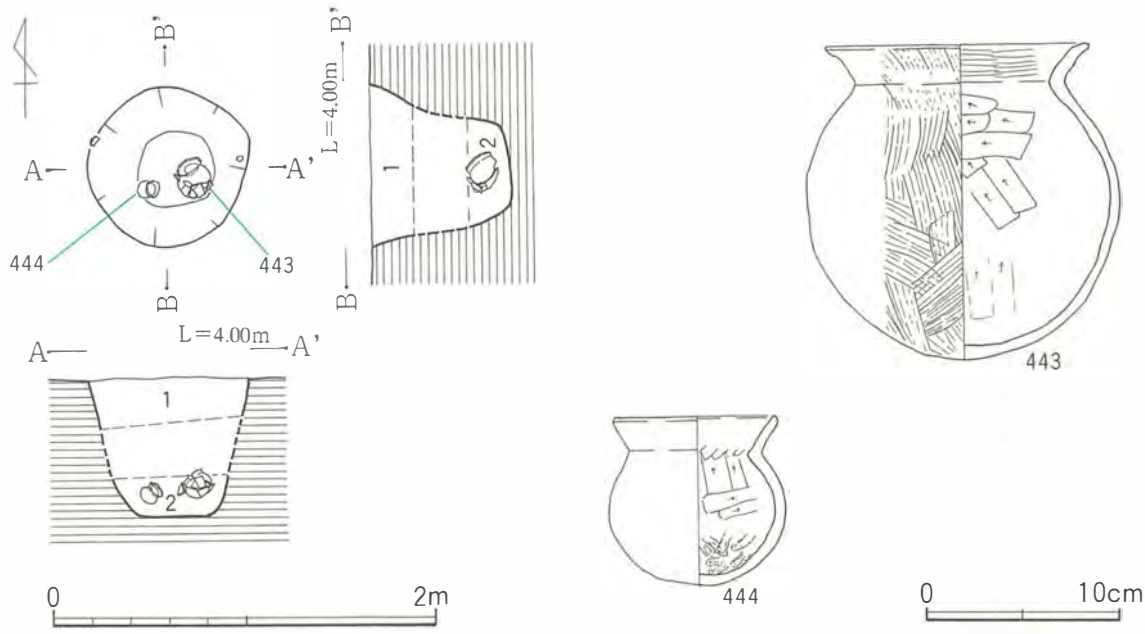
429・431・430・432は壺である。429・431は大きさが異なるが、口縁部がやや外反しながらも直になるものである。外器面にはハケ目が残る。429の復元口径が16.5cm、431の復元口径が21.0cm を測る。430は二重口縁を持つもので頸部がほぼ縦に直で、口縁部が段から大きく開くものである。大部分ナデ調整であるが、頸部内器面には横方向のハケ目が残る。復元口径は21.0cm を測る。432は底部のみで甕との差はわかりにくいが、胴部の張り方から壺にした。外器面は多方向のハケ目が施される。底部にわずかに平坦部がみられる。内器面は縦方向のヘラ削りを中心とする。

高坏は425・433である。425は高坏の坏部で屈曲部から口唇部へやや外反しながら伸びていき、端部は断面が尖り気味に収める。坏部と脚部の接合部では脚を間にはめ込んだ跡が観察できる。口径は14.8cm を測る。433は高坏の脚部で円形の4箇所の透かしが脚裾に入る。425との関係は近いかもしれない。

426・434～438は鉢である。口縁部が直に伸びるものと二重口縁のものがある。426・436・437・438は口縁が直になった鉢である。426は口径が器高に対して広く、口縁端部が薄くなる。復元口径は14.0cm を測り、ナデ調整がほとんどである。436～438もほぼ同様の形態であるが、わずかに調整や形が異なる。436の



第80図　5SE064出土土器実測図



第81図　6SE053実測図

外器面の胴部は横方向のヘラ削りが施される。437・438の胴部外器面はハケ調整が施される。口径は14cmほどである。434・435は二重口縁の小型鉢である。434は復元が正しければ、かなり立ち気味の口縁部を持ち、器高も高そうである。435は口縁部にはっきりした屈曲を持ち、口径も17.8cmを測り大きめである。調整はいずれも横ナデによる。

440・441・442は小型丸底壺で口縁径に対して胴部最大径が小さく、口縁部は直に伸びるものである。特に442は口縁径12.5cmに対し胴部最大径が8.1cmの1.5倍ほどある。

439は小型甕としたが、鉢の分類に含めてもよい。口縁は直で端部は尖り気味である。胴部はほぼ球形であろう。

427は鉢形土製模造品で、平底を呈し、器表面には指ナデの跡が残り、内器面には指頭圧痕もある。

○6SE053【第81図】

i－39グリッドで検出した井戸跡である。当初Ⅴ層の途中で遺構として認識し、50cm掘り下げ、そこを底部と思い、ただの土坑として一旦処理した。さらに水田層を掘り下げていったところ古墳時代の甕が出土し、そこが以前土坑として処理した地点と一致した。そこで慎重に掘り進め、土坑と判断し掘りきっていなかったものと判断し、以前のものとあわせて井戸跡とした。ただ、最下面の標高は3.2mで、他の湧水のある井戸跡の底面に比べると高いが、状況的に井戸跡としておく。当初確認した面での平面形は直径1mを測る。深さは当初の確認面から底面まで1mを測る。

当初の部分と最下層部分の土層を重ねて一応二層に分層した。まず、1層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、粘性の強いやわらかい粘土層である。酸化鉄が縦縞状に無数集積し黄褐色（10YR5/6）を呈し、層の50%程度をしめた。2層は灰色（N4/1）を呈する。粘性の強いやわらかい粘土層で、酸化鉄の集積がわずかにみられる。また、所々に青灰色（5B5/1）の粘土が混入していた。

［出土遺物］

出土遺物としては最下層から出土した大小の甕と壺の２点のみである。いずれもほぼ完形で出土した。

443は甕で、口径が13.7cm、器高が16.2cmを測る。甕としては中型のものである。口縁部は外反し端部は丸まり、全体からみて短い。外器面は縦方向のハケ目、内器面は横方向のハケ目調整が施される。胴部は

球形を呈し、底部付近は各方向のハケ目での調整が施される。内器面は中位までは縦方向のヘラ削りで上位は横方向のヘラ削りが施される。

444は小型の壺形土器である。口径が8.7cm、器高が9.2cm を測る。小型丸底壺の部類に入る。外器面はナデ調整である。口縁部は短くつまみ上げ、内面に弱い沈線が施され、外面に稜が走る。口縁径と最大胴部径はほぼ同程度である。内器面は底部が指押さえ跡が残り、中位より上はヘラ削りが施される。

（５）土坑と出土遺物

○4SK027【第82図】

Z－28グリッドで検出した土坑である。平面形は長軸1.8m、短軸1.5m を測るやや不整形な楕円形を呈し、確認面からの深さ72cm を測る。底部は平坦である。確認面で中心部に焼土が堆積しているのを確認した。その中には破片になった土器片が出土し、甕形の土製模造品も１点検出した。祭祀的な雰囲気はあるが不明確である。上面の状況から井戸跡の可能性があったが、最終的に湧水の痕跡を認めなかったので土坑とした。

出土した土器は焼土と混じっており、1層のみで出土した。下層にはいっさい遺物が出土していないので、遺物を破棄した土坑とも言い難い。底面の標高は3.2m である。

埋土はほぼ水平に堆積し、7層に分層できた。注記は以下のとおりである。

１層は、黒褐色（2.5Y3/1）を呈する、やわらかい粘質土で、酸化鉄が部分的に多く見られる。やわらかい茶色の粒子を多く含む。小粒の白っぽい粘土をやや多く含む。炭化物をやや多く含み、焼土を少量含む。

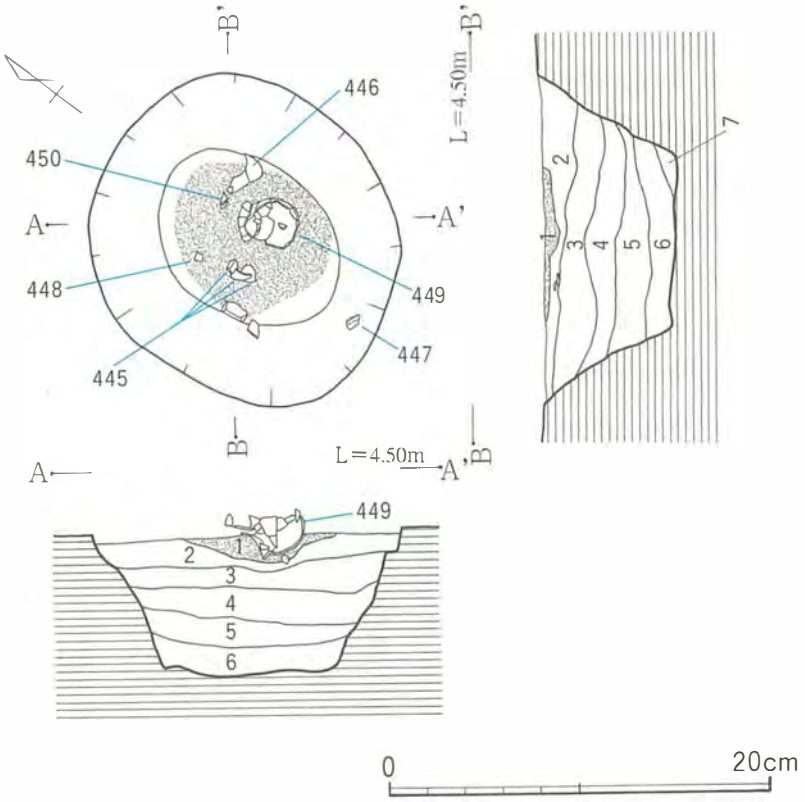
２層は、黒褐色（2.5Y3/2）を呈する軟性粘質土層である。茶色粒子を多く含む。酸化鉄が沈殿したような茶色の粒子をやや多く含む。小粒の白っぽい粘土をやや多く含み、黒褐色の粘土を塊状に点々と含む。炭化物・焼土を少量含む。3層は黒褐色（2.5Y3/2）を呈し、2層よりやや明るい。軟性の粘土質で、酸化鉄やマンガン粒子、小粒の白色粘土などを含む。炭化物・焼土を少量含む。4層は、暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）で、やわらかい粘土質。やわらかい茶色の粒子を少量含む。小粒の白っぽい粘土を多少含む酸化鉄が沈殿したような茶色の粒子を３層より多く含む。5層は、黒褐色（10YR3/2）を呈し、2層よりやや灰色がかった軟性粘土質層である。白色粘土細粒、酸化鉄粒、炭化物・焼土等をわずかに含む。6層は黄褐色（2.5Y5/3）を呈する軟性粘質土層である。地山の淡黄灰色土が混じり込んでいる。小粒（５層より大）の白色粘土、黒褐色粘土を部分的に含む。酸化鉄、炭化物・焼土なども微量含む。7層は、黄褐色（2.5Y5/3）を呈し、6層と同じであるが、地山の淡黄灰色土を塊状に多く含む点が異なる。

［出土遺物］【第83図】

遺物は大部分が確認面で出土し、1層からのもので焼土に混じるようにして出土している。この土坑の廃絶過程でかかわってきた遺物である可能性がある。

大部分が破片であり、出土数も少なかったので図化できたのは、甕が３点、高坏が２点、壺形土製模造品が１点である。

甕は445・446・449である。449はほぼ全体を推定できるものである。部分的な残りのため途中は他の部分で補いながら図化した。この甕は口径より胴部最大径より1.5倍ほど大きい。口縁部は端部付近でやや内湾しながらも直に伸び、口唇部はやや角張る。丈はあまり高くない。胴部外器面は斜め方向のハケ目が確認できる。内器面は中位まで縦方向のヘラ削り、上位は横方向のヘラ削りが施される。445は破片のため全体は不明であるが、中型の甕である。口縁部は緩やかに外反し、口唇部の内側で少しつまみ上げている。胴部は不明であるが、頸部状況からあまり胴は張り出さないと推定した。外器面にハケ目がみえる。中型のものである。446は頸部の締まり具合と胴部の張り出しは449と類似し､口縁部がないのでやや不明確であるが、449と同一固体の可能性がある。外器面は縦方向のハケ目、内器面は横方向のヘラ削りである。



第82図　4SK027実測図

447は壺形土器の口縁部で、外器面には、径1cmほどの円形工具による刺突文が3点集中してみられる。450は高坏の脚部で、器壁は薄く内部にはケズリが見られ、上部の付け根部分から徐々に広がっていく。

448は壺形模造品で作りはわりと丁寧である。

○4SK060【第84図】

4SX038の一角でY－30グリッドに位置する土坑である。平面形は長軸0.9m、短軸0.8mを測る楕円形を呈し、確認面から深さは66cmほどを測る。底面は円形ではないが、ほぼ平坦である。

この遺構からの出土遺物がないため、この遺構の所属時期が不明確であるが、遺構の検出状況から一応古墳時代の遺構としてここで述べる。

形態的には井戸状のものであるので、4SX038に伴う遺構の可能性もある。他にも溝状遺構の一角で確認されている例もあり、井戸跡の可能性が大きい。ちなみに底面の標高は1.55mである。

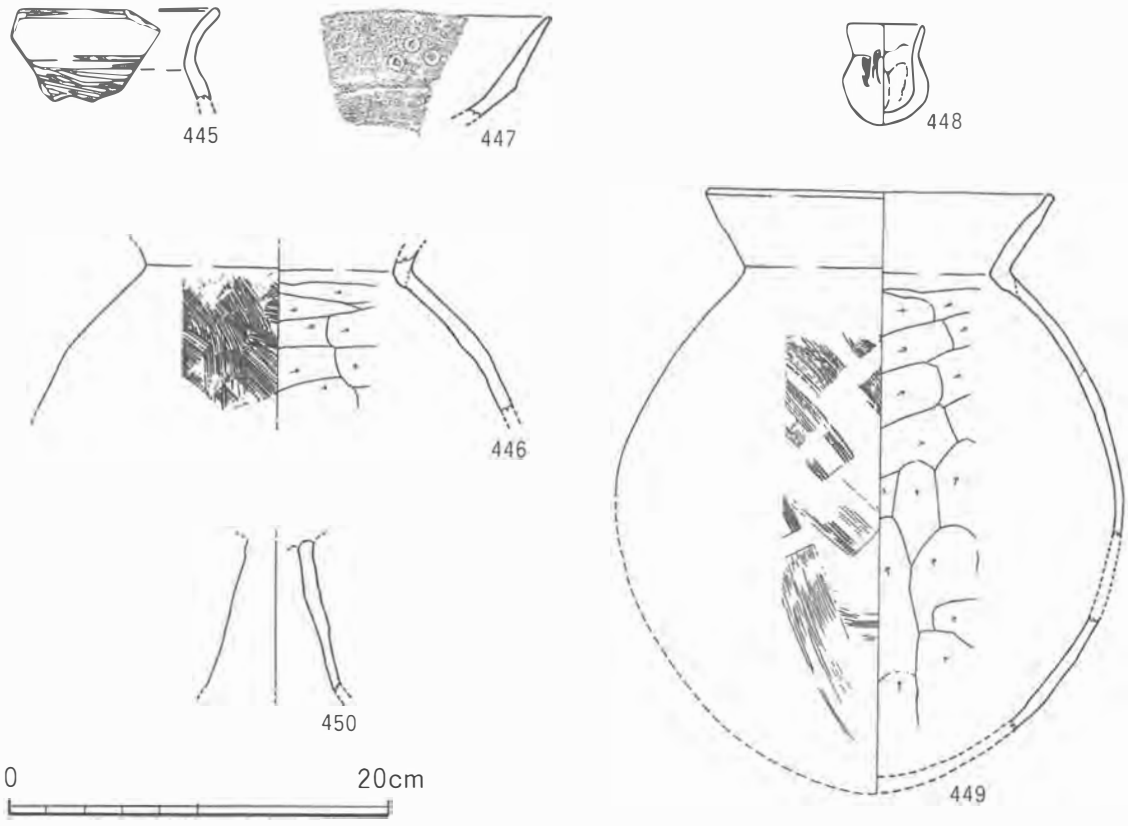
埋土は注記しわすれたため不明である。

○5SK052【第85図上】

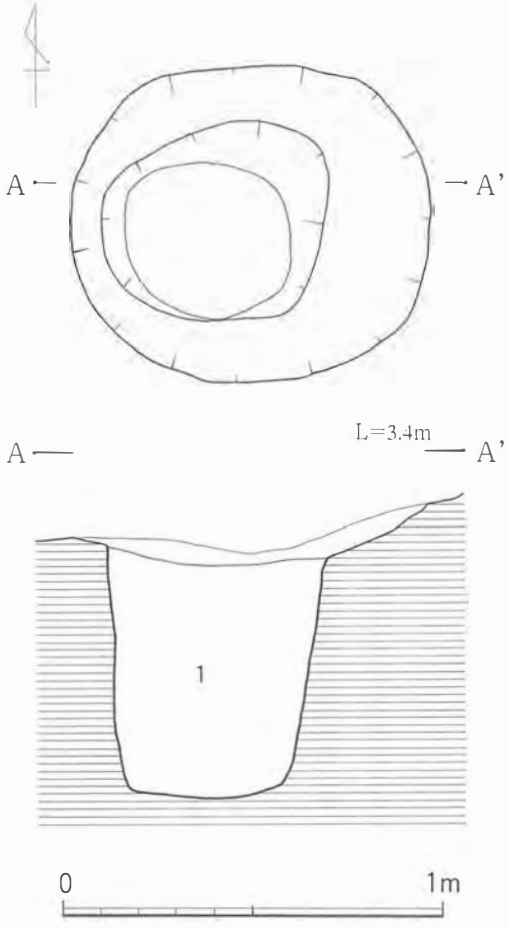
a－31グリッドで出土した土坑で、確認面で多量の土器が出土している。平面形は確認した面では、長軸1.7m、短軸1.5mの不整形を呈し、遺構確認面からの深さは84cmを測る。素掘りの井戸で断面形態は、ほぼU字状を呈している。形態的には4SK027に似る。埋土の堆積状況からみると、一気に埋めた後徐々に陥没した穴に再度土が堆積していった状況が伺える。底面の標高は3.4mである。

埋土の注記は以下のとおりである。

1層は黒褐色（2.5Y3/2）を呈する。ブロック状の暗赤褐色（5YR3/6）土を多量に含む。粘性は弱い。締まりが強く、硬い砂粒を上層に含む。2層は、にぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する。暗赤褐色（5YR3/6）

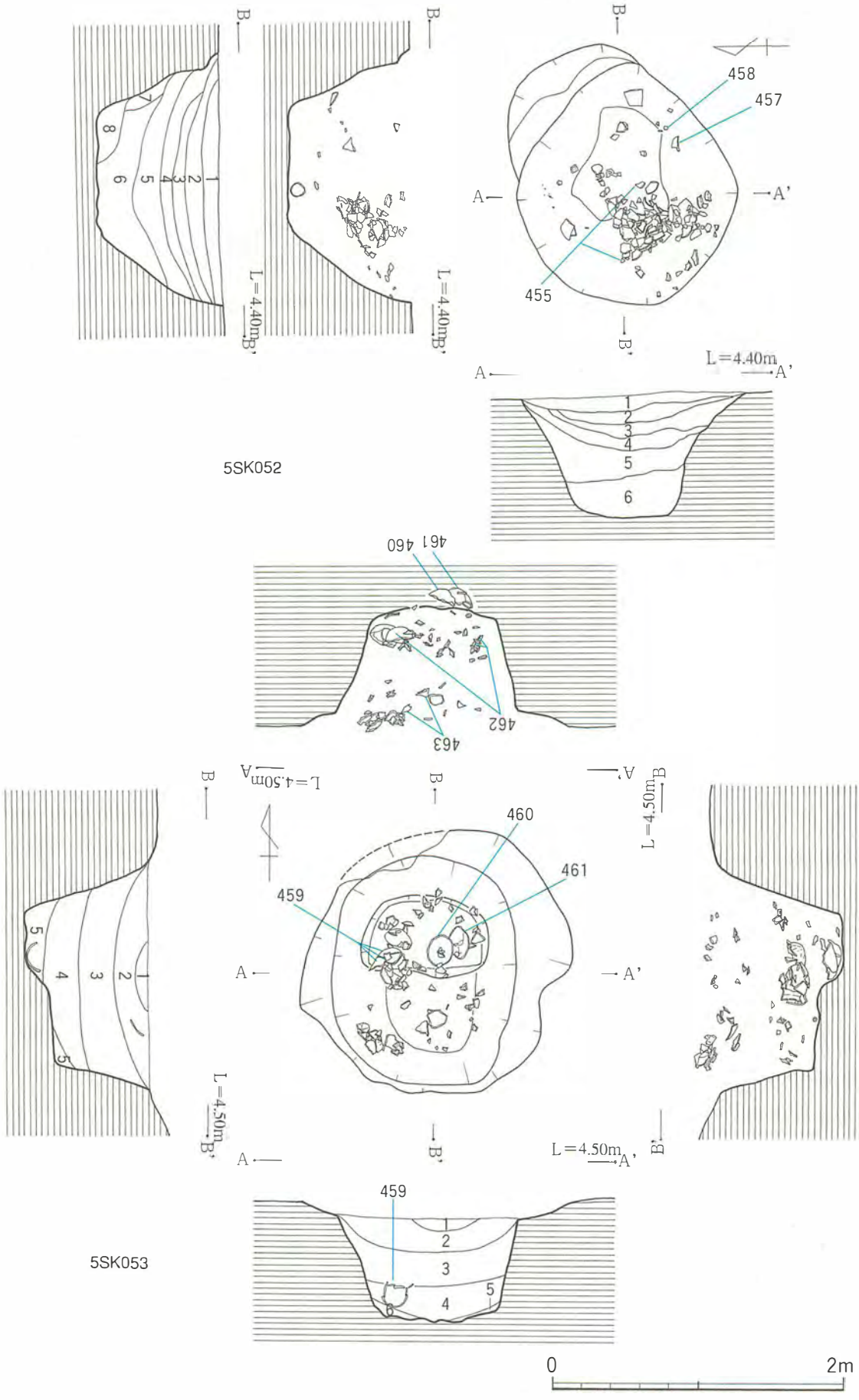


第83図　4SK027出土土器実測図



第84図　4SK060実測図

土のブロックを所々に含む。粘性、締まりともに強く、黒褐色（10YR3/2）土も混じるためで１層よりも灰色に見える。3層は、黒褐色（2.5Y3/2）を呈する。2層と同じく粘性もあるが、水気を比較的多く含むため、締まりは２層より弱い。暗赤褐色土（同上）のブロックも少ないが混じる。4層は、オリーブ褐色（2.5Y4/4）土である。にぶい黄色（2.5Y6/4）や浅黄色（2.5Y6/4）の土を多量に含む。土は粘性、締まりともに強いが、水気は少ない。黄色系の土はよく締まっているが、粘性はない。遺物が混入する。5層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈する。黄灰色（2.5Y4/1）の粘性、締まりともにあるが、水分を多く含み、土は重く、やわらかい。遺物を混入する。6層は、黒褐色（2.5Y3/2）を呈する。粘性、締まりともにあるが水分は少なく、5層に比べ、かたく黒っぽく見える。にぶい赤褐色（5YR4/4）と黒褐色（5YR2/2）の土が筋状に所々混じり、土は硬い。遺物混入層である。7層は灰色（5Y4/1）を呈し、粘性、締まり共に強いが、水気を多く含むため土はやわらかい。暗赤褐色（5YR3/6）土を筋状に含む。8層は褐色（7.5YR4/4）を呈する。粘



第85図　5SK052・5SK053実測図

性はないが、締まりはある。水分は少なく、土自体は硬い。暗赤褐色土のブロックを多く含むため、6層より赤く見える。

［出土遺物］【第86図】

遺物は大部分が５層までの出土で、6層にも一部はいる。少し時期差がある可能性がある。

図化したのは、甕が３点、壺が１点、器台が２点、脚付鉢が１点、土製模造品が１点である。

451・452・453は甕である。いずれの甕にも外器面に煤が濃く付着している。451は口縁部が大きく外反し口唇部が角張る。胴部は球形を呈し、外器面は斜めのハケ目が入り、底部近くはハケ目をナデ消している。胴部の内器面は大きめのヘラ削りがなされる。底部付近には指頭圧痕が残る。口径が18.3cm、器高が25.6cm、最大胴部径が23.3cm を測る。452・453は大きさが異なるものの器形はどちらも倒卵形に近く、底部を面的に作っている。452が小さく、口縁部はやや外反し、端部はやや角張る。外器面はハケ目がナデにより消されている。内器面は丁寧なヘラ削りによる器壁を薄くしている。口径が14.5cm、器高が23.6cm、最大胴部径が21.0cm、底部径が5.7cm を測る。453は、452の1.5倍に拡大した形である。口縁部の傾きはよく似るが、口唇部が丸まり、外面に盛り上がりがある。外器面には頸部近くに櫛状工具で弧を連続して描き、櫛描波状紋に似せている。その下は縦にハケ目が中位付近まで残る。その下はナデ消されている。内器面は丁寧なヘラ削りで器壁を薄めているが、底部は分厚くなっている。口径が16.9cm、器高が28.3cm、胴部最大径が25.1cm、底径が5.7cm を測る。

454は壺で、口縁部がやや外反しながら直に伸び、口唇部がやや尖り気味のものになる。胴部外器面は縦方向のハケ目から横方向のハケ目が見られる。内器面はナデ調整である。口径は13.6cm を測る。外器面に黒斑がある。

455・456は器台で、455は受部があり脚に穴状の透かしが３箇所入るものである。調整は横ナデ、ナデによるものである。456は受部と脚の真ん中に穴の開くものである。復元底径は10.9cm を測る。

457は脚付鉢の鉢部底部と脚部の破片で、脚部は設置面が広く、径も20.0cm を測り大きい。調整はほとんどナデである。458は高坏形の土製模造品で、脚部はしっかりしている。調整は指ナデによる手捏である。

○5SK053【第85図下】

b－31グリッドに位置している。当初井戸跡として掘り下げていたが、さほどの深さがなかったので土坑としたものである。平面形は東西軸1.8m、南北軸1.7m の不整形である。確認面からの深さ83cm を測る。底面は南北方向で段が作られていた。20cm ほどの段差がある。

埋土は自然堆積のようである。遺物の垂直分布をみると、4層以下と２層以上のものに分けられる。間層として３層がはいる。底面の最下部の標高は3.2m である。

埋土の注記は下記のとおりである。

１層は、明赤褐色（2.5YR5/6）～黒色（N2/0）を呈する焼土層である。明赤褐色土は硬くしまるが、黒色土はやわらかい。部分的に地山の粘土（褐色）や酸化鉄を含む。2層は、灰黄褐色（10YR4/2）粘土層で、粒子が細かくやわらかい。所々に３～10mm の炭化物、5mm 程の焼土粒、3～5cm 程の地山の褐色粘土を含む。酸化鉄の帯がみられる。3層は、灰黄褐色（10YR4/2）粘土層で、2層と同様で粒子が細かくやわらかい。２層とあまり変わらないが、全体的にやや明るい色で、地山の褐色粘土をほとんど含まないため、2層と区別した。2mm ほどの炭化物、帯状の酸化鉄（5mm×３～5mm）分を含む。4層は、灰色（N4/0）粘土層で、粒子が細かくやわらかい。2mm～1cm 程の炭化物、地山の褐色粘土（１～5mm）、帯状の酸化鉄（5mm×１～10mm）分を所々に含む。5層は灰色（5Y4/1）粘土層である。粒子が細かくやわらかく、帯状の酸化鉄（５mm×２～3mm）分を含む。4層と比較するとやや全体の色調がやや白っぽく最下層に斜めに堆積している

様子が伺える。

［出土遺物］【第87図】

図化したのは、甕が５点、小型壺が１点である。出土遺物は多かったが、図化できたものは少なくいずれも下層の遺物出土層から取り上げている。

甕には459～463がある。459は唯一完形で形の分かるものである。口縁部は頸部から内湾しながらやや立ち気味に口唇部に至る。口唇部は水平に切ったように形作られる。胴部は倒卵形で、外器面は縦・横のハケ目がみられる。底部付近はナデ消されている。頸部下に二条の沈線で波状紋がめぐっている。内器面はヘラ削りが施されており、器壁は薄い。内器面底部には指頭圧痕が残る。460・461・462はいずれも胴部の中位以下が残るものである。460は外器面全体に丁寧な縦方向のハケ目が残る。内器面は斜め方向のヘラ削りが施されている。461は外器面ではハケ目が部分的に残る。内器面はヘラ削りが細かく施されている。器壁は底部が分厚くなっているが、上は薄くなっている。底部はやや平らになっている。462は球形をなし、外器面は丁寧なハケ目が残る。内器面はヘラ削りが施され、下位には指頭圧痕がみられる。底部はやや厚くなる。463は頸部～胴部である。外器面はハケ目、内器面はヘラ削りが残る。

464は、小型壺の口縁部である。二重口縁状の作りである。

○5SK061【第88図上】

a－32グリッドに位置している土坑である。この遺構も当初井戸跡の可能性も考えながら掘り下げた。結果的には平面形は不定形で東西軸1.7m、南北軸1.8m を測る。断面形態は素掘りの U 字形で深さ87cm を測る。底面はでこぼこしている。上面から床面まで土器片が出土している。底面の標高は3.5m ほどである。

埋土の注記は以下のとおりである。

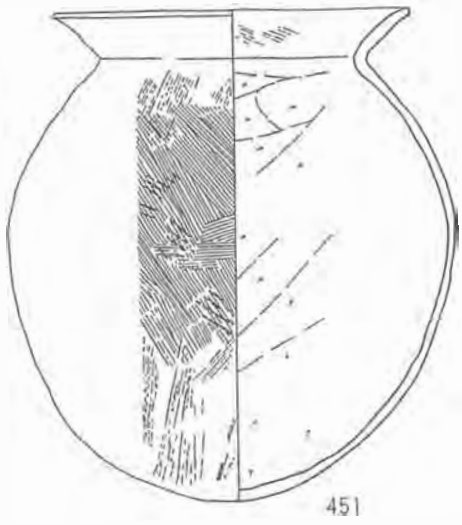
１層は、黒褐色（10YR3/2）を呈し、粘性はあまりなくさらさらしている。酸化鉄が筋状にのび、少量のマンガン粒子を含む。2層は、黒褐色（10YR3/2）を呈し、粘性はあまりなく、締まりがない。酸化鉄が筋状にのび、少量のマンガン粒子、極少量の炭化物を含む。2層は、黒褐色（10YR3/2）を呈し、粘性が少しあり、締まりがない。多量の酸化鉄マンガンを含む。極少量の炭化物がみられる。4層は、暗褐色（10YR3/3）を呈し、粘性が少しあり、締まる。まばらに酸化鉄、マンガンの集積を含む。5層は、暗褐色（10YR3/3）を呈し、粘性が強く、締まる。酸化鉄を多く含み、少量のマンガンもみられる。6層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、粘性が非常に強く締まっている。ところどころ酸化鉄の集積がみられる。

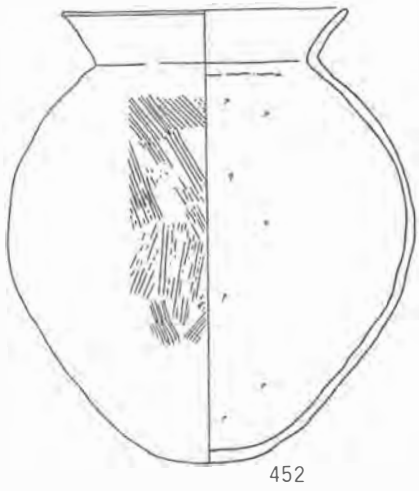
［出土遺物］【第89図】

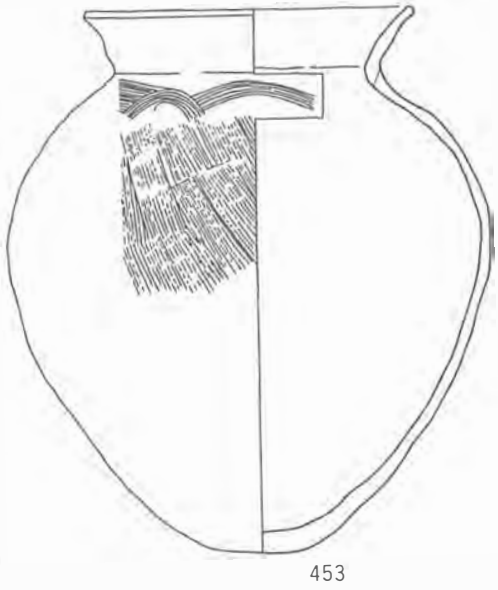
遺物の出土量は割と多かったが、図化できたものは甕が３点、壺が４点、小型壺１点、鉢が１点である。

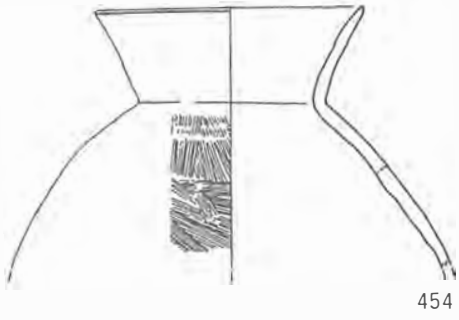
甕には465・466・467がある。465は、口縁部から底部付近まで残る。口縁部は内湾し、口唇部は角張る。内面に沈線がめぐる。胴部は倒卵形を呈する。外器面は上位が縦方向のハケ目の後横方向のハケ目が施される。中位以下はほぼ縦方向のハケ目が施される。内器面は口縁部に横方向のハケ目、胴部上位はハケ目の後横方向のヘラ削りが中位までなされている。中位以下は縦方向のヘラ削りがなされている。底部付近には指頭圧痕が残る。器壁は頸部から底部へと随時薄くなっている。466は、口縁部から頸部付近まで残る。口縁部は外反し、口唇部はつまみ上げ内面に沈線が見られる。頸部以下のわずかに残る胴部では外器面はナデで、内器面は細かいヘラ削りがみられる。467は口縁部から胴部中位付近まで残る。口縁部は内湾し、口唇部は水平にならし、内面に沈線がめぐる。胴部は胴長形を呈する。外器面は上位が縦方向のハケ目から横方向のハケ目である。中位以下は斜めハケ目が施され、その上に櫛状の工具でひっかくような調整を行っている。内器面は右斜め上へヘラ削りがなされている。

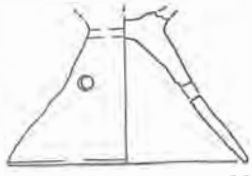
468と473は壺である。器形はよく似ているが、出土層位は473が底面近く、468が上面と異なる。468は、

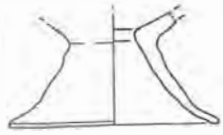


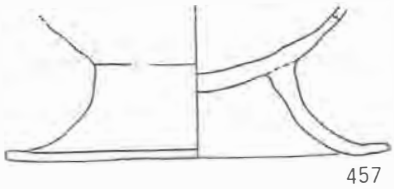




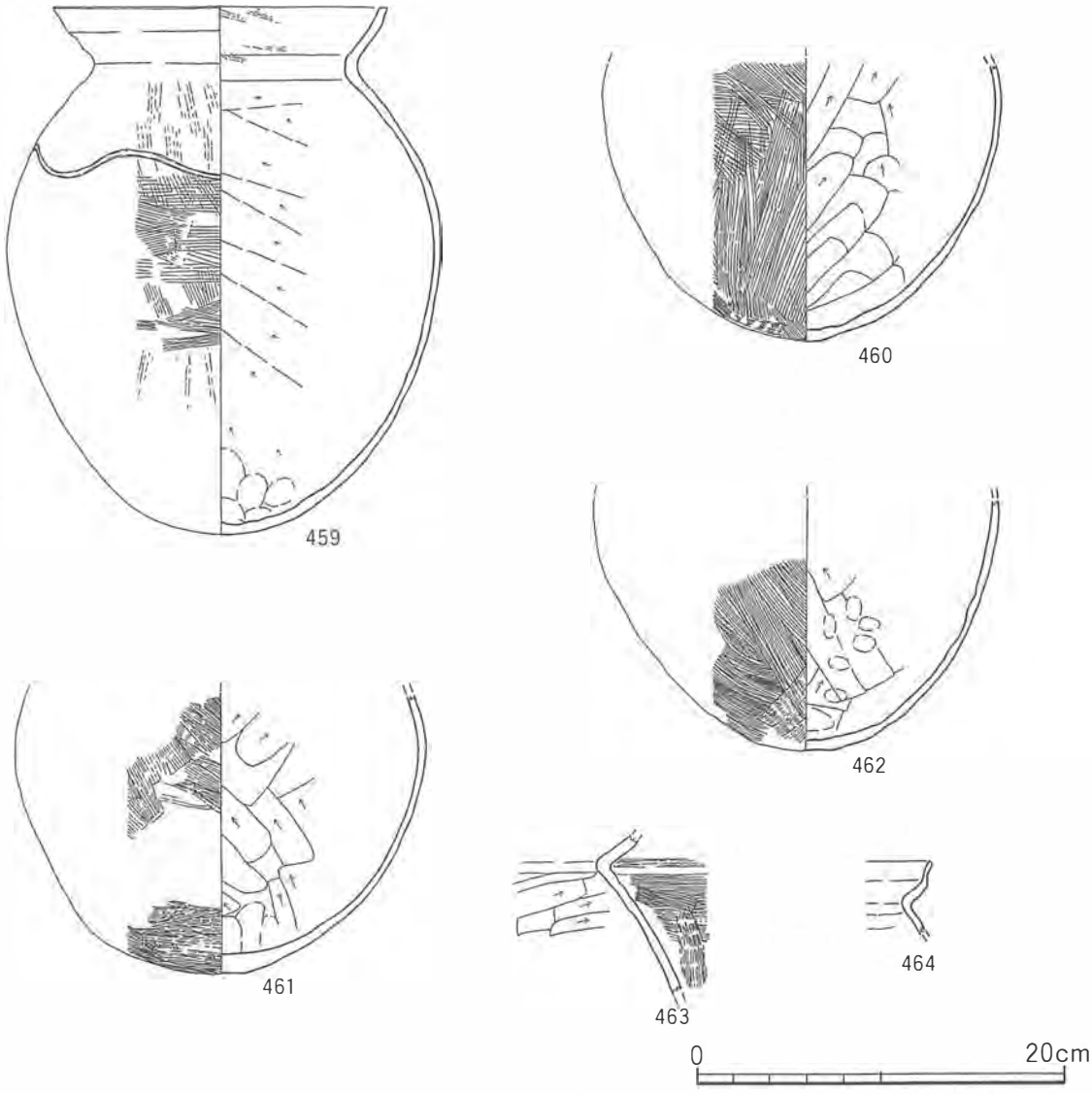








第86図　5SK052出土土器実測図



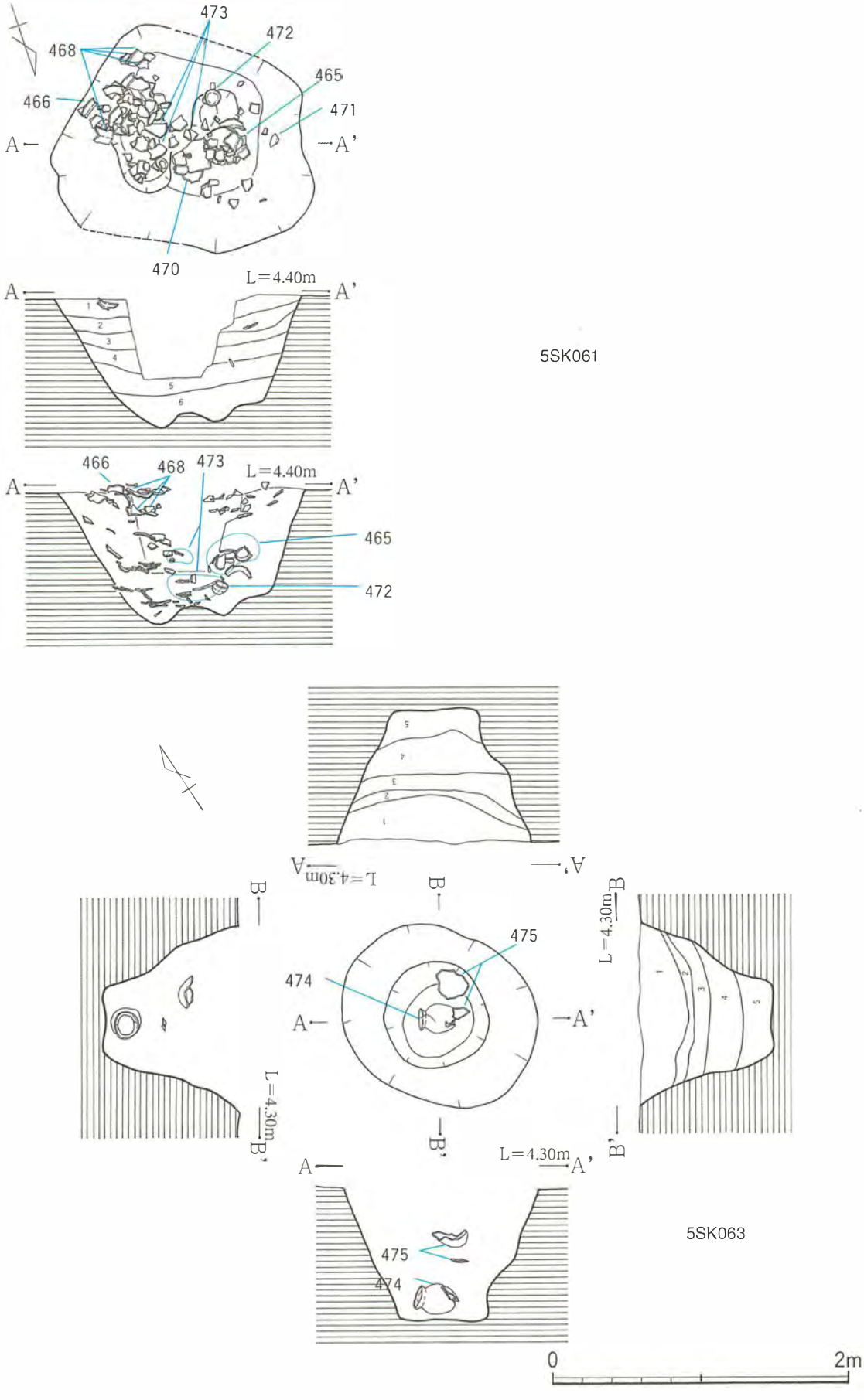
第87図　5SK053出土土器実測図

口縁部がやや外反しながら口唇部が角張る。内面に横方向のハケ目が残る。胴部は球形を呈する。外器面は上位に施す横方向のハケ目、下位は縦方向のハケ目が施される。内器面は細身のヘラ削りがなされるが、中位より下位に指頭圧痕が残り、胴部の張り出しを形成したものであろう。473は468より高さが低いが、口縁部と胴部の比は468より口縁部が大きくなる。口縁部はほぼ直に伸び、胴部は横に潰れた様な形をしている。胴部外器面上位には横方向のハケ目が残り、中位以下は交互に交差したハケ目が施されている。内器面は全体的に丁寧なヘラ削りが施される。底部には細かい指頭圧痕様の痕跡が多く残る。器壁は非常に薄い。

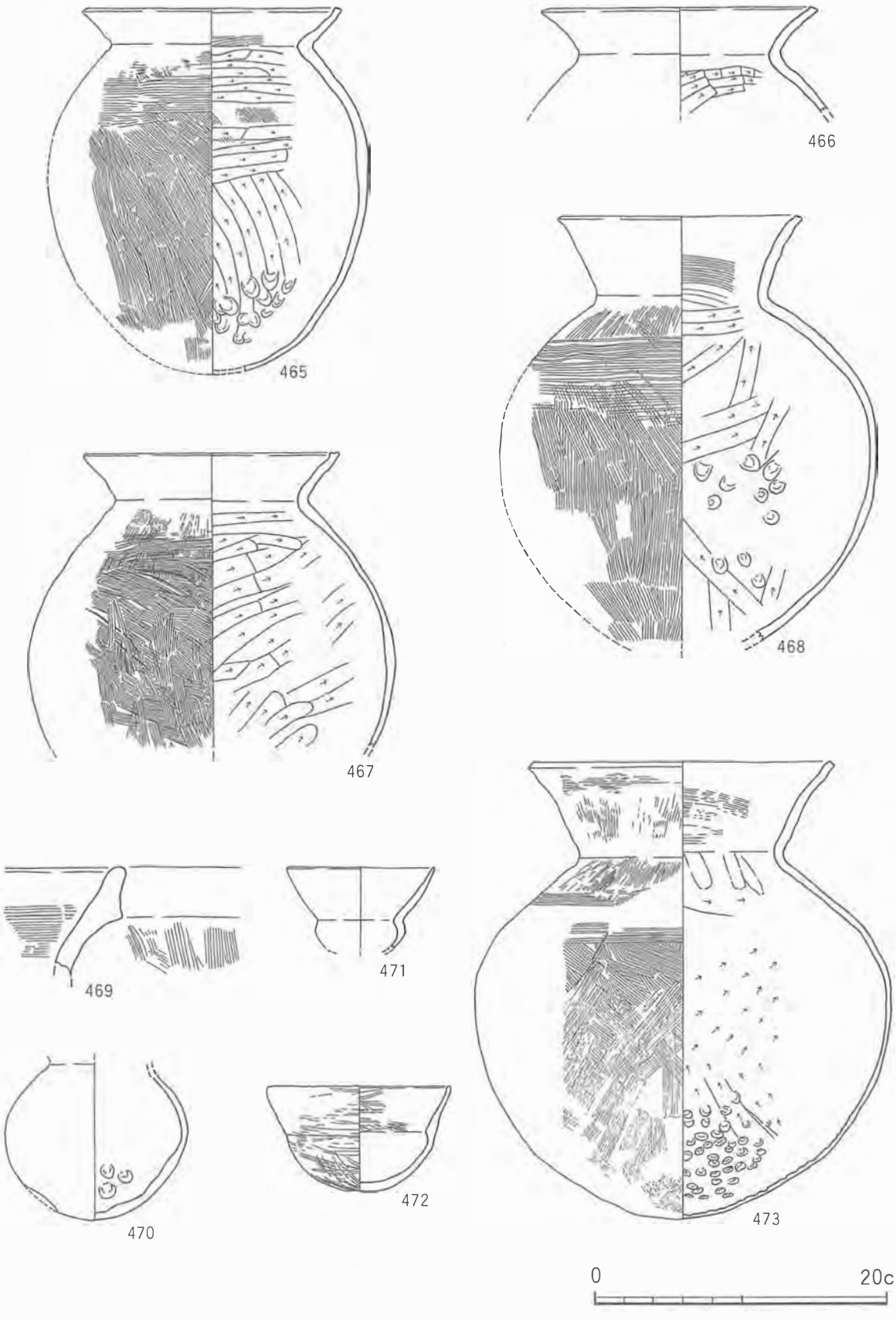
小片であるが469は大型の壺の一部で二重口縁の浅いものである。内器面は横方向のハケ目、外器面は縦方向のハケ目がそれぞれ残る。

471は小型丸底壺で、口縁部はやや内湾しながらほぼ直に伸び端部はとがる。口径はかなり広い。胴部径は口縁部径に比してかなり小さい。470は小型壺である。内器面底部に指頭圧痕が残る。口縁部がないので全体像はつかめない。

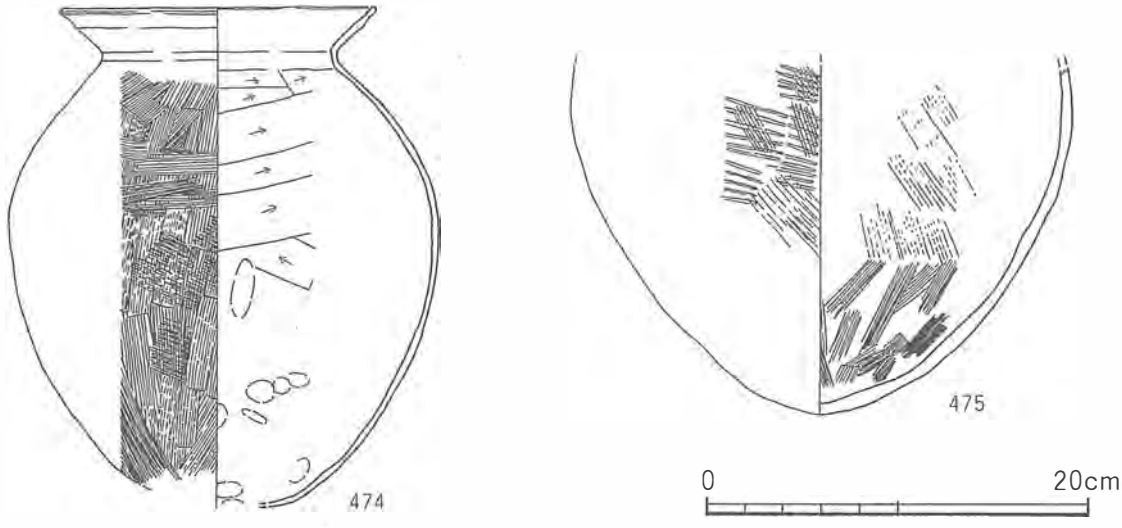
472は鉢で、口径が広くわずかに頸部を作るものである。口縁部はやや内湾しながら伸び、端部は丸くなる。頸部の屈曲は外器面ではあまり明瞭ではないが、内器面では明瞭に作っている。内外器面にはハケ目も



第88図　5SK061・5SK063実測図



第89図　5SK061出土土器実測図



第90図　5SK063出土土器実測図

しくはナデの痕跡がみられる。あまりしっかりしていない。

○5SK063【第88図下】

a－31グリッドに位置している土坑である。当初井戸跡の可能性もあるということで慎重に掘り進めたが、深さが浅く、井戸ではないと判断した。ただ、最下層に完形の甕があることを考えると、当時は井戸としての利用があったことも考えられる。底部は平坦面を作っている。底部の絶対高は3.3m である。

平面形は長軸1.3m、短軸1.2m のほぼ円形を呈し、確認面からの深さ85cm を測る。底面の標高は3.3m である。

埋土の注記は以下のとおりである。

１層は、暗褐色（10YR3/1）を呈し、締まりがあり硬く、砂粒と酸化鉄を含む。2層は、灰黄褐色（10YR 4/2）を呈し、やわらか目ではあるが、砂粒を多く含む。若干多めの酸化鉄を含む。3層は、暗褐色（10YR3 /3）を呈し、土自体は粒子が細くやわらかいが、砂粒を多く含む。酸化鉄も含む。4層は、暗灰色（N3/0）を呈し、粘土質で、粒子は細くなめらかであるが、やや硬い。砂粒や酸化鉄を含む。5層は、灰色（5Y4/1）を呈し、粘土質であるが、大き目の砂粒を多く含む。水分が多くべたべたしている。酸化鉄も含む。

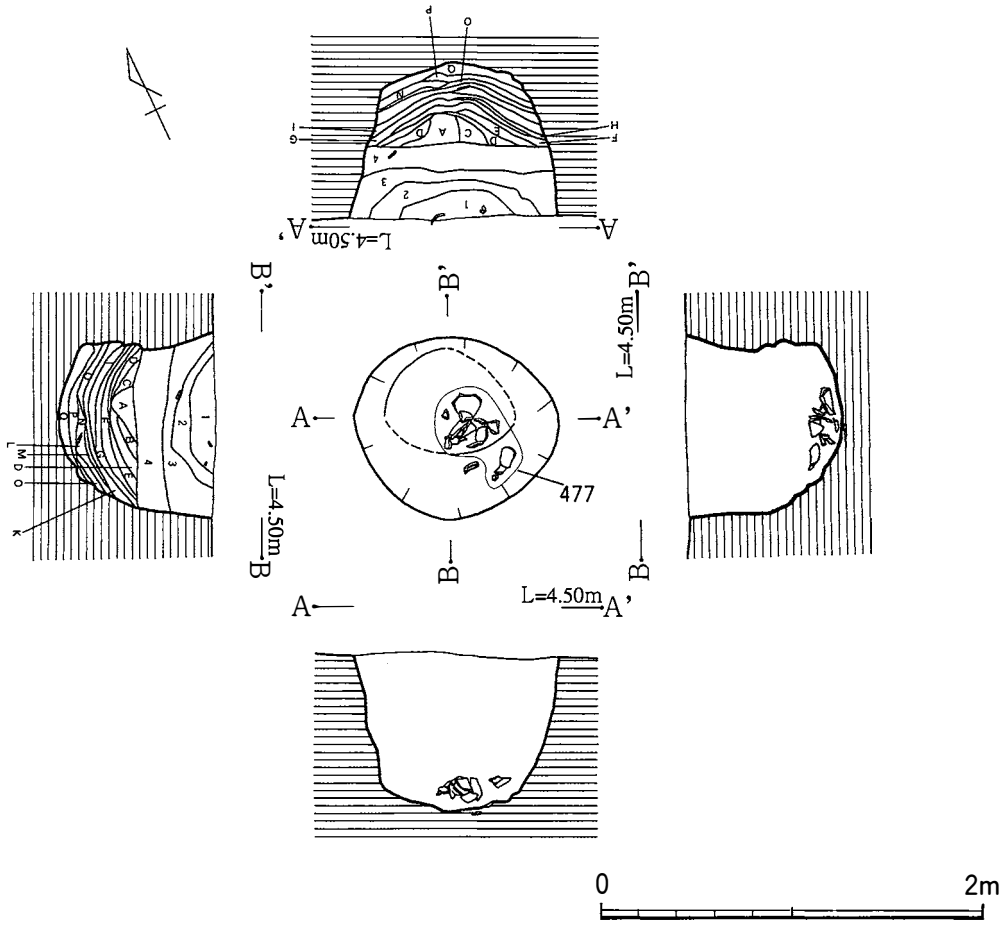
［出土遺物］【第90図】

出土遺物は少なく、最下層に１点と、中位に２点ほど破片が出土したのみである。接合の結果、図化した甕２点となった。

474は口縁部がやや内湾し、長さは短く頸部から大きく開く。口唇部は丸まっている。胴部は倒卵形を呈し、外器面には左上がりのタタキの痕跡が縦方向のハケ目調整の下に見える。内器面は中位より下は斜め方向のヘラ削りと指頭圧痕があり、中位より上は横方向のヘラ削りがなされている。

475は、大型の甕の胴部下位部分である。内器面にはハケ目が残る。外器面には左上がりのタタキがかなり明瞭に残る。その後ハケで調整が行われている。底部はやや尖り気味である。

474が底面からほぼ一個体として出土した。底部は破損し、土圧で潰れていた。475は中層から出土したものである。



第91図　4SK004実測図

○4SK004【第91図】

Z−27グリッドに位置している。長軸1.1m、短軸1.0mのほぼ円形の土坑で、深さ82cmを測る。

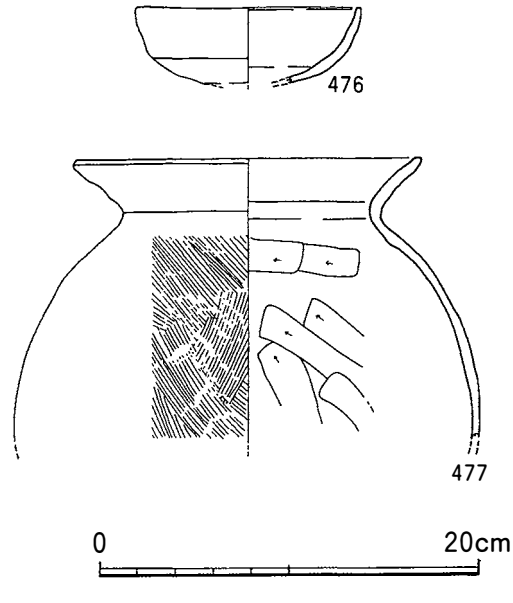
この遺構も当初井戸跡と考え、慎重に掘り進めた。結果的には土坑として処理したが、他の井戸跡と比較すると井戸跡の可能性もある。底面の標高は3.5mである。

［出土遺物］【第92図】

出土遺物は少なく、図化できた遺物は坏が1点、甕が1点である。

476は土師器の坏で体部のやや下に屈曲部を持ち、外底面は磨耗しているがヘラ削りの跡が若干みえる。

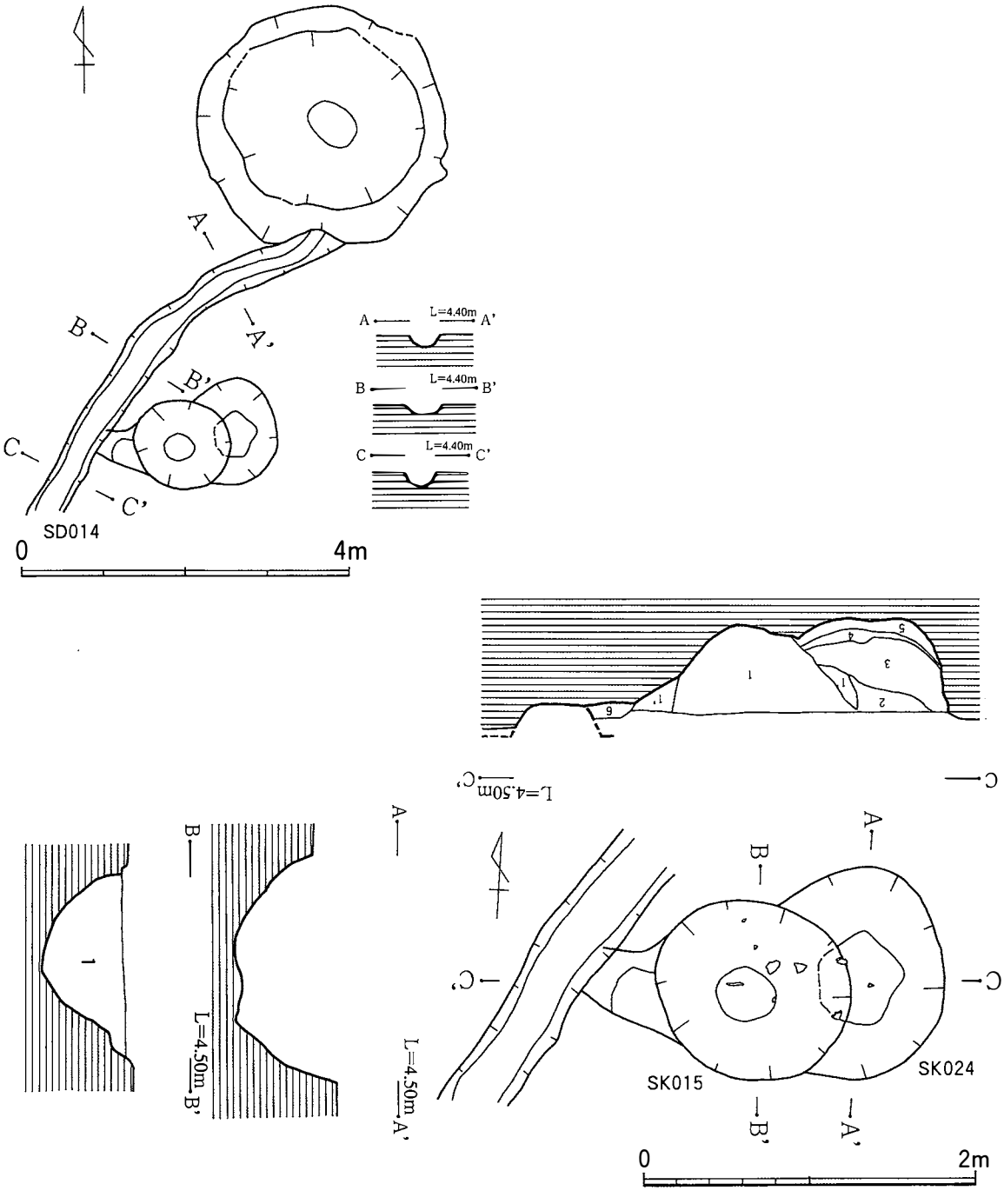
477は甕形土器で、口縁端部が丸くなり、胴部の最大径はやや下位の方になっている。器壁は薄い。



第92図　4SK004出土土器実測図

○4SD014・4SK015・4SK024【第93図】

一連の遺構4SE005から伸びる溝遺構である4SD014とそれに付随するように検出したのが4SK015・4SK024である。2つの土坑は重複しており、4SK015が4SK024を切っている。4SK015は、X−28グリッドに位置する。長軸1.4m、短軸1.2mを測るほぼ円



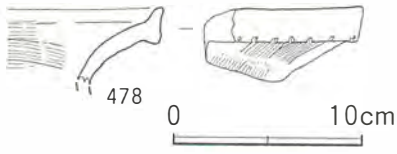
第93図　4SD014・4SK015・4SK024実測図

形の土坑で、深さは52cmを測る。

4SK024は、X－28グリッドに位置し、4SK015と重複している。長軸1.4m、短軸1.1mの楕円形の土坑で、深さ56cmを測る。

この遺構は土層観察を一度にしたため注記は下記のようになった。

第93図の土層断面図C－C'について述べる。1層は4SK015の埋土で分層ができず、褐灰（7.5YR4/1）を呈する軟性の粘土である。酸化鉄も入り赤褐色（5YR4/8）を呈する。1'層は黒褐色（5YR1/3）、暗赤色（10R3/6）、橙色（7.5YR6/8）など部分的に様々な土色を呈しているが、所々に地山層によく似た乳白色粘土をブロック状に含む。酸化鉄の混じる土もブロック状に含み、1層よりやや黒い。4SK015の埋土との関係がありそうである。2層から５層は4SK024の埋土である。2層は黒褐色（5YR1/3）と暗赤色（10R3/6）と赤橙色（7.5YR7/8）を呈する土が混じる。1'層とよく似るが、酸化鉄の入る土のブロックなどを含む。3層は

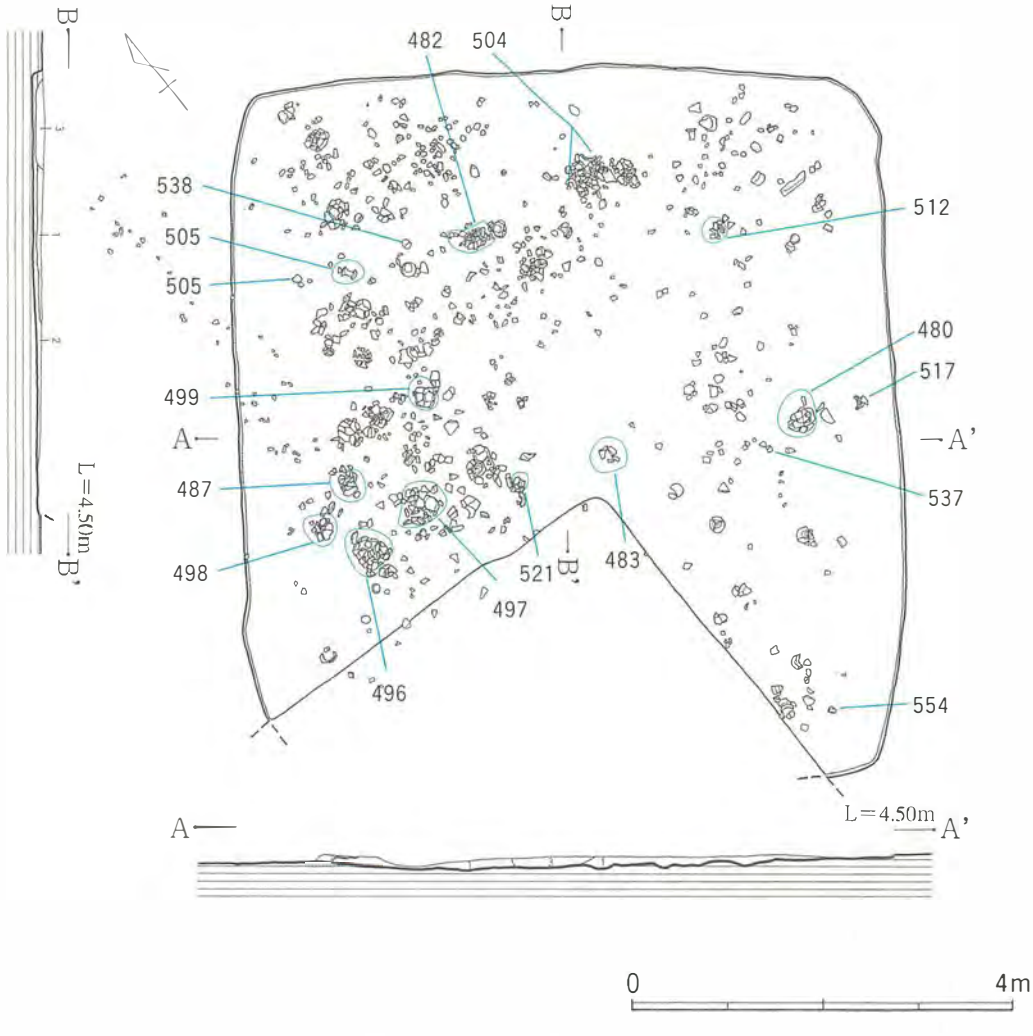


第94図　4SK015出土土器実測図

褐灰色（7.5YR4/1）と暗赤色（10R3/6）とにぶい黄色（2.5Y4/6）を呈する土が混じり、2層と色あいはよく似るが、地山層と同じ乳白色粘土をブロック状（2～3cm）に多く含む。また酸化鉄の沈着も多く、やわらかく粘性がある。4層は暗灰色（N3/0）を呈する粘土層である。3層よりやわらかい。5層は灰黄褐色（10YR4/2）と赤色（10R4/6）と明黄褐色（10YR6/8）の混じる層で、3層とよく似るが、地山層の混入はない。

［出土遺物］【第94図】

いずれも遺物の出土量は少なく、小片が多い。その中なら4SK015から出土した1点のみを図化できた。478は壺の口縁で口縁の縁に細かい刻み目が入る。内外面ともに縦方向のハケ目がはいる。二重口縁土器であろうか。



第95図　4SK006実測図

○4SK006【第95図】

W・X－27・28グリッドに位置し、4SI016と重複している。4SI016は古代の住居跡である。当初遺物の出土量が多く廃絶後に土器捨て場になった住居跡と考えて発掘を進めていたため、方形の住居跡という想定で無理に形を造った可能性がある。ただ現況から判断すると、長軸は想定で最大7.5m、短軸が7m を測る。確認面からの深さは5cm 程度である。遺物の出土量は多く、破片数が多くまた、土製模造品の数量も多かった。床面を精査したが炉跡、柱跡などは確認できなかった。

残した土層観察用ベルトから、この遺構の埋土は１層のみであることを確認した。埋土は黒褐色（10YR2/1）を呈するあまり締まりのない土である。ただ、部分的にその土に混じってブロック状に黒色（10YR1.7/1）を呈する焼土塊が入り込んでいた。基本的にこの遺構の埋土である。

また、この遺構自体、壁がほとんど観察できない部分もあり、遺物の分布も遺構外でも出土し、それらと接合するものも多少あった。遺構としての捉え方に問題があった可能性がある。

［出土遺物］【第96図～第101図】

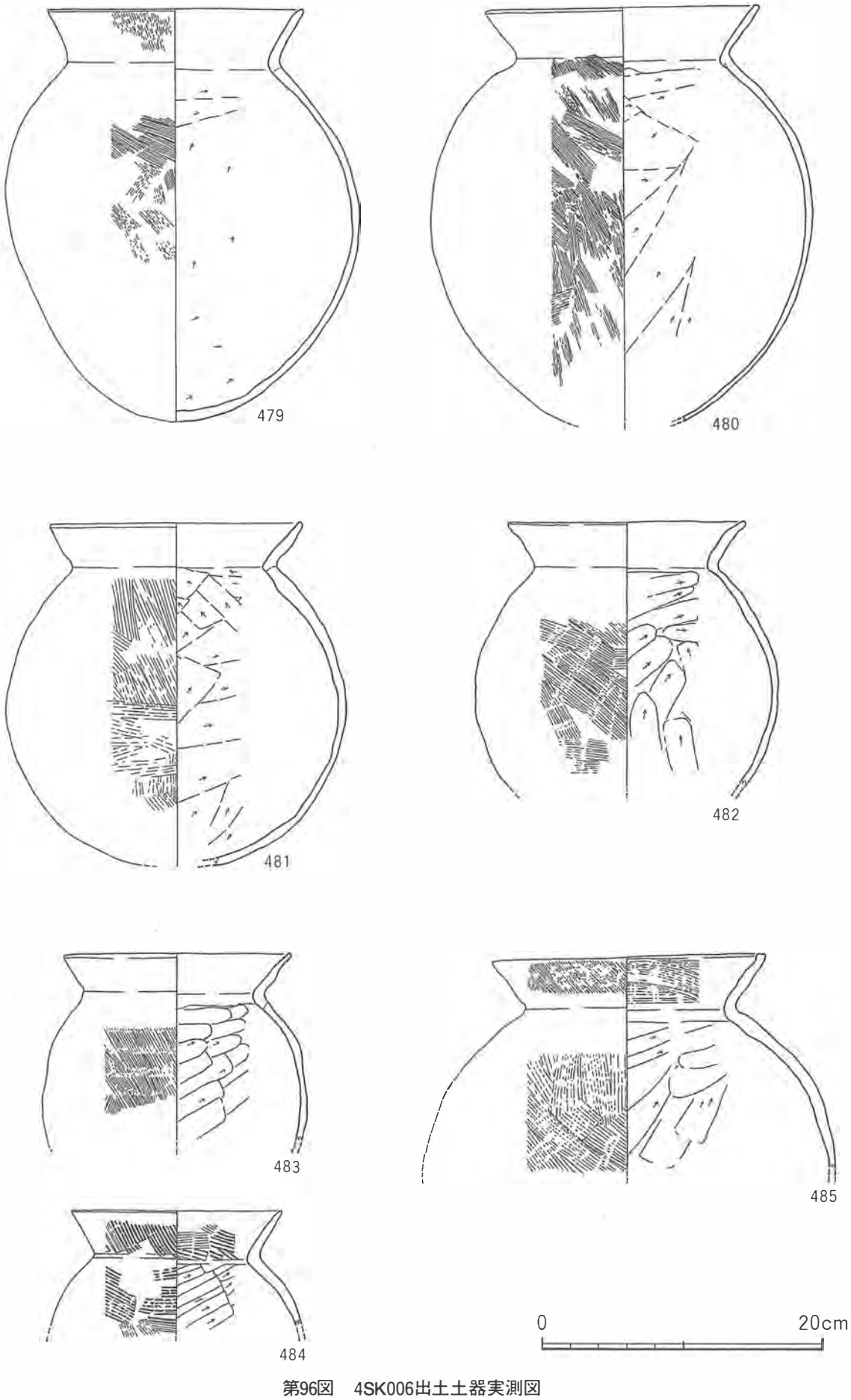
図化したのは、多量の遺物の中から甕９点、壺11点、高坏６点、脚付甕？の脚１点、鉢２点、器台１点、中型甕３点、小型壺14点、小型鉢２点、壺形土製模造品２点、甕形土製模造品１点、鉢形土製模造品６点、不明品１点、甑把手１点、古代須恵器高台付坏１点、石器（砥石2､石錘が1､敲石が１点）である。このうち石器の553、555は、縄文時代もしくは弥生時代のものである。古代の須恵器が混じるのはこの遺構が洪水の影響で上面が削平を受けた際に混入したものと考えられる。

479～486、488は甕である。器形と大きさおよび細部の違いからいくつかに分類できる。胴部が倒卵形を呈し、最大径が上位にあるものは479である。緩やかに屈曲した頸部から口縁部がほぼ直に伸び、口唇部は薄くしていく。外器面はハケ目の後ナデ調整、内器面は丁寧なヘラ削りが施される。480は最大胴部径がほぼ中位にあり球形に近い。頸部には口縁部と胴部との接合状況が観察できる。口縁部はやや外側にふくらみを持ち口唇部は丸くなる。外器面にはハケ目調整が、内器面には丁寧なヘラ削りが施される。器壁は非常に薄い。481と482は器形がよく似るが口縁部の特徴は、481は口唇部が丸まり外面がやや膨らみ、482は口縁部が外へ大きく反っている。胴部の最大径は中位よりも下位にある。485は口唇部が水平に角張り内面上部に浅い溝が走る。口縁部内外面ともハケ目調整される。

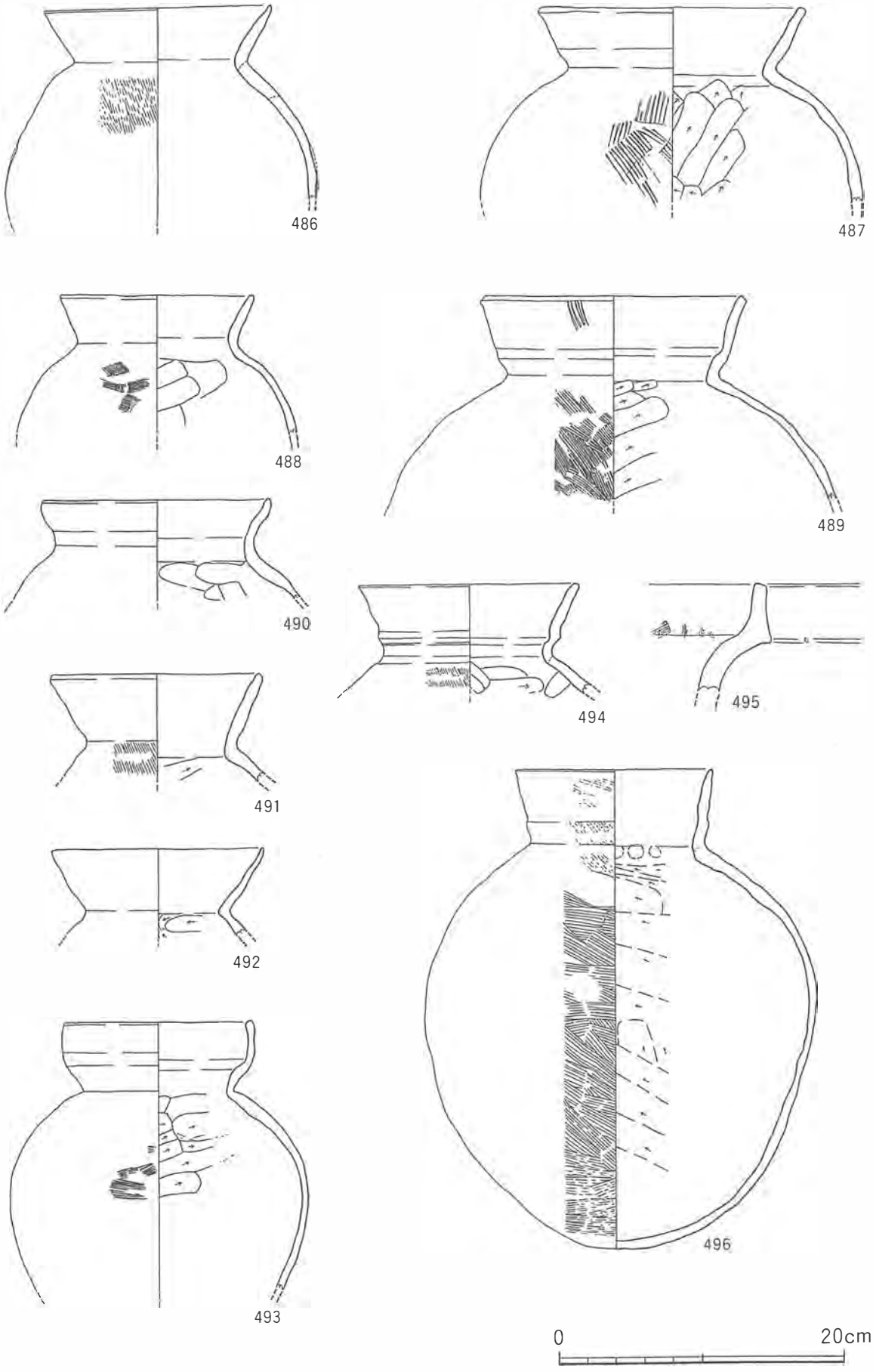
483以下の甕は先のものに比べて小型のものである。483は口縁部が割と直に伸び口唇部は手捏りである。胴部は口縁部に比較して余り張り出さないものである。484は口縁部が直で、483よりしっかりしたつくりである。486・488・490は口縁部径に対して胴部の張り出しが大きく一見すると壺のような感じを受けるものである。486・488は口縁部が直に伸びるものである。490はやや二重口縁の雰囲気のあるもので口縁部断面がやや膨らみを持つ。

487・489・491～499は壺である。これもいくつかに分類できる。489・494・495・496・499は二重口縁壺の部類に入るが、口縁部の形態がかなり異なり明確に分けるのは難しい。大きさでは大型と中型には分けられる。499は、他のものより頸部の絞りが大きく口縁部の径が広くなる畿内系二重口縁壺で、壺形埴輪の流れにつながるものかもしれない。491・492・497・498は畿内系広口壺で、直口縁を持つものである。ただ、491・492は直であるがやや二重口縁の雰囲気を持つ。496は壺の中でも特に口径が狭く、他地域から流入品の可能性がある。全体的な形態は口縁部が締まるほかに胴部の最大径が胴部の中位より上にあり、縦長いのでスマートな印象を受ける。頸部内器面には口縁部接合した際に着いたと推定される指圧痕である。

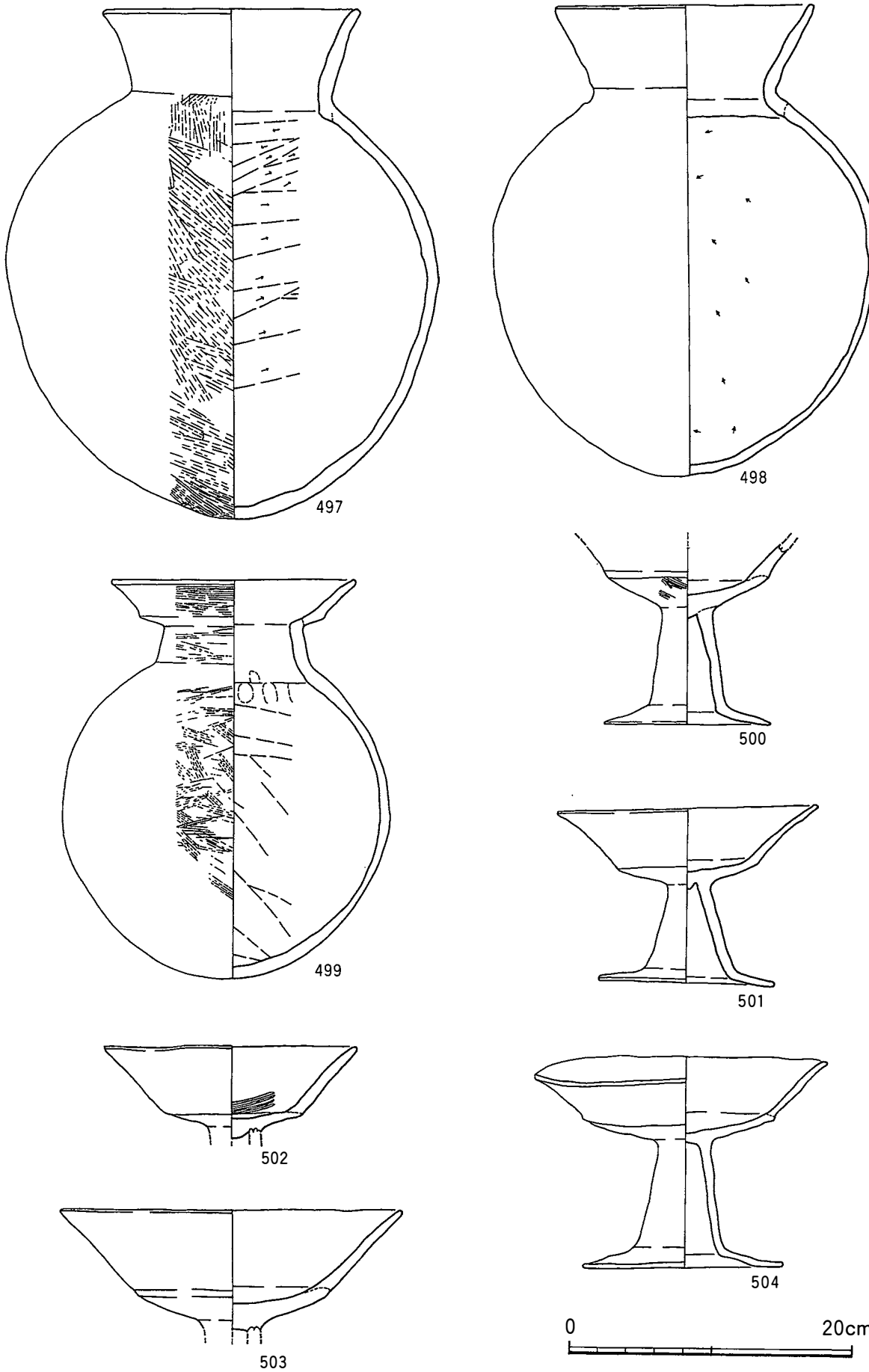
500～514、518は高坏である。坏部の状況と脚部の状況から数種に分けられる。坏の高いもの(502・503)坏部の低いもの、脚部が底部で屈曲が強いものと坏部からものがある。底部での屈曲も坏部から直に近いものとやや開き気味のものに分かれる。518は特殊な形態の高坏である。



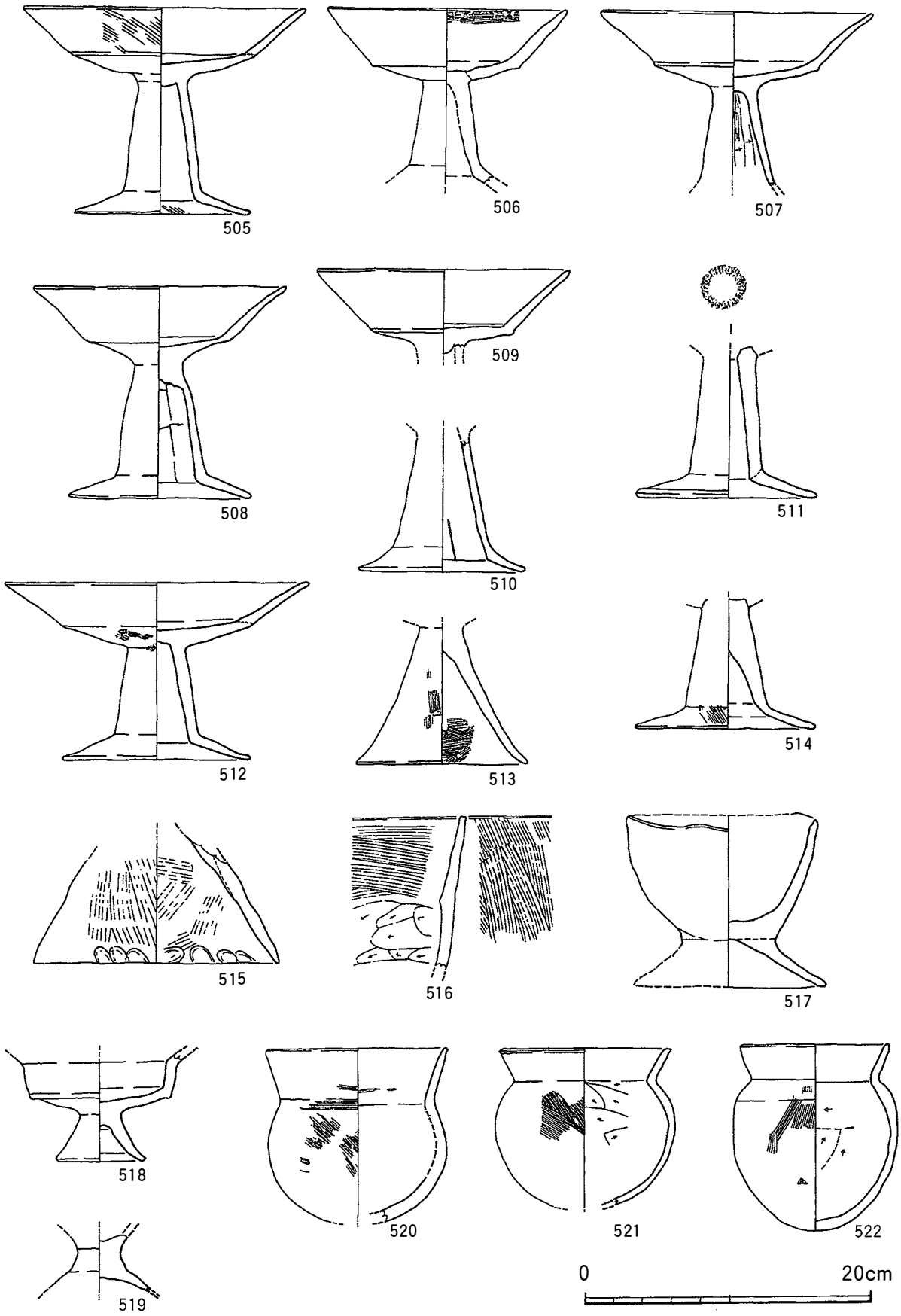
第96図　4SK006出土土器実測図



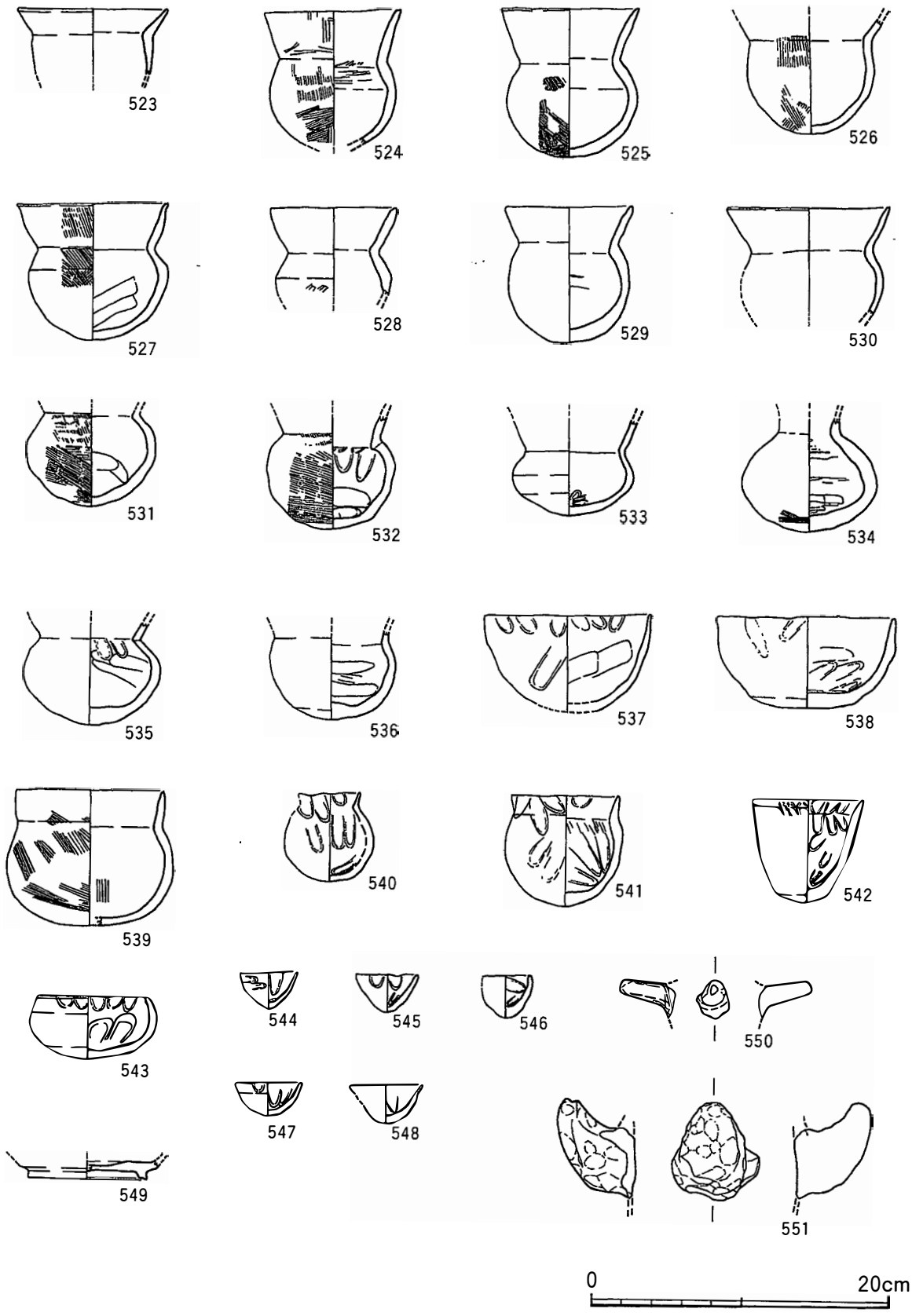
第97図　4SK006出土土器実測図



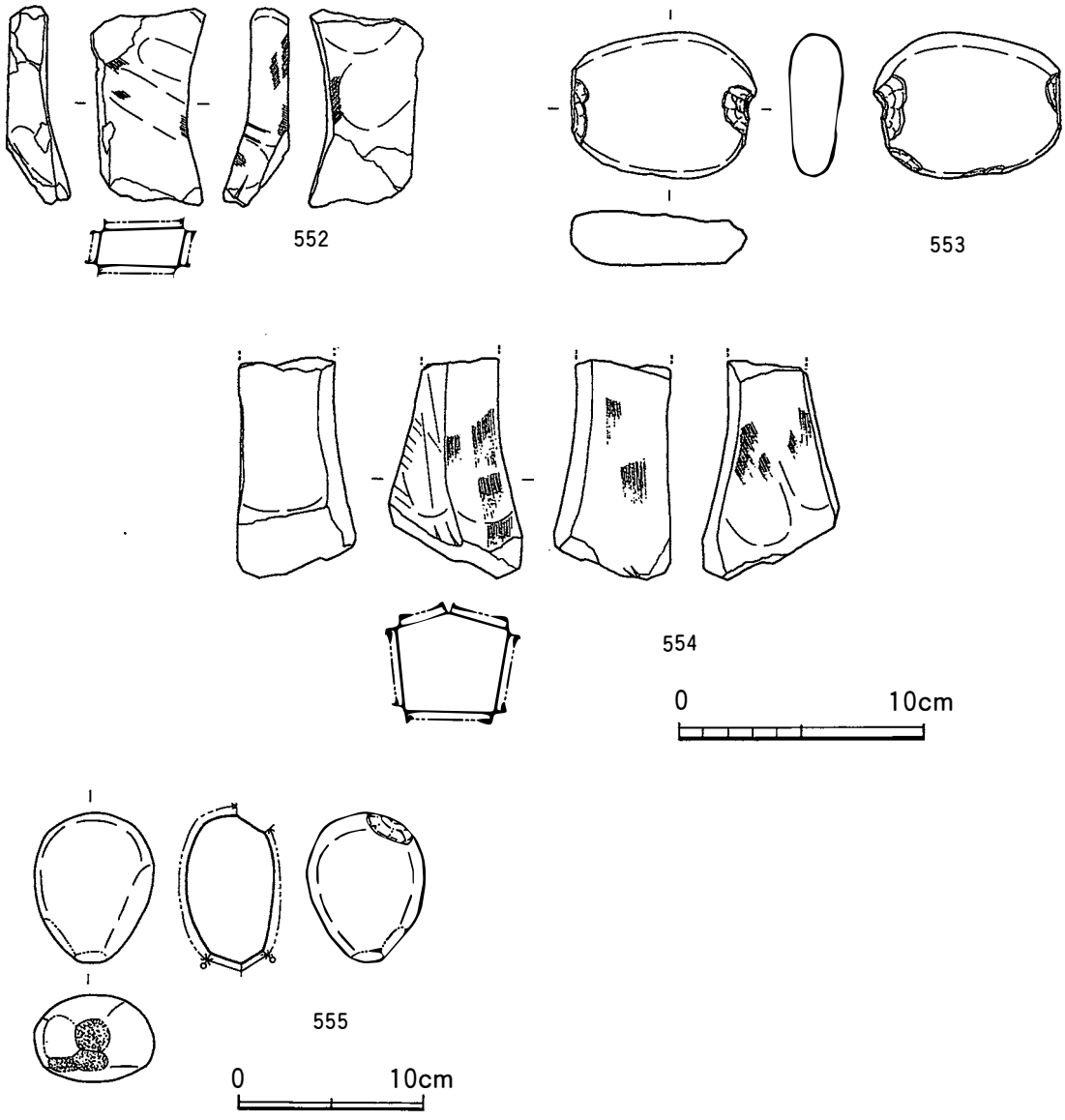
第98図　4SK006出土土器実測図



第99図　4SK006出土土器実測図



第100図　4SK006出土土器実測図



第101図　4SK006出土石器実測図

鉢は脚付と脚のないものの２種で517と516・539である。516は遺構の上位から出土したもので、復元口径が22.0cm を測る。外器面は縦方向のハケ目、内器面の口縁部が横方向のハケ目、胴部内器面は横方向のヘラ削りが施される。517は口径が13.0cm、器高が12.0cm、復元底径が13.0cm を測る。内外器面ともナデ調整が施される。

519は、器台で脚部のみである。ナデ調整が施される。

520～523は小型甕である。520は口縁部が頸部からほとんど直に伸びるもので、復元口径が12.5cm、最大胴部径が12.5cm を測る。外器面はハケ目調整、内器面はヘラ削りが施される。外器面に黒斑がある。521は１層出土で、復元口径が11.4cm、復元最大胴部径が12.5cm を測る。口縁部は520より短く頸部からの開きが大きく、器高が低い。外器面はハケ目が残り、内器面はヘラ削りが施される。522は口縁部が短く、胴部が倒卵形を呈する。復元口径が10.1cm、最大胴部径が11.4cm を測る。外器面には縦方向のハケ目が、内器面にはヘラ削りが施される。外器面には黒斑がある。523は、先のものより小型で復元口径が10.0cm を測る。胴部は口径より狭い。器面調整は不明瞭である。

小型壺は524～536がある。口縁部と胴部の長さの差と最大胴部径と口径の差によって、大きく３種類に分

類できる。頸部から口縁部の長さが比較的長く、口縁部の開きが小さく、口縁部と胴部の長さがほぼ等しいもの（524・525・527・528・529・531・532・536)、最大胴部径より口径が明確に広いもの（526・530・533・535)、口径が最大胴部径より明確に小さいもの（534）である。この中には完形のものだけではないので分類の誤りは含まれる可能性はある。524は口径が9.2cm、復元最大胴部径が8.5cmを測り、外器面にハケ目、内器面にはケズリ後ナデが施される。525は口径が9.0cm、最大胴部径が8.8cm、器高が9.9cmを測り、外器面移ハケ目、内器面に指ナデが施される。526は口縁部が欠損し口径が不明であるが、頸部より大きく開く。復元最大胴部径は8.4cmを測る。外器面はハケ目、内器面はナデ調整される。527は２層の出土で、復元口径が10.0cm、最大胴部径が9.2cm、器高が9.1cmを測り、外器面はハケ目、内器面はヘラ削りが施される。口縁部がやや二重口縁気味でやや内湾する。外器面に黒斑がある。528は１層と２層の出土である。復元口径が8.4cm、復元最大胴部径7.8cmを測る。外器面にハケ目、内器面に横ナデが残る。529は２層の出土で復元口径が8.4cm、復元最大胴部径が8.1cm、器高が9.0cmを測る。外器面には弱いハケ目、内器面にはハケ目の後ナデ調整が施される。外底部に黒斑がある。530は口径が10.8cmを測り、復元最大胴部径は口径より小さく9.5cmほどである。磨耗が進み、内外器面とも調整は不明である。531は１層の出土で、口縁部が欠損しているが頸部からかなり開き気味である。最大胴部径が8.5cmを測る。外器面はハケ目が、内器面がナデや指ナデが残る。外器面には赤色顔料が塗布される。532は口縁部が欠損しているが、頸部からの立ち上がりがあまり開いていない。最大胴部径は8.5cmを測る。外器面には横方向のハケ目、内器面頸部に指押さえ、胴部はナデと指頭圧痕が残る。533は胴部が他のものよりも横に広く、最大胴部径が8.1cmを測り、さらに口径は広いと推定できる。外器面は横ナデ、内器面はヘラ削りと底部付近は指頭圧痕が施される。534は頸部が締まり、口縁部はほぼ直に立つものである。1層から出土し、復元最大胴部径が9.0cmを測る。外器面はハケ目の後ナデ調整され、内器面はケズリが施される。535は１層の出土で、最大胴部径が9.1cmを測り、口径は胴部径とほぼ同じと推定した。外器面はナデ調整、内器面は頸部に指頭圧痕、下位は指ナデによる調整と考える。外器面には意図的な打ち欠きと考えられる跡がある。536は頸部より上位が欠損している。最大胴部径が8.3cmを測る。外器面はナデ調整、内器面はヘラ削り後指ナデが施される。外器面に黒斑がある。

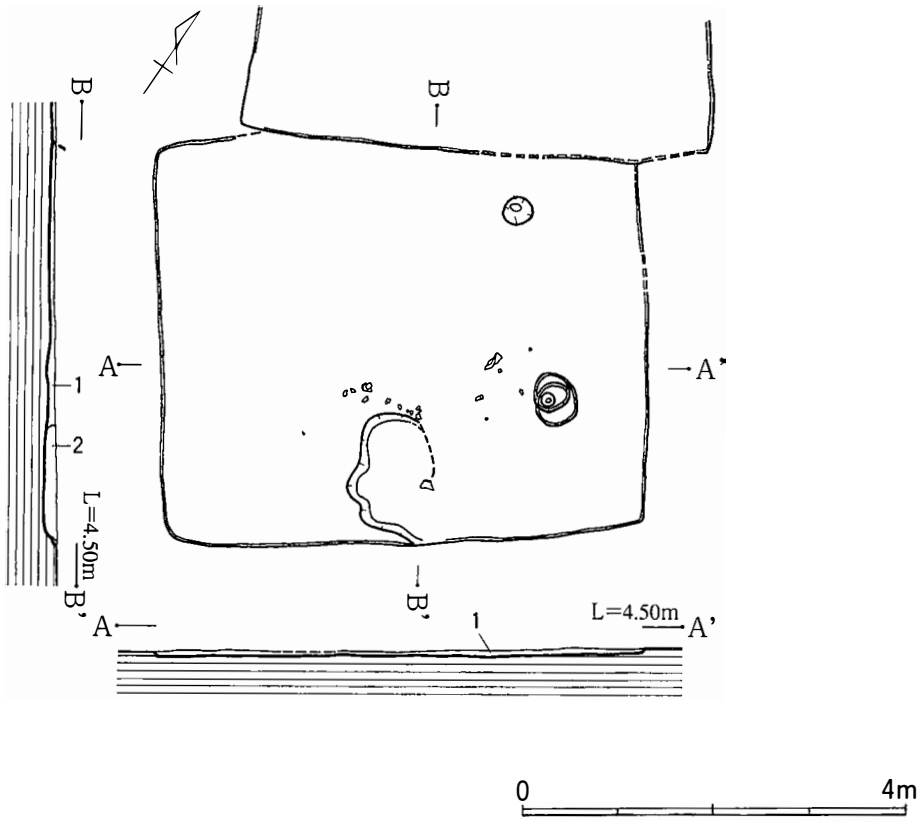
537・538・539は小型鉢とする。537・538はともに手捏によるものである。537は復元口径が11.2cmを測り、復元器高が6.5cmほどを測り、内外器面には指頭圧痕と指ナデによる調整、内器面体部にはヘラ削りもみられる。外底面には黒斑がある。538は復元口径が11.8cm、器高が6.0cmを測り、537より平たい。内外器面は指ナデによる調整が施される。外器面には煤が付着する。539は口縁部と頸部を明瞭に持つものである。口縁は頸部から直に立ち上がる。1層の出土で、復元口径が9.6cm、器高が9.1cmを測る。外器面はハケ目の後ナデ、内器面もハケ目の後ナデが施される。

540～548は土製模造品で、いずれも調整は指による手捏である。537・538はやや大型の鉢形土製模造品で、調整は口縁部が指ナデ、体部の内外器面も指ナデ、ナデである。540・541は壺形のもので口縁下部がすぼまるが、540がよりすぼまり、541がやや大きく口縁の開きも大きい。542は口縁部の長さが短く、外反し、底部が平底形に近い甕形のものである。543は胴部より口縁部の小さくなる鉢形のものである。器高は低い。544～548は口径と器高の比が若干異なるが、一応すべて鉢形のものとしておく。

550は不明器の把手で、丁寧なナデ調整でされ頂点部に穴がある。551は甑の把手である。

549は須恵器の高台付坏の底部で古代のものである。高台は貼付によるもので、高台の畳付部に弱い凹部がめぐる。紛れ込みであろう。

石器には砥石・石錘・敲石がある。554・552は砥石である。石材は不明である。553は石錘である。両側片を打ち欠き、抉り部分を造り出している。555は小型の敲石である。表面と裏面はかなり摩耗している。



第102図　4SK010実測図

下部にはタタキに使用した跡がはっきりと残る。

○4SK010【第102図】

Y－27グリッドに位置し、4SI011と重複している。この遺構が出土した付近はⅣ層が厚く、Ⅴ層は削平されていたため、4SK010・4SI011を確認することは非常に困難であった。掘り下げを繰り返した結果、両遺構を確認し、この遺構が4SI011に切られていることまで分かった。壁面の残存度は4SI011と変わらず、確認面からの深さ４～10cmほどであった。

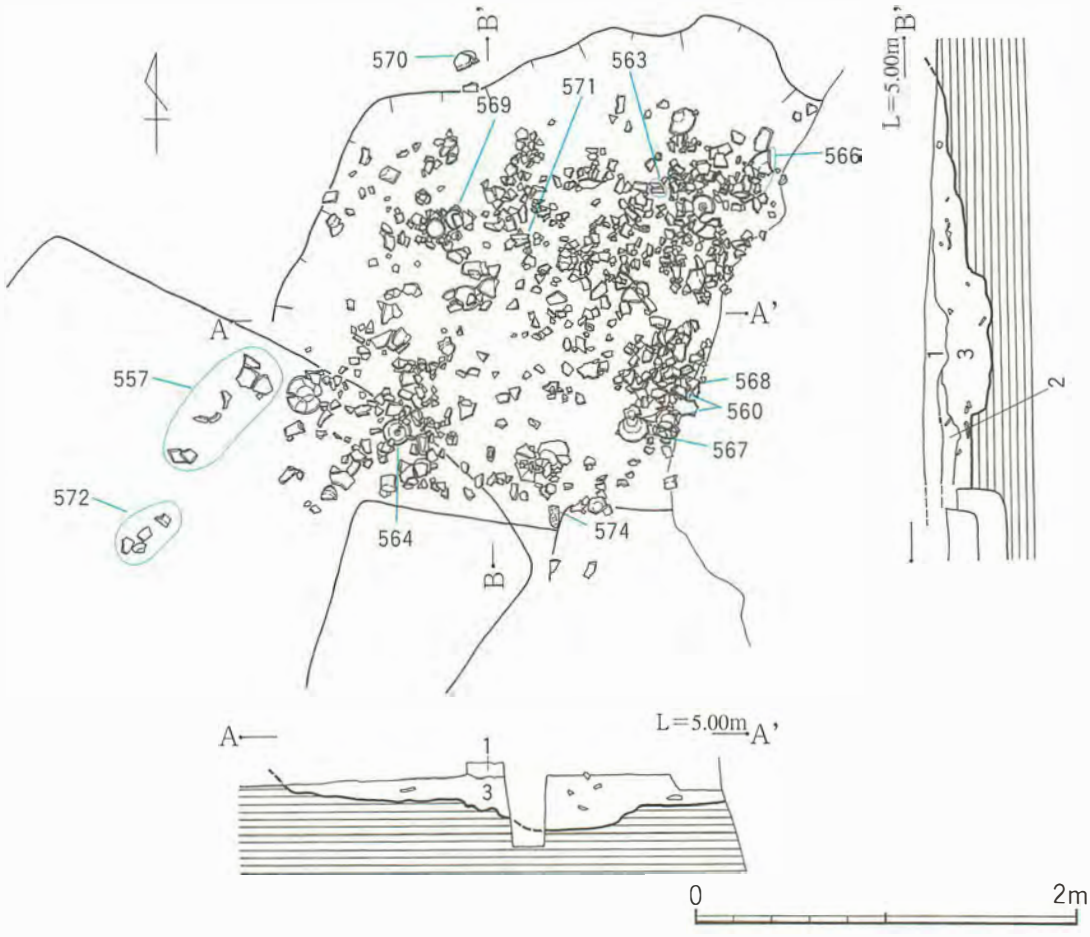
柱跡らしきものを２本は確認できたが、それ以上の柱跡は見つからず、また焼土なども確認できなかったため土坑の扱いとした。ただ、確認した形は住居跡としてもよいようである。一角に浅い掘り込みを確認したが、どういう性格があるのか不明である。

長軸で5.1m、短軸で4.3mほどを測り、長方形を呈する。

埋土としては１層が中心で、2層は掘り込みの埋土である。1層は褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。青灰色の粘土がブロック状に混じる。締まりは弱い。2層は黒褐色（10YR3/2）を呈し、酸化鉄の沈着を少量含む。粘土質で締まりが強い。

［出土遺物］

遺物の出土量は少なく、破片がほとんどで図化できるものは無かった。ただ、小破片は古墳時代の遺物であることは確認している。



第103図　5SK032遺物出土状況実測図

○5SK032【第103図】

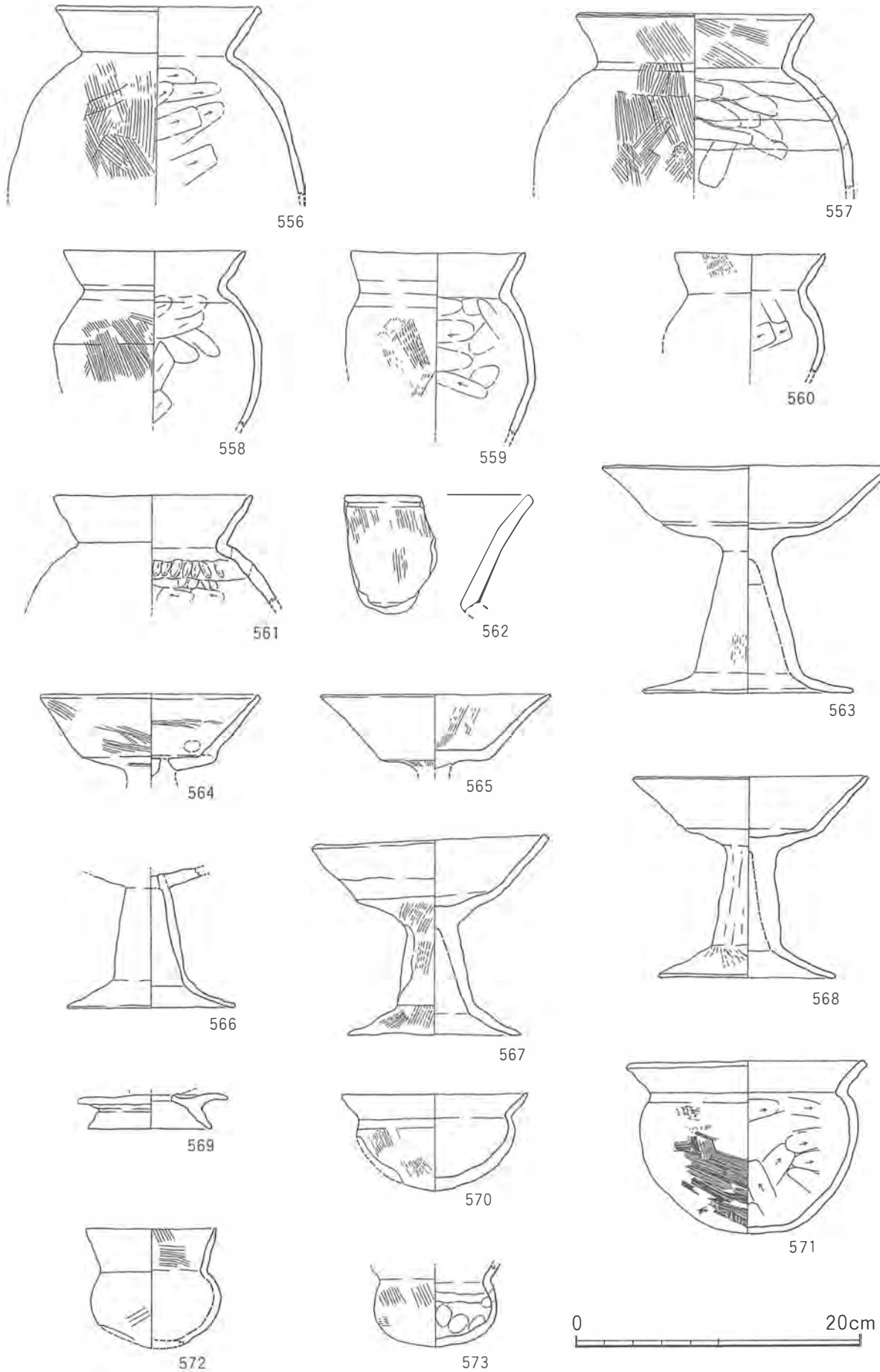
b－34グリッドに位置し、5SI031・5SI033と重複している。遺構東側が撹乱の為全体は不明であるが、南北軸2.2m、東西軸2.4mであり、他の遺構に切られているため不明確であるが不整形な土坑になるものと思われる。確認面からの深さ34cmを測る。

埋土は3層に分割できた。1層は明黄褐色（10YR7/6）を呈する、締まりのある粘質土である。ややきめの細かな砂粒を含む。この層中に遺物は含まれない。2層は黄褐色（10YR5/6）を呈する粘質土層である。土質は基本的に1層と大差ないが、土色は1層よりやや暗くなる。またこの層には遺物が含まれる。3層は、にぶい黄褐色（10YR4/3）を呈し、1・2層に比べて締まりがなく、ホクホクした感じの粘質土である。土色はこの層がより褐色が強くなり、遺物の大半はこの層から出土している。

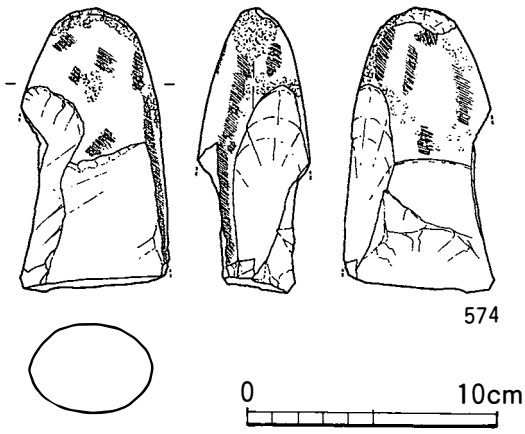
［出土遺物］【第104図・第105図】

遺物の出土量は多かったが、図化できるものは少なかった。図化した遺物は、甕が5点、壺片が2点、高坏が6点、器台が1点、鉢が2点、小型壺が2点、石器が1点である。

556～560は甕である。556は、口縁部は頸部から直に伸び、やや膨らみながら口縁端部はやや丸まりながら外面につまみ出されて終わる。頸部は締まり、胴部最大径は中位もしくは下位になる。外器面は縦方向のハケ目が残り、内器面は横方向のヘラ削りがなされる。557の口縁部はやや外反しがら直に伸び口唇部は角張る。胴部は最大径が中位付近にある。外器面は縦方向のハケ目が施され、内器面は斜め方向のヘラ削りがなされる。内器面にはまた粘土紐の接合痕が残り、製作技法が確認できる。これらは大型の部類にはいる。558は口縁部が途中でやや外部に張り出し、口唇部が尖り気味になるものである。外器面には縦方向のハケ



第104図　5SK032出土土器実測図



第105図　5SK032出土石器実測図

目が残り、内器面には不定方向のヘラ削りがある。頸部付近は横方向に近い。559は頸部が余り締まらず、口径は胴部最大径に近く、頸部からやや内湾しながら、口唇部は尖り気味になっている。外器面にはハケ目が残り、内器面は不定方向のヘラ削りが施される。558・559は、中型のものである。560は、口縁部が大きく、それに比べて胴部が非常に小型のもので、全体的には小型の甕である。口縁部は途中ややふくらみを持ちながら口唇部が尖り気味となる。外器面は表面にハケ目は見られず、内器面はヘラ削りされる。

561は畿内系広口壺である。口縁部がほぼ直に伸び、口唇部は尖り気味に終わる。外器面の調整痕は不明であるが、内器面の頸部近では指頭圧痕が残り、その下はヘラ削りがなされている。また、粘土紐の接合法が断面で観察できる。562も壺の口縁部のみで、直口のもので外器面に縦方向のハケ目がみられる。口唇部は角張る。

563～568は高坏である。坏部の径が大きいものと割りと小さく立ち上がり角の急なものがある。569は類例を確認できなかったが、一応器台とする。570・571は頸部を持つ鉢である。大きさの差があり、571は高さも高い。572・573は小型壺で底部を打ち欠いたような痕跡がある。

574は磨製石斧の破片である。表面に琢調の跡が残ることから弥生時代のものであろう。石材は安山岩である。

○5SK036【第106図】

b－33グリッドに位置している。南北軸4.5m、東西軸4.1m の不整形の土坑で、確認面からの深さ40cmほどを測る。住居跡の可能性を考え確認作業を進めたが、明確な炉や柱痕跡は見つけられなかったため、土坑とした出土遺物は小破片が多く、遺構外との接合もある。

埋土は２層が主で１層は部分的な層である。1層は、灰黄褐色(10YR6/2) を呈し、褐色が強い。土質は砂をほとんど含まず粘性が強い。2層は褐灰色(7.5YR4/1) を呈し、褐色が強い。砂はほとんど含まない。

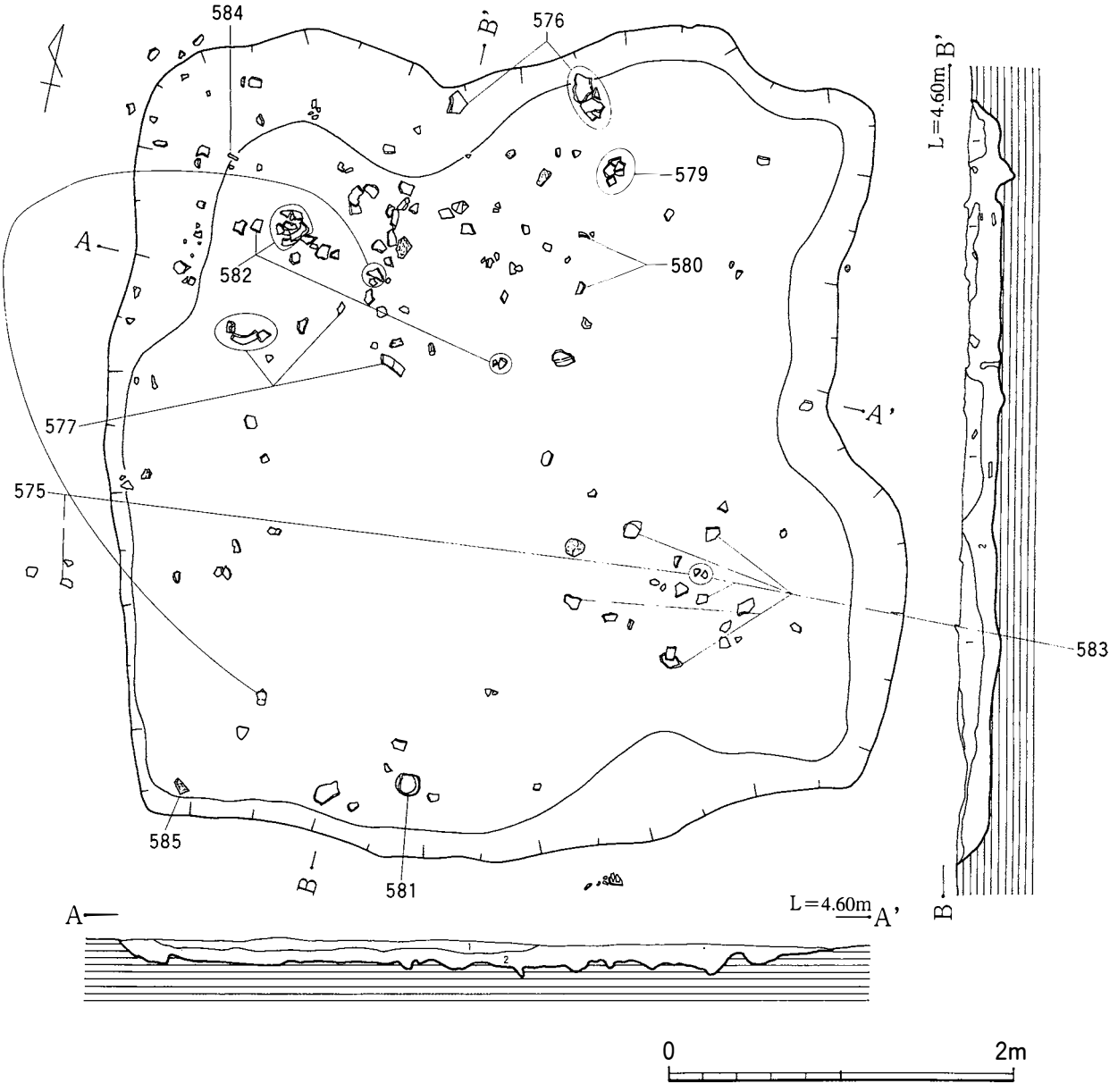
［出土遺物］【第107図】

出土した遺物のうち、図化できたのは土師器の甕が３点、壺が１点、埦が２点、坏が２点、鉢が１点、勾玉様土製品が１点、砥石が１点である。

甕は575・576・577である。575は中型の甕で口縁部は低く厚みがあり余り開かず、口唇部は丸くなる。胴部は球形を呈し、外器面には縦方向のハケ目調整、内器面には下位では下方から、上位では横方向のヘラ削りが施される。576は口径が胴部に比して狭く、やや胴張りの器種である。口縁部は頸部からほぼ直に立ちながら口唇部近くで強く外反する。胴部外器面は縦方向のハケ目、内器面はヘラ削りが施される。577は口縁部がやや直気味である。

578は壺の口縁部で二重口縁ではないが口唇部下に刻み目をいれた突帯がめぐる。

579～582は埦である。579・580は器壁の厚さに差はあるが、口径や器高、器表面の調整など、形態的に類似するものである。579は器壁が薄く、口唇部がやや外反する。外器面は口縁部が横方向、体部中位以下が斜め方向のヘラ削りが施される。580では口唇部の外反はないが、やや外側に薄くなる。外器面はやはりヘラ削りが施される。581・582は形態がやや異なるが、ともに坏とする。581は須恵器の蓋を模倣した土師器



第106図　5SK036実測図

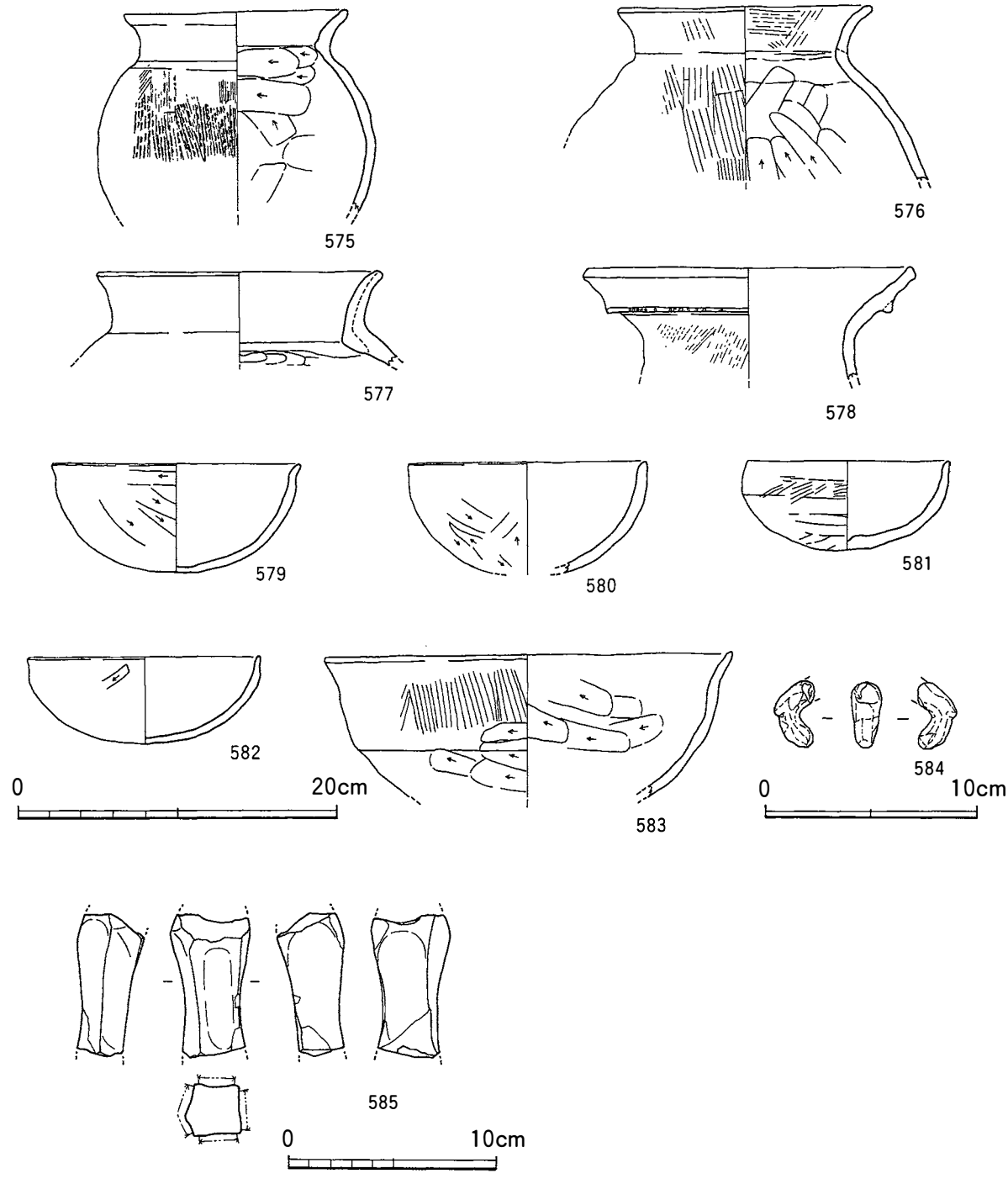
の坏で底部は多方向のヘラ削り、体部中央の屈曲部より上位はハケ目が施される。口唇部は薄くなり、弱く外反する。582は口縁部が薄なり弱く外反し、器壁は薄い。外器面の一部にヘラ削りが残る。埦に近い形態を持つが、器高が低い。

583は大型の鉢の一部である。外器面体部には弱い稜が入り、その上下で調整が異なる傾向がある。上位では縦方向のハケ目、稜線付近から下位は横方向のヘラ削りが施される。内器面は横方向のヘラ削りが施される。体部上位でやや径が狭くなり、そこからやや外反する。端部は断面がやや丸くなる。

584は勾玉状の土製品である。頭部が欠損しているので明確ではないが、胴部の屈曲から勾玉であろう。585は砥石である。4面とも使用痕があり、摩耗した跡からこの砥石が非常によく使用されていたことが分かる。石材は石英粗面岸である。

○4SK009【第108図】

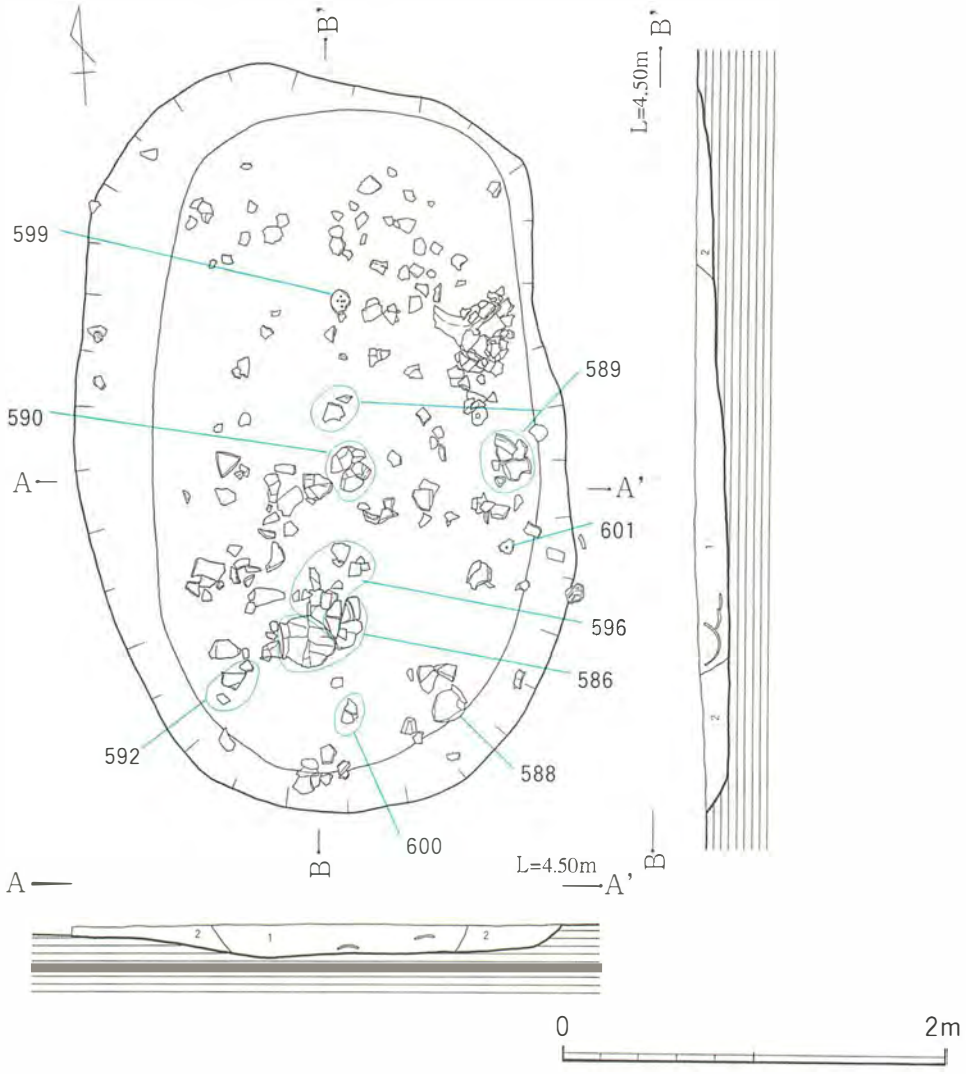
W－27グリッドに位置している。軸を南北に取る長楕円形の土坑でN－５°－W。長軸3.8m、短軸2.6m、



第107図　5SK036出土遺物実測図

深さ16cmを測る。かなり多くの土器が出土している。埋土から焼土や炭化物がでており、炉よりも大きい火をたいた跡である可能性がある。場合によっては土器の焼成坑の可能性もある。この遺構の埋土中から出土した甕片が4SE005から出土したものと接合したことから、両遺構は同時期もしくは近接した時期に廃棄された可能性がある。

この遺構は確認した面から底面まで深さが浅いので土層も以下のように2層に分層できるのみである。1層は黒褐色（10YR3/1）を呈し、粘土質で硬い。茶色の堅い粒と茶色の柔らかい粒を多く含み、砂を少量、焼土を微量に含む。炭化物を少量、一部塊で出土する。2層は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、粘土質で堅い。



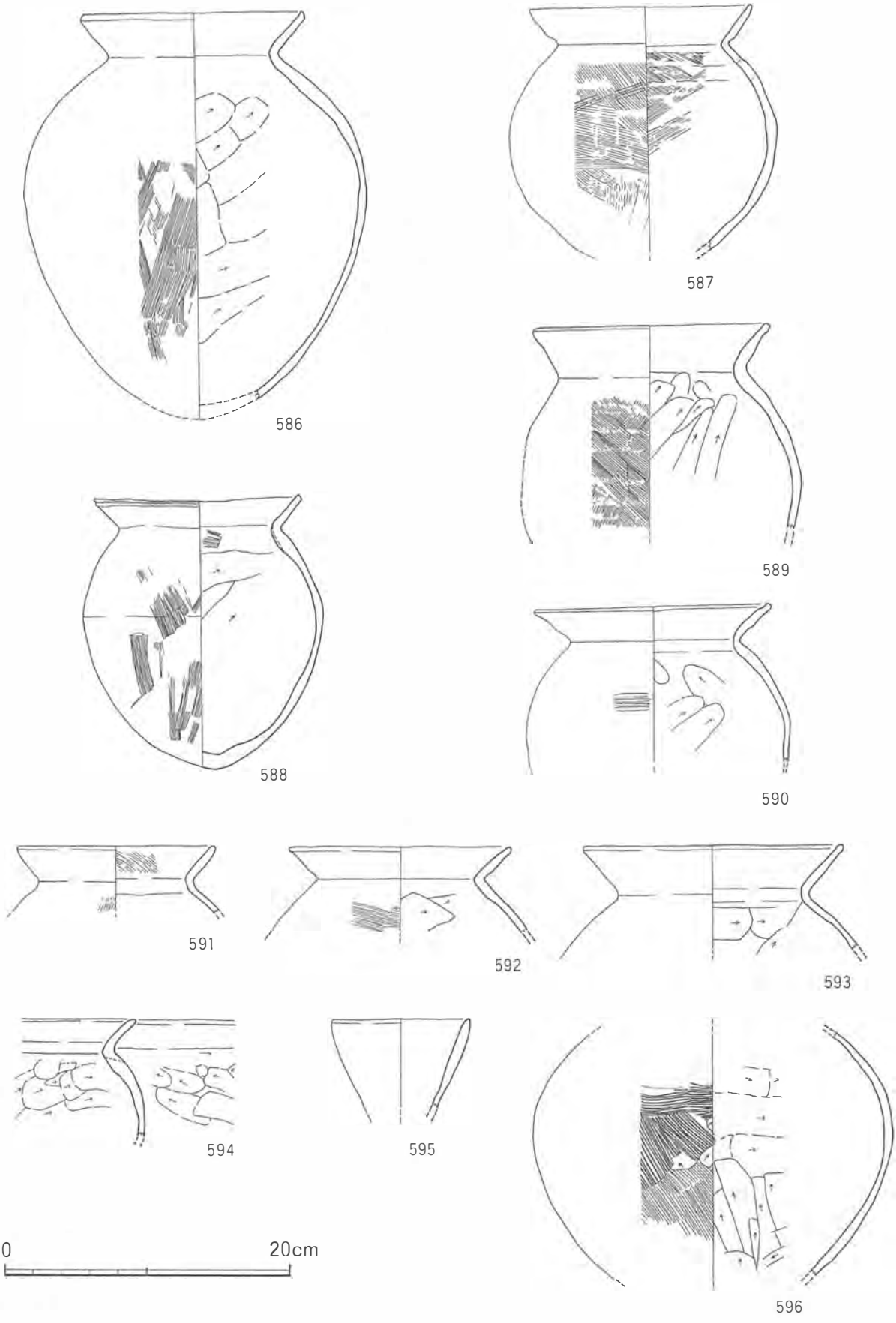
第108図　4SK009実測図

茶色の柔らかい茶色の粒と茶色の堅い粒を多く砂を少量、炭化物と焼土を微量に含み、酸化鉄も多く筋状に含まれている。

［出土遺物］【第109図・第110図】

出土遺物は多くその中から図化したのは、甕が９点、壺が２点、高坏が３点、器台が５点、鉢が２点、小型壺１点、大型甕１点、台石１点である。

甕には586～594がある。586、587、589・590・588などにまとめられそうである。586は口縁部がほぼ直で、口唇部は内側にややつまみ上げたようになり、外部に稜を形成している。胴部は倒卵形で、最大径は口縁部径の1.5倍ほどである。外器面の調整は磨耗して不明瞭になっているが、縦方向のハケ目である。内器面は斜め方向のヘラ削りが施される。587は口縁部が肥厚し直になるが、外側が厚くなる。胴部は丸形である。外器面は左上がりのタタキを施した後に上部は斜め方向のハケ目、中位は横方向のハケ調整が施されている。内器面はハケ目が残り下位はヘラ削りが施されている。底部は尖り気味である。588は口縁部がやや内湾気味で、口唇部はやや角張り気味で外面に稜がみられる。胴部は卵形である。外器面にはハケ目が残る。内器面は口縁部近くにハケ目が残り、その下部はヘラ削りが施されている。底部は尖り気味である。589は口縁部が直で、口唇部は丸まっている。胴部径は口径よりやや大きめである。外器面はタテ方向のハケ目が残る。内器面は縦方向のヘラ削りが施されている。590は口縁部の開きが大きく、ほぼ直に伸び外側がやや肥厚す



第109図　4SK009出土土器実測図

る。口唇部は丸くなり、内側に一条の窪みが走る。胴部は丸まり気味で、横方向のタタキが残る。内器面は斜め縦方向へヘラ削りを施している。胴部最大径は口縁径とほぼ同じである。593もほぼ同じであるが、やや口縁部が立ち上がり直になる。591・592は587に似る。594は口縁部が直で口唇部は丸まりながら尖り気味である。内外器面は横方向のヘラ削りが施される。

大型二重口縁甕である372は、口縁部から胴部上位がこの遺構から出土し、胴部中位から底部が4SE005から出土しており、整理作業中に接合した。この土器は「山陰系」の典型な口縁部を持ち、胴部と口縁部の間の頸部がわずかにすぼまる。ただ、この遺構での出土層位は上層であるのに対し、井戸跡（4SE005）からの出土層位は下層であり、この遺構の廃棄時期の方が井戸跡の廃棄時期よりやや早い可能性はある。

壺には595・596がある。胎土・焼成などがよく似ているが、器形の特徴から別物であると判断した。595は直口壺の口縁部である。この手の壺としては口径が小さい。596は壺の胴部である。倒卵形を呈し、外器面には斜め方向のハケ目による調整痕が残る。内器面は底部付近が縦方向、中位より上は横方向のヘラ削りが施されている。

高坏には597・598・600がある。597は、坏部の口縁部だけの破片である。推定口縁径は20.4cm を測る。一部に黒斑がある。598は高坏の脚部片である。上層の出土である。調整はナデと一部ハケ目である。外底面に黒斑がある。600は下層の出土で、高坏の脚部で中実のものである。表面はナデ調整がなされる。601は、上層の出土で脚部のみである。かなり開くもので穿孔がある。坏部はないが小さいものであろう。外底面には黒斑がある。

器台には599・601～604がある。599は高坏の脚部の可能性もあるが、一応器台にする。上層で出土し、ハの字に開くもので、穿孔されている。外器面はハケ目が施される。内器面はナデ調整である。外底面には黒斑がある。601は、脚部のみで、脚部の付け根に比べて大きく広がる。透かしがある602は、上層出土で受部から脚部上部まで残る器台である。口径は9.8cm を測る。脚部に穿孔される。603は中心に孔の空いた器台の受部である。上層の出土である。604は、器台の脚部で穿孔がある。脚部は低い。

小型鉢には605・606がある。605は復元口径10.0cm、606は復元口径は10.7cm をそれぞれ測る。いずれも上層の出土である。

607は小型壺で口縁部はやや内湾しながら、長く伸びる。下層の出土で、復元口径は12.3cm を測る。

石器としては608がある。砥石もしくは台石として利用されたもので、各面に摩研された跡がある一方、表面と裏面には敲かれた痕跡が残る。

○4SK025【第111図】

Y－27グリッドに位置し、4SB036と重複している。軸を南北に取る隅丸長方形の小型土坑でN－3°－W。長軸1.5m、短軸1.1m、確認面からの深さ27cm を測る。この遺構は周囲の住居跡と関係があるものとして住居跡の一部との見方もあったが、その証拠はなかった。

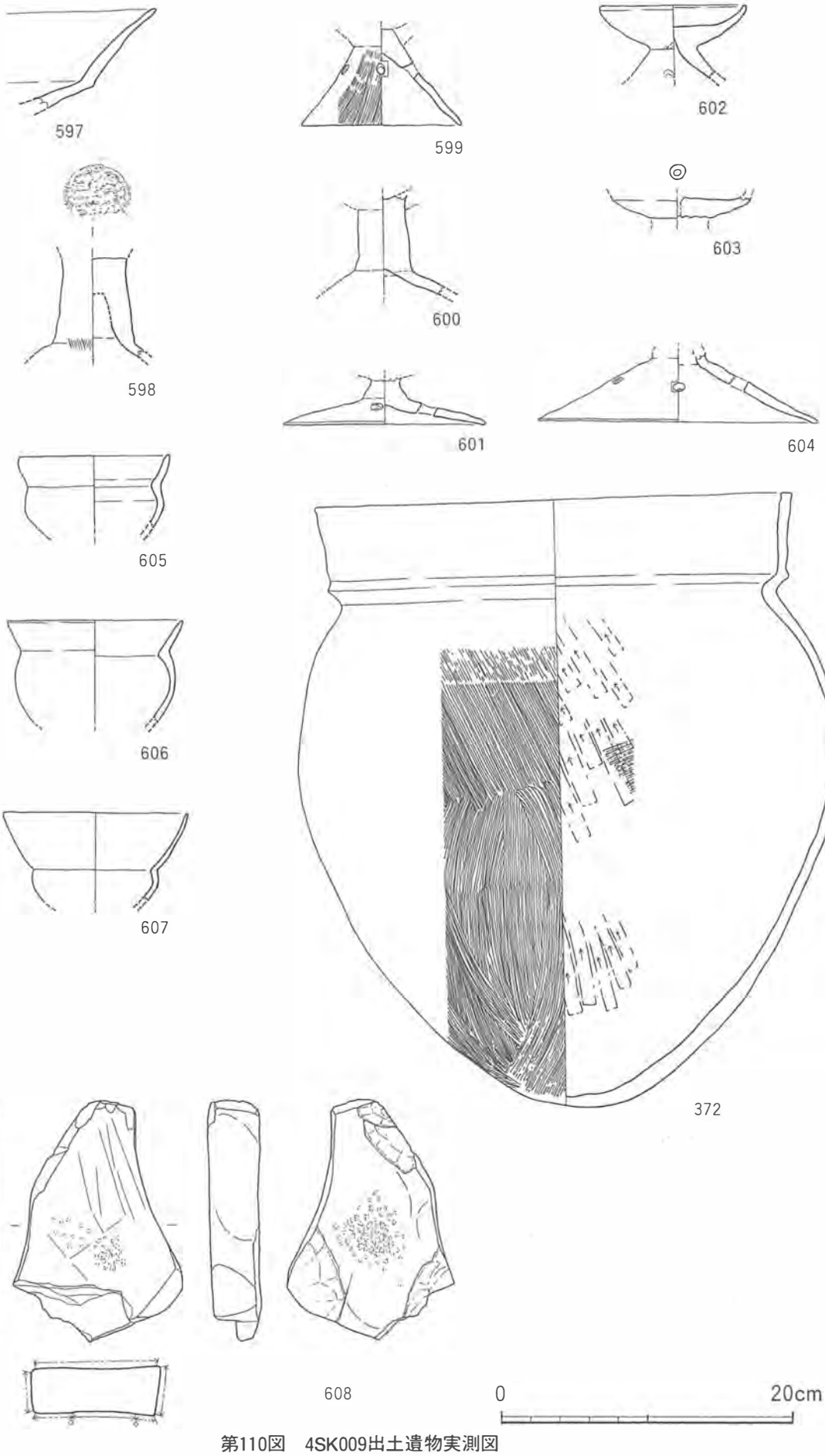
埋土は自然堆積によるものと判断している。土層は、1層が黒褐色（10YR3/1）を呈し、粘性のある土である。やや粗で、遺物を多く含む。2層は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、良く締まった強粘性の土である。3層は暗灰褐色（7.5YR3/3）を呈し、軟粘性土である。遺物わずかに含む。

［出土遺物］

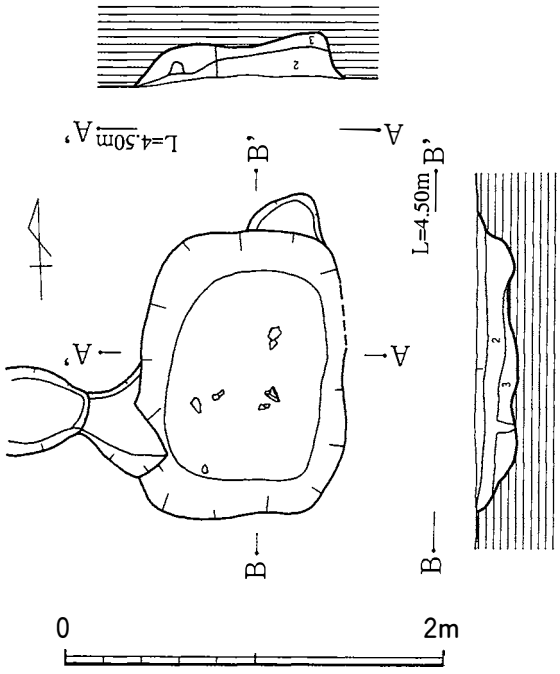
遺物は出土したが、小破片が多く図化はできなかった。

○4SK032【第112図上左】

W－28グリッドに位置している。軸を南北に取り、中央がくぼんだ長楕円形の土坑でN－33°－W。長



第110図　4SK009出土遺物実測図



第111図　4SK025実測図

軸3.6m、短軸0.4m、確認面からの深さ16cm を測る。南西部に焼土が堆積していた。

埋土は大きく２層に分けられた。1層は、黒褐色（10YR3/1）を呈する。炭化物が集中する。1～２粒の焼土を多く含む。2層は黒褐色（10YR3/2）を呈し、ややわらかい粘土質層である。炭化物が少量混入し、やわらかい茶色の粒子を多く含む。やわらかい黒い粒子をやや多く含む。酸化鉄が沈殿したような茶色の粒子をやや多く含む。炭化物・焼土を含む。

［出土遺物］【第113図】

この遺構から出土した遺物は、610・611・614・615・616・617である。

610は、中型の甕である。611は口縁部がややそり気味の直口壺である。615は高坏の脚部である。裾部が水平近くまで開くものである。616は胴部のみであるが頸部の締まり具合から壺と判断した。614は小型の壺である。617は杓子形の土製模造品の一部であろうか。

○4SK030【第112図上中】

X－28グリッド～Y－28グリッドにかけて位置している。長軸を N－16°－W 方向に取る不定形な土坑である。長軸1.9m、短軸0.5m、深さ14cm を測る。遺物の中には、明らかに中世の瓦器椀と認められるものが出土している。しかし、これは遺構上部の砂層に混じっており、Ⅶ区の大部分で確認した洪水によって紛れ込んだものと判断し、ここでは触れない。

土層は上部の砂層を取り去ると１層の黒褐色（10YR3/1）を呈する、やわらかい粘質土が現れる。やわらかい茶色の粒子を多く含み、またやわらかい黒い粒子をやや多く含む。炭化物と焼土をごく微量含む。2層は黒褐色（10YR3/2）を呈するやわらかい粘質土である。

［出土遺物］【第113図】

第113図に図化したうち、この遺構から出土した土器は、609の甕、612の高坏、613の小型壺の３点である。

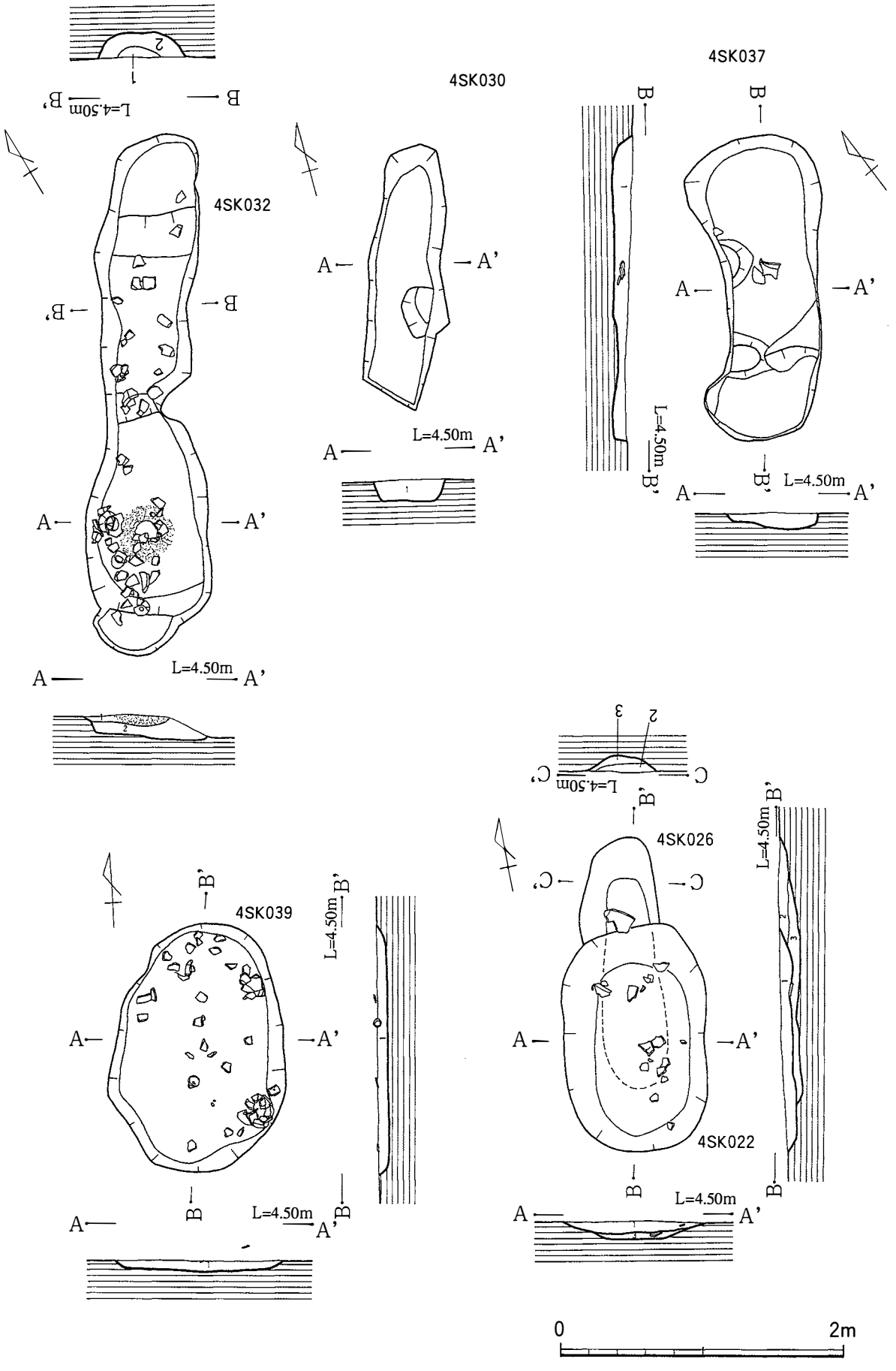
609はやや口縁部が直線的に伸びラッパ状に開き、口唇部端部断面は丸くおさまる。頸部から口縁部までの破片である。外器面には縦方向のハケ目が施される。

612は、高坏の坏部である。口縁部が屈曲部から急激に外反している。端部でさらに開く。屈曲部は明瞭な稜をみせる。外器面にハケ目を残す。

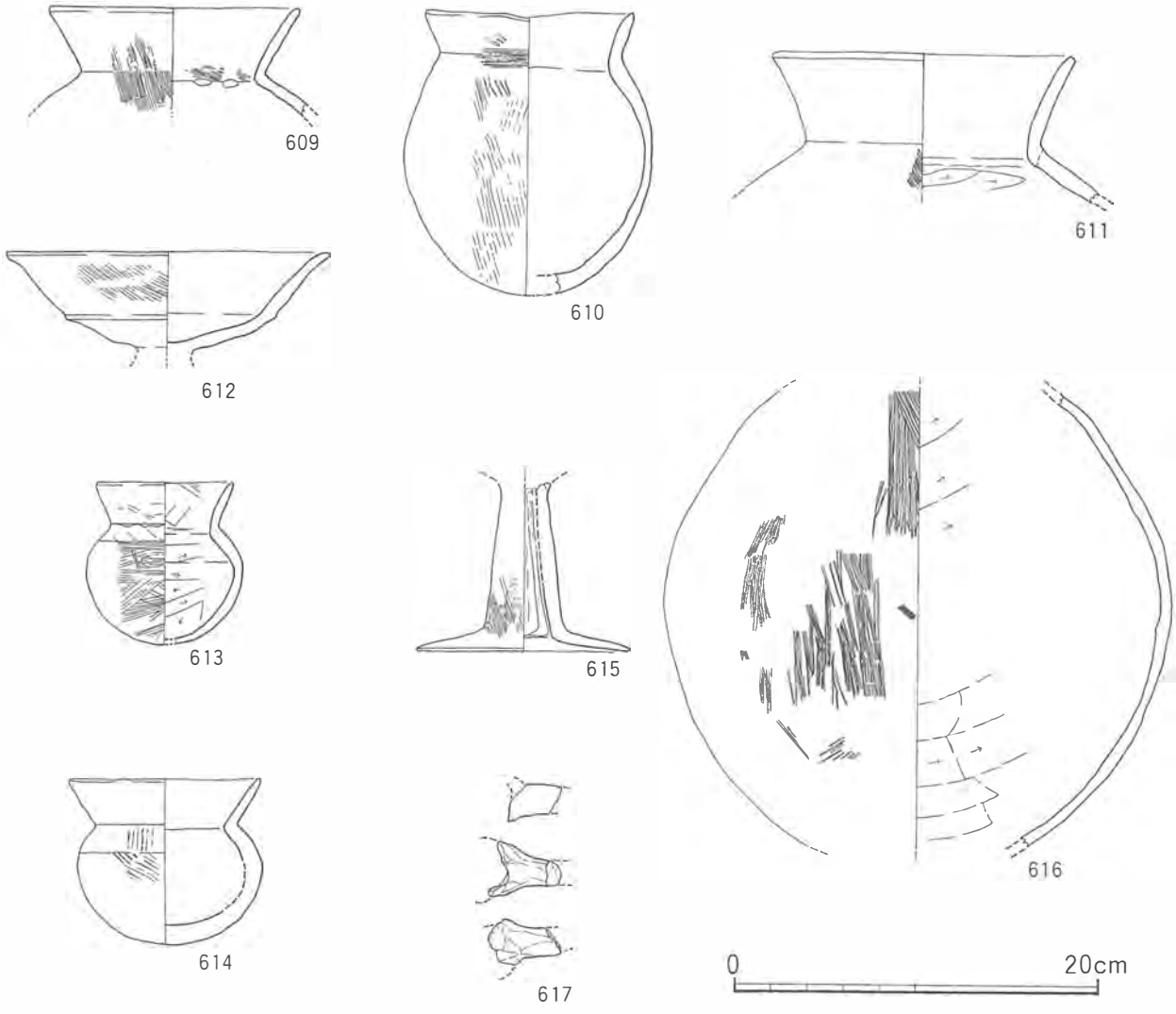
613は、ほぼ完形の小型壺である。口縁部は頸部から外反し、端部は断面が尖り気味になる。胴部は口縁部よりも張り出す。外器面は丁寧にハケ目調整が施される。内器面は細かいヘラ削りが施される。復元口径が7.4cm、復元最大胴部径が8.6cm、復元器高が8.8cm を測る。

○4SK037【第112図上右】

W－26グリッドに位置している。軸を N－37°－W 方向に取る不整形な土坑である。長軸2.1m、短軸0.6m、深さ13cm を測る。



第112図　4SK032・4SK030・4SK037・4SK039・4SK022・4SK026実測図



第113図　4SK030・4SK032出土土器実測図

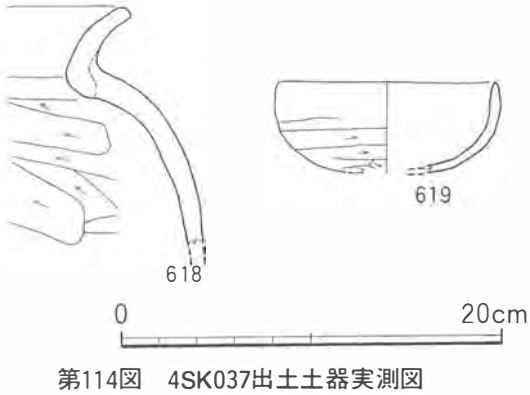
埋土は１層しかなく、褐灰色（10YR4/1）を呈する粘土質でやや堅い。こげ茶色の堅い粒子と茶色のやわらかい粒子を多く、焼土を少量含む。

［出土遺物］【第114図】

図化したのは、甕１点、坏１点で、古墳時代末の遺物である。

甕の618は胴部の最大径が上部にあり、口縁部の形態は頸部から急激に反り、口唇部は丸まっている。内器面のヘラ削りは横方向でかなり削り込んでいる。

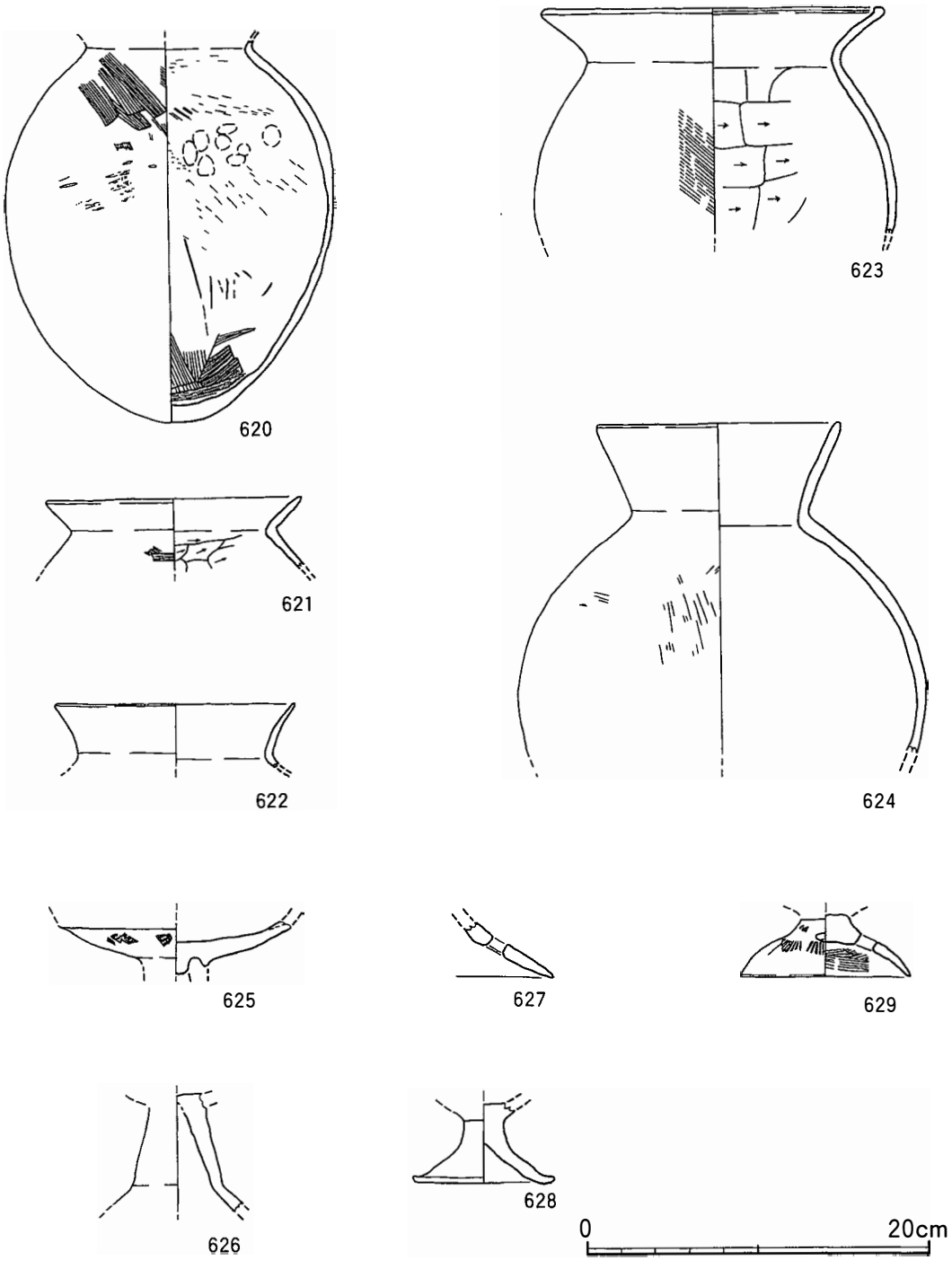
619は坏である。外底面はヘラ削りが丁寧に施されている。口縁部がやや厚みがあり、口唇部がやや尖る。外器面には黒斑があり、赤彩が残る。



第114図　4SK037出土土器実測図

○4SK039【第112図下左】

V－27グリッドに位置している。軸をほぼ南北方向のN－5°－Wに取る長楕円形の土坑である。長軸が1.7m、短軸が1.2m、確認面からの深さ7cmを測る。埋土



第115図　4SK039出土土器実測図

は黒褐色を呈し、ややわらかい粘土質である。粒状の炭化物・焼土と炭化物が少量混入している。

この遺構の性格はよく分からない。

［出土遺物］【第115図】

遺物は出土したが、あまり図化できなかった。ここでは、甕３点、壺２点、高坏２点、器台３点を図示している。

甕は623・621・622である。いずれも口縁部～胴部しかない。621は、復元口径が14.8cm を測る。622は復元口径が13.8cm を測る。623は口縁部内側に浅い沈線を持つ。復元口径は19.4cm、復元胴部は21.0cm を

測り、胴部の最大径は中位にある。

620・624は壺である。620を当初甕と考えたがここでは壺の部類に入れる。この土器は口縁部がないため全体は不明だが、内器面底部にハケが残り、上部には指頭圧痕が見られる。624は頸部が締まり、そこからやや開きながら直に口縁部が立ち上がる。胴部の最大径はやや中位よりも低い。

625・626は高坏である。破片であるため全体像は不明確であるが、626はやや脚の開き気味のものである。627は脚部で穿孔されたものである。器台の可能性がある。629は小型の器台である。628も中実の器台である。

○4SK022・4SK026【第112図下右】

4SK022・4SK026はⅤ－27グリッドに位置し、4SK026が4SK022に切られている。ほぼ両遺構は、同じ方向に軸線が走る。軸はＮ－20°－Ｅにとり、やや4SK026のほうの傾きが大きい。4SK022は、平面形が隅丸長方形気味で、長径が1.58m、短径が1.0m、確認面からの深さ14cm を測る。その遺構を確認した後、4SK026を検出した。

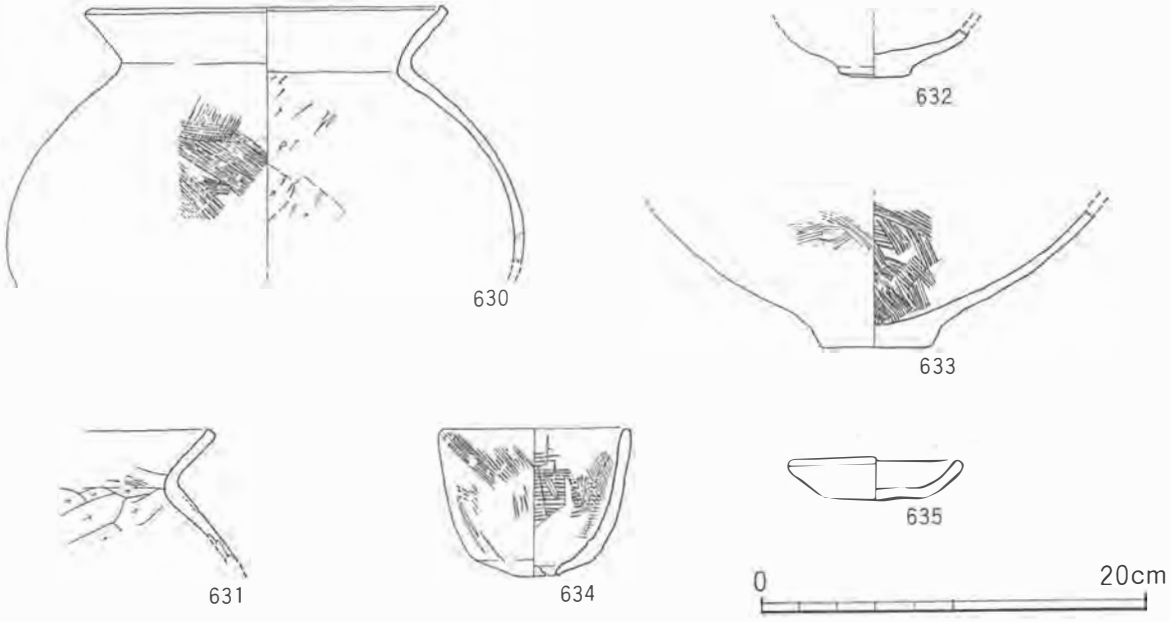
［出土遺物］【第116図】

遺物の出土量はそれほど多くはなかったが、2つの遺構のどちらかに分けることができていない。図化できた遺物として、甕２点、壺２点、甑？１点、皿１点である。

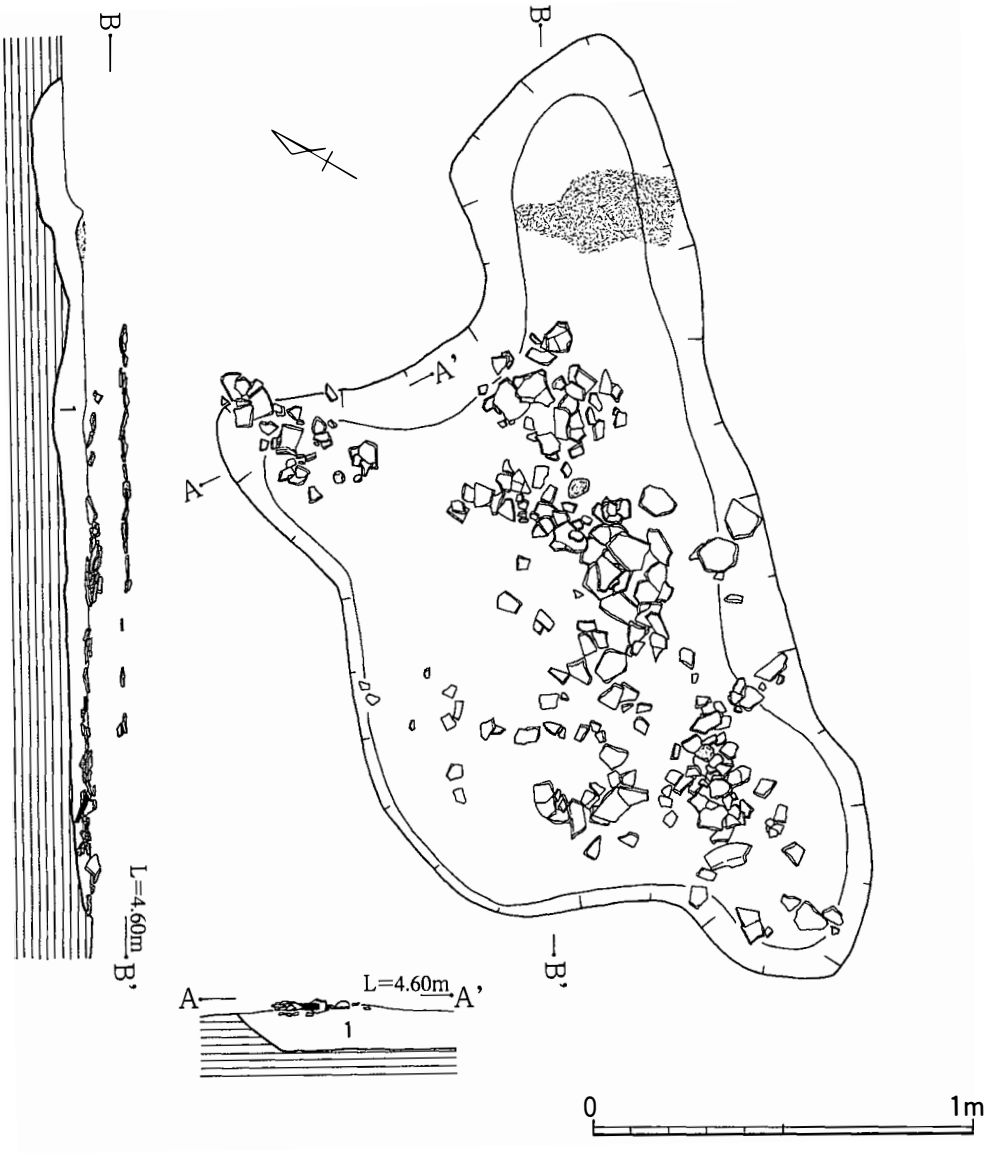
630は甕で、口径に比較して胴部最大径が1.5倍ほど大きい。頸部から口唇部までの高さはさほどまで高くない。口唇部はやや厚く角張り気味でしっかりした作りである。631も甕で、630と類似するが口縁がやや内側にそる雰囲気がある。

632・633は壺の底部で、大きさでは633がずいぶんと大きい。ともに形態はよく似ていて、底部が狭く胴部から突き出すように降りており胴部最大径に対して円盤を貼り付けたような形で作られている。特に633は内器面にハケを残し、1層の出土であるが、時期的に古いものである。

634はあまり類例がないもので、須恵器に似るが、焼きが甘く色調は白い。坩堝のような形態の鉢形で内器面はハケ状工具で横方向になでたようになっており、外器面にはタタキのような痕跡がある。器壁は厚い。



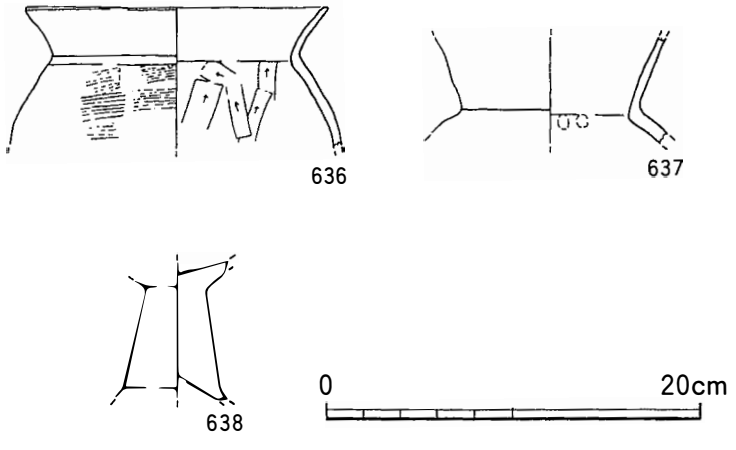
第116図　4SK022・4SK026出土土器実測図



第117図　5SK037実測図

底部には穿孔されているようである。この遺物は出土層位は３層であるが、紛れ込みの可能性もある。復元口径は9.7cm を測る。

635は皿形土製模造品で焼きの状況からみると古墳時代のものであるが、口唇部が角張りあまり類例のな



第118図　5SK037出土土器実測図

いものである。

○5SK037【第117図】

b－33グリッドに位置している。長軸2.2m、短軸1.2m の不整形の土坑で、確認面からの深さ20cm を測る。遺構の東側東部に焼土が堆積していた。遺物は層状に出土したのでこの遺構に直接伴うというよりその後の堆積課程でたまっていたものであろう。遺物はどちらかとういうと西側に傾斜して出土している。このことは遺構の出土地点が北側に傾斜して出土した状況とは異なり何らかの別の条件によるものであろう。焼土中にも含まれており、火を受けた状況もあった。

埋土は以下のとおりである。

１層は、暗褐色（10YR3/3）を呈し、あまり締まりがない。粘性が弱く、極少量の砂粒を含む。2層は、にぶい黄褐（10YR5/3）を呈し、締まっていて粘性がやや強い。

［出土遺物］【第118図】

遺物はわりと多く堆積してはいたが、図化できたのは甕が１点、壺が１点、高坏が１点である。

636の甕は、中型のもので、口径が胴部最大径とあまり変わらず、口径が大きくみえる。口唇部は緩やかに伸びとがって終わり、やや手捏的な感じの作りである。

637の壺は頸部付近が大部分であるが、頸部からややラッパ状に開きながら直に近い形で伸びるものである。内器面に接合の際の指押痕が残る。

638は高坏の脚部で中実のものである。

（６）大溝状遺構と出土遺物

○4SX049【第119図・第120図】

調査Ⅶ区から調査Ⅷ区にかけて出土している。ほぼ東西に走る溝状の遺構である。古代には部分的に4SX038と重複になるようである。この遺構は、他に出土している大溝状遺構とともに今回報告する中では重要な遺構の一つである。これらの大溝状遺構の全体像は調査対象範囲内ではつかむことはできなかった。また、それぞれの関係ももう少しのところで確認できないままである。

4SX049は当初古代の遺構としている4SX038を掘り進める中で確認した遺構である。遺構自体が調査区をまたいでいるため、確認作業は調査Ⅶ区・Ⅷ区の２カ年に渡って行った。Ⅶ区で確認した遺構の延長としてⅧ区でも予想通りに確認できた。

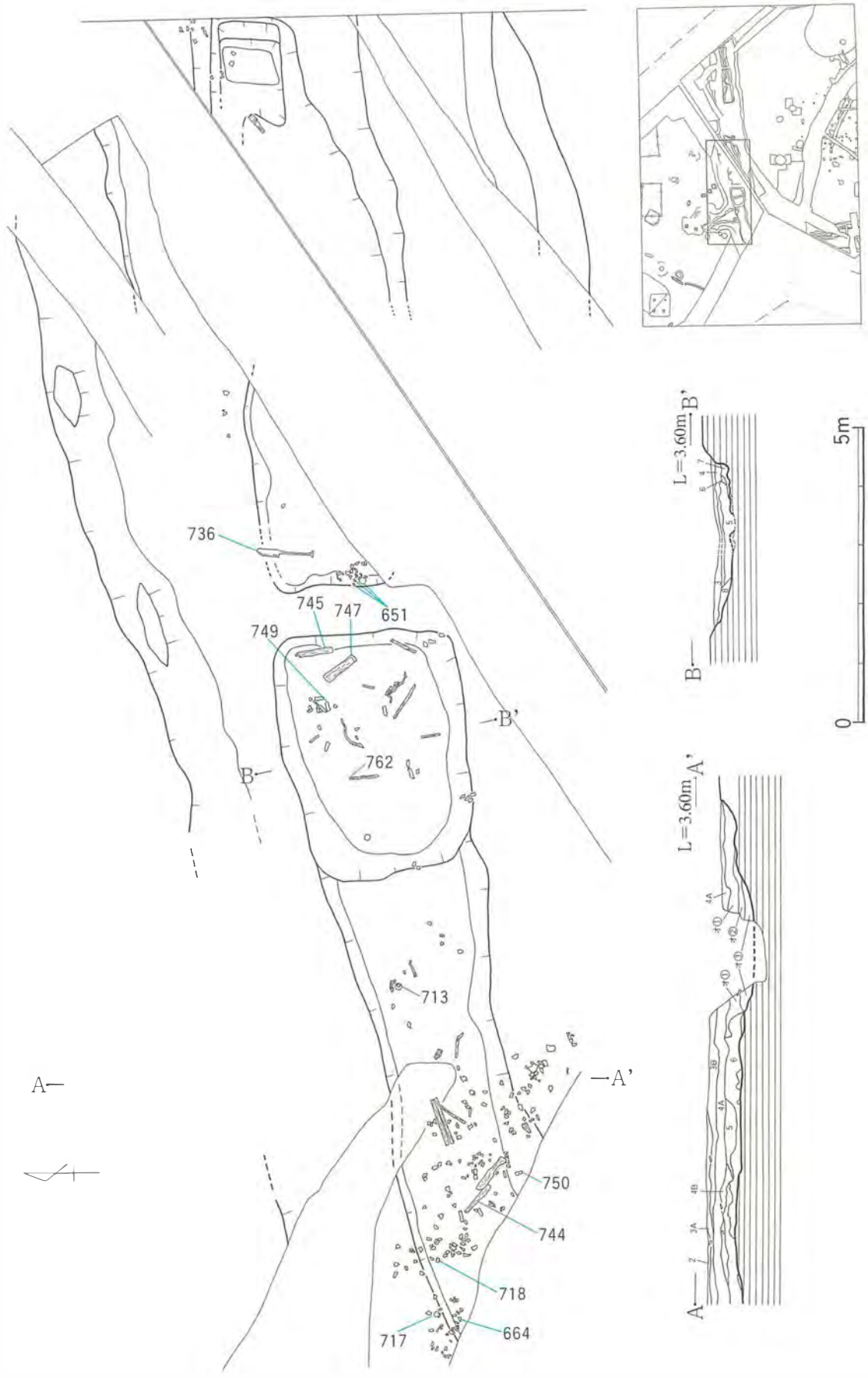
調査の際に打ち痕が矢板列を挟んだままではあったが、方向はほぼ東西に走ることを確認した。調査区の限られた範囲ではあるが、長さは最大で48m まであることを確認した。幅は上の古代の遺構と正確に分離できていないため大まかであるが、上端の最大幅で8m ほどである。

底部には、長方形を呈する浅い落ち込みを４箇所ほど確認した。形は一定しているとは言い難い。その掘り込みは底部からの深さ20cm ほどで一定していない場合も多い。この落ち込みに関しては第５章でまとめる。

埋土を観察するためⅦ区では２箇所、Ⅷ区では２箇所設定した。それぞれ上部には古代の層があり別の遺構があった。各断面層の注記は以下のとおりである。

［A－A’土層断面注記］

これは、4SX049の東側断面である。1層は、表土層である。2層は、黒褐色（10YR2/2）を呈し、少量の炭化物を含む。縦縞の酸化鉄がみられる固くしまった土である。3A 層は、黒褐色（2.5Y3/2）を呈し、2層より炭化物量が多く、粒が少し大きくなる。また、2～3mm の黄色や赤色粒子も含まれる。赤色粒子は大



第119図　4SX049実測図

きいものでは1cm 程のものもある。縞状の酸化鉄粒子も２層より増える。固さは２層より少しやわらかい。3B 層は、黒褐色（2.5Y3/2）を呈する。3A 層より少し白っぽく、炭化物量などが減少する。粒子はより細かくなっている。酸化鉄の集積は細かく短い筋状で全体にほぼ均一に含まれている。3A 層よりきめ細かくやわらかい土である。4A 層は、オリーブ黒色（5Y3/2）を呈し、3B 層より酸化鉄の集積量が減少している。きめ細かい土である。ところどころに灰白色のかたまりや横帯が存在している。4B 層は、オリーブ黒色（7.5Y3/2）を呈し、4A 層より少し粗い土である。酸化鉄の集積は、4A 層より多く含まれている。灰白色粒子（5mm 程度）を部分的に含んでいるが、量は少ない。炭化物の量も減少している。5層は、オリーブ黒色（2.5Y3/2）を呈し、砂質層である。酸化鉄の集積は少ない。6層は、黒褐色（2.5Y3/2）を呈し、酸化鉄の集積は、個々の大きさが大きくなっている。炭化物が、3～4mm 大で混入している。5層よりきめ細かい土であるが、4B 層より粗い。オ①層は、オリーブ黒色（5YR3/1）を呈し、4A 層より少しやわらかいきめ細かい土である。2～3mm 大の炭化物が数量的には多くないが、点々と存在している。酸化鉄の縦縞が多くはいる。砂の混じりが多い。オ②層は、灰褐色（5Y2/1）を呈し、部分的にオリーブ黒色（7.5Y2/2）を呈するところもある。縦縞の酸化鉄の集積量が増加し、鮮明になっている。オ①層に比べ、黒っぽい土で、砂粒子を多く含み粗い。オ③層は、暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）を呈し、縦縞状の酸化鉄の集積量は減少し、色は鮮明になっている。黄色土や青色土の塊、青色粒子多数含まれている。軟質土で、オ②層よりはきめ細かく、少々砂っぽい。

［B－B’土層断面注記］

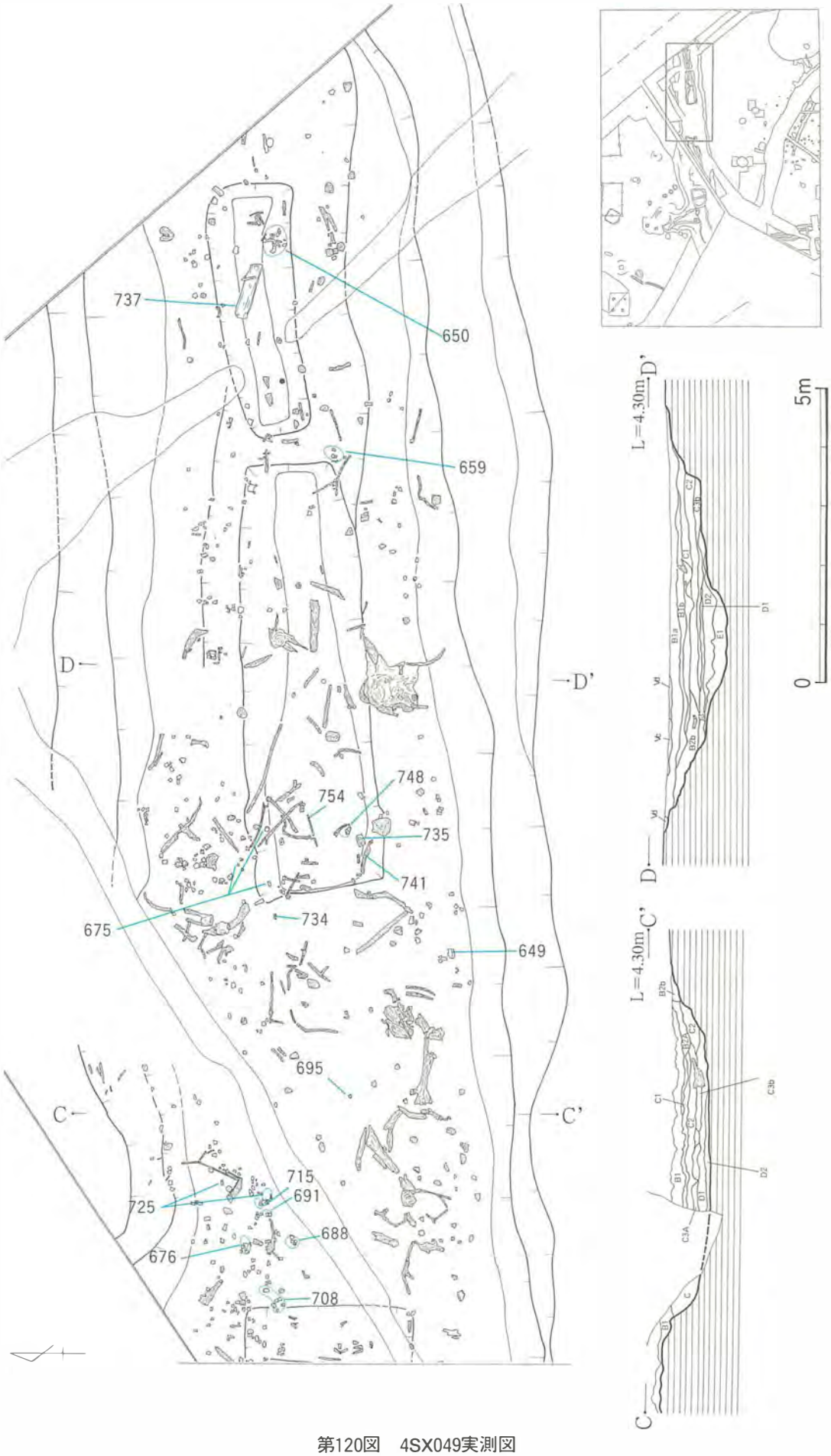
これは、4SX049内の方形落ち込みの土層断面である。この遺構独自の番号を付けている。1層・２層は、注記がないので３層以下の注記を記す。

３層は、暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）を呈し、酸化鉄の縦縞の集積量は減少し、色は鮮やかになる。黄色土や青色土の塊を含む。また青色粒子も多数含まれる。軟性土で２層よりはきめ細かく、少々砂っぽい。4層は、暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）を呈し、粘性が非常に強く、湿り気も多い。白色粒子をわずかに含む。炭化物量は多い。縦縞状の酸化鉄の集積がみられる。下位には砂を微量含む。5層は、暗青灰色（5BG4/1）を呈し、4層よりも更に粘性が強く、湿り気も更に多くなる。下部になるほど締まりが弱くなり、4層よりも柔らかく、炭化物の量は微量である。6層は、暗青灰色（10BG4/1）を呈し、上層よりも粘性・湿り気ともに強くなり、締まりのない柔らかい土である。酸化鉄の集積は縦縞状である。非常にきめの細かい砂を含む。炭化物の量は多い。7層は、暗青灰色（5BG3/1）を呈する。粘性・湿り気ともに非常に強く、柔らかい。締まりは上層に比べ、やや強い。酸化鉄の帯、白い粒をわずかではあるが含む。炭化物は多い。7層にみられた砂よりも粗い砂を多く全体に含み、上層よりも粗い土である。8層は、青灰色（5BG5/1）を呈する。粘性・湿り気は最も強い。砂を多く含み粗く、締まりは弱いが、削った感触は硬い。酸化鉄・炭化物ともに少量含む。

［C－C’土層断面注記］

この土層断面は、a－30グリッド、31グリッドに係る4SX049内のものである。0層からⅤd 層はこの遺構の上層で、遺構に直接には関わらないが、注記は記す。

０層は、耕作土で、暗灰黄色（2.5Y4/2）を呈する。3～5mm ほどの酸化鉄の集積ブロックが入り、硬く締まる。Ⅰ層は、オリーブ褐色（2.5Y4/3）を呈する。全体的に細かい砂粒を含む、よく締まった土である。Ⅱ層は、暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）を呈する。非常に硬く締まる。所々に２～3mm のマンガン粒を含む。Ⅲ層は、暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）を呈する砂質土である。非常に固く締まり、Ⅱ層と比較すると砂が含まれる割合が高くなる。マンガン粒子（２～3mm）も多く含まれる。磨耗した遺物を含む。4層は、明黄褐色（10YR6/8）を呈する砂層である。純粋な明黄褐色の砂層（粗い砂粒）と、2～3mm のマンガン粒を含む



第120図　4SX049実測図

少し黒っぽい砂層が不規則に入る。Ｖａ層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈する砂質土で、Ⅳ層とＶｃ相当層との漸移層である。より粘土の割合が高くなり、2～3mmのマンガン粒を所々に含み、砂粒も細かい。Ｖｃ相当層で、褐灰色（10YR4/1）を呈する粘土層である。2～3mmのマンガン粒、2～5mmの酸化鉄の集積ブロックを含む。乾くと硬く締まる。古墳～古代時代の遺物を含む。Ｖｄ層は、赤褐色（5YR4/8）を呈する粘土層である。褐灰色（10YR4/1）粘土を基礎に、酸化鉄のオレンジ色の色調が全体的にかぶる。2～3mm程度のマンガンの集中部や酸化鉄の集中部（１～3mmのブロック）がみられる。古墳～古代時代の遺物を含む。

以下が遺構の埋土である。Ｂ１層は、オリーブ黒色（5Y3/1）を呈する、砂質粘土層である。随所に幅３～5mm、長さ３～10mmの酸化鉄の縦帯がみられる。まれに２～3mmの炭化物粒を含む。Ｂ２層は、黒褐色（2.5Y3/1）粘土層である。この層は、さらにａ、ｂに分けられる。B2a層は、粒子が細かく硬く締まる。Ｂ１層に比べて黒っぽい。薄いシルト色のブロック（１～2mm）や酸化鉄の帯（同上）が所々にみられる。B2b層はB2a層より酸化鉄の帯が多く全体的に赤っぽく、やわらかい。シルト質のブロックも大きい（３～5mm)。Ｃ１層は、褐灰色（10YR4/1）を呈する砂質粘土層である。層の途中にシルト層の帯（横）層が５～10mmの巾でみられる。端の方ではとぎれる。所々に２～3mmの炭化物粒を含む。Ｃ２層は、灰色（５Y4/1）砂質土で、砂粒は細かい。炭化物粒子（３～5mm）や酸化鉄の縦縞集積（幅３～5mm、長さ２～５mm）がみられる。Ｃ３層は、さらにａ、ｂの２層に分かれる。C3a層は、灰色（5Y4/1）を呈する砂質土である。C3b層は少々黒っぽく砂粒の割合が少ない。Ｄ１層は、オリーブ黒色（5Y3/1）を呈する粘土層である。細かい砂粒も少々含まれる。1～3mmの炭化物のブロックを含む。木器、土器などの遺物を多く含む。遺物は古墳時代前半のものである。青銅鏡は、この層から出土している。Ｄ２層は、黒褐色（10YR3/1）砂質土であるが、粒子は細かくシルトに近い。所々にオリーブ灰色（2.5GY6/1）を呈するブロック粒子（５～10mm）や炭化物粒子（３～5mm)、酸化鉄の帯（Ｃ２層と同じ）がみられる。遺物を多く含む。

［Ｄ－Ｄ’土層断面注記］

これは、Ｃ－Ｃ’土層断面の西側にある土層断面である。

5D層は、酸化鉄の多い赤色層である。これは基準層である。

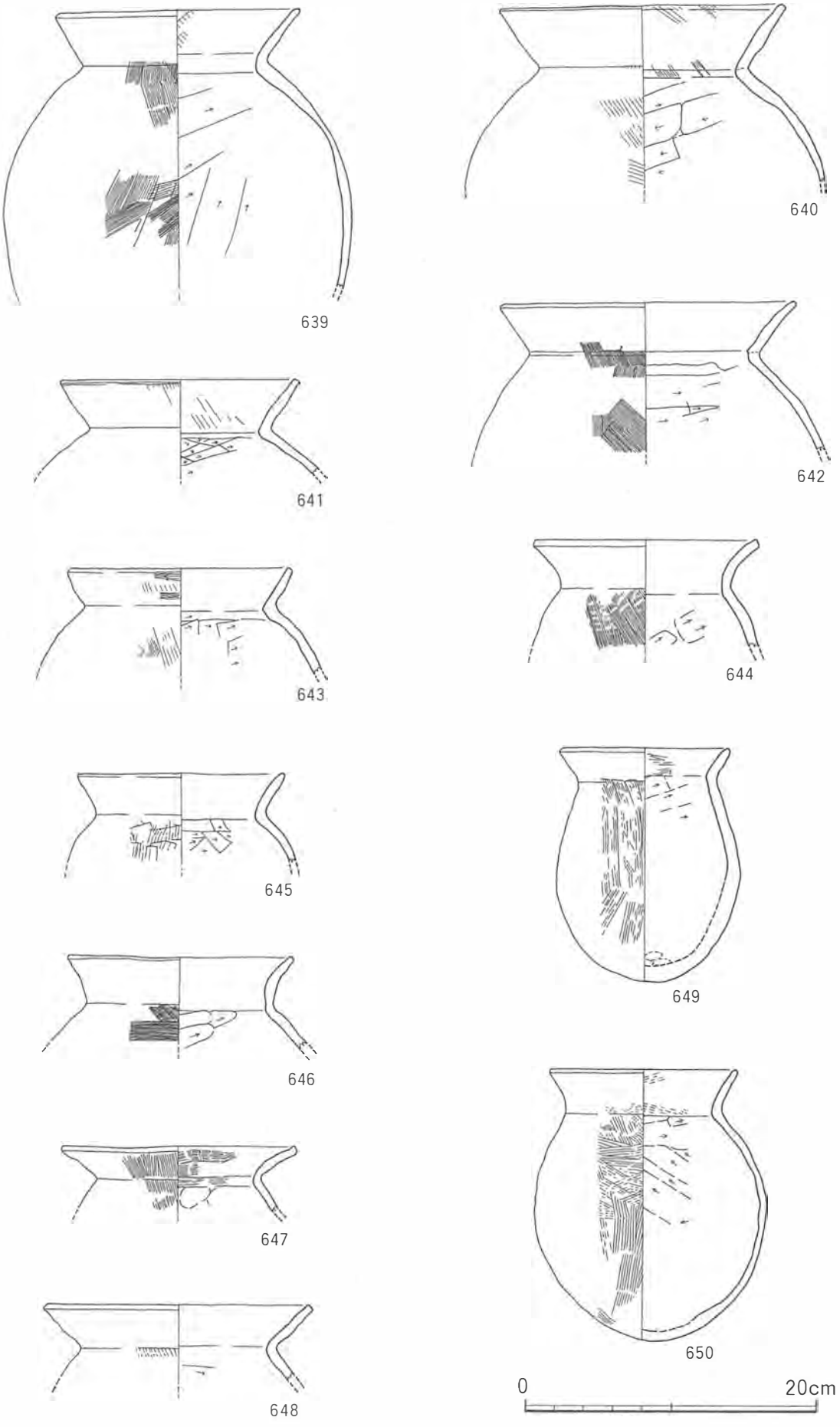
B1a層は、褐灰色（7.5YR4/1）土層である。B1a層、B1b層、B1c層の順で下層の方がより黒くなる。ベルト①のＢ１層とB1c層と同層で、その上層を明るさの順に分層した。B1b層は、褐灰色（10YR4/1）を呈する。B1c層は、同じく褐灰色を呈する。Ｃ層は、シルトが帯状に入る砂質土の白っぽい層である。Ｄ層は、炭化物を含む黒っぽい層である。Ｅ１層は、灰色（N5/0）を呈する粘土層である。粒子が細かく、やわらかで粘質が高い。所々１～3mmの青灰色（10BG6/1）の土塊を含む。Ｅ２層は、部分的な層で北西側の矢板下にある。黒褐色で粘質の強い層である。

［出土遺物］【第121図～第139図】

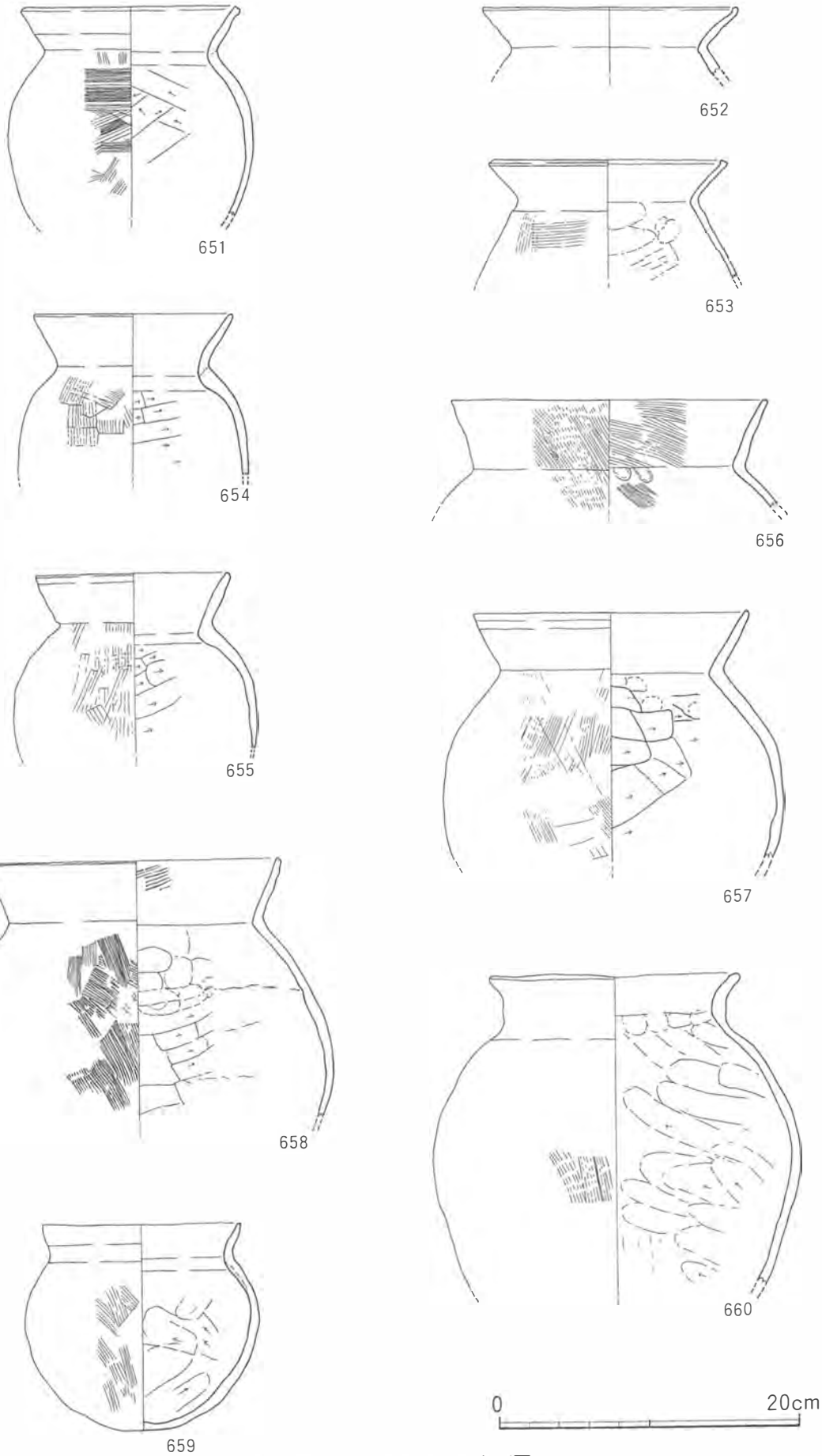
甕22点、壺９点、高坏18点、器台４点、坏12点、鉢４点、小型壺22点、模造品１点、土製品２点、鏡片１点、木製品47点、石核１点、凹石１点、台石２点、磨石２点、石鏃１点を図化し掲載した。

甕には639～660がある。いくかの形態が確認でき、時期差を示す可能性がある。普通程度の大きさの甕は639～643・657～658・660である。このうち前者と660は明らかに時期の差を示すもので形態的にずいぶん異なる。

639は、口縁部は直に伸び、端部は丸くなる。口縁内器面はハケ目とナデ調整である。胴部は下端がないもののほぼ倒卵形を呈している。外器面にはハケ目調整、内器面にはヘラ削りが施される。口径が16.3cm、最大胴部径が23.6cmを測る。640は、下層からの出土で、口縁部はやや途中肥厚しながら直に伸び、口唇部端部は丸くなる。外器面はハケ目調整、内器面は斜め横方向のヘラ削りが施される。復元口径が19.2cm



第121図　4SX049出土土器実測図



第122図　4SX049出土土器実測図

を測る。641は、下層の出土で、口縁部を中心とした破片である。口縁はやや肥厚しながら直に伸び、口唇端部が角張る。内器面の胴部付近はヘラ削りが施される。外器面には、煤とは異なる黒色の付着物が確認できた。642は、下層の出土で、口縁部はやや外反しながら端部へ伸び、口唇端部は丸くなる。頸部から胴部にかけては張りが弱く、最大径は下位にある。胴部外器面はハケ目調整がみられ、内器面はほぼ横方向のヘラ削りが施される。部分的に粘土巻上げ痕がある。口径は19.6cm を測る。643は下層の出土である。口縁部は先のものに比べ短く、やや立ち上がり気味にほぼ直に伸びる。途中やや肥厚する。端部はやや丸くなる。外器面はハケ目が残る。内器面は横方向のヘラ削りが施される。外器面には煤の付着も認められる。復元口径は14.8cm を測る。644は、口縁部が頸部から急激に外反する。口唇部端部は強く角張る。胴部の張りは弱い。胴部外器面には狭い単位のハケ目調整がみられ、内器面にはヘラ削りが見られる。復元口径は15.0cm を測る。645は、やや立ち気味で弱く外反しながら伸び、口唇端部はやや尖り気味に丸くなる。胴部はやや上位に最大胴部径がみられる。胴部外器面はハケ目調整、内器面はヘラ削りが施される。復元口径は14.0cm を測る。646は、B 層と D 層から出土し接合している。口縁部は頸部から直に立ち上がりながら強く外反する。口唇端部はやや丸まっている。胴部外器面は斜め方向のハケ目後、横方向のハケ目が施される。内器面は細かいヘラ削りが施される。口径は15.2cm を測る。647は口縁部が頸部から強く外反し、口唇端部はツマミ上げられる。復元口径は16.0cm を測る。外器面は縦方向のハケ目、内器面には横方向のハケ目、胴部には指押さえが施される。648は、2層から出土している。口縁部が頸部から強く外反している。口縁部途中がやや外側に膨れる。口唇部端部は角張る。胴部外器面は縦方向のハケ目が残る。内器面は横方向のヘラ削りが施される。復元口径は、17.8cm を測る。649は完形で出土した。小型の甕で、胴部はやや砲弾形を呈し、口径が11.1cm、最大胴部径が12.5cm、器高が15.9cm を測り、口径と最大胴部径がほぼ近い。口縁部は短くほぼ直に伸び、端部は丸まる。胴部外器面は縦方向のハケ目が弱く残る。全体的にナデ調整が施される。内器面はヘラ削りが施される。内器面底部には指頭圧痕が見られる。650はほぼ完形品である。口縁部は頸部からやや立ち気味で直に伸び、口唇端部は丸くなる。口縁部は内外器面ともハケ目調整がみられ、その後にナデ調整される。胴部は卵形を呈する。外器面は上位には横方向のハケ目、下位は縦方向のハケ目が施される。内器面の中位には斜め方向のヘラ削り、頸部近くには横方向のヘラ削りが施される。口径12.7cm、復元最大胴部径が15.8cm、器高が18.6cm を測る。外器面には煤が付着している。651は、口縁部から胴部下位までの破片である。口縁部は頸部から直に伸び、口唇端部は強く角張り、ややへこむようになる。口縁自体は途中でやや外側へ弱く湾曲する。調整は内外面とも横ナデである。胴部外器面は上位が縦方向のハケ目の後に横方向のハケ目が施される。中位から下位にかけては斜め方向のハケ目調整が施される。内器面は斜め方向のヘラ削りが施される。復元口径が14.0cm、胴部最大径が16.3cm を測り、口径と胴部径の差が小さい。652は、B 層から D 層にかけて出土した、頸部から口縁部の破片である。口縁端部が摘み上げられている。復元口径は16.8cm を測る。653は、F 層から出土している。口縁部は頸部から直に伸び、端部はつまみ上げられ、内面に弱く沈線様のへこみがある。口縁部は内外器面に横ナデ調整が施される。胴部外器面は縦方向と横方向のハケ目が残る。内器面は上位に指押さえ跡、その下位はヘラ削りが施される。復元口径は15.0cm を測る。654は、口縁部が直に伸び、端部は尖り気味になって丸くなる。胴部外器面は、縦方向のハケ目が、内器面は斜め横方向のヘラ削りが施される。外器面には煤が付着している。復元口径が13.0cm、最大胴部径が15.2cm を測る。655は、654に似て口縁部は直に伸び、端部が尖り気味で丸くなる。胴部外器面は縦方向のハケ目、内器面は斜め方向のヘラ削りが施される。口径が12.8cm、復元最大胴部径が16.2cm を測る。656は、口縁部のみの破片である。復元口径が20.8cm を測る。口縁部は頸部から直に伸びる。端部は丸くなる。口縁部の内外器面にはハケ目調整が丁寧に施される。頸部内器面には指押さえがなされる。わずかに残る胴部には内外器面ともハケ目が見られる。657は、上層の出土で胴部中位以上が残る破片であ

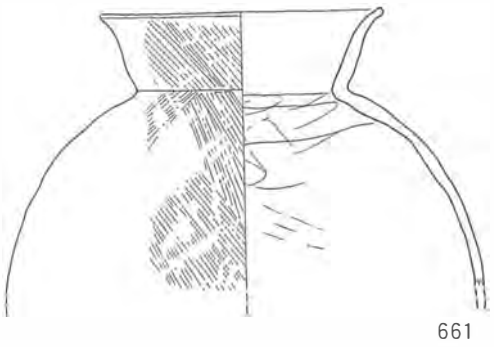
る。口縁部が直で、口縁端部が尖り気味で丸まっている。胴部外器面に薄く残るハケ目は中位より上位と下位では方向が異なる。内器面にはヘラ削りが施される。頸部近くには指頭圧痕がみられる。復元口径が18.0cm、復元最大胴部径が22.5cmを測る。658は、遺構の上層の出土で、胴部中位より上位が残る破片である。口縁部はほぼ直にのびるが、やや内傾気味である。端部はやや角張る。胴部の復元形は、倒卵形を呈すると推定できる。胴部外器面にはハケ目、内器面上位に指頭圧痕、その下位にはヘラ削りが施される。その調整の変わり目付近に粘土巻上げ痕がみられる。復元口径が18.8cm、復元最大径が26.0cmを測る。659は、小型の甕である。復元口径が13.0cm、復元最大胴部径が15.4cm、器高が13.7cmを測り、胴部はやや球形に近い。口縁部は端部が尖り気味で、胴部外器面にはハケ目が、内器面にはヘラ削りが施される。

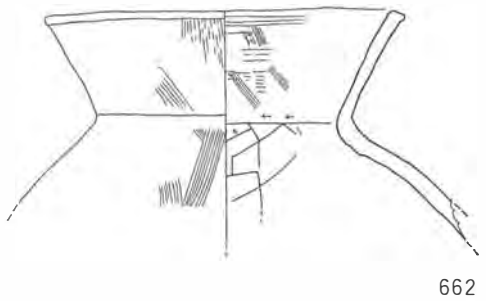
660は、上層の出土である。口縁部は短く、強く外反する。内器面頸部には、指頭圧痕が施され、内器面胴部には右斜め上方向へのヘラ削りが施される。外器面胴部にはハケ目がわずかに残る。口縁部復元径が16.4cm、復元最大胴部径が24.2cmを測る。

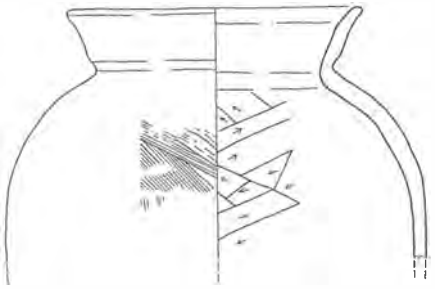
661から669は壺としている。形態もさまざまである。

661は、口縁から胴部中位までの破片である。口縁部は頸部から直に伸びながら口唇部近くで急激に外反している。端部はやや角張る。外器面には縦方向のハケ目が見られる。復元口径は14.6cmを測る。胴部は外器面には斜め方向のハケ目の後にナデが施される。内器面にはヘラ削りが施される。662は、下層から出土している。口縁部は頸部から直に立ち上がり、口縁端部は膨らみながら角張る。内器面は横方向のハケ目、外器面には縦方向のハケ目が施される。口径は18.0cmを測る。胴部は外器面には縦方向のハケ目、内器面にはヘラ削りが施されている。663は、中層、C層、下層の出土である。口縁部は頸部から直に立ち上がりながら口唇端部で急激に外反する。長さは短い。口縁はやや肥厚し、端部は丸くなる。胴部外器面には斜め方向のハケ目、内器面には斜め方向のヘラ削りが施される。復元口径が14.9cm、復元最大径が22.0cmを測る。外器面には黒斑がある。664は、下層の出土である。口縁部は頸部から直に伸び、やや肥厚しながら端部に至る。端部は尖り気味に丸くなる。胴部は球形を呈し、外器面は上位が大きめのハケ目、中位から下位には斜め方向のハケ目が施される。内器面は頸部付近で指押さえが、その下は斜め方向のヘラ削りが施される。復元口径が13.6cm、復元最大胴部径が17.5cmを測る。外器面に一部煤が付着している。665は、器壁がやや厚い。口縁部は頸部から急に外反している。外器面は斜め方向のハケ目が施され、内器面には横方向のヘラ削りが施される。この土器は古墳時代の後期のものである可能性がある。口径は16.5cmを測る。666は、中層からの出土である。口縁部は非常に短く、頸部と口縁部の差がはっきりしない。胴部外器面にははっきりした縦方向のハケ目が、内器面には縦方向のヘラ削りが施される。口径が18.3cm、最大胴部径が25.6cmを測る。器壁は厚い。ここで壺としているが、古代に近い土器である可能性があり、そうならば甕としたほうがよい。外器面には黒斑がある。667は、中層の出土である。口縁部は二重口縁である。口縁の内外器面はハケ目となで調整が施される。胴部は球形を呈する。外器面は縦方向のハケ目が、内器面は斜め矛方向にヘラ削りされる。口径が13.2cm、胴部最大径が22.2cmを測る。668は、やや小型の壺で中層の出土である。口縁部は頸部から強く広がり、端部は尖る。胴部は球形ながらやや潰れた形をしている。調整はかなり磨耗しているので、内器面にヘラ削りが施される。復元口径が11.0cm、外器面が15.9cmを測る。669は、小型のもので、中層からの出土である。口縁部は頸部から直に立ち上がり、口唇部端部は細くなり丸くなる。口縁内部はハケ目調整が施される。胴部外器面は斜め縦方向のハケ目が、内器面は縦方向のヘラ削りが施される。復元口径が11.1cm、復元最大胴部径が13.3cmを測る。

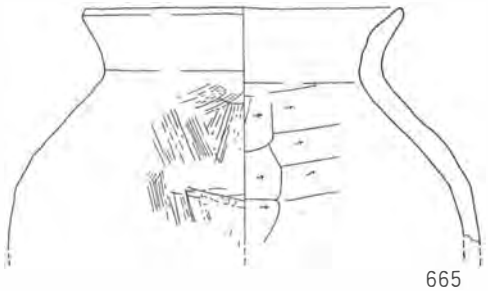
670～682は高坏の坏部分である。670は、F層出土である。高坏の坏部の上位部分のみの破片である。口唇部は大きく外反する。内器面は縦方向のハケ目、外器面にも薄くハケ目が残る。復元口径は18.0cmを測る。671は、高坏の坏部のみである。脚部との接合面から外れている。屈曲部がこの坏部の併せ部で、外器

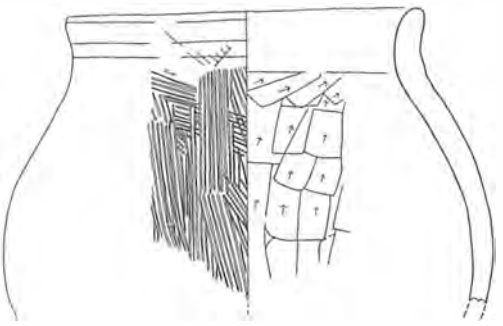

661

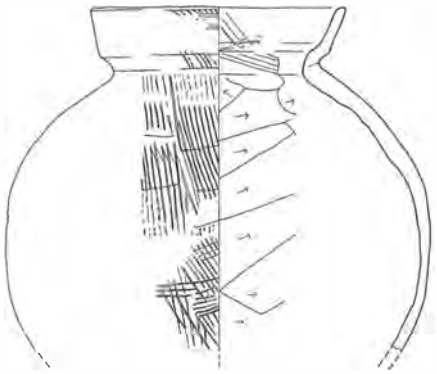

662


663

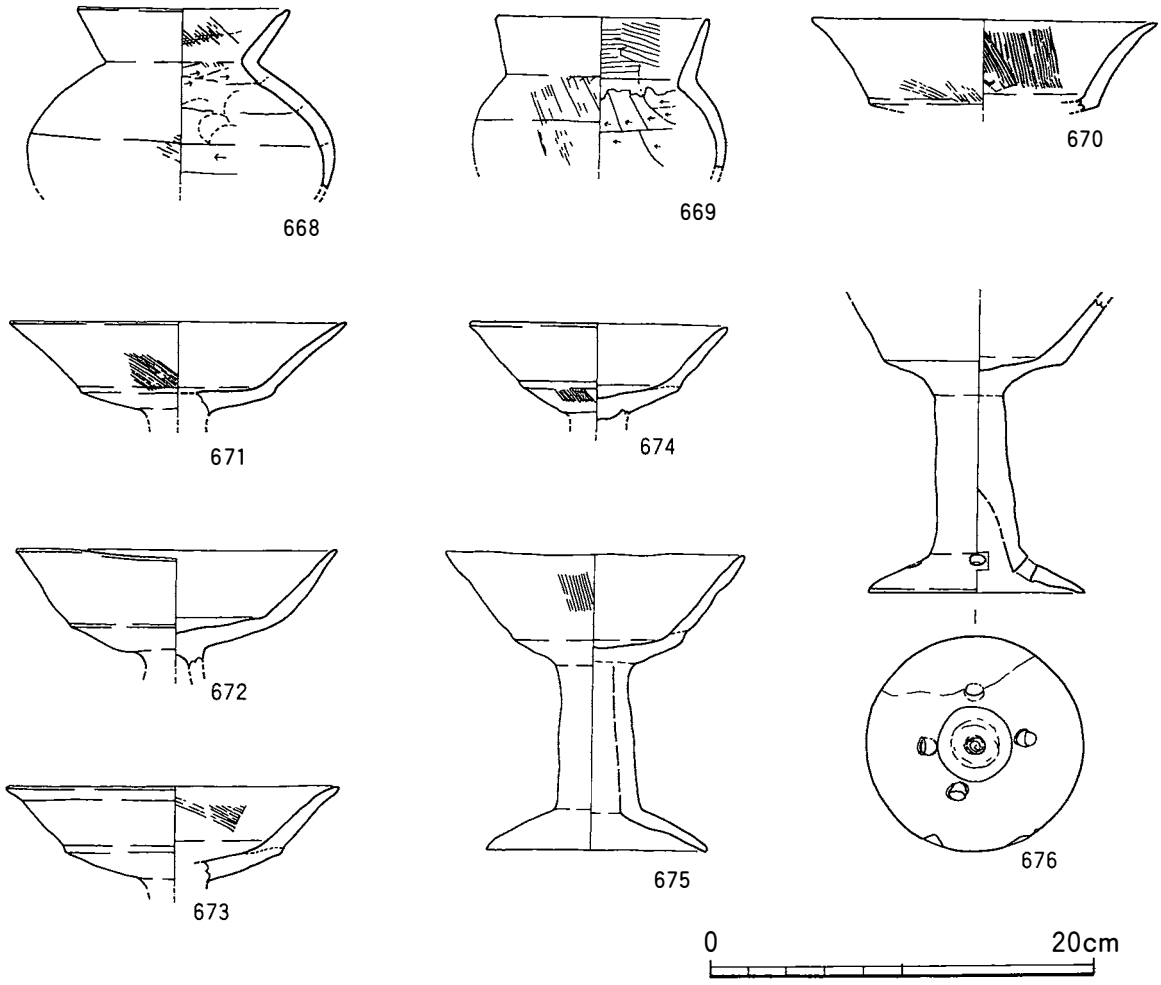
664


665


666

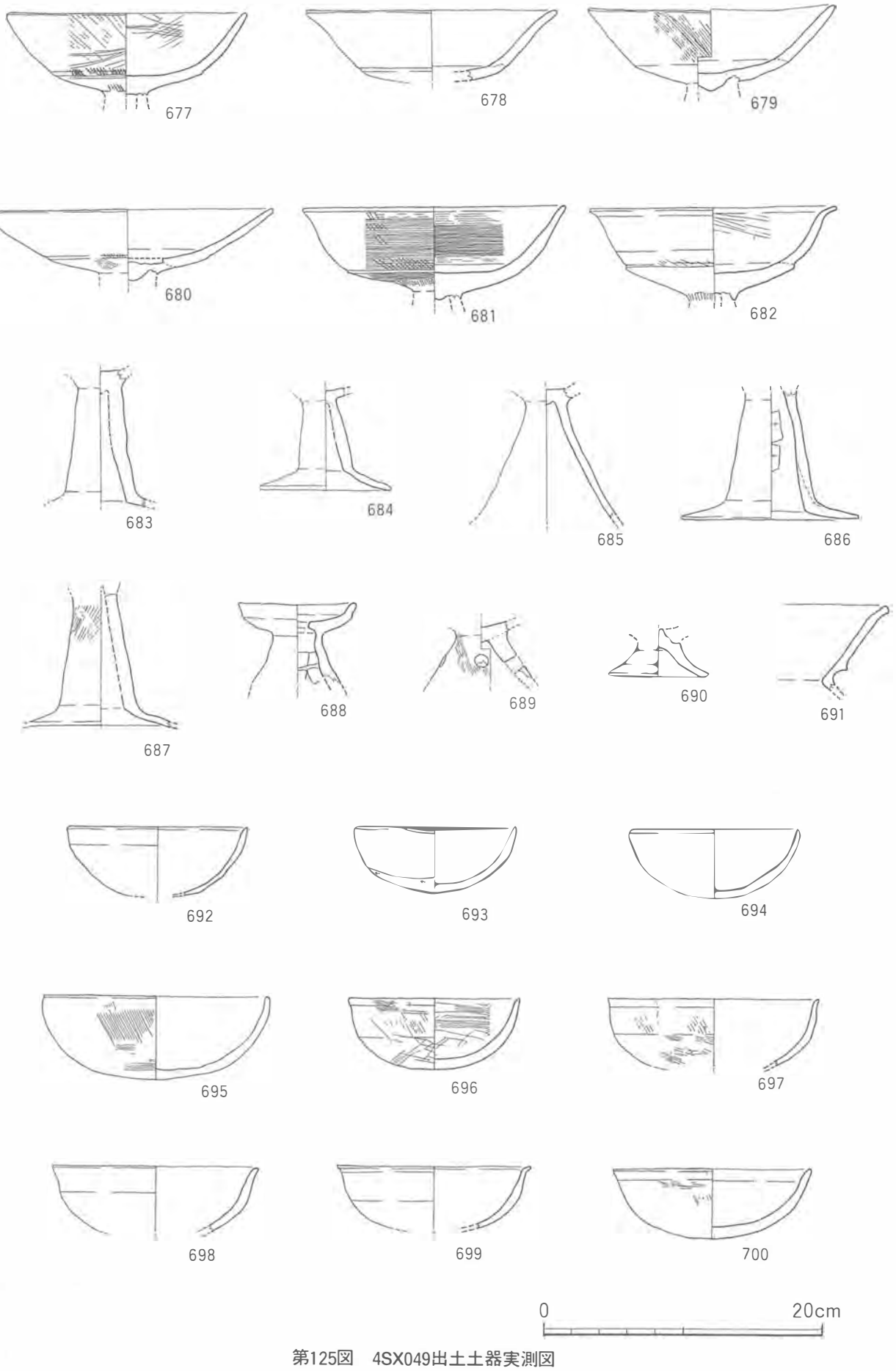

667

第123図　4SX049出土土器実測図

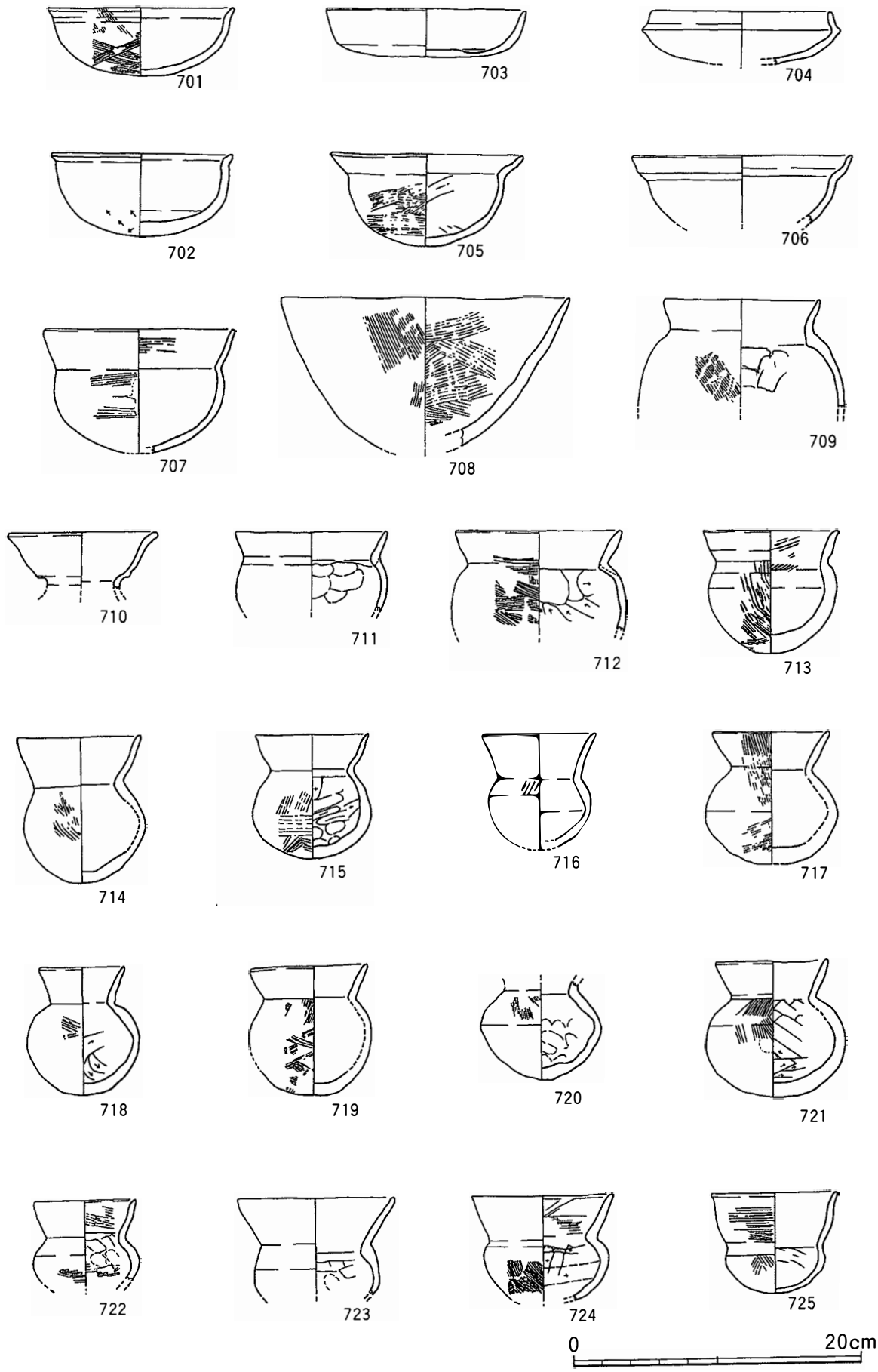


第124図　4SX049出土土器実測図

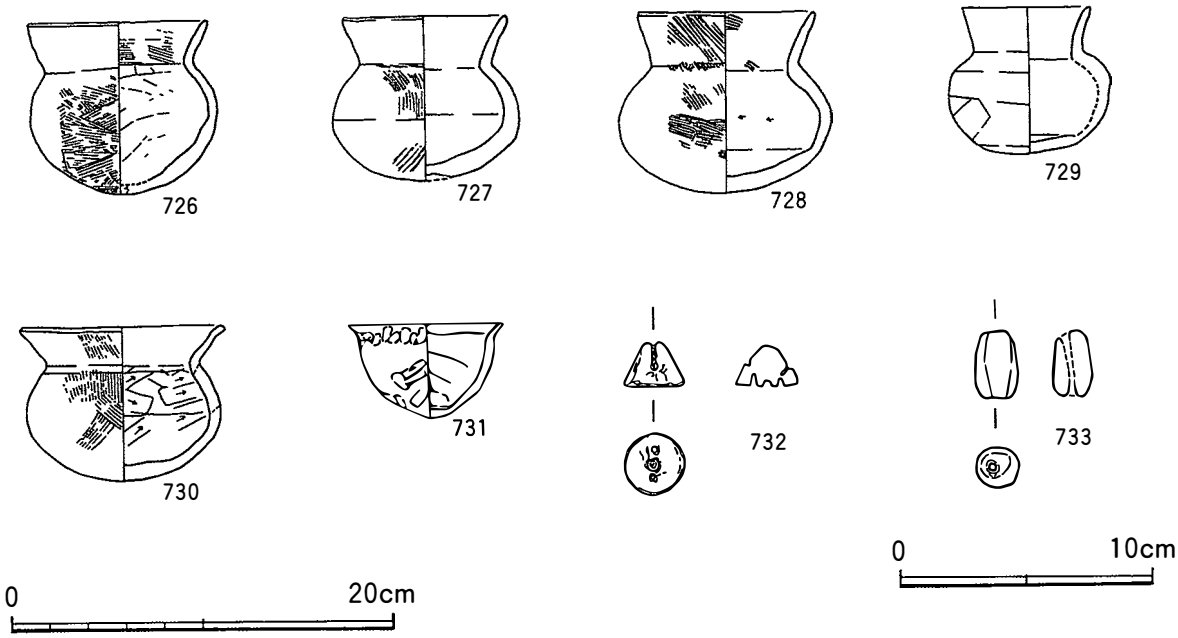
面に接合痕跡がみえる。外器面にハケ目が部分的にみえる。ナデ調整が全体的に施される。復元口径が17.3cmを測る。672も高坏の坏部である。接合部は坏の下部にみえる。口径は16.6cmを測る。外器面にハケ目が一部残る。内外器面には黒斑がある。673は、下層の出土で、高坏の坏部である。671と同じく脚部が中央部で抜け落ちている。坏部自体も体部で接合部がみえる。内器面にハケ目がみえるが、大部分はナデ調整される。復元口径は17.3cmを測る。674は、高坏の坏部で坏部の底に接合部がある。坏部の下位径が小さく縦長にみえる。外器面の一部にハケ目が見えるものの大部分はナデ調整である。口唇部がやや外反気味となる。口径は13.4cmを測る。外器面に黒斑がある。全体に赤彩されている。675は高坏のほぼ全体が揃うもので、D層からの出土である。坏部の形態は674に似て坏部下位の径が小さい。口径が15.8cm、器高が15.5cmを測る。脚部径が12.4cmを測る。坏部の外器面はハケ目が施される。脚部内器面はヘラ削りされる。ナデ調整が施される。676は坏部の一部から脚部まで残る。D層からの出土である。形態は675に似るが、脚部の抉りが浅く、4箇所の穿孔があるが、不均衡である。裾部の開きはやや弱い。調整はナデによるものが多い。脚部底径が11.1cmを測る。677は、高坏の坏部である。口縁部は外反している。脚部は坏部の底から剥げている。調整はハケ目後にナデ調整が施される。口径は16.8cmを測る。678は、下層からの出土で、坏部のみの破片である。器面調整はナデである。復元口径が18.0cmを測る。679は、坏部分のみで脚部は坏部の底に接合部分を残して剥げている。坏部の開きは大きい。口径は17.4cmを測る。680は、下層からの出土で坏部のみの破片である。坏部の高さは低く、復元口径は20.5cmを測る。脚部の接合部分は679と同じで外れかたも同様である。681も坏部のみである。口唇部はやや反る。器面調整は、内外器面とも横



第125図　4SX049出土土器実測図



第126図　4SX049出土土器実測図



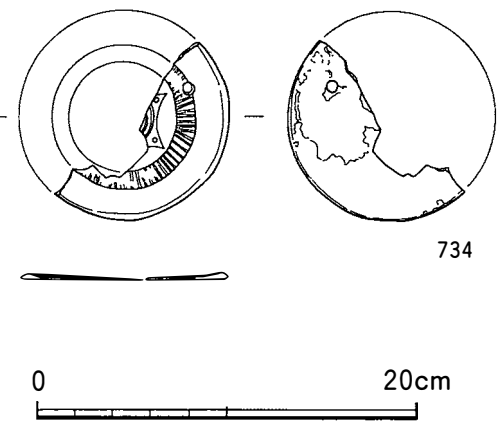
第127図　4SX049出土土器実測図

方向のハケ目と、縦方向のナデが外器面にわずかにみられる。外器面には黒斑がある。復元口径は19.0cmを測る。682は中層の出土で、681に似て口縁部の反りはかなり大きい。坏部は二つの部分に分かれる。坏部の屈曲部がその2部分の接合部になる。器面調整は横ナデとハケ目が残る。脚部は坏部の底から剥げている。口径は17.6cmを測る。外器面に黒斑がある。

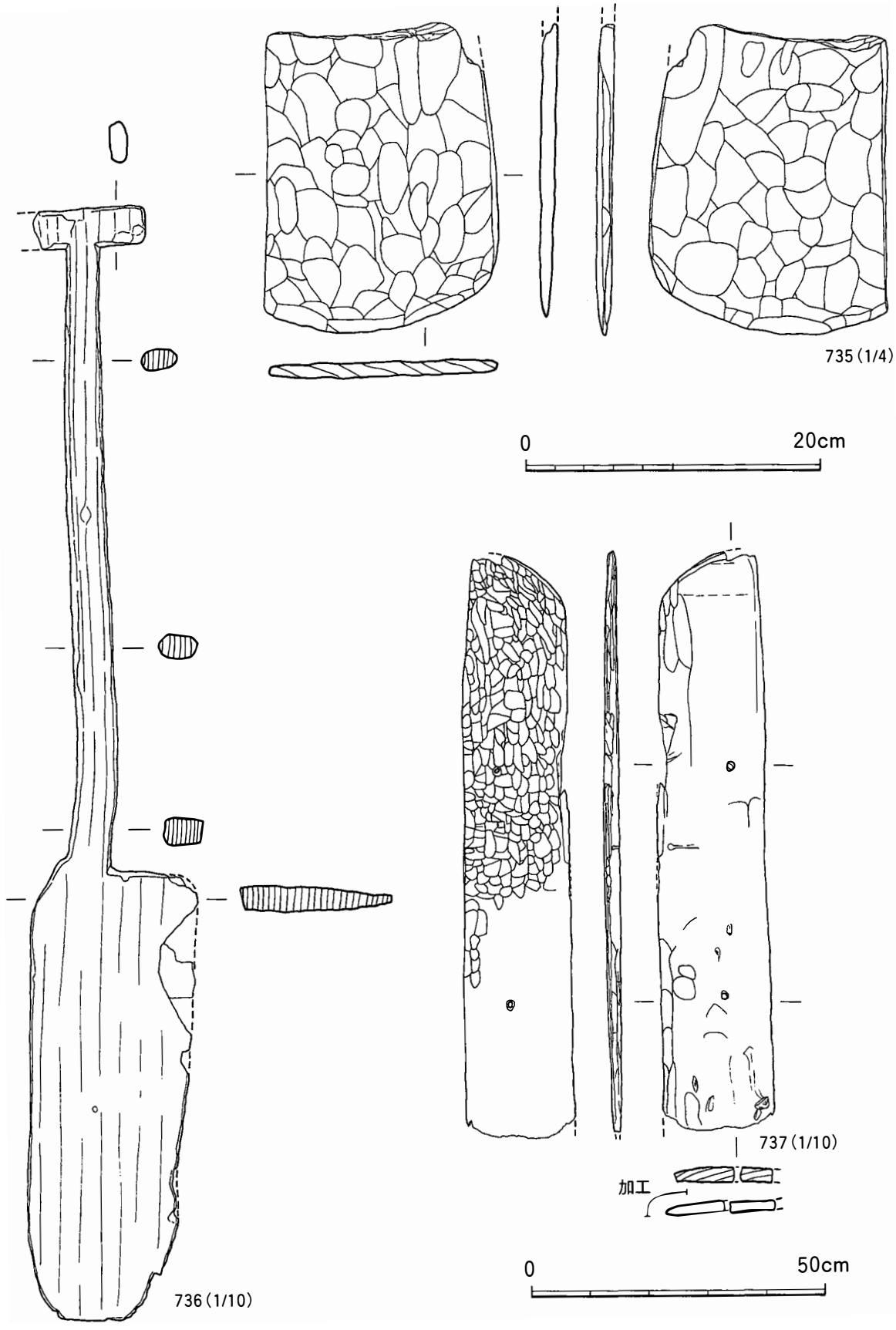
683～687は高坏の脚部を主とするものである。683は2層の出土で、坏部底部の一部と裾部の上位部分までの破片である。この底部付近も脚部と一体とみられる。内器面は横方向のヘラ削りにより抉っている。器表面はナデ調整である。684は、坏部底面から裾部までの破片である。高さは低い。調整はナデによる。裾部の復元口径は9.4cmを測る。685は、坏部底面から脚部途中までの破片である。付け根部分からラッパ状に開くものである。内器面はヘラ削りでが施される。他はナデ調整である。686は、付け根部分から剥離した脚部で、徐々に開きながら、裾部で強く屈曲している。脚部内器面は横方向の削りを行っている。復元底径は12.5cmを測る。687は、中層出土の高坏の脚部である。付け根部から徐々に開く。裾部の開きは少ない。外器面には縦方向のハケ目がわずかに残る。内器面はヘラ削りによるものである。

688～691は器台である。688は、C層、D層の出土である。器形は小型の高坏状を呈し、上位の坏上の受け部と脚部の間に穴が開けられている。脚部内器面はヘラ削りが施される。689は、脚台部のみの破片である。2層から出土している。脚部には4箇所の穴が穿たれている。690は、小型のもので明確に器台とするにはやや難があるが、一応器台とする。

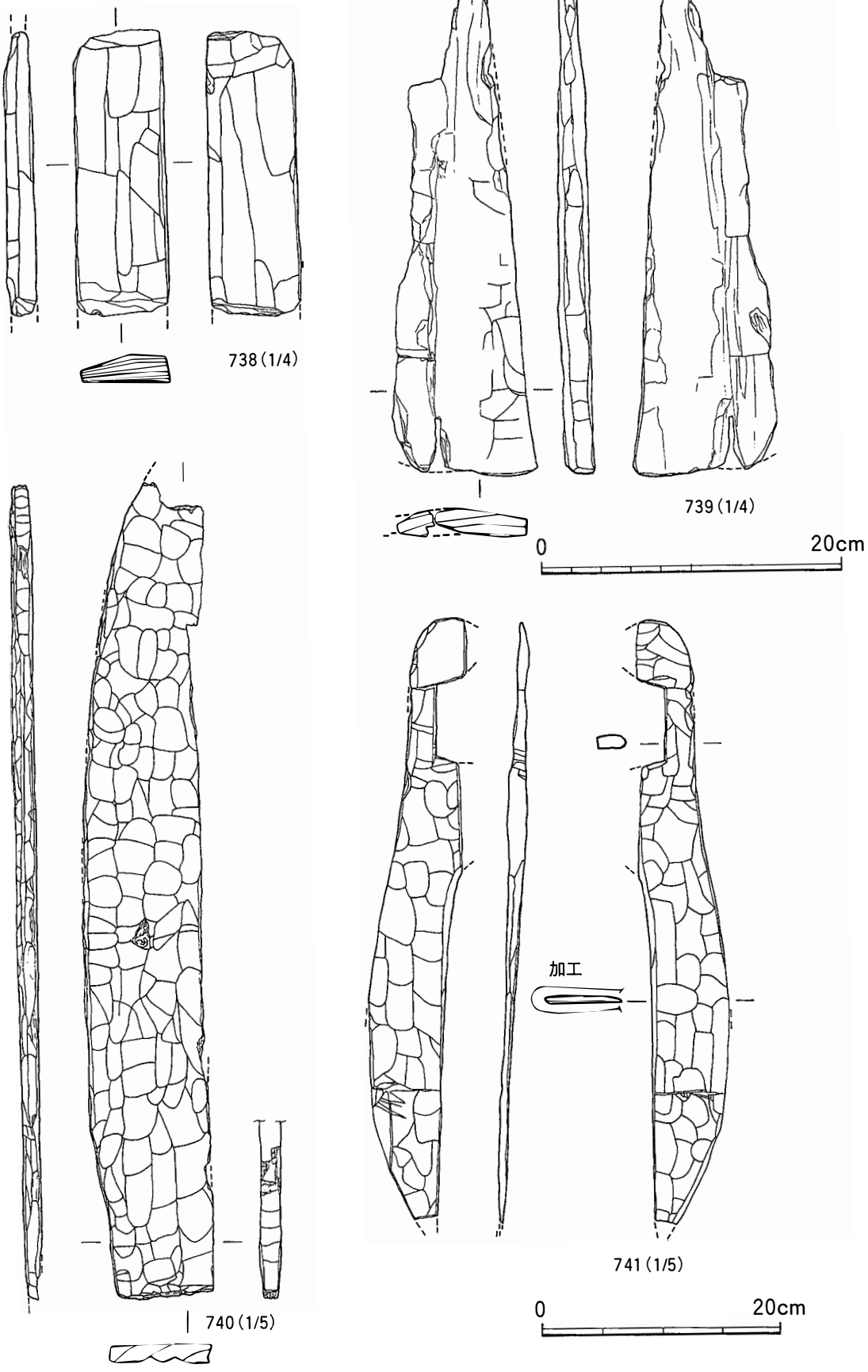
691は、鼓形器台とした。形態的には二重口縁壺の様でもあるが、他の二重口縁壺の作りに比べしっかりしており、胴部にあたる方向への伸び方が異なるので、器台とした。C層、D層の出土である。磨耗が進んでいるので調整ははっきりしないが、ナデによるものであろう。



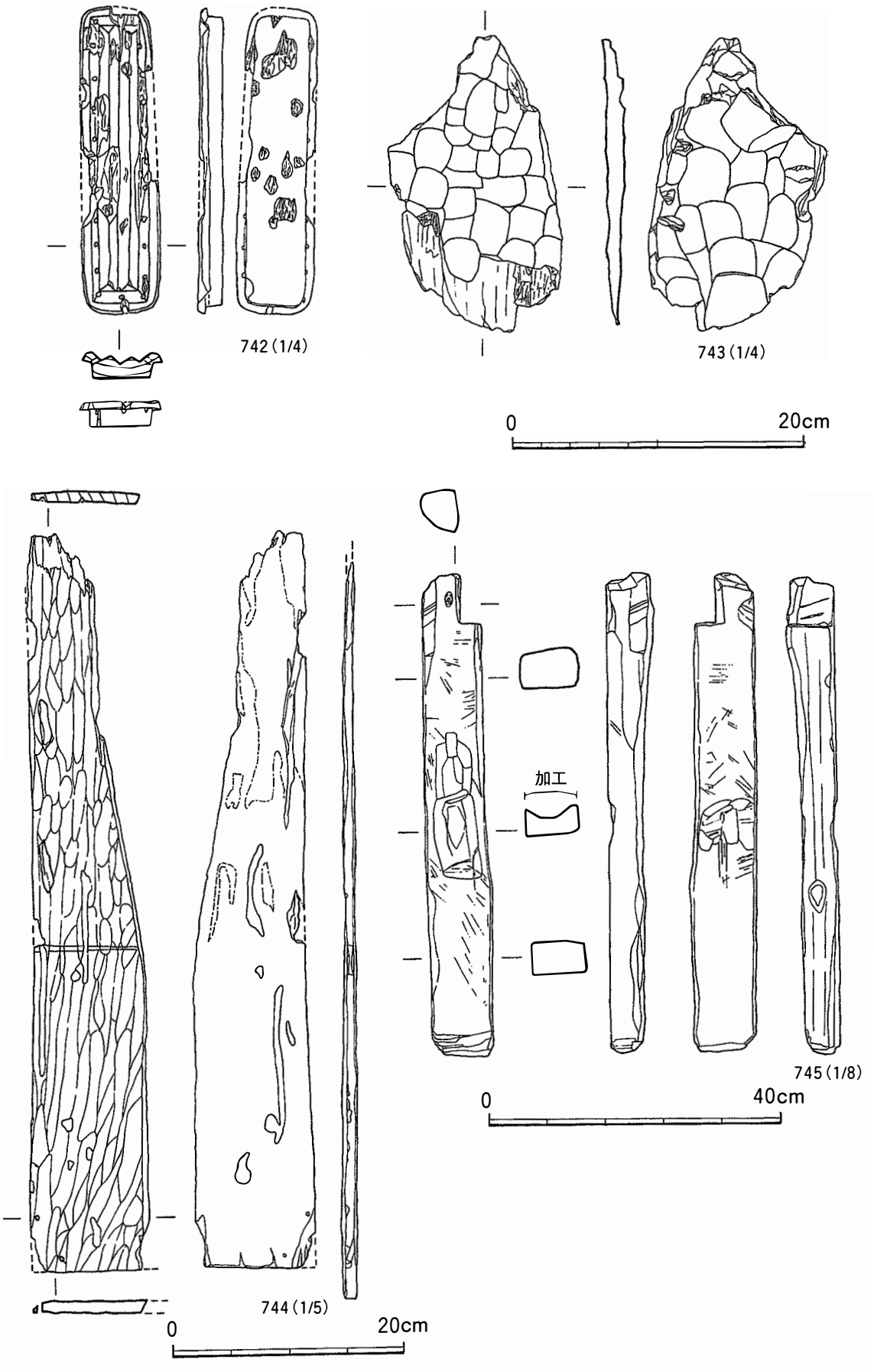
第128図　4SX049出土青銅鏡実測図



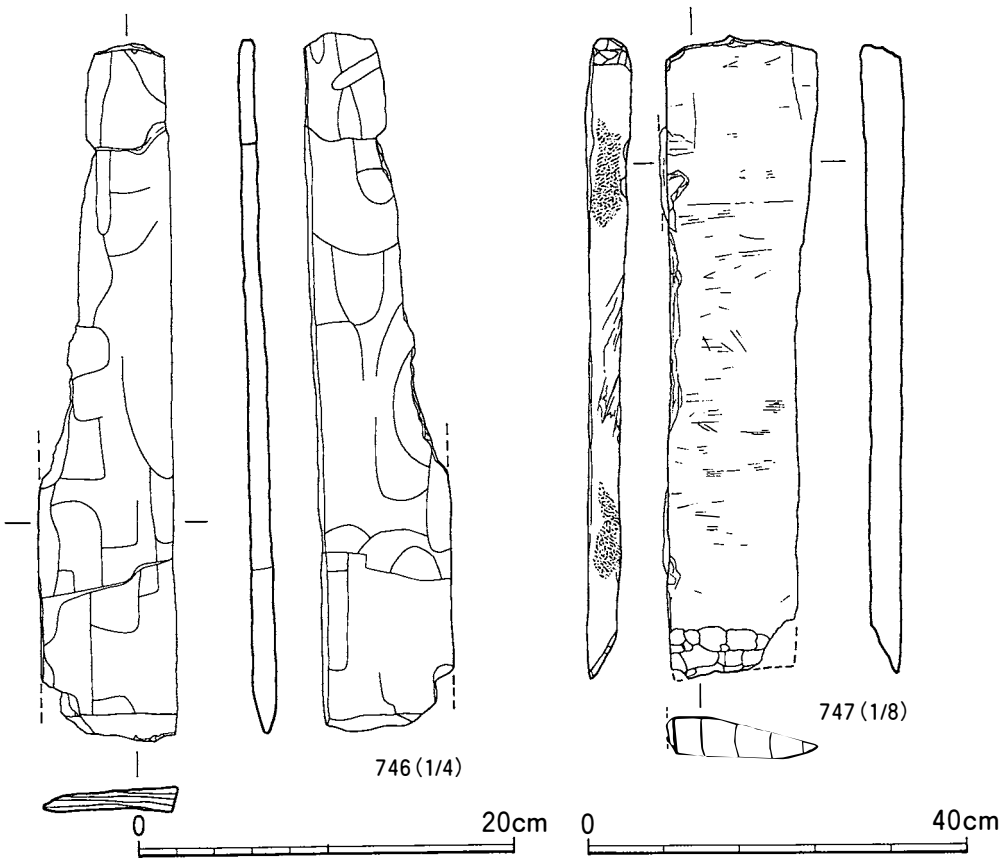
第129図　4SX049出土木製品実測図



第130図　4SX049出土木製品実測図

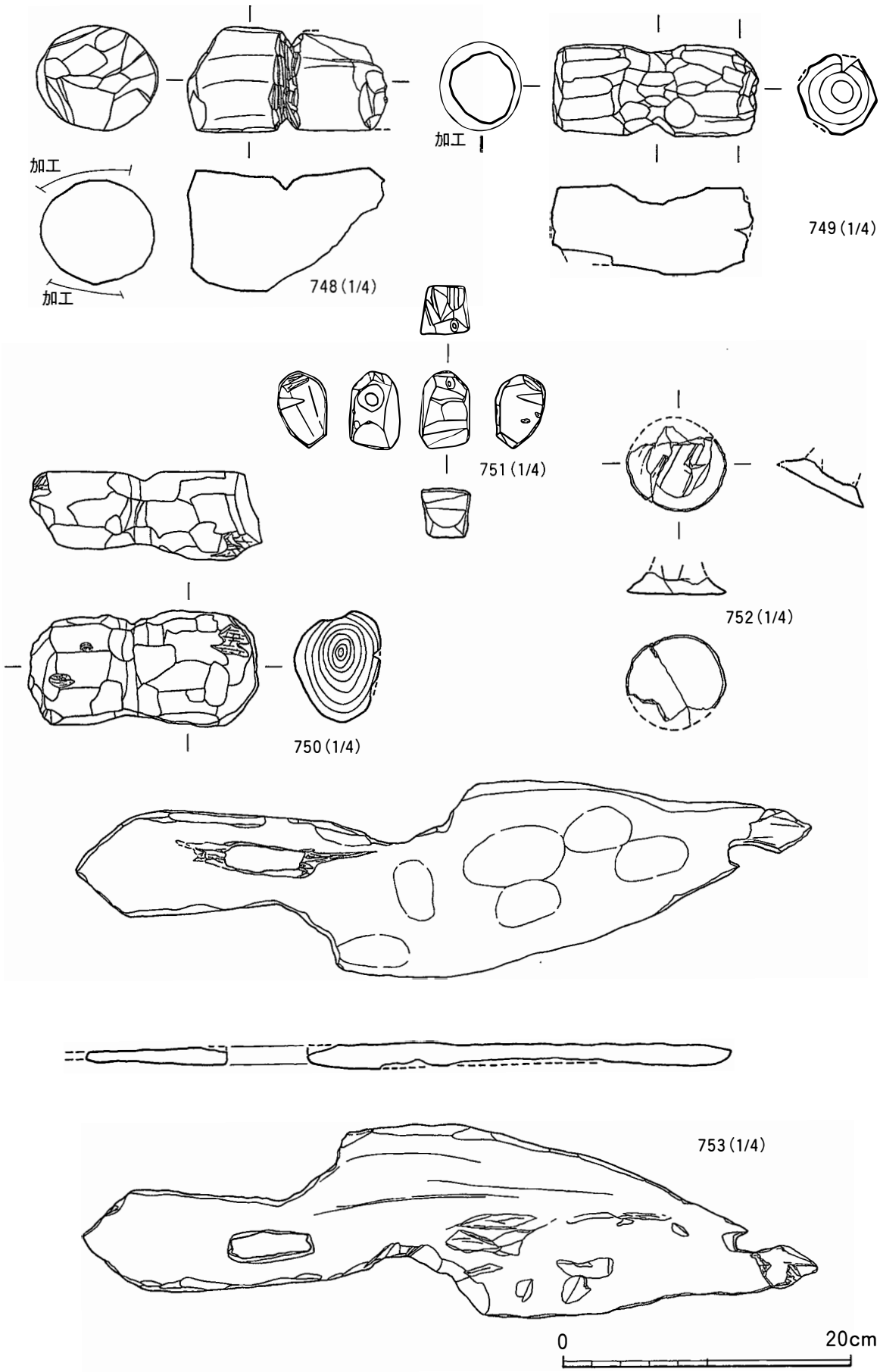


第131図　4SX049出土木製品実測図

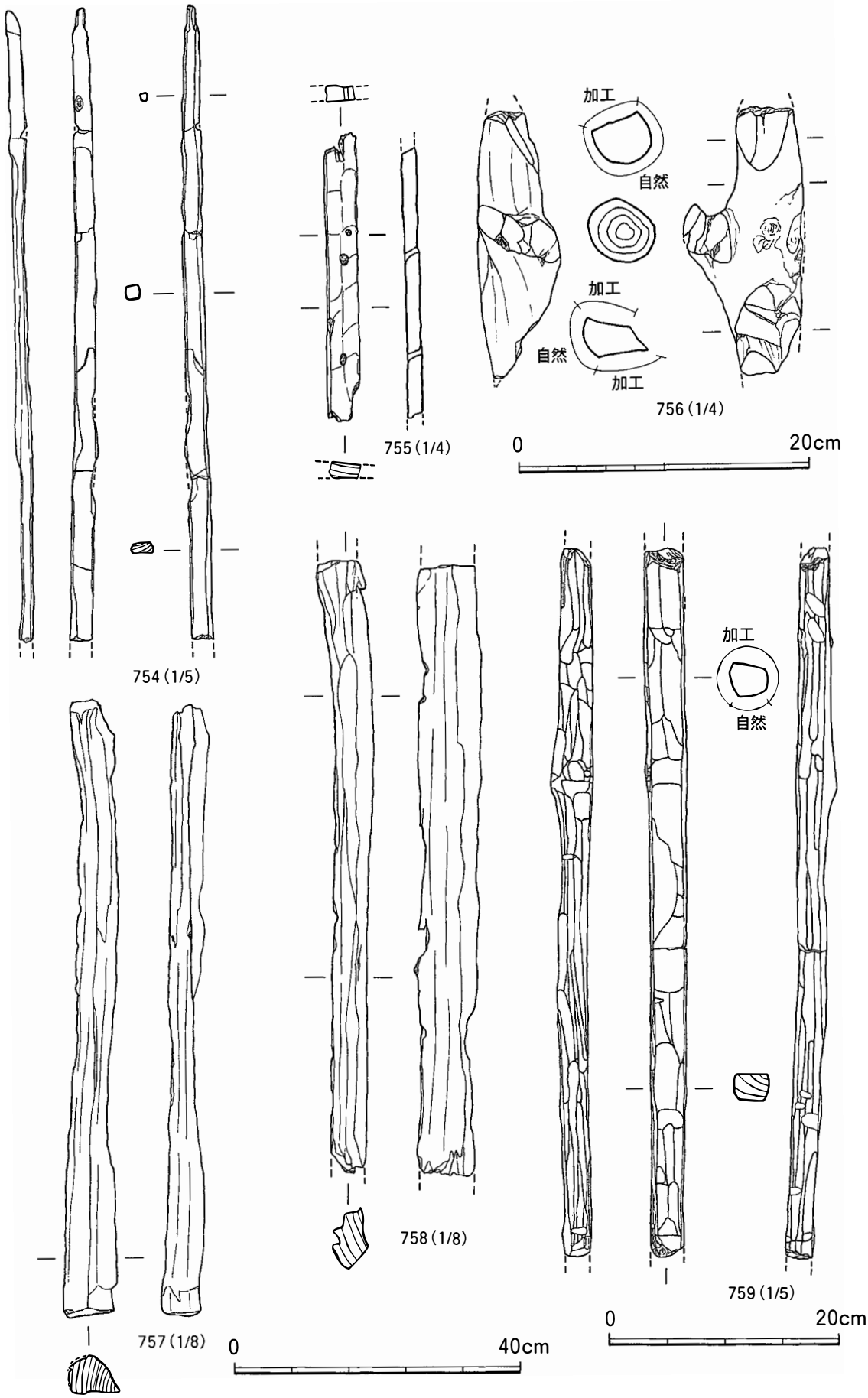


第132図　4SX049出土木製品実測図

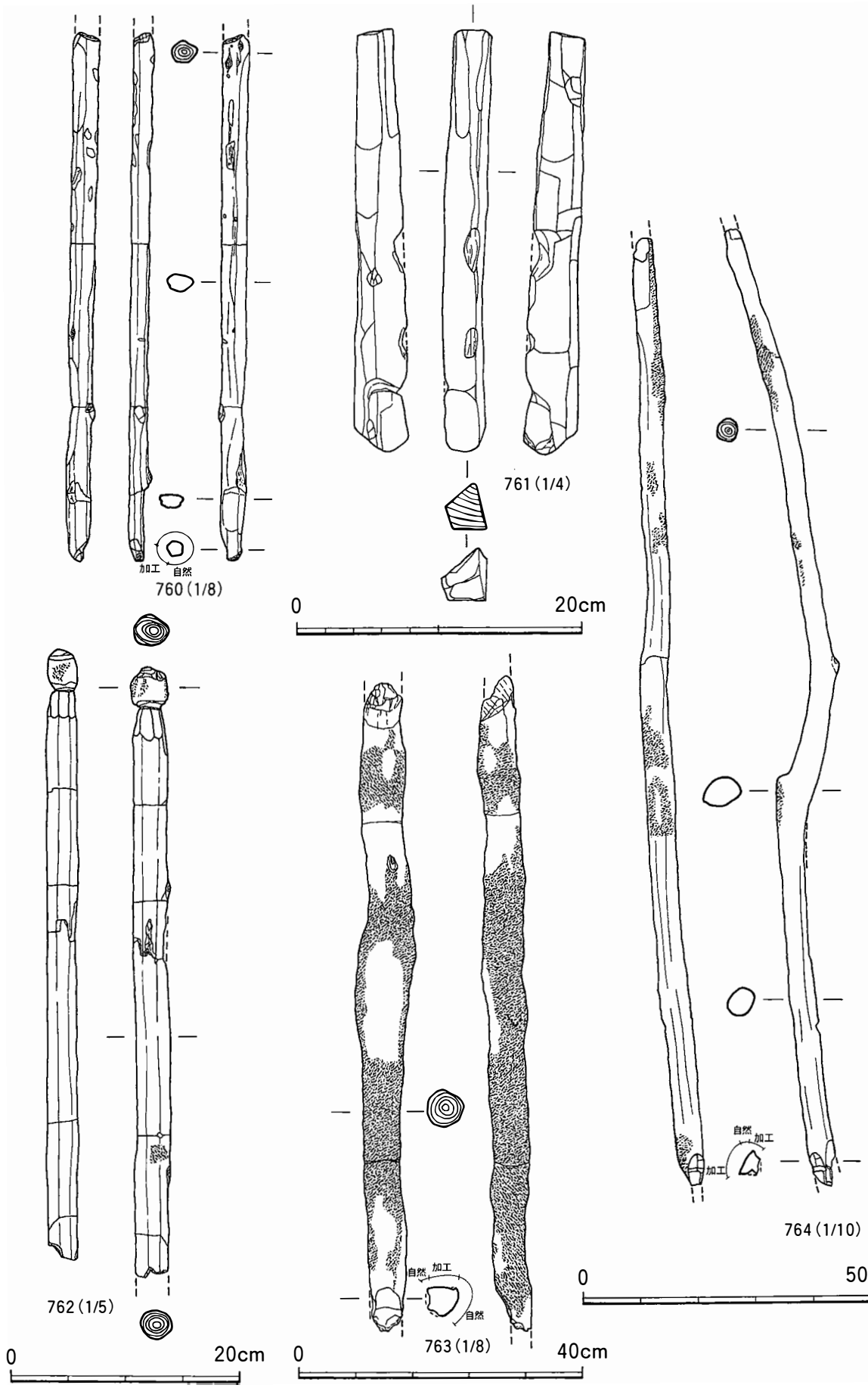
692～701・703・704は坏である。692は、口縁部がやや肥厚し、端部が薄くなるものである。外器面の口縁部下に弱い稜線が認められる。その下位にはヘラ削りが施されていたと思われるが磨耗のためはっきりしない。693は、2層出土である。口縁部は端部からやや下位で肥厚し、端部は薄くなる。外器面には肥厚した部分で弱い稜線が認められ、その下位にはヘラ削りが施される。口径が11.5cm、復元器高が4.4cmを測る。外器面底部付近には板状工具の痕跡が残る。外器面には黒斑がある。694は、復元口径が11.8cm、復元器高が5.0cmを測る。調整は磨耗のため不明である。695は、やや大型のもので鉢としてもよいようである。中層からの出土である。口縁端部は丸くなる。外器面は斜め方向のハケ目が残る。底部付近は多方向のハケ目が施される。内器面はナデ調整が施される。口径が16.0cm、器高が5.9cmを測る。696は、中層の出土である。口縁部は弱く外反して薄くなる。器壁はやや厚い。外器面には中位に弱い稜が認められ、その下位はヘラ削りが施される。上位はハケ目が残る。内器面は中位より上には横方向のハケ目、下位には板状工具による器面調整が施される。復元口径が12.2cm、器高が5.0cmを測る。外器面には黒斑がある。697は2層の出土である。この土器は696に口縁部付近が似かより、端部付近で弱く外反する。器壁は696より薄い。体部付近でやや強く屈曲し、稜を形成している。外器面にはハケ目が残る。内外器面とも煤が付着している。復元口径は15.0cmを測る。698は、上層の出土である。この土器も上記のものと似る。調整はかなり磨耗しているため不明瞭である。復元口径は14.6cmを測る。外器面には煤が付着している。699は、上層からの出土である。口唇部の外反は明確である。体部中位には稜が明確である。復元口径が14.0cmを測る。700は、中層の出土である。口縁端部はやや外反する。外器面に一部ハケ目が残る。口径が13.8cm、器高が5.0cmを測る。701は、6層出土の土師器の坏である。口縁部で外反する。口径が12.9cm、器高が4.7cmを測る。器面調整は外器面に横ナデ、ナデが施される。703は、土師器の坏である。内外器面に赤彩が施される。復



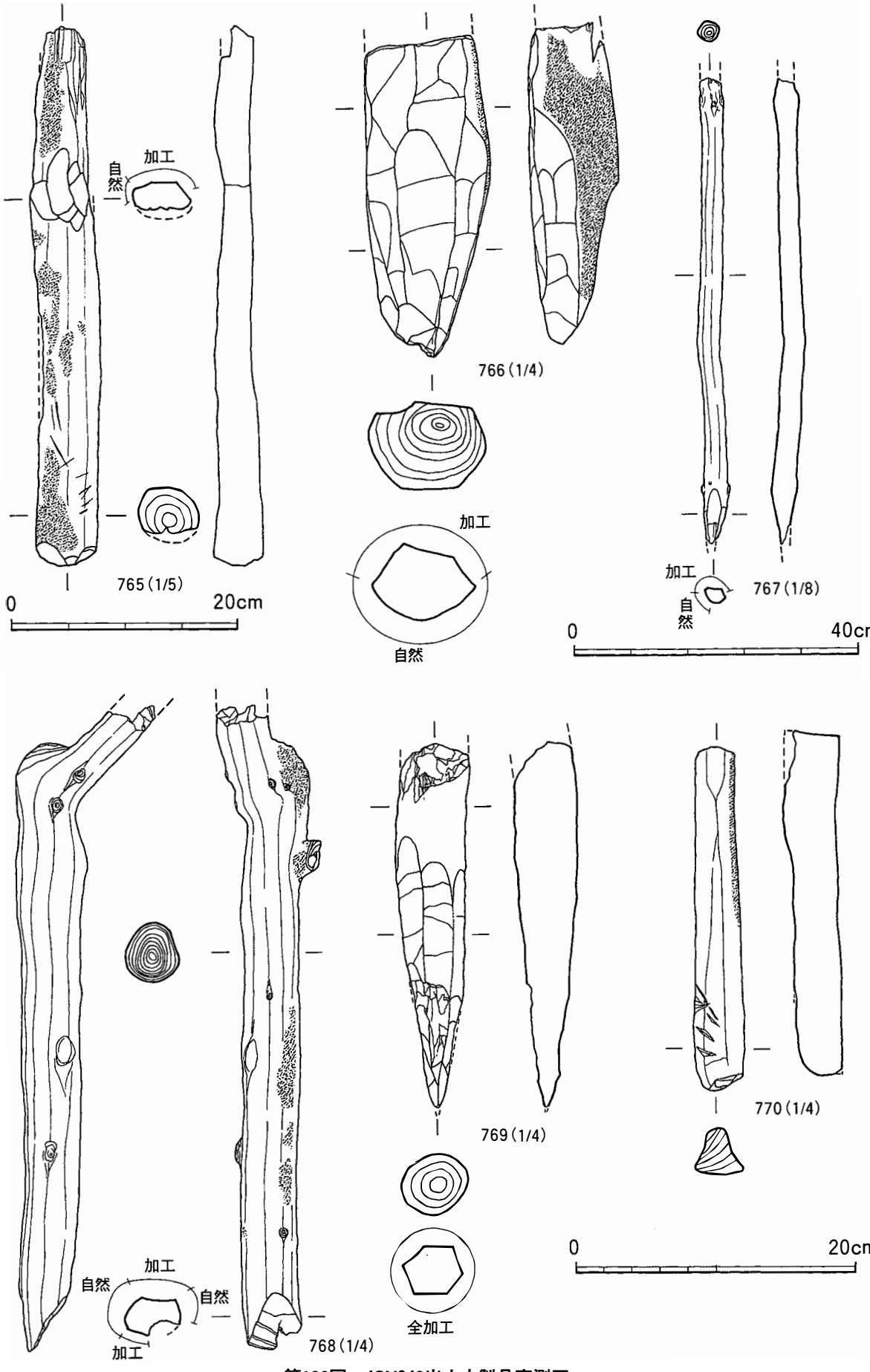
第133図　4SX049出土木製品実測図



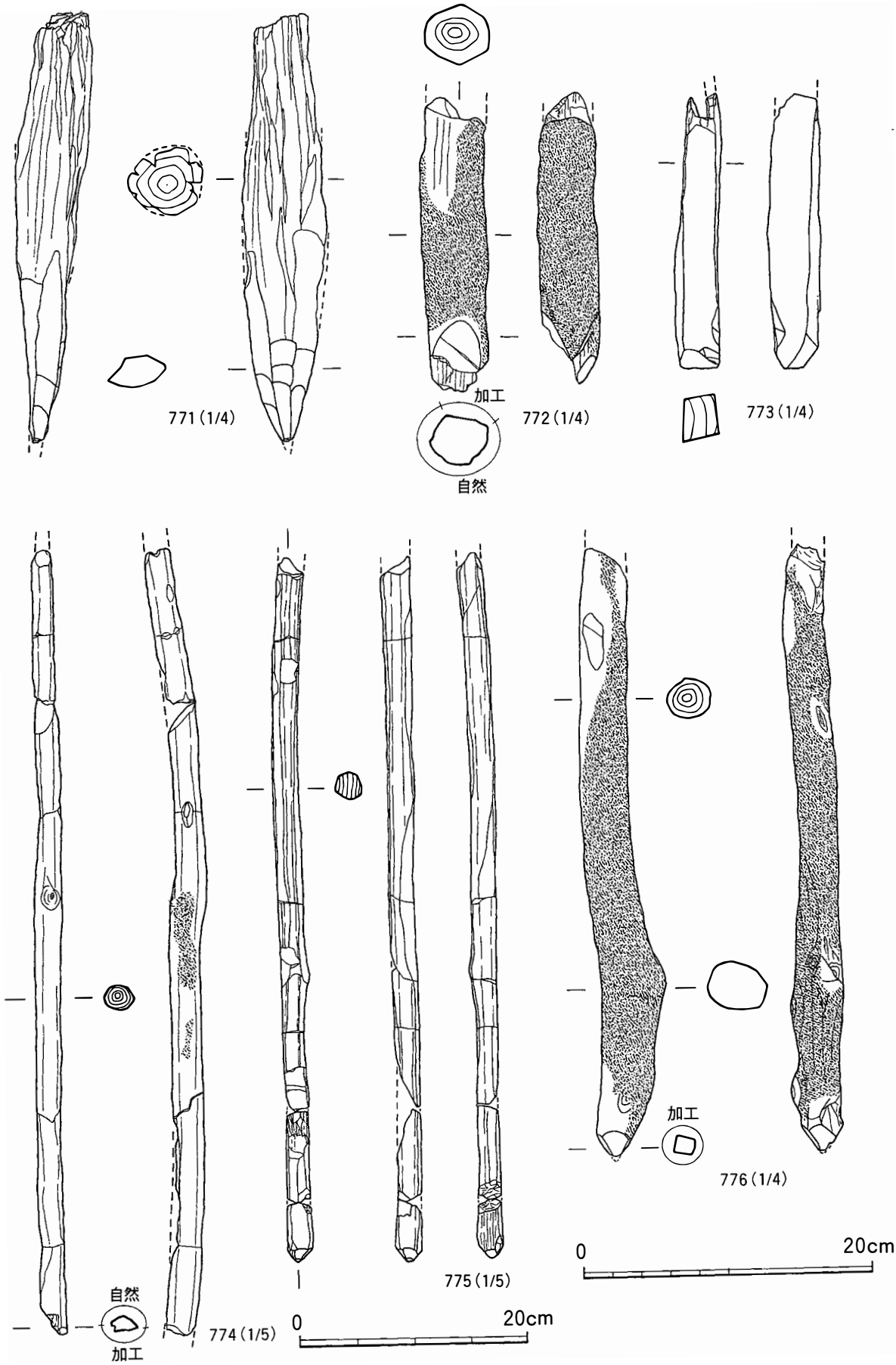
第134図　4SX049出土木製品実測図



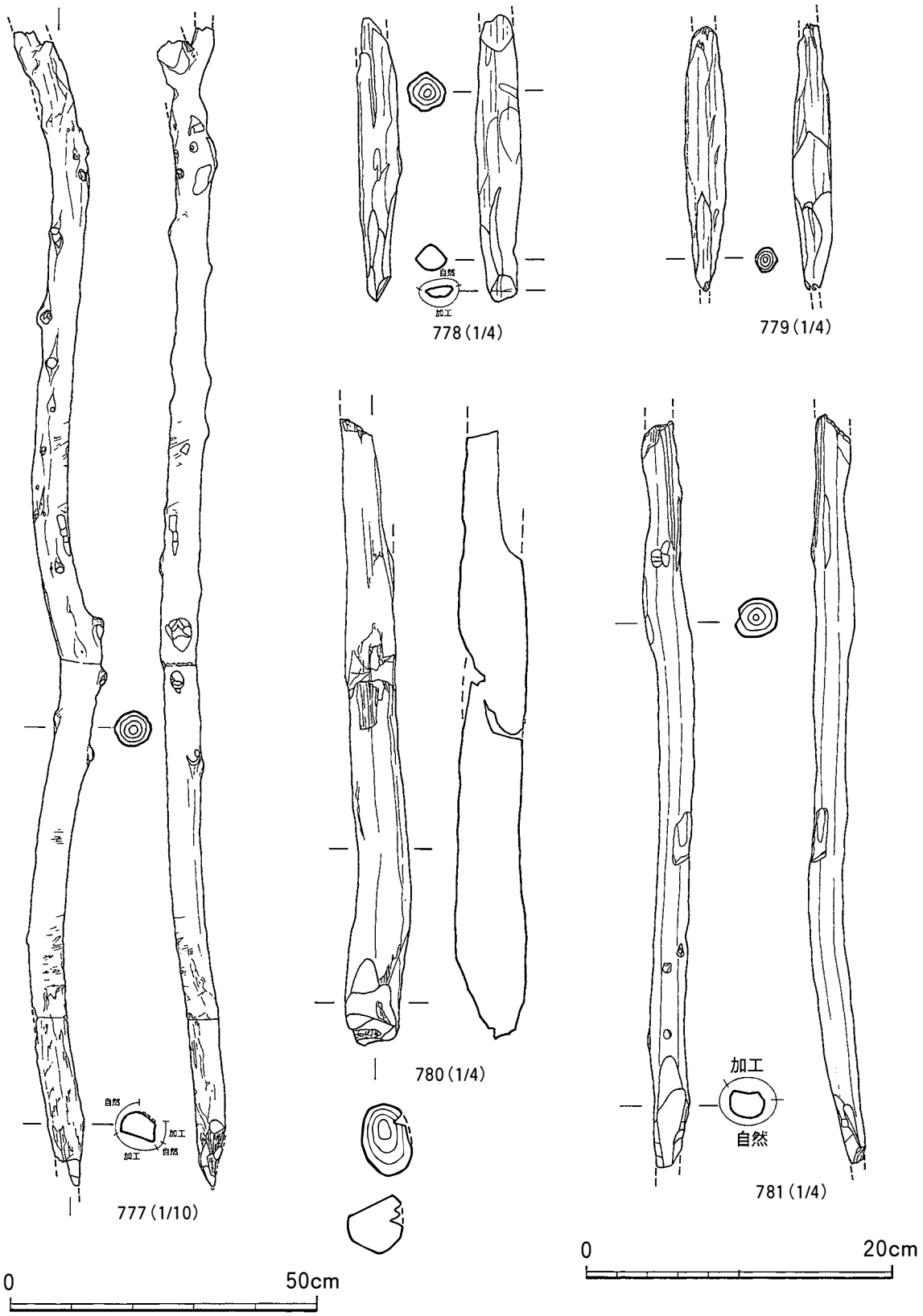
第135図　4SX049出土木製品実測図



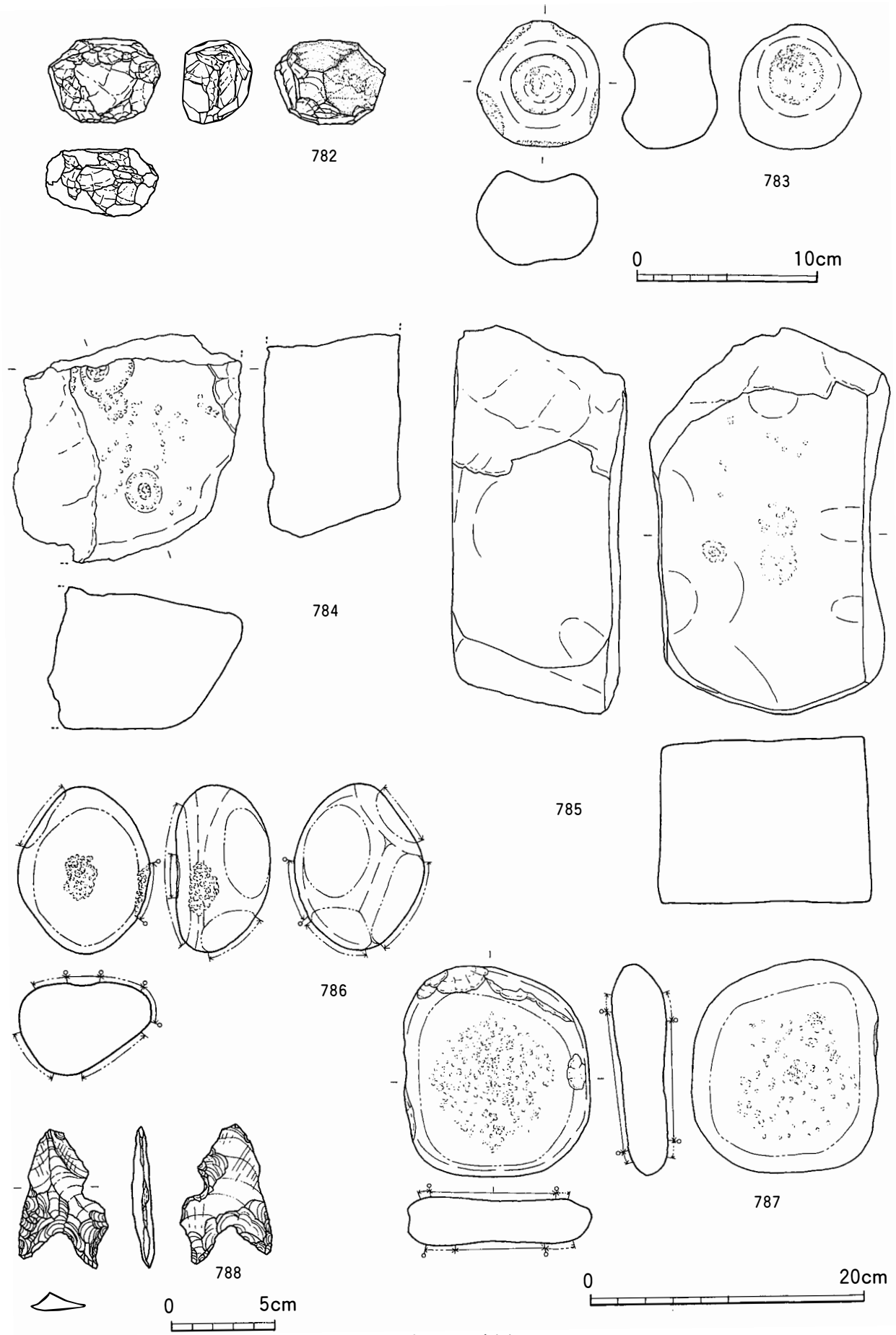
第136図　4SX049出土木製品実測図



第137図　4SX049出土木製品実測図



第138図　4SX049出土木製品実測図



第139図　4SX049出土石器実測図

元口径は13.9cm、器高は3.3cm、復元底部は6.8cmを測る。口縁部は横ナデ調整が施される。704は、2層の出土で、須恵器坏の模倣土師器である。受け部付近が胴部の最大径でこの上に立ち上がりは低い。器表面はかなり磨耗しているが、ヘラ磨きの痕跡が残る。復元口径は12.5cmを測る。

702・705～708は鉢形の土師器である。702は、土師器の鉢である。口唇部は短いながら強く外反する。作りは坏の697・699と似るが、器高が高い。器壁はやや厚い。口径が12.4cm、器高が5.65cmを測る。器面調整は横ナデとナデである。外底面にはヘラ削りが薄く残る。705は、口縁部を明確に作り出したもので、頸部から急速に外反している。口縁部はナデ調整が施される。体部外器面には横方向のハケ目が、内器面にはヘラ削り後ナデ調整が施される。復元口径が13.3cm、器高が6.4cmを測る。706は下層の出土で、口縁部は弱い二重口縁を呈する。器面調整はナデである。復元口径が15.0cmを測る。707は下層の出土である。口縁部は頸部からやや内傾しながらほぼ直に伸びる。端部は丸い。口縁内器面は横方向のハケ目が施される。外器面胴部は横方向のハケ目が施れる。復元口径が13.0cm、復元最大胴部径が11.9cmを測る。

708は、C・D層から出土した甑と考える。底部の穿孔部分はないが、器形の特徴から、穿孔されていると考える。口唇部は薄くなり、断面は尖る。底部から口唇部まで直に伸びる。内外器面ともハケ目が施される。復元口径が20.2cmを測る。

709は小型の甕である。口縁部は頸部からやや外反しながら伸び、薄くなり断面が尖る。胴部は縦に長く伸び、外器面には縦方向のハケ目が、内器面にはヘラ削りが施される。復元口径が10.7cmを測る。

710は、中層および2層の出土である。小型の二重口縁壺で頸部から口縁部までの破片である。口径が10.3cmを測る。調整は横ナデを確認している。外器面に黒斑がある。

711～712は、小型甕としたものである。形態的に713以降の壺形のものに比べ、口縁部径が広く、胴部径と口縁部径の比が小さいものである。711は、D層から出土し、内器面には指頭圧痕が見られる。口縁部は短く直である。復元口径が10.6cmを測り、胴部最大径もほぼ同じである。712は、711よりやや胴部が長いと推定できる。口縁部はやや肥厚し短い。復元口径が11.4cm、最大胴部径が12.3cmを測る。胴部外器面は横方向のハケ目調整、内器面がヘラ削りされる。内器面には黒斑がみられる。

713～730は小型壺としたものである。713は下層の出土で、口縁部径9.2cm、最大胴部径8.8cm、器高8.5cmを測り、口縁部径が胴部最大径より大きい。口縁部に二重口縁を思わせる厚みがみえる。外器面に縦方向のハケ目が残る。口縁部の内器面にハケ目が残る。714は下層の出土で、口縁部は頸部からやや内傾しながら長く伸びて端部に至る。口径が8.5cm、最大胴径が10.1cmを測る。外器面はハケ目が残る。外器面に黒斑がある。715は、口縁部がやや二重口縁気味な特長持つものである。外器面体部にはハケ目が残り、内器面内にはヘラ削りと底に指頭圧痕がある。復元口径7.0cm、最大胴径が8.2cm、器高が8.5cmを測る。716は、口縁部が頸部からやや外反気味に伸びるのものである。口縁部が胴部の8割ほどもあり長い。復元口径が6.0cm、最大胴部径が7.4cmを測る。717は下層の出土で、胴部の張りが大きく、口縁部は胴部の5割ほどで短い。外器面は縦方向のハケ目が上位をしめ、下位は斜め方向にハケ目が残る。口径が7.9cm、最大胴部径9.1cmを測る。718は、頸部が締まり、胴部の張りが大きい。復元口径が5.8cm、復元最大胴部径が7.8cm、器高が8.8cmを測る。719は、1層の出土で、口縁径が8.1cm、最大胴部径が8.5cmを測り、差が小さく甕のような形態になる。口縁部は頸部から直に開く。底部は平らな面がみられる。外器面胴部にはハケ目調整が施される。外器面には黒斑がある。720は、頸部から胴部まで残るものである。胴部のやや上位に最大径があり、8.3cmを測る。内器面には指頭圧痕とヘラ状工具痕が残る。外器面はハケ目調整され、煤の付着や、黒斑もみられる。721は、胴部の張りが強くややひしゃげた感じになっている。口径が7.8cm、器高9.6cmを測る。外器面胴部には縦方向気味のハケ目調整がみられる。内器面胴部は斜め上方へのヘラ削り、底部は横方向のヘラ削りが施される。722は2層の出土で、口縁部から胴部までの破片である。口縁部

は径部からやや直に立ち上がるように伸びる。途中わずかの屈曲が見られる。外器面はハケ目がわずかに残る。内器面は横方向のハケ目と指頭圧痕が見られる。復元口径が7.0cm、復元最大胴部径が7.4cm を測る。723は上層の出土で、復元口径が10.9cm、最大胴部径が8.7cm を測り、口径が胴部径を上回るものである。頸部から直に口唇部まで伸びる。調整は磨耗しているため分かりにくいが、胴部内器面には指押さえの跡が残る。724は中層の出土で、復元胴部最大径が8.1cm、復元口径が10.0cm を測り、胴部径より口縁部径が広い。最大胴部径が胴部の上位にくる。外器面胴部には縦方向のハケ目、内器面口縁部には横方向のナデ、胴部内器面には横方向のヘラ削りが施される。内器面には粘土巻上げ痕も残る。725は口縁部径が胴部最大径よりも大きいものである。また、頸部の区切りがはっきりしない。復元口径が8.6cm、復元最大胴部径が6.4cm、器高が7.0cm を測る。口縁部は器高の３分の２ほどあり、口縁部が大きい。口縁部はハケ目の後ナデ調整、外器面胴部はハケ目、内器面胴部にはヘラ削りが施される。726は、口縁径が9.0cm、復元最大胴部径が8.2cm を測り、やや口径が胴部径よりも広い。外器面は丁寧なハケ目調整、口縁部内器面に横方向のハケ目、内器面胴部にはヘラ削りが残る。内外器面に黒斑が残る。口縁部が胴部の高さの３分の１ほどである。

727・728は、器高に比して胴部の張りが大きく胴部がつぶれたようになっており器形がよく似ている。727は、口縁径が8.4cm、最大胴部径が9.8cm を測る。外器面にハケ目が、内器面胴部ではナデ痕が残る。外器面に黒斑がある。728は口縁径が9.1cm、最大胴部径が11.1cm を測る。729は、復元口径が6.5cm、最大胴部径が8.4cm、器高が7.5cm を測る。外器面は斜め方向のハケ目、内器面は胴部にナデを調整している。外器面に黒斑を持つ。730は復元口縁径が10.9cm、最大胴部径が10.1cm を測り、口径が胴部径にわずかに勝る。器高は8.1cm とかなり低い。このことから土器としてはかなり低い。外器面はハケ目調整で、内器面口縁部はナデ、内器面胴部内はヘラ削りが施される。731は、鉢形の土製模造品である。器壁は薄く、作りは丁寧である。手捏製で、口縁部は少しづつ指でつまみながらつくり出している。内器面は小工具によりヘラ削りされ、外器面はハケ目もしくはヘラ削りにより調整されている。復元口径が8.2cm、器高が4.9cm を測る。

732は、異形土製品である。断面は三角ながら、頂部は丸みを帯びる。上面からみると、凹線が頂部を横断し、両斜辺の中位に穿たれた２孔まで伸びている。その孔は底面にまで穿たれている。また底部中央部には浅い穴が開いている。この土製品はなんらかの製品の一部と考えられる。

733は、土玉と思われる。長さ4cm、厚み2.5cm を測る。器表面には丁寧なミガキが施される。

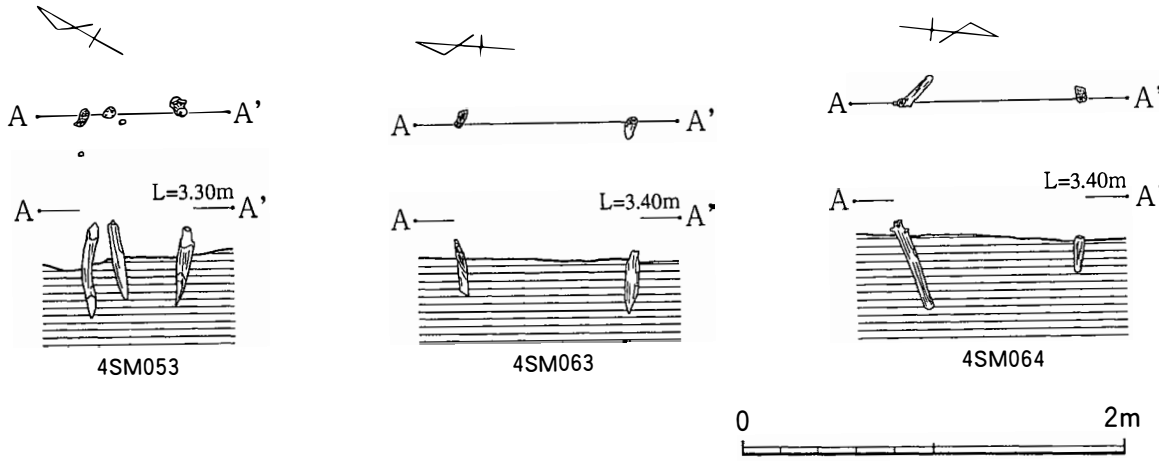
734は遺構の最下部で出土した小型の青銅鏡の破片である。残存部分は、全体の３分の１ほどである。外区は無紋で、その内側に鋸歯文帯が巡る。内区には内行花文があり、花文頂部に珠文が配される。さらに内側に二本の鏡式は、小型内行花文鏡と考えられる。残存部分が偏るためやや不明な部分もある。この鏡の残存度がよかったのは、粘土層中で空気に触れなかったためと考えられる。

735～905は、この遺構から出土した木製品類である。製品、部材などさまざまである。

735は、広鍬の歯先もしくは鍬の泥除け部分と考えている。厚みが薄く、木取りは柾目である。刃先が両刃になっており、鍬先と考えているが、薄さを考慮すると泥除け部分である可能性もある。細かい加工痕が両面に残る。材はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。

736は、4SX049の最下部に設けられた方形の落ち込みの中から出土した一木平鋤（97TY－4108）である。落ち込みから水平状態で出土している。木取りは柾目で、柄部はＴ字型を呈している。鋤部に対して柄部の付き方はやや片側によって、歯の踏み込み部分である肩部があることから、片踏み鋤と考えられる。長さは93.5cm を測る。材は、ブナ科コナラ属アカガシ亜属である。

737は、径1cm ほどの孔が２箇所空けられているため、有孔板材とした。頂部は弧状に成形されている。表面はかなり細かい加工痕が残る。木取りは板目で、材はマツ科モミ属である。残存長が97.6cm、残存幅



第140図　4SM053・4SM063・4SM064実測図

が18.6cm、厚みが2.5cm を測る。738も板材で、板取りは板目取りである。樹種は、ブナ科シイ属である。残存長が18.9cm、残存幅が6.1cm、厚みが2.0cm を測る。739も同じく板材で、板取りは板目取りである。樹種はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。残存長が33.5cm、残存幅が9.0cm、厚みが2.0cm を測る。740も同じく板材で、板取りは、板目取りである。樹種はマツ科モミ属である。残存長が67.1cm、残存幅が10.0cm、厚みが1.8cm を測る。

741は二又鍬である。板目に沿って半分に割れている。板取は柾目取りで、材の樹種はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。残存長が49.6cm、厚みが1.6cm を測る。

742は、容器の部材とした。正面とした面には四方に縁を巡らし内部には２本の山形の稜を造り出している。縁部分の四方に24個の細かい穴が空けられている。裏面は丁寧に面取りがなされ、別の容器などとの組み合わせられるかのように作りがよい。この木製品の用途については、回る小さな穴に紐を通し、他の容器の蓋としての利用できる。またこの穴から紐を通し、編み上げていって籠状の容器ができる可能性もある。他には、細長い木製容器の蓋という考え方もある。他に類例を待ちたい。木取りは柾目取りで、材の樹種はツツジ科スノキ属シャシャンボである。縦が20.7cm、横幅が5.2cm、最大の厚みが1.8cm を測る。

743は容器片とした。木のコブ部分を刳抜いている。木取りは柾目取りで、材の樹種はクスノキ科クスノキ属クスノキである。残存長が20.2cm、残存幅が11.0cm、厚みが1.3cm を測る。

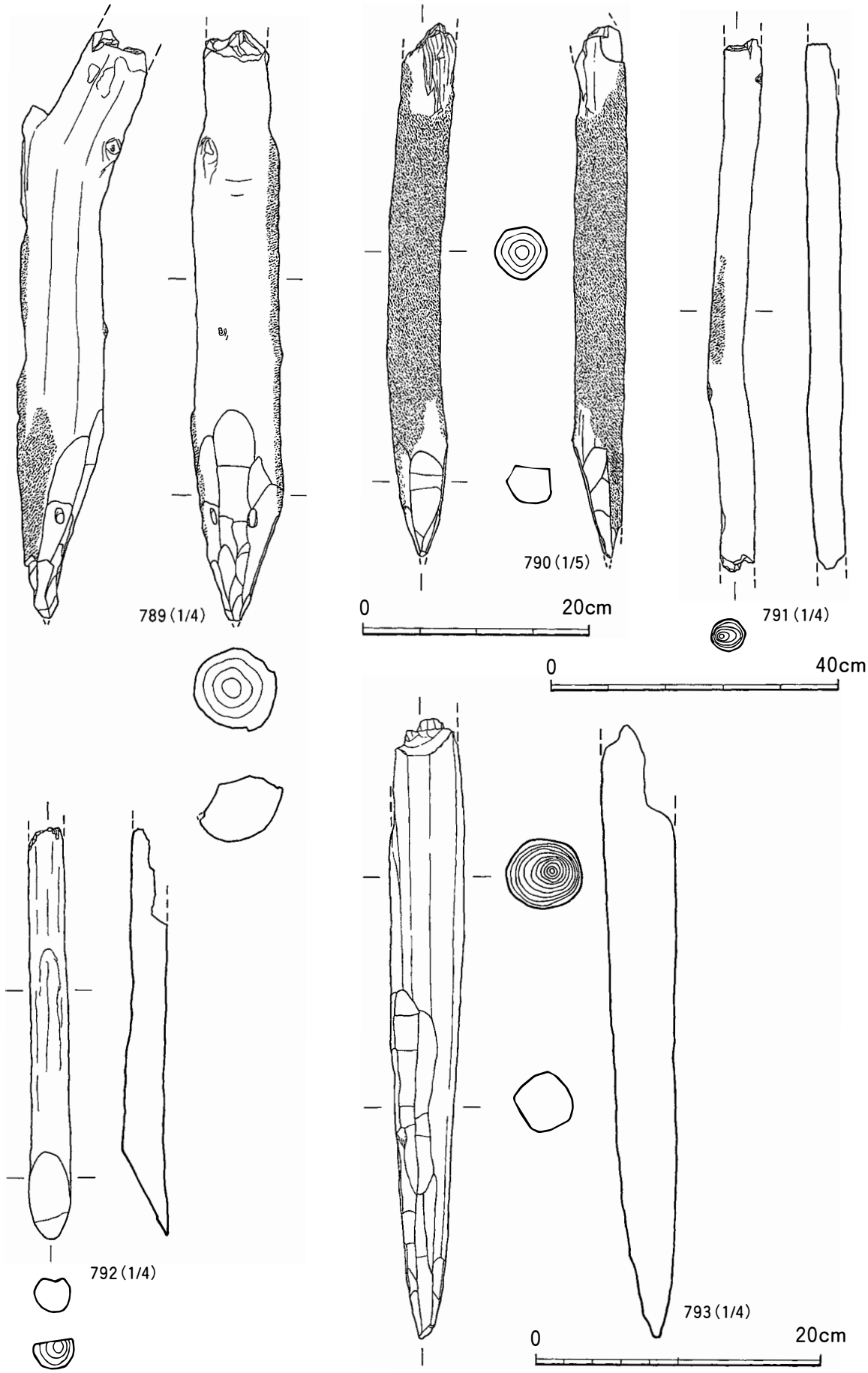
744は、両面共整形の板材で、木取りは追い柾目である。樹種はマツ科モミ属である。残存長が62.7cm、残存幅が10.2cm、厚みが1.3cm を測る。

745は、建築材を転用した工作台とした。器表面に刃物痕が残り、この上で刃物を使った工作を行っている。樹種はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。残存長が65.5cm、残存幅が9.0cm、厚みが6.8cm を測る。

746は板材で、板目取りである。樹種はブナ科シイ属である。残存長が36.4cm、残存幅が7.0cm、厚みが1.3cm を測る。

747は、ミカン割杭を転用した工作台である。側面を工作台に利用し、刃物痕が残る。木取りは柾目取りである。樹種はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。残存長が64.3cm、残存幅が16.0cm、厚みが4.4cm を測る。

748・749・750は木錘である。前の２点がツバキ科のヒサカキ属とツバキ属、最後の１点がモクセイ科イボタノキ属である。共に芯持ちの丸木から作られている。



第141図　4SM053杭実測図

751は、動物を模した形をしているため、一応動物偶（97TY－4109）とした。最初は木っ端と考えたが、意図を持ったような加工痕があるため木偶とした。縦5.3cm、横3.5cm、長さ3.3cmを測る。材は、ニレ科ムクノキ属ムクノキである。

752は、円錐形の台とした。上面に刃物痕が残り、方形の掘り込みがあるようである。木取りは柾目取りである。樹種はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。高さが6.5cm、横径が6.5cm、厚みが1.5cmを測る。

753は、平面形が鋤のような格好をした板材である。側片は不規則な刃物痕が入る。よく観察すると、2つの長方形の穴が開いている。ここを指し込み穴とした箱の一部の可能性がある。材はクスノキ科クスノキ属クスノキである。

754は、弓らしきものである。上部にユハズと考えられる削りだし部分がある。側面部も面取りして方形にしている。下部は剥げ落ちて折れている。材は芯去りのウルシ科ウルシ属である。

755は、有孔木片とした。板材で斜めに穿孔したものである。材は板目材で、スギ科スギ属スギである。

756は、枝節のある芯持ち丸木材で、上下端にカット痕がある。一応加工材としたがこれから加工するのかもしれない。樹種はブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節である。

757～764は大部分が一部加工された材である。

757・758は、割り材で何らかの材として使用されたものである。ともに一応建築材とした。樹種は757・756ともブナ科クリ属クリである。

759は、芯無し材の半裁材で、すべての面に加工を施し、一部がやや盛り上がったようになっている。よく似たものと天秤棒がある。樹種はニレ科ムクノキ属ムクノキである。

760は、芯持ち丸木の材である。樹種は不明である。761は、芯去り材の加工木片である。樹種は不明である。

762は、芯持ち丸木材の建築材である。樹種はクスノキ科クスノキ属クスノキである。頂部は下から削ぎこみを入れ、抉りこみを作りだしている。側辺はほとんど丸木のままである。この材は立った状態で出土した。杭として役割があったのであろう。抉りこみが他の材との組合せに使用された可能性がある。

763は、芯持ち丸木材の建築材である。樹種はブナ科シイ属である。木表面が焼けている。下部にカット痕が見える。764は、芯持ち丸木材の建築材とした。途中から屈曲する材で、下部をカットし尖らせている。樹種はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。

765～781は、大部分が芯持ち丸木材である。杭や建築材とみられるものがほとんどで、大きさの違いだけである。樹種は不明である。中では771が杭であるが、かなり造りがよい。樹種はムクロジ科ムクロジ属ムクロジである。773は柱の転用材と考えられ、木取りも柾目材である。角が作られてもいる。775は建築材とした。芯無し材で加工が施され下部の造りもよい。節を落としている。樹種はニレ科ムクノキ属ムクノキである。

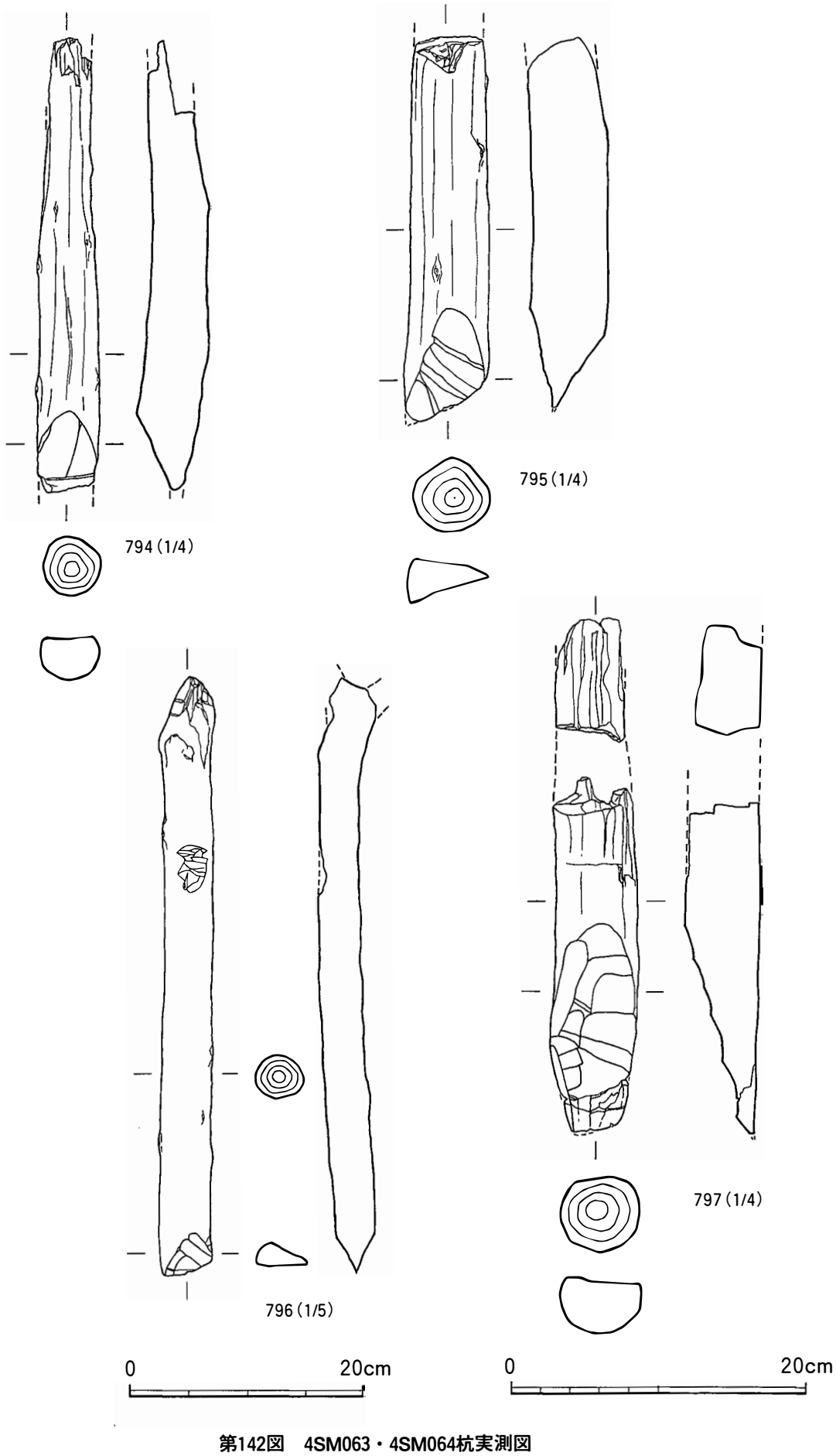
782～788は石器類である。この遺構の時期よりも以前のものが大部分で、縄文時代～弥生時代のものが主であろう。782は安山岩の石核である。各面からの細かい剥片を剥ぎ取っている。

783は、石英安山岩製の凹石である。遺構の最下層付近から出土した。この石器については古墳時代に使用されていた可能性がある。長さが6.8cm、幅が6.6cm、厚みが5.1cmで、重さが329.9gを測る。

784は破損した石皿で、石材は安山岩である。5SX049のD層から出土している。785は同じく安山岩製の石皿で破損している。角張った細長い石材を利用し、砥石のように使用したものか。

786は凹石で、石材は石英安山岩である。正面に研磨痕と敲痕、側辺にも敲痕がある。研磨痕は他の面にもある。長さが12cm、幅が9.65cm、厚みが4.8cm、重さが1012gを測る。

787は台石とした。やや小振りではるが、表裏面に琢彫痕が多数見られるので、台石と判断した。石材は



第142図　4SM063・4SM064杭実測図

石英安山岩である。5SX049のD層から出土している。長さが15.35cm、幅が13.5cm、厚みが3.9cmと薄い。重さは1329.4gである。

788は、黒曜石製の石鏃である。側辺が欠損しているので他の用途に使ったのかもしれない。剥片を使用したものである。長さが3.40cm、幅が2.15cm、厚みが0.4cm、重さが2.25gを測る。

○4SM053・4SM063・4SM064【第140図】

これらの遺構は4SX049の中に打ち込まれた杭列である。時期については上部が腐食で失われていたので、どの層から打ち込まれたのか明確ではない。

［部材］【第141図・第142図】

杭列であるので部材としては杭である。上部は腐食のためなくなっているが辛うじて残った部材を図化したのが第141・第142図である。

4SM053は4SX049内のY－30グリッド付近で検出し、4SE055に近接する。4SX049の掘り下げ作業時に杭列で確認した。確認水平レベルはL＝3.10mであり、4SX049の底面への打ち込みである。

4SM063は1番から2番までの杭2本のみの出土であり、その全長は0.36m、杭列確認面からの最大深度は42cmを測り、4SX049の底面へ打ち込む。

このような小規模の杭列ではあるが、隣接する4SM053とは主軸方向にズレがあることから、別杭列とした。

4SM063と平行する4SM064は、同じ遺構とも考えられるが、ここでは別遺構としておく。

なお本資料の杭は腐食が激しく実測に耐えられないことから図化は行わなかった。

○5SX040【第143図～第148図】

この遺構は熊本県と玉名市の調査区である調査Ⅷ区及び調査Ⅸ区の東側に位置し、調査区内で確認した長さが100m以上を測る大きな溝状遺構である。調査範囲全体で確認した状況からは、やや蛇行しながら北から南へと続く溝状の遺構である。この遺構の全体像は今回の調査範囲ではつかめていない。この遺構と他の大溝状遺構との関係も掴めていない。調査時には、最後まで発掘に時間がかかり、土層観察用のベルトを完全に掘り取ることはできなかった。

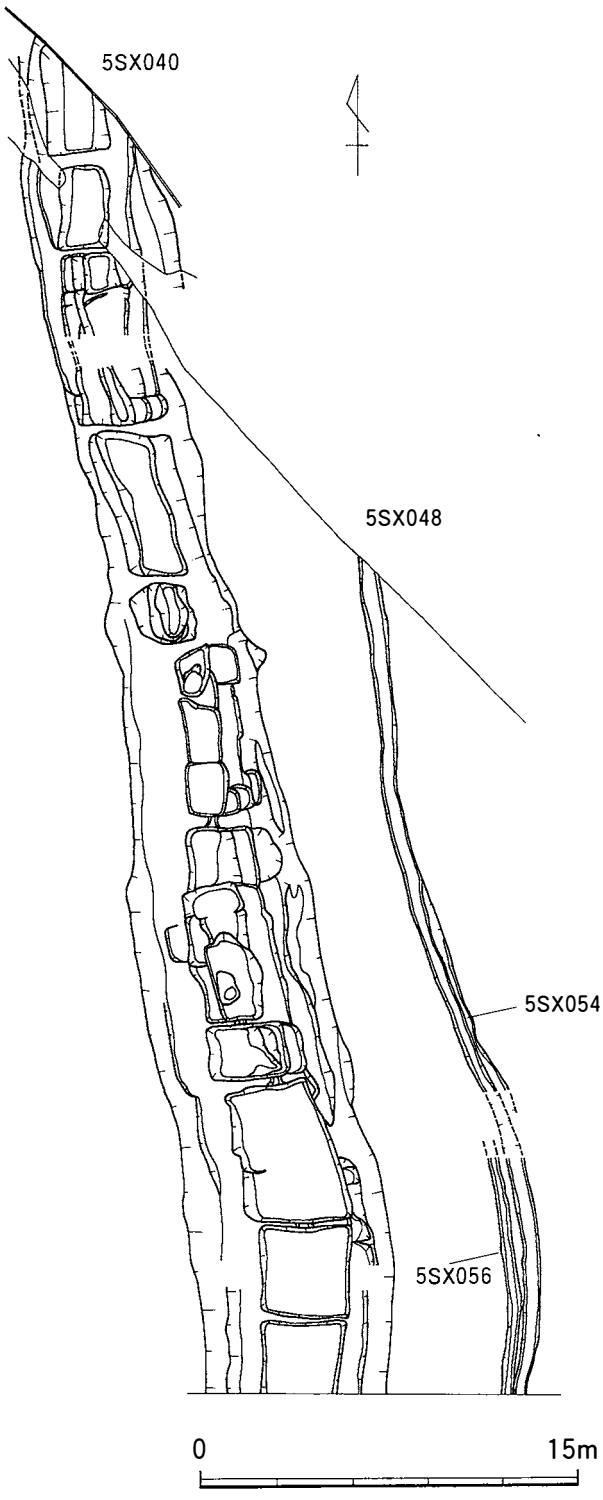
この遺構の底部には他の同様の大溝状遺構に見られる「長方形の掘り込み」が小区画を形成するように、北側から中央部にかけて見られる。玉名市の調査区に含まれる南側部分では本来掘り込みがないのか、流水で削られてなくなっているのか確認できなかった。調査時では当初、大きな溝状遺構がまず掘り込まれて、その中に小さな区画が設けられたものとしていた。その後掘り込みの観察や大溝状遺構の壁面の掘り方を観察したところでは、数度の掘り替えが行われた形跡がある。

最終的に掘削の終わった段階では、場所により形状や確認面からの掘削深度が異なっている。確認面での幅が約5.5mほど、底面の幅が約4.5mほど、確認面からの深さは北側が浅く0.4m、県調査区の南側で確認面から0.7mを測る。底面にある長方形の掘り込みは、長辺の長いもので約6mほど、短いもので約3mほど、幅は約2～4mとさまざまで、掘り返しもあり、本来の単位を明確にすることは困難であった。

各土層断面の注記を以下に記す。なお、注記はそれぞれの土層断面ごとに行い、全体を通じての土層の照合はしていないので各箇所で統一がとれていないことを付記しておく。

［A－A’土層断面注記］

B層は、灰褐色（10YR4/2）を呈し、やや粘性があり、多量の酸化鉄が筋状に入る。C層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、粘性が強く、多量の酸化鉄を含む。D1層は、黒褐色（2.5Y3/2）を呈し、粘性が強く、やや



第143図　5SX040・5SX048・5SX054・5SX056全体図

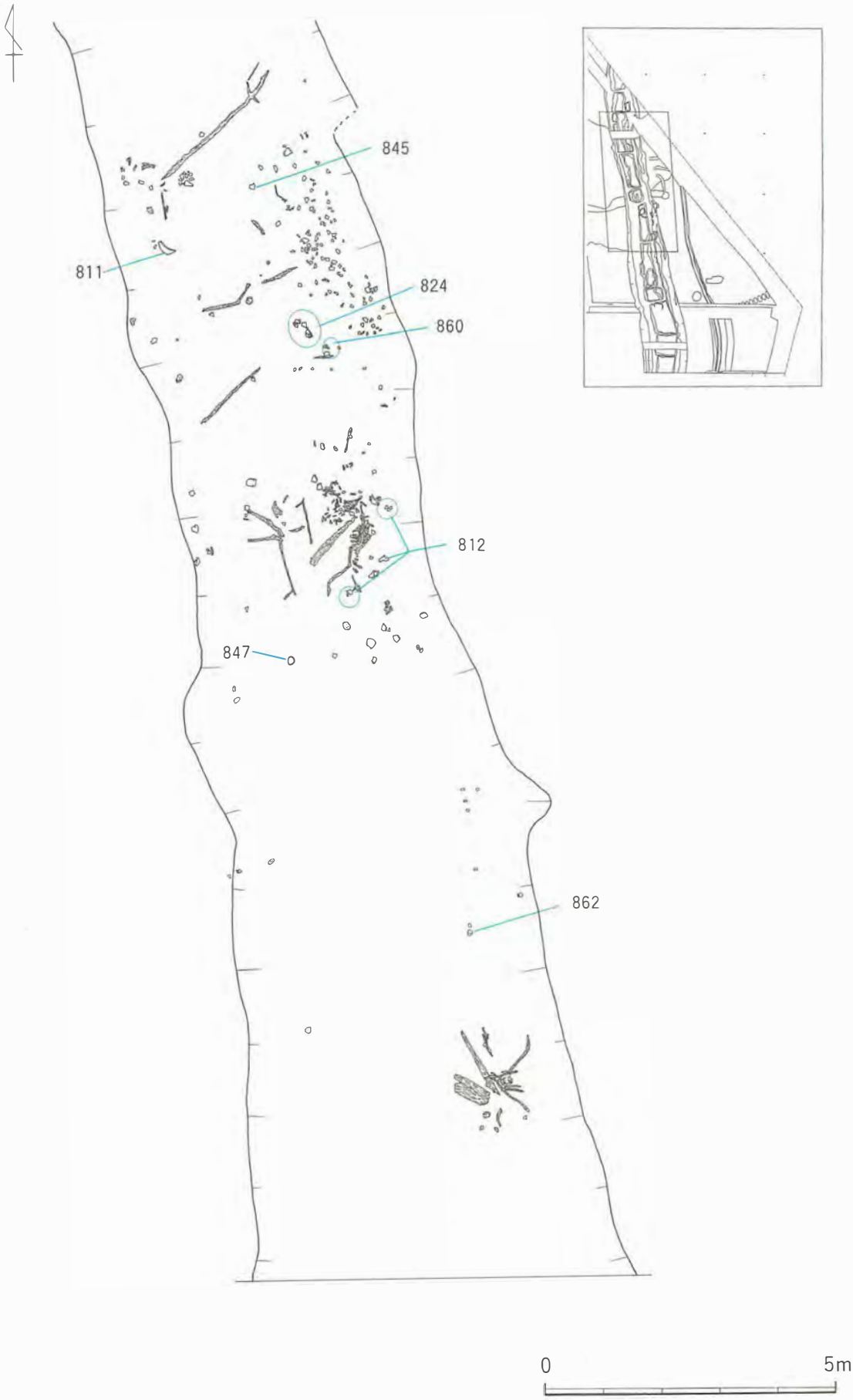
水気を含む。少量の酸化鉄を含む。やや締まった層である。D2a層は、褐灰色(10YR4/1)を呈し、粘性があり、1mm以下の砂粒を多く含み、炭化物も少量含む。D2b層は、黒褐色（2.5Y3/2）を呈し、粘性が強く、やや水気を含み、1mm以下の砂粒を少量含み、炭化物も少量含む。E層は、灰色（5Y4/1）を呈し、粘性が強く、水気を多く含み、酸化鉄の集積も少量含む。D２層は、暗褐色（10YR3/4）を呈し、やや粘性があり、多量の酸化鉄の集積を含む。E１層は、暗褐色（10YR3/3）を呈し、粘性が強く、少量の酸化鉄の集積を含む。

［B－B’土層断面注記］

１層は、灰色（7.5Y6/1）を呈し、やや締まりがない。2層は、黒褐色（5YR2/2）を呈し、締まっている。酸化鉄の集積がわずかにある。3層は、黒褐色（5YR2/1）を呈し、2層より締まっていない。炭化物や酸化鉄の集積を土中に含む。4層は、にぶい赤褐色(5YR4/4）を呈し、3層より締まっていない。炭化物や酸化鉄の集積を土中に含む。5層は、にぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、4層より締まっていない。炭化物は少ないが、酸化鉄の集積を土中に含む。6層は、にぶい赤褐色(5YR4/3）を呈し、5層より締まりがない。腐食の進んだ木材を含む。また、砂粒も若干含む。７層は、黒褐色（10YR3/1）を呈し、やや締まりがあり、炭化物を含む。8層は、黒褐色（10YR3/1）を呈し、7層より締まりがない。炭化物や遺物を含む。9層は、黒褐色（10YR3/1）を呈し、8層より締まりがない。土中に若干の砂粒を含む。10層は、黒色(10YR2/1)を呈し、砂粒を多量に含み、締まりが弱い。11層は、黒色（10YR2/1）を呈し、砂粒を若干含む。10層より締まりがある。12層は、青灰色（5BG5/1）を呈し、締まりがある。炭化物や酸化鉄の集積を土中に若干含み、遺物も含む。13層は、褐灰色（10YR5/1）を呈し、砂粒を若干含み、酸化鉄の集積を土中に含む。14層は、青灰色（10BG6/1）を呈し、炭化物をほとんど含まず、シルトや粘土を多量に含む。

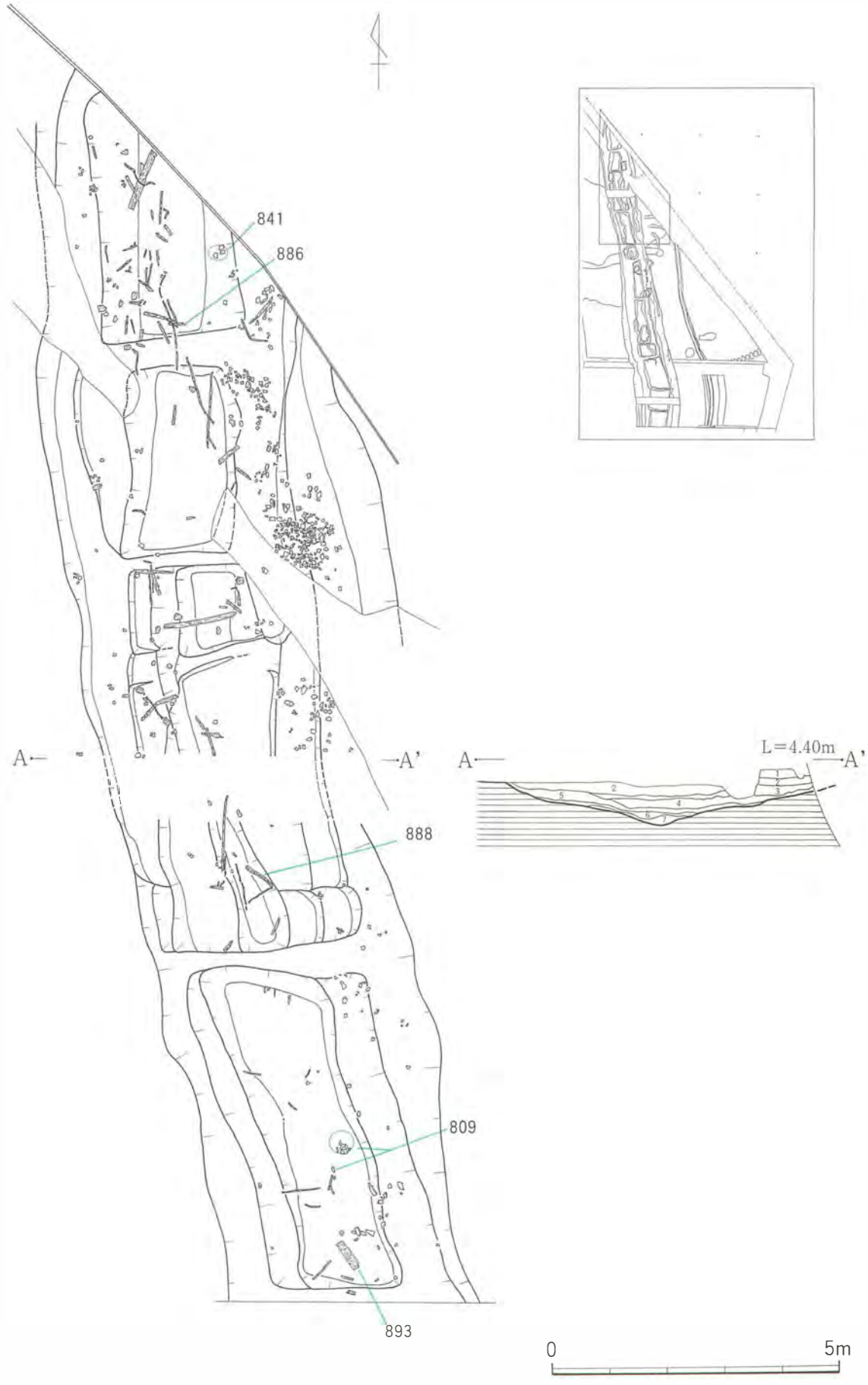
［C－C’土層断面注記］

Ｖc層は、褐灰色（10YR5/1）を呈し、乾くとサラサラする。A１層は、灰黄褐色（10YR5/2）を呈し、粘性は少なく、少量の酸化鉄を含む。A２層は、灰黄褐色（10YR5/2）を呈し、粘性は少なく、少量の酸化

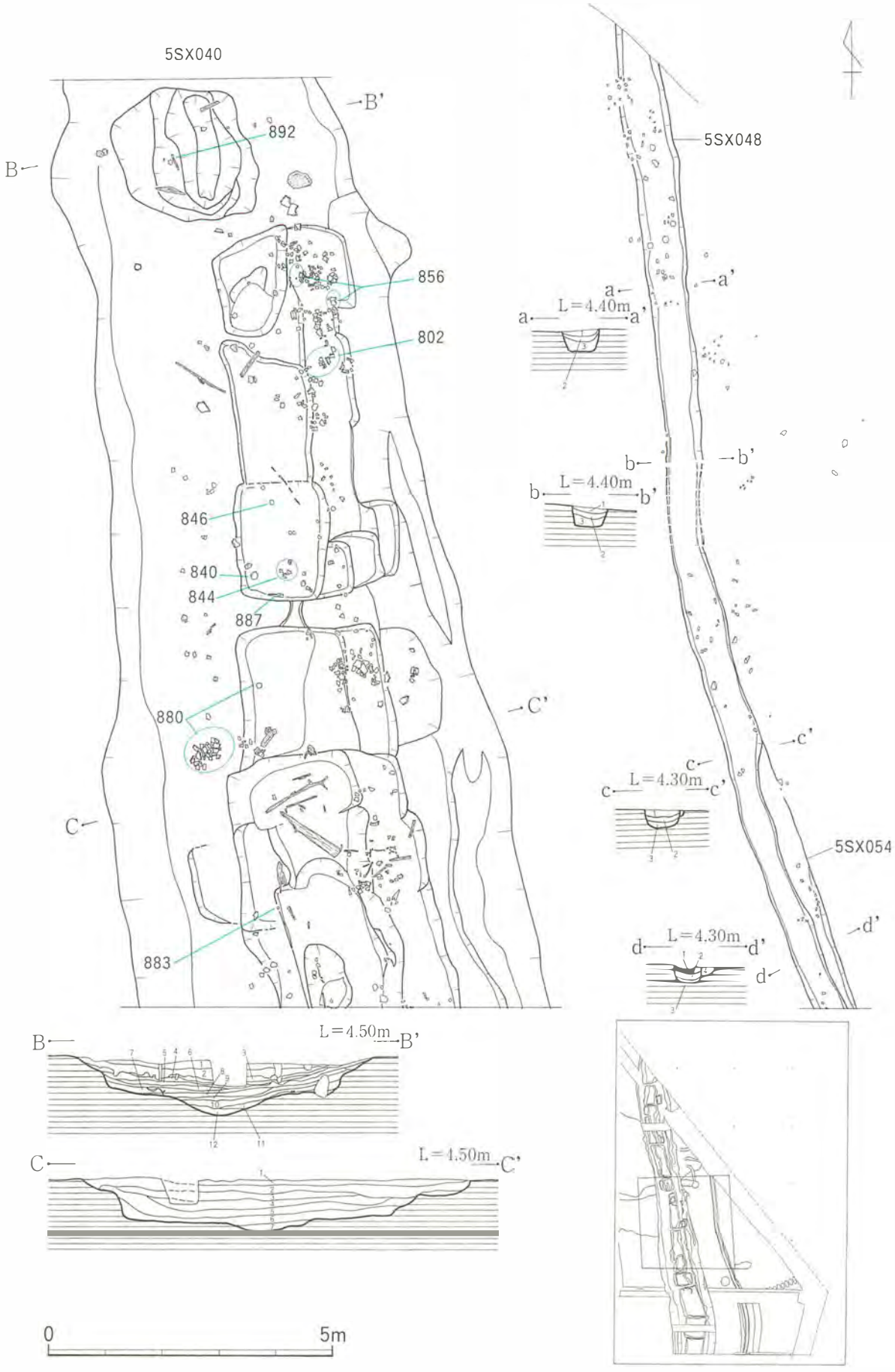


第144図　5SX040上面遺物出土状況実測図

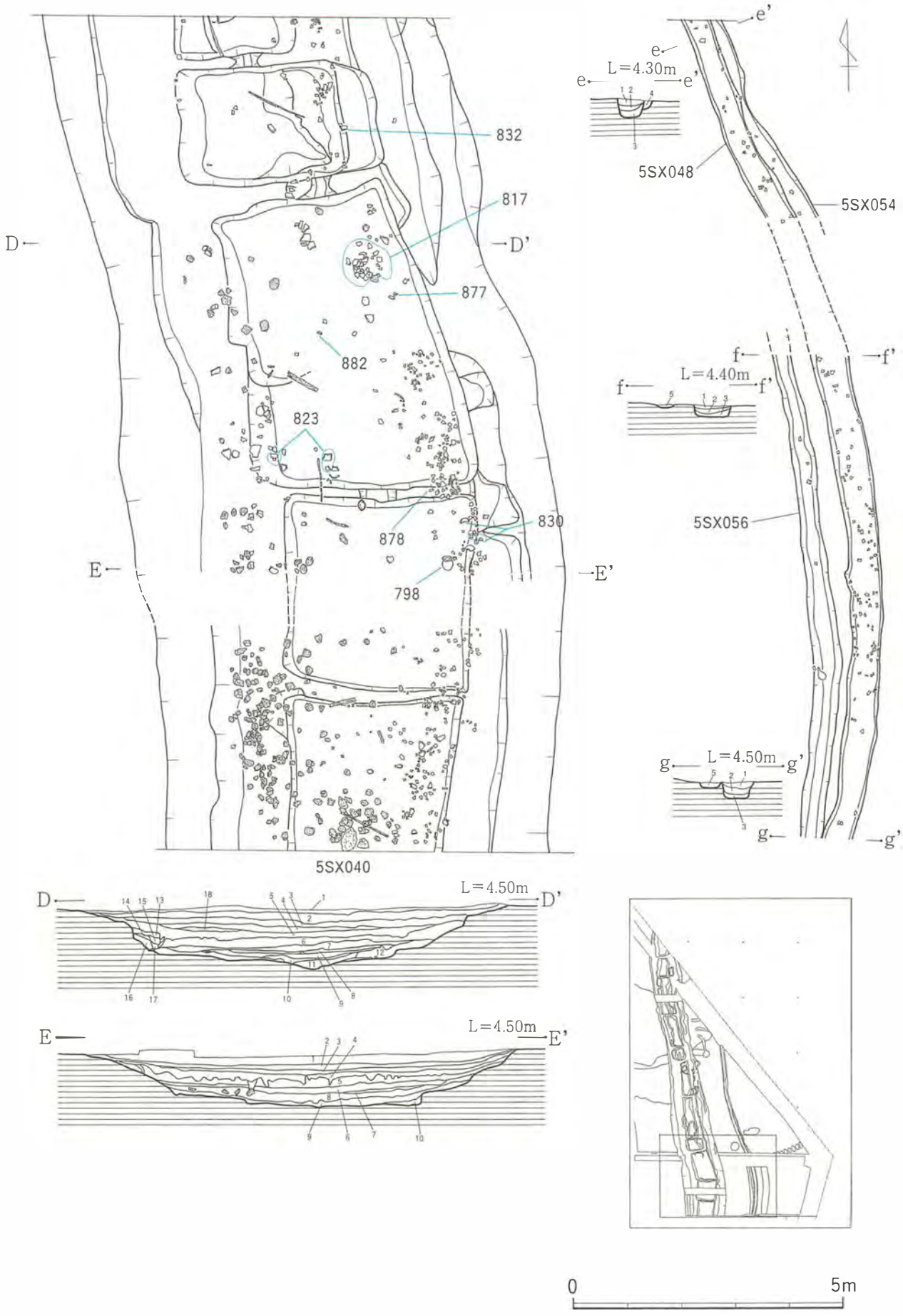
第145図　5SX040上面遺物出土状況実測図



第146図　5SX040下面実測図



第147図　5SX040下面実測図（含5SX048・5SX054）



第148図　5SX040下面実測図（含5SX048・5SX054・5SX056）

鉄を含む。B層は、褐灰色（10YR4/1）を呈し、やや粘り気があり、少量酸化鉄を含む。C層は、黄灰色(2.5Y4/1）を呈し、粘性でまんべんなく多量の酸化鉄を含む。D１層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、粘性が強く、やや水気を含む。酸化鉄のかたまりを少量含む。D２層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、粘性が強く、やや水気を含む。酸化鉄のかたまりを少量含む。E層は、黒褐色（2.5Y3/1）を呈し、粘性が強く、水気を多く含む。

［D－D’土層断面注記］

１層は、褐色（10YR4/4）を呈し、さらさらして締まりがない。酸化鉄を少量含む。2層は暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）を呈し、粒子が細かくさらさらしている。ごくわずかな酸化鉄を含む。3層は灰黄褐色（10、YR4/2）を呈し、粘性を有し締まっている。酸化鉄、マンガンの集積あり。4層はにぶい黄褐色（10YR4/3）を呈し、粘性が弱く、さらさらしている。ここまでを他の土層におけるA層に当てる。

５層は、褐灰色（10YR4/1）を呈し、細砂が混じっているが、粘りが強いため、土は締まっている。この５層と18層をB層に当てる。

６層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、細砂が少々見られるが粘りが強いため、土は締まっている。この層をC層に当てる。

７層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、細砂が見られるが、粘りは非常に強く、6層よりもかなり粘る。酸化鉄の集積がほんのわずかだけ入る。8層は、黒褐色（10YR3/2）を呈し、粘性はないが、締まっている。砂質が強い。遺物混入層である。この７・８層をD層に当てる。

９層は、褐灰色（10YR4/1）を呈し、8層に比べ締まりが強く、水気を多く含む。粘性のない砂質で、遺物混入層である。炭化物を少量だが、塊状に含む。10層は、暗灰黄色（2.5Y4/2）を呈し、9層に比べ青く灰色っぽく見える。粘性が強く、締まりがややある。遺物混入層である。この９・10層をE層に当てる。

11層は、灰黄褐色（10Y4/2）を呈し、粘性はあるが締まりは少なく、多量に筋状のにぶい赤褐色（5YR4/4）土を含む。加えて砂を含んでいるため、水気は少なく粘性はない。この層をF層に当てる。

12層は、褐灰色（10Y4/1）を呈し、粘性・締まり共に強く、砂は含まず、土は重い。灰オリーブ色（5Y5/2）土をブロック状に少量含む。遺物混入層である。13層はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、粘性はないが、締まりはある。赤い塊状の土が堆積している。黒色のブロック状の土も多く含む。土はかたい。14層は、明赤褐色（5YR5/8）を呈し、もともと褐灰色（10YR4/1）土の中に明赤褐色土が混じっており、多量であるため、その土の色に見える。11層に比べ粘性、水気があり、土は重たいと感じる。15層は暗灰黄色（2.5Y5/2）を呈し、粘性、締まりともに強いが、より水気を含むため、重たくやわらかい。16層は褐色（7.5YR4/4）を呈し、12層と酷似しているが、色は16層の方がより褐色が強く見える。加えて、締まり、粘性ともにあるが水気は12層に比べ少ない。溝壁を成す土層と考えられる。17層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、粘性、締まりともに強い。水気を含む。溝の掘り変えに際し、溝壁となった部分かもしれない18層は、褐灰色（10YR4/1）を呈し、粘りは強い。酸化鉄の集積が多い。

［E－E’土層断面注記］

１層は、暗褐色（7.5YR3/3）を呈し、炭化物を含み、粘性は弱い。2層は、褐色（5YR3/3）を呈し、やや粘性があり、炭化物を含み、酸化鉄の集積も多い。遺物を若干含む。3層は、褐色（5YR2/2）を呈し、やや粘性があり、炭化物を若干含む。4層は、黒褐色（5YR2/1）を呈し、粘質が強く、締まっている。炭化物を若干含む。5層は、黒褐色（5YR2/1）を呈し、やや粘質がある。4層に比べやや締まりがない。炭化物を含む。遺物を若干含む。極微量の砂を含む。6層は、にぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、やや粘性はある。酸化鉄を土中に多量含む。炭化物多い。7層は、褐灰色（5YR4/1）を呈し、粘性弱い。酸化鉄の集積を土中に含み、炭化物も含む。8層は、にぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、粘質がある。6層より締まる。炭化物を若

干含む。9層は、にぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、粘性が強い。8層より締まる。炭化物を含み、酸化鉄の集積がみられる。10層は、黒褐色（2.5Y3/1）を呈し、やや粘性がある。6層より締まりがない。石を含み、酸化鉄の集積を土中に若干含む。11層は、黒褐色（2.5Y3/1）を呈し、粘性がある。10層より締まる。酸化鉄の集積を土中に若干含む。12層は、黒色（2.5Y2/1）を呈し、粘性がある。11層より締まりがない。若干の砂を含み、炭化物を含む。13層は、黒色（2.5Y2/1）を呈し、やや粘性がある。12層より締まりがない。土中に砂粒を含み、炭化物も若干含む。14層は、黒色（2.5Y2/1）を呈し、やや粘性がある。13層より締まりがない。若干の遺物と炭化物を含む。15層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、やや粘性がある。14層より締まりがない。赤色粘土層がブロック状に混入する。若干の炭化物を含む。16層は、黒色（2.5Y2/1）を呈し、やや粘性がある。15層より締まりがある。若干の炭化物を含む。

次に5SX040の東側をほぼ平行して走る5SX054・5SX056・5SX048の溝の土層について述べる。

これらの遺構のうち、中心を通るのが5SX048である。5SX054は北の方で5SX048に切られた遺構として現われ、途中で一緒になってしまう。一方、5SX056は土層確認用に残したベルトの途中から突然始まり、やはり5SX048に切られるように検出できた。これらのことから、場所によって多少土層の注記の違いはあるが、大きく、5SX048を中心として土層注記を行うこととし、5SX054と5SX056は従的な扱いで記述する。

5SX048の土層は大きく3層に分けられた。非常によく似た土層である。1層は灰黄褐色（10YR4/2）～褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、粘性が強く、締まりも強い層である。赤褐色土（2.5YR4/6）や黒褐色（10YR2/2）土をところどころに含む。遺物が混入する。2層は、同じく灰黄褐色（10YR4/2）を呈する層で、粘性が強く、やや締まりがある。1層よりやわらかく、黒っぽい。赤褐色（2.5YR4/6）土の量が1層に比べ少ない。遺物を混入する。3層は褐灰色（7.5YR4/1）～灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、粘性が強く、締まりがあるが、水気を多く含むため、2層よりさらにやわらかい。赤褐色（2.5YR4/6）の土塊と1層より大きくまとまった黒褐色（10YR2/2）土を多く含む。溝底部付近（最下位層）には、より水気を含んだ暗灰黄色（2.5Y4/2）土が5～6cm堆積している。

次に5SX054の土層の注記番号は4層である。灰褐色を呈し、粘性が強く、水気もある。比較的やわらかい赤色土を多く含む。

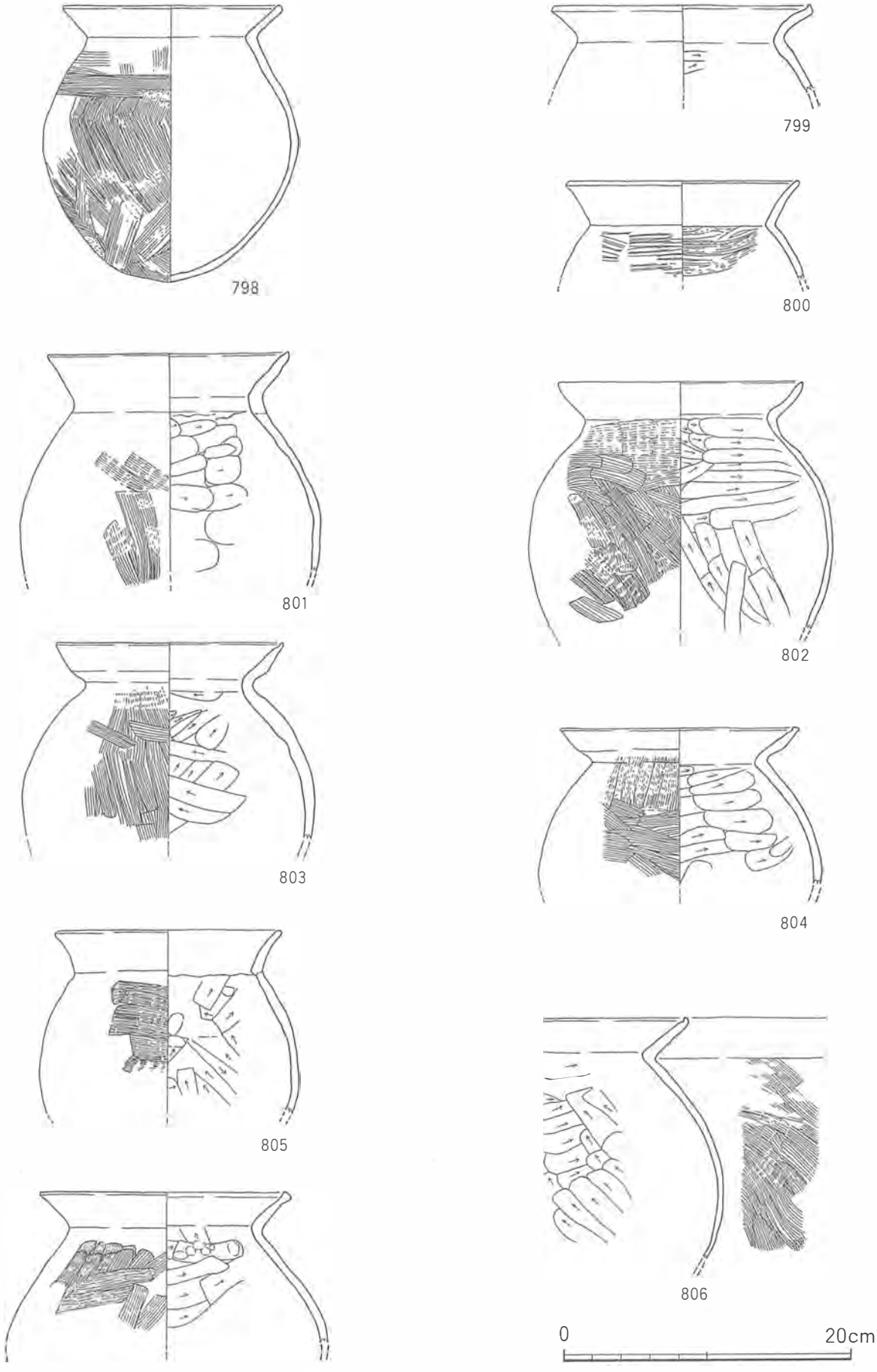
5SX056の土層は5層とした。にぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、粘性がなく、締まりはないが、硬くなっている。

［出土遺物］【第149図～第160図】

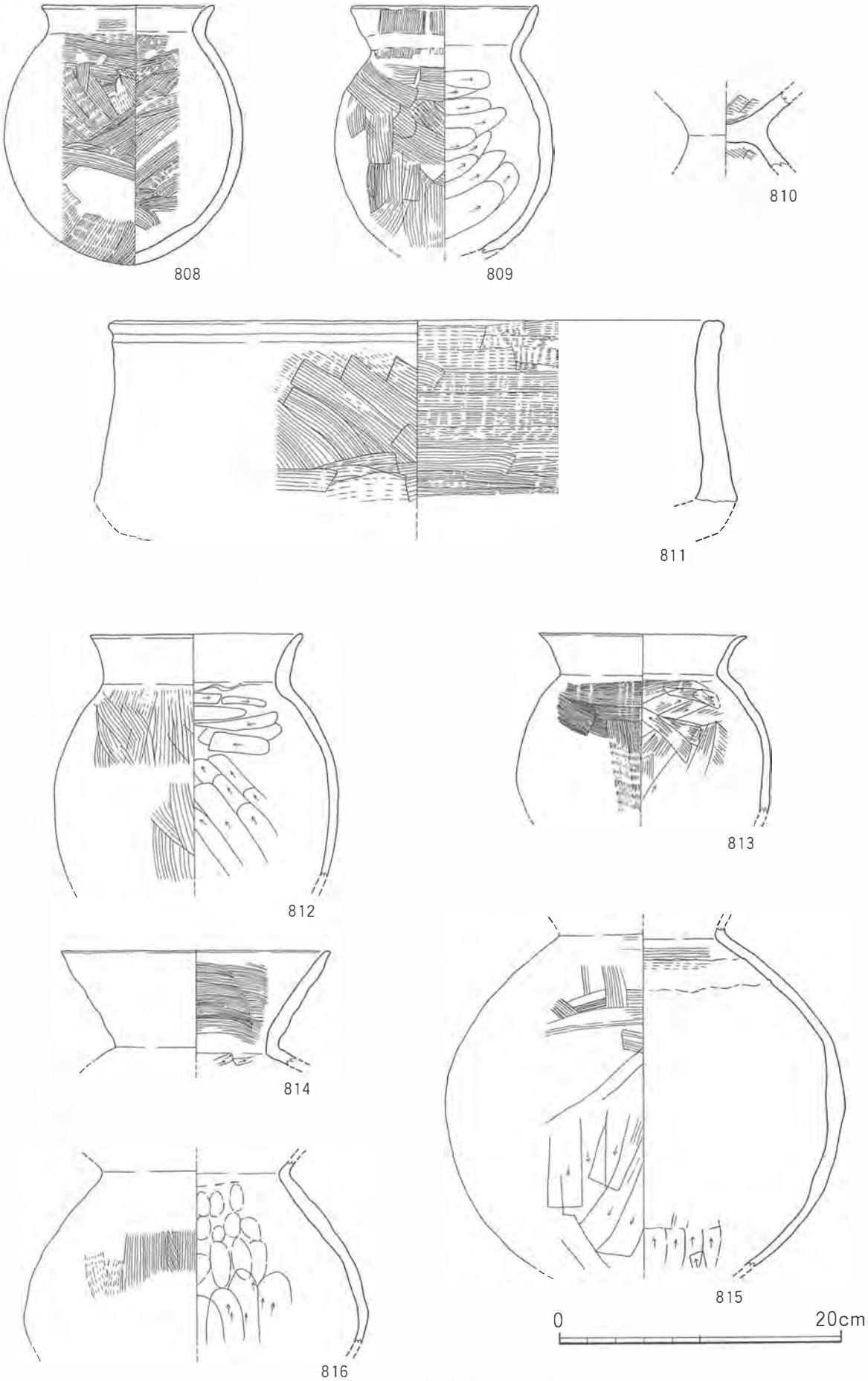
図化した遺物は、甕が16点、大型壺が1点、壺が10点、高坏が7点、器台が2点、鉢が2点、甑が1点、坏が1点、小型甕が2点、小型壺が19点、小型鉢が5点、土製模造品が16点、須恵器の蓋が1点、土錘が2点、土玉が3点である。

811を除く、798～813は、甕形土器である。

798は完形で溝の底近くにあったもので意図的に投げ込まれた中型のものである。口縁端部が丸く、端部内側に弱い沈線が回る。胴部は胴部下位に最大口径のある形である。外器面の調整は頸部近くの胴部は横方向のハケ目、それ以下は方向を変えながらの斜めハケ目を施す。内器面の観察ではかなり、丁寧にヘラ削りを行っている。内外器面に黒斑がある。799はC層からの出土で、胴部上位から口縁部までの破片である。口縁の開きは大きく、口唇部では弱くつまみあげて端部を尖らせる。800は、同じく胴部上位から口縁部までの破片である。外器面に横方向のタタキが残る。内器面は横方向のハケ目で調整される。801は、口縁部が頸部から斜め方向にやや長く伸び、口唇部端部を細く伸ばしている。胴部は中位まで残り、やや倒卵形に近い。外器面にはハケ目が部分的に残る。内器面は横方向のヘラ削りが施される。外器面に赤彩されたような痕跡が見られる。802はD層一括で、形態的に798に似ており、口縁部は頸部からやや開き気味になって



第149図　5SX040出土土器実測図



第150図　5SX040出土土器実測図

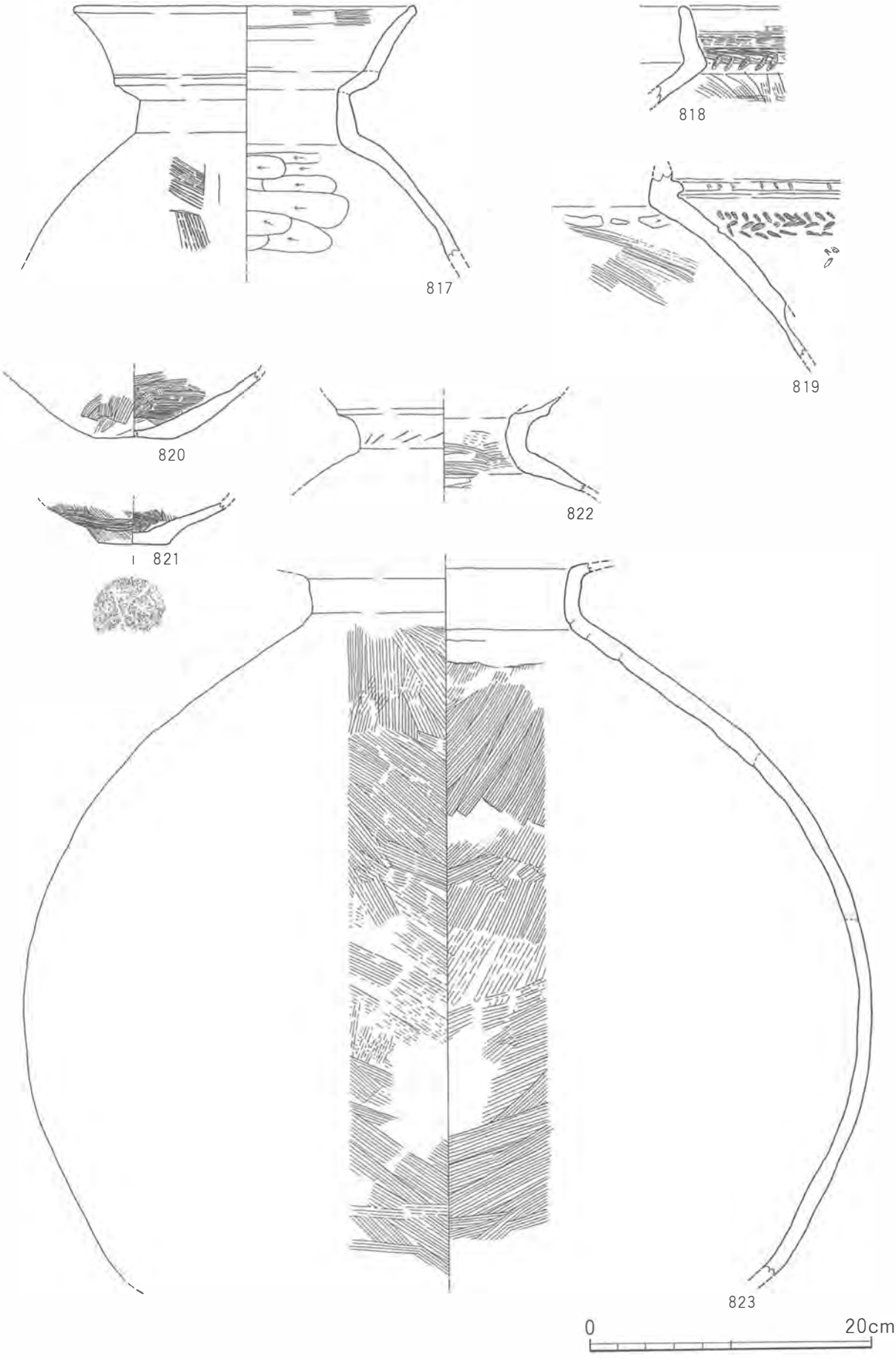
内湾してやや薄くして終わらせている。外器面の調整は頸部近くに横方向のハケ目、その下位は、横方向から斜め上方向のハケ目が施される。内器面には上位の部分までは横方向のヘラ削りで、その下位に斜め上方向のヘラ削りが施される。外器面に黒斑がある。803は、E層とF層からの出土である。802に似た形態で、口縁部の開きと途中でやや肥厚するところは類似し、端部がより細くなって終わる。胴部形態は卵形であろう。ただ胴部の厚みはかなり厚く、器面調整もやや雑である。外器面の口縁部に煤が付着している。804はE層出土で、頸部から口縁部の開きが大きく、途中肥厚させ、端部は平坦にし、内側を弱くつまみ、沈線状のくぼみをめぐらす。胴部は倒卵形に近い。外器面上位は縦方向のハケ目、中位からは横方向のハケ目が施される。内器面は横方向のヘラ削りを施される。口縁部外器面に指頭圧痕が残る。805は、頸部の口縁と胴部の接合痕が残る。口縁はやや外反しながら立ち気味に端部にいたり、丸めて収める。胴部はやや縦長である。外器面には横方向のハケ目、内器面は下位が縦方向のヘラ削り、上位は横気味の斜め方向のヘラ削りが施される。806はやや大型のもので口縁は頸部から直に伸び、端部は丸めて収める。端部はつまみ上げられる。外器面は斜めハケ目、内器面は斜め方向のヘラ削りが施される。807はDE層出土で、口縁端部を肥厚させて丸く収める。胴部はやや卵形気味である。外器面は縦方向のハケ目後ナデ、内器面は横気味の斜め方向のヘラ削りが施される。内器面頸部付近に指頭圧痕がみられる。外器面に黒斑がある。808は、口縁部の短いもので、頸部から口唇部までが短く、やや外反する。胴部最大径が中位よりやや下になる。内外器面ともハケ目調整が施され器壁はやや厚い。口径が13.4cm、器高が18.0cmを測る。外器面に黒斑がある。809はD層出土の土器で、頸部から口唇部までやや内湾しながら端部にいたる。口縁部は縦方向のハケ目、胴部外器面は下位が縦方向のハケ目、上位は斜めから横方向のハケ目へと移る。口径が13.1cmを測る。

810は、脚台付き甕の脚部の付け根付近である。これは弥生土器に入れるべきであった。内器面には横ハケ目が施される。

811は大型の二重口縁甕の口縁部分としたが、全体形が不明である。壺の口縁の可能性がある。外器面には斜め方向のハケ目、内器面には横方向のハケ目を施し、その後ナデ調整をされる。

812は、頸部がやや肥厚し口唇部までが短く、断面は急に細くなる。胴部は緩やかにふくらみ、胴部最大径が中位付近にある。外器面は縦方向のハケ目が施され、内器面は胴部の中位以下は斜め上へ、頸部近くは横方向へのヘラ削りが施される。製作技的には、古墳時代後期から古代にはいる時期のものである。外器面には煤が付着している。813はDE層から出土し、頸部から口縁端部までが短く、急激に外反する。胴部は倒卵形を呈する。外器面は中位より下は縦方向のハケ目、頸部近くは横方向のハケ目である。内器面はやや荒いヘラ削りが施される。口径は14.6cmを測る。

814～826までは、土師器の壺形土器である。814はE層から出土した口縁部で、頸部からラッパ状に直に広がっていく。口唇部断面は細くなっている。内器面には横方向のハケ目による調整痕が残る。わずかにみえる胴部から頸部にはヘラ削りが施される。復元口径は10.0cmを測る。815は、口縁部と底部を欠く胴部片である。胴部はほぼ球形を呈する。外器面上位にハケ目が残り、下位には縦方向のヘラ削りもしくはハケ目での調整がなされる。内器面は調整が明確でないが、下位にヘラ削りがわずかにみられ、頸部付近は横方向にハケ目が施される。また、その付近には粘土巻上げ痕が残る。外器面には黒斑がある。816はE層からの出土で、上に同じく頸部から胴部上位の破片である。胴部形態は球形に近い。外器面の調整はハケ目がわずかに残り、内器面は上位に指頭圧痕、その下位には縦方向のヘラ削りが施される。外器面に赤彩らしき跡があり、煤も付着している。内器面には黒斑がある。甕の可能性もある。817はD・E層からの出土で、二重口縁壺の口縁から胴部上位まで残るものである。頸部が直立し、やや直角気味に開いた短い１次口縁をなす。2次口縁はそこからやや外反しながら立ち上がり、端部はやや角張る。口径が23.6cmを測る。口縁部内器面には横方向のハケ目が残り、横ナデが主である。胴部はやや下位に最大胴部径がありそうである。外



第151図　5SX040出土土器実測図

器面はハケ目がわずかにみえ、内器面は横方向ヘラ削りが施される。外器面に黒斑がある。818はE層出土で、二重口縁壺の破片と考えられているが、部分的過ぎるためはっきりとは分からない。一次口縁から二次口縁が鋭角で立ち上がる。外器面の屈曲部には貝殻状の工具によって連点が押されている。それより上面は横方向のハケ目が、屈曲より下位には縦方向のハケ目が施される。819は818に近いものと考える。頸部には突帯を貼り付けている。その上に小さな連点が押引きされる。その下位に３組の押しが必要になる。内器面はハケ目調整が施される。820と821は壺の底部で820がやや上げ底で、821は小さい底部を持つ。外底面には葉脈痕が残る。822は二重口縁壺の頸部付近のみで、頸部がやや外反している。内器面にはハケ目が残る。1次口縁が短く、すぐ立ち上がるようである。823は頸部から胴部の半分以上が残る大型のものである。頸部は短く、一次口縁が緩やかに開く。胴部は不明であるほぼ球形を呈し、同張りも大きい。内外器面とも丁寧なハケ目とナデが施される。

824は、口縁の短い小型の壺である。DE層から出土している。口縁は頸部から斜め方向に伸びて端部が丸めて収める。胴部はやや潰れた倒卵形を呈する。外器面は粗めの縦方向のハケ目、内器面は下位が横方向のヘラ削り、その上位は縦方向のヘラ削り、頸部近くは横方向のヘラ削りが施される。上下に指頭圧痕が残る。825は頸部より上が欠けている壺である。胴部はやや横に潰れた球形で底部がやや平らになる。外器面は上位が横方向のハケ目、それ以下は縦方向のハケ目が施される。内器面は底部が上へのヘラ削り、上位は横方向のヘラ削りが施される。頸部付近に指頭圧痕が残る。外器面には黒斑がある。826は、口縁部が一部残るものの大部分胴部のみの小型壺である。胴部はかなり横に潰れた球形を呈する。外器面はハケ目、内器面は横方向のヘラ削りが施される。E層、F層の出土である。外器面に黒斑がある。

827～834は高坏である。

827は高坏の坏部のみで、脚部との接合部から外れているようである。坏部自体は高さが高く、縦長気味のものである。828は、屈曲部に孔を穿つ高坏脚部である。上部は坏部の底部付近まで残る。筒内はヘラ削りによる。829は高坏の脚部である。828よりも屈曲が少なく、緩やかな屈曲を示す。その付近に孔が穿たれている。脚上位は縦方向のヘラ削り、下位はハケ目調整が施される。内器面も下位がハケ目調整である。830は、坏部から脚部の一部が残る高坏でE層の出土である。坏部は口縁部がかなり外反して端部を細めている。坏の屈曲はあまり明瞭でないが、一部に稜線が巡る。831はE層の出土である。高坏としているが、器台の脚部と考えられる。外器面はハケ目後ナデ調整が施される。穿孔が１箇所ある。832はE層で出土していた高坏の坏部である。脚部はないが、脚から途中稜線があるものの口縁部までほぼ直に広がる。外器面は縦方向のハケ目、内器面は横方向のハケ目とミガキが施される。断面観察では、途中に接合痕跡がみえる。833は、高坏の坏部のみで脚部が不明である。調整は外器面がハケ目後横ナデが施される。834はD層出土の高坏の坏部である。坏部の屈曲は明瞭になっており、脚部との接合面も今までの高坏とは異なるようで、坏部が底まで残り、製作技法の違いが存在している。内外器面に黒斑がある。

835～838は鉢形土器と捉える。

835は頸部と口縁部を明瞭に持つタイプで、口縁は強く開き、頸部から胴部はやや張っている。836は６層出土の鉢である。浅い皿状のもので体部には多くの指頭圧痕が残っている。837はやや深い小型鉢である。C層で出土し、復元口径が5.2cmを測る。外器面に黒斑が残る。838はE層・D層で出土した小型鉢である。口縁部が長く、内湾している。内器面胴部にヘラ削りが入る。

839は、C層から出土している。作りは甕とよく似ているが小型の鉢である。口縁は頸部からやや平たく身近く伸び、端部は薄くなる。口縁部内面は横方向のハケ目、胴部は横方向のヘラ削りが、外器面にはハケ目が施される。外器面に煤が付着している。840は、これは小型甕である。遺構の床面近くに完形品として出土した。口縁部径が11.5cm、器高が11.2cm、最大胴部径が11.9cmを測る。外器面はハケ目、内器面は

ヘラ削りが施される。

841～857は小型丸底土器である。

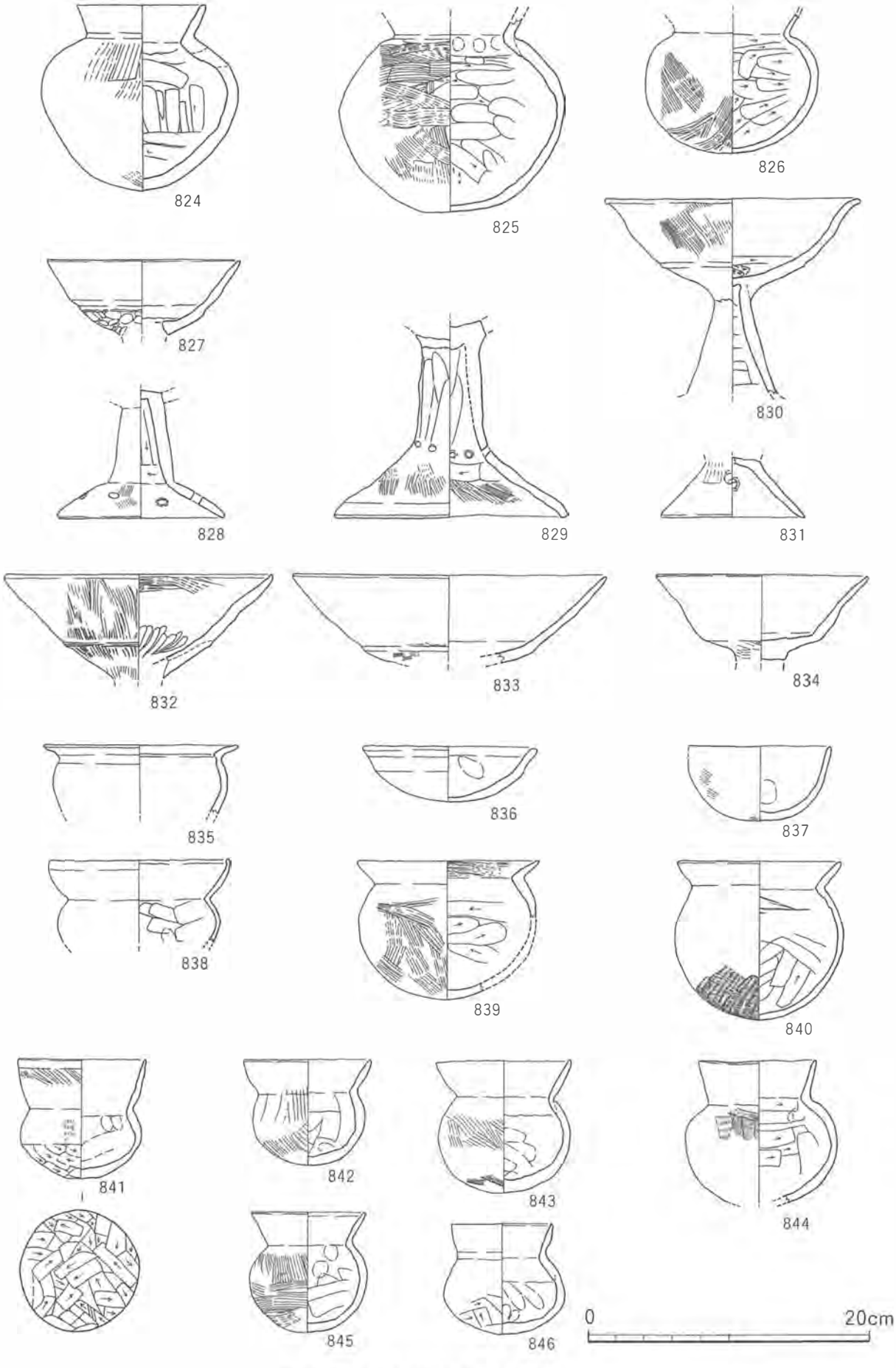
841は、口縁部と胴部の比率がほぼ同じものである。口縁部は頸部からほぼ直に伸び端部は薄くなる。胴部はあまり胴張りせず、下半分はヘラ削りで整えられる。内器面は指や工具によって削られる。復元口径が9.0cm、最大胴部径と器高が8.4cmである。外器面に黒斑がある。842は4D層出土で、口径が最大胴部径より大きく、口縁部が胴部の比が1：2ほどである。外器面はハケ目、内器面はヘラ削りが施される。843は、やや大きめのものである。口径が9.7cm、器高が9.3cm、最大胴部径が9.5cmを測る。内外器面に黒斑がある。844はD層から出土し、口縁がほぼ真上に直に立つ。口径が8.2cmを測る。外器面はハケ目、内器面はヘラ削りが施される。845は、842に似た形態で、器壁は薄く仕上げている。口径が8.2cm、器高が8.6cm、最大胴部径が8.4cmを測る。胴部外器面は縦方向のハケ目後横方向のハケ目、内器面はヘラ削りが施され、指頭圧痕から指調整も行われた。846はⅣd層出土で、844に似た形態をとり、口縁部がほぼ直に立つものである。胴部の最大径はやや下にある。外器面下部にはヘラ削りが、内器面は指ナデ調整が施される。口径が7.2cm、器高が7.8cm、最大胴部径が8.6cmを測る。外器面に黒斑がある。847は口縁部がほぼ直に伸びるもので、最大胴部径が大きいものである。胴部には欠損している部分があり、わざと打ち欠いて剥離させたようである。復元口径が10.2cm、最大胴部径が11.7cmを測る。胴部外器面はハケ目が一部残る。内器面は指ナデであろうか。最大胴部径は復元で10.2cmを測る。848はE層の出土で、胴部のみであるが、胴部側面に意図的な打ち欠きにより穴が開けられている。内器面は指ナデの跡が残る。849はA・B層の出土で、口縁部が一部残るが大部分は胴部のみである。外器面の調整は摩耗のため不明で、内器面は指ナデ調整である。外器面に黒斑がある。850は口唇部のみで小型壺のものとしたが、根拠は薄い。851はE・F層出土で、口縁部が胴部に比べて大きいものである。ほぼ1：1に近い。口径が8.6cm、器高が7.4cm、最大胴部径が7.9cmを測る。外器面はハケ目、内器面は指ナデによって調整される。外器面に黒斑がある。852は口径と最大胴部径がほぼ等しいもので、口縁部と胴部の比が1：2ほどである。口径が8.4cm、器高が7.7cmを測る。外器面にはハケ目が薄く残り、内器面は横方向のヘラ削りが施される。853は、胴部のみでかなり横に潰れた球形を呈する。口縁部はないが、直に立つと考えられる。最大胴部径は8.1cmを測る。内器面はヘラ削りないし指ナデによる調整、外器面はハケ目調整が施される。854はE層の出土で、一応壺の底部としたが、小型には入らないと考える。平底で外底面に葉脈痕が残る。底径は4.7cmを測る。内器面はヘラ削りを施す。855は、胴部のみである。最大胴部径が7.5cmを測る。内器面は指ナデ、外器面がハケ目調整を施される。底部がやや平底気味である。856は、口縁部が胴部よりも大きいもので、復元口径が11.2cm、器高が8.3cmで比率的に丈が低い。このことから小型鉢にしてもよいのかもしれない。857も口縁部が胴部よりも大きいものである。B層から出土している。ただ、復元口径、復元最大胴部径は実測図の誤差があるようで正確ではない。ただ、比率的は1.5：1ほどの差はある。

858～860は小型の鉢形土器とする。

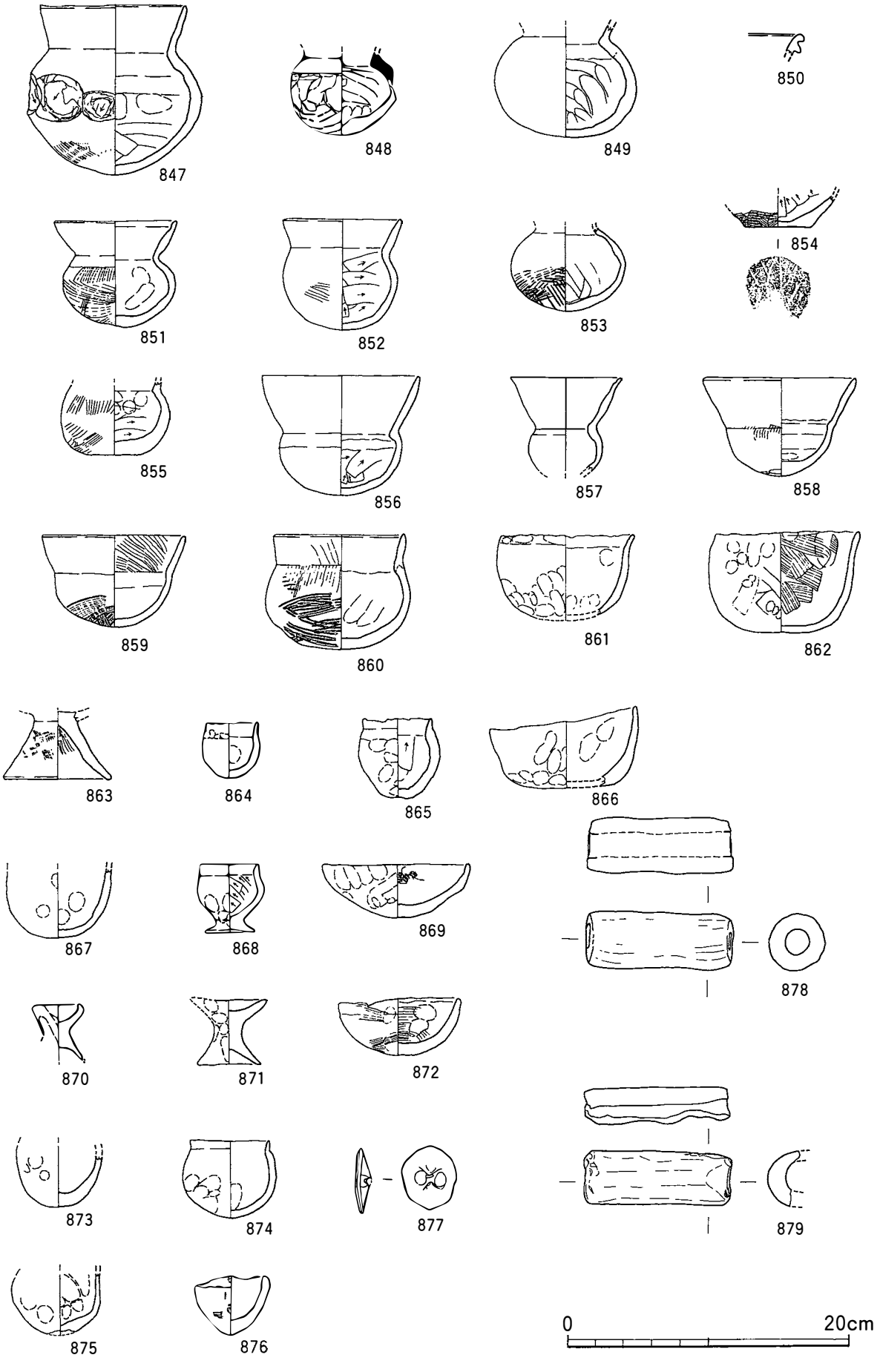
858はD層から出土し、口径が大きく、最大胴部径の倍ほどある。復元口径が10.7cm、器高が6.8cmを測る。外器面はハケ目、内器面は指押さえとヘラ削りで調整される。859はD層出土で、口径が9.9cm、器高が6.3cmを測る。外器面の口縁部はハケ目、内器面はヘラ削り後横ナデで調整される。外器面に黒斑がある。860は、口縁が直に立つ形態で、口径より最大胴部径が広い。外器面はハケ目、内器面は指ナデによる調整が施される。口径が9.4cm、器高が7.9cm、最大胴部径が10.2cmを測る。外器面に黒斑がある。

863は小型器台の脚部である。上部の坏部はなく、脚部も余り広がらずに端部を細くして収める。外器面のハケ目、内器面のハケ目らしきもので調整される。

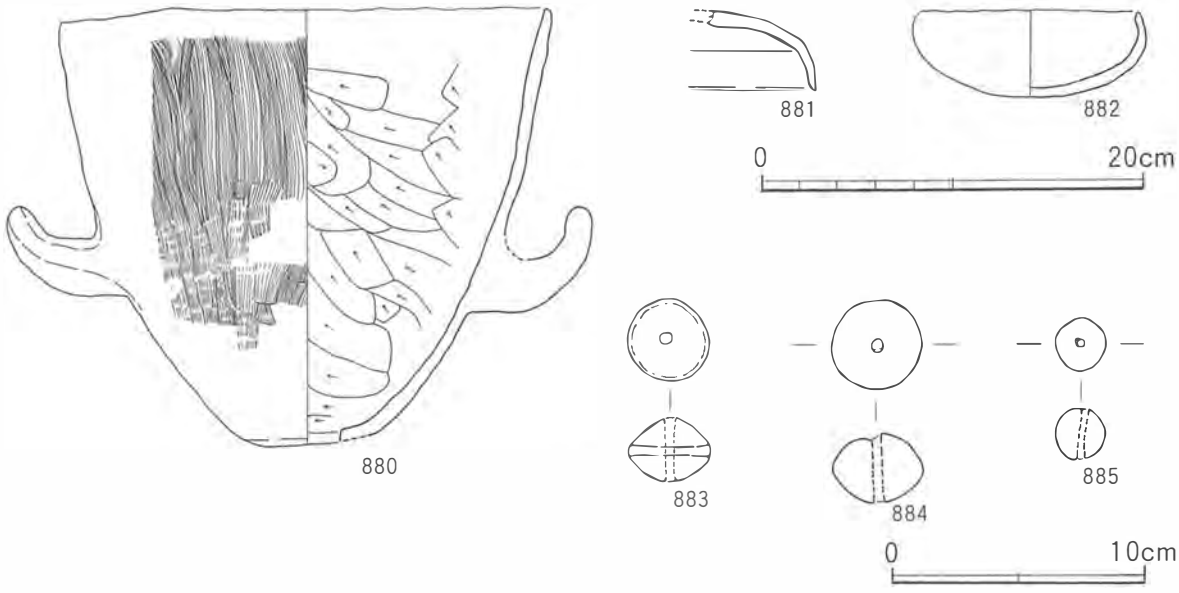
863を除く861～877を土製模造品とする。手捏品をここでは土製模造品として扱っているので、一般的な



第152図　5SX040出土土器実測図



第153図　5SX040出土土器実測図



第154図　5SX040出土土器実測図

模造品にしては大きい861・862も入れる。

861・862は鉢形のもので他のもの比べても大きい。手捏により作成されているため、指の痕跡が残る。862は内器面だけハケ目調整が施されている。C層からの出土である。

864・865は甕形のもので遺構の下位からの出土である。864が小振りである。調整は手捏が大部分で一部簡単な工具を使っているようである。866はE層出土で、鉢形のものである。867はC層とE層出土のものが接合し、全体形が不明であるが甕形に入れる。外器面に黒斑がある。868は台付甕形とした。造りは丁寧である。869・872は坏形のもので、ともにE層からの出土である。調整がやや異なる。870は高坏形とした。871は、高坏に似るが、坏部の開き具合から器台形とした。中・下層出土である。873は壺形とした。874は、甕形に似るが口縁部と頸部の関係から鉢形とした。D層出土である。875も鉢形で、E層の出土である。外器面に黒斑がある。876は、口縁部が欠損しているものの鉢形とした。877は鏡形で、遺構の下部で出土した。手捏であるが、鏡の紐穴は中心につまみ上げて作っている。棒状工具で孔も開けている。

878と879は竹輪形の土錘である。大きさはほぼ同程度である。中心の穴は棒状工具を芯にして回りに粘土を巻き付け、大きさを合わせている。器表面はナデ調整である。

880は小型の甑で、BC層及び1層から出土したものである。体部に一対の把手をもつ。把手は手捏によるもので上向きに付けられている。口縁部は屈曲せず平坦である。体部外器面には縦方向のハケ目が調整痕として上位から中位に残る。内器面は底部から口縁部近くまで斜め左方向にヘラ削りが施されている。全体的に器壁は1cm未満で薄手である。底部中央部に穴を刳り貫き、整形している。器高が25.6cmを測る。

881は、須恵器の坏蓋である。破片であるため全体像はつかめない。口縁部は、口唇部内面に稜を持ち、ほぼ直に立ち上がる。外器面天井部には回転ヘラ削りが施される。

882は、E層からの出土である。土師器の坏で、口唇部から1cmほどの胴部に最大径を持つ。そこから上位は内傾し、口唇部端部はやや丸まっている。磨耗しているため、調整痕は不明である。ただ、外器面に黒斑が残る。口径が12.1cm、器高が4.5cmを測る。

883～885は土玉である。883・884は高さに差異はあるものの算盤玉状を呈している。それぞれ上下からの穿孔されている。885はほぼ球形を呈し、径は1cmほどと先のものより小さい。上下から穿孔されている。

886～905は、木製品である。

886は、破損した二又鍬の再加工品である。刃部の名残が下位に残る。刃の切っ先は欠けている。欠損した部分を削り直して、何か別の用途に使用されたようである。木取りは柾目による。樹種はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。残存長は30.8cm、残存幅が5.2cm、厚みが1.6cm を測る。887は横槌でタタキ部に敲打痕が強く残る。特に正面及び裏面に強く敲打の跡は強い。木取りは芯持ち丸木を利用し、握り部分は径2cmほどに削り、握りやすくなっている。全体的に丁寧な加工を施している。樹種はニレ科ムクノキ属ムクノキである。縦が30.5cm、たたき部の横幅が6.5cm を測る。

888は一応脚としておく。頂部は差込部としてやや薄くしている。脚部端は下から5cm ほどの所に細い抉りを入れている。先端部はやや丸く仕上げている。樹種はクスノキ科シロダモ属である。縦が54.6cm、横幅が4.9cm、厚みが2.5cm を測る。加工は丁寧になされている。

889は亀甲状を呈する加工木片で表面に径1mm ほどの孔をあけている。孔自体は表面近くで止まっている。加工は側面、裏面に施されている。裏面の加工痕からみると別の器材の一部を加工したもののようである。木取りは柾目取りである。樹種はブナ科シイ属である。縦が11.2cm、横が11.1cm、厚みが1.7cm を測る。

890は細木を利用したもので、丸杭の一つであろう下部を尖らせている。891も芯持ち丸木を利用した丸杭で上部は腐植している。下部を尖らせている。

892は、形態的な特徴から弓とした。芯去り材の先端部を部分的に薄く加工し、弦を張る部分を造り出している。木全体も面を取りながら細く加工している。樹種はウルシ科ウルシ属である。

893は、板材で残存する下位部分を両面から尖らせるように切断している。厚みが2.8cm を測り、下部から15cm ほどのところに縦4.5cm、横4cm の孔が開けられている。この板材の利用方法が不明であったので、単に有孔板材とした。板目材で面は表面を一様に加工している。樹種はクワ科クワ属である。

895は、木簡様木片で、ブナ科コナラ属アカガシ亜属の板目材を利用している。特に文字などの記載はない。面取りは丁寧である。幅が2.6cm、厚みが1.1cm を測る。

897は、ニレ科エノキ属を利用した建築材と考える。他にも形態的に似通ったものが出土している。縛り部分を設けている。厚みは2.8～2.9cm を測る。

901はスギ科スギ属スギの板目材を利用した有孔板材である。孔があいてはいるが何に利用したか、不明である。903はブナ科コナラ属アカガシ亜属の板目材を利用したもので、長さも1.2m ほどあり破損してなければまだ長かったと考えられる。厚みは2.3cm を測る。

900は芯持ち丸木を利用し、周りに細かい加工を行い、面に傷がないようにしたもので、柄の一部と考える。厚みは3.0～2.6cm を測る。

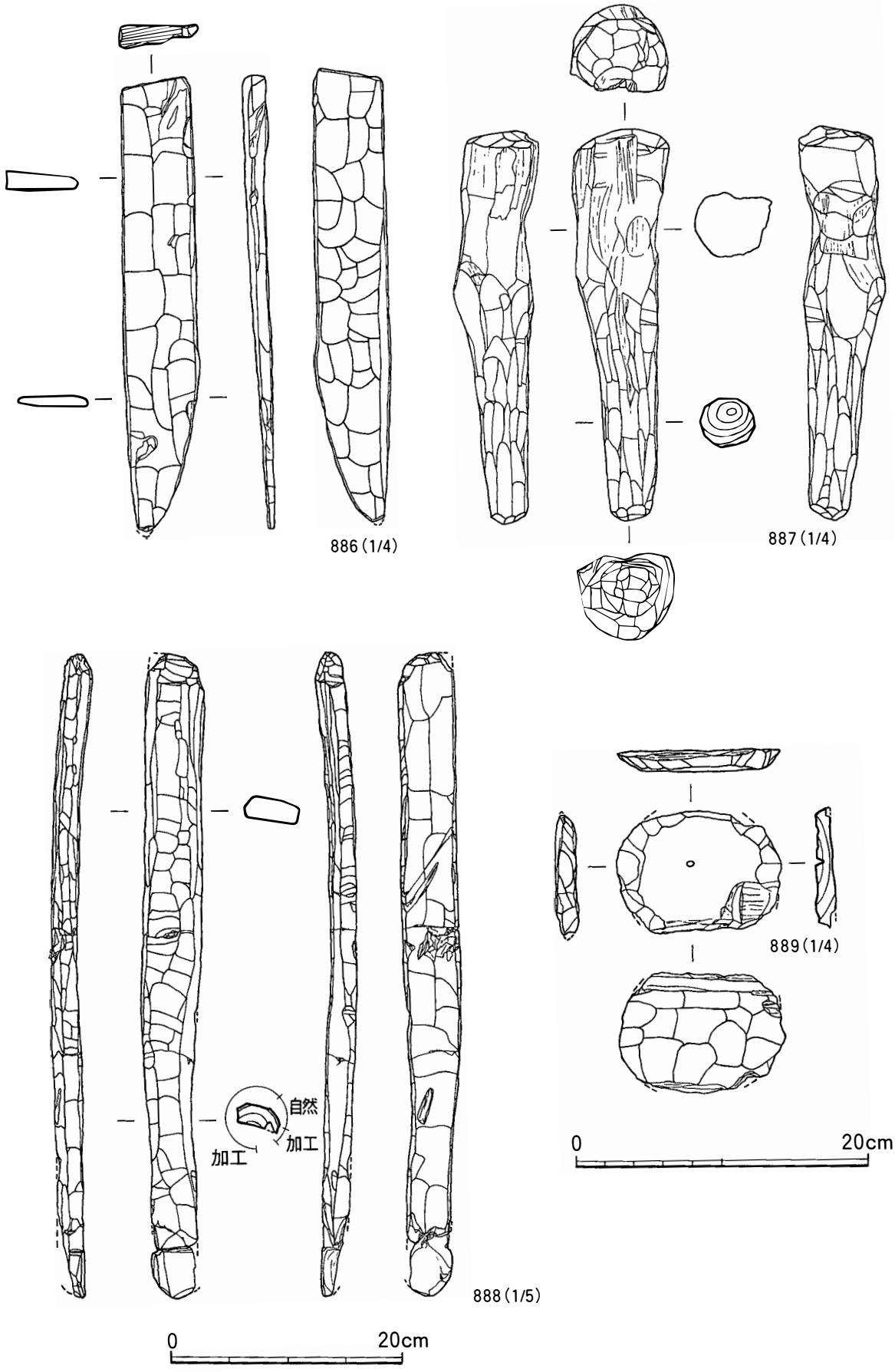
この他にも建築材とした物や加工木片としたものが出土したが、ものとして十分掴めなかった。

906～923は石器類である。遺構から出土しているもののこれらの石器の大部分は縄文時代もしくは弥生時代のものである。

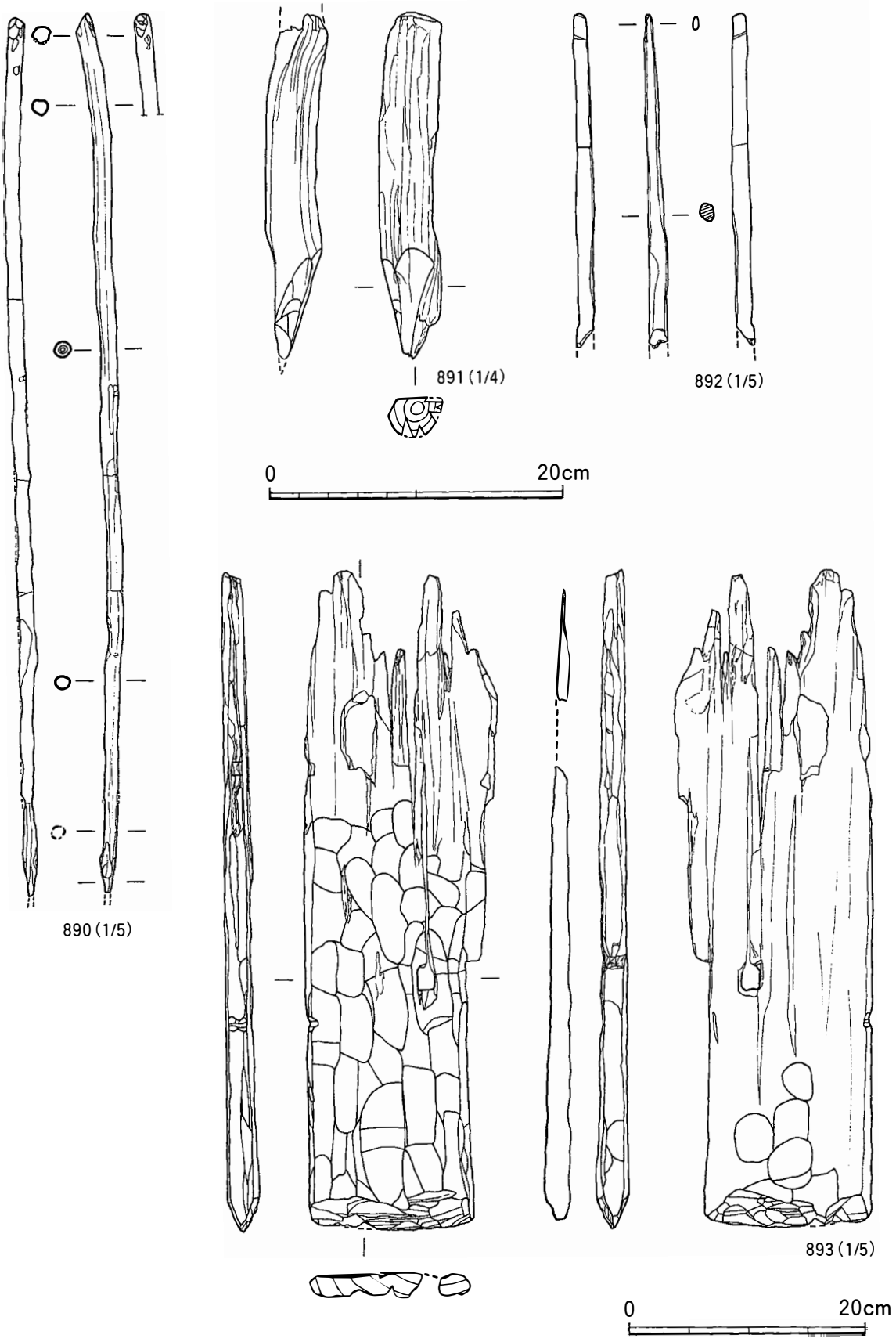
906は、E 層から出土したもので、石鏃の未製品とした。石材は黒曜石である。薄片を利用したもので側片から細かい剥ぎ取りにより整形していく途中と考えた。ただ、石鏃の未製品にしては頂部の尖りが形成されておらず、底辺の剥離痕が丁寧なので小型のスクレイパーである可能性もある。長さは2.65cm 以上、幅が2.2cm、厚みが0.8cm、重量は3.5g を測る。

907・908は縄文時代後晩期の剥片鏃であろう。907は主要剥離面を片面に残す平基鏃である。一部欠損している。石材は安山岩である。908は、抉り入った凹基鏃で刃部があまり尖っていない。一部欠損する。石材は黒曜石である。

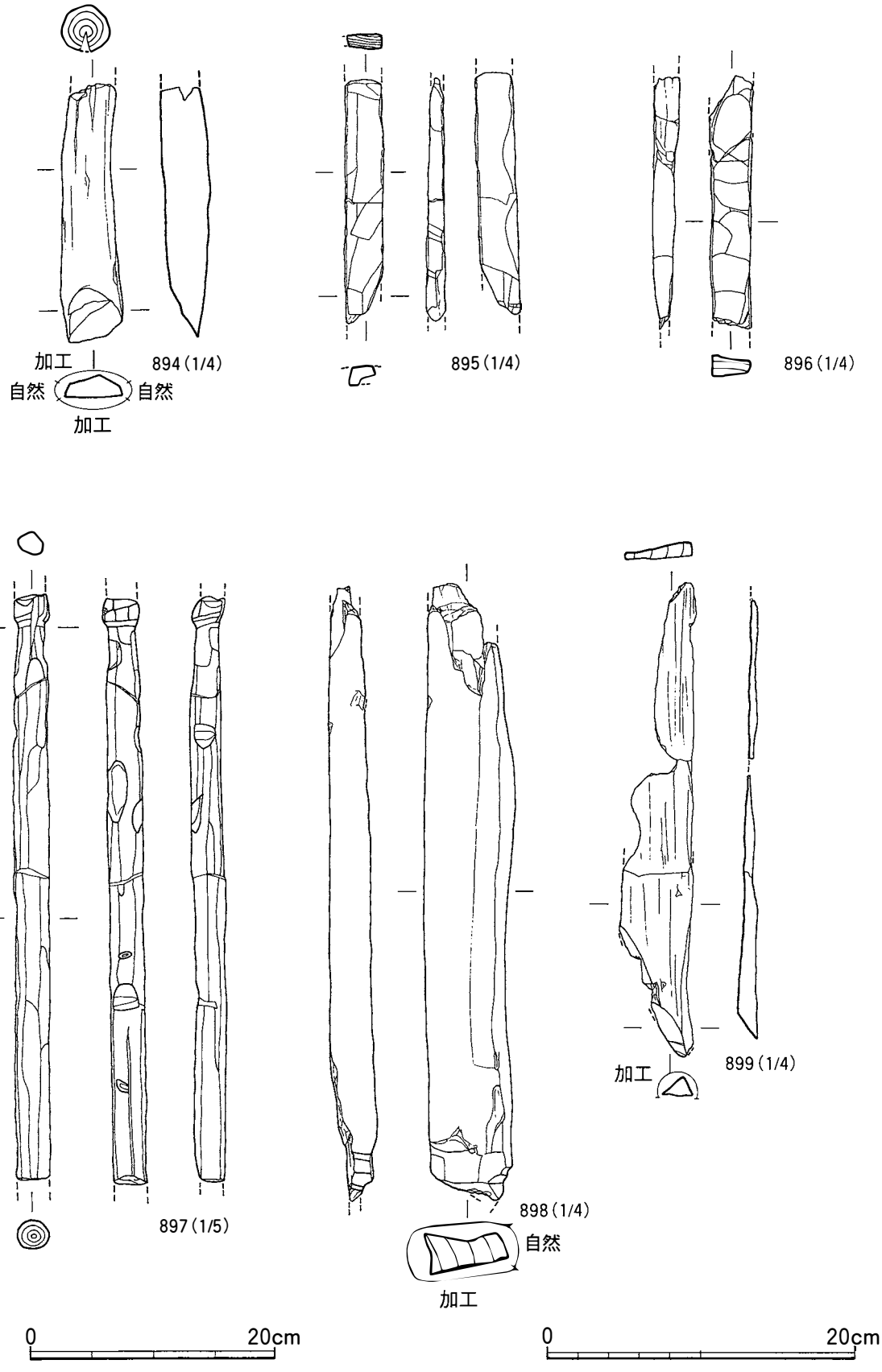
909は磨製の石庖丁の破片である。凝灰岩製としたがやや疑問である。5SX040の２層出土である。破損し



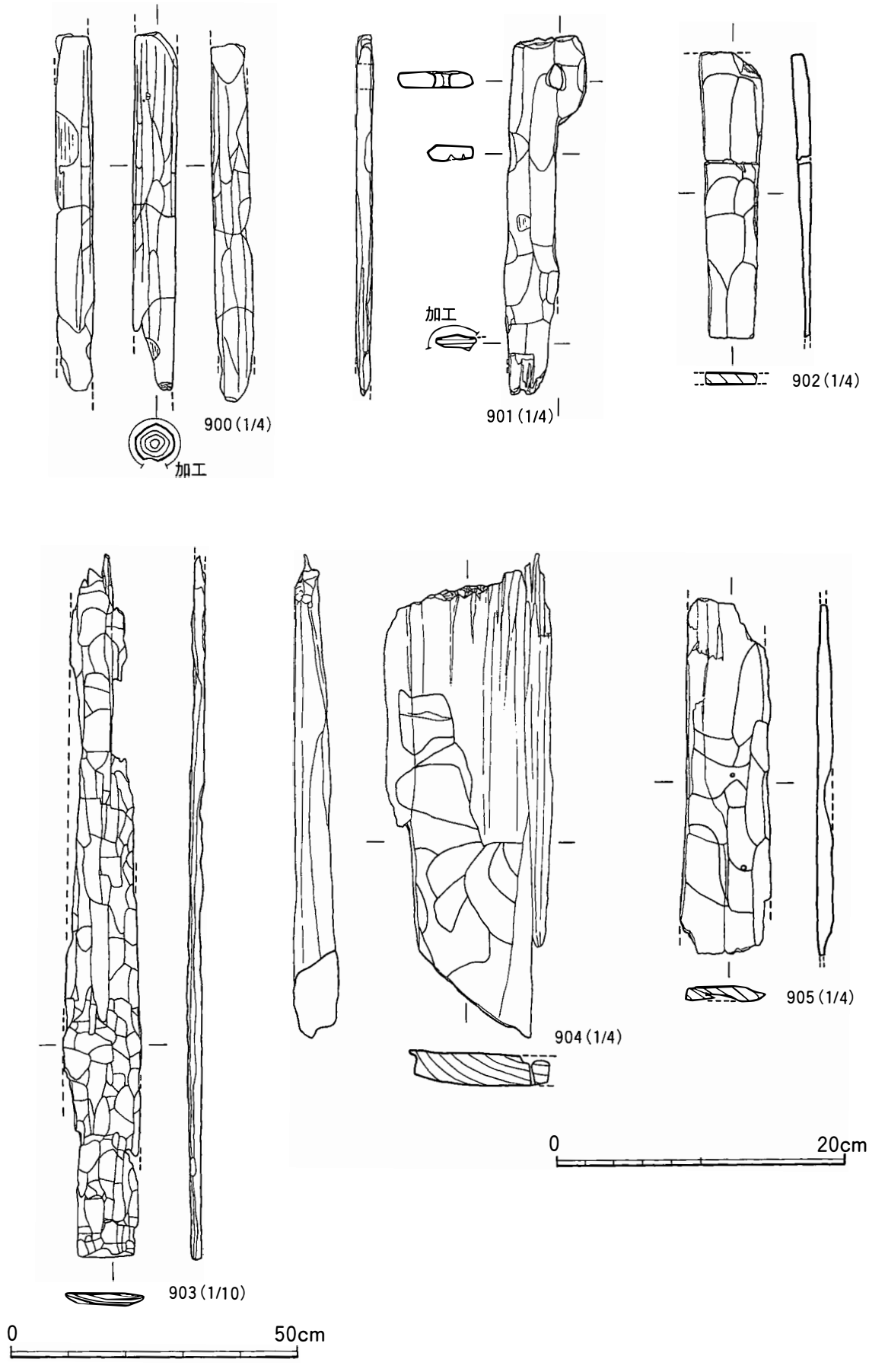
第155図　5SX040出土木製品実測図



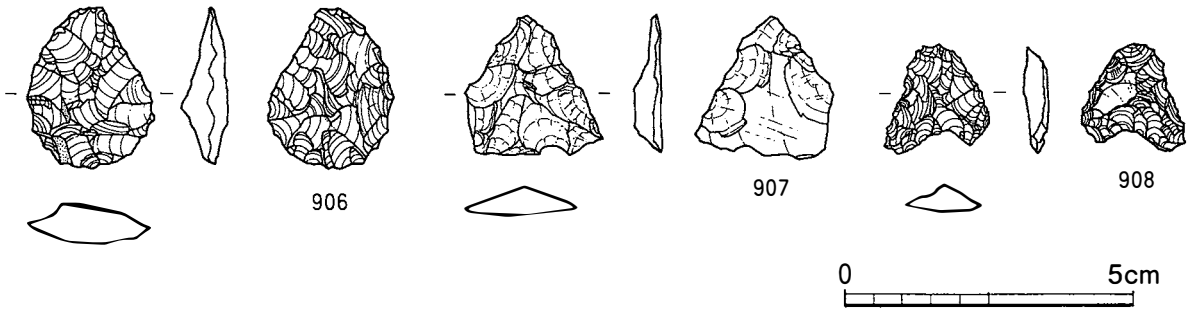
第156図　5SX040出土木製品実測図

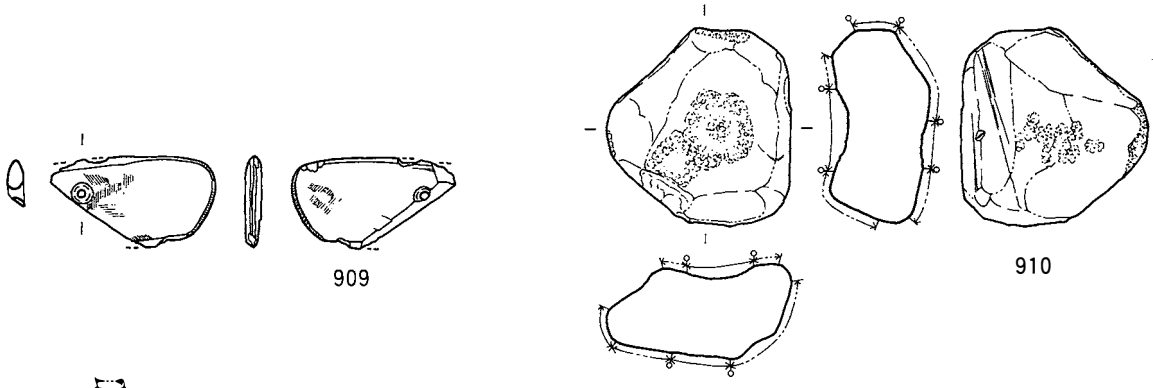


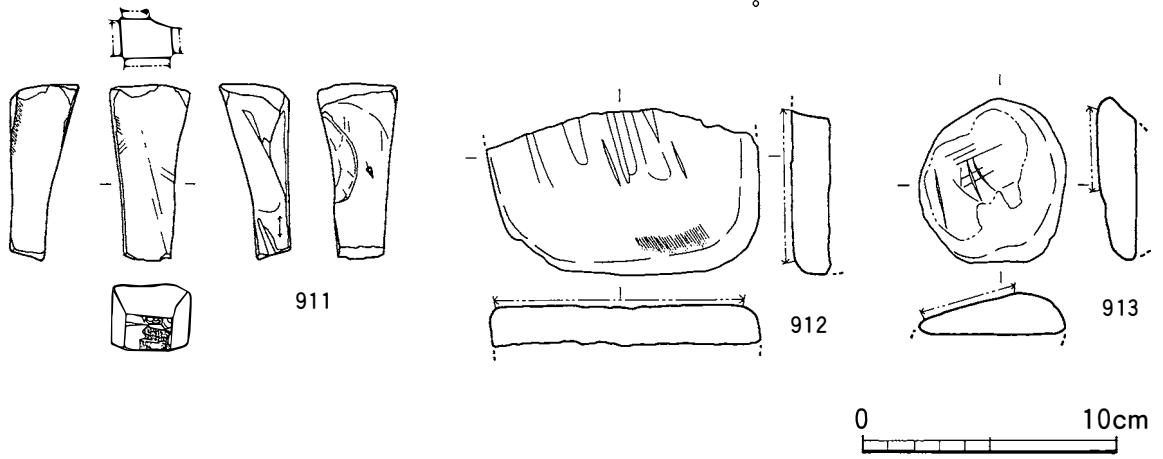
第157図　5SX040出土木製品実測図

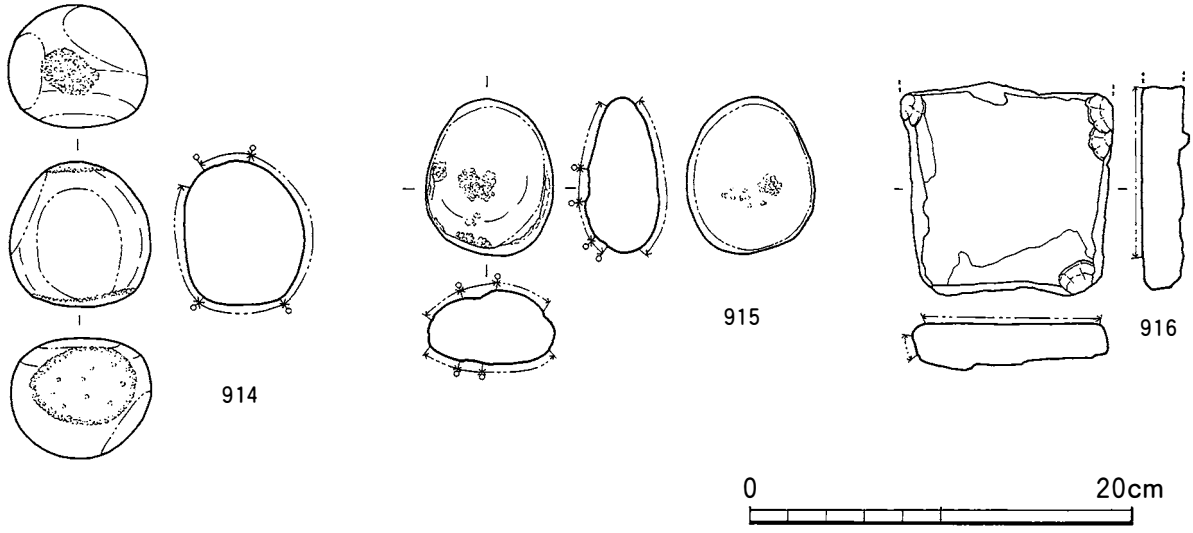


第158図　5SX040出土木製品実測図

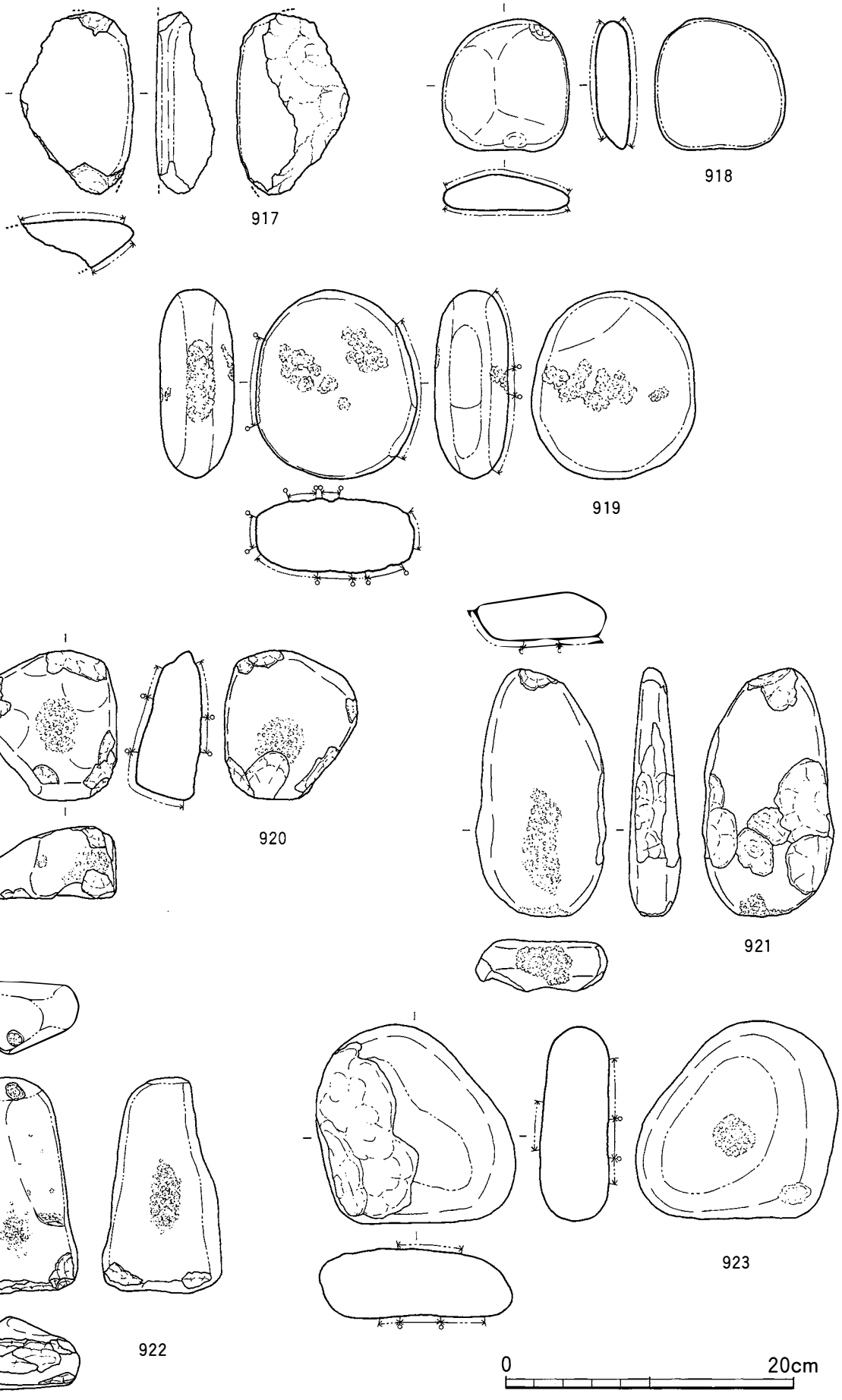








第159図　5SX040出土石器実測図



第160図　5SX040出土石器実測図

ているが孔が一部残る。小型のものである。

910は、凹石で砂岩を利用している。5SX040のD層から出土している。表裏両面に窪みがある。その他の面も磨石として利用している。

911は泥岩を利用した砥石である。ほぼ四面とも使用され、かなり磨り減っている。

912も砥石としたが、こちらは砂岩を利用している。破損しているため全体は不明である。913も砥石とした。砂岩を利用している。5SX040の４層からの出土である。使用しているのは一部で、磨石としてもよい。

914・915・917・918は磨石である。914は石英安山岩を利用し、ほぼ全面を使用している。一部敲石としても使用している。縦7.55cm、横7.40cm、厚み6.30cm、重量535gを測る。915は、角閃安山岩を利用したもので、平たい面を主に使用している。一部敲打痕がみえる。縦8.10cm、横6.80cm、厚み3.90cm、重量259.30gを測る。917は石英安山岩を利用している。5SX040のE層から出土した。918は石英安山岩を利用し、平たい面を主に使用している。縦9.00cm、幅8.95cm、厚み2.45cm、重量304.5gを測る。

916は台石とした。砂岩を利用し、上面に磨痕が見える。

919は、角閃安山岩を利用した磨石である。やや大きいが敲打痕も残るので手で持って使用したと考える。縦12.95cm、横11.20cm、厚み5.15cm、重量862.9gを測る。

920は石英安山岩を利用した凹石で、縦10.20cm、横9.3cm、厚み4.9cm、重量616.3gを測る。敲打痕が残る。

921・922は敲石である。921は石英安山岩を利用し、下面と側面などを使用している。長さ17.0cm、幅9.05cm、厚み3.5cm、重量749.9gを測る。922は石英安山岩を使用し、主に下面を使用している。側面や上面も使用している。5SX040のD層から出土している。長さ14.9cm、幅8.2cm、厚み5.0cm、重量858.6gを測る。

923は石英安山岩を利用した石皿である。ただ、敲石としても使用できそうではある。両面を使用している。

この他図化していないが、E層から出土した安山岩製の石鏃がある。縄文時代の遺物である。

○5SX048・5SX054・5SX056【第143図・第147図・第148図】

c－32グリッドに位置し、5SX023と重複している。軸をN－41°－W方向に取る隅丸方形の土坑である。長軸が1.1m、短軸が0.9m、深さ36cmを測る。

5SX048・5SX054の土層確認断面は大きく６箇所に設定した。各地点の土層の状況を統一して観察すべきであったが、十分検討できていない。そのため、各地点の土層断面の注記をそのまま記すことにした。

まず、土層断面a－a'は以下のとおりである。

１層は、にぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、粘性がなく締まりはないが、乾くとかたくなる。2層は、黄褐色（10YR5/6）を呈し、粘性があり、締まりがある。赤褐色土を多く含み、黒色土がブロック状に多少含まれる。枯れた草など含む。3層は、暗灰黄色（2.5Y5/2）を呈し、粘性がかなり強く、締まりがある。赤褐色土を少量含む。4層は、暗灰黄色（2.5Y5/2）を呈し、粘性が更に強く、強く締まる。8層は、灰黄色（2.5Y6/2）を呈し、粘性がなく締まりがないが、土はかたくなる。9層は、褐色（7.5YR4/3）を呈し、遺構の埋土ではなく、地山である。ブロック状の黒色土を多量に含む。粘性がありかたく締まる。

土層断面b－b'は以下のとおりである。

１層は、灰黄褐色（10YR5/2）～明褐色（7.5YR5/6）を呈し、粘性はないが、よく締まっている。赤褐色の土を所々に含む。2層は、明褐色（7.5YR5/6）及び黒褐色（7.5YR3/2）を呈し、上層部に２の層で明褐色（7.5YR5/6）土があり、その下部にはブロック状に黒褐色土を多く含む層が続き、どちらも粘性はややあるが、締まりがなく、やわらかい。3層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、粘性があり締まりが強いが、水気がなくかたい。ブロック状に赤褐色土を含む。4層は、灰黄褐色（10YR4/2）土で、粘性が強く、締ま

りも強い。水気があり３層よりやわらかい。

土層断面c－c'・d－d'は以下のとおりである。

１層は、褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、粘性があり、締まりがある。赤褐色土やブロック状の黒色土を含む。2層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、粘性があり、強く締まる。赤褐色土も含む。3層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、粘性があり、強く締まる。2層に比べ水気を多く含む。4層は、灰褐色土で、粘性は強いが、水気があり比較的やわらかい。赤色土を多く含む。

土層断面e－e'は以下のとおりである。

１層は、褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、粘性があり、締まりがある。赤褐色土を含み、ブロック状の黒色土を含むため黒っぽく見える。黄灰色（2.5Y6/1）の粘性のつよい土が塊状で混在する。2層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、粘性があり、締まりが強い。赤褐色土を含む。3層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、粘性が強く、締まりもある。2層よりも水気を多く含む。4層は、灰褐色土で、粘性は強い。橙色（7.5YR6/6）土をブロック状に含む。

土層断面f－f'は以下のとおりである。

１層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、粘性が強く、硬く締まる。赤褐色（2.5YR4/6）土を所々に含む。黒褐色（10YR2/2）土のブロック状に多く含む。遺物が混入する。2層は、褐灰色（7.5YR4/1）土で、粘性が強く、やや締まりがある。1層よりやわらかく、黒っぽい。赤褐色（2.5YR4/6）土も１層より少なく含む。遺物が混入する。3層は、褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、粘性が強い。締まりはあるが、水気を多く含むため２層よりやわらかい。赤褐色（2.5YR4/6）の土塊と１層より大きなまとまりの黒褐色（10YR2/2）土を多く含む。溝底部付近（最下位層）には、より水気を含んだ暗灰黄色（2.5Y4/2）土が５～6cm堆積している。

土層断面g－g'は以下のとおりである。

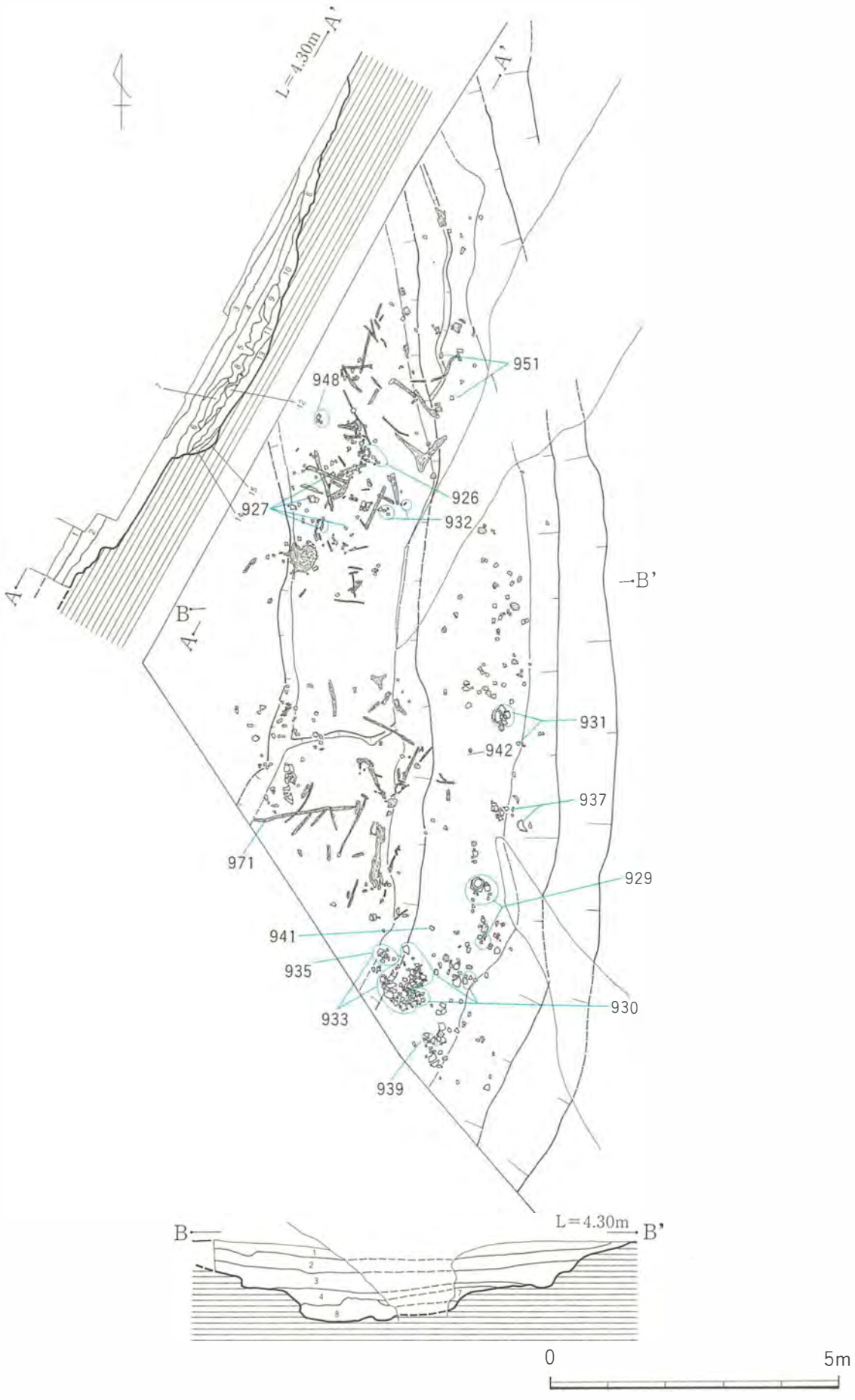
１層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、粘性が強く、強く締まる。かたい赤褐色（2.5YR4/6）土も多量に含む。同様に黒褐色（10YR2/2）を呈する小さな（３～5mm程度）塊状ブロックを多数含む。遺物が混入する。2層は、灰黄褐色（10YR4/2）土で、粘性が強く、締まりはややある。1層よりやわらかい。1層と同様に赤褐色土と黒褐色土を含む。遺物が混入する。3層は、黒褐色（10YR3/2）土で、粘性は強いが、水気を多く含むためやわらかい。1層・２層より暗い。赤褐色土が含まれ、黒褐色土の塊も含まれる。また、底部付近（最下位層）には、より水気を含んだ暗灰黄色（2.5Y4/2）土が７～9cm程度堆積する。

5SX054底面の土坑内埋土は以下のとおりである。

１層は、明赤褐色（2.5YR5/6）～黒色（N2/0）を呈する。焼土層であり、明赤褐色（2.5YR5/6）と炭化物黒（N2/0）が混じった層である。明赤褐色土は固く締まるが、黒色土（炭化物）はやわらかい。部分的に地山の粘土（褐色）や酸化鉄を含む。２層は、灰黄褐色（10YR4/2）粘土で、粒子は細かくやわらかい。所々に３～10mmの炭化物、５mm程の焼土粒、３～５mm程の地山の褐色粘土を含む。酸化鉄の帯状集積がみられる。３層は、灰黄褐色（10YR4/2）粘土層で、２層と同様で粒子が細かくやわらかい。２層とあまり変わらないが、全体的にやや明るく、地山の褐色粘土をほとんど含まないため、２層とは区別した。２mmほどの炭化物、帯状の酸化鉄（５×３～５mm）集積を含む。4層は、灰色（N4/0）粘土層で、粒子が細かくやわらかい。２mm～１cm程の炭化物、地山の褐色粘土（１～５mm）、帯状の酸化鉄（５×１～10mm）を所々に含む。５層は、灰色（5Y4/1）粘土層で、粒子が細かくやわらかい。帯状の酸化鉄（５×２～３mm）を含む。４層と比較するとやや全体の色調がやや白っぽく、最下層に斜めに堆積している様子が窺える。

○5SX051【第161図】

調査Ⅷ区の南西角で検出した遺構で、遺構の一部のみを確認した。他の大溝状遺構と同様の性格を持つも



第161図　5SX051実測図

のである。ごく限られた範囲ではあるが、底部中心軸に長方形の一段下がる部分を２箇所検出した。また断面にもあるように掘り込み途中に段が形成されていた。この遺構も他の大溝状遺構と同じく何度かの掘り返しが想定できる。

出土遺物の中で古墳時代中期の須恵器の蓋が出土している。出土層位は溝の埋土中であるので遺物の上下移動がありえるが、全体的に遺構の中位層である。遺構としては使用の末期近くのものであろう。

埋土の注記は以下のとおりである。

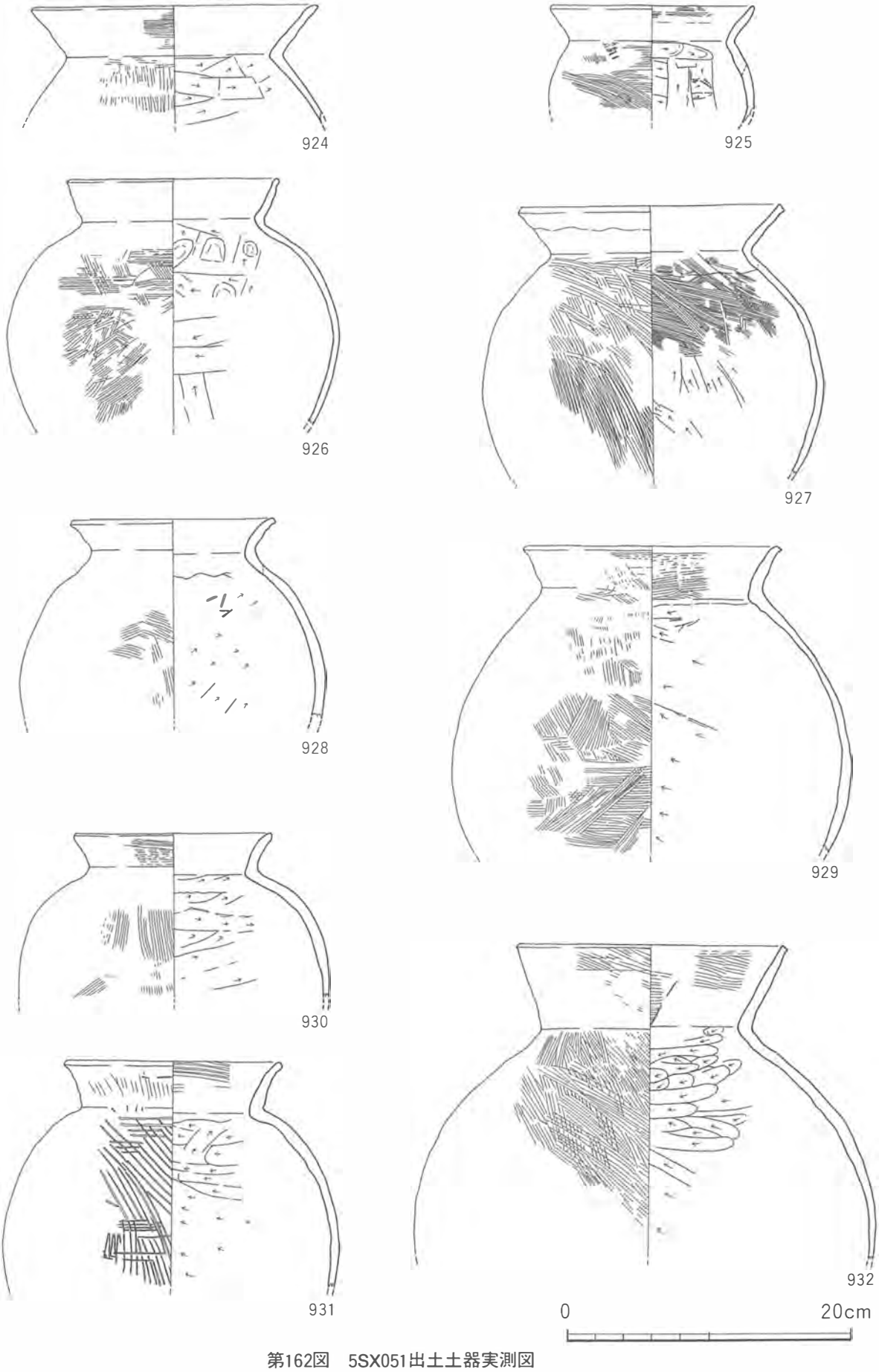
A層は、褐灰色(10YR4/1)粘土層で、硬く締まっている。帯状の酸化鉄(幅３～10mm、長さ２～15mm)とマンガン粒（２～5mm）や帯状のマンガン（幅３～5mm、長さ２～5mm）の集積が非常に多い層である。遺物はあまり含まない。B層は、黄灰色（2.5Y4/1）粘土層で、A層と同様にしまっているが、幾分やわらかい。A層と同様帯状の酸化鉄（同じ）とマンガン粒（同じ）の集積があるが、A層より酸化鉄の割合が減り、マンガンの入る割合が高くなる。遺物はあまり含まない。C１層は、褐灰色（10YR4/1）粘土層で、やわらかく粘性が高い。間にシルト質の暗灰黄色（2.5Y4/2）の帯（幅２～3mm）や砂層（幅２～3mm）が所々に入る。C２層は、黒褐色（2.5Y3/1）粘土層で、C１層よりやや暗く、砂の割合が高くなる。間に暗灰黄色（2.5Y4/2）の粒子（２～5mm）や砂、2～３層のⅡ層（１～2mm）が入る。遺物はあまり入らない。炭化物粒（２～3mm）も所々に含む。D１層は、黒褐色（10YR3/1）砂層で、木器や土器などの遺物を一番多く含む砂層である。部分的には粘土の割合が高い所もあるが、全体的には砂質である。5mm～3cm 程の炭化物も多く含む。D２層は、褐灰色（10YR5/1）粘土層で、所々に砂粒も含む。層としては部分的にしかみられない。炭化物粒（２～3mm）も含む。E１層は、黄灰色（2.5Y5/1）粘土層で、粒子が細かくやわらかい粘土層である。黒褐色（2.5Y3/1）粒（２～3mm)、青灰色（10BG6/1）粒（５～10mm)、明黄褐（2.5Y6/6）粒（２～3mm）を多く含む。D１層ほどではないが遺物も含む。特に木質が多い。黒褐色の土塊（２～5mm）も所々に含む。E２層は、黄灰色（2.5Y4/1）粘土層で、E１層より色調が少し暗い。E３層は、灰色（10Y4/1）粘土層で、E１・E２層と同様に黒褐色粒、青灰色粒、明黄褐色粒を多く含むが、全体的に粒子が小さく、色調も暗い。木質（流木や加工木）を含む。E４層は、青灰色（10BG6/1）砂層で、ブロック状になった粘質黒褐色土（３～7mm)、砂質青灰色土（２～10mm)、砂質のオリーブ黄（5Y6/4）土を含む砂質層である。青灰色土の割合が多いため色調は青い。木質（流木や加工木）を含む。E５層は、灰色（10Y4/1）粘土層で、やわらかく粘性が高い。少量の砂も含むが、全体的には粘土層である。粒子が細かく、金雲母が多く含まれている。流木も含む。E６層は、オリーブ灰色（10Y6/2）粘土で、粒子が細かくやわらかい。ブロック状の黒褐色粘土（３～7cm）も含む。全体的な色調としては、ブロック状のオリーブ灰色粘土が多く、オリーブ灰色を呈している。E７層は、青灰色（10BG6/1）粘土層で、やわらかく粘性が高い。ブロック状のオリーブ灰（10Y6/2）粘土や黒褐色（2.5Y3/1）粘土も含む。砂の割合が高い。E８層は、灰色（N5/0）粘土層で、最下位層である。やわらかく粘性が高い。粒子も細かく、金雲母も含まれる。ブロック状のオリーブ灰粘土（5mm～3cm)、黒褐色粘土（5mm～3cm）やオリーブ灰色粘土（5mm～2cm）も含まれる。E９層は、部分的に観察できた層であるが、E８層とほとんどかわらない。この層から土器片が１点出土した。黒褐色で粘性の強い粘土（４～5mm）のすぐ下が地山の黒褐色砂層になる。

［出土遺物］【第162図～第167図】

その総数は甕11点、壺５点、鉢２点、甑２点、高坏１点、器台１点、須恵器の蓋１点、土製模造品５点、の総数28点である。

924～931は甕形土器である。

924は、口縁は頸部から直で伸びて端部にいたり、上端部を平らにする。胴部は上位までしかない。外器面は縦方向のハケ目、内器面は横方向のヘラ削りが施される。復元口径が19.8cm を測る。925はD層から



第162図　5SX051出土土器実測図

出土し、小型のもので、口縁は頸部からやや内傾しながら端部に至る。端部は細くなって収まる。胴部は卵形を呈する。外器面は横方向のハケ目、内器面は縦方向のヘラ削りと横方向のヘラ削りが施される。復元口径が14.0cmを測る。外器面には煤が付着している。粘土巻上げ痕が残る。926は、口縁部が頸部からやや内傾しながら端部に至る。端部は肥厚させて丸めて収める。胴部は最大胴部径が口径を上回り、倒卵形を呈する。外器面は上位を横方向のハケ目、中位以下を縦方向のハケで調整される。内器面は頸部近くに指頭圧痕が、中位は横方向のヘラ削り、下位は縦方向のヘラ削りが施される。復元口径が14.4cmを測る。外器面には黒色顔料を塗布したようにみえる部分がある。927はD層から出土し、口縁が頸部からほぼ直に伸び、端部は角張る。胴部は倒卵形を呈する。外器面は縦斜め方向のハケ目が施される。内器面は上位は縦方向のハケ目、中位以下は縦方向のヘラ削りが施される。復元口径が18.2cmを測る。外器面に煤が付着している。928はD1、D2層から出土し、復元口径が14.0cmを測る。口縁は頸部から外反して端部にいたる。端部は丸めて収まる。胴部は最大胴部径はやや下位に位置し、卵形になる。外器面はハケ目調整がなされ、内器面は斜め方向のヘラ削りが施される。粘土の接合痕が上位に残る。また、外器面には黒斑がある。929は、復元口径が17.4cmを測る。口縁は頸部からやや外反しながら端部に至る。その間口縁自体もやや肥厚させている。口唇端部は外側に弱いつまみ上げが残る。外器面はハケ目がやや乱雑に施され、内器面は斜め方向のヘラ削りが施される。また、外器面には黒斑があり、また、粘土の接合痕がみられる。930は口縁が頸部からやや外反しながら、端部は丸めて収める。外器面は縦方向のハケ目があり、内器面には横方向のヘラ削りが施される。胴部の張り出しは大きい。復元口径が13.8cmを測る。外器面には黒斑がある。931は口縁が頸部からやや外反しながら立ち気味に伸びて、端部をわずかに肥厚して丸くなって収まる。胴部は卵形か。外器面は上位からハケ目の大きいものでハケ目調整が施される。横方向のハケ目はわずかにみえる。内器面は横方向のヘラ削りを施される。復元口径は14.8cmを測る。外器面には黒斑がある。

932～934は壺形土器である。

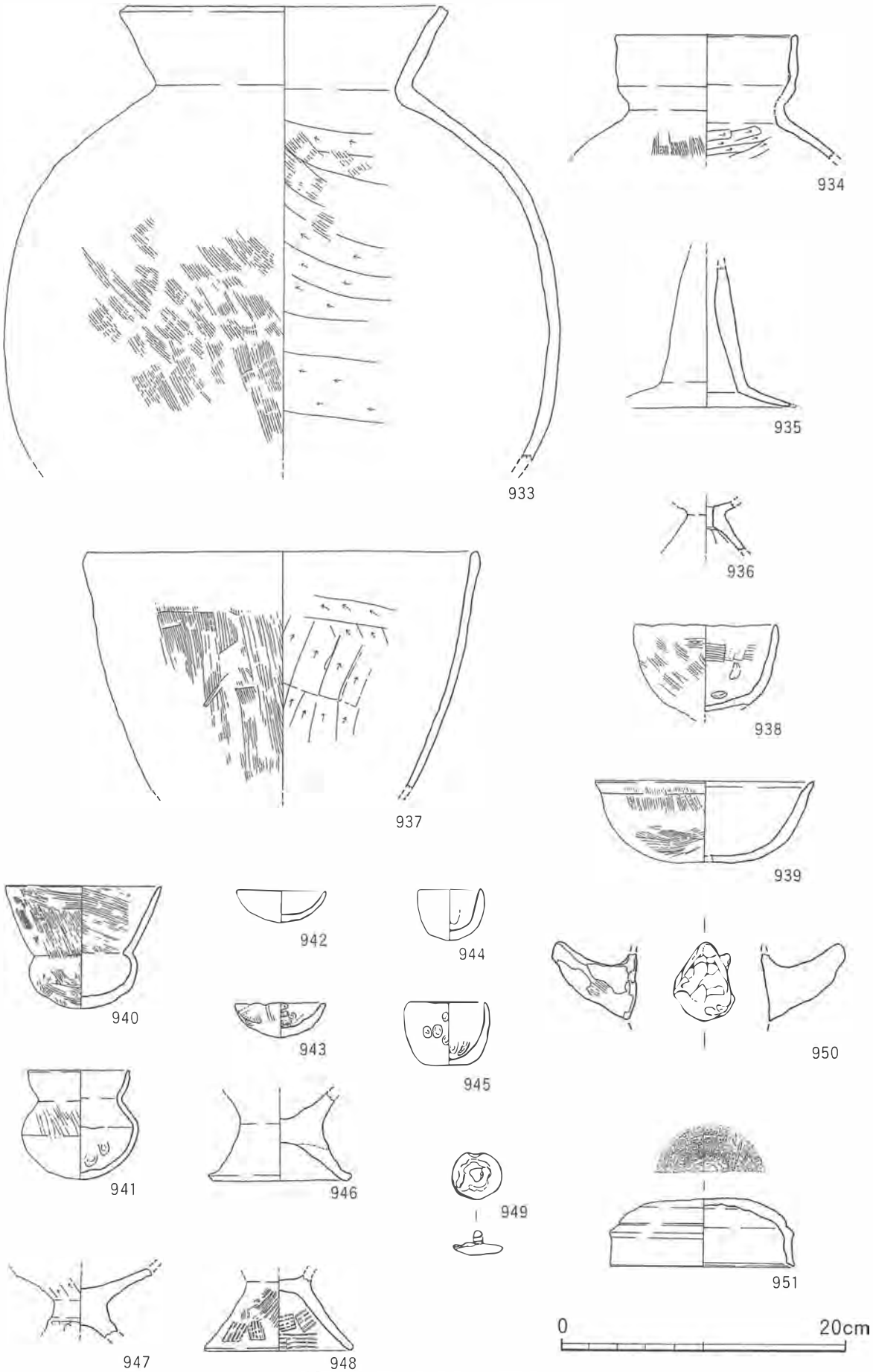
932は、頸部から直に口唇部まで伸びる。端部は角張る。口縁部は内外器面の横方向のハケ目が施される。胴部は球形に近い形を呈する。外器面には縦もしくは斜め方向のハケ目の後、ナデによる調整が施される。内器面は上位が横方向のヘラ削り、中位以下が斜め方向のヘラ削りが施される。933は壺で、口縁が頸部から直に斜めに6cmほど延びて端部にいたる。端部は角張る。復元口径は22.0cmを測る。胴部は頸部から急に広がり、球形になる。外器面は斜めハケ目の後ナデ消されている。内器面は上位がハケ目、下位が横方向のヘラ削りが施される。外器面には黒斑がある。934はD層出土の二重口縁壺である。頸部は緩やかに外反し、1次口縁は短く、2次口縁はそこから直に立ち上がる。復元口径は12.6cmを測る。端部はやや肥厚させて丸めて収める。胴部は頸部から急に広がるようである。外器面は縦方向のハケ目、内器面は斜め方向のヘラ削りがみえる。

935は高坏形土器の脚部である。上位からあまり開かず、接地面近くで急激に屈折させ、端部にいたる。外面はナデ、横ナデが施される。内器面ヘラ削りによる。外器面に煤が付着している。

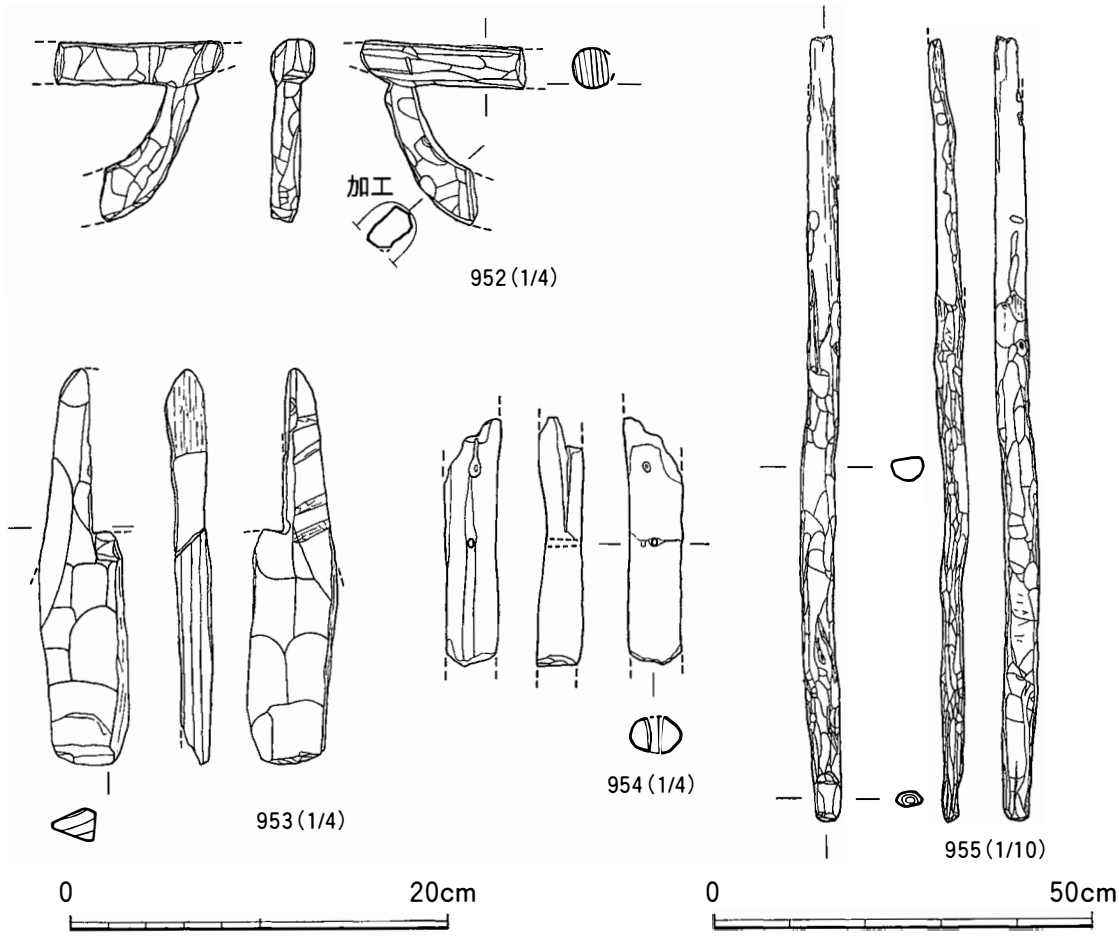
936はA～B層から出土した小型の器台である。中央部に穴が穿たれる。

937は底部は不明ながら形態的な特徴から甑とする。形態は鉢形である。口縁端部は丸めてある。復元口径が27.4cmを測る。外器面は中位付近から縦方向のハケ目が施される。内器面は上位が横方向、中位以下が縦方向のヘラ削りが施される。外器面に黒斑がある。

938・939は鉢形土器である。938はD層から出土し、口縁が9.3cmを測る。底部が一部欠損しており、さらに下に脚などが付属した可能性がある。小型品で指による成形痕が残る。その上をハケ目やナデによって調整している。外器面に黒斑がある。939は、口縁が広く、器高の浅い鉢である。復元口径が15.2cmを測る。口縁端部はやや外反させ薄くして終わる。器壁は中位がやや厚くなり、底部は薄くなる。外器面は上位



第163図　5SX051出土土器実測図



第164図　5SX051出土木製品実測図

が縦方向のハケ目、中位以下が横方向のハケ目が施される。内器面はナデ調整が施される。外器面に煤が付着している。

940・941は小型壺である。

940は、口縁部と胴部の比が1.2：1ほどになり、口縁が大きな小型壺である。口径は10.9cm、器高が8.6cmを測る。口縁部は頸部からほぼ直に立て気味に広がり、端部は薄くして収める。胴部は頸部からやや広がった後すぐ丸くなる。外器面は口縁部が縦方向のハケ目、胴部はハケ目が施される。内器面は口縁部が斜め方向のハケ目、胴部はナデ調整が施される。外器面に黒斑がある。941は甕形に近いが、一応小型壺とする。口縁は頸部からやや内湾させながら端部に至る。胴部は中位に弱く稜線を見せて下位にいたる、やや横に潰れた球形である。口径が7.1cm、器高が7.7cm、最大胴部径が8.2cmを測る。調整はナデにより見えにくいが、胴部外器面に斜め方向のハケ目、内器面の底部に指頭圧痕が残る。外器面に黒斑がある。

942～945は、土製模造品で、坏形、鉢形がある。942、943が坏形で、やや浅く、皿に近い形態である。

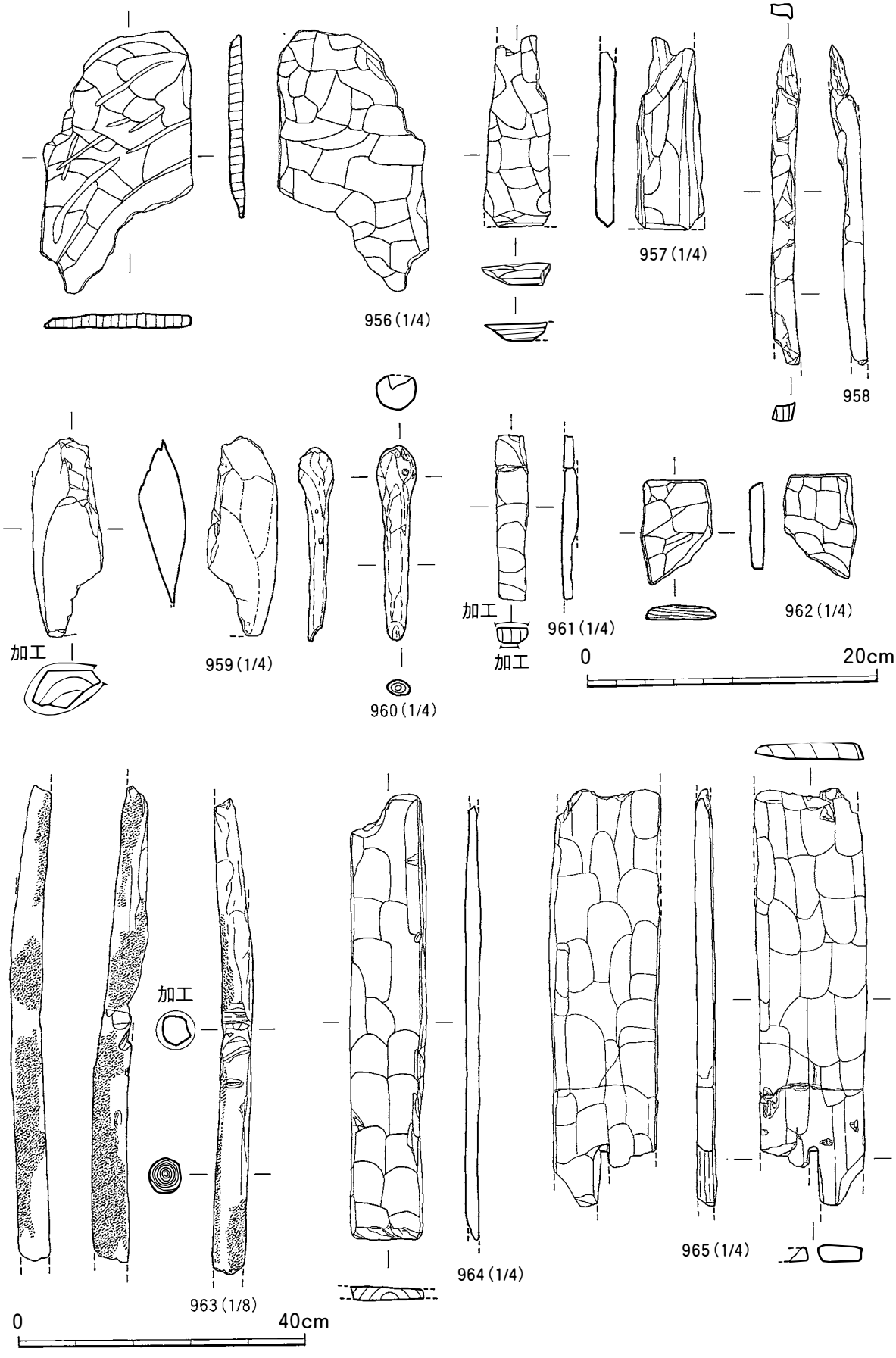
944、945が鉢形で大小の違いはあるがほぼ同一の形態である。945は底部がやや平たくなる。

946・947・948は、紛れ込んだと考えられる弥生時代の甕形土器の底部である。946は甕の、947は高坏の、948は甕の脚部である。

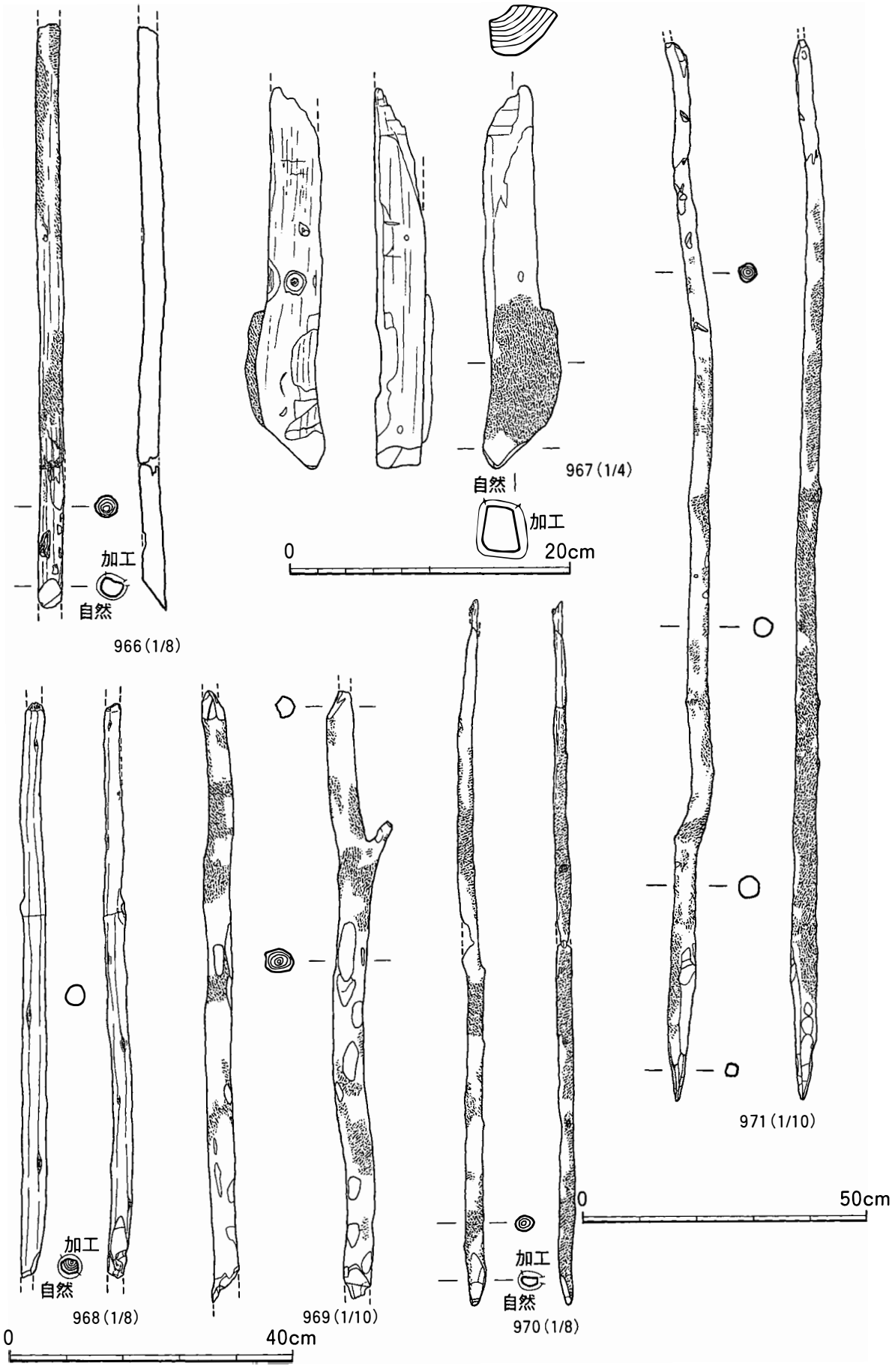
949は鏡形の土製模造品である。手捏で小振りのもので、径が3.5cmを測る。鈕はつまみ状であるが横に穴を開けている。ナデ調整される。重量は7.0gである。

950は、甑の把手である。手捏で成形し、ヘラ削りやナデによって調整される。

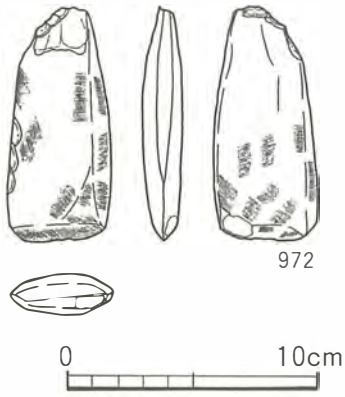
951はD層及びVc層で出土した須恵器の蓋である。口縁端部内側に稜が走る。口縁部は端部から直上に



第165図　5SX051出土木製品実測図



第166図　5SX051出土木製品実測図



第167図　5SX051出土石器実測図

立ち上がる。口縁部と天井部の間には明瞭な稜線が入る。天井部には回転ヘラ削りが施される。口径が12.8cm、器高が4.7cm を測る。

952～962は、木製品等である。出土位置は大部分が底部付近に集中する。

952はブナ科コナラ属アカガシ亜属を材とした鋤の取手である。欠損しているが柾目材によって丁寧に作りあげている。953は、ブナ科コナラ属アカガシ亜属の柾目材によって作られた鍬の破片である。柄の指し込み部分が残り、柄の指し込み角度が見られる。954は材不明の有孔木製品である。955はツバキ科ツバキ属の芯持ち丸木を丁寧に加工した天秤棒である。片方の端部は欠損しているが、残ったほうには上部に浅い抉りが作られ、ぶら下げたものがずり落ちないようにしている。4.3～4.4cm の太さで、角は全て取り去っている。残存長は1.01m ほどである。964・965はブナ科シイ属の板材である。956はクスノキ科クスノキ属クスノキの板材である。そのほかは丸杭などで用途はよく分からない。

972は、蛇紋岩製の磨製石斧で、ほぼ完形品である。A－B 層の出土である。刃部は片刃気味で、他の磨製もほどよい。縦長が9.1cm、幅が4.1cm、厚みが1.6cm を測る。重さは92.14g である。

○5SX038【第168図】

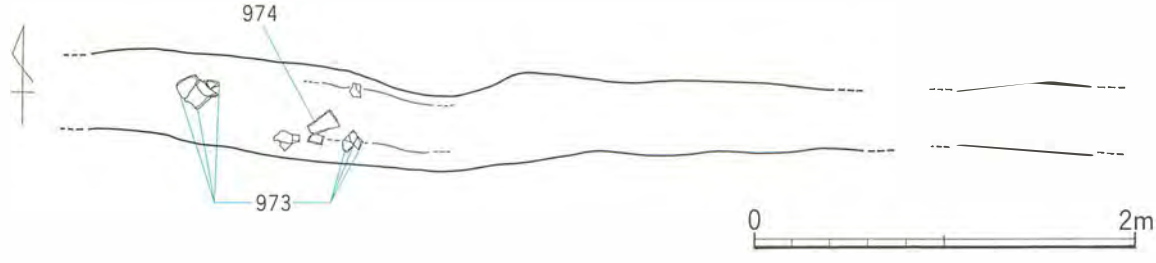
a－33グリッドで検出した溝状遺構であるが、ほとんど痕跡のみである。部分的に20cm ほどの掘り込みを確認面とのわずかの差で確認できた。確認した長さは5.3m 程、幅が40～50cm を測る。

この遺構の性格はよくわからないが、一応溝としての機能を備えていたと考える。

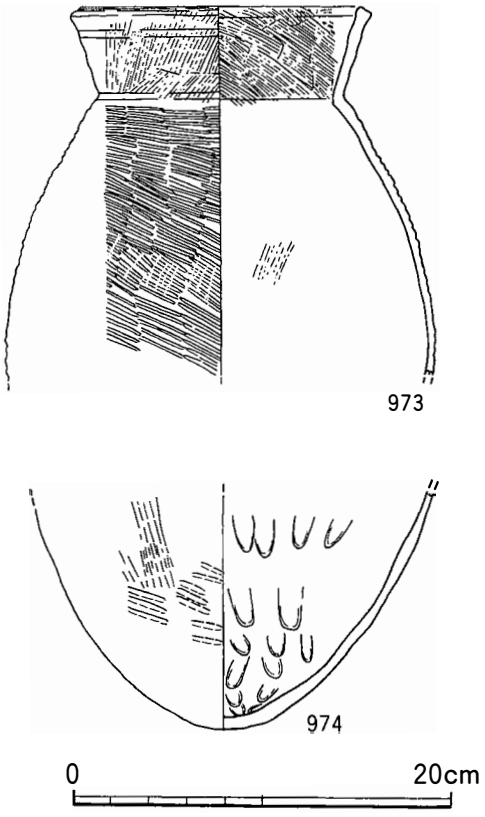
［出土遺物］【第169図】

図化したのは、長胴甕の２点である。

973は口縁部から胴部中位までの破片である。頸部から口縁部は直に伸びて口縁端部にいたる。端部は角張って厚くなっている。頸部から胴部中位までは緩やかに膨らんでいく。口縁部は内外器面ともハケ目調整が施される。胴部は外器面がやや左上がりのタタキが施され、内器面はわずかにハケ目が残るが、大部分はナデ消される。復元口径が14.9cm、復元最大胴部径が22.6cm を測る。974は、973によく似ており、しかも同一遺構の中から出土している。整理段階では接合を試みたが、つながらなかった。底部付近で、外器面はタタキ、内器面は指押え跡が多く残り、製作技法の一端がわかる。



第168図　5SX038実測図



第169図　5SX038出土土器実測図

○5SX050【第170図】

f－34グリッド～g－34グリッドで検出した遺構で、連続する土坑をつないだような形を呈する。方向はほぼ東西で遺構のつながりは最後までは確認できなかった。X区の方へ伸びていたが、X区では確認できなかった。

形状は並列した２つのピットが浅い溝で繋がり、それらが10個ほど連なった状態である。これに類する遺構は他に確認していない。出土した場所が水田跡の可能性があるところであるため、2列並ぶ杭列の可能性が大きい。杭列を結ぶ溝は２本あり、杭と杭の間にはある。道路との見方もあるが今のところ不明である。

埋土は、以下のとおりである。1層は、灰褐色を呈し、砂粒を少し含む。2層は、灰黄褐色を呈し、砂粒を少し含む。3層は、灰褐色を呈し、粘性を帯びる。4層は、黄褐色を呈し、1層に似る。５層は、黄灰褐色を呈し、4層より締まり、褐色が強くなる。6層は、3層に似る。粘性がやや強くなる。

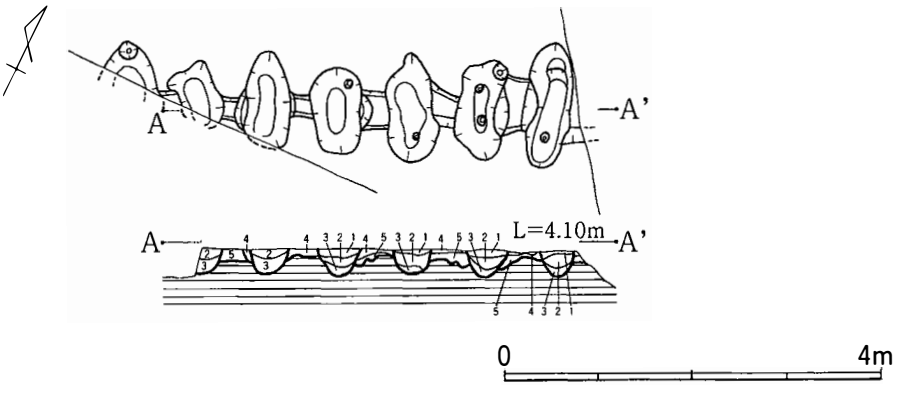
遺構の時期は、確認した面が少なくとも古墳時代前期の層中であることから、これ以降の時期に位置付けた。

［出土遺物］【第32図】

出土遺物は、混じりこみと思われる126がある。弥生前期の刻目突帯文を持つ甕形土器である。２層から出土している。磨耗しているため調整は不明である。

（７）水田に関わる遺構【第171図】

水田本体の確認はできていない。その傍証となるような溝状遺構、何らかの関係が想定できる土坑などを



第170図　5SX050実測図

ここでは取り上げる。水田跡の証拠としてイネのプラント・オパールの分析を行っており、その結果この時期の層以降にイネの栽培の可能性が推定されている。以下に個別の関連遺構について記述する。

○4SK061・4SK062

これらの遺構はこの周囲で確認した土坑である。

SU・C－D 間の埋土の注記は以下のとおりである。

１層：暗灰黄色(2.5Y4/2) ；ともに軟質性の茶色粒子と黒色粒子を多く含む。

２層：にぶい黄褐色(10YR4/3) ；軟性粘質土。

３層：暗褐色(10YR3/3) ；軟性粘質土。軟質の茶色粒子、黒色粒子を多少含む。硬質の黒色小粒子やや多く含む。

４層：褐灰色(10YR4/1) ；軟性粘質土。3層の埋土に似る。

５層：黄灰色(2.5Y5/1) ；強軟性粘質土。やわらかい茶色の粒子を多くと、やわらかい黒い粒子を多少含む。黒くて硬い粒子をやや多く含む。

６層：黄灰色(2.5Y4/1) ；強軟性粘質土。軟性の茶色粒子を多量に、軟質の多く軟質の黒色粒子を多少含む。

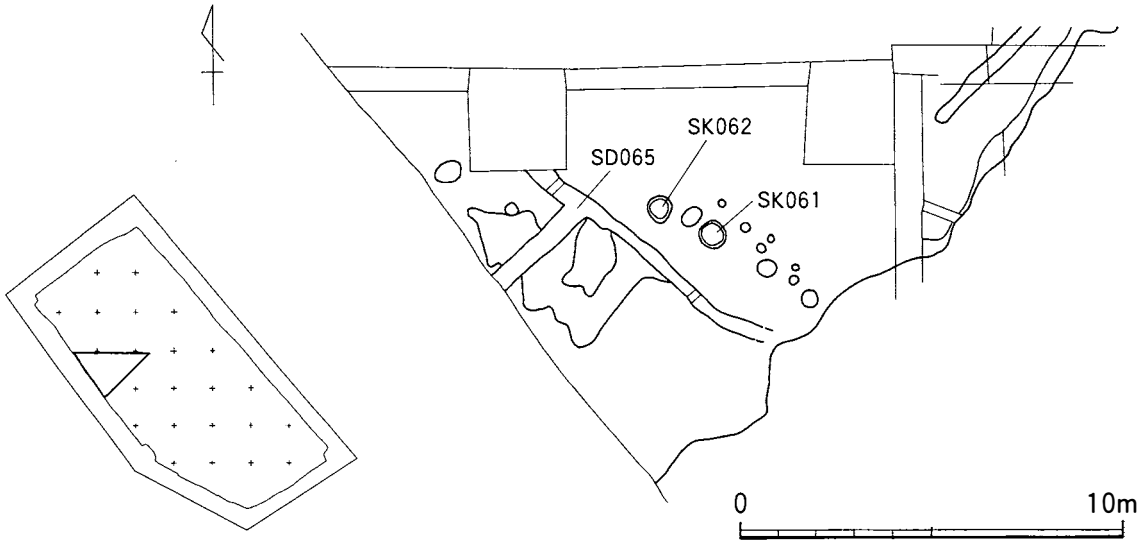
７層：暗灰黄色(2.5Y5/2) ；軟性粘質土。軟質の茶色粒子を多くと、軟質の黒色粒子を多量に含む。黄色粘土を部分的に含む。地山に類似した層。

○4SD065

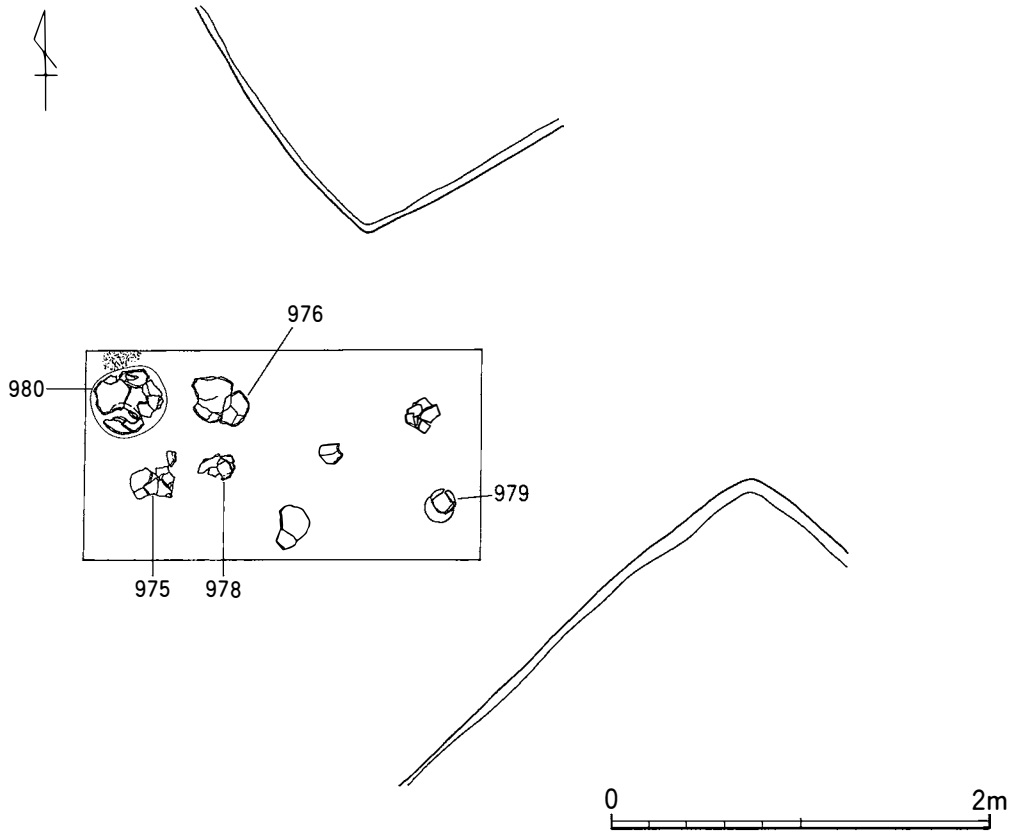
SU・E－F 間で土層を観察すると、その土色は褐灰色（10YR4/1）を呈し、ややかたくてぼそぼそした粘質土である。やわらかい茶色の粒子と、やわらかい黒い粒子を共に多く含む。SU・G－H 間も同様である。

自然科学的分析によれば、イネが栽培されていたと思われる最下位層は、第１トレンチでは第６層（絶対高約3.80m）であり、第２トレンチでは第７層（絶対高約3.60m）にあたる。そこで調査においては、現在の４層が標高約4m なので、その高さから20cm ずつ２回に掘り下げて水田遺構の確認を行った。

この溝が水田耕作に伴っているかどうかは現段階では確証はない。



第171図　4SK061・4SK062・4SD065実測図



第172図　b－34グリッド内トレンチ遺物出土状況実測図

（8）b－34グリッド内トレンチ出土遺物【第172図】

この一帯は住居跡等の集中する地域であるのは認識できていたが、自然堤防上の土質や自然条件により遺構を確認するのに充分ではなかった。調査の早い段階でこの付近に遺構らしい輪郭線が見えていたが、他の遺構を確認している間に風化が進み確認できなくなりそのままになっていた。そこで調査の最終段階で遺構の有無を確認するためにトレンチを開けてみた。その結果、遺構の埋蔵物を思わせる遺物の出土があった。同じくその堆積層には焼土も出土し、遺構の存在を窺わせたが、時間的な制約のためその後の調査をあきらめざるをえなかった。不十分な調査の証としてあえてここで取り上げる。

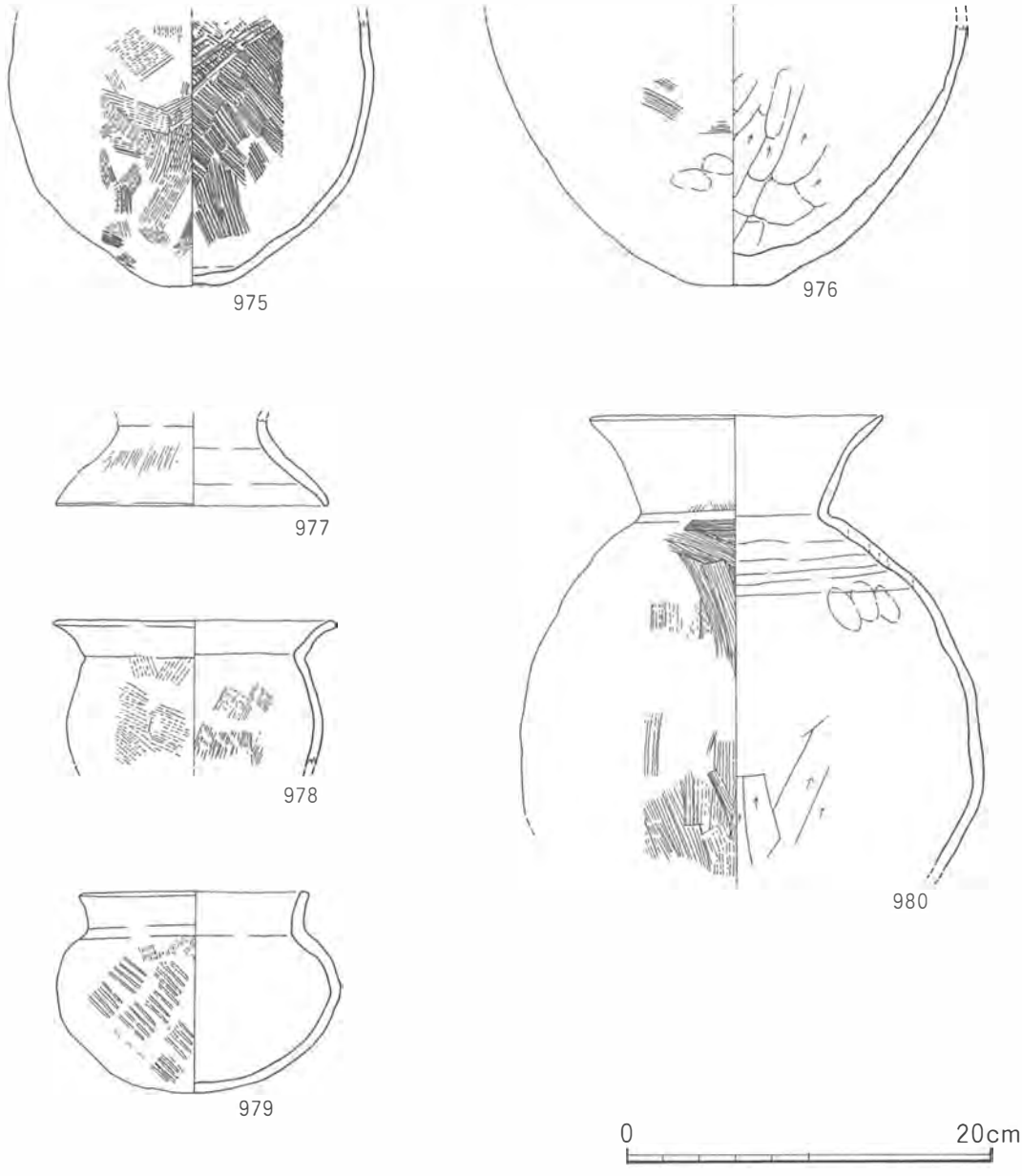
出土遺物が含まれていた層は、周囲で遺構として確認した5SI029の埋土や玉名市側のS－027の埋土よりも明るく、それらの遺構の地山としてみていた土層中に含まれていた。そのことからそれらの遺構よりも古い時期に遡るものである可能性が大きい。

［出土遺物］【第173図】

出土状況図（第172図）に図示した遺物のほとんどをここで図化した。甕が3点、壺が1点、器台1点、直口鉢1点である。

975は甕の胴部下位で、底部はやや平底なっている。器壁はかなり薄い方である。外器面はハケ目が弱く残り、内器面は斜め方向のハケ目が残る。中型のものである。976も甕の胴部下位で、底部はわずかに平底となる。器壁は底部が2.5cmと厚くなる。外器面は摩耗で不鮮明であるがハケ目と指押さえが若干見える。内器面は縦方向のヘラ削りによって調整されている。978は小型の甕で口径の方が胴部最大径よりも大きい。口縁部はくの字であるがやや立ち気味である。口唇部は丸まっている。胴部外器面は薄くハケ目が見える。内器面にも薄くハケ目が部分的に見える。

980は、土師器の壺形土器である。口径は25.0cmを測る。口縁部は長く伸び、頸部から急激に外反する。

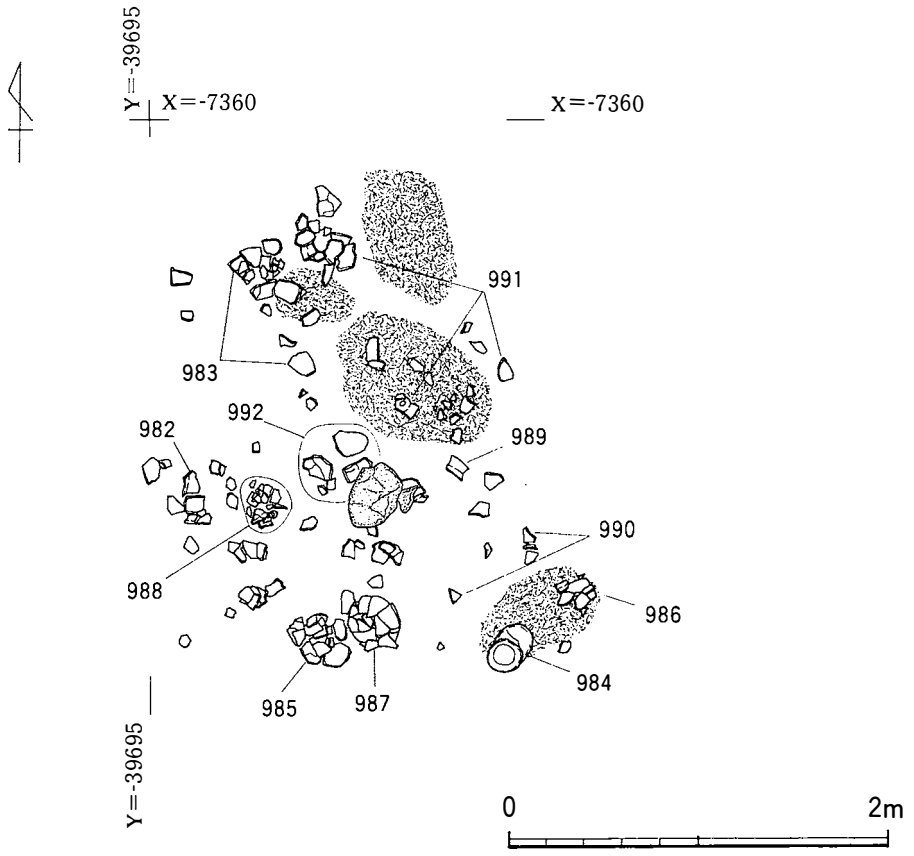


第173図　b－34グリッドトレンチ内出土土器実測図

口唇部断面は尖って収める。胴部は卵形であろう。外器面は縦方向のハケ目の後ナデ消されている。内器面の上位は調整が不十分で粘土巻上げ痕が残る。その下は指頭圧痕が見られ、下位は縦方向のヘラ削りが施される。

977は器台としたが、脚部のみで全体の形状は不明である。脚部は接地面よりやや上部で内傾しながら尖って終わる。外器面にわずかにハケ目が残る。

979は、直口縁を持つ鉢とした。在地系のもので弥生時代からの伝統を引いた器形である。口縁部は直に立ち、胴部はつぶれた様になっている。底部にはやや平坦な部分があり座りがよい。外器面には左上がりのタタキが施されている。内器面はハケ目調整痕が残る。



第174図　c−34グリッド土器集中部実測図

（9）c−34グリッド内土器集中部【第174図】

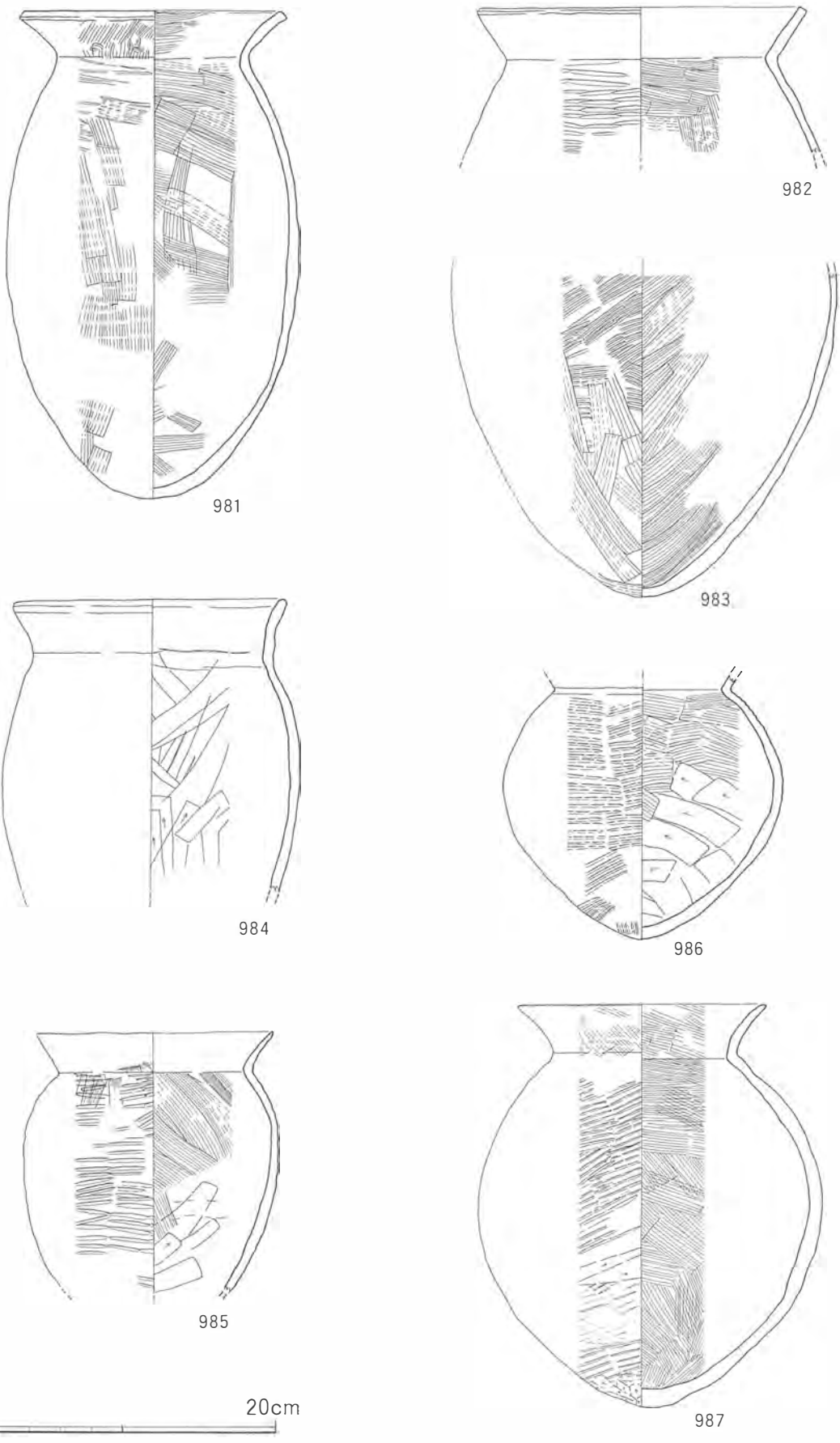
調査Ⅷ区のc−34グリッドでかなりまとまって土器片が集中して出土するのをはやくから確認していた。出土地点は旧宅地の端で、すぐ横を近世以降の溝が走っている部分で、土層自体かなり乱れた状況であったため、宅地の拡張に伴い埋め立てた土に遺物が含まれていると判断して精査するのを怠っていた。調査の進展に伴って、現況の水田部分まで本来の地形が伸び、溝は本来の地形を切断したにすぎないことが分かってきた。そこで、この土器の集中部も何らかの遺構である可能性がでてきたため、精査をすることとした。しかし、精査しながら掘り下げたが、明確な遺構としてはとらえることができなかった。ただ、焼土が含まれることや遺物がまとまって出土することから遺構が存在していた可能性は大きい。遺物の集中や焼土の範囲を記録したが、最終的には包含層中の一状況とした。ただ、遺構の可能性も捨ててはいないのでここで集中した遺物について取り上げた。

第174図に示したように遺物は個体としてのまとまりがある。焼土も部分的な広がりがあり、炉とするにやや難がある。ただ、この範囲外には同じ層位で遺物のまとまりはなくなる。

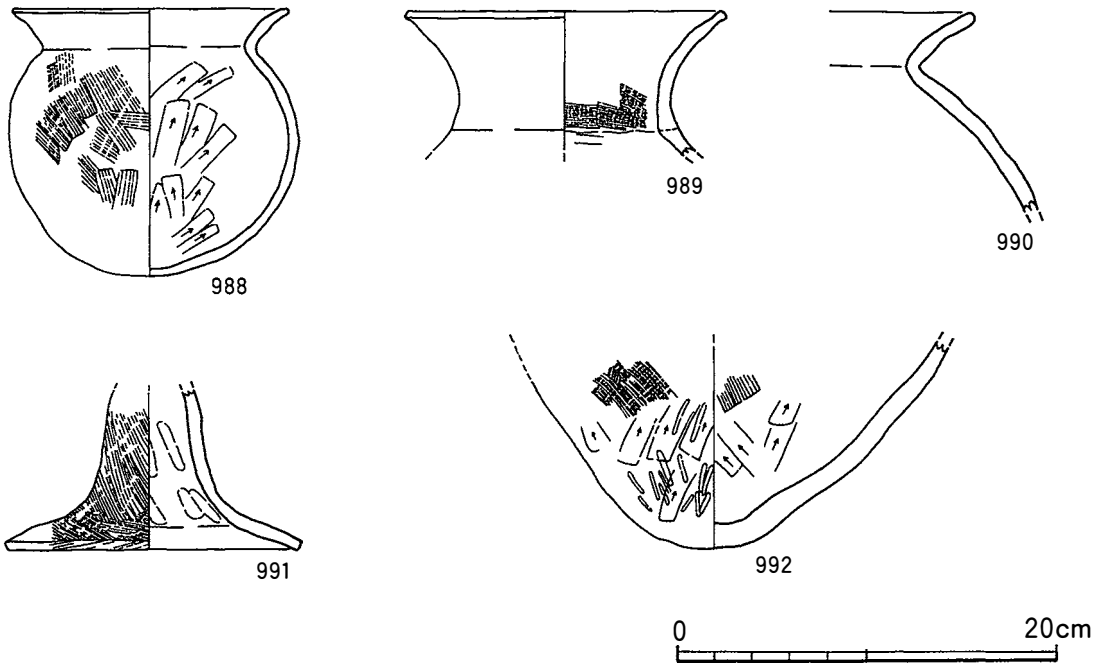
［出土遺物］【第175図・第176図】

ここで図化したのは甕が8点、壺が3点、高坏が1点である。出土遺物のうち個体としてかなりまとまって出土したものである。

981～988が甕で、古手のものが多い。981～984は胴部が砲弾形を呈する長胴甕で、在地系のものとして菊池川流域では多く見られるものである。981は口唇部がやや角張り、口縁部はくの字に屈曲し、外器面はハケ目の下にタタキの痕跡が見える。内器面はハケ目により調整されている。982は同じく口縁部がくの字に屈曲し、口唇部が角張る。大きさは981より一回り大きいものである。外器面には横に平行のタタキがはっきり残り、内器面にはハケ目調整がなされる。983は982と似た個体の胴部下位である。ただ。982と異なる



第175図　c－34グリッド土器集中部土器実測図



第176図　c－34グリッド土器集中部土器実測図

部分として外器面にタタキ痕が残り、右上がりのやや長く残るものである。ハケ目による調整が施されている。内器面も同様にハケ目調整がなされる。984は長胴で砲弾形を呈するが、981とは形がずいぶん異なる。口縁は頸部付近での屈曲が弱く、胴部から口唇部へかけて緩やかに伸びる。口唇部は丸いまる。外器面は丁寧にナデ調整がなされている。内器面にはヘラ削りが施され、部分的にはヘラの一部が沈線状になっている。口縁径と胴部最大径がほぼ同じである。

986は頸部から底部にかけての土器で、胴部は丸く、底部は尖るものである。胴部外器面はほぼ横方向のタタキで調整され、底部付近でやや不規則な方向のハケ目が施される。内器面上部はハケ目による調整が施され、中位から下位は斜め左方向にヘラ削りが施されている。985は981など同様に縦に細長い器形である。口縁部は短く口唇部は尖る。外器面は横に平行なタタキが施される。その上に弱く縦方向のハケ目が見える。内器面は胴部中位から上位にはハケ目が斜め方向に施され、下位にはヘラ削りがハケ目の方向とは逆方向に施されている。調整方法は986に似る。987は986に似た器形であるが、それよりもやや胴部が長い。頸部はすぼまり壺のような器形を呈する。口縁部は頸部からやや外反しながら伸び、口唇部は尖り気味になり終わる。胴部は倒卵形を呈し、器壁は1cmほどの厚みがある。底部は2cmほどある。胴部の外器面は右上がりのタタキが施され、底部付近にはヘラ削りが施され尖り底のようにしているようである。内器面はハケ目調整である。口縁部の内外面ともハケ目が施される。988は甕としたが、胴部がややつぶれた球形を呈する。口縁部は強く外反している。外器面は狭いハケ目が残る。内器面は縦方向のヘラ削りが施される。990は破片であるが、頸部から急激に開き胴部はかなり張り出す。

989は頸部から外反しながら開き口唇部が丸く収めている。頸部内器面にハケ目がわずかに残る。胴部はわずかに残る範囲ではヘラ削りである。992は底部のみで、壺のものとした。外器面はハケ目とヘラミガキもしくはヘラ削りが見られる。内器面はハケ目とそれを消すヘラ削りが施される。

991は高坏の脚部である。脚の底部付近が大きく開き、端部は角張る。外器面にはハケ目が施され、内器面はヘラ削りで調整される。

（10）包含層出土遺物

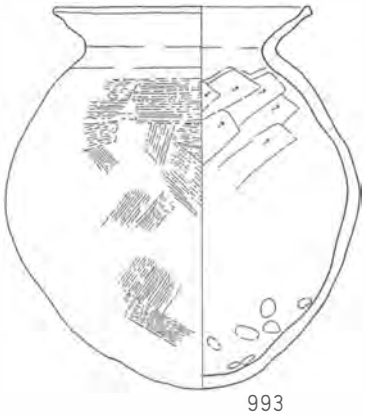
ここではその他の遺構には伴わなかったもののこの時期の層から出土した遺物を包含層の遺物として述べる。大部分が標準層Ｖｃ層に含まれているものである。

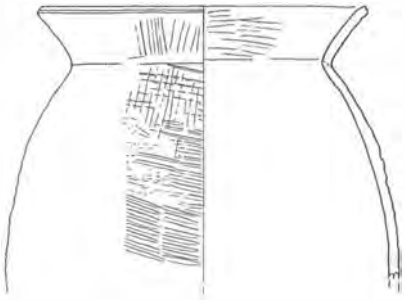
［出土遺物］【第177図～第183図】

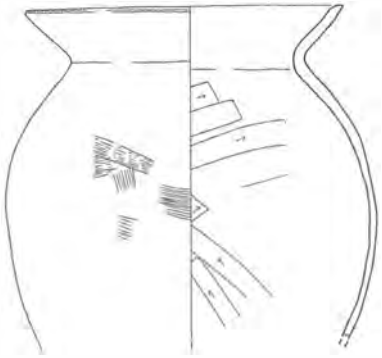
図化した遺物のうち土器類は、甕が14点、壺が９点、高坏が７点、器台が５点、坏が４点、甑が３点、鉢が３点、小型甕が６点、小型鉢が４点、小型壺が２点、注口土器が１点、土製模造品が14点である。石器は２点である。

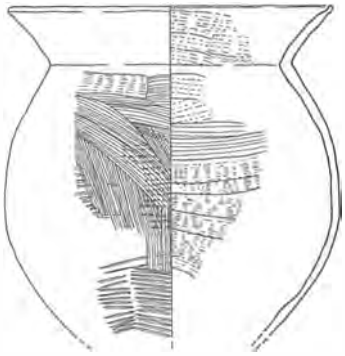
993～1006は甕形土器である。994・995・997は胴部が砲弾形を呈するものである。

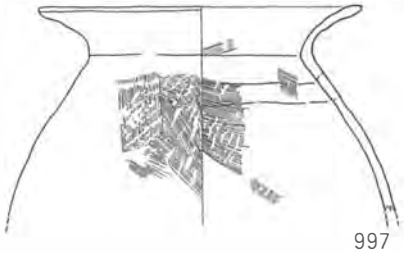
993は口縁部が頸部から直線的に開き、途中やや肥厚させ、それを細くし、端部をやや肥厚させ、丸めて収める。胴部は卵形で下位に重心がくる。外器面は上位が横方向のハケ目、その下位は交差させながらのハケ目が施される。その後ナデ調整される。内器面は上位は斜め方向のヘラ削り、他は不明瞭で、底部付近には多くの指頭圧痕が残る。994は長胴甕の系統で、胴部自体が胴部をあまり張り出さず、細長い。口縁部は頸部からやや広げながら、直に伸びて端部に至る。口唇部は角張る。口縁内部は横方向のナデ、外面は縦方向のハケ目である。胴部はやや左上がりのタタキ痕が残る。その上に縦方向のハケ目が施される。内外器面に煤が付着している。995はａ－34グリッドＶｃ層出土の甕で、復元口径が16.5cm を測る。口縁は頸部からやや内湾気味に端部に至る。端部上面は平坦にする。胴部は倒卵形で、外器面はハケ目の後に横方向のナデ、内器面は上部、下位で方向の異なる斜めヘラ削りがそれぞれ施される。996はＺ－33グリッドＶｃ層で出土した甕である。口径が胴部最大径とほぼ等しい。口縁は頸部からやや肥厚させ外反しながら端部に至る。端部は細くなり、丸めて収める。口縁部内器面は横方向のハケ目が施される。997はⅧ区ｂ－34グリッド出土で、復元口径が16.9cm を測る。口縁は頸部からやや薄くなりながら端部に至る。端部付近では肥厚し、端部がやや細くなって収まる。胴部はあまり張り出さず、最大径は下位の方にあるようである。外器面は縦ないし斜め方向のハケ目が残る。内器面は斜め方向のハケ目が残る。頸部近くの内器面に粘土巻上げ痕がみえる。998はⅧ区ｃ－34グリッドの出土で、復元口径が16.0cm、復元胴部最大径が21.9cm を測る。口縁は頸部から直に短く伸び、端部を丸めて収める。胴部は卵形を呈し、外器面は縦方向のハケ目を、内器面は横方向のハケ目、下位はヘラ削りが施される。器壁は下位のヘラ削り部分の方がより薄くなっている。外器面に黒斑がある。999はⅧ区Ｚ－33グリッドの出土で、復元口径が15.6cm を測る。口縁は頸部からほぼ直に伸び、端部に至り、やや摘み上げて収める。胴部は緩やかに開いていく。外器面は斜め方向のハケ目が、内器面は横方向のハケ目が薄く残る。また、粘土巻き上げ痕跡がみえる。1000はＺ－35グリッドで出土した。口縁は頸部からやや内湾させながら端部でつまみ上げ、やや肥厚させて収める。胴部は球形を呈する。外器面はハケ目が残る。内器面は横方向のヘラ削りから縦方向のヘラ削りを施される。1001はｂ－34グリッドで出土したもので、一応甕にしているが、形態的には鉢に近い。口縁は頸部から立ち気味で直にのび、端部がやや角張る。胴部は外器面が斜め、もしくは平らなタタキが残る。内器面はハケ目の痕跡が残る。復元口径が24.7cm、復元最大胴部径が25.2cm を測る。1002はＹ－26グリッドＶｂ層で出土したもので、復元口径が17.0cm、最大胴部径が23.1cm を測る。口縁は頸部から直に伸び、端部を丸めて収める。内器面には短い単位の横方向のハケ目が施される。胴部は倒卵形を呈し、やや器壁が厚い。外器面は斜め方向のハケ目調整が施され、内器面は横方向に近い斜め方向のヘラ削りが施される。1003はＹ－27グリッドＶａ層、Ｖｃ層から出土した。口縁は頸部から直に伸びて、端部が丸まって収まる。胴部は倒卵形か。器壁は薄い。外器面はハケ目が残る。内器面は上位が横方向のヘラ削り、中位以下は斜め方向のヘラ削りが施される。復元口径が17.4cm、復元最大胴部径が22.2cm を測る。1004はｃ－34グリッドから出土した。口縁は頸部から直に伸び、端部が丸くなって収まる。胴部は徐々に開いている。外器面は調整が不明瞭である。内器面は上位が斜め方向のハケ目

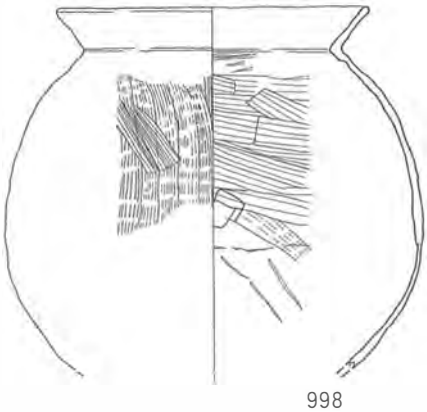

993


994

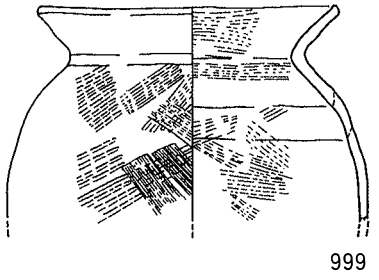

995

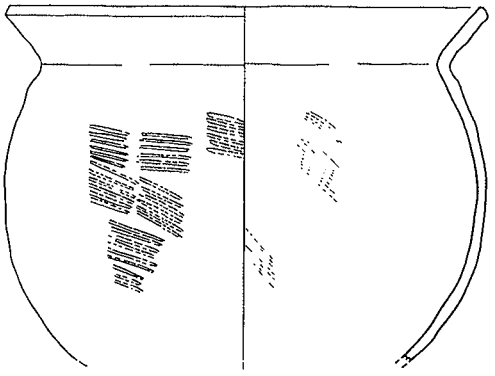

996

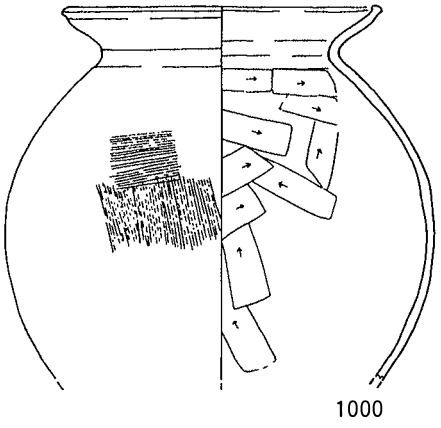

997

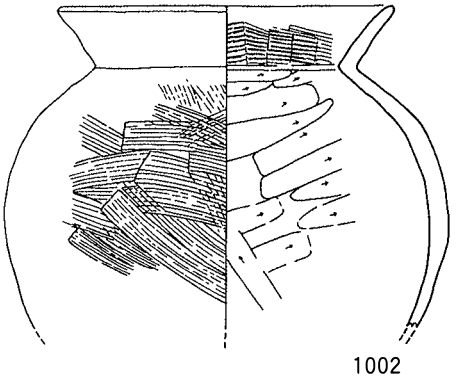

998

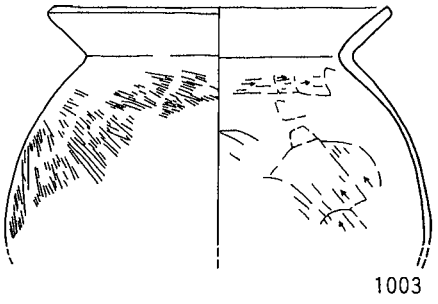
第177図　包含層出土土器実測図

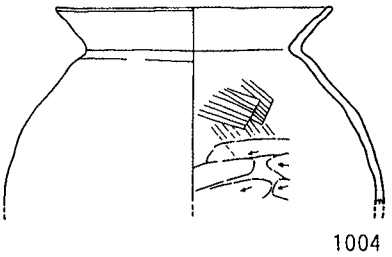

999

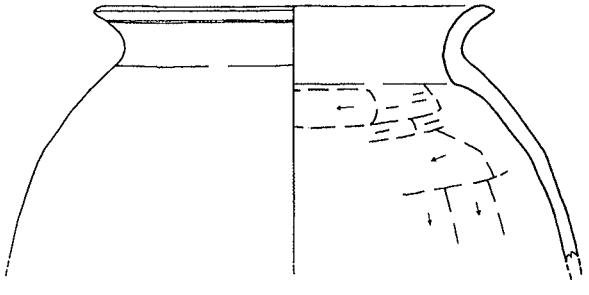

1001

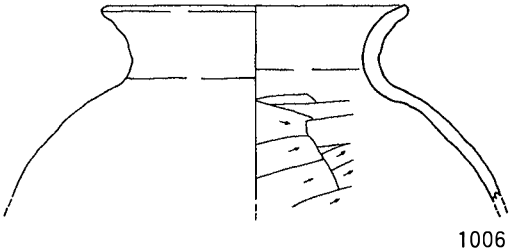

1000

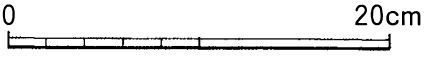

1002


1003

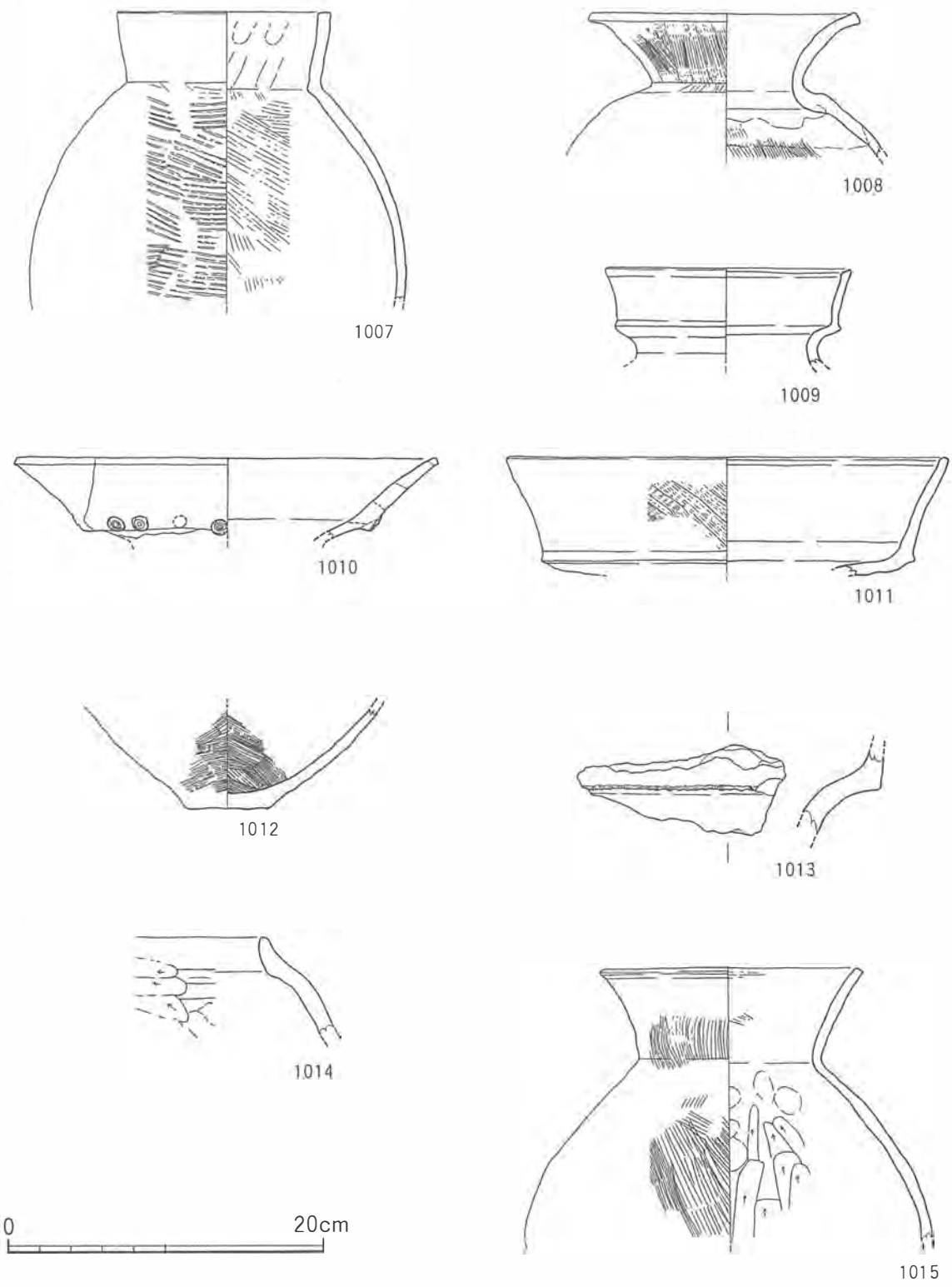

1004


1005

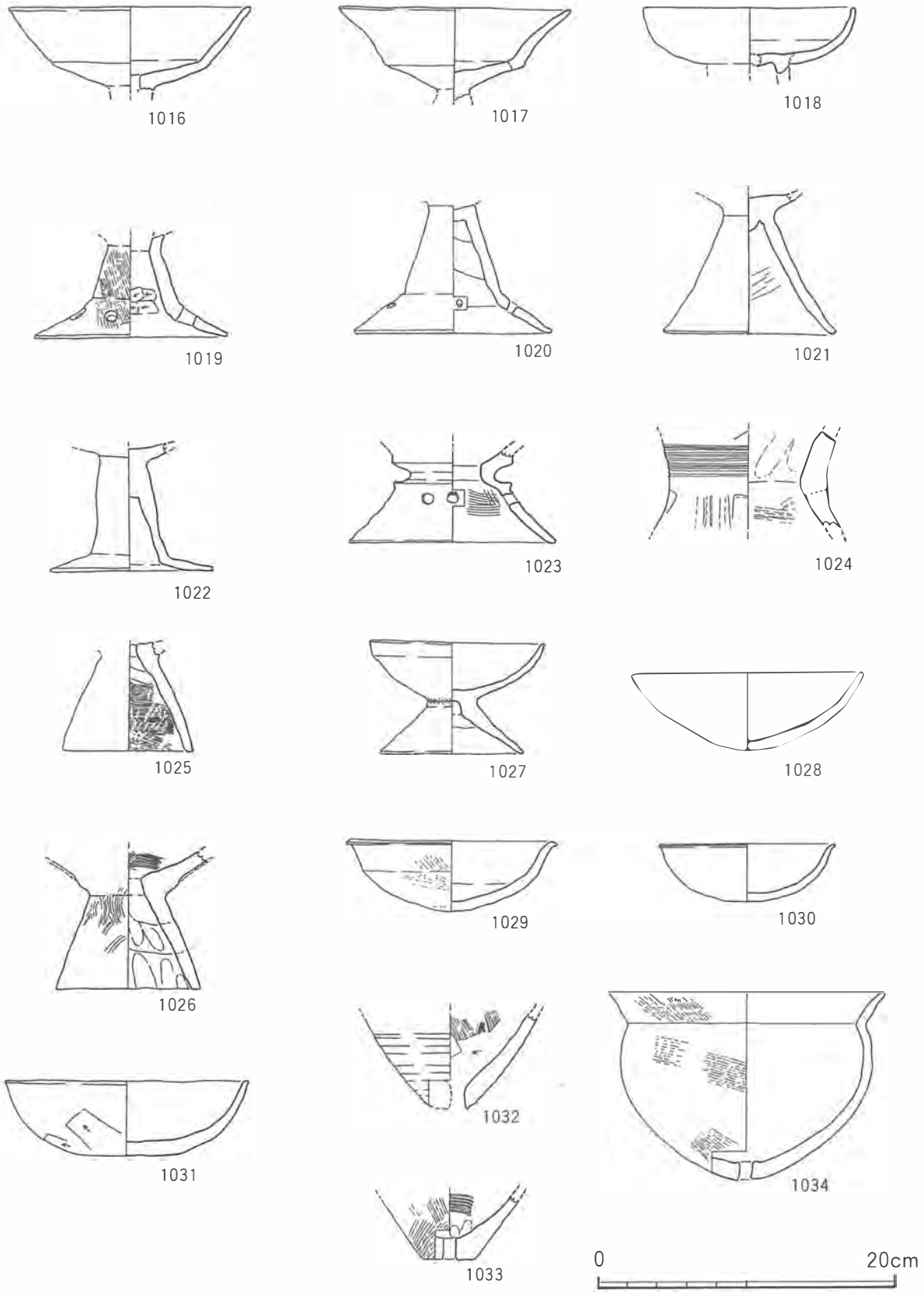

1006



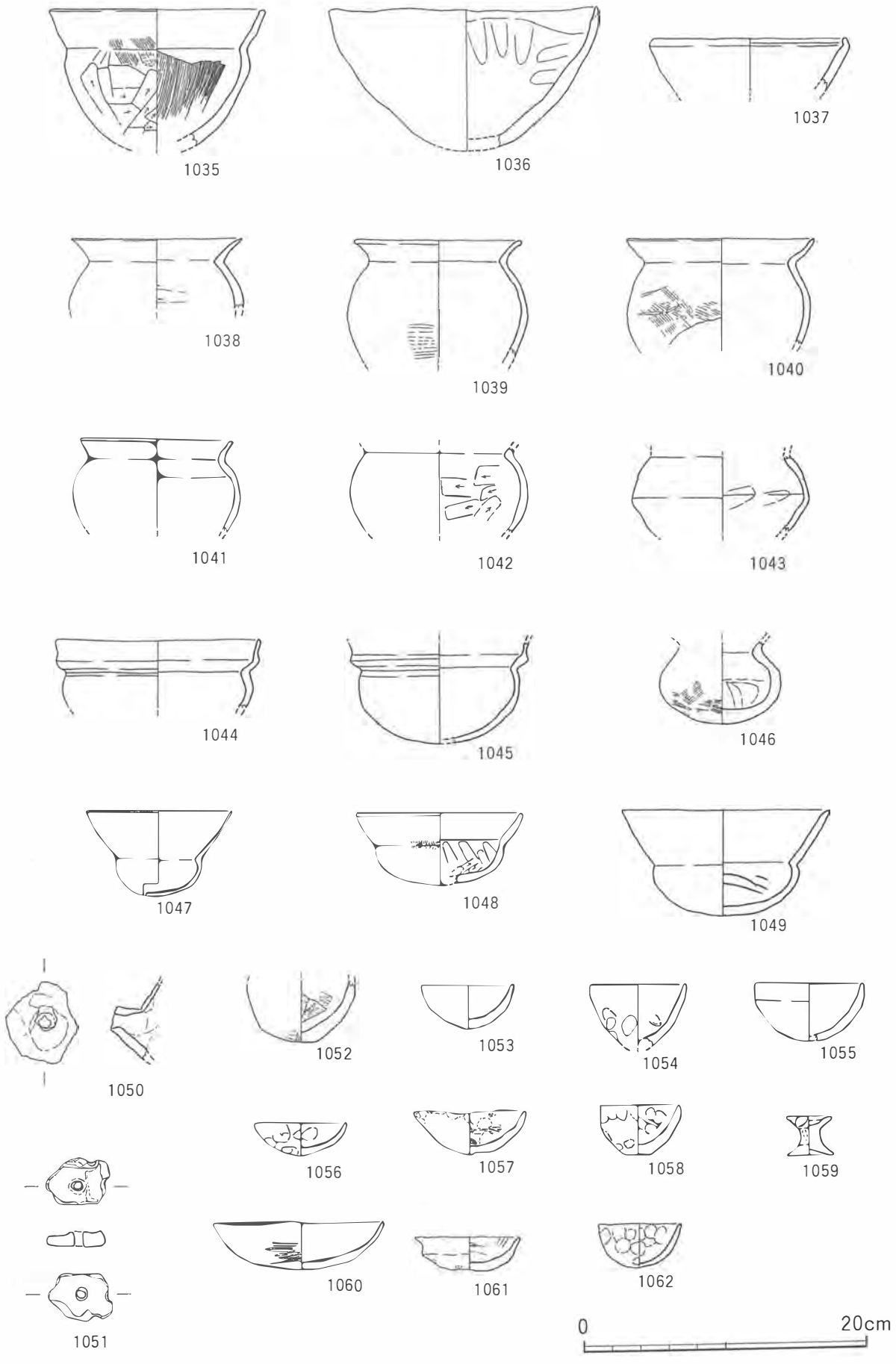
第178図　包含層出土土器実測図



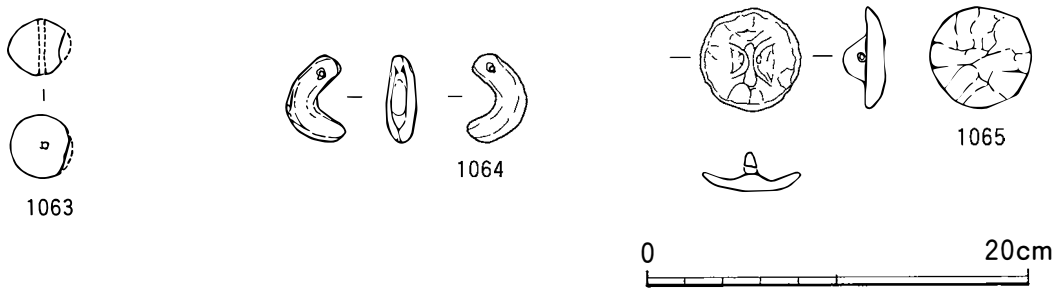
第179図　包含層出土土器実測図



第180図　包含層出土土器実測図



第181図　包含層出土土器実測図



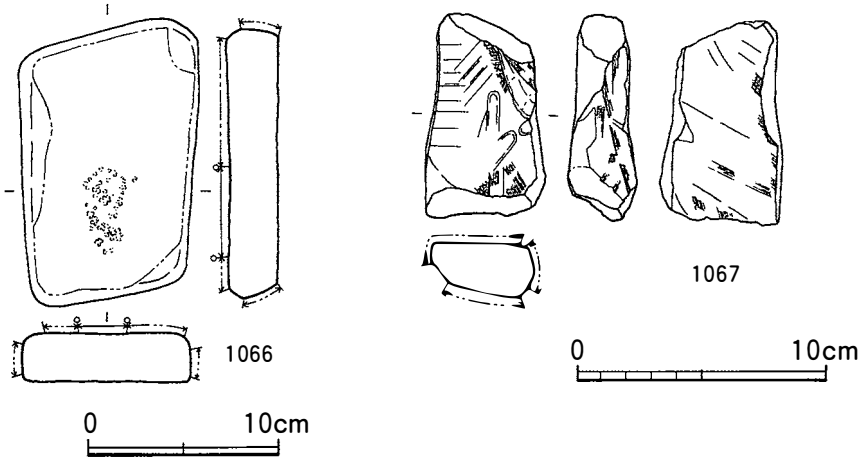
第182図　包含層出土遺物実測図

で、中位では横方向のヘラ削りが施される。復元口径は14.4cm を測る。1005はZ－29グリッドVc層出土の甕である。復元口径が19.6cm を測る。口縁は頸部からやや肥厚しながら急に外反し端部にいたり丸めて収まる。胴部内器面は上位が横方向、中位以下が縦方向のヘラ削りを施し、器壁を薄くしている。外器面はハケ目の後ナデ消されている。外器面全体に赤彩されているようである。

1006はc－34グリッド出土の甕である。口縁は頸部からやや肥厚しながら急に外反し端部にいたり丸めて収まる。胴部はかなり大きくなりそうである。口縁部は横ナデ、胴部内器面は横方向のヘラ削りが入る。外器面はナデ調整である。

1007～1015は壺形土器である。1007は長胴系のものである。1009～1011、1013は二重口縁壺である。

1007はe－33グリッドL３層、Vc層出土のもので長胴のもである。口縁は頸部からほぼ直に立ち上がり、端部は角張っている。胴部は長く伸びる。外器面には横方向でのタタキが入る。内器面はハケ目で調整される。復元口径が13.5cm、最大胴部径が23.7cm を測る。外器面に黒斑がある。1008はⅧ区出土の土器で、かなり胴部が張り出すものである。頸部は微妙にカーブし急激に外反し口縁端部至る。口唇部ではやや肥厚し、角張る。外器面には縦方向のハケ目が施される。胴部は一部しかないが、内器面にハケ目がみえる。また、口縁部と頸部接合痕が見える。1009はb－34グリッド出土で、二重口縁壺の口縁部である。口径は15.3cm を測る。調整はナデ調整のみである。1010はV－27グリッドVc層から出土した二重口縁壺である。復元口径は26.5cm を測る。直に伸びた口縁部には櫛描文や竹管文が残る。1011はZ－33グリッドから出土した大



第183図　包含層出土石器実測図

型の二重口縁壺である。復元口径が28.0cmを測る。1次口縁部と2次口縁部のみで大型品である。外器面に斜め方向のハケ目が残る。1012はc－34グリッド出土で、弥生系の壺の底部である。内外器面とも丁寧なハケ目が残る。底径は5.1cmを測る。1013はX－29グリッドⅤc層出土の二重口縁壺の頸部付近の破片である。1次口縁と2次口縁の屈曲部に小さな刻み目がはいる。1014はY－29グリッドⅤc層出土の土師器の無頸壺である。復元口径は16.4cmを測る。内器面には横方向のヘラ削りが入る。外器面の一部に赤彩が施される。1015はa－34グリッドで出土した壺で、口縁部が頸部からやや外反しながら伸び、端部を角張らせるものである。胴部はやや胴長である。頸部外器面に縦方向のハケ目、内器面は横方向のハケ目か。胴部外器面には斜めハケ目、内器面には縦方向のヘラ削りが施される。頸部付近には指押さえが残る。口径は15.6cmを測る。

1016～1022は土師器の高坏である。坏部が屈曲するものと椀形を呈するものとがある。脚部は屈折するものと裾広がりのものに分かれる。

1016はb－34グリッドから出土した高坏の坏部である。口径が16.4cmを測る。坏の下位に明瞭は稜線をもち、ここから屈曲し、口縁端部まで直に伸びる。端部は丸く収める。1017はb－34グリッド出土で、坏部の下位に明瞭な屈曲を持ち、屈曲部からやや外反しながら端部に至る。端部は薄く収める。復元口径は15.8cmを測る。1018はZ－29グリッドⅤc層出土した高坏の坏部である。坏部には屈曲を持たず、丸底の坏のような形態をとる。脚部との接合が断面で観察できる。復元口径は14.1cmを測る。1019はb－34グリッド出土の高坏の脚部である。剥離した部分が残る。外器面にはハケ目が残り、その後ナデ調整される。脚部内はヘラ削りにより調整される。4箇所の穿孔が屈折部付近にある。1020はa－34グリッド出土の高坏の脚部である。やや長めで開き気味である。屈曲部の下位に穿孔されている。脚部の内器面はヘラ削りにより調整される。1021はＹ－29グリッドの出土で、脚部基部から緩やかに開き端部に至る。端部はやや角張る傾向があるが、丸みを帯びる。1022はb－34グリッドで出土した土師器の高坏の脚部である。脚部は基部からやや開きながら伸びて屈折部で急激に開き、端部で丸めて収める。外器面はナデによる調整、内器面は横方向のヘラ削りを施される。底径は10.8cmを測る。

1023～1027は土師器の器台である。形態が様々で使用方法も異なるか。

1023はいわゆる鼓形器台で中位の筒部から脚部の破片である。Y－27グリッドⅤa層、Ⅳ層からの出土である。脚部には2つの穴が空いている。復元底径は14.0cmを測る。1024はa－28グリッドⅤb層から出土した筒形の器台である。外器面には横方向のカキメと縦方向のナデが、内器面には上部で指ナデ、下部はヘラ削りが施される。1025はb－34グリッド出土の器台で、上部に穴が空き、脚部は基部から直に広がる。内器面の上位はヘラ削り、下位は横方向のハケ目が施される。底部径が8.8cmを測る。1026はb－34グリッドから出土したもので、形態的に1025に似る。上部の方が大きそうであるが全体像は不明である。脚部は直にのび端部至る。内器面には指押さえ痕が残り、外器面はハケ目が施される。1027はb－34グリッド出土で、ここでは器台としているが、形態的には脚付鉢とした方がよいかもしれない。上部口径が11.6cm、器高が7.6cm、脚部底径が9.7cmを測る。調整は摩耗のため不明瞭である。

1028～1031は土師器の浅い埦である。

1028はc－34グリッド出土の埦で、摩耗して調整は不明である。口径が15.2cm、器高が5.3cmを測る。1029はY－26グリッドⅤb層から出土し、復元口径が13.8cm、器高が4.7cmを測る。口縁端部が外反し、体部に弱い屈曲部を持つ。外器面の調整はハケ目後横ナデである。外器面に赤彩が残る。1030はY－26グリッドⅤb層から出土し、復元口径が11.4cm、器高が3.7cmを測る。口縁端部が外反する。1031はb－34グリッドから出土し、復元口径16.2cm、復元器高5.0cmを測る。やや底部を意識して平らな部分を設ける。外器面下位にヘラ削りがみられる。

1032～1034は土師器の甑である。1032・1033は底部に穿孔が認められるため、全体像は不明ながら甑としている。

1032はＹ－27グリッドＶc層から出土したもので、内器面にハケ目後ナデが、外器面にタタキ痕が残る。外器面には黒斑がある。1033はＸ－26グリッドＶb層から出土し、外器面にハケ目、内器面にハケ目や指頭圧痕が見える。1034は、鉢形土器の底部に焼成前に一箇所穿孔している。e－32グリッドＶc層の出土である。口縁部は頸部からやや外反しながら開き、端部は丸く収める。胴部は上位に最大胴部径を持ち、底部はやや尖り気味である。復元口径が18.4cm、器高が12.6cm、復元最大胴部径が18.4cmを測る。外器面には薄くハケ目が残る。内器面はナデであろうか。

1035～1037は、土師器の鉢である。1037は鉢としたが、坏の可能性もある。

1035は頸部を持つもので、Ｙ－26グリッドＶc層出土である。復元口径は15.2cmを測る。口縁部は頸部からやや膨らみながら端部に至る。端部は丸めて収める。胴部は頸部下位でわずかに膨らませるもののそのまま底部へむけてすぼまる。外器面上位にハケ目、頸部以下はほとんどヘラ削りが施される。内器面は縦方向のハケ目と上位はナデが施される。1036はｂ－34グリッド出土で、復元口径は19.4cmを測り、大型である。内器面に指ナデ調整が施される。外器面に黒斑がある。1037はＶ－26グリッドＶc層から出土し、復元口径が13.2cmを測る。口縁端部をつまみ内傾させて内部に沈線を造り出している。内外器面に赤彩が施される。

1038～1049は、小型製品である。1038～1043は小型甕である。形態的にそれぞれやや異なるが口径が10cm～13cmに入り、最大胴部径が上位にある。調整は外器面にハケ目、内器面のヘラ削りがほとんどである。1043は胴部に屈曲した部分がある。

1044・1045、1048・1049は土師器の小型鉢とした。1044・1045は二重口縁のもので、ともにｂ－34グリッドから出土している。大部分ナデ調整によるものである。1044は外器面に煤が付着し、1045は外底面に黒斑がある。1048・1049は頸部から口縁部が長く伸びるもので、1048はやや内湾し、1049はそのまま直に伸びて端部を薄くして収める。1048・1049はＹ－27グリッド出土で、主にＶ層の出土である。1048は内器面が指ナデによる調整、外器面がハケ目による調整を施される。復元口径は11.7cmを測る。1049は内器面の調整がヘラ削りとナデによる。外器面はナデによる調整が施される。

1046・1047は小型壺で、形態はかなり異なる。1046は口縁部がなく胴部のみである。胴部最大径が下位にあり重心が低い。外器面はハケ目が残り、内器面は指ナデによる調整がなされる。1047は胴部最大径の２倍ほど口径を持つ。復元口径が10.0cm、器高が5.9cmを測る。器面調整は不明瞭で、ナデによるものか。

1050は一応注口土器とした。ただ、全体像が不明なため本当に注口であるかどうか怪しい。時期的にも特定しづらい。

1051は甑の底部の穿孔部分と想定している。

1052～1062は土製模造品で、手捏のものである。鉢形のもの（1052・1054・1055・1056・1057・1058・1062）、坏形のもの（1053・1060・1061）、高坏形のもの（1059）がある。

この他に土玉（1063）、勾玉（1064）、鏡（1065）がある。土玉は、径が3.1cmの球形の土に径５mmほどの穴を穿ったものである。これについては土錘の一種ともいわれる。勾玉は、形がややひねており、鏡は形代として祭祀的な行為に使用されたのであろう。

石器としては、1066と1067がある。1066はｂ－31グリッドから出土し、長さ15cm、幅10cm、厚み2.5cmを測る板状の石材を利用した台石である。石材は砂岩である。表面はよく磨耗し、中央部よりやや下に敲打痕が残る。1067はＹ－28Ｇから出土した砥石で上下が欠損し、側面の大部分は使用されて摩耗している。石材は石英粗面岩である。残存長15cm、最大幅7cm、最大厚み2.5cmを測る。使用痕としては横方向の研磨痕が強く残る。

第３節　古墳時代終末～古代の遺構と遺物

（１）遺構の分布状況【第184図・第185図・第248図】

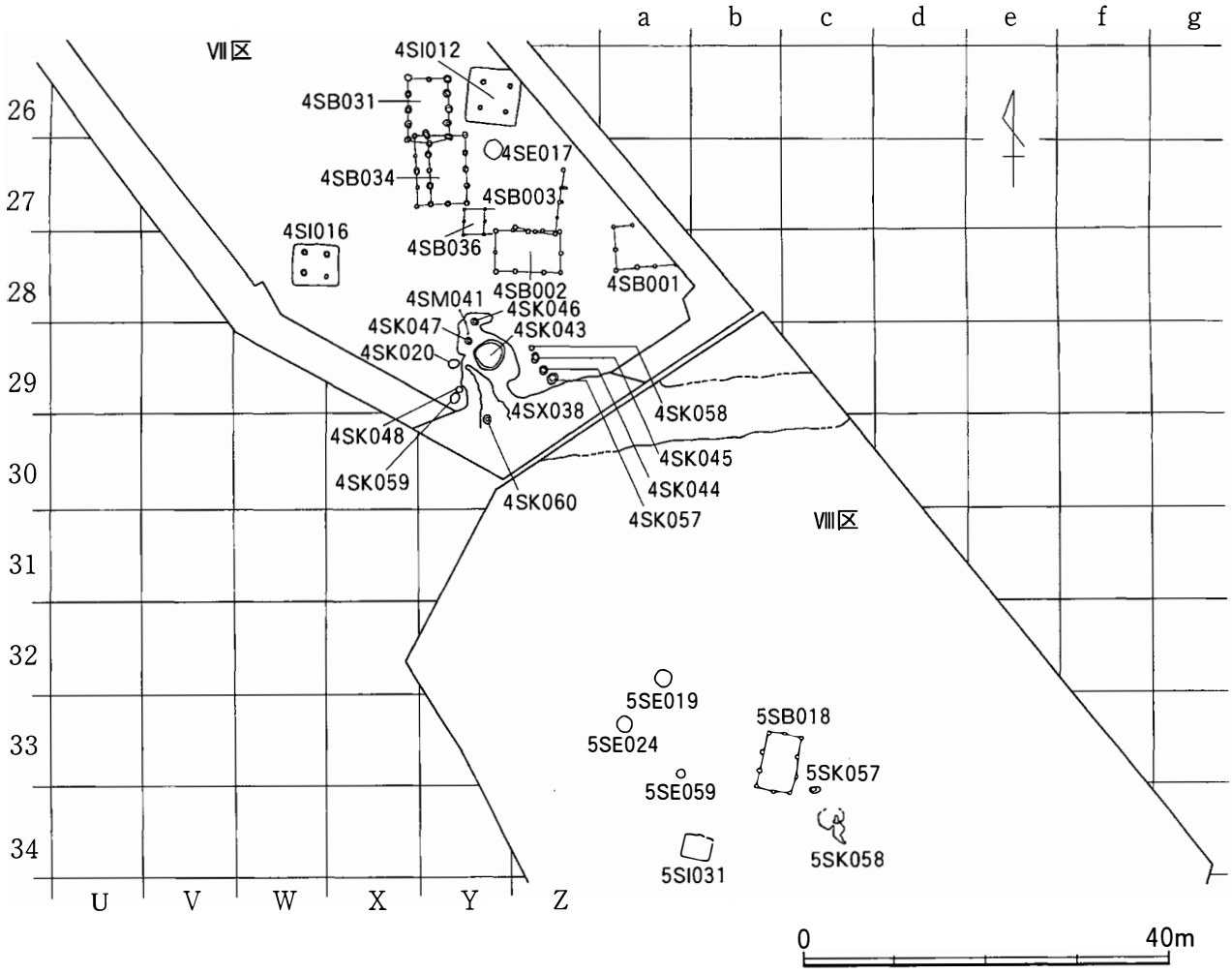
ここでは主に７世紀中葉から９世紀初めまでを対象として扱う。

この時期は古墳時代から古代社会へと時代が変革していく時期であり、集落のあり方や出土遺物にもその動きは顕著である。

ここでは第４次・第５次の調査によって出土した遺構・遺物が主であるが、一部第６次のものも含まれる。

これまで柳町遺跡では第２次調査で古代の遺構と認定した折敷粗朶を施された大畦状遺構を確認していた。この遺構の構築土に伴って、古代の土師器・須恵器、鉄鏃、帯金具（丸鞆）､墨書土器などが出土し、この近隣に古代の生活痕跡があると予想されていた。この遺構はほぼ東西方向に伸びていたが、県道山鹿立花線の拡幅調査に伴う発掘調査ではこの遺構の続きを確認していないので、それほどの延長がないか、道路の構築に伴い破壊された可能性もある。ただ、この道路自体は玉名平野条里跡に関係する畦畔であるとの想定もある。ちなみにバイパス工事に伴い水路を付け替える工事の際に立ち会った際に道路下に畦畔の跡らしきものを確認している。

第４次調査（調査Ⅶ区）ではじめて古代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡などを確認した。掘立柱建物跡は一部玉名市側の調査区まで続いていた。幾度かの建替えはあったようであるが、並び自体には規則性があり、方位を意識している。これは、竪穴住居跡にもいえることでほぼ方位に沿っている。井戸跡の１基には井戸枠と井戸側が残されていた。井戸の廃棄時期は遺物から平安期に入ってからと思われるが、これが



第184図　調査Ⅶ・Ⅷ区古代遺構配置図

この遺構群の終焉かもしれない。

また、もう一つ特筆的なこととして、井戸と溝状遺構との組合せもあり、何らかの祭祀的な遺物の出土状況もあった。

第５次調査（調査Ⅷ区）では、掘立柱建物１棟、竪穴住居跡１基、土坑、井戸跡等を検出した。こちらはⅦ区のもとは方位的には一致しない。時期も異なる可能性がある。

第６次調査（調査－１区）では、遺構自体は道路状遺構でわずかに見られるだけで、この遺構は10世紀以降まで落ちるかもしれない。

（２）掘立柱建物跡と柱

第４次調査（調査Ⅶ区）ではＷ－26グリッドからａ－28グリッドにかけて柱跡が広がり、その中から６棟の建物を想定することができた。玉名市側でも数棟確認している。

また柱跡ではあるものの建物とならなかったものがかなりあった。その中には腐食した柱材が残るものあった。

第５次調査（調査Ⅷ区）では、1棟分を確認している。

○4SB001【第186図上】

調査Ⅶ区東側ａ－27グリッド～28グリッドにかけて位置する遺構である。遺構の東側が調査区外に入るため、遺構の全容は不明であるが、検出範囲より、桁行6.4m、梁行4.6m の（３＋α）間×２間の東西棟建物である。桁行方向はＮ－83°－Ｅである。柱間寸法は桁行Ｐ２～Ｐ１で2.1m、桁行Ｐ４～Ｐ７で2.3m＋2.1m＋2.1m である。梁行Ｐ２～Ｐ４は2.4m＋2.2m である。柱穴は確認面で直径36～55cm、深さ14～34cm を測る。柱材の一部が腐食しながらも柱穴Ｐ４・Ｐ７以外の全ての柱穴に残り、柱痕跡は全て確認できた。

Ｐ６の柱材は樹種同定によれば、カヤもしくはイチイ、Ｐ２・３・５の柱材は針葉樹までは確認できている。

柱穴の掘り方埋土は確認面がⅥ層で、その層と対照的な黒褐色を呈する硬くしまった粘質土である。柱痕跡に入った土はやや灰色のかかった暗褐色を呈する粘性土である。柱材の腐食とともに徐々に進入してきたのであろう。

○4SB002【第186図下】

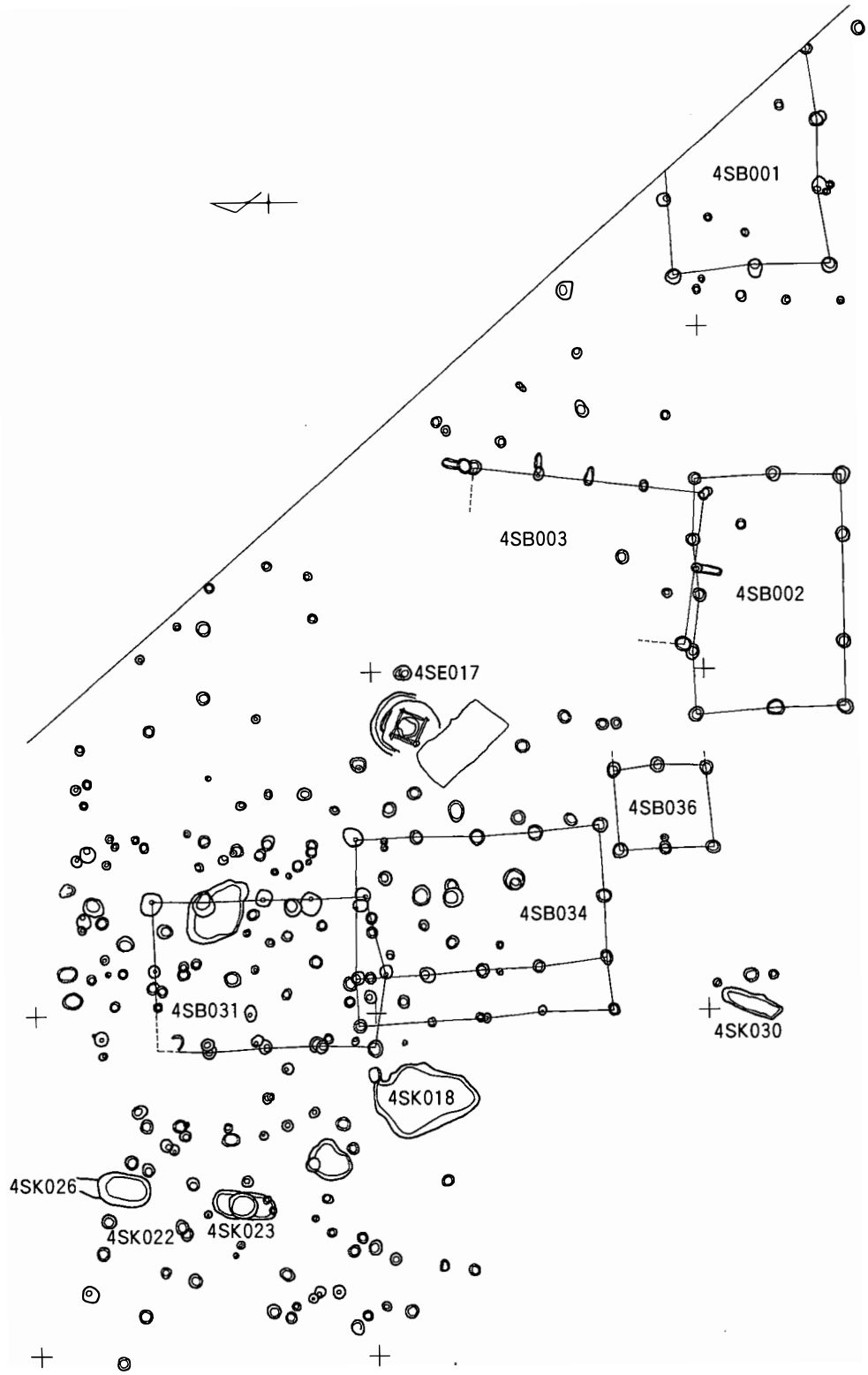
Ｙ－28グリッド～Ｚ－28グリッドにかけて位置する遺構で、4SB003・4SI029と重複している。桁行6.9m、梁行4.4m の４間×２間の東西棟建物である。桁行方向はＮ－90°－Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ５～Ｐ１で1.9m＋1.6m＋1.7m＋1.8m、桁行Ｐ７～P10で1.9m＋3.2m＋1.8m である。梁行Ｐ５～Ｐ７は2.2m の等間隔、梁行Ｐ１～P10は2.3m＋2.1m である。柱穴は、確認面では直径36～50cm、深さ11～33cm を測る。4SB001と同様に柱材の一部が柱穴Ｐ１・Ｐ７・Ｐ８以外の全てに残り、柱痕跡として確認できた。

柱穴の掘り方埋土は黒色を呈する土がほとんどでＶｂ層に近い色である。柱痕跡もしくは木質のやせた隙間部分では、柱の木質が腐食した後に入り込んだ土層で埋まっており、やや灰色がかった粘性土である。

Ｐ２・５・９の柱材の樹種同定ではアワブキ属として、P10の柱材は広葉樹として、その他の柱材は針葉樹であることを確認した。

○4SB003【第187図上】

Ｚ－27グリッドに位置する遺構で、4SB002と重複している。調査工程上時間がなく、遺構の北西部が未調



第185図　調査Ⅶ区古代掘立柱建物跡等集中域実測図

査のため全容は不明であるが、検出範囲から推定すると、桁行6.9m、梁行4.4mの４間×２間の南北に伸びる建物である。桁行方向はＮ－６°－Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ７～Ｐ３で1.9m＋1.5m＋1.6m＋1.8mである。梁行Ｐ３～Ｐ１は2.2mの等間隔である。柱穴は、確認面で直径24～40cm、深さ11～18cmを測る。柱痕跡は全て確認できた。

Ｐ３の柱材の樹種同定結果、針葉樹まではわかった。

柱穴の掘り方の埋土は、黒褐色を呈する粘質土で柱痕跡に入る土もほとんど同じである。

○4SB031【第187図下】

Ｘ－26グリッド～Ｙ－26グリッドにかけて位置する遺構で、4SB034・4SX021と重複している。桁行6.3m、梁行4.5mの４間×２間の南北棟建物である。桁行方向はＮ－１°－Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ10～Ｐ６で1.5m＋1.8m＋1.4m＋1.6m、桁行Ｐ１～Ｐ４で1.7m＋1.7m＋1.5mである。梁行Ｐ10～Ｐ11は2.0m、梁行Ｐ６～Ｐ４は2.4m＋2.2mである。柱穴は、確認面で直径34～66cm、深さ19～55cmを測る。柱痕跡は全て確認できた。

埋土は黒褐色を呈する粘性土できめが細かくよく締まっている。柱痕跡に入る土も同じく黒褐色を呈し、わずかに焼土や炭化物を含む。

○4SB034【第188図】

Ｙ－26グリッド～Ｙ－27グリッドにかけて位置する遺構で、4SB031・4SI011・4SX010と重複している。桁行7.6m、梁行5.5mの４間×２間の西面庇南北棟建物である。桁行方向はＮ－１°－Ｗである。柱間寸法は桁行Ｐ13～Ｐ17の庇部分で2.4m＋1.7m＋1.7m＋2.2m、桁行Ｐ３～Ｐ７で2.0m＋1.8m＋1.7m＋2.0m、桁行Ｐ１～Ｐ９で1.8m＋1.8m＋1.7m＋2.0mである。梁行Ｐ13～Ｐ１は1.4m＋2.1m＋2.0m、梁行Ｐ17～Ｐ９が1.5m＋1.8m＋2.1mと不均等である。柱穴は確認面で直径21～54cm、深さ８～59cmである。柱材の一部が、柱穴Ｐ３・Ｐ４・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ12・Ｐ13・Ｐ17に残り、柱痕跡は全て確認できた。

埋土は黒褐色を呈し、粘質土に褐色の粘土をブロック状に含む。柱痕跡は腐食した木質部がかなり残るものとわずかに残るものがあり、暗褐色から灰褐色の土が入り込んでいた。

［柱材］【第189図】

柱穴Ｐ３・Ｐ４・Ｐ７・Ｐ12では他の掘立柱建物の柱材に比べて、柱材は比較的よく残っていた。そのうちの３本を図化した。

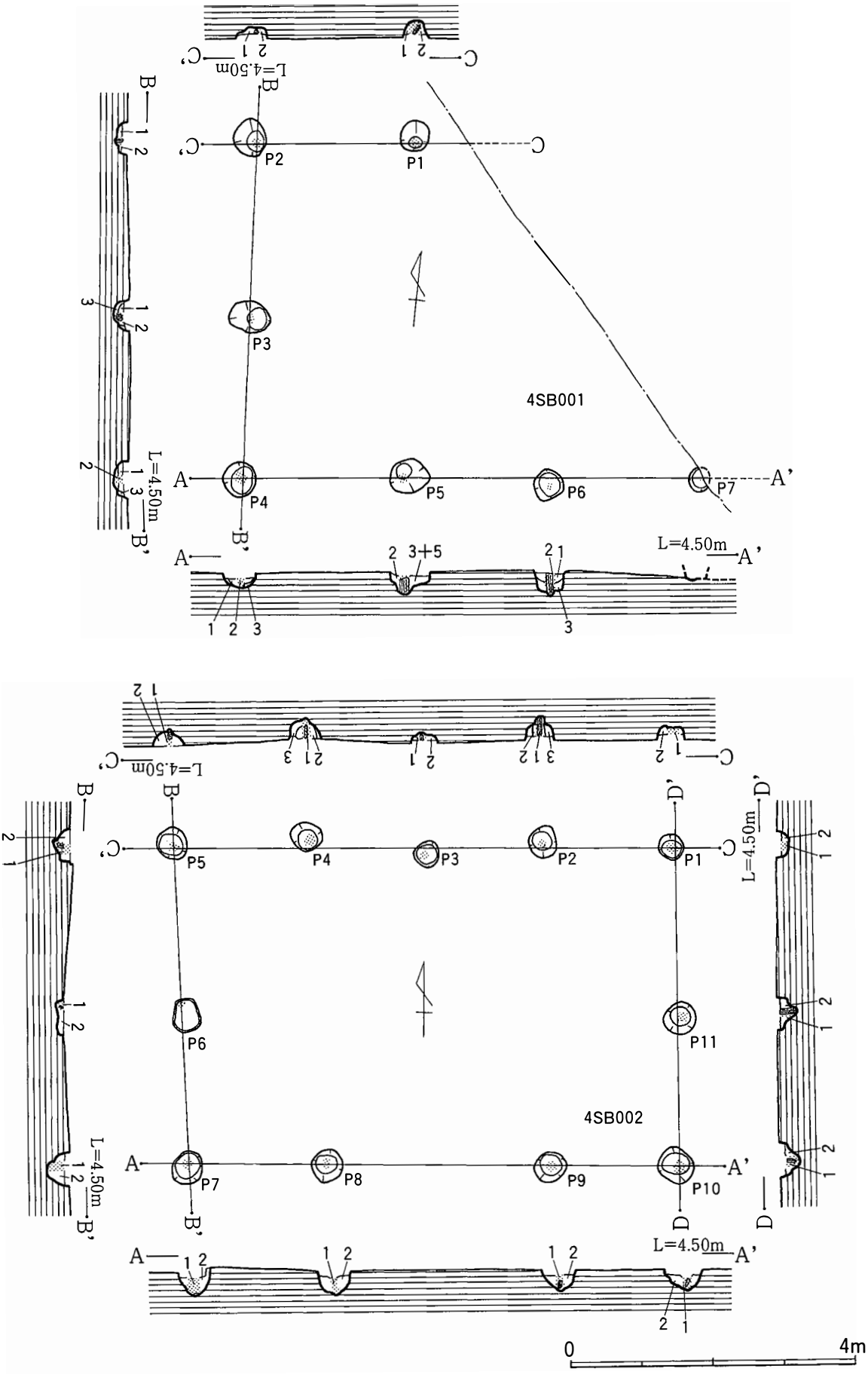
1068はＰ２の柱材で、保存処理を行った際の分析によると樹種はマキ科マキ属イヌマキである。一木を利用し先端には加工したときの痕か、伐採の際に斧痕が残っている。残存部分での最大径は11cmである。

1069はＰ４の柱材である。腐食部分が多く本来の径は測定できないが、残存の最大径は11.1cmである。

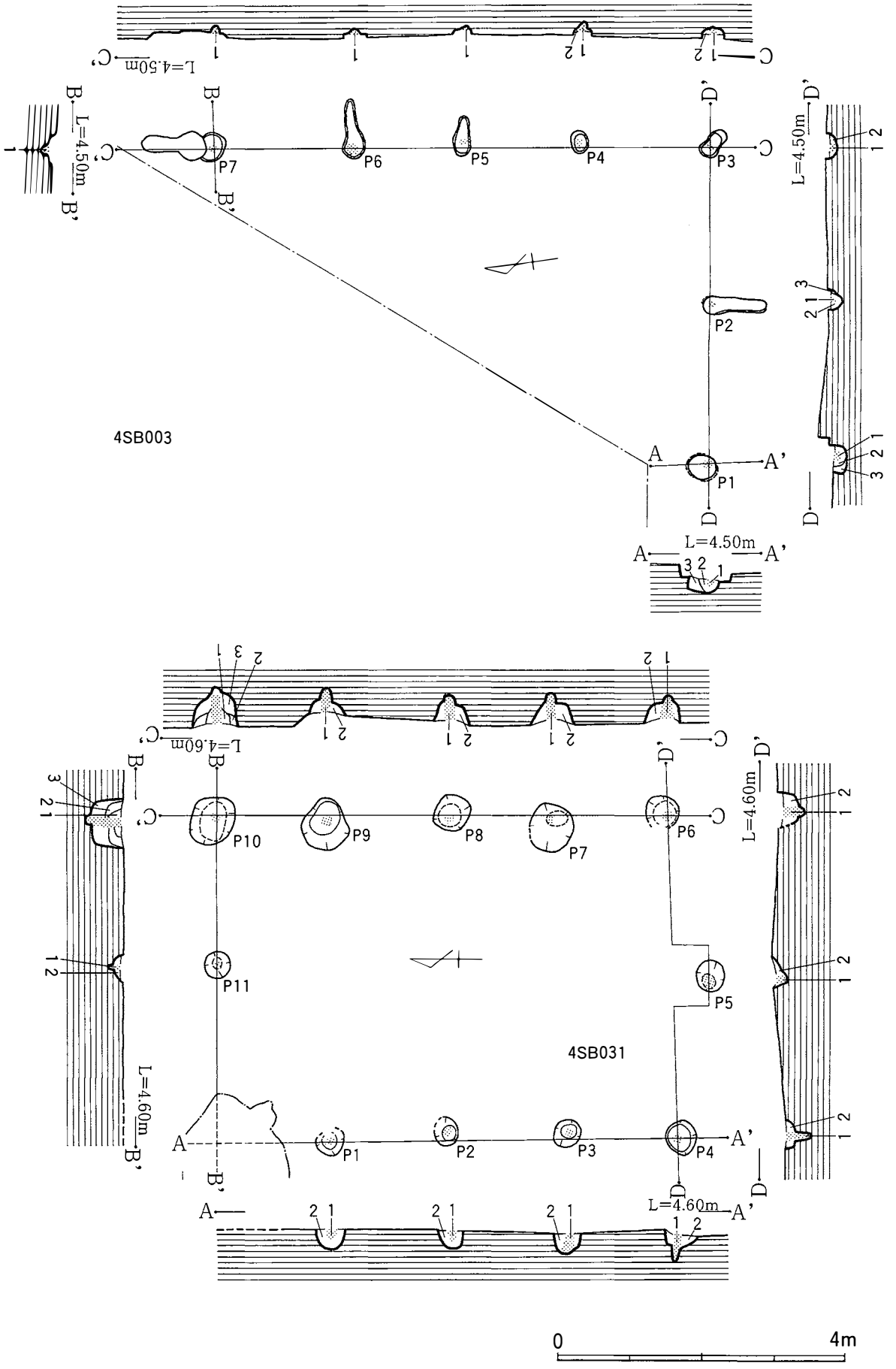
1070はＰ３の柱材で、保存処理の際の樹種同定ではイチイ科カヤ属カヤである。この材が一番良く残っている。先端には伐採痕か加工痕がある。

この他にも腐食しながらも柱材は残っていた。ただ、Ｐ１では柱材は確認できなかったが、円盤状の木製品が痕跡をとどめていた。図化をしたものの薄く残っていたので、取り上げられる際に破砕してしまい形を留めることができなかった。径は約20cmを測った。礎板の可能性があるが、この柱穴だけであり疑問が残る。

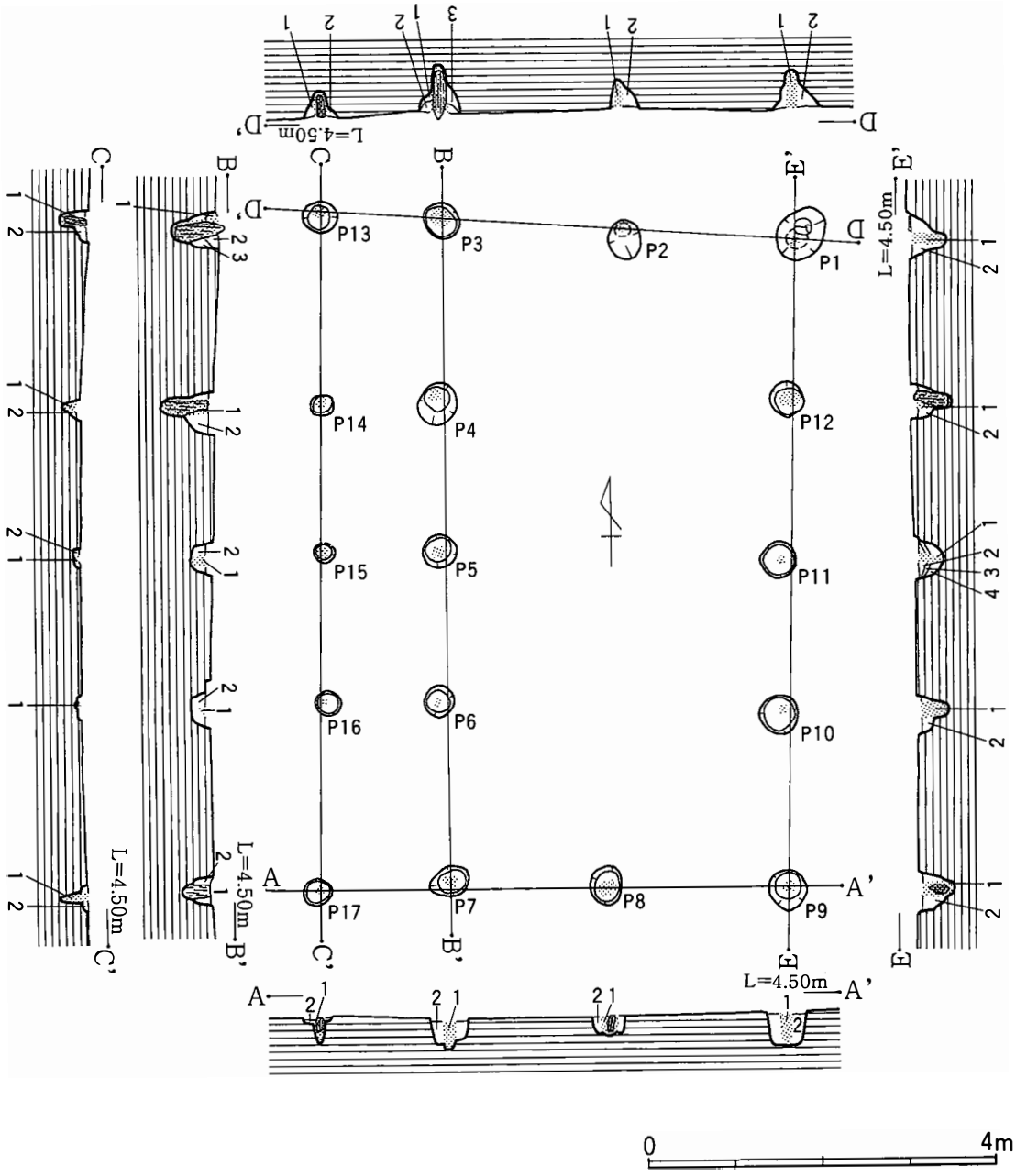
また、Ｐ12・Ｐ９の柱材はカヤ、Ｐ13はマキ属と樹種同定され、他のものは針葉樹までは同定されている。



第186図　4SB001・4SB002実測図



第187図　4SB003・4SB031実測図



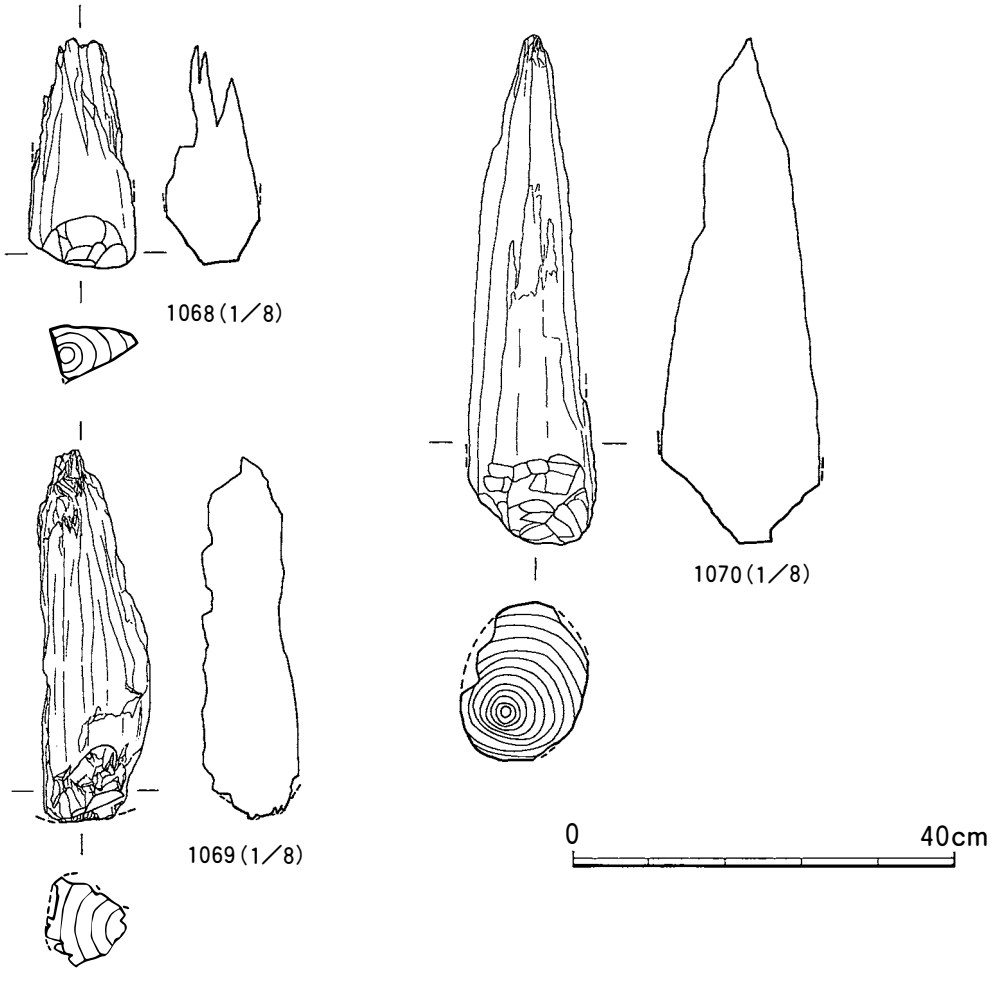
第188図　4SB034実測図

○4SB036【第190図】

Y－27グリッドに位置する遺構で、4SX010・4SX025と重複している。調査工程上時間がなく、遺構東部が未調査のため全容は不明であるが、検出範囲より、桁行2.5m、梁行2.8mの（1）間×2間の東西棟建物である。桁行方向はN－85°－Eである。柱間寸法は桁行P1～P4で2.5m、桁行P3～P6で2.4mである。梁行P1～P3は1.4mの等間隔、梁行P4～P6は1.4m＋1.3mである。柱穴は確認面で直径31～49cm、深さ23～60cmを測る。柱痕跡は全て確認できた。

柱材を含むものが2本あり、そのうちのP2の腐食した柱材は樹種同定の結果、コナラ属コナラ節であった。

柱穴の掘り方の埋土は黒褐色を呈する粘質土で、茶色の粒子、炭化物・焼土を含む。柱痕跡には柔らかい灰色の粘質土が入る。



第189図　4SB034残存柱材実測図

○5SB018【第191図】

b・c－33グリッド～34グリッドにかけて位置する遺構である。桁行6.1m、梁行3.6m の３間×２間の南北棟建物である。桁行方向は N－11°－E である。柱間寸法は、桁行Ｐ２～Ｐ５で2.1m＋2.1m＋2.0m、桁行P10～Ｐ７で2.2m＋2.0m＋1.8m である。梁行Ｐ２～P10は1.8m の等間隔、梁行Ｐ５～Ｐ７は1.8m＋1.9m である。

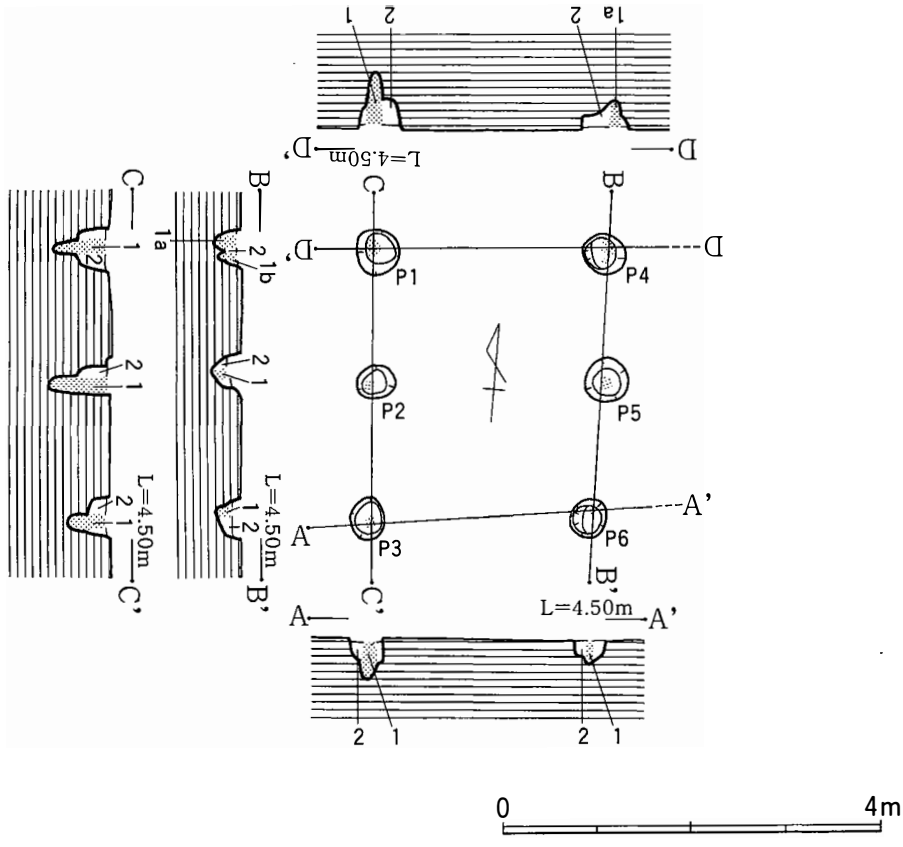
柱穴は、確認面で直径39～55cm、深さ29～52cm を測る。柱痕跡は柱穴Ｐ２・Ｐ５以外全てで確認できた。

掘り方の埋土は黒褐色を呈する粘質土で、縄文時代の遺物をを含む。柱痕跡にはやや柔らかい黒色の粘性土が入る。

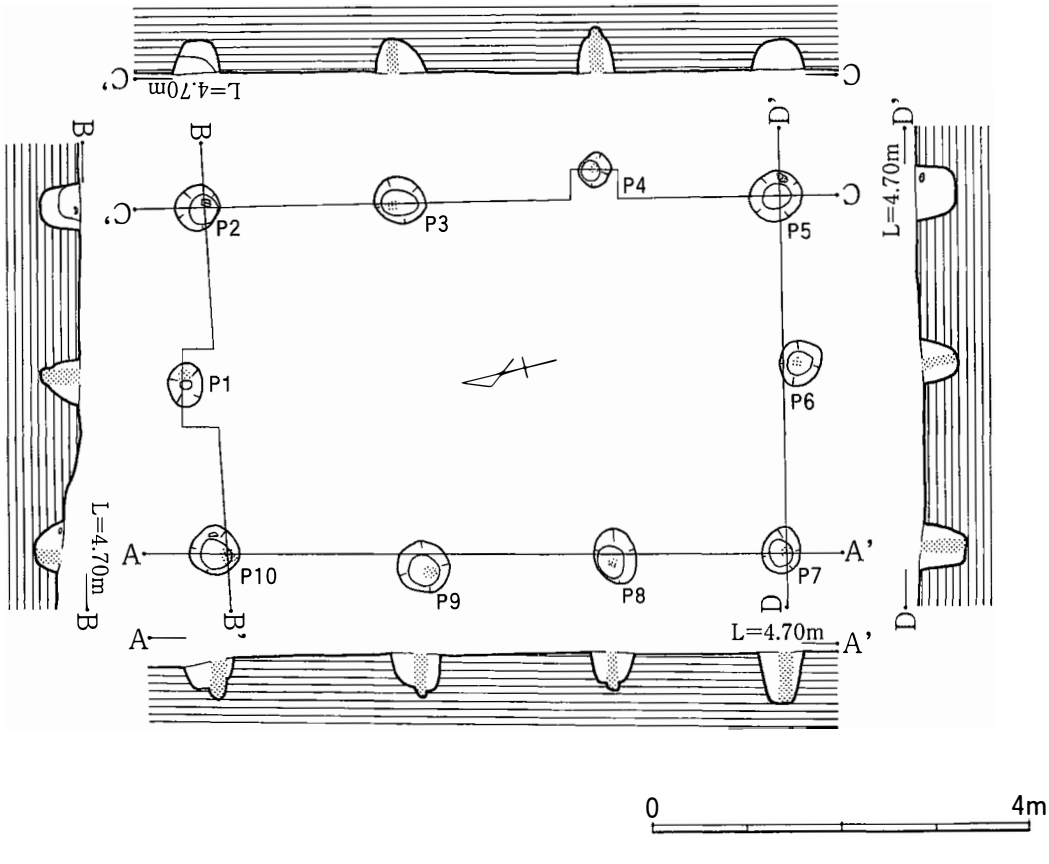
［出土遺物］

柱穴の埋土中から遺物の出土があったのでここでまとめて述べる。ただ、これらの遺物はこの遺構の存在する微高地の堆積層の中に縄文時代晩期の遺物を含む層があり、柱を立てる際掘削した土に入っていたものが埋め戻し土に混入したものと判断している。したがって、いずれものこの掘立柱建物跡の構築時期のものではないと考えているが遺物の例としてここで記した。

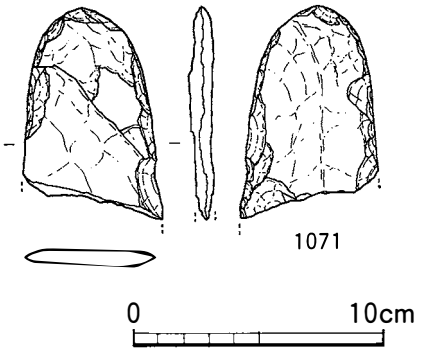
第32図の127は、壺の屈曲部である。縄文時代の遺物である。柱穴の一つから出土した。第192図の1071は、安山岩製の打製石斧である。柱穴 P10の半裁中に出土したもので、この遺構に伴う可能性は少ないが一応記す。刃部は欠損している。縦長の剥片に両側から敲打による剥離を行い成形している。頭部にも若干の加工を行っている。残存長が8.2cm、最大幅5.2cm を測る。



第190図　4SB036実測図



第191図　5SB018実測図



第192図　5SB018柱掘り方内出土石器実測図

（３）竪穴住居跡と出土遺物

○4SI012【第193図】

Y－26グリッド～Z－26グリッドにかけて位置し、4SI013と重複している。住居跡の規模は、長軸5.85m、短軸5.65m、床面積33.1㎡で南北にわずかに長い方形を呈している。長軸方位はN－８°－Eである。壁高は８～17cmを残している。床面には計９個の柱穴を検出したが、P1、P2、P3、P４を主柱穴とする４本柱の竪穴住居を想定できる。柱跡は床面から平均60cm掘り下げている。床面に顕著な硬化面は認められなかった。

遺構の北側から西側にかけて溝状の痕跡があったが、性格は不明である。ただ、この遺構の作成時の床面成形と関係する可能性もある。

壁際に作り付けのカマドの痕跡やそれを破壊したような粘土なども検出していない。しかし、埋土中に焼土がかなり認められ、溝中に多量の焼土と粘土粒を確認したのでその部分にカマドなどの屋内で火を利用する施設があったた可能性もある。

埋土は、基本的に３層に分層できる。１層が灰黄褐色（10YR4/2）を呈する砂質土でやや焼土が混じる。２層は暗褐色（10YR3/3）を呈する土で焼土粒・炭化物をかなり含む。３層はほぼ床面で暗褐色（10YR3/3）を呈する粘質土で、焼土粒をわずかに含む。

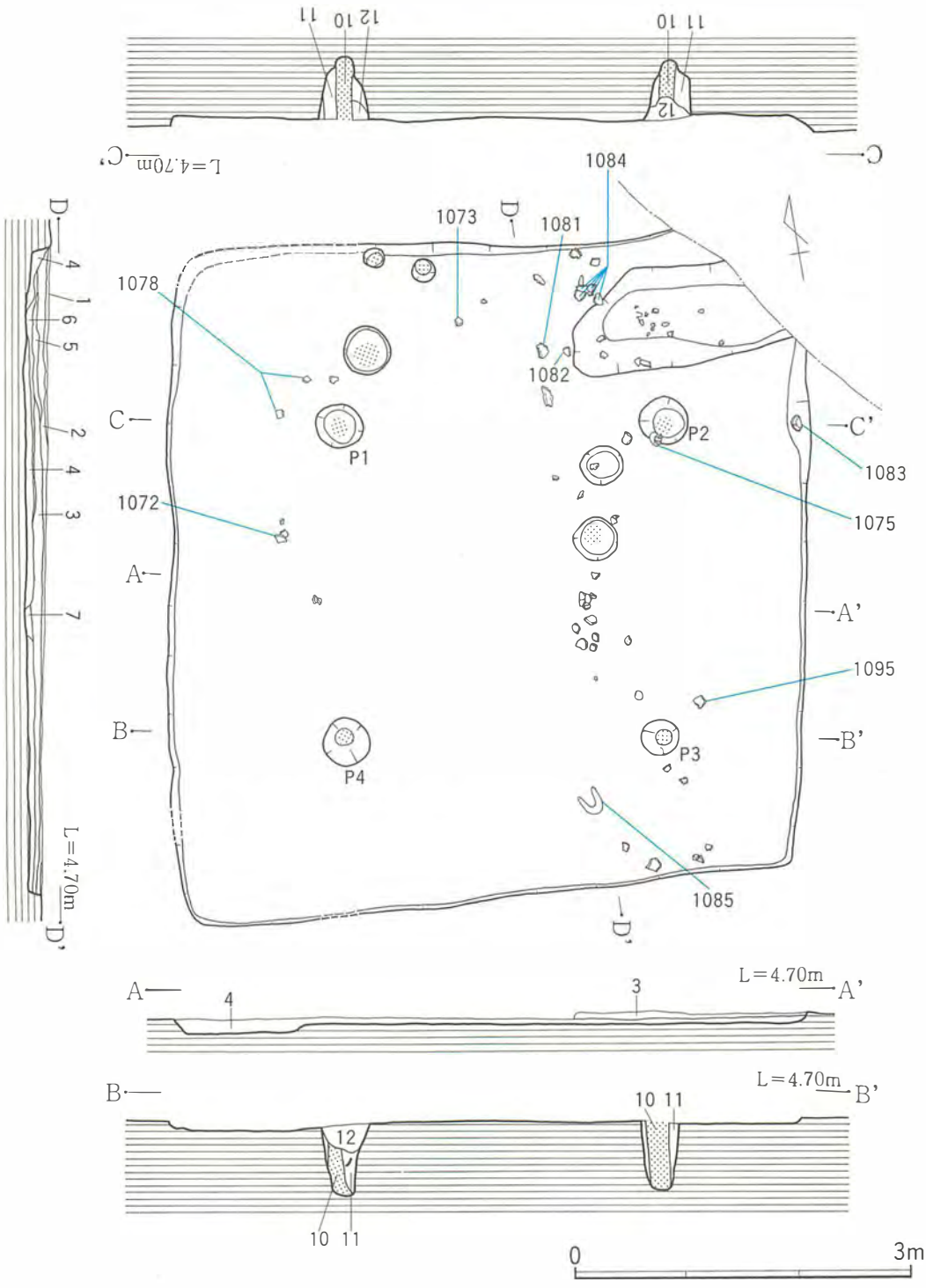
［出土遺物］【第194図・第195図】

第194図に示した遺物はこの住居跡の時期に近いものであろうが、第195図の土器は重複する古墳時代前期の遺物である。これは重複する4SI013のためか、その包含層中の遺物がかなり混入していると想定できる。

1072・1073は須恵器の蓋である。ツマミの有無は欠損により不明である。復元口径は11.8cmを測る。1073も破片で全体形はつかめないが、復元口径は15.2cmを測り、口径の差が大きい。こちらもツマミの有無は不明である。どちらも返しが退化しているが、1073の方の痕跡化が著しい。1074・1075は須恵器の坏である。1074は底部から体部の立ち上がりは急で、復元口径が13.4cmを測る。1075は、復元口径12.9cmを測り、底径が口径に比べて半分ほどで体部の立ち上がりが緩やかである。この２つは時期差を示すもので、1074の方が古い。1076は、須恵器の高坏である。1077は土師質の土器で、破片のため不明確であるが瓦器椀の可能性もある。1078は焼きの甘い須恵質の土器で外器面に櫛上工具による刺突文がある。器形は小型の鉢である。1079は瓶の口縁部である。口径は小さく立ち上がりは直である。1080～1082は土師器の甕である。1080は口縁部と胴部の差がほとんどなく、甕というより甑の可能性がある。1081と1082は口縁部が外湾し、胴部が直に落ちるものである。内器面はヘラ削り、外器面は縦方向のハケ目である。1082は外器面の調整が頸部下で明瞭に分けられ、稜線がみられる。これらの口縁部の形態差は若干の時期差を示す。いずれも古代のものである。1084は土師器の坏としておく。外器面上部に丁寧な横方向のミガキがかけられている。内器面は放射状のミガキがかけられている。外底面はヘラ削りされている。須恵器の模倣土器である可能性がある。

1083は須恵質の硯である。全体の２分の１ほどしか残っていないが、住居跡の壁面に転倒し張り付くようにして出土した。残された箇所から判断して、図化したように脚部には方形の透かしが４箇所ほど存在した可能性がある。上面の陸部は良く使用され、磨耗の度合いが大きい。出土直後には墨痕を若干認めた。海部は縁から5mmほどの幅で、縁の高さから5mmほどである。上面観では正円ではなく、わずかに歪みがある。

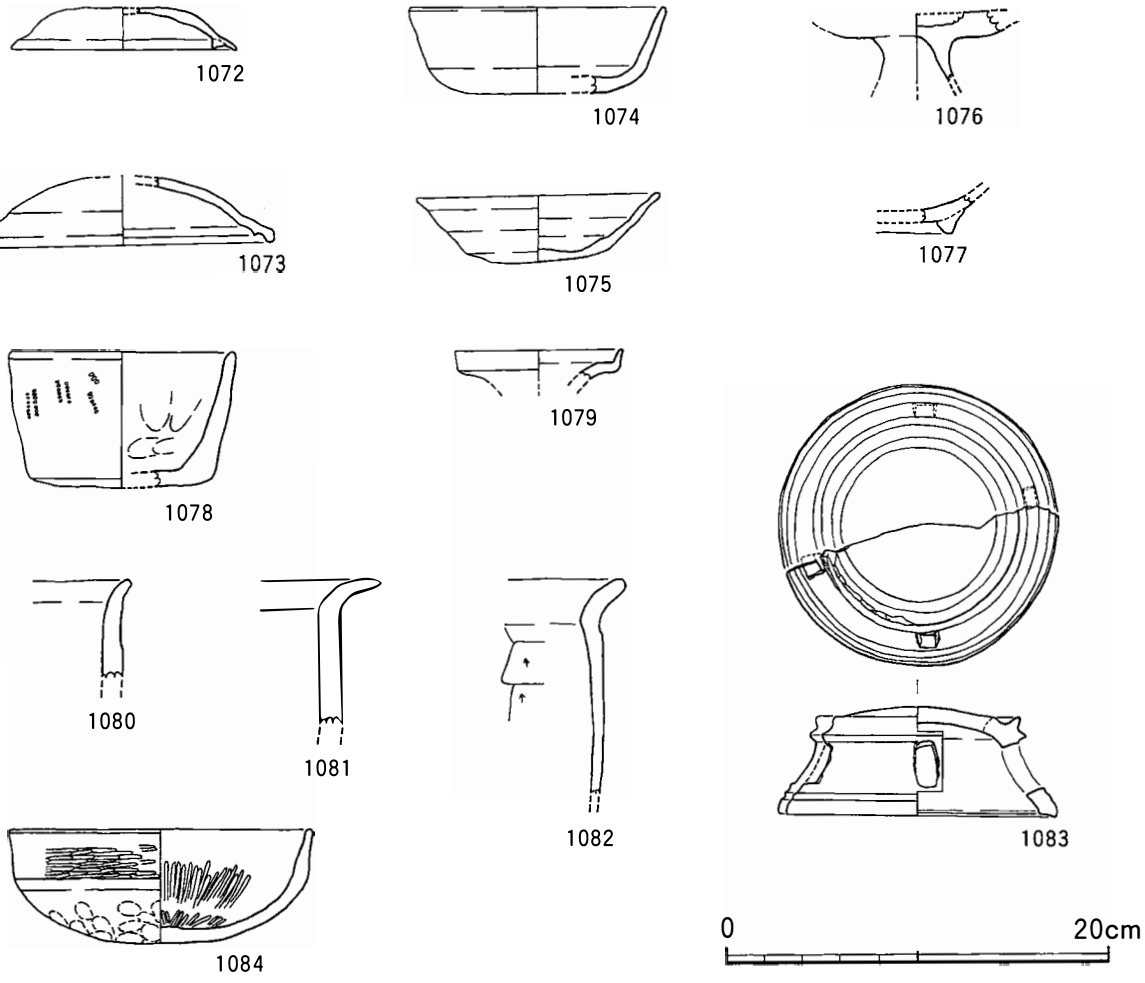
1085は鉄製鋤先である。出土時はまだこの遺構を確認していなかったため途中で取り上げた。その後で遺

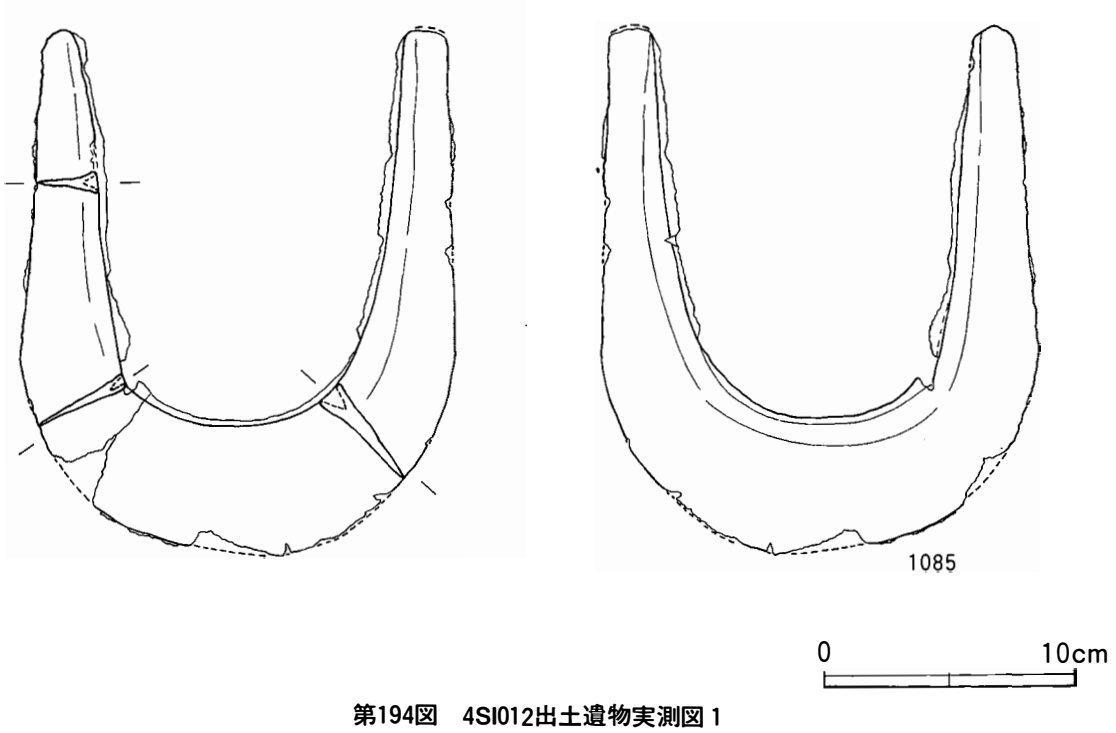


第193図　4SI012実測図

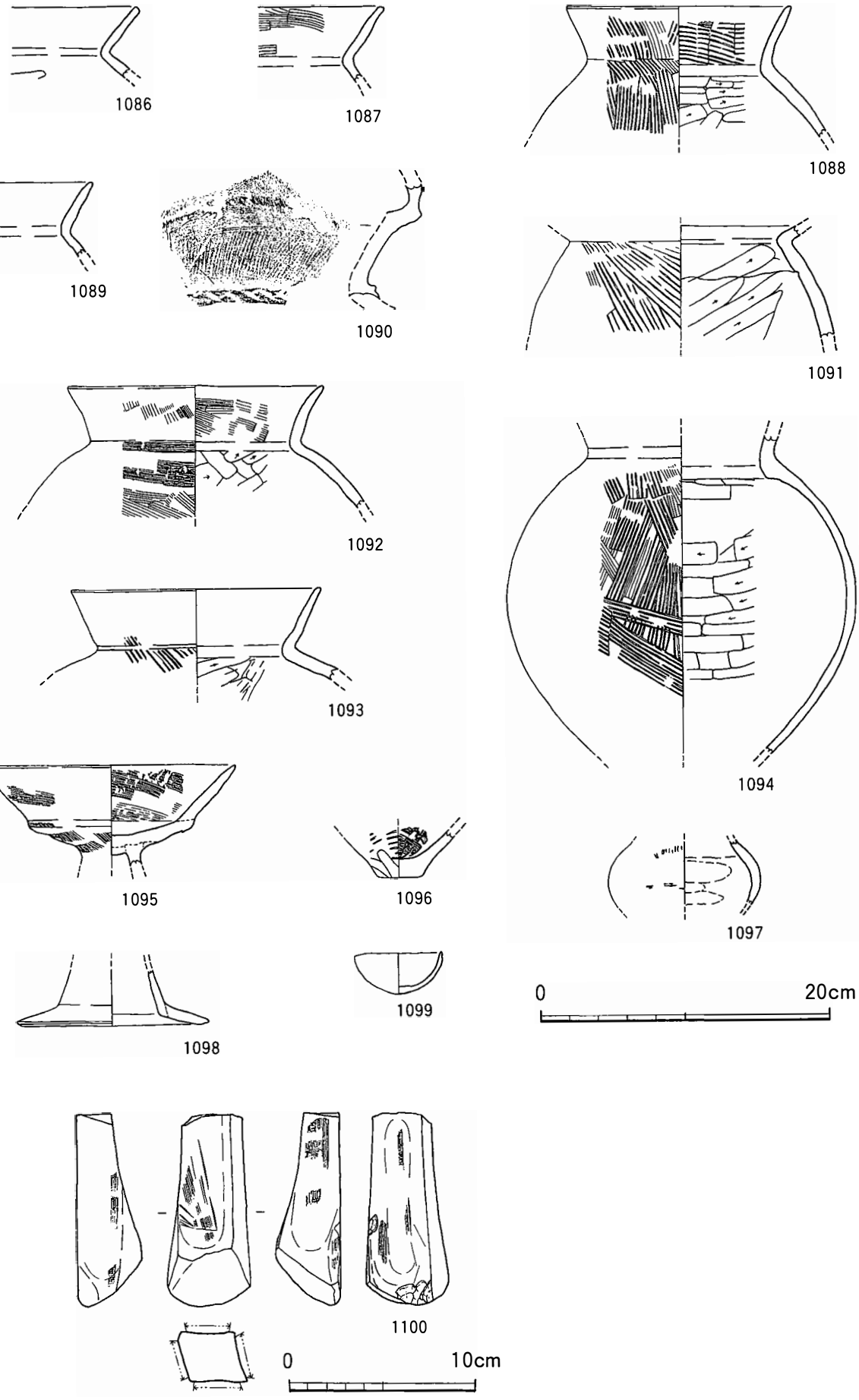
構を確認し、出土位置を復元した。床面から少し浮いた状態であった。出土した当初は厚く土が巻いており、蹄鉄と間違えた。周囲の遺物から鉄製の鋤先と判断した。整理過程で錆と土を除去したが、土と錆が一体となっており除去するのに時間を要した。除去した結果、本体の形状が観察可能となった。平面形はほぼきれいなU字形を呈し、先の刃部幅が5cmほどで、上部の方は2～2.5cmほどである。木質は残っていなかったが、装着部の挟み込み部は1cm前後開いている。刃部の角度は10度ほどである。

第195図の1086・1087・1088・1089・1091・1092は古墳時代前期の甕である。1086は口縁部がまっすぐ口唇部に伸び、先が薄くなる。やや付け根付近が膨らむ名残がある。1087も同様に口唇部に伸びる。口唇部は





第194図　4SI012出土遺物実測図１



第195図　4SI012出土遺物実測図 2

やや薄くなり丸まる。口縁内部は横方向のハケ目が残る。1088は胴部の張りが強く、頸部からより直に口縁部が立ち上がり、端部は尖り気味であるため壺の形態にもみえる。口縁内部は横方向のハケ目が施される。外器面は縦方向のハケ目が残る。内器面には横方向のヘラ削りが施される。1089は口縁部のみの破片で1088と同様である。1091は頸部から胴部上位の破片である。口縁部が頸部からかなり開く器形で、二重口縁の甕の可能性がある。外器面には斜め方向のハケ目、内器面には斜め方向のヘラ削りが施される。1092の口縁部は頸部から直気味に伸び、端部近くで外反する。内器面は横方向のハケ目、内器面は縦方向のハケ目が施される。胴部は頸部から大きく張り出す。外器面は横方向のハケ目が施される。内器面はヘラ削りが施される。

1090は頸部から口縁部の一部が残る二重口縁壺である。頸部には刻み目を入れた貼り付け突帯がある。上位で屈曲し、そこにも刻み目が施される。1096は狭い平底の壺の底部で、外器面には上部にタタキ、下にヘラ削りが施される。内器面は細かいハケ調整がみえる。1097は小型壺の胴部片である。外器面にはハケ目がわずかに残る。内器面には横方向の指ナデが施される。

1095と1098は高坏である。1095は、坏部が二分するもので、口縁端部が尖り気味で坏部下部との接合面が明瞭な稜線を形成する。坏部と脚部の接合も断面観察から分かる。内器面・外器面ともハケ目が残る。1098は高坏の脚部のみで、裾部付近でかなり開きながら屈曲し広くなって終わる。1098は高坏の脚部で、脚柱径は広く、裾部が急激に屈曲して広がる。1099は鉢形の土製模造品である。

1100は砥石である。石材は凝灰岩で、4面ともかなり使いこまれている。この所属時期ははっきりしないが、古代のものとしておく。

○4SI016【第196図】

W－28グリッド～X－28グリッドにかけて位置し、古墳時代の土坑である4SK006と重複している。住居跡の規模は、長軸4.94m、短軸4.42m、床面積21.8㎡を測り、東西に長い長方形を呈している。長軸方位は、N－91°－Wである。壁高は、5～10cmを残している。床面には4個の柱穴が検出され、この配列から4本柱の竪穴住居が想定できる。

遺構を検出したのはⅤc層を掘り下げる過程で、この部分に砂質分が多く確認が当初十分にできず、かなり上面をとばしており、一部ではほぼ床面まで掘り下げている。硬化面は確認できなかった。埋土確認ベルトでは、土層上面に砂層があり、その撹拌した状況が認められた。焼土は4層で見られ、カマドの土の可能性がある粘土粒子も見られることからカマドは破壊されたのであろう。

4SK006を切っているが、床面にはその遺物は非常に少なかった。遺物からの時期判定は難しいが、少なくとも奈良時代以降であろう。

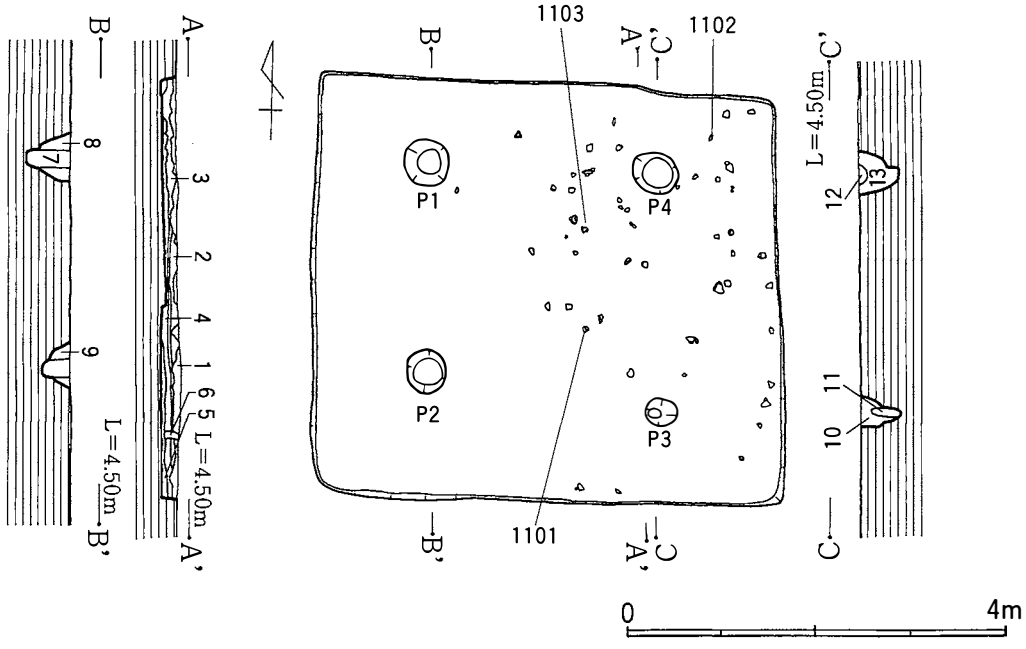
埋土は上面の砂層を除けば大きく2層に分けられる。①層は黒褐色（10YR3/3）を呈する粘質土である。②層は黒褐色（10YR3/1）を呈し、粘土質で堅く締まり、鉄分が筋状に沈殿している。白っぽい粘土とやわらかい茶色の粒を含む。

［出土遺物］【第197図】

この遺構に伴う遺物はもともと少なく、図化できのは須恵器の蓋が1点、高坏が1点、土師器の甕が2点、高坏が2点、小型丸底壺1点、甕形模造品が1点、甑の把手が1点である。

1101は須恵器の蓋で、輪状ツマミを持つものである。外器面は回転ヘラ削りが天井に施される。内器面はナデ調整である。荒尾窯産であろう。1102は須恵器の高坏で、坏部と脚部の接合部付近の破片である。やや脚の長いもののようである。1103は土師器の甕で頸部から先が細く短い。胴部は直に落ちる。器壁はやや厚い。内器面にヘラ削りが見える。1107は甑の把手である。手捏で作り貼り付けたものである。

この遺構に混入したものであろうが、ほぼ古墳時代前期のものも出土している。1104は甕で、口縁部が外



第196図　4SI016遺物出土状況実測図

反しながら急激に広がるものである。口唇部はやや角張る。1105は高坏である。やや古墳でも古い様相を持ち、坏部の組み合わせの接合部付近で外器面に明瞭な沈線と下の稜線が付けられている。そこからやや外反しながら直に伸びて端部は尖って終わる。調整痕として外器面にハケ目が残る。1106は高坏の脚部で、坏部がはげ落ちている。1108は小型壺で、口縁部はほぼ直に立ち上がり、口唇部は丸めて終わっている。胴部はあまり残っていないが、内器面にヘラ削りもしくは指押さえがなされている。1109は甕形土器を模倣した土製模造品である。手捏による成形で、内器面と口縁部には指押さえ痕が残る。

○5SI031【第198図】

調査Ⅷ区のa－34グリッド～b－34グリッドにかけて位置している住居跡である。住居跡の規模は、長軸1.60m、短軸1.29m、床面積20.6㎡を測り、東西にやや長い長方形を呈している。長軸方位はN－102°－Wである。壁高は12～22cmを残している。床面には2個の柱穴を検出した。これらの配置状態から2本の主柱穴をもつ住居と考えられる。柱穴は床面から50cmほどの掘削深度を測る。柱痕跡は確認できなかった。

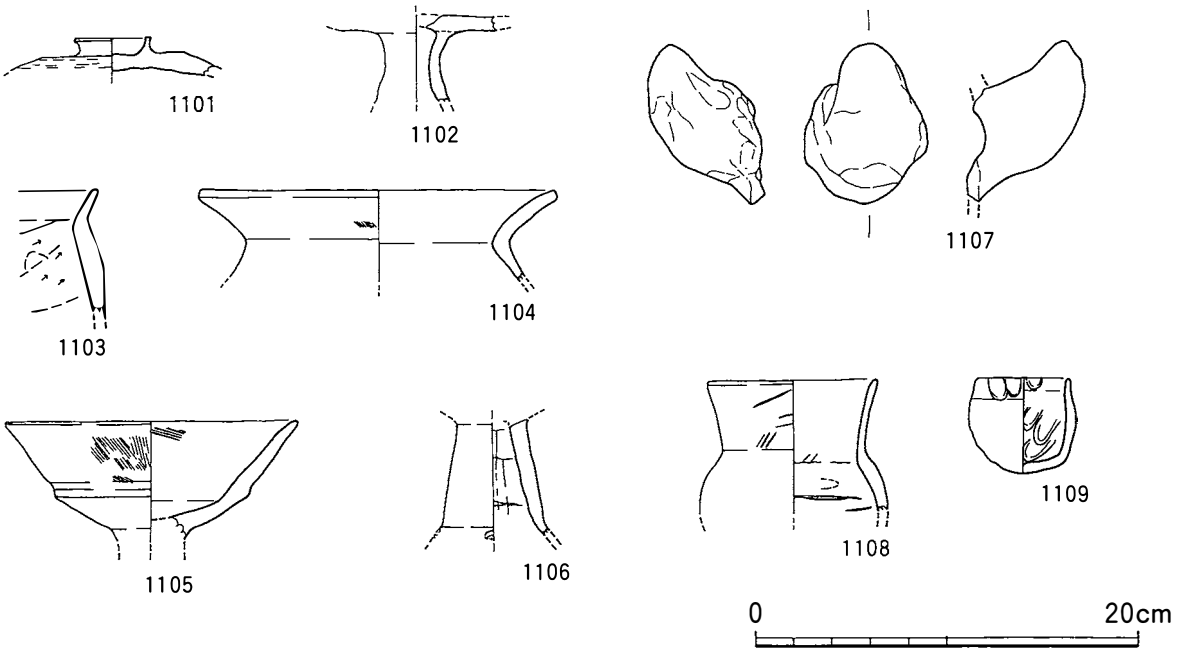
北壁ほぼ中央部にカマドが設けられ、カマドの壁面の基礎部はほぼ残っているが、一部撹乱のため削平されている。また、床面の北西からカマドにかけて焼土が堆積している。先の住居跡に比べ小型である。カマド上部は破壊され、その際に広がったと考えられる焼土・粘土粒が西側部分に広がっていた。

カマド以外の埋土は大きく2層に分けられる。色調は1層2層ともにぶい黄橙色（10YR7/2）を呈するが、微妙に色合いが異なる。また、土質は1層が肌理（粒子）細かな砂質分がやや強いのに対し、2層は粘性がやや強い。カマドでは、数層に分けられるが、焼土と埋土の両方がその中にある。

［出土遺物］【第199図】

古墳時代の遺構の中にあるため大部分は、古墳時代の遺物であるが、須恵器を数点遺構内で確認した。そのうち図化できたのは2点である。

1110は蓋である。幅広で高さの低いツマミがつく。口唇部は返しがなく、直に屈曲して端部に伸びる。口径は16.2cmを測る。ツマミはかなり平べったい。天井部の外器面にはヘラ削り痕がそのまま残る。



第197図　4SI016出土土器実測図

1111も蓋である。ツマミは1110よりやや高い。天井部外器面にはヘラ削りが残る。また器高が2.7cmと高く、口唇部は返しがなく直に伸びる。1110よりも明瞭になっている。これらの遺物は1110が８世紀末、1111が８世紀中半に比定される。

（４）井戸跡と出土遺物

○4SE017【第200図・第201図】

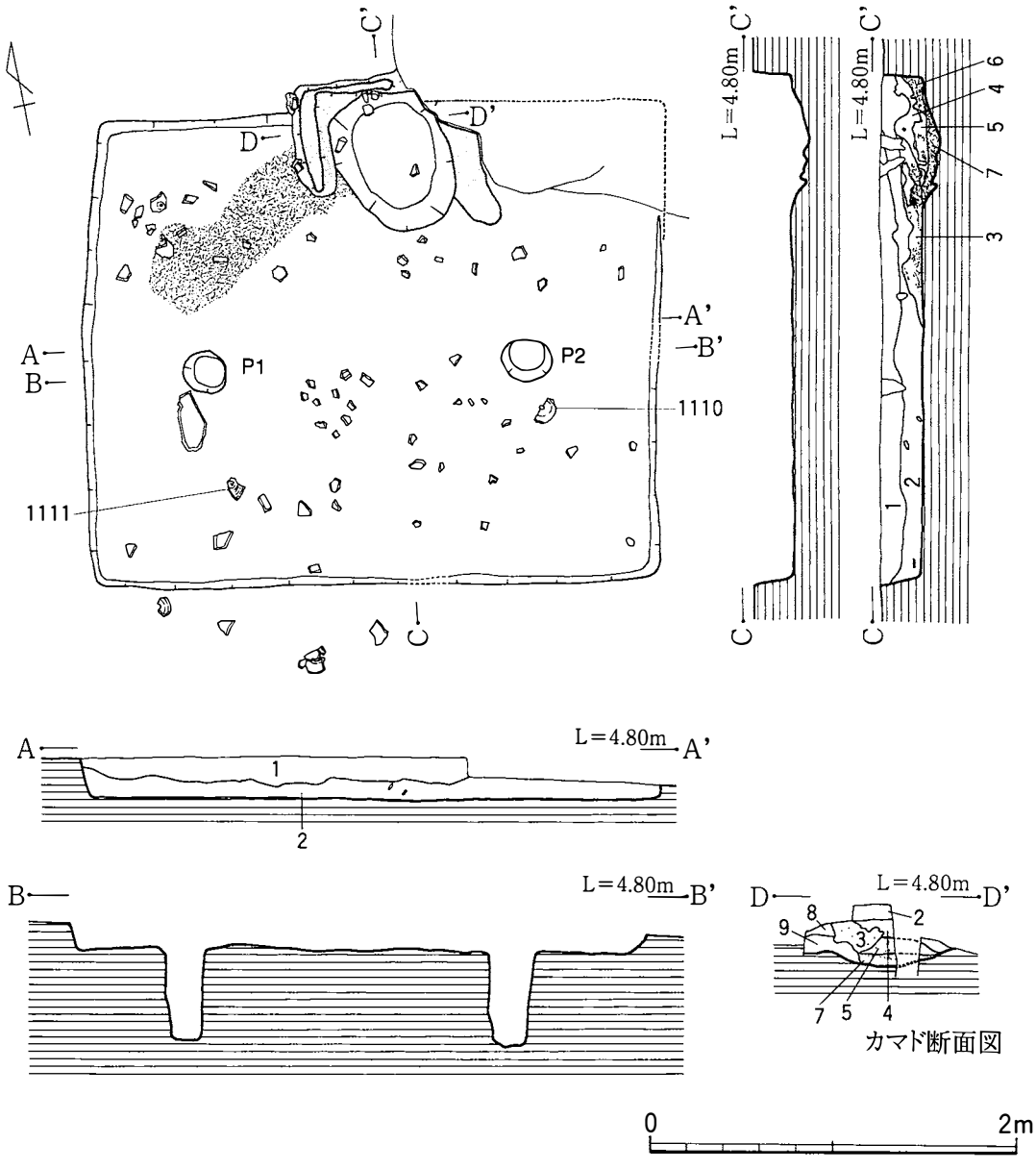
Y－27グリッドに位置する井戸跡である。掘形の平面形状は円形で当初の確認面での径が2.2m、掘削途中で1.8mを測る。遺構確認面から80cmほどのところに段を設けている。径は確認面での形よりやや小さくなって1.1mほどである。井戸の最下層まではその段から深さ2.5mを測る。

この井戸には井桁状に組み合わせた井戸側と、その中に一木刳り貫きの井戸枠が残っていた。井桁状の枠は、横板組で２段積む蒸篭形で、板の寸法は、長さ81～95cm、幅25～30cm、井筒(一木刳り貫きの井戸枠)は現在の残存状態で径55cm、深さ101cmを測る。

この井戸の生成過程を調査の際の解体課程から井戸枠と井桁状の井戸側の設置状況をみてみる。

井戸自体は水脈まで掘り下げられ、井戸枠を設置するため段が上部の３分の１付近に造られている。その段には井戸の掘り方より若干大きめのクスノキ製の一木刳り貫き井戸枠をすえ、井戸内に落ち込まないようになっていた。当時の大きさは不明であるが、現況で1.1mあるので、上部の腐食を考えるとそれ以上はあったと考えられる。その後、垂木をその周囲に井桁状に組む。まず、東西に南北方向で平行に設置し、その上に南北の位置に東西方向で平行に設置している。組合せ部に浅い抉りを設け、組み合わせている。その上に板材を蒸篭型に組み合わせている。板材の両端にはそれぞれ上下から板を組み合わせるための切込みを入れている。現状として残っていた板材は12点で、各面の下からのほぼ３枚目まで確認した。当時はまだ上まで組み合わさっていた可能性がある。

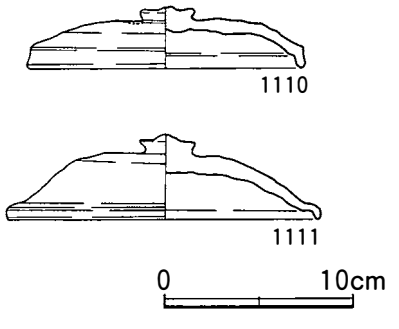
埋土は、大きく井戸枠の外と内側のものにわけられる。1層～５層までが井戸枠の外の分で、1層は黒褐色土で、一部に焼土ブロック等も含む。2層は明褐色土で、土器片等を多量に含む。3層は灰白色を呈する。4層は黒褐色を呈する粘質土である。横の垂木の下層の土でやや締まりが強く、粘性があった。



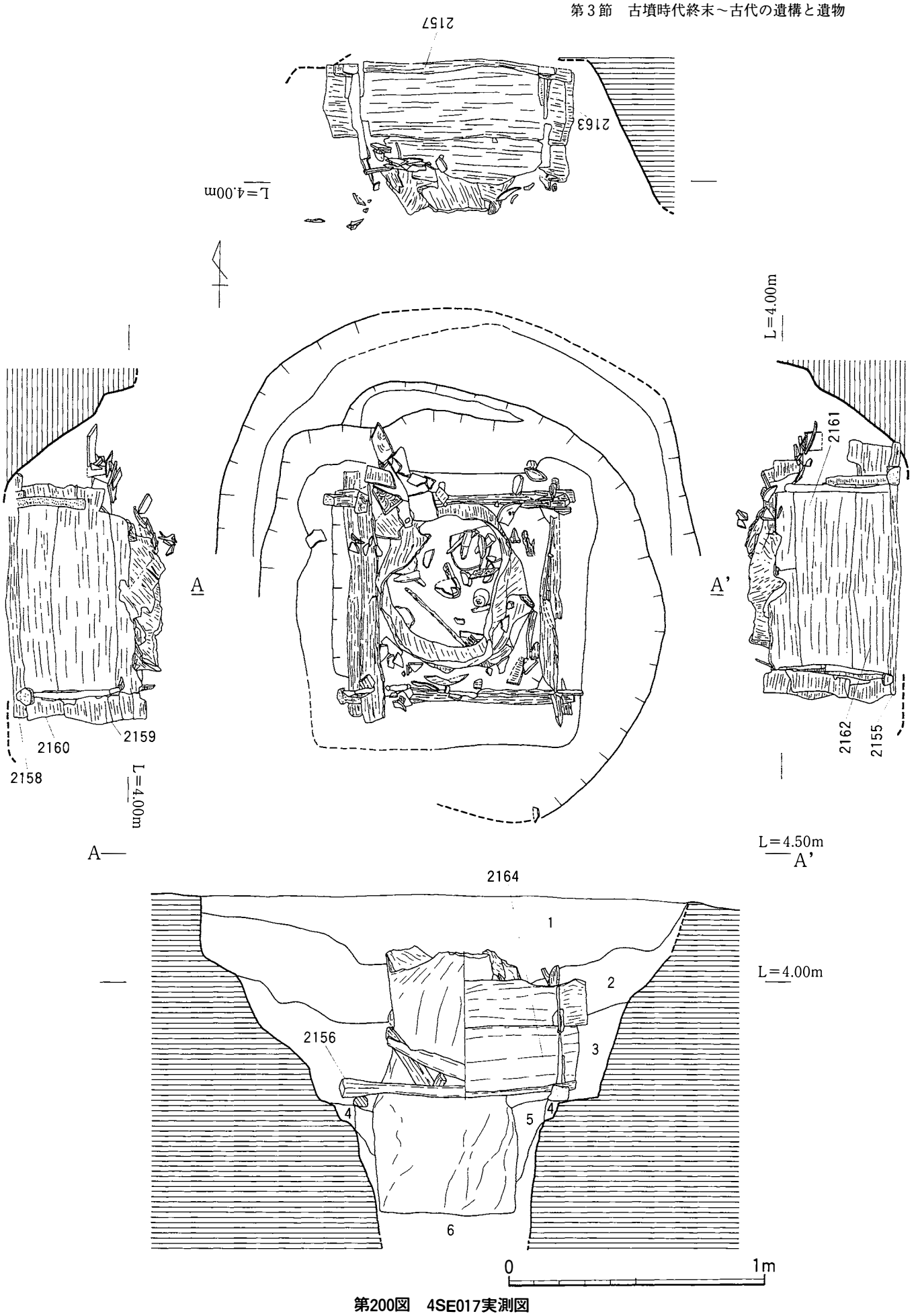
第198図　5SI031実測図

井戸枠内側の埋土６層のみで、黒褐色を呈する粘性土で遺物を多く含む。

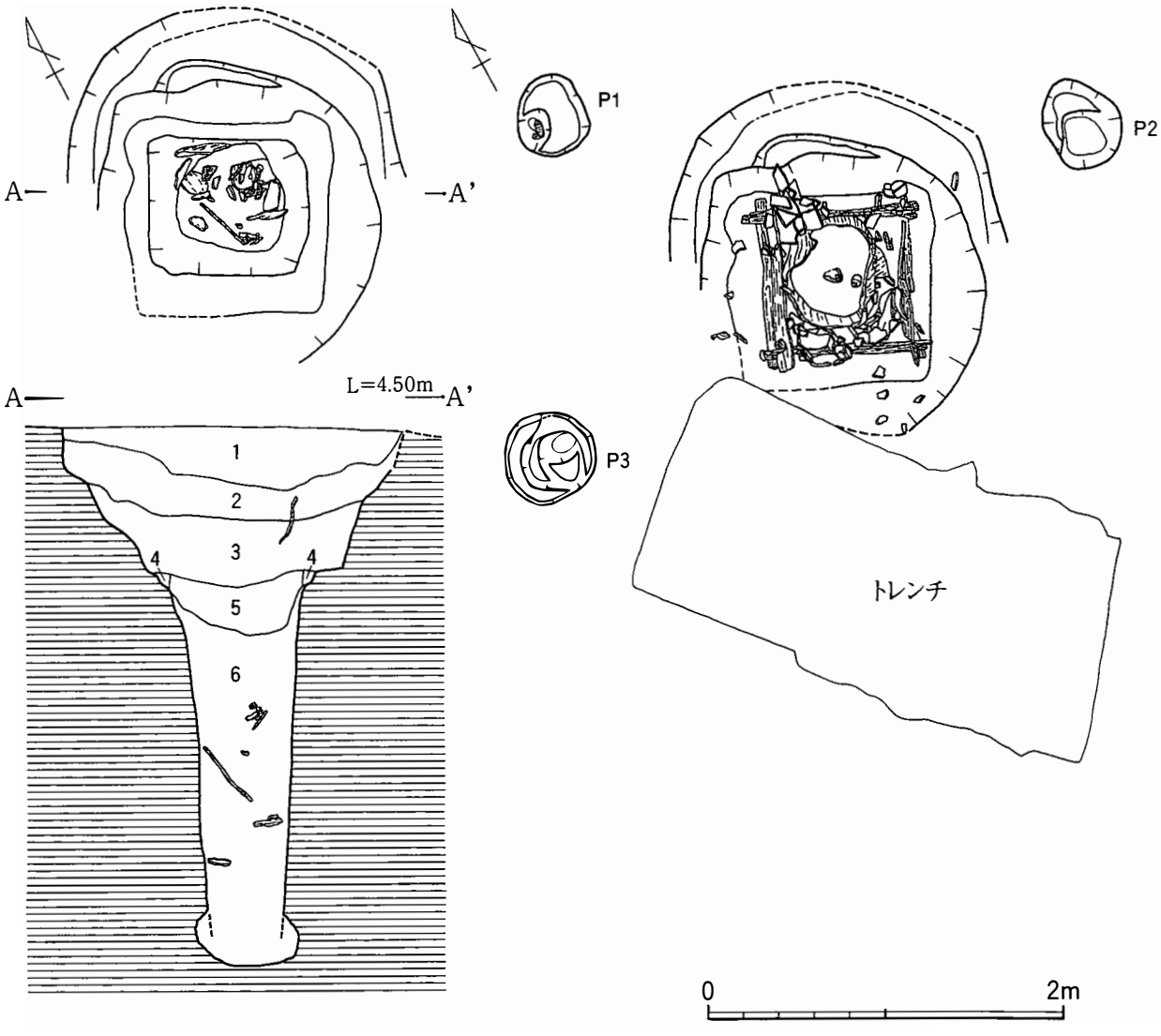
井戸跡の外部施設と考えているのは、遺構の周囲に検出した柱跡とした３つのピット群である。井戸の南側がトレンチで破壊されているため、もう１つピットが存在した可能性があり、4本柱の建物があったと考えた。この想定した建物は井戸跡を囲む形となり、長方形に配置する柱跡の中心に井戸が存在することとなった。そこでこの建物跡は独立した小屋ではなく、井戸の周囲に井戸全体を覆うような上屋を設置していたと推定した。柱間を３つのピットからやや不安ながらも測ると、柱間は長い方で6.0m、短い方で3.5mとなった。長軸で方位を考えると、N－64°－Wである。上部構造は不明である。P２では柱の痕跡が確認でき



第199図　5SI031出土土器実測図



第200図　4SE017実測図



第201図　4SE017実測図

た。これは同時に井戸側の蒸籠組の方向と合致する。

Ｐ１の埋土は、1層が暗褐色（10YR3/3）を呈し、地山（黄褐色粘質土）の土が大型の斑点となって混入している土を含む層である。2層は暗褐色（10YR4/6）を呈し、地山（黄褐色粘質土）の中型の大きさの土が斑点状になって混じり込む層である。地山（黄褐色粘質土）の微細な粒子が混じり込む層である。4層は柱が腐食した後に入り込んだ埋土である。

Ｐ２では、1層がＰ１の１層に同じであった。2層はＰ１の２層に同じであった。3層は柱根部分の腐食による粘質土が入り込んだ層であった。

［出土遺物］【第202図～第205図】

出土遺物のうち土器類については、井戸側周囲の掘り形の埋土中（第202図）、井戸枠内中上部（第203図）、井戸内下層（第204図）に分けて記述する。また、木製品についてはいずれも井戸の中である。

井戸側周囲の掘り形の埋土中からは須恵器（蓋・坏・高坏・埦・壺）、土師器（坏・埦）などが出土している。まず須恵器である。1112・1113は蓋である。1112は輪状つまみを持ち、天井部には半分ほどヘラ削りが施される。輪状つまみは丁寧な作りである。口縁端部は小さくつまみ出すだけである。1113はつまみのないもので平坦化している。口縁端部はやや持ち上がり気味で角張るようにつまみ出す。1114・1117・1118・1130は坏である。1114は、口縁端部が外反し、体部断面が傾斜し、底径が狭くなる。外底面に墨書がわずかに残

第202図　4SE017掘り方内出土土器実測図

る。1117は底部のみで底径は広い。1118は口縁部が外反するもので1114に近い。1115・1116・1120・1121・1122・1123・1134・1136は高台付坏である。

破片が多くこの井戸との関係がうかがわせるような遺物は確認できないが、1114の墨書土器、1136の転用硯、暗文の入る土師器（1135）などから井戸の上限はせいぜい8世紀末から9世紀初頭であろう。

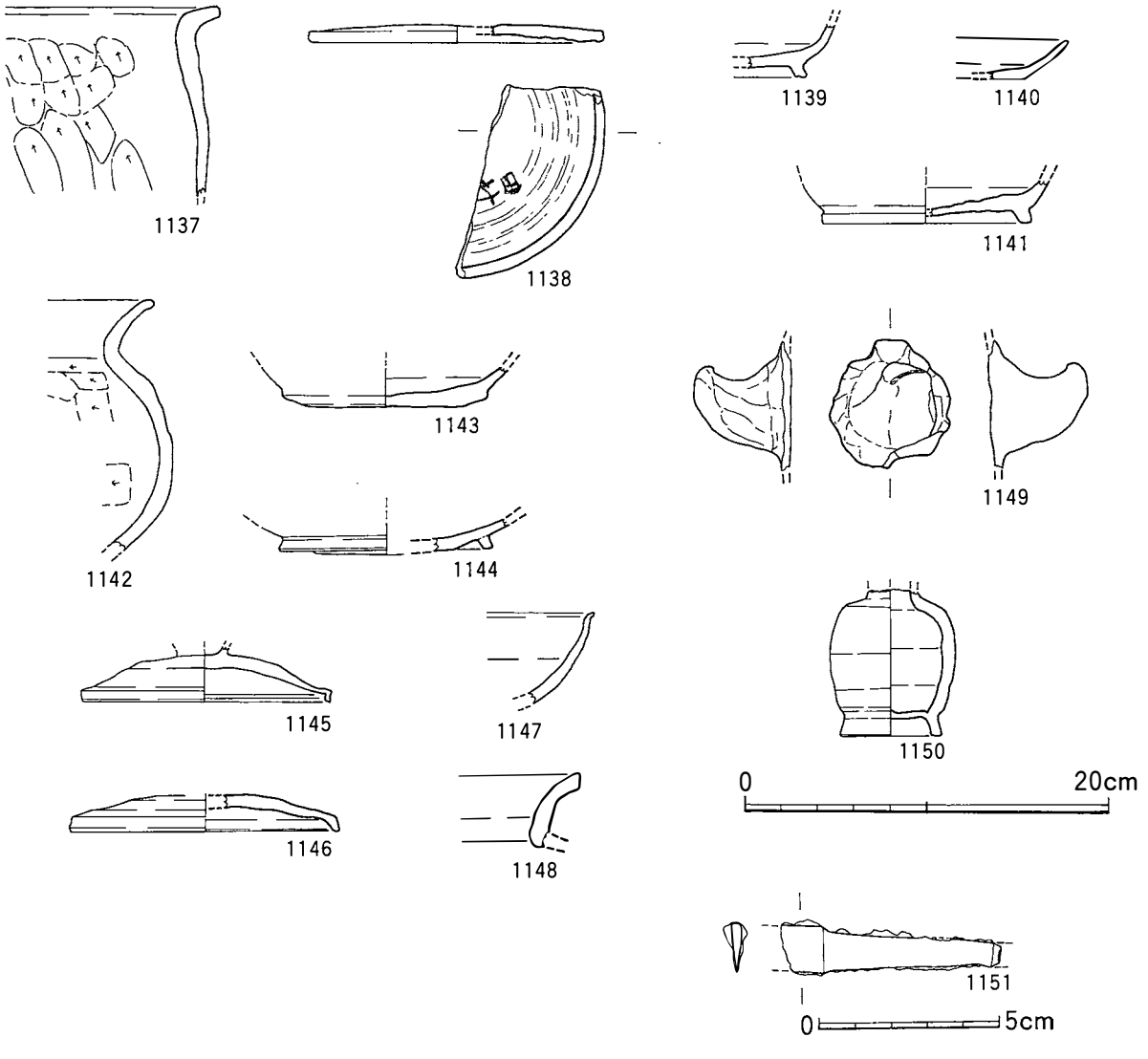
井戸枠内中上部の遺物の出土状況は井戸が廃絶した後の堆積物と判断できる。当然古い要素の土器も入る

が、須恵器の1138・1144など、土師器の1137・1140などから推定して9世紀中であろう。この中で1138は墨書土器で薄くなっているが、内器面に「田村？」の文字がある。同時にこの土器は転用硯としても利用されていたようで内器面がかなり磨耗している。1150は須恵器の小型壺であるが、あまり類例のないものである。頸部から上が欠損しているが水滴のような使用方法も想定できる。

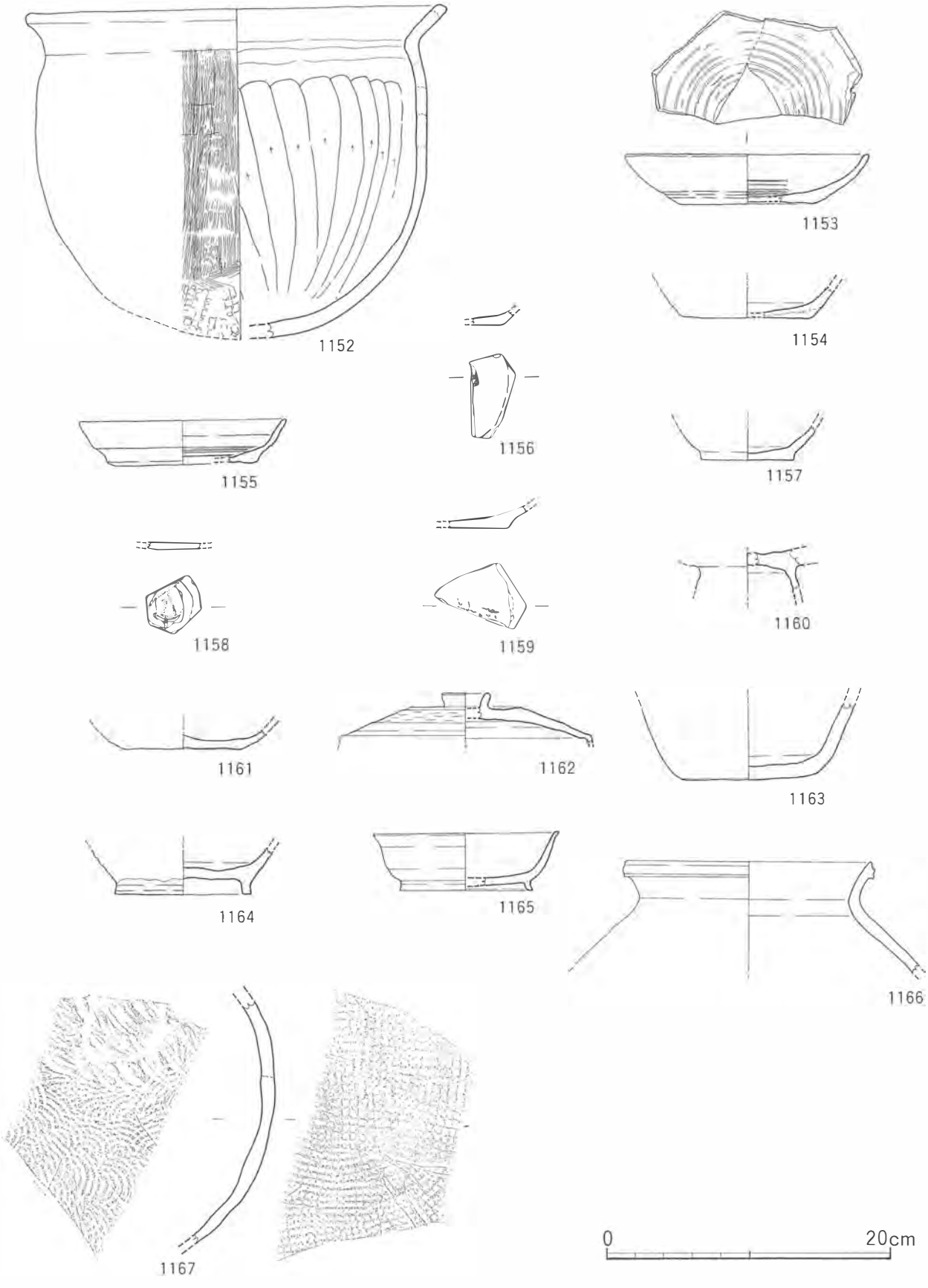
1151はこの遺構からでた刀子である。錆びと欠損により傷みがかなり進んでいるため全体の形状がつかめない。

第204図の遺物は井戸内の下層から出土したもので、井戸の廃絶時期に近いと判断している。

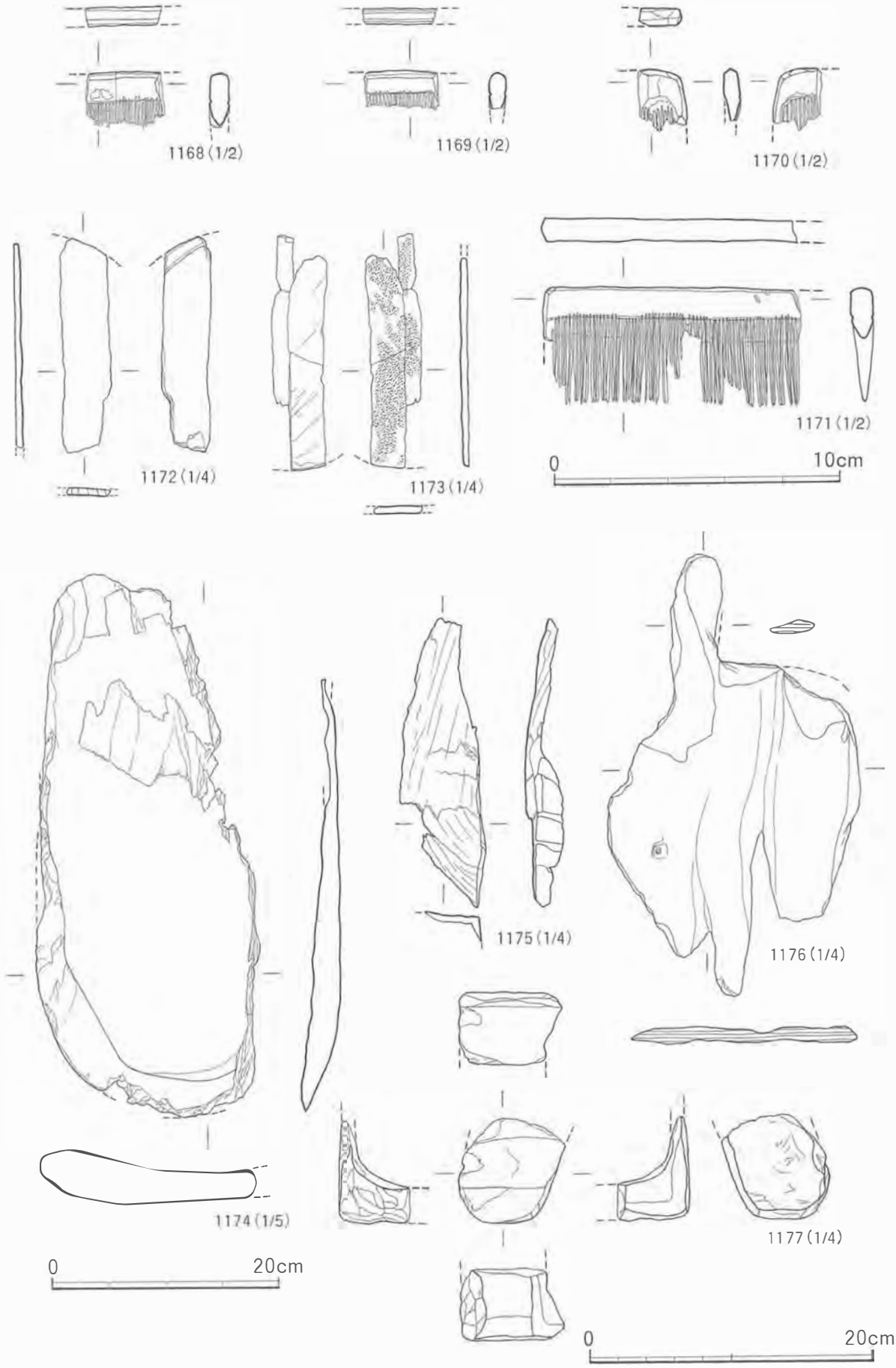
1152は土師器の甕で丈が短いので鍋の可能性もある。口径は胴部最大径よりも大きく、胴部も頸部からわずかなふくらみを持つだけで底部は丸くなる。内器面は縦方向のヘラ削りが入る。外器面は縦方向のハケ目による調整がなされる。1153～1159、1161は坏で、1153は内面に暗文を回転させながら内体面まで施している。1155にもわずかに暗文が見える。1156、1158、1159は外底面に墨書されているが、文字の判読はできなかった。1160は高坏の脚部である。全体像が分からないが、脚部の外面には薄く縦方向のヘラ削りがみえる。焼きはあまりよくなくかなり摩耗している。1164は高台付埦である。体部の立ち上がりから埦と判断した。1162・1163、1165～1167は須恵器で、1162は蓋で径の小さい輪状ツマミを持つものである。口縁部の返しは



第203図　4SE017上部出土遺物実測図



第204図　4SE017井戸枠内下層出土土器実測図



第205図　4SE017出土木製品実測図

ないようである。1165は高台付坏である。口縁端部が外側へ少し反るような傾向がある。1163は鉢である。1166は甕である。

1167は横瓶の破片である。井戸の最下層から出土し、井戸の水さしの役割持っていた可能性がある。

これら井戸内の遺物は井戸の廃絶時もしくは使用時のものと判断した。

次に木製品であるが、第205図に図示している。木製品の大部分は、井戸枠内から出土しているが、いくらかは井戸枠の外側からも出土している。

1168～1171は横櫛である。井戸枠内の中位から低位付近で出土した。材としてすべてマンサク科イスノキ属イスノキが使用されており、櫛歯の作り方などから同一個体と考えられる。長さは少なくと10cm 以上のものであろう。1172と1173は組み合わせの蓋もしくは底板の一部と考えられる。材としてはブナイ属である。1173は上層から､1173は中下層から出土している。その他の木製品は不明確である。

○5SE059【第206図】

この遺構は、a－33グリッドに位置し、平面形はほぼ円形で、確認面での径が約1m を測る。確認面から60cm ほどの深さのところに１段あり、その中心付近に一回り小さな穴が開いている。径が50cm ほどでそのままその面からほぼ垂直に落ちている。深さは段からほぼ1.3m ほどである。

当初この遺構を確認した時、直径1m の掘り方の中心に径50cm の柱痕跡のある柱穴と考えた。ところが、掘り下げを進めるにつれて、中心に木製の井戸枠が残る井戸跡であることが分かった。

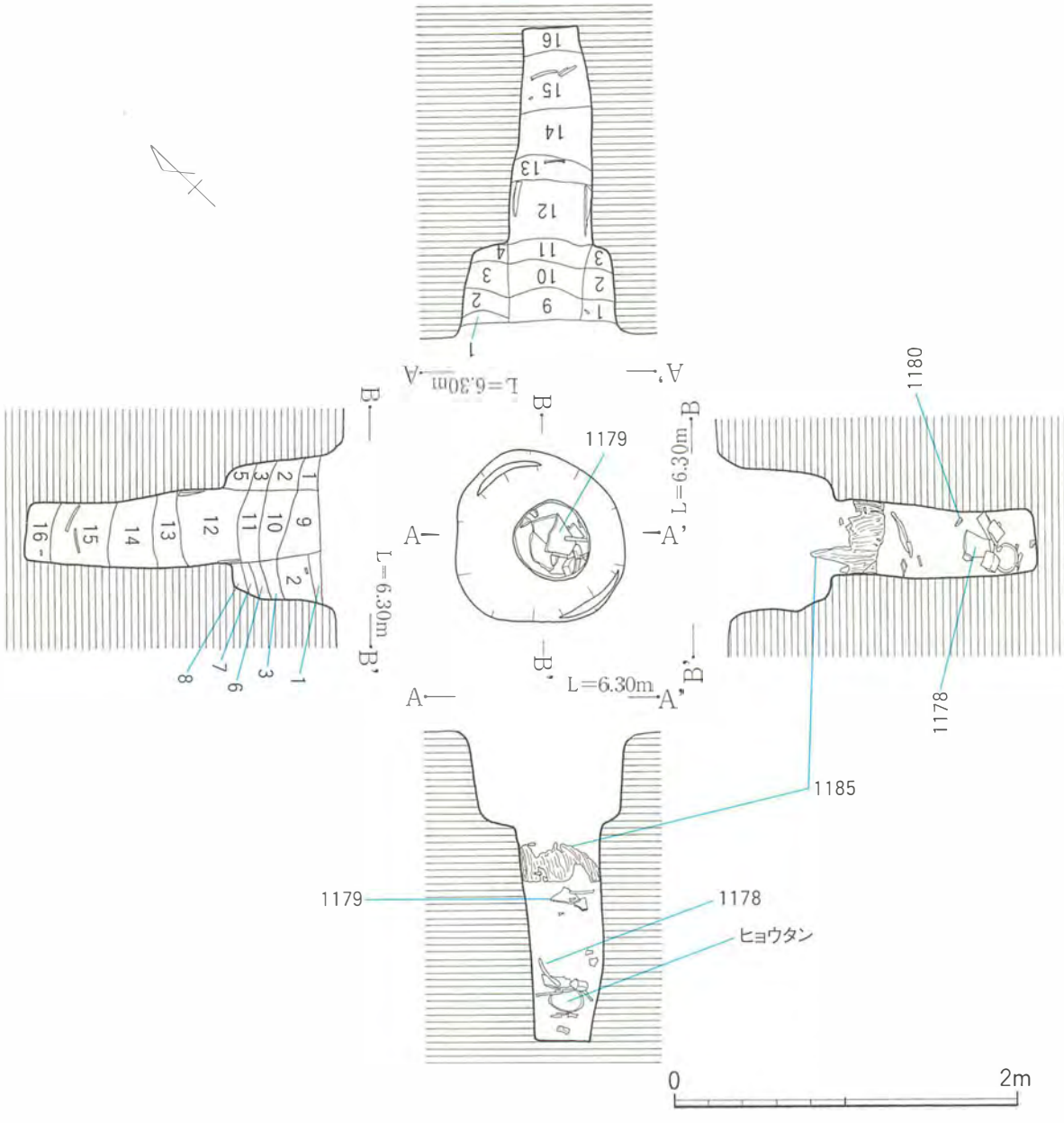
形態的に4SE017と類似遺構である。ただ、こちらは一木刳り貫きの井戸枠のみが残るものであった。ほとんど腐食し、下位部分の半分ほどが残る。

底面は砂層のため崩れており、その絶対高は1.2m ほどである。

埋土の注記を以下に記す。

まず、井戸枠がすでに腐食していため井戸枠外側の埋土は、多少分層し難い部分もあったが、8層に分けた。1層は暗褐色（10YR3/3）～黒褐色（10YR3/2）を呈し、粒子が細かく、締まりがある。焼土・炭化物粒子を少量含む。部分的にローム土らしき土も含む。2層は暗褐色（10YR3/3）を呈し、1層の土にローム、砂質土の塊を多く含む。また粘性やが強く、焼土や炭化物粒子を多く含む部分もある。締まりは１層よりやや弱い部分と強い部分がある。3層は暗褐色（10YR3/3）を呈し、粒子は微細で、締まりがある。粘性はやや強く、ロームも含む。焼土粒子・炭化物を多く含む。3層は、暗褐色（10YR3/3）～にぶい黄褐色（10YR5/4）を呈し、地山であるローム土を多量に含む。粒子は粗いが、粘性は強い。焼土や炭化物粒子を多く含む。4層は、暗灰黄色（2.5Y5/2）を呈し、粒子が微細で、粘性がかなり強い。5層は、黒褐色（10YR3/2）を呈し、粒子が細く、粘性が強い。焼土や炭化物粒子を含む。6層は、暗褐色（10YR3/4）を呈し、11層よりやや明るく、粘性が強い。7層は、褐色（10YR4/6）を呈し、黄褐色土を多量に含む。締まりや粘性ともにやや弱い。8層は、黄褐色（2.5Y5/3）を呈し、黄褐色土粒を含む。粘性がかなり強い。

次に井戸内の埋土であるが、上位の層はこの井戸の廃棄後の堆積物と周囲の掘り方の埋土が混じっていると判断している。また、分層しにくい部分もあった。この最初の層を９層とし、灰黄褐色（10YR6/2）を呈する、粒子の細かいやや強粘性の層である。焼土や炭化物粒子を多く含み、部分的にローム土をブロック状に含む。その下を10層とし、灰黄褐色（10YR5/2）を呈する粒子の細かい、やや強粘性の層である。焼土や炭化物粒子を含む。11層は黒褐色（2.5Y3/2）～灰黄褐色（10YR5/2）を呈し、粒子は微細で、粘性がかなり強い。12層は黒褐色（2.5Y3/2）を呈し、木屑や植物遺存体を多く含み、面的に残る場合もある。13層は、黒褐色（2.5Y3/2）を呈し、粒子が細かく粘土質である。植物遺体を多く含む。14層は、黒褐色（10YR3/1）を呈し、粒子が微細で、粘性がやや強い。部分的に植物遺体を含み、ヒョウタンらしきものもある。一部に



第206図　5SE059実測図

青灰色（5B6/1）のブロック土が入る。15層は黒色（7.5Y2/1）を呈し、粒子は微細で、肉眼で観察できるほどの植物遺体は確認できない。一部に炭化物らしきものも含む。16層は緑灰色（5G5/1）を呈し、青灰色（5BG2/1）の土と混じる。最下層の土で粘性強く粒子は細かい。遺物はほとんど含まない。湧水層である。

［出土遺物］【第207図・第208図】

1178～1180は須恵器の大甕片である。いずれも井戸の下層付近で出土したもので、最下層よりもやや上位にあり、井戸溜りのためのものかもしれない。大甕片自体は整形技法や胎土から見て同一個体である。1181は須恵器壺の口縁である。小片のため時期は不明である。

第208図では木製品を図示している。1182～1184は径が5mmほどの棒状のもので側面は丁寧に削られている。接合できなかったが、出土状況から考えると本来は1本だったと思われる。須恵器の大甕の出土した付近に、半裁し中を刳り貫いたヒョウタンが出土している。井戸の中のヒョウタンとこの棒状工具の組み合わせは、他県に類似例があるようにヒョウタンに棒をとおして柄杓にしたのではなかろうか。

1185は一木刳り貫き井戸枠の残穴で、図示したものの他に2点ほど小片がある。調査時にはそれらが円形

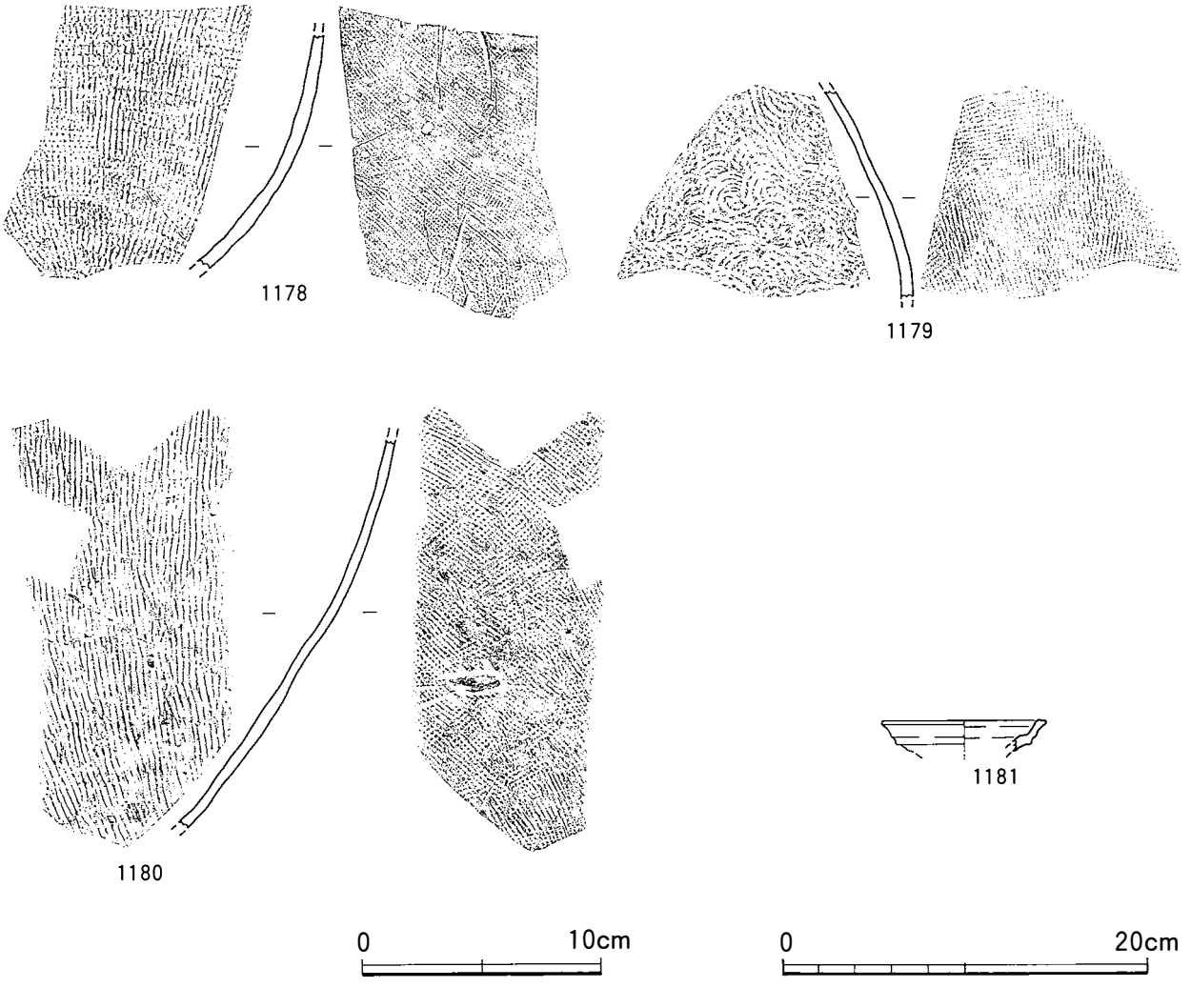
の枠として井戸内の段から少し落ちたところに座っていた。土層断面からみると上面まで伸びていたようである。復元径は約70～80cm ほどで、途中から下へは落ち込まないようになっていた。樹種はクスノキであった。

○5SE019【第209図】

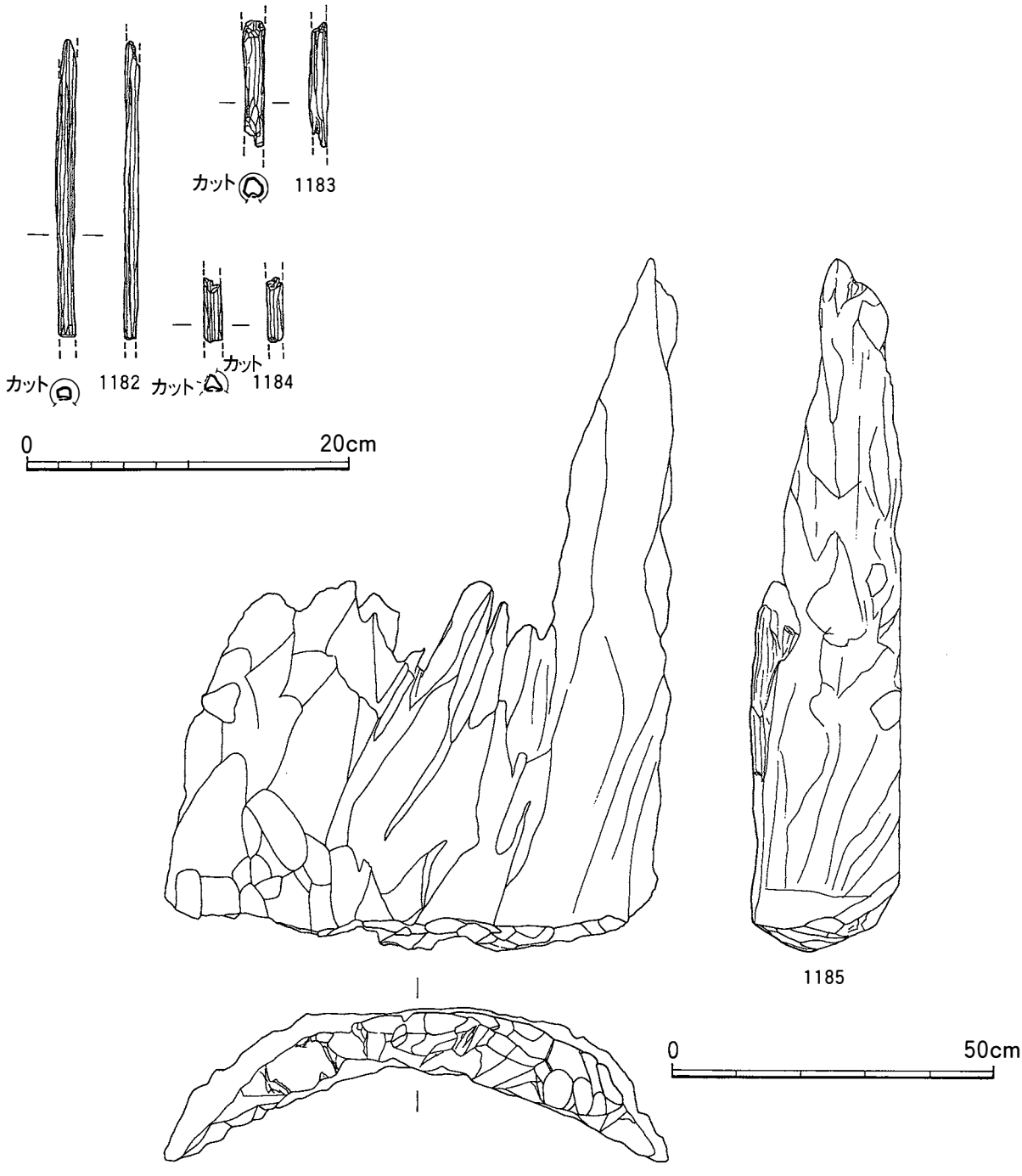
a－32グリッドに位置する井戸跡である。本来は径が1.6～1.7m を測る不整円の井戸であろうが、西側に舌状に50cm ほど突き出した落ち込みがあり、上面から階段状に３段に段掘りされ井戸途中まで降りている。深さは確認面から約2m を測る。この突き出しの場所は、井戸側などを設置したときのものか、井戸枠を抜き取った際に掘り広げた跡のもののどちらかと推定している。

この井戸は当初、上部で出土していた小型壺から古墳時代前期のものと考えていたが、井戸内を掘り下げた段階で古代の須恵器などを確認したので古代の井戸とした。

埋土は、確認面から大きく５層に分割した。このうち、層として確認しているのは４層と５層である。4層はオリーブ黒色（5Y3/1）を呈し、粘性を強く帯びるが、極端に締まりがない。3大の木片や炭粒を少量含む。5層はオリーブ黒色（5Y3/2）を呈し、4層に比べ粘性、締まり共にやや強い。多量の木片や櫛などの遺物を含む。この層と湧水層の砂層の境近くで多くの須恵器片が出土した。また、使用された墨がこの層から出土した。最下面は湧水するシルト層であるため本来の底を確認できていない。絶対高は2.1m を測る。



第207図　5SE059出土土器実測図



第208図　5SE059出土木製品実測図

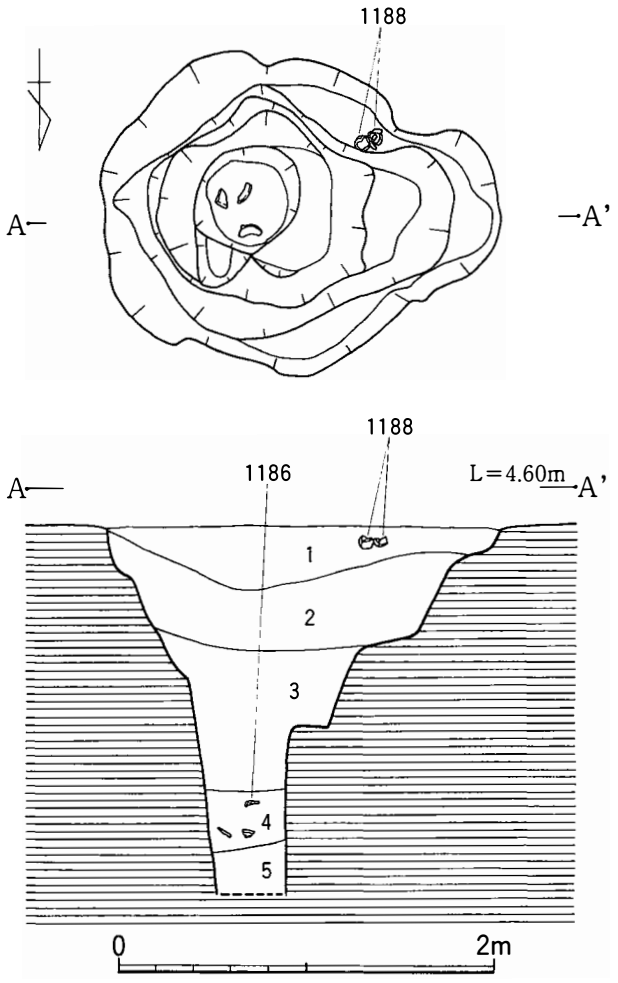
［出土遺物］【第210図】

1186は土師器の高台付埦である。内外器面とも丁寧な横方向のミガキが施されている。1187は土師器の坏で底部に暗文のような調整痕がある。1188は古墳時代の小型丸底壺である。この遺構の検出時に縁付近にあったものである。

1189は墨である。最下層から出土した。かなり使い込んでおり、下方は使用にのため斜めに磨耗している。表面は磨耗して何の痕跡もない。本来の形態や成分などについて確認していない。

1190は木簡様の板材である。頭頂部が斜めに切られ、側面は滑らかに落とされている。文字は確認できなかった。もう一点同じものはあるが、そちらも文字は確認できない。いずれも樹種はマツ科モミ属であった。

1191は櫛である。これは最下層から出土した。泥をさらって水洗し、櫛歯を20枚以上回収したが、接合は



第209図　5SE019実測図

できなかった。樹種はマンサク科イスノキ属イスノキであった。

○4SE043【第211図】

Y－29グリッドに位置し、4SX038の一部をなす遺構である。掘形の平面形状は不整円形で南北3.1m、東西3.2m を測る。底面は砂層まで掘り切り、出水が多く掘り下げを断念したため不明であるが、遺構確認面からの深さは3.0m を測る。断面形態は上面が緩やかに傾斜し、急激に落ちほぼＶ字状を成しており、最下面は尖り先細り形を呈している。井戸としては素掘りのものである。井戸の上層からは、木簡様木製品・木片・種子などが出土している。

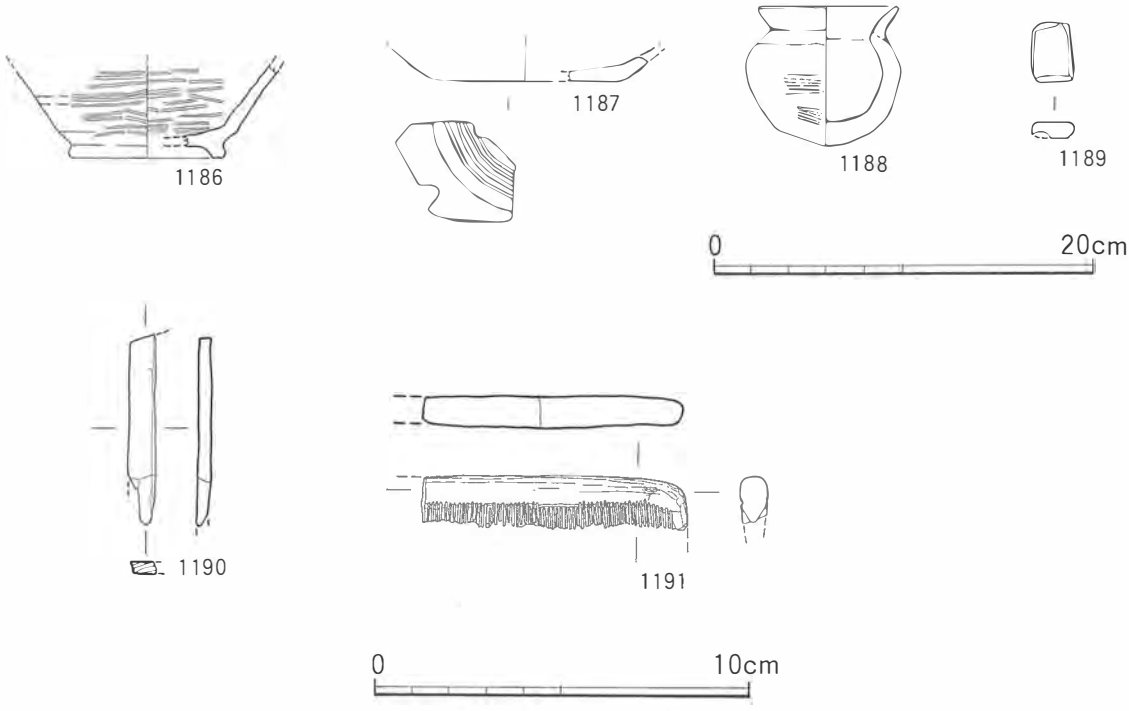
4SX038を掘り下げ中に円形の形状を確認し、そこを後に掘り下げた結果確認したものである。4SX038における役割を想定できるが、具体的な役割は不明である。ただ、4SX038が祭祀的な遺構であることから、この遺構も水辺の祭祀にかかるものと推定している。

この井戸跡は出土遺物を検討した結果、4SE017や5SE059などから出土した遺物より古い遺物が出土しており、これらより古い井戸と考えている。

井戸の最下層はやや不正確であるが、最下部の絶対高は2.92m 付近である。

埋土の注記は以下のとおりで、大きく４層に分層した。遺物は１層に集中している。

１層は、オリーブ黒色（7.5Y3/1）を呈する粘質土層で、肌理が細かく、よく締まる。あまり不純物は含まない。2層は、オリーブ黒色（10Y3/1）を呈し、基本的に粘質土だが、若干砂も混じり、締まりがある。



第210図　5SE019出土土器・木製品実測図

所々に灰オリーブ色（7.5Y5/2）の極小のブロック含む。3層は、暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）を呈し、基本的に粘質土でそれに黒褐色土が混じっている。所々に植物繊維を含み、黄土色や青灰色の粒子が極く少量みられる。4層は、緑灰色（10G6/1）を呈し、硬い粘質土で水分量が少なく、削るとブロック状になって剥げる。

［出土遺物］【第212図～第214図】

4SX038との関係が明確であるため、上面のものは4SX038の遺物とし、明らかにこの井戸の埋土中から出土したものを図化することにした。ただし、遺物の出土層は１層から２層の上面であり、下層にはほとんど含まれていない。従って、この遺構の遺物の大半は上位にあり、その中からの遺物である。

須恵器には、蓋坏・坏・高台付坏・小型壺・横瓶などが出土している。

1193・1195は坏蓋で、返しをわずかに残し、擬宝珠のつまみを持つものである。つまみ近くは回転ヘラ削りが施される。口径は1193が11.0cm、1195が11.7cm をそれぞれ測る。口径の違いから1193を小蓋とする。

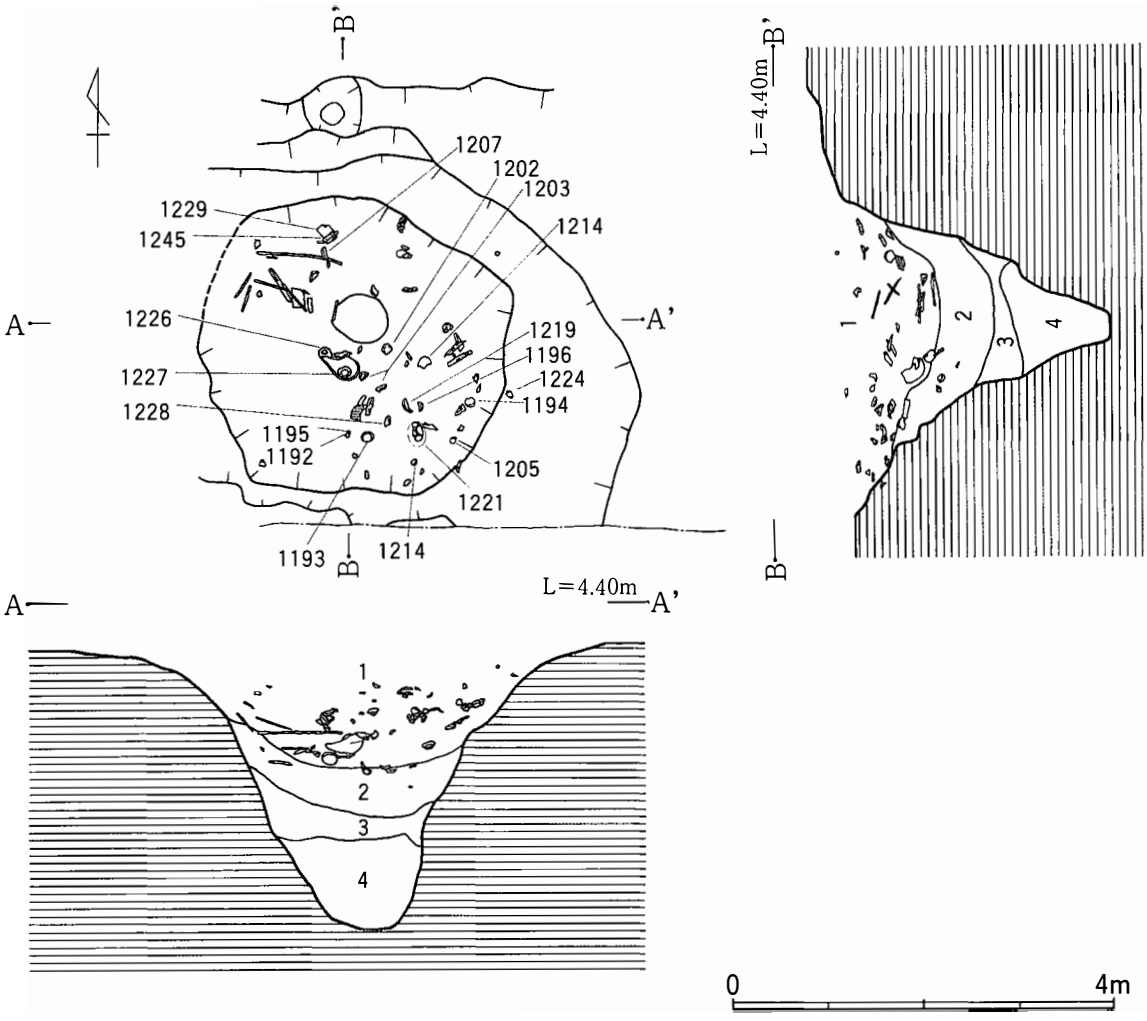
坏身は２種に分けられる。1192の受け部はしっかりしているが、立ち上がりをわずかに持つものである。底部外面に回転ヘラ削りを持つ。内器面底部に「一」の字様のヘラ記号をもつ。1194・1196・1198・1199は口径10.4～11.7cm を測る坏で器高の違いがわずかにある。外底面にヘラ削りがある。1197は一応坏にしておくが、底径と推定器高の様子から埦蓋かもしれない。1200は外底面に「井」の字様のヘラ記号をもつ。底径が狭く立ち上がりが開く器形は平安時代のものである可能性がある。

1202～1204は、高台付坏で、口径が11.9cm 前後、器高が4.1cm ほど、高台径が7cm 前後を測る。ほぼ同型であるが、高台の状況が各個体でわずかに異なる。1203の高台は直に伸び端部がやや角張るのに対し、1202と1204はより開くものである。

1201は一応埦とするが、全体が不明確であるためこれ以上ふれない。

1205は小型壺で、復元口径6.4cm を測る。胴部最大径は下位にある。底部付近にはヘラ削りがはいる。

1206は横瓶の胴部と考えられるが、頸部以上がないのであくまでも推定である。胴部の一端は卵形をつくり、すぼめた所に粘土蓋を貼り付けた部分がある。外器面には同心円状のカキメが残ることなどからこの器



第211図　4SE043実測図

種と判断した。

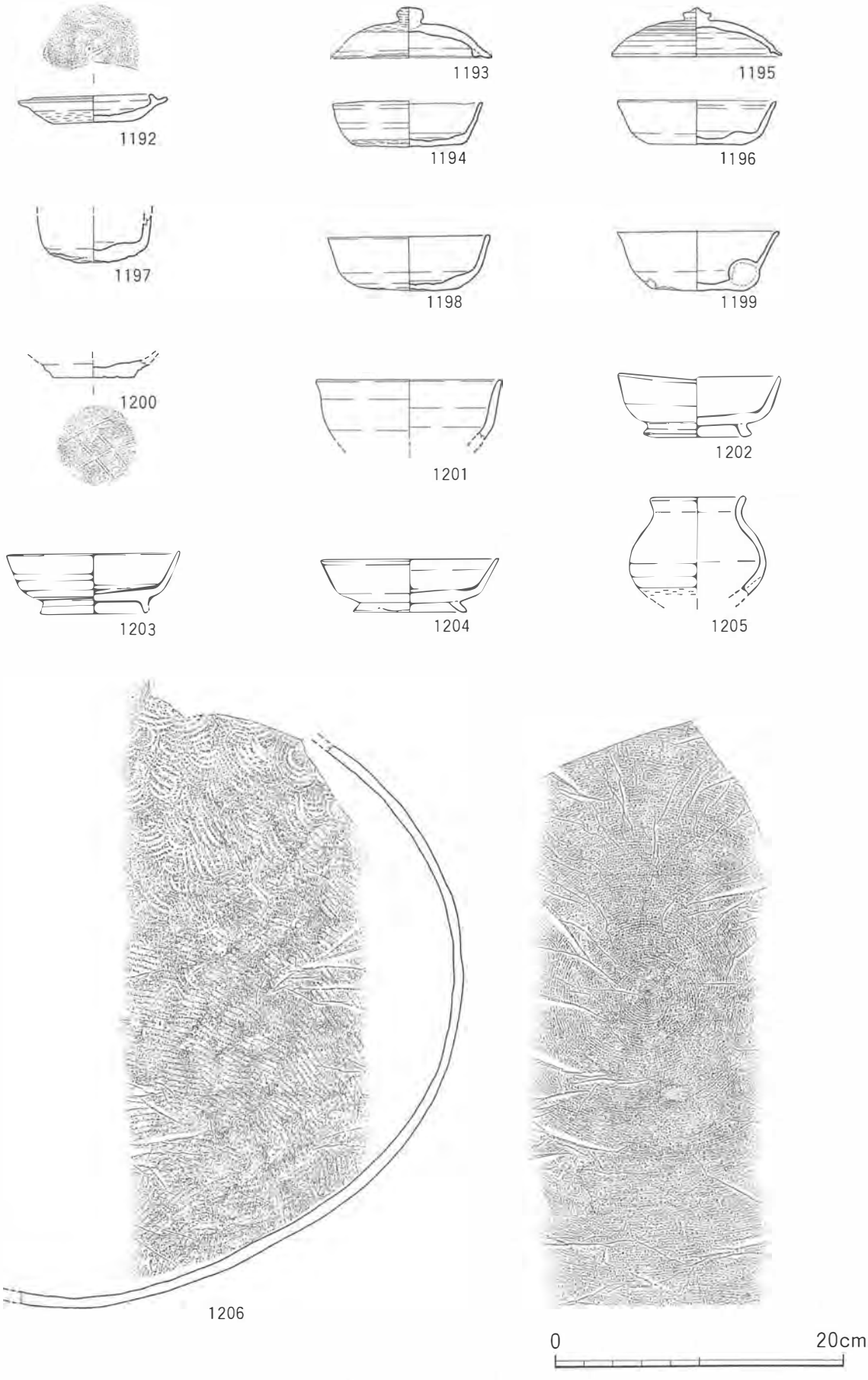
1207・1208・1210・1211・1213・1216はほぼ同じ種類の土師器の坏である。いずれも上層出土の遺物で、口径は10.8～13.0cm、器高を測る。口縁部は体部の中位付近で屈曲し、上位がやや内傾するものである。1207・1208は内外器面に赤彩が施される。1210・1211は内外器面に黒色顔料が塗布されている。特に1210・1216は内器面に暗文が施されている。1213は、上記のものに似るが中位の稜が明確でない。内外器面にはミガキが入る。

1209・1212・1217・1215は土師器の坏で口径が15.8～17.8cm を測り、やや差があるが口縁部が開くものである。器高が口径に比べ器高が低い。1209・1212は赤彩が施される。1215は内外器面に黒色顔料が施される。

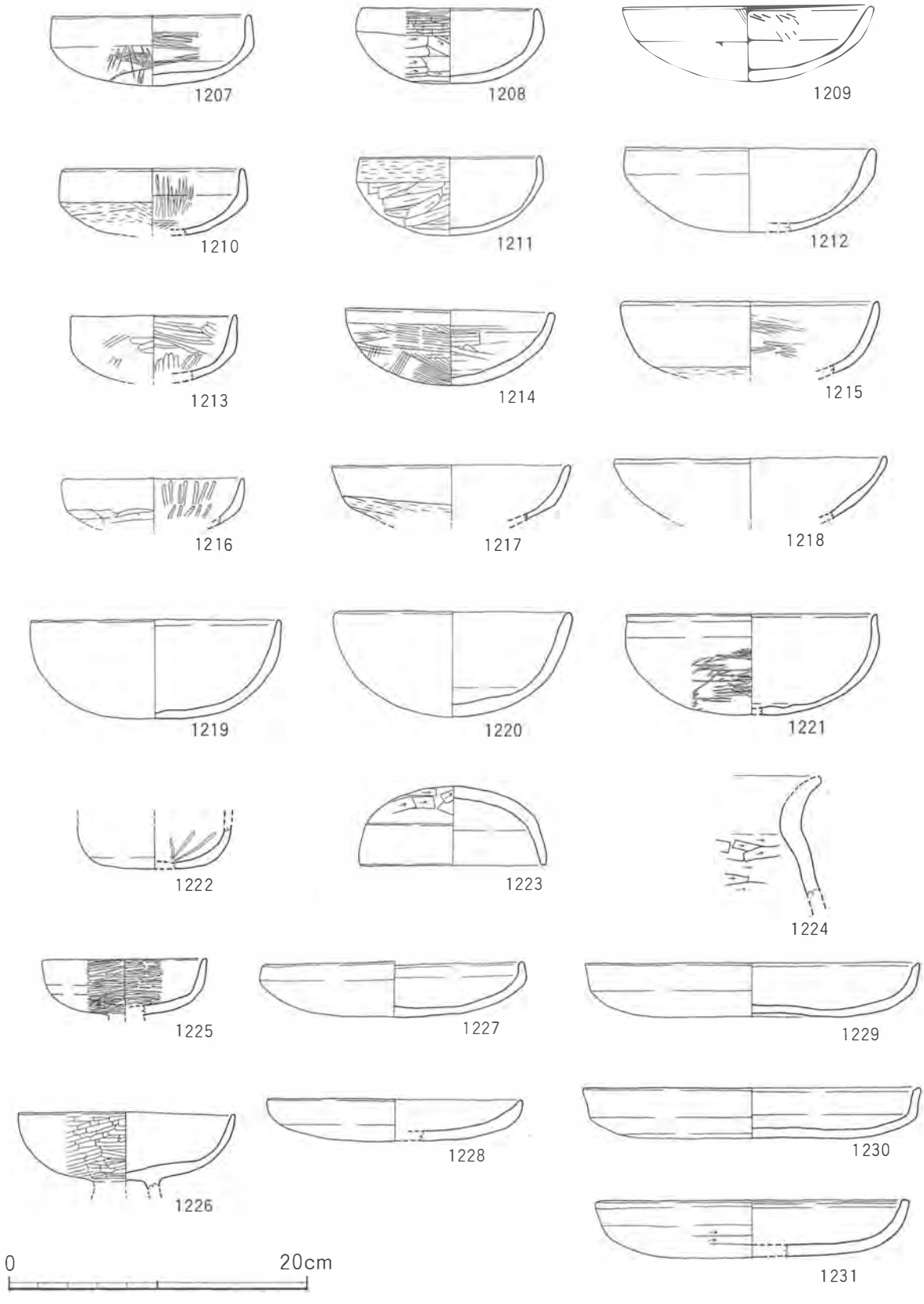
1214も土師器の坏で、口径部近くに弱い稜が入りそれを境に調整が変わる。その部分から下には内外器面ともヘラミガキが入る。口径は13.9cm を測る。1218は口縁から直に底部へ降りる。復元口径17.8cm を測る。内外器面に黒色顔料が施される。

1219～1221は土師器の坏である。復元口径は15.7～16.7cm、器高が約6.7cm を測る。器表面には赤彩がかなり残っている。ミガキ部分もある。

1222は一応土師器の坏とした。破片で内外器面にはミガキが施され、内器面に底部には暗文が施されている。黒色顔料が施される。



第212図　4SE043出土土器実測図



第213図　4SE043出土土器実測図

1223は口縁部の開き具合が体部の屈曲部から開くので一応土師器の蓋にした。口縁部径は12.4cm、器高が5.2cmを測る。器表面には横ナデが施され、外器面は赤彩されている。天井部は手持ちヘラ削りが施される。

1224は土師器の甕の破片で、胴部上位から口縁部までのものである。頸部から直気味に胴部へ続く。

1225・1226は土師器の高坏の坏部である。かなり口縁は立つ。1225は復元口径11.0cm、1226は口径14.5cmを測り、大きさは異なる。どちらも内外器面とも丁寧なミガキが施されている。脚部がないので全体形は不明である。

1227～1231は土師器の盤であるが、器形の特徴から1227、1228、1229・1230、1231の4種類に分けられる。1227は、口径17.3cm、器高3.7cmを測る。内外器面はヘラ削りの後ミガキが施される。体部に最大径があり、口縁部は内傾する。全面に赤彩が施される。1228は器高が浅く、体部があまりない。復元口径は17.0cmを測る。内外器面に赤彩が施される。1229・1230はやや異なるもののよく似ている。体部からやや外反しながら端部に至る。口径は22.2～22.6cm、器高が3.4～3.5cmを測る。1231は復元口径が20.0cmを測る。外器面には赤彩が施される。

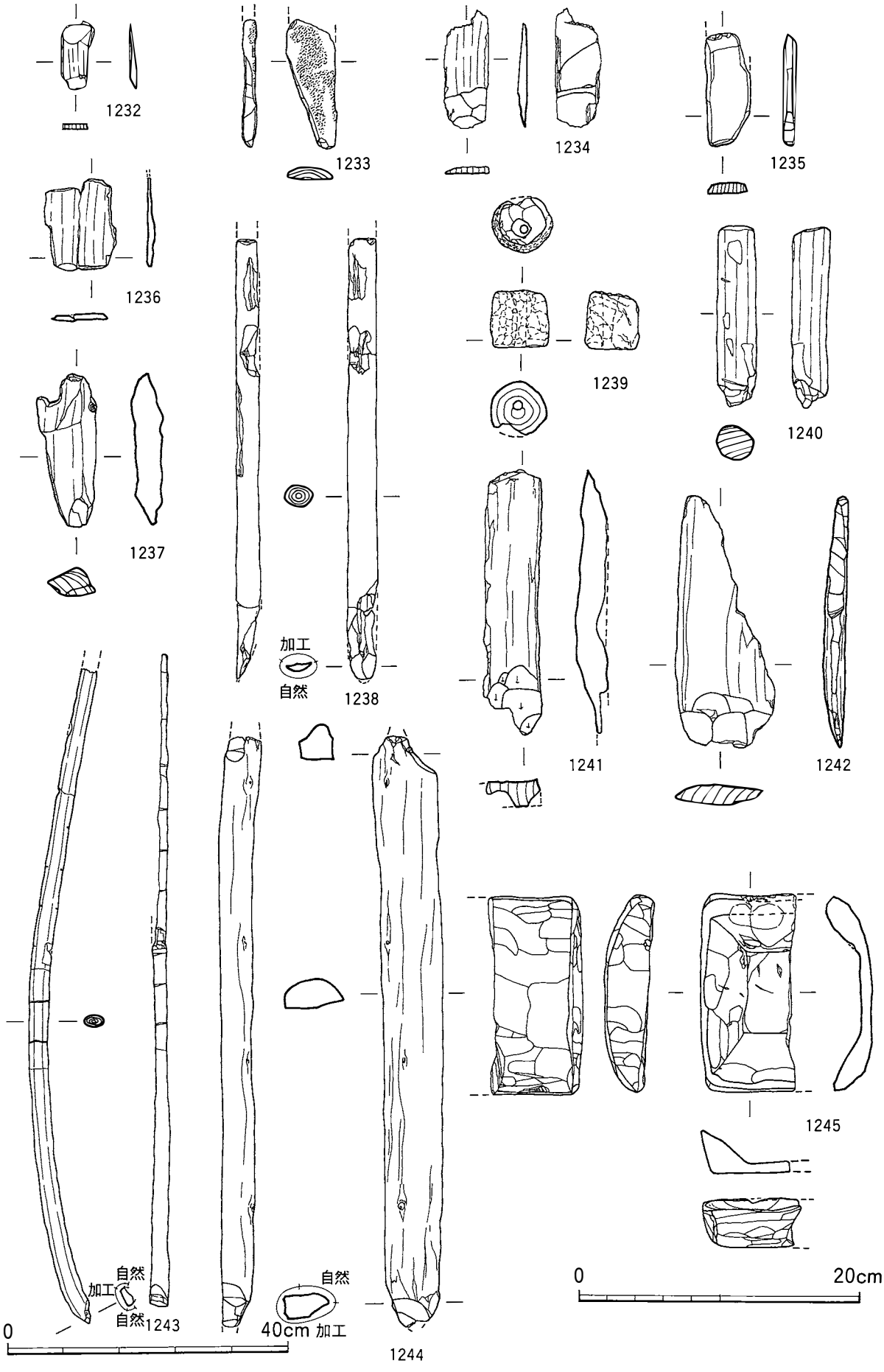
1232～1245は木製品及び木片である。製品として分かるものは1245・1239である。1245は小型の槽の破片で、幅6.0cmを測る。樹種はツツジ科スノキ属シャシャンボである。1239は一応紡錘車としている。一木のマツ科マツ属（二葉松類）を長さ4.7cmに切り取ったもので、中心部には径0.5cmほどの穴が通っている。

1240・1238・1243は柄である。そのほかは木片である。

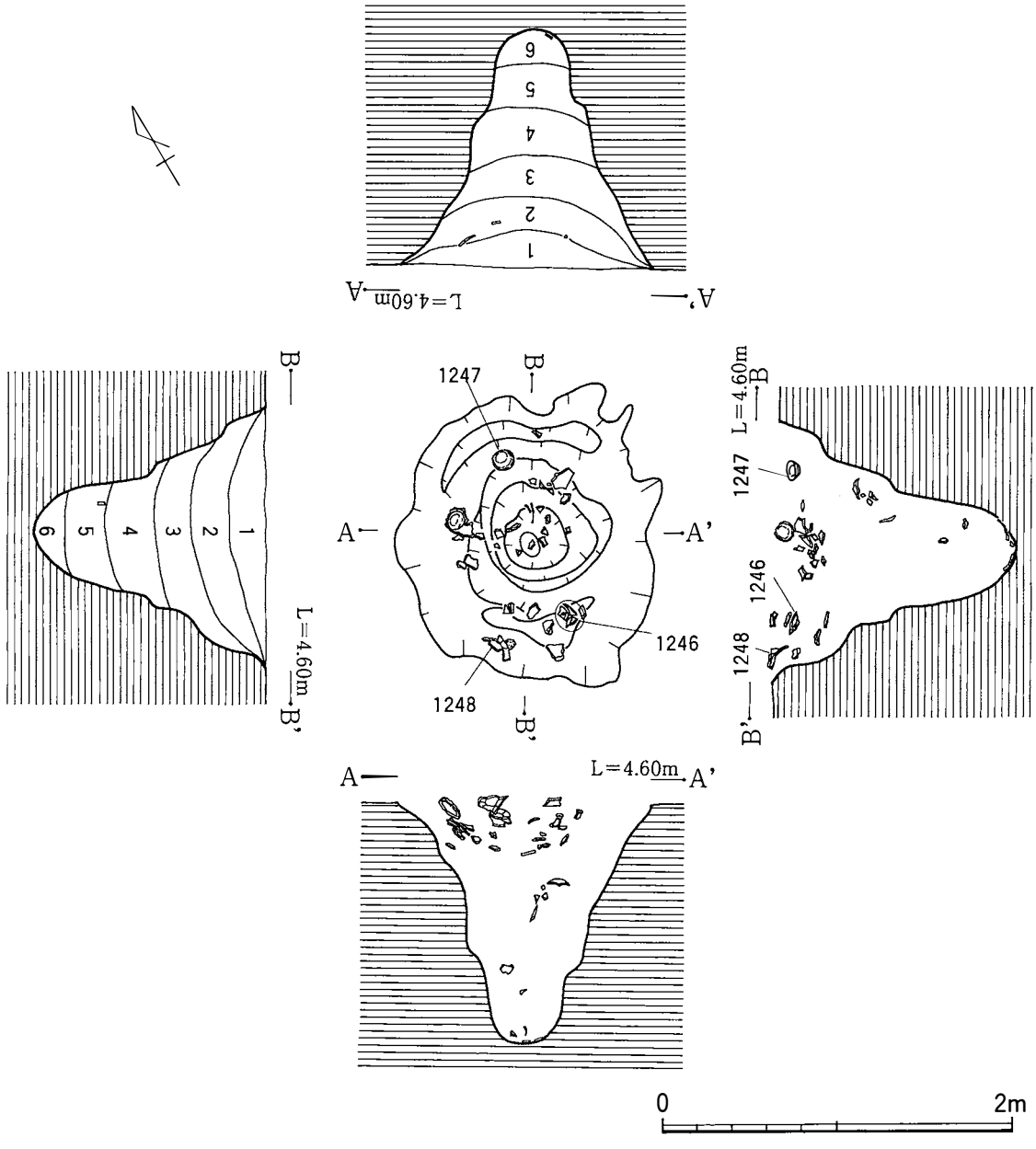
○5SE024【第215図】

a－33グリッドに位置する井戸跡である。掘り方の平面形状は不整円形で長軸が1.6m、短軸が1.4m、遺構確認面からの深さが1.4mを測る。断面形は、ロート状を呈する。当初4SX038を掘り下げている際に青灰色の粘質土中に環状のやや白みがかった線が見えた。円形の土坑が掘られているもの判断し、掘り下げたがそのときは明確に輪郭がつかめなかった。その後4SX038をある程度の掘り下げていく過程で、再度のこの遺構をとらえることができた。その結果、この遺構が4SX038と重複もしくは4SX038に伴う井戸として認識できた。その後は通常の井戸跡の掘削方法にあわせて4分割し、対面部分2箇所の掘り下げを進めた。その途中で木製品や土器片が出土した。

以下に埋土の概略を述べるが、土層は4SX038とも共通する部分があったと推定できるが、上記の理由により、遺構として明確に確認できた以後のものしかここではふれない。1層は暗褐色（10YR3/3）シルト層である。やや硬めで締まるが粘性はあまりない。0.3～10mm程の焼土粒、2～3mm程度の炭化物を所々に含む。また、酸化鉄を含んだオレンジ状の塊も所々にみられる。多くの遺物の入る包含層で、完形の須恵器埦も出土している。この層自体は流れこみによってできた層の可能性もある。2層は、黒褐色（10YR3/2）粘性シルト層で、1層と比べやわらかく粘性もみられる。3～5mm程の少礫を含む。3～10mmの焼土粒、3～10mmの炭化物を多く含む。遺物は土師器の破片を少量含む。3層は、黒褐色（10YR3/1）粘性シルト層である。1～3mmの焼土粒や3～10mmの炭化物粒子も所々に含むが、1、2層ほど多くはない。遺物は含まない。所々にマンガン粒子もみられる。4層は、褐灰色（10YR4/1）粘土層である。とてもやわらかく粘性が強い。3層と同じくマンガン粒子を含む。遺物はみられない。炭化物粒子も所々に含む。5層は、褐灰色（10YR4/1）粘土層である。4層と同様やわらかく粘性がある。3～5mmの炭化物粒子や同レベルの地山となる黄褐色粒土層のやわらかい粒子（5～10mm）を含む。遺物を少量含む。6層は黒色（10YR2/1）粘土層で、井戸の最下位の埋土層である。粘性が強いが、やわらかい粘土層である。遺物を少量含む。



第214図　4SE043出土木製品実測図

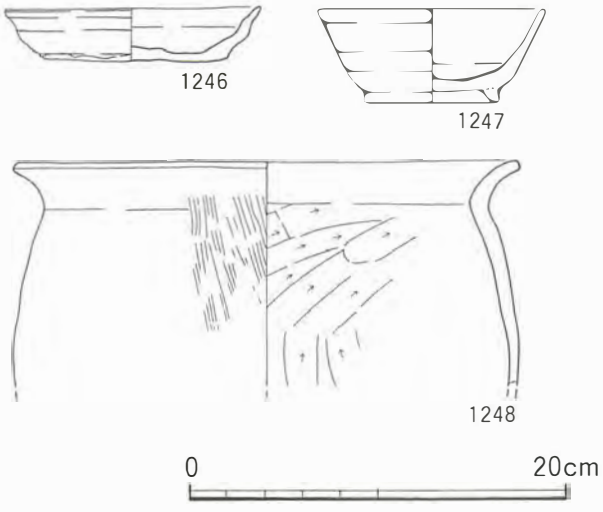


第215図　5SE024実測図

［出土遺物］【第216図】

図化したのは、土師器の坏１点、須恵器の高台付埦１点、土師器の甕１点である。いずれの遺物もこの遺構の上位層から出土したもので、この井戸の使用時期を示すものではないが、時期特定の際の参考にはなるであろう。

1246の坏は、口径13.2cm、高さ2.7cm を測る。口縁部はやや反る。底面にはヘラ切り離しの跡が残る。1247は須恵器の高台付埦である。高台は低く断面方形で先端はやや丸くなる傾向にある。口径11.8cm、器高4.9cm を測る。外底面にはヘラ削りによる調整痕が残る。1248は土師器の甕で胴部がやや張る。頸部は少しすぼまり、口縁部は短く、かなり外側に反り返るものである。復元口径は26.2cm を測る。内器面のヘラ削りは斜め方向である。外器面には縦方向のハケ目が残る。



第216図　5SE024出土土器実測図

（５）土坑と出土遺物

○4SK040【第217図】

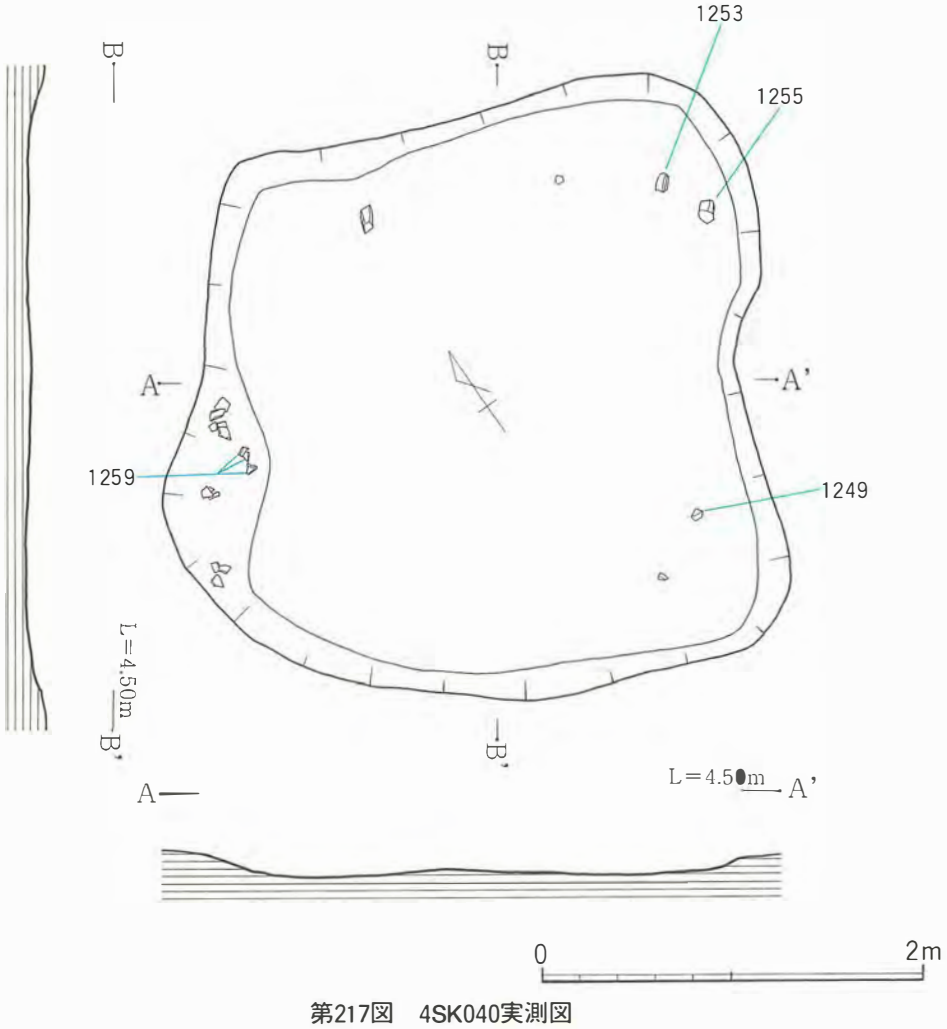
Ⅴ－26・27グリッドに位置する土坑である。掘り方は不整形で凹凸がある。長軸で3.1m、短軸で3.0m を測る。緩やかに落ち込み、深さは最大で確認面から10cm ほどである。水田遺構に関係する遺構と推定したがそれ以降の遺構である可能性もある。出土遺物からは、7世紀後半から末にかけての時期が想定できる。

［出土遺物］【第218図・第258図1617】

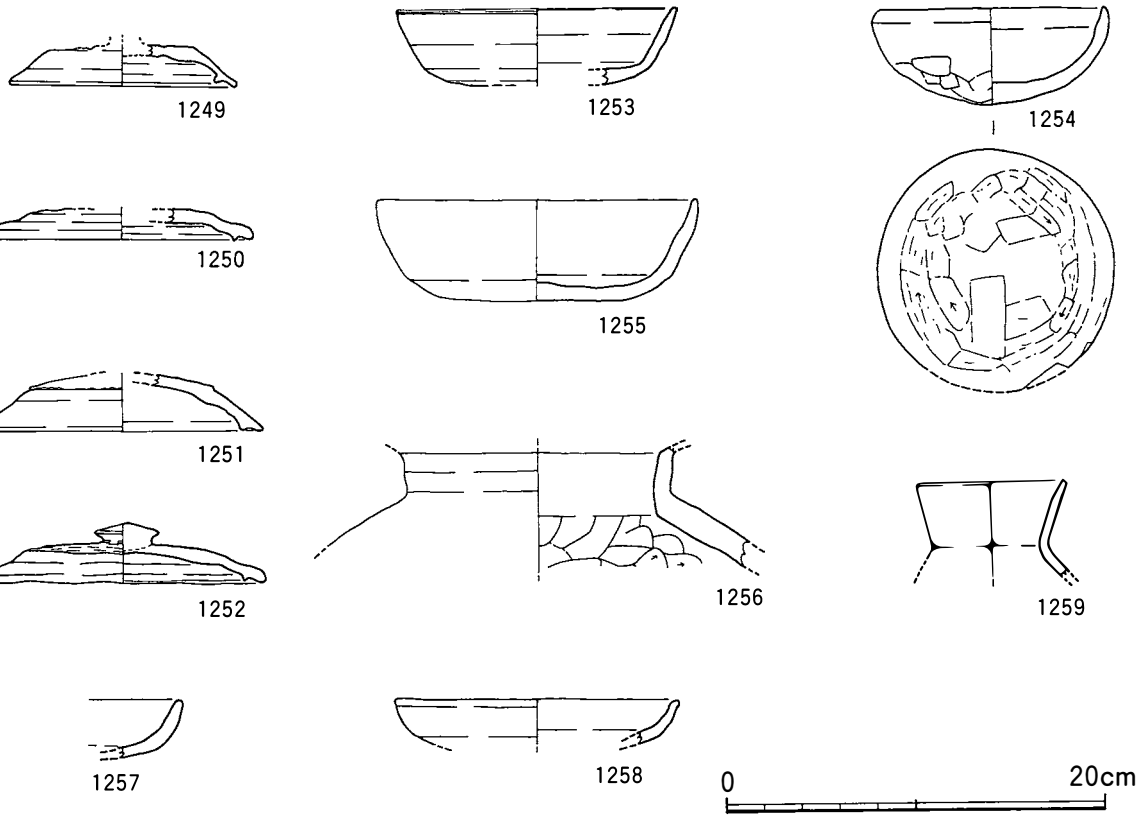
この遺構から出土した遺物のうち図化したのは、須恵器坏蓋1249、須恵器坏1253、須恵器高坏1617、土師器坏1254・1255、土師器壺1256・1259である。

須恵器蓋1249は、宝珠つまみのつくもので外器面天井部は回転ヘラ切り離し痕が残り、器高が高めのものである。返しはわずかに認められるが、内側に入っている。口径は11.7cm を測る。坏1253は口縁から体部下部までの破片で、復元口径が15.5cm、器高が3.6cm 以上を測る。底径は稜線部分で10cm ほどである。

須恵器高坏1617はグリッド一括に入れていたがここで述べる。脚部は欠損し、坏部だけが残る。坏部はか



第217図　4SK040実測図



第218図　4SK040・4SD051・4SD066出土土器実測図

なり直に立ち上がり、口縁端部がやや肥厚する。復元口径は13.8cm を測る。底部付近は回転ヘラ削りが入る。

土師器坏1254は、口縁部がやや肥厚し端部で細くなる。外器面には口唇部から1cm 弱のところに稜線が巡る。外底面は手持ちヘラ削りが施されている。内外面とも黒色顔料が丁寧塗られている。在地系の土器である。口径が11.7cm、器高が4.9cm を測る。1255は復元口径が17.1cm、高さ5.2cm を測る大型の坏で、内外器面には赤色顔料の痕跡が残り、全面に塗布されていたようである。口縁は内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味になる。外来的要素が強い。

1256は混入したもので、古墳時代前期の二重口縁壺の頸部から胴部上位部分である。頸部は直に立ち上がる。内器面にはヘラ削りが施される。1259も同様に古墳時代前期の小型壺の口縁部から頸部までの破片である。口縁部はかなり直に立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。

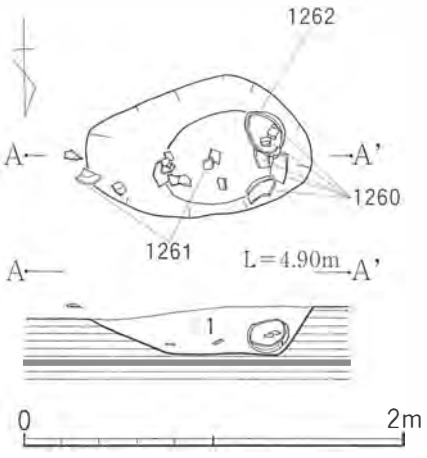
○4SD051【第251図】

この遺構は、先の古墳時代の節で述べている溝遺構と平行になる状況で出土している。この溝自体は玉名市側の調査区まで続いている。断面は緩やかに落ち込み、途中で屈曲しながら伸びる。水田跡に伴う溝遺構として考えられる。

［出土遺物］【第218図】

この遺構に伴うのは第218図中の須恵器1250・1251、土師器1257・1258である。

須恵器蓋1250は、破片のため頂部が欠けツマミの有無は不明であるが、他の類例と形態から判断してこれにはつまみがあったものと推定できる。かなり水平に近いが返し部分でやや横に伸びるようになる。返しはほとんど退化し、わずかな痕跡が残る。復元口径は13.6cm を測る。蓋1251は1250よりも器高が高く、やはりつまみがつくものである。返しはほとんど退化するものの痕跡としてはしっかり残っている。天井頂部にはヘラ切り離し痕がそのまま残る。復元口径は14.6cm を測る。



第219図　5SK057実測図

1257は土師器の坏で、口径は不明であるが体部が立ち上がり、口縁端部が薄くなっていく。1258は土師器の盤で、体部から口縁部の立ち上がりが割と緩やかで、外器面に回転ナデが残る。復元口径は15.0cm を測る。

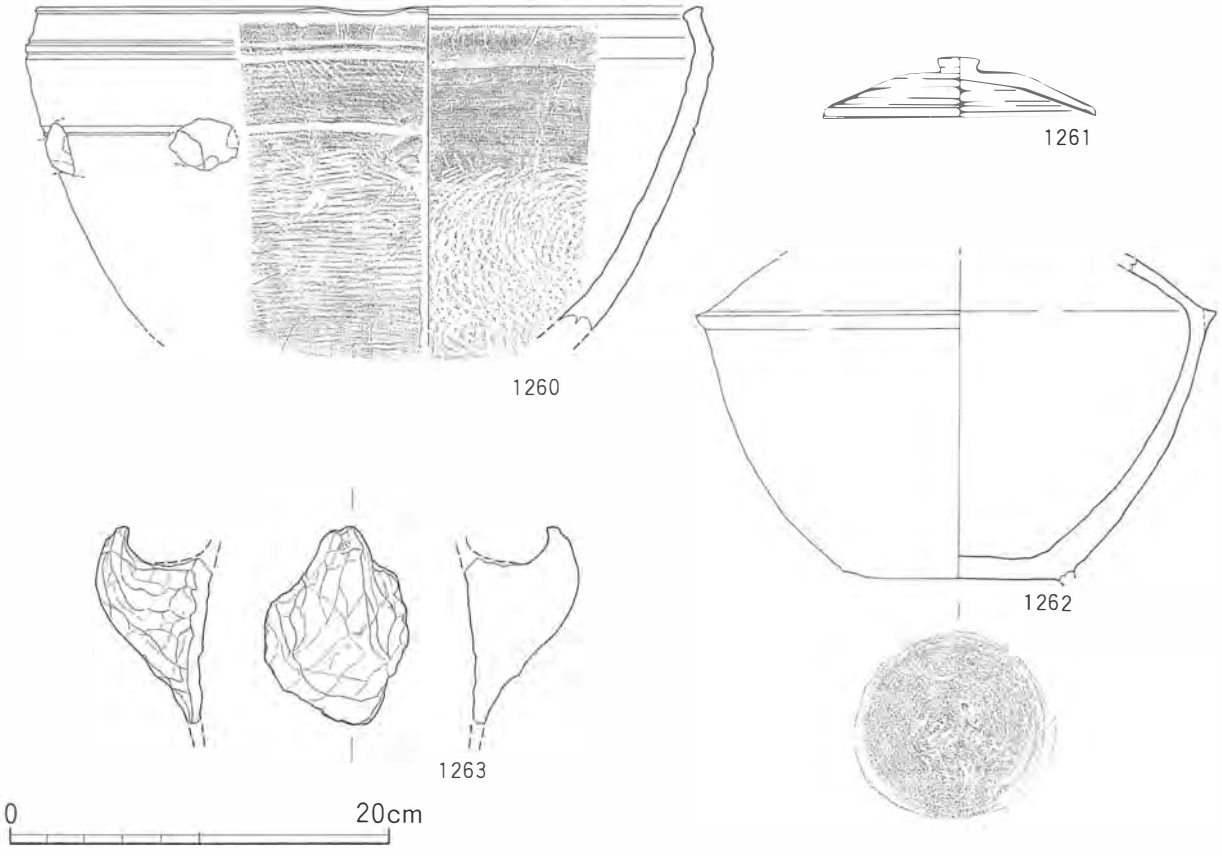
○5SK057【第219図】

c－34グリッドに位置する土坑である。遺物の出土はあるが近世の溝近くでもあり、何らかの撹乱によるものかもしれない。不整形である。確認に際しては何度も精査し輪郭を抽出したが、明確にはできなかった。ただ、埋土の違いを頼りに掘り進め形態を確認した。平面形は不整形な楕円形を呈している。長軸が1.2m、短軸が0.52m ほどで、確認面からの深さは25cm ほどである。埋土中から古代の遺物が出土した。

埋土は、一層のみで灰黄褐（10YR4/2）を呈する、あまり締まりのない粘質土である。少量粒子が混じり、極少量焼土粒子（直径1cm 程）が混じる。

［出土遺物］【第220図】

1260は須恵器の片口鉢である。外面胴部に把手の痕跡が、類例から一対持つと推定できる。口径が35.0cm、復元器高16.9cm を測る。内器面には同心円タタキ当て具痕が残る。1261は須恵器の蓋である。返しがなくなり、縁が直に立つ。擬宝珠ツマミを持つ。口径31.0cm を測る。1262は須恵器の長頸壺の胴部から底部にかけてのものである。胴部の屈曲部に突帯状の突き出しが回る。高台が付くが外れている。胴部の最大径は



第220図　5SK057出土土器実測図

27.2cm を測る。1263は土師器の甑の把手で先端部はとがっている。

○5SK058【第221図】

これも上記と同様で同じ性格の遺構？の可能性がある。不整形な輪郭であるが、埋土の撹乱の影響も否定できない。かなり不整形で、調査の際の遺構の確認違いの可能性はある。ただ遺物の出土はこの範囲に限られているので一応以降としておく。確認面からの深さは15cm ほどである。

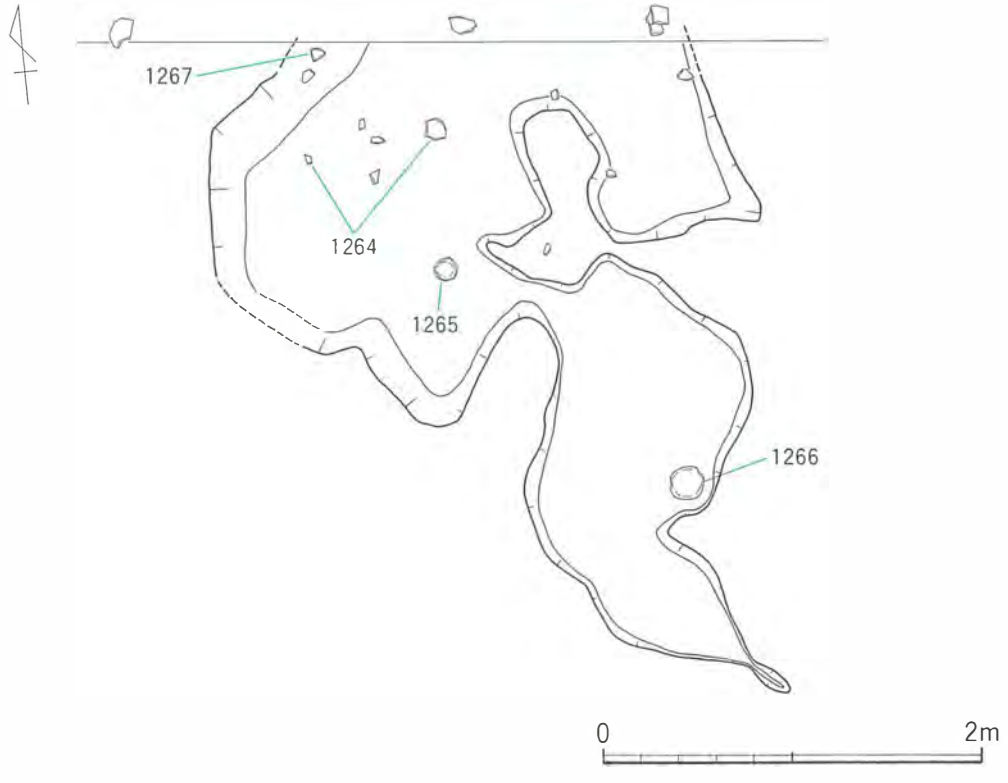
［出土遺物］【第222図】

いずれも須恵器である。1264は低いツマミのつく蓋である。返しはなく端部の立ち上がりも低い。口径は14.1cm、器高はやや高く2.7cm を測る。1265は坏である。口径12.4cm、底径8.1cm を測り、ともに径が広いが、器高が3.4cm を測り低い。外底面には回転ヘラ切り離し痕が残る。1266と1267はともに高台の付く盤である。1266は口径17.0cm、底径13.8cm、器高2.8cm を測り、1267は復元口径18.6cm、復元底径14.0cm、器高2.5cm を測り、ほぼ同時期のものである。

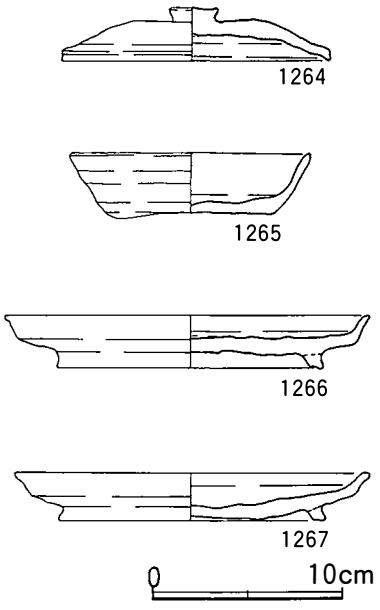
（6）4SX038及び関連遺構と出土遺物

○4SX038【第223図～第225図】

この遺構はいくつかの遺構の複合したものと考える。調査Ⅶ区で確認したものでY－28グリッドの南側からY・Z－29へと青灰色の粘土層を認めた。遺物がかなりたくさん集中する場所であった。7世紀後半～古代の土師器・須恵器が完形に近い形で次々と出土した。掘り進める中で井戸跡（4SE043）を確認した。先に延ばしていくと東西に走る溝状遺構に到達した。この遺構は上部に多量の古代の土師器・須恵器を包含していた。この遺構は調査Ⅷ区にも続き、一連の遺構として処理することとした。調査中は第4次調査では井戸から大溝状遺構に流れ込むまでをSX－38とし、大溝状遺構をSD－49として処理していた。ただ、遺物



第221図　5SK058実測図



第222図　5SK058出土土器実測図

取り上げに際してはSD－49の上面をSX－38とした。また、第５次調査では当初からこの大溝状遺構をS－049として処理していた。もちろんその上面には古代の遺物が入っていた。このように調査中では遺構に対しての首尾一貫性がなかったので整理の際に混乱することとなった。そこで整理段階では困難を極めたが、一応Y－28グリッド南から大溝状遺構に至る部分は4SE043を含めて4SX038とまずとらえ、さらに大溝状遺構の古代の遺物の出土する層までも4SX038に含めることとした。したがって、大溝状遺構にかかる4SX038と4SX049は一部共有する形になった。遺物の仕分けは単純に古代の遺物の入っている層までとしたが、たぶん当時水の流れがあった場所と考えられるので遺物が水流の影響で沈み込む可能性がある。したがって遺構の関係は大まかにしかとれられないのも事実である。

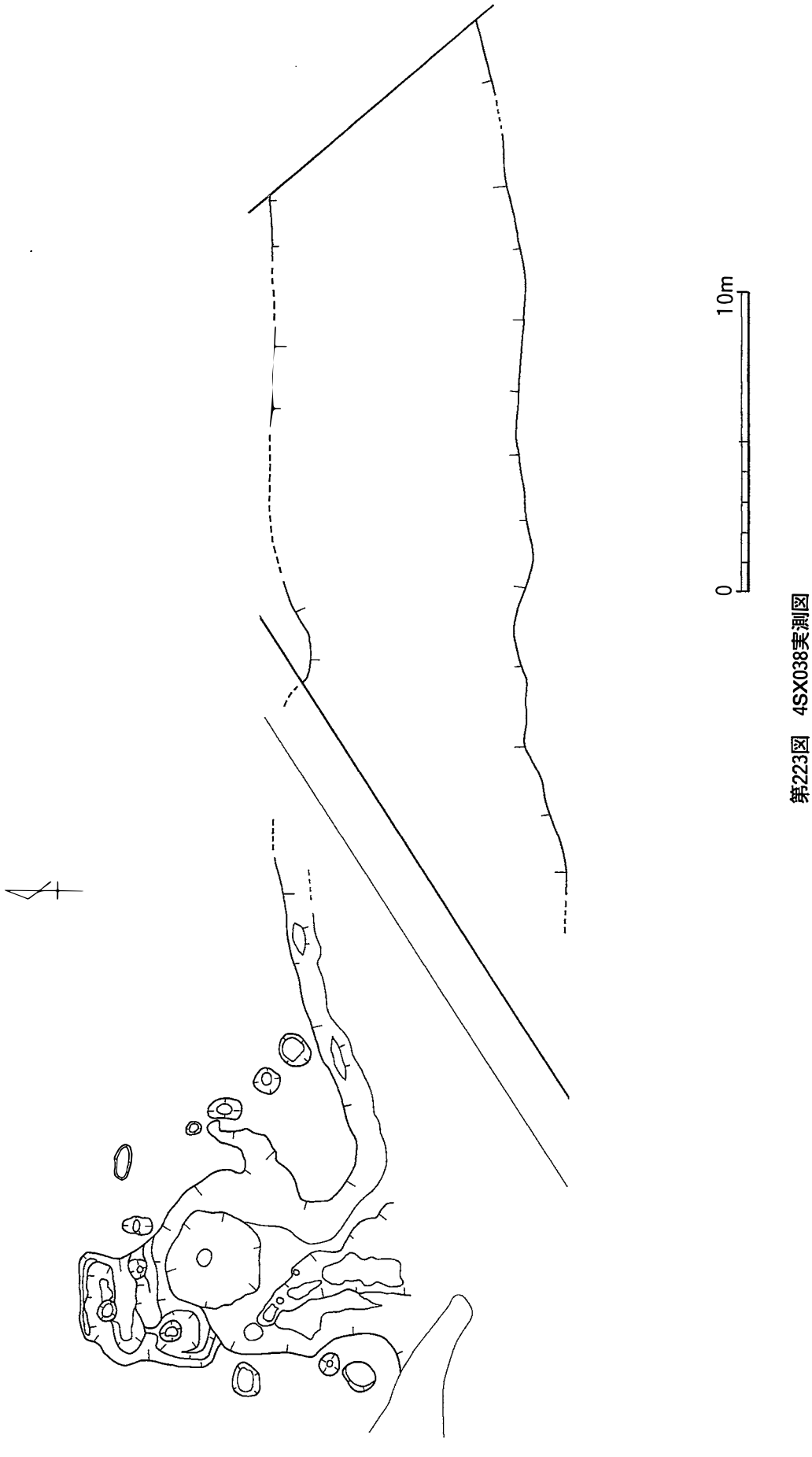
遺構の形状は4SX049の大溝状遺構に井戸を伴う突き出しが着いたようになっており、溝としてかろうじて存続していた4SX049に井戸からの水を流し込むことで水辺の祭祀を行う場所を創設したと推定している。

１層は灰白色（10YR2/2）を呈し、締まった土に細かい粒子を含む。3mm～1cmの焼土粒、3～5mmの炭化物などを含む粘土層である。乾くと非常に硬く締まる。粘性はあまりない。2層は黒褐色（5Y2/2）を呈するやや締まった土に少量の酸化鉄を含む。粘性が高く、やわらかい粘土層である。部分的に（上層と下層に２～3mmの炭化物様の黒色の粒子を含む。また、全体的に酸化鉄の縦縞や塊を含む。1層より灰色が少し濃い。3層は黒褐色(2.5Y3/1）～オリーブ黒色(7.5Y3/1）を呈し、きめ細かい土に酸化鉄・少量の炭化物を含む。2層とほぼ同じ性質だが、炭化物粒子・焼土粒と思われる赤い粒子や黄色い粒子を多く含む。4層は黒褐色(10YR3/1)～黄灰色(2.5Y4/1）を呈し、きめ細かい土に酸化鉄・微量の炭化物を含む。2層と３層より更に暗灰色が強くなっている粘土層である。2、3層よりやわらかく粘質も強い。より６層に近い。所々に炭化物粒子や黄色い粒子、酸化鉄の帯を含む。5層は、黒色（5Y2/1）～黒褐色（2.5Y3/2）を呈し、きめ細かい土に酸化鉄・微量の灰褐色の土で、細かい粒子を含む。4層とは明らかに違い、砂粒を多く含む粘土層である。炭化物粒子、黄色い粒子、酸化鉄の帯を含み、更に６層に近い、暗灰色に近い色をしている。６層は、黒褐色（2.5Y3/1）を呈し、きめ細かい土に細かい粒子を含む。オ①層は、暗灰色を呈し、やわらかくて粘性の高い粘土層である。井戸の4SE043内の最上層と思われる。4SX038内で4SE043を遺構として認識できた最初の層である。

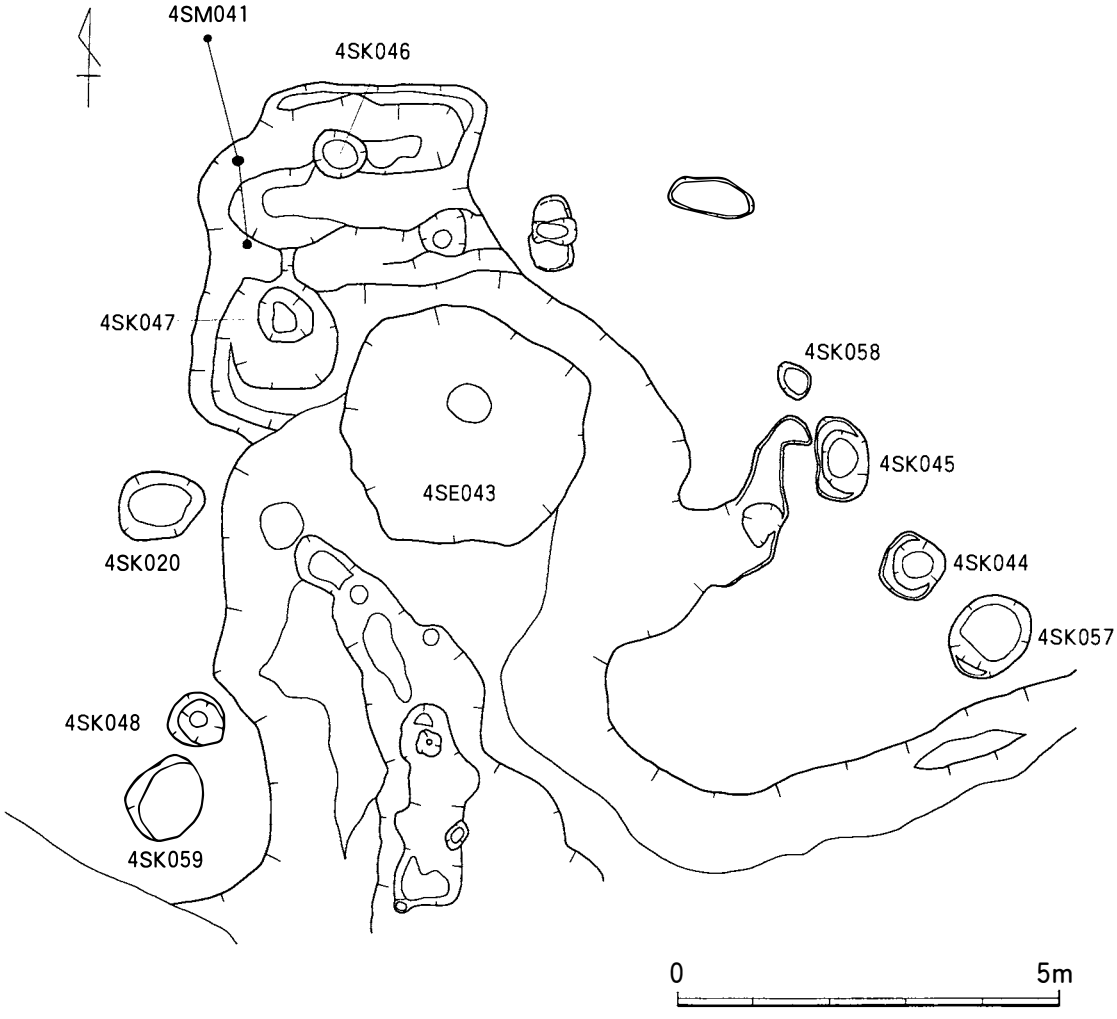
［出土遺物］【第226図～第242図】

出土した遺物には器種の特異性がある。極端に器種が坏等に集中する傾向がある。しかも完形もしくは当時完形だったと思われるものの多さである。

図化したのは、須恵器（坏蓋48点、壺蓋３点、坏24点、埦６点、盤４点、高坏５点、耳付坏２点、鉢２点、中甕６点、大甕２点、壺13点、横瓶２点、提瓶１点）、土師器（坏蓋４点、埦３点、甕10点、壺２点、脚付鉢１点、鉢１点、土錘１点、古墳の壺７点、甑の把手３点、古墳甕１点）、金属器（耳環1、帯金具１）、木製品９点である。



第223図　4SX038実測図



第224図　4SX038部分実測図

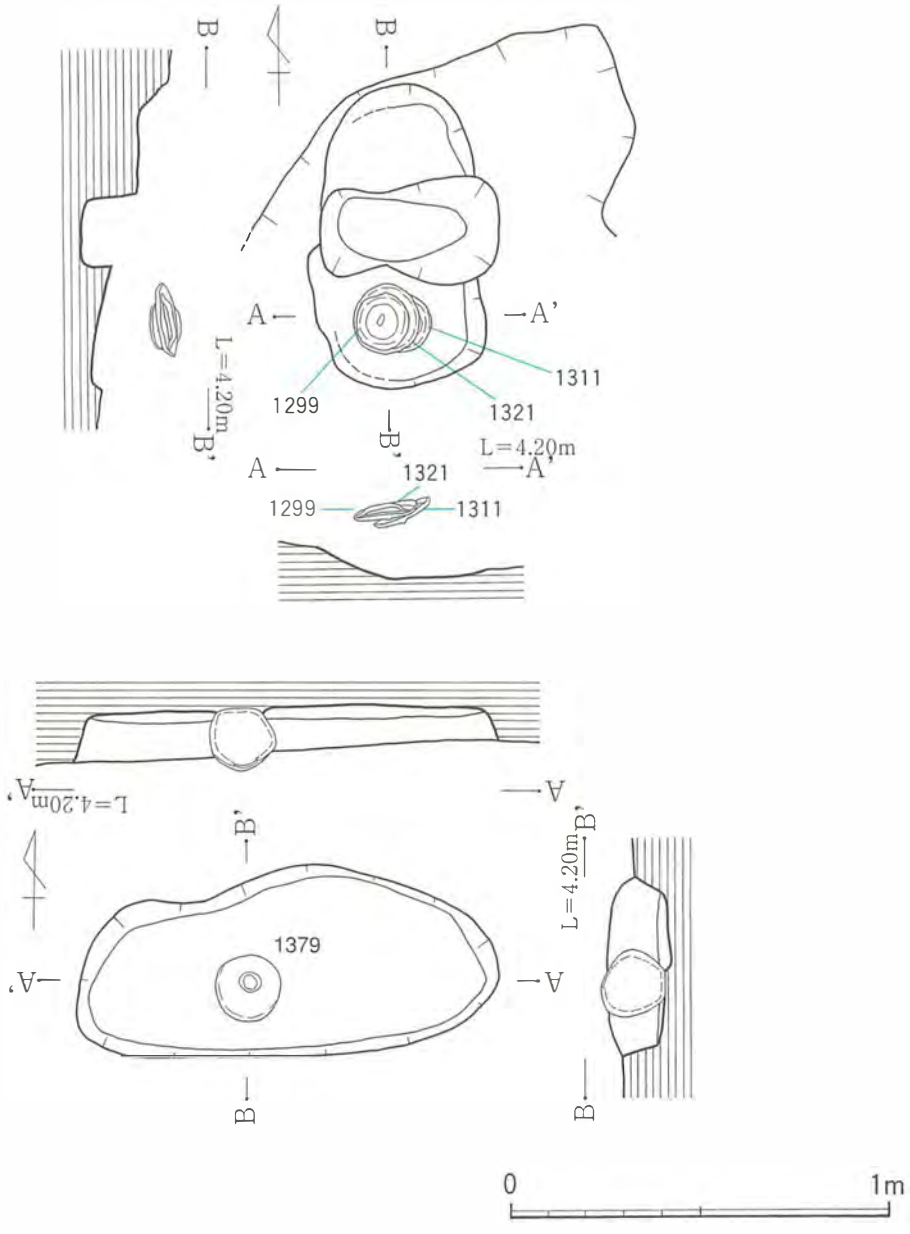
須恵器は1268～1384である。いずれも古墳時代終末から古代にかけてのものがほとんどである。身に返しの残る坏・蓋と、それが消えてしまいつまみの付く蓋が出土し、層的に分離は困難であるが、傾向は編年に沿うようである。

提瓶が１点出土したが、これは溝の上部からかなり散乱した状態で出土しており、かなり離れたグリッドとの接合もあるので、流水により流れ込んだ物である可能性が高い。

1268～1295、1297、1299、1301、1303、1305～1311、1313～1317、1319～1323、1325は、須恵器の坏蓋である。形態的には大きさと返しの有無、器高などにより細分できる。時期的には７世紀後半～８世紀前半までのものが主である。高台付坏においてもほぼ同時期のものが出土している。盤は小型のものが多い。甕類は少なく、たまたまそこに入ったものの可能性がある。入ったものは破片が多い。遺構の上部で見つかったものには他の遺構との接合例が多い。

1268・1269は坏蓋で古手のものである。口径が9.2cm、器高が4.0cm を測る。1269は復元口径が12.0cm を測る。これらは身に返しを持つものの蓋であろう。1270・1271・1325は壺の蓋と考えられる。体部が直になって口唇部に至る。1270は口径が9.7cm、1271は口径が9.0cm、1325は復元口径が9.6cm を測る。1270は他のものに比べて器形は異なる。1270・1325は天井部外器面にヘラ記号が書かれる。

1272～1275は天井部にはツマミがなく、短い返しがあるもので、返し部がやや突き出すものである。いず



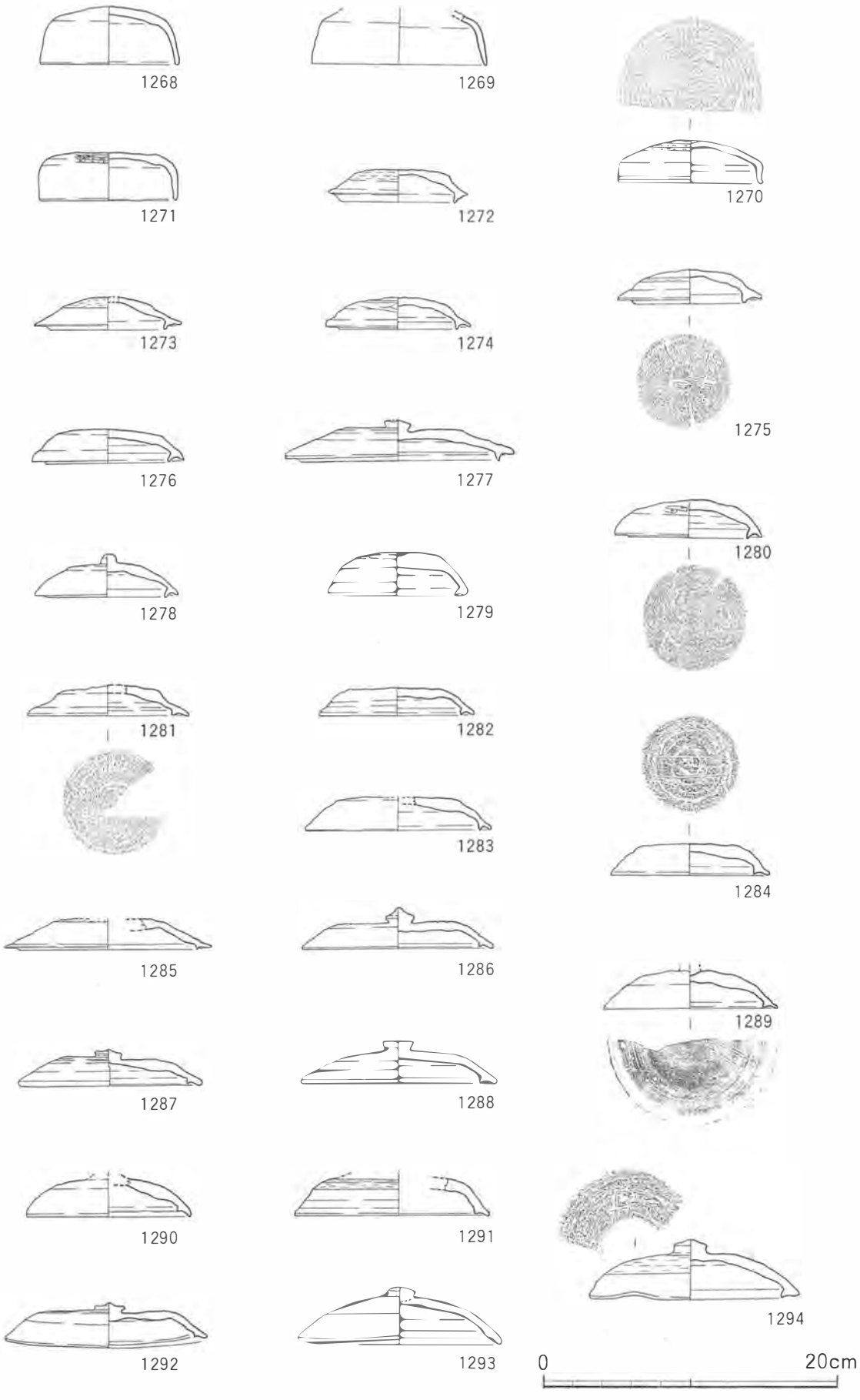
第225図　4SX038部分実測図

れも天井部の頂部付近には回転ヘラ削りが施される。口径は10cm 前後を測る。器高は2.3cm ほどである。1275には天井部内器面にヘラ記号が入る。1276・1279・1280も返しを持つものであるが、返し部は天井部から口縁までそのまま伸びるものである。1276・1280の口径は10cm ほどで、器高は2.5cm ほどを測る。1279は器高が2.9cm を測る。1280の内器面にはヘラ記号が入る。

1277は擬宝珠を持つ蓋で、返しがやや突き出ている。口径が15.7cm を測る。1278は宝珠を持つ蓋で、返しはやや出ている。復元口径は9.8cm を測る。

1281・1282・1283・1284は口径が10.5cm 前後を測るもので、返しは短い。1285は、復元口径が12.2cm を測る。宝珠の有無は欠損しているため不明である。

1286～1294・1303・1305・1306はツマミを持つもので、ツマミは擬宝珠である。返しはほとんど退化している。口径で2種類に分けられそうである。口径が11.5cm ほどのものと口径が13.2cm ほどのものである。1289は内器面にヘラ記号、1294は外器面にヘラ記号が付けられている。1301はツマミがないが欠損しているだけであろう。口径は15.0cm を測る。1299もツマミが欠損していると考えられ、同様なものであろう。口



第226図　4SX038出土土器実測図

径は15.2cm を測る。

1295・1297は返し部がしっかりしたもので、1295がよりはっきりとしている。口径はともに11cm ほどを測る。

1307・1308は破片のため正確ではないが、ツマミを持ち、返し部がまだ残るものである。復元口径は16.8cm、18.0cm を測る。

1311・1310・1313～1315はツマミを持ち、返しがなく、口縁部が少し立つものである。口径に差があるので分類できそうである。

1309・1317は輪状ツマミを持つ蓋である。1317は天井頂部にヘラ削り痕があり、そこに輪状ツマミを付けるものである。形態的差があるので本来異なるものかもしれない。

1319～1323はツマミを持つ蓋である。口縁部はやや開き気味の立ち上がりがある。ツマミの形態はやや平たいものがある。1322は宝珠ツマミであるが、形態が異なるので坏蓋ではないかもしれない。

坏身は1296・1298・1300・1302・1304・1326～1332・1343である。1296・1302・1327は口径が異なるが、体部を立ち上げたうえで、底部はヘラ削りのあとナデ調整で済ませたもので、やや古手のものである。1298・1300・1304・1328・1329・1330・1331・1332はヘラ切り離しののち丁寧なナデ調整で底部を平にしている。1298・1304・1328・1329・1330は口径が11cm ほどで、1300はやや大きく口径13.7cm を測る。1331は復元口径が11.2cm、器高はやや高く3.8cm を測る。1332も口径は大きいと考えられるが、口径は不明で底径は7.6cm を測る。1326は受け部を持つ坏身で立ち上がりは低い。

高台付き坏身は1312・1318・1324・1333～1339である。1312は復元口径が13.6cm、器高が5.1cm を測る。坏部は立ち上がりが直である。高台は断面が明確ではない。外底面には爪形状圧痕がある。1318・1324は大きさが異なるものの、形態はよく似る。やや内湾気味の体部と外面に反るような高台に特徴がある。1318の口径は12.7cm、器高5.1cm を測る。1324は口径16.0cm、器高6.2cm を測る。1333は高台がややはねるものである。口径が11.8cm、器高が4.1cm を測る。1334は口唇部が反り返る。復元口径が13.8cm、器高が4.7cm を測る。1335は体部が内に内傾するもので､高台底面に沈線が入るものである。小型のもので復元口径が10.6cm、器高が3.7cm を測る。1337は体部から反り返るもので埦に近い。復元口径が14.8cm、器高が5.7cm を測る。1336・1338・1339は底部ののみで全体は不明である。

1340は一応坏にしたが、口縁部にゆがみがあるが、別の器種かもしれない。

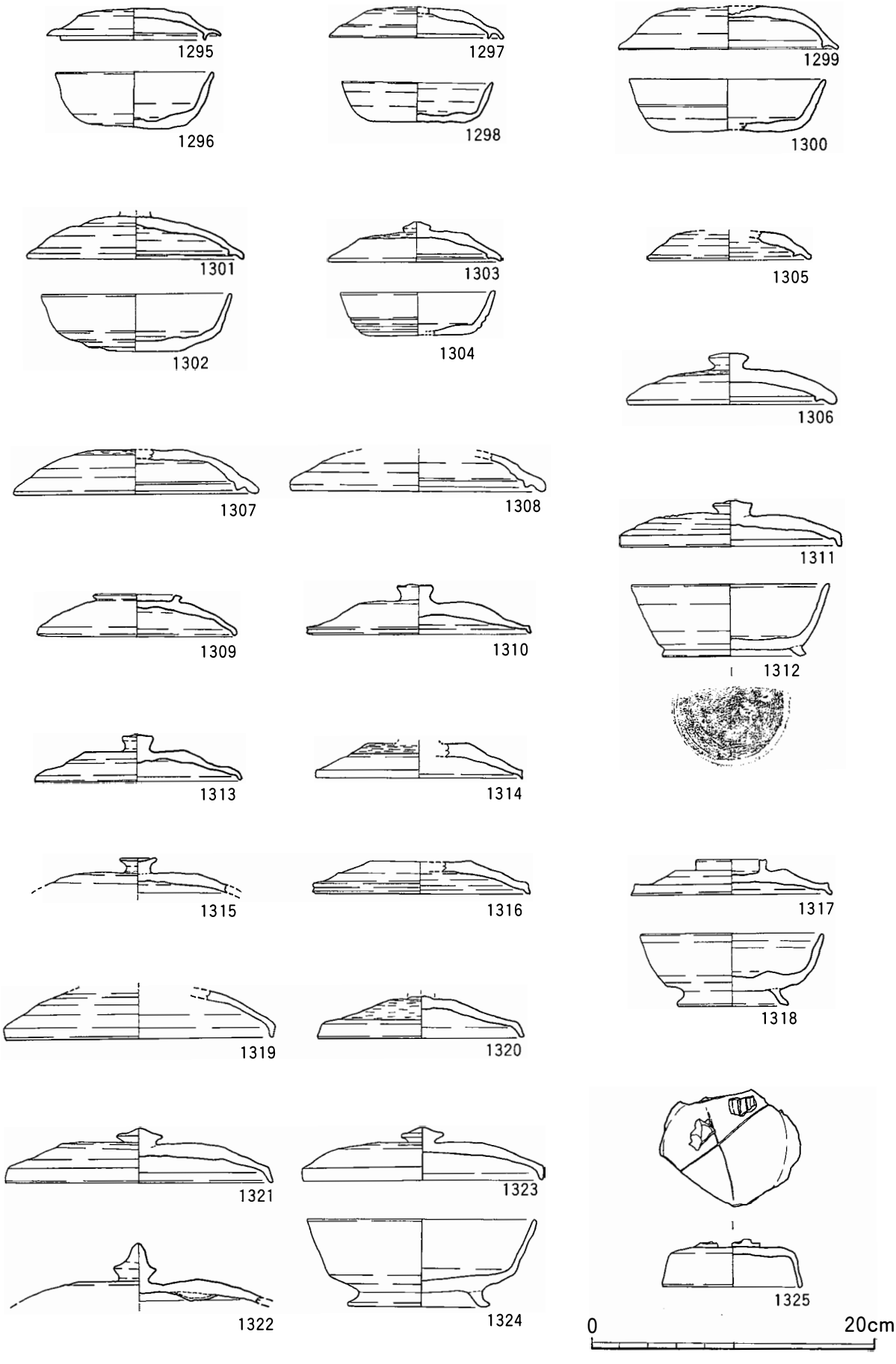
埦は1341～1345・1347である。1343は高台の付かないものである。坏よりも体部が高い。口径が14.3cm、器高が5.2cm を測る。1341は高台が直で高いものである。器高は不明である。1342は高台が短いが直に延びるもので、口縁部まで体部も直に伸びる。1344・1345は全体が不明であるが、高台の底部に沈線が入る。1347も全体は不明であるが、体部は直に伸びるようである。

1346は稜埦の破片である。体部の屈曲が入り段を形成する。そこから口唇部にかけて外反する。

盤は1348～1351である。高台の付くのが1348で復元口径が19.0cm、器高が2.8cm を測る。1351は高台のないもので復元口径が15.8cm、器高が2.1cm を測る。1349と1350は破片のため正確にはわからない。1349については壺の可能性もある。

高坏には1352～1356がある。1352は口縁から脚部まで図化できた。復元口径が13.3cm、器高が7.3cm を測る。坏部の大きさが大きくやや外反するものである。1353は坏部が残るもので口縁部はやや断面がとがる。口径が9.9cm を測る。1354は脚部のみである。脚部径が小さいので坏部も小さいものであろう。1355は坏部と脚部の繋ぎ部である。1356は、坏部と脚の上位が一部残る。口径が17.3cm を測る。大型品である。

1357・1358は耳付坏である。2つとも耳の部分だけが残っている。体部・底部が不明なため全体は不明であるが、類例から耳が二つ付くものと思われる。形はあまり似通っていない。



第227図　4SX038出土土器実測図

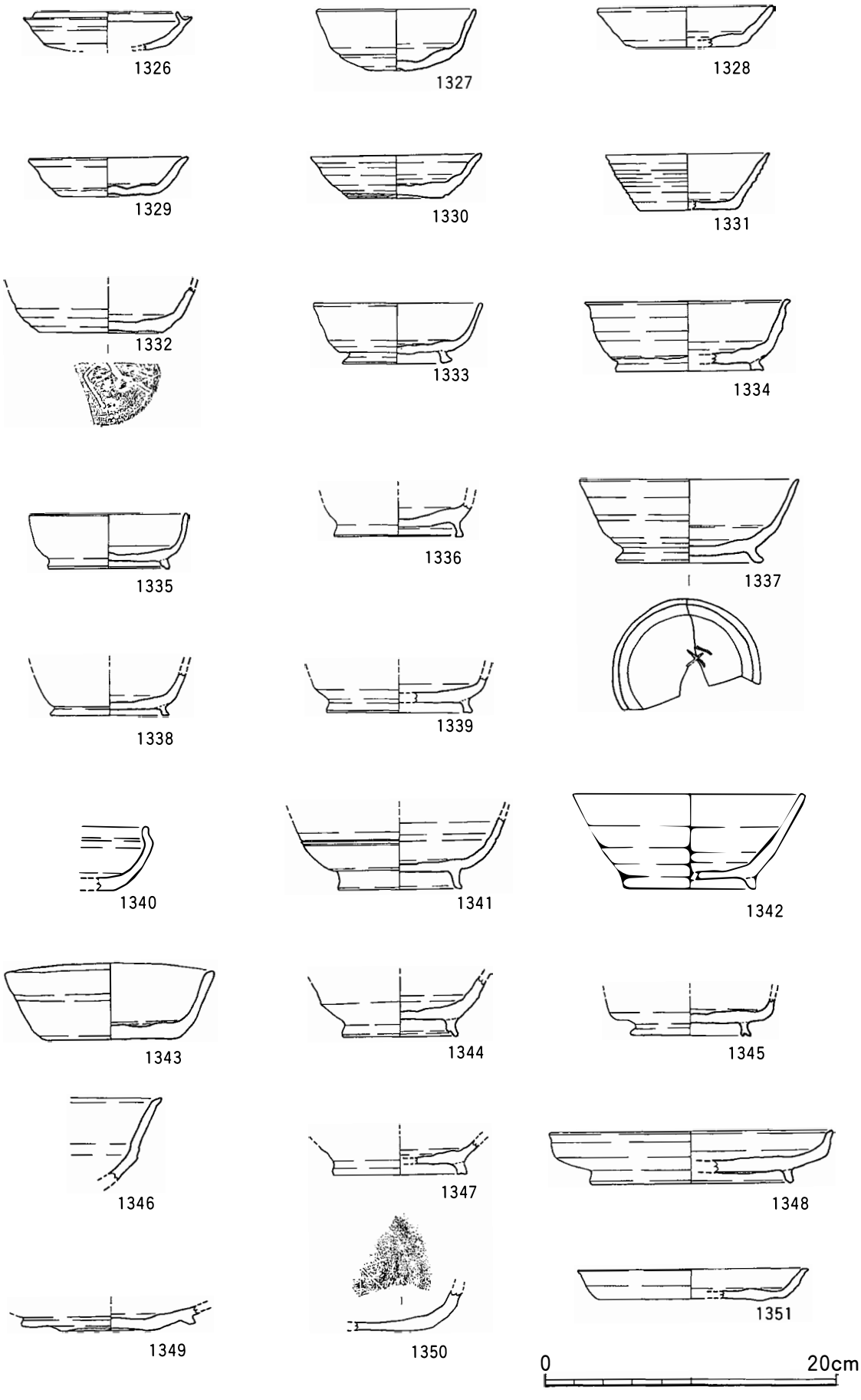
鉢には1359・1360がある。いずれも口唇部から体部までしかない。1359はやや胴部で緩やかな屈曲を示し、外器面にはタタキが見られる。1360は口唇端部が平坦で外器面にカキメが施されていなかったのか。

1361～1368は甕である。1361～1363は口縁部だけで、短く外反した口縁部を持ち、外面に口唇部を作っている。口径は一様ではなく、20cm 前後である。全体的に中型の甕である。1364は口縁部が大きく外反し、口唇部で屈曲するものである。口縁部の長さは長い。外器面には櫛描き波状文を描く。これは大甕である。1365も大甕の胴部片である。内器面に平行の当て具痕、外器面に擬格子のタタキが残る。1366は小型の甕の底部付近である。外器面に格子タタキ、内器面に同心円の当て具痕が残る。1367・1368は同一固体の可能性があるが、微妙に異なる。口縁部はほとんど同じでやや立ち気味に外反する短めの口縁部の復元口径は14.5cm、19.5cm を測る。外器面には横方向の平行タタキ、内器面には右回りについた同心円の当て具痕が残る。1372も同じ器形の甕の胴部と考えられる。外器面には縦方向のタタキが入り横に弱く回転による櫛目状の走る沈線が見える。内器面は同心円当て具痕が残る。これを詳細に観察したところ内器面の磨耗が外器面に比較して強い。なでると滑らかになっている。またよくみれば墨の跡も見えることから転用硯である可能性が高い。

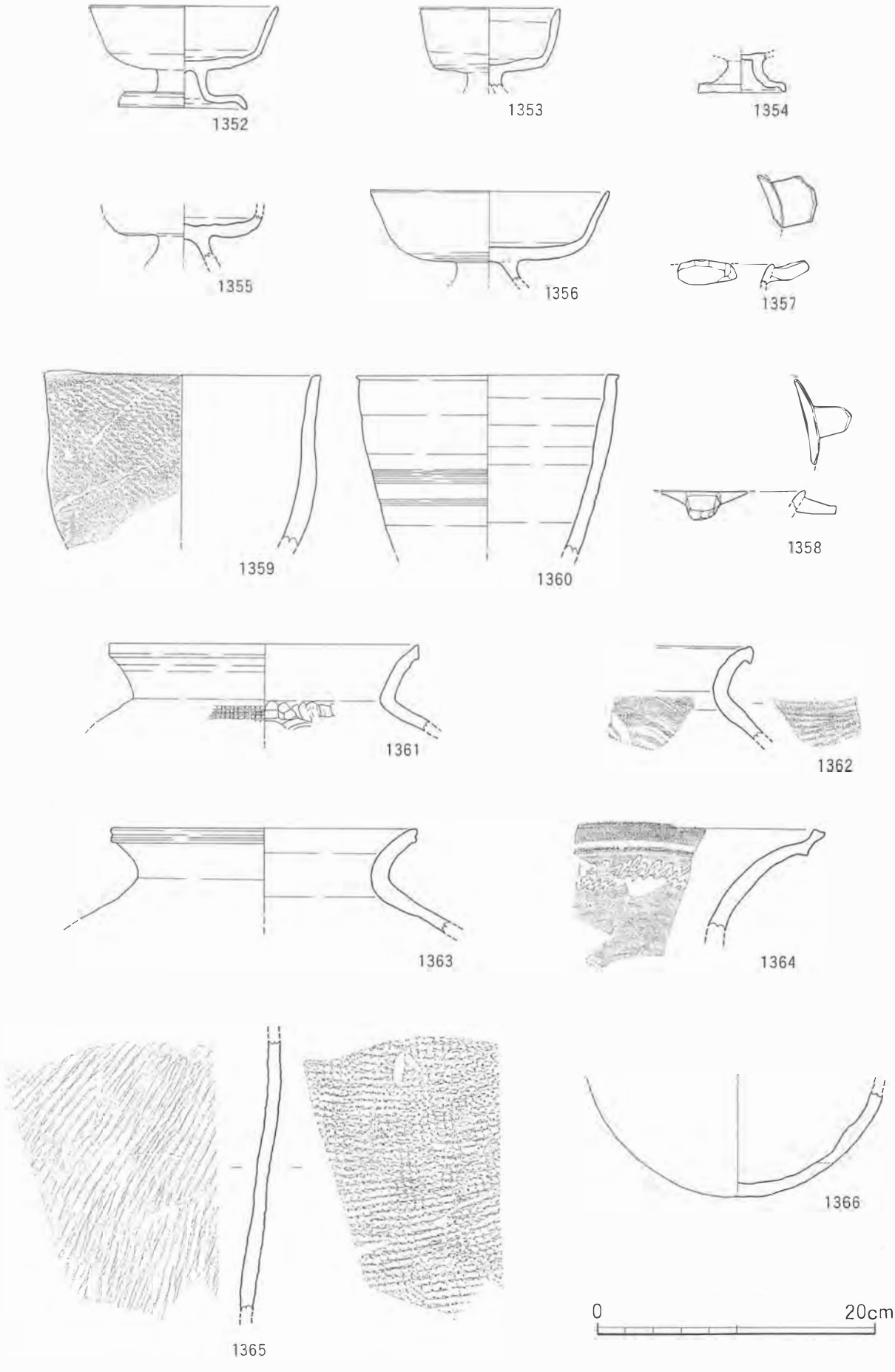
1369～1371、1373、1374～1382、1383は壺である。大きくは短頸壺と長頸壺に分けられ、大きさによってさらに分類できそうである。1369は短頸壺で復元口径が6.4cm を測る。外器面はタタキの後ヘラ削りにより跡が弱くなっている。内器面には当て具痕が残る。1370は高台付きの壺の胴部から底部にかけての破片である。復元底径は9.2cm を測る。内外器面とも横ナデの跡が残る。1371はやや口径の広い広口の壺である。口径は12.6cm を測る。胴部の張りは上位にある。内外器面とも横ナデによる調整痕が残る。1373は、壺の底部で、高台部分が残る。高台部の断面は付け根から直に開き端部は丸まるものである。1374はやはり平底の壺底部である。外底面には車輪文のタタキあて具痕が残る。1375は小型の須恵器細頸壺である。遺構上層の出土である。頸部から口縁部がやや傾いている。全体的に回転横ナデによる調整である。1376は、須恵器の長頸壺である。遺構の上層からの出土である。頸部の径に比較して胴部の復元最大径が22.0cm を測りかなり大きい。1377は須恵器の壺の口縁部の破片としたが、甕の破片の可能性がある。復元口径は8.2cm を測る。1378は、長胴瓶で上層から出土している。外器面には格子タタキが、内器面頸部下には指ナデの跡が残る。1379は長頸壺の胴部から底部まであるもので、4SX038の北側の狭い落ち込みで出土したものである。底部は平底である。最大胴径17.8cm、底径12.6cm を測る。外器面はナデと肩部付近は回転ヘラ削りが施される。外底面はヘラ削りされる。肩部から頸部の間に２本の沈線が入る。1380は壺の底部である。1381は横瓶の破片と考えられる。胴部の片面でカキメが外器面に残る。4SX038の２層からの出土である。1382は短頸壺の口縁部のみの破片である。復元口径は21.5cm を測り、かなり大型のものである。内外器面とも回転ナデ調整である。器表面には口縁の屈曲部に二条の突帯が巡る。火ぶくれがある。1383はほぼ口縁から底部まで形態の残った長胴壺（瓶）である。破片自体は4SX038の上層からⅧ区の包含層にかなり散らばっていた。復元口径は10.6cm、復元最大胴径が20.9cm、器高が30.45cm、復元底径が12.0cm を測る。外器面は平行タタキ、内器面には指押えがほぼ胴部全体に残る。1384は提瓶である。4SX038の２層と、Ⅶ区・Ⅷ区のⅣ層、Ⅴc 層から出土している。胴部表面には同心円状にカキメが残る。最大胴径20.5cm を測る。肩部側面には欠損しているが、わずかに把手が残る。表面はやや平面的で裏面は胴張りしている。全体的に焼きが甘く、器面調整はあまりはっきりしていない。1443は土師器の盤である。復元口径が12.3cm を測る。底部は回転ヘラ削りされる。

1386～1478は土師器で、こちらも器種による出土数の偏りがある。特に坏の多さは須恵器の例と同様でこの遺構の特色を示す。

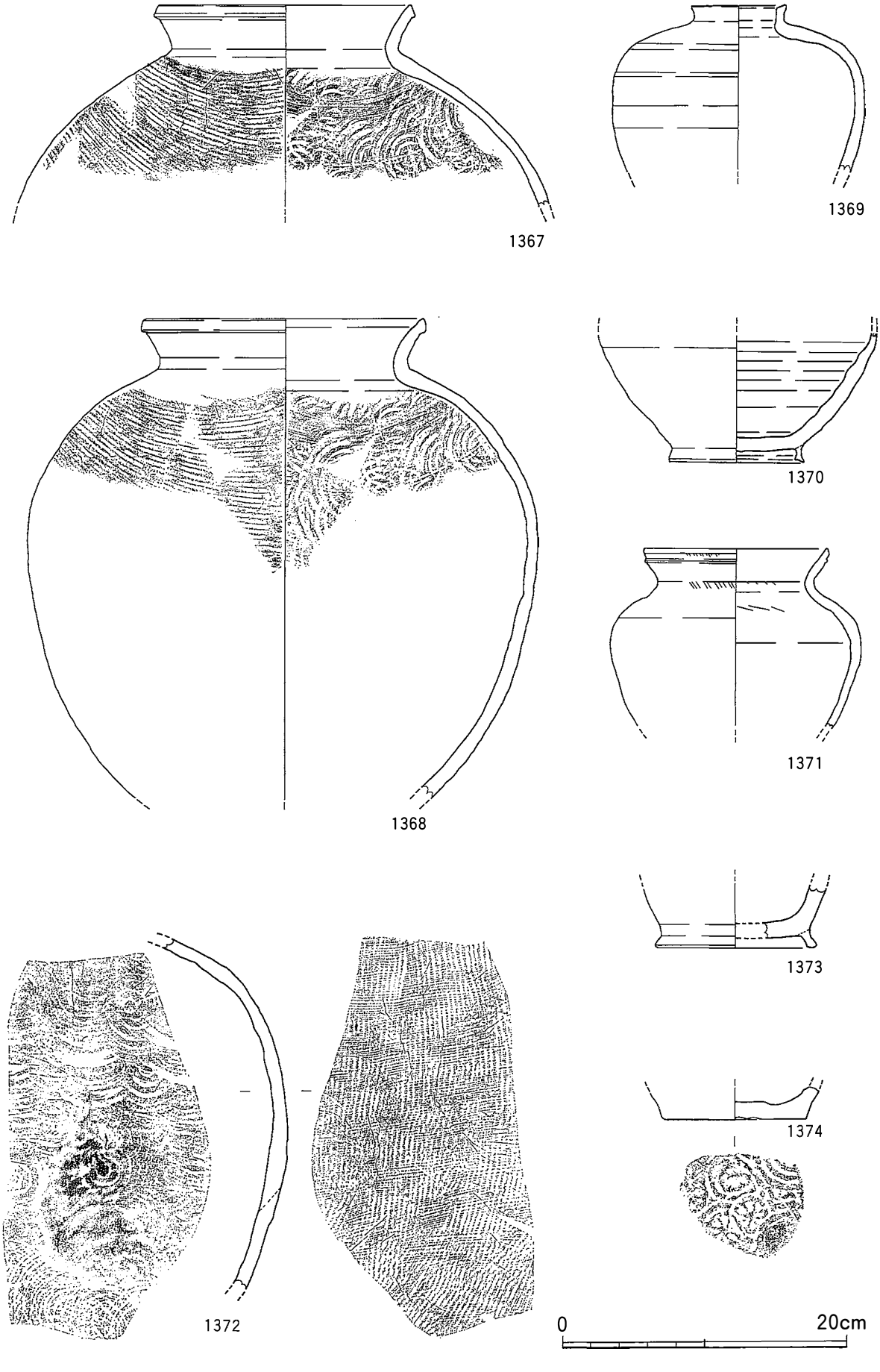
1386～1395は甕である。口縁部の形態と胴部の形態からいくつかに分けられる。頸部から口唇部までの長



第228図　4SX038出土土器実測図

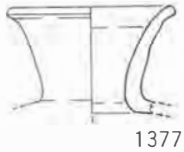


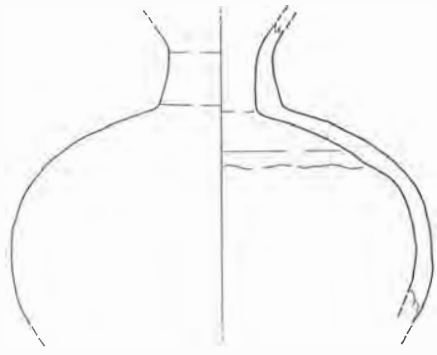
第229図　4SX038出土土器実測図

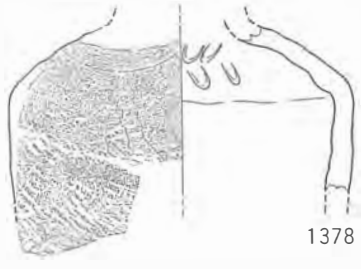


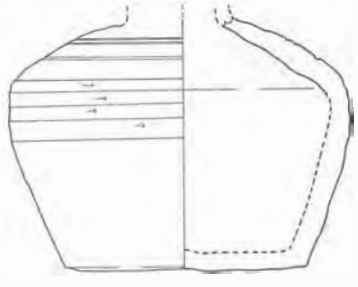
第230図　4SX038出土土器実測図

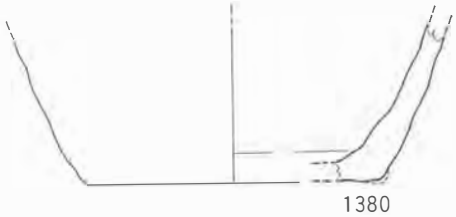
1375

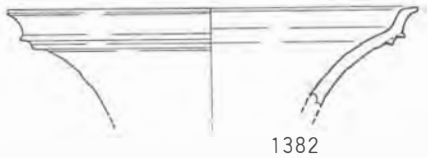

1377

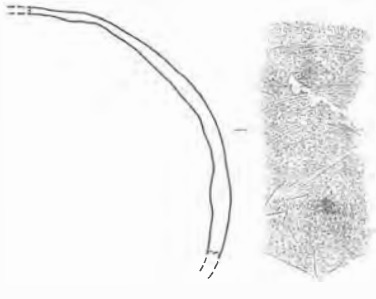

1376

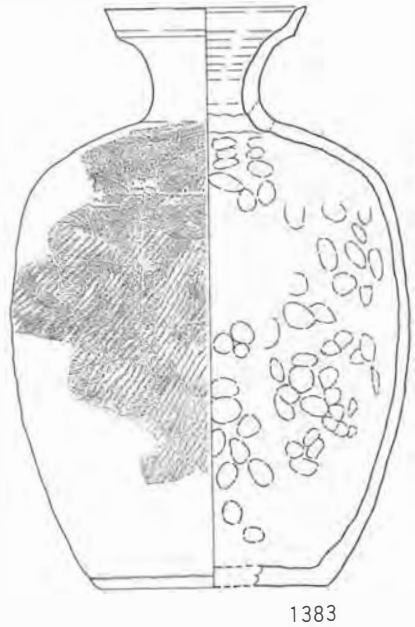

1378


1379

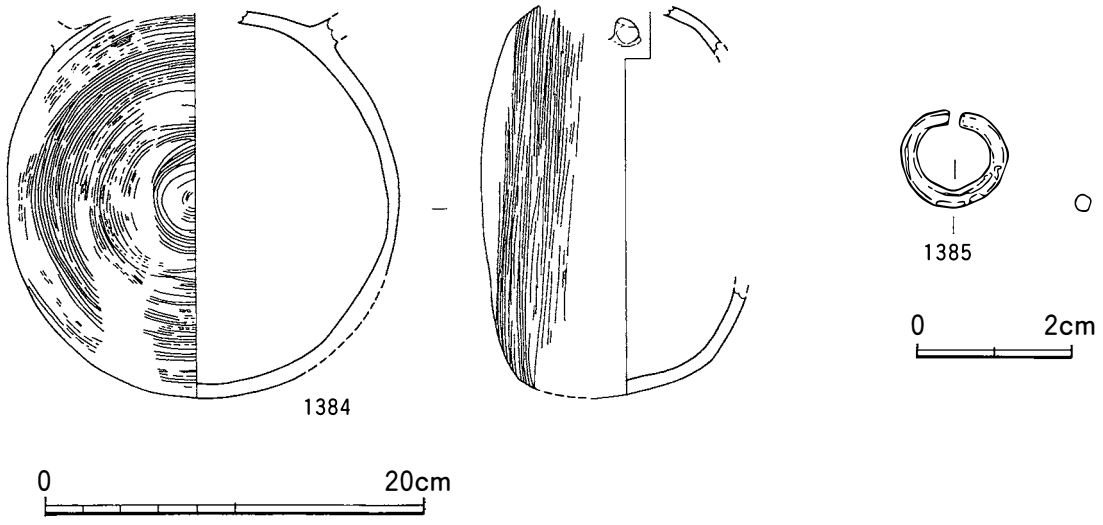

1380


1382


1381


1383

第231図　4SX038出土土器実測図



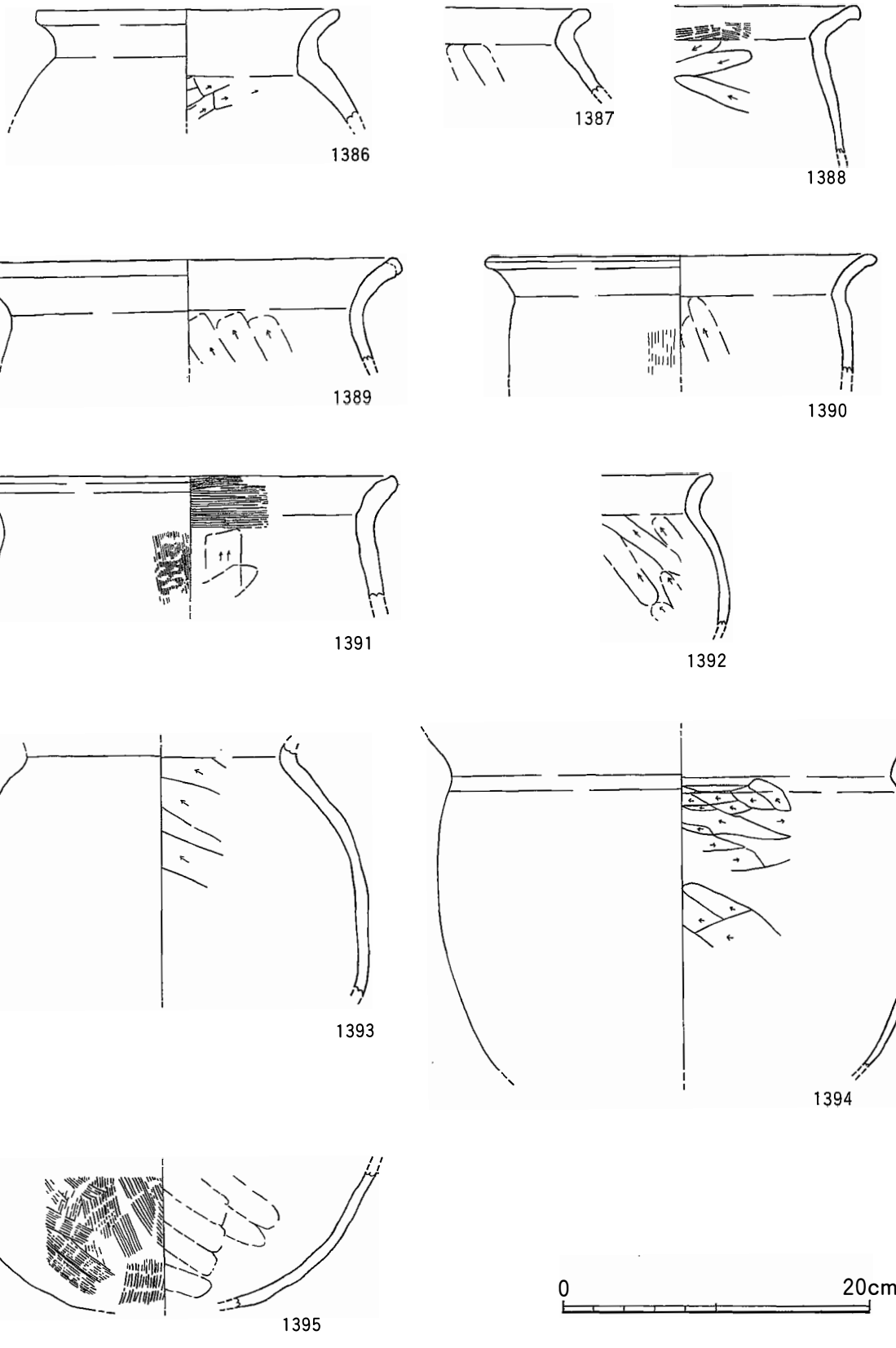
第232図　4SX038出土遺物実測図

さがかなり短く口縁が強く外反し、胴部の張りが大きいものとして1386・1387・1393がある。1392は似るがやや胴部の張りが少ないものである。1386・1387は口径が19cm 前後を測る。1388・1389・1390・1391・1394は、口縁部はやや長く外反し、胴部は頸部からさほど張らずに降りるものである。外器面のハケ目調整と内器面のヘラ削り調整が頸部まで縦方向のものとそうでないものに分かれそうで、それが全体の形態的差異に関係する可能性がある。1393と1395は外器面の一部に赤彩を施しているようである。

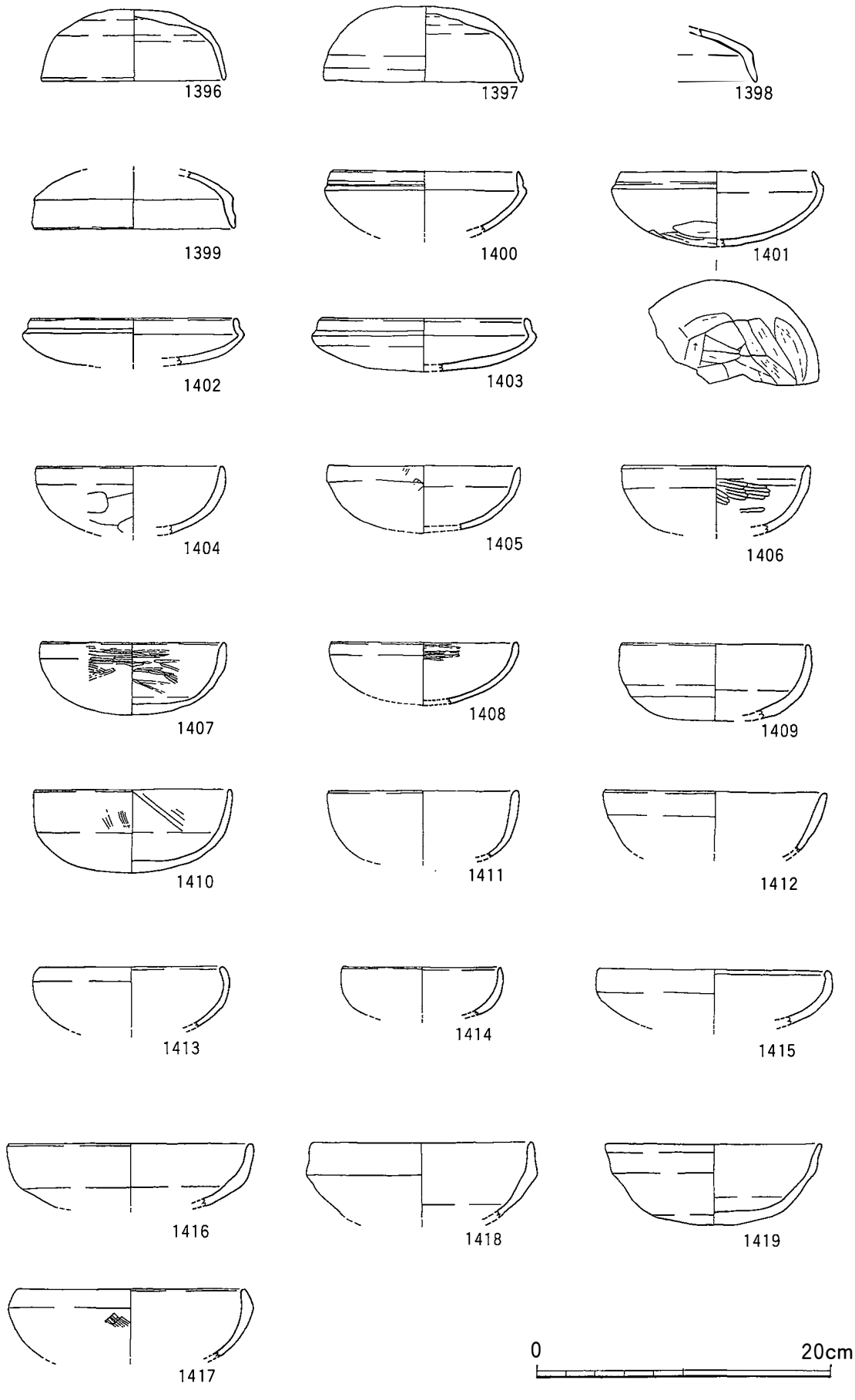
1396～1399は蓋とした。後に述べる坏身としたものと形態的な差異はさほどなく、わずかに口縁部の開き具合が身よりも開くために蓋とした。いずれも須恵器の蓋を形態的に模倣したものと考えられる。1396･1397は口唇部がやや外反し、天井部までの高さが高く、それぞれ4.8cm、5.2cm を測る。口径は13cm 前後を測る。1396の天井部外器面にはヘラ切り離し痕が残り、1397はヘラ削りが施されている。1398・1399は蓋の破片で、口縁部に強い屈曲部分がある。

1400～1439は坏身としたものである。形態的な相違からいくつかに分けられる。1400～1403は５世紀末から６世紀はじめの須恵器の坏身を模倣したものと思われる。ただ、この時期の須恵器自体はこの遺構からは出土していない。立ち上がりは低く、痕跡化した受け部付近に弱い沈線が巡る。全体的には器高の差から5cm 前後のものと3.5cm ２つに分けられそうである。風化しているものもあるが全体的にミガキが施され、外底面にはヘラ削りが施される。また、器面全体には黒色顔料が塗布されているようである。1402と1403は実測図上では異なる個体としたが、出土状況とそれぞれを詳細に観察すると、同一個体である可能性が高い。次に1404～1408は体部中央部より上位ににぶい稜を持つものである。体部の稜より下位には手持ちでヘラ削りが施される。1406・1407・1408は体部内器面には横方向のヘラミガキが施される。口縁部はやや肥厚するものが多い。口径は12.5cm 前後を測る。1406と1408には内外器面に黒色顔料が塗布されている。1409～1411・1416は体部中央部よりやや下位に弱い稜を持つものである。摩耗して調整がはっきりしないものが多いが、外器面底部にはヘラ削りが施されているようである。1409・1411・1416の口縁部はやや厚みがあるが、1410は薄くなる。また1410は内器面に、1416は外器面に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。

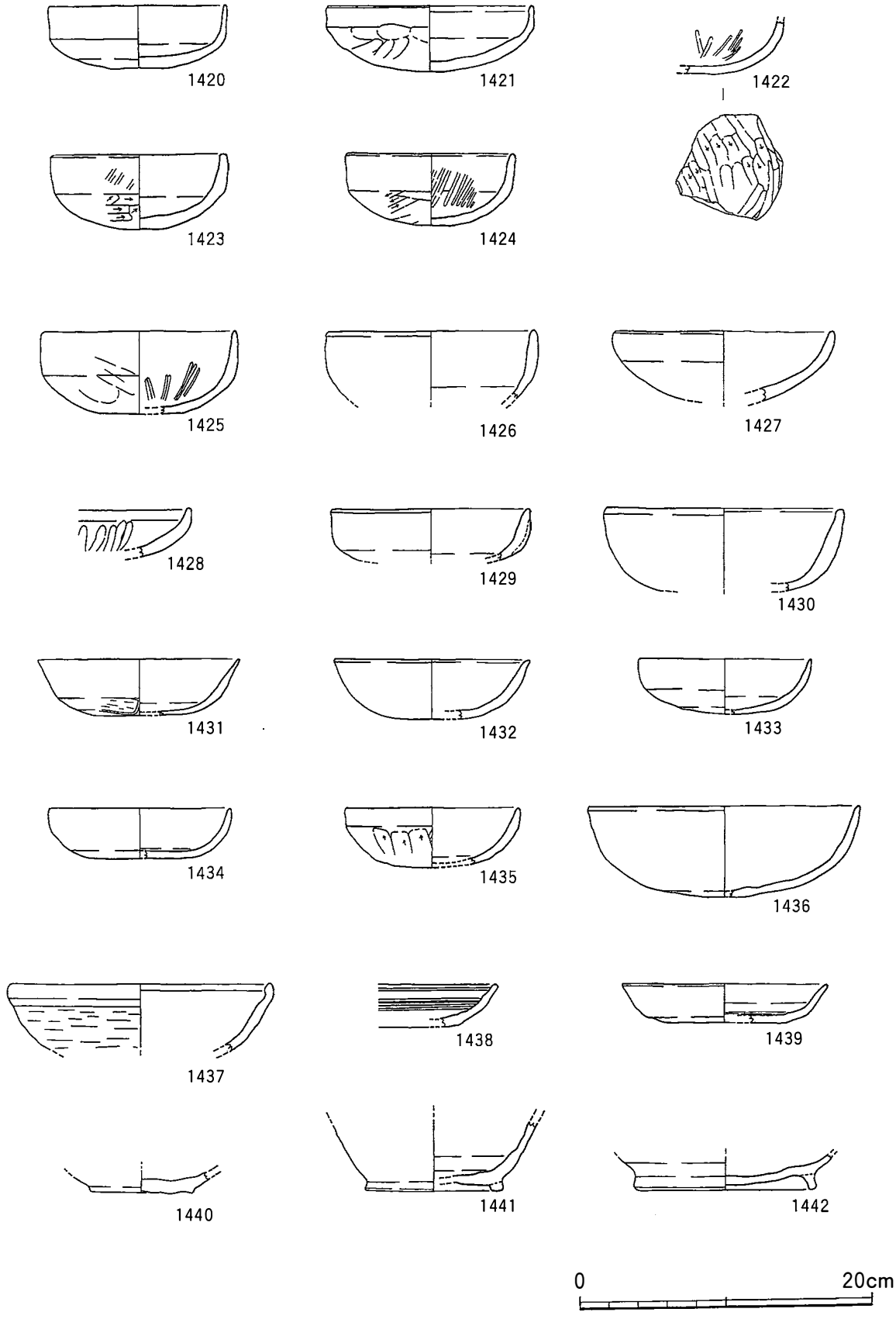
1413は口縁がやや内傾するもので端部は丸めて収める。復元口径は12.2cm を測る。外底面にはヘラ削り痕が残る。全体に黒色顔料が塗布される。1416は、遺構の上位の層から出土している。復元口径は16.6cm を測り、外底面にはヘラ削りが残る。外器面に赤彩が部分的に残る。1417は上位出土で口径が15.6cm を測



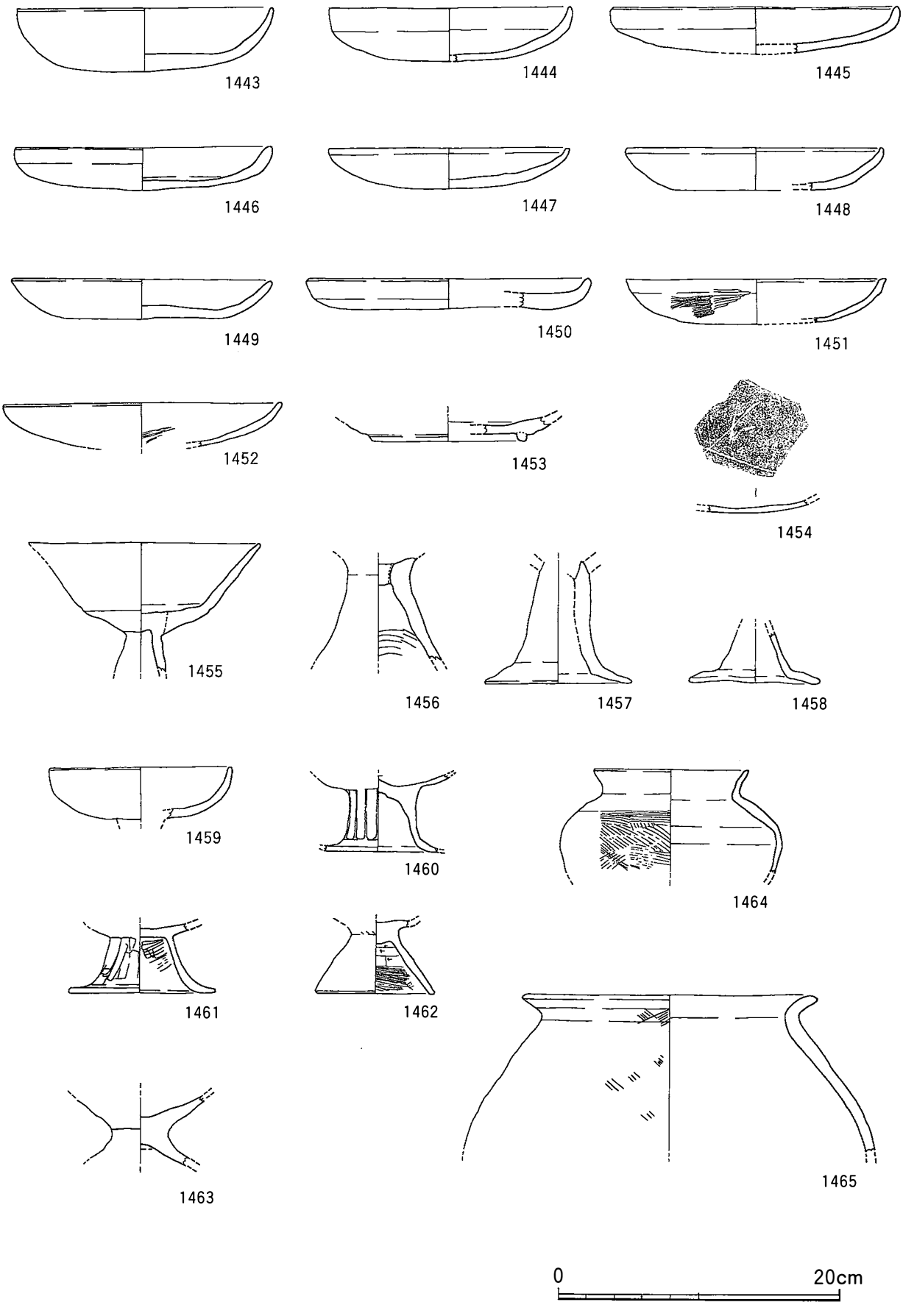
第233図　4SX038出土土器実測図



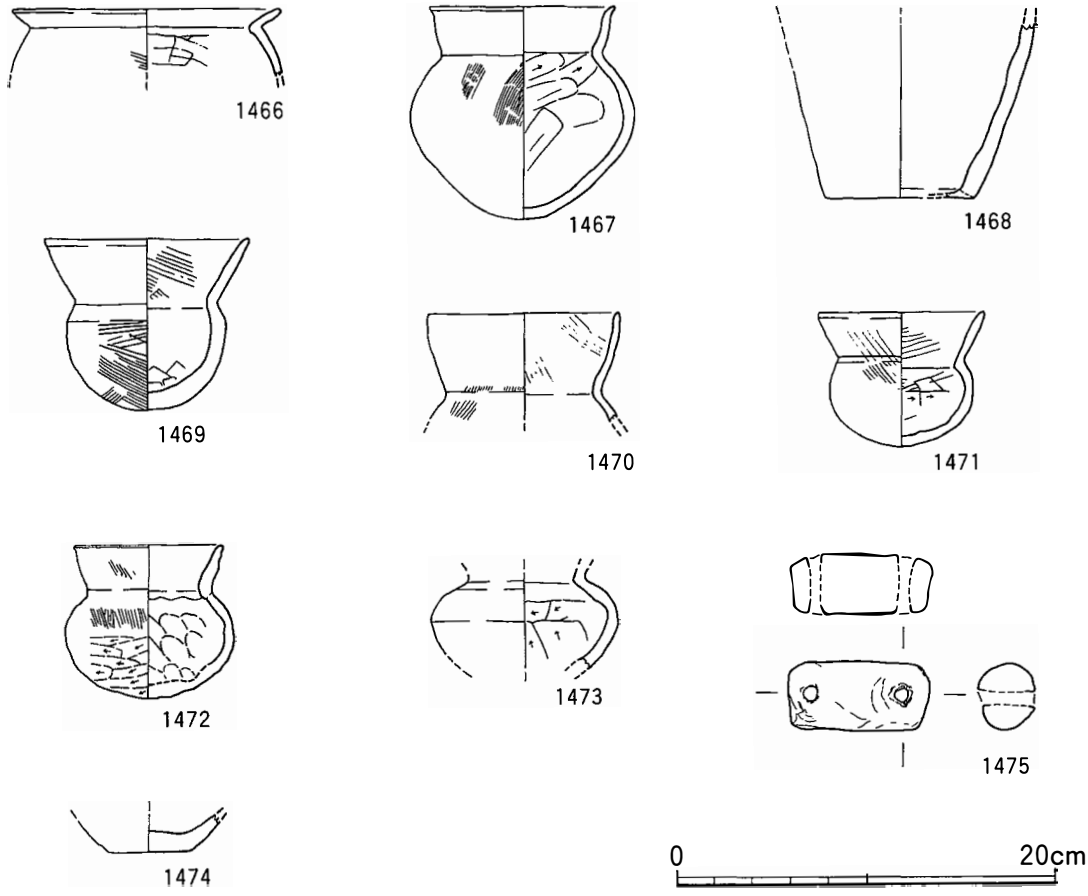
第234図　4SX038出土土器実測図



第235図　4SX038出土土器実測図

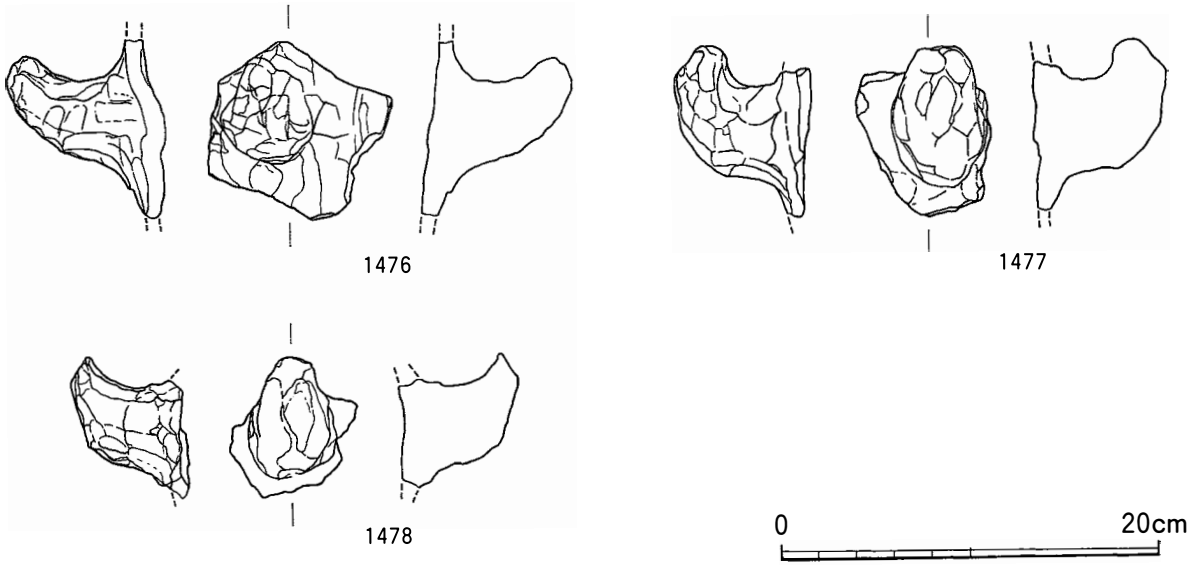


第236図　4SX038出土土器実測図

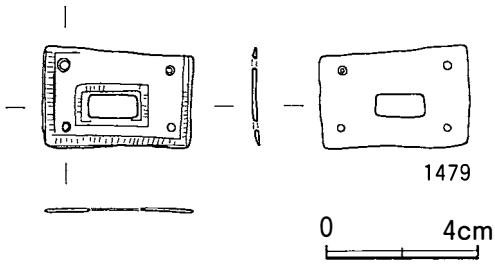


第237図　4SX038出土遺物実測図

る。内外器面に赤色顔料が塗布される。1426は、中位付近出土で、復元口径は14.2cm を測る。外底面はヘラ削りが施される。内外器面に赤色顔料が塗布される。1427は上位の出土で、復元口径は14.5cm を測り、内外器面に赤色顔料が塗布される。1432は口縁端部が尖り、やや外反するものである。復元口径は13.3cm を測る。器表面には赤色顔料が塗布される。1436は大型の坏で、鉢としても良いかもしれない。口縁部はや



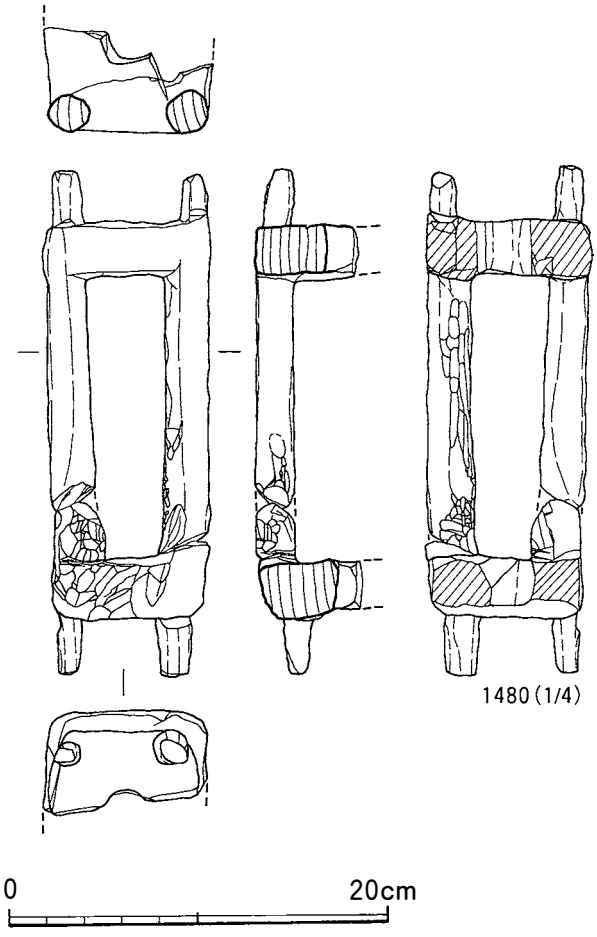
第238図　4SX038出土土器実測図



第239図　4SX038出土遺物実測図

や細くなりながら立ち上がる。復元口径は18.3cmを測る。全体的に赤色顔料が塗布され、ヘラミガキ痕が内外器面に施され、内器面には暗文が入る。1434はＶａ層出土で、復元口径は12.2cmを測る。口縁部の内器面に赤色顔料が塗布される。

1415は出土層がＤ・Ｅ相当層で遺構の埋土としては下位に属する。復元口径を15.4cmを測る。口縁端部内面には弱い沈線が入る。内器面に黒色顔料が残る。1412は、外器面の体部中位より上位に稜が入り、口縁径よりも稜線部分が狭い。復元口径は14.8cmを測る。内外器面には黒色顔料が塗布される。1419は体部の稜付近で小さな屈曲が入る。遺構の上位からの出土で復元口径は14.6cmを測る。1420は1413に似るが体部の屈曲部がやや肥厚し、口縁端部が内湾する。復元口径が12.0cmを測る。外器面底部にはヘラ削り跡が残る。1421は、体部の屈曲部からほぼ直に口縁部が立ち上がる。外底面にはヘラ削りが施される。復元口径は14.1cm、復元器高は4.4cmを測る。内外器面に煤が付着している。1422は破片であるが、外底面の調整痕が明確であったので図化した。外底面は丁寧なヘラ削りが施される。手持ちによるものと判断した。内器面にはヘラミガキの跡が残る。1423は、体部の屈曲部から口縁端部までの長さが2cmほどを測り、長い。口径が11.7cm、器高が5.1cmを測る。外底面にはヘラ削り痕が残る。体部の上位はハケ目が施される。外器面に黒斑がある。1424は、遺構上位の出土で、口径が11.5cm、器高が4.8cmを測る。口縁部は1423に似て、体部から直に立ち上がる。外底面はヘラ削り痕が残る。内器面には縦方向の暗文が入る。外器面には煤が付着している。1425も上と同様に口縁部が立つもので遺構の上位から出土している。口径は13.0cmを測る。外底面にはわずかにヘラ削りの跡がみられ、その後ミガキを施しているようである。内器面には中心から放射状に伸びる暗文が施され、ヘラミガキも行われている。1428は、口縁部のみの破片で形態的には皿にしても良いもので内器面の暗文がしっかりと残る。復元口径は15.2cmを測る。1429は、体部から口縁部が直に立ち上がり、端部断面は尖り気味のものである。 復元口径は13.6cmを測る。1431は、口縁が体部屈曲部から緩やかに外反している。外底面にはヘラ削りが施されている。復元口径は13.6cmを測る。器壁が全体的に薄く、やや時期が異なるようである。1432もほぼ同様のものである。1433は口径11.7cmを測り、口縁端部断面が尖り気味のものである。器面調整ははっきりしない。1414は、復元口径が10.8cmを測り、



第240図　4SX038出土木製品実測図

他の坏より一回り小さい。体部に明瞭な稜線はなく、底部付近から緩やかにやや丸まり内湾しながら立ち上がる。断面はやや尖る。1435は、外底面のヘラ削りは下から上位に向けて施されている。復元口径は11.9cmを測る。1418は、体部付近に明瞭な屈曲を持ちやや肥厚する。やや内湾し断面端部は尖り気味である。1430・1437は形態の異なるもので、口縁部が立ち気味で口唇部内面に沈線が巡る坏である。1430はⅤc層の出土で、復元口径が15.7cmを測る。調整は摩耗のためあまりはっきりしない。内器面に赤色顔料が残る。1437は復元口径が17.8cmを測る。外器面は口縁下にヘラ削りの後ナデ調整が施される。内器面には赤色顔料が残る。1438は、内器面に回転ヘラミガキにより暗文状に施される。復元口径は、1438が16.4cm、1439が13.8cmをそれぞれ測る。

1440～1442は埦である。完形のものはなく、底部のみである。1440は平底のもので底径が6.8cmを測る。1441・1442は高台のつくもので、回転台を使用している。1441の高台は断面カマボコ状を呈する貼り付けのものである。1442は底部のみであるが、やや長く伸びた貼り付け高台を持つ。内器面底部に赤色顔料が残る。

1444～1454は盤である。いずれも遺構の上層で出土したものである。形態から3類ほどに分けられる。まず体部に明らかな屈折部分を持ち、それより下位にはヘラ削りが施されるもので、1444・1445・1446・1450・1451などである。次に体部に明瞭な屈曲は有さず、口縁部から緩やかに底部に至るものである。1443・1447・1448・1449・1452である。高台を有する1453がこれに加わり、大きく3類となる。これらはまた、口縁部や器高の特徴の差からいくつかに分類することは可能であるが、点数が少ないのでここまでとする。1444～1450にはそれぞれ赤色顔料の塗布がみられる。1452は内外器面とも黒色顔料の塗布がみられる。1454は本来の器形は不明であるが、底部付近と思われ、内器面にヘラ記号らしきものが残る。

1455～1461は高坏である。このうちこの遺構の時期に相当するのは1460、1461である。坏部はないので明確ではないが、いずれも脚部外器面に縦方向のケズリが施される。また、脚部高も低く、器壁も薄い。ただ、開き具合は若干異なる。1460は外底面に、1461は外器面全体に赤彩された痕跡がある。本来はどちらも赤色顔料が塗布される高坏であろう。1455・1457・1459については古墳時代の遺物の混入とみられる。特に1455については坏部の底面が狭く、口縁部にかけてラッパ状に急激に開くものである。一方で脚部はやや貧弱である。1459は坏部のみで、浅い埦形の坏部である。内外器面には赤彩が施される。

1456・1458・1462・1463は器台と考えている。1456は脚部のみの破片で、上部に穿孔されていることから器台の範疇とした。1458は小型のもので脚部のみで明確ではないが、高坏の可能性もあるが器台とした。1462は脚部のみの破片で他例から器台とした。1463も同様である。これらも古墳時代の遺物の混入品と考えている。

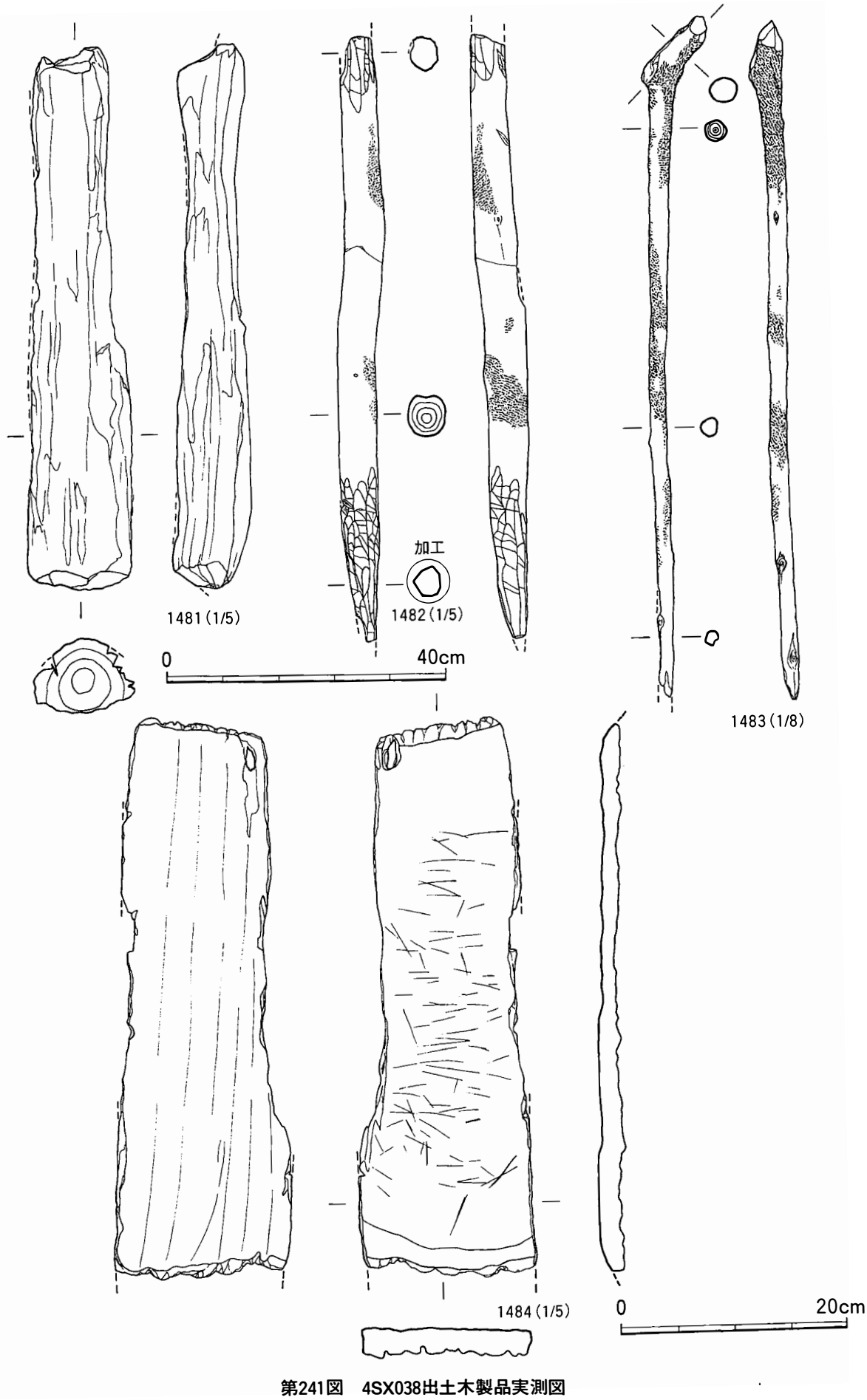
1464は小型の壺で、古墳時代の混入遺物である。復元口径11.0cmを測る。外器面には横方向のハケ目、斜め方向のハケ目が残る。内器面は器面調整が不鮮明である。

1465は口縁部が厚く短くなっており、頸部から急激に反り返る形である。胴部の張り具合から一応壺としたが、口縁の形状上甕でもよいと思われる。調整痕は明確ではないが、外器面にハケ目、内器面にナデがわずかに認められる。外器面には黒斑の他、赤色顔料を塗布している。

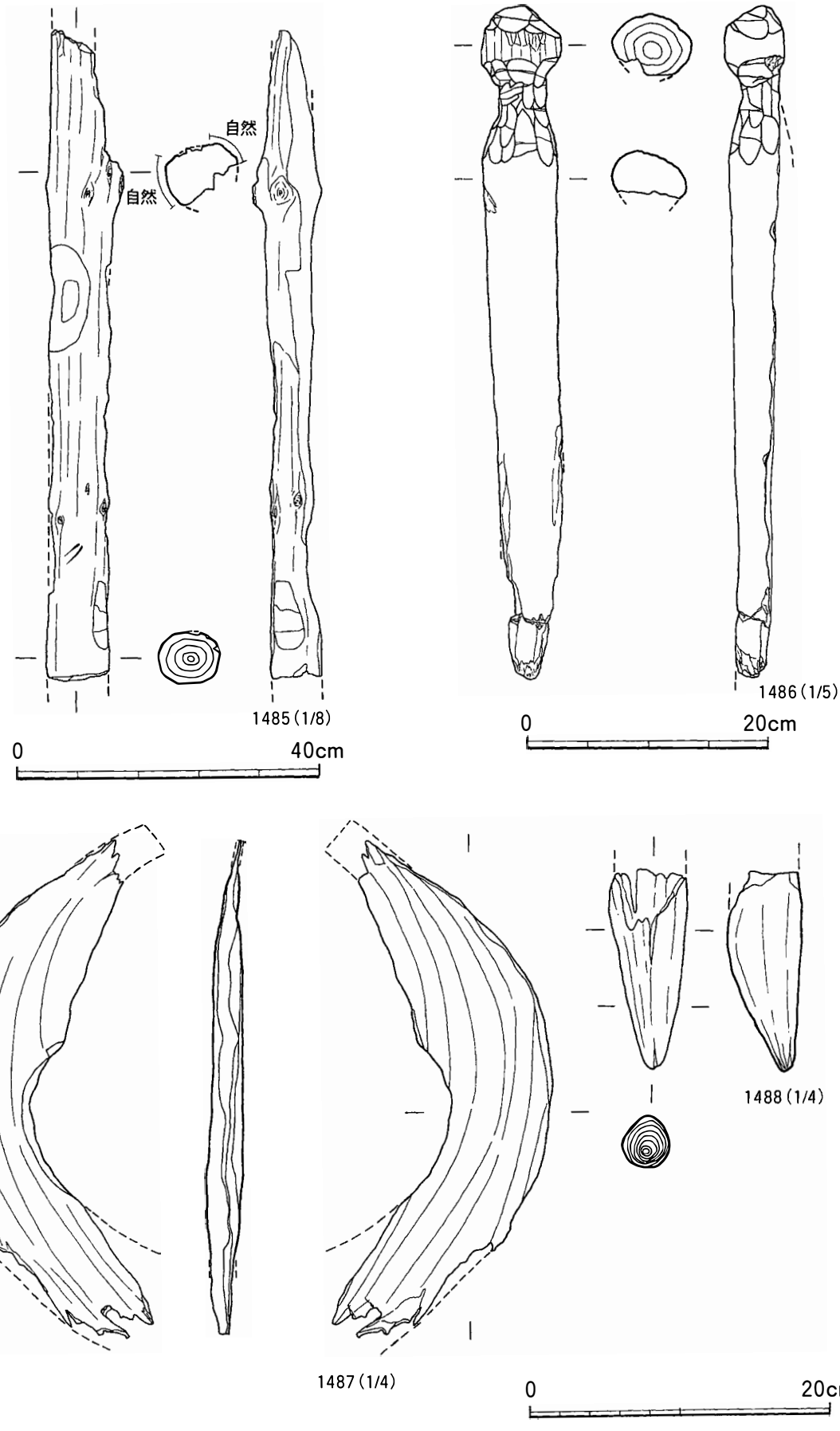
1466は小型甕である。口縁部が短く強く外反するもので、古代のものに近い。外器面はハケ目が残り、内器面には横方向のヘラ削りが残る。

1464・1467・1469～1473は小型壺である。

1464は下層と上層のものが接合している壺で、頸部からやや反りながら短く伸びて口唇部に至る。復元口径は20.3cmを測る。胴部外器面にはハケ目が施される。内器面は摩耗して不明である。胴部が最大径を呈する。1467は口縁部がやや中位でふくらみ口唇部で反るような形である。胴部は中位よりやや上位に最大胴部径が位置し、底部はやや平坦部を有する。外器面にはハケ目、内器面にはヘラ削りが施される。形態的に



第241図　4SX038出土木製品実測図



第242図　4SX038出土木製品実測図

は甕の範疇に入れた方がよいかもしれない。1469～1473はいわゆる小型丸底壺の範囲に入る。口縁部が割と長く胴部径より広くなる1469、同じくらいの1470・1471、口径が小さい1472・1473がある。いずれも古墳時代前期の混入品である。

1468は鉢とした。平底からほぼ直に立ちあがるもので、口縁部付近が不明である。

1474は壺である。平底で調整や全体の雰囲気から弥生時代の土器が混入した可能性がある。

1475は細長いややつぶれた棒状の土塊の左右に二箇所の孔を穿った土錘である。このタイプの土錘は5SX040などからも出土している。一応古墳時代のものと考えている。

1476～1478は甑の把手である。いずれも胴部に貼り付けたもので、手捏により、指ナデ調整が施されている。

金属器としては、1385は銅製の耳環がある。径が1.2～1.4cm を測る。芯材は径が5mm を測る。遺構の掘り下げ中に出土したものである。次に1479の帯金具状の金属板がある。これはやや不正確な長方形のものである。一辺が他の辺に対して歪んでいる。この板材の中心よりやや下に方形の透かし穴がはいる。また、金具の縁と透かし穴の縁には辺や穴に縁に平行な細線を引き、辺と線の間には直行した櫛書様の細線彫りの文様が入っている。横幅4cm、縦幅2.3～2.6cm、厚み1mm を測り、やや表面側に反ったようになっている。

木製品には、1480がある。Ⅷ区からの出土である。一木を刳り抜いて造られており、残存しているのは本来の大きさの半分ほどと推測している。残存長が26.8cm、幅8.9cm を測る。樹種はイチイ科カヤ属カヤである。完形ならば糸巻きに似ているためここでは糸巻きとしたが、通常この時期の糸巻きとしては組み合わせ式のものが多く一木作りはまれである。上下にある突起は何か別の部材に差し込むために造り出されているように見受けられる。また、真ん中には棒状のものを通したような穴が開き、かなり摩耗している。これらのことから糸巻きというより何かの他の製品の一部と考えた方が良さそうである。想定としてはロクロの部材が考えられる。1484は板材である。上下の端がうすくなっており、他の部材へ差し込んだ部分かもしれない。表面にはキズが入る。

このほかに建築材、杭などがある。1481・1482・1483・1485・1486・1488は建築材とした。用途不明品も多い。

樹種としてはツツジ科スノキ属シャシャンボ、ブナ科シイ属、クスノキ科クスノキ属クスノキ、マツ科マツ属（二葉松類）、ツバキ科サカキ属サカキなどがある。

○4SM041【第243図】

杭列のため明確にこの遺構に伴うとはいえないが、4SX038の溝状部分に対して直交するように並ぶことから、この遺構と関係するものと考えている。杭列として３本がほぼ南北に直線上に並ぶ状態で検出した。ただ、この並び方が何か特定の役割を持つものかどうかは不明である。

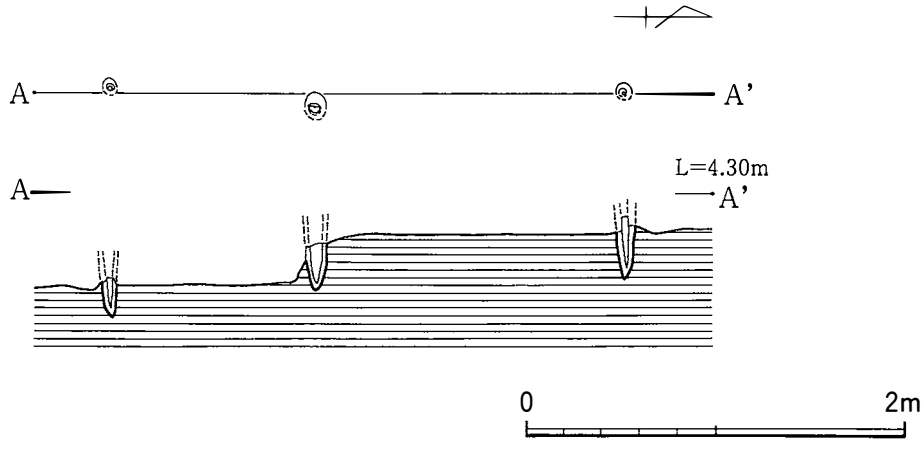
流れに対して垂直方向ではあるが、あまり影響はないので何か別の目的で造ったのであろう。

○4SX056【第244図】

4SX038に付随するものと考えているが、浅い掘り込みと流れを止めるような杭列と横板があり堰状の遺構である。円形状の落ち（ピット）に板材を杭で止めてあるもので、二又鍬や編鍾などの木製品をかんでいる。ただ大きさが、掘り込みの上面で1.5m ほどしかない。この掘り込みを溝から区切る物であるのはたしかである。

［木材］【第245図～第247図】

杭をのぞくと、せき止めに使われた木材の中には木製品を転用した物があった。1490は二股鍬の破損品である。1491は板材の一部である。1492も下端にのこるカーブからすると何かの部材の一部である可能性が強い。

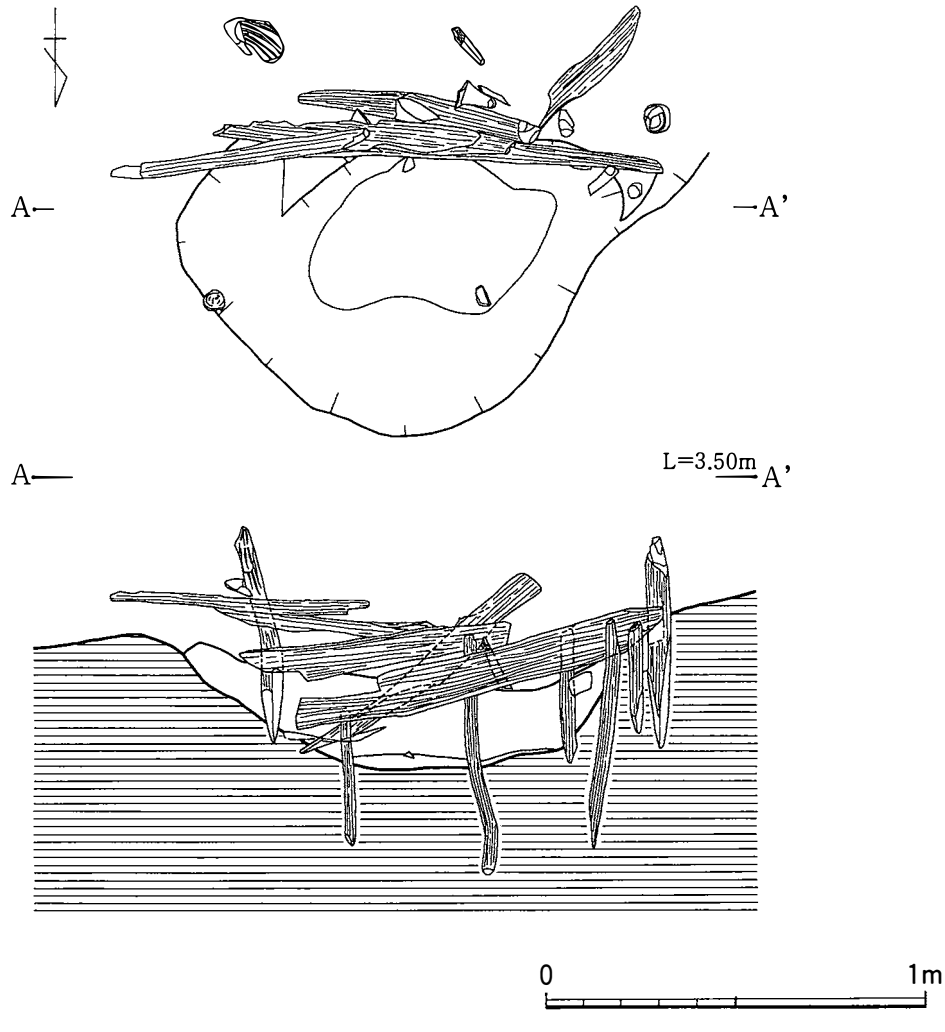


第243図　4SM041実測図

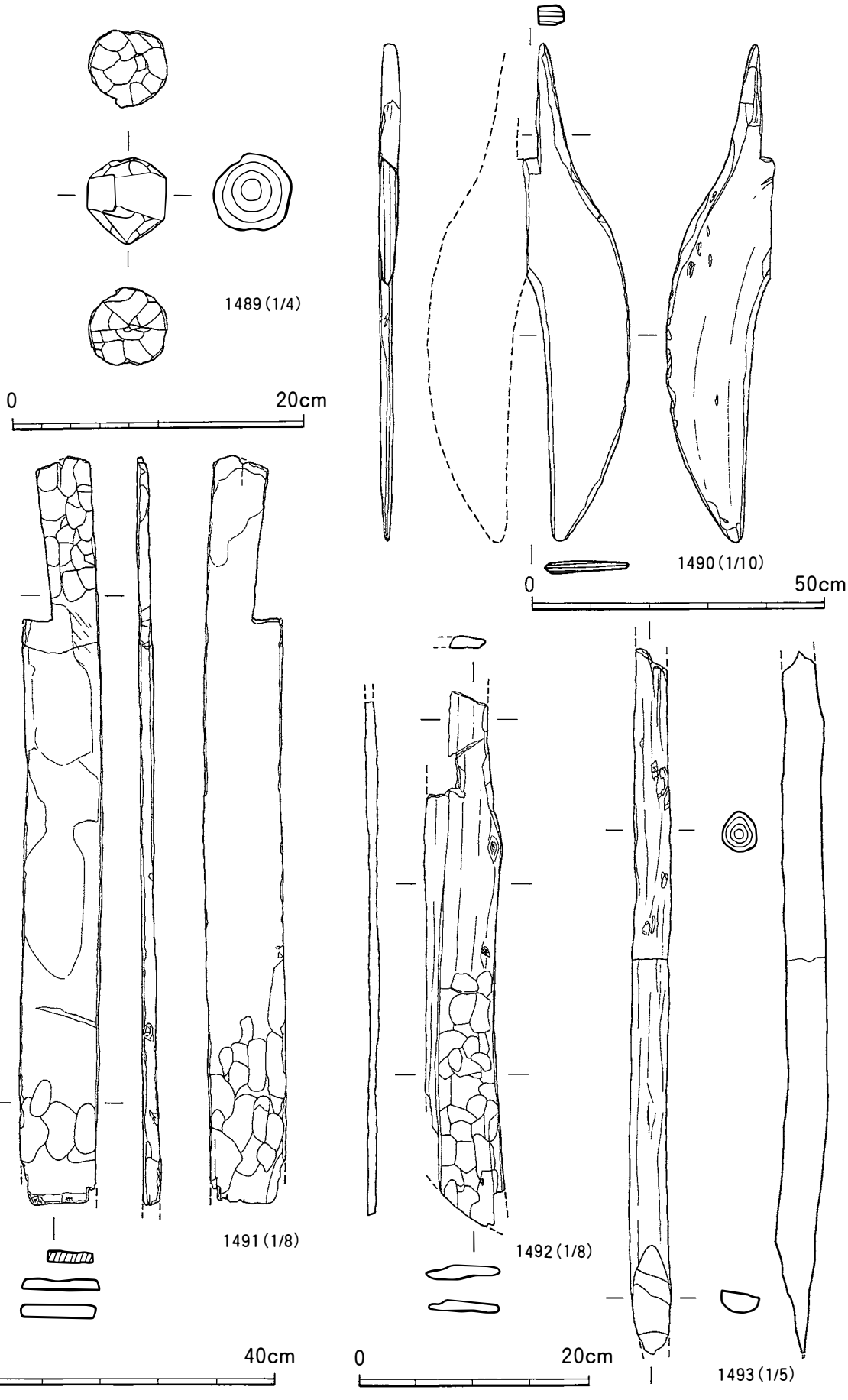
（７）道路状遺構と出土遺物

○6SX001・6SX002・6SX050・6SX051・6SX052（道路状遺構）【第248図・第249図】

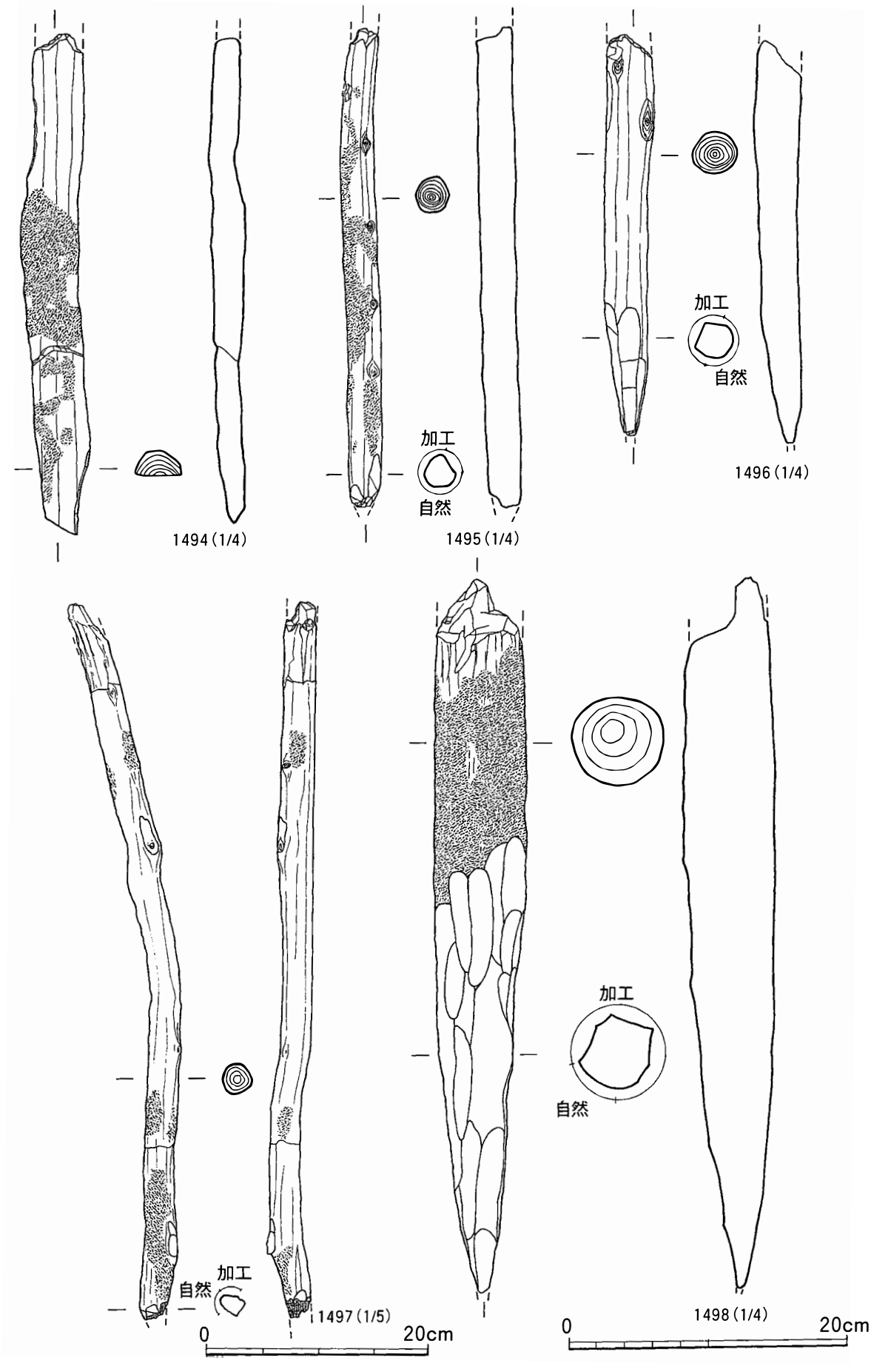
この遺構は調査Ｘ－１区で検出したもので、遺構番号は５つに分けているが、1～２条の道路状遺構が重なったものと考えている。



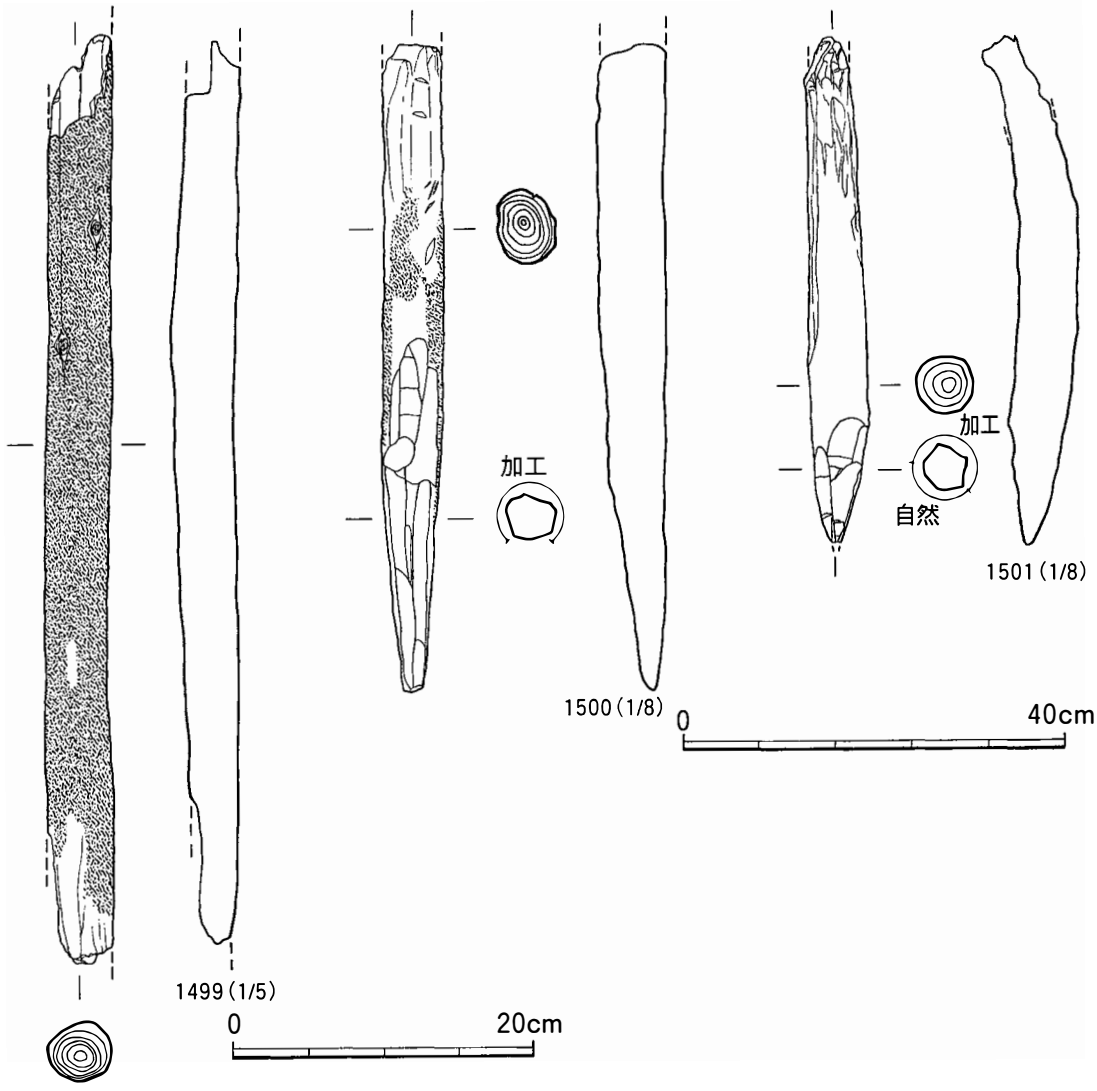
第244図　4SX056実測図



第245図　4SX056伴出木製品等実測図



第246図　4SX056伴出木製品実測図



第247図　4SX056伴出木製品実測図

途中を表土剥ぎの際に掘りすぎたために各遺構間の繋がりが不明確になってしまった。ただ、確認層位及び遺構の状況などが非常に似通っていたため、一連の遺構と判断した。

この遺構の性格については、6SX001、6SX002で溝状の落ち込みの中心に窪みがあり、他の調査例から道路状遺構と呼ばれるものと考えた。ただ、このような遺構は緩斜面に造られる場合が多いが、ここは地形的な傾斜はやや南側に低くくなる程度で、足がかりとしての窪みにあまり意味がないようである。

確認した遺構は調査Ｘ－１区をほぼ南北に40m の長さがあった。Ｘ－２区では確認できなかった。埋土はグレー気味のシルト土から砂質土が多かった。

ここでは一応古代に属する遺構としてここで取り上げるが、出土遺物をみると中世に属する遺物も多く本来中世の遺構とした方がよいのかもしれない。

6SX051の埋土（Ａ－Ａ'）は、灰黄褐色（10YR5/2）を呈する砂質（砂質70％粘質30％）土で、さらさらして締まりがない。酸化鉄、マンガン粒子を多く含む。

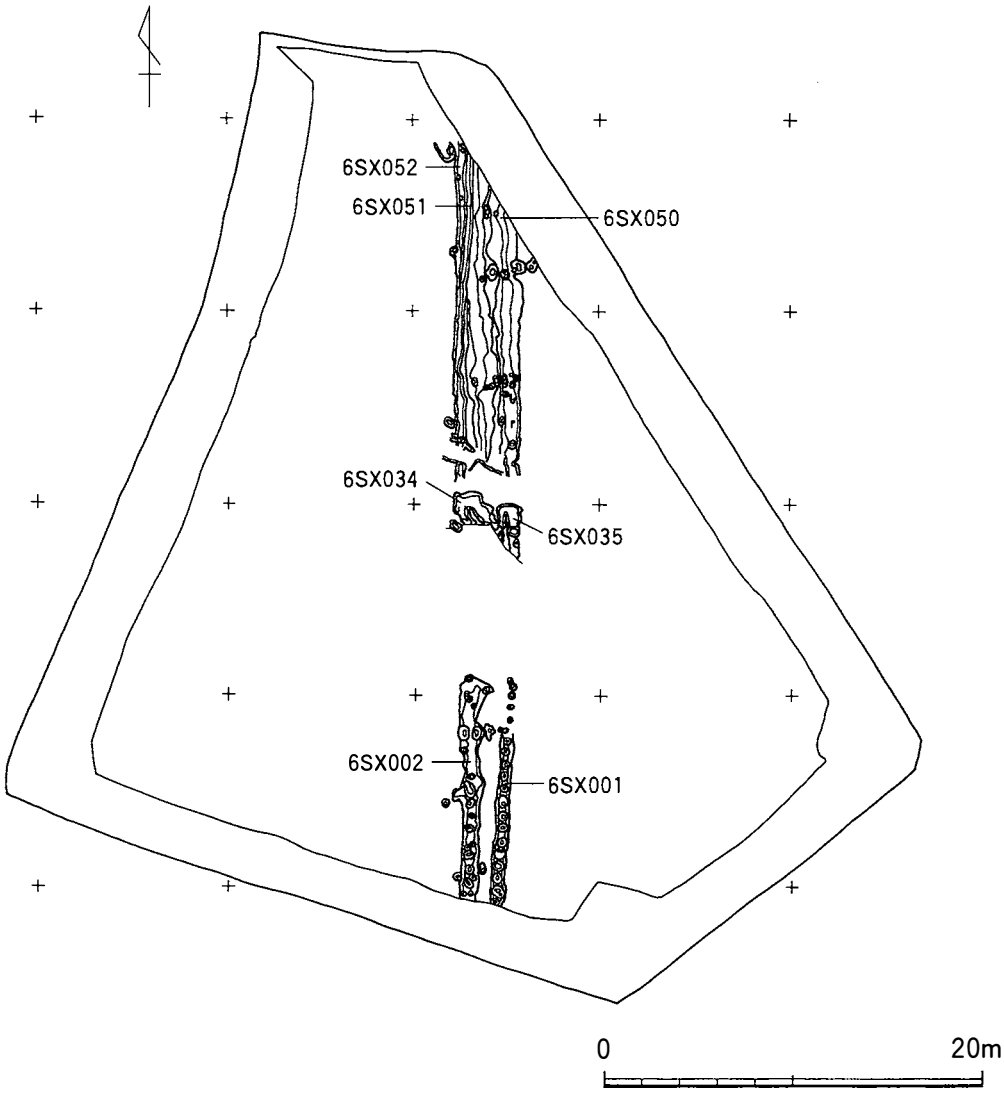
6SX052の埋土は、2層に分離でき、1層は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する砂質土（砂質80％粘質20％）で、さらさらしていて締まりがない。酸化鉄、マンガン粒子を非常に多く含む。2層は、暗褐色（10YR3/3）を呈し、砂粒を多く含み（砂質90％粘質10％）、さらさらしていて締まりがない。酸化鉄、マンガン粒子をやや

含むシルト層である。

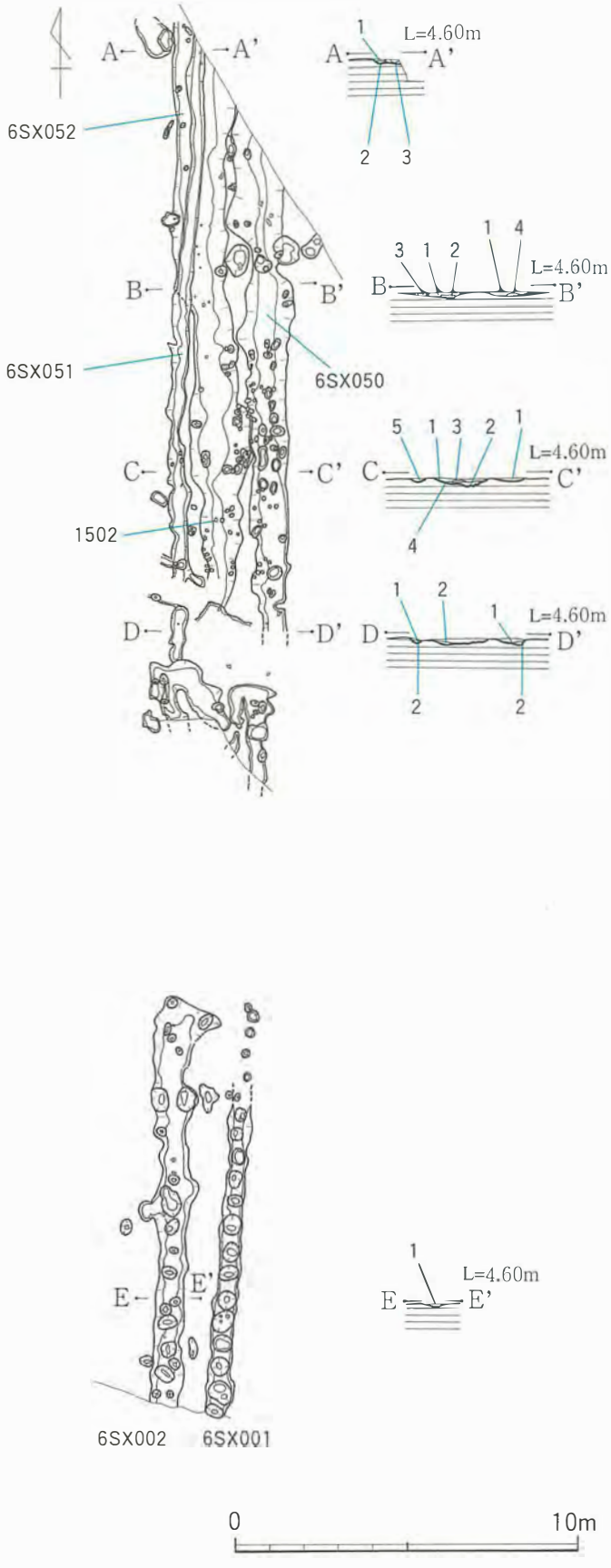
6SX051の埋土は、1層が灰黄褐色（10YR4/2）を呈する砂質土で、さらさらして締まりがない（砂質80%、粘質20%）。酸化鉄、マンガン粒子を非常に多く含む。2層は暗褐色（10YR3/3）を呈する砂質土で、さらさらして締まりがない（砂質90%、粘質10%）。酸化鉄をやや含む。4層はにぶい黄褐色（10YR4/3）を呈し、砂粒を少し含んだ締まりのある粘土（砂質10%、粘質90%）である。酸化鉄を少し、マンガン粒子を多く含む。

6SX050、051、052のC－C'間の土層断面の土層は、以下のとおりである。1層は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する砂質土で、さらさらして締まりがない（砂質80%、粘質20%）。酸化鉄、マンガン分を非常に多く含む。2層は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、1層と同様、酸化鉄、マンガンを含む。土は粘りがあり、締まっている（砂質30%、粘質70%）。

D－D'間では、1層は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する砂質土で、さらさらしていて締まりがない（砂質80%、粘質20%）。酸化鉄、マンガン粒子を非常に多く含む。2層は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、酸化鉄、マンガン粒子を含む。土は粘りがあり締まっている（砂質30%、粘質70%）。3層はにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈し、さらさらして締まりがない砂層（砂質ほぼ100%）である。酸化鉄を非常に多く含む。4層は暗褐色（10YR3/3）を呈する砂質土で、さらさらしていて締まりがない（砂質70%、粘質30%）。酸化鉄をやや含む。5層は灰黄褐色（10YR5/2）を呈する、砂質土で、さらさらしていて締まりがない（砂質70%、粘質30



第248図　調査Ｘ－１区内遺構配置図



第249図　道路状遺構実測図

％）。酸化鉄、マンガン粒子を多く含む。

［出土遺物］【第250図】

遺物の出土は少なく、土器２点と石器１点が図化できた。いずれも埋土中の遺物である。1502は須恵器の蓋で輪状ツマミをもつもので返しはない。1503は瓦器埦であり、この遺構が中世はじめまで下る可能性を示す。

石器として石鏃を一点図化している。1504は平基鏃に近い格好をしており、縄文時代の遺物が混入したのであろう。

この他にも、図化していないが6SX051には瓦質土器が、6SX050では土師質土器などが出土している。6SX002の上層であるVa層出土土器の土師器は高台付坏で古代末である。また、Va層の須恵器（古代）の坏底部がある。6SX052からは古代の須恵器坏？の底部が出土し、6SX050では近世陶磁器唐津系の皿も出土している。

（８）その他の遺構と出土遺物

○4SD050・4SD051・4SD052【第251図】

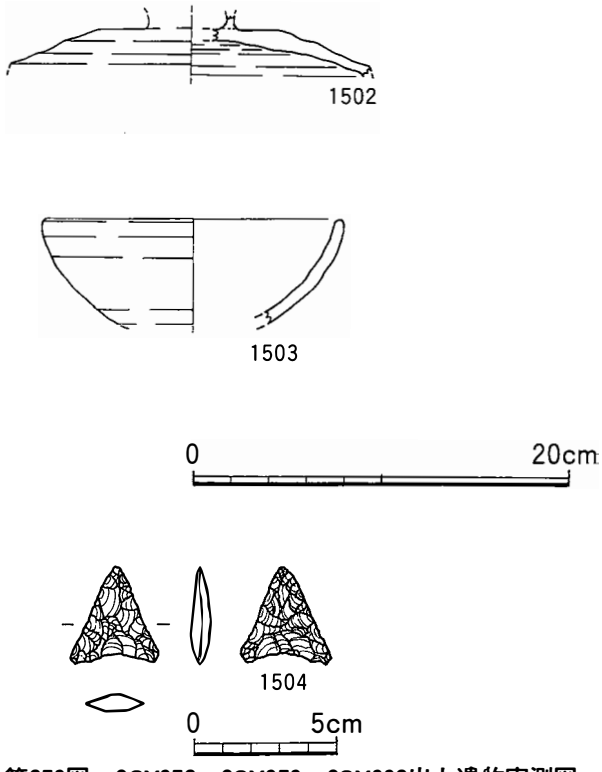
水田跡の周囲にある溝状遺構で出土遺物から古代の遺構とした。古墳時代から続くものと考えられなくはないが、同じ場所に水田がどの程度の期間あったか不明である。水田の周囲に巡らす溝と考える。前後関係は明確ではない。

W－26グリッドからW－27グリッド、V－27グリッドまで確認している。玉名市側にも伸びる。併行する4SD052、4SD050も同じか、やや時期のずれるものである。

これらの溝が水田跡に関係するかというと全体的な状況から確証はない。ただ、水田の周囲に溝を巡らす例はあるので、玉名市側の調査結果と併せて今後検討していく必要がある。

○ピット群

掘立柱建物群の分布する一帯には建物として並ばなかったが、木片が残るようなものもあり建物として認識できなかったものの土層を下に記す。ただし、全てのPitに於いて１は柱根跡、



第250図　6SX052・6SX050・6SX002出土遺物実測図

２は掘り方である。また、2層では分層できた場合a、b、cとした。

P37は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土に褐色の粗い粒子をわずかに含む。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；１層に似るが、締まっている。

P38は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土に暗褐色の粗い土をブロックに含み、わずかに焼土も含む。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；１層に似るが、よく締まっている。

P39は、1層は不明。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土と粗い褐色土がブロックに入り混じり、わずかに焼土・炭化物も含む。

P40は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；きめ細かな粘土に焼土・炭化物を多く含む。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；粗い褐色土に粘土をブロックに含む。

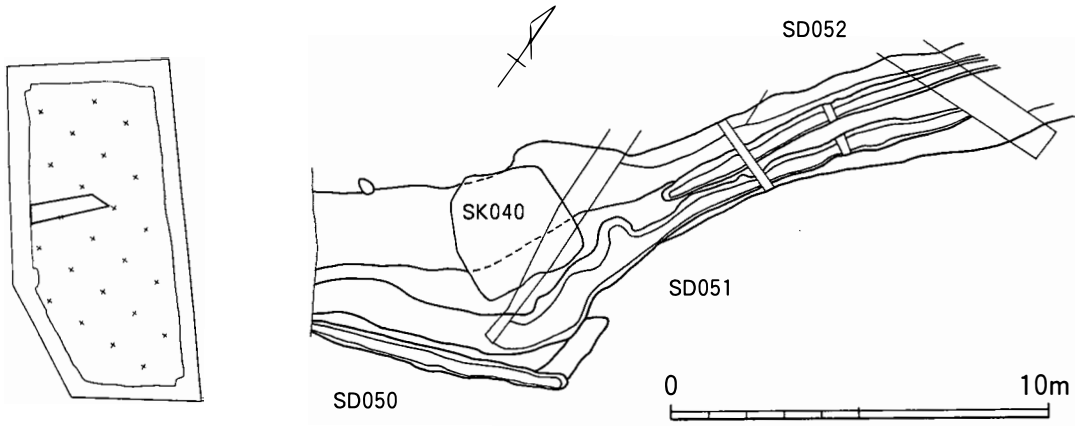
P41は、1層：黒色（7.5YR2/1）；粘土に粗い褐色の粒子と焼土・炭化物を含む。2層：黒褐色(7.5YR3/2）；粗い暗褐色の土に粘土をブロックに含み、締まっている。

P42は、1層：黒褐色（7.5YR3/2）；粘土に粗い褐色土をブロックに含み、わずかに焼土・炭化物を含む。２層：暗褐色（7.5YR3/3）；Pit41、2層に似るがやや明るい。

P43は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；きめ細かい黒褐色の粘土にやや粗い褐色土をブロックに含み、やや締まっている。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；粗い褐色土に粘土をブロックに含み、締まっている。わずかに焼土・炭化物も含む。

P44は、1層：黒色（7.5YR2/1）；きめ細かい粘土に焼土・炭化物を含む。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；１層に似るが焼土・炭化物の量が少なく、締まっている。

P45は、1層：黒色（7.5YR2/1）；粘土に焼土・炭化物を含む。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；粗い褐色土と粘土がブロックに入り混じり焼土・炭化物も含み、締まっている。



第251図　4SD050・4SD051・4SD052実測図

P46は、1層：注記なし。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；やや粗いが粘質の土に茶褐色の粒子を含む。

P47は、1層：きめ細かい粘土。2層：不明

P48は、1層：黒色（7.5YR2/1）；粘土に粗い暗褐色の粒子を含み、焼土・炭化物も含んでいる。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；１層に似るがやや締まっている。

P49は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；きめ細かな粘土、木質を残す。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；粗い暗褐色土に粘土をブロックに含む。

P50は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；きめ細かい粘土にわずかに木質を残す。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；やや粗い暗褐色土に粘土をブロックに含み、焼土・炭化物も含む。

P51は、1層：黒色（7.5YR2/1）；きめ細かな粘土に焼土・炭化物を多く含む。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；粗い暗褐色土に粘土をブロックに含み、締まっている。

P52は、1層：黒褐色（10YR3/1）；きめ細かな粘土にわずかに焼土・炭化物を含む。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；１層に似るがやや粗く硬く締まっている。

P53は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；やや粗い粘土に焼土・炭化物を多く含む。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；１層に似るが硬く締まっている。

P54は、1層：黒色（7.5YR2/1）；粘土に焼土・炭化物を多量に含んでいる。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；１層に似るがやや粗く、硬く締まっている。

P55は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土に焼土・炭化物を多く含んでいる。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；粗い土に粘土を小さなブロックに含み焼土・炭化物も多く含む。

P56は、1層：なし。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；粗い土に粘土をわずかに含み、締まっている。

P57は、1層：黒色（7.5YR2/1）；きめ細い粘土に焼土・炭化物を多く含む。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；粗い暗褐色の土に粘土を小さくブロックに含み、焼土・炭化物も多く含む。

P58は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；細かい粘土に多量の焼土・炭化物を含む。2層：なし。

P59は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；きめ細かい粘土に焼土・炭化物をわずかに含む。2層：なし。

P60は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土に茶褐色の粒子をわずかに含む焼土・炭化物もわずかに含む。２層：黒褐色（7.5YR3/2）；粗い暗褐色土に粘土を小さなブロックに含み、硬く締まる。

P61は、1層：黒褐色（7.5YR3/2）；粘土に茶褐色の粒子と焼土・炭化物を多量に含む。2層：なし。

P62は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土に粗い暗褐色土をわずかに含む焼土・炭化物も多く含む。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；粗い褐色土に粘土を小さなブロックに含み硬く締まる。

P63は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土に粗い暗褐色土をブロックに含み焼土・炭化物も多量に含む。２層：黒褐色（7.5YR3/2）；粗い暗褐色土に粘土を小さなブロックに含み、焼土・炭化物も含む。

P64は、1層：黒色（7.5YR2/1）；きめ細かい粘土で、焼土・炭化物も含み、木質を残す。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；粗い暗褐色土に粘土を含み、焼土・炭化物も多く含まれ、硬く締まる。

P65は、1層：黒色（7.5YR2/1）；きめ細かい粘土。2層：黒褐色（7.5YR3/1）；Pit64２層に似る。

P66は、1層：黒色（7.5YR2/1）；粘土に粗い茶褐色の粒子と焼土･炭化物を多く含む。2層：黒褐色（7.5YR2/2）；やや粗い暗褐色土にわずかに焼土・炭化物を含む。

P67は、1層：黒色（7.5YR2/1）；粘土に粗い暗褐色土をブロックに含み、焼土・炭化物を多量に含む。２層：なし。

P68は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土に茶褐色の粒子を含み、焼土・炭化物もわずかに含む。2層：なし。

P69は、1層：黒色（7.5YR2/1）；粘土にやや粗い茶褐色の粒子を含み、焼土・炭化物もわずかに含む。

２層：黒褐色（7.5YR3/1）；粗い暗褐色土に粘土をブロックに含み、硬く締まる。

P70は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土に粗い暗褐色土を含み、焼土・炭化物を多量に含む。2層：暗褐色（7.5YR3/3）；やや粗い暗褐色土に粘土を含み、焼土・炭化物も多く含む。

P71は、1層：黒色（7.5YR2/1）；きめ細かい粘土に多量の焼土・炭化物を含む。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；やや粗い暗褐色土に多量の焼土・炭化物を含む。

P72は、1層：黒色（7.5YR2/1）；Pit71、1層に似る。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；Pit71、2層に似る。

P73は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；きめ細かい粘土にやや粗い暗褐色土をブロックに含む。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；やや粗い暗褐色土に粘土を含み、焼土・炭化物もわずかに含む。

P74は、1層：黒色（7.5YR2/1）；粘土に粗い茶褐色の粒子と多量の焼土・炭化物を含む。2層：なし

P75は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土に粗い茶褐色の粒子と焼土・炭化物を多く含む。2層：黒褐色7.5YR3/1；１に似るが硬くしまる。

P76は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；Pit75、1層に似る。

P77は、2層：暗褐色（7.5YR3/3）；粗い暗褐色土に粘土をブロックに含み、焼土・炭化物も多く硬く締まる。

P78は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土に茶褐色の粒子と焼土･炭化物を多量に含む。2層：暗褐色(7.5YR3/3）；Pit77、2層に似る。

P79は、1層：なし。2層：褐色（7.5YR4/3）；やや粗い褐色土の茶褐色の粒子を含み、ブロックに粘土も含む。

P80は、1層：黒色（7.5YR2/1）；きめ細かい粘土に多量の焼土・炭化物と、木質を残す。2層：極暗褐色（7.5YR2/3）；Pit81、2層に似るがやや暗い。

P81は、1層：黒色(7.5YR2/1)；やや粗い粘土に多量の焼土・炭化物を含む。2層：暗褐色(7.5YR3/3)；粗い暗褐色土に多量の茶褐色の粒子や焼土・炭化物を含み硬く締まる。

P82は、2層：黒褐色（7.5YR3/2）；Pit81、1層に似る。

P83は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土に多量の焼土・炭化物を含む。2層：黒褐色（7.5YR2/2）；やや粗い暗褐色土に多量の焼土・炭化物を含み、締まる。

P84は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；Pit83、1層に似る。2層：黒褐色（7.5YR2/2）；Pit83、2層に似る。

P85は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；Pit83、1層に似る。2層：黒褐色（7.5YR2/2）；Pit83、2層に似る。

P86は、1層：黒褐色(7.5YR3/1)；細かい粘土に多量の焼土・炭化物を含む。2層：黒褐色(7.5YR3/2)；１層に似るが、やや粗い褐色の粒子を多く含む。焼土・炭化物も含む。

X－26グリッドのピット群注記は以下のとおりである。

P１は、1層：黒色(10YR2/1)。2層：黒褐色(10YR3/1)；Pit5、2層に似るが、粘土質の土が多くやや暗い。

P２は、1層：黒色(10YR2/1)；粘質がありきめが細かくなめらか。2層：黒褐色(10YR3/2)；Pit5、2層に似る。

P３は、1層：黒色(10YR2/1)；P2、1層に似る。2層：黒褐色（10YR3/2）；P5、2層に似る。

P４は、2層：黒褐色(10YR3/2)；P5、2層に似る。

P５は、1層：黒色(10YR2/1)；焼土・炭化物を多く含みややわらかめ。2層：暗茶褐色（10YR3/2）；全体に鉄分を多く含みザラザラした状態。ブロック状に径5mm～10mmの暗黒褐色の粘土を含む。又、焼土・炭化物粒子もわずかに含む。

P６は、1層：黒色（10YR2/1)。2層：黒褐色（10YR3/1）；P5、2層に似るが焼土・炭化物を多く含みやや暗い。

Ｐ７は、1層：黒色（10YR2/1）；非常にやわらかく木質が残る。きめが細かくなめらか。2層：黒褐色（10YR3/2）；P5、2層に似る。

Ｐ８は、1層：P7、1層よりやや水分が少ない程で、ほぼ同じ。2層：P7、2層に同じ。

Ｐ９は、1層：黒色（10YR2/1）；P2、1層に似る。2層：黒褐色（10YR3/2）；P5、2層に似るが、焼土・炭化物の粒子が大きく、多く含む。

P10は、1層：黒色（10YR2/1）；２層：黒褐色（10YR3/2）；P5、2層に似るが、炭化物・焼土は少ない。

P11は、1層：黒褐色（10YR3/1）；２層にいう粘質の土の割合が高く暗い。2層：黒褐色（10YR3/2）；基本的には粘質のある粒子の細かい土であるが鉄分の沈殿したものや粒子の粗い土を含み全体にザクザクした状態。また、焼土と炭化物を含む。

P12は、1層：黒褐色（10YR3/2）；焼土・炭化物を多く含む。2層：黒褐色（10YR3/2）；P11の２層に似るが、焼土・炭化物を含まず、やや明るい。

P13は、1層：黒褐色（10YR3/1）；P11、2層の粘質土の割合が多く暗い。2層：黒褐色（10YR3/2）；P11、2層に似る。

P14は、1層：黒褐色（10YR2/2）；P13、1層に似るが焼土・炭化物を多く含みやや暗い。

P15は、1層：黒色（10YR2/1）；きめ細かい粘土に焼土・炭化物を多く含む。2層：黒褐色（10YR3/1）；比較的細かい土に茶褐色の粒子と焼土・炭化物を多量に含む。

P16は、1層：黒色（10YR2/1）；きめ細かく、なめらか。2層：黒褐色（10YR3/2）；P11、2層に似る。

P17は、1層：黒色（10YR2/1）；きめの細かい粘質土焼土を含む。2層：黒褐色（10YR3/1）；きめの細かな粘土に茶褐色の粗い粒子を多量に含み、焼土も含む。

P18は、2層：黒褐色（10YR3/1）；P17、2層に似る。

P19は、1層：黒色（10YR2/1）；粗い粒子や焼土・炭化物を多く含むが、全体に粘質土の割合が高い。

P20は、1層：黒色（10YR2/1）；P19、1層に似る。2層：暗褐色（10YR3/3）；粗くかたい焼土・炭化物を多量に含む。

P21は、1層：黒色（10YR2/1）；粗い粒子の土も含まれているが、全体にきめ細い粘質土である。焼土・炭化物を含む。2層：黒褐色（10YR3/1）；粘質土の割合が高く全体に暗い。焼土・炭化物を含む。

P22は、1層：黒褐色（10YR3/1）；きめの細かい粘質土に焼土・炭化物を含む。2層：黒褐色（10YR3/1）；１層に似るが、焼土・炭化物を多く含む。

P23は、1層：黒色（10YR2/1）；きめの細かい粘質土に多量の焼土・炭化物を含む。2層：黒褐色（10YR3/1）；比較的粒子は細かいが、多量の焼土・炭化物を含む。

P24は、1層：黒褐色（10YR3/1）；粘質の土に多量の焼土・炭化物を含む。2層：暗褐色（10YR3/4）；粘質の土に粗い粒子を多く含み、焼土・炭化物を多く含む。

P25は、1層：黒褐色（10YR3/1）；きめの細かい粘質の土に焼土・炭化物を含む。2層：黒褐色（10YR3/2）；粒子の粗い土にきめ細かい粘土を多く含む。焼土・炭化物を多く含む。

P26は、1層：黒褐色（10YR3/1）；きめ細かい粘質土。焼土・炭化物を含む。2層：暗褐色（10YR3/3）；粗い粒子も含むが比較的粘土質に近い。焼土・炭化物をわずかに含む。

P27は、1層：黒褐色（10YR3/2）；きめ細かい粘土質の中に多量の粗い粒子の土を含み。焼土・炭化物の量も多い。2層：黒褐色（10YR3/2）；粗い粒子の土に多量の焼土・炭化物を含む。

P28は、1層：黒色（10YR2/1）；きめの細かい粘質土。2層：暗褐色（10YR3/3）；粘質土に鉄分の沈殿物であろう粗い粒子を多量に含みわずかに焼土・炭化物を含む。

P29は、1層：黒色（10YR2/1）；きめ細かい粘土の土に木質を残す。2層：暗褐色（10YR3/3）；Pit28、

２層に似る。

P30は、1層：なし。2層：暗褐色（10YR3/3）；P28、2層に似る。

P31は、1層：黒褐色（10YR3/1）；きめ細かい粘土質に粒子の粗い茶褐色土を多量に含む。又、焼土・炭化物の量も多い。2層：黒褐色（10YR3/2）；粒子は粗く、やや締まる。わずかに焼土・炭化物を含む。

P32は、1層：なし。2層：暗褐色（10YR3/3）；P33、2層に似る。

P33は、1層：なし。2層：暗褐色（10YR3/3）；土塊に黒褐色の粘質土を含むが全体に粗い土。焼土・炭化物を含む。P34、1層に似る。

P34は、1層：黒色（10YR2/1）；きめの細かい粘質土。木質を残す。2層：黒褐色（10YR3/2）；粗い粒子の土を含む。焼土・炭化物を含む。

P35は、1層：黒褐色（10YR2/2）；きめの細かい粘質土。2層：なし。

P36は、1層：なし。2層：黒褐色（10YR3/1）；粘質土に赤茶色の粗い粒子を多く含み全体にザクッとしている。焼土・炭化物を含む。

P37は、1層：なし。2層：黒褐色（10YR3/1）；P36、2層によく似るが焼土・炭化物はほとんど含まない。

P38は、1層：黒褐色（10YR3/1）；粗い粒子を多く含み焼土・炭化物も多量に含む。2層：黒褐色（10YR3/1）；１層に似るがやや明るい。

P39は、1層：黒色（10YR2/1）；きめの細かい粘土質。焼土を多く含む。2層：黒褐色（10YR3/1）；粗い粒子の締まった土に焼土・炭化物を多量に含む。

P40は、1層：黒色（10YR2/1）；きめの細かい粘質土。焼土も含む。下から20木質を残す。2層：なし。

P41・杭は、1層：黒色（10YR2/1）；きめの細かい粘土に木質を残す。2層：なし。

P42は、1層：黒色（10YR2/1）；きめ細かい粘土。2層：暗褐色（10YR3/3）；粗く、締まった土に焼土・炭化物を多く含む。

P43・杭は、1層：黒色（10YR2/1）；きめ細かい粘土に木質を残す。

P45は、1層：黒褐色（10YR3/2）；比較的細かい粘質の土に茶褐色の粒子を多く含む。2層：なし。

P46は、1層：黒褐色（10YR3/1）；きめ細かい粘土に焼土・炭化物をわずかに含む。2層：黒褐色（10YR3/1）；比較的細かい土に褐色の粒子を多く含み、締まる。

P47は、1層：黒色（10YR2/1）；きめ細かい粘土にわずかに木質を残す。2層：暗褐色（10YR3/4）；ザクッとした粗く締まった土に粘土をブロックに含む。

P48は、1層：黒褐色（10YR3/1）；細かな粘土に多量の粘土・炭化物を含む。2層：暗褐色（10YR3/3）；粗く、締まった土に粘土塊をブロック状に含み、焼土・炭化物も多く含む。

P49は、1層：黒褐色（10YR3/1）；P48、1層に似る。2層：暗褐色（10YR3/3）；P48、2層に似る。

P50は、1層：黒色（10YR2/1）；きめ細かい粘土に焼土・炭化物を多く含む。2層：黒色（10YR2/1）；１層に似るが、茶褐色の粒子を多く含みやや硬い。

P51は、1層：黒褐色（10YR3/1）；細かな粘土に焼土・炭化物をわずかに含む。2層：暗褐色（10YR3/3）；粗く締まった土に黒褐色の粘土をブロック状に含み焼土・炭化物もわずかに含む。

P52は、1層：黒色（10YR2/1）；きめ細かな粘土に焼土・炭化物をわずかに含む。2層：黒褐色（10YR3/1）；比較的細かい土に焼土・炭化物を多く含む。

P53は、1層：黒色（10YR2/1）；きめ細かな粘土に焼土・炭化物を多く含む。2層：黒褐色（10YR3/2）；茶褐色の粗い粒子を多く含み、よく締まっている。焼土・炭化物も多く含む。

P54は、1層：黒色（10YR2/1）；P53、1層に似るがわずかに木質を残す。2層：黒褐色（10YR3/2）；P53の２層に似る。

P55は、1層：黒色（10YR2/1）；きめ細かな粘土。木質を残す。2層：黒褐色（10YR3/2）；褐色の粒子を多く含み、粗く締まる。

P56は、1層：なし。2層：灰黄褐色（10YR4/2）；比較的細かな土に焼土を多量に含む。

P57は、1層：黒色（10YR2/1）；きめ細かな粘土にわずかに木質を残す。2層：黒褐色（10YR3/2）；Pit56、2層に似るが炭化物の量が多い。

P58は、1層：黒褐色（10YR3/1）；粘土にわずかな木質を残す。2層：黒褐色（10YR3/2）；粘土が主であるが粗い茶褐色の粒子を多く含み、硬く締まる。

P59は、1層：黒色（10YR2/1）；きめ細かい粘土。わずかに木質を残す。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；暗褐色の粗い粒子に粘土を含む。わずかに焼土・炭化物も含む。

P60は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土が主であるが、暗褐色の粗い粒子と焼土・炭化物を多く含む。２層：黒褐色（7.5YR3/2）；Pit59の２層に似る。

P61は、2層：黒褐色（7.5YR3/2）；粒子の粗い土に粘土も含む。

P62は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；きめ細かい粘土に暗褐色の粗い土をブロックに含み焼土・炭化物も多く含む。2層：灰褐色（7.5YR4/2）；粒子の粗い土に粘土も含むが硬く締まる。

P63は、2層：黒褐色（7.5YR3/2）；Pit61の２層に似る。

P64は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土が主であるが暗褐色の粗い土や焼土・炭化物を多く含む。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；よく締まった粗い土に粘土も含まれる。わずかだが焼土・炭化物も含む。

P65は、1層：黒褐色（7.5YR3/2）；粘土を主とするが暗褐色の粗い土と焼土・炭化物も多く含む。2層：暗褐色（7.5YR3/3）；粗い土に粘土をブロックに含み焼土・炭化物も多く見られる。又、砂を多く含む。

P66は、1層：黒褐色（7.5YR3/1）；粘土に多量の焼土・炭化物を含む。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；硬く締まった粗い土に、焼土・炭化物を多く含む。

P67は、1層：黒色（7.5YR2/1）；きめ細かい粘土にわずかに木質を残す。2層：黒褐色（7.5YR3/2）；Pit66の２層に似る。

（９）包含層中の遺物【第252図～第266図】

包含層中の遺物の中には遺構に伴っていた可能性もあるが、遺構を特定できなかったものについてはここで取り上げる。古墳時代中期から古代までとかなり時期差がある。

・土器【第252図～第261図・第264図】

まず土器で図化したのは、須恵器が坏蓋23点、壺蓋２点、坏身37点、椀８点、盤９点、大甕３点、中甕７点、壺17点、横瓶１点、高坏６点、鉢９点、耳付坏２点、片口鉢１点である。土師器が甕５点、カマド１点、鉢１点、甑２点、坏14点、椀７点、盤２点、高坏１点、甑の把手６点、不明把手１点、粘土塊２点である。

1505～1529は須恵器の蓋である。1505・1506は古墳時代の坏蓋と考えている。1505はツマミのないもので口径の狭いものである。1506は輪状つまみを持ち、口縁端部近くでやや外反するものである。復元口径は12.7cmを測り広い。

1507・1508は須恵器の壺蓋である。口縁部がほぼ直もしくはやや内湾している。1509～1512は坏蓋で、内面にかえりをもつものである。このうち1512はツマミを持つ可能性があるもので、他のものに比べ器高が高く、ツマミの周囲にはカキメ状の痕跡が残り、かえりは小さい。その他のものは口径が比較的小さく、身との差があまりないものであるが、返し部の内傾が強いものを蓋とした。この３点は天井部外器面にいわゆる「ヘラ記号」として２本の沈線が入る。

1513～1517は須恵器の宝珠もしくは擬宝珠ツマミの付く坏蓋である。口縁部と天井部外器面の調整により

いくつかに分かれる。1513は口縁端部が深くやや内湾する。1515・1516はほぼ同形で口縁端部がやや反り気味で角張るものである。1514・1517は口縁端部があまり明瞭でないものである。いずれも天井部にはかなり回転ヘラ削りがはいる。1518～1529は輪状ツマミを持つ坏蓋である。

1530～1565は坏身である。大きくは高台の付かない1530～1544と、高台の付く1545～1565に分けられる。

1530・1531は受け部と立ち上がりを有するものである。1530は立ち上がりが5mmほどしかなくかなり退化している。内器面底部にはヘラ記号が入る。1531は立ち上がりが低く、内傾するもので先の蓋との差はほとんどないがやや立ち上がりがそれらよりも高いということで身とした。1532は身としたがどちらかというと蓋とした方がよい。1533は底径と口径の差が小さく、体部はほぼ直に立ち上がる。1534も同様に体部の立ち上がりが直に近く、口縁端部がやや反るものである。1535は口径・底径ともに広く、差は小さい。口縁部はほぼ直に立ち上がる。器壁は全体的に薄い。1537・1538も同様に口径と底径の差が小さいものである。口縁部は底部からほぼ直に立ち上がる。1536・1540は口径と底径の差がやや大きいもので、底部から斜め方向に立ち上がるものである。

1545～1565は、須恵器の高台付坏である。口径と器高、高台の形態などによりいくつかに分類できる。

1566～1572は、須恵器の高台付椀である。

1573は高台の付かない椀もしくは鉢である。復元口径が16.3cm、器高が7.0cmを測り、一回りほど他の椀類より大きい。体部下位から底部にかけては回転ヘラ削りが施される。

1574は、小片であることに加え、形態上の類似から間違ってこの須恵器の所に入れたが、緑釉陶器の椀もしくは皿である。底部と高台部分がごくわずかに残った小片であるが、内器面には緑釉が残っている。胎土はよく精製された粘土が使用され、淡黄白色を呈する。低い高台の接地面には、浅い窪みを入れられている。長門産と考えられる。

1575・1576・1578～1582は、須恵器の高台付盤である。口径の違いから大きく2種に分けられる。1575・1576の口径は小さく、1578～1582は復元ながら大きめである。器形的な特徴はほぼ同じである。

1583・1584は、高台のない盤である。

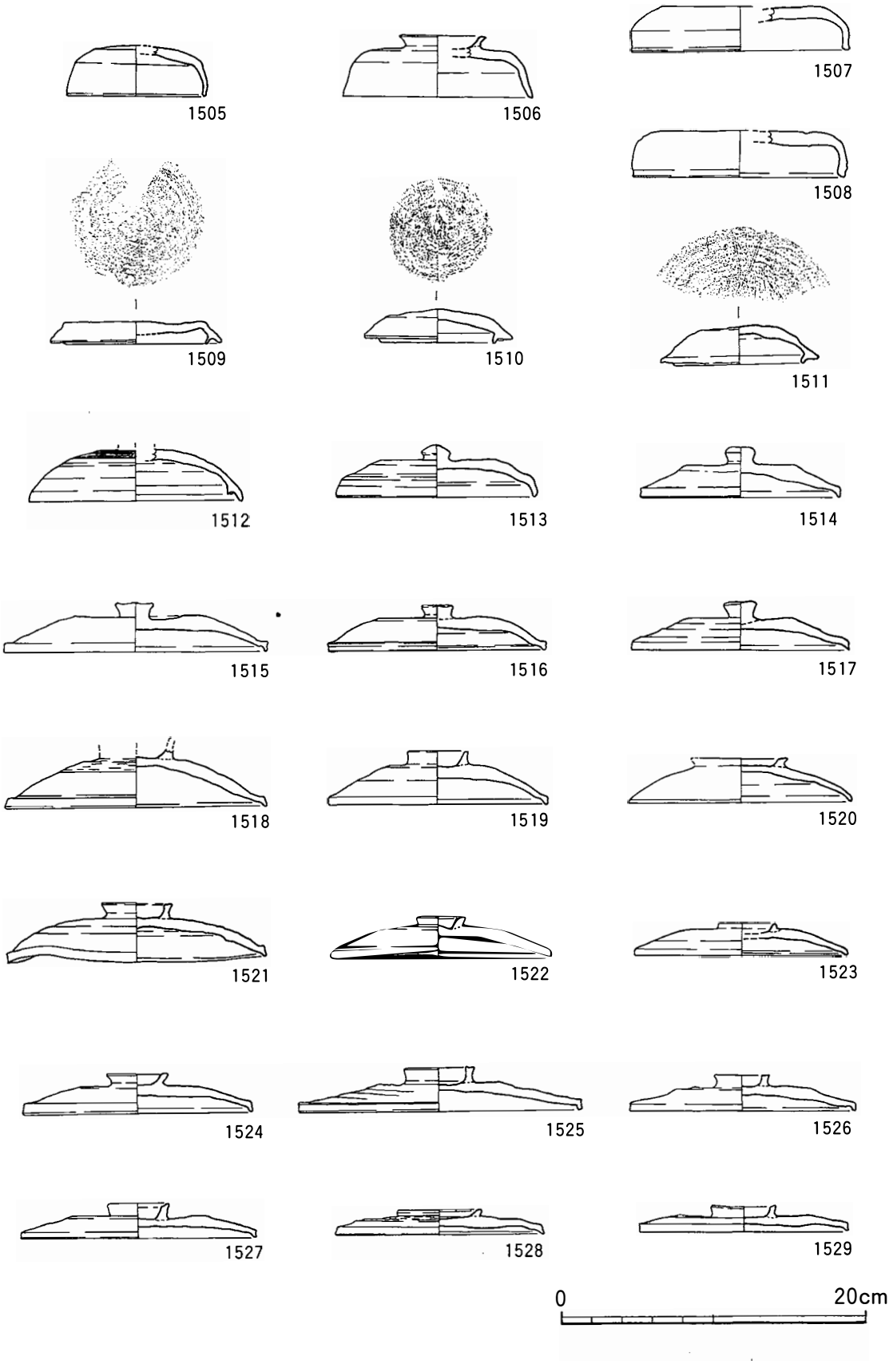
1585～1595は、須恵器の大甕・甕である。1585～1590は、口縁部が長く伸び、ラッパ状に広がる大甕で、特に1585・1586・1587は口唇部近くで屈曲部をもち、二重口縁状を呈するものである。1592・1591は、頸部が短い大甕である。

1604は須恵器の透かし孔をもつ双耳が肩部に付いた長胴壺（瓶）である。復元口径が14.6cm、器高が38.7cm、復元最大胴径が26.0cm、底径が17.1cmを測る。外器面には平行タタキが残りその上に回転横ナデが施される。内器面は回転横ナデが表面に、胴部上位には指による成形痕、胴部中位以下には当て具痕が残る。外底面にはヘラ削りが残る。

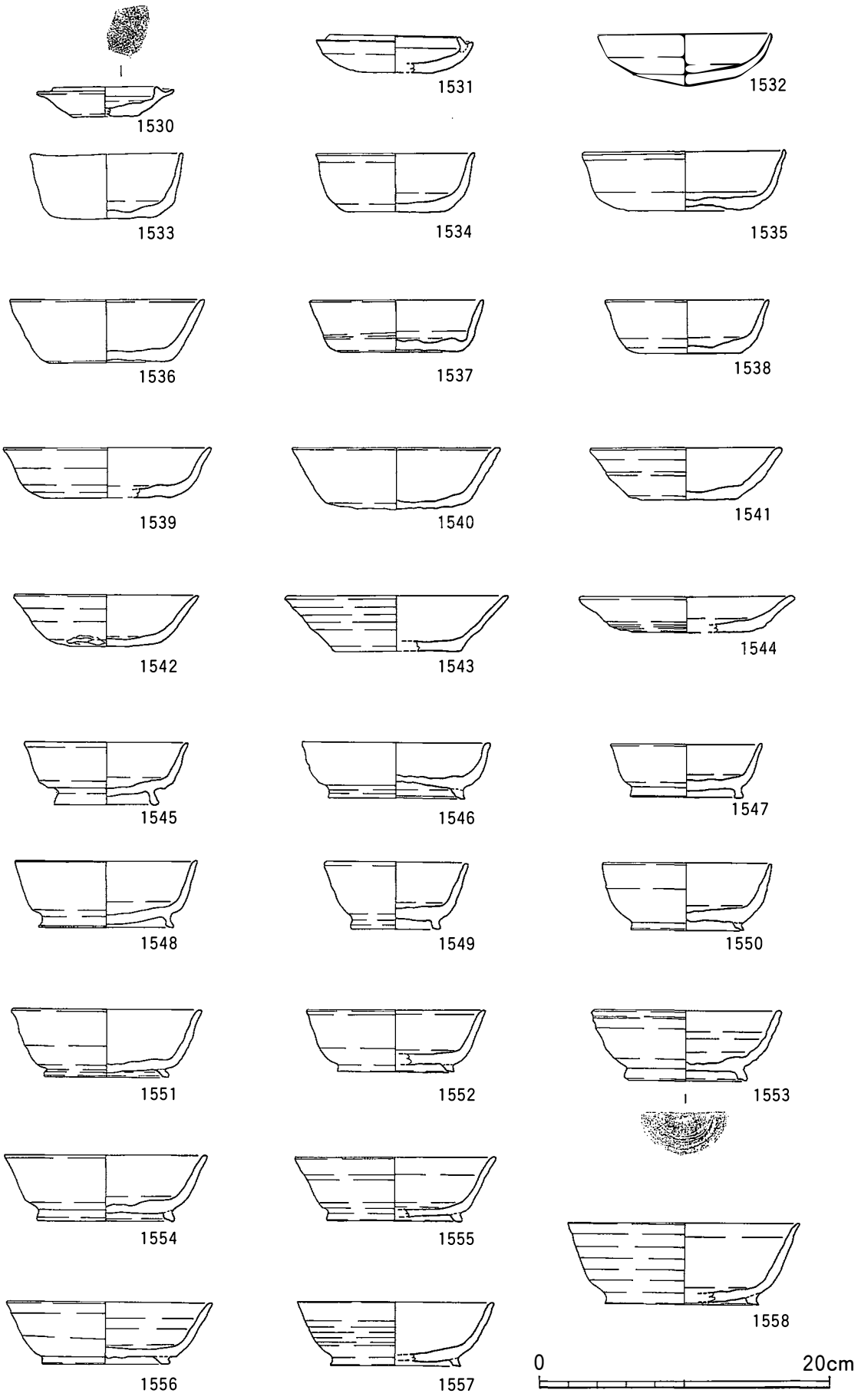
1605～1612は須恵器の一応長頸壺と考える。完形品がなく、部分的なものがほとんどなので厳密に分類はできないが、肩部の特徴から大きく2種に分けられる。肩部に突帯を持ち、その上部にも突帯をめぐらすものと突帯が付かずカーブしているだけのものである。底部形態は平底に高台が付くものである。形態的な差異が時期差を示すものかもしれない。

1613は須恵器の横瓶の一部と考える。形態的には大甕の破片のようであるが、図示した部分の断面をみれば明らかなように甕を作る要領で卵形を作って最後に蓋部分を被せて完全な卵を作り、さらに上部の胴部に穴を開け、そこに口縁をつけるものである。タタキ調整はその際に行って蓋がわからないようにしている。

1614～1619は須恵器の高坏である。1614が他の器形に比べ口径が小さく、縦長の印象を受け、かなり異なっている。また、坏部の高さの違いから、1615～1617と1618～1619に分けられそうである。1617は中間的ではあるがやや小さい。



第252図　包含層出土土器実測図



第253図　包含層出土土器実測図

1614は、Y－26グリッドVb層出土の径の狭い坏部の深い高坏である。本来坏部は復元口径が、8.4cmを測り、体部に２本の沈線が走る。脚部の底径は復元で5.0cmを測る。全体の器高は7.4cmを測る。調整は回転横ナデである。

1615～1619は同系統の高坏である。1615・1616・1617が浅めのもので、1618・1619は深めのものである。1615はV－26グリッドVc層の出土で、復元口径が13.7cmを測る。坏の底部には回転ヘラ削りが施される。1616はW－26グリッドVb層の出土で、復元口径が13.0cmを測る。口縁端部が外反し端部を薄くする。底部に粘土巻き上げ痕残る。1617は4SK040の上層Vc層出土で、復元口径が13.8cmを測る。坏部の外底面は回転ヘラ削りが施される。脚部の貼り付けも一部みえる。1618は、X－26グリッドVb層出土で、復元口径が14.0cmを測る。回転横ナデによる成形で底部に粘土巻上げ痕が残る。脚部はかなり開く。1619はY－29グリッドVc層の出土で、1618とほぼ同形態である。口径が14.2cm、器高が9.3cm、脚の底径が8.7cmを測る。

1620～1622は須恵器の鉢のうち、形態的にすり鉢と考えられるものである。

1620はY－28、Y－29グリッドVc層で出土した須恵器の鉢である。復元口径が18.0cmを測る。体部から口縁まで立ち上げて口縁部付近で内側に屈曲させ、口唇部上端を内側に傾ける。外体部の屈曲部から下位にカキメが入る。1621はZ－29グリッドVb層出土の須恵器の鉢で、形態的に1620に似る。カキメはない。復元口径が13.2cmを測る。1622はZ－29グリッドVb層出土の須恵器の鉢で、復元口径が13.0cmを測る。口縁部近くの屈曲が強く明確な稜線を造り出す。体部下位にヘラ削りが入り、その後ナデ消す。

1623～1625は、須恵器の耳付鉢である。1626も同じかもしれない。

1623はY－28、Z－28グリッドVc層出土のもので、口唇部を弱くつまみ上げて丸めて収めている。耳は細い粘土紐の端をまず貼り付け、それを上に折り曲げて作っている。外器面に弱く平行タタキがみえる。1624はZ－29、Z－28、Y－29の各グリッドのVa～Vc層、Ⅳb層の各層から出土しており、広く拡散した状態になっていたものを接合した。復元口径が16.7cmを測る。体部から口縁部まで直に伸び、端部をやや細くして収める。耳は1623と同じく上に折り曲げて作っている。1625はc－34グリッド出土で、復元口縁が18.6cmを測り、上記の２点より大きい。器形もやや胴張りして口唇端部至る。端部は丸めて収める。耳の作りは同様であるが、少し短くなり整形している。内器面は同心円タタキ当て具痕の後回転横ナデを施す。1626はY－29、Z－29グリッドⅣ層、Vb層の出土した須恵器の鉢で、復元口径が20.0cmを測る。口縁部がやや内傾する。

1627はY－29グリッドVc層出土の須恵器の鉢で、口縁端部はややつまみ上げて外へ屈曲する。外器面には目の細かい擬格子タタキが、内器面には同心円の当て具痕が残る。

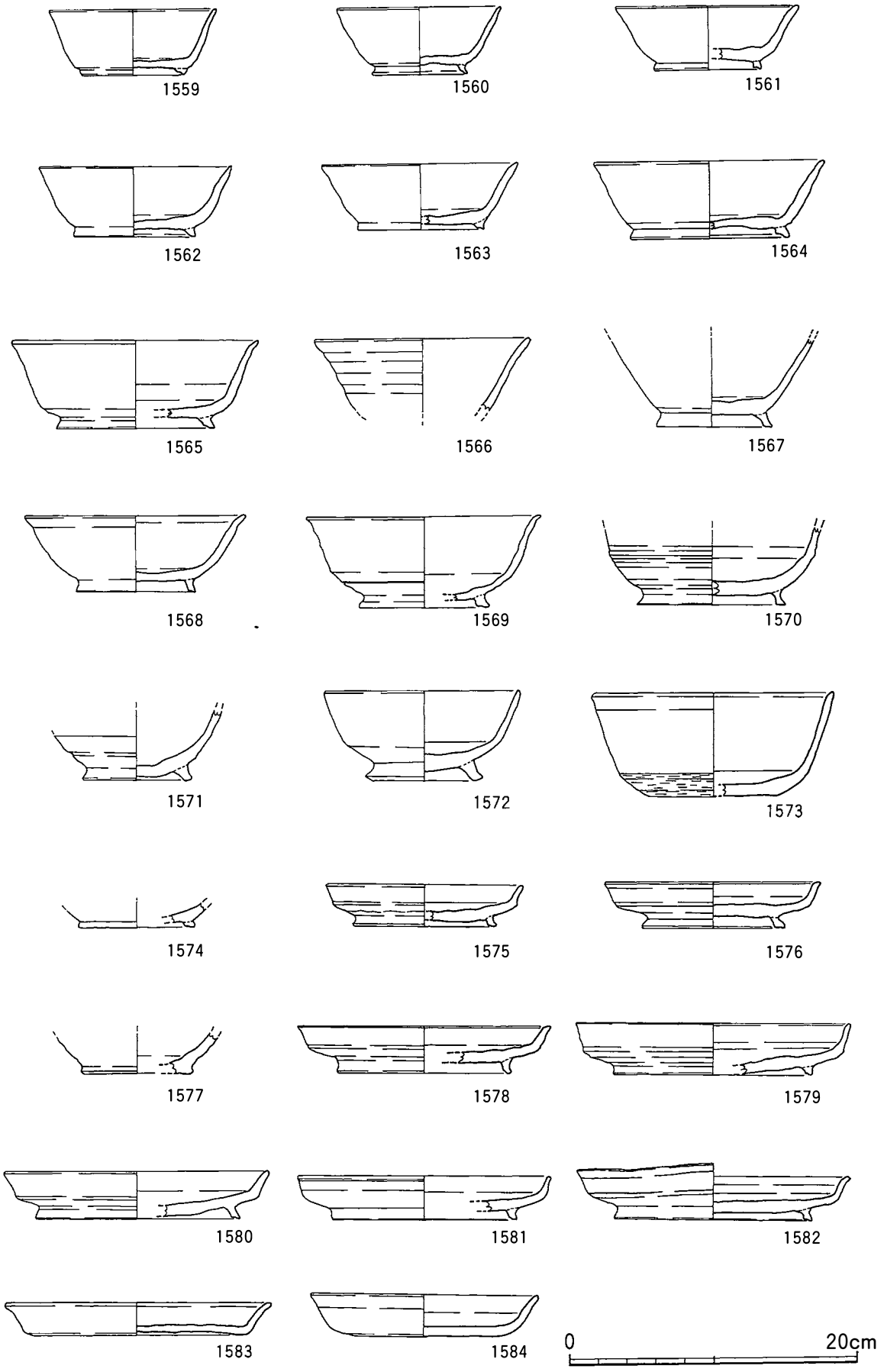
1628はc－30グリッドⅣ層出土の須恵器の鉢の破片と考えたが、外器面に残る櫛歯状のタタキは備前系陶器のタタキに類似している。Ⅳ層からの出土ということから中世の国内産陶器とした方がよい。

1629・1630は須恵器の耳付坏である。口唇部近くに耳を付けている。1629はb－30グリッドVc層の出土で、1630はa－30グリッドⅣ層出土である。

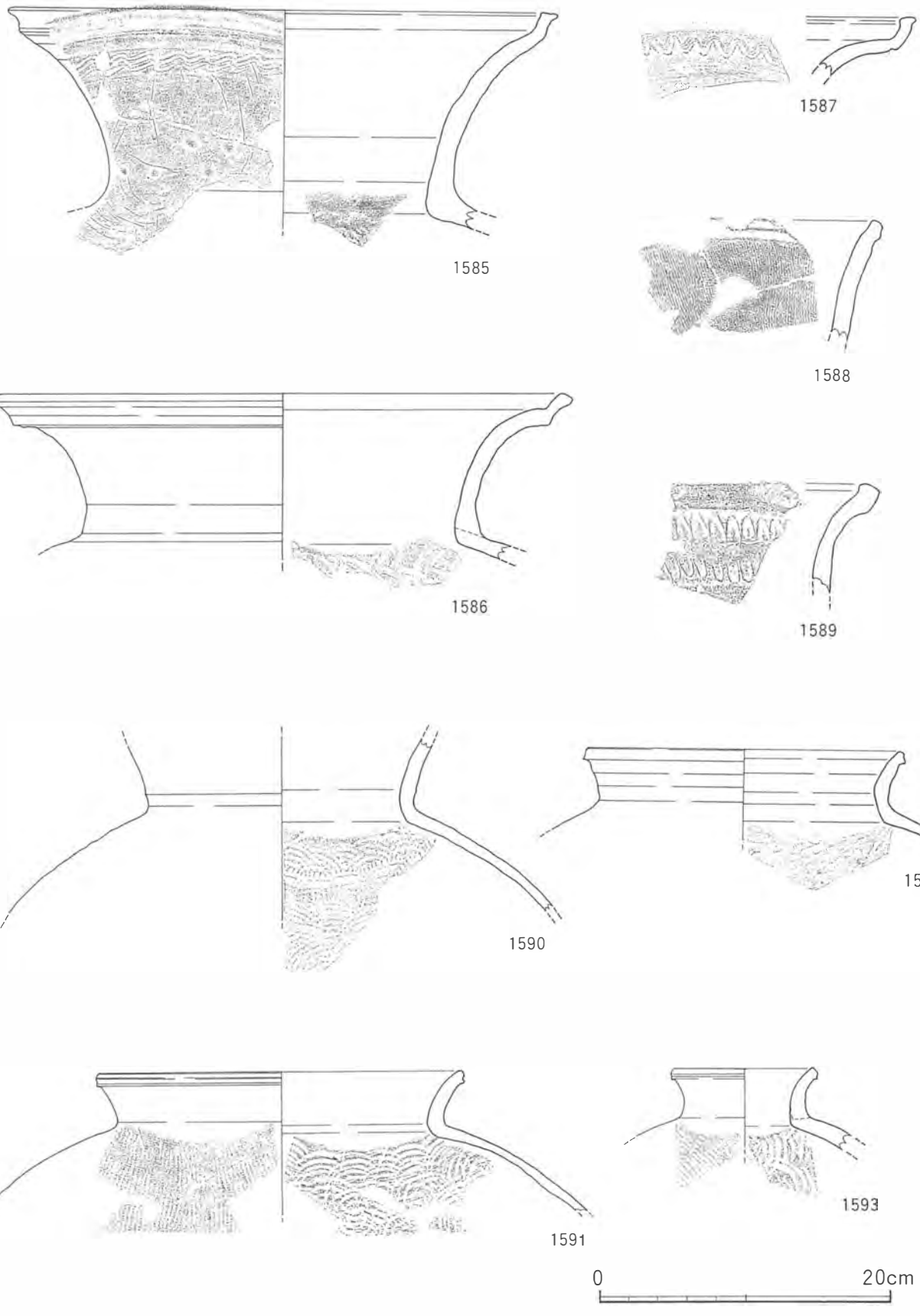
1631はa－27グリッドVc層から出土した須恵器の片口鉢である。

1632～1636は土師器の甕である。形態的な差異がいくらかあるが、ほぼ同時代のものである。

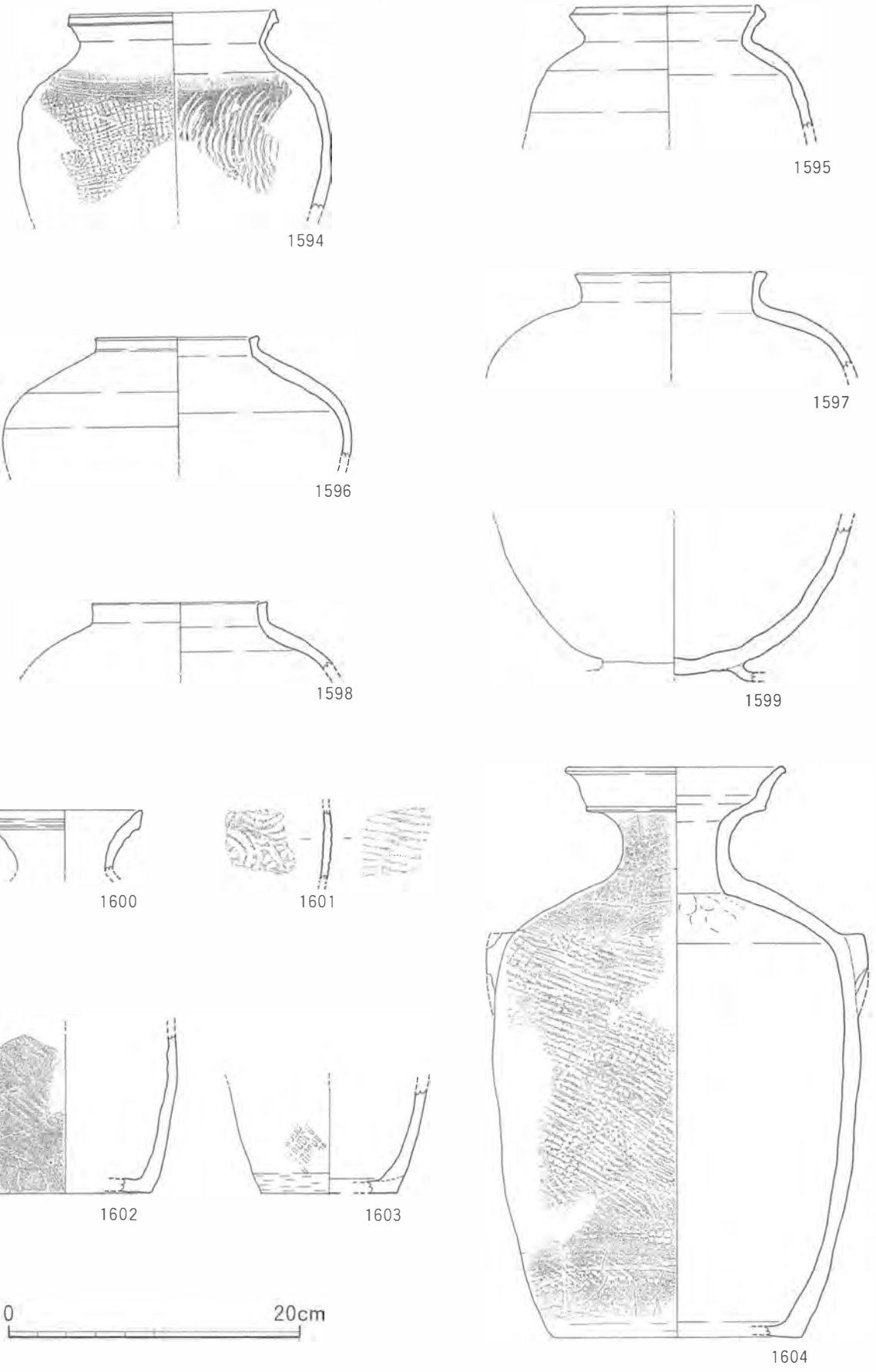
1632はc－34グリッド出土で、頸部から口唇部までが大きく外反している。さらに肥厚し短い。端部は丸く収まる。胴部はやや中位付近で膨らみ、底部に向かう。外器面は縦方向のハケ目と横方向のハケ目が施される。内器面はほぼ縦方向のヘラ削りである。復元口径は25.2cmを測る。1633はb－29グリッドVa層の出土で、復元口径が27.6cmを測る。口縁部は頸部から急激に外反する。端部はやや角張る。胴部は頸部からほとんど膨らまず、下位で小さくなる。外器面はハケ目が残る。内器面は斜め方向ヘラ削りが施される。



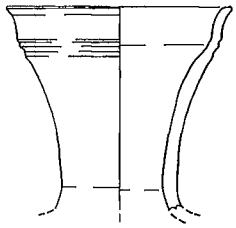
第254図　包含層出土土器実測図

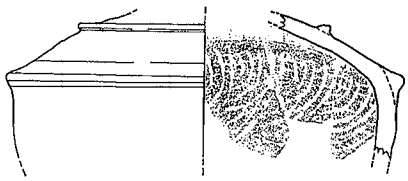


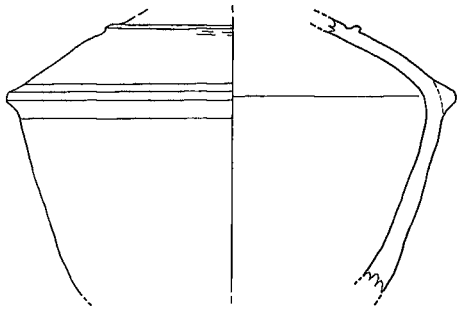
第255図　包含層出土土器実測図

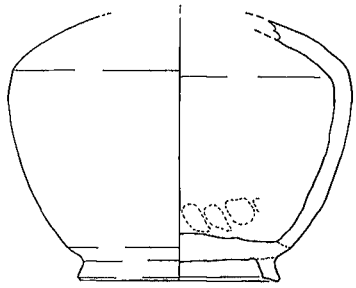


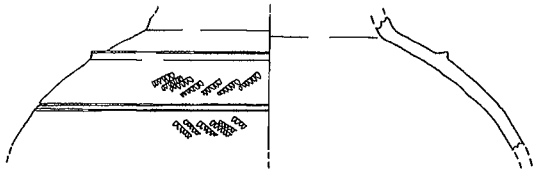
第256図　包含層出土土器実測図

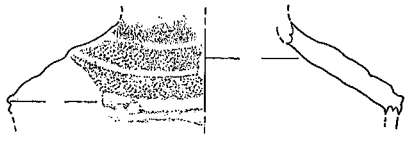

1605

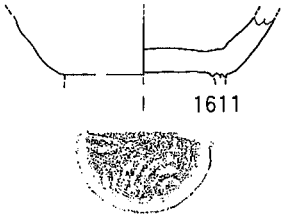

1606

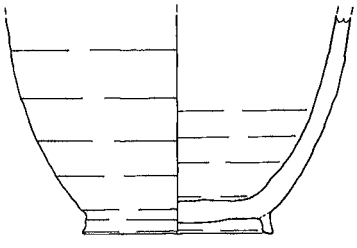

1607

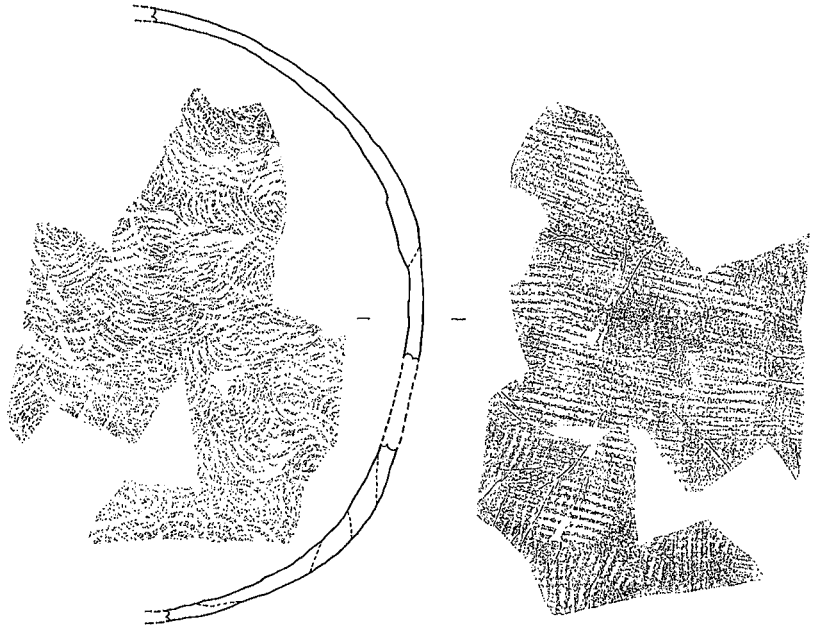

1608

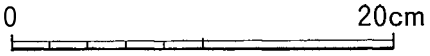

1609


1610

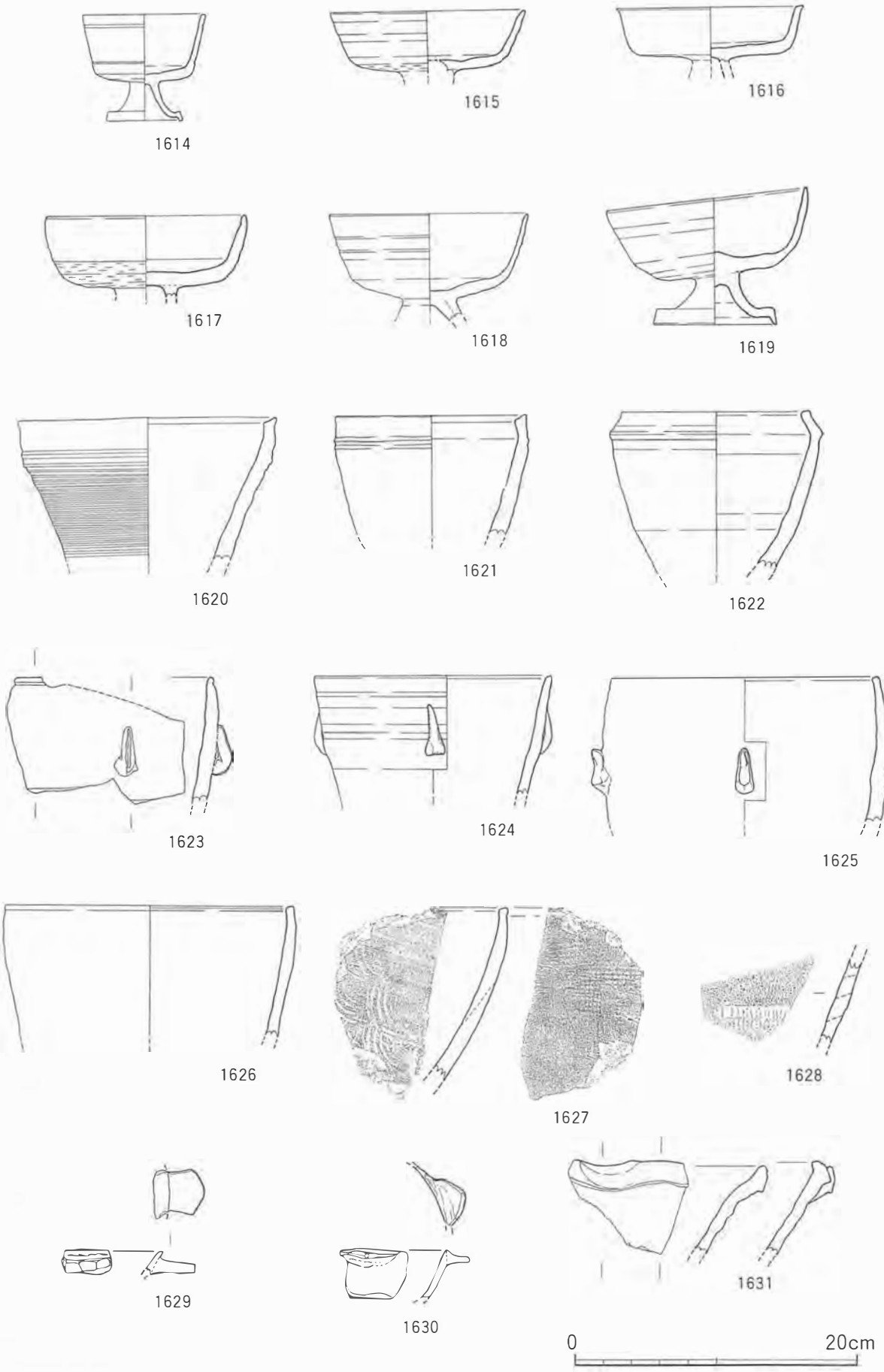

1611


1612

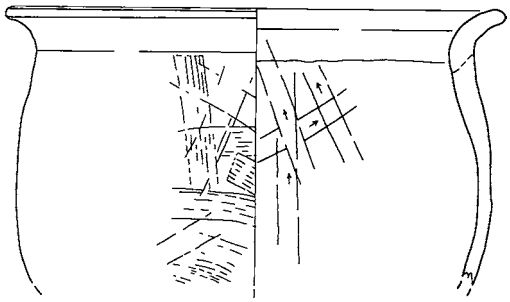

1613

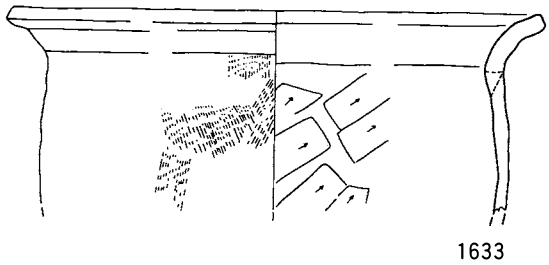


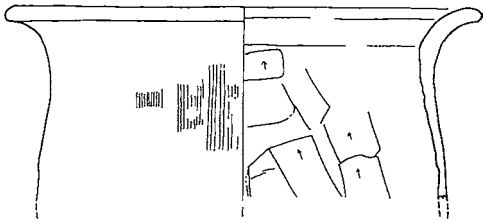
第257図　包含層出土土器実測図

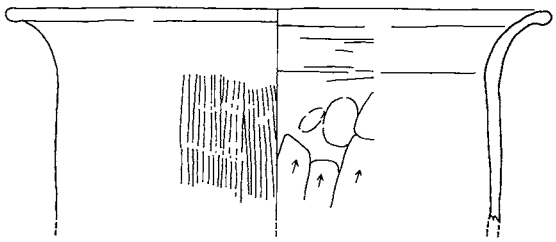


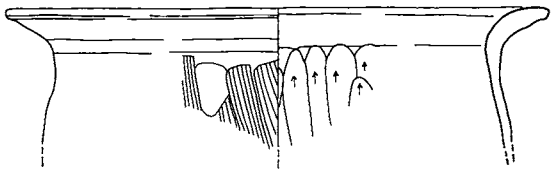
第258図　包含層出土土器実測図

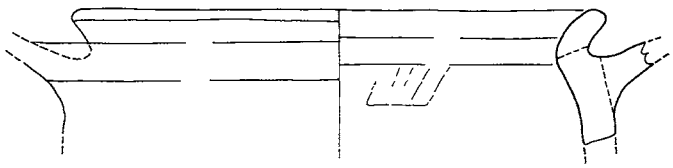

1632

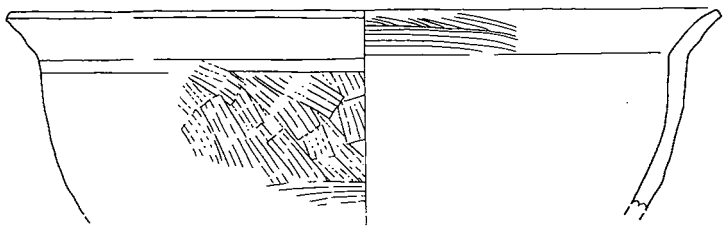

1633

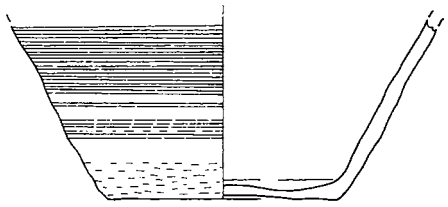

1634

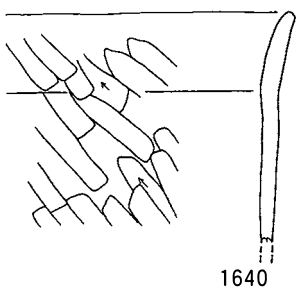

1635

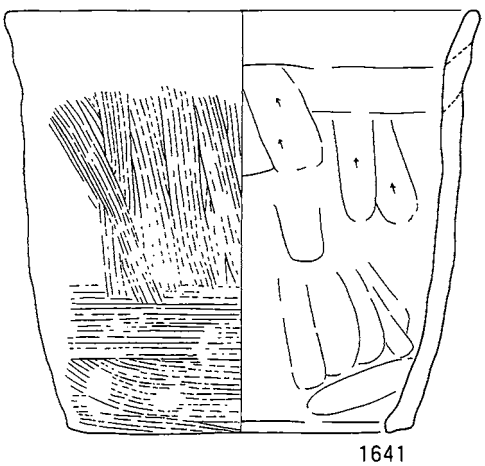

1636


1637


1638


1639


1640


1641

0　20cm

第259図　包含層出土土器実測図

1634はX－26グリッドVb層の出土で、復元口径が24.2cmを測る。口縁は頸部から肥厚し、急激に外反する。端部は丸く収める。胴部はやや膨らみ気味でるが、ほとんど直に近い。外器面は縦方向のハケ目が残り、内器面は縦方向のヘラ削りが施され、器壁が薄くなっている。1635はc－33グリッド出土で、復元口径が27.0cmを測る。口縁部は頸部からやや立ち上がり、端部でやや肥厚させて丸めて収める。胴部はほぼ直になる。外器面は縦方向のハケ目、内器面は縦方向のヘラ削りが施される。1636はc－34グリッドの出土である。口縁部は肥厚させて急激に外反する。口縁端部はやや角張る。胴部はやや広がる。外器面は縦方向のハケ目、内器面は縦方向のヘラ削りが施される。復元口径が28.6cmを測る。

1637はc－31グリッドの出土した土師器のカマドの一部である。焚き口の一部と鍔がみえる。内器面はヘラ削りが施される。

1638は土師器の鉢である。体部には外器面にハケ目が入る。口縁部は頸部から弱く外反し、端部は角張る。口縁部内面は横方向のハケ目が施される。

1639は土師器の鉢であるが、整形技法は須恵器的技法を取り入れている。体部下位の横方向の回転ヘラ削り、中位にみられるカキメも回転台を使用してつけたものであろう。調整は、体部はハケ目の後にナデが施される。内器面はナデとヘラ削りが施される。外底面にはヘラ切り離し痕が残る。

1640・1641は土師器の甑である。

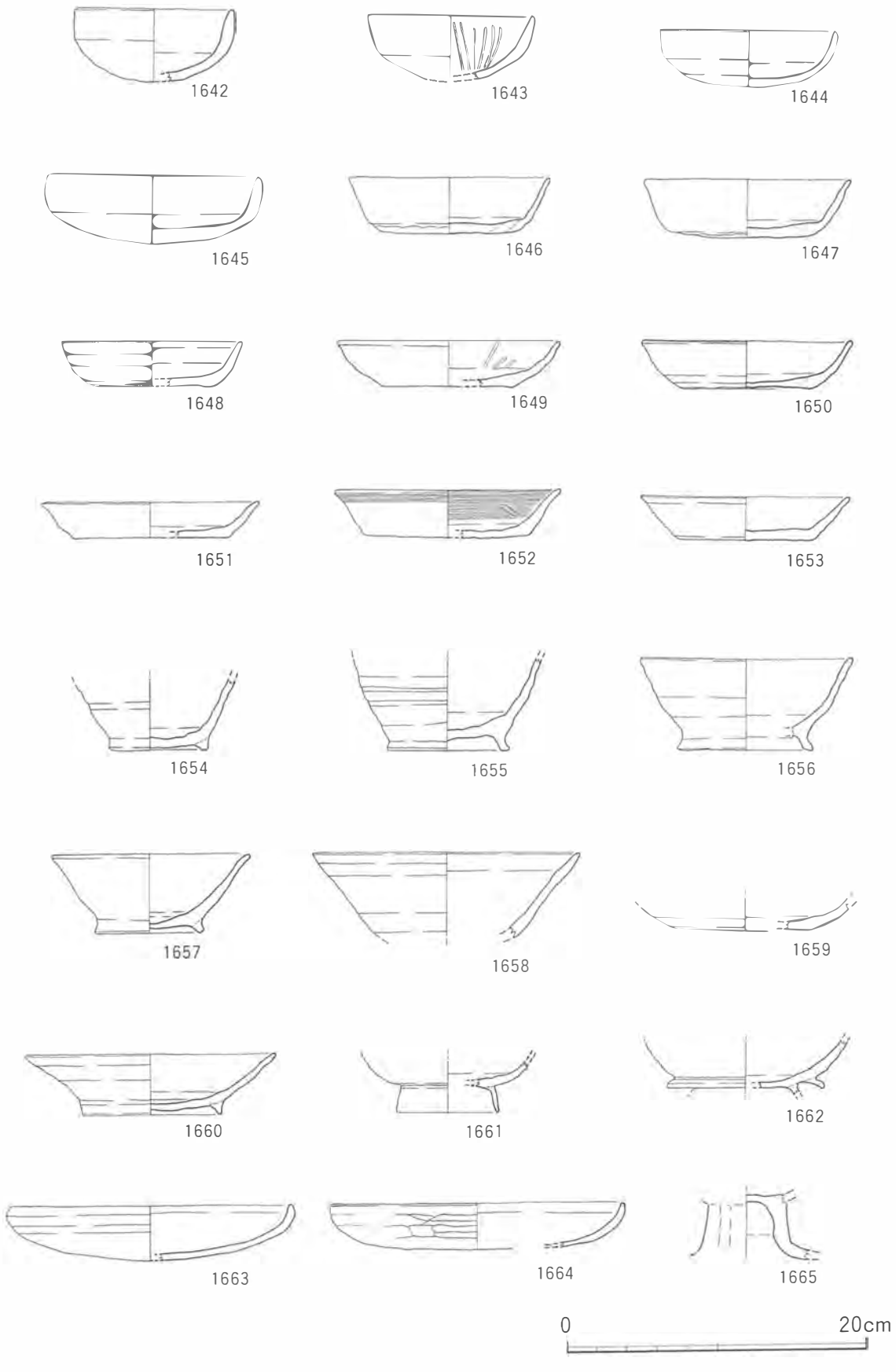
1640はW－26グリッドVb層出土の破片で、体部からほぼ直に口縁部まで伸びる。口縁端部はやや角張り収まる。内器面は斜め方向のヘラ削りが施される。外器面に黒斑がある。1641はa－29グリッドVa～Vc層で出土した。層的にいくつかにまたがって出土していたものを集めて組み上げたものである。復元口縁が24.3cm、復元器高が22.3cm、復元底径が17.9cmを測る。この個体では把手を確認しなかった。底部はほぼ全体の孔があいている。外器面は上位～中位はタテハケ、下位は横方向のハケ目が施される。内器面は縦方向のヘラ削りを施される。口縁部近くに粘土巻上げ痕がみえる。

1642～1645はいわゆる須恵器模倣の坏といわれるものである。口径と高さの比から大きく2種に分けられる。1642・1643は口径と高さの比が小さく、1644・1645は口径と高さの比が大きい。口縁部は一時的に肥厚し、端部は細くなり収まる。

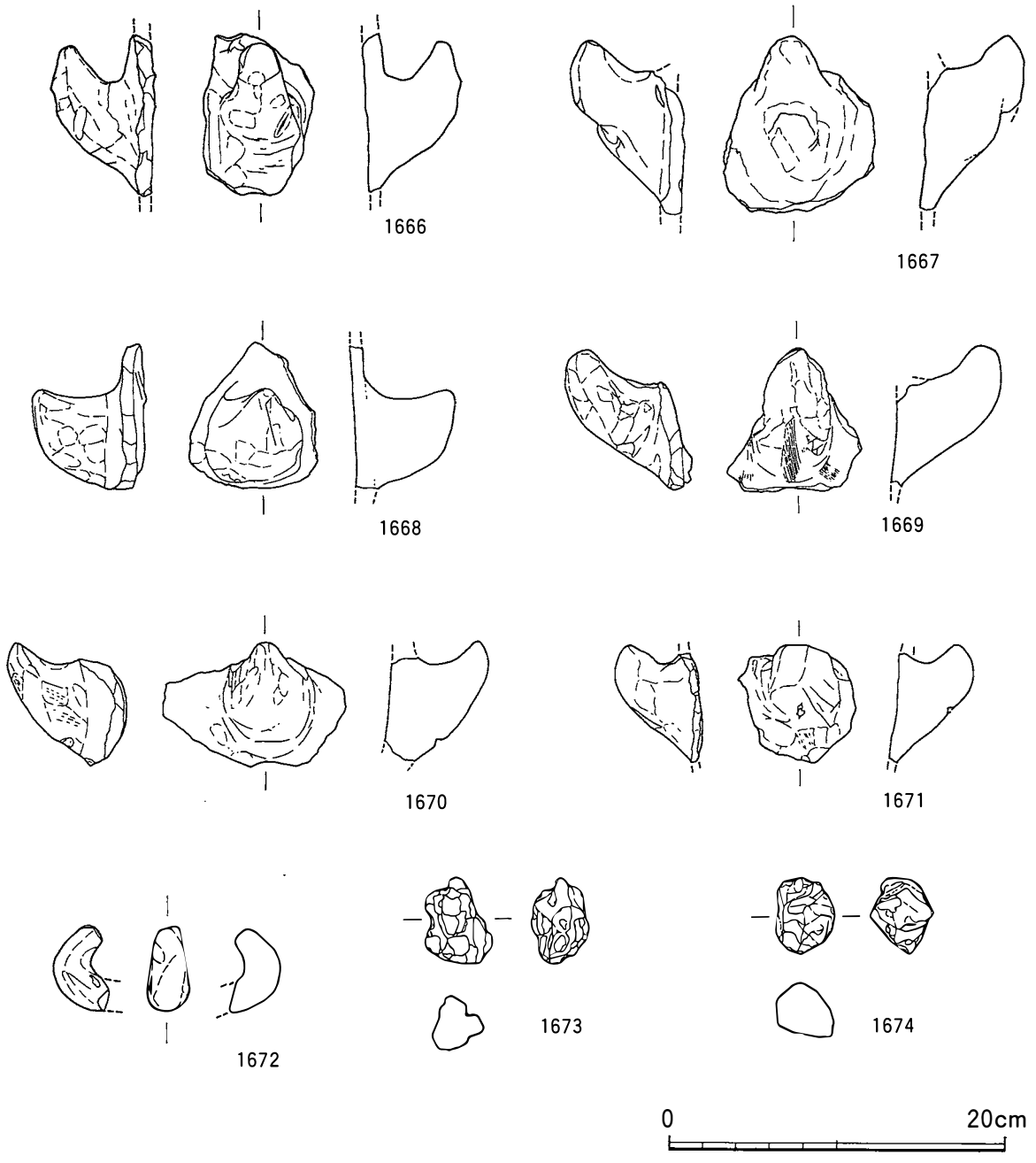
1642は、Z－29グリッドVc、Vd層の出土で、復元口径が10.2cmを測る。外器面底部にはヘラ削りが施される。内外器面には黒色顔料が塗布されている。1643はY－29グリッドVc層出土で、復元口径が11.2cmを測る。口縁部は横ナデで、外器面底部はヘラ削り後ナデ調整がなされる。内外器面に赤色顔料が施される。内器面にはヘラ状工具による放射状の線による暗紋がみられる。1644はY－26グリッドV層から出土し、口径が11.4cmを測る。器面調整は最終的にナデによる。外器面に黒斑がある。1645はZ－29グリッドVc層出土で、口径が14.2cm、器高が4.5cmを測る。外器面底部はヘラ削りの後ナデ調整され、全体はナデ調整である。内外器面には部分的に黒色顔料が塗布される。

1646～1653は土師器の坏である。平らな底部から明確に屈曲して立ち上がるものとやや曖昧に立ち上がるものがある。この形態的な特徴と器高の差での違いで分けられそうであるが、一応1種としておく。

1646はb.c－33、34グリッドで出土したもので、復元口径が13.4cm、器高が3.7cmを測る。調整はナデがほとんどである。復元底径は10.0cmを測る。外器面底部には粘土紐巻上げ痕が残る。1647はc－34グリッドの出土で、復元口縁が13.4cm、器高が3.9cm、底径が9.7cmを測る。外底面にヘラ切り離し痕が残る。1648はi－37グリッドⅡ層の出土で、復元口径が11.9cm、器高が2.95cm、復元底径が8.0cmを測る。外底面には板目圧痕が残る。1649はc－34グリッドL01層からの出土で、復元口径が14.8cm、復元底径が8.9cmを測る。内器面に暗文が残る。1650はZ－29グリッドVc層出土で、復元口径が13.8cm、復元器高が3.1cm、復元底径が8.6cmを測る。外底面にはヘラ切離し痕が残る。内外器面の一部に赤色顔料が残る。1651はⅧ



第260図　包含層出土土器実測図

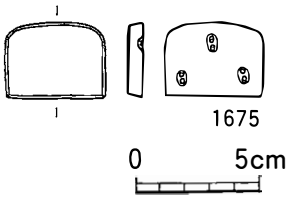


第261図　包含層出土遺物実測図

区で出土し、復元口径14.2cm、復元底径10.2cmを測る。外底面にヘラ切り離し痕がありナデ消している。1652はb－32､33グリッドⅤc層で出土し、復元口径15.1cm、器高が3.2cm、復元底径が11.0cmを測る。体部にはナデがカキメのように残る。内外器面ともに赤彩される。1653はY－26グリッドⅤb層の出土で、口径が13.5cm、器高が2.9cm、底径が8.5cmを測る。回転ナデ調整が大部分で、外器面には赤色顔料が施される。

1654～1661は埦である。高台のつくものと付かないものがある。また器高によっても違いがある。

1654はb、c－33､34グリッドL01層出土で、体部から底部の破片である。器種的には土師器の高台付埦である。高台は低く、5mm以下で底面がほぼ床面に接するくらいである。調整は回転横ナデによるものである。外器面には赤彩がある。1655はⅧ区c－34グリッド出土で、体部から高台までしかなく、高台径が8.2cmを測る。高台が高く、端部がやや外に出る。調整はナデである。1656はⅧ区L01層出土で、復元口径が14.0



第262図　包含層出土石帯実測図

cm、復元器高が6.0cm、高台底径が8.9cm を測る。調整は横ナデである。1657はＹ－26グリッドⅣ層出土で、復元口径が13.1cm、器高が5.2cm、高台径が6.9cm を測る。口縁端部がやや外反する。高台内にはヘラ切り離し痕が残る。底部内器面には粘土巻上げ痕も残る。1658は区ｋ－40グリッド出土で、高台の有無が不明であり、一応埦とした。器面調整は回転横ナデである。復元口径は17.9cm を測る。1659は区出土で、底部のみの破片である。一応形態的な特徴から埦とした。復元底径は8.6cm である。調整は回転横ナデである。1660はｋ－38グリッドⅣ層出土のもので、復元口径が16.6cm、器高が4.0cm、高台径が9.1cm を測る。高さが低いので高台の付く皿でもよいかもしれないが、器形的な特徴としては埦に入れた。1661はｃ－31グリッドのＶａ層、Ｖｃ層で出土した。高台はほぼ直に立ち上がり、端部が薄くなる。体部は破片のため不明確である。高台径は6.5cm を測る。

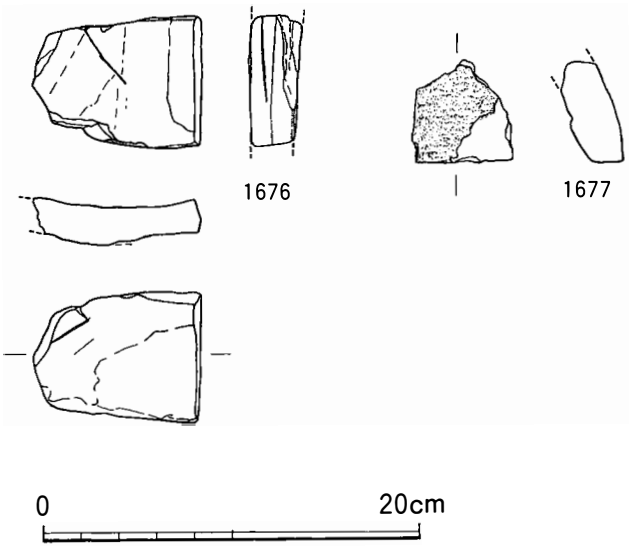
1662はⅧ区Ｌ01層出土で、高台の付け根にもう一つ裳腰様の裾が付くものである。器面調整はナデによるものがほとんどで、内黒土器の一つと考える。

1663・1664は土師器の盤である。いずれも完形品ではないが、ほぼ同様の製品である。

1663はＺ－29グリッドＶｃ層出土で、復元口径が18.6cm、復元器高が3.6cm を測る。外器面には口縁より下部にケズリが入り、その後ナデ調整される。内器面はナデである。1664はＹ－26グリッドＶｂ層出土で、復元口径が19.7cm、器高が3.0cm を測る。外器面は口縁部下位ではヘラ削り後ナデ調整される。内外器面に黒色顔料が塗布される。内器面に沈線がある。

1665はＺ－29グリッドＶｃ層出土の土師器の高坏の脚部である。部分的なため限られた情報しかないが、脚の体部に縦方向のケズリが入り、角柱のようになっている。脚自体は短く、裾が大きく開く。外器面には赤色顔料が施される。

1666～1672は土師器の甑の把手と考えている。形態が様々で手捏により作られたためであろう。指押さえ、指ナデによる成形がなされ、ナデやハケ目も一部使用される。これだけが単独で出土する場合が多いが、これだけでも重量があるため、他の破片から分離してもあまり動かず残る場合が多かったためと考えられる。ここで図化したものにはたまたま、Ｘ、Ｙ－26、27グリッド付近に集中している傾向がある。



第263図　包含層出土遺物実測図

次に1678～1680は須恵器の小型短頸壺である。小片が多く、全体の器形はつかめない。これらは水滴、薬壺などとして使用されたものと推定している。1678がⅤ－26グリッドVa層出土の壺で、外器面に自然釉がかかる。1679は、a－29グリッド5層出土の小型壺である。1680はZ－29グリッドⅣ層出土の小型短頸壺である。

1681は壺蓋のつまみらしきもので須恵質である。1682は須恵質の男根様の把手である。この把手に特殊な意味があるのか不明である。また、どういう器形のものに着くのかも分からない。

1683～1685は鉄器類である。

1683は刀子の莖と刃部の下部が残るものである。錆びて欠損しているため、形態などは不明である。1684は、圭頭斧形鉄鏃の刃部部分である。これも錆が厚く、本来の形状をうまくつかめていない。1685は刀子の刃部と考えているが、これも厚く錆が被り、本来の鉄部分が十分にみえないため、本当に刀子なのか疑問は残る。

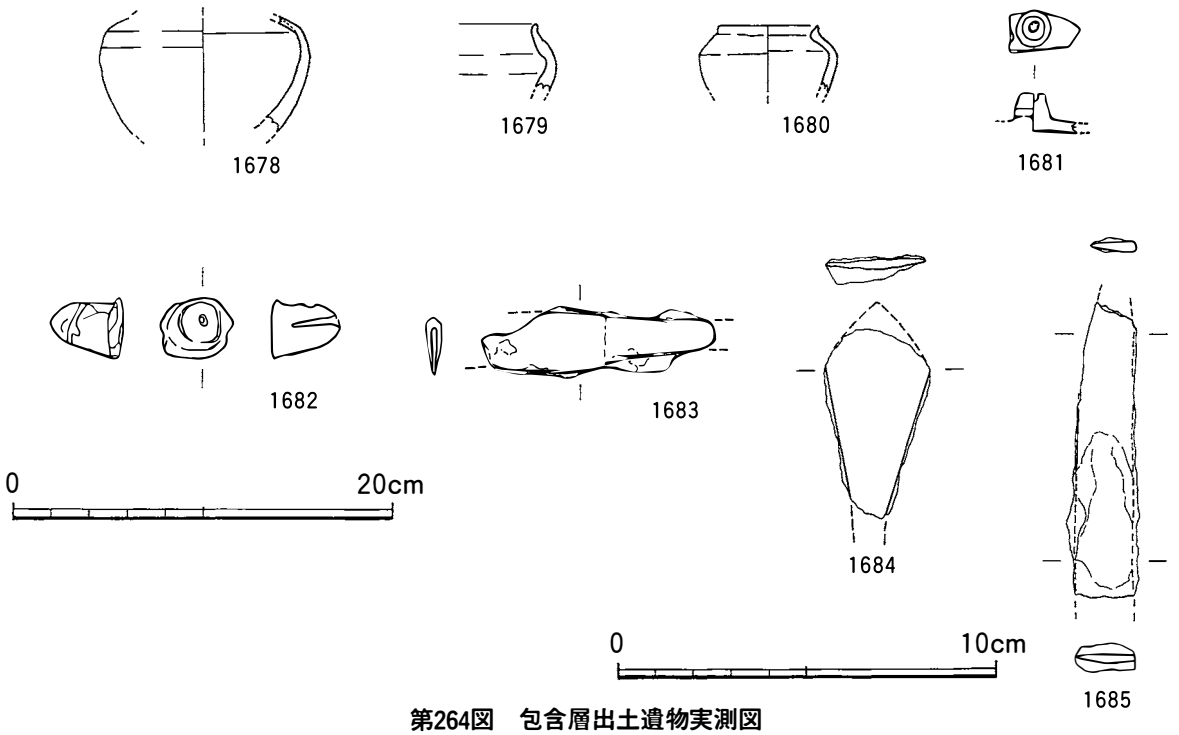
・瓦片【第263図】

第263図の1676・1677の2点は瓦片である。いずれも小破片のため、明確な分類は不可能で、やや薄手で、平瓦の一部と考えられる。1点は1676のZ－28グリッド5a層出土の平瓦片である。薄手のものである。1677は丸瓦片でZ－30グリッド5b層から出土している。表面に縄目タタキ痕が残る。

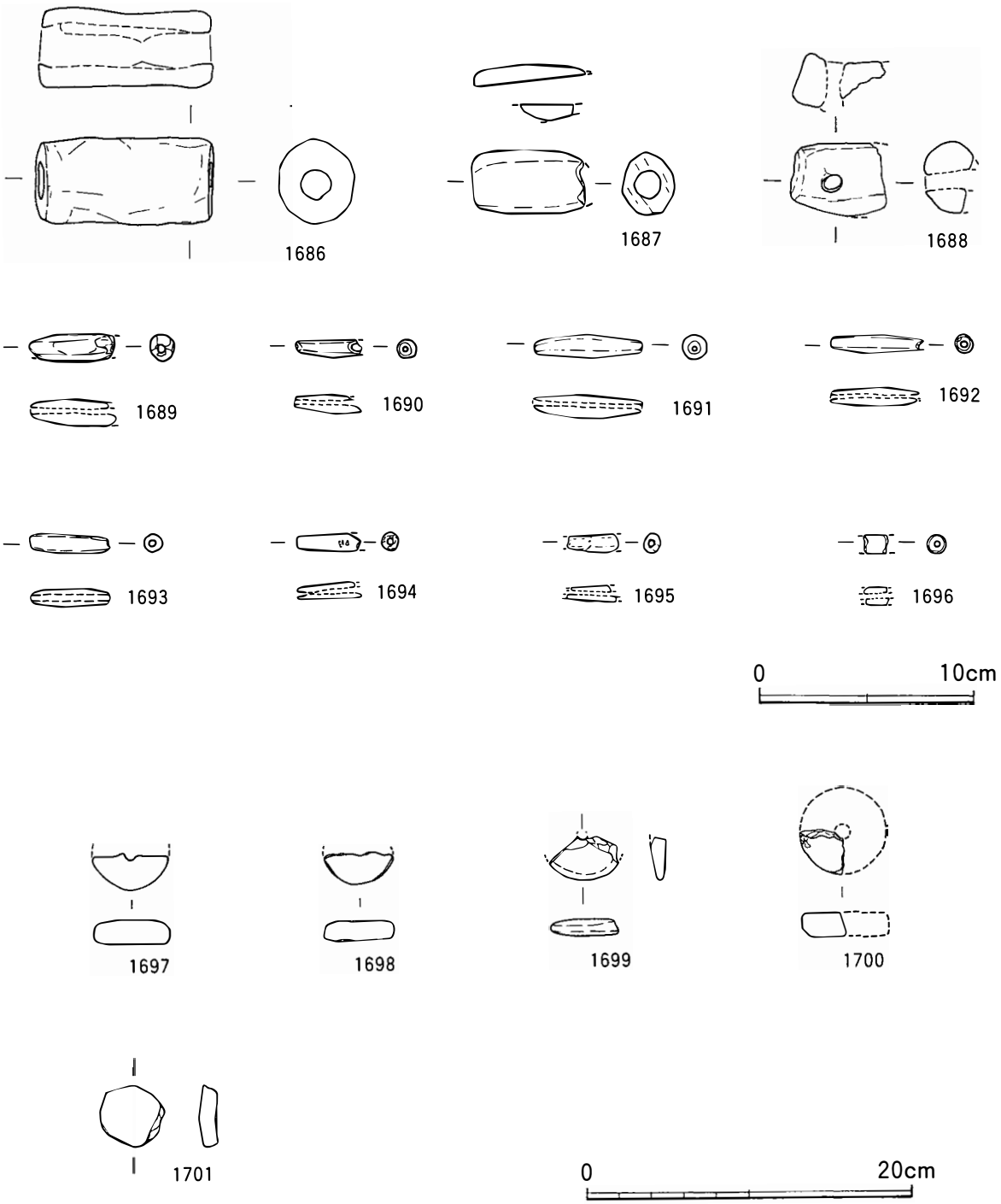
これらは器表面の調整痕や厚みから判断して別物である。出土数の少なさと土地の状況からこの付近に瓦を使うような建物があったとは考えにくく、摩耗の具合なども加味して検討した結果、遺跡周囲の河川（菊池川など）の氾濫の際に、流されてきたものとした。ただ、調査地点の北東方向の菊池川沿いの地に瓦片の多く出土する場所があり、そこから持ってきたか、西側丘陵地にある大塚遺跡や立願寺廃寺などから持ってきた可能性も否定できない。瓦片の整形技法の様子から平安時代のものと考えられる。

・石帯【第262図】

石帯が1点包含層中から出土している。器形は「山形」の範疇に入るもので、横幅が4cm、縦長が3cm、厚みが8mmほどを測る。表面は丁寧に仕上げられ、光沢がある。ただ、器表面は風化がすすみ、つるつるした面も一枚剥げるとざらざらした石材の砂粒化したものがなでるとでてくる状態である。裏面に比べ面積



第264図　包含層出土遺物実測図



第265図　包含層出土遺物実測図

的にやや狭くなっている。

裏面には３箇所の紐穴が穿たれている。紐穴は１箇所ごとに２穴あり、下方で両穴が貫通するようにやや斜め方向に穿つ方法を取っている。深さは5mm 前後を測る。石材は石灰岩質凝灰岩である。

○その他の遺物【第261図・第264図・第265図・第266図】

第261図の1673・1674は粘土塊である。古墳時代前期の大溝状遺構や土坑でも出土しているので、必ずし

もこの古墳時代末～古代の遺物とすることはできないが、層的に古代の層に含まれていたのでここに掲載した。

第264図の1683は、刀子である。古代以降のものである。切っ先を欠き、刀身付け根と茎部分が残るのみである。中子には木質がわずかに残る。1684は鉄鏃ととらえている。三角矢根のものである。1685は不明鉄器であるが、側片を刃部とするにはやや難があるので、先の方がとがるような道具であるヤリガンナの可能性もある。

第265図は土錘を一覧化したものである。時期の決め手に欠けるが、古墳時代から中世のものまで入る可能性がある。大きくは4種類に分かれる。1686のような大型のちくわ状のもの、1687のような大型の土玉のようなもの、1688のような紐通しの穴を開けているもの、その他の大部分は、1689～1696のような小さく細長い筒状のものである。数の面では最後のものが多い。大型の竹輪状のものは他の例から古墳時代以来のもの、最後の簡単なものは中世・近世は小さく細長いものと考えている。

1697～1700は土製の紡錘車である。使用による破損のためか、ほとんど欠損している。1701は、土師器の甕片を利用した円盤状の土製品である。

第４節　中世以降の遺構と遺物

（１）中世の遺構の分布状況【第266図】

ここでは、中世から近世の時期の遺構・遺物を主に取り扱う。特に重要性をみとめた場合は近代以降のものも扱っている。

中世の遺構として明確なものは少なく、調査Ⅷ区で確認した掘立建物跡状柱列、池状遺構の窪地が２箇所とその間の狭い道、及び杭列などがあるだけである。その分布域はⅧ区の自然堤防の上とその周囲に中心がある。遺物自体は調査Ⅷ区では第Ⅳ層の砂層に混入して、土器のみならず銭貨などが出土している。Ⅳ層がⅤ層を削っている状況を調査Ⅶ区から調査Ⅷ区かけて確認できること、Ⅳ層が洪水などにより形成された層であることを考慮すると、Ⅳ層の形成時期は中世のある時期である可能性が考えられる。

（２）掘立柱建物跡

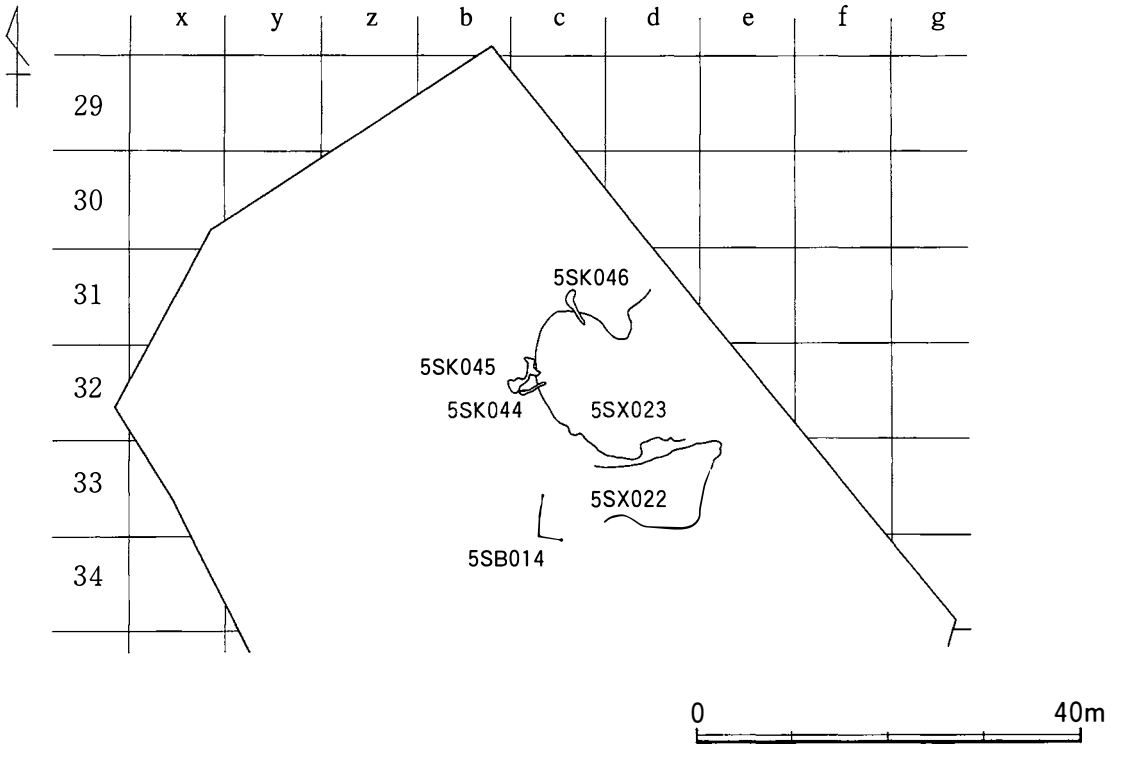
○5SB014【第267図】

調査Ⅷ区のｃ－33グリッドに位置し、表土剥ぎの途中から明確な並びを確認していた。柱跡径は約20cmで確認面からの深さは25cmである。柱穴は３間×１間と予想できるまでを確認したが、削平により段落ちした部分にも伸びる可能性がある。したがって完全に１棟分としては並ばない。柱痕跡は確認できなかった。

柱間は桁行方向で2.1m＋2.2m、梁行約2.4mを測る。

柱跡の掘り方埋土自体は最終確認面の40～50cm上からすでに確認していたが、並びを完全に見分けるまで掘り下げすぎた。

埋土は古代の掘立柱建物跡のものに比べ、黒色の度合いがより強い。いずれの柱跡の埋土も黒褐色（7.5



第266図　調査Ⅷ区内中世遺構配置図

YR3/2）を呈し、きめ細かい土で炭化物をわずかに含み柔らかい。

ここでは一応掘立柱建物跡としたが、削平部分以外でも並び方が不完全なところがある。確認面がすでに削平された状態であったためと考えているが、柵列の可能性もある。

（3）池状遺構と出土遺物

○5SX023・5SX022・（5SK044・5SK045・5SK046）【第268図】

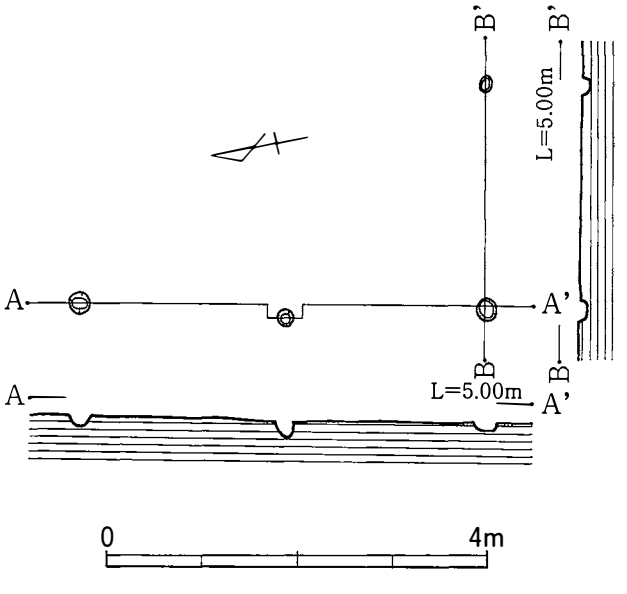
5SX023・5SX022は、一部近世以降の溝で削られ、一部は調査区外とした現道の下になっているため全体の形状は不明確である。ただ調査区内で確認した遺構状況としては両遺構とも落ち込みの開始面から緩やかに落ち、底の立ち上がりも明確でない。遺構の規模も明確ではないが、調査区内で分かる範囲で記すと、5SX022が南北長10m、東西長20m、5SX023が南北長25m、東西長15mをそれぞれ測り、5SX023の規模がやや大きい。この両遺構の間には幅1mほどの通路状になった部分があり、東西に延びていた。両遺構の縁には杭がその通路状の場所を護るように打ち込まれていた。杭の並びは不揃いで、木杭や竹杭である。

調査時には窪みの部分のみを遺構ととらえていたが、整理の過程で間の道状の部分も含めて一つの遺構と考えるようになった。

これら遺構の機能は不明な点が多いが、5SX023・5SX022の埋土は非常に軟弱で水の溜まっていたような状態であったので池状遺構（溜池状遺構）とした。この遺構からどこかへ水を供給するような水路の存在が調査範囲では確認できなかったので、水を単に溜めていただけの施設と考えられる。

5SX023・5SX022は、ともに底部の形状がどちらも緩やかに落ち込むスリバチ状を呈しており、明確な掘り込みなどの人工的加工が加えられたようにはみえない。埋土にはともに砂質土が下層に入ることから調査Ⅶ区から調査Ⅷ区にかけて広がる第Ⅳ層の形成時期と関係する可能性がある。これらのことから、これらの遺構は第Ⅳ層の一部を成す洪水に起因して自然に形成された窪地を利用し、両遺構の間に杭を打ち込み護岸設備とし、ある程度管理した遺構と考えられる。両遺構間の道と考える部分は調査区外に延びるためその行方は不明であるが、東側には現在の家屋集中部があり、やや高くなった場所である。調査範囲に遺構の時期の顕著な集落を確認していないのでその方向に集落などが存在した可能性はある。

時期については埋土中の遺物が少なくとも中世までのものしか含まないので、中世を上限としておく。

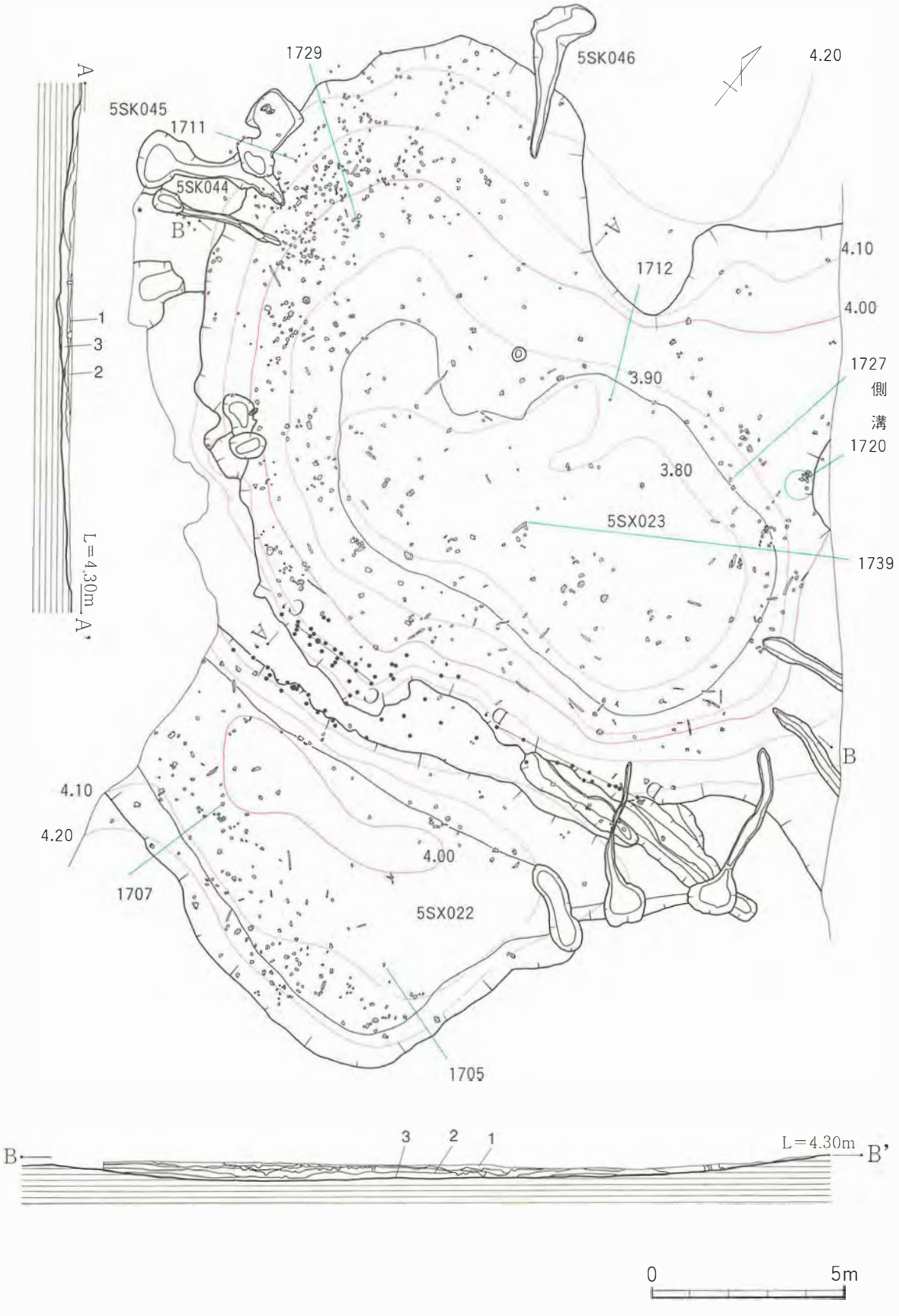


第267図　5SB014実測図

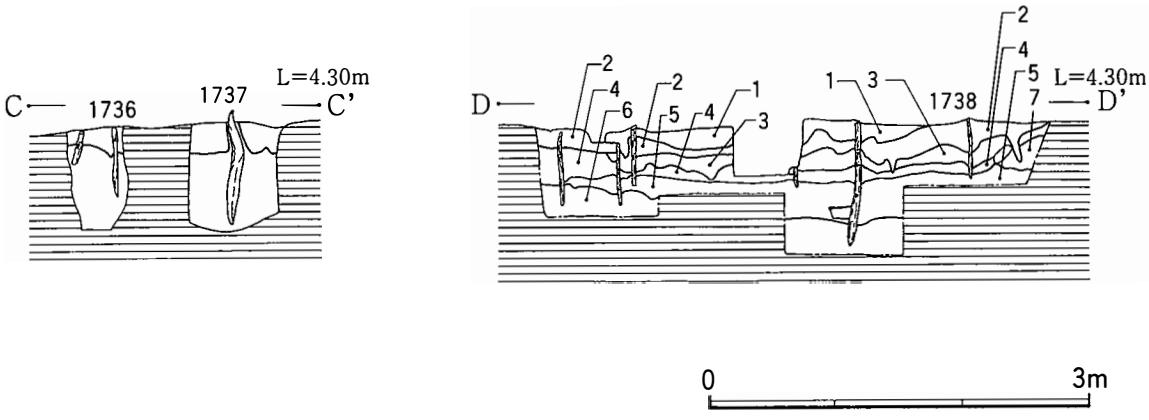
5SX023の縁辺部には調査時遺構と考えた砂質粘土を埋土とする抉り込みがあちこちにある。長く延びた溝状のもので一端により抉り込んだような窪みがある。埋土は砂が多く粘土が混じり、流水などにより形成されると考えられる。遺物はほとんど含んでいない。このような状況からこれらの抉り込みは遺構ではなく、5SX023の縁のみにみられることから5SX023に関係し、この遺構への水の流入に関係して形成された自然の産物と考えた。

5SX022の埋土としては一層のみを確認し、灰黄褐色（10YR4/2）を呈する砂質粘土で、酸化鉄を含んでいる。締まりはあまりない。

5SX023の埋土は、上面ではかなり攪乱を受け、砂粒の入る割合が多い。全体的には大



第268図　5SX022・5SX023・5SK044・5SK045・5SK046実測図



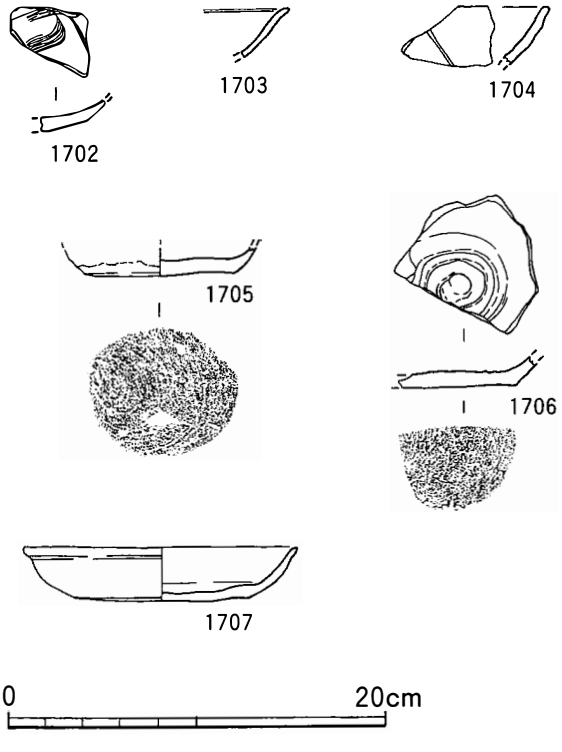
第269図　5SX023に伴う杭列断面実測図

きく４層に分けられる。1層が褐色（10YR4/4）を呈し、きめが細かく締まりがある層で、酸化鉄、マンガンも目立つ。粘性は非常に強い。2層は、灰黄褐色（10YR5/2）を呈し、きめが細かくさらさらした砂質土層で、酸化鉄を少量含んでいる。3層はオリーブ褐色（2.5YR4/3）を呈し、酸化鉄を多く含み、少し粘りのある層である。4層は黒褐色（2.5Y3/2）を呈し、酸化鉄、マンガンを含む粘質土である。

［出土遺物］【第270図～第276図】

○5SX022の出土遺物【第270図・第271図】

1702・1704は、白磁皿の底部片で内器面に櫛描文が施され、大宰府分類のⅧ－1c類と推定する。時期は11世紀後半～12世紀前半に比定される。1703は口禿げの白磁で口縁部のみの破片である。大宰府分類のⅨ－1a類である。時期的には13世紀後半～14世紀前半に増加するという。1705・1706は糸きり底の土師器の坏で、1705は底部のみが残る。1706も底部のみで底径は1705とほぼ同じであるが、作りが異なり、内器面に渦巻状のへこみがある。1707は回転台を利用した平安時代の土師器の坏である。外底面はヘラ削りが施され、体部には回転横ナデが施される。器表面はやや赤みがかった色調である。



第270図　5SX022出土土器実測図

1708は石鍋の底部である。推定底径は10cmを測り、破片から円形の底部と推定している。僅かに残る側面には縦方向のケズリ痕が見える。破損後に別の用途に利用されたのかほぼ中心部に推定径8mmの穴が開けられている。1709は縄文時代のもので紛れ込みであろうが、黒曜石の石核である。各方位から細かい剥片が剥ぎ取られている。1710は石錘である。縦長で、表裏の中心位置に上下、側面にも上下の抉りを入れている。この抉りに網の一端を結んだものであろう。石材は凝灰岩である。この他にも中世の遺物が出土している。

○5SX023の出土遺物【第272図～第275図】

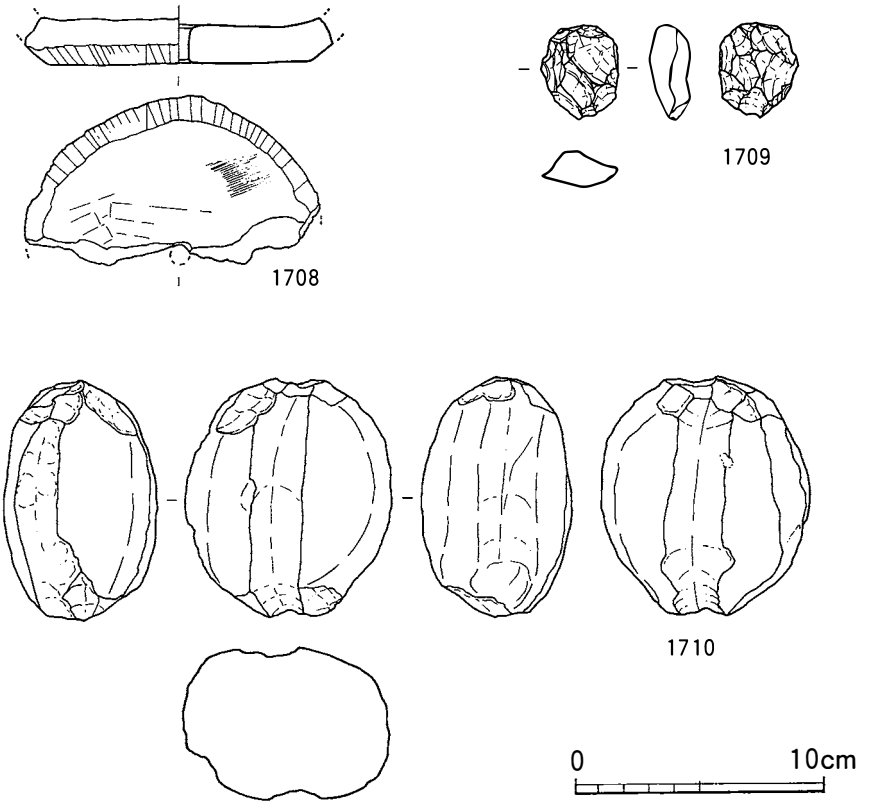
この遺構は古墳時代の遺構である5SX040と重複しているためか、その時期の遺物が混入して出土している。1715・1718・1719～1721がそれである。

中世の遺物としては、1711～1714までを図化して

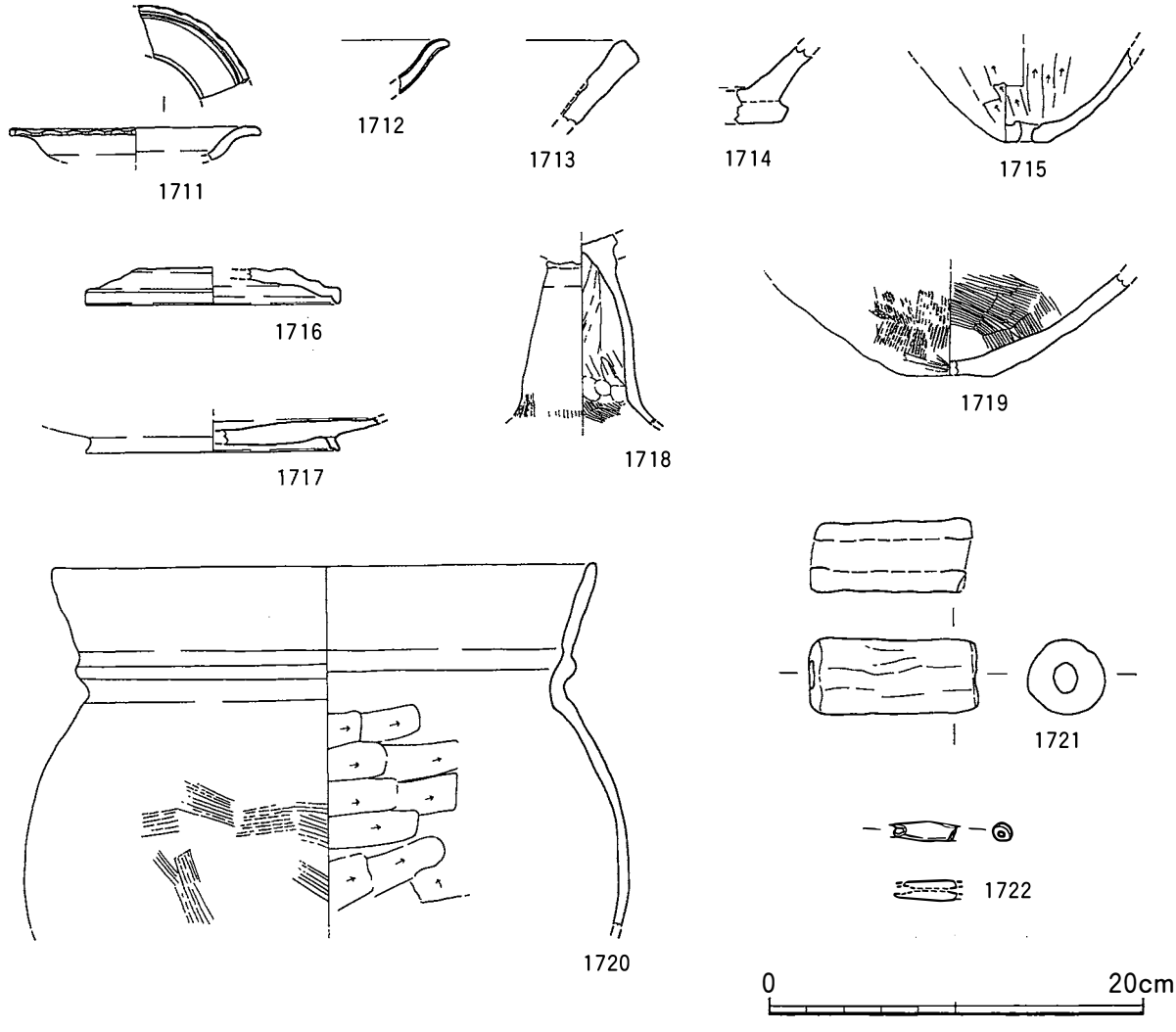
いる。1711は陵花縁の青磁皿である。口縁部で内面が外反する。口唇部には陵花が施される。縁近くに２本の沈線が入る。越州窯系青磁皿であろう。1712は青磁碗片で口縁部が外反する皿で、釉は厚い。1713は須恵質の擂鉢片、1714は越州窯系の青磁碗の底部片である。内器面に釉が剥げかかりながらも残る粗製品である。外器面底部は釉がなく、ヘラ削りが施され、須恵質土器の雰囲気がある。大宰府分類の碗Ⅱ－2f類に当たる。時期は８世紀末～10世紀中頃に比定される。1722は土錘で、何らかの芯に粘土を巻き付け焼成したものである。時期は不明確であるが、中世のものであろう。

1720はかなり大きな破片で、口縁部から胴部までである。この遺構の底面部から出土している。二重口縁甕で、古墳時代前期の遺物で、頸部が少し締まり、口縁に一段の盛り上がり、直に口唇部に伸びる。1715は古墳時代前期の甑の底部で、1箇所穿孔されている。1719は、古墳時代前期の壺の底部で、内器面に横方向のハケ目が施され、外器面は縦方向のハケ目が残る。1718は、同じく古墳時代の高坏の脚部で、薄い器壁でややふくらみを持つ。1721は竹輪状の土錘で、ほぼ完形である。確証はないが他の遺構の例から古墳時代のものと考えられる。1716は古代の須恵器の蓋で、やや小ぶりのものである。口縁部の返しはなく、折り曲げただけである。つまみは欠損部分のため不明である。1717も同じくの古代の須恵器で、体部の開き具合から高台付き皿とする。復元径からやや大きめのものである。これらの古墳時代と古代の遺物は、流れ込みの可能性がある。古墳時代の遺物については、この遺構と重複する5SX040に伴う遺物とも考えられる。

1723～1730・1734は埋土中から出土した木製品類で、1～２層までのものが大部分である。製品として分かるものは少ない。1723は板材で穿孔されている。1727は小さい石鹸状の木片で、何かこするためのものかもしれない。1729は何かの部材であろう。長さ5cmほどの小木片の両端に1mm程度の小穴が開けられている。1724・1726は杭で端部を刃物によって尖らせている。1725は縁を薄く削った板材である。1728は木片である。1730は炭化した木片であるが、非常に平滑になった一面があり刃物（刀剣）などを研ぐ際に用いられた可能性がある。1734は細く短冊状にした板材の端部両側から尖らせたものである。一方の端部は欠損して



第271図　5SX022出土石器類実測図



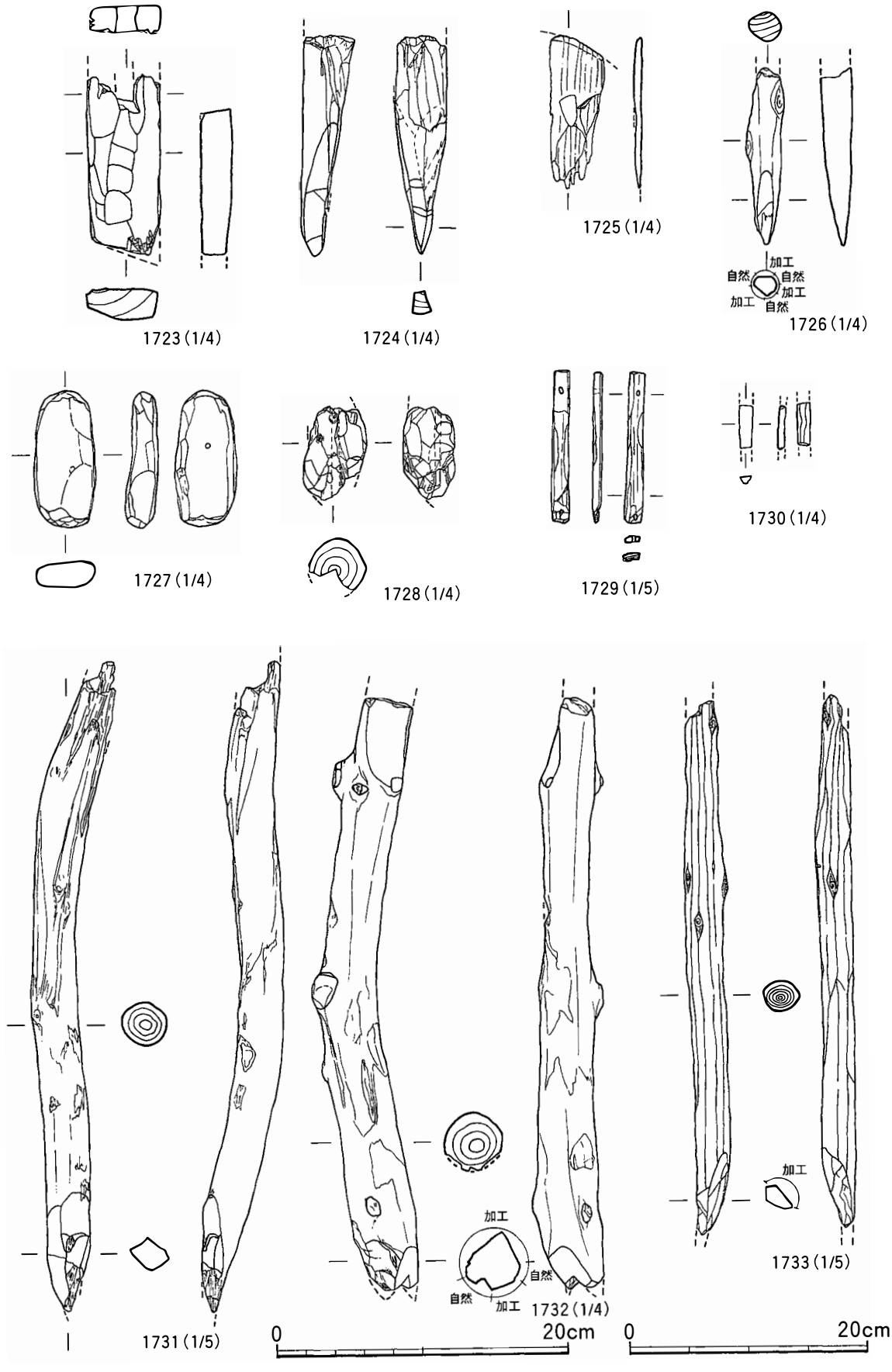
第272図　5SX023出土土器実測図

いる。

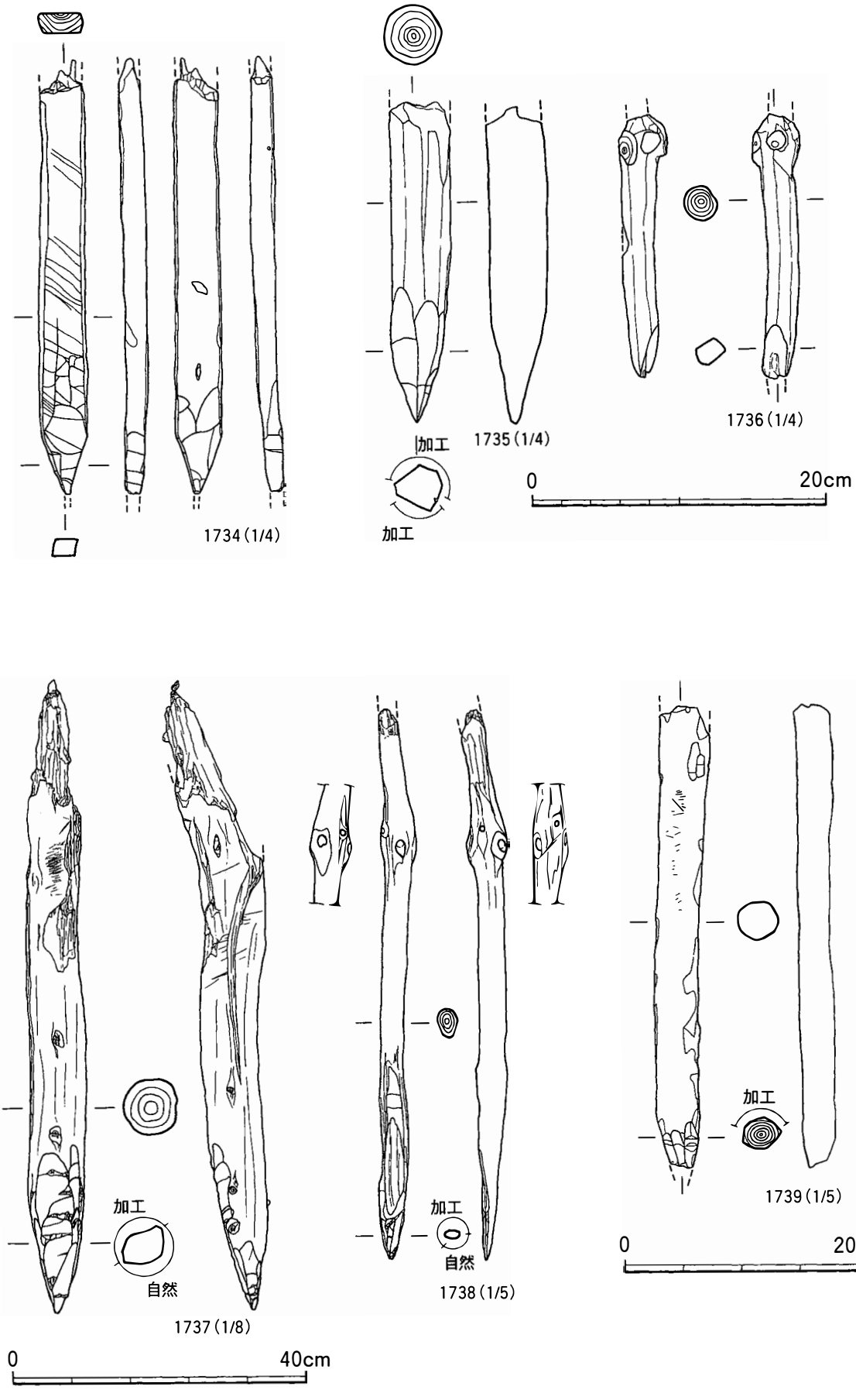
1731～1733、1735～1739は5SX022と5SX023の間に打たれた杭の一部である。大小さまざまで規格性はないようであるが、両遺構の淵付近に列状に打たれていた。杭の中には竹杭もあり、腐りやすい竹が残っているところを見ると中世でも新しい時期であるかもしれない。

第275・276図は、これらの遺構中から出土した石器等を図化している。時期も様々で遺構の形成時期に伴わないものが多い。1740は基部の抉りが深く入っていない石鏃である。1741は打製石斧の破片である。刃部形状は丸くなる。1742～1744は敲石の一種である。1742は各面が摩耗し、下端部及び側面に敲打痕があった。1743は各面が摩耗し、表裏面に強い敲打痕、側面にも弱い敲打痕が残る。1744の下端部に敲打痕がある。1745は深い窪みが残る凹石であろう。

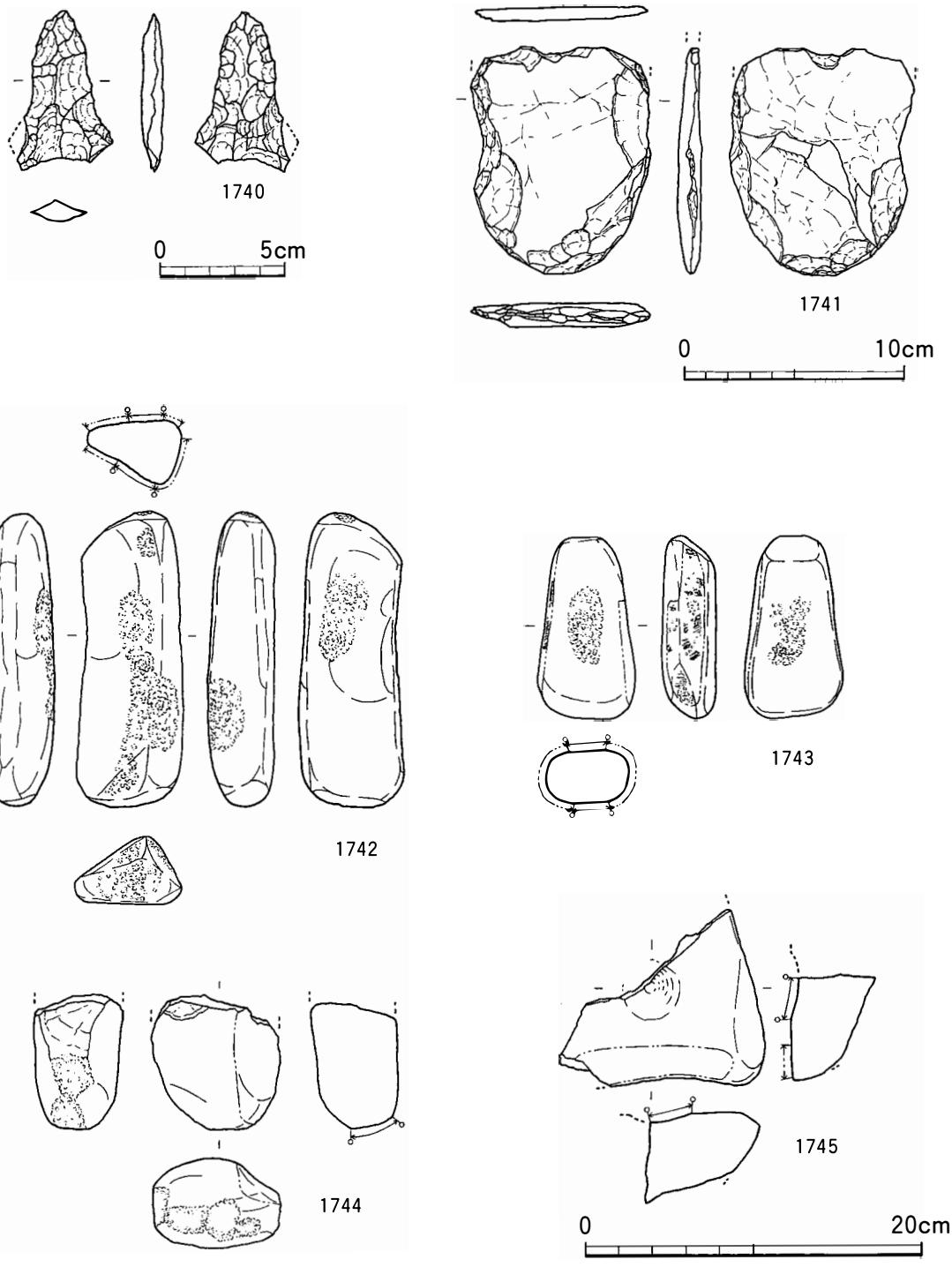
第276図は、取り上げ地点が明確でないため包含層の出土品としたが、これらの遺跡に伴う可能性の高いものである。1746は滑石製石鍋片で体部であると考えられる。外器面に縦方向のケズリ痕がある。1747は把手であるが何の把手かは不明である。付け根付近のところに穴が開けられている。1748～1750は滑石を円盤状に加工し、穿孔している。一応有孔石製品とする。用途は不明である。他の遺跡でも類例があり、今後の資料増加に待ちたい。1751は石錘で表面、側面と上下に抉りが入る。表面は十字形に、側面は上下にそれぞれ入っている。石材は凝灰岩である。1752は砂岩製の砥石で、表面は非常によく磨研され、凹面となっている。裏面には破砕面を残す。



第273図　5SX023に伴う木製品実測図



第274図　5SX023に伴う木製品実測図



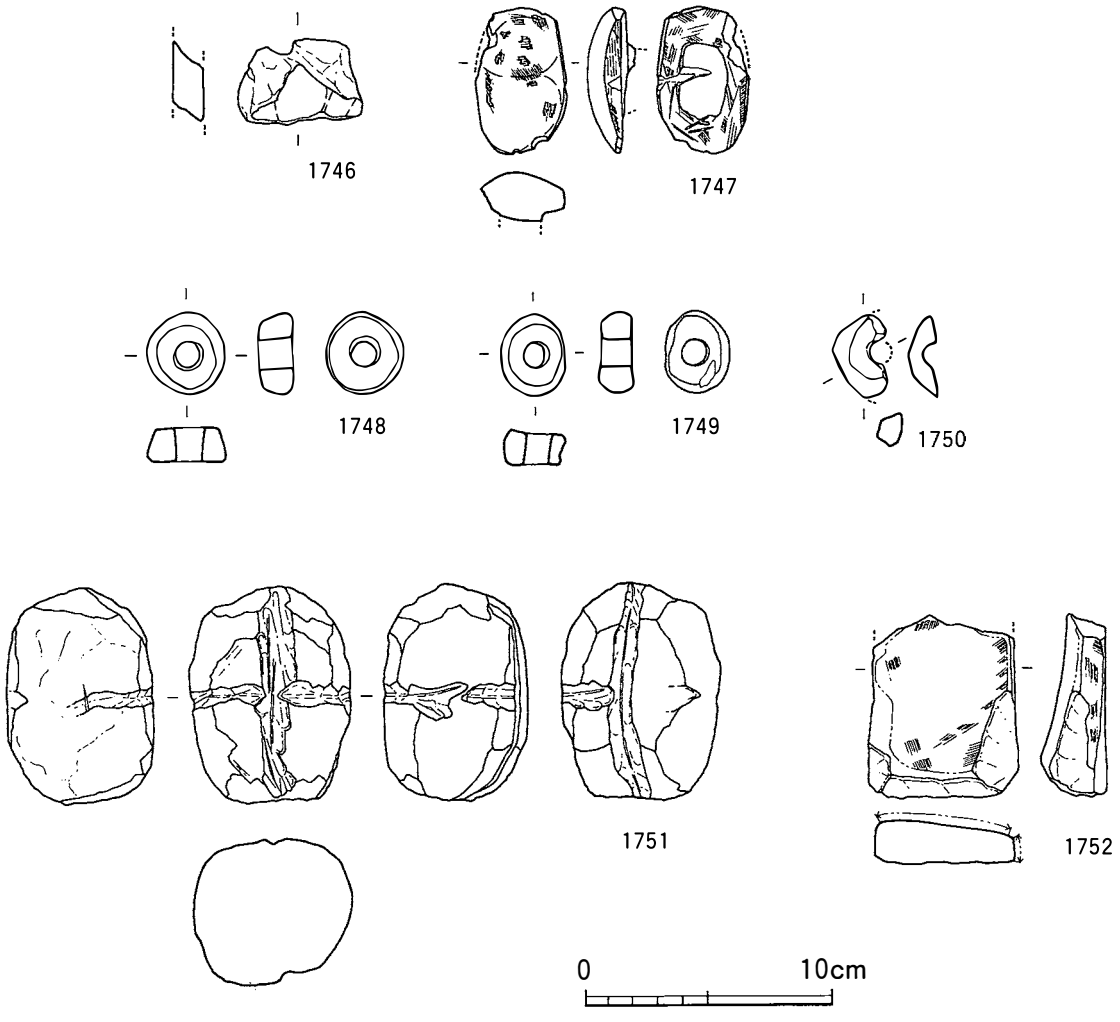
第275図　5SX023出土石器実測図

（４）近世以降の遺構と遺物

これから述べる近世の遺構と遺物は調査Ⅷ区と調査Ｘ区のものである。特に遺物では調査Ｘ区のものが多い。これは良好な廃棄遺物が集中していたからである。ただ、ここでの遺構と遺物での構成がこれまでと異なり一貫性がなくなった部分があるのは整理作業・報告書作成時の編者の方針が動いたためで、見づらくなったことをお詫びしておく。

○5SK016【第277図】

b－32グリッドで検出した5SK016は遺構確認時には5SK017を切る遺構としていたが、埋土の状況を見誤ったもので最終的には同一遺構であると判断した。



第276図　包含層出土石器実測図

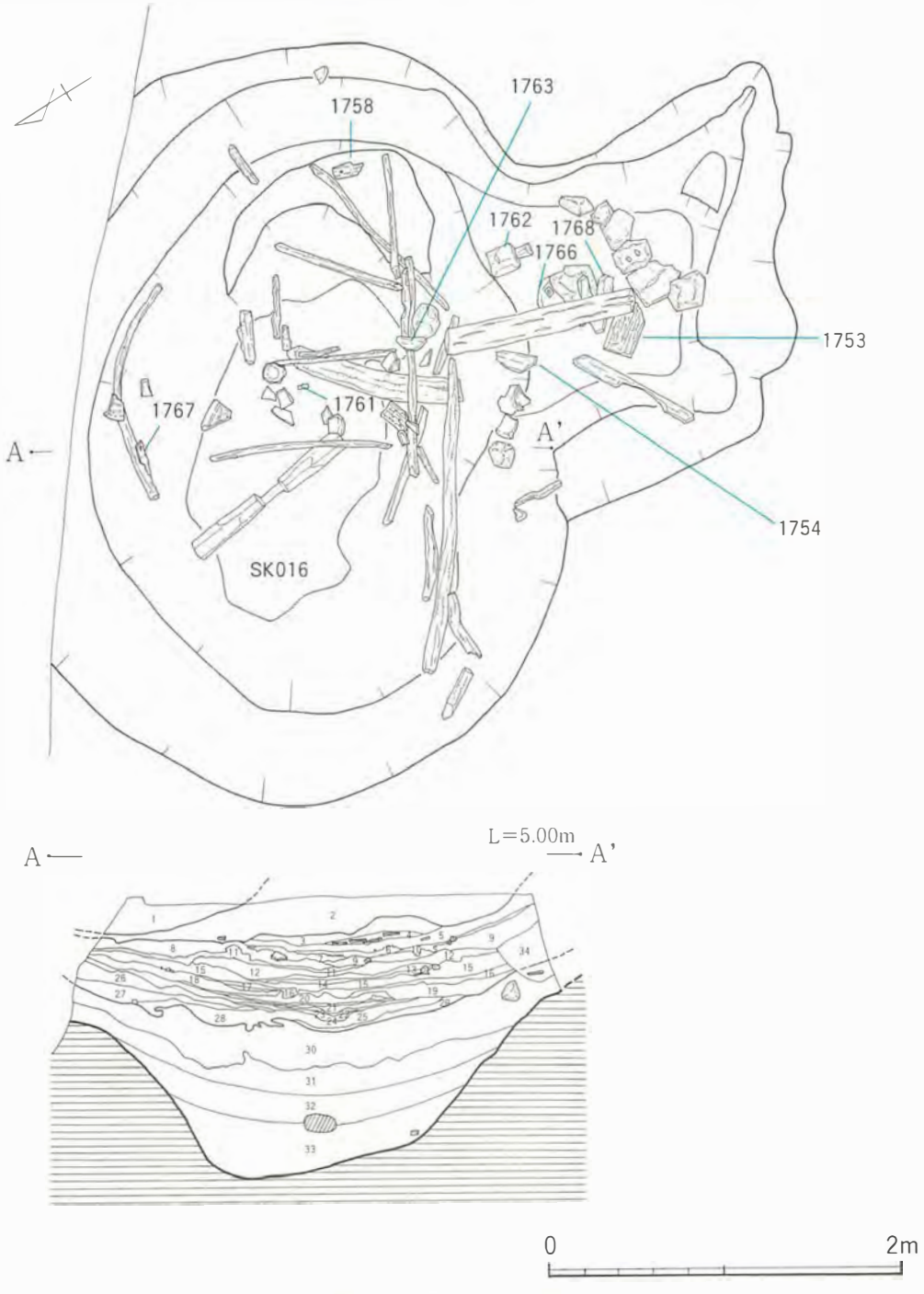
遺構の平面形は軸を南北に取る楕円形の土坑でN－51°－E。長軸4.3m、短軸2.3m、遺構確認面からの深さは1.6mを測る。断面形は擂鉢状を呈する。埋土をみると上部80cmほどは粒子細かい粘性土と砂質土が交互に交差しており、流水がよく動いた状況を示すものであろう。その下の層は層変化の間隔が広く徐々に埋まっていく状況を示している。遺物は途中でいくらか出たがさほどめぼしいものはなかった。ただ、最下層になる部分には木製品がかなりあった。

埋土は大きく上層の非常に細かい砂流が堆積した層と中層以下のやや分層しにくく割とまとまった層に分けられる。上層部分は最近まで水の流れの影響を受けたところで水流によって薄い層序が形成されたものであろう。一方下層は一定期間水がよどんだ状態を示していたと思われる。

近世以降に宅地の範囲を広げるために厚く客土された部分を掘り下げていく途中でこの遺構を検出した。遺構はその時期、宅地のあった高地の裾で、近世の水路に面した位置にあったと推定した。水路面と遺構は水を共有する関係にあったようである。水が水路から常に流れ込み溜まる状況であろう。このような遺構は私的な考えでは、洗い場的なものでいわゆる「ヨケ」というものであろう。

この遺構の中には木製品がかなり埋まっていた。特に杵状の木製品は未使用であったし、他の品にも使用前と思われるものもある。木材の強度を増すため水漬けしていた可能性がある。

この遺構の時期については、出土した陶器などから近世初頭～半ばを想定しておく。



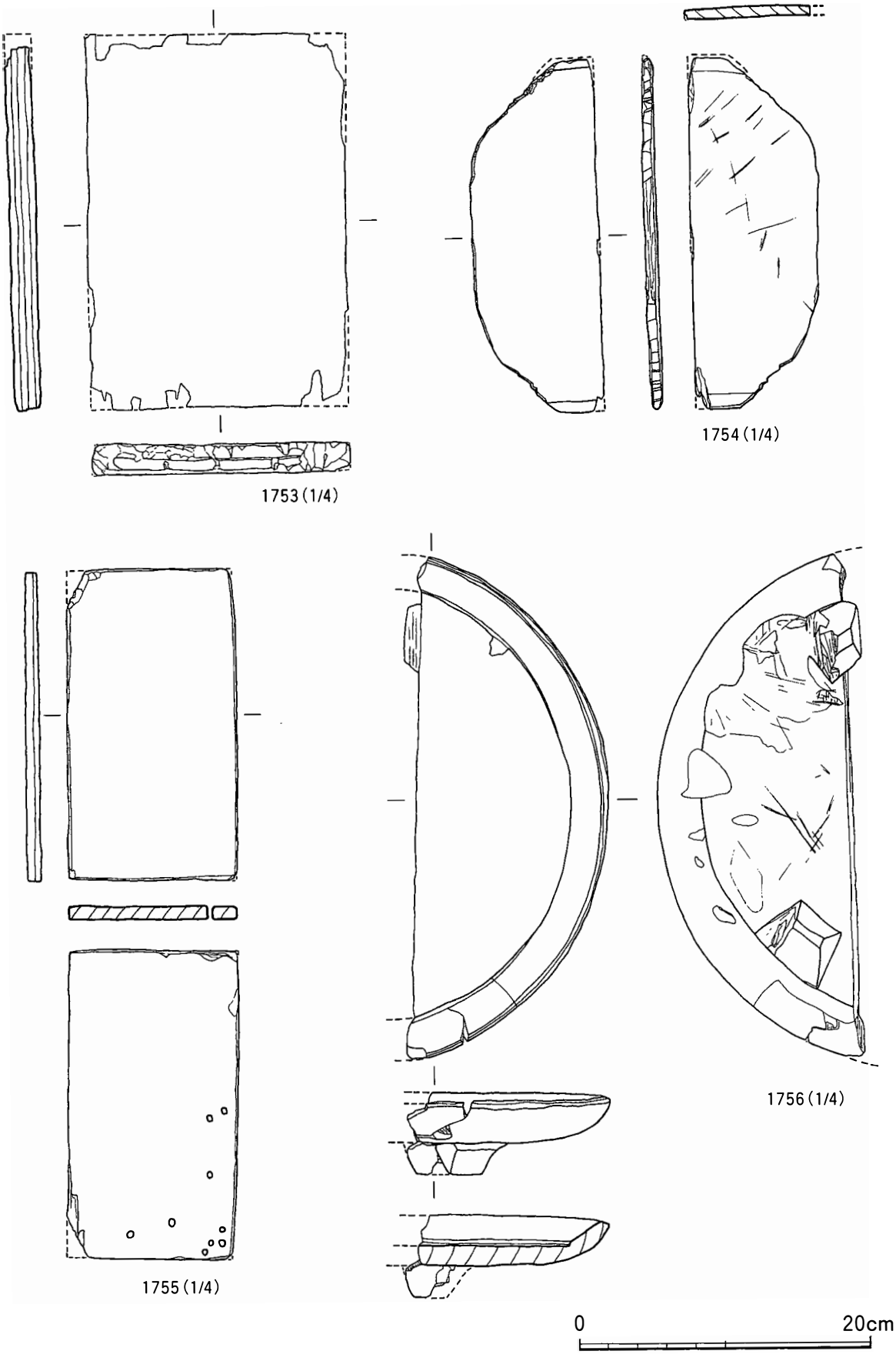
第277図　5SK016実測図

［出土遺物］【第278図～第281図】

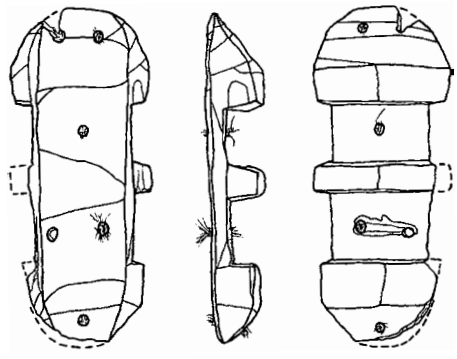
遺物には近世の肥前系陶器を6点ほど確認している。皿を中心に碗などもある。その他に土師質土器も多少出土している。これらの遺物は細片のため図化しなかった。ここで図化できたのは木製品と石器である。

1753は板材で側面にはめ込むような穴が4つほど開いており、組合箱の蓋もしくは底であろう。1754は厚みが8mmほどであるが上下はそれよりも薄くなっており、差し込み蓋であろうか。1755も板材であるが、特に側片に加工はなく用途は不明であるが、箱の部材の可能性がある。

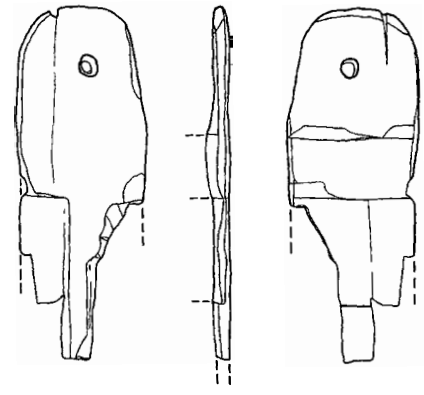
1756は短い脚のついた盆状のものである。柾目取りであろう。直径は残された部分から34.5cmと推定できる。脚は短く四脚あると思われる。1757・1758は下駄である。1757は真ん中に一歯があり両側にも端から立ち上がる歯がある。歯は横から尖り中心線で三角になる。横幅は狭い。緒孔は6箇所空いており、端に上



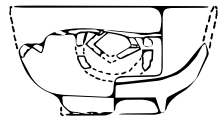
第278図　5SK016出土木製品実測図



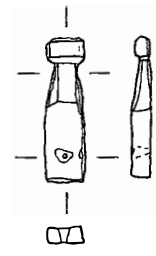
1757（1/4）



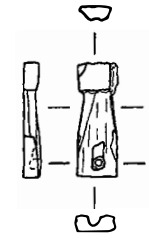
1758（1/4）



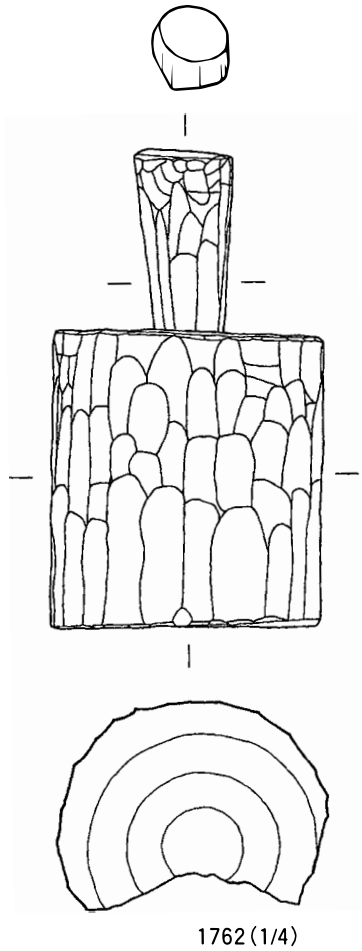
1759（1/4）



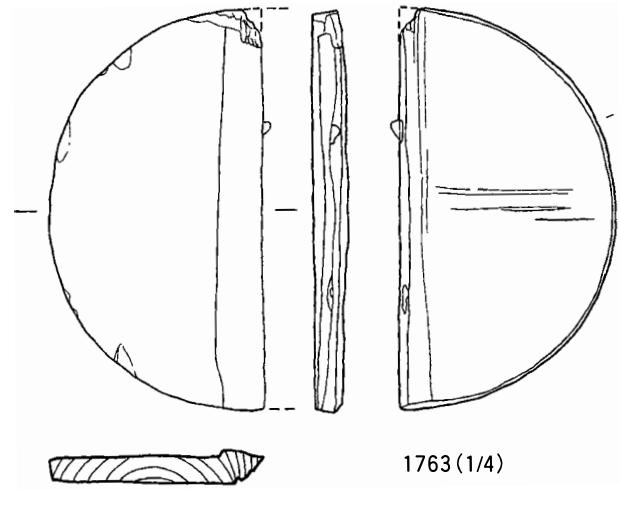
1760（1/4）



1761（1/4）

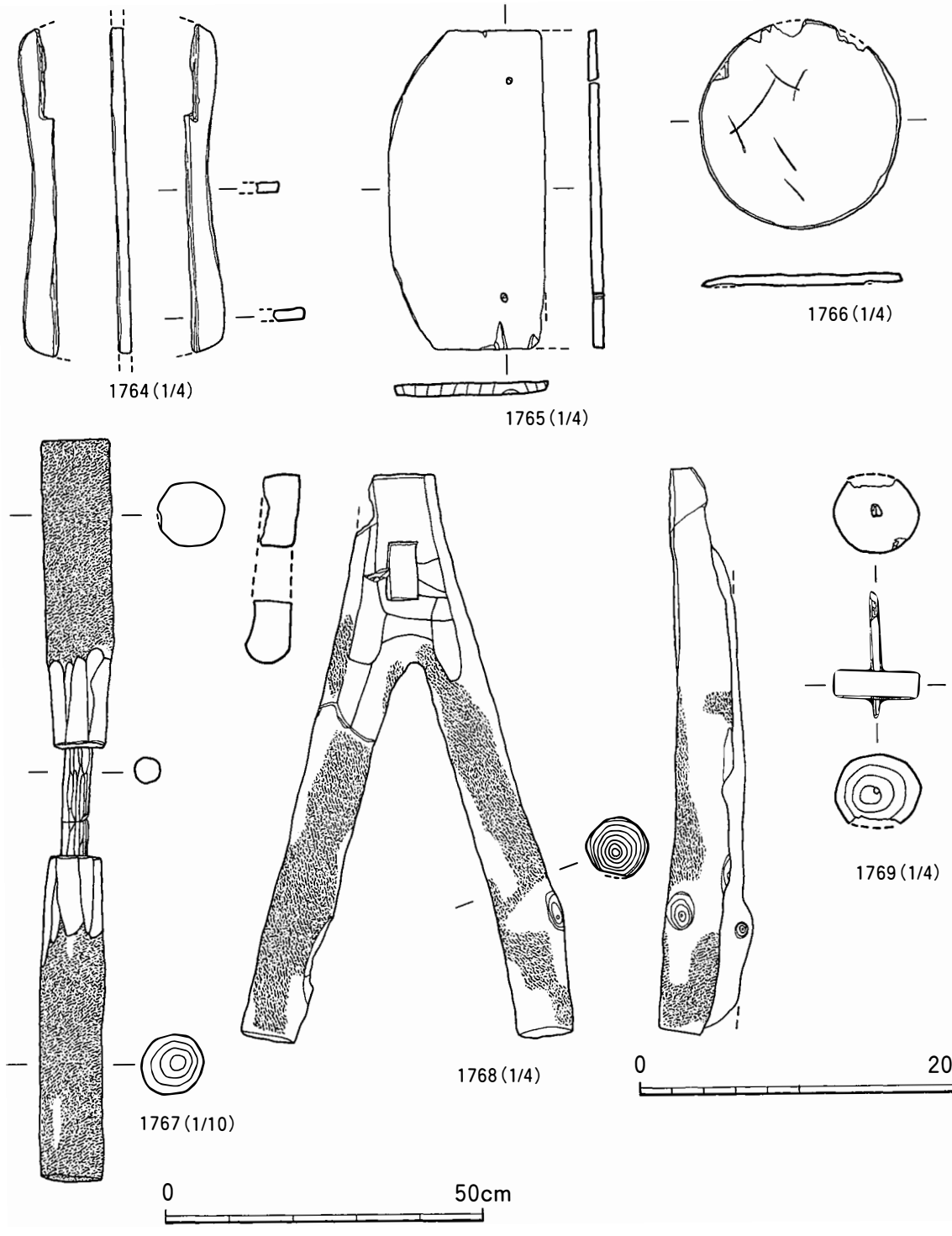


1762（1/4）



1763（1/4）

第279図　5SK016出土木製品実測図

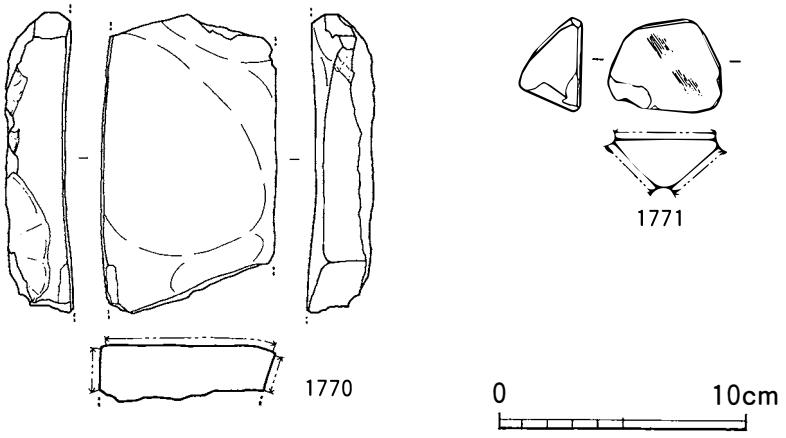


第280図　5SK016出土木製品実測図

で２穴下に１穴、間に３穴あいている。これは紐を自由に付け替えできるようになっているものと思われる。このうち２穴に紐の痕跡が残る。歯はさほど摩耗していない。1758は歯がかなりすり減った縦長で歯の幅は広い。紐孔は一つ確認できる。破損したので廃棄したものであろう。いずれも一木から作成している。

1759は漆椀で、体部表面に銀箔で「丸に菱紋」の家紋を描いている。この家紋は調査地のもとの住民のものと一致する。口縁部は欠損しているので口径・器高は不明であり、図では想定である。高台は1cmほどを測る。

1760・1761は柄杓の曲げ物に取り付く部材で柄の差し込み先を止めるものである。上部の抉りは曲げものに縛るもので、下位にある孔に柄の先端を差し込む。1762は横槌である。長さが25cm、槌部の幅が13.5cm、



第281図　5SK016出土石器実測図

柄の長さ9cm、幅が５～3.8cm を測る。1763は盆と考えられ、厚みが1.3cm、復元直径が21.5cm を測る。1764は何かの部材であるが不明品である。1765も板材で箱などの部材であろう。1766は曲げ物の底であろう。直径は12.5cm を測る。1767は竪杵型木製品である。樹皮が残り、部材の直径が10.3cm、長さが116cm を測る。竪杵とすれば未使用品である。両面はまったく使用痕と呼べるものはなく、まだ作成途中の可能性が強い。1768は筵編機の一部で脚と考えられる。縦高が35cm を測る。上部は面取りされ、方形の差し込みが開けられている。1769は軸が残っていることから紡錘車と考えている。弾み車は直径が5.5cm、厚みが1.7cm を測る。また軸の長さは8.0cm 残る。

1770は石皿か。平面、側面には使用痕が残る。1771は断面三角をなす石片でそれぞれの面が研磨されている。

Ｘ区の遺構配置【第282図・第283図】

Ｘ区は、調査区が現況の道路により２箇所に分かれ、北側を調査Ｘ－１区、南側をＸ－２区としており、近世以降の遺構について述べる。

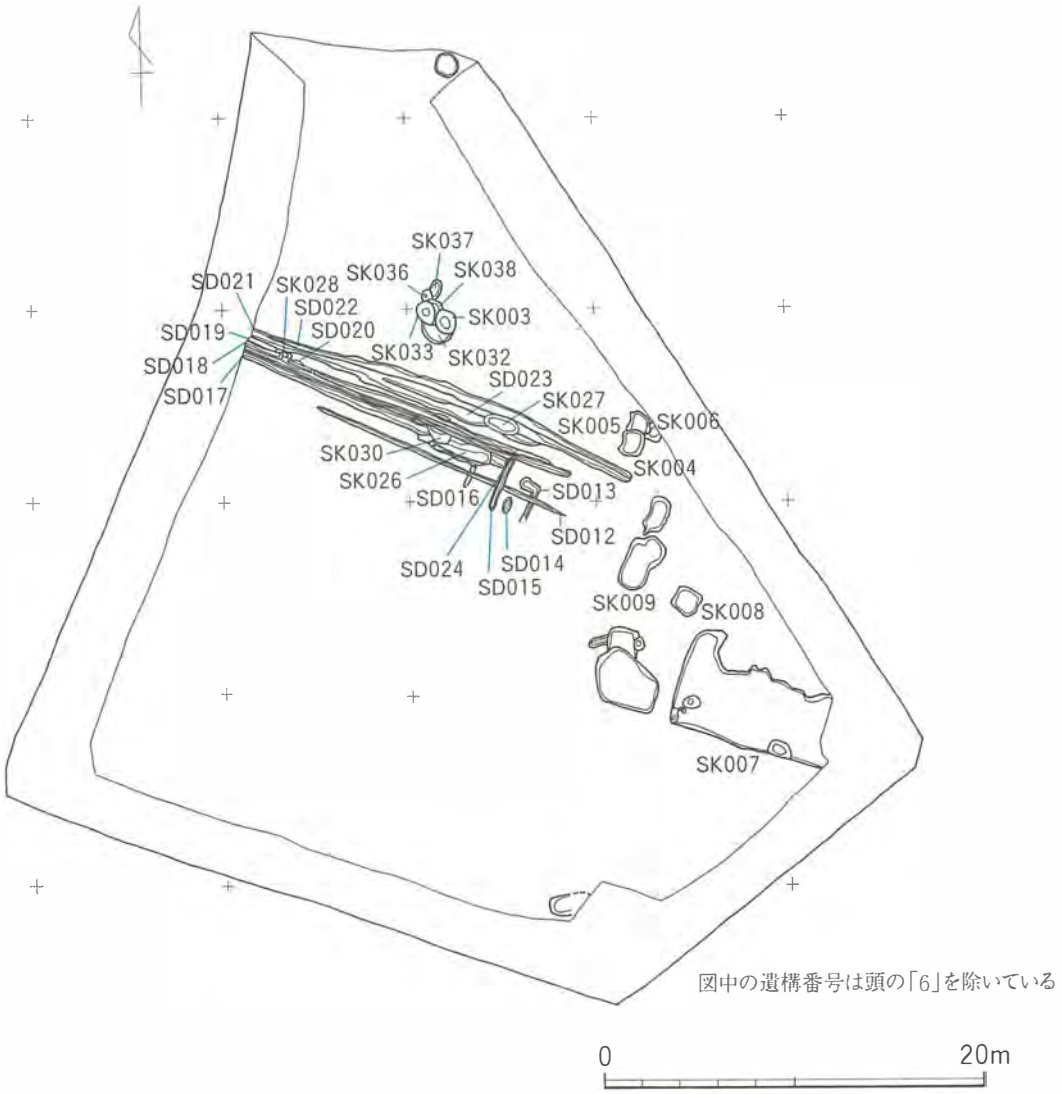
Ｘ－１区では調査区の北側に近代以降、かなり新しい土坑というよりごみ捨て穴と特定できるものが出土した。宅地になっていた所で、もともと水田面より高くなっていた。しかし、表土を剥ぐと微妙に高いだけでさほどまで違いがなかった。東西方向に走る溝状の遺構が集中しているのを検出できている。これはそう古くない時期の水田もしくは畑地に伴う側溝である可能性が大きい。その方向は現況の土地区画に沿ったものであった。【第282図】

その面を剥ぐと段落ちと浅い土坑を確認した。また、その北側にはピット群を検出し、方向性が見られ、いくつかには柱痕跡や柱材の一部を検出したので、建物跡の可能性を考えて建て方を探った。しかし、いずれのピットも確認面から50cm 前後の深さの掘り込みであったものの、掘立柱建物として組合せるまでにはピットを並べることができなかった。ただ、ピットのいくつかは並び、それに沿うようである。【第283図】

Ｘ－２区では、現況から少なくとも近世初頭に遡る溝状遺構を６条ほど検出した。詳細は後に述べる。

○6SK004・005・006【第284図上】

３つの土坑の切り合いで、6SK006→6SK005→6SK004の順を想定できた。遺物の出土は少なく、大部分は近世の陶磁器であった。特に6SK005では少し大きい陶器片に礫が混じって出土している。



第282図　調査Ｘ－１区内近代以降遺構配置図

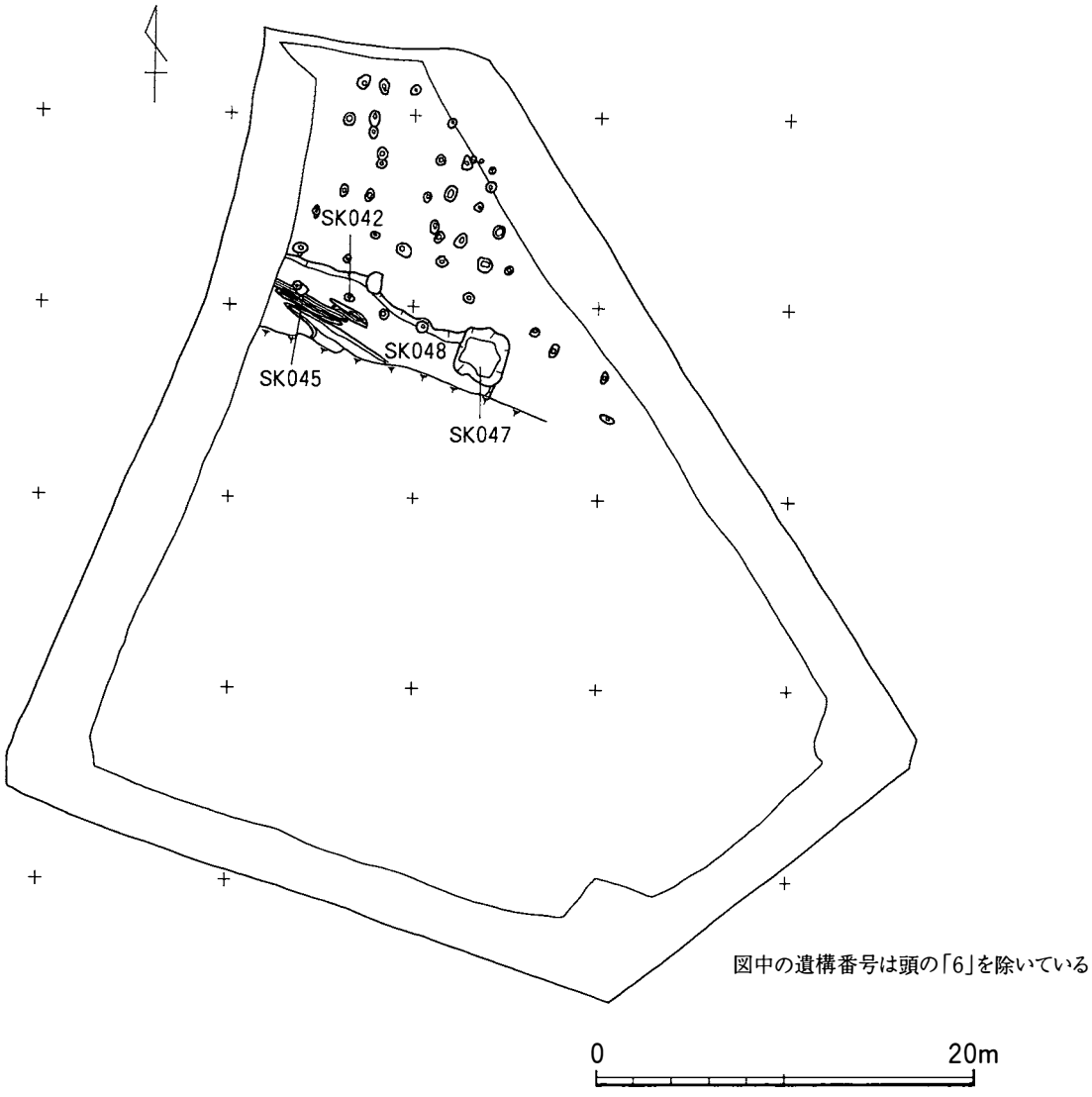
いずれもごみ捨て穴の可能性が大きく、有機質は腐食のためなくなったものと考えられる。

［出土遺物］【第285図・第286図・第305図】

6SK004・005・030の各遺構から出土した遺物は少ないので一括して記す。

6SK004の出土遺物は1772～1774の３点の土器等と1778の板状石、第305図の1876・1877の陶器である。1772は瓦質の盤の破片である。器表面は丁寧に磨かれている。1773は土師質の鍋であろうか。復元口径は18.4cm、器高は2.95cmを測る。1774は焙烙鍋で底部に敷物の跡が残る。復元口径は47.2cmを測り、かなり大型のものである。1778は長さ20cm、幅8cmを計り、表面と側辺がかなり研磨されている。下が鋭角にとがるのは、はめ込むための細工であろう。製品としての特定はできなかった。1876は、産地不明の土瓶底部片である。釉は剥ぎ取られ煤が付着している。1877は、産地不明の土瓶の口縁付近である。口径は8.3cmを測る。取っ手が一部に見える。いずれも19世紀後半のものと推定できる。

6SK005の遺物として1775・1777を図化した。1775は瓦質の小型火鉢であるが、焼成は良好である。ほぼ完形に近く３本の脚が付くと推定している。復元口径は14.9cm、器高は7.15cmを測る。口縁端部は角張る。外底面には布痕が残る。1777は瓦質の擂鉢である。内器面に４本櫛描きの摺り目が作られる。復元口径は29.0cm、復元器高は11.8cmを測る。外器面に指頭圧痕が残る。口縁端部はしっかりと作る。



第283図　調査Ｘ－１区内近世遺構配置図

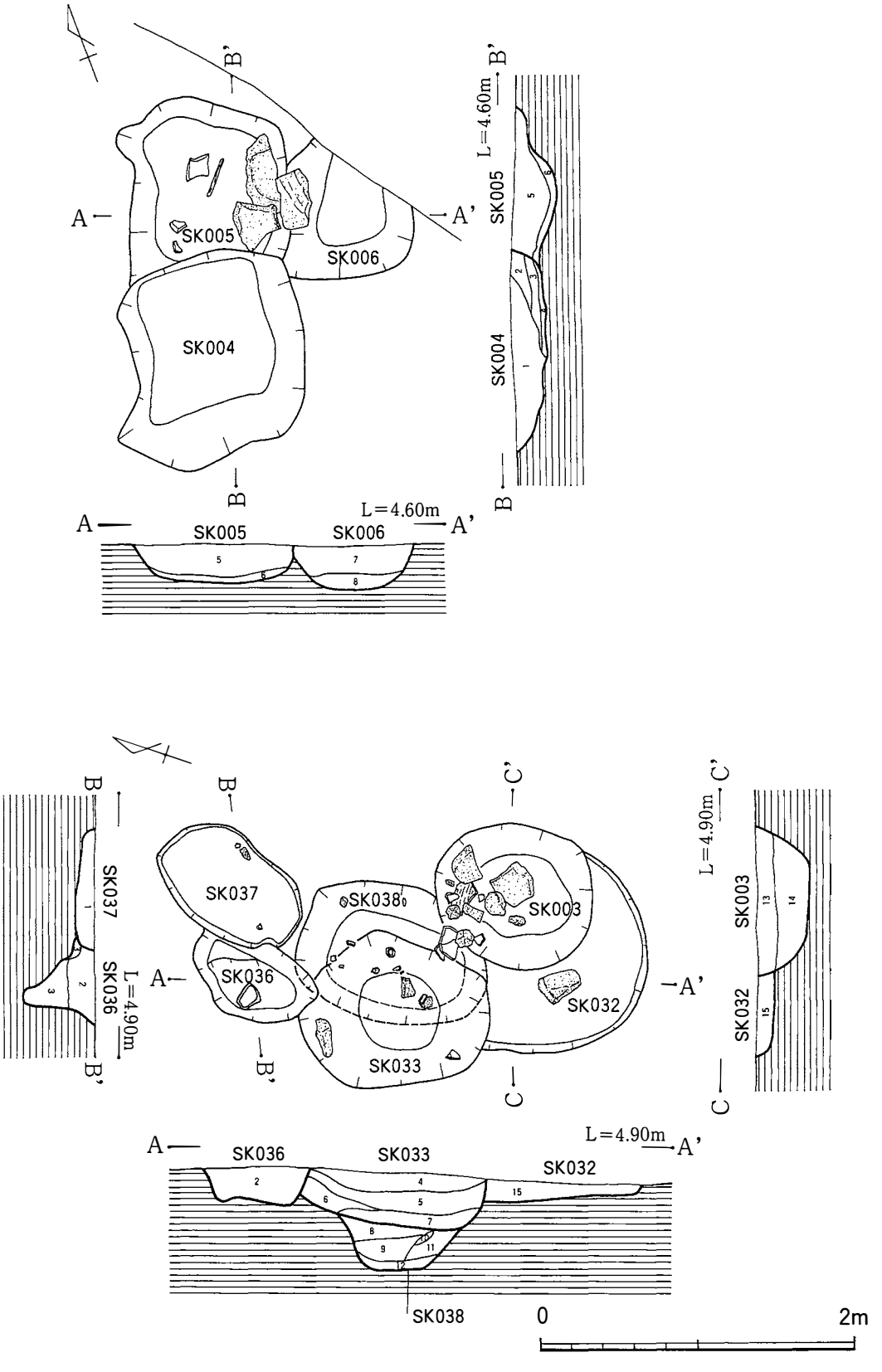
6SK030の出土遺物としては1776の１点を図化した。口縁端部を厚く平坦にし外に尖り気味である鉢である。内器面には指頭圧痕が残る。全体形は不明である。

○6SK003・032・033・036・037・038【第284図下】

いずれも近世末から近代までの遺構でごみ穴であろう。同じ場所に何回も掘り込まれている。切りあい関係は6SK032→6SK038→6SK033→6SK036→6SK037で、6SK003は検出状況から考えると一番新しい可能性があるが、切り合いからは6SK032→6SK038→6SK033→6SK003までを確認したにすぎない。出土遺物は少なく図化できるものはなかったが、大部分は近世の陶磁器片、土器片であった。

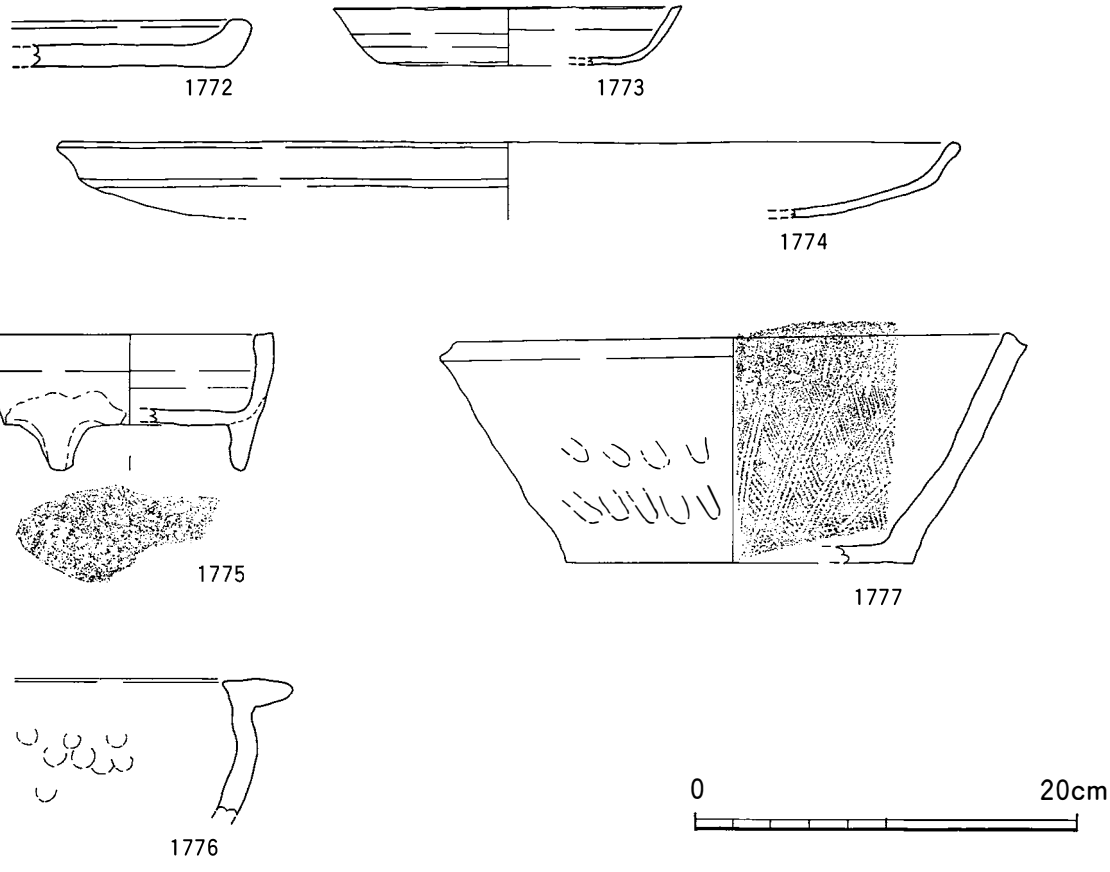
6SK033、036、037、038等の土層は以下のとおりである。

6SK037の埋土は１層のみで、にぶい黄褐色（10YR4/3）を呈し、あまり締まりがなく、酸化鉄・マンガン粒子を含む。炭化物の塊（長さ1cm弱、幅3mm）が多くみられる（砂質50％、粘質50％）。6SK036の埋土は二層に分かれ、2層の灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、酸化鉄・マンガン粒子・ごく少量の炭化物を含む層（砂質70％、粘質30％）と３層の暗褐色（10YR3/4）を呈し、マンガン粒子が目立つ層とからなる。全体的にあまり締まりがない（砂質20％、粘質80％）。6SK033の埋土は４層～７層までの四層を確認した。4層は暗灰黄色（2.5Y4/2）を呈し、さらさらして締まりがなく、少量の酸化鉄・焼土粒子、炭化物を含む（砂



図中の遺構番号は頭の「6」を除いている

第284図　土坑実測図



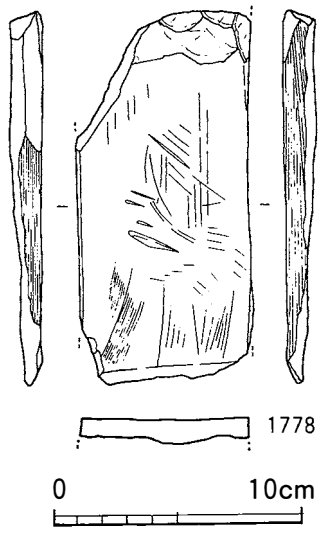
第285図　6SK004・6SK005・6SK030出土土器実測図

質50%、粘質50%)。5層は黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、4層と比べると酸化鉄の量が多い。全体的に締まりがなく、さらさらしている（砂質70%、粘質30%)。6層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、酸化鉄はあまり含まれず、粘性が強い。炭化物・焼土粒子を含む(砂質30%、粘質70%)。7層は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)を呈し、酸化鉄が非常に多く含み、粘性が強い。炭化物の塊（長さ1cm、幅5mm）が少量みられる。

6SX038の埋土は、8層は7層よりも酸化鉄の量が多い（砂質30%、粘質70%)。9層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、締まりがなく、粒子が粗い。多量の炭化物がみられ、焼土を含む（砂質30%、粘質70%)。10層は部分的な層である。暗灰黄色（2.5Y4/2）を呈し、酸化鉄はほとんどみられず、土はあまり締まりない（砂質50%、粘質50%)。11層は、にぶい黄褐色（10YR3/3）を呈し、酸化鉄が多く、微量のマンガン粒子を含む。土は締まり、粘性が強い（砂質30%、粘質70%)。12層は、黒褐色（10YR3/2）を呈し、埋土は締まっている（砂質20%、粘質80%)。

6SK032は6SK003によって切られている。埋土は15層の一層のみを確認している。灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、きめ細かく締まっている。砂粒がまばらにみられ酸化鉄が目立つ（砂質40%、粘質60%)。

6SK003は上面の一層は確認できなかったが、その下層である黒褐色（2.5Y）層を確認した。酸化鉄の量が少なく、粘性が強い。砂粒、炭化物もみられる（砂質20%、粘質80%)。



第286図　6SK004出土石板実測図

［出土遺物］

図化できる遺物は少なかった。その中で6SK038から出土した第296図の1820を取り上げる。この陶器は肥前内野山北系陶器で器種は中皿である。内器面に小さな段が入る。削り出し高台で、畳付に胎土目痕がある。釉は明緑灰色を呈する。生産時期は1610年代～1650年代である。

○ピット群【第287図】

Ｘ－１区の北側では多くの近世以降の30数個のピット群を確認した。部分的に並ぶものはあるが、掘立柱建物跡としては並ばず、そのままピット群として処理した。ピットの中には木質もしくは杭などが残るものがあった。杭もしくは柱跡の可能性が大きい。掘り方自体は深くても20cm ほどしかなく表土から掘削が1m 近く下げていたのでかなり上から掘り込まれたのであろう。埋土は暗褐色、暗灰褐色であまり締まっていない土が多い。ピットの並びは平面図からみるとやや方向の異なる並びが見られる。やや北東方に偏るようである。時期差を示すものかもしれない。ピットの径は確認面で50cm 前後が多い。いずれにしても調査区外に伸びているようである。ピット群からはほとんど出土遺物はない。残った樹痕は15cm ほどである。

○調査Ｘ－２区溝状遺構集中域【第288図】

柳町遺跡の一番菊池川に近接した場所で、県道玉名立花線に隣接した場所がこの調査Ｘ－２区である。この場所は菊池川の旧堤防につながるような場所で、調査Ⅷ・Ⅸ区の一角がそうであったように自然堤防の一部であったようである。現在県道玉名立花線は菊池川の堤防ではないが、現在の堤防線が作られる以前はここが堤防線であった。道路を越えた菊池川の隣接地は旧河川敷と考えられる。試掘調査によってもそのことは確認されている。

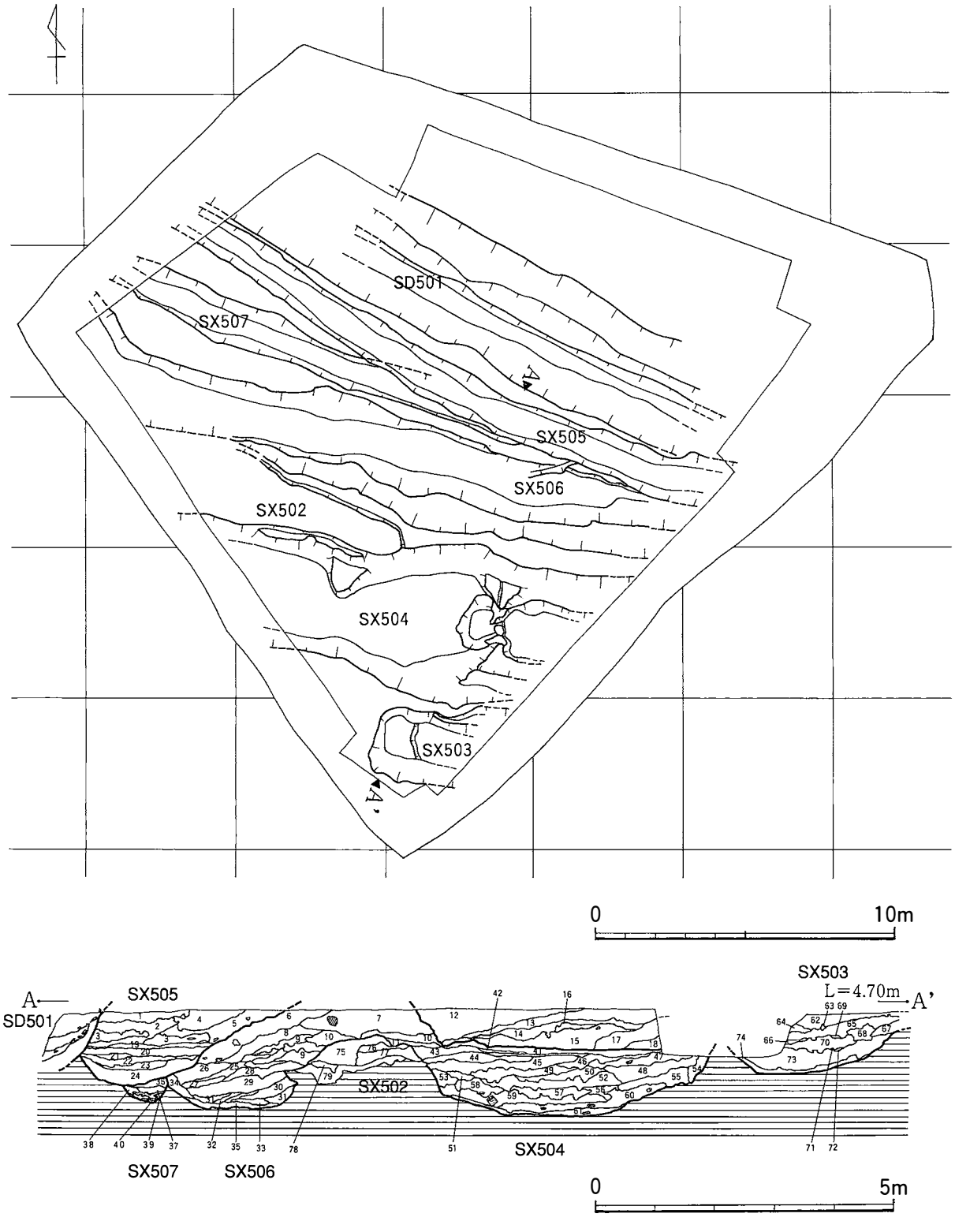
この調査Ｘ－２区では、現在まで使用されていたものから、中世末～近世初頭までを主とし、最古は弥生時代早期までの流路の様々な時期に渡る遺構が出土している。主な遺構としては、6条の溝・溝状遺構がある。

現代まで使用されていた6SD501の南側は、一時期宅地となっていた部分で、厚く客土されている。その客土中に多くの遺物が含まれている。遺物の含まれ方は、傾斜した状態であった。遺物を丹念に掘り出していく中で、埋土の状態が推定できた。埋土は主に北西方向から流れ込むような状況が確認でき、遺物はまんべんなく出土するので、複数回のながれ込み状況が見られた。このことは用地外にある宅地方向に高くなった部分があり、そこから廃棄物を捨てていったか、いつの時期かの造成によって、調査区の状況ができたことが推定できた。その時期は溝状遺構の検出状況から一時期ではなく、6時期ほどに渡る可能性がある。ただ、その認識に至ったのがかなり掘削を進めていった結果であるので、層的に十分確認するにいたっていない。

○6SX502【第289図】

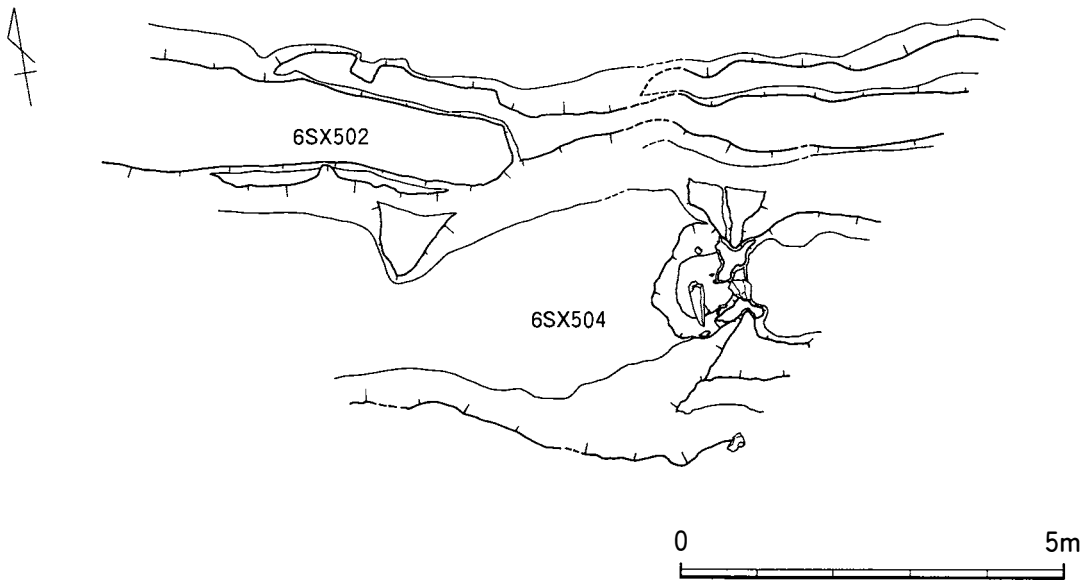
溝状遺構である6SX504と6SX507に挟まれた土手状の部分である。ここには土手の土自体は旧来の土層の堆積状況をとどめており、遺物包含層でもある。その土中には中世の遺物や古代・古墳時代の遺物が含まれていた。上部は砂質の土であるため流水による体積の可能性もある。このあと土手状部分をさらに下層まで掘り下げきっていないため、包含層や遺構の有無については不明である。

第287図　調査Ｘ－１区ピット集中域実測図



図中の遺構番号は頭の「6」を除いている

第288図　調査Ｘ－２区遺構配置図・土層断面図



第289図　6SX502・6SX504実測図

○6SX503【第290図】

g・f−44グリッド、f−43グリッドで遺構の一部を確認した溝状遺構である。6SX504に並行するように出土し、ほぼ東西に走るようであるが、検出した地点は端部付近であった。階段状に浅くなって終わっている。確認面から最深部で約60cmを測る。確認した最大幅は約2.5mを測る。この調査区内で確認した長さは2.5mほどである。

この遺構の埋土としては主に９・12・13層がある。9層は暗灰黄色（2.5Y4/2）を呈し、上層との境界付近に酸化鉄、マンガン粒が広がり、砂粒もわずかに含む層である（砂質55%、粘質45%）。12層は、灰オリーブ色（5Y5/2）を呈し、酸化鉄の塊が目立ち、粘性の強い層である。部分的に砂の塊も入る（砂質40%、粘質60%）。13層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、酸化鉄は少なく、マンガン粒や炭化物を少量含む層（砂質20%、粘質80%）である。地山として27層のにぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する層がある。少量の酸化鉄・炭化物・多量のマンガンみられる。部分的な層として10層のにぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する砂層がある。少し大きめの白色の砂も混じる（砂質100%）。11層は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、酸化鉄はほとんどみられず、土質はあまり締まっていない（砂質50%、粘質50%）。

19層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、砂質60%粘質比較的砂の多い層であるが、9層と10層と19層は、こ

第290図　6SX503実測図

の付近で入り混じり、攪拌したようになる。

20層は、黄橙色（10YR7/8）を呈し、基本的には粘性の土だが、10層や19層との境付近を中心に砂質の土を多く含む。

［出土遺物］【第296図・第297図・第298図・第306図・第309図・第310図・第318図】

陶磁器を数点確認しているが、図化できたものは少ない。いずれも肥前系のものと考えられる。

1821は、産地不明の陶器の底部破片で、器種は大皿であろう。生産時期は17世紀前半である。内底面は、ナデ調整後施釉されているが、灰釉を雑に施されている。胎土目剥ぎとり痕が残る。外底面は、無釉である。

1834は産地不明の陶器で、器種は中鉢である。6SX504から出土したものと接合する。1880は、朝鮮系と考えられる陶器の甕である。6SX504でも破片が出土し、そちらで述べている。1916は肥前系染付磁器の底部片で、生産年代は1690年頃であろうか。直上層からの出土である。見込に花文、高台内に円圏と「大明成□□年」の文字が書かれる。1926は肥前系染付磁器で、器種は中碗である。生産年代は17世紀中葉である。高台内が削り出しにより斗金状になる。1937は肥前系染付磁器の底部破片で、大碗であろうか。生産時期は17世紀中葉である。見込に円圏内に菊花文と周囲に花弁が描かれる。高台には二本の圏線が入る。

2005～2007は瓦質の火鉢である。口縁部外側には菊花文のスタンプが連続して押されている。その下の体部上位には二本の突帯を貼り付け、その間に櫛状工具による波状文を施している。体部はやや外側に張り出す。底部には脚がたぶん３本付けられていたと思われる。断面では脚の先は丸まっており、貼り付け後角を切っているようである。接地面は平らである。2005・2006はほとんど同様の形態で同一個体の可能性がある。口唇部は平らになっている。2005の復元口径は45.2cm を測る。2007は口唇部がやや丸くなっている。復元口径は39.8cm、器高は37.3cm を測る。底部外器面には当て布痕が残る。脚は貼り付けによるものである。

2003は瓦質の捏鉢である。復元口径が34.8cm、器高が12.4cm を測る。ナデ調整で全面しあげるが、外器面には成形時の押圧痕が残る。2004は瓦質の脚付浅鉢である。火鉢と考えられる。復元口径が15.9cm、復元器高が7.1cm を測る。鉢部の外底面には当て布痕らしきものが残る。また煤も付着している。貼り付け脚は１本を確認したが、3本の可能性がある。2084は瓦質の火鉢の一部で、直上層からの出土である。口唇部は平らで外器面にはその下に菊花文のスタンプ、一本の突帯とその下の波状文がある。

○6SX504【第289図】

この遺構は、調査区南側から２番目の溝状遺構にあたる。確認したのは溝全体の一部であり今後調査区外の南東側に延びるようである。確認面からの深さは1.0m 程、幅が4.2m、確認した長さが10m を測る。

埋土の一定部分までは上部からの埋め込み土によるもので、さらにその下は遺構の埋土である。

この遺構の最下層においてその確証が得られた。両溝状遺構は、それ以外の溝状遺構と比較すると幅、深さとも勝っている。また遺物の大部分が西側からの落ち込む状況を示している。遺物の中には肥瓶のようなものまで含まれていたので南西側に屋敷などがあり、破砕物が大量にこちら側に捨てられた可能性がある。その屋敷は少なくとも近世初頭にさかのぼる可能性がある。

埋土中上部に貝類が多量に混入し、部分的に貝捨て場になっていたようである。サンプルを採取し主なものを分類してみたところ以下の通りであった。貝種としてはシオフキ、アサリガイ、ハマグリ、オキシジミ、ハイガイなどがほとんどであった。ただ、埋土の上位から出土し、遺構内の埋土途中まで入っていないことから、この貝捨て場は遺構が埋没した後に形成されたのであろう。

土層のうちＡ層からＣ層はこの遺構の上層になるもので直接この遺構の埋土とはしない。したがって、Ｄ層以下をこの遺構の埋土と考える。かなり細かく分層でき、Ｄ層からＵ層までに分けた。まず、遺構の上の層であるＡ～Ｃ層について記す。Ａ層は、暗灰黄色（2.5Y5/2）を呈し、非常に酸化鉄が強く全体的に

含まれていて、3mmほどの砂がまばらに混じる。土質はさらさらしている（砂質80%、粘質20%）。B層は、黄褐色（2.5Y5/3）を呈し、A層に比べると、酸化鉄の量は非常に減少し、土質は締まりがない（砂質80%、粘質20%）。C層は、暗灰黄色（2.5Y4/2）を呈し、A、B層に比べて、酸化鉄の量はさらに減少し、部分的に見られるのみである。炭化物や砂粒を含む（砂質60%、粘質40%）。

以下は埋土の注記である。D層は、灰オリーブ色（5Y4/2）を呈し、酸化鉄がC層より多くなり、褐灰色の粘土塊が混じる。炭化物・小石も含む（砂質40%、粘質60%）。E層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、D層と同程度の量の酸化鉄を含む。小石・砂粒が目立ち、炭化物も見られる。土質は粘質がやや強く締まっている（砂質45%、粘質55%）。F層は、褐灰色（10YR4/1）を呈し、酸化鉄を全体的に含み、層上部には、砂の塊があり、少し大きめの砂粒子を全体的に含んでいる（砂質30%、粘質70%）。G層は、暗灰黄色（2.5Y4/2）を呈し、酸化鉄がF層よりも少ないが、全体的にまばらに含み、砂のかたまりが目立つ（砂質30%、粘質70%）。H層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、全体的に非常に小石が目立ち、にぶい黄色の粘土がところどころ混じる。酸化鉄は、ほとんどみられない（砂質30%、粘質70%）。I層は、灰色（5Y4/1）を呈し、粘性が強く締まっている。酸化鉄はほとんどみられず、炭化物・小石・砂粒がみられる（砂質35%、粘質65%）。J層は、灰色（7.5Y4/1）を呈し、少量の酸化鉄がところどころ混じり、小さめの小石・砂粒が目立つ。締まりはあまりない。炭化物が混じる（砂質40%、粘質60%）。K層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、弱い酸化鉄が薄く全体的に広がり、砂粒も少量みられる（砂質35%、粘質65%）。L層は、灰色（7.5Y4/1）を呈し、酸化鉄を非常に多く含み、小石・砂も混じっている。灰黄色の粘質土が混じっていて、土質は締まっている（砂質30%、粘質70%）。M層は、褐灰色（10YR4/1）を呈し、K層と同様に弱い酸化鉄がまばらにみられ、若干、砂粒を含む（砂質30%、粘質70%）。N層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、酸化鉄が全体的に含まれており、土質はあまり締まりがない（砂質50%、粘質50%）。O層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、少量の酸化鉄・小石がみられ、雲母も混じる（砂質40%、粘質60%）。P層は、灰色（5Y4/1）を呈し、非常に多量の砂を含み、灰オリーブ色の粘質土も混じる。小石・雲母もみられ、土質はあまり締まっていない（砂質50%、粘質50%）。Q層は、灰色（7.5Y4/1）を呈し、部分的に少量の酸化鉄がみられ、雲母・小石も含む（砂質30%、粘質70%）。R層は、褐灰色（10YR4/1）を呈し、K、M層よりも若干強めの酸化鉄を少量含み、部分的に砂のかたよりがみられ、雲母も混じる（砂質45%、粘質55%）。S層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、酸化鉄はほとんどみられず、非常に粘質が強い。淡黄色の粘質土のかたまりもみられる（砂質10%、粘質90%）。T層は、灰色（7.5Y4/1）を呈し、酸化鉄は、全くみられず粘性が非常に強い。小石・雲母もみられる（砂質10%、粘質90%）。U層は、黒褐色（2.5Y3/1）を呈し、酸化鉄は、全くみられず、非常に粘性が強い。土質は非常になめらかである（砂質０%、粘質100%）。

［出土遺物］【第294図～第327図】

出土遺物にさほどの差はないが、この遺構と6SX505、及びその間に出土するものは近世初頭（17C後半代）の遺物が多い。この遺構に伴う遺物として明確にいえるものは少ない。ただ、この遺構付近もしくは溝内に入っていたものを抽出して述べる。

1779は肥前系陶器の中碗と考えられる破片で、生産時期は1600年代～1630年代である。①層出土のもので、外器面に貼り付けた白い細いひも状のものがあり、いわゆる「そうめん手」と呼ばれるものである。1789は、肥前系伊万里の緑釉陶器の中碗で、生産時期は17世紀後半である。1799は、肥前系嬉野内野山の緑釉陶器の小皿である。生産時期は17世紀末～18世紀前期である。口径は12.4cm、器高は3.4cmを測る。見込には蛇の目釉剥ぎが施される。1801は、肥前系の灰釉陶器で、器種は五寸皿である。生産時期は17世紀中葉である。復元口径は13.9cm、器高は3.4cmを測る。高台は土見せで釉薬はかからない。1802も肥前系の灰釉陶器で、器種は五寸皿である。生産時期は17世紀中葉である。復元口径は14.8cmを測る。1809は、肥前系陶器で、

内器面に刷毛目を施し、見込に象嵌で花を描く。器種は小皿である。生産時期は17世紀前期である。2、3層で出土している。復元口径は12.8cm、器高は3.6cm を測る。見込には象嵌で円圏と花模様が描かれる。また砂目が残り重ね焼きされたものであろう。1813は、肥前系嬉野内野山南産の陶器で、器種は五寸皿である。生産時期は16世紀末～17世紀初頭である。復元口径は13.7cm、器高は4.4cm を測る。縁が二段になる。1819は、肥前嬉野内野山産の緑釉陶器の底部の破片で、器種は中皿である。生産時期は17世紀後半である。見込には蛇の目釉剥ぎが施される。高台は無釉である。1823は、肥前唐津系の陶器で、器種は大皿である。生産時期は1590年代～1630年代である。口径は35.5cm、器高は9.4cm を測る。削り出し高台は無釉である。1828は、肥前高取系（？）の陶器で、器種は小鉢である。生産時期は17世紀初であろうか。口径は9.3cm、器高は4.6cm を測る。削り出し高台で畳付は無釉である。1832は、産地不明の陶器で器種は中鉢である。復元口径は20.0cm、器高は9.3cm を測る。口縁部は内側に折り返している。内器面にはあて具痕が残る。外器面には叩き痕が薄く残る。内器面底部には板目痕が残る。1833も産地不明の陶器で、器種は中鉢である。1層と包含層中の出土でこの遺構に伴うものではないかもしれない。復元口径は21.0cm を測る。口縁部は外側から折り曲げる。1834も産地不明の陶器で器種は中鉢である。6SX503、直上層からも出土し接合している。復元口径は18.0cm、器高は12.7cm を測る。内器面にはあて具痕が残る。外器面には叩き痕が残る。口縁部は外側から内側へ折り曲げている。1852は、肥前系の陶器で、器種は甕である。生産時期は17世紀後半である。包含層からも出土し接合した。口径は46.7cm、器高は45.5cm を測る。内器面には格子状の当て具痕、外器面にはタタキと描き目が残る。口縁部は内側に張り出すT字形を呈する。外器面肩部には二条の縄状突帯が装飾として貼り付けられる。釉は鉄釉でいわゆる「ハンズーガメ」である。1855は、肥前系陶器の甕である。生産時期は18世紀～19世紀である。①層出土である。内器面には当て具痕、外器面はタタキ痕が残る。外器面肩部には縄状突帯が1条と沈線が4条巡る。1856は肥前系陶器で、器種は壺の底部破片である。生産時期は16世紀末～17世紀前半である。内器面には指押さえ痕が残る。1857は肥前系陶器で鉄釉を施す。器種は瓶である。生産時期は1600年代～1630年代である。内器面底部に指押さえが残る。1858は、生産地不明の二彩手の陶器で器種は瓶である。外器面には頸部に鉄釉、肩～胴部は化粧土による刷毛目で横線を施し波状文さらに後に様々な色褐色釉で文様を施す。頸部には耳を貼り付けている。この形態は仏花器と思われる。1859は肥前系陶器で器種は大型の瓶である。生産時期は1630年代～1650年代である。1層と2層及び包含層最下層と接合する。胴部の最大径が上位に位置する。肩部と胴部上位に沈線がそれぞれ二条ずつ巡る。内器面の頸部まで施釉が及ぶ。胴部には格子目当て具が残る。外器面は格子目叩き後ナデが施される。底部外面には胎土目痕が残る。

1866は、肥前伊万里産の緑釉陶器で、器種は火入で底部の破片である。生産時期は17世紀後半である。1872は、生産地不明の陶器で、器種は火入である。生産時期は器形から1650年代～1690年代に当たる。口径は12.4cm、器高は7.7cm を測る。口縁部は外側に折り曲げ磨丸める。口縁下の体部には化粧土で刷毛目横線を施し、雑に施釉している。1873は肥後産と推定される陶器の水指破片である。1880は、産地が朝鮮系かと考えられる陶器の甕である。生産時期は16世紀程である。遺構内の中位から最下層で出土している。外器面には細かい格子目のタタキが丁寧に施され、内器面には同心円文の当て具痕が残る。器壁は5mm 前後と薄い。外器面には暗緑色の自然釉もしくは藁灰釉がかかる。遺構の最下層で破片の一部が出土しているが、6SX503・6SX506でも破片が出土している。ここでは大きい破片の出土した6SX504を主な出土遺構とした。

この他に図化していないが、肥前の青唐津の小皿が2点出土している。また、硬質に焼締め、表面には透明釉が塗布された光沢のある箱形の製品がある。長方形の箱型を呈し、中にはしきりが設けられている。この形式の遺物として江戸遺跡の出土例から火打ち箱と考えた。木製や磁器製のものが多く、このような陶器の例は見られないが形態は類似している。産地などは不明である。

1923は肥前系染付磁器で、器種は中埦であろうか。生産時期は1640年代～1650年代である。見込には菊花菱文が呉子で描かれる。1935は肥前系染付磁器で、器種は大埦である。生産時期は1630年代～1640年代である。遺構の最下層からの出土である。復元口径は12.0cm を測る。外器面には花文と雲文が描かれる。1938は肥前系染付磁器の底部で、器種は中埦であろう。生産時期は17世紀中葉である。高台内に圏線を描く。1950は肥前系白磁の小皿で、内器面に型打ち技法が用いられる。生産時期は17世紀前半である。1951は、肥前波佐見系青磁の小皿である。生産時期は1655年代～1680年代である。口径は13.5cm、器高は3.8cm を測る。見込は蛇の目釉剥ぎがなされる。外器面の釉は高台まで及んでいない。1952は肥前波佐見系の青磁の五寸皿である。生産時期は1680年代～1710年代であるが、17世紀中葉の可能性もある。口径は13.6cm、器高が3.8cm を測る。見込には蛇の目釉剥ぎがなされる。1953は肥前系の染付磁器の底部片で、器種は小皿であろう。生産時期は17世紀前半である。見込には菊花文らしきものが呉子で描かれる。1954は、肥前系染付磁器の底部破片で、器種は中皿であろう。生産時期は17世紀前半である。2・３層で出土した。花卉文が施されている。

1982は景徳鎮産の染付磁器の底部破片で、器種は皿である。生産時期は16世紀後半である。底面見込み風景文が描かれている。小野分類では皿Ｂ群またはＥ群である。底部高台内銘款としては大明年造であろうか。1984は、福建漳洲窯系磁器の破片である。器種は芙蓉手の大皿である。生産時期は16世紀末である。底部と口縁部付近が残るため全体像は他の例から推定である。内底面には山水画風で水鳥と植物が描かれている。1992は国外産と考えられる青磁の碗である。生産時期は16世紀であろうか。見込には印花文が押されてから施釉される。体部は意図的に打ち欠いてあるところから破損後別の目的に利用されたものであろう。2002は中国産と考えられる青磁の壺で、南瓜形を呈する。生産時期は16世紀末～17世紀初めであろう。6SX507からも出土している。

以下は土師器、瓦質土器などの土器類を扱う。2008は、土師器の小型の坏で口径10.9cm、高さが2.65cm を測る。外底面には糸切り痕が残る。2009は瓦質の擂鉢の破片である。6本ほどの櫛描による摺り目を作る。2010は瓦質の捏鉢の破片である。器高は12.7cm を測る。2011は、瓦質の片口鉢である。復元口径は37.7cm、復元器高が14.3cm を測る。外底面には当て布痕らしきものが残る。2012は、瓦質の擂鉢で、遺構の最下層からの出土である。復元口径は27.8cm、器高は13.9cm を測る。外器面には押圧痕が残る。外底面に当て布痕らしきものが残る。6本の櫛描を交差させて擂目を作っている。2013も瓦質の擂鉢である。底部付近のみの出土である。外器面には押圧痕が残り、外底面には当て布痕が残る。8本の櫛描を放射状に口縁近くまで重ねながら擂目を作る。2014は瓦質の浅鉢である。鉢部の口縁径は14.2cm を測る。脚が付属するが欠損している。

2015は瓦質の鉢である。復元口縁径は15.6cm、復元器高5.2cm を測る。内器面上部から外器面かけて煤が付着している。内底面にヘラ記号がある。2016は、瓦器埦で口縁部から底部までほぼ復元できるものである。復元口縁が14.5cm、器高が6.9cm を測る。埦形は半円形を呈する。器形からするとこの遺構の時期よりも古いものである。また、2017は瓦質の鉢と考えられるが、他の鉢類とは異なる。復元口径が36.4cm を測る。外器面に押圧とヘラ削りが施される。2019～2022は瓦質の捏鉢である。2019は復元口径が39.8cm、器高が12.9cm である。1層からの出土である。外器面には指頭圧痕が残る。2020は復元口径が40.2cm を測る。器高は13.4cm を測る。外器面に押圧痕が残る。2021は口径が42.7cm、器高が11.3cm を測る。外器面には押圧痕、底面には当て布痕が残る。内器面には当て布痕や型押痕が残る。2022はこの遺構の北側で出土した。復元口径は42.85cm、器高が12.8cm を測る。外器面は押圧痕が残り、底面に当て布痕が残る。

2023～2026は瓦質の火鉢である。2023・2025の口唇部は平らになって角張る。体部はほぼ直に落ちる。底部には平たい脚が付けられている。2023は１層から出土した。復元口径は45.0cm を測る。外器面に菊花文

のスタンプと三条の突帯を貼り付ける。突帯の間には４本の櫛描による波状文が施される。2024も１層から出土した底部の脚部のみである。2025は、口径が42.5cm、器高が36.7cm を測る。外器面にはナデやハケによる調整、内器面も同様である。外器面上位には３条の突帯が、低位にも１条の突帯が貼り付けられている。口唇部下には菊花のスタンプ、3条の突帯の間には櫛描波状文が施される。2026は２～３層から出土した底部の破片である。2025と同様に底部付近に１条の突帯が貼り付けられる。

2027は大型の甕で、口縁から底部までである。出土位置はこの遺構の確認面の上位で上からの落ち込みの可能性がある。復元口径は76.0cm、器高は63.2cm を測る。口唇部は断面三角を呈しほぼ水平な面を有する。体部はやや外側に張り出し底部に至る。調整はタタキ後ナデを行っている。底部は平底である。内器面には石灰化した物質がかなり付着し、また、一枚の銭が張り付いていた。この付着した物質はトイレなどに見られる硝酸塩である可能性がある。このことからこの甕はトイレと考えられる。

2044・2047・2052は土師器の皿である。いずれも外底部には回転糸切り離しが施される。2044は口径が10.3cm、器高が2.0cm を測る。調整はナデによる。2047は口径が10.6cm、器高が2.3cm を測る。調整は回転横ナデによる。2052は１層から出土し、口径6.6cm、器高1.35cm を測る。

2070は瓦質の浅鉢型の火鉢である。復元口径が16.0cm、器高が7.2cm を測る。調整は横ナデとヘラ削りによる。三角形に作った脚が貼り付けられている。

2081・2085は瓦質の火鉢の破片である。2081は外器面にハケ目調整を施す。また、口唇部下に菊花文をスタンプとして押す。1条の突帯を付ける。2085は復元口径が47.2cm を測る。口唇部下に花文の型押し、突帯を２条貼り付け、その下にもあったと思われる。その間に櫛描波状文を描く。

2018は木製の柄の着いた鉄製品である。刀身の幅は2cm ほどと細い。残存長は10cm ほどである。刀身の断面厚みは最高で5mm ほどである。

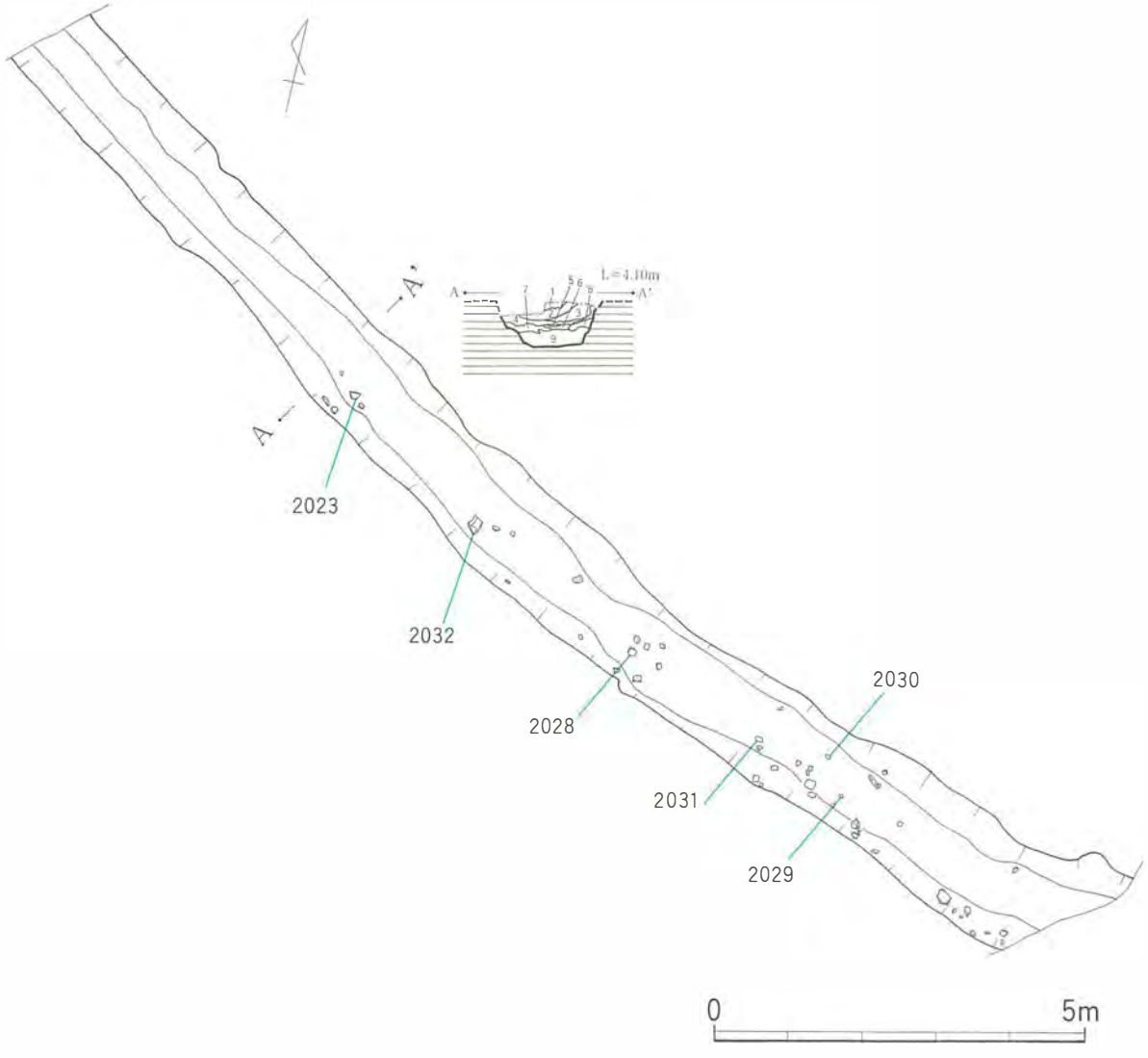
○6SX505【第291図】

i－39グリッドからj－40グリッドにかけて位置し、N－30°－W～N－40°－W の方向に走る。深さが確認面から50cm で、確認長が18m ほどを測る。断面形は逆台形を呈する。層序は下記の通りである。

１層は、褐色（7.5YR4/4）を呈し、非常に酸化鉄が強く、少量のマンガン含んでいる。土はあまり締まりがない（砂質50%、粘質50%）。２層は、オリーブ褐色（2.5Y4/3）を呈し、１層と比べ、酸化鉄は少なく全体的にまばらにみられる。砂粒が目立ち、締まっている（砂質30%、粘質70%）。３層は、暗灰黄色（2.5Y4/2）を呈し、酸化鉄（長さ３～4mm、幅3mm ほど）の塊が目立つ。粘質が強く、砂粒が少量みられる（砂質30%、粘質70%）。４層は、黒褐色（2.5Y3/2）を呈し、上層部分と比べると、酸化鉄の量は激減しており、ところどころにみられるだけである。少量の炭化物を含む（砂質35%、粘質65%）。５層は、褐色（7.5YR4/6）を呈し、酸化鉄混じりの砂層（砂質95%、粘質５%）である。６層は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、５層と比べ砂粒は少なく、ぱさぱさしている。微量の炭化物を含む（砂質60%、粘質40%）。７層は、黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、粘質がやや強く締まっている。少量の酸化鉄・炭化物を含み、砂粒がまばらにみられる（砂質30%、粘質70%）。８層は、暗灰黄色（2.5Y4/2）を呈し、土質は締まりがない。微量の酸化鉄を含み、炭化物の塊が混じる（砂質55%、粘質45%）。９層は、褐灰色（10YR4/1）を呈し、まばらに黄灰色の土が混じる。微量の酸化鉄を含み、炭化物も少量みられる（砂質15%、粘質85%）。10層は、オリーブ灰色（2.5GY5/1）を呈する地山の層。粘質が非常に強く、酸化鉄が少量みられる（砂質５%、粘質95%）。

［出土遺物］【第301図・第305図・第322図】

1846は肥前系陶器で器種は擂鉢である。6SX506でも出土している。復元口径は32.4cm を測る。内器面に



第291図　6SX505実測図

は11本程の櫛描で摺り目を作っている。焼締によるもので無釉である。1878は産地不明の陶器で、器種は壺であるが、器形の特徴から油徳利であろう。年代は不明である。

2028・2029は小型の浅鉢形の瓦質土器である。2028は、脚が欠けており付け根付近だけ残っている。口径は11.8cmである。2029は復元口径が13.0cmを測る。外底面に布痕が残る。口縁部に断面を三角形にしている。2030は瓦質の坏片である。破片のため詳細は不明である。復元口径は17.2cmを測る。2031は瓦質の捏鉢の破片である。口縁部近くのみの出土で、口唇部は角張る。2032は土師質の捏ね鉢である。包含層から出土したものと接合する。口径は40.4cm、器高は11.4cmを測る。ナデによる調整が施されるが、外器面には指頭圧痕が残る。2033は瓦質の焙烙鍋である。口径は32.3cm、器高が7.3cmを測る。外器面は回転横ナデが主であるが、体部外底面近くにヘラ削りを施す。部分的に列点様の指押えが入る。外器面全体に煤が付着し、内器面全体に煮炊きによる焦げが残る。体部に一箇所の穿孔がある。焼成後に開けられている。

○6SX506・507【第292図】

この二つの溝状遺構は切り合っているが、切り合い関係の前後は6SX507→6SX506と考えた。いずれも溝状遺構でやや中心線がずれる。

6SX506は、調査区内では約11m を確認した。6SX504とほぼ平行に伸びている。幅が2m ほどで、確認面からの深さ30cm ほどを測る。埋土を観察すると下層に荒い砂流がみられ流水作用があったことをうかがわせる。その後粘性土に変化し埋没していった状況が分かった。

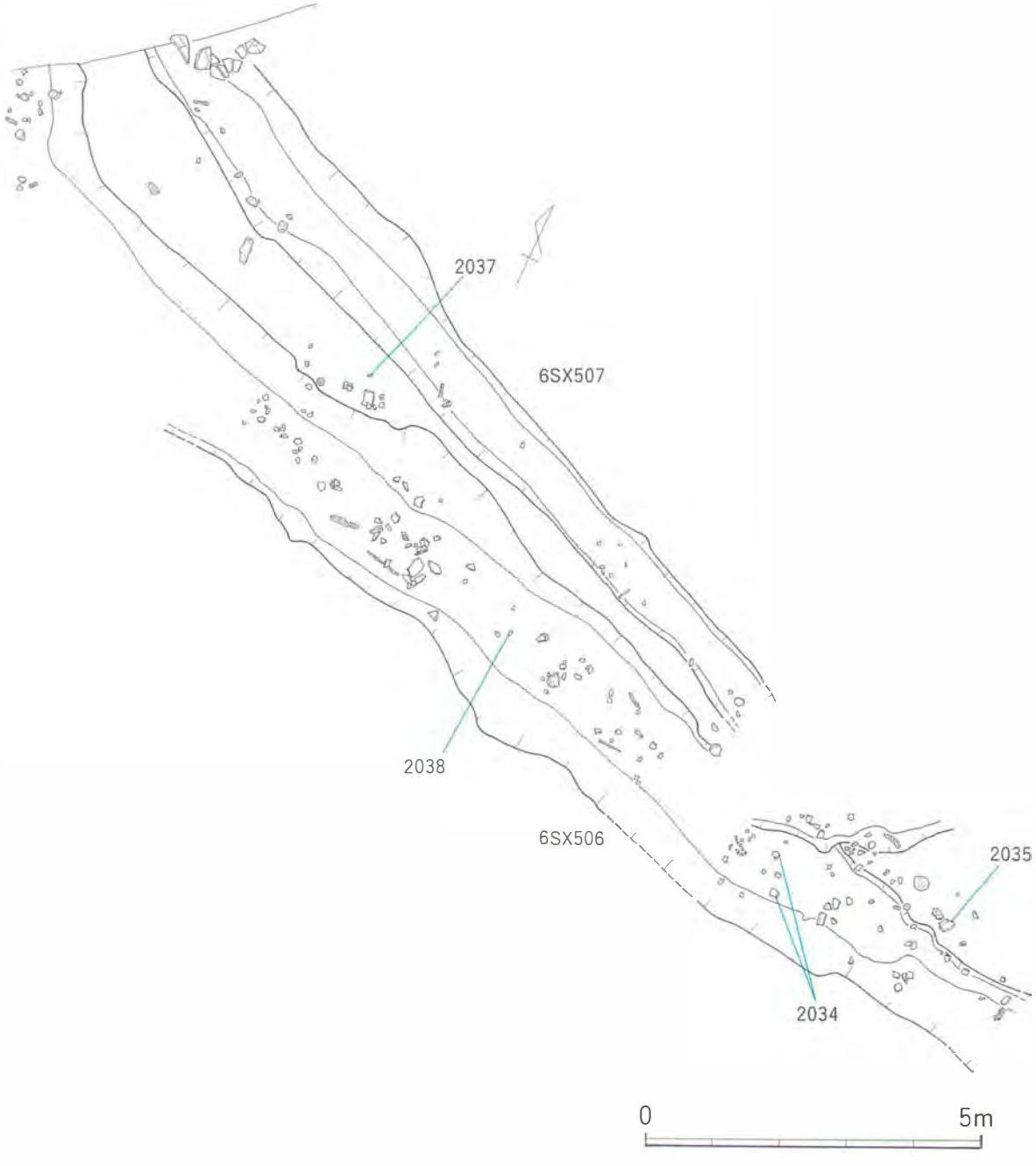
6SX507は、6SX506により切られており、調査区内で14m ほどを確認した。幅は確認面で１～1.5m を測る。深さは確認面から30cm ほどである。

［出土遺物］

出土遺物は中世～近世初頭のものがほとんどで、数量的には瓦質土器が多く、陶器片がそれにはいる程度である。下層にいくほど瓦質土器の割合は高くなる。

6SX506の出土品としては以下のものがある。

1780は、肥前系の陶器で器種は中碗である。生産は1600年代～1630年代である。復元底径は3.5cm を測る。1786は、肥前系陶器の中碗ある。生産年代は17世紀後半～18世紀前半である。復元口縁径は10.1cm、



第292図　6SX506・6SX507実測図

器高5.3cmを測る。1788は、肥前系の嬉野内野山窯産の緑釉（内野山系）陶器である。器種は中碗である。生産時期は17世紀末～18世紀前半である。口径は10.7cm、器高6.7cmを測る。1804は肥前系の陶器で、器種は小皿である。生産時期は17世紀後半～18世紀前半である。口径13.1cm、器高3.4cmを測る。1814は、肥前系嬉野内野山窯製の陶器で、器種は小皿である。生産時期は17世紀末～18世紀前半である。口径12.0cm、器高3.7cmを測る。内底面には蛇の目釉剥ぎが施される。1826は、肥前唐津系の二彩陶器で、器種は大鉢である。生産時期は1600年ほどである。口径は37.0cm、器高は12.9cmを測る。口縁部には白化粧土を施した後雑に施釉している。口縁部では白化粧土で櫛目波線後雑に施釉し、胴部では白化粧土で櫛刷毛目横線を施した後雑に施釉している。底部には胎土目痕が残る。1830は、肥前内野山系の緑釉陶器で、器種は中鉢である。復元口径は19.6cmである。内底面には蛇の目釉剥ぎが施される。1843は肥前系陶器で、器種は擂鉢である。復元口径は37.0cm、器高は11.6cmを測る。鉄釉が施されている。内器面には5条の櫛描で摺目が付けられている。外底面には回転糸切り離し痕が残る。1846は、肥前系陶器で、器種は擂鉢である。6SX505からも出土し接合する。復元口径は32.4cmを測る。内器面には13条の櫛描による摺目が付けられている。焼締によるだけで全体が無釉である。1860は肥後小代系の陶器で、器種は瓶（徳利？）である。生産時期は18世紀代であろうか。6SX502でも出土し接合する。外器面に指ナデあて具痕がある。1867は、肥前系の陶器で、器種は火入である。生産時期は1655～1690年である。口径は9.3、器高5.7cmを測る。1879は、九州内の産地不明陶器で、器種は片口である。復元口径は22.4cm、器高11.4cmを測る。1889は、国内産の京焼風陶器で、器種は碗である。見込には崩れた山水画が描かれている。外底面高台内に「小倉」の押印がある。1891も京焼風陶器で、器種は碗である。見込にはやはり崩れた山水画が描かれる。外底面高台内に「小倉」の押印がある。1892も肥前系の京焼風陶器で、器種は皿である。見込には先のものと同様に山水画の崩れたものが描かれる。生産時期は17世紀後半～18世紀前半に当たる。復元口径は19.7cm、器高6.1cmを測る。これらの京焼風陶器は同じ産地であろう。高台内の「小倉」印がそれを示す。1907は、肥前系の染付磁器で、器種は中碗である。生産時期は18世紀中葉～後葉である。口径は10.1cm、器高5.3cmを測る。外器面には青海波文と菖蒲文を組み合わせた文様が描かれる。高台内名款は方形に変形字である。1915は、肥前系の染付磁器で、器種は中碗である。生産時期は18世紀中葉～後葉である。6SX504でも出土し接合する。器種については鉢の可能性もある。1928は、肥前系の染付磁器で、器種は中碗である。生産時期は17世紀後半～18世紀前半である。6SX506の直上層で出土している。1960は、肥前系の染付磁器で器種は五寸皿である。口縁は折り縁である。生産時期は17世紀中葉である。復元口径は14.7cm、器高は3.9cmを測る。内器面の口縁には植物文、見込には柳を描いている。1962は肥前系染付磁器で、器種は小皿である。生産時期は17世紀末～18世紀前半である。口縁径は13.1cm、器高は3.4cmである。内器面には大根を主として草葉などを描いている。外器面には省略した文様が入る。1981は、景徳鎮産の染付磁器で、器種は碗である。生産時期は16世紀後半である。内器面には花文、外器面体部に花文が入る。高台内には銘が入るが読めない。復元口径は、5.2cmを測る。小野分類では器種が碗E群饅頭心型である。この他図示していないが、陶器の天目中鉢や肥前系の染付磁器で、大碗らしきものがある。

2034は瓦質土器で脚坏の浅鉢である。脚は欠損しているが付け根付近が残っている。2035は切り合い付近から出土した脚付きの浅鉢で瓦質土器である。2036は瓦質の大甕で胴部下位まで残る。口唇部は断面形がつぶれた「くの字」状を呈している。内器面には指ナデによる調整が施されている。

2037は弥生土器の口縁のみである。高坏の可能性がある。2038は須恵質で何らかの容器の脚であると考える。

○6SD501【第293図】

この遺構は現在まで水路として使用されていたもので、調査前まで水が流れていたものである。ただ、そ

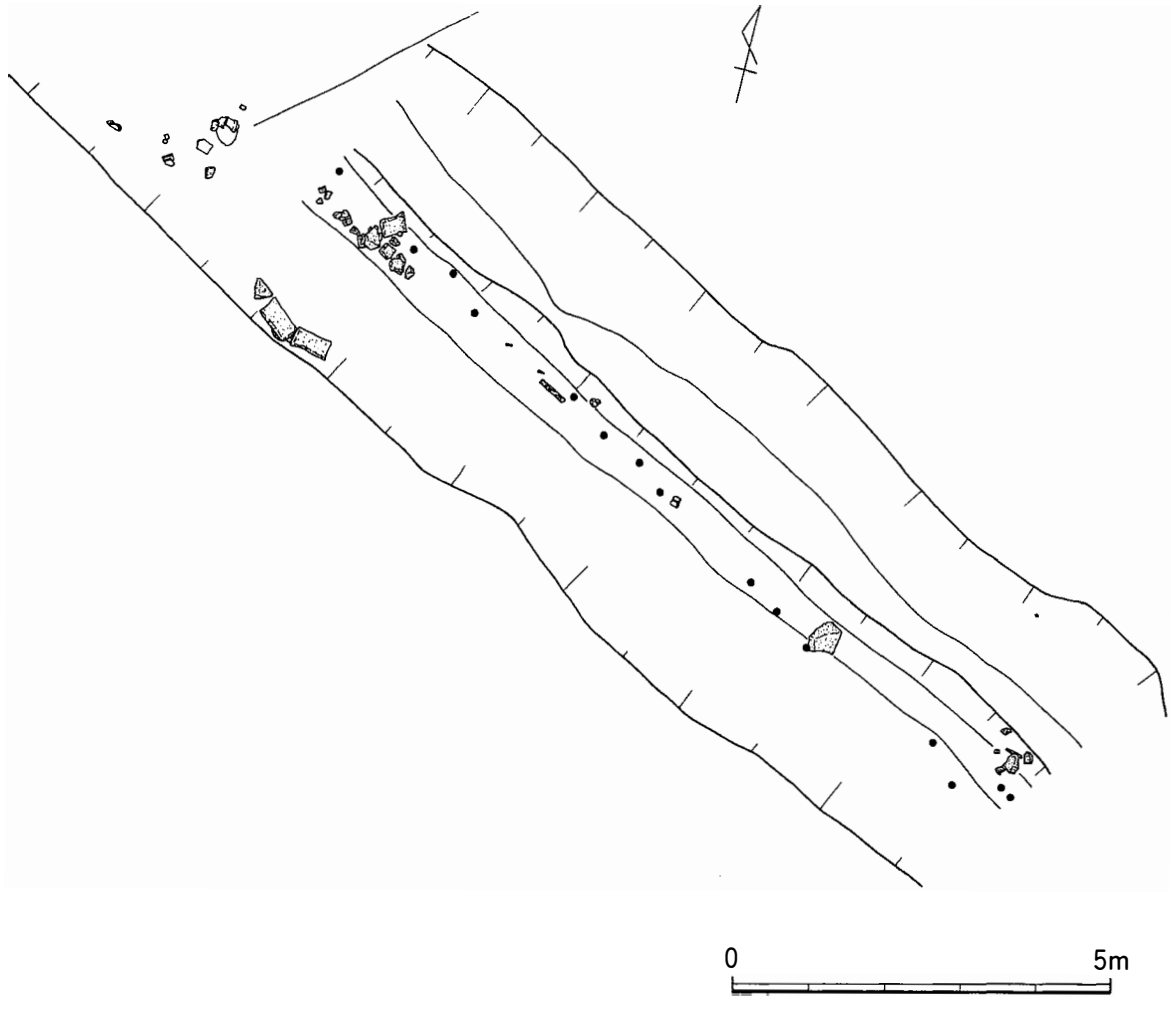
の始まりは、最下層の遺物などを検討すると近世近くまで遡る可能性がある。この遺構を当初は新しいものとして表土剥ぎでは水路内まで下げていった。途中近代に石垣が組まれたところで松の胴木と石垣を支える縦に打ち込まれた杭列を確認した。その下層を調査の対象とした。ここではその下層から下の層序のみを示す。1層は、灰色（10Y4/1）を呈する。土質は粘性の強い粘質土で、締まりもある。砂礫粒子は多い。2層は、灰オリーブ色（5Y5/2）を呈する粘質土である。キメの細かな砂粒子が全体中の20%近くを占める。3層は、灰色（5Y4/1）を呈する粘質土である。ややキメの荒めの砂粒子が全体中の35%近くを占める。

遺構自体は現況面から深さが1.5m、幅が1.5m を測る。調査地点では東西となるが、本来は蛇行しながら流れていた模様で明治時代の地籍図中にこの溝に比定できるものが描かれ近世まで遡る可能性はある。この溝は菊池川との間で洪水時の安全弁として利用されていた様で、菊池川の水位が上がったときは菊池川からの水が水田方向に流れ込み、水が引けば流れ出すようになっていたという。増水した水をうまく水田に引き込むことで遊水池にして被害を最小限にとどめようとした工夫の一端を担っていたと考えられる。溝としては蛇行しながら西から東へ流れ、菊池川の方向へと続く。

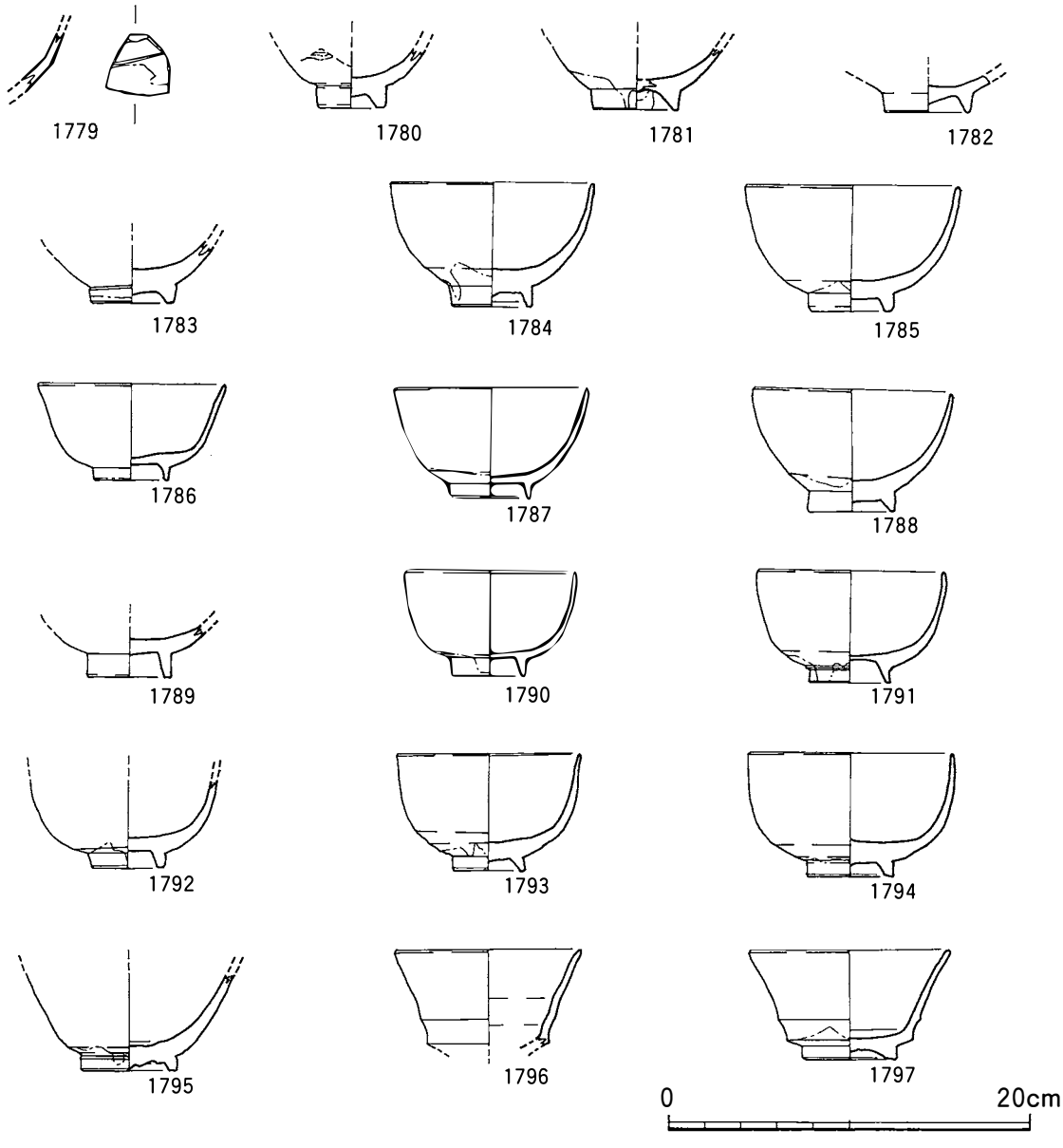
［出土遺物］

この遺構は近現代まで残った溝である。したがって遺構の上位から出土した遺物にはプラスチックの歯ブラシ、瓶、鉄筆、石板などがあった。

陶磁器では1796・1797・1812・1824・1848・1920・1921・1929・1931・1932・1955・1959・1543・2074・



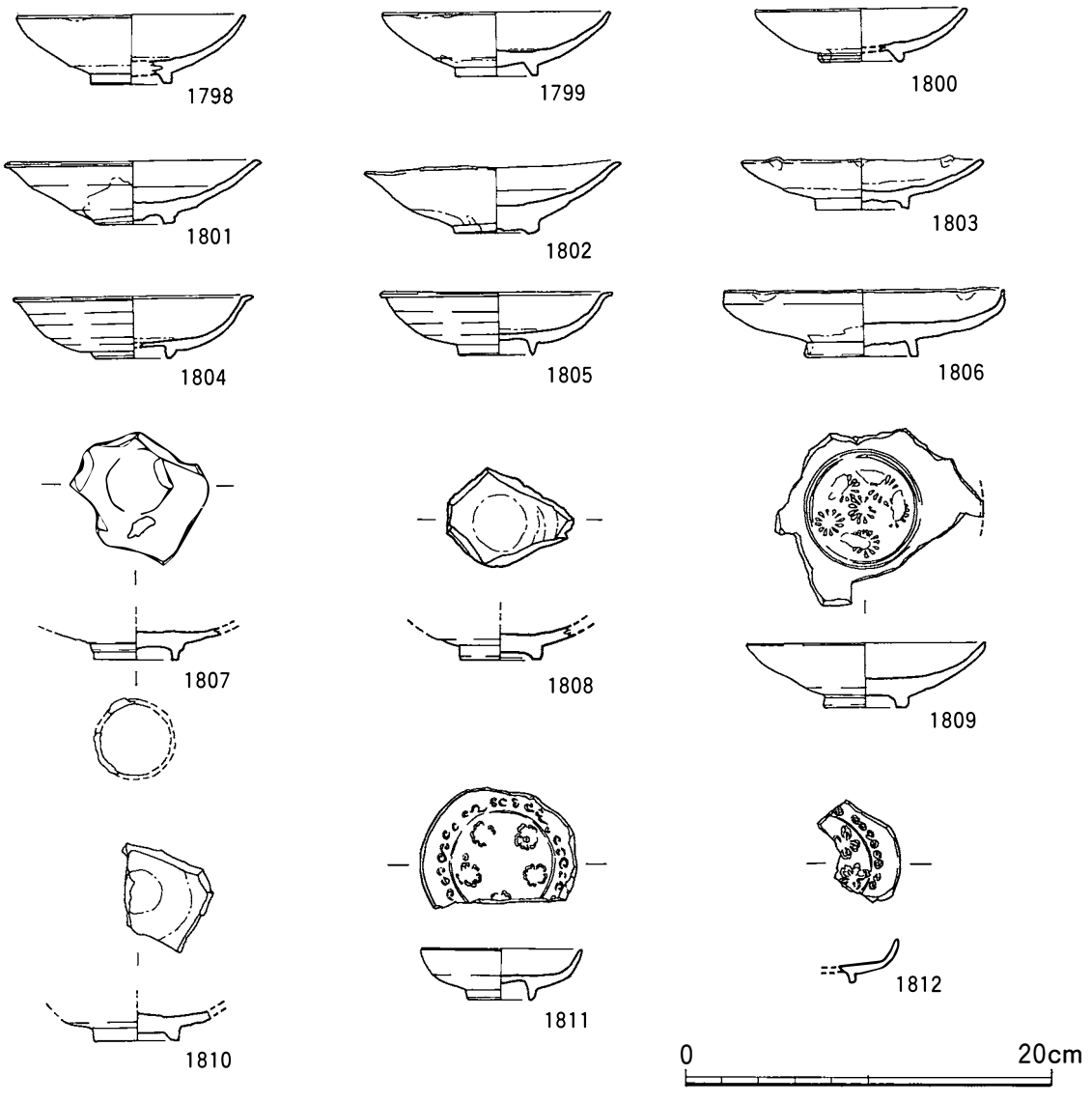
第293図　6SD501実測図



第294図　近世陶器実測図

2078・2094・2101がある。

1796は、肥後産陶器で、器種は中埦である。生産時期は18世紀末～19世紀前半である。復元口径は0.3cmを測る。無紋のもので口縁が外反する。1797は、肥後産陶器で、器種は中埦で1706と同じ器形である。生産時期は18世紀末～19世紀前半である。復元口径は10.8cm、器高は6.0cmを測る。1812は、肥後小代焼類似の陶器で、内器面に白色粘土を埋め込む象嵌が施される。器種は小皿である。生産時期は19世紀中葉であろうか。1824は陶器で、器種は大鉢である。産地は不明で、生産時期は器形から1750年以降と推定できる。口縁部付近は、灰釉後白化粧土で刷毛目波線を施す。外底面には砂目痕がある。1848は九州内産の陶器で器種は擂鉢である。生産時期は18世紀中葉～後葉である。内器面には12本以上の櫛描による摺目が施されている。1920は、肥前系の白磁で、器種は中碗であろう。生産時期は18世紀後半である。1921は、肥前系白磁の中碗である。生産時期は18世紀後半である。復元口径は11.1cmを測る。1929は肥前系磁器の染付中碗で広東碗と呼ばれるものである。生産時期は1820年代～1860年代に当たる。復元口径は11.6cm、高さは3cmを測る。外器面には仙芝文が描かれ、見込には一重圏内に崩れた壽字文が描かれる。1931は、肥前系磁器染付の中碗

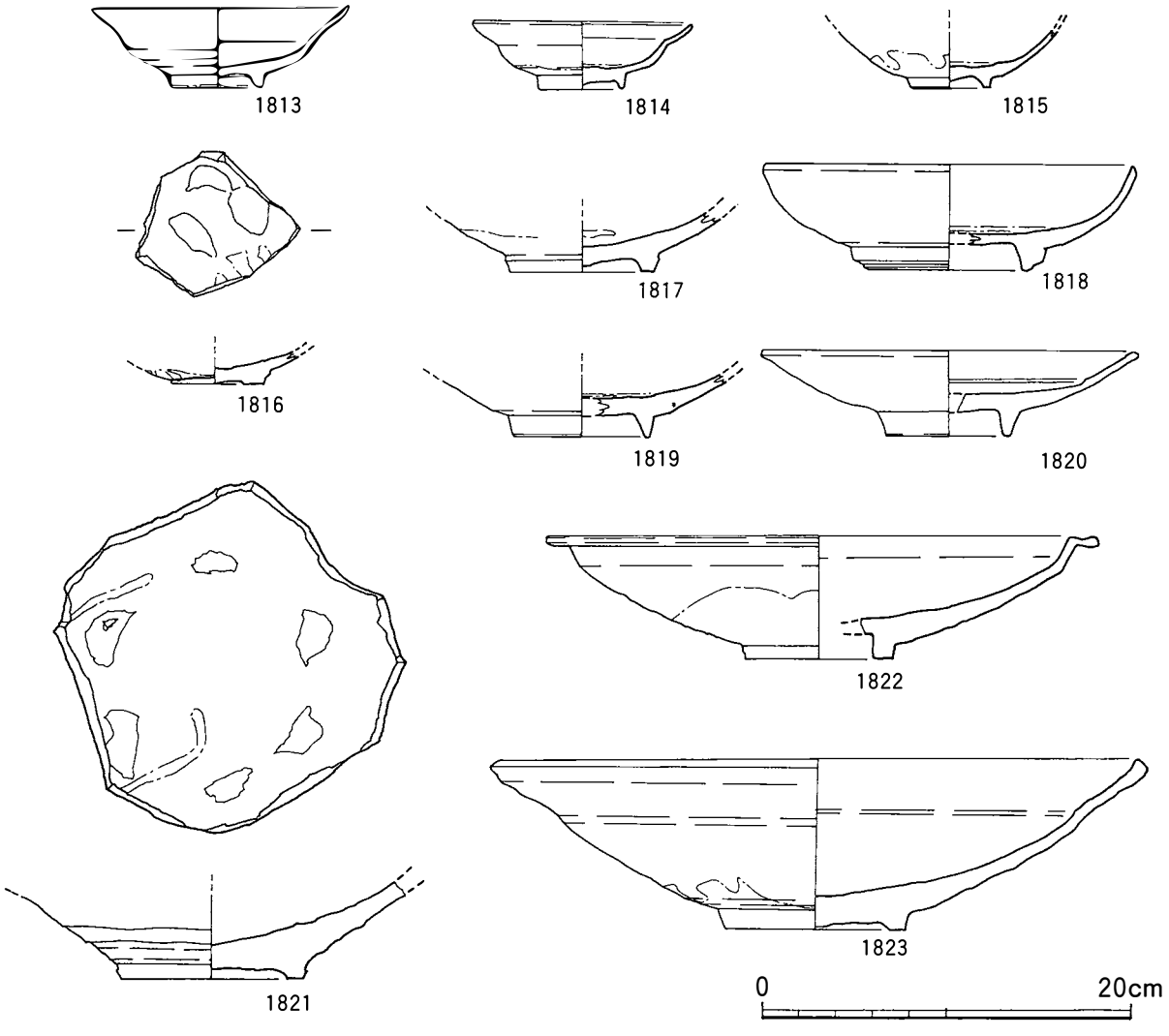


第295図　近世陶器実測図

で、生産時期で19世紀～明治期で、復元口径が10.5cm、高さ5.7cmを測る。外器面には山水文が施される。見込には壽文か。1932は肥前系磁器染付の中碗で端反碗である。生産時期は19世紀～明治期である。外器面には二重格子文が施される。1955は口縁部付近の破片で、肥前系磁器染付の中皿である。生産時期は18世紀中期～後期である。復元口径は18.6cmを測る。口唇部に菊花文と梅が配される。1959は、肥前系磁器染付の小皿である。生産年代は19世紀前期でA層の一括出土である。復元口径は9.4cm、高さは2.6cmを測る。内器面底部には蛇の目釉剥ぎが施され、そこに重ね焼きの跡が残る。内器面に簡略化した花文が巡る。

このほか時期の異なる混入品がありそのうちのいくつかを紹介する。第253図の1543は須恵器の坏である。口縁径が15.3cm、復元高が3.7cm、復元底径が8.7cmを測る。体部は回転横ナデがなされる。外底面には回転ヘラオコシ痕が残る。

第326図は包含層出土遺物としているが、その中のいくつはこの遺構の上部からの出土である。2074は瓦質土器で浅鉢形の火鉢である。復元口径が16.5cmを測る。貼り付け脚を持つ。外器面は横ナデ、内器面には指頭圧痕が施される。2078は、瓦質土器で獣面外耳付壺の破片である。獣面は獅子を型どり型押しであろ



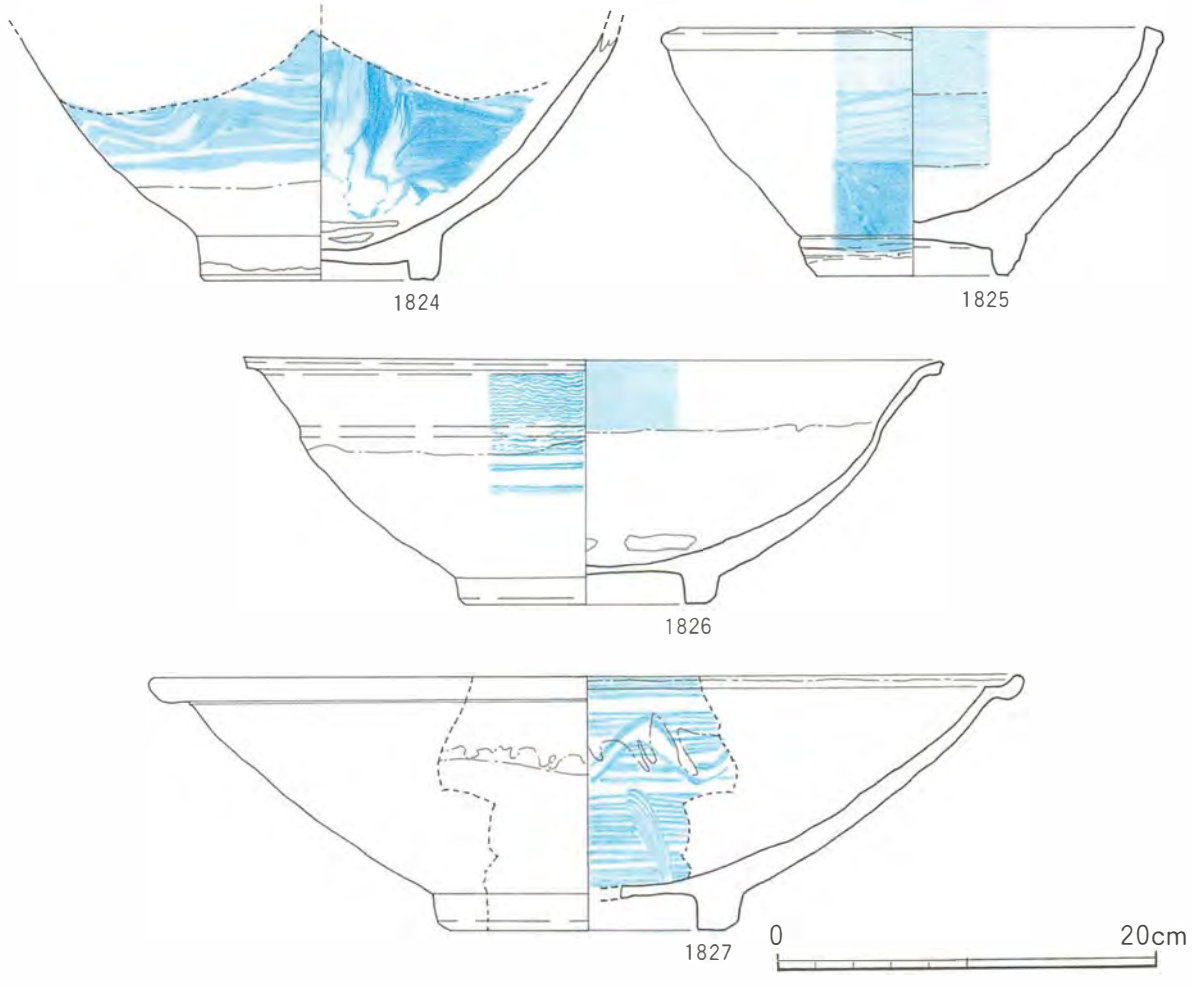
第296図　近世陶器実測図

う。第328図の2094もこの遺構の出土で、瓦質土器でカマドの一部と推定している。外器面には半円と花火様模様が型押しされている。内器面に煤が付着し、火入れ口が赤く焼けている。第330図の2101は瓦質土器の大甕で口縁径が41.6cm を測る。胴部は張り出す。

○包含層の出土遺物

この調査区内で近世以降の遺物包含層はＸ－１区・Ｘ－２区ともに、この時期の遺構を確認した面より上部である。従ってなかには遺構確認面より上部から遺構が掘り込まれている可能性は大きく、当然包含層と考えた層から出土した遺物もその遺構のものである可能性は大きい。しかし、ここでそこまでの判別は困難なので、ここでは各遺構の項目で述べなかった遺物についてのみ記述する。ただ、明確に遺構との共伴関係が十分認識できてはいないものも多い。ここではそれらを一まとめにして述べる。

まず、出土状況の概要をまとめる。調査Ⅶ区では標準層位のⅣ層～Ⅴ層上面にかけて中世の青磁などが点々と出土している。調査Ⅷ区では、用地内にあった住宅の生活過程もしくは宅地の撤去段階で土中に廃棄物として埋め込んだ陶磁器類が出土している。Ｘ－２区では、整地層中と溝状遺構の上面・中位から出土している。



第297図　近世陶器実測図

ここでX－2区について、やや詳しく述べる。X－2区は、そのほとんどが溝状遺構と整地層である。現在も宅地の営まれている場所であるが、この場所になるには次々と埋め立てられて行った過程が遺物の出土状況、土層の堆積状況から窺える。この埋土中から多量の陶磁器、土師質土器、瓦質土器などが出土した。遺物の出土状況を詳細に観察すると、明らかに調査区南側に生活場所が想定でき、その北側に配された溝に対して廃棄したものか、さらに整地作業が行われた際にまとめて廃棄されたものかのどちらかである。文中で「L01層、L02層、L03層」などは遺物包含層を便宜上分けたものである。

・陶器【第294図～第307図】

第294図に図化したものは、陶器の碗類である。

1781・1782・1784・1785・1787・1790・1792～1794は中碗である。

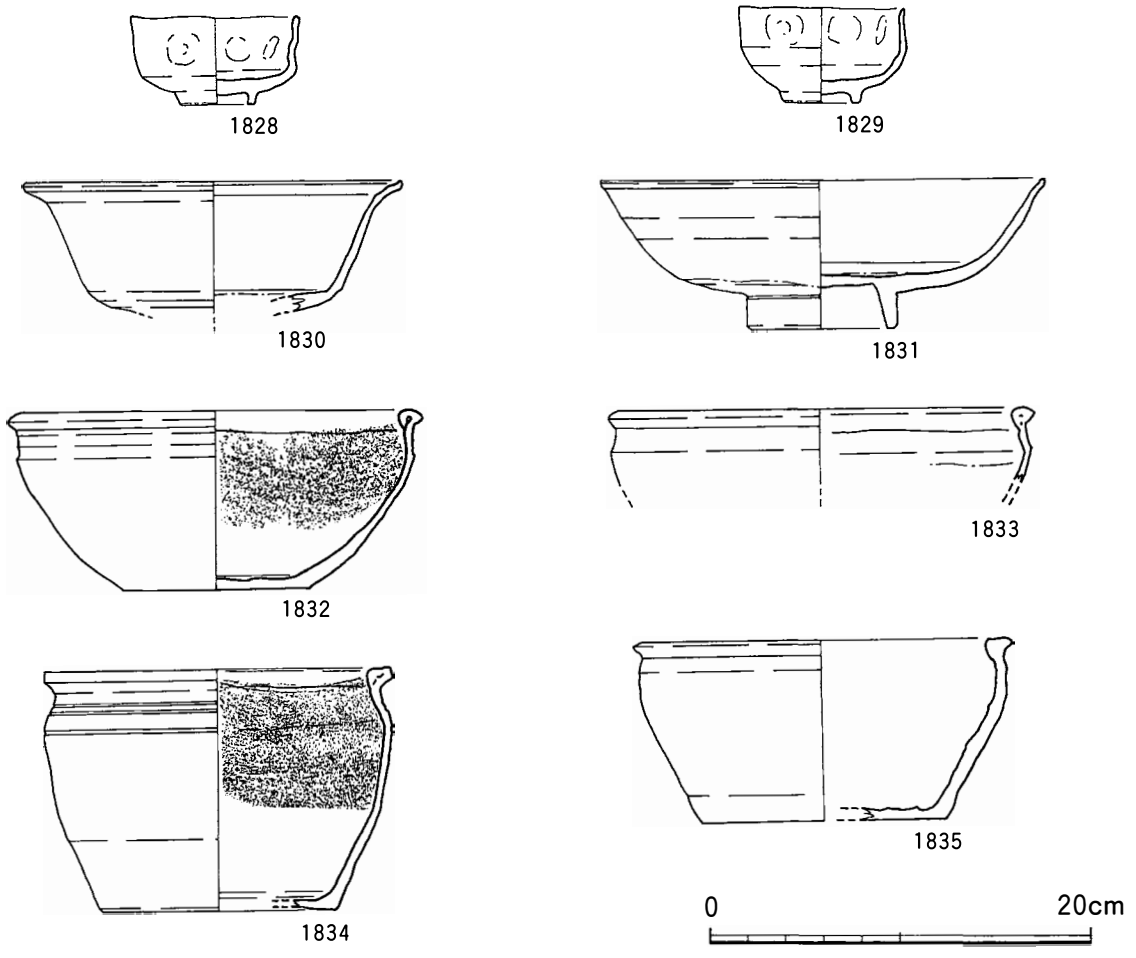
1781は、緑釉陶器である。肥前系嬉野内野山産で17世紀後半のもので、表採品である。1782は肥前系のもので、製作時期は1650年以降である。X－1区の表土剥ぎ中に出土した物である。底径は4.6cmを測る。高台は削り出し高台でケズリ部には兜巾があり、畳付以外に施釉される。1784は鉄釉系のもので、製作時期は17世紀末～18世紀前半である。X－2区から出土した。1785は緑釉陶器で、肥前嬉野内野山系産とされる。製作時期は17世紀末～18世紀前である。X－2区g－43グリッド、L03層から出土した。復元口径11.5cm、器高4.3cmを測る。1787は産地不明のもので、製作時期は17世紀後半～18世紀前半に比定される。X－2区g－43グリッドL05層出土である。復元口径10.7cm、器高6.2cmを測る。1790は17世紀後半～18世紀前半の肥前系と思われる中碗である。X－2区g－43グリッドの2103、L03層で出土

した。口径9.4cm、器高5.8cm を測る。1792は肥前系のもので、製作時期は17世紀後半～18世紀前半である。Ｘ－２区 f－42グリッド出土である。1793は肥前系の中碗で、製作時期は17世紀後半～18世紀前半である。Ｘ－２区 b－42グリッド、整地層①層から出土している。口径10.2cm、器高6.4cm を測る。1794は肥前系のもので、製作時期は17世紀後半～18世紀前半である。Ｘ－２区 g－43グリッドから出土している。復元口径11.0cm、器高6.7cm を測る。

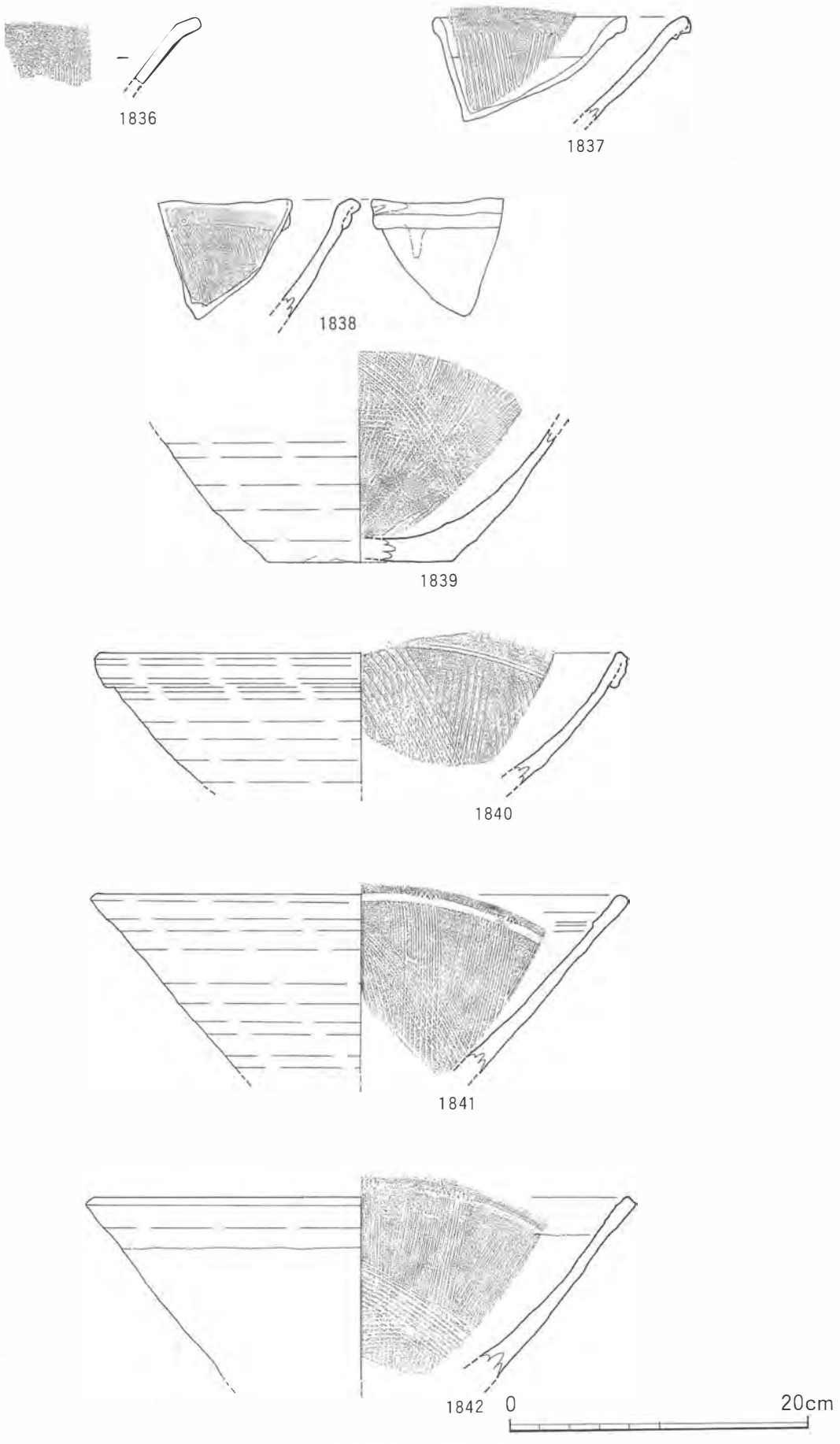
1795は大碗で肥後小代産と推定される。生産時期は18世紀代？である。Ｘ－２区の撹乱中からの出土である。

第295図～第298図に図化したものは、陶器の皿類である。口径の差から小皿、五寸皿、中皿に分けられる。

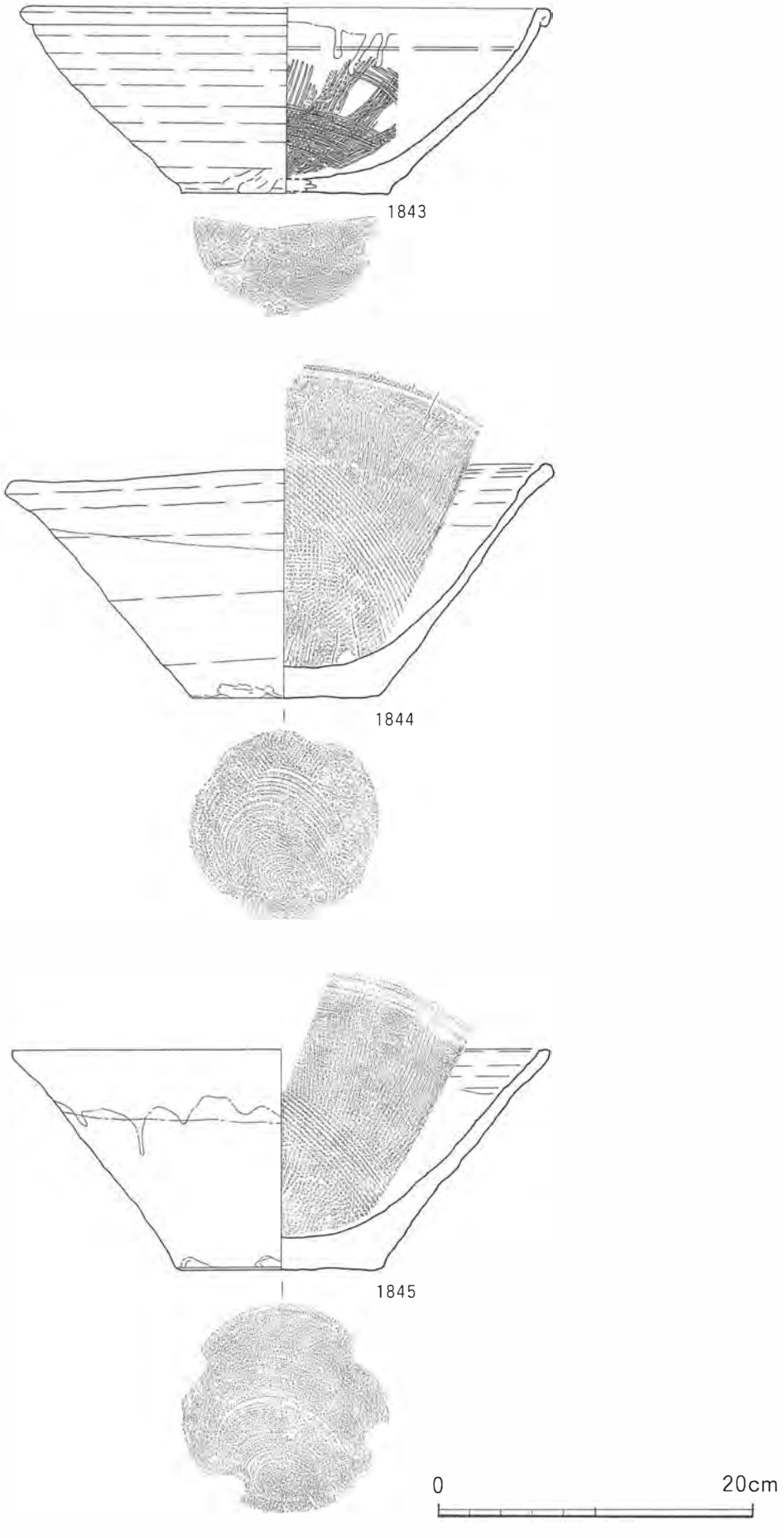
1798、1800、1803、1805、1807、1808、1810、1811は小皿である。1798は肥前嬉野内野山産の緑釉陶器で、製作時期は17世紀末～18世紀前期である。Ｘ－２区 g－43グリッド、L05層から出土した。口径12.2cm、器高3.8cm を測る。見込に蛇の目釉剥ぎが施される。1800は肥前系の刷毛目を施したものである。製作時期は17世紀後半～18世紀前半のものである。Ｘ－２区 g－43グリッド、L03層から出土した。口径11.2cm、器高2.9cm を測る。見込に蛇の目釉剥ぎがなされる。1803は、肥後小代産と考えられるもので、製作時期は19世紀初頭である。Ｘ－１区の表土剥ぎ中に出土した。器高2.8cm を測る。見込み中央は露胎である。削り出し高台の中には渦巻き高台（右巴）があり、土みせで、高台際にわずかに削りがあり凹線となる。1805



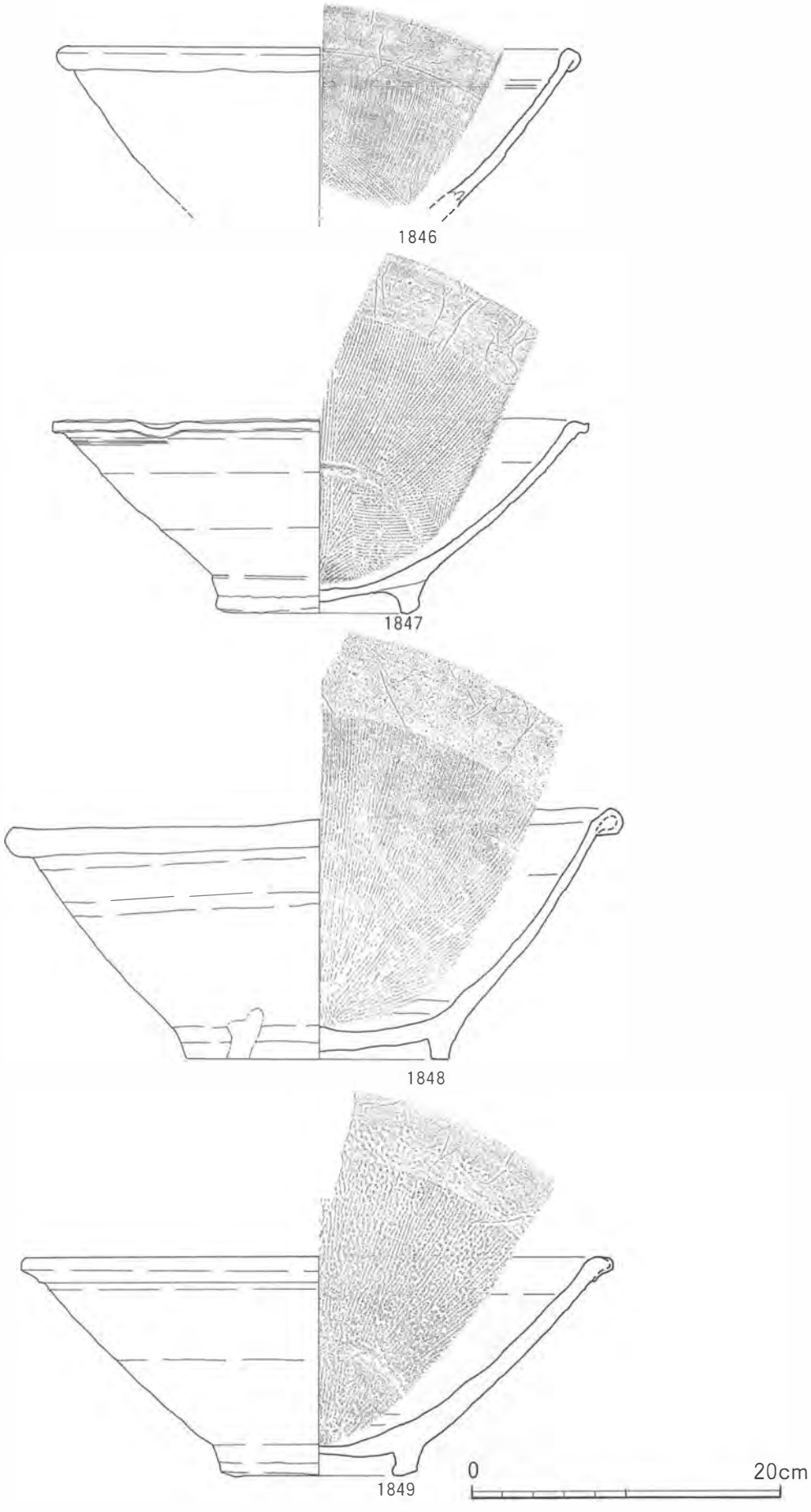
第298図　近世陶器実測図



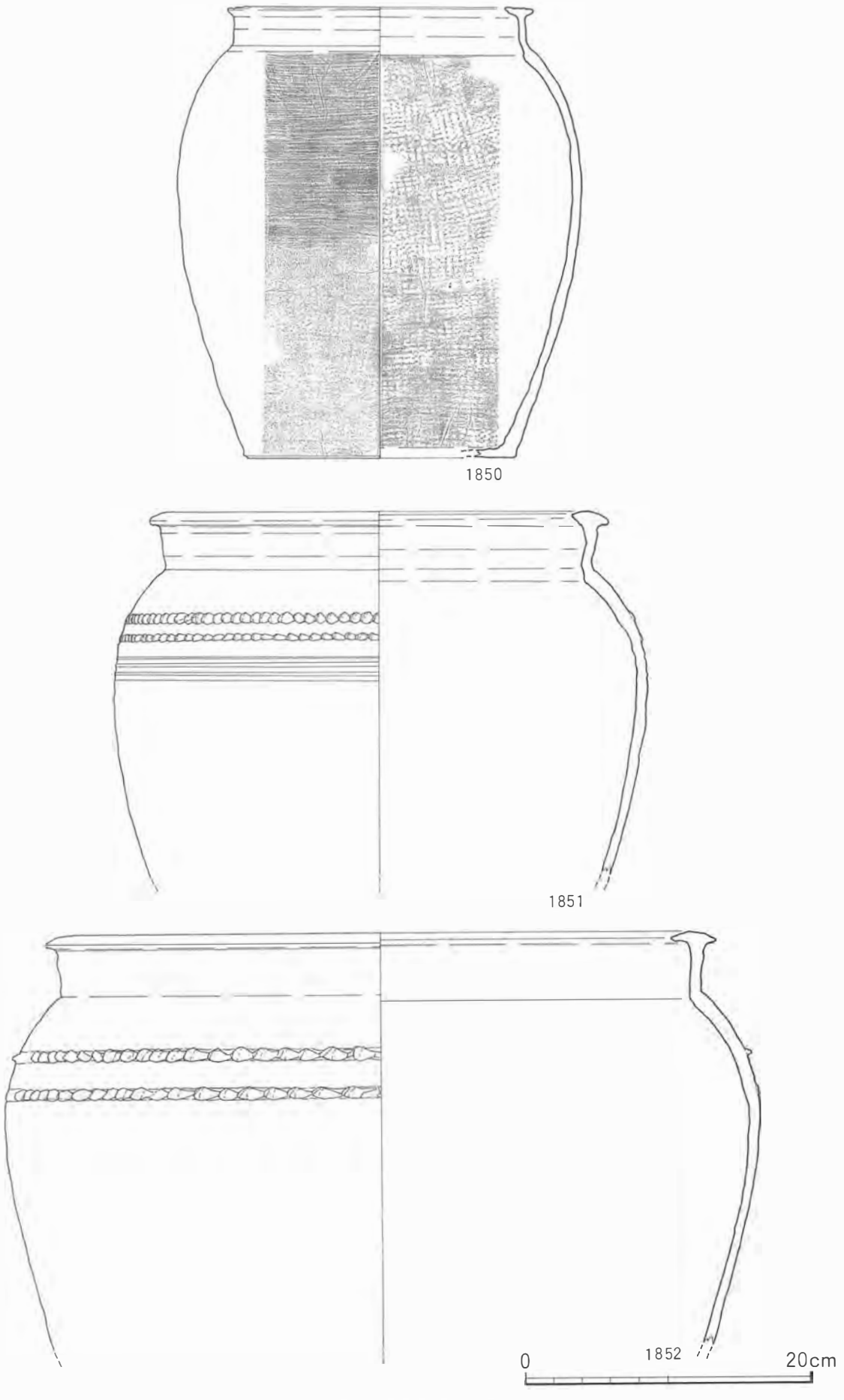
第299図　近世陶器実測図



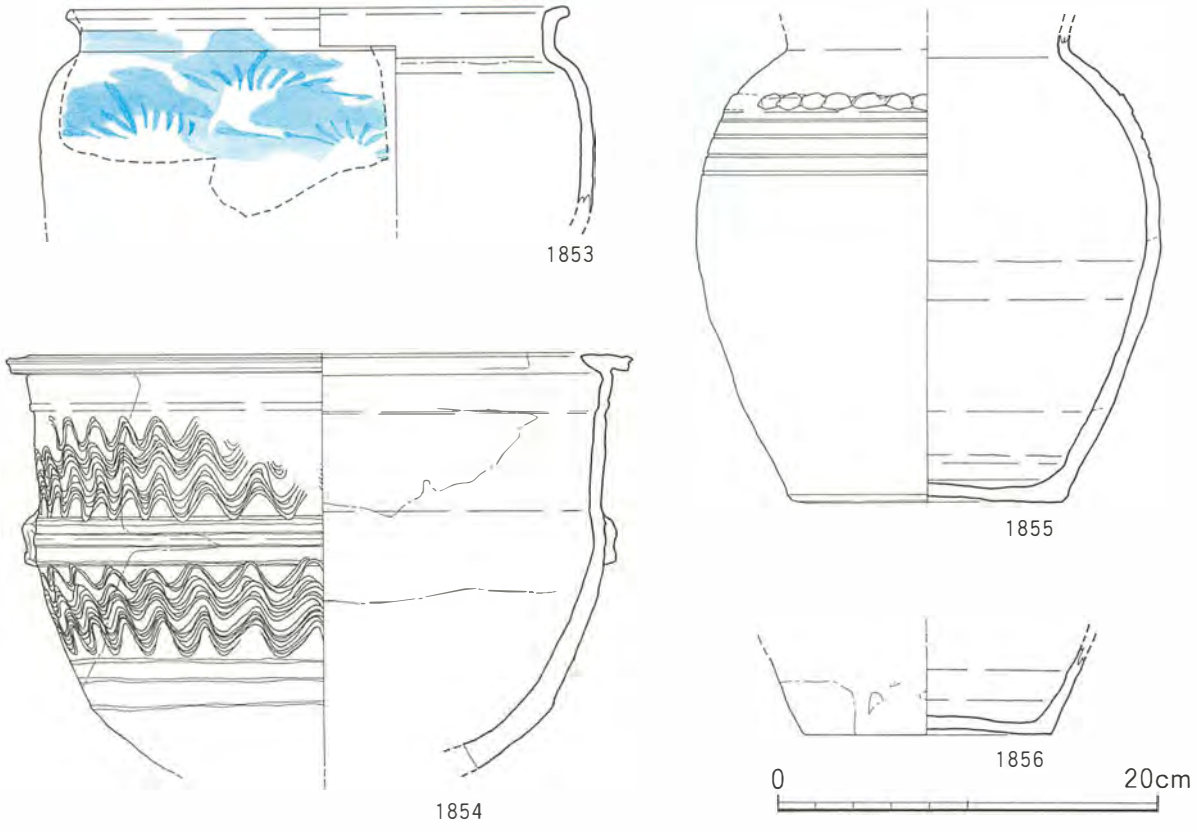
第300図　近世陶器実測図



第301図　近世陶器実測図



第302図　近世陶器実測図



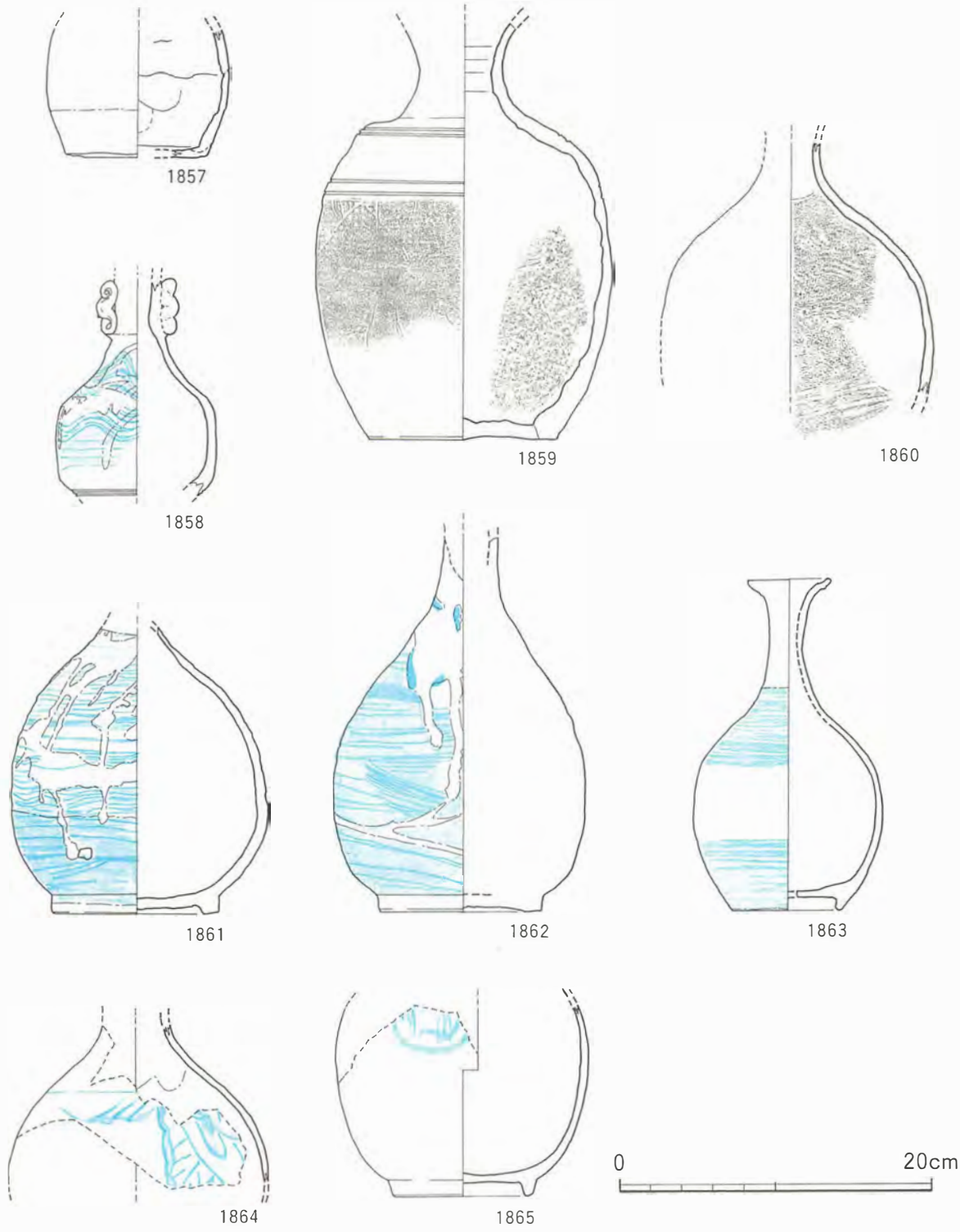
第303図　近世陶器実測図

は肥前系の小皿で、17世紀後半～18世紀前半に当たる。X－2区g－43グリッドから出土した。口径は12.7cm、器高は2.5cmを測る。見込に蛇の目釉剥ぎである。1807は肥前系の小皿？である。製作時期は1600年～1630年である。X－2区g－43グリッド出土した。見込と畳付けに胎土目痕が残る。1808は、肥前系の小皿で、1690年～1780年に製作された。X－2区g－43グリッドで出土した。見込には蛇の目釉剥ぎが施される。1810は、肥前系の小皿で、1690年～1780年に製作される。X－1区Pit19から出土した。復元口径は4.4cmを測る。見込はナデ後施釉蛇の目釉剥ぎが施される。1811は肥後小代焼に類似した象嵌のある小皿である。19世紀中頃？の製作である。X－2区の撹乱からの出である。復元口径は8.8cm、器高は2.8cmを測る。

1806・1815は五寸皿である。1806は、藁灰釉をかける肥前高取系のものである。製作時期は17世紀前半に比定できる。X－2区f－42,43グリッド出土である。口径15.1cm、器高3.6cmを測る。1815は肥前嬉野内野山産のものである。製作時期は17世紀末～18世紀前半である。X－2区f－42,43グリッドで出土した。見込に蛇の目釉剥ぎが施される。

1816・1817は中皿である。1816は肥前系の灰釉陶器である。製作時期は17世紀中半である。X－2区g－43グリッドのL05層で出土した。1817は肥前系灰釉陶器である。製作時期は1600年～1630年である。X－2区L05層の出土である。

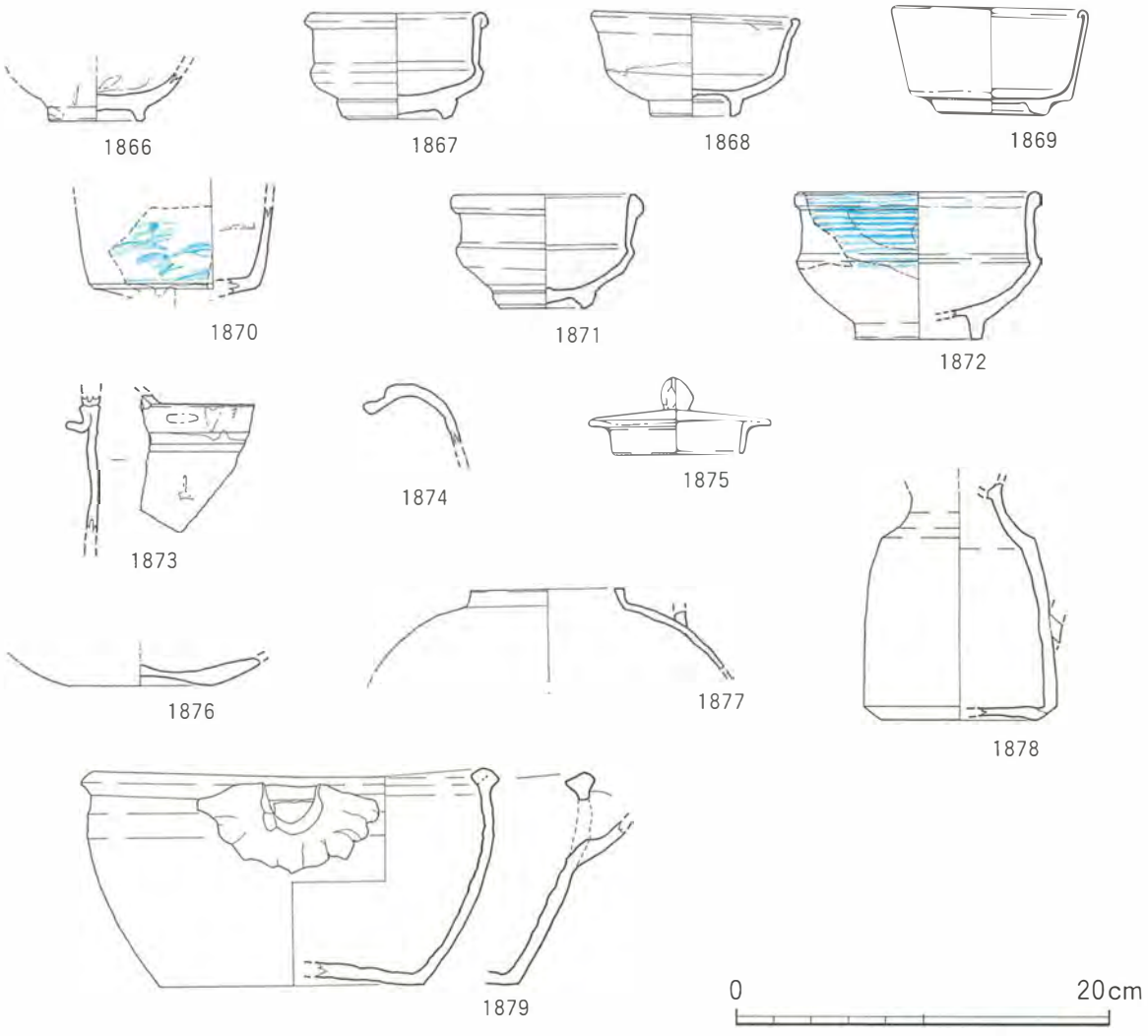
1825・1835は中鉢である。1825は生産地不明のものである。製作時期は1700年代とされる。X－2区から出土した。復元口径は24.4cm、器高は13.0cmを測る。口縁部には化粧土が、胴部には化粧土の後、白化粧土で櫛描ハケ目を施し、内器面は口縁部～胴部には化粧土の後、白化粧土で櫛描ハケ目後に雑に施釉される。砂目痕が畳付けに残る。1835は生産地不明の中鉢である。X－2区g－42グリッド出土する。口径は19.0cm、器高は9.5cmを測る。内器面はナデ後施釉口縁部のみ釉なし。外器面の施釉は口縁部のみで他には釉が



第304図　近世陶器実測図

い。

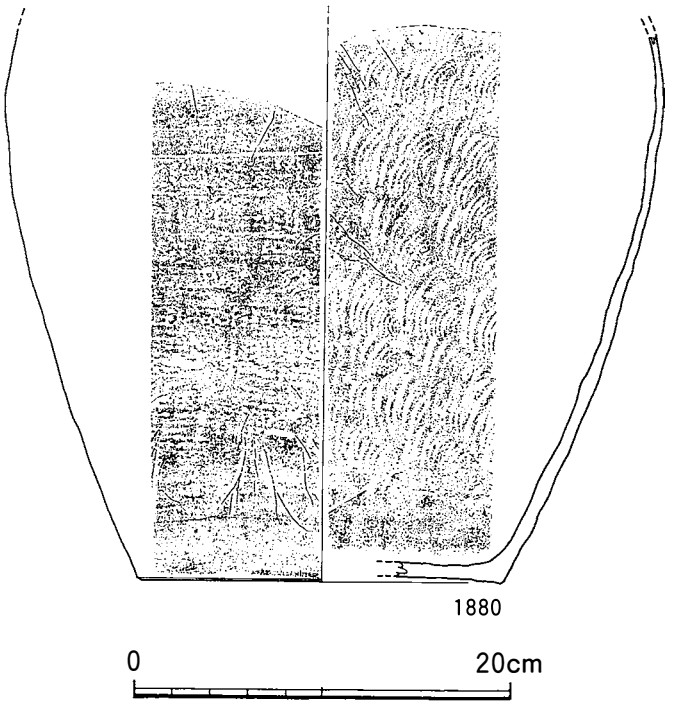
1827は生産地不明の大鉢で1750年以降の生産である。Ｘ－２区ｆ－42,ｇ－43グリッドのL03層撹乱から出土した。復元口径は42.6cm、復元器高は13.2cm である。内器面にはナデ後化粧土ハケ目（横・縦）で波状文を施した後、口縁のみ雑に施釉、外器面にはナデ後口縁のみ施釉、外器面はナデ後化粧土ハケ目（横・縦）が施される。



第305図　近世陶器実測図

第299図～第301図は擂鉢を図化したものである。釉かけていないもの(A)、かけているもの(B)である。

1836は国内生産地不明の擂鉢である。17世紀前半～中期くらいの生産である。X－2区g－42グリッドの撹乱から出土した。復元口径は38.5cmを測る。内器面には櫛描擂目が施される。1837は産地不明の擂鉢で、17世紀前半～中期の生産品である。X－2区g－43グリッドから出土していた。復元口径は37.1cmを測る。内器面には櫛描擂目が施される。1838は、生産地不明の擂鉢で、17世紀前半～中期の製作である。X－2区g－43グリッドの出土である。復元口径は27.0cmを測る。内器面には櫛描による擂目が施される。1839は、九州内の産地不明の擂鉢で、17世紀前半～中期（不明）に生産される。X－2区g－43グリッド、L03層から出土。復元口径は12.3cmを測る。内勤面には櫛描による擂目が施される。1840は産地不明の擂鉢で17世紀中期～後半（不明）の生産である。X－2区g－43グリッド出土している。復元口径は35.0cmを測る。内器面には回転横ナデ後櫛描擂目が施される。1841は生産地不明の擂鉢で、17世紀中期～後期（不明）の生産であろう。X－2区g－43グリッド、L03層から出土した。復元口径は34.8cmである。内器面には回転横ナデ後櫛描擂目と沈線が施される。1842は肥前系の擂鉢で17世紀中半～後半の製作である。X－2区f－43グリッドL01層出土である。復元口径は35.8cmを測る。櫛描擂目凹線模様がある。1844は九州内産の擂鉢で17世紀中期～後期に製作されたものである。X－2区g－43グリッド、L03層から出土した。口径は33.9cm、

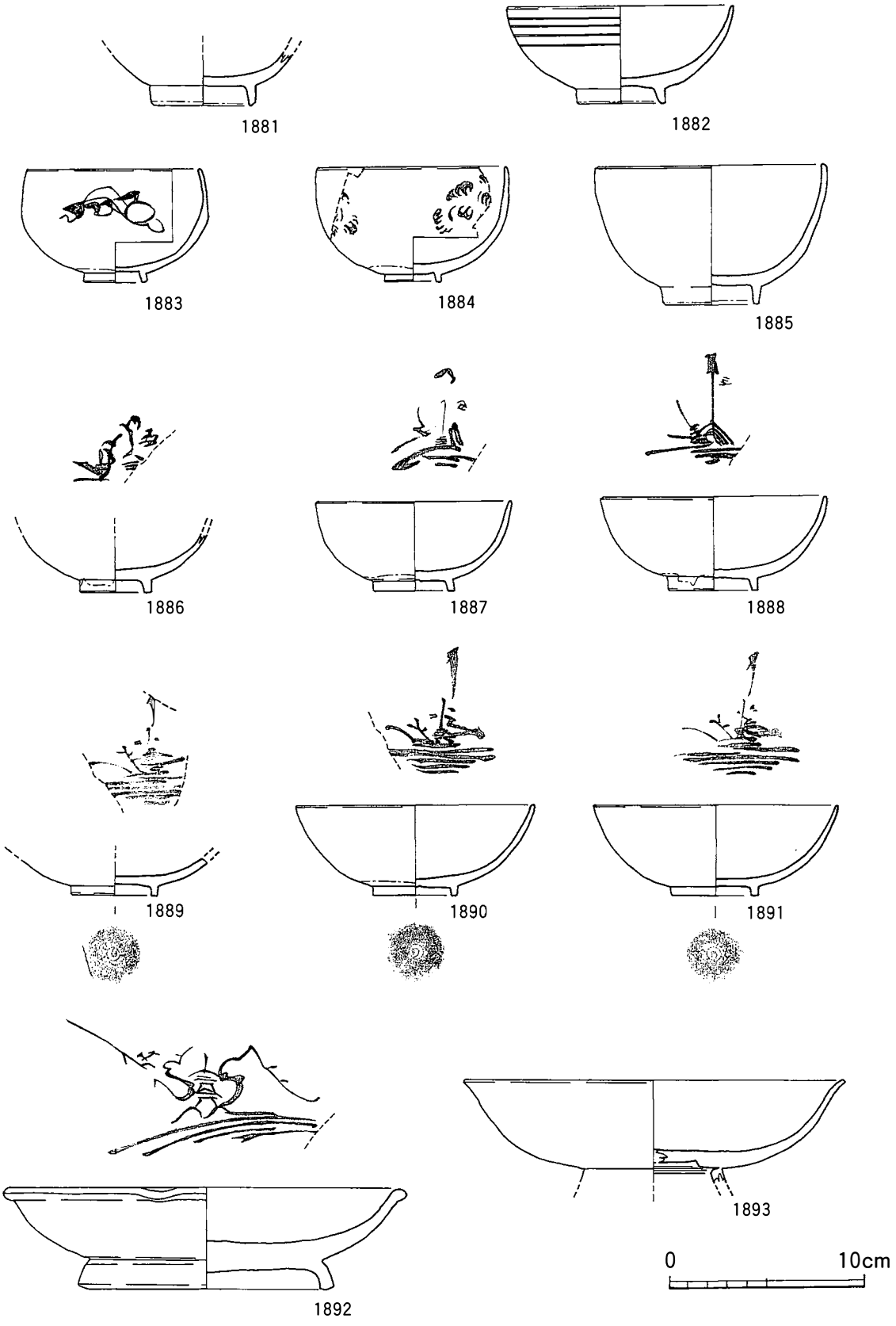


第306図　近世陶器実測図

器高14.6cm を測る。内器面には回転横ナデ後櫛描の擂目が施される。外底面には回転糸切リ痕が残る。1845は九州内産の擂鉢で、17世紀中期～後期製作のものである。Ｘ－２区ｇ－42グリッドの撹乱からの出土品である。口径が33.8cm、器高が13.7cm を測る。内器面には回転横ナデ後櫛描擂目が施される。外底面には回転糸切りを施される。1847は、肥前系擂鉢で18世紀中期～後期に製作されたものである。Ｘ－２区から出土している。口径は34.6cm、器高は12.3cm を測る。内器面には回転横ナデ後櫛描擂目が施される。外底面には回転糸切り痕が残る。1849は、生産地不明の擂鉢で、製作時期は18世紀中期～後期とされる。Ｘ－２区から出土している。口径は37.6cm、器高は17.15cm を測る。内器面には回転横ナデ後、櫛描擂目後施釉が施される。外底面に回転糸切り離し痕が残る。

1851は肥前系の甕で、17世紀後半の製作である。Ｘ－２区ｆ－42,43グリッドのL01層である。口径は32.2cm、復元器高は25.3cm を測る。内器面には当て具痕が残り、外器面には格子タタキ痕が残る。1853は、肥前二川焼か弓野窯（福岡）産の甕である。19世紀に製作された物である。Ｘ－２区ｇ－42グリッドの撹乱層から出土した。復元口径が26.0cm を測る。1854は九州内産の甕である。Ｘ－２区ｆ－43,ｇ－43グリッド、L03層から出土している。口径は33.0cm、復元器高は21.6cm を測る。1861は、肥前唐津系の二彩瓶である。1650年以降の製作である。Ｘ－２区ｇ－43グリッド、L03層出土である。内器面は、ナデ後（口縁付近～胴部）化粧土でハケ目で横線・波状文後雑に施釉（胴部～底部付近）化粧土である。高台はナデ後施釉、釉剥ぎとり。1862は産地不明の瓶で17世紀末～18世紀前期の生産である。Ｘ－２区のL05層出土である。外器面にはナデ後化粧土が施される。頸部～肩部にかけては白化粧土をかけた後に雑な鉄釉を施している。畳付のみ無釉で、板目痕が残る。

1863は肥前系の瓶で、17世紀末～18前中期の製作である。Ｘ－２区ｆ－43,ｇ－43グリッドのL03層出土である。口径5.1cm、器高21.2cm を測る。口縁に鉄釉、内器面の口縁部～頸部に鉄釉他、白化粧土で横線ハケ目が施され、外底面にはナデ後化粧土畳付釉剥ぎされ、砂目痕が残る。1864は産地不明の陶胎染付の瓶で



第307図　近世磁器実測図

ある。Ｘ－２区 g－43グリッドの L03層から出土した。

1865は肥前系か肥後天草系の徳利である。18世紀～19世紀の製作である。Ｘ－２区 g－43グリッドの L03層から出土した。

1869～1871はいずれも肥前系の火入れである。1869は17世紀末～18世紀前期に生産されたもので、Ｘ－２区 g－43グリッド、L05層から出土した。1870は陶胎染付のもので、17世紀後半～18世紀前半に製作されたものである。Ｘ－２区 g－43グリッド L03層からの出土である。1871は1655年～1690年に生産されたもので、Ｘ－２区 g－43グリッドから出土した。

1874は肥後産と思われる水指の破片である。口縁部から胴部の一部が残る。Ｘ－２区 f－42グリッドから出土している。1875は肥後天草系窯生産の水注である。製作時期は18世紀後期～19世紀とされる。Ｘ－２区 g－43グリッド L01層中から出土した。

1881～1888、1890、1893は京焼風陶器である。器種は碗（1881～1888・1890）と鉢（1893）である。1881は製作時期が17世紀末～18世紀前期とされる。Ｘ－２区 g－23グリッド、L05層から出土している。1882は、17世紀後期～18世紀前期に製作されたものである。Ｘ－２区から出土している。復元口径は11.3cm、器高は4.8cm を測る。1883は関西系のもので、18世紀前半の生産である。Ｘ－２区 g－42グリッドの撹乱及び整地①層から出土した。復元口径は8.7cm、器高は5.7cm を測る。体部に文様が描かれる。1884も関西系のもので製作時期は18世紀前半である。Ｘ－２区からの出土である。復元口径は9.5cm、器高は5.7cm を測る。体部に花文が描かれる。

1885は肥前系と考えられるもので、製作時期は17世紀末～18世紀前半である。Ｘ－２区 g－43グリッド、L05層から出土した。復元口径は11.3cm、器高は6.9cm を測る。無紋である。

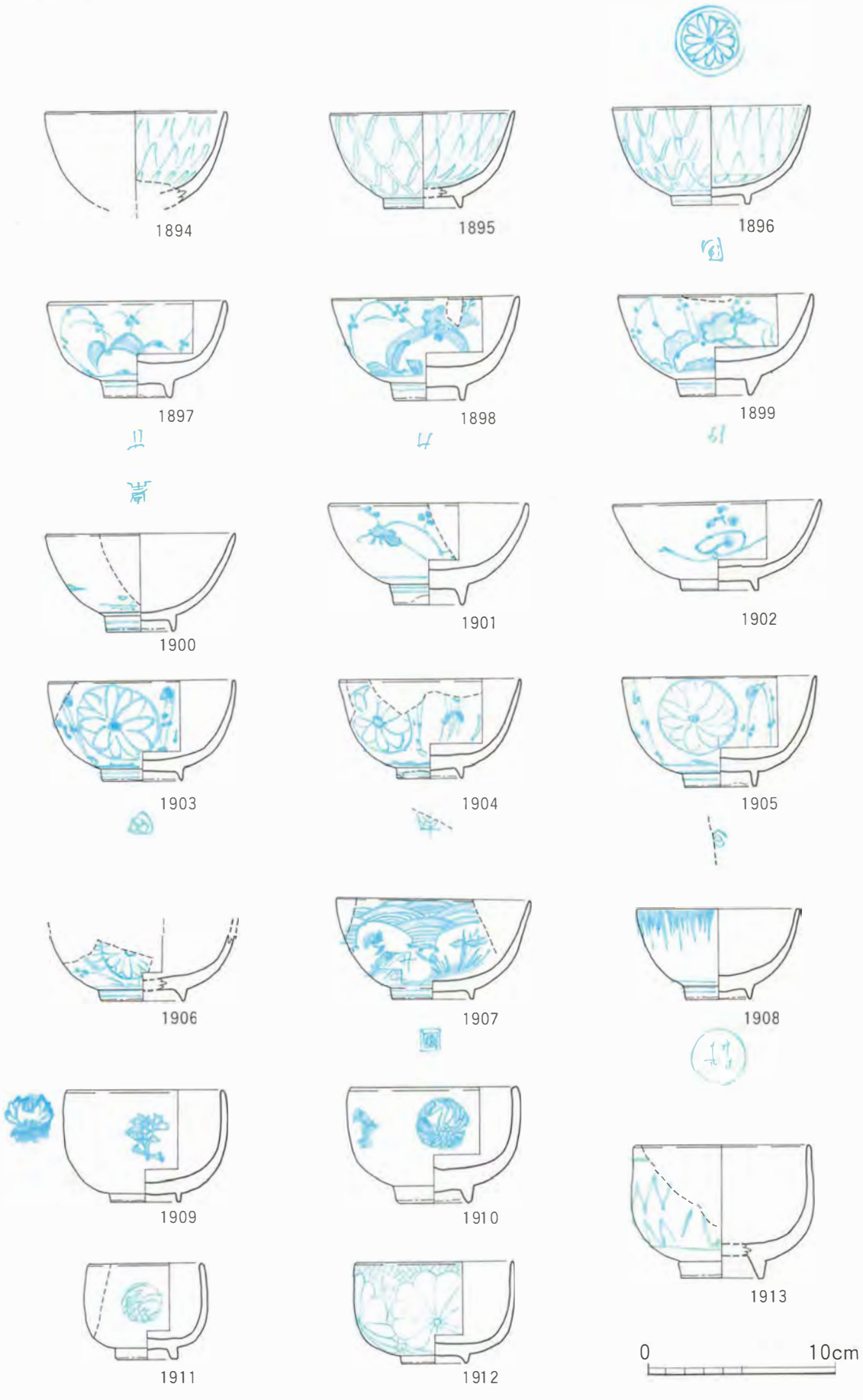
1886～1888・1890は肥前系の器高の低い碗で、見込に崩れた山水文を共通して持つものである。1886は、生産時期が17世紀後～18世紀前半である。Ｘ－２区 g－43グリッド L03層から出土した。1887は、生産時期が17世紀後期～18世紀前期である。Ｘ－２区 g－43グリッド L03層から出土した。口径は9.8cm、器高は4.5cm を測る。1888は生産時期が17世紀後期～18世紀前期である。Ｘ－２区 g－43グリッドの出土である。復元口径は11.1cm、器高は4.6cm を測る。1890は生産時期が17世紀後期～18世紀前期である。Ｘ－２区 g－43グリッドから出土した。復元口径は12.0cm、器高は4.5cm を測る。見込には崩れた山水文が描かれている。

1893は肥前志田窯の鉢で、生産時期は17世紀後期～18世紀前期である。Ｘ－２区 g－34グリッド、L03層から出土した。復元口径は19.2cm を測る。貼付け高台で高台は高い。

・磁器【第308図～第315図】

1894・1895・1897～1906・1914・1922・1927・1930・1933・1934は肥前系を主とする染付の中碗である。

1894は肥前系染付の中碗である。製作時期は18世紀前期～中期である。Ｘ－２区 g－43グリッド、L03層から出土した。内器面に一条の線による網目文が描かれる。1895は肥前系染付の中碗である。製作時期は18世紀前期～中期である。Ｘ－２区から出土した。復元口径は9.7cm、器高5.0cm を測る。内器面は一条の編み目文、外器面には２条の網目文が描かれる。1897の生産時期は18世紀中期～後期である。Ｘ－２区 f－42グリッドの整地層の①層で出土する。復元口径が9.2cm、器高が5.0cm を測る。外器面には梅花文が描かれる。1898の生産時期は18世紀中期～後期で、Ｘ－２区 g－43グリッド、L03層から出土した。口径が9.9cm、器高が5.3cm を測る。外器面には梅花文が描かれる。1899の生産時期は18世紀中期～後期である。Ｘ－２区 g－42グリッドの撹乱から出土している。復元口径は10.1cm、器高は5.2cm を測る。外器面に形の整った梅花文が描かれる。1900の生産時期は1780年頃である。Ｘ－２区 f－42グリッドの壁際①層で出土している。復元口径は9.7cm、器高が5.1cm を測る。1901の生産時期は18世紀中期～後期である。Ｘ－２区の側溝



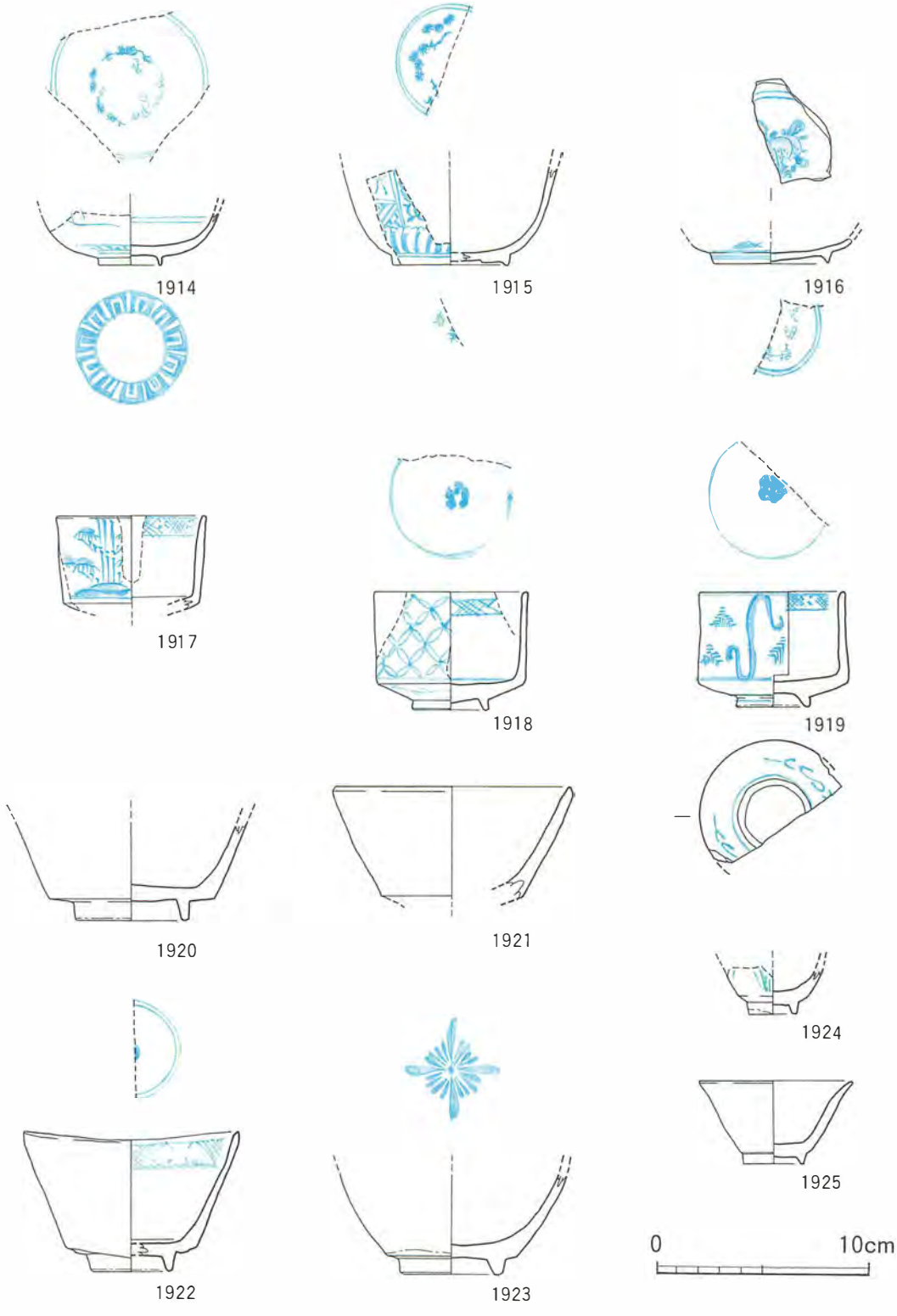
第308図　近世磁器実測図

から出土した。復元口径は10.4cm、器高が5.3cmを測る。外器面には梅花文が描かれる。1902の生産時期は18世紀中期～後期である。Ｘ－２区f－42・43グリッドから出土した。口径が10.7cm、器高が4.5cmを測る。外器面に植物文らしきものが描かれる。見込に蛇の目釉剥ぎがある。1903は、生産時期が18世紀中期～後期である。Ｘ－２区f－42グリッドの整地①層から出土した。復元口径が9.7cm、器高が5.2cmを測る。外器面には植物と圏線内に菊花文が描かれる。1904は1903とほぼ同じ物である。Ｘ－２区g－43グリッドから出土している。復元口径は9.6cm、器高が5.1cmを測る。1905も同様である。Ｘ－２区g－43グリッド、L03層から出土した。復元口径が10.3cm、器高が5.7cmを測り、1903・1904よりやや大きく、高台がより高い。1906は破片であるが先の物と同様である。Ｘ－２区から出土している。器形的には1903・1904とほぼ同じである。1914は底部片である。染付赤絵である。生産時期は18世紀中期～後期である。Ｘ－２区g－42グリッド、整地①層からの出土である。底部周囲には日足文が巡る。内器面見込に松竹梅を環状に描く文様を入れる。1922は筒形碗である。生産時期は18世紀後期である。Ｘ－２区g－43グリッドから出土している。口径が9.9cm、器高が6.6cmを測る。1927は生産時期が18世紀中期～後期である。Ｘ－２区g－42グリッド、L01層から出土した。口径が9.9cm、器高が5.1cmを測る。外器面には円圏内に鶴文が描かれる。1930は生産時期が1780年頃である。Ｘ－２区f－42グリッド、整地①層から出土した。復元口径が10.8cm、器高が5.6cmを測る。外器面には唐草文と龍文らしきものが描かれている。1933は、中碗ながら端反碗である。生産時期は19世紀～明治時代である。Ｘ－２区出土である。口径は10.5cm、器高が6.2cmである。1934も端反碗でより体部下位が張っている。産地は不明である。生産時期は19世紀代である。Ｘ－２区g－43グリッドL01層から出土した。復元口径は11.3cm、器高が6.3cmを測る。外器面に竹文らしきものが描かれる。

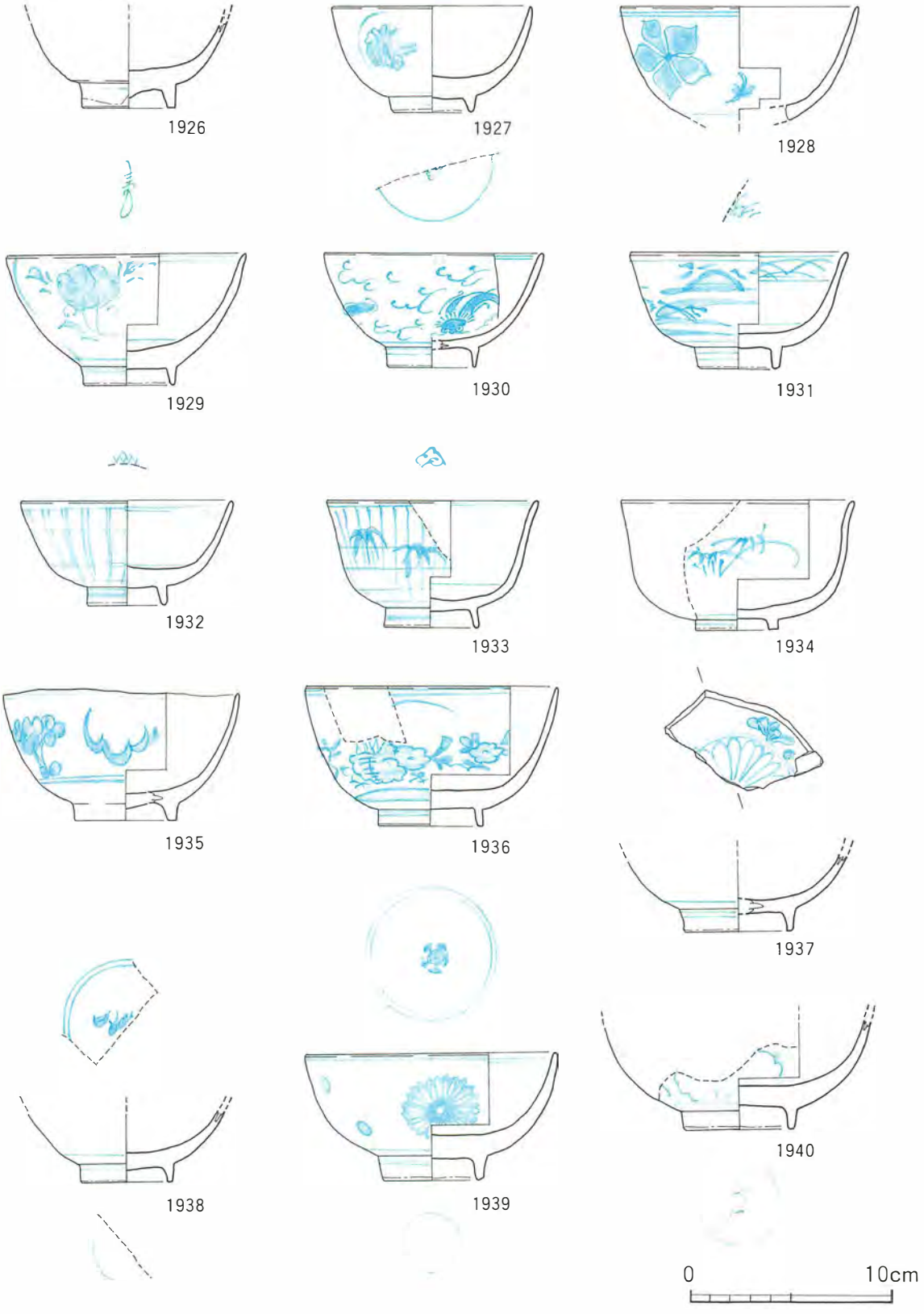
1909～1913・1917～1919は小碗でほぼ肥前系である。1909～1913は小丸碗である。1909は生産時期が18世紀中期～後期である。Ｘ－２区の出土である。復元口径が8.1cm、器高が5.8cmを測る。1910も同様の器形で18世紀中期～後期の生産である。Ｘ－２区g－43グリッドの撹乱から出土している。復元口径が8.7cm、器高が6.0cmを測る。これらの外器面には鶴文や竹文らしきものが描かれる。1911はより小型のもので生産時期は幕末頃である。Ｘ－２区の撹乱から出土している。復元口径が5.7cm、器高が5.0cmを測る。外器面には崩れた鶴文が描かれる。1912は生産時期が1780年～1810年である。Ｘ－２区g－42グリッドの撹乱からの出土である。復元口径が8.3cm、器高が5.3cmを測る。外器面には線文に菊花文が描かれる。1913は破片で生産時期は1630年～1650年である。口縁部がやや反り気味である。外器面には網目文が描かれる。Ｘ－２区g－43グリッド、L05層から出土した。復元口径が9.0cm、器高が6.2cmを測る。1917は筒形碗である。生産時期は1780年～1810年である。Ｘ－２区g－42グリッドの撹乱出土である。復元口径が6.9cmを測る。外器面には竹文が描かれている。1918も筒形碗で、生産時期は1780年～1810年である。Ｘ－２区g－42グリッドの撹乱から出土した。復元口径が7.2cm、器高が5.5cmを測る。外器面には七宝文が、内器面口縁には簡略化した四方襷文が描かれる。見込にはコンニャク印判がみられる。1919も筒形碗であるが、器形はやや異なり口径がすぼまる。生産時期は1780年～1810年である。Ｘ－２区f－42グリッドの整地①層出土である。口径は6.8cm、器高が5.4cmを測る。外器面には植物文、内器面口縁付近に四方襷文が描かれる。

1924・1925は小坏である。1924は外器面に文様が描かれる染付のものである。肥前系のもので、生産時期は17世紀中期である。Ｘ－２区g－43グリッドで出土した。文様は不明である。1925は白磁のもので生産時期は17世紀中期～後期である。Ｘ－２区f－43グリッド、L03層から出土した。口径が7.1cm、器高が4.9cmを測る。口縁部がやや外反する。

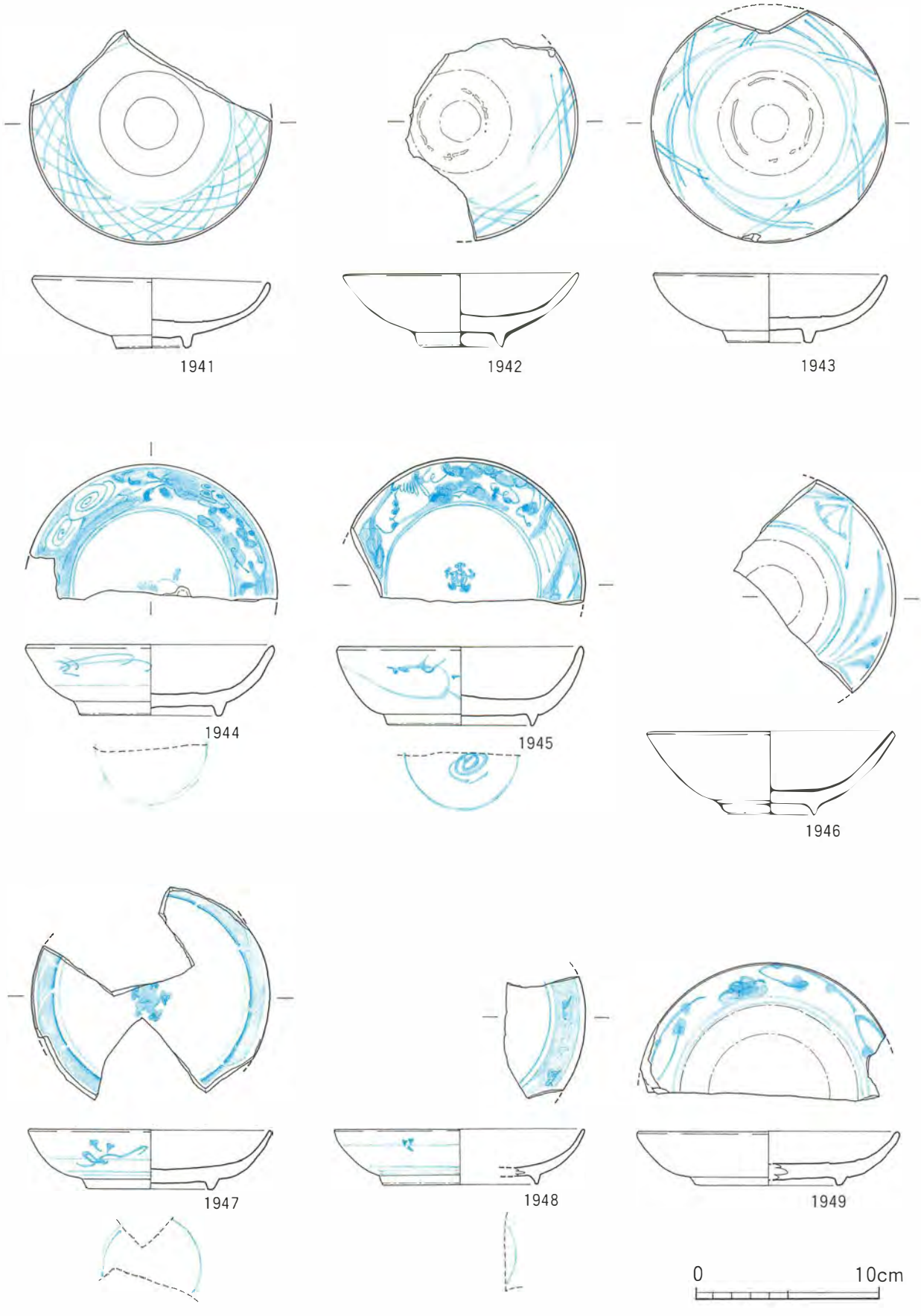
1936・1939・1940は大碗である。いずれも肥前系である。1936は生産時期が17世紀後半ころである。Ｘ－２区g－43グリッドで出土している。復元口径が12.4cm、器高が6.8cmを測る。外器面には牡丹の様な花文が描かれている。1939は染付で、見込みにコンニャク印判の五弁花文がみえる。外器面には菊花文が描か



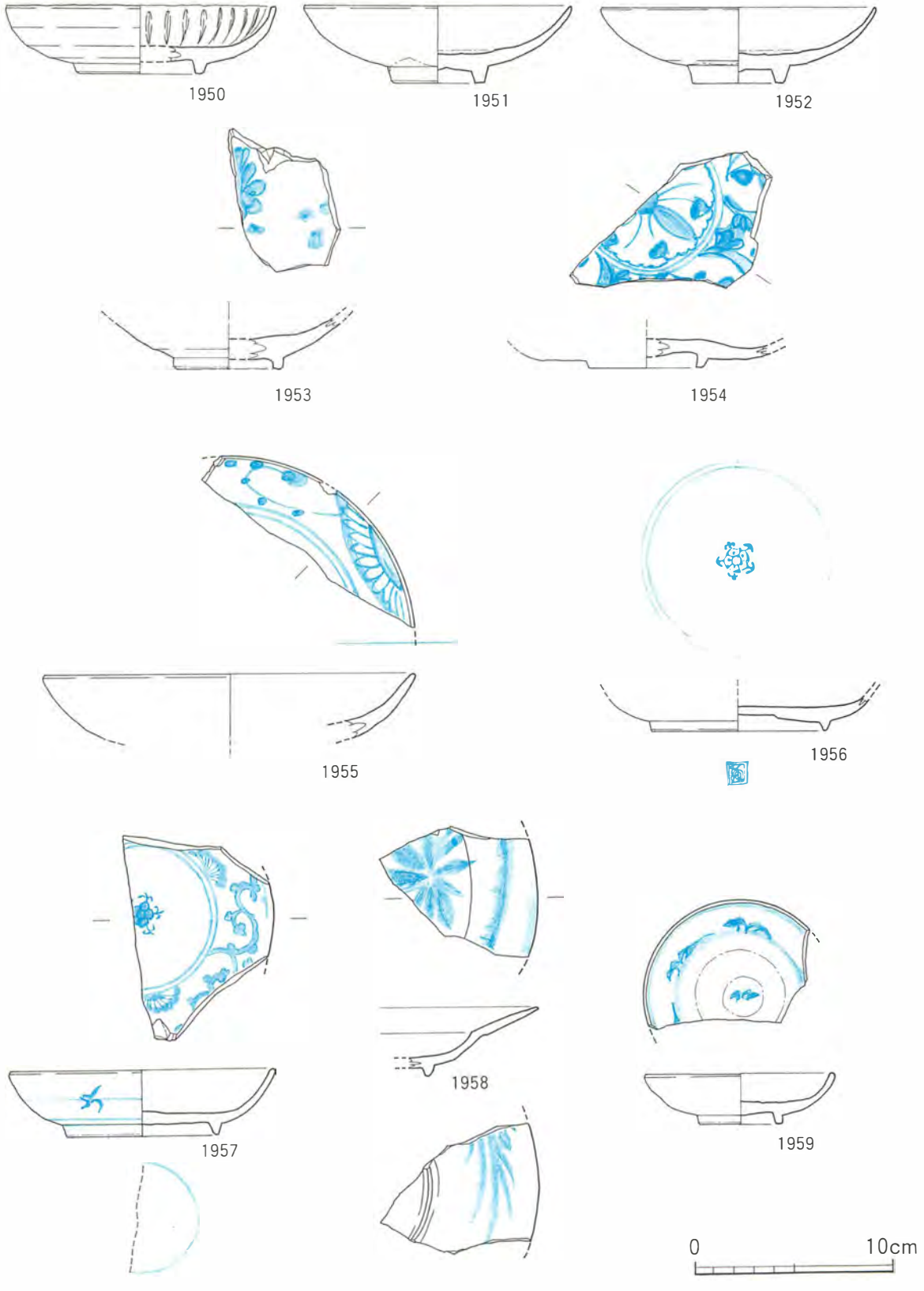
第309図　近世磁器実測図



第310図　近世磁器実測図



第311図　近世磁器実測図



第312図　近世磁器実測図

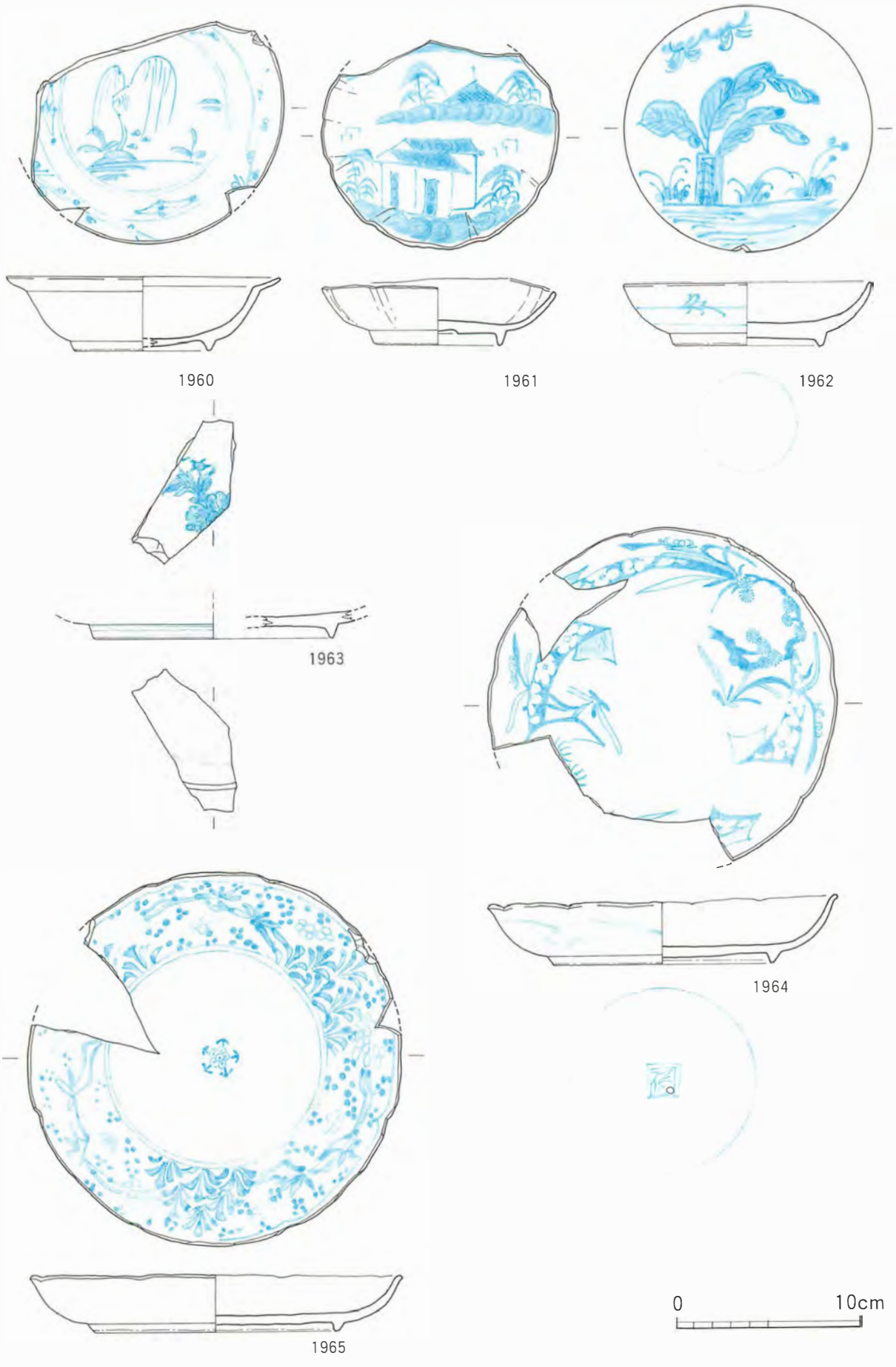
れる。生産時期は1680年～1770年である。Ｘ－２区 g－43グリッド、L01層からの出土である。口径は12.4cm、器高が6.2cm を測る。1940は体部下位から底部の残る破片で、高台内に文字を文様化した線が引かれる。外器面には花文の一部がみえる。生産時期は18世紀中期～後期である。Ｘ－２区 g－42・43グリッド、整地①層から出土した。

1941～1947・1961は肥前系の小皿である。1941～1943は同じ18世紀中期～後期の肥前系染付小皿である。いずれも見込に蛇の目釉剥ぎがある。高台径が4cm 前後で狭い。1941はＸ－２区 g－43グリッド、L03層出土で、口径が12.5cm、器高が3.8cm を測る。口縁部に斜格子文が入る。1942はＸ－２区表土中で出土した。復元口径12.7cm、器高が3.9cm を測る。見込は蛇の目釉剥ぎで、そこに重ね焼き時の釉着部がみえる。口縁部に二重斜格子文が描かれる。1943も同様で、Ｘ－２区 f－42グリッド、L01層で出土した。口径が12.3cm、器高が3.7cm を測る。口縁部に、二重斜格子文が描かれる。1961は肥前系の型打成形の染付小皿である。生産時期は1820年～1860年である。Ｘ－２区で出土した。口径が12.5cm、器高が3.0cm を測る。蛇の目凹型高台で畳付は無釉である。1944・1945は高台径が7.5cm 前後である。1944は肥前系染付の小皿で17世紀末～18世紀前の生産時期である。Ｘ－２区で出土した。復元口径が13.1cm、器高が4.8cm を測る。口縁内部に雲気唐草文、口縁外部に草葉文が描かれる。見込にはコンニャク印判が一部見られる。1945は肥前系染付の小皿で、生産時期は1750年～1810年である。Ｘ－２区 g－42・43グリッドの整地①層から出土した。復元口径は13.1cm、器高は4.2cm を測る。口縁内部に唐草文が、口縁外部に草文が描かれる。見込には五弁花のコンニャク印判が見られる。高台内には崩れた渦福が描かれる。1946は肥前系染付の小皿である。生産時期は18世紀後期～19世紀前期である。Ｘ－２区の整地①層で出土した。復元口径は13.2cm、器高が4.4cm である。高台径は1944などより狭い。見込には蛇の目釉剥ぎを見ていた。1947は肥前系の染付の小皿である。生産時期は17世紀後期～18世紀前期である。Ｘ－２区 g－43グリッド、L03層から出土した。復元口径は12.8cm、器高は3.2cm である。見込にコンニャク印判。外器面口縁部には草文が描かれる。1961は肥前系の染付小皿である。生産時期は1820年～1860年である。Ｘ－２区から出土した。口径が12.5cm、器高が3.0cm を測る。型打成形によるもので、10弁状になる。内器面には山水画を模倣した画が描かれる。外底面は蛇の目凹型高台を有し、畳付は無釉である。

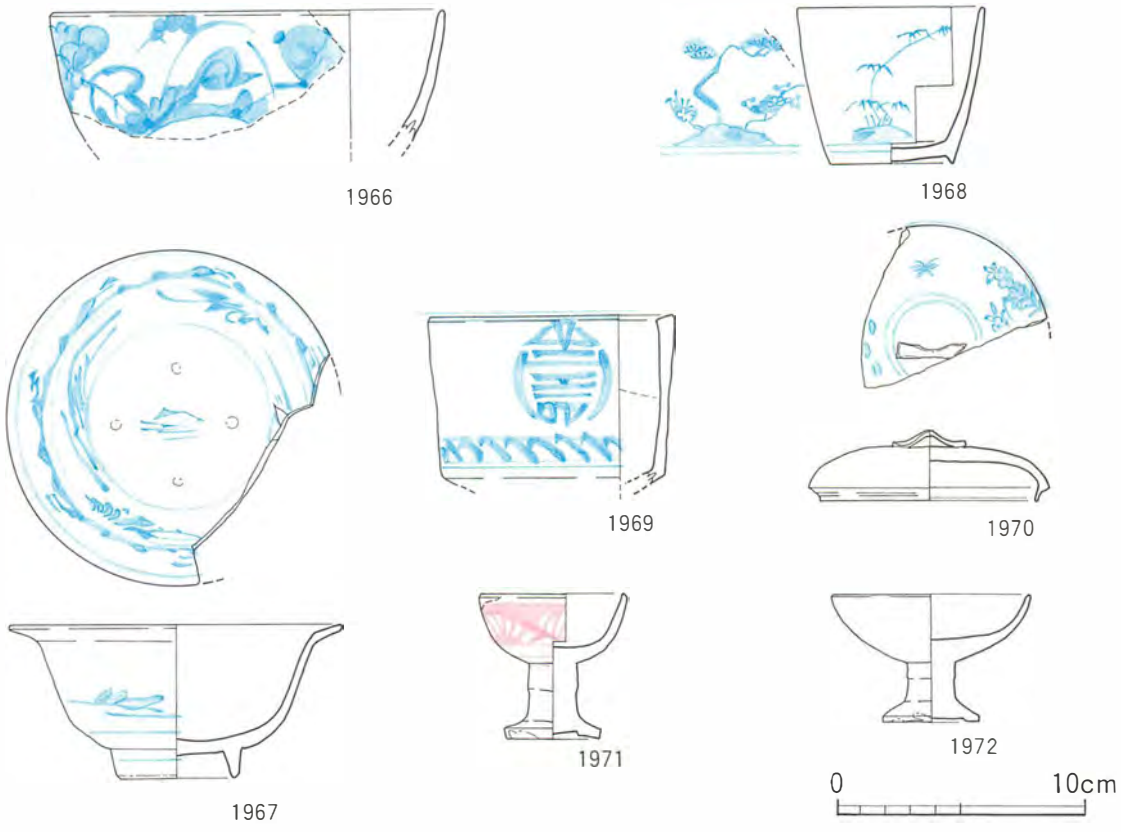
1948・1949・1956は肥前系の五寸皿である。1948は、生産時期が17世紀後期～18世紀前期である。Ｘ－２区 f－43グリッドから出土している。復元口径は13.6cm、器高が3.0cm を測る。1949は同じく肥前系の五寸皿である。生産時期は1750年～1810年である。Ｘ－２区の表土からの出土である。復元口径は13.8cm、器高は2.9cm を測る。口縁内部に草花がえがかれている。1956は肥前系の染付で五寸皿である。生産時期は18世紀後期である。Ｘ－２区 b－43グリッド、L03層で出土した。口径8.7cm を測る。見込にコンニャク印判が残る。1963は肥前有田長吉谷窯の大皿で、染付製品である。生産時期は1660年～1680年である。見込には草葉文が描かれる。

1958は肥後天草焼の中皿である。生産時期は18世紀末～19世紀である。Ｘ－２区 g－43グリッドの撹乱から出土した。口縁部の広い折縁皿である。見込には草花らしきものが描かれる。外器面体部にも線状の文様が入る。

1964・1965は肥前系染付けの中皿である。1964は生産時期が1680年～1710年である。Ｘ－２区 g－43グリッド、L05層、L03層から出土した。口径が18.5cm、器高が3.3cm を測る。型打成形で波状口縁を作成している。内器面には草花を文様状に描く。高台内には一重圏内に角「渦福」銘が入る。1965は肥前系染付の中皿である。生産時期を1680年～1710年とする。Ｘ－２区 f－42グリッド、整地①層から出土した。口径は19.8cm、器高は3.1cm である。口縁内部の縁には草、食物が描かれる。見込には五弁花のコンニャク印判がある。



第313図　近世磁器実測図



第314図　近世磁器実測図

その他の器形として中鉢（1966）、鉢（1967）、猪口（1968）、火入（1969）、合子（1970）、仏飯器（1971・1972）、油壺（1975・1976）、徳利（1977）などがある。

1966は、生産時期が18世紀前期の中鉢で、X－2区g－43グリッドで出土した。口径は15.7cmを測る。外器面には花弁文が描かれる。

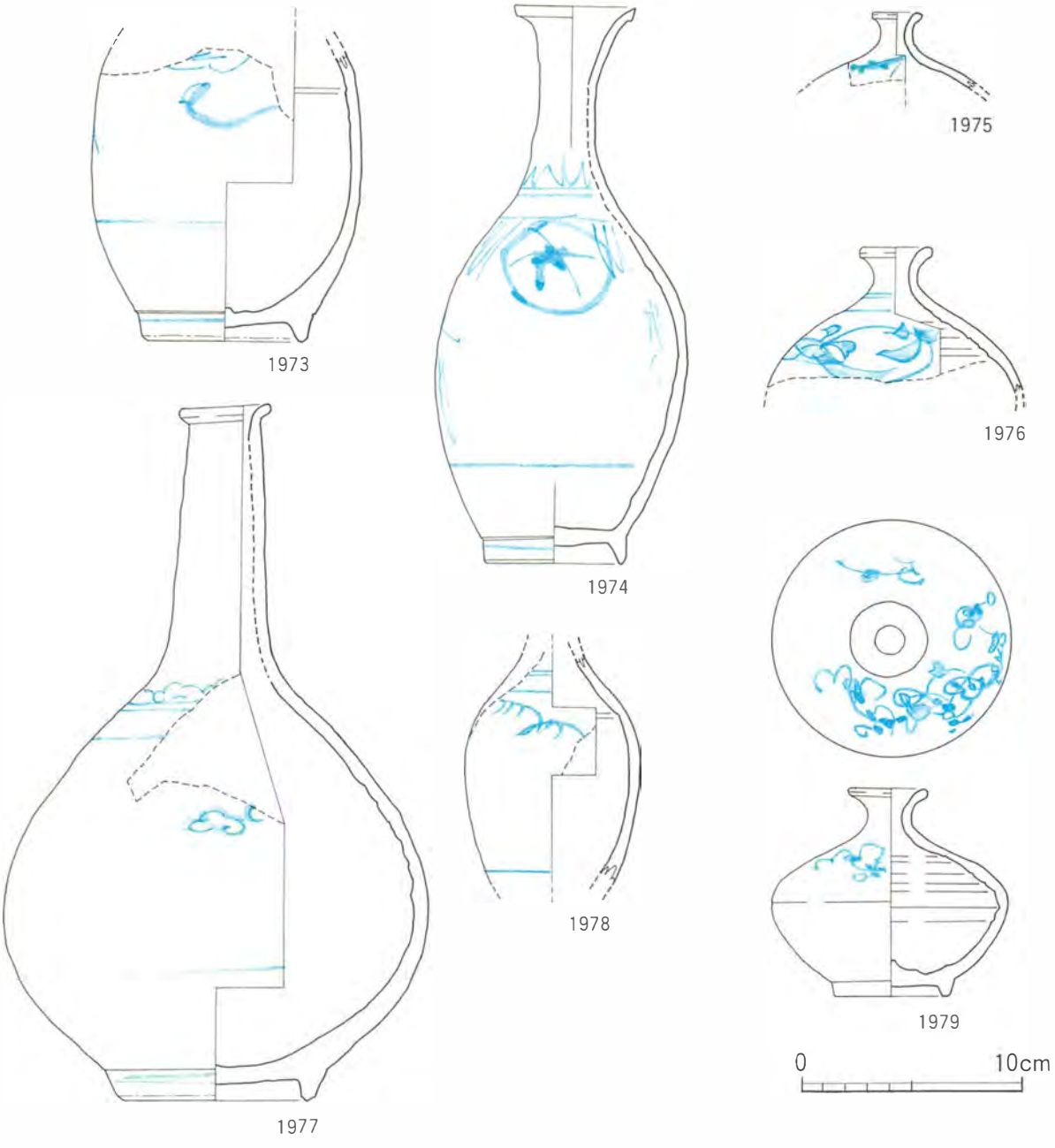
1967は、折縁口縁の鉢で、生産時期は幕末ごろともみられる。X－2区g－42・43グリッド、整地①層出土である。口径が13.1cm、器高が6.1cmを測る。内器面口縁部に渦巻く草葉文が回り、見込に崩れた山文が描かれている。また見込にハリ痕がある。外器面体部には草文を描く。

1968の猪口は、やや内傾気味の口縁を持つ。生産時期は18世紀中
地層の出土である。口径が7.4cm、器高が6.1cmを持つ。外器面には松文と竹文が描かれている。

1969は筒形を呈する火入で、全体像は破片のため不明である。生産時期は18世紀後期である。X－2区f－43グリッド、L03層から出土している。復元口径は9.8cmを測る。外器面には「壽」字や列斜線が描かれる。

1970は肥前系染付鉢蓋である。頂部には熨斗形の紐を貼り付けている。文様は外器面に植物文が描かれる。生産時期は18世紀後期～19世紀前期である。X－2区f－42グリッドの撹乱から出土している。復元口径は8.6cm、器高が2.8cmを測る。

1971・1972は仏飯器である。1971は肥前系赤絵のもので、生産時期は18世紀後期～19世紀中期である。X－2区から出土している。復元口径は5.6cm、器高が5.7cmを測る。外器面に草花文が描かれる。1972は肥前系白磁の仏飯器である。生産時期は18世紀後期～19世紀中期である。X－2区g－43グリッド、L03層から出土した。復元口径7.8cm、器高5.0cmを測る。



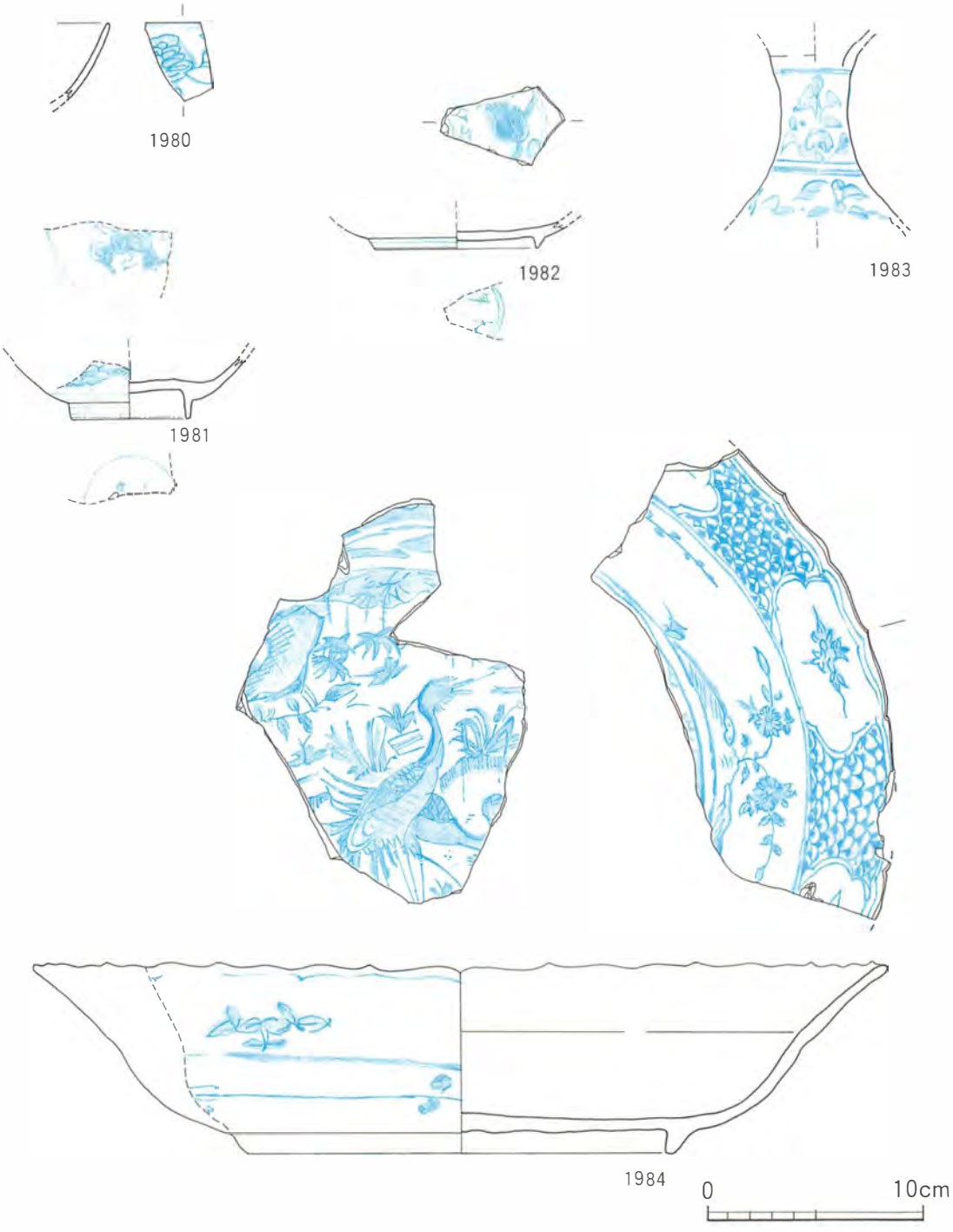
第315図　近世磁器実測図

1975・1976・1979は肥前系染付の油壺である。1975は生産時期
ッドの撹乱層から出土している。口径が2.2cm を測る。1976は生産時期が17世紀後期～18世紀前期で、X－２区ｇ－43グリッドのL03層から出土した。口径が3.0cm を測る。外器面体部に草葉文が描かれる。

1977は肥前系染付徳利である。生産時期は18世紀後期～19世紀前期であるX－２区ｆ－43・ｇ－43グリッドL03層から出土している。口径が3.7cm、器高が30.7cm を測る。底部は削り出し高台がある。体部には圏線と花弁文らしきものが描かれる。

・輸入磁器【第316図・第317図】

ここで輸入磁器としたものは、今回報告書で取り上げた調査Ⅶ区・Ⅷ区・X区から出土した古代から中世にかけての遺物である。十分に吟味していないところもあり、挿図作成時期には輸入品としていたものが、再度確認していく際に国内品と判明したものもあった。しかし、すでに図の修正が不可能であったため、そ

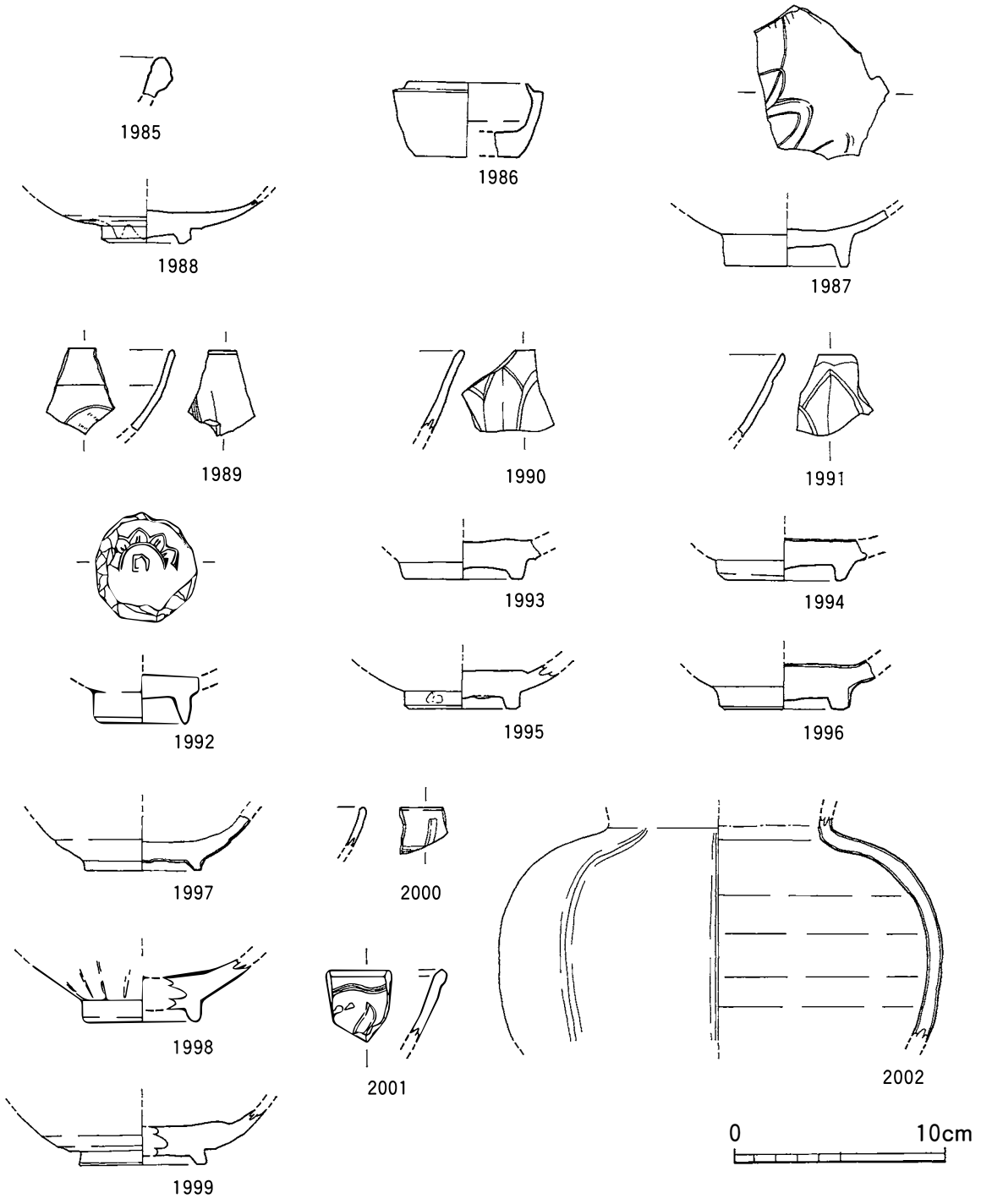


第316図　輸入陶磁器実測図

のままここに掲載したものもあることを断っておく。

1980はb－43グリッドL01層の出土で、景徳鎮系の染付碗である。生産時期は16世紀後半である。Ⅰ期に当たる。Ⅹ－2区b－43グリッドL01層中から出土した。1981は6SX506出土の景徳鎮系の染付碗で、生産時期は16世紀後半である。小野分類碗E群饅頭心型にあたる。見込みに草花文が描かれ、体部外器面には植物が描かれている。高台内銘は不明である。1982は6SX504出土の景徳鎮系の染付皿である。生産時期は16世紀後半である。小野分類皿B群またはE群にあたる。銘は、大明年造か。底面見込みには風景が描かれる。1983は調査Ⅷ区から出土した、中国産もしくは東南アジア系の染付瓶である。生産時期は、16世紀末～17世紀代であろう。文様は不明である。残存しているのは頸部のみである。

1984は6SX504の底部付近から出土した福建漳洲窯系の染付けの大皿で、いわゆる「芙蓉手」とよばれる



第317図　輸入陶磁器実測図

ものである。生産時期は16世紀末である。いくつかの破片に分かれていたが、ほぼ一個体の破片と考えている。器形は稜花皿で、不足部分が多く、全体の文様はつかめなかった。見込みの中心部には葦草と思われる草の中に水鳥が２羽描かれている。内区に草花が、外区には波文の間の窓に花菱文が描かれる。高台内には釉がかけられていない。この類似品は堺環濠都市遺跡でも出土している。

1985～2002は、各調査区で出土した白磁や青磁などの小破片を集めたものである。

1985は中国系の白磁碗で、口縁部のみで玉縁口縁である。生産時期は11世紀後期～12世紀で、Ⅳ期に当たる。Ｘ－１区ｈ－38グリッド、Ⅲ層から出土している。1986は中国系の白磁合子である。生産時期は12世紀代である。調査Ｘ－２区ｆ－43グリッド、L03層から出土した。口縁部は釉かきとりである。1987は中国系

白磁碗である。生産時期は11世紀後半～12世紀後半である。Ⅴ類に当たる。Ⅷ区b－34グリッド、4176である。内器面には櫛描による文様が描かれる。

1988は白磁の皿もしくは坏である。森田編年のD群に当たる。Ⅶ区X－27グリッド、Va層からの出土である。底部片で底径が3.5cmを測る。削り出し高台である。1989は同安窯系青磁碗であろうか。生産時期は12世紀中期～後期である。Ⅰ期に当たる。X－1区からの出土である。調整としてナデ後細かい縦方向の櫛目文が描かれた後施釉される。1990は龍泉窯系青磁碗である。生産時期は13中期～14世紀初である。大宰府編年のⅢb期に当たる。X－2区g－43グリッドL01層から出土した。箆描き蓮弁文が描かれた後施釉される。

1991は龍泉窯系青磁碗である。生産時期は13世紀中期～14世紀初で、大宰府編年のⅡb期に当たる。X－2区g－43グリッドから出土した。外器面には箆描蓮弁文後施釉される。1993は龍泉窯系青磁碗である。生産時期は13世紀前～後半で、大宰府編年のⅠ類もしくはⅡ類に当たる。Ⅷ区c－30グリッド、2271で出土している。1994は龍泉窯系の青磁碗である。生産時期は13世紀中期～14世紀初期で、大宰府編年のⅠ類もしくはⅡ類に当たる。X－1区の表採品である。

1995は龍泉窯系の青磁碗で、大宰府編年のⅠ類もしくはⅣ類に当たる。Ⅶ区X－28グリッドのVc層の出土である。1996は、龍泉窯系の青磁碗である。生産時期は12世紀前期である。X－2区のL05層出土である。

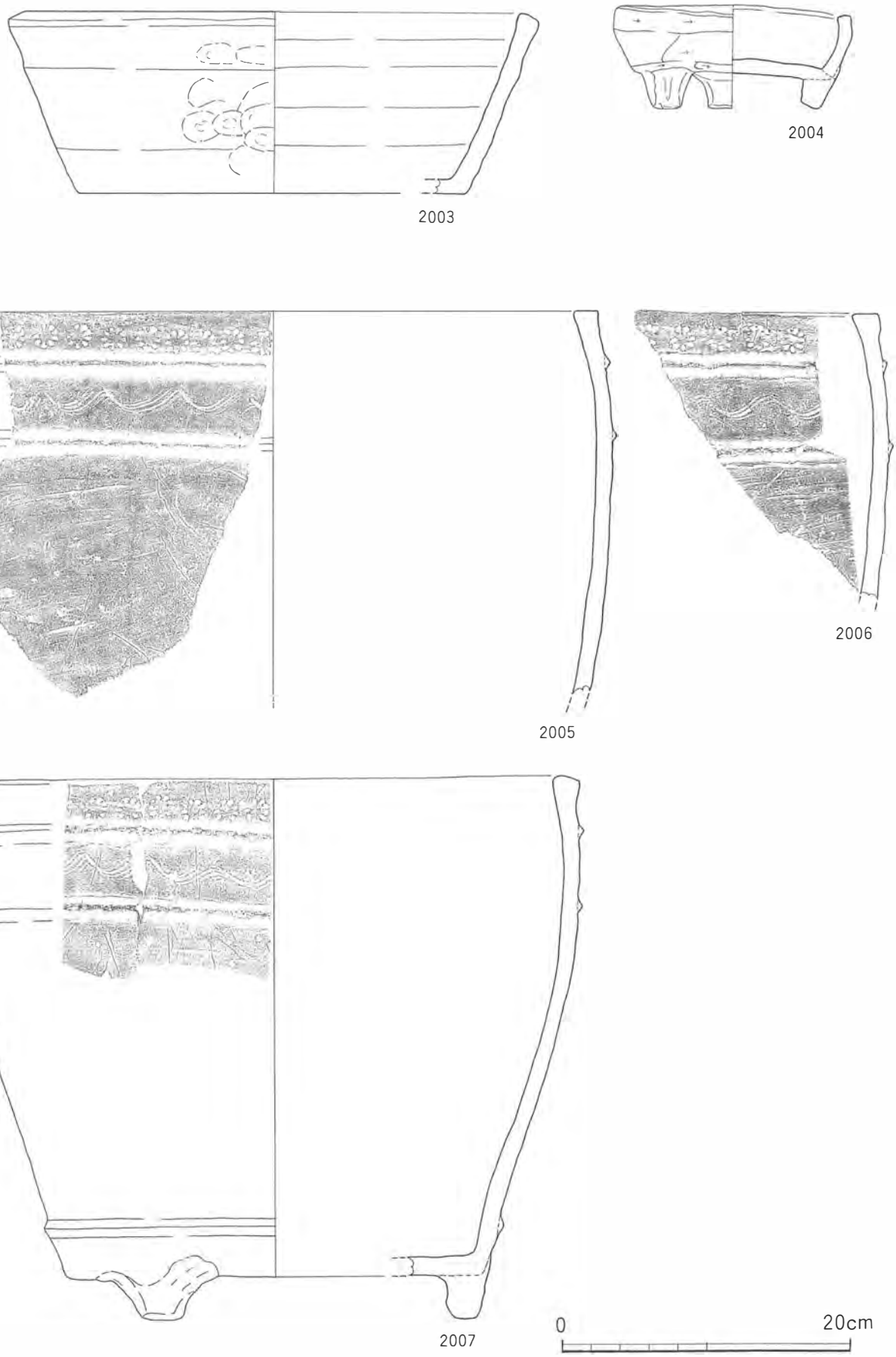
1998は龍泉窯系青磁碗である。Ⅶ区Z－26グリッドのVa層の出土である。外器面には片刀蓮弁が施される。削り出し高台は無釉である。1999は龍泉窯系青磁碗で、大宰府編年のⅠ類もしくはⅣ類に当たる。Ⅶ区の側溝から出土し、層位は不明である。2000は龍泉窯系青磁碗であろう。上田編年のCⅡ類に当たる。Ⅶ区V－25グリッドのVc層上層から出土した。2001は青磁碗である。Ⅶ区Z－27グリッドのⅣ層から出土した。

1997は国内産の青磁瓶である。X－2区g－43グリッドのL03層から出土した。畳み付きは釉剥ぎとりがなされる。

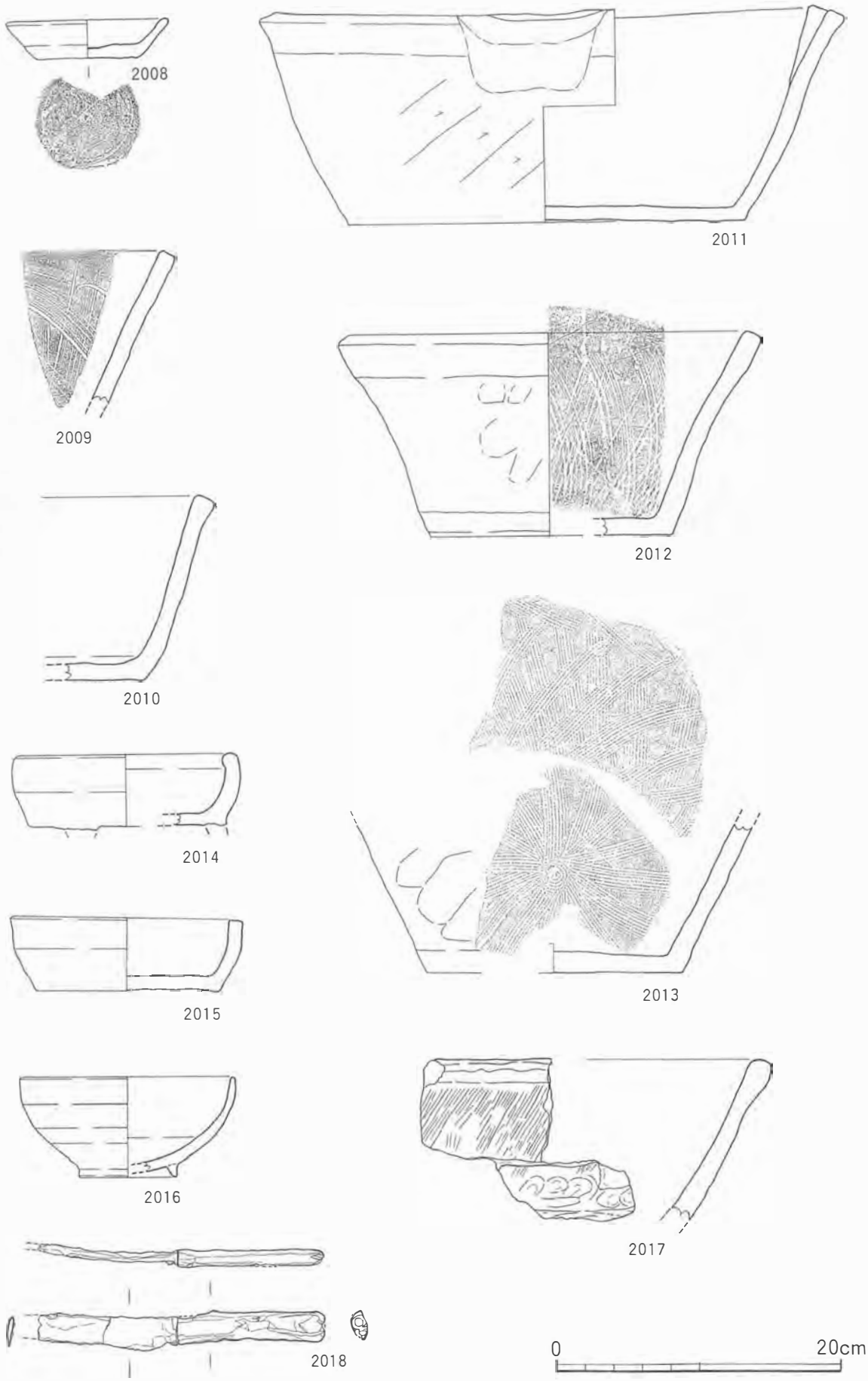
この他に、越州窯青磁など古代のものがあった。他に掲載し忘れていたものとして以下のものがある。Ⅶ区Z－27グリッド、Ⅳ・Vb層出土のもので、大宰府分類では碗Ⅱ－2類に当たる。内器面は、釉にムラがあり、あまり良くなく剥げる。胎土は粗く、胎土中に黒色の斑点を含む。重ね焼きの目跡が僅かに見える。外器面は無釉である。外底面は無釉でヘラナデ調整される。やや上底気味。径で細分が可能であろうか。次にⅧ区b・c－34グリッドL01層（Ⅳ層）出土のものである。大宰府編年では碗Ⅱ－2類に当たる。内器面は、釉にムラがあり、剥げている。胎土は割と精製されているが、黒色の斑点が僅かに見られる。底部内外面に重ね焼きの目跡がある。外面は無釉である。外底面はヘラナデ調整であった。

Ⅷ区b－32グリッド出土のものは、龍泉窯系青磁で内面見込みに何か削り出して文様を作っているようである。釉色は内外器面とも茶色味を帯びた淡緑色である。釉は半透明である。外器面の畳付け及び高台内部は無釉である。高台内部の削りは浅く、削り痕跡を残す。次に、Ⅶ区出土のものとX－29グリッドⅣ層出土のものとX－28グリッドⅣ層出土のものがあり、これらは同一固体の碗とみられる。胎土は灰色で緻密。釉は内外器面とも淡緑黄色でくすんでいる。外器面に条線が調整痕として見られる。蓮弁のある青磁としては7点出土している。それらは少なくとも3個体以上ある。出土地点については、Y－26グリッドVb層、X－28グリッドVc層、Y－28グリッドVa層、W－26グリッドⅣ層、Y－26グリッドVb層、V－26グリッドVa・b層などである。他にも同安窯系青磁碗で、大宰府編年のⅠ－c類かと考えられるものや、青磁皿などもある。

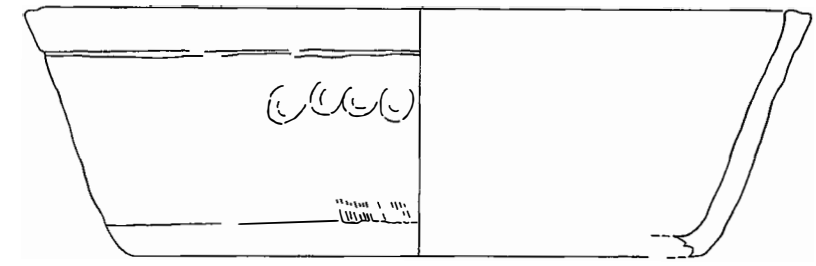
白磁では、Ⅶ区Z－27グリッド、Ⅳ層出土のものがある。大宰府分類の碗Ⅰ－5類に当たるようで、刑窯、もしくは定窯系のものであろう。胎土は乳黄白色を呈し、かなり緻密であるが、空隙が僅かに入る。口縁は不明である。輪状高台をもち、肉厚の角広台である。内器面は乳白色の釉色である。外器面は高台付け根か



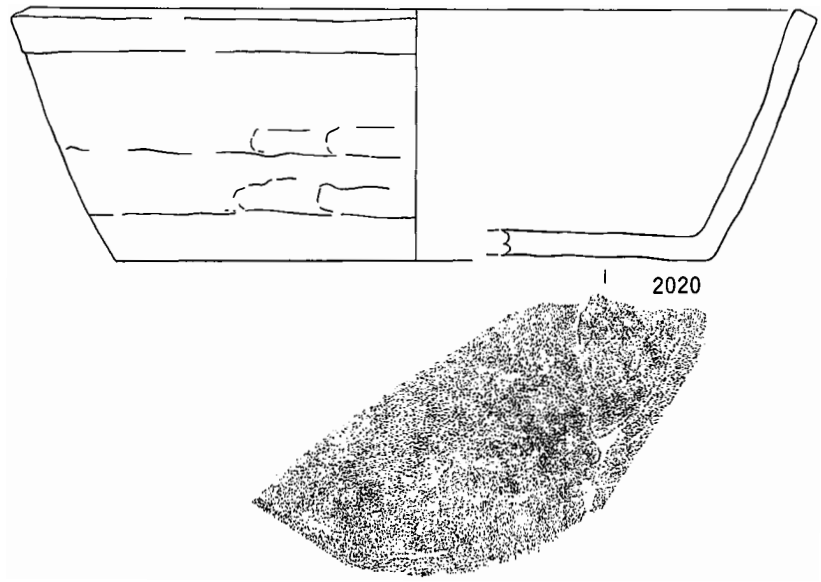
第318図　6SX503出土土器実測図



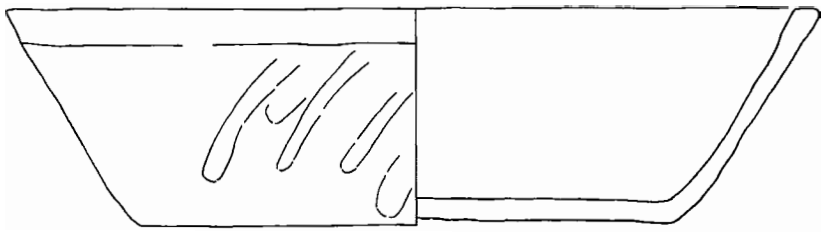
第319図　6SX504出土土器実測図



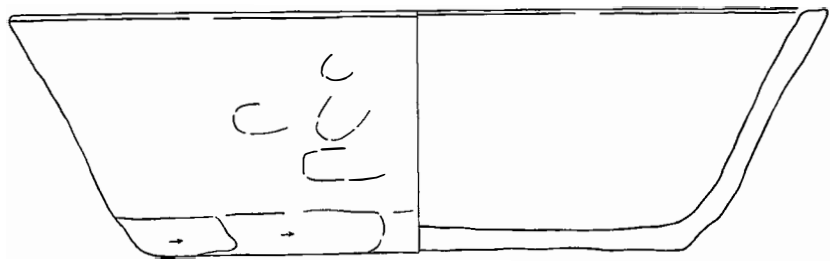
2019



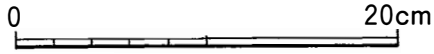
2020



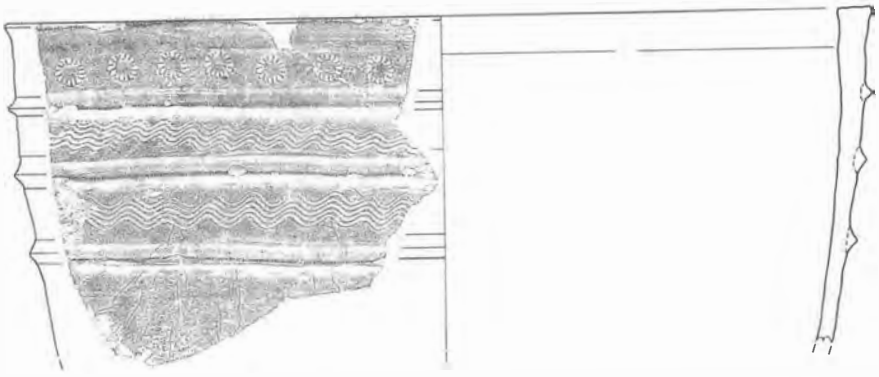
2021



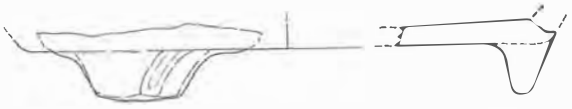
2022



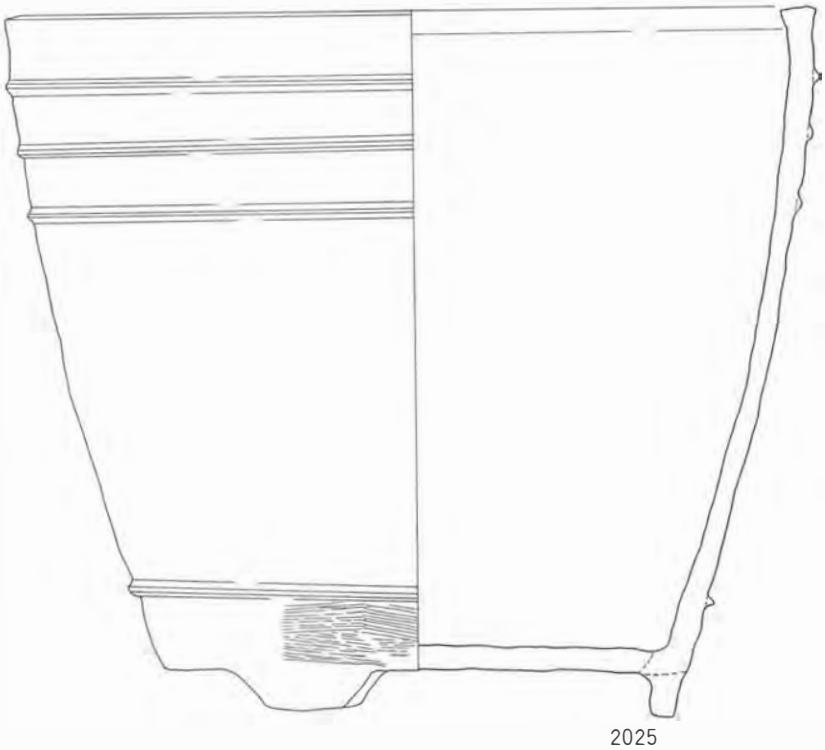
第320図　6SX504出土土器実測図



2023



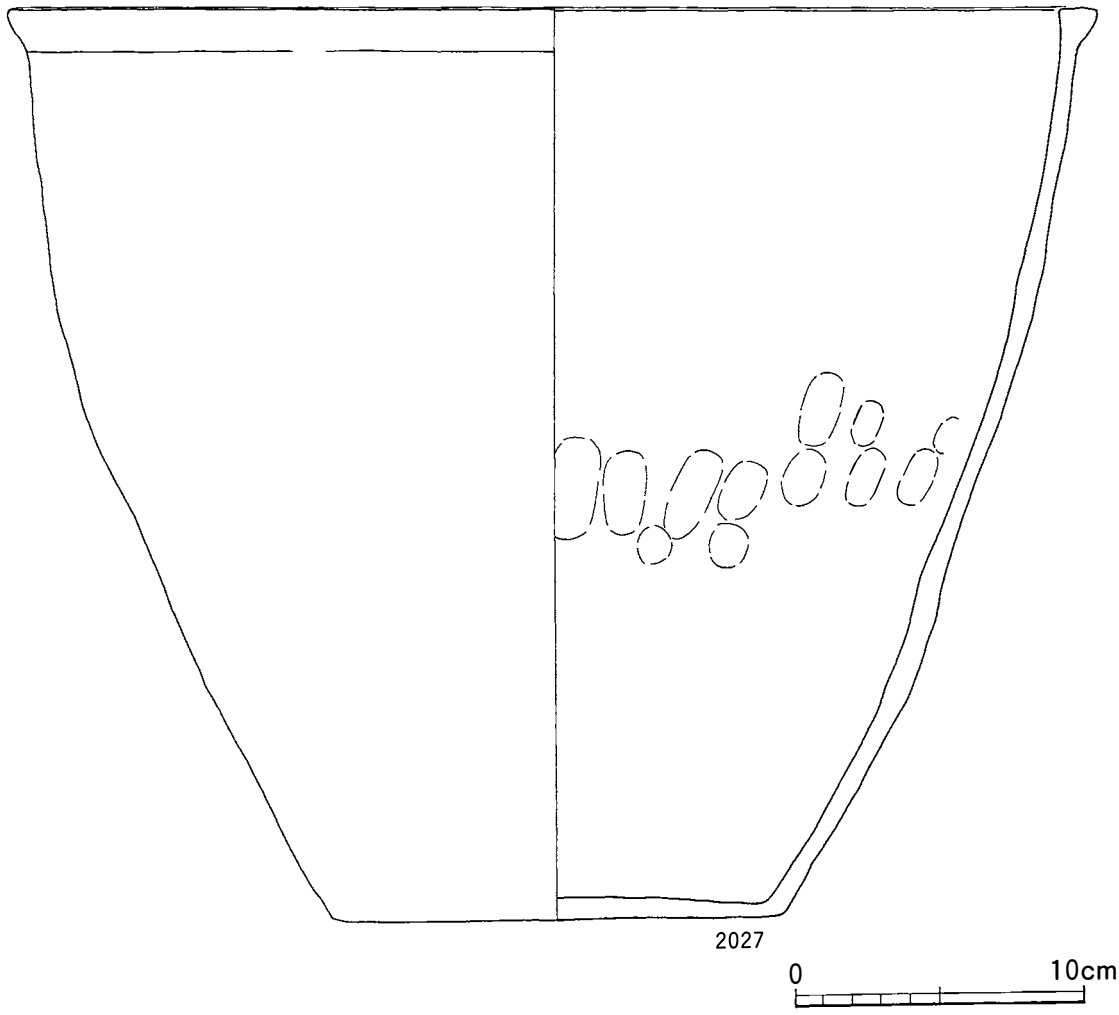
2024



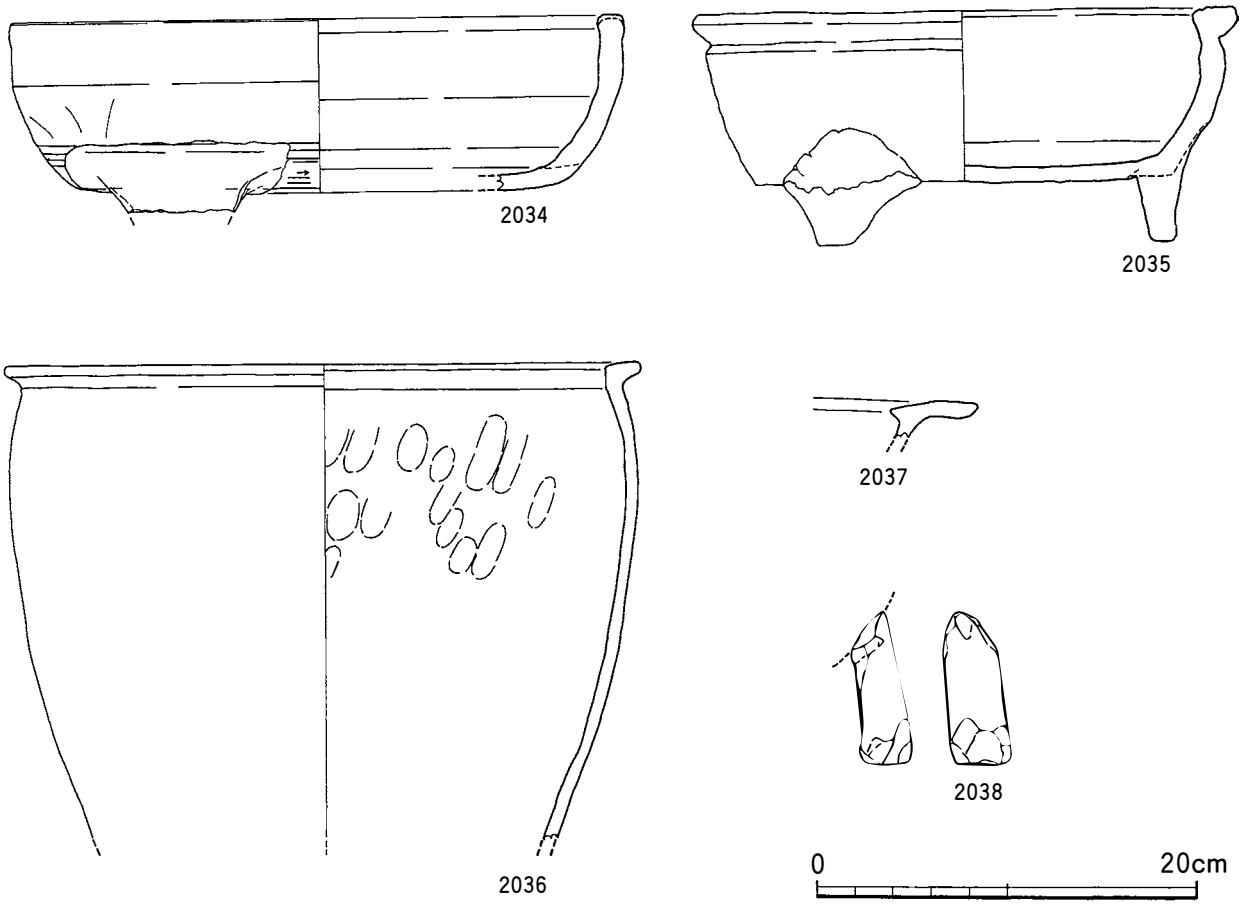
2025

2026

第321図　6SX504出土土器実測図



第322図　6SX505出土土器実測図



第323図　6SX504・6SX506・6SX507出土土器実測図

ら1cmまでぐらいに釉が内器面と同様の発色でかかる。高台は削りだしである。さらに口剥げの白磁があり、施釉後口縁端部を削る取り、さらに口唇部内面も釉を掻き取ったものである。

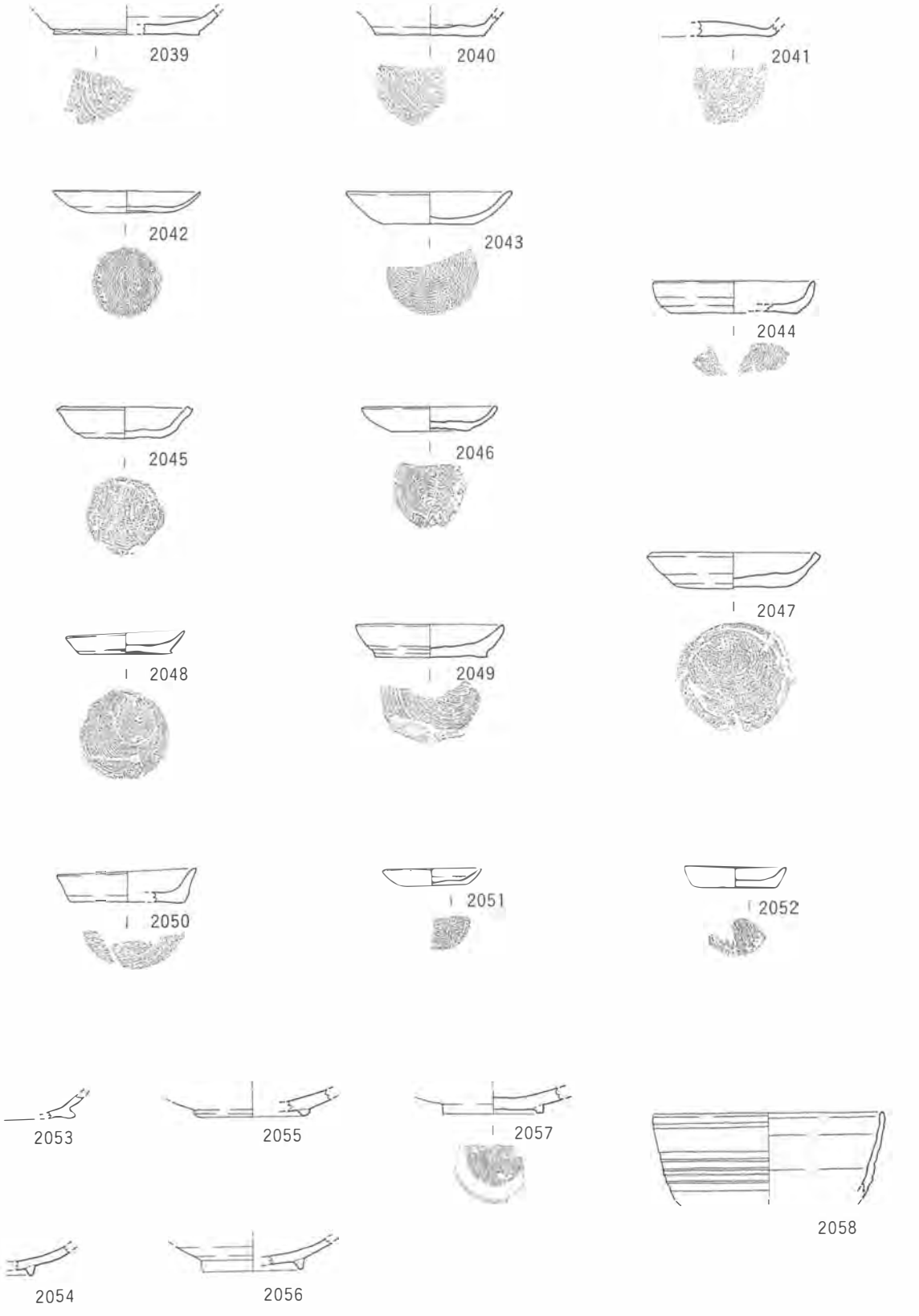
・包含層出土土器【第324図～第330図】

包含層から出土した土器をまとめてみる。いずれも在地系のものと考えられるが、明確に産地は特定できない。器種としては、土師質土器の皿、椀、瓦質土器のすり鉢、浅鉢、火鉢、捏鉢などがある。

2039～2052は、底面に糸切り痕を残す皿である。法量からいくつかに分類できそうである。ただ、数量が少なく有効な分類にはなりえないので、底部の形態と径を基準に順に記述する形を取る。

2039は、土師質土器の坏である。破片のため明確な形状は不明であるが、立ち上がり等により坏とした。2040は、f－43グリッド出土の土師質土器の坏である。復元底径が7.4cmを測る。回転横ナデを主とする調整痕が残る。2041は、回転糸切りの土師質土器の皿である。2042は、土師質土器の坏で、g－43グリッドのL05層の出土で、口径が1.4cm、復元底径が9.5cm、器高が4.6cmを測る。回転台使用の土師器で、底部には回転糸切り離し痕が残る。調整は回転横ナデによる。2043はX区g－43グリッド出土の土師質の皿で復元口径が10.8cm、底径6.0cm、器高が2.15cmを測る。外底面に回転糸切り離し痕が残る。2044はX区6SX504出土の土師質土器の坏である。復元口径が10.3cm、底径が8.2cm、器高が2.0cmを測る。底部には回転糸切り痕残る。2045は、土師質の皿で、g－43グ

器高が2.0cmを測る。外器面の調整は回転ヘラ削り後ナデで、外底面は回転糸切り痕が残る。2046は、X区f－42・g－43グリッドL03層出土の土師質の皿である。復元口径8.7cm、復元底径が5.0cm、器高が1.6cm



第324図　包含層出土土器実測図

を測る。底部には回転糸切り痕が残る。2047は、土師質土器の皿で、口唇部が角張る。外底面には回転糸切りが残る。2048はg－43グリッドL05層出土の土師質皿で、口径が7.7cm、底径が6.0cm、器高が1.6cmを測る。外底面に回転糸切り痕が残る。内部には指の圧痕が残る。2049は、表土剥ぎ中に出土した土師質の皿で復元口径が9.65cm、復元底径が7.4cm、器高が2.1cmを測る。底部には回転糸切り痕が残る。2050は、g－43グリッドL05層出土の土師質の皿である。復元口径が9.0cm、復元底径が7.4cm、復元器高が2.2cmを測る。外底面に回転糸切り痕が残る。2051は、f－43グリッドL03層出土の土師質の皿である。復元口径が6.4cm、復元底径が4.7cmm、器高が1.1cmを測る。外底面に回転糸切り痕が残る。2052は、6SX504のⅠ層出土の土師質皿である。復元口径が6.6cm、復元底径が5.3cm、器高が1.35cmを測る。外底面に回転糸切り痕が残る。

2053～2057は、瓦器埦である。ただ、最初の2053は底部の小破片で全体の形態が不明で、高台の付き方が異なり瓦器埦ではないかもしれない。2054～2057も破片としては大きくなく、成形や技法の点で十分捉えられないので一応遺物の出土があったことを記す。出土層はⅡ層、Ⅲ層である。2057は外底面に瑕か、記号か不明のものが入る。高台はいずれも貼り付けによるもので、断面形態がやや異なる。

2058は、口縁から胴部にかけての土師質土器埦の破片である。X区h－40グリッドの出土である。回転台による成形であり、回転横ナデが施される。層序的には、Vb層～Ⅵ層であるが、この付近には撹乱があったので上位層から落ち込みの可能性が強い。

2059はX区f－42・43グリッドL03層出土の土師質土器の坏である。口径が15.2cm、底径が8.6cm、器高が3.4cmを測る。残りがよく、硬い。外底面に回転糸切り痕が残る。2060はX区f－43グリッドL03層出土の土師質土器の皿である。復元口径が18.3cm、復元底径が11.1cm、器高が3.05cmを測る。外底面に回転糸切り痕が残る。2061はX区f－43グリッド出土の瓦質の大型の皿である。外体部の下位に横方向の削りが入る。復元口径が23.7cm、復元底径が18.0cm、器高が5.0cmを測る。外器面に沈線が施される。2062はX区撹乱出土の瓦質の把手付焙烙である。把手部分と焙烙部分の一部の破片である。外器面の下位は横方向のヘラ削りが施される。把手は焙烙部を作った後に貼り付けている。底部に煤が付着しているので火にかけられたものである。何かを炒るのに使ったのであろう。焙烙部の復元口径が15.9cm、復元器高が2.9cmを測る。2063も同じく、Ⅷ区の撹乱から出土した瓦質の把手付焙烙である。最初土師皿と考えたが、同器種が他の場所で出土したのと、体部に残る剥離痕からこの器種であることから分かった。

2064～2066は瓦質の擂鉢である。2064は、Ⅶ区W－26グリッド出土。2065はX区h－40グリッドⅣ層出土で、2066はX区g－42グリッド5トレンチ出土である。いずれも6本ほど櫛描による摺目が施される。

2067はX区出土の近世の瓦質の風炉の一部と考えられる。内器面には指頭圧痕がみられる。外面には波状文が付く。2068はX区g－39グリッドⅣ層出土の須恵質土器の壺である。内器面にはハケ目が残る。外器面には大きめの格子文タタキが施される。

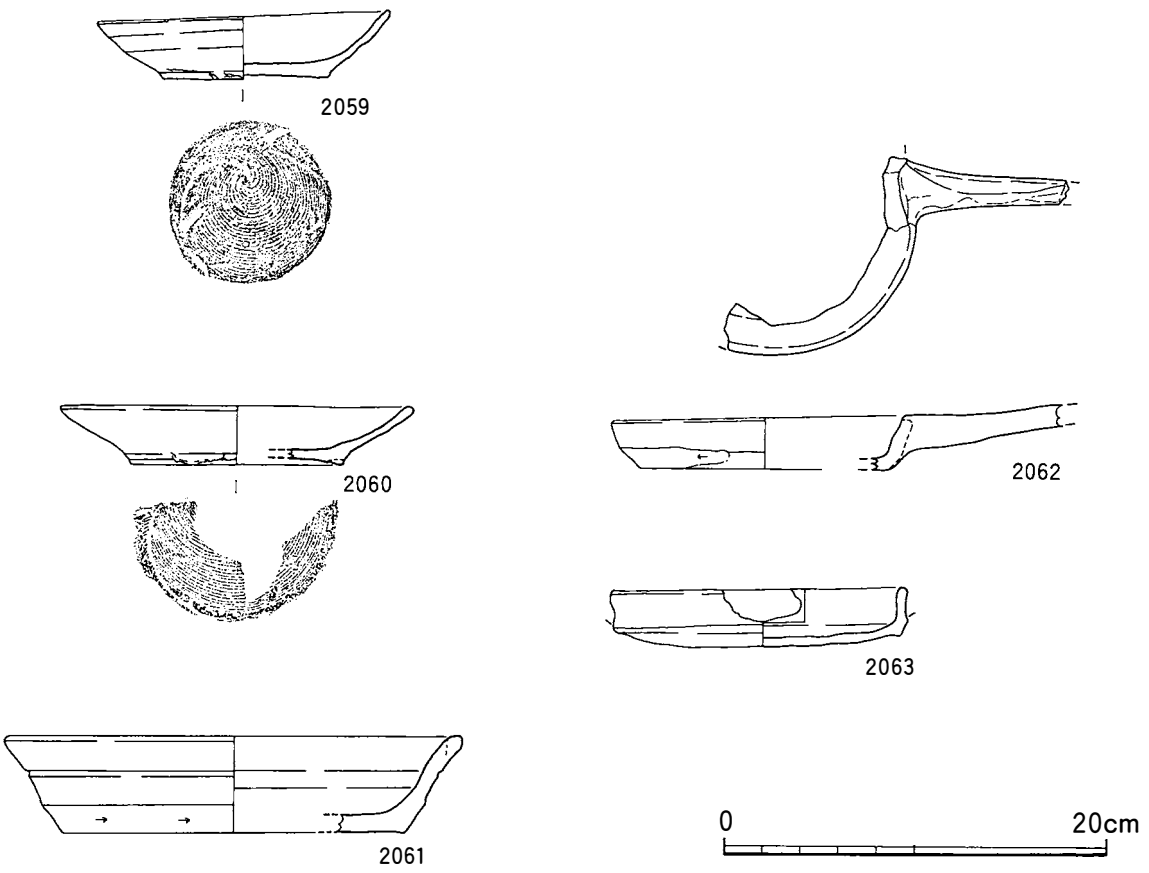
2069はⅦ区Y－28グリッド出土の瓦質の擂鉢である。

2070～2072は同形式の瓦質の火鉢である。いずれもX区から出土したもので、浅鉢形を呈し、底部に3箇所の低い脚を持つ。2070と2071はほぼ同じ大きさで、2073がやや小型である。脚は貼り付けによるものである。

2073と2074はやはり瓦質の火鉢で、よく似た器形と考える。先のものより深く口縁部が内湾する。大きさは2074がやや大きいようである。2073はX区g－43グリッドL03層出土で、2074はX区6SD501出土である。内器面にはいずれも指頭圧痕が残り、外器面は丁寧なミガキが施される。底部に3脚が貼り付けられる。

2075はⅧ区a－31グリッド出土の瓦質の鉢で、口唇部に斜格子の沈線による刻みが入る。

2076はX区g－43グリッドL03層出土の瓦質の浅鉢形で火鉢である。口唇部は断面三角が尖り、胴部はや



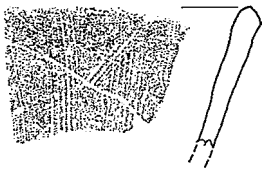
第325図　包含層出土土器実測図

や膨らむ。脚は3脚付くものと考えられる。脚は貼り付けであるが、付け根に獣面が付く。2077はX区f−43グリッド出土の瓦質の浅鉢で、火鉢である。口唇部にへこみが入り段を形成する。脚が付くと思われるが、不明である。外器面は表面が剥離している。2078はX区6SD5014層出土の瓦質の獣面外耳付壺と考えられる。獣面は造りが丁寧である。

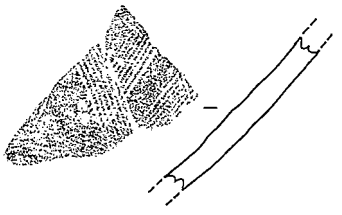
2079はX区f−42グリッド出土の瓦質の火鉢である。外器面に菱型の刻印文が押される。

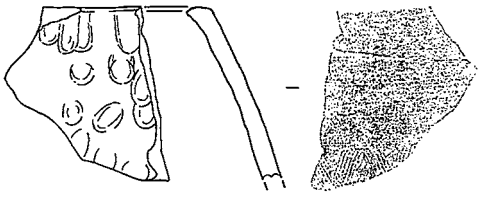
2080～2085は深鉢形の火鉢の口縁付近の破片である。2080はX区g−39グリッドⅣ層出土の瓦質の火鉢である。口唇部に三角の突帯を持ち、その下部に小さな三角突帯が巡る。その間に三角鋸歯文状を呈するスタンプが連続的に押されている。低い突帯の下には連子窓状の縦格子が入る。2081はX区6SX504出土で、口縁部に菊花文のスタンプが押され、その下に低い突帯が巡る。その下は横方向のハケ目である。瓦質の火鉢である。2082も同様であるが、口唇部とその下2cmほどに低い突帯が巡る。その間に菊花文が不規則に押される。下の突帯の下に櫛描きによる波状文が巡る。内器面には斜めハケが入る。X区f−43グリッドから出土した。2083は文様と調整は2082によく似るが、口唇部の造りが異なる。口唇部の突帯がなく、内器面にやや肥厚している。X区f−43グリッド出土である。2084は、X区6SX503の直上層出土である。文様調整は2083に似る。口唇部が両側に肥厚し、外器面では突帯となる。2085は、X区6SX504から出土している。口縁部が内傾し、胴部が膨らむように見える。口唇部は肥厚する。外器面に二条の突帯が口唇部の下に巡る。口縁部には刺突による文様が付けられ、低い突帯をはさみ、櫛描波状文が巡る。さらにその下の突帯をはさみ、櫛描波状文が巡るようである。調整は基本的にナデであるが、内器面にはハケ目がはいる。復元口径は47.2cmを測る。

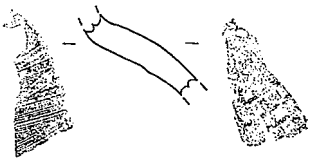
2086・2087は土師質の捏鉢である。2086はX区6SX502出土で、その上層のL01層、L03層でも出土してい

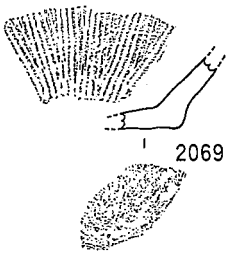

2064

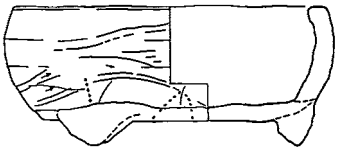
2065

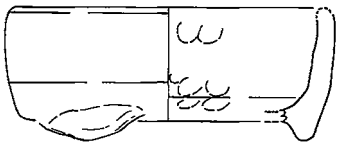

2066

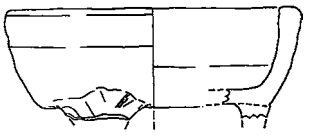

2067

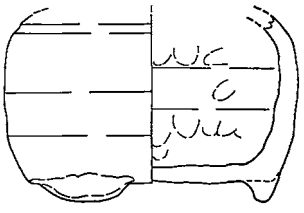

2068

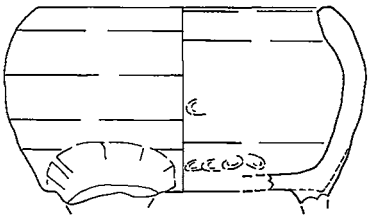

2069

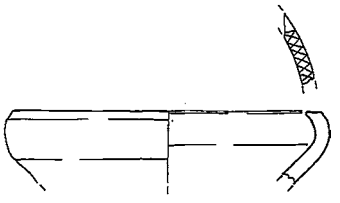

2070

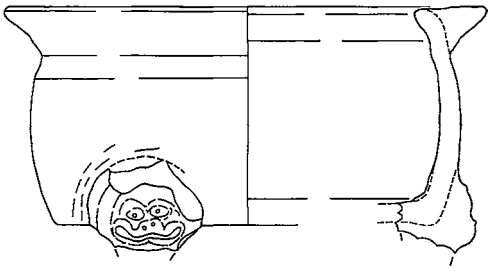

2071

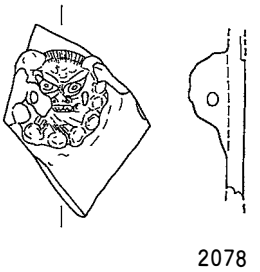

2072

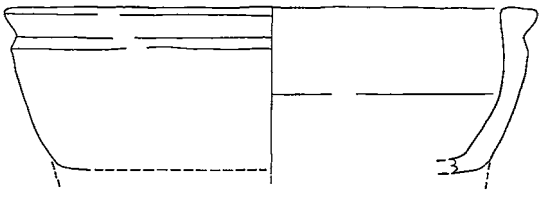

2073

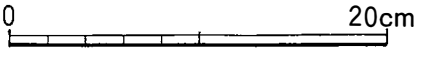

2074


2075

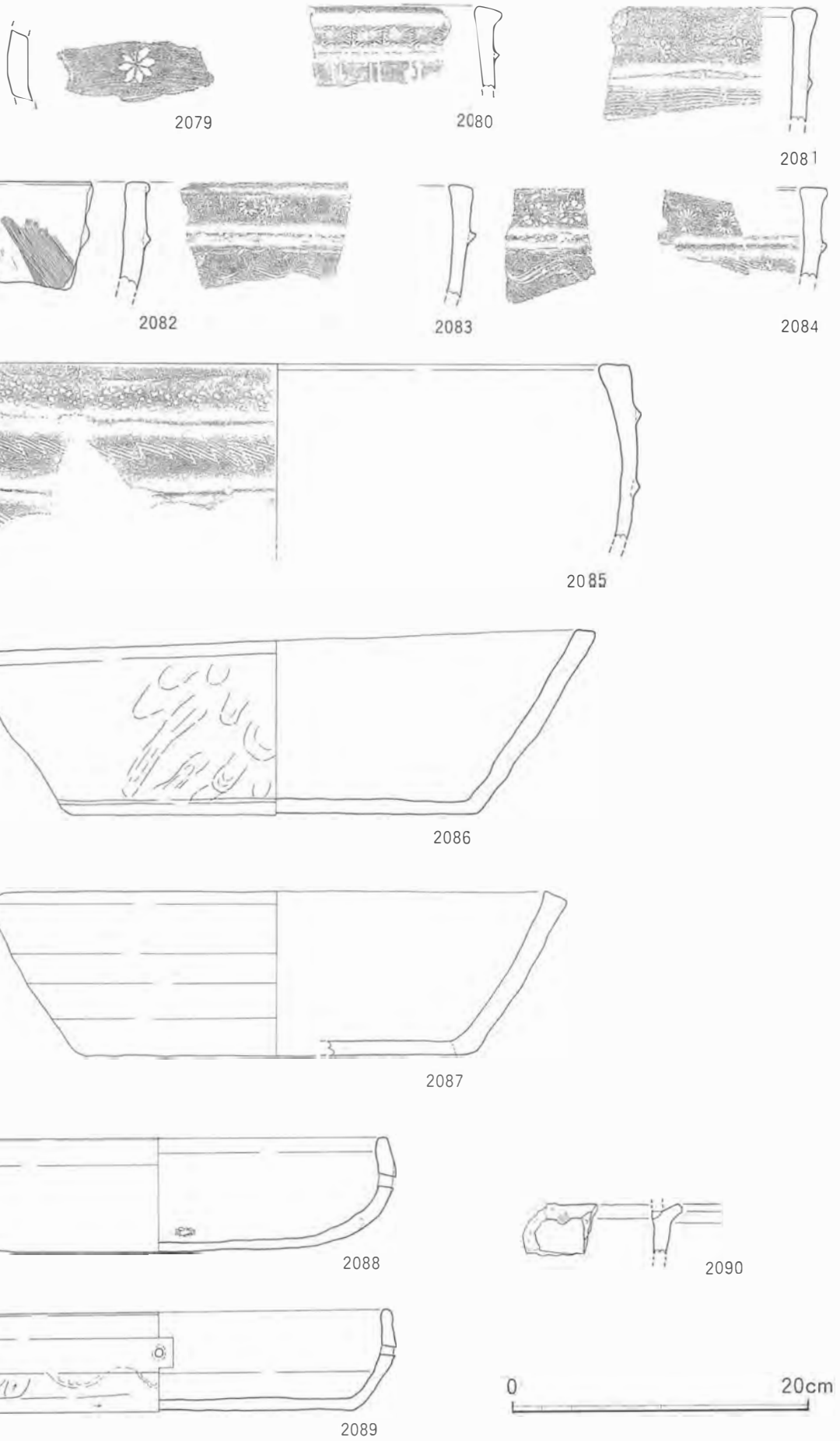

2076


2078

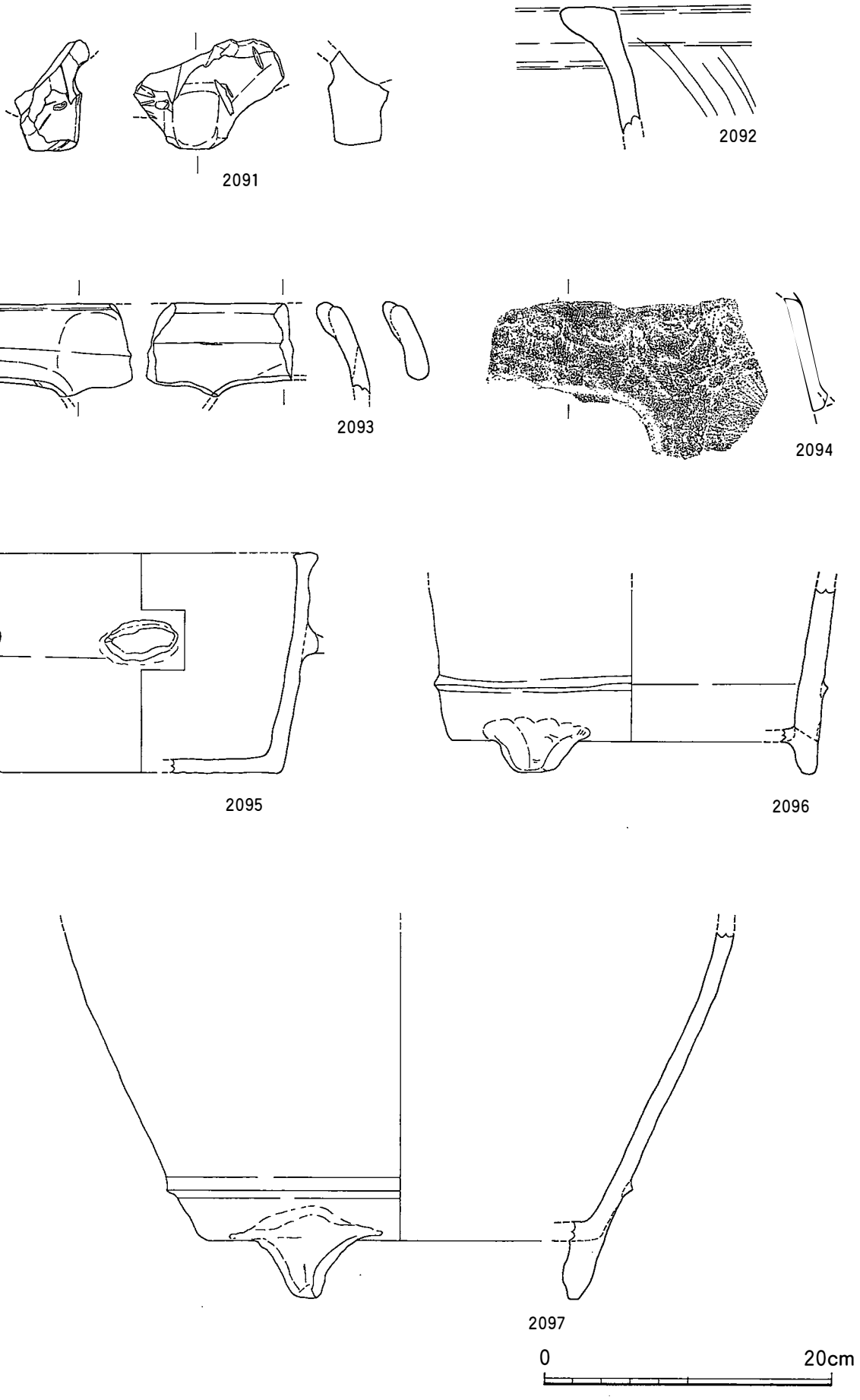

2077



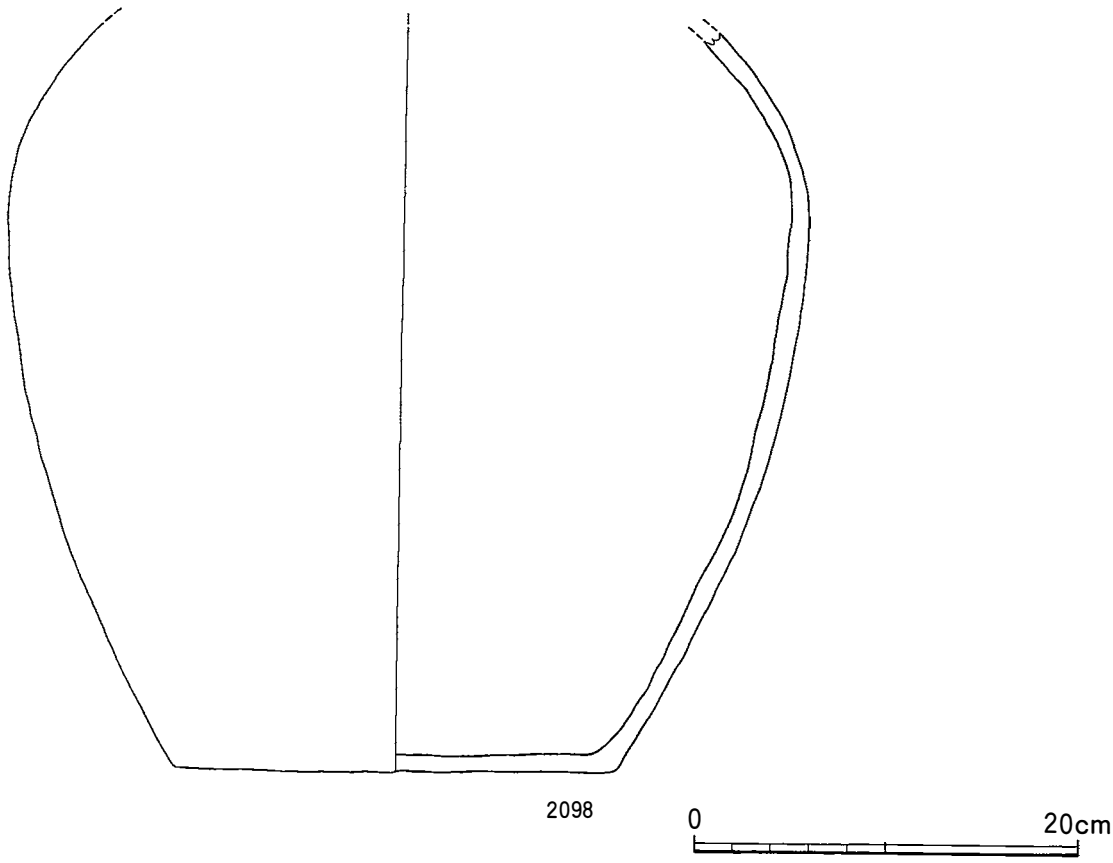
第326図　包含層出土土器実測図



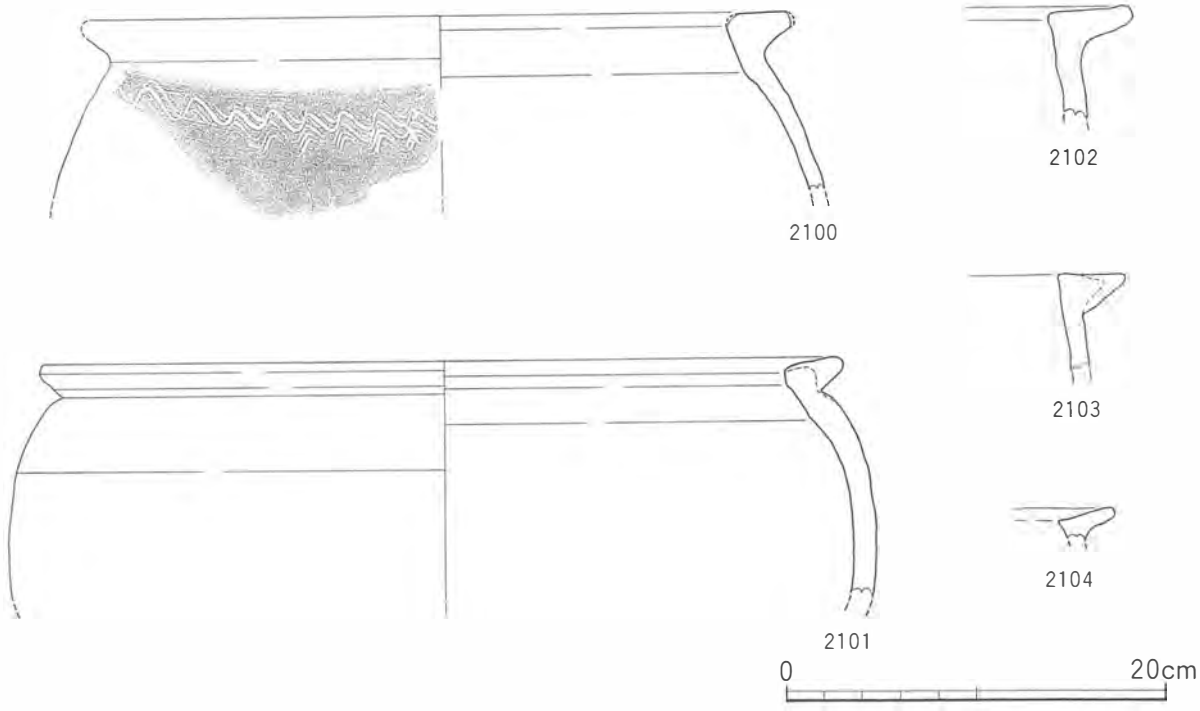
第327図　包含層出土土器実測図



第328図　包含層出土土器実測図



第329図　包含層出土土器実測図



第330図　包含層出土土器実測図

る。口径が42.7cm、底径が27.4cm、器高が11.5cmを測る。外器面体部には指による押圧痕が残る。底部外器面には、当て布痕が残る。回転台によるナデ調整を主とする。全体に煤が付着している。2087はX区ピット中から出土し、2086より小振りである。出土したピットはX－1区の北側の宅地跡にあったものである。復元口径が36.6cm、復元底径が27.0cm、器高が10.9cmを測る。調整は横ナデによる。

2088・2089は瓦質の焙烙鍋である。2088はX区6SX502の整地Ⅰ層L03層出土の瓦質の焙烙鍋である。体部に一箇所焼成前の穴が穿たれる。また内器面底部には花文のスタンプが1ヶ所押されている。造りは丁寧で、回転台使用による横ナデと一部ヘラ削りが施される。底部は当て布が当たっていた。復元口径が30.6cm、底径が24.9cm、器高が7.6cmを測る。胴部は張り出し、最大胴部径が32.0cmを測る。外器面には煤が付着している。内底面には焦げた痕跡もある。2089はX区g－43、f、h－43グリッド一括遺物中のL03層出土のものである。こちらにも焼成前の穿孔が2箇所ある。これは紐通し穴かもしれない。外器面に調整か、文様らしき跡がみえる。口縁径が31.3cm、底径が26.3cm、器高が6.7cm、最大胴部径が32cmを測る。体部下位には回転ヘラ削りを施す。底面には当て布痕らしきものがある。全体的に煤が付着している。

2090はⅦ区Y－26／27グリッド出土で、瓦質の鍋の一部であろう。2091はⅦ区Y－28グリッド出土で、瓦質の火鉢の脚部であろう。2092はX区f－42グリッド整地①層出土で、瓦質の口縁部と考えられる。

2093・2094は瓦質のカマドと考える。焚き口らしき穴が下に開く。上部はそこで終わる。形態的にかなり異なる。2093はX区g－43グリッド出土である。2094はX区6SD501のA層出土の瓦質土器である。外器面には半円模様と、花火様模様である。内器面には煤を付着してこない。火入れ口は赤く焼けている。

2095はX区g－43グリッドL03層出土の瓦質の火鉢である。浅い円筒の鉢で、破片のため全体状況は不明である。底部が平底である。底部外器面に板状の工具によるの圧痕がある。

2096はX区g－43グリッド出土の瓦質の火鉢である。破片ではあるが体部下位と底部の一部が残る。底部には貼り付けの脚が付く。外器面の低位には低い突帯が1条巡る。2097も火鉢で、X区g－44グリッドの出土である。胴部がかなり張り出すが、器形的な特徴は2096に似る。

第331図　包含層出土遺物実測図

2098はX区6SX502出土で、土師質の大甕である。口縁部付近を欠くため全体の状況は不明である。最大胴部径は42.2cm、底部径が23.3cmを測る。ナデにより調整されているため、余り作成方法が不明である。

2099はX区g－43グリッドL03層出土の土師質の甕である。胴部上位に焼成後に開けられたと見られる径20cmほどの穴が開いている。復元口径が55.1cmを測る。器面調整はよくなされる。内器面に指なでによる調整が施される。

2100はX区6SX502出土の瓦質の甕である。口唇部に断面三角形の突き出しがあり、上端部はほぼ平らある。胴部は頸部からかなり張り出していっている。ほぼ回転台による機面調整が行われる。横ナデ調整している。頸部下に五本程度による波状文が巡る。2101もX区6SD5013層、2層及びL01層出土の瓦質の大甕である。特に器面調整などで特徴はそう多くない。復元口径は41.6cmを測る。2102・2103は大甕の口縁部である。2102はX区h－37グリッド出土の瓦質の甕の口縁である。2103はi－37グリッドⅡ層出土している。

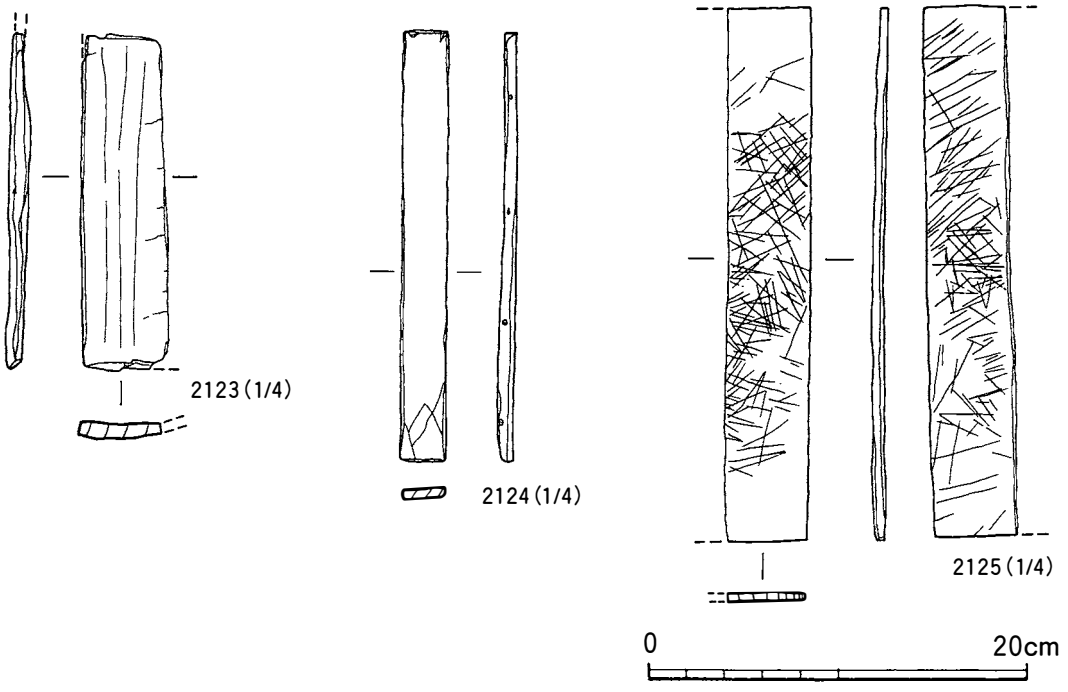
2104は甕形の弥生土器の口縁部である。j－40グリッドのⅣ層からの出土である。復元口径は20.4cmを測る。

○木製品【第332図～第334図】

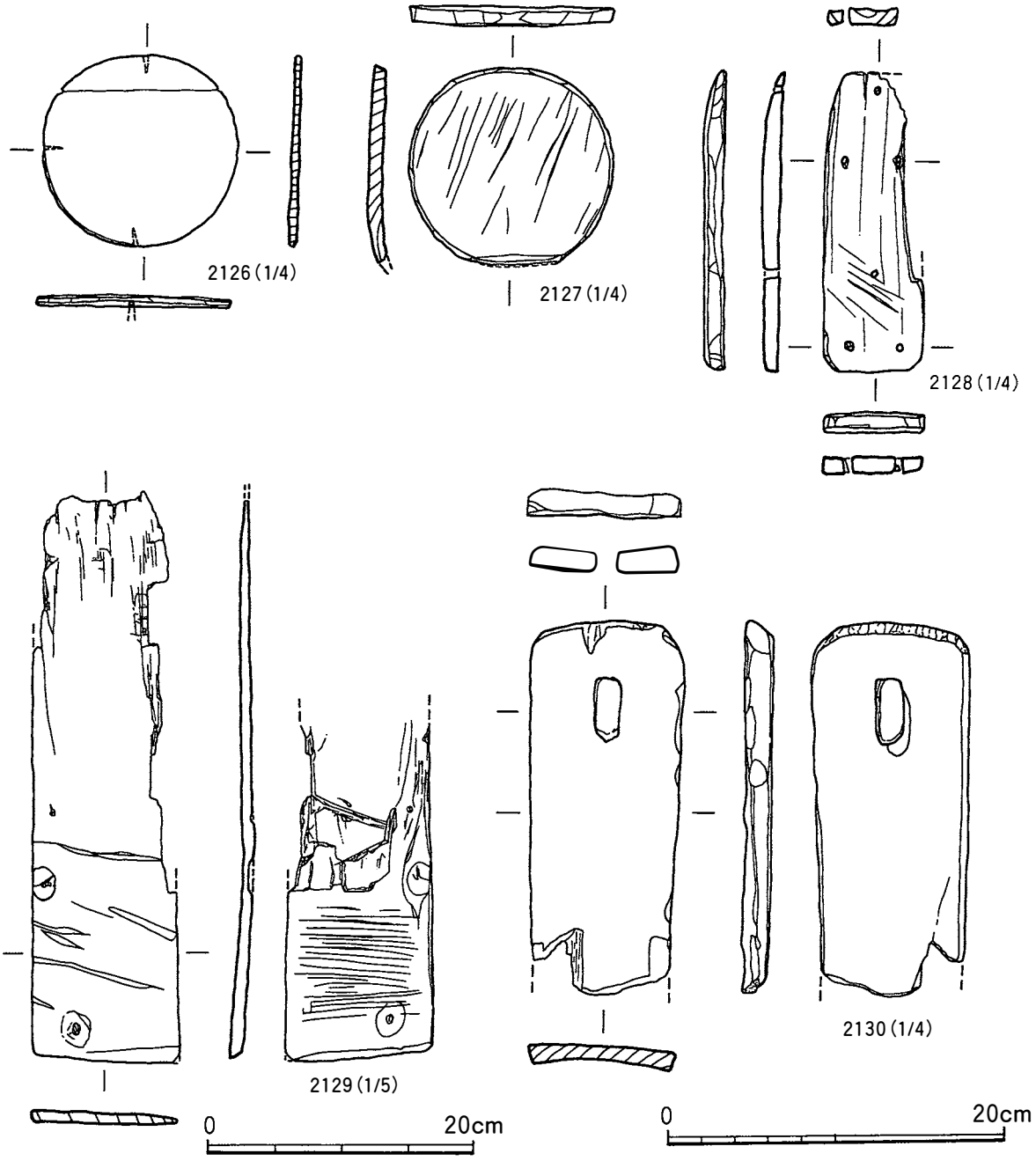
近世以降の木製品としてここで取り上げるものは、X－2区の溝状遺構から出土したものである。したがって、近世初頭から近代までのものである。

2123～2125は板材である。いずれも板目材である。樹種の特定はしていない。2123は、やや湾曲した板材の一部であろう。2124は、寄板で作られる箱などの材の一枚であろうか。下部は削られて薄くされているのは、隙間にはめ込むためのものである。上部と側片には釘跡と考えられる小さな跡が残る。2125は同じく板材で、側面の一方は元の加工痕が残り、その一方は割れた跡が残る。柾目板取りで上端、下端がやや薄く仕上げているので、何かのはめ込み使用されていた可能性がある。表面には裏表とも細かい刃物痕が残る。

2126・2127は円形に加工された板材である。曲げ物の蓋もしくは底板として作られたと考えられる。2126は側面に目釘の孔がみられることから底板であろう。側面の断面がやや上下で異なることからもそれは窺え



第332図　6SX504・506・507出土木製品実測図



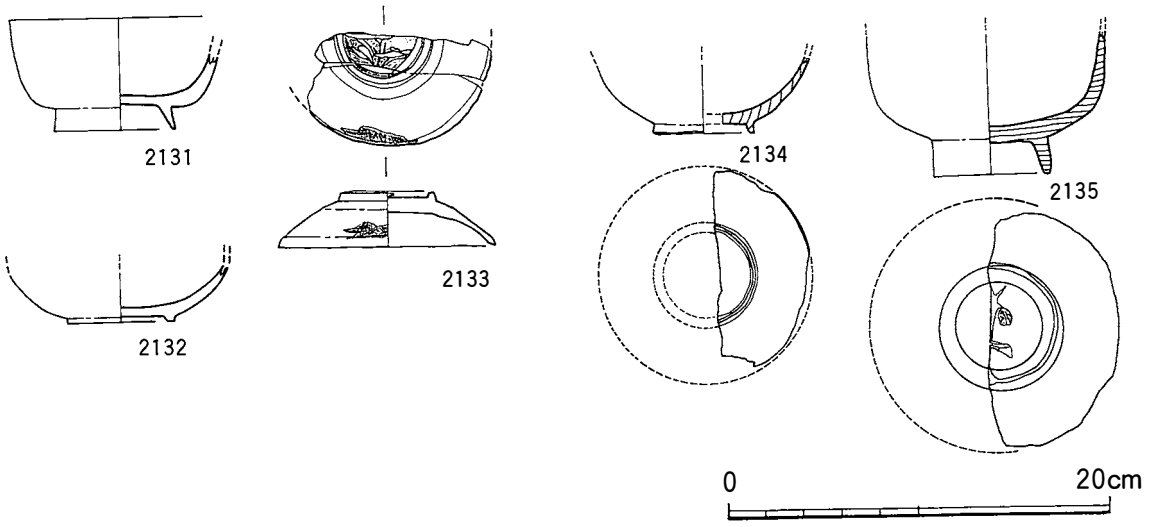
第333図　6SX505出土木製品実測図

る。2127はやや厚く側面が上下で異なるので同様に底板であろう。やや板が曲がっている。

2128は下駄様の板材である。6つの孔が3つずつ三角形を作って上下に配置されている。穴には紐の痕跡が残る。縦断面をみると船形状に上端が細くなっている。平面状の角とりも上部が細くなる。この板材は、歯がないものの草履下駄類に属するものと判断する。

2129は板材であるが、2箇所の穴以外は不明である。下部の小口をやや斜めに切っている。板材自体は鋸挽きによる目が残る。2130も板材である。厚みはやや不規則で、側片の加工は粗い。上部に長方形の穴が開けられている。ここに柄を指し込み、鍬として利用したのかもしれない。下部の状況が破損のためなくなっており詳しい状況が不明である。板は板目取りであろう。

2131～2135は木製の漆器類である。2131はX区6SX506から出土した椀で、無地のものである。高台が低く、底も薄い。口径が11.3cmを、高さが5.9cmを測る。木取りは横木取りで、樹種はブナ科ブナ属である。



第334図　Ｘ－２区溝状遺構出土漆椀実測図

2132はＸ区6SX507から出土した丸椀である。高台がほとんどなく、口径はかなり大きくなりそうである。2133は椀の蓋である。外器面には黒漆上に銀で蒔絵が施される。剥落が多く文様は不明瞭である。高台内に赤色漆で「本堅地」の文字が入る。内器面には赤漆が塗られる。材はブナ属である。木取りは横木取りである。2134は椀の欠損品で高台の低い丸椀である。外器面が黒漆、内器面が赤漆である。これも横木取りである。2135はＸ区6SX506から出土した椀で、半分で体部の張りが大きい。口縁端部は不明である。高台は他に比べて高く、器壁がやや厚い。木取りは、横木取りである。高台内に文様が入るが、半裁品のため不明である。

○石製品【第335図・第336図】

第335図はＸ－２区の溝状遺構内の出土品である。第336図はＸ－２区内の包含層出土品である。石臼・石製模造品・砥石などがある。

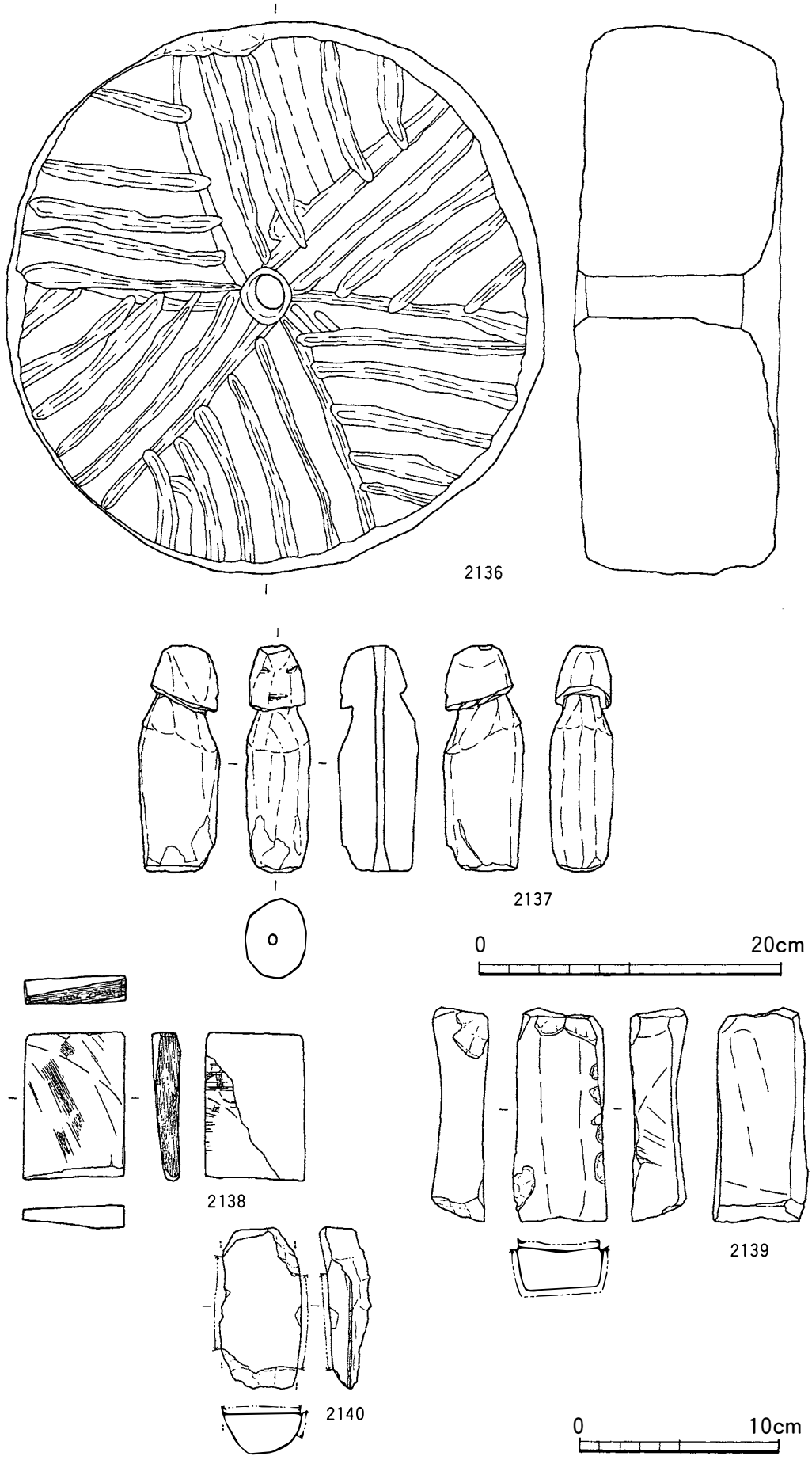
2136は碾臼の下臼である。これは6SX504からの底面近くからの出土である。径は36.2cm、厚さは13.8cmを測る。2141も同じく碾臼の下臼である。径が32.4cm、厚さが9.0cmを測る。凸面となる。

2138～2140は砥石とした。ただ、その形態は異なり、時期の特定が難しい。2140や2139は、中世もしくは古代からすでに使用されていたものと思われる。2138は側片が擦り切りによって切り取られている。厚さが薄く、本来の砥石といえるか疑問はある。ただ、表面と研磨と摩耗の状況から砥石とした。時期は新しいと考えられる。石材は粘板岩の一種と考える。2139は一般的に砥石とされるもので、4面とも使用痕が認められる。下端が欠損している。使用は長期に渡ると考えられる。時期は不明である。2140も同様であるが欠損したものであろう。

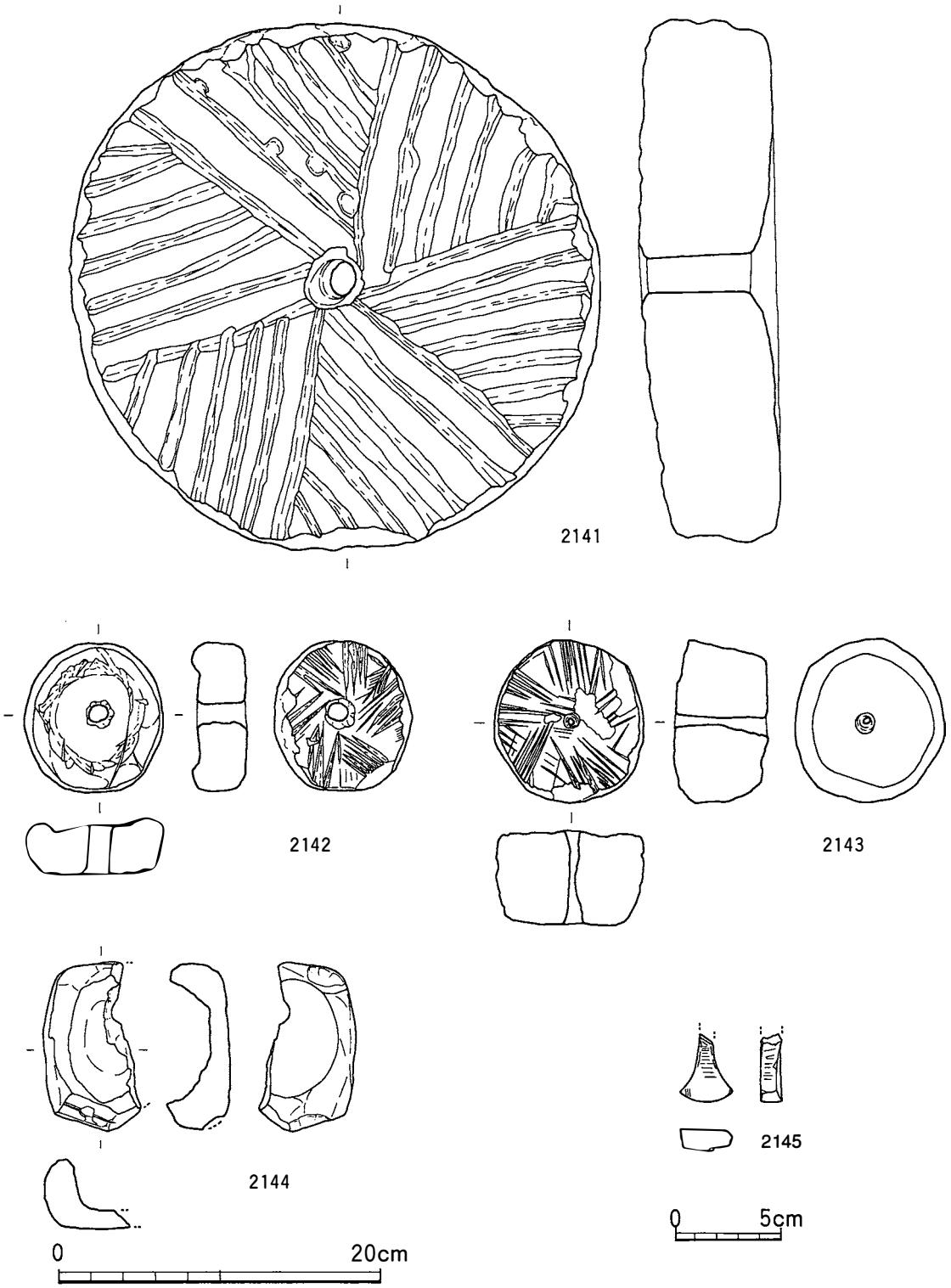
石製模造品として2137・2142・2143・2144がある。

2137は男根様のもので軟質の凝灰岩で作られている。中心に穴が穿たれ、他の器物と組み合わさっていた可能性がある。亀頭部付近にはよく観察すると目・鼻・口に比定できる線引きがあり、こけしとも見立てられる。ただ、全体的には陽物の形態であるので本来はそれであろう。長さが13cm、正面幅4.3cm、側面幅5cmを測る。遊具なのか信仰の対象物なのか不明である。

2142・2143は軽石製で、碾臼の上臼と下臼を模したもので、2142が上臼で径８～10cm、高さ4.5cmほどを測り、2143が下臼で、径９～10cm、高さ5.5cmを測る。両臼とも主溝と副溝も本物を模して刻み込んでいる。玩具としたものであろうか。



第335図　Ｘ－２区溝状遺構内出土石製品実測図



第336図　X－2区包含層出土石製品実測図

2144は軽石製で長さ10.8cm、残存最大幅6cm、厚み3.6cmを測る塊の内部を丁寧に方形に刳り貫いたものである。容器を模したと考えたが、具体的に何を指すのか不明である。遊具の一種であろう。

2145は滑石製で、分銅形の下半分のようであるが、欠損しているため本来の形状は不明である。

○出土銭貨【第337図】

出土した銭貨はいわゆる「渡来銭」と国内通貨に分けられる。

いわゆる「渡来銭」としたものが５枚出土したが、5SD012の埋土中から出土した2148を除けば、いずれも表土剥ぎ中や包含層を掘削中に出土した物である。2146～2150は字面に従えば11世紀から12世紀代のものである。2150は金銭の「大定通宝」で、九州では出土数は少ないようである。12世紀末を初鋳とする。また、2151は琉球国の貨幣「大世通宝」で、15世紀代のものである。

2152～2155は江戸期の「寛永通宝」で４枚（うち１枚は破損）出土している。大部分がＸ区からの出土で、6SD017から出土した2153を除けば、他は包含層中の出土である。

この他にも図化はしていないが、寛永通宝の破片と思われるものが出土している。

○土製人形類他【第331図・図版47・48】

出土した人形類には、土製・陶製・磁製の３種がある。多いのは土製である。これらの多くは調査Ⅷ区の近世以降の土坑に廃棄されていたもので時期の特定はできていない。ここでは、特筆すべきもののみをいくつか選び述べる。

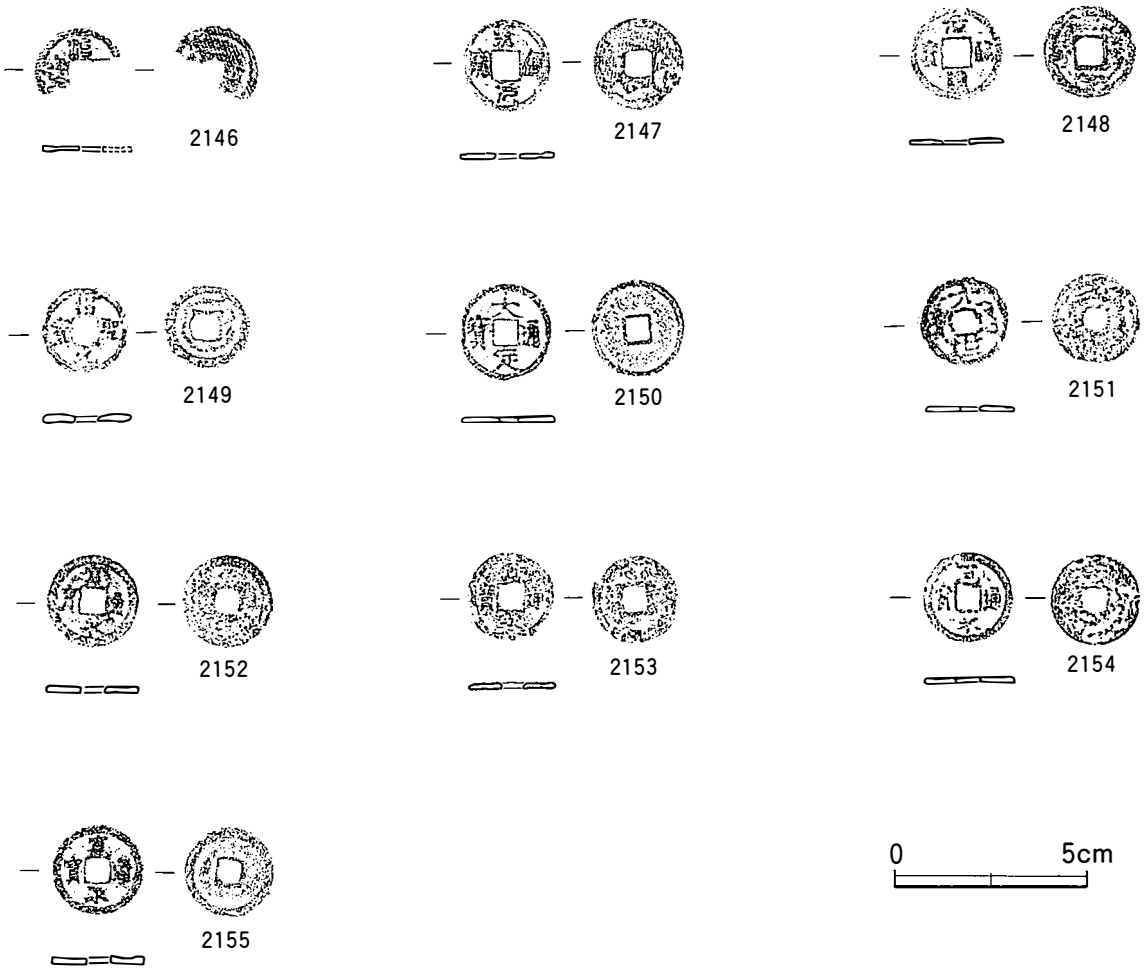
磁器製人形は肥前系かと思われるものがあるが多くはない。2118の人形は頭部のみで全体つかめないが、小形の童子像と推定している。現況では白磁になっている台が一部図に赤色顔料がみられることから本来は彩色が施されていた可能性がある。

土製人形としては、2119、2120、図版47・48の2203、2204、2205、2207と、2206、2208～2213などの２つに分けられる。前者は型合わせで、後者が手捻り成形である。前者のモチーフとしては布袋・恵比寿・鍾馗？（2205）などがある。遺物自体の胎土はほとんどが砂粒を交えない精製土が用いられている。焼成後の粘土の色は橙色から淡黄色などを呈している。また、2204のように他のものと組み合わせて作り上げるようなものもあり、種類は様々である。後者のものは手捻りでつくるため形のばらつきは大きく一定ではない。取り上げたものは現在玉名郡玉東町で製作している木の葉猿と呼ばれる玩具の一種である。これらには信仰に関係するといわれ、子どもの誕生を願う際に祀るという話も聞く。猿そのものに形作ったのは2206、2212と2213である。2206は現況のものと異なり頭に角状の突起をもち、描写も細かい。通常言われる木の葉猿ではないのかもしれない。2212・2213は、両手を一物にあてがい上を向く姿勢は、現在でも作られている木の葉猿そのものである。2204～2207は馬形であるが、背に粘土がはがれたような状態で出土したものや、人形と思われる胴体の一部が着いたままのものもあるので背には人形もしくは猿が乗ると思われる。この例も実は木の葉ざるの一形態として近代まで受け継がれている。

この他に2115が、いわゆる「泥面子」である。これは泥面子のうちでも芥子面で、猿のような顔を型押しで成形している。

○獣骨

調査Ｘ－２区からは、多くの獣骨が集中して出土している。地点は調査Ｘ－２区の北側部分で近世～近代の埋土の中からで、近世陶磁器とともに合わせて12点ほど出土している。新しい獣骨としてあえて分析にはかけなかった。ここで図化もしていない。ただ、出土状況等について若干触れることにする。



第337図　出土銭貨拓影図

獣骨は、現代の溝の近くを掘り下げる過程で出土し、ほとんど部分だけの出土で長さが20cmほどあればいいほうであった。出土の仕方は高低差が大きく、時期差かとも捉えたが、調査の進展に伴い他の遺物の出土状況にある程度に通っている点があるのが分かるに及んで、この獣骨も上から斜面を流れ落ちてきたものと理解した。したがって、そう大きな時間差はなかったものと理解した。

周囲の遺物の出土状況からこれらの骨は近世以降の産物とした。獣骨の種類はウシかウマとして処理した。大腿骨に当たるような太い骨も多く、中には中足骨を見つけその指の数を確認すると二本であったことからウシとした。ところが、そのほかの骨の特徴を見直したところ、ウシだけでなく、ウマもいるのではないかと思い、確認した中にウマの中足骨と思われるものがあったので結論は保留した。

骨自体がなぜここにあったのかは不明であるが、この調査区がさまざまなものを捨てるか、押し込んだような場所であるので、これらの骨もごみとして処理されたものであろう。

第Ⅳ章　自然科学的分析

第１節　柳町遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．はじめに

柳町遺跡は、菊池川右岸の後背湿地に位置し、発掘調査により弥生時代～奈良時代の遺構・遺物が出土している。沖積地に位置するため、木製品などの植物性遺物が良好な状態で保存され、大量に出土している。このうち、94年度～96年度調査区から出土した木製品については樹種同定が行われており、針葉樹・広葉樹合わせて60種類近くが確認されている（大迫、1996；パリノ・サーヴェイ株式会社、1996；未公表資料）。第４次調査区および第６次調査区では、掘立柱建物跡、井戸跡、旧流路の堰状（橋梁状）遺構等が確認された。掘立柱建物跡の柱穴には柱根、堰状（橋梁状）遺構には構築材がそれぞれ残存していた。また、井戸跡からは種実遺体が出土している。

本報告では、第４次（97年度）調査区および第６次（99年度）調査区から出土した木材・種実遺体の同定を行い、用材選択や植物利用に関する資料を得る。また、第６次調査区から出土した木材については、放射性炭素年代測定も併せて実施し、その年代を確認する。なお、放射性炭素年代測定は、加速器質量分析法（AMS 法）を選択した。

２．試料

（１）木材

試料は、第４次（97年度）調査区の掘立柱建物跡から出土した柱材17点と、第６次（99年度）調査区の堰状もしくは橋梁状遺構から出土した構築材４点である。樹種同定は全点について実施し、年代測定は堰状もしくは橋梁状遺構の構築材４点について行う。

（２）種実

第４次調査区の井戸跡（4SE017）の埋土中から出土した種実遺体１点（97TYP－4019）である。

３．方法

（１）放射性炭素年代測定

（株）地球科学研究所を通じて、アメリカ合衆国ベータ社が行った。

（２）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

（３）種実同定

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特長から種類を同定する。

４．結果

（１）放射性炭素年代測定

測定結果を表１に示す。堰状（橋梁状）遺構の構築材と考えられる木材の年代値は、2510±40BP～2640±40BP であった。同位体効果の補正を行った年代（補正年代）では、2450±40BP～2570±40BP となる。

表1　放射性炭素年代測定結果

遺物番号	遺構番号		試料の質	年代	13C／12C	補正年代	Code No.
99TY-6054	6SX054	98	木材（ヤナギ属）	2580±40	−27.2‰	2540±40	Beta-153692
99TY-6059	6SX054	83	木材（ヤマグワ）	2510±40	−28.9‰	2450±40	Beta-153693
99TY-6061	6SX054	75	木材（ヤマグワ）	2640±40	−29.1‰	2570±40	Beta-153694
99TY-6068	6SX054	95	木材（ヤマグワ）	2570±40	−27.2‰	2530±40	Beta-153695

1）年代は、1950年を基点とした年数
2）放射性炭素の半減期は5568年を使用した
3）測定は、加速器質量分析法で行った

（2）樹種同定

樹種同定結果を表2に示す。掘立柱建物跡から出土した柱材は、いずれも保存状態が悪い。樹種の同定に至らなかった試料については、観察できた範囲での結果を記した。同定された樹種は、針葉樹2種類（マキ属・カヤ）と、広葉樹4種類（ヤナギ属・クリ・ヤマグワ・アワブキ属）であった。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

表2　樹種同定結果

遺物番号	遺構番号		用途など	樹種
97TY-4002	4SB001	Pit02	掘立柱建物跡の柱材	針葉樹
97TY-4003	4SB001	Pit03	掘立柱建物跡の柱材	針葉樹
97TY-4004	4SB001	Pit05	掘立柱建物跡の柱材	針葉樹
97TY-4005	4SB001	Pit06	掘立柱建物跡の柱材	針葉樹
97TY-4006	4SB002	Pit02	掘立柱建物跡の柱材	アワブキ属
97TY-4008	4SB002	Pit05	掘立柱建物跡の柱材	アワブキ属
97TY-4009	4SB002	Pit09	掘立柱建物跡の柱材	アワブキ属
97TY-4010	4SB002	Pit10	掘立柱建物跡の柱材	広葉樹
97TY-4011	4SB002	Pit11	掘立柱建物跡の柱材	針葉樹
97TY-4013	4SB003	Pit04	掘立柱建物跡の柱材	針葉樹
97TY-4033	4SB034	Pit07	掘立柱建物跡の柱材	針葉樹
97TY-4034	4SB034	Pit08	掘立柱建物跡の柱材	針葉樹
97TY-4035	4SB034	Pit09	掘立柱建物跡の柱材	カヤ
97TY-4254	4SB034	Pit13	掘立柱建物跡の柱材	マキ属
97TY-4037	4SB034	Pit17	掘立柱建物跡の柱材	針葉樹
97TY-4272	4SB034	Pit01	掘立柱建物跡の柱材	針葉樹
97TY-4038	4SB036	Pit01	掘立柱建物跡の柱材	クリ
99TY-6054	6SX054	98	堰状（橋梁状）遺構の構築材	ヤナギ属
99TY-6059	6SX054	83	堰状（橋梁状）遺構の構築材	ヤマグワ
99TY-6061	6SX054	75	堰状（橋梁状）遺構の構築材	ヤマグワ
99TY-6068	6SX054	95	堰状（橋梁状）遺構の構築材	ヤマグワ

・マキ属（*Podocarpus*）　　マキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。樹脂細胞が早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔構成され、柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1～2個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）　　イチイ科カヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

・針葉樹

軸方向組織は仮道管を主とする。樹脂道は認められないが、保存が悪いため仮道管内壁のらせん肥厚および樹脂細胞の有無は不明。早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅の狭い試料が多い。放射組織は柔細胞のみで構成されるが、分野壁孔の形状は不明。

いずれも今回同定されたマキ属やカヤに似ることから、いずれかである可能性が高いが、同定には至らなかった。

・ヤナギ属（*Salix*）　　ヤナギ科

散孔材で、道管は年輪全体にほぼ一様に分布するが年輪界付近でやや管径を減少させる。管壁厚は中庸で、横断面では楕円形～やや角張った楕円形、単独および2～3個が複合する。単穿孔を有し、壁孔は交互状に

配列する。放射組織は異性、単列、１～15細胞高。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）　クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は１～５列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、１～６細胞幅、１～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・アワブキ属（*Meliosma*）　アワブキ科

散孔材で、管孔は単独または２～６個が複合する。道管は単または階段穿孔を有し、壁孔は小型で交互状に配列する。放射組織は大型で異性Ⅱ型、１～３細胞幅、１～50細胞高。

・広葉樹

試料の保存状態は悪い。広葉樹材の特徴である道管要素が認められる。しかし、道管の穿孔、内壁の形状、道管の分布様式、密度、放射組織の形状など、広葉樹材の同定に必要な他の特徴が全く観察できないため、種類の同定には至らない。

（３）種実同定

同定の結果、ヒョウタン類の種実であった。以下に検出された種類の形態的特長を記す。

・ヒョウタン類（*Lagenaria*）　ウリ科ユウガオ属

種子が検出された。大きさは1.5cm 程度。褐色で肉厚。縁は肉厚で盛り上がっている。表面は厚くて柔らかく弾力があり、ざらつく。

５．考察

（１）堰状（橋梁状）遺構（6SX054）の年代

堰状（橋梁状）遺構の構築材の年代値は、補正年代で2450±40～2570BP±40BP であった。この年代値は、縄文時代晩期末～弥生時代早期の年代（日本第四紀学会ほか、1992）に相当する。これは、遺構の構築年代として推定されている弥生時代前期よりも若干古い年代を示しているが、大きくは矛盾しない。年代値が若干古いことについては、樹齢の問題や古材の再利用などが考えられる（東村、1990）。今回についても、試料の径などを考慮すれば、樹齢と試料採取位置の問題により実際よりも古い値が出ている可能性がある。しかし、４点の試料のうち、３点が誤差範囲で年代値が一致し、他の１点も大きくずれた年代を示さないことを考慮すると、遺構の構築時期が2450～2550BP 頃の可能性もある。

（２）用材選択

掘立柱建物跡の柱材は、種類不明の針葉樹材が多い。同定された種類としては、針葉樹のカヤ、マキ属、広葉樹のクリ、アワブキ属である。4SB002と4SB036を除く各建物跡では、カヤとマキ属を含めた針葉樹が多く利用されており、主に針葉樹材を柱材に選択・利用していたことがうかがえる。針葉樹材は、一般に樹幹が真っ直ぐで大径木が多い。また、木理が通直で加工が容易、耐水性等に優れた材質を有した種類が多い。そのため、掘立柱建物跡の柱材としては適材であり、今回の結果についても材質を考慮した用材選択が推定される。また、4SB036に認められた広葉樹材のクリは、強度や耐朽性に優れた材質を有しており、針葉樹材と同様の用材選択といえる。一方、4SB002に認められたアワブキ属は、現在の植生などを考慮すれば、落葉性のアワブキあるいは常緑性のヤマビワと考えられる。このうち、アワブキの材は、比較的重厚であるが、狂いやすくて脆いため、掘立柱建物の柱材としては適材とはいえない。一方、ヤマビワは、比較的軽い

が、緻密で折れ難い材質を有する（柴田、1957)。このことを考慮すれば、木材はヤマビワの可能性が高い。しかし、いずれにしても他の針葉樹類やクリと比較すると材質が劣ることから、4SB002では他の建物跡と用材選択が異なることが指摘できる。この背景には、建物の用途・性格などが関係している可能性があるが、詳細は不明である。

堰状（橋梁状）遺構の構築材は、1点がヤナギ属で、他の3点はヤマグワであった。このことから、ヤマグワを主とした用材選択が推定される。しかし、点数が少ないため、実際の種類構成でもヤマグワが多くなるかは不明である。これらの樹木は、人里周辺や河畔などに一般的であることから、周辺に生育していた樹木を利用したことが推定される。

（2）植物利用

ヒョウタン類は、栽培のために渡来した種類であり、容器や食用などとして利用される。しかし、現在のところ種子の形状から、ユウガオとヒョウタンの区別や、ヒョウタン類の形状や大きさなどを推定することは難しいため、具体的な用途に関しては不明である。

引用文献

東村武信（1990）改訂　考古学と物理化学．212ｐ.,学生社.

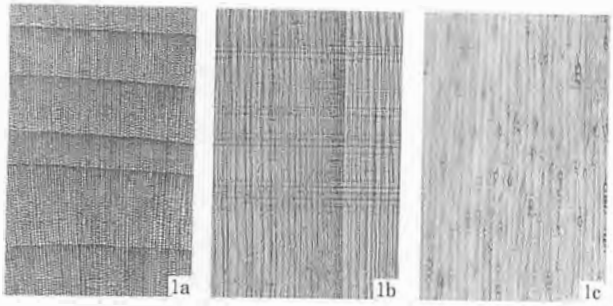
日本第四紀学会・小野　昭・春成秀爾・小田静夫編(1992)図解・日本の人類遺跡．242ｐ.,東京大学　出版会.

大迫靖雄（1996）柳町遺跡から出土した1号木製短甲の樹種について．「柳町遺跡の木製短甲　ー熊本県玉名市河崎字柳町所在の柳町遺跡より出土の1号・2号木製短甲紹介」,ｐ.18－19，熊本県教育委員会.

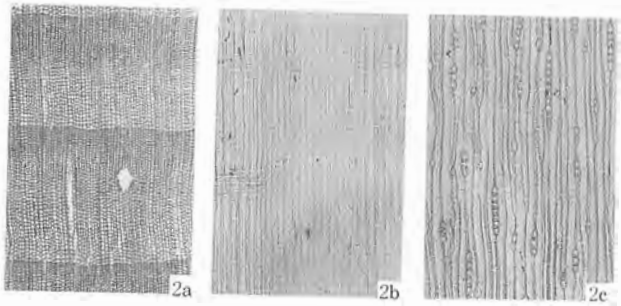
パリノ・サーヴェイ株式会社（1996）柳町遺跡出土の2号木製短甲の樹種同定．「柳町遺跡の木製短甲　ー熊本県玉名市河崎字柳町所在の柳町遺跡より出土の1号・2号木製短甲紹介」,ｐ.20－21，熊本県教育委員会.

柴田桂太編（1957）資源植物辞典（増補改訂版).904ｐ.,北隆館.

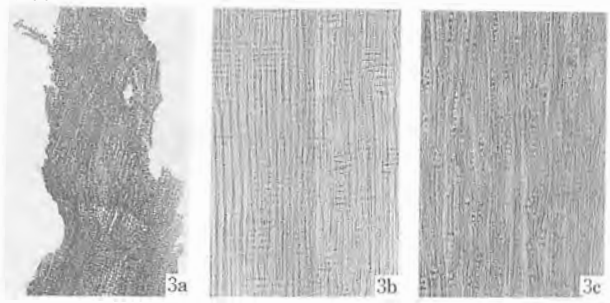
木材＜１＞



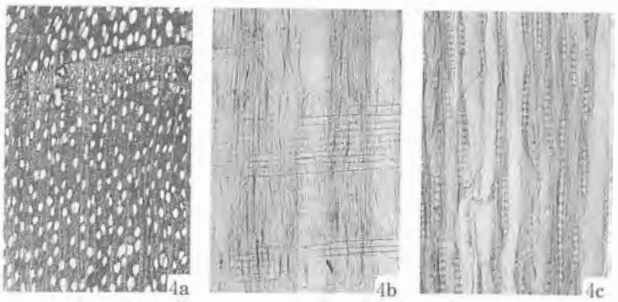
木材＜２＞



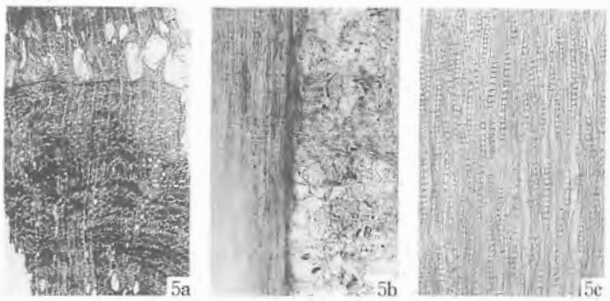
木材＜３＞



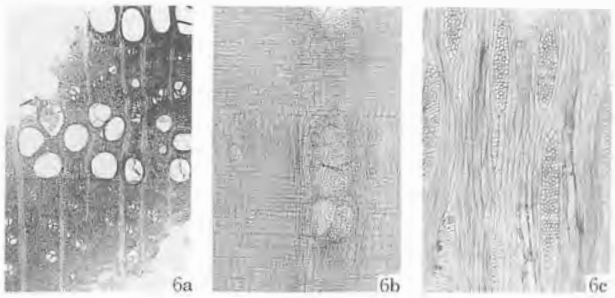
木材＜４＞



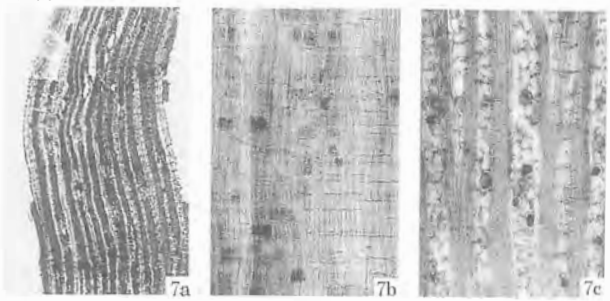
木材＜５＞



木材＜６＞



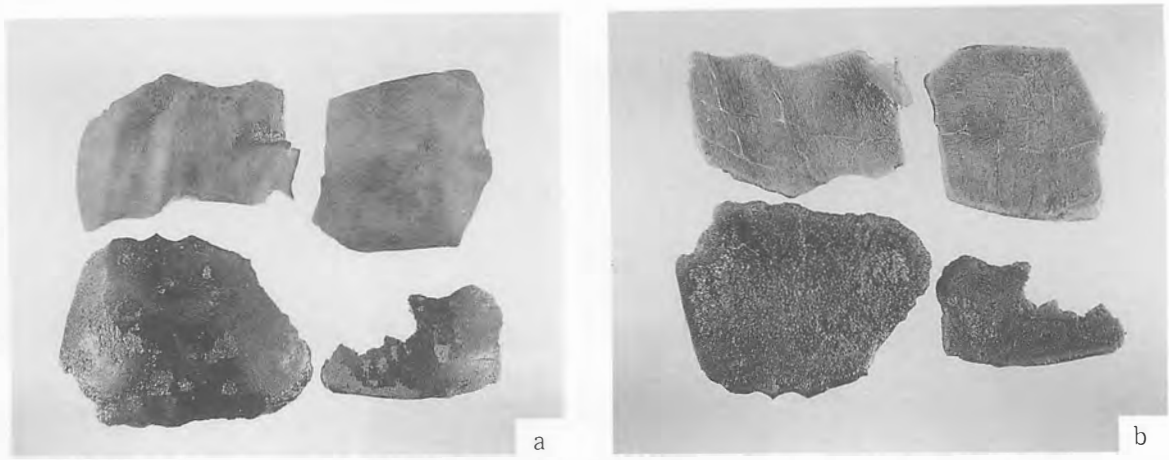
木材＜７＞



1．マキ属（97TY－4254）
2．カヤ（97TY－4035）
3．針葉樹（97TY－4002）
4．ヤナギ属（99TY－6054）
5．クリ（97TY－4038）
6．ヤマグワ（99TY－6061）
7．アワブキ属（97TY－4006）
a：木口　b：柾目　c：板目

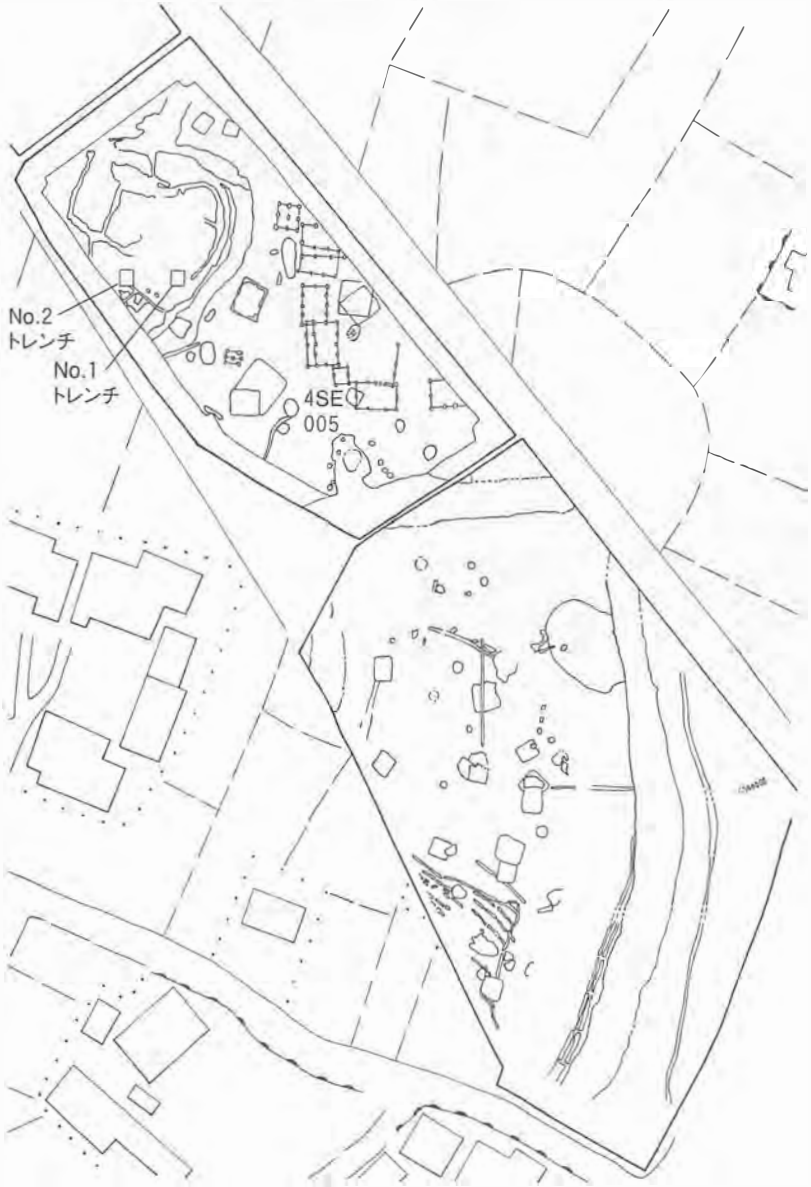
200μm：a
200μm：b，c

柳町遺跡出土木製品樹種顕微鏡写真　－１－



ヒョウタン類（97TYP－4019）

柳町遺跡出土木製品種実顕微鏡写真　－2－



第338図　分析試料採取地点位置図

第２節　熊本県、柳町遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．柳町遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、1987)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984)。

２．試料

分析試料は、Ｖ26グリッドNo.1トレンチ、Ｖ26グリッドNo.2トレンチ、4SE005（井戸）の３地点から採取された５点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１ｇに対して直径約40μｍのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}ｇ）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

４．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１、２および図１～３に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、Ｖ26グリッドNo.1・No.2トレンチについては、水田跡の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な５分類群に限定した。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、シバ属

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、その他

5．考察

（1）稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1ｇあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

1）Ⅴ－26グリッドNo.1トレンチ（第339図）

最上位の暗褐色土層（試料1）から砂層と粘土の互層（試料16）までの層準について分析を行った。その結果、暗褐色土層（試料1）から褐色土層中位（試料6）までの各層準からイネが検出された。このうち、暗褐色土層の中下位（試料2、3）では、密度が5,300～6,100個／ｇと高い値であり、古墳時代とされる褐色土層（試料4）でも4,500個／ｇと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層準では、密度が3,000個／ｇ以下と比較的低いことから、稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の可能性も否定できない。

2）Ⅴ－26グリッドNo.2トレンチ（第340図）

最上位の暗褐色土層（試料1）から砂層と粘土の互層（試料16）までの層準について分析を行った。その結果、暗褐色土層（試料1）から暗褐色粘質土層（試料7）までの各層準からイネが検出された。このうち、暗褐色土層（試料1、2）および古墳時代とされる褐色土層（試料3～5）では密度が5,200～8,200個／ｇと高い値であり、その下位の暗褐色粘質土層（試料7）でも5,300個／ｇと高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

3）4SE005（第341図）

古墳時代前期とされる井戸内の堆積層（7層～10層）について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

（2）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

1）Ⅴ－26グリッドNo.1・No.2トレンチ

イネ以外の分類群では、古墳時代とされる褐色土層を中心にヨシ属やタケ亜科などが検出されたが、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると、褐色土層下部およびその下位の暗褐色粘質土層ではヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上の結果から、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、古墳時代もしくはそれ以前の時期に、そこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

２）4SE005

井戸内の堆積層（７層～10層）からは、海綿骨針が多量に検出され、ヨシ属、ウシクサ族型、ネザサ節型、クマザサ属型なども検出された。また、井戸底部付近の10層では、ブナ科（シイ属）やクスノキ科などの樹木（照葉樹）も検出された。おもな分類群の推定生産量によるとヨシ属が優勢となっていることが分かる。以上の結果から、4SE005の周辺は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたものと推定される。また、海綿動物に由来する海綿骨針が多量に検出されることから、何らかの形で海の影響を受けていた可能性も考えられる。

６．まとめ

分析の結果、古墳時代とされる褐色土層およびその下位の暗褐色粘質土層からは、イネの植物珪酸体（プラント・オパール）が多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、上位の暗褐色土層でも稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、古墳時代もしくはそれ以前の時期に、そこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

参考文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第２号，ｐ.27－37.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，ｐ.15－29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，ｐ.73－85.

表1　柳町遺跡Ⅶ区におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

分類群＼試料	Ⅴ−26グリッドNo.1トレンチ 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
イネ	23	53	61	45	30	22										
ヨシ属		15			23		30	45	8			15		8		
ススキ属型	15		8				8	7								
タケ亜科	23	15	8	8	45	45	38	52		8	8	8	8	15	8	8

推定生産量（単位：kg／m²・cm）

イネ	0.66	1.56	1.78	1.33	0.88	0.66										
ヨシ属		0.96			1.42		1.92	2.81	0.47		0.95			0.49		
ススキ属型	0.19		0.09				0.09	0.09								
タケ亜科	0.11	0.07	0.04	0.04	0.22	0.22	0.18	0.25		0.04	0.04	0.04	0.04	0.07	0.04	0.04

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度（単位：×100個／g）

分類群＼試料	Ⅴ−26グリッドNo.2トレンチ 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
イネ	60	52	60	82	60	38	53									
ヨシ属			8			8	15	22	7	30		8		8		
ススキ属型		7													8	
タケ亜科	15	15	8	15	22	38		30				15	8		15	

推定生産量（単位：kg／m²・cm）

イネ	1.77	1.54	1.77	2.42	1.76	1.11	1.56									
ヨシ属			0.48			0.48	0.96	1.41	0.47	1.92		0.48		0.48		
ススキ属型		0.09													0.09	
タケ亜科	0.07	0.07	0.04	0.07	0.11	0.18		0.14				0.77	0.04		0.07	

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表2　柳町遺跡Ⅶ区における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

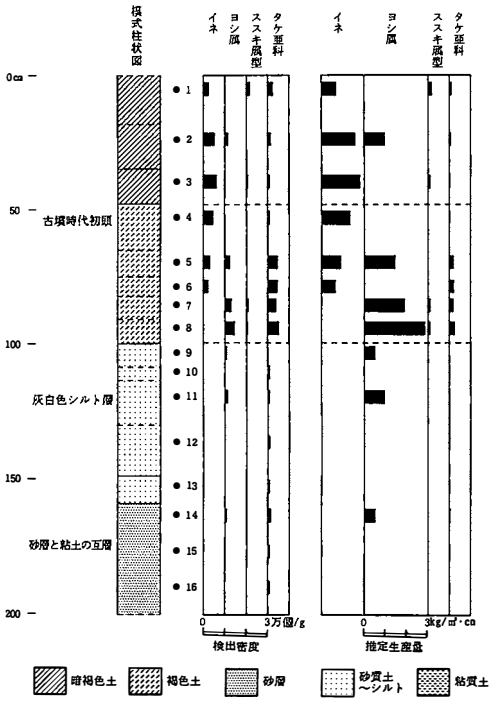
分類群 ＼ 試料	SE005（井戸） 7	8	9	10上	10下
イネ科					
ヨシ属	6	22	14		13
ススキ属型				7	13
ウシクサ族型	28	22	7	7	27
ウシクサ族型(大型)					13
シバ属	6		7		
タケ亜科					
メダケ節型	6				
ネザサ節型	6		14	14	7
クマザサ属型	17	29		36	27
ミヤコザサ節型				7	
未分類等	34	14	7	29	7
その他のイネ科					
表皮毛起源			7		
棒状珪酸体	78	65	83	58	46
茎部起源	11				13
未分類等	330	302	486	353	365
樹木起源					
ブナ科（シイ属）				7	
クスノキ科					7
その他				7	7
（海綿骨針）	106	151	381	230	133
植物珪酸体総数	519	453	624	525	544

おもな分類群の推定生産量（単位：kg／m²・cm）

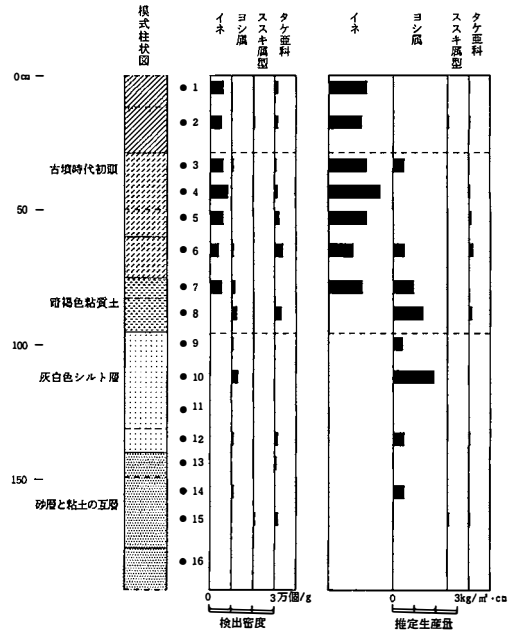
ヨシ属	0.35	1.36	0.88		0.84
ススキ属型				0.09	0.16
メダケ節型	0.06				
ネザサ節型	0.03		0.07	0.07	0.03
クマザサ属型	0.13	0.22		0.27	0.20
ミヤコザサ節型				0.02	

タケ亜科の比率（%）

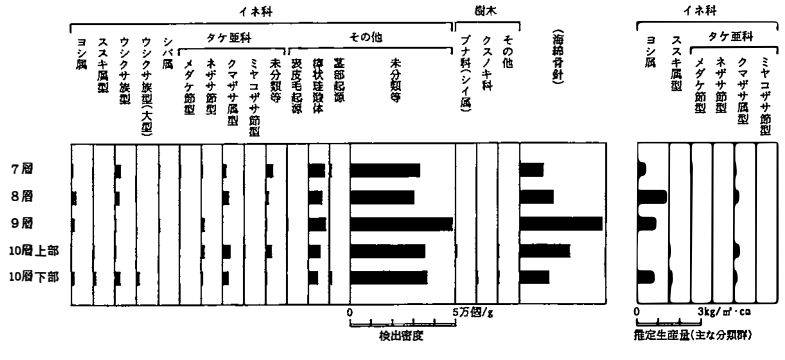
メダケ節型	30				
ネザサ節型	12		100	19	14
クマザサ属型	58	100		75	86
ミヤコザサ節型				6	



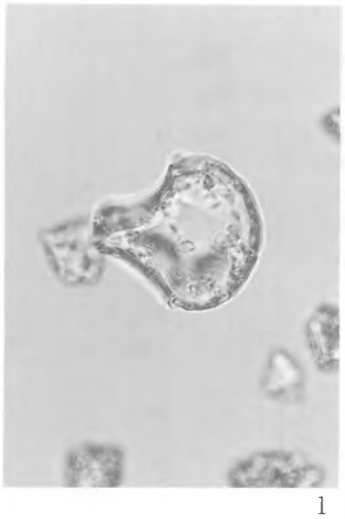
第339図　V−26グリッド No.1トレンチにおけるプラント・オパール分析結果

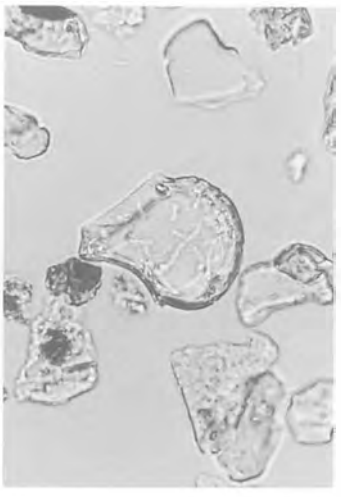


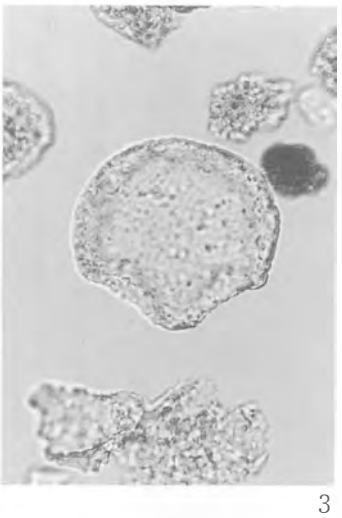
第340図　V−26グリッド No.2トレンチにおけるプラント・オパール分析結果



第341図　4SE005における植物珪酸体分析結果

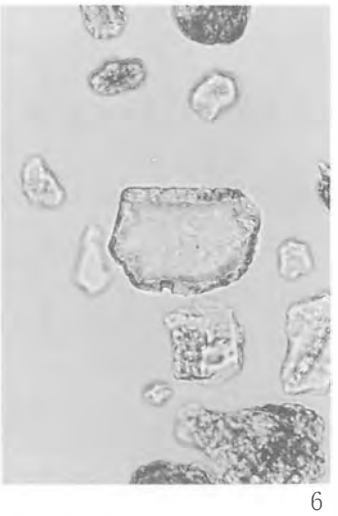

1


2


3

4

5


6

7

8

9

植物珪酸体の顕微鏡写真　－1－　　（倍率はすべて400倍）

10

11

12

No.	分　類　群	地点	試料名
1	イネ	No.2トレンチ	5
2	イネ	No.1トレンチ	2
3	ヨシ属	No.1トレンチ	2
4	シバ属	4SE005	9
5	ネザサ節型	4SE005	7
6	クマザサ属型	4SE005	10下
7	表皮毛起源	No.1トレンチ	14
8	イネ科の茎部起源	No.2トレンチ	11
9	ブナ科（シイ属）	No.2トレンチ	13
10	クスノキ科	No.1トレンチ	12
11	マンサク科（イスノキ属）	No.1トレンチ	3
12	海綿骨針	4SE005	8

0　50　100 μm

植物珪酸体の顕微鏡写真　－２－　（倍率はすべて400倍）

Ⅱ．柳町遺跡4SE005（井戸）における花粉分析

1．試料

試料は、古墳時代前期とされる4SE005（井戸）から採取された７層、８層、９層、10層上、10層下の５点である。

2．方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
2）水洗した後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。
5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類したが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

3．結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉29、樹木花粉と草本花粉を含むもの２、草本花粉12、シダ植物胞子２形態の計45である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ－シイ属－マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、キハダ属、モチノキ属、カエデ属、ブドウ属、ツバキ属、トネリコ属、ニワトコ属－ガマズミ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、カラハナソウ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、ツリフネソウ属、ノブドウ、セリ亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉の検出状況

最下位の10層下では、花粉がほとんど検出されなかった。8層～10層上では樹木花粉の占める割合が極めて高く、クリーシイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属が優占している。草本花粉では、イネ科やカヤツリグサ科などが低率に出現する。7層では、草本花粉の占める割合が増加し、イネ科とヨモギ属が優占してアカザ科－ヒユ科、アブラナ科、カラハナソウ属などが伴われる。他にクワ科－イラクサ科が増加する。

4．花粉分析から推定される植生と環境

8層～10層上の堆積当時は、4SE005の周辺はカシ類やシイ類を主とする照葉樹林が分布していたと考えられ、草本はあまり生育していなかったものと推定される。その後、7層の堆積当時には、イネ科やヨモギ属を主にアカザ科－ヒユ科、アブラナ科、カラハナソウ属などの草本、および草本を多く含むクワ科－イラクサ科が増加したと考えられる。これらの草本はいずれも人里植物であり、この時期に農耕を伴う集落等の人為環境が拡大したことを示している。

参考文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p．82－110．

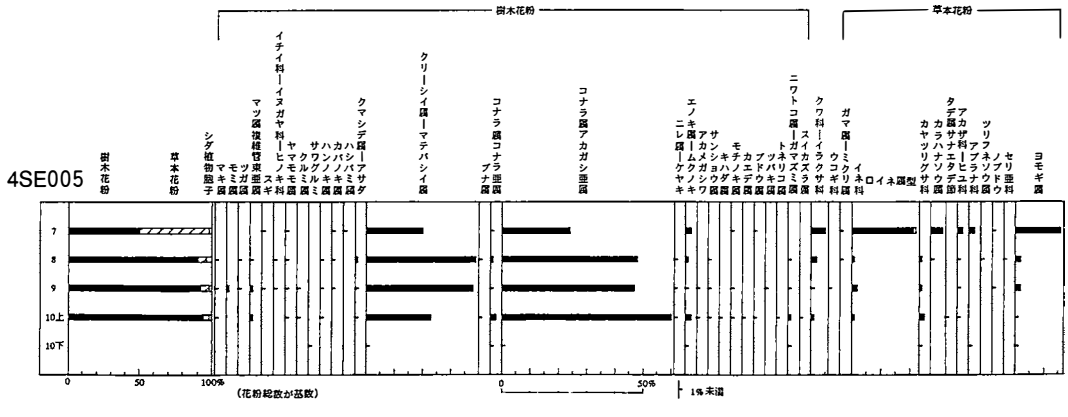
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p．248－262．

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p．

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p．

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p．187－193．

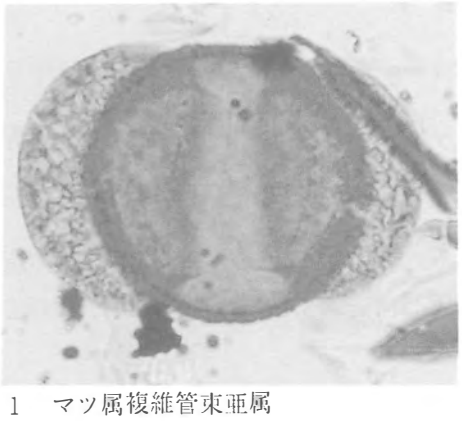
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p．21－30．



第342図　Ⅶ区における花粉ダイヤグラム

表3　柳町遺跡Ⅶ区における花粉分析結果

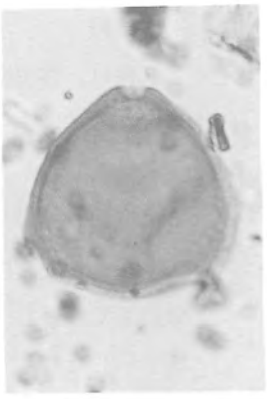
分類群		SE005				
学名	和名	7	8	9	10上	10下
Arboreal pollen	樹木花粉					
Podocarpus	マキ属		2	1	1	
Abies	モミ属			4		
Tsuga	ツガ属		1	1		
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属		2	4	4	
Cryptomeria japonica	スギ	1		1		
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科		1	1		
Myrica	ヤマモモ属	1	1	1	3	
Juglans	クルミ属			2	1	
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ					1
Alnus	ハンノキ属		3	1	3	
Betula	カバノキ属	1	1	2		
Corylus	ハシバミ属	1				
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属－アサダ		4	1	3	
Castanea crenata-Castanopsis-Pasania	クリ－シイ属－マテバシイ属	55	158	146	95	20
Fagus	ブナ属		1		1	
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1	5	3	8	2
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	64	195	183	247	26
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ		1	2	2	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属－ムクノキ	4	4	3	7	1
Mallotus japonicus	アカメガシワ			1	1	
Zanthoxylum	サンショウ属		1	1	1	
Phellodendron	キハダ属				1	
Ilex	モチノキ属	1		1	1	
Acer	カエデ属				1	
Vitis	ブドウ属	2			1	
Camellia	ツバキ属			1		
Fraxinus	トネリコ属				1	
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属－ガマズミ属		1	1	4	1
Lonicera	スイカズラ属				1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科	13	6	3	4	
Araliaceae	ウコギ科			1		
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Typha-Sparganium	ガマ属－ミクリ属	1	1			
Gramineae	イネ科	57	5	8	5	
Oryza type	イネ属型	2		1		
Cyperaceae	カヤツリグサ科		4	4	8	1
Humulus	カラハナソウ属	10	1			
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節				1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	6	3	1	1	
Cruciferae	アブラナ科	5				1
Impatiens	ツリフネソウ属		1			
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ	1		1		
Apiodeae	セリ亜科		1			
Artemisia	ヨモギ属	44	6	8	3	6
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	2	8	4	7	
Trilate type spore	三条溝胞子	2	7	3	3	1
Arboreal pollen	樹木花粉	131	381	361	387	51
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	13	6	4	4	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	126	22	23	18	8
Total pollen	花粉総数	270	409	388	409	59
Unknown pollen	未同定花粉	3	1	3	3	0
Fern spore	シダ植物胞子	4	15	7	10	1



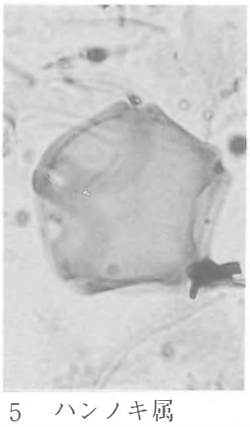
1　マツ属複維管束亜属

2　スギ

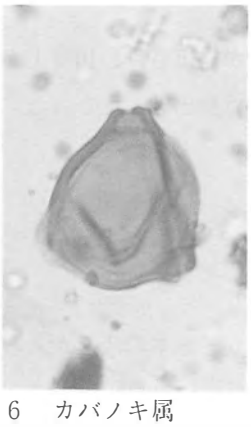
3　イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科



4　ヤマモモ属



5　ハンノキ属

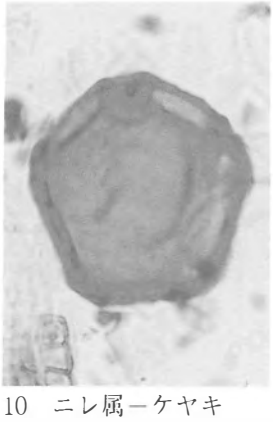


6　カバノキ属

7　クリ－イシ属

8　コナラ属コナラ亜属

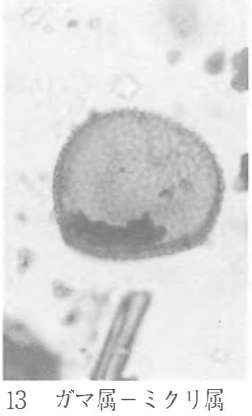
9　コナラ属アカガシ亜属



10　ニレ属－ケヤキ

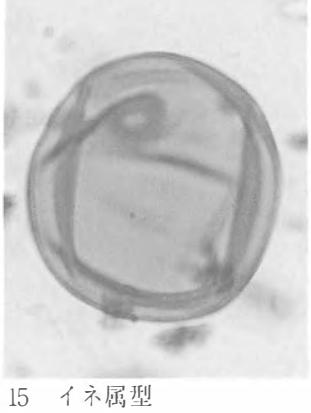
11　エノキ属－ムクノキ

12　サンショウ属

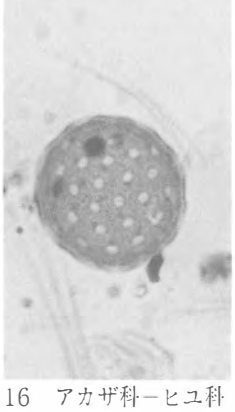


13　ガマ属－ミクリ属

14　イネ科



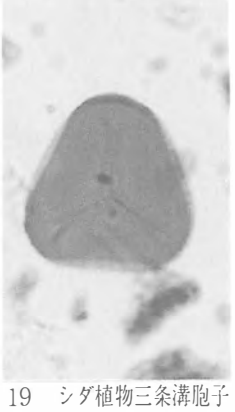
15　イネ属型



16　アカザ科－ヒユ科

17　セリ亜科

18　シダ植物単条溝胞子



19　シダ植物三条溝胞子

45μm

柳町遺跡出土花粉・胞子遺体顕微鏡写真

Ⅲ．柳町遺跡4SE005（井戸）における種実同定分析

1．試料

試料は、古墳時代前期とされる4SE005（井戸）から採取された７層、８層、９層、10層上、10層下の５点である。

2．方法

0.25mm 篩を用いて水洗選別を行った。試料の容量は400ccである。同定は、これらの残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴および現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

3．結果

７層からカヤツリグサ属、カタバミ属、アブラナ科、ナス科が検出され、10層上からアブラナ科が検出された。いずれも少量である。８層、９層、10層下からは、種実は検出されなかった。以下に、各分類群の形態的特徴を記す。

ａ．カヤツリグサ属　*Cyperus*　果実　カヤツリグサ科
　褐色～黒色で狭倒卵形を呈す。表面はやや粗い。

ｂ．カタバミ属　*Oxalis*　種子　カタバミ科
　茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に６～８本の隆起が走る。

ｃ．アブラナ科　*Cruciferae*　種子
　茶褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面には長方形の網目がある。

ｄ．ナス科　*Solanaceae*　種子
　黄褐色で円形を呈す。表面には網目模様がある。

4．種実同定分析から推定される植生と環境

７層の堆積当時は、周辺にアブラナ科、カヤツリグサ属、カタバミ属、ナス科などが生育していたと考えられ、人里や農耕地の環境であったものと推定される。８層～10層下では、種実がほとんど検出されなかった。

参考文献

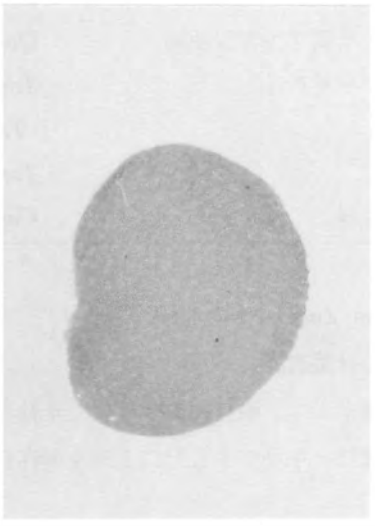
笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494ｐ．

1　カヤツリグサ属果実　0.5mm

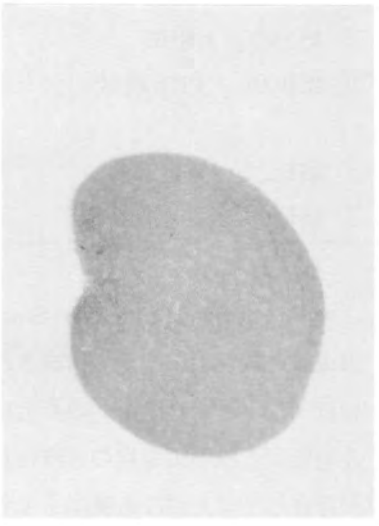
2　アブラナ科種子　0.5mm

3　アブラナ科種子　0.5mm

4　カタバミ属種子　0.5mm



5　ナス科種子　0.5mm



6　ナス科種子　0.5mm

柳町遺跡出土種実顕微鏡写真

表4　柳町遺跡Ⅶ区における種実同定結果　（試料500cc中0.25mm目篩）

分類群			4SE005				
学名	和名	部位	7層	8層	9層	10層上	10層下
Herb	草本						
Cyperus	カヤツリグサ属	果実	1				
Oxalis	カタバミ属	種子	1				
Cruciferae	アブラナ科	種子	3			1	
Solanaceae	ナス科	種子	1				
Tatal	合計		6			1	
Unknown	不明		1				

Ⅳ．柳町遺跡出土炭化材の樹種同定

1．試料

試料は、柳町遺跡から出土した炭化材５点である。

2．方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3．結果

結果を表１に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表５　柳町遺跡Ⅶ区出土炭化材の樹種同定結果

試料		樹種（和名／学名）	
① 4SI029	CS-05	散孔材	*diffuse-porous wood*
② 4SI029	CS-07	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*
③ 4SB001	Pit６柱材	カヤ－イチイ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
			-*Taxus cuspidata* Sieb. et Zucc.
④ 4SB034	Pit12柱材	カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
⑤ 4SE017	井戸枠材	シイ属	*Castanopsis*

a．カヤ　*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.　イチイ科　　写真１

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～４個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し２本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には２本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cm に達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

b．カヤ－イチイ　*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
-*Taxus cuspidata* Sieb. et Zucc.
イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞はヒノキ型を示すが、１分野における個数は不明瞭である。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在するが不明瞭である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁にはらせん肥厚が存在するが不明瞭である。

以上の形質より、カヤもしくはイチイのいずれかに同定される。カヤとイチイはらせん肥厚の特徴などで同

定できるが、本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であったため、カヤ－イチイの同定にとどめた。

ｃ．シイ属　*Castanopsis*　ブナ科　写真２

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属にはスダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無で同定できるが、本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であったため、シイ属の同定にとどめた。

ｄ．コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*　ブナ科　写真３

横断面：中型から大型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m 以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ｅ．散孔材　*diffuse-porous wood*

横断面：小型の道管が散在する。

放射断面：道管が存在する。

接線断面：放射組織が存在する。

以上の形質より散孔材に同定される。なお本試料は変形が激しく、保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であったため、散孔材の同定にとどめた。

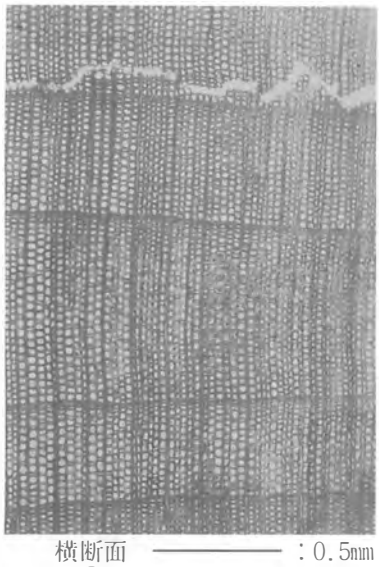
４．考察

同定された樹種は散孔材、コナラ属アカガシ亜属、カヤ－イチイ、カヤ、シイ属であった。これらは暖温帯に生育する樹木で、いずれも高木である。

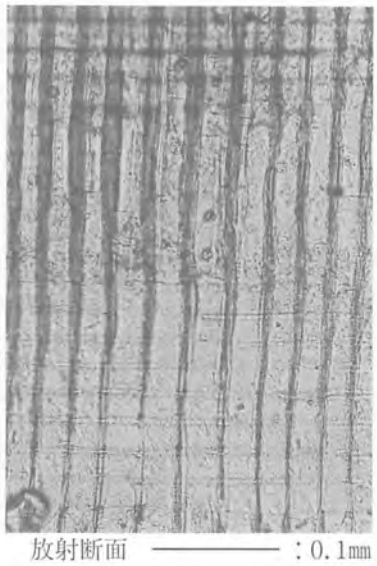
参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，ｐ.20－48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，ｐ.49－100.



横断面 ——— ：0.5㎜



放射断面 ——— ：0.1㎜

接線断面 ——— ：0.1㎜

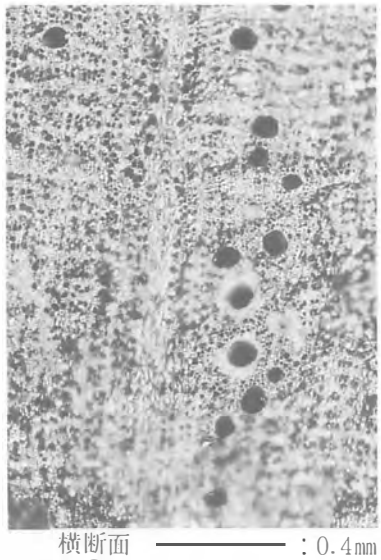
1．④　カヤ

横断面 ——— ：0.5㎜

放射断面 ——— ：0.2㎜

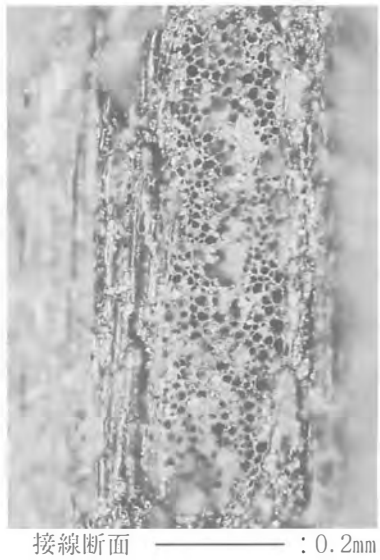
接線断面 ——— ：0.2㎜

2．⑤　シイ属



横断面 ——— ：0.4㎜

放射断面 ——— ：0.2㎜



接線断面 ——— ：0.2㎜

3．②　コナラ属アカガシ亜属

柳町遺跡出土木製品炭化材及び木材の顕微鏡写真

V．柳町遺跡における放射性炭素年代測定結果

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	4SI029	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No.2	4SI012	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析(AMS)法

2．測定結果

試料名	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代 交点（1σ）	測定No. (Beta－)
No.1	1690±70	－30.8	1600±60	AD440 (AD410～550)	113917
No.2	1440±50	－31.9	1330±50	AD680 (AD660～720) (AD735～760)	113916

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

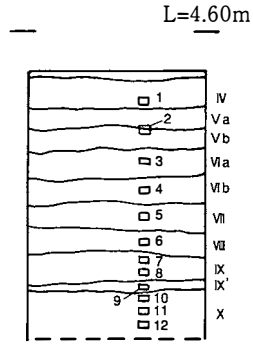
試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

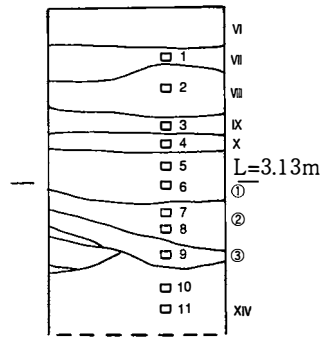
δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

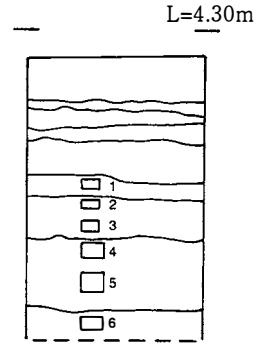
過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σは補正^{14}C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ値が表記される場合もある。



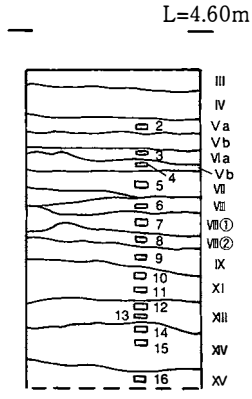
①南側ベルト土層断面図



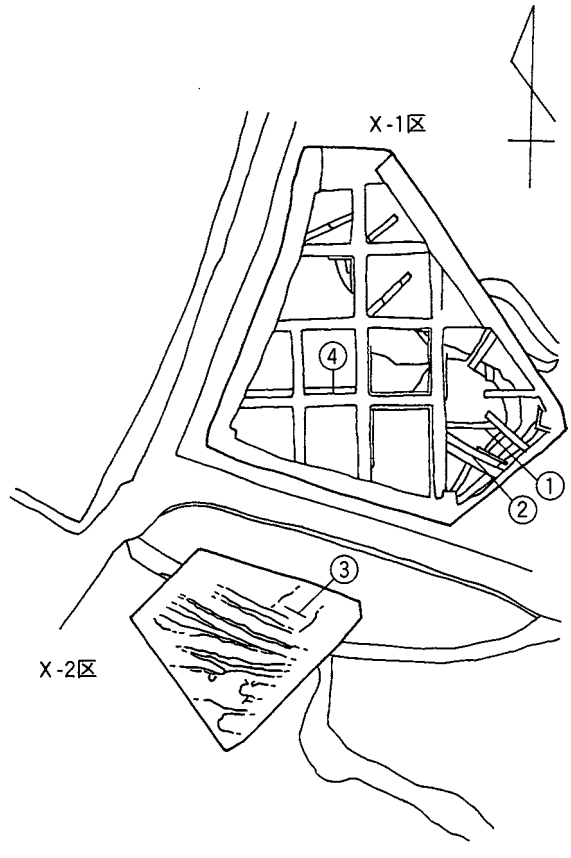
②第Xトレンチ北側土層断面図



③北東側壁の土層断面図



④南側壁土層断面図



第343図　X区分析試料採取地点位置図

第３節　熊本県、柳町遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．柳町遺跡における放射性炭素年代測定

１．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	j−40G　Ⅺ層	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No. 2	j−39G　Ⅸ層	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No. 3	j−39G　Ⅸ層	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

２．測定結果

試料名	^{14}C年代（年 BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年 BP）	暦年代（西暦）	測定 No. Beta−
No.1	2720±40	−26.0	2700±40	交点：cal BC830	141490
				1 σ：cal BC885～815	
				2 σ：cal BC915～805	
No.2	2560±40	−12.3	2770±40	交点：cal BC910	141491
				1 σ：cal BC940～845	
				2 σ：cal BC1000～825	
No.3	2400±40	−12.6	2600±40	交点：cal BC795	141492
				1 σ：cal BC810～785	
				2 σ：cal BC820～770	

１）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から、単純に現在（1950年 AD）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は国際慣例に従い5,568年を用いた。

２）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU−Th年代と^{14}C年代の比較により作成された補正曲線を使用した。最新のデータベース（“INTCAL98Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998,Radiocarbon40（３））により、約19,000年 BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年 BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68％確率）・２σ（95％確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

Ⅱ．柳町遺跡におけるプラント・オパール分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山、2000）。

２．試料

試料は、Ｘ－１区のｊ－40グリッド南側ベルト、ｊ－40グリッド流路状遺構（6SX049）、ｈ－39グリッド南側ベルト、Ｘ－２区のｈ－42グリッド北東側壁の４地点から採取された計46点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１ｇに対し直径約40μｍのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mg の精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}ｇ）をかけて、単位面積で層厚１cm あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

４．分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な５分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

５．考察

（１）水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１ｇあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、密

度が3,000個／ｇ程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個／ｇとして検討を行った。

1）j－40グリッド南側ベルト

Ⅳ層（試料１）から11層（試料12）までの層準について分析を行った。その結果、Ⅳ層（試料１）からＸ層（試料９）までの各層からイネが検出された。このうち、Ⅳ層（試料１）からⅧ層（試料６）までの各層では、密度が5,200～6,800個／ｇと高い値であり、Ⅸ層（試料７）でも4,500個／ｇと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

Ｘ層（試料９）では、密度が800個／ｇと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2）Ｘ－１区、j－40グリッド流路状遺構（6SX049）

Ⅶ層（試料１）からⅪ層（試料11）までの層準について分析を行った。その結果、Ⅶ層（試料１、２）、Ⅷ層（試料３）、①層（試料６）、②層（試料７）の各層からイネが検出された。このうち、Ⅶ層（試料１、２）とⅧ層（試料３）では、密度が3,000～3,800個／ｇと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

弥生時代前期とされる溝内堆積層の①層（試料６）と②層（試料７）では、密度が700～800個／ｇと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられるが、ここでは溝の周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で溝内にイネのプラント・オパールが混入したものと推定される。

3）Ｘ－１区、h－39グリッド南側ベルト

Ⅳ層（試料１）からⅩⅤ層（試料17）までの層準について分析を行った。その結果、Ⅳ層（試料１）からⅨ層（試料８）までの各層からイネが検出された。このうち、Ⅵａ層（試料３）では密度が9,700個／ｇとかなり高い値であり、Ⅳ層（試料１）、Ⅴａ層（試料２）、Ⅵｂ層（試料４）、Ⅷ層（試料７）、Ⅸ層（試料８）の各層でも5,200～6,800個／ｇと高い値である。また、Ⅶ層（試料５）でも3,000個／ｇと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。ｄ層（試料６）では、密度が800個／ｇと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

4）Ｘ－２区、h－42グリッド北東側壁

Ⅶ層（試料１）からⅫ層（試料６）までの層準について分析を行った。その結果、Ⅶ層（試料１）、Ⅷ層（試料２、３）、①層（試料４）の各層からイネが検出された。密度は、いずれも1,500～2,300個／ｇと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

（2）堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。

イネ以外の分類群では、下位層準を中心にヨシ属が比較的多く検出され、ススキ属型やタケ亜科は比較的少量である。おもな分類群の推定生産量によると、イネが出現した層準より下位層、および溝内堆積層では

ヨシ属が卓越していることが分かる。

以上のことから、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、弥生時代前期とされるⅨ層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。

６．まとめ

プラント・オパール分析の結果、弥生時代前期とされるⅨ層、およびその上位のⅧ層から古代とされるⅣ層までの各層からは、イネが多量に検出され、それぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、弥生時代前期とされる溝内堆積層からもイネが検出され、周辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、弥生時代前期とされるⅨ層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。

文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）.考古学と植物学. 同成社，ｐ．189－213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー．考古学と自然科学，９，ｐ．15－29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）ープラント・オパール分析による水田址の探査ー．考古学と自然科学，17，ｐ．73－85.

表1　柳町遺跡X区におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

分類群	学名 \ 地点・試料	j−40グリッド南側ベルト											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	52	52	68	60	68	52	45	23	8			
ヒエ属型	*Echinochloa* type											7	
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	7		23	7			15	8	23	37	37	38
ススキ属型	*Miscanthus* type	7			22					8	7	7	8
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	37		23	22	15	22	15	38	23	30	30	15

推定生産量（単位：kg／m²・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	1.54	1.54	1.99	1.76	1.99	1.54	1.32	0.66	0.22			
ヒエ属型	*Echinochloa* type											0.63	
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	0.47		1.42	0.47			0.94	0.48	1.44	2.36	2.36	2.37
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.09			0.28					0.09	0.09	0.09	0.09
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.18		0.11	0.11	0.07	0.11	0.07	0.18	0.11	0.14	0.14	0.07

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度（単位：×100個／g）

分類群	学名 \ 地点・試料	h−39グリッド南側ベルト																
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	67	61	97	68	30	8	60	52									
ヒエ属型	*Echinochloa* type																	
ヨシ属	*Phragmites* (reed)			7						22	15	8	8	15	15	15	45	15
ススキ属型	*Miscanthus* type		30	7	8	7		7	7	7	7	8	31	8	8		8	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	15	15		15	37	30	7	37	30	75	38	15	23	23	15	45	7

推定生産量（単位：kg／m²・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	1.98	1.78	2.87	2.00	0.88	0.22	1.75	1.54									
ヒエ属型	*Echinochloa* type																	
ヨシ属	*Phragmites* (reed)			0.47						1.42	0.94	0.47	0.48	0.95	0.95	0.94	2.87	0.94
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.38	0.09	0.09	0.09		0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.38	0.09	0.09		0.09	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.07	0.07		0.07	0.18	0.14	0.04	0.18	0.14	0.36	0.18	0.07	0.11	0.11	0.07	0.22	0.04

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度（単位：×100個／g）

分類群	学名 \ 地点・試料	j−40グリッド流路状遺構										
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	38	38	30			7	8				
ヒエ属型	*Echinochloa* type											
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	8	8	15	15	22	15	60	45	7		
ススキ属型	*Miscanthus* type	8	15		8		15	8			15	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	15	38	15	23	60	30	15	30	15	15	23

推定生産量（単位：kg／m²・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	1.11	1.12	0.88			0.22	0.22				
ヒエ属型	*Echinochloa* type											
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	0.48	0.48	0.94	0.95	1.41	0.94	3.79	2.83	0.47		
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.09	0.19		0.09		0.19	0.09			0.19	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.07	0.18	0.07	0.11	0.29	0.14	0.07	0.14	0.07	0.07	0.11

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

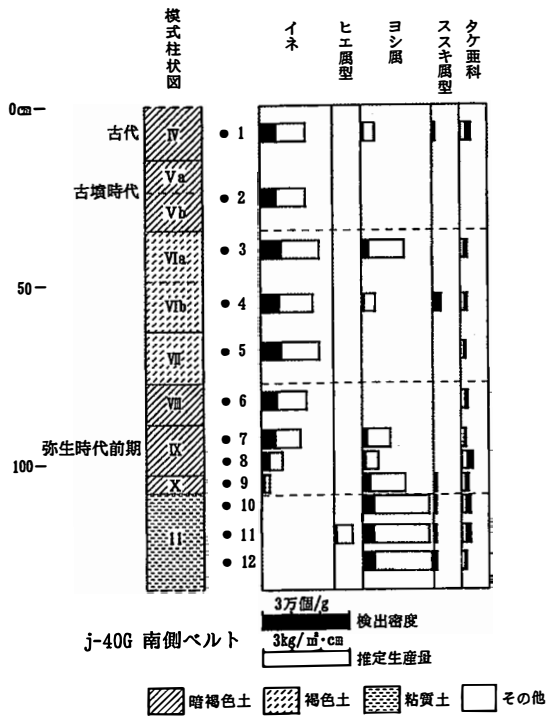
検出密度（単位：×100個／g）

分類群	学名 \ 地点・試料	h−42グリッド北東側壁					
		1	2	3	4	5	6
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	23	15	7	8		
ヒエ属型	*Echinochloa* type						
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	38			30	37	
ススキ属型	*Miscanthus* type	45			8		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	15	37	52	38	52	23

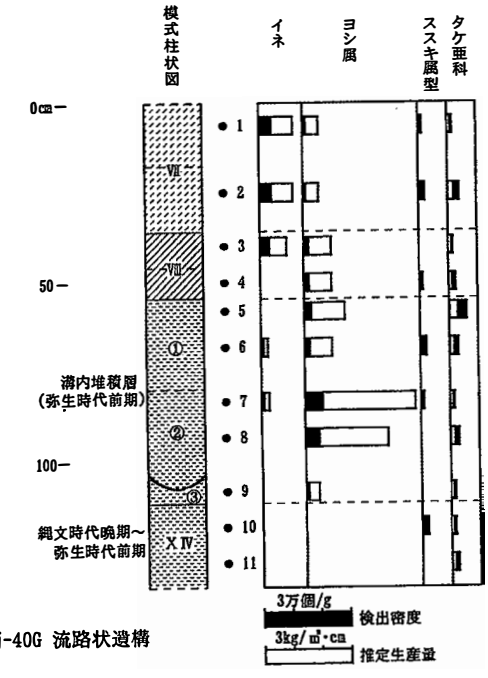
推定生産量（単位：kg／m²・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	0.66	0.44	0.22	0.22		
ヒエ属型	*Echinochloa* type						
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	2.37			1.92	2.36	
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.56			0.09		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.07	0.18	0.25	0.18	0.25	0.11

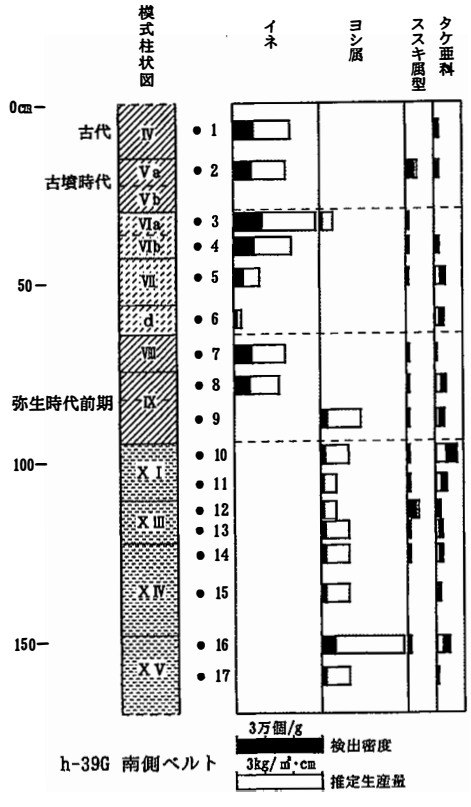
※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



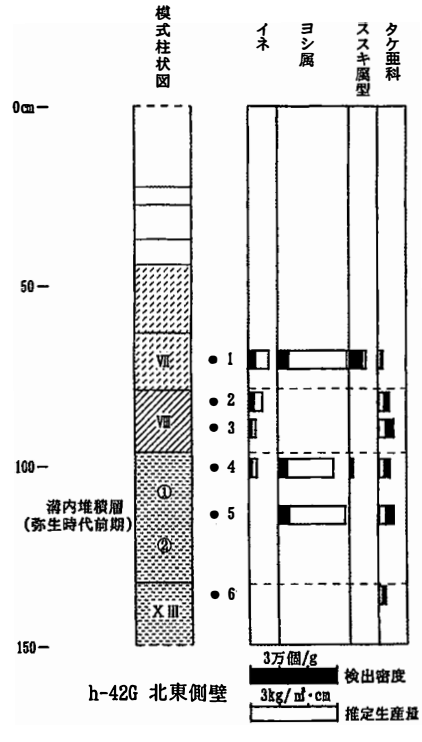
j-40G 南側ベルト



j-40G 流路状遺構



h-39G 南側ベルト



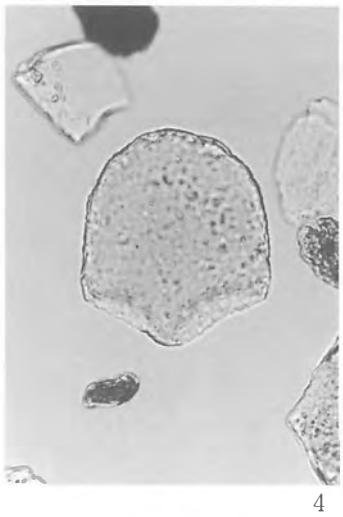
h-42G 北東側壁

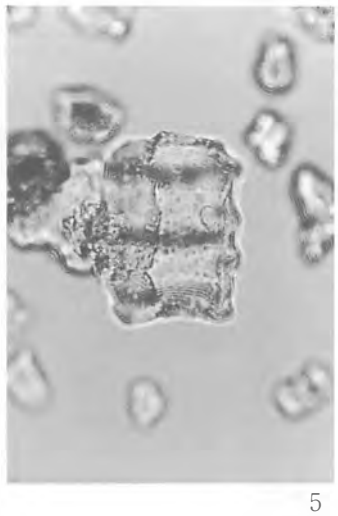
第344図　X区におけるプラント・オパール分析結果

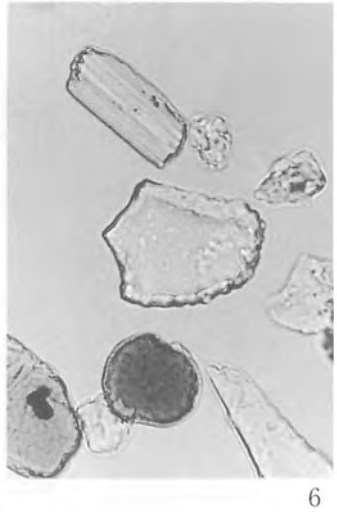
1

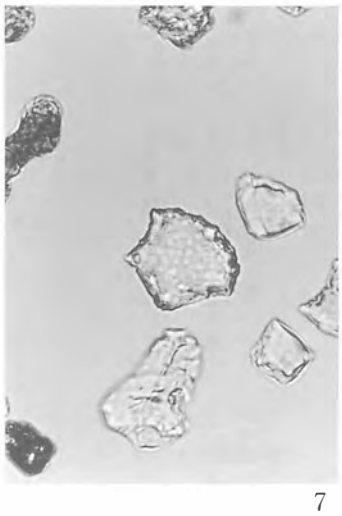
2

3

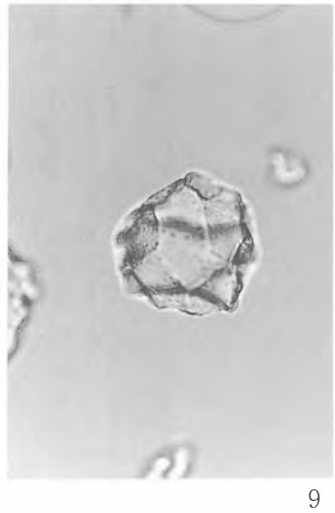

4


5


6


7

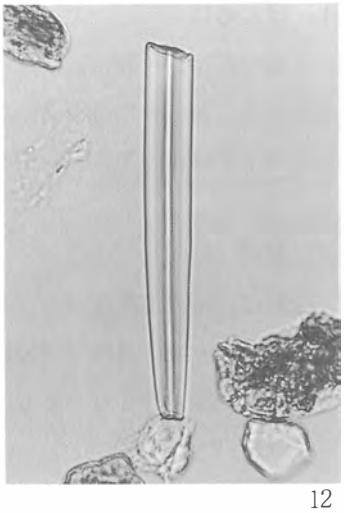
8


9

植物珪酸体の顕微鏡写真　－1－　　（倍率はすべて400倍）

10

11



12

No.	分　類　群	地点	試料名
1	イネ	j－40グリッド	3
2	イネ	h－39グリッド	1
3	イネ	6SX049	2
4	ヨシ属	j－40グリッド	3
5	ネザサ節型	h－39グリッド	13
6	クマザサ属型	j－40グリッド	11
7	ミヤコザサ節型	h－39グリッド	1
8	イネ科の茎部起源	h－39グリッド	13
9	ブナ科（シイ属）	h－39グリッド	2
10	クスノキ科	h－39グリッド	12
11	マンサク科（イスノキ属）	h－39グリッド	1
12	海綿骨針	j－40グリッド	12

植物珪酸体の顕微鏡写真　－２－　　（倍率はすべて400倍）

Ⅲ．柳町遺跡における花粉分析

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地堆積物を対象として比較的広域な地域の植生や古環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

2．試料

試料は、平成９年度調査で出土した井戸跡（4SE017）から採取された木枠内中～下層、平成10年度調査で出土した大溝状遺構（5SX049）から採取されたＤ層とＥ層、および大溝状遺構（5SX051）から採取されたＥ層とＦ層の計５点である。

3．方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
2）水洗した後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。
5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。

花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4．結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉27、樹木花粉と草本花粉を含むもの４、草本花粉22、シダ植物胞子２形態の計55である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科ーイヌガヤ科－ヒノキ科、ヤマモモ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリーシイ属－マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、ウルシ属、モチノキ属、カエデ属、ブドウ属、グミ属、モクセイ科、ニワトコ属－ガマ

ズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ノブドウ、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（２）花粉群集の特徴

１）井戸跡（4SE017）の木枠内中～下層（第345図）

草本花粉の占める割合が高く、イネ科が優占する。草本花粉では、他にヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、カヤツリグサ科の出現率が比較的高く、オモダカ属、ミズアオイ属、ソバ属が伴われる。樹木花粉はクリ－シイ属－マテバシイ属（生態上からシイ類と考えられる）、コナラ属アカガシ亜属（生態上からカシ類と考えられる）の出現率がやや高い。

２）大溝状遺構（5SX049）のＤ層とＥ層（第346図）

草本花粉ではイネ科の出現率が高く、ヨモギ属もやや高い。他にカヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、クリ－シイ属－マテバシイ属が主に出現する。Ｅ層ではクワ科－イラクサ科（生態上からカラムシと考えられる）の出現率が高い。

３）大溝状遺構（5SX051）のＥ層とＦ層（第347図）

下位のＦ層からは、花粉がほとんど検出されなかった。上位のＥ層では樹木花粉の占める割合が高く、コナラ属アカガシ亜属が優占し、クリ－シイ属－マテバシイ属の出現率も高い。草本花粉は低率であるが、イネ科やガマ属－ミクリ属が伴われる。

５．花粉分析から推定される植生と環境

（１）井戸跡（4SE017）

古代とされる井戸跡の木枠内中～下層の堆積当時は、ソバ属などの畑作が行われていたと考えられ、周辺はイネ科をはじめヨモギ属、アカザ科－ヒユ科などが多く生育する比較的乾燥した人里の環境であったと推定される。森林植生としては、周辺地域にシイ類やカシ類などの照葉樹林が分布していたと推定される。

（２）大溝状遺構（5SX049）

古墳時代前期とされる大溝状遺構のＤ層とＥ層の堆積当時は、イネ科を主にヨモギ属やカラムシなどが生育する比較的乾燥した人里の環境であったと推定される。森林植生としては、周辺地域にシイ類やカシ類などの照葉樹林が分布していたと推定される。

（３）大溝状遺構（5SX051）のＥ層とＦ層

古墳時代前期とされる大溝状遺構のＥ層の堆積当時は、近隣にシイ類やカシ類などの照葉樹林が分布していたと推定される。また、遺構内はガマ属－ミクリ属などが生育する水域の環境であったと考えられる。

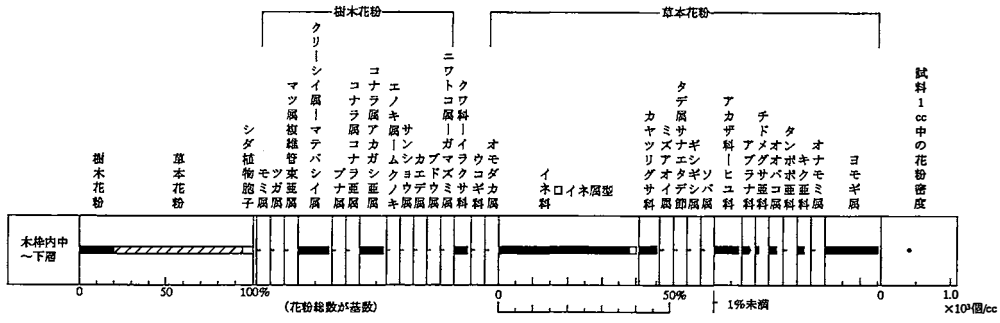
Ｆ層からは、花粉がほとんど検出されなかった。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことや、水流による淘汰を受けたことなどが考えられる。

文献

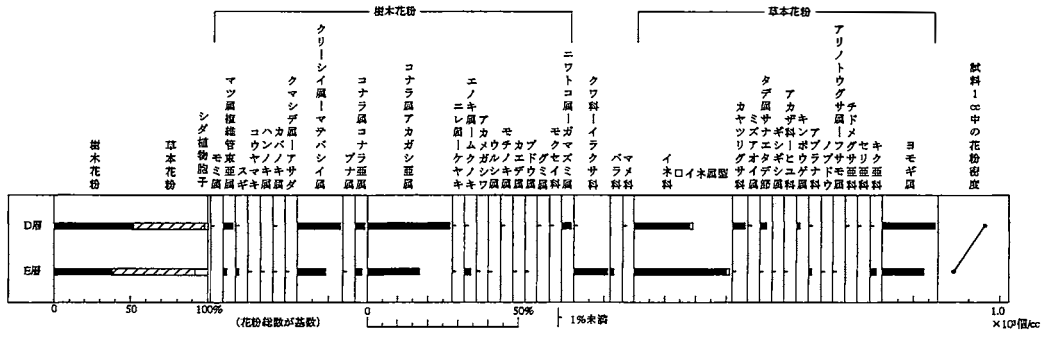
中村純（1973）花粉分析．古今書院，ｐ．82－110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，ｐ．248－262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60ｐ．
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91ｐ．
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，ｐ．187－193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，ｐ．21－30.

表2　柳町遺跡における花粉分析結果

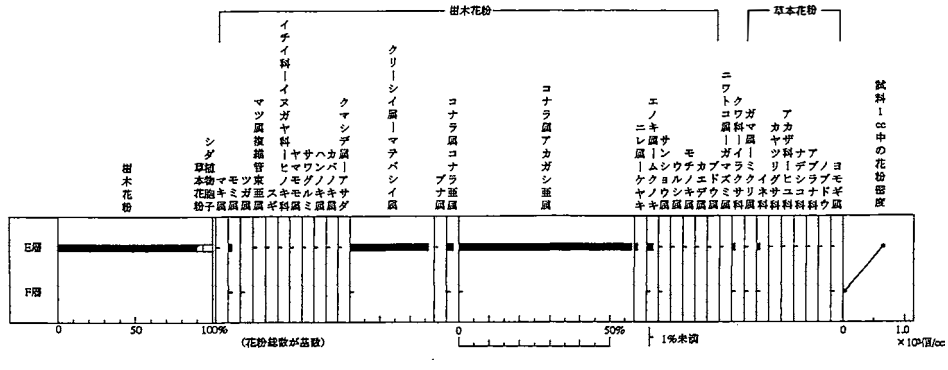
分類群		4SE017	5SX049		5SX051	
学名	和名	木枠内中～下層	D層	E層	E層	F層
Arboreal pollen	樹木花粉					
Podocarpus	マキ属				1	
Abies	モミ属	2	3		5	2
Tsuga	ツガ属	2				1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	3	12	3	4	
Cryptomeria japonica	スギ		2	4	1	
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ			1		
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科				1	
Myrica	ヤマモモ属				1	
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ				1	
Alnus	ハンノキ属			2	2	
Betula	カバノキ属		3	1	1	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属－アサダ			1	1	
Castanea crenata-Castanopsis-Pasar	クリ－シイ属－マテバシイ属	32	60	26	122	6
Fagus	ブナ属	1		1	2	
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	3	11	7	8	3
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	25	115	51	264	27
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ		1	1	5	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属－ムクノキ	1	1	7	11	1
Mallotus japonicus	アカメガシワ			1		
Zanthoxylum	サンショウ属	1			1	1
Rhus	ウルシ属			1	2	
Ilex	モチノキ属		4		1	
Acer	カエデ属	1		1	3	
Vitis	ブドウ属	1		1	1	
Elaeagnus	グミ属		1			
Oleaceae	モクセイ科		2			
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属－ガマズミ属	1	12		1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科	14	2	34	6	1
Rosaceae	バラ科					
Leguminosae	マメ科		2			
Araliaceae	ウコギ科	1				
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Typha-Sparganium	ガマ属－ミクリ属				1	1
Sagittaria	オモダカ属	1				
Gramineae	イネ科	142	75	92	6	1
Oryza type	イネ属型	6	3	4	2	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	19	19	2	1	
Monochoria	ミズアオイ属	2	2			
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	1	8	2		
Rumex	ギシギシ属	3		1		
Fagopyrum	ソバ属	3				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	29		2	2	
Caryophyllaceae	ナデシコ科				1	
Ranunculus	キンポウゲ属		6			
Cruciferae	アブラナ科	7	4	4	2	
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ			1	1	
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属－フサモ属			1		
Hydrocetyloideae	チドメグサ亜科	4	1			
Apiodeae	セリ亜科		2			
Plantago	オオバコ属	6				
Lactucoideae	タンポポ亜科	1				
Asteroideae	キク亜科	7	3	7		
Xanthium	オナモミ属	2				
Artemisia	ヨモギ属	57	74	40	3	3
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	12	7	22	20	2
Trilate type spore	三条溝胞子	10	4	4	11	3
Arboreal pollen	樹木花粉	73	227	109	439	41
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	15	4	38	6	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	290	197	156	19	5
Total pollen	花粉総数	378	428	303	464	47
	試料1cc中の花粉密度	4.0 $\times10^3$	7.7 $\times10^3$	2.7 $\times10^3$	6.5 $\times10^3$	3.3 $\times10^2$
Unknown pollen	未同定花粉	4	7	6	5	0
Fern spore	シダ植物胞子	22	11	26	31	5
Helminth eggs	寄生虫卵	(－)	(－)	(－)	(－)	(－)
	明らかな消化残渣	(－)	(－)	(－)	(－)	(－)



第345図　4SE017における花粉組成図

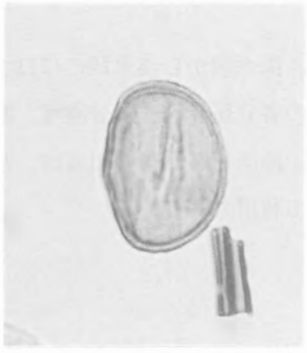


第346図　5SX049における花粉組成図

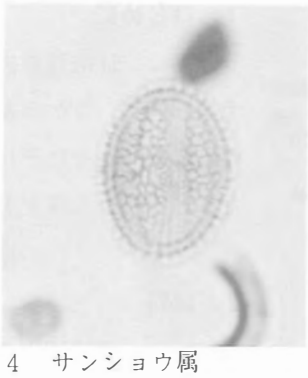


第347図　5SX051における花粉組成図

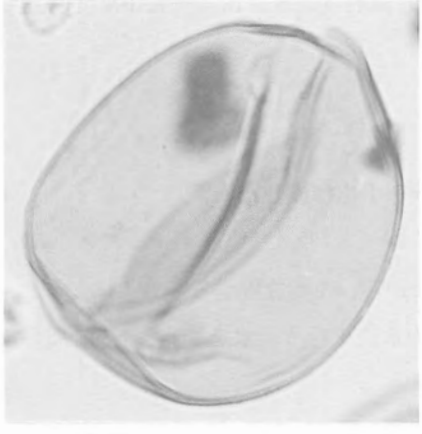
1　コナラ属コナラ亜属

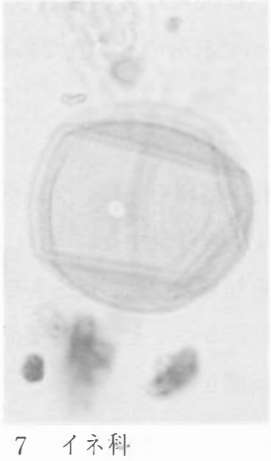

2　コナラ属アカガシ亜属

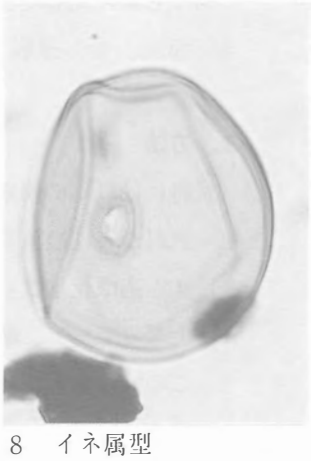
3　エノキ属－ムクノキ

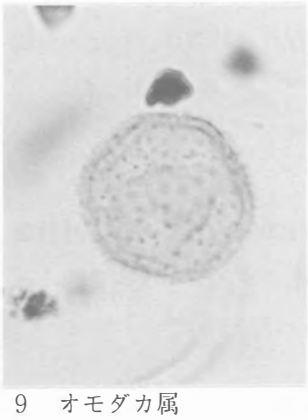

4　サンショウ属

5　ブドウ属

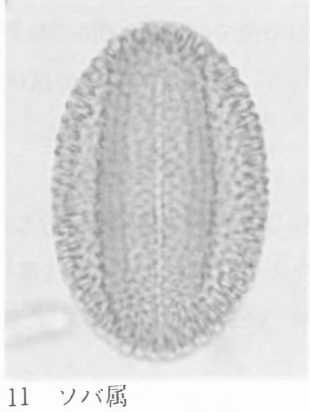

6　イネ科


7　イネ科


8　イネ属型


9　オモダカ属

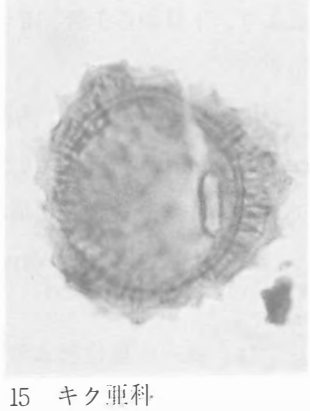
10　カヤツリグサ科


11　ソバ属

12　アカザ科－ヒユ科

13　チドメグサ亜科

14　タンポポ亜科


15　キク亜科

16　ヨモギ属

10μm

柳町遺跡出土花粉顕微鏡写真

Ⅳ．柳町遺跡における珪藻分析

１．はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域、および湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

２．試料

試料は、平成10年度調査で出土した大溝状遺構（5SX051）から採取されたＥ層とＦ層、平成11年度調査で出土した流路状遺構（6SX049）から採取された試料６、８、10、平成10年度調査で出土した大溝状遺構（5SX049）から採取されたＥ層の計５点である。

３．方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

１）試料から乾燥重量１ｇを秤量する。

２）10％過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、１晩放置する。

３）上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を５、６回繰り返す。

４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600～1000倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が100個体以上にまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

４．結果

試料から出現した珪藻は、真－中塩性種52分類群、中－貧塩性種１、貧塩性種129分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表１に示す。また、珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図１～図３に示す。流路状遺構（6SX049）については、珪藻分析結果から分帯区分を行った。

（１）流路状遺構（6SX049）

珪藻群集の構成と組成より、下位からⅠ帯、Ⅱ帯、Ⅲ帯の珪藻分帯を設定した。以下に、珪藻分帯に基づいて珪藻群集の特徴を示す。

Ⅰ帯（Ⅺ層、試料10）では、真－中塩性種、内湾環境指標種群の *Paralia sulcata* が優占し、*Cyclotella stylorum*、*Coscinodiscus marginatus* が伴われる。他に、貧塩性種もやや低率に出現しており、*Achnanthes lanceolata* などの好流水性種、中～下流性河川環境指標種群や、*Fragilaria construens v.venter* などの好止水性種が検出される。また、陸生珪藻の *Navicula contenta*、*Navicula mutica* なども低率であるが出現する。

Ⅱ帯（②層、試料８）では、真－中塩性種よりも貧塩性種の占める割合が高くなる。貧塩性種では、*Achnanthes lanceolata* などの好流水性種、中～下流性河川環境指標種群、*Navicula mutica*、*Navicula contenta*、*Bacillaria paradoxa* などの陸生珪藻、*Navicula pupula*、*Navicula pupula v.rectangularis*、*Nitzschia tryblionella* などが低率に出現する。また、*Fragilaria construens*、*Fragilaria construens*

v.venter などの好止水性種も検出される。

Ⅲ帯(①層、試料６)では、貧塩性種の出現率が高くなり、好止水性種の *Fragilaria construens*、*Fragilaria pinnata*、*Fragilaria construens v.venter* などが多く検出される。他に、各生態性が不定性の *Navicula pupula*、好流水性種の *Navicula elginensis v.neglecta* や陸生珪藻も低率に出現する。真－中塩性種では、内湾環境指標種群の *Paralia sulcata*、*Coscinodiscus marginatus*、*Cyclotella stylorum* などが低率に検出される。

（２）大溝状遺構（5SX051）

Ｅ層とＦ層では、真－中塩性種の出現率が高く、内湾環境指標種群の *Paralia sulcata*、*Cyclotella stylorum* が優占する。他に、*Achnanthes brevipes* などの海水砂質干潟環境指標種群、*Diploneis smithii*、*Nitzschia granulata* などの海水泥質干潟環境指標種群などが伴われる。中－貧塩性種では *Rhopalodia gibberula*、貧塩性種では好流水性種、中～下流性河川環境指標種群である *Achnanthes lanceolata*、好止水性種の *Amphora ovalis*、*Fragilaria construens v.venter*、陸生珪藻の *Navicula mutica* などが低率に検出される。

（３）大溝状遺構（5SX049）

Ｅ層では、真－中塩性種よりも貧塩性種の占める割合が大きい。貧塩性種では、*Gomphonema angustatum*、*Navicula kotschyi* など、各生態性が不定性である種の出現率が高い。また、*Amphora ovalis*、*Fragilaria construens v.venter* などの真－好止水性種、*Achnanthes lanceolata* などの好流水性種、中～下流性河川環境指標種群が検出される。他に、*Pinnularia subcapitata*、*Navicula mutica* などの陸生珪藻、*Navicula elginensis*、*Gomphonema gracile* など沼沢湿地付着生環境指標種群も低率に出現する。真－中塩性種では、*Thalassiosira spp.* などの内湾環境指標種群、*Achnanthes haukiana* などの海水砂質干潟環境指標種群が検出される。

５．珪藻分析から推定される堆積環境

（１）流路状遺構（6SX049）

縄文時代晩期～弥生時代前期とされるⅪ層の堆積当時は、真－中塩性種の内湾環境指標種群の出現率が高いが、貧塩性種の好流水性種、中～下流性河川環境指標種群や陸生珪藻も検出されることから、河川などの淡水の影響がある内湾の環境や、内湾に隣接する堆積環境が推定される。

弥生時代前期とされる流路状遺構内（①層、②層）は、貧塩性種の好止水性種をはじめ、貧塩性種の好流水性種、中～下流性河川の環境指標種群や陸生珪藻も検出されることから、河川の影響がある止水域で沼沢地の環境が推定される。また、真－中塩性種の内湾環境指標種群が伴われることから、海水ないし汽水の影響も考えられる。

（２）大溝状遺構（5SX051）

古墳時代前期とされるＥ層とＦ層の堆積当時は、真－中塩性種の内湾環境指標種群の出現率が高く、海水砂質干潟環境指標種群、海水泥質干潟環境指標種群なども検出されることから、内湾から干潟の環境が推定される。また、貧塩性種の好流水性種、中～下流性河川の環境指標種群、止水性種、陸生珪藻も検出されることから、河川および淡水域の影響も考えられる。

（３）大溝状遺構（5SX049）

古墳時代前期とされるＥ層の堆積当時は、貧塩性種の陸生珪藻、好止水性種、不定性種、好流水性種、中～下流性河川環境指標種、沼沢湿地付着生環境指標種群および真－中塩性種の内湾環境指標種などが多様に出現することから、海水ないし汽水の影響のある内湾ないし干潟に隣接する沼沢地の環境であったと推定される。

文献

Lowe,R.L.（1974）Environmental Requirements and pollusion tolerance of fresh－water diatoms.333ｐ.,National Environmental Reserch.Center.

Hustedt,F.（1937－1938）Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda－Expedition.Arch.Hydrobiol,Suppl.15,ｐ．131－506.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第１号，植生史研究会，ｐ29－44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，ｐ１－20.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，ｐ73－88.

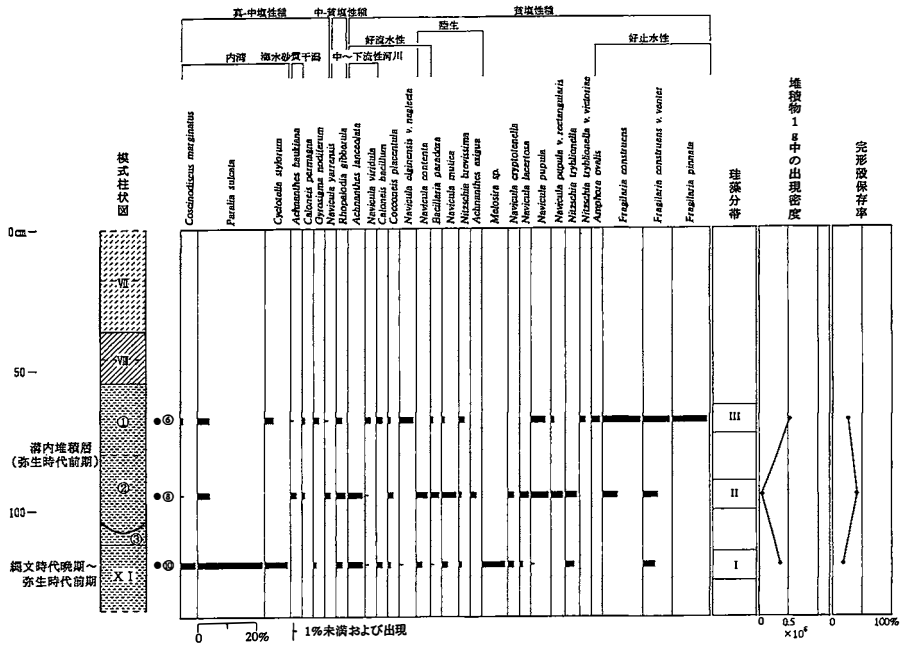
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，９，ｐ23－45.

表３　柳町遺跡Ⅷ・Ｘ区における珪藻分析結果　－１－

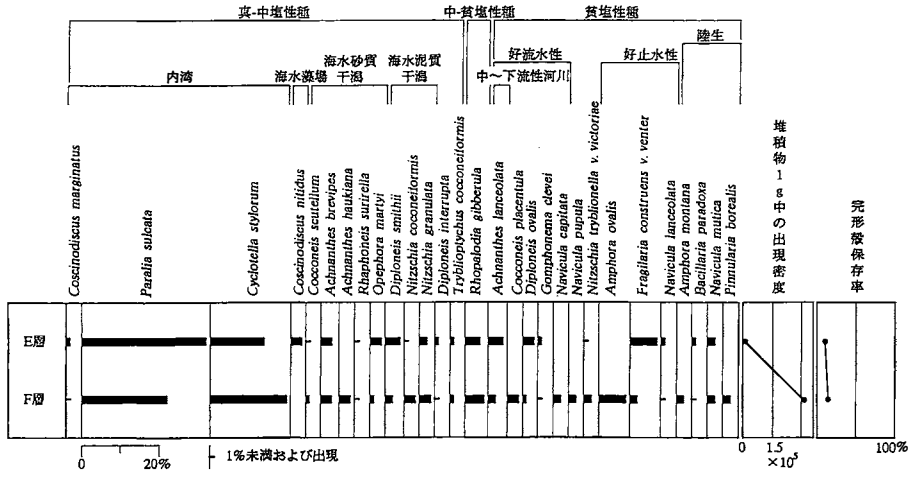
種類	6SX049			5SX051		5SX049
	j－40内溝⑥	j－40内溝⑧	j－40G⑩	E層	F層	E層
真－中塩性種（海－汽水生種）						
Achnanthes brevipes	1	3	3	6	6	4
Achnanthes brevipes v. angustata	1					
Achnanthes delicatula			3			
Achnanthes haukiana	2	8			5	10
Actinocyclus ehrenbergii	1			1		1
Actinocyclus normanii			1	1		
Actinoptychus senarius	1		1	2		
Amphora coffeaeformis			1			
Asteromphalus flabellatus				1		
Bacillaria paxillifer	4	12	2	3	1	
Caloneis permagna	5	4				
Cocconeis scutellum		1		2	2	
Coscinodiscus curvatulus				1	1	
Coscinodiscus marginatus	5	1	12	4	1	1
Coscinodiscus nitidys	1			10		
Coscinodiscus subutilis		1				
Cyclotella stylorum	11		20	42	30	8
Cymatotheca weissflogii		5				
Diploneis interrupta				3	1	
Diploneis smithii	1	2	1	11	4	1
Diploneis splendica	1					
Diploneis weissflogii		1	1	1		
Grammatoph ·a macilenta		1				
Gyrosigma balticum		6				
Gyrosigma nodiferum	7		3			
Gyrosigma sp.						2
Hemidiscus weissflogii	1		7			1
Paralia sulcata	18	14	58	97	42	9
Navicula lacertosa		10	3			
Navicula marina	1					
Navicula yarrensis	2	8		1		
Nitzschia cocconeiformis	1	1	1	2	5	1
Nitzschia constricta			1			
Nitzschia gracile					2	
Nitzschia granulata	2	1	4	7	5	2
Nitzschia lorenziana	2					
Nitzschia punctata	1		3	2		
Nitzschia sigma	3	5	1			1
Nitzschia tryblionella		15	8			3
Nitzschia tryblionella v. debilis						2
Nitzschia tryblionella v. victoriae	9			1	4	
Opephora martyi	2	2	2	8	2	1
Pleurosigma fascila		2				
Rhaphoneis surirella	1	1	3	2	1	
Rhoicosphenia abbreviata					1	
Surirella fastuosa v. recedens	3	2				
Thalassiosira bramaptrae						1
Thalassiosira oestrupii			1			
Thalassiosira spp.					1	22
Trachyneis aspera					1	
Trybliоptychus cocconeiformis	1	1	2	4	2	
中－貧塩性種（汽－淡水生種）						
Rhopalodia gibberula	6	13	4	11	9	
貧塩性種（淡水生種）						
Achnanthes clevei			1			
Achnanthes crenulata				1		
Achnanthes exigua		9				
Achnanthes hungarica	1			1		
Achnanthes inflata	1					
Achnanthes lanceolata		20	12	13	3	13
Achnanthes minutissima		2				
Achnanthes montana			1			
Achnanthes rostrata			3	1		
Amphora lusiae				1		
Amphora montana	2		3		4	
Amphora ovalis	13				13	24
Asteromphalus flabellatus				1		
Aulacoseira ambigua	5	1		2	1	1
Aulacoseira granulata			1			
Caloneis bacillum	8		4			1
Caloneis lauta	1	3				
Caloneis silicula	2	2			1	1
Cocconeis placentula						3
Cocconeis placentula	5	8	3		6	
Cymbella affinis		1				
Cymbella cuspidate	1					
Cymbella minuta	1	1	1	1	1	1
Cymbella naviculiformis	1	1				3
Cymbella sinuate	2		2			
Cymbella tumida	1	1	1	2		
Diatomella balfouriana				1		
Diploneis ovalis	3		5	9	2	2
Diploneis yatukaensis	2		1	1	1	3
Epithemia adnata		1		1		
Eunotia curvata		1				
Eunotia pectinalis v. minor			1			2
Eunotia praerupta v. bidens			1			
Fragilaria construens	56	20				2
Fragilaria construens v. binodis	1	1				
Fragilaria construens v. venter	39	20	10	20	3	9

表４　柳町遺跡Ⅷ・Ｘ区における珪藻分析結果　－２－

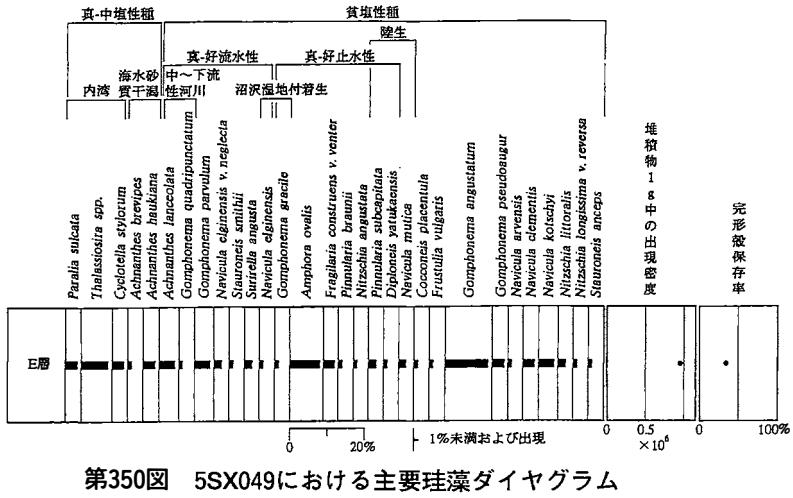
分類群	6SX049			5SX051		5SX049
	j－40内溝⑥	j－40内溝⑧	j－40G⑩	E層	F層	E層
Fragilaria parasitica		4				
Fragilaria pinnata	50					2
Fragilaria pinnata v.lancettula		5	1			
Fragilaria virescens				2		
Frustulia rhomboides				1		
Frustulia vulgaris	2	3	1		1	4
Gomphonema acuminatum						2
Gomphonema angustatum		2				34
Gomphonema clevei	1		5	4	1	
Gomphonema gracile		1			2	4
Gomphonema parvelum		4	1		1	13
Gomphonema pseudoaugur					3	8
Gomphonema quadripunctatum						4
Gomphonema truncatum		1				
Hantzschia amphioxys	2			1	1	2
Melosira sp.			22			
Melosira varians		1				
Navicula americana	3					
Navicula anglica v.subsalsa	1					
Navicula arvensis		1				3
Navicula bacillum				1		
Navicula capitata					4	
Navicula capitata v.hungarica			1			
Navicula capitata v.linealis	2	3				
Navicula clementis						9
Navicula contenta		16	5			2
Navicula cryptocephala	2				1	3
Navicula cryptotenella		8	6	1		
Navicula cuspidata						1
Navicula decussis		1				1
Navicula elginensis	4					3
Navicula elginensis v.neglecta	21		2			5
Navicula gastrum	2					
Navicula goeppertiana					1	
Navicula kotschyi		5				13
Navicula lanceolata	6	1		3	1	
Navicula mutica	4	19	4	5	3	6
Navicula mutica v.goeppertiana		2				
Navicula muticoides			2		1	
Navicula pseudolanceolata		6				
Navicula pupura	22	23	2		3	
Navicula pupura v.rectangularis	5	14		2		
Navicula pygmaea					1	
Navicula radiosa	1	1				
Navicula recens					1	
Navicula reinhardtii	1					
Navicula tokyoensis	1					
Navicula viridula	8	3	2		1	1
Neidium affine	1	1				1
Neidium ampliatum		3				
Nitzschia amphibia	4	2			1	
Nitzschia angustata		6				3
Nitzschia brevissima	6	5	3			
Nitzschia gracilis		2				
Nitzschia littoralis						5
Nitzschia longissima v.reversa						3
Nitzschia obtusa			2			
Nitzschia palea			2			
Nitzschia recta				2		
Nitzschia sp.	1			1		
Pinnularia acrosphaeria	3	1				1
Pinnularia borealis		1			4	
Pinnularia braunii		3				4
Pinnularia gibba	3	1				3
Pinnularia interrupta	1					
Pinnularia microstauron	1	1				3
Pinnularia obscura		2				
Pinnularia schoederii						1
Pinnularia schroederii					1	2
Pinnularia subcapitata		6		1		5
Pinnularia viridis	3	4				2
Rhopalodia gibba					1	
Rhopalodia gibba v.ventricosa		2				1
Stauroneis acuta		1				
Stauroneis anceps	3	1				4
Stauroneis lauenburgiana			2			2
Stauroneis smithii	3	3				3
Surirella angusta		1	1			6
Surirella robusta v.splendida		1				
Surirella tenera	1	1				
Synedra rumpens v.familiaris		1				
Synedra ulna	2	1			1	
不明						
Hyalodiscus stelliger	4	4	1	1		
合計	413	390	261	303	195	304
未同定	61	60	55	87	52	44
破片	1264	811	1405	2754	1206	673
試料１ｇ中の殻数密度	5.3 $\times 10^6$	4.7 $\times 10^5$	3.3 $\times 10^6$	5.7 $\times 10^3$	3.1 $\times 10^5$	9.7 $\times 10^5$
完形殻保存率（%）	27.3	35.7	18.4	12.4	17.0	34.1



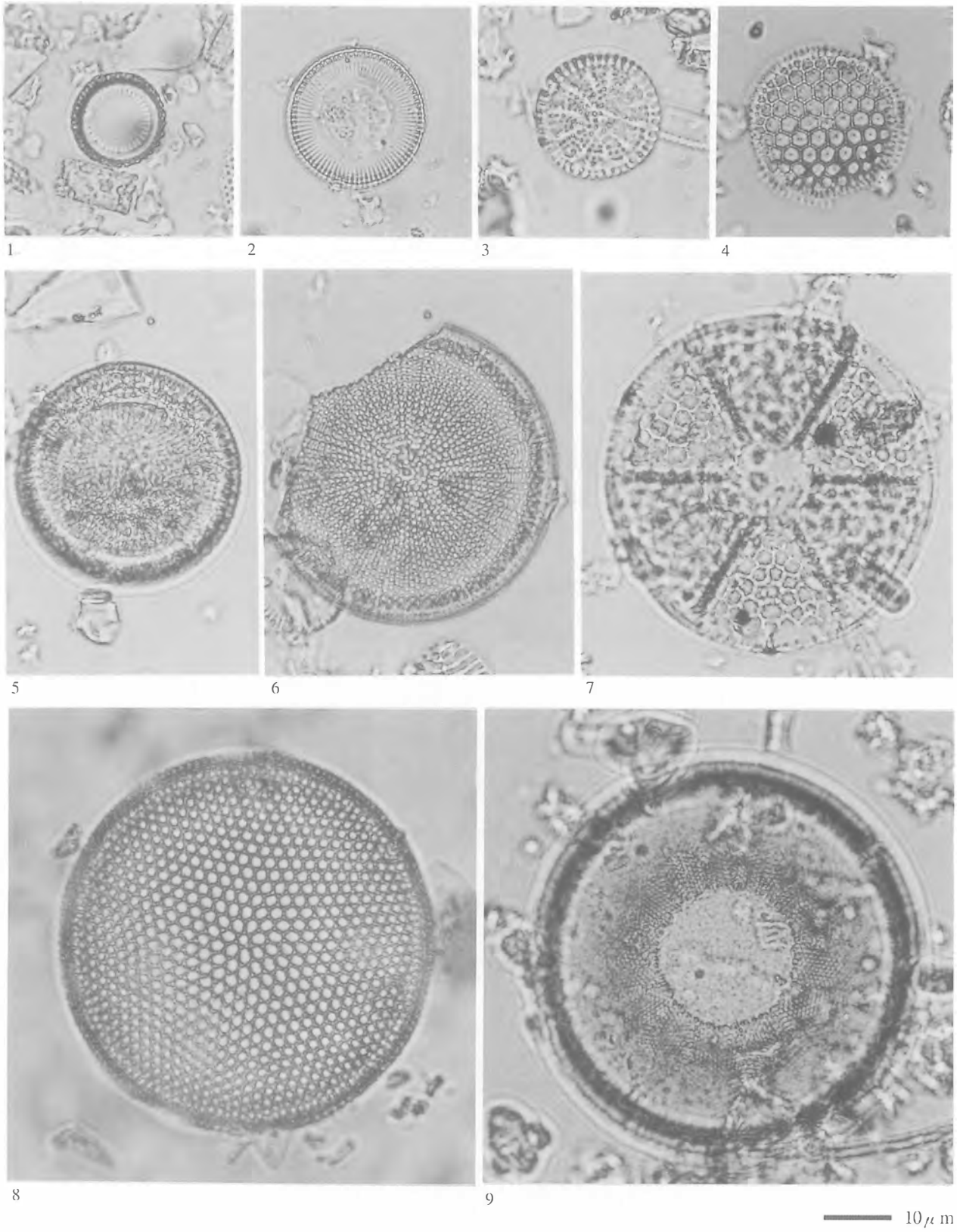
第348図　6SX049における主要珪藻ダイヤグラム



第349図　5SX051における主要珪藻ダイヤグラム

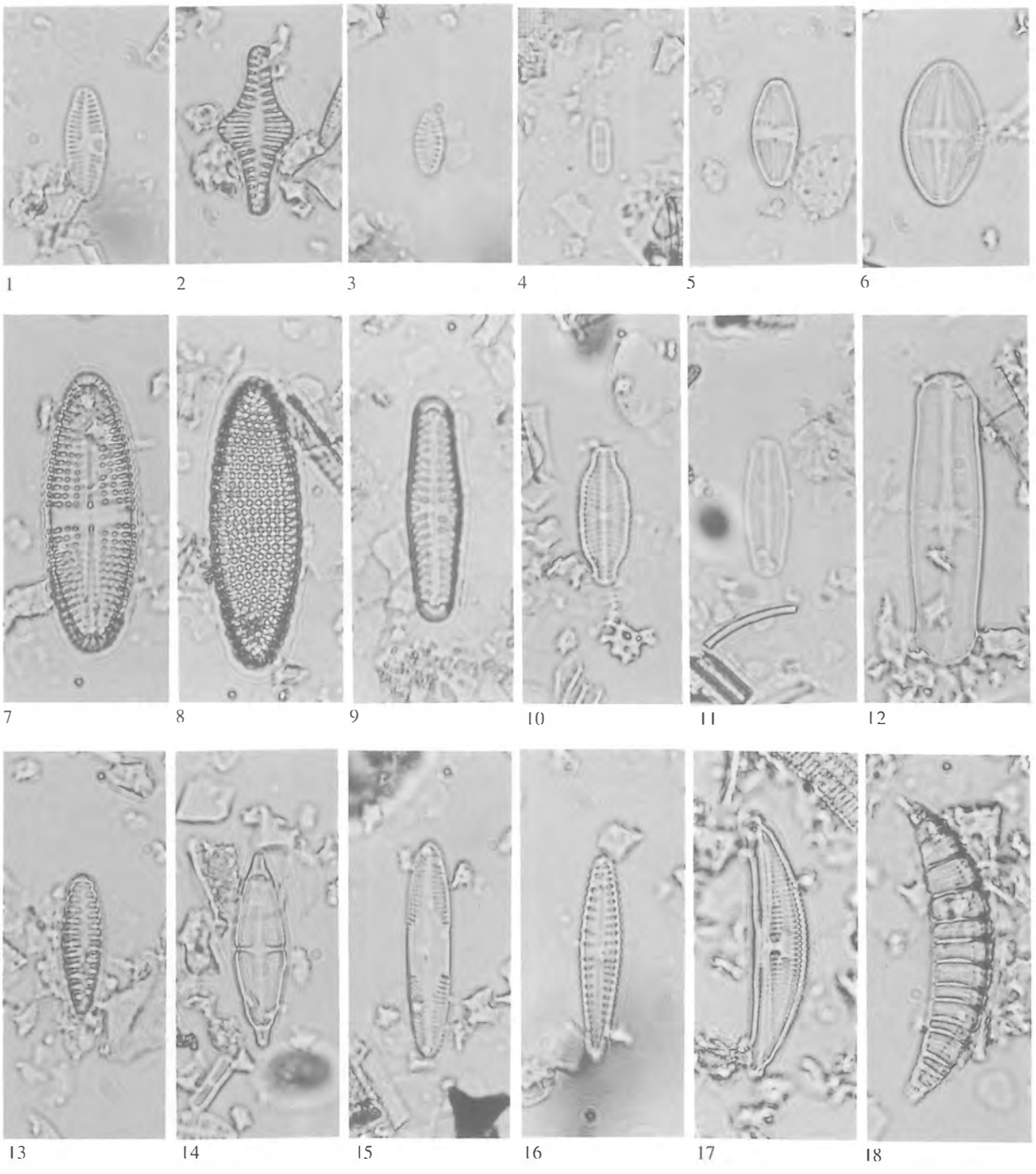


第350図　5SX049における主要珪藻ダイヤグラム



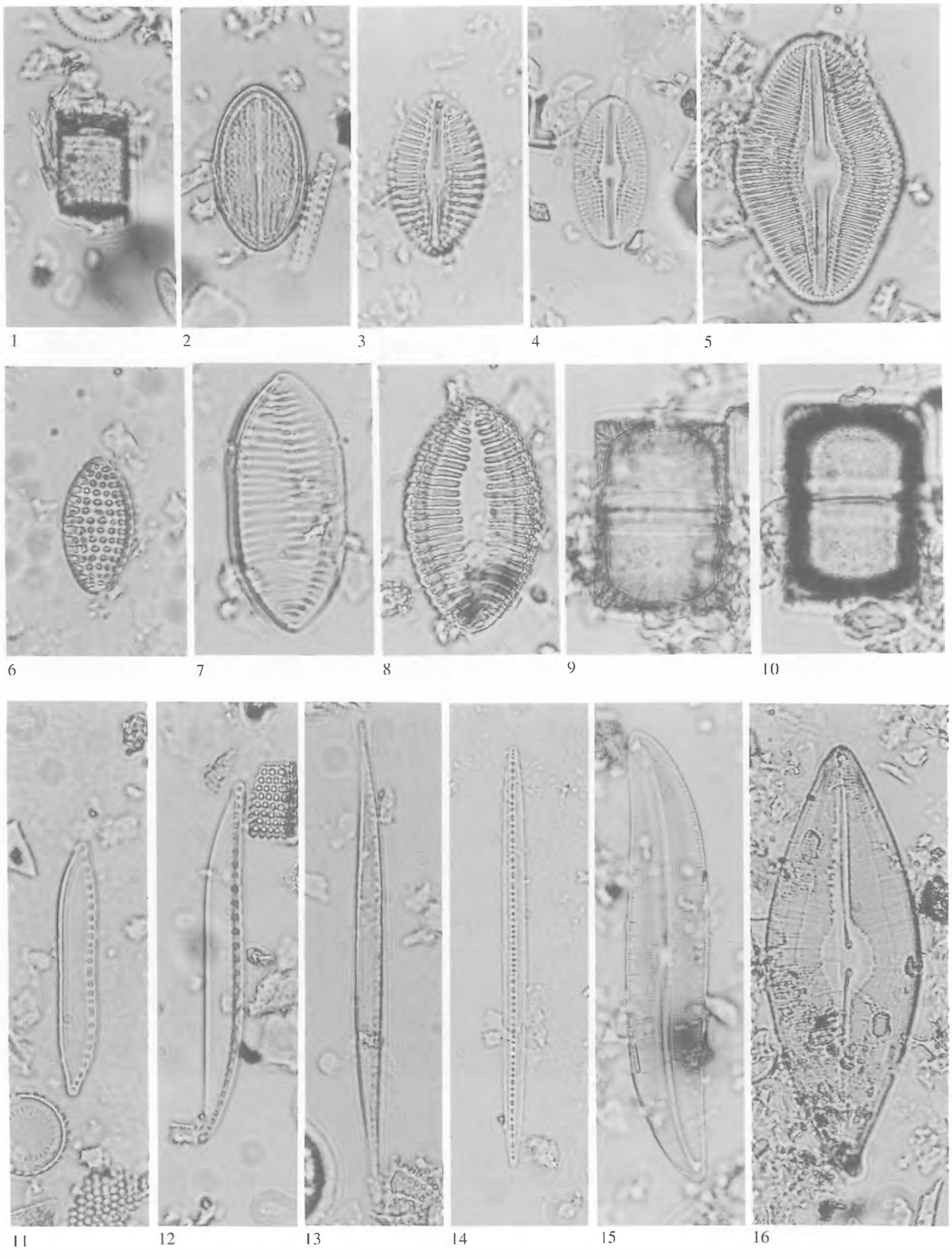
1. *Melosira sulcata*　2. *Cyclotella stylorum*　3. *Trybliоptychus cocconeiformis*　4. *Coscinodiscus marginatus*
5. *Thalassiosira bramaputrae*　6. *Actinocyclus ehrenbergii*　7. *Actinoptychus undulatus*　8. *Coscinodiscus radiatus*
9. *Hyalodiscus stelligera*

柳町遺跡の珪藻　－1－



1. *Achnanthes lanceolata*　2. *Fragilaria construens*　3. *Fragilaria construens v.venter*
4. *Navicula contenta*　5. *Navicula mutica*　6. *Navicula lacertosa*　7.8. *Achnanthes brevipes*
9. *Navicula capitata v.linealis*　10. *Navicula elginensis v.neglecta*　11. *Navicula pupula*
12. *Navicula pupula v.rectangularis*　13. *Opephora martyi*　14. *Stauroneis smithii*
15. *Pinnularia subcapitata*　16. *Gomphonema angustatum*　17. *Amphora ovalis*
18. *Rhopalodia gibberula*

柳町遺跡の珪藻　－2－



1－13 ―― 10μm
14－16 ―― 10μm

1. *Aulacoseira ambigua*　2. *Cocconeis placentula*　3. *Diploneis smithii*　4. *Diploneis ovalis*
5. *Diploneis yatukaensis*　6. *Nitzschia granulata*　7. *Nitzschia tryblionella*　8. *Nitzschia cocconeiformis*
9. 10. *Melosira varians*　11. *Nitzschia brevissima*　12. *Nitzschia clausii*　13. *Nitzschia longissima v.reversa*
14. *Bacillaria paradoxa*　15. *Gyrosigma nodiferum*　16. *Caloneis permagna*

柳町遺跡の珪藻　－3－

Ⅴ．柳町遺跡における種実同定

１．はじめに

植物の種子や果実には比較的保存性の高いものが多く、堆積物中や遺構内などに残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その群集の構成や組成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

２．試料

試料は、平成10年度調査で出土した古代の井戸跡（5SE019）から採取された２層、３層、４層、大溝状遺構（5SX040）から採取されたＥ層とＦ層、平成９年度調査の古代の井戸跡（4SE017）から採取された木枠内中層、および井戸内（4SE017）から出土した選別試料の計７点である。

３．方法

ブロック試料（堆積物）については、以下の処理を施して、種実の抽出および同定を行った。選別済みの試料については、同定のみを行った。

１）試料各200ccに水を加え放置し、泥化を行う。

２）攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別を行う。

３）残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

４．結果

学名、和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に、同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

モモ　*Prunus persica Batsch*　核　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

〔草本〕

カヤツリグサ科　*Cyperaseae*　果実

黄褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

タデ属　*Polygonum*　果実　タデ科

黒灰色で頂端の尖る卵形を呈す。断面は両凸レンズ状で、表面には微細な網目模様がある。

（１）井戸跡（5SE019）から採取された２層、３層、４層

種実は、いずれの試料からも検出されなかった。

（２）大溝状遺構（5SX040）から採取されたＥ層とＦ層

Ｅ層からタデ属がわずかに検出された。

（３）井戸跡（4SE017）から採取された木枠内中層

カヤツリグサ科がわずかに検出された。

（４）井戸内（4SE017）から出土した選別試料

いずれもモモ核であった。

５．所見

井戸内（4SE017）から出土した種実は、栽培植物のモモ核であった。モモ核は、弥生時代以降は西南日本各地の遺跡の溝や井戸から普通に出土しており、周辺で栽培されていたとみなされる。

大溝状遺構（5SX040）のＥ層からはタデ属、井戸跡（4SE017）の木枠内中層からはカヤツリグサ科が検出された。これらの植物は、周辺の水湿地などに生育していたものと考えられる。

文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494ｐ．

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，ｐ．131－139.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，ｐ．276－283.

金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナルNo.409，ニューサイエンス社，ｐ．15－19.

1　モモ核　－1.0mm

2　同左　－1.0mm

3　モモ核　－1.0mm

4　同左　－1.0mm

5　モモ1/2核　－1.0mm

6　同左　－1.0mm

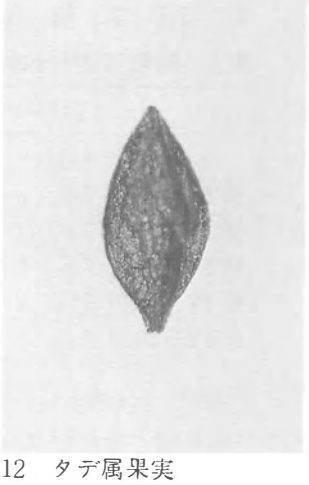
7　モモ1/2核　－1.0mm

8　同左　－1.0mm

9　モモ1/2核　－1.0mm

10　同左　－1.0mm

11　カヤツリグサ科果実　——1.0mm



12　タデ属果実　——1.0mm

柳町遺跡出土種実顕微鏡写真

Ⅵ. 柳町遺跡出土木材の樹種同定

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、分類群によって特徴ある組織をもっていることから、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能である。木材は、大型の植物遺体で移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

2．試料

試料は、平成10年度調査で出土した井戸跡（5SE059）内の井戸枠材１点、および平成９年度調査で出土した古代の掘立柱建物の柱材５点の計６点である。

3．方法

カミソリを用いて、新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結果

結果を表５に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

マキ属　*Podocarpus*　マキ科　　写真１・２

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、年輪界がやや不明瞭である。樹脂細胞が散在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に１～２個存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～20細胞高である。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりマキ属に同定される。マキ属には、イヌマキやナギがある。関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。材は、耐朽性が強く、耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

表５　柳町遺跡出土木材の樹種同定結果

試料（地区／遺構／層位）						結果（和名／学名）	
	8区		5SE059	井戸枠一部		クスノキ	*Cinnamomum camphora*
97TY－4001	7区	a－27，28	4SB001	pit.1	柱	マキ属	*Podocarpus*
97TY－4007	7区	Z－27ｸﾞﾘｯﾄﾞ	4SB002	pit.4	柱	アワブキ属	*Meliosma*
97TY－4012	7区	Z－27ｸﾞﾘｯﾄﾞ	4SB003	pit.3	柱	マキ属	*Podocarpus*
97TY－4036	7区	Y－27ｸﾞﾘｯﾄﾞ	4SB034	pit.10	柱	針葉樹	*Conifer*
97TY－4039	7区	Y－27ｸﾞﾘｯﾄﾞ	4SB036	pit.2	柱	コナラ属コナラ節	*Quercus sect. Prinus*

針葉樹　*conifer*　　写真３

横断面：仮道管が存在する。

放射断面：放射柔細胞と仮道管が存在する。

接線断面：単列の放射柔細胞が存在する。

以上の形質より針葉樹に同定される。本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察は困難なことから、針葉樹の同定にとどめた。

コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　写真４

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがある。北海道、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

クスノキ　*Cinnamomum camphora* Presl　クスノキ科　写真５

横断面：中型から大型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して、散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～３細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば油を含み、大きく膨れ上がったものが見られる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径５mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性も高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

アワブキ属　*Meliosma*　アワブキ科　写真６

横断面：小型の道管が、単独ないしその複合部に１～２個の柔細胞をはさんで、放射方向にむかって２～４個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の小高木から高木である。

５．所見

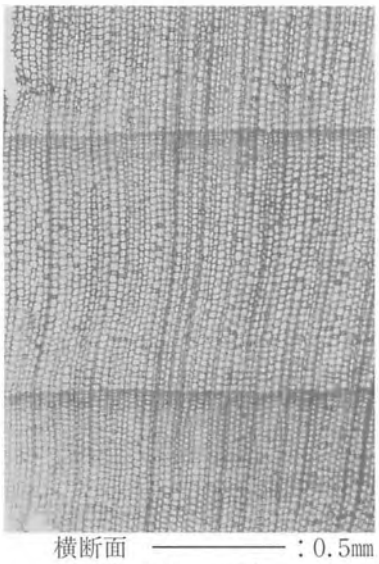
分析の結果、井戸跡（5SE059）内の井戸枠材はクスノキと同定された。また、古代の掘立柱建物の柱材は、マキ属２、針葉樹１、コナラ属コナラ節１、アワブキ属１と同定された。いずれも、温帯ないし温帯下部の暖温帯に分布する樹種であり、遺跡周辺から採取できる樹種であったと考えられる。なお、マキ属は九州と東海で特徴的に使われる選材である。

文献

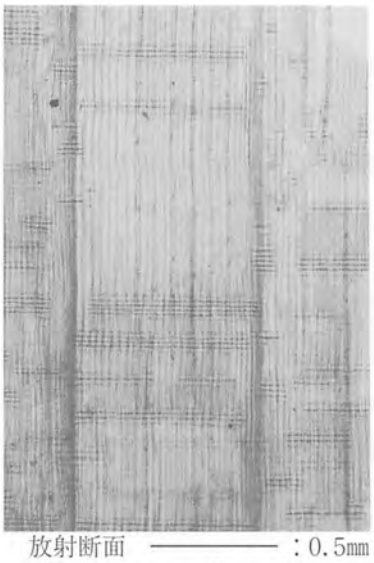
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，ｐ．20－48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，ｐ．49－100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296ｐ．



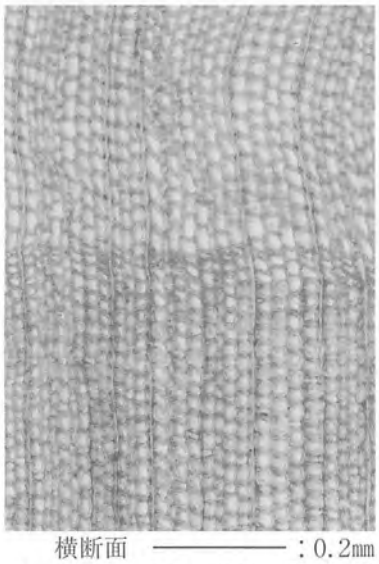
横断面 ――――：0.5㎜



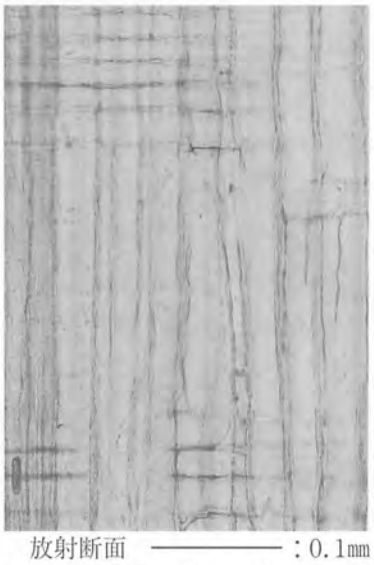
放射断面 ――――：0.5㎜

接線断面 ――――：0.2㎜

1．97TY－4001　7区　a－27，28　4SB001　pit.1　柱　マキ属



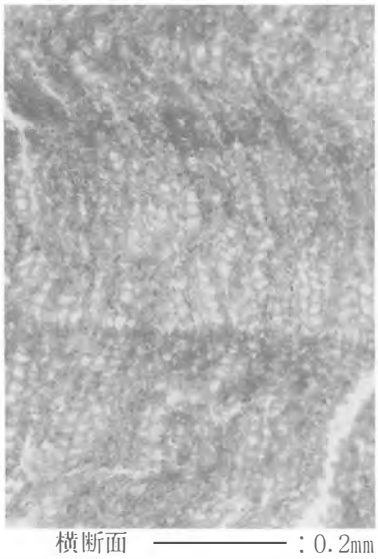
横断面 ――――：0.2㎜



放射断面 ――――：0.1㎜

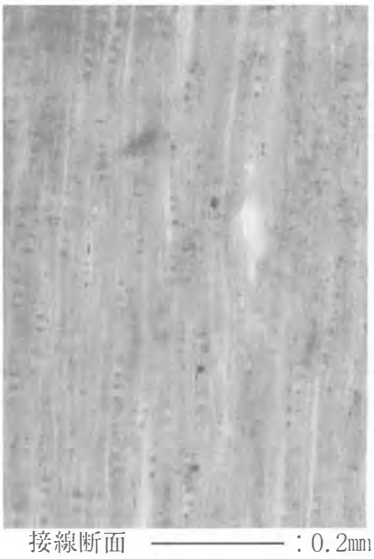
接線断面 ――――：0.2㎜

2．97TY－4012　7区　Z－27グリッド　4SB003　pit.1　柱　マキ属



横断面 ――――：0.2㎜

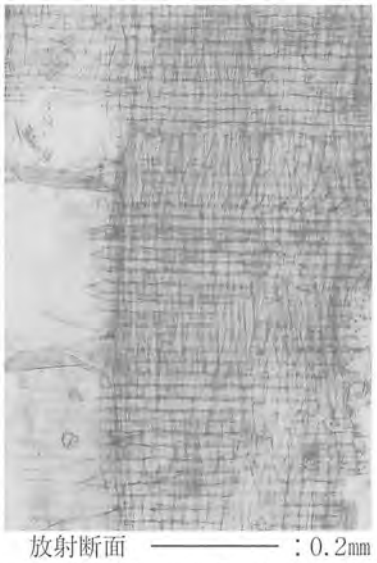
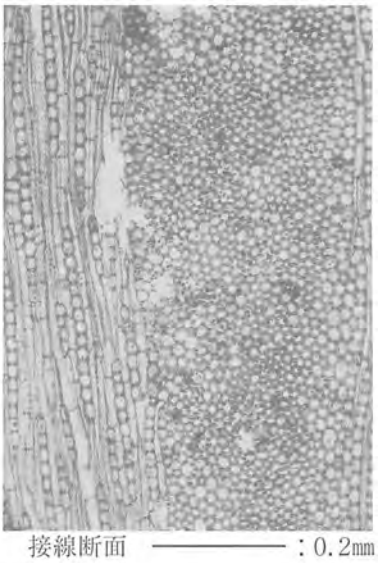
放射断面 ――――：0.1㎜



接線断面 ――――：0.2㎜

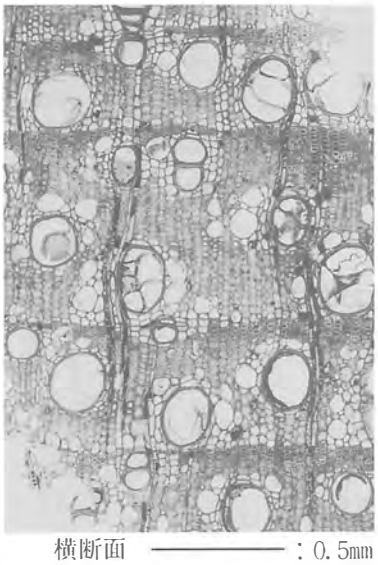
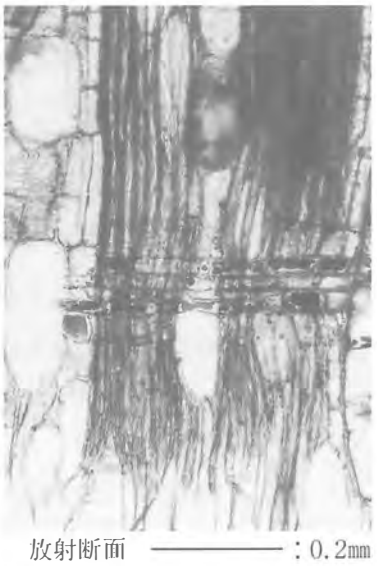
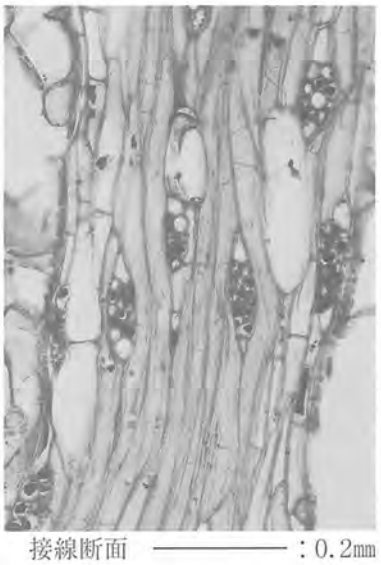
3．97TY－4036　7区　Y－27グリッド　4SB034　pit.10　柱　針葉樹

柳町遺跡出土木製品樹種顕微鏡写真　－1－

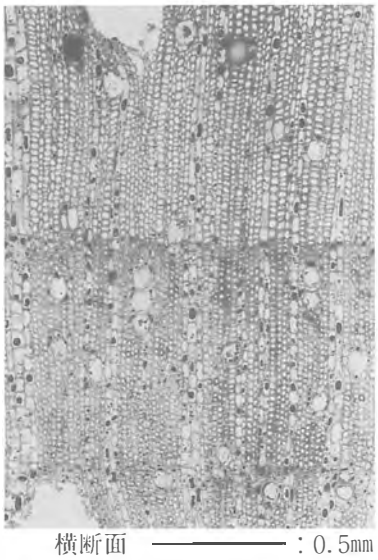
横断面 ―――― ：0.5㎜　放射断面 ―――― ：0.2㎜　接線断面 ―――― ：0.2㎜

4．97TY－4039　7区　Y－27グリッド　4SB036　pit.2　柱　コナラ属コナラ節

横断面 ―――― ：0.5㎜　放射断面 ―――― ：0.2㎜　接線断面 ―――― ：0.2㎜

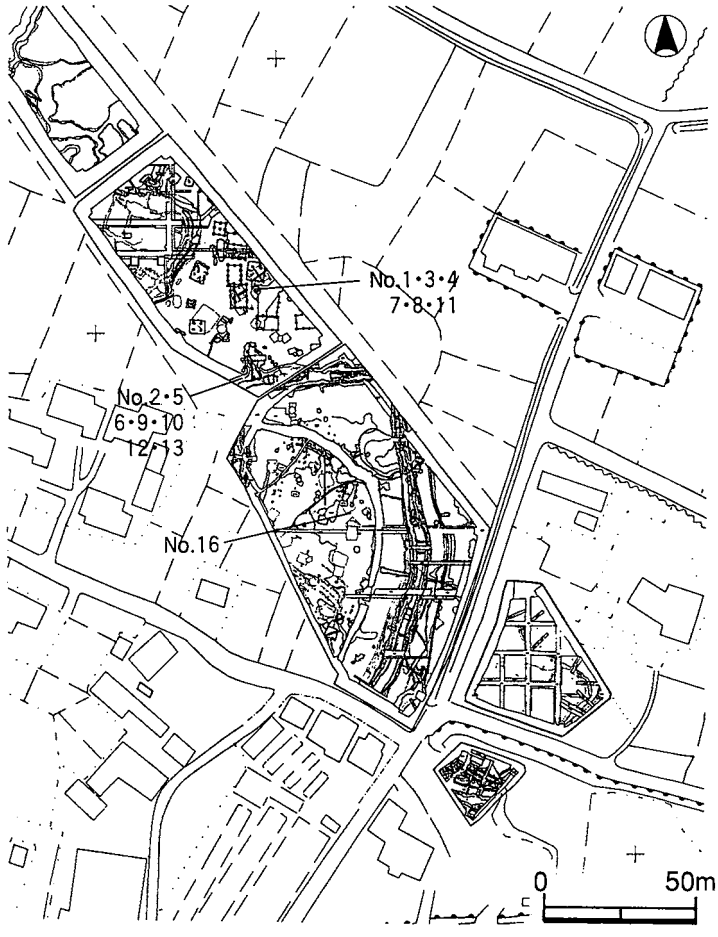
5．8区　5SE059　井戸枠一部　クスノキ



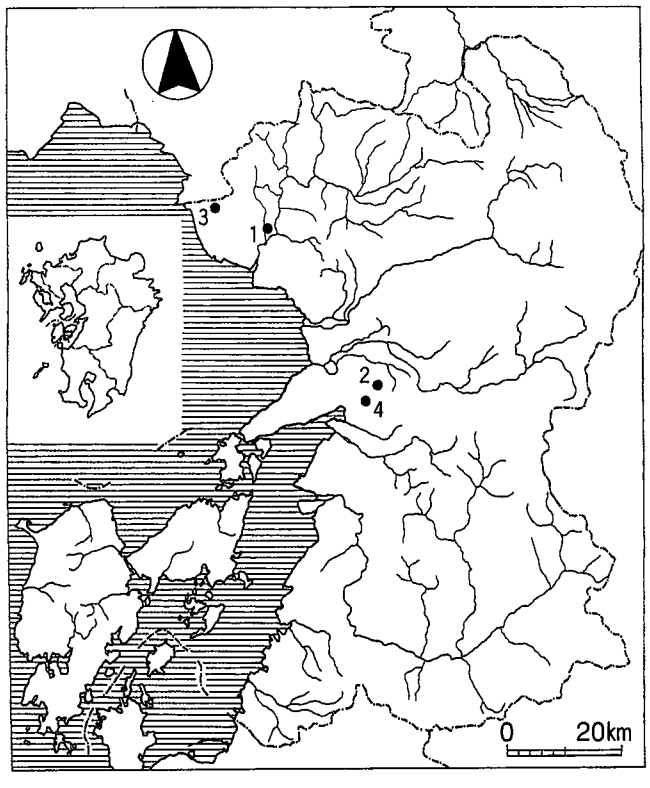
横断面 ―――― ：0.5㎜　放射断面 ―――― ：0.2㎜　接線断面 ―――― ：0.5㎜

6．97TY－4007　7区　Z－27グリッド　4SB002　pit.4　柱　アワブキ属

柳町遺跡出土木製品樹種顕微鏡写真　－２－



第351図　蛍光Ｘ線分析試料採取地点位置図



1.柳町遺跡
2.益城郡家跡
3.丸山窯跡
4.萩尾大溜池窯跡

第352図　蛍光Ｘ線分析比較試料採取地点位置図

第４節　柳町遺跡出土須恵器・陶器の蛍光Ｘ線分析

小村美代子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

柳町遺跡は、熊本県玉名市に位置する。この遺跡で須恵器・陶器が多数検出された。熊本県の須恵器の生産地は、荒尾窯跡群、植木窯跡群、熊飽窯跡群、宇城窯跡群、八代窯跡群、球磨窯跡群の６群に大別される（熊本県教育委員会、1980)。これら６群のうち、荒尾窯跡群・宇城窯跡群が二大生産地である。柳町遺跡のある玉名市は、良質の粘土が採取される小代山ふもとの荒尾窯跡群の集中する荒尾市の東隣に位置する。よって、柳町遺跡出土須恵器は荒尾窯跡群で生産された可能性が高いと予想されている。

今回提供された試料の内、柳町遺跡出土須恵器13点に対して、比較試料となる宇城窯跡群に位置する益城郡家跡出土須恵器１点、荒尾窯跡群丸山窯跡・宇城窯跡群萩尾大溜池窯跡の表採須恵器各10点である。まずこれら丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡須恵器胎土の化学組成の違いを把握し、柳町遺跡の須恵器が荒尾窯跡群で生産された可能性を検討していく。

なお、提供された試料には、柳町遺跡出土陶器２点も含まれる。これら陶器は荒尾窯跡群のある小代山周辺で生産された小代焼と考えられている。これらについては、陶器胎土の化学組成を荒尾窯跡群丸山窯跡須恵器胎土と比較して材料学的に考察していきたい。

２．分析方法

試料を以下に示す。

≪提供された試料≫

・柳町遺跡Ⅶ区出土須恵器　：13点　（No.１～13）

・柳町遺跡Ⅷ区出土陶器　：２点　（No.14、16）

≪上記の試料の比較試料（表採試料）≫

・下益城郡城南町益城郡家跡採集須恵器　：１点　（No.15）

・荒尾市本井手字鐙田　丸山窯跡須恵器　：10点　（No.17～26）

・下益城郡松橋町萩尾字高岳　萩尾大溜池窯跡須恵器：10点　（No.27～36）

の計36点である。

試料は５ｇ程度岩石カッターで採取し、表面に付着する釉薬等を除去した。これらを超音波洗浄して乾燥させた後、セラミック乳鉢（成分 Al_2O_3：93.4％、SiO_2：５％）で粉砕し粉末化した。この粉末を内径20mm、厚さ５mm の塩化ビニール製リングに詰め、500kgf／cm^3（約17ｔ）の圧力をかけてブリケットを作成した。

測定は、波長分散型蛍光Ｘ線分析装置（㈱リガク製System3080）を使用し、データ処理システムDATAFLEX－152（検量線法）を用いて定量分析を行った。測定元素は主成分元素（Na_2O、MgO、Al_2O_3、SiO_2、P_2O_5、K_2O、CaO、TiO_2、MnO、Fe_2O_3）と微量元素（Rb、Sr、Y、Zr）である。

また、試料の詳細及び試料の切断面の肉眼観察による須恵器・陶器の胎土の特徴を表１及び表２に記載した。胎土の色相及び明度／彩度は、「新版　標準土色帖」(小山ほか、1992）に従った。

３．分析結果

分析結果を表３及び表４に示した。表４の丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡須恵器を見ると、含有量が多い元素から SiO_2が65.86～73.45%、Al_2O_3が16.50～24.86％で、全体の約９割を構成する。それに続いて Fe_2O_3が

3.49～5.51％、K_2Oが1.45～2.22％となっている。丸山窯跡は萩尾大溜池窯跡より、各元素で最小値から最大値の範囲がやや広い傾向が見られる。

4．考察

これら分析値の個々の違いを見出すことは困難なので、化学分析値全体を評価するために、分析した全元素を使用した主成分分析による第１―第２主成分の散布図を作成した（第355図）。なお、主成分分析は、田中ほか（1987）の解析プログラムを使用し、散布図の出力を一部変更して用いた。解析は、相関行列の固有値について計算した。

この図１より丸山窯跡須恵器は図の左側に分散して分布し、萩尾大溜池窯跡須恵器は丸山窯跡須恵器と一部重複して分布することが分かる。全体の分析値から見ると、荒尾窯跡須恵器のNo.20、23、24、25と萩尾大溜池窯跡須恵器は類似する化学組成を持つことがうかがえる。また柳町遺跡須恵器の多くは丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡の重複領域付近に分布する。

柳町遺跡須恵器の１部（No.11、13）、柳町遺跡陶器（No.14、16）は一見して、丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡須恵器の分布から離れた右側に分布し、大きく異なる化学組成を持つことが分かる。なお、丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡ごとに楕円で囲んでいるが、これは統計的な意味はない。

ａ）荒尾窯跡群丸山窯跡・宇城窯跡群萩尾大溜池窯跡須恵器について（No.17～36）

第355図の分析した全元素を使用した主成分元素では、一部に丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡須恵器は類似する化学組成を持つことが分かったので、丸山窯跡と萩尾大溜池窯跡須恵器を区別することが可能な元素に注目する。須恵器の産地推定では、三辻（1983）により、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）が有効とされている。まず、これら４元素から見ていく。

表４より、K_2O（酸化カリウム）は、丸山窯跡は1.45～1.84％、萩尾大溜池窯跡は1.72～2.22％の分析値を示しており、分類するのに有効な元素と考えられる。

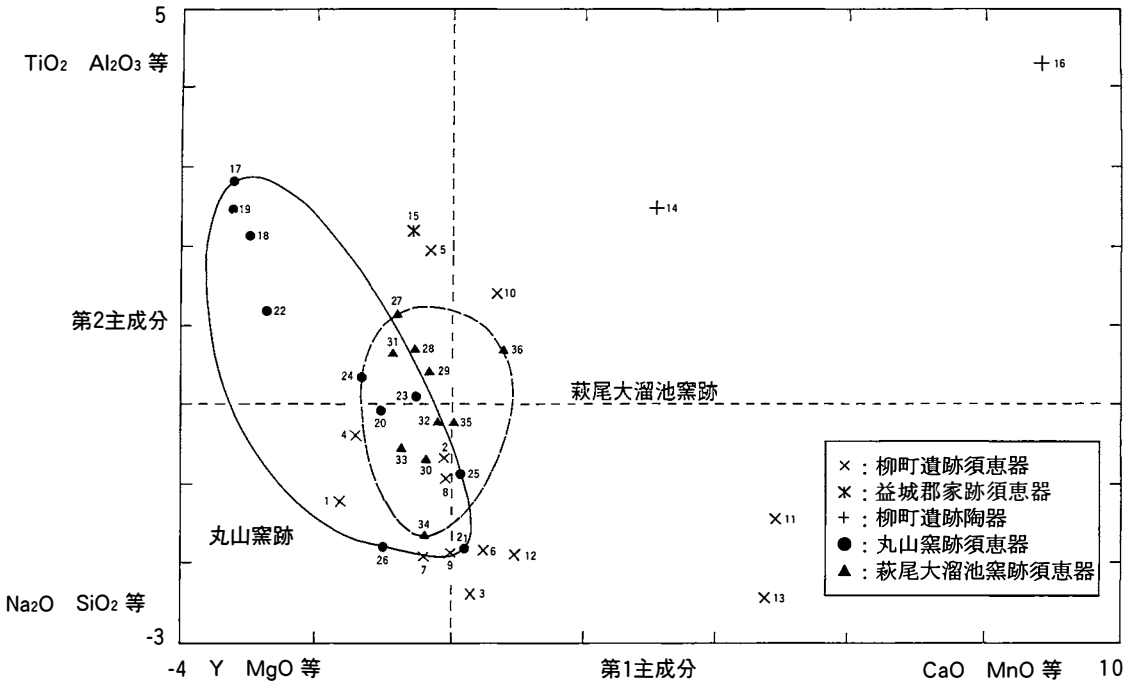
CaO（酸化カルシウム）は、丸山窯跡は0.23～0.55％、萩尾大溜池窯跡は0.37～0.49％で、重複するため、分類することが難しい。

Rb（ルビジウム）は、丸山窯跡は84.3～101.7ppm、萩尾大溜池窯跡は100.5～140.3ppmでこれもK_2Oと同様、分類に有効な元素と考えられる。

Sr（ストロンチウム）は丸山窯跡50.3～147.0ppm、萩尾大溜池窯跡は70.4～112.3ppmで重複するので分類することが難しい。なお、KとRb、CaとSrはそれぞれ同族元素にあるため、分布傾向が類似する。

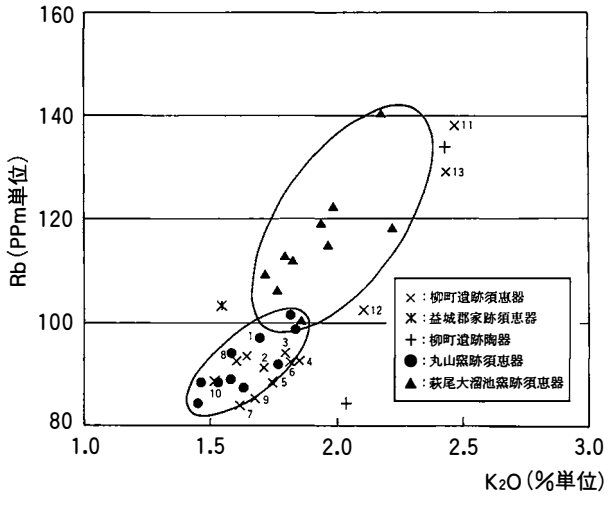
他の元素に注目すると、MnO（酸化マンガン）が丸山窯跡で0.010～0.017％、萩尾大溜池窯跡で0.021～0.031％、Zr（ジルコニウム）が丸山窯跡で206.5～233.9ppm、萩尾大溜池窯跡で165.2～187.4ppmで、分類するのに有効な元素と思われる。

よって、K_2O、Rb、MnO、Zrの４元素を丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡を分類する有効元素として使用していく。これら４元素を使用したグラフを第354図及び第355図に示す。丸山窯跡、萩尾大溜池窯跡ごとにまとまりが見られることが分かる。なお、丸山窯跡、萩尾大溜池窯跡の分布を最小限にそれぞれ楕円で囲んでいるが、これは統計的な意味はない。MnO、Zrの２元素は、これまでの分析において必ずしも有効とは言えないが、これら元素が熊本県の須恵器を分類するのに有効な元素であるのかもしれない。しかし、ここで示した結果は、二大生産地の各一基分の須恵器の分析であり、今後、荒尾窯跡群・宇城窯跡群の須恵器の分析を更に重ねることによって、より詳細な情報を得られると考えられる。



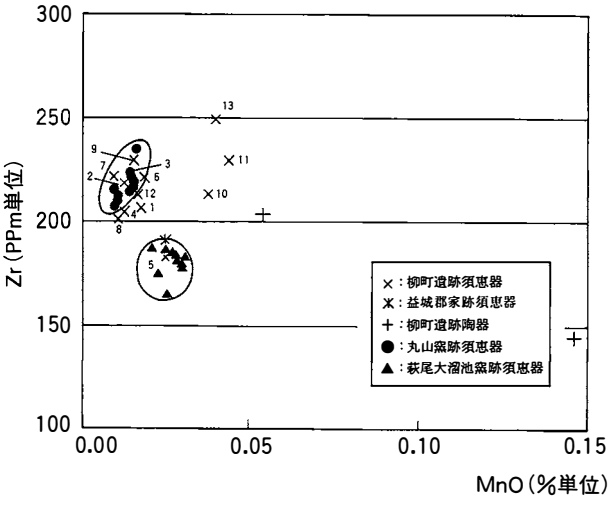
〔元素記号〕Na_2O:酸化ナトリウム、MgO:酸化マグネシウム、Al_2O_3:酸化アルミニウム、SiO_2:酸化ケイ素、CaO:酸化カルシウム、TiO_2:酸化チタン、MnO:酸化マンガン、Y:イットリウム

第353図　試料須恵器の第１－第２主成分分析分布図



（元素記号）K:カリウム　Rb:ルビジウム

第354図　K－Rb 分布図



（元素記号）Mn:マンガン　Zr:ジルコニウム

第355図　Mn－Zr 分布図

b）柳町遺跡須恵器について（No.1～13）

第354図および第355図より、柳町遺跡須恵器の多くは丸山窯跡須恵器の分布と重なることが分かる。丸山窯跡の分布に注目すると、第354図では、No.1～10の柳町遺跡須恵器がほぼ同じ位置に分布する。第355図では、No.1～4、6～9、12の計9点の柳町遺跡須恵器がほぼ同じ位置に分布する。よって、第354図及び第355図共に丸山窯跡の分布と重なるNo.1～4、6～9の計8点は、丸山窯跡を含めた荒尾窯跡群で生産された可能性が高い。

第354図及び第355図の丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡どちらか一方の枠内に属する試料はNo.5、No.10、No.12の3点である。

第354図及び第355図共に丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡どちらの枠外にも属さないものは、No.11、13の2点である。これら5点の生産地は現状では不明である。

c）益城郡家跡採集須恵器について（No.15）

第354図では、No.15は丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡の分布から共にやや外れている。第355図では、No.15は萩尾大溜池窯跡の分布内に位置する。よって生産地は現状では不明である。

d）柳町遺跡陶器について（No.14、16）

2点とも分析値が比較的大きく異なり、第353図～第355図でも丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡枠内に共に属さず分布する。これら陶器の切断面の肉眼観察により、今回分析した他の試料の須恵器より砂粒が多く含まれていることを確認している（表1参照）。このことが、分析値に大きな影響を与えた1つの要因と思われる。

よって生産地は現状では不明である。この陶器の産地推定を行うには、窯跡出土小代焼の分析が必要である。

5．おわりに

今回柳町遺跡から出土した須恵器・陶器について産地推定を目的として、蛍光X線分析を行った。その結果、熊本県内産須恵器の基礎的なデータの不足という状況から、可能性を示すにとどまった。ただし、化学組成が類似する須恵器は同一地域の産地の可能性は高い。なお、三辻（1982）は熊本県内窯跡出土須恵器の産地推定を行っており、（Rb－Sr）、（K－Rb）分布図上で荒尾グループ、宇城グループ、球磨グループの相互識別が可能であると述べている。今回の分析でも、第354図のK－Rb分布図で判別でき、三辻とおおよそ同様の結果が得られたと思われる。

今後、県外産須恵器を含め、県内産須恵器の多角的、基礎的な分析が必要であろう。

謝辞　今回の分析にあたり、熊本県教育庁文化課の坂田和弘氏に多大な御協力を頂きました。ここに感謝の意を表します。なお、表採試料は教育庁文化課に保管されている。

引用文献

熊本県教育委員会（1980）、「生産遺跡基本調査報告書」、4～7ｐ.
小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修（1992）、「新版　標準土色帖」、日本色研事業株式会社発行
三辻利一（1983）、「古代土器の産地推定法．考古学ライブラリー14」、ニューサイエンス社、20～27ｐ.
三辻利一・山本成顕（1982）、「元素分析による古代土器の産地推定の実例（4）―熊本県内窯跡出土須恵器―」、奈良教育大学古文化財教育研究報告第11号、19～25ｐ.

表1　柳町遺跡出土須恵器・陶器胎土の特徴

（色相　明度／彩度）での「外側・内側」はそれぞれの一方の面を指す。「外部・内部」の場合、外部は両面を、内部は外部に囲まれた範囲を指すものとする。
（砂粒）は量の多さを指し、「少ない」「普通」「多い」「特に多い」の4段階で分類した。

No.	種別	器種	注記	遺跡名	色相　明度/彩度	色	最大粒径	砂粒	その他の粒子	釉の有無
1	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SE017掘り方最下層一括	柳町遺跡	外側：2.5GY7/1　内側：7.5YR7/4	外側：明オリーブ灰　内側：にぶい橙	φ2㎜	普通	—	—
2	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SX038一括	柳町遺跡	N7/1	灰白	φ1㎜以下	少ない	—	—
3	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SE017掘り方最下層一括	柳町遺跡	N8/1	灰白	φ1㎜以下	少ない	—	—
4	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SE017井戸枠内一括	柳町遺跡	N7/1	灰白	φ1㎜以下	少ない	—	—
5	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SX038一括	柳町遺跡	2.5Y8/1	灰白	φ1㎜以下	少ない	—	—
6	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SX038一括	柳町遺跡	外側：N6/　内側：10YR7/3	外側：灰　内側：にぶい黄橙	φ1㎜以下	少ない	—	—
7	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SE017掘り方一括	柳町遺跡	外側：N7/　内側：7.5YR7/2	外側：灰　内側：明褐灰	φ1㎜以下	少ない	—	—
8	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SE017掘り方最下層一括	柳町遺跡	外側：10YR5/1　内側：5YR7/4	外側：褐灰　内側：にぶい橙	φ1㎜	普通	—	—
9	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SX038一括	柳町遺跡	N7/	灰白	φ1㎜以下	少ない	—	—
10	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SX038, 5C 層 No.403	柳町遺跡	外部：2.5Y8/2　内部：7.5Y6/1	外部：灰白　内部：褐灰	φ2㎜	普通	—	—
11	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SE017掘り方最下層一括	柳町遺跡	N7/	灰白	φ3㎜	普通	—	—
12	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SX038一括	柳町遺跡	N8/	灰白	φ1㎜以下	少ない	黒色発泡粒	自然灰釉
13	須恵器	大甕片	柳町Ⅶ区4SX038一括	柳町遺跡	外部：N7/　内部：N6/	外部：灰白　内部：灰	φ1㎜	少ない	—	—
14	陶器	壺片？	柳町Ⅷ区表土	柳町遺跡	5YR4/1	褐灰	φ2㎜	特に多い	—	有り
15	須恵器	大甕片	下益城郡城南町益城郡家跡表採	益城郡家跡	N7/	灰白	φ1㎜	少ない	—	—
16	陶器	埦	柳町Ⅷ区 b－34グリッド攪乱一括	柳町遺跡	N6/	灰白	φ2㎜	多い	—	有り

表2　丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡表採須恵器胎土の特徴

（色相　明度／彩度）での「外側・内側」はそれぞれの一方の面を指す。「外部・内部」の場合、外部は両面を、内部は外部に囲まれた範囲を指すものとする。
（砂粒）は量の多さを指し、「少ない」「普通」「多い」「特に多い」の4段階で分類した。

No.	種別	器種	所在地	遺跡名	色相　明度/彩度	色	最大粒径	砂粒	その他の粒子	釉の有無
17	須恵器	皿	荒尾市本井手字鐙田	丸山窯跡	N8/	灰白	φ1㎜以下	少ない	—	—
18	須恵器	皿	荒尾市本井手字鐙田	丸山窯跡	外部：10YR8/3　内部：N7/	外部：浅黄橙　内部：灰白	φ1㎜以下	少ない	—	—
19	須恵器	坏？	荒尾市本井手字鐙田	丸山窯跡	外部：2.5Y8/3　内部：N7/	外部：浅黄　内部：灰白	φ2㎜	少ない	—	—
20	須恵器	壺	荒尾市本井手字鐙田	丸山窯跡	外部：10YR7/2　内部：N8/	外部：にぶい黄橙　内部：灰白	φ1㎜	少ない	—	—
21	須恵器	壺	荒尾市本井手字鐙田	丸山窯跡	7.5YR7/1	明褐灰	φ1㎜以下	少ない	—	自然灰釉
22	須恵器	甕	荒尾市本井手字鐙田	丸山窯跡	N7/	灰白	φ1㎜以下	少ない	—	—
23	須恵器	甕	荒尾市本井手字鐙田	丸山窯跡	5YR7/1	明褐灰	φ2㎜	少ない	—	—
24	須恵器	甕	荒尾市本井手字鐙田	丸山窯跡	5YR7/4	にぶい橙	φ1㎜	少ない	—	—
25	須恵器	大甕	荒尾市本井手字鐙田	丸山窯跡	2.5Y7/1	灰白	φ1㎜	少ない	—	—
26	須恵器	甕	荒尾市本井手字鐙田	丸山窯跡	N7/	灰白	φ1㎜	少ない	—	自然灰釉
27	須恵器	高台付坏	下益城郡松橋町萩尾字高岳	萩尾大溜池窯跡	外部：N7/　内部：10R6/2	外部：灰白　内部：灰赤	φ2㎜	普通	—	—
28	須恵器	高台付坏	下益城郡松橋町萩尾字高岳	萩尾大溜池窯跡	2.5YR7/1	明赤灰	φ1㎜	普通	—	—
29	須恵器	高台付坏	下益城郡松橋町萩尾字高岳	萩尾大溜池窯跡	5N/	灰	φ3㎜	普通	—	自然灰釉
30	須恵器	高台付坏	下益城郡松橋町萩尾字高岳	萩尾大溜池窯跡	外部：2.5Y8/1　内部：N7/	外部：灰白　内部灰白	4㎜	普通	—	自然灰釉
31	須恵器	壺	下益城郡松橋町萩尾字高岳	萩尾大溜池窯跡	N7/	灰白	φ1㎜以下	少ない	—	—
32	須恵器	甕	下益城郡松橋町萩尾字高岳	萩尾大溜池窯跡	N7/	灰白	φ3㎜	少ない	—	自然灰釉
33	須恵器	甕	下益城郡松橋町萩尾字高岳	萩尾大溜池窯跡	N7/	灰白	φ1㎜	少ない	—	自然灰釉
34	須恵器	甕	下益城郡松橋町萩尾字高岳	萩尾大溜池窯跡	N7/	灰白	φ3㎜	普通	—	自然灰釉
35	須恵器	壺	下益城郡松橋町萩尾字高岳	萩尾大溜池窯跡	5Y8/1	灰白	φ1㎜	普通	—	自然灰釉
36	須恵器	甕	下益城郡松橋町萩尾字高岳	萩尾大溜池窯跡	N8/	灰白	φ1㎜	少ない	—	—

表3　柳町遺跡出土・益城郡家跡表採須恵器・陶器胎土の主成分元素（単位：%）、微量元素（単位：ppm）の分析値

（化学組成）[主成分元素] Na_2O：酸化ナトリウム、MgO：酸化マグネシウム、Al_2O_3：酸化アルミニウム、SiO_2：酸化ケイ素、P_2O_5：酸化リン、K_2O：酸化カリウム、CaO：酸化カルシウム、TiO_2：酸化チタン、MnO：酸化マンガン、Fe_2O_3：酸化鉄　[微量元素] Rb：ルビジウム、Sr：ストロンチウム、Y：イットリウム、Zr：ジルコニウム

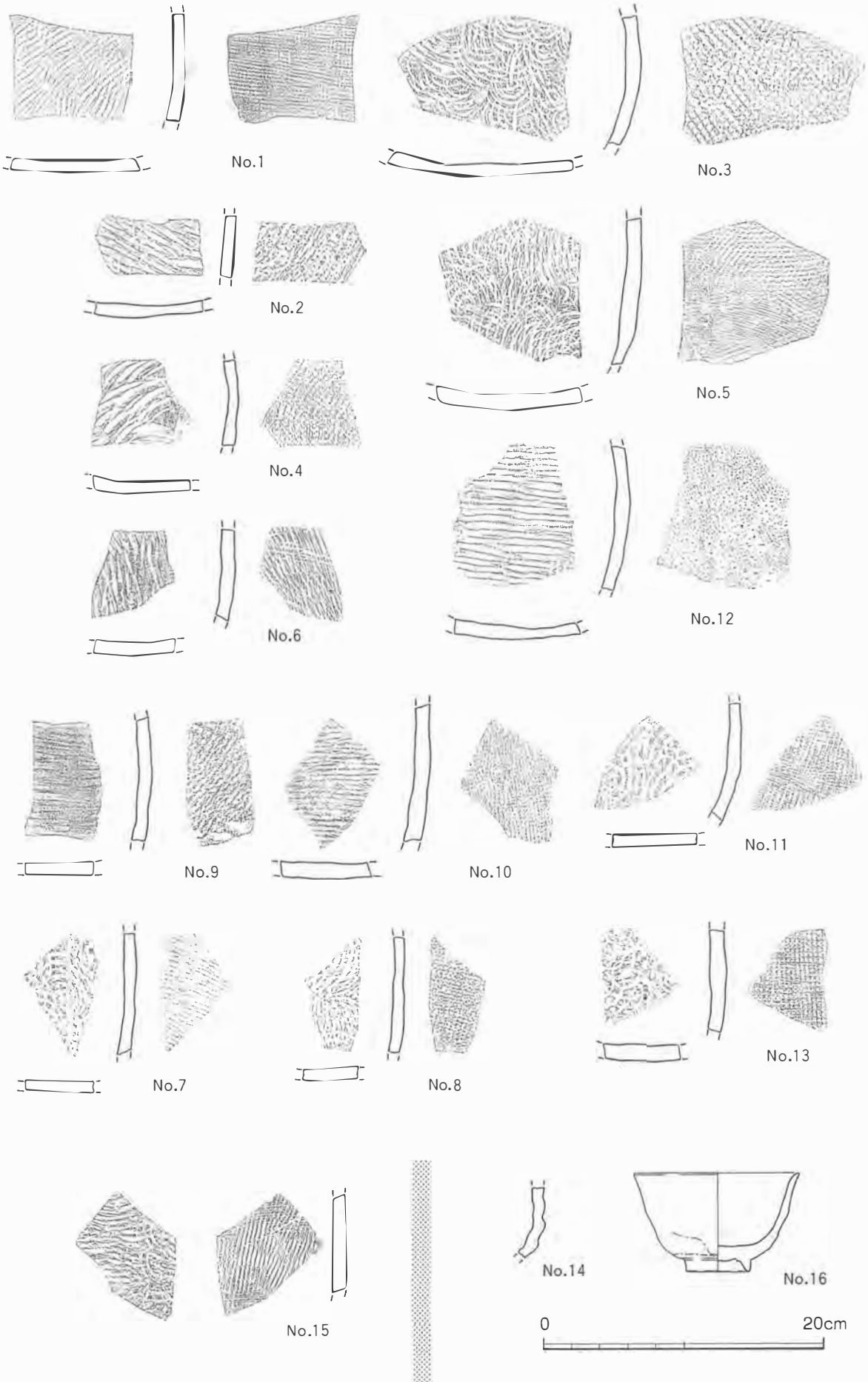
No.	種別	器種	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	TOTAL	Rb	Sr	Y	Zr	生産地の候補
1	須恵器	大甕片	0.63	1.26	16.31	74.24	0.025	1.64	0.42	1.22	0.018	3.87	99.63	93.6	95.6	33.3	206.1	荒尾窯群
2	須恵器	大甕片	0.58	1.08	17.39	71.72	0.097	1.71	0.39	1.10	0.013	5.56	99.65	91.3	86.9	30.0	218.2	荒尾窯群
3	須恵器	大甕片	1.11	1.20	17.57	71.69	0.028	1.80	0.56	1.07	0.015	4.59	99.63	94.2	145.7	35.1	220.4	荒尾窯群
4	須恵器	大甕片	0.68	1.03	20.04	70.72	0.025	1.85	0.24	1.25	0.013	3.94	99.77	92.7	54.5	31.6	204.0	荒尾窯群
5	須恵器	大甕片	0.58	1.21	21.72	67.25	0.107	1.74	0.37	1.26	0.025	5.24	99.50	88.6	67.1	37.6	182.7	不明
6	須恵器	大甕片	0.89	0.94	17.25	72.05	0.030	1.82	0.41	1.13	0.019	5.43	99.96	92.5	111.0	26.7	220.9	荒尾窯群
7	須恵器	大甕片	0.80	1.00	18.02	72.23	0.032	1.62	0.35	1.13	0.010	4.57	99.76	84.1	122.7	27.3	221.1	荒尾窯群
8	須恵器	大甕片	0.70	1.06	18.34	70.44	0.025	1.60	0.39	1.13	0.011	5.57	99.27	92.7	121.0	30.3	200.7	荒尾窯群
9	須恵器	大甕片	0.97	0.99	17.88	71.85	0.082	1.68	0.39	1.10	0.016	4.35	99.29	85.4	118.8	32.0	228.7	荒尾窯群
10	須恵器	大甕片	0.81	1.26	19.73	69.15	0.127	1.52	0.62	1.38	0.038	5.50	100.14	88.7	108.2	32.4	213.2	不明
11	須恵器	大甕片	1.66	1.21	25.46	61.04	0.027	2.47	0.72	1.01	0.044	5.91	99.56	138.1	184.9	29.6	229.1	不明
12	須恵器	大甕片	0.92	1.29	19.26	71.19	0.081	2.10	0.62	1.04	0.017	3.80	100.32	102.6	154.7	33.9	212.5	不明
13	須恵器	大甕片	1.66	1.00	24.60	62.38	0.025	2.43	0.72	1.00	0.040	5.29	99.14	129.1	188.6	27.4	249.2	不明
14	陶器	壺片？	0.19	1.12	23.44	64.39	0.062	2.43	0.73	1.32	0.054	6.71	100.44	133.9	95.8	28.0	202.1	不明
15	須恵器	大甕片	0.70	1.31	19.81	68.84	0.086	1.55	0.38	1.57	0.025	5.35	99.61	103.3	93.5	31.1	190.6	不明
16	陶器	埦	0.67	0.57	22.75	59.54	0.118	2.04	1.14	1.28	0.146	9.51	97.76	84.5	169.9	15.6	144.5	不明

表4　丸山窯跡・萩尾大溜池窯跡表採須恵器胎土の主成分元素（単位：%）、微量元素（単位：ppm）の分析値

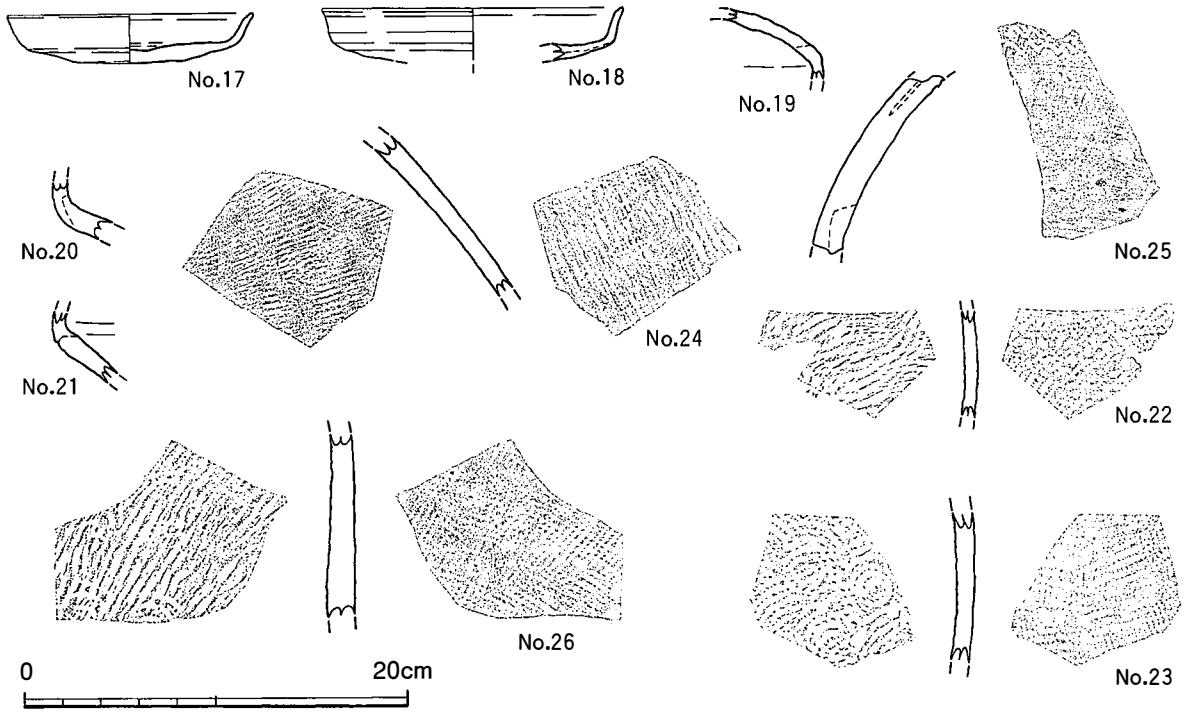
（化学組成）[主成分元素] Na_2O：酸化ナトリウム、MgO：酸化マグネシウム、Al_2O_3：酸化アルミニウム、SiO_2：酸化ケイ素、P_2O_5：酸化リン、K_2O：酸化カリウム、CaO：酸化カルシウム、TiO_2：酸化チタン、MnO：酸化マンガン、Fe_2O_3：酸化鉄　[微量元素] Rb：ルビジウム、Sr：ストロンチウム、Y：イットリウム、Zr：ジルコニウム

※No.17～26：荒尾市丸山窯跡、No.27～36：下益城郡萩尾大溜池窯跡

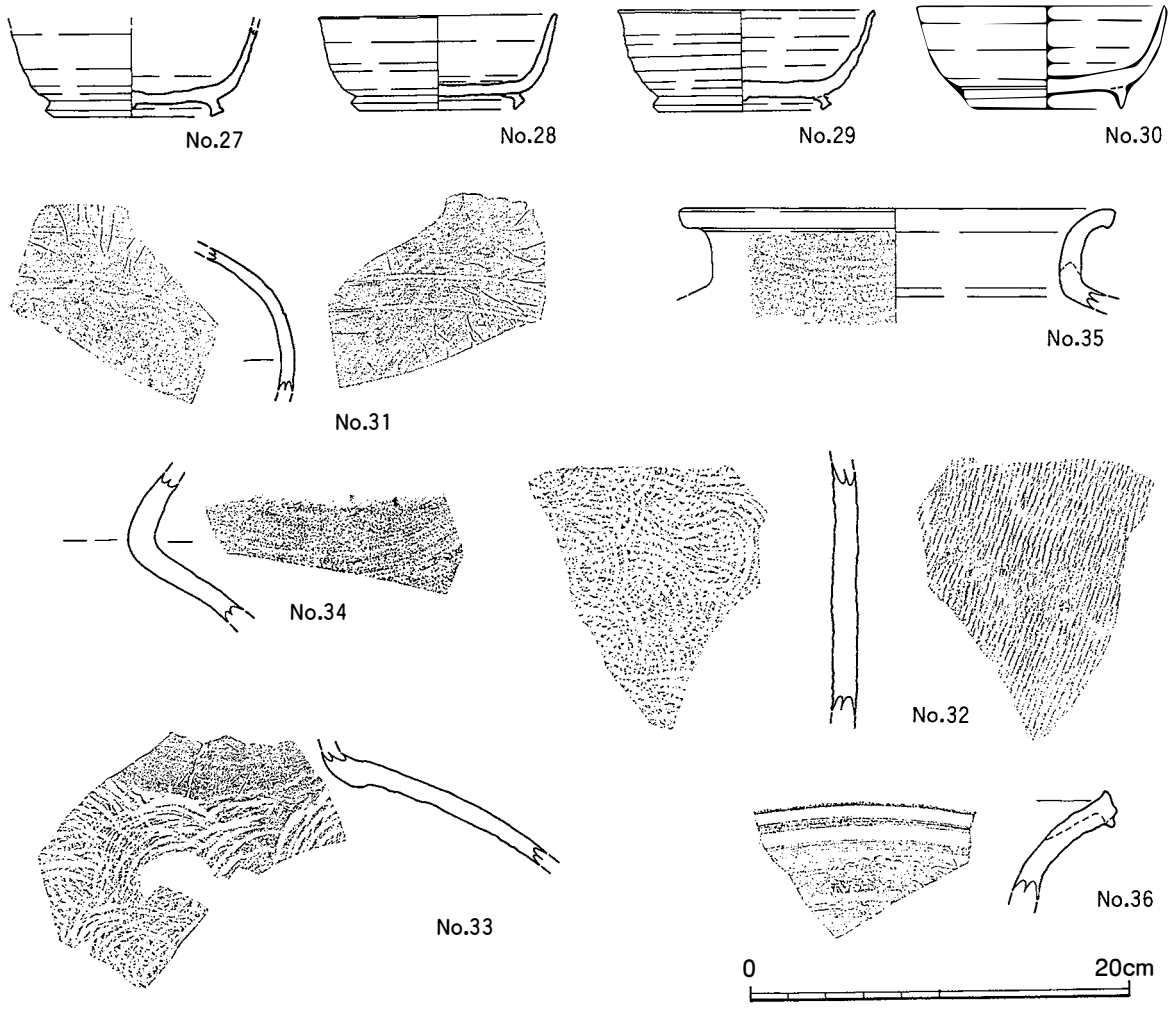
No.	種別	器種	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	TOTAL	Rb	Sr	Y	Zr
17	須恵器	皿	0.17	1.58	24.86	65.86	0.027	1.46	0.23	1.40	0.011	4.52	100.13	88.5	51.2	43.9	211.8
18	須恵器	皿	0.28	1.47	24.32	67.22	0.023	1.59	0.24	1.34	0.010	4.34	100.83	94.2	50.3	45.5	206.5
19	須恵器	坏？	0.25	1.58	24.17	66.91	0.024	1.53	0.23	1.40	0.010	4.56	100.66	88.5	51.3	44.3	214.5
20	須恵器	壺	0.59	1.49	20.89	69.66	0.031	1.63	0.53	1.20	0.016	4.34	100.37	87.6	117.6	35.6	216.1
21	須恵器	壺	0.88	1.15	17.95	71.88	0.027	1.77	0.51	1.11	0.015	4.96	100.24	92.0	147.0	33.6	214.3
22	須恵器	甕	0.31	1.42	22.87	68.78	0.021	1.70	0.26	1.29	0.011	3.91	100.58	97.2	58.2	43.0	208.9
23	須恵器	甕	0.90	1.27	19.16	69.23	0.025	1.58	0.45	1.37	0.016	5.51	99.51	89.1	100.1	30.5	218.5
24	須恵器	甕	0.59	1.30	20.04	69.85	0.026	1.45	0.39	1.33	0.015	5.07	100.06	84.3	90.6	30.2	221.0
25	須恵器	大甕	0.98	1.20	18.87	69.68	0.033	1.82	0.55	1.24	0.015	5.05	99.44	101.7	109.5	34.0	223.6
26	須恵器	甕	0.65	1.11	18.21	72.62	0.025	1.84	0.43	1.18	0.017	3.49	99.59	98.8	108.6	33.9	233.9
27	須恵器	高台付坏	0.65	1.42	20.15	68.95	0.032	1.77	0.38	1.29	0.031	5.10	99.77	106.5	71.3	34.7	182.5
28	須恵器	高台付坏	0.66	1.32	19.43	69.55	0.029	1.83	0.42	1.27	0.028	5.10	99.64	112.1	70.4	34.6	183.5
29	須恵器	高台付坏	0.71	1.33	18.92	69.66	0.030	1.94	0.42	1.23	0.030	4.96	99.22	119.2	79.3	36.3	178.1
30	須恵器	高台付坏	0.65	1.08	16.50	72.50	0.022	1.97	0.37	1.21	0.029	4.59	98.91	114.9	81.2	32.5	181.1
31	須恵器	壺	0.63	1.26	19.91	70.06	0.023	1.72	0.40	1.29	0.025	4.81	100.13	109.4	72.5	34.6	186.4
32	須恵器	甕	0.72	1.20	17.82	70.82	0.023	1.99	0.43	1.21	0.030	4.69	98.94	122.3	80.3	35.5	180.2
33	須恵器	甕	0.77	1.25	17.02	72.31	0.022	1.80	0.40	1.21	0.027	4.64	99.43	113.0	79.6	33.5	184.7
34	須恵器	甕	0.67	1.02	16.63	73.45	0.018	1.86	0.38	1.11	0.021	3.98	99.14	100.5	79.0	23.7	187.4
35	須恵器	壺	0.88	1.41	19.80	68.72	0.024	2.22	0.49	1.16	0.023	4.37	99.09	118.3	105.5	41.0	175.0
36	須恵器	甕	0.87	1.34	20.21	66.70	0.034	2.18	0.48	1.21	0.026	5.49	98.53	140.3	112.3	44.5	165.2
最大値			0.98	1.58	24.86	73.45	0.034	2.22	0.55	1.40	0.031	5.51		140.3	147.0	45.5	233.9
最小値			0.17	1.02	16.50	65.86	0.018	1.45	0.23	1.11	0.010	3.49		84.3	50.3	23.7	165.2
標準偏差			0.23	0.16	2.48	2.10	0.004	0.21	0.10	0.09	0.007	0.51		14.7	25.5	5.7	20.0



第356図　柳町遺跡Ⅶ区・Ⅷ区出土分析試料及び比較試料実測図



第357図　荒尾窯跡群丸山窯跡採集須恵器試料実測図



第358図　宇城窯跡群萩尾大溜池窯跡採集須恵器試料実測図

表5　荒尾丸山窯跡表採須恵器観察表

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考			
			器高	口径	底径	外面	外底面	内面	内底面
17	須恵器	皿	2.6	(12.9)	(6)	回転ヨコナデ	ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	不定方向のナデ
18	須恵器	皿	—	(15.3)	—	回転ヨコナデ	ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	—
19	須恵器	坏？	—	—	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—
20	須恵器	壺	—	—	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—
21	須恵器	壺	—	—	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—
22	須恵器	甕	—	—	—	擬格子タタキ	—	同心円タタキ	—
23	須恵器	甕	—	—	—	擬格子タタキ	—	同心円タタキ	—
24	須恵器	甕	—	—	—	平行タタキ後ヨコナデ	—	同心円タタキ後平行タタキ	—
25	須恵器	大甕	—	—	—	ヨコ方向のナデ，ハケメ，鋸歯文	—	摩耗のため調整不明	—
26	須恵器	甕	—	—	—	平行タタキ	—	平行タタキ	—

表6　萩尾大溜池窯跡表採須恵器観察表

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考			
			器高	口径	底径	外面	外底面	内面	内底面
27	須恵器	高台付坏	—	—	8.2	回転ヨコナデ	ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ
28	須恵器	高台付坏	4.9	(12.5)	(8.2)	回転ヨコナデ，ケズリ	ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ
29	須恵器	高台付坏	5.2	13.4	8.6	回転ヨコナデ	ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ
30	須恵器	高台付坏	5.3	13.0	7.9	回転ヨコナデ	ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ
31	須恵器	壺	—	—	—	タタキ後回転ヨコナデ，沈線	—	同心円タタキ後回転ヨコナデ	—
32	須恵器	甕	—	—	—	回転ヨコナデ	—	ヨコナデ，同心円タタキ	—
33	須恵器	甕	—	(22.2)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—
34	須恵器	甕	—	—	—	擬格子タタキ	—	回転ヨコナデ，同心円タタキ	—
35	須恵器	壺	—	—	—	回転ヨコナデ，波状文	—	回転ヨコナデ	—
36	須恵器	甕	—	—	—	平行タタキ	—	同心円タタキ	—

第５節　熊本県柳町遺跡出土木製品の樹種調査結果

㈱吉田生物研究所　汐見　　真
京都造形芸術大学　岡田　文男

１．試料

試料は熊本県柳町遺跡から出土した農工具22点、紡織具３点、服飾具３点、容器15点、祭祀具１点、文房具５点、建築部材20点、用途不明品43点の合計115点である。

２．観察方法

剃刀で木口（横断面)、柾目（放射断面)、板目（接続断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結果

樹種同定結果（針葉樹６種、広葉樹21種、つる性植物１種）の顕微鏡写真と表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）イチイ科カヤ属カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）
（遺物 No.1070・1725・1480）
（写真 No.４－10・６－３・７－８）
（表 No.40・54・69）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部は狭く年輪界は比較的不明瞭である。軸方向柔細胞を欠く。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～４個ある。仮道管の壁には対になった螺旋肥厚が存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。カヤは本州（中・南部)、四国、九州に分布する。

２）マキ科マキ属イヌマキ（*Podocarpus macrophyllus* D.Don）
（遺物 No.1068・1723）
（写真 No.４－９・６－５）
（表 No.39・56）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかであり、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個ある。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）をなして存在する。柾目では放射組織はすべて単列であった。イヌマキは本州（中・南部)、四国、九州、琉球に分布する。

３）イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ（*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch f. drupacea Kitamura）
（遺物 No.1489）
（写真 No.３－５）
（表 No.25）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭く、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平均に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で１分

野に１～２個ある。仮道管内部には螺旋肥厚が見られる。短冊形をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）して存在する。板目では放射組織はほぼ単列であった。イヌガヤは本州（岩手以南)、四国、九州に分布する。

４）マツ科モミ属（*Abies* sp.）

（遺物 No.1232・1234・744・737・740・1190）

（写真 No.２－１・２－２・３－２・７－10・８－８・10－９・10－10）

（表 No.11・12・22・71・79・100・101）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で１分野に１～４個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

５）マツ科マツ属［二葉松類］（*Pinus* sp.）

（遺物 No.1485・1239・1727）

（写真 No.１－５・１－８・６－２）

（表 No.５・８・53）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で１～15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属［二葉松類］はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

６）スギ科スギ属スギ（*Cryptomeria japonica* D.Don）

（遺物 No.1729・901・755）

（写真 No.６－４・７－６・９－１）

（表 No.55・67・82）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

７）ブナ科シイ属（*Castanopsis* Sp.）

（遺物No.1483・1492・1172・1173・2155・2156・2157・2158・2159・2160・2161・2162・2163・2164・889・902・904・763・738・746・965・964・66・92・91・78）

（写真No.１－３・３－７・４－４～５・５－１～９・６－８・６－10・７－２・９－３・９－８～９・10－３～４・11－１・11－５・11－７・11－９）

（表No.３・27・34・35・41・42・43・44・45・46・47・48・49・50・59・61・63・84・89・90・94・95・102・106・108・110）

環孔性放射孔材である。木口では孔圏部の道管（～300μｍ）は単独でかつ大きいが接線方向には連続し

ていない。孔圏外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で柵状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスダジイがあるが、ツブラジイに見られる集合～複合放射組織の出現頻度が低い為区別は難しい。シイ属は本州（関東以西）、四国、九州、琉球に分布する。

8）ブナ科コナラ属アカガシ亜属（*Quercus subgen. Cyclobalanopsis* sp.）

（遺物 No.395・1240・736・745・747・752・1490・886・903・895・741・735・764・739・953・952・61・65・63・102）

（写真 No. 1－1・1－9・2－3・2－7・3－1・3－3・3－6・6－9・7－1・7－7・8－3～4・9－4・9－6・9－10・10－2・11－2～4・11－8）

（表 No. 1・9・13・17・21・23・26・60・62・68・74・75・85・87・91・93・103・104・105・109）

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管（～200μm）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。

9）ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

（遺物 No.758・757）

（写真 No. 2－8～9）

（表 No.18・19）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～500μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

10）ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris* sp.）

（遺物 No.756）

（写真 No. 7－9）

（表 No.70）

環孔材である。木口では大道管（～430μm）が年輪界にそって1～数列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、厚壁で円形の小道管が単列に放射方向に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に幅の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ属クヌギ節はクヌギ、アベマキがあり、

本州（岩手、山形以南）、四国、九州、琉球に分布する。

11）ブナ科ブナ属（*Fagus* sp.）

（遺物 No.1759・2131）

（写真 No. 6 － 1 ・12－ 2 ）

（表 No.52・113）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～110μｍ）がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、２～３列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、２～３列、広放射組織の３種類がある。広放射組織は肉眼でも１～３mm の高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

12）ニレ科エノキ属（*Celtis* sp.）

（遺物 No.897・89・111）

（写真 No. 7 － 4 ・11－ 6 ・11－10）

（表 No.65・107・111）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～230μｍ）が数列で孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が多数集まって円形、斜線状の集団管孔を形成し、花綵状に配列している。放射組織は１～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏型のものと８～10細胞列の大型のものがある。大型の放射組織は周囲を軸方向に長くやや大型の細胞（鞘細胞）に取り囲まれている。エノキ属はエノキ、エゾエノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

13）ニレ科ムクノキ属ムクノキ（*Aphananthe aspera Planch.*）

（遺物 No.1243・751・887・759・775）

（写真 No. 1 －10・ 2 － 4 ・ 7 － 3 ・ 8 － 9 ～10）

（表 No.10・14・64・80・81）

散孔材である。木口では中庸の道管（～170μｍ）が単独ないし２～３個放射方向に複合して年輪界に散らばっている。軸方向柔細胞は道管の周囲を取り囲んだものやそれらがつながって白い帯のように見えるもの（連合翼状～帯状柔組織）がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は篩状の壁孔が存在する。板目では放射組織は１～５細胞列、高さ～700μｍからなる。ムクノキは本州、四国、九州に分布する。

14）クワ科クワ属（*Morus* sp.）

（遺物 No.893）

（写真 No. 6 － 6 ）

（表 No.57）

環孔材である。木口では大道管（～280μｍ）が年輪界にそって１～５列並んで孔圏部を形成している。

孔圏外では小道管が２～６個、斜線状ないし接線状、集合状に不規則に複合して散在している。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。小道管には螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管内には充填物（チロース）が見られる。板目では放射組織は１～６細胞列、高さ～1.1mm からなる。単列放射組織はあまり見られない。クワ属はヤマグワ、ケグワ、マグワなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

15）クスノキ科クスノキ属クスノキ（*Cinnamomum camphora* Presl）

（遺物 No.1484・762・1174～1176・2215・743・753・956・962・1185）

（写真 No.１－２・２－５・３－９～10・４－１・４－６～７・５－10・８－２・８－７・10－５～７）

（表 No.２・15・29・30・31・36・37・51・73・78・96・97・98）

散孔材である。木口では中庸の道管（～200μｍ）が単独または２ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に取り囲んでおり、その中に一見小さな道管と見間違えるほどの油細胞（樟脳油貯蔵細胞）がある。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の大型壁孔が階段状に並んでいる。板目では放射組織は１～３細胞列、高さ～800μｍからなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞に変化したものが多く見られる。クスノキは本州（関東以西）、四国、九州に分布する。

16）クスノキ科シロダモ属（*Neolitsea* sp.）

（遺物 No.888）

（写真 No.６－７）

（表 No.58）

散孔材である。木口では中庸の道管（～100μｍ）が単独または２，３個が放射方向に複合してやや疎に分布している。軸方向柔細胞は道管の周囲を囲んでいる。柾目では道管は単穿孔とまれに階段穿孔、側壁に交互壁孔を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は長楕円状、篩状ないし階段状の壁孔が並んでいる。板目では放射組織は１～２・３細胞列、高さ～700μｍからなる。油細胞はほとんど見られない。シロダモ属はシロダモ、イヌガシがあり、本州（宮城、山形以南）、四国、九州、琉球に分布する。

17）クスノキ科タブノキ属（*Machilus* sp.）

（遺物 No.1177）

（写真 No.４－８）

（表 No.38）

散孔材である。木口では中庸で厚壁の道管（～130μｍ）が単独または２ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に囲んでいる。柾目では道管は単穿孔とまれに階段穿孔、側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管と放射組織間壁孔は円形、レンズ状、篩状の壁孔が並んでいる。板目では放射組織は１～３細胞列、高さ～600μｍからなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞（樟脳油貯蔵細胞）となったものが見られる。タブノキ属はタブノキ、ホソバタブがあり、本州（日本海側は青森、太平洋側は岩手中部以南）、四国、九州、琉球に分布する。

18）マンサク科イスノキ属イスノキ（*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.）

（遺物 No.1171・1168～1170・1191）

（写真 No.４－２～３・10－８）

（表 No.32・33・99）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～50μｍ）がおおむね単独で、大きさ数とも年輪全体を通じて変化なく平等に分布する。軸方向柔細胞は黒く接線方向に並び、ほぼ一定の間隔で規則的に配列している。放射組織は１～２列のものが多数走っているのが見られる。柾目では道管は階段穿孔と内部に充填物（チロース）がある。軸方向には黒いすじの柔細胞ストランドが多数走っており、一部は提灯状の細胞になっている。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は１～２細胞列、高さ～１mm で多数分布している。イスノキは本州（関東以西）、四国、九州、琉球に分布する。

19）ムクロジ科ムクロジ属ムクロジ（*Sapindus mukurossi Gaertn.*）

（遺物 No.1491・771）

（写真 No.３－８・８－１）

（表 No.28・72）

環孔材である。木口ではやや大きい道管（～300μｍ）が数列で孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が団塊状に集合している。軸方向柔細胞は幅の広い帯状をなして接線方向に連続している（帯状柔組織）。柾目では大道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目は放射組織は１～３細胞列、高さ～400μｍからなる。ムクロジは本州（中南部）、四国、九州、琉球に分布する。

20）ウルシ科ウルシ属（*Rhus* sp.）

（遺物 No.892・754）

（写真 No.７－５・８－６）

（表 No.66・77）

環孔材である。木口ではやや大きい道管（～270μｍ）が、単独または２ないし数個が集団で複合して孔圏部を形成している。孔圏外は単独ないし数個複合して散在している。軸方向柔細胞は周囲状が顕著である。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は１～３細胞列、高さ～700μｍからなる。ウルシ属はヌルデ、ヤマウルシがあり、北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する。

21）アワブキ科アワブキ属（*Meliosma* sp.）

（遺物 No.791・209）

（写真 No.３－４・12－１）

（表 No.24・112）

散孔材である。木口では中庸な道管（～130μｍ）が、単独ないし柔細胞を間に挟んで２～４個放射方向に複合して分布している。幅の広い放射組織が幾筋もある。柾目では道管は階段穿孔（バー少数）を持つ。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は１～４細胞列、高さ～2.5mm からなる。アワブキ属はヤマビワ、アワブキ等があり、本州、四国、九州、琉球に分布する。

22）ツバキ科ツバキ属（*Camellia* sp.）

（遺物 No.749・955）

（写真 No. 2 － 6 ・ 9 － 5 ・ 9 － 7 ・10－ 1 ）

（表 No.16・86・88・92）

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～40μm）が、単独ないし 2 ～ 3 個接合して均等に分布する。放射組織は 1 ～ 3 細胞列で黒い筋としてみられる。木繊維の壁はきわめて厚い。柾目では道管は階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔（とくに直立細胞）は大型のレンズ状の壁孔が階段状に並んでいる。放射柔細胞の直立細胞と軸方向柔細胞にはダルマ状にふくれているものがある。板目では放射組織は 1 ～ 4 細胞列、高さ～ 1 mm 以下からなり、平伏細胞の多列部の上下または間に直立細胞の単列部がくる構造をしている。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが全体で見られる。ツバキ属はツバキ、サザンカ、チャがあり、本州、四国、九州に分布する。

23）ツバキ科サカキ属サカキ（*Cleyera japonica* Thunb. Pro parte emend. S. et Z.）

（遺物 No.1486）

（写真 No. 1 － 4 ）

（表 No. 4 ）

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～50μm）が単独ないし 2 ～ 4 個複合して平等に分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、高さ～1.5mm からなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが見られる。サカキは本州（茨城、石川以西南）、四国、九州に分布する。

24）ツバキ科ヒサカキ属（*Eurya* sp.）

（遺物 No.748）

（写真 No. 8 － 5 ）

（表 No.76）

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～50μm）が単独ないし 2 ～ 4 個複合して平等に分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔が存在する。板目では放射組織は 1 ～ 4 細胞列で、高さ～ 5 mm からなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが全体で見られる。ヒサカキ属はヒサカキ、ハマヒサカキがあり、本州（岩手、秋田以南）、四国、九州、琉球に分布する。

25）ミズキ科ミズキ属？（*Cornus* sp.）

（遺物 No.2132）

（写真 No.12－ 3 ）

（表 No.114）

散孔材である。木口は乾燥で収縮しており、道管の大きさ、分布の様子ははっきりとしない。柾目では道管は階段穿孔を有する。放射組織は平伏と方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は小さい。板目では放射組織は 1 ～ 4 細胞列、高さ～ 1 mm からなる。

26）ツツジ科スノキ属シャシャンボ（*Va ccinium brtacteatum* Thunb.）

（遺物 No.1481・1245・742）

（写真 No. 1 － 6 ～ 7 ・ 9 － 2 ）

（表 No. 6 ・ 7 ・83）

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管（～50μｍ）が、単独あるいは２～３個複合して散在する。柾目では道管は単穿孔、階段穿孔（バー数１～10）と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は凸レンズ形を呈する直立細胞の単列のものと、５～８細胞列で高さがきわめて高い多列放射組織（～２mm 以上）からなる。多列部には鞘細胞が見られる。シャシャンボは本州（関東南部、東海、石川以西）、四国、九州に分布する。

27）モクセイ科イボタノキ属（*Ligustrum obtusifolium* Sieb. et Zucc.）

（遺物 No.750）

（写真 No. 2 －10）

（表 No.20）

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管（～60μｍ）がほぼ単独で多数分布している。年輪界の道管はやや大きく孔圏的である。柾目では道管は単穿孔と螺旋肥厚を有する。木繊維も螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は中型の大きさである。板目では放射組織は１～２細胞列、高さ～600μｍからなる。イボタノキ属はイボタノキ、ミヤマイボタ、ネズミモチ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

28）つる性植物

（遺物 No.114）

（写真 No.12－ 4 ）

（表 No.115）

半環孔材である。大きな道管（～100μｍ）がほぼ単独で年輪にそってまばらに分布している。小道管は単独ないし数個が放射状ないし塊状の複合して分布している。道管壁はやや厚い。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。内腔には着色物質がみられる。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織が多数の端列と２～３細胞列のものがある。

◆参考文献◆

島地　謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」　雄山閣出版（1988）
島地　謙・伊東隆夫「図説木材組織」　地球社（1982）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」　京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」　保育社（1979）
深澤和三「樹体の解剖」　海青社（1997）

◆使用顕微鏡◆

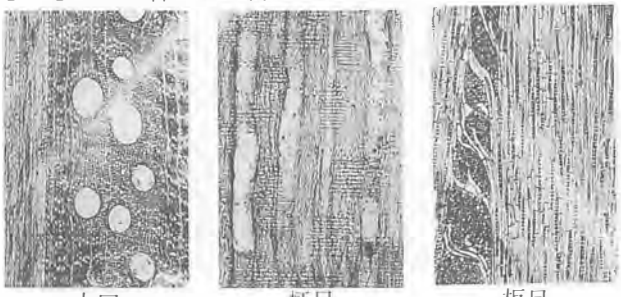
Nikon
MICROFLEEX UFX-DX Type 115

表１　柳町遺跡出土木製品樹種同定表

No.	写真番号	遺物番号	登録番号	遺構名	器　種	樹　種
1	1－1	395	97TY－4014	4SE005	泥よけ	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
2	1－2	1484	97TY－4040	4SX038	盤転用工作台	クスノキ科クスノキ属クスノキ
3	1－3	1483	97TY－4041	4SX038	建築材	ブナ科シイ属
4	1－4	1486	97TY－4044	4SX038	建築材	ツバキ科サカキ属サカキ
5	1－5	1485	97TY－4045	4SX038	建築材	マツ科マツ属［二葉松類］
6	1－6	1481	97TY－4046	4SX038	建築材	ツツジ科スノキ属シャシャンボ
7	1－7	1245	97TY－4067	4SE043	槽	ツツジ科スノキ属シャシャンボ
8	1－8	1239	97TY－4068	4SE043	紡錘車	マツ科マツ属［二葉松類］
9	1－9	1240	97TY－4069	4SE043	柄	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
10	1－10	1243	97TY－4070	4SE043	柄	ニレ科ムクノキ属ムクノキ
11	2－1	1232	97TY－4071	4SE043	木簡様木製品	マツ科モミ属
12	2－2	1234	97TY－4072	4SE043	木簡様木製品	マツ科モミ属
13	2－3	736	97TY－4108	5SX049	一木平鋤	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
14	2－4	751	97TY－4109	5SX049	加工時の除去部	ニレ科ムクノキ属ムクノキ
15	2－5	762	97TY－4110	5SX049	建築材	クスノキ科クスノキ属クスノキ
16	2－6	749	97TY－4111	5SX049	木錘	ツバキ科ツバキ属
17	2－7	745	97TY－4112	5SX049	建築材転用工作台	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
18	2－8	758	97TY－4115	5SX049	建築材	ブナ科クリ属クリ
19	2－9	757	97TY－4116	5SX049	建築材	ブナ科クリ属クリ
20	2－10	750	97TY－4117	5SX049	木錘	モクセイ科イボタノキ属
21	3－1	747	97TY－4121	5SX049	ミカン割杭転用工作台	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
22	3－2	744	97TY－4122	5SX049	合わせ箱の部材	マツ科モミ属
23	3－3	752	97TY－4182	5SX049	柄付木製品？	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
24	3－4	791	97TY－4143	4SM053	柄	アワブキ科アワブキ属
25	3－5	1489	97TY－4149	4SK056	コマ形木製品	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ
26	3－6	1490	97TY－4151	4SK056	又鍬	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
27	3－7	1492	97TY－4152	4SK056	板材	ブナ科シイ属
28	3－8	1491	97TY－4153	4SK056	板材	ムクロジ科ムクロジ属ムクロジ
29	3－9		97TY－4189	4SE017	井戸枠	クスノキ科クスノキ属クスノキ
30	3－10		97TY－4200	4SE017	井戸枠	クスノキ科クスノキ属クスノキ
31	4－1	1174	97TY－4212	4SE017	盤	クスノキ科クスノキ属クスノキ
32	4－2	1171	97TY－4213	4SE017	櫛	マンサク科イスノキ属イスノキ
33	4－3	1168 1169 1170	97TY－4214	4SE017	櫛	マンサク科イスノキ属イスノキ
34	4－4	1172	97TY－4215	4SE017	蓋材	ブナ科シイ属
35	4－5	1173	97TY－4216	4SE017	蓋材	ブナ科シイ属
36	4－6	1175	97TY－4217	4SE017	容器	クスノキ科クスノキ属クスノキ
37	4－7	1176	97TY－4218	4SE017	柄付木製品	クスノキ科クスノキ属クスノキ
38	4－8	1177	97TY－4234	4SE017	建築部材	クスノキ科タブノキ属タブノキ
39	4－9	1068	97TY－4030	4SB034	柱材	マキ科マキ属イヌマキ
40	4－10	1070	97TY－4031	4SB034	柱材	イチイ科カヤ属カヤ
41	5－1	2155	97TY－4190	4SE017	せいろ組み井戸枠垂木（東側）	ブナ科シイ属
42	5－2	2156	97TY－4191	4SE017	せいろ組み井戸枠垂木（南側）	ブナ科シイ属
43	5－3	2157	97TY－4192	4SE017	せいろ組み井戸枠垂木（北側）	ブナ科シイ属
44	5－4	2158	97TY－4193	4SE017	せいろ組み井戸枠垂木（西側）	ブナ科シイ属
45	5－5	2159	97TY－4194	4SE017	せいろ組み井戸枠板材（西側２）	ブナ科シイ属
46	5－6	2160	97TY－4195	4SE017	せいろ組み井戸枠板材（西側３）	ブナ科シイ属
47		2161	97TY－4196	4SE017	せいろ組み井戸枠板材（東側２）	ブナ科シイ属
48	5－7	2162	97TY－4197	4SE017	せいろ組み井戸枠板材（東側３）	ブナ科シイ属
49	5－8	2163	97TY－4198	4SE017	せいろ組み井戸枠板材（北側２）	ブナ科シイ属
50	5－9	2164	97TY－4199	4SE017	せいろ組み井戸枠板材（南側２）	ブナ科シイ属
51	5－10	2215	97TY－4267	4SE017	くりぬき井戸枠本体部分	クスノキ科クスノキ属クスノキ
52	6－1	1759	98TY－5024	5SK016	漆塗椀	ブナ科ブナ属
53	6－2	1727	98TY－5064	5SX023	研磨器？	マツ科マツ属［二葉松類］
54	6－3	1725	98TY－5065	5SX023	曲げ物部材？	イチイ科カヤ属カヤ
55	6－4	1729	98TY－5067	5SX023	織具部材？	スギ科スギ属スギ
56	6－5	1723	98TY－5073	5SX023	建築材	マキ科マキ属イヌマキ
57	6－6	893	98TY－5108	5SX040	有孔板材	クワ科クワ属
58	6－7	888	98TY－5109	5SX040	脚	クスノキ科シロダモ属
59	6－8	889	98TY－5110	5SX040	円盤状木製品	ブナ科シイ属
60	6－9	886	98TY－5111	5SX040	又鍬再加工品	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
61	6－10	902	98TY－5112	5SX040	板材	ブナ科シイ属
62	7－1	903	98TY－5113	5SX040	板材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属

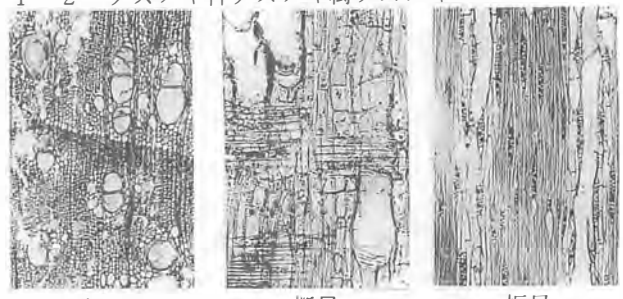
No.	写真番号	遺物番号	登録番号	遺構名	器　種	樹　種
63	7－2	904	98TY－5114	5SX040	板材	ブナ科シイ属
64	7－3	887	98TY－5115	5SX040	横槌	ニレ科ムクノキ属ムクノキ
65	7－4	897	98TY－5116	5SX040	建築材	ニレ科エノキ属
66	7－5	892	98TY－5117	5SX040	弓？	ウルシ科ウルシ属
67	7－6	901	98TY－5122	5SX040	有孔板材	スギ科スギ属スギ
68	7－7	895	98TY－5124	5SX040	木簡様木片	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
69	7－8	1480	98TY－5204	5SX049	糸巻？	イチイ科カヤ属カヤ
70	7－9	756	98TY－5205	5SX049	建築材の一部	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節
71	7－10	737	98TY－5206	5SX049	有孔板材	マツ科モミ属
72	8－1	771	98TY－5207	5SX049	杭	ムクロジ科ムクロジ属ムクロジ
73	8－2	743	98TY－5208	5SX049	鍬	クスノキ科クスノキ属クスノキ
74	8－3	741	98TY－5209	5SX049	又鍬	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
75	8－4	735	98TY－5210	5SX049	鍬	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
76	8－5	748	98TY－5211	5SX049	木錘	ツバキ科ヒサカキ属
77	8－6	754	98TY－5212	5SX049	弓？	ウルシ科ウルシ属
78	8－7	753	98TY－5213	5SX049	箱の一部？	クスノキ科クスノキ属クスノキ
79	8－8	740	98TY－5215	5SX049	板材	マツ科モミ属
80	8－9	759	98TY－5216	5SX049	建築材	ニレ科ムクノキ属ムクノキ
81	8－10	775	98TY－5217	5SX049	建築材	ニレ科ムクノキ属ムクノキ
82	9－1	755	98TY－5219	5SX049	有孔板材	スギ科スギ属スギ
83	9－2	742	98TY－5220	5SX049	容器	ツツジ科スノキ属シャシャンボ
84	9－3	763	98TY－5221	5SX049	建築材	ブナ科シイ属
85	9－4	764	98TY－5222	5SX049	建築材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
86	9－5		98TY－5226	5SX049	柄の一部	ツバキ科ツバキ属
87	9－6	739	98TY－5227	5SX049	板材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
88	9－7		98TY－5229	5SX049	柄の一部	ツバキ科ツバキ属
89	9－8	738	98TY－5234	5SX049	板材	ブナ科シイ属
90	9－9	746	98TY－5236	5SX049	板材	ブナ科シイ属
91	9－10	953	98TY－5277	5SX051	鍬破片	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
92	10－1	955	98TY－5278	5SX051	天秤棒	ツバキ科ツバキ属
93	10－2	952	98TY－5279	5SX051	鋤の取手	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
94	10－3	965	98TY－5282	5SX051	加工板材	ブナ科シイ属
95	10－4	964	98TY－5283	5SX051	板材	ブナ科シイ属
96	10－5	956	98TY－5285	5SX051	板材	クスノキ科クスノキ属クスノキ
97	10－6	962	98TY－5286	5SX051	板材	クスノキ科クスノキ属クスノキ
98	10－7	1185	98TY－5337	5SE059	井戸枠	クスノキ科クスノキ属クスノキ
99	10－8	1191	98TY－5047	5SE019	櫛	マンサク科イスノキ属イスノキ
100	10－9	1190	98TY－5378	5SE019	木簡様木片	マツ科モミ属
101	10－10		98TY－5379	5SE019	木簡様板材	マツ科モミ属
102	11－1	66	99TY－6002	6SX049	有孔板材	ブナ科シイ属
103	11－2	61	99TY－6003	6SX049	割材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
104	11－3	65	99TY－6004	6SX049	木器未製品	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
105	11－4	63	99TY－6006	6SX049	板材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
106	11－5	92	99TY－6023	6SX054	矢板	ブナ科シイ属
107	11－6	89	99TY－6025	6SX054	半裁杭	ニレ科エノキ属
108	11－7	91	99TY－6027	6SX054	矢板	ブナ科シイ属
109	11－8	102	99TY－6042	6SX054	板材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
110	11－9	78	99TY－6058	6SX054	矢板	ブナ科シイ属
111	11－10	111	99TY－6063	6SX054	矢板	ニレ科エノキ属
112	12－1	209	99TY－6129	j－40グリッド	鋤？	アワブキ科アワブキ属
113	12－2	2131	99TY－6132	6SX506	漆塗椀	ブナ科ブナ属
114	12－3	2132	99TY－6133	6SX507	漆塗椀	ミズキ科ミズキ属？
115	12－4	114	99TY－6138	6SX049	網代	つる性植物

1－1　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



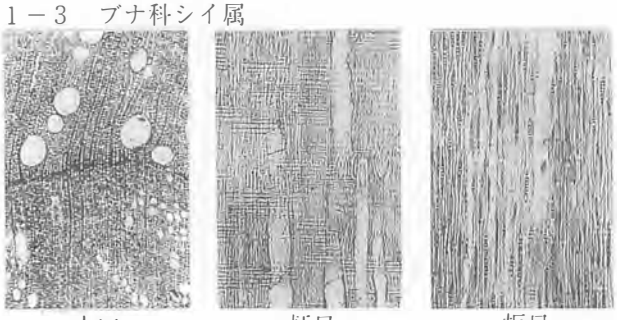
木口　柾目　板目

1－2　クスノキ科クスノキ属クスノキ



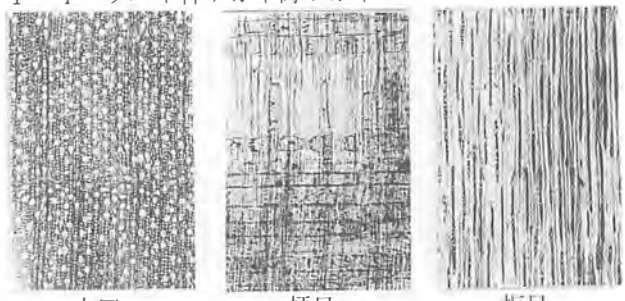
木口　柾目　板目

1－3　ブナ科シイ属



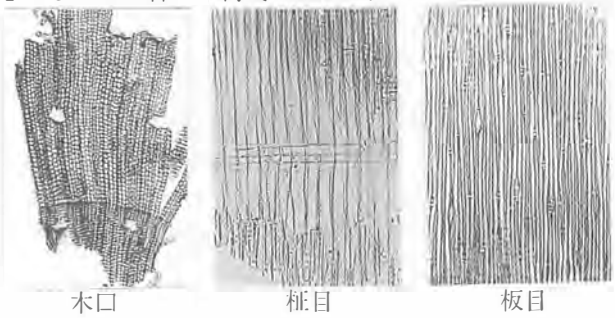
木口　柾目　板目

1－4　ツバキ科サカキ属サカキ



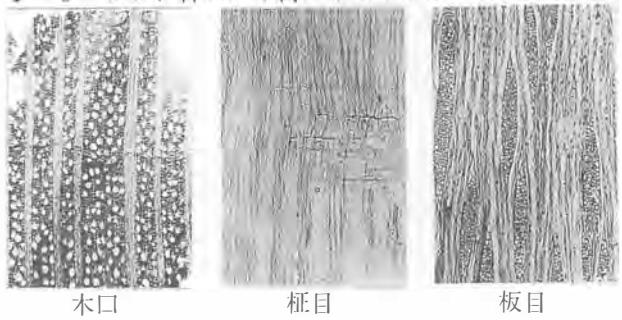
木口　柾目　板目

1－5　マツ科マツ属〔二葉松類〕



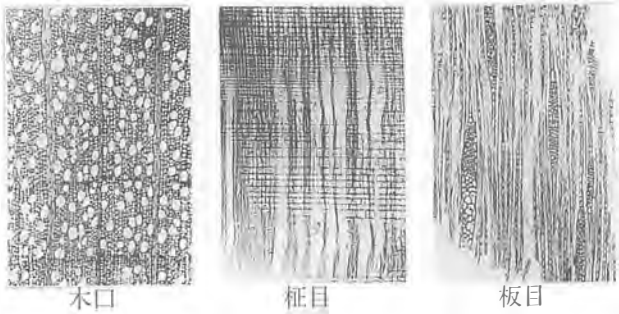
木口　柾目　板目

1－6　ツツジ科スノキ属シャシャンボ



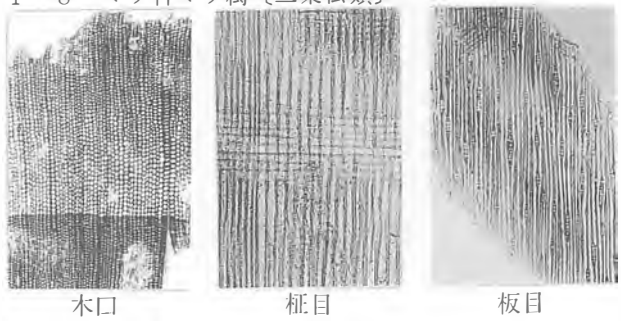
木口　柾目　板目

1－7　ツツジ科スノキ属シャシャンボ



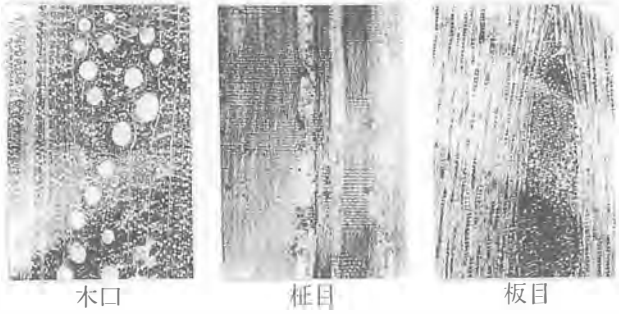
木口　柾目　板目

1－8　マツ科マツ属〔二葉松類〕



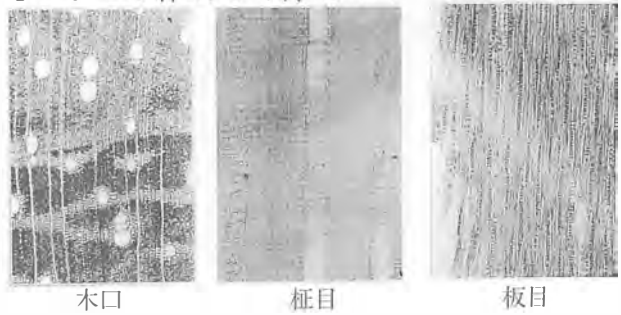
木口　柾目　板目

1－9　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



木口　柾目　板目

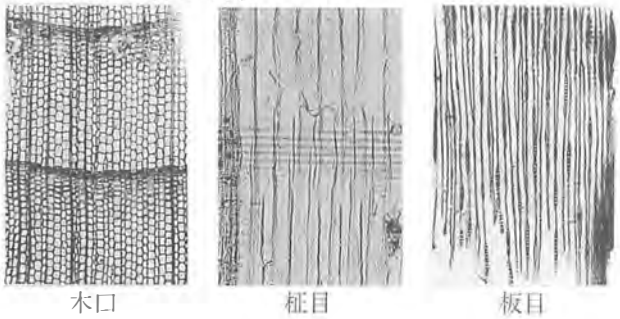
1－10　ニレ科ムクノキ属ムクノキ



木口　柾目　板目

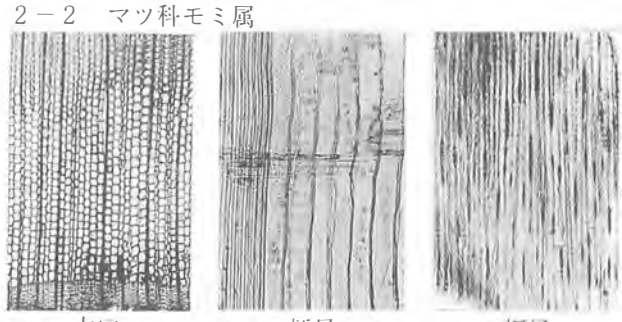
柳町遺跡Ⅶ区出土木製品樹種顕微鏡写真　－1－

2－1　マツ科モミ属



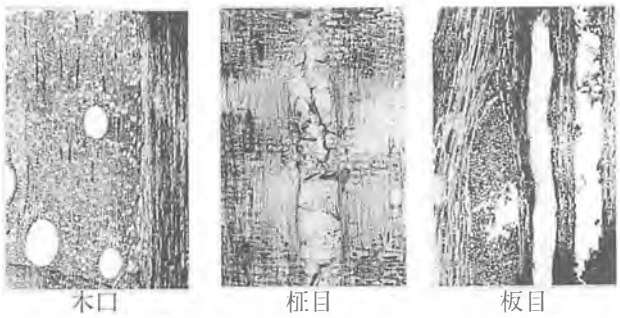
木口　柾目　板目

2－2　マツ科モミ属



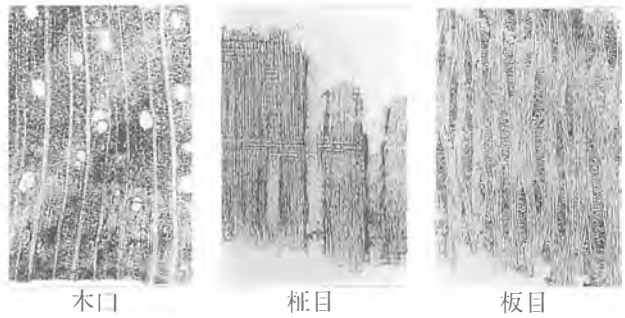
木口　柾目　板目

2－3　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



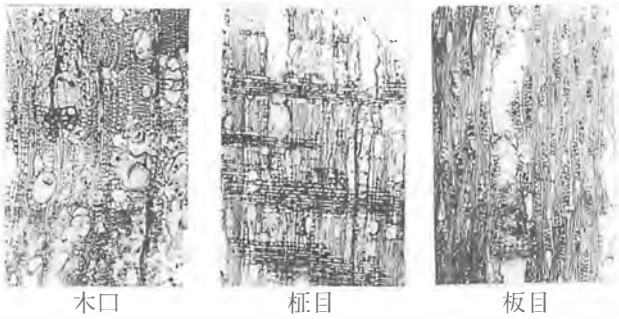
木口　柾目　板目

2－4　ニレ科ムクノキ属ムクノキ



木口　柾目　板目

2－5　クスノキ科クスノキ属クスノキ

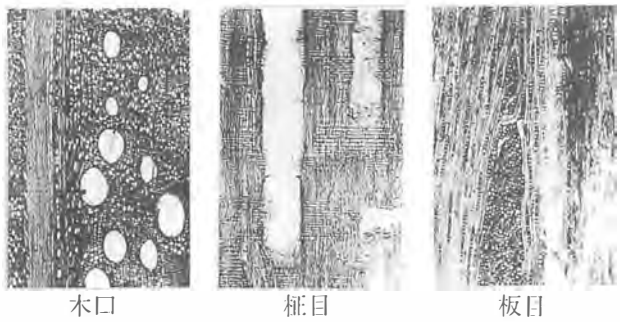


木口　柾目　板目

2－6　ツバキ科ツバキ属

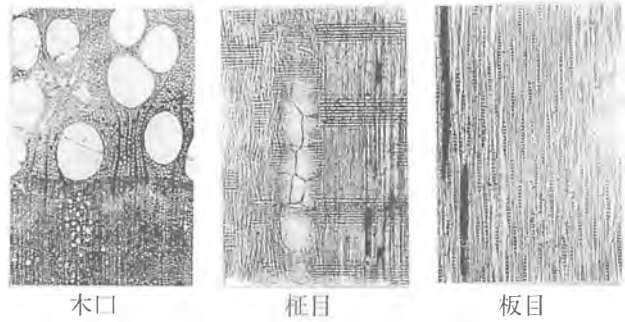
木口　柾目　板目

2－7　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



木口　柾目　板目

2－8　ブナ科クリ属クリ

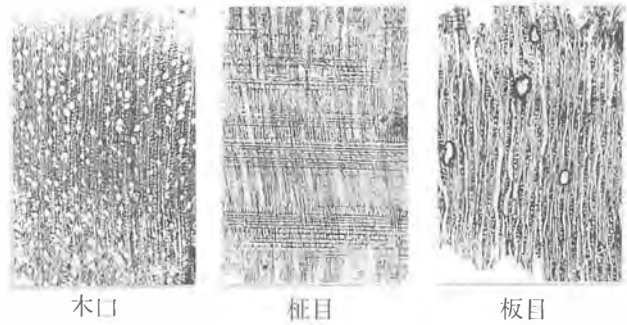


木口　柾目　板目

2－9　ブナ科クリ属クリ

木口　柾目　板目

2－10　モクセイ科イボタノキ属



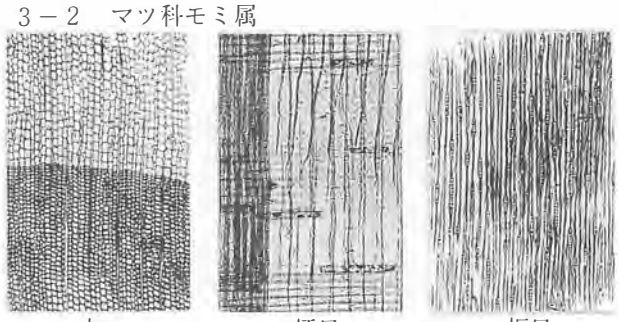
木口　柾目　板目

柳町遺跡Ⅶ区出土木製品樹種顕微鏡写真　－2－

3－1　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

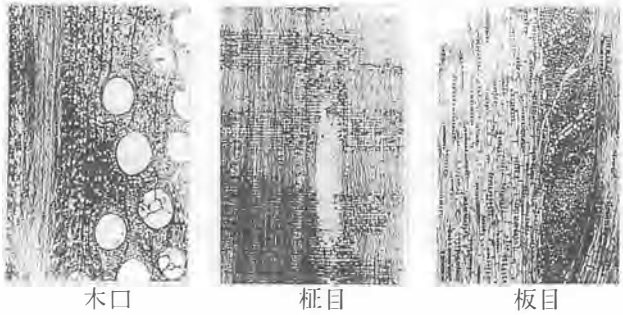
木口　柾目　板目

3－2　マツ科モミ属



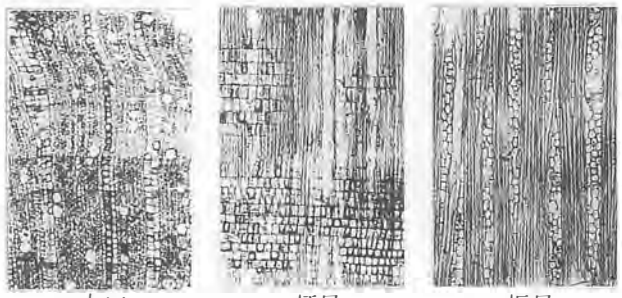
木口　柾目　板目

3－3　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



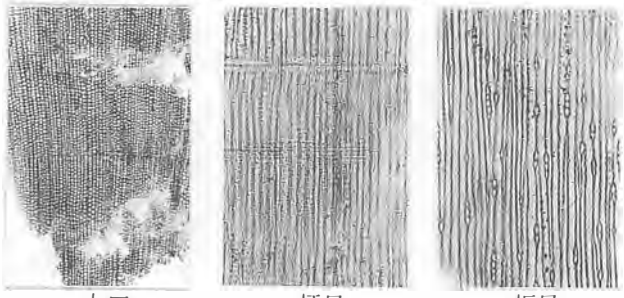
木口　柾目　板目

3－4　アワブキ科アワブキ属



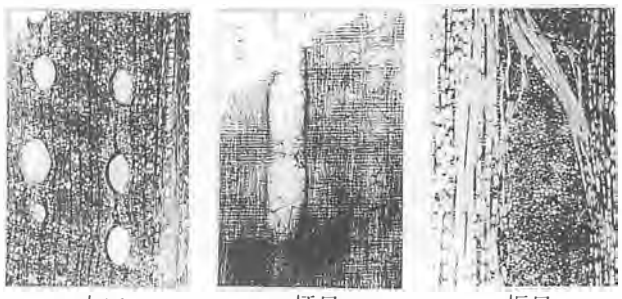
木口　柾目　板目

3－5　イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ



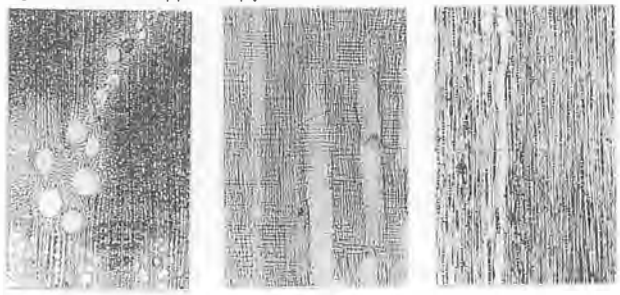
木口　柾目　板目

3－6　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



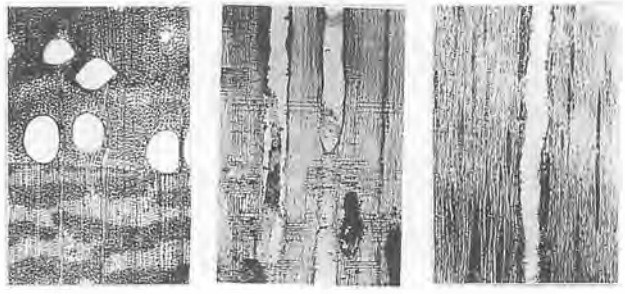
木口　柾目　板目

3－7　ブナ科シイ属



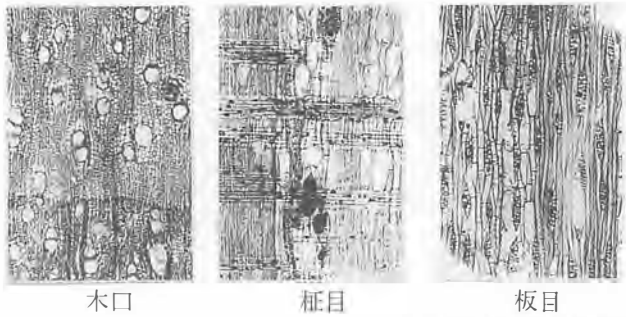
木口　柾目　板目

3－8　ムクロジ科ムクロジ属ムクロジ



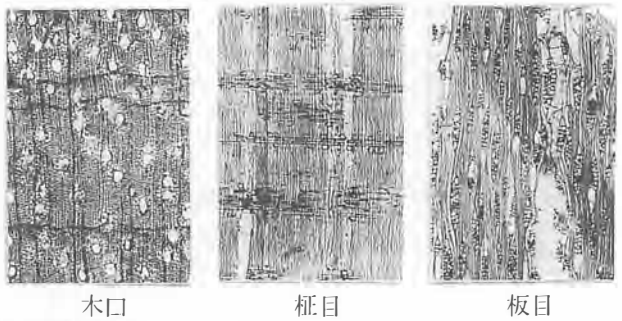
木口　柾目　板目

3－9　クスノキ科クスノキ属クスノキ



木口　柾目　板目

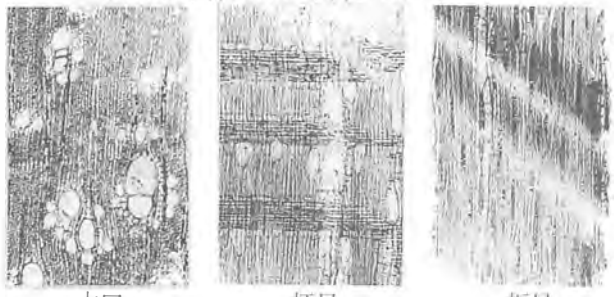
3－10　クスノキ科クスノキ属クスノキ



木口　柾目　板目

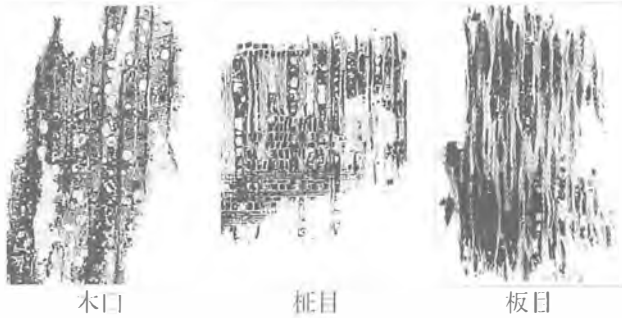
柳町遺跡Ⅶ区出土木製品樹種顕微鏡写真　－3－

4－1　クスノキ科クスノキ属クスノキ



木口　柾目　板目

4－2　マンサク科イスノキ属イスノキ

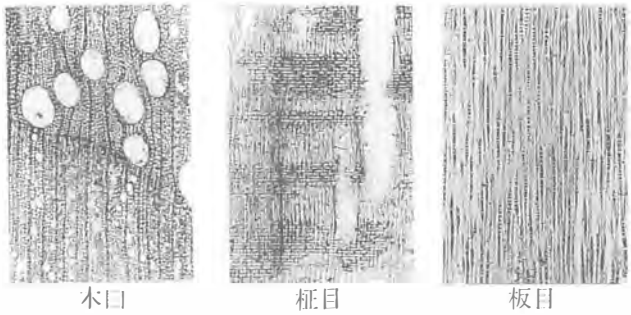


木口　柾目　板目

4－3　マンサク科イスノキ属イスノキ

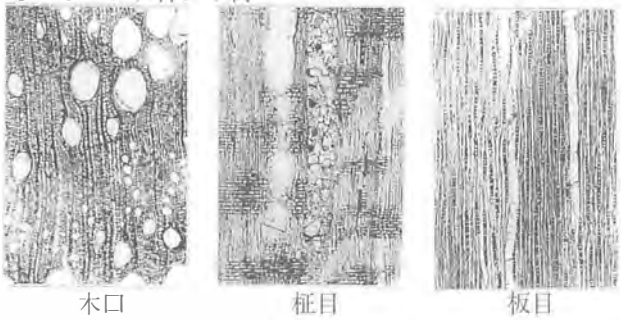
木口　柾目　板目

4－4　ブナ科シイ属



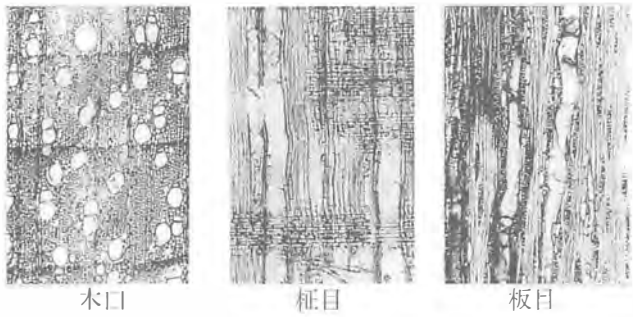
木口　柾目　板目

4－5　ブナ科シイ属



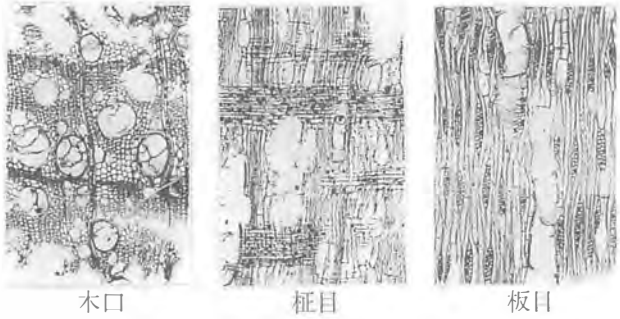
木口　柾目　板目

4－6　クスノキ科クスノキ属クスノキ



木口　柾目　板目

4－7　クスノキ科クスノキ属クスノキ

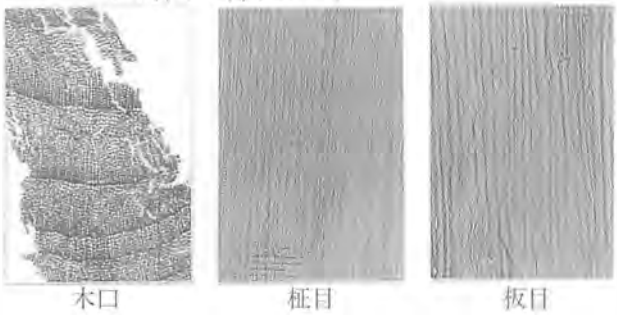


木口　柾目　板目

4－8　クスノキ科タブノキ属タブノキ

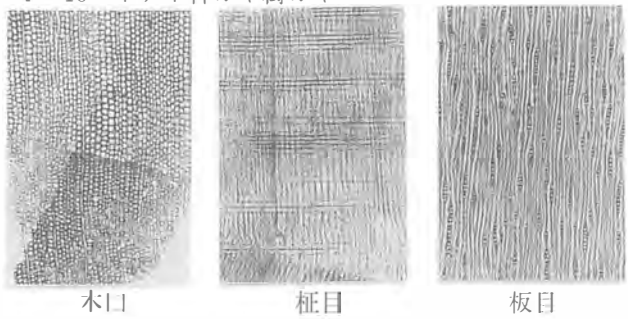
木口　柾目　板目

4－9　マキ科マキ属イヌマキ



木口　柾目　板目

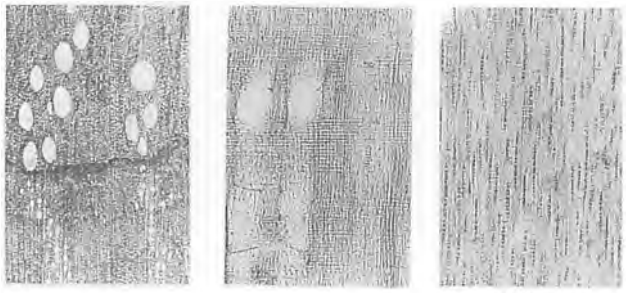
4－10　イチイ科カヤ属カヤ



木口　柾目　板目

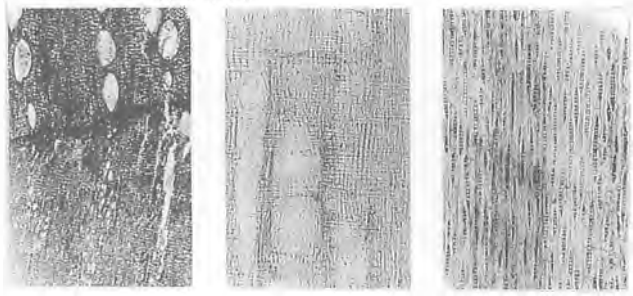
柳町遺跡Ⅶ区出土木製品樹種顕微鏡写真　－4－

5－1　ブナ科シイ属



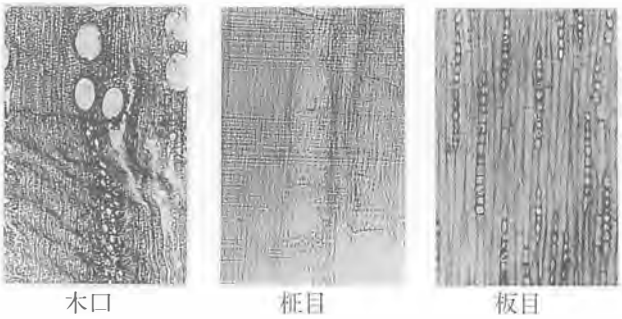
木口　柾目　板目

5－2　ブナ科シイ属



木口　柾目　板目

5－3　ブナ科シイ属

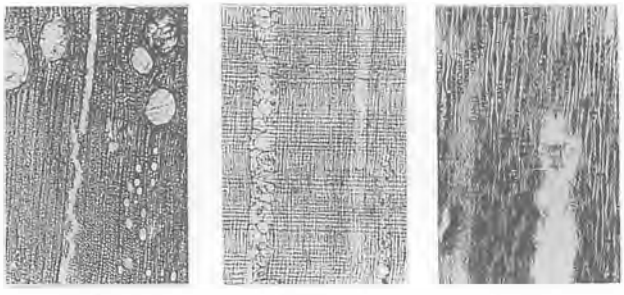


木口　柾目　板目

5－4　ブナ科シイ属

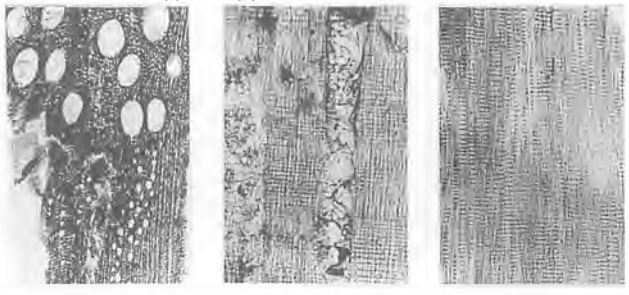
木口　柾目　板目

5－5　ブナ科シイ属



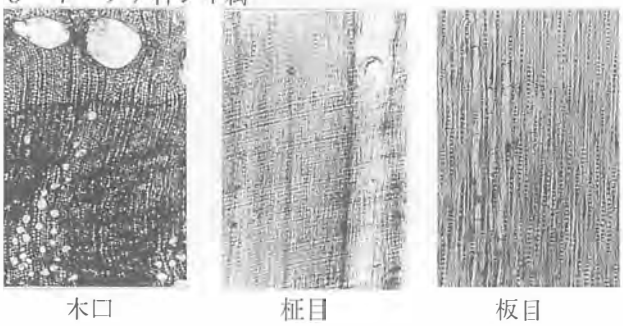
木口　柾目　板目

5－6　ブナ科シイ属



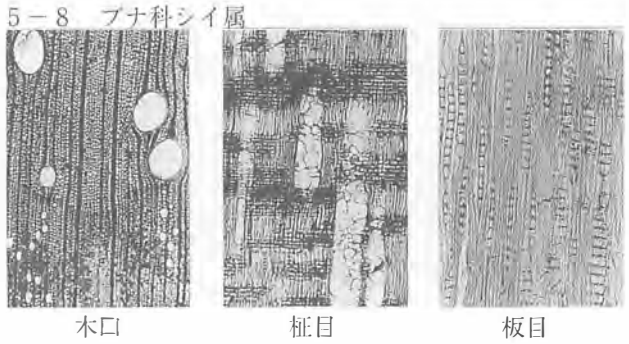
木口　柾目　板目

5－7　ブナ科シイ属



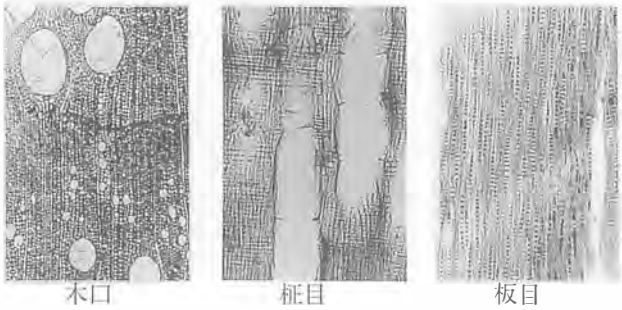
木口　柾目　板目

5－8　ブナ科シイ属



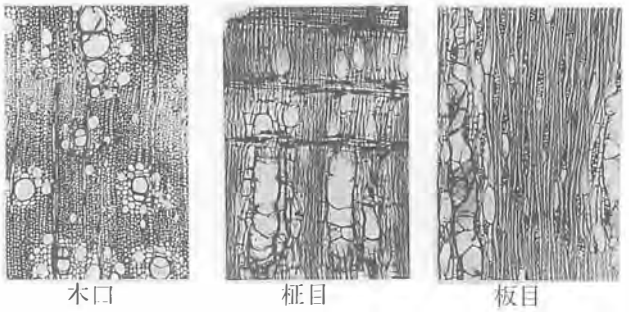
木口　柾目　板目

5－9　ブナ科シイ属



木口　柾目　板目

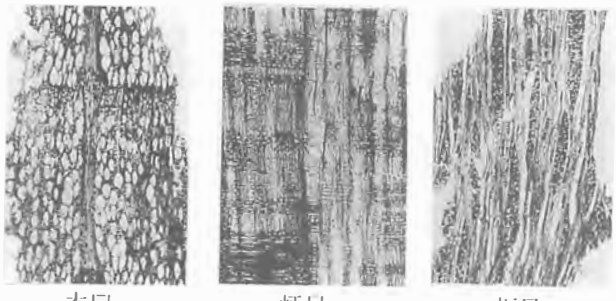
5－10　クスノキ科クスノキ属クスノキ



木口　柾目　板目

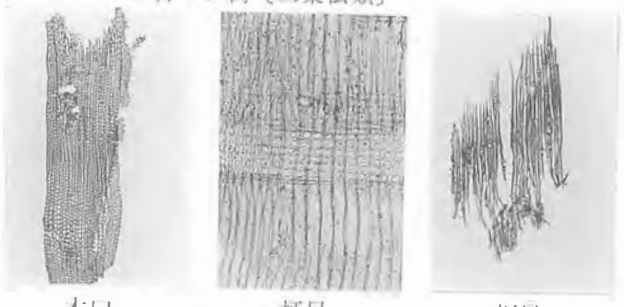
柳町遺跡Ⅶ区出土木製品樹種顕微鏡写真　－5－

6－1　ブナ科ブナ属



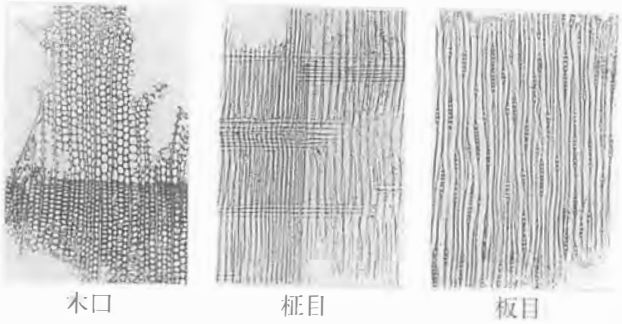
木口　柾目　板目

6－2　マツ科マツ属〔二葉松類〕



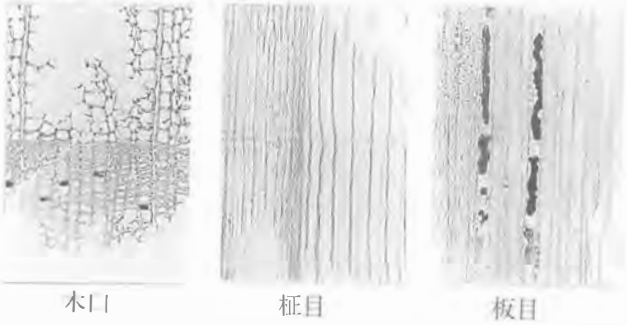
木口　柾目　板目

6－3　イチイ科カヤ属カヤ



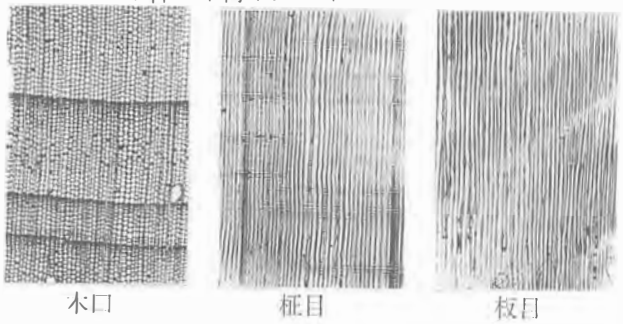
木口　柾目　板目

6－4　スギ科スギ属スギ



木口　柾目　板目

6－5　マキ科マキ属イヌマキ

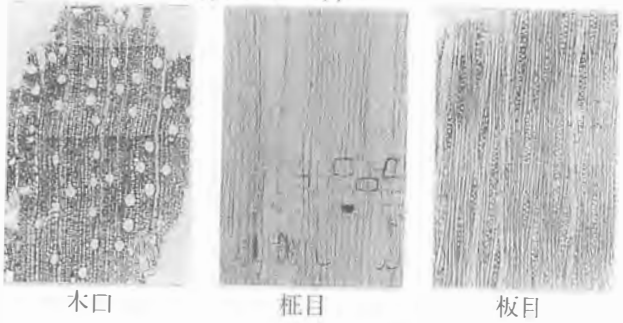


木口　柾目　板目

6－6　クワ科クワ属

木口　柾目　板目

6－7　クスノキ科シロダモ属



木口　柾目　板目

6－8　ブナ科シイ属

木口　柾目　板目

6－9　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

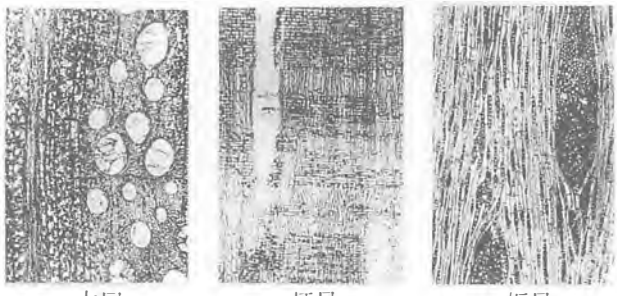
木口　柾目　板目

6－10　ブナ科シイ属

木口　柾目　板目

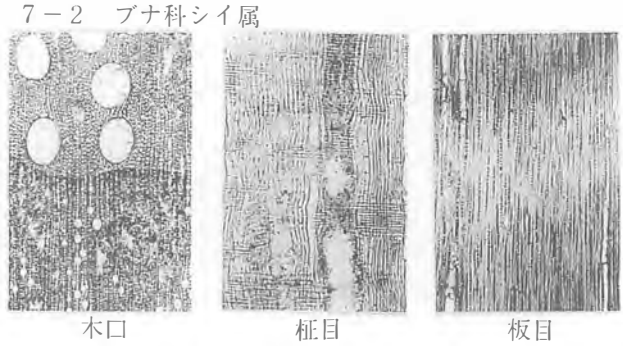
柳町遺跡Ⅷ区出土木製品樹種顕微鏡写真　－6－

7－1　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



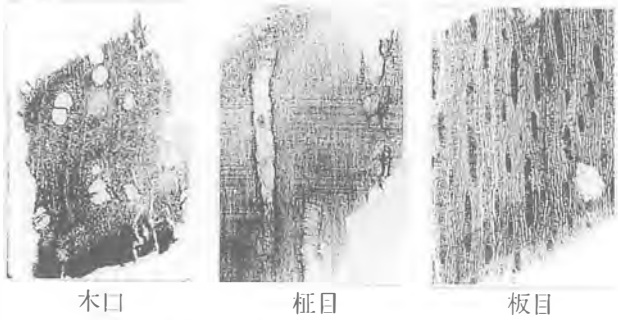
木口　柾目　板目

7－2　ブナ科シイ属



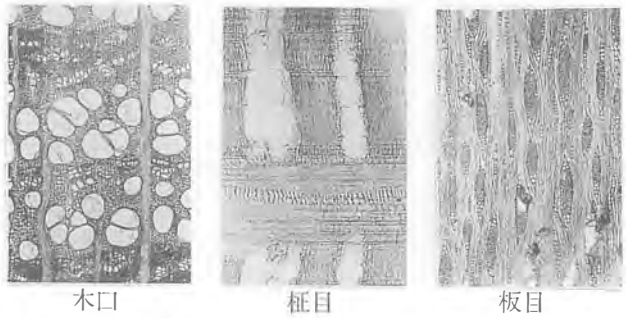
木口　柾目　板目

7－3　ニレ科ムクノキ属ムクノキ



木口　柾目　板目

7－4　ニレ科エノキ属

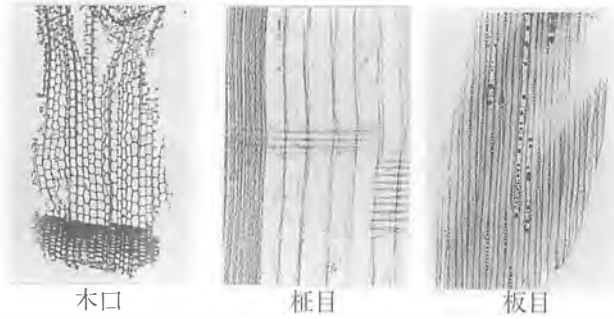


木口　柾目　板目

7－5　ウルシ科ウルシ属

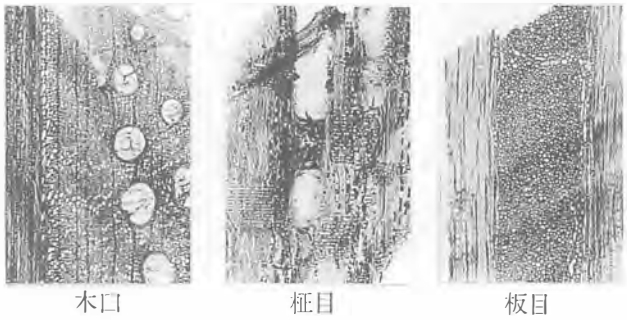
木口　柾目　板目

7－6　スギ科スギ属スギ



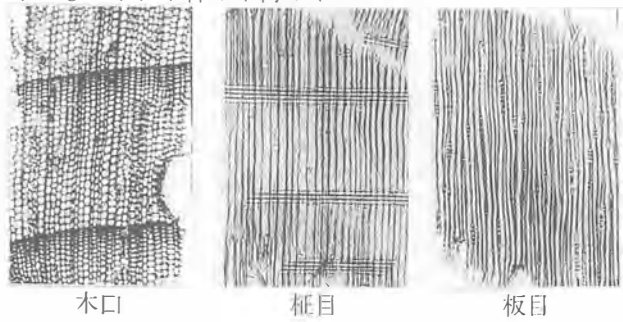
木口　柾目　板目

7－7　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



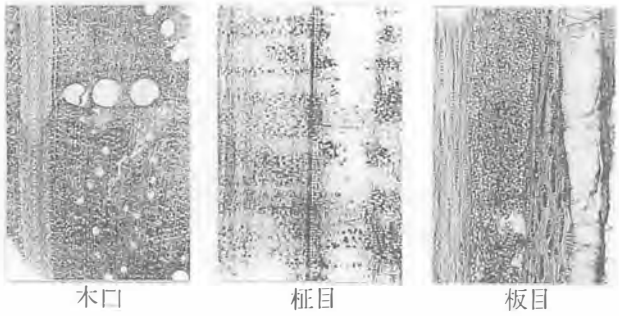
木口　柾目　板目

7－8　イチイ科カヤ属カヤ



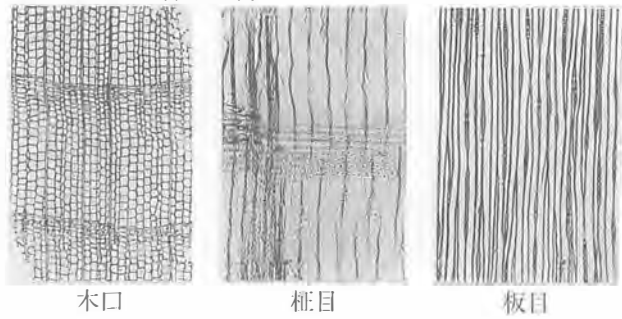
木口　柾目　板目

7－9　ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節



木口　柾目　板目

7－10　マツ科モミ属



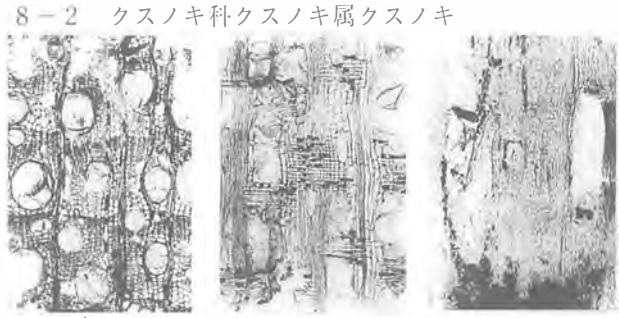
木口　柾目　板目

柳町遺跡Ⅷ区出土木製品樹種顕微鏡写真　－7－

8－1　ムクロジ科ムクロジ属ムクロジ

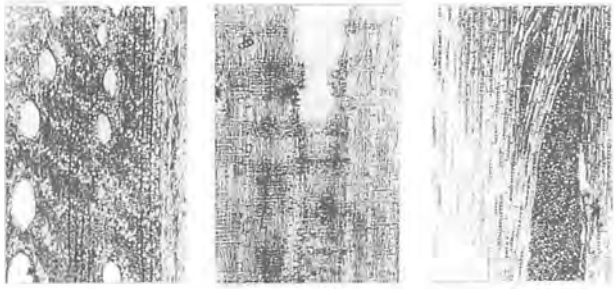
木口　柾目　板目

8－2　クスノキ科クスノキ属クスノキ



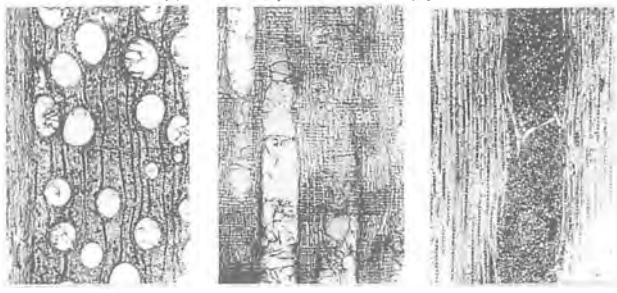
木口　柾目　板目

8－3　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



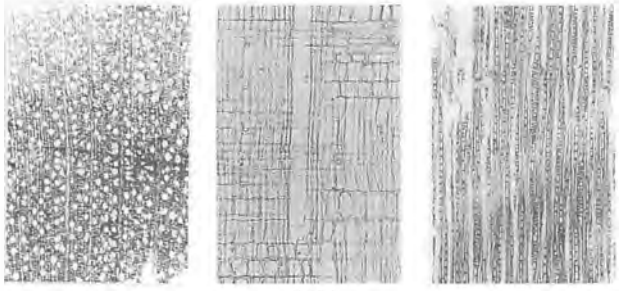
木口　柾目　板目

8－4　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



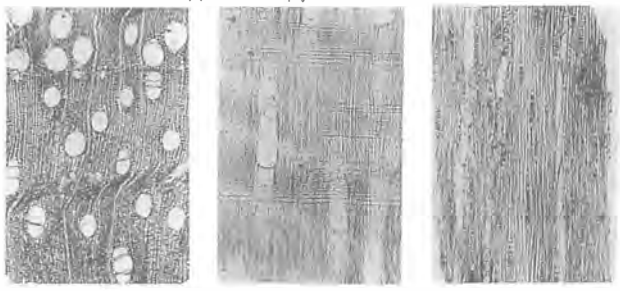
木口　柾目　板目

8－5　ツバキ科ヒサカキ属



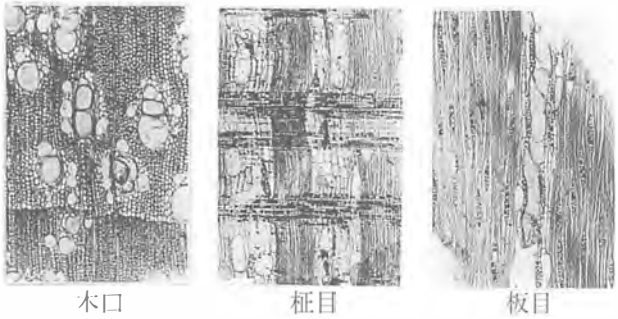
木口　柾目　板目

8－6　ウルシ科ウルシ属



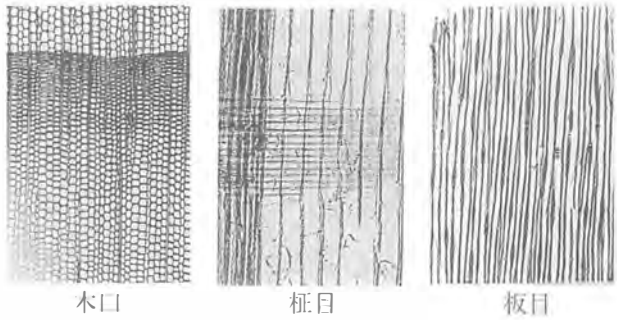
木口　柾目　板目

8－7　クスノキ科クスノキ属クスノキ



木口　柾目　板目

8－8　マツ科モミ属

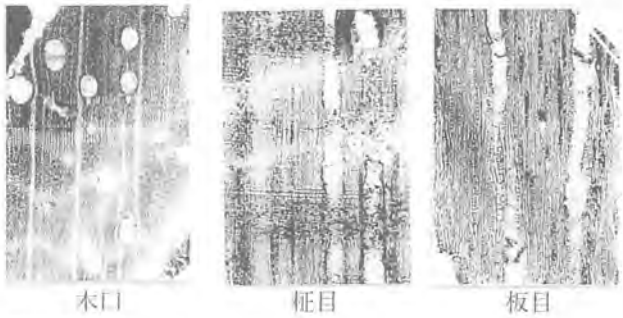


木口　柾目　板目

8－9　ニレ科ムクノキ属ムクノキ

木口　柾目　板目

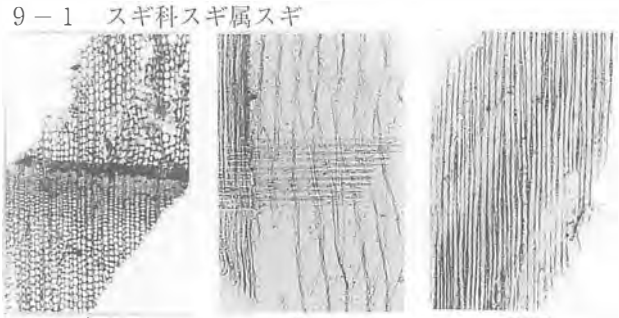
8－10　ニレ科ムクノキ属ムクノキ



木口　柾目　板目

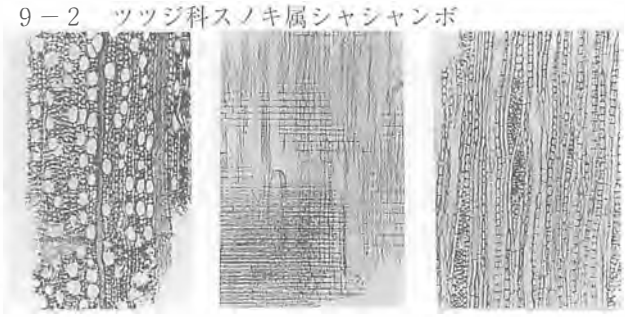
柳町遺跡Ⅷ区出土木製品樹種顕微鏡写真　－8－

9－1　スギ科スギ属スギ



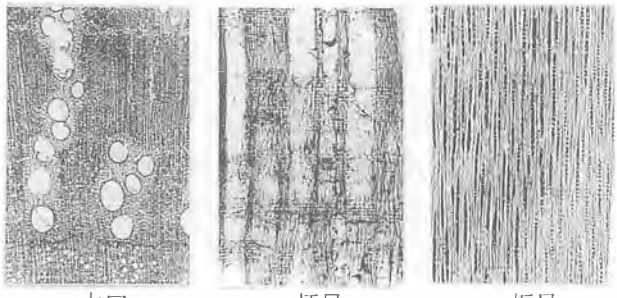
木口　柾目　板目

9－2　ツツジ科スノキ属シャシャンボ



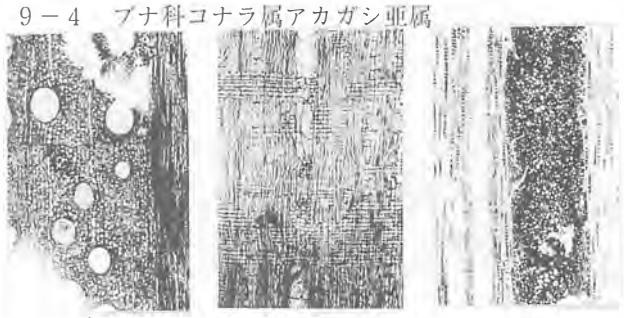
木口　柾目　板目

9－3　ブナ科シイ属



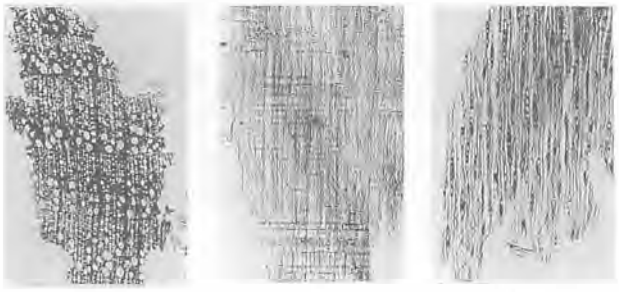
木口　柾目　板目

9－4　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



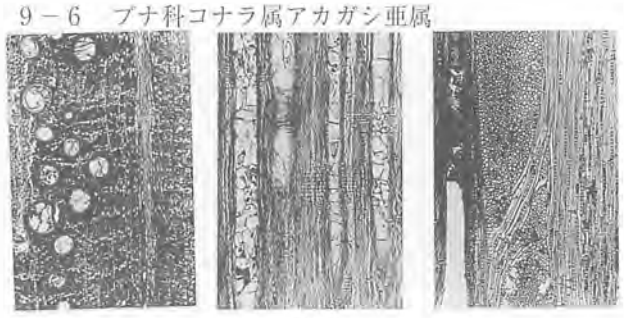
木口　柾目　板目

9－5　ツバキ科ツバキ属



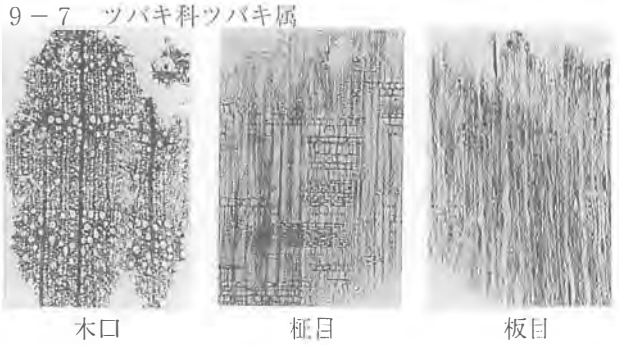
木口　柾目　板目

9－6　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



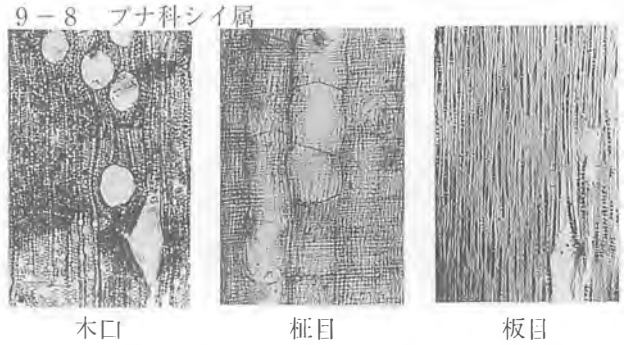
木口　柾目　板目

9－7　ツバキ科ツバキ属



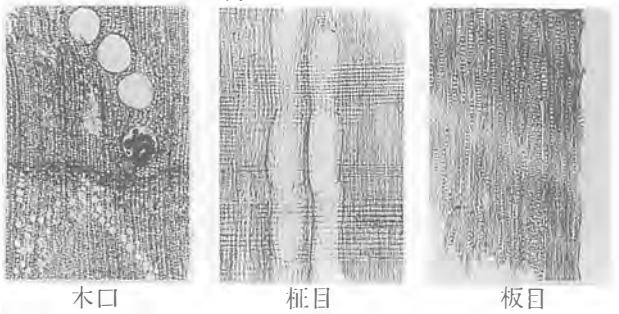
木口　柾目　板目

9－8　ブナ科シイ属



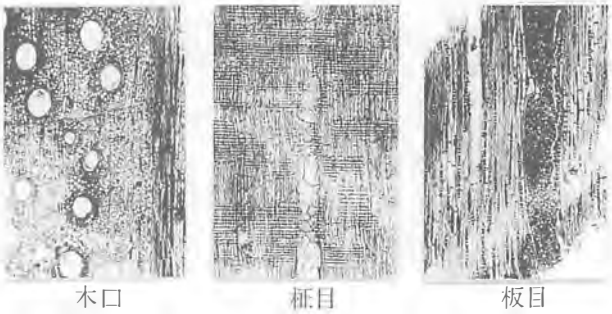
木口　柾目　板目

9－9　ブナ科シイ属



木口　柾目　板目

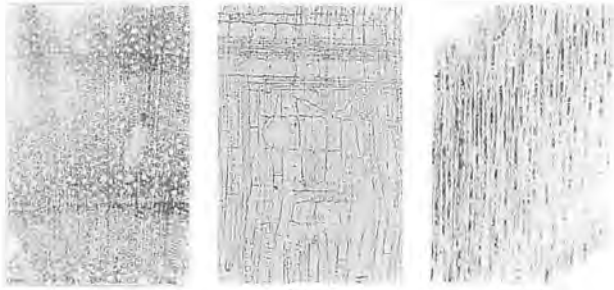
9－10　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



木口　柾目　板目

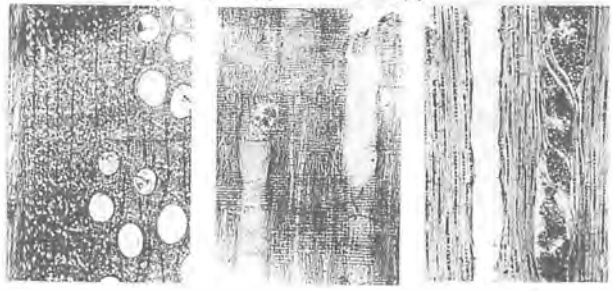
柳町遺跡Ⅷ区出土木製品樹種顕微鏡写真　－9－

10－1　ツバキ科ツバキ属



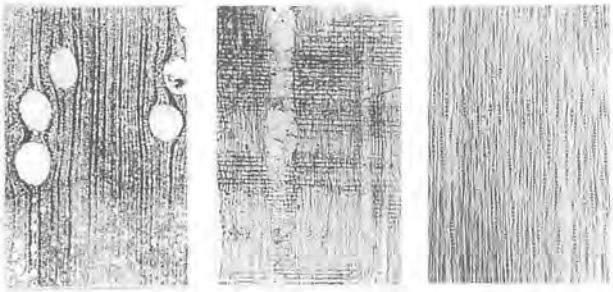
木口　柾目　板目

10－2　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



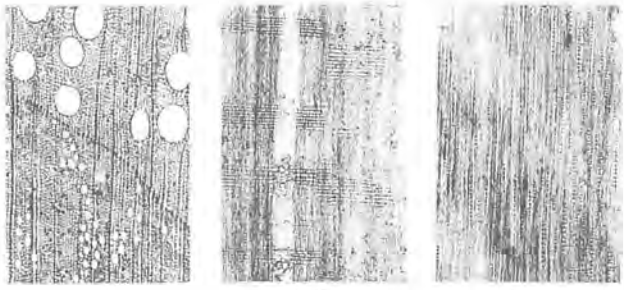
木口　柾目　板目

10－3　ブナ科シイ属



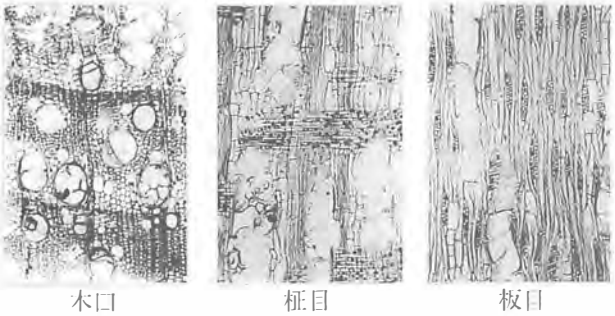
木口　柾目　板目

10－4　ブナ科シイ属



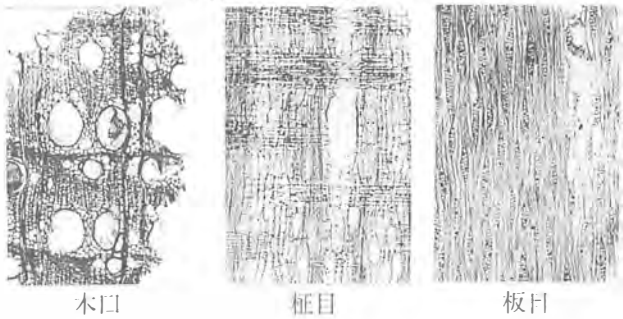
木口　柾目　板目

10－5　クスノキ科クスノキ属クスノキ



木口　柾目　板目

10－6　クスノキ科クスノキ属クスノキ

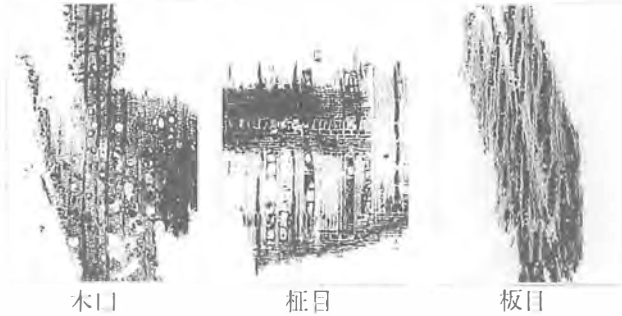


木口　柾目　板目

10－7　クスノキ科クスノキ属クスノキ

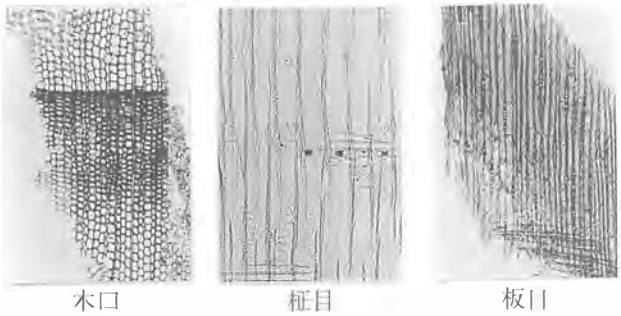
木口　柾目　板目

10－8　マンサク科イスノキ属イスノキ



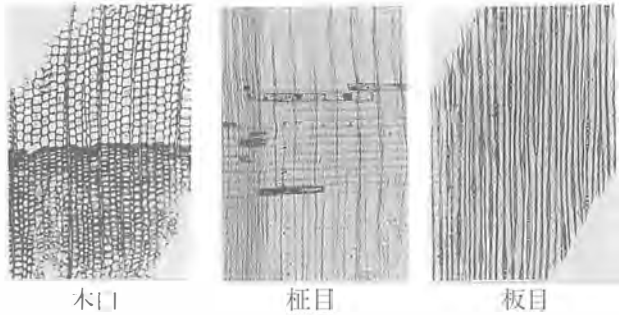
木口　柾目　板目

10－9　マツ科モミ属



木口　柾目　板目

10－10　マツ科モミ属



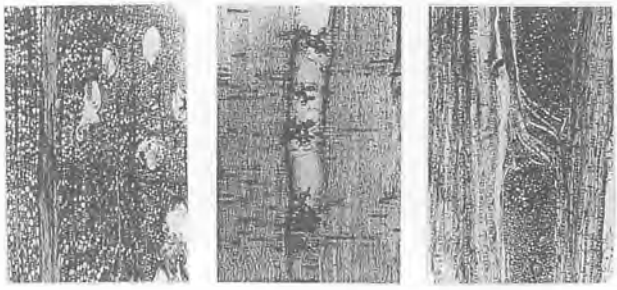
木口　柾目　板目

柳町遺跡Ⅷ区出土木製品樹種顕微鏡写真　－10－

11－1　ブナ科シイ属

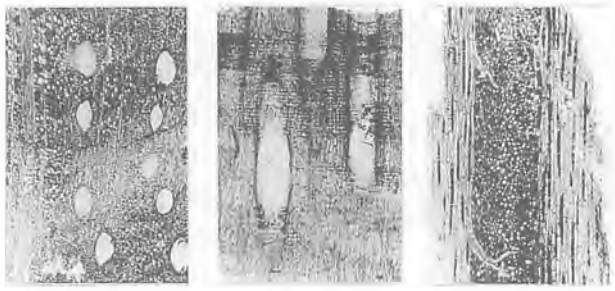
木口　柾目　板目

11－2　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



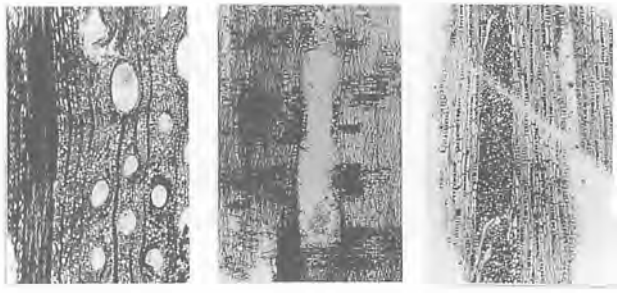
木口　柾目　板目

11－3　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



木口　柾目　板目

11－4　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

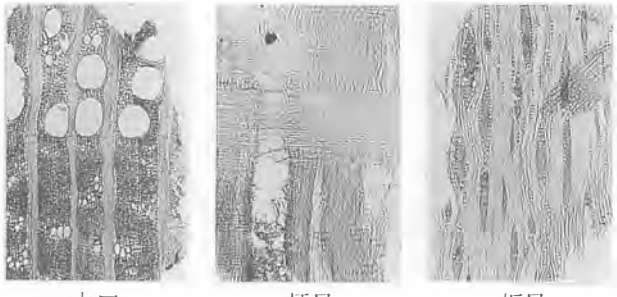


木口　柾目　板目

11－5　ブナ科シイ属

木口　柾目　板目

11－6　ニレ科エノキ属

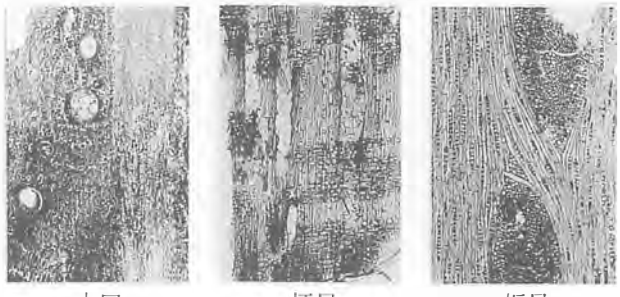


木口　柾目　板目

11－7　ブナ科シイ属

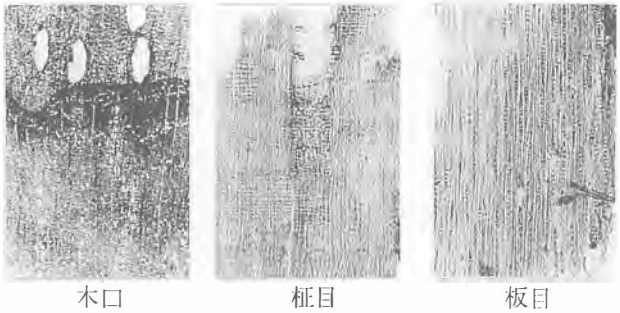
木口　柾目　板目

11－8　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



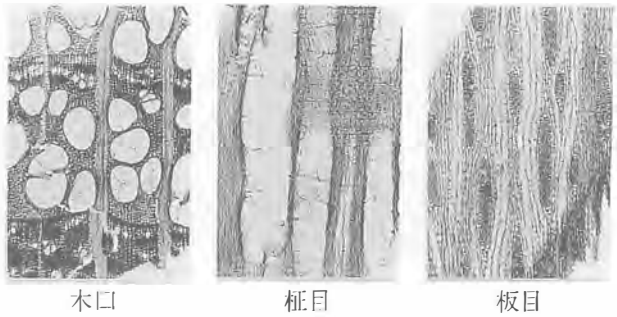
木口　柾目　板目

11－9　ブナ科シイ属



木口　柾目　板目

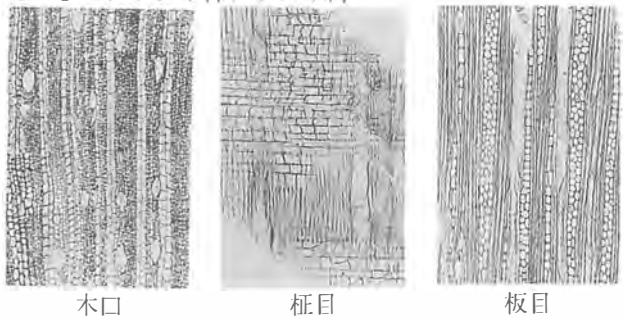
11－10　ニレ科エノキ属



木口　柾目　板目

柳町遺跡Ｘ区出土木製品樹種顕微鏡写真　－11－

12－1　アワブキ科アワブキ属

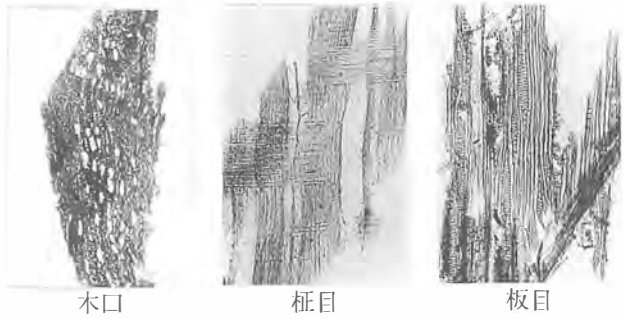


木口　柾目　板目

12－2　ブナ科ブナ属

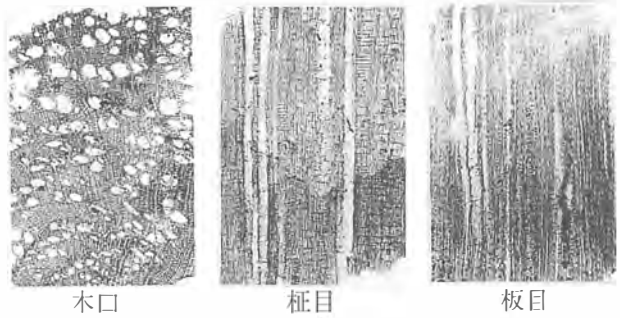
木口　柾目　板目

12－3　ミズキ科ミズキ属？



木口　柾目　板目

12－4　つる性植物



木口　柾目　板目

柳町遺跡X区出土木製品樹種顕微鏡写真　－12－

第6節　熊本県柳町遺跡出土近世漆椀の塗膜構造調査

㈱吉田生物研究所　　本吉　恵理子
京都造形芸術大学　　岡田　　文男

1．はじめに

熊本県に所在する柳町遺跡から出土した漆椀について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2．調査資料

調査した資料は表1に示す近世の漆椀3点である。

表1　調査資料一覧表

No.	登録番号	器種	樹種＊	内面		外面	
				塗り	加飾	塗り	加飾
1	98TY－5024	椀	ブナ属	赤色	—	黒色	銀白色の蒔絵で○に◇の文様
2	99TY－6132	椀	ブナ属	赤色	—	黒色	高台内に赤色漆で「本堅地」の文字
3	99TY－6133	椀	ミズキ？	赤色	—	黒色	—

＊：樹種については別稿の報告を参照。

3．調査方法

表1の資料の内外両面から数mm四方の破片を採取して、エポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片を作製した。これを落射光ならびに透過光下で検鏡した。

4．観察結果

塗膜断面の具体的な観察結果を表2に示す。

表2　塗膜断面の観察結果

No.	器種	樹種	部位	写真No.	塗膜構造（下層から）					
					下地構成		漆層構造			
					膠着剤	混和剤	塗り	顔料	加飾	顔料ほか
1	椀	ブナ属	内面	1	柿渋	木炭粉	赤色漆	ベンガラ	—	
			外面	2，3	柿渋	木炭粉	透明漆	—	蒔絵	金属粉
2	椀	ブナ属	内面	4	柿渋	木炭粉	赤色漆	ベンガラ	—	
			外面	5	柿渋	木炭粉	透明漆	—	—	
			高台内	6，7	柿渋	木炭粉	透明漆	—	赤色漆	ベンガラ？
3	椀	ミズキ？	内面	8	柿渋	木炭粉	赤色漆	ベンガラ	—	
			外面	9	柿渋	木炭粉	透明漆	—	—	

塗膜構造：全点ともに木胎の上に下地、漆層が重なっている様子が観察できる。

下地：すべての試料に、褐色の柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地が認められた。上層部に柿渋のみの部分が顕著なものもあった（No.1外面、No.2外面、No.3内外面、写真No.2，5，8，9）。

漆層：塗りについては、3点とも内面が赤色で外面が黒色であった。その塗膜構造は内面の赤色部は下地の

上に直接赤色漆が１層、外面の黒色部は顔料を混和しない透明漆が１層というもので、資料による違いは見られなかった。外面の透明漆層の表面は３点とも劣化し、変色している。

加飾：No.１の外面には黒色の塗りの上に○に◇という家紋風の文様銀白色の蒔絵技法で施されている。この部分の塗膜断面を観察したところ、黄褐色の透明漆層の上に無色に近い漆層が見え、その上に黄色みを帯びた色調で光る金属粒子が貼りついた状態や、漆層中に金属粒子が沈む状態が観察された（写真No.２，３）。この金属粒子の断面は横長の形状が多かった。

また、No.２の高台内には、やや暗い色調の赤色漆で、明快な筆致で「本堅地」と文字が書かれている。この部分は、透明漆層の上に赤色漆が１層みえる（写真No.６，７）。混和された赤色顔料は、ベンガラの可能性が高い。

５．摘要

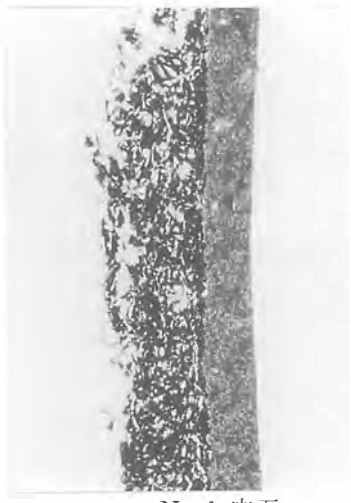
近世の漆椀３点の塗膜構造調査を行った。

３点とも内面赤色、外面黒色の塗りで、炭粉渋下地の上に赤色漆、透明漆が１層という構造であった。木胎の樹種は、ブナ属２点とミズキ？１点であった。

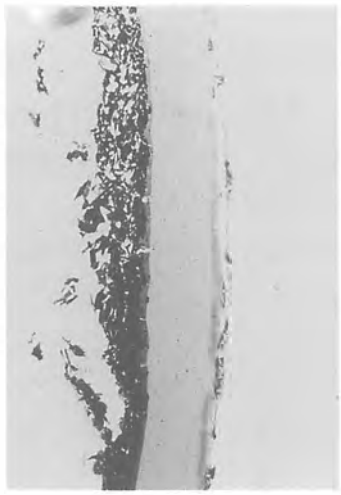
No.１の外面には、黒色の塗りの上に○に◇という家紋風の文様が蒔絵で施されている。断面の観察から、「下地の上に透明漆を１層塗り、内面赤色で外面黒色の漆椀が完成してから、施文部に漆で文様を描き、その漆が固まる前に金属粉を蒔きつけた。」という制作工程が復元できる。金属粉や漆層の様子から、蒔絵技法の中でも「蒔放し」という技法と推定される。

３点の内面の赤色漆に混和された顔料は、ベンガラであった。No.２の高台内に書かれた文字部の赤色漆の顔料もベンガラの可能性が高い。

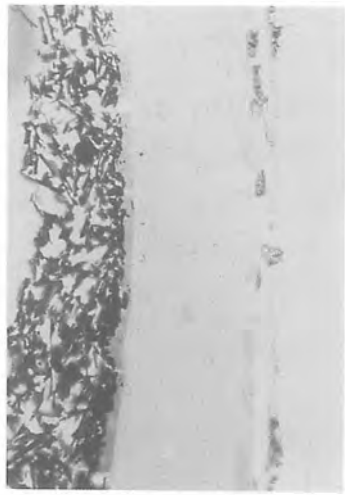
No.２の高台内に書かれた「本堅地」とは、漆工用語で漆に地の粉や砥の粉を混和した下地を指す言葉である。下地に漆を使用していることから、製品は堅牢で高級品であったと考えられる。断面を観察したところ、実際には漆の代用品の柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地が施されていることが判明し、当時の安価品が高級品のように見せかけられたものと推測される。



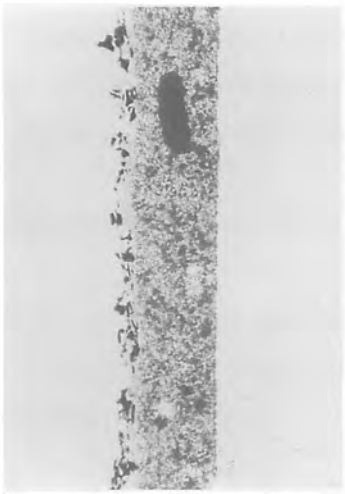
No. 1 内面



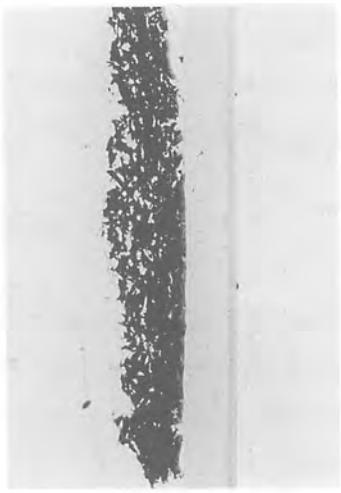
No. 1 外面



No. 1 外面 蒔絵部分

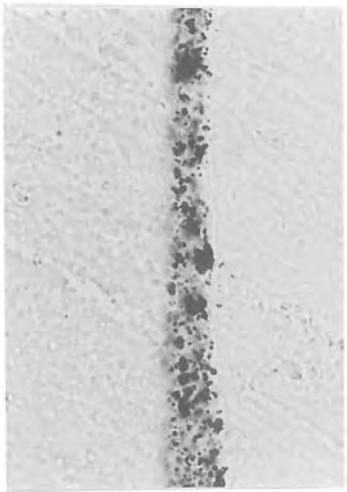


No. 2　内面



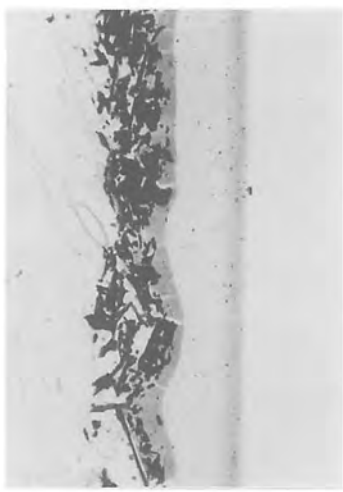
No. 2　外面

No. 2 高台内の文字部分



No. 2　高台内

No. 3　内面



No. 3　外面

柳町遺跡出土近世漆椀塗膜構造顕微鏡写真

第Ⅴ章　調査成果の総括

第１節　遺跡の立地と変遷

柳町遺跡の立地する玉名平野は、菊池川下流域に広がる沖積平野とされる。この平野には、菊池川を中心に、繁根木川、木葉川などの諸河川が流れ、この平野の形成に大きな役割を担ってきている。現在では河川改修が進み、大規模な氾濫はなくなってきたが、十数年前までは河川の氾濫により平野部自体が大きな影響を受けることもあった。また、現在の海岸線は、干拓などによって遺跡の付近からは遙かに遠くなっているが、中世には伊倉の港が知られ、古代にはさらに内陸に入り、現在の玉名駅の南側に入江があり、港となっていたという想定もある。ただ、潮の干満による水面の上下は、本遺跡より上流の菊水町の白石堰付近まで現在でもある。動物相でも汽水性のものがみられる。

菊池川の源流は阿蘇の外輪付近まで遡るが、その名となった菊池市周辺で大小の河川と合流し、菊水の丘陵地と臼間山地に挟まれた狭い平野部を流れ、一気に開けて玉名平野に入り、その真ん中付近を蛇行しながら流れる。そして、木葉川の南に張り出す伊倉丘陵台地に打ちあたり西に大きく屈曲する。この付近に本柳町遺跡は位置している。その後、菊池川はさらに細かく蛇行しながら、伊倉丘陵と高瀬町まで広がる低位段丘の玉名台地の間を抜けて有明海へ向かっていく。地形図でその状況を大きく眺めていると、菊池川と玉名平野の状況が掴めてくる。目を転じて、玉名平野に焦点を当てると、伊倉丘陵と玉名台地によって内湖的に堰き止められ、盆地状を呈する平野ともいえる。そこに菊池川をはじめ、繁根木川や木葉川などが、丘陵と台地の隙間を流れていく。

菊池川が現在のような流れに至るまでに、地質的な状況からこの平野の中で幾度かの流れを変化させていると考えられている。更新世後期には現在の位置より北西側にあり、縄文時代の海進海退期の変化と小岱山の隆起により、現在の位置に至ったとされている[註1]。このような大きく菊池川の流路が定まる一方で、洪水などによる一時的な流れがあったものと考えられる。そのことは調査過程で旧地形を探っていった際、現在の地表面の平坦さに比べ、近世以前の地形がかなり凹凸に富むものであったことと砂質土やシルトの堆積状況から推定できる。今回報告した調査Ⅶ区、Ⅷ区、Ｘ区では、地形的な特徴を様々に示している。菊池川の自然堤防とその後背低地、さらに複雑な微地形など、現在の地形以上の変化を確認できた。遺構のうち人々の住居跡の多くは自然堤防上や微高地に形成され、水路や溝などは低地に作られていた。

今回の発掘調査では弥生時代前期以前の地形状況を確認できたのはＸ区においてのみである。この調査区においては、地形は起伏に富み、その中を蛇行して自然流路が流れ、一部は自然堤防下に潜りこんでいた。この自然流路内には堰状の杭列や木片、木器などを確認でき、人々が低湿地に近い土地に何らかの働きかけを行っていることが分かっている。しかし、予想していた水田は確認できなかった。遺物だけでいえば縄文時代晩期初頭の土器片がⅧ区の自然堤防上で、不整形な土坑とともに出土しており、この時代にも人々の生活があった可能性を示している。ただ、縄文時代後期以前の遺物は今回の調査地では確認できておらず、これまでの調査等によれば、平野部でも山裾に近い部分に生活の場があったと思われる。さらにこれまでの玉名バイパス関連の確認調査や繁根木川の試掘調査、Ｘ区のトレンチで確認したところによれば、この平野の大部分が縄文時代晩期以前にはアシなどの植物の茂る湿地帯であったと推定できる。そして、玉名バイパスに限れば、この状況が繁根木川付近から本遺跡の下層まで続いていることが分かっている。ただ、一見同じに見える植物遺体を含む泥炭層が確実に同じ時期とは限らない。周囲の試掘・確認調査結果によれば、その後の流入土の堆積状況の違いから層位に違いが生じ、早くに微高地を形成した場所と、中世頃までまだ泥炭地として残っていた場所があるようである。

Ⅷ区とＸ区の調査から、現在の地形に近い形になってきたのは、弥生時代後半以降であろうことは推定で

きてきた。弥生時代の終末から古墳時代の初頭にかけては、多くの遺構を検出し生活面も確認し、地形的にもほぼ現在の状況に近い地形が形成されていたことは確かである。本遺跡の付近では、その面に至るまでの弥生時代を通じて土砂が１ｍほど堆積していった。それがある程度落ち着いた弥生時代終末期から古墳時代前期になると、平野内の微高地上に集落が点々と形成されてくる。Ⅶ区・Ⅷ区にみられる大溝状遺構はこの集落を囲い込むように巡っていることから、一種の環濠集落を形成しているようにも見える。しかし、調査区内では同時期の遺構がこの大溝の外側にも広がるので、大溝が完全に集落を囲むとはいえない。ただ、大溝状遺構が集落を区画する溝として存続であったことは否定できないであろう。今後この周囲での調査次第では、この大溝状遺構の正体も判明すると考える。

調査地では古墳時代の中期までの遺構・遺物を確認しているが、その後、７世紀中頃までの遺構・遺物が出土しなくなる。そして、７世紀末になると再び住居が形成されてくる。それに併せて一種の水辺の祭祀を行ったような井戸と水路があらわれてくる。その後、Ⅶ区でみられた企画性のある掘立柱建物跡が造営される。積み上げ式相欠け仕口型横板組井戸枠を持つ井戸もこの時期であろう。この時期の遺構からは墨や円面硯、墨書土器、石帯が出土しており、役所的な施設が存在していたのであろう。

その後、中世の遺構は部分的に観察できるものの、調査した範囲では非常に少なくなる。この中世のいずれかの時期に大規模な洪水が、この調査地を襲っているようである。その証拠として調査Ⅶ区とⅧ区にはⅣ層とした砂もしくは砂質土の堆積があり、その中には古代の遺物に混じって、中世の土師質土器や青磁片などが出土している。砂質土の堆積は、自然堤防に沿いながら、Ⅶ区の古代の掘立柱建物跡のあった微高地を削るようにして間に入り込んでいた。どちらから流れたかの特定は難しいが、東西に伸びているのは確かである。また、Ⅷ区の低地に池状遺構とした５SX022・23も出土遺物から、この時期に形成されたものと考えられる。

近世以降には、一帯は水田や、宅地、畑地として利用され、現在の状況に近い形になってくる。自然堤防上には、周囲より地形的に高いこともあり、ある程度の有力者の住居が築かれ、一方では、やや低い微高地にも宅地が営まれている。また、畑地も同様の場所に作られている。水田はその周囲の低地に作られている。調査Ⅶ区・Ⅷ区・Ｘ区に畦畔は表土剥ぎ中に確認したところでは、現在とやや異なる場合が多かった。水田の小畦畔はかなり頻繁に変わった可能性がある。

現在、この平野部で本遺跡の位置する菊池川の右岸にある周知の埋蔵文化財包蔵地は、玉名平野条里跡を除けば、本遺跡、両迫間日渡遺跡などである。本遺跡やその後調査された両迫間日渡遺跡などの状況や、試掘・確認調査の結果によると、この平野の限られた部分に遺跡が存在しているようである。特に遺跡の存在が予想できるのは、今回本遺跡の存在するような自然堤防上や、柳町遺跡のⅠ区・Ⅱ区で遺構が出土した平野内の埋没した微高地上である。今後遺跡の有無を想定するには、明らかな自然堤防は第一の候補であるが、その他に埋没した微高地にも目を向ける必要がある。それを見いだすには、一見ほぼ平坦に見える平野内にも、細かに標高を取っていくと、実は微妙に高低差が存在していることがわかる。地形の高低だけでなく、微高地に立地する可能性の高い集落などの遺跡の存在も推定できる。

註１　『玉名市史』資料篇３　自然民族、玉名市史編纂室、1996

第２節　縄文時代～弥生時代の遺構と遺物

（１）遺構（自然流路と堰状遺構）

柳町遺跡ではすでに『柳町遺跡Ⅰ』において、自然流路とそれに伴った突帯紋土器とその同時期の遺物が出土している。その流路は特に人工的に掘削された遺構とは認められなかった。ただ、杭列を検出しているので、この流路を何らかの目的で利用していたのは確かである。また、この流路やその周囲で出土した縄文時代終末期から弥生時代前期にかけての遺物は、大きな破片が多く、あまり摩耗もしていなかった。このことは、本調査地の近くにこの縄文時代終末期～弥生時代前期の生活遺構が存在する可能性を示唆している。

今回の調査においては、自然流路をＸ区で確認し、その中で杭列とは別に堰状の遺構も確認した。その堰状遺構にかかった状態の網代を検出した。併せて小破片とはいえこの遺構に伴うと考えられる土器類も出土している。

自然流路である６SX049は今回の調査では、Ｘ－１区の北側から、Ｘ－２区にかけて伸びると想定した。ただ、Ｘ－１区からＸ－２区に係る部分が現況道路のために調査できなかったことと、Ｘ－２区で完全に検出できなかったことから、果たして同一のものか怪しいところではある。この流路に対しては、堰状遺構や杭列、さらには横に並べた伐採された自然木などから、明らかに流路に対しての人為的な働きかけがあったことは確実である。今回の調査範囲では確認できていないので明言は避けたいが、人為的な働きかけと水の管理を行うための施設として、取水口や排水口、さらに護岸工事などが行われ、水路として利用されていた可能性もある。この流路の堆積土の一部を土壌分析にかけている。その結果の中で、イネのプラント・オパールについてみると、この流路自体での検出数量は少ないが、検査者によれば近辺での栽培の可能性が指摘されている。

次に堰状遺構としたＸ－１区の６SX054について再度まとめる。まず構造からみると、自然流路６SX049に対してほぼ直角に板状もしくは丸杭、半裁杭を２列平行にして打ち込んで形成している。２列の杭列を一対のものとし、堰状遺構ととらえたのは、この杭列の並び方が平行関係にあり、この２杭列間の上部に板材が乗っていた痕跡がみられたからである。発掘によって確認した状況では、この堰状の杭列が流路を完全に塞ぐものではなかった。ただ、対岸から長い一木材がこの杭列まで伸びていたので、この一木に沿って何か置くことで流量の調整を行っていた可能性がある。網代が流路の上流部にあったことも意味のあることかもしれない。ただ、周囲に水の取り入れ口となる遺構やこの堰状遺構に繋がる溝なども確認できていない。したがって、この遺構で溜めた水を水田などへ出すような堰と考えるより、この遺構に掛かるように出土した網代や、甕形土器の破片などの出土から、この堰部分に水を一定量溜めて何かを洗ったり、水に晒したりする場所ではなかったかと推定している。

この６SX054の木材のうち、４本の杭・矢板について樹種同定と年代測定を行っている。杭・矢板は肉眼観察でいくつかの種類で分けられそうであったので、代表的なものを選び、分析にかけた。その結果、材の樹種はヤナギ属とヤマグワで、いずれも落葉広葉樹である。遺跡の周囲に生えていたものであろう。年代測定の結果では、補正年代で2450±40～2570±40BP で、縄文時代晩期末～弥生時代早期の年代とされ、想定よりも古い測定結果がでたとされた。しかし、委託に出した試料に対するコメントで弥生時代前期としていたためで、現在の知見では年代測定結果と出土遺物の想定年代との間に齟齬はないと考える。

（２）遺物

ア）縄文時代晩期初頭の遺物

明らかに縄文時代晩期の土器とされるのは、調査Ⅷ区の自然堤防上からわずかながら出土した天城式土器がある。土坑中から出土もあるが、この土坑に伴うものか単に混じり込んだものか十分な確証がない。層的

には、古墳時代の遺構を検出していたⅥ層上面の古代の掘立柱建物跡５SB018の柱跡の一つを掘削中に、Ⅶ層と考えられる層から数点出土している。ただ、部分的な掘り下げを周囲で行った際に出土はなかったので、出土自体が部分的な落ち込みの中にあった可能性がある。したがって、今回の調査では、このⅦ層で出土してはいるが、時間的な制約もあって層位的に十分な調査を行えなかったので、明確に縄文晩期初頭の包含層があると断言できない。

イ）縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺物

この時期については、「突帯文土器」及び同時期の遺物についてまとめる。

今回報告しているこの時期の遺物の出土量は多くはない。ただ、自然流路や堰状遺構に伴うと考えられるものもある。『柳町遺跡Ⅰ』において報告されているように調査Ⅱ区の自然流路から良好な資料が得られており、玉名市の調査区でも同じように良好な資料とそれに伴う木製品の出土もある。

ここではこれまで先人の研究成果や『柳町遺跡Ⅰ』での成果などをもとに、今回の調査区の状況の概略をまとめる。

まず、「突帯文土器」という用語の定義について、国立歴史民俗学博物館の藤尾慎一郎氏による突帯文土器の定義を引用する。

「突帯文土器とは、直口縁をもつ煮沸用土器の口縁部や胴部に突帯を貼り付けてめぐらせる文様を主文様とする土器とする。突帯には刻目を施すことが多いが、時期と地域によって様々なあり方をみせ、刻目を施さない突帯（無刻突帯文）や刻目を施した突帯（刻目突帯文）などの単位文様は、縄文・弥生時代に普遍的な文様であるが、貼り付け突帯がこの時期の主文様となることに「突帯文土器」という名称の由来がある。無刻突帯文や刻目突帯文は壺や粗製の鉢などの他の器種にも単位文様としてさかんに用いられるので、突帯文土器とは煮沸用土器に主文様としての突帯を貼り付けた土器と言い替えることもできよう。筆者はこれまで西部九州の弥生時代早期から前期末までの時間幅に限定して刻目突帯文土器という名称を用いてきた。それはこの地域の突帯文土器が刻目突帯文を主文様とする土器と特徴づけることができたからである。しかし本稿は近畿以西の突帯文土器を対象とするので、突帯上に刻目を施すかどうかが問題になる場合もある。そこで突帯文を主文様とする煮沸用土器を突帯文土器と呼び、突帯文土器の中に刻目の有無で区別できる無刻突帯文土器と刻目突帯文土器が含まれると定義するとした。」[註2]

そして、まとめて以下のように突帯文土器を定義づけている。

突帯文土器…主文様としての突帯を口縁部や胴部に貼り付けた煮沸用土器

無刻突帯文土器…突帯に刻目を施文していない突帯文土器

刻目突帯文土器…突帯に刻目を施文する突帯文土器

さらに、「突帯文土器を煮沸用土器にもつ土器のセットが突帯文土器様式である。この様式は現在までのところ水稲農耕に伴う最古の土器様式で、貯蔵用の壺、盛りつけ用の高坏などの新しく出現する器種と、浅鉢や鉢などの縄文時代からある器種からなる。しかし一部の地域や時期によっては縄文時代からの器種だけで様式を構成する例もあって器種構成は一様でない。同じ様式であるにもかかわらず器種構成が異なるのは、水稲農耕を生業とするかどうかが大きくかかわっているからである。」としている。同じ「突帯文土器様式」でありながら、器種構成が異なるのが生業にかかわるというところまで述べられている。

『柳町遺跡Ⅰ』では、甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・蓋について分類作業を実施し、それぞれの時期的な組み合わせをおおまかに想定している。ただ、如意状口縁系土器をはずしてある。実際この系統の土器はかなり少ない。甕ではａ～ｉ類まで分類し、さらにａ類、ｂ類、ｄ類についてはさらに２つに細分類している。壺はＡ類～Ｃ類の３類に分類している。鉢はＡ類～Ｄ類の４類に、高坏はＡ、Ｂの２類に分類している。蓋は甕蓋で１点のみをとっている。さらに甕はⅠ期、Ⅱ－１期、Ⅱ－２期、Ⅲ期に配置さ

れ、編年されている。壺・鉢・高坏・蓋についてはⅠ期～Ⅲ期に編年されている。Ⅰ期は縄文時代晩期終末～弥生時代前期初頭に相当するものとされる。Ⅱ期は弥生時代前期中葉～後葉に相当するものとし、Ⅲ期は弥生時代前期後葉～末期に相当するものとされる。

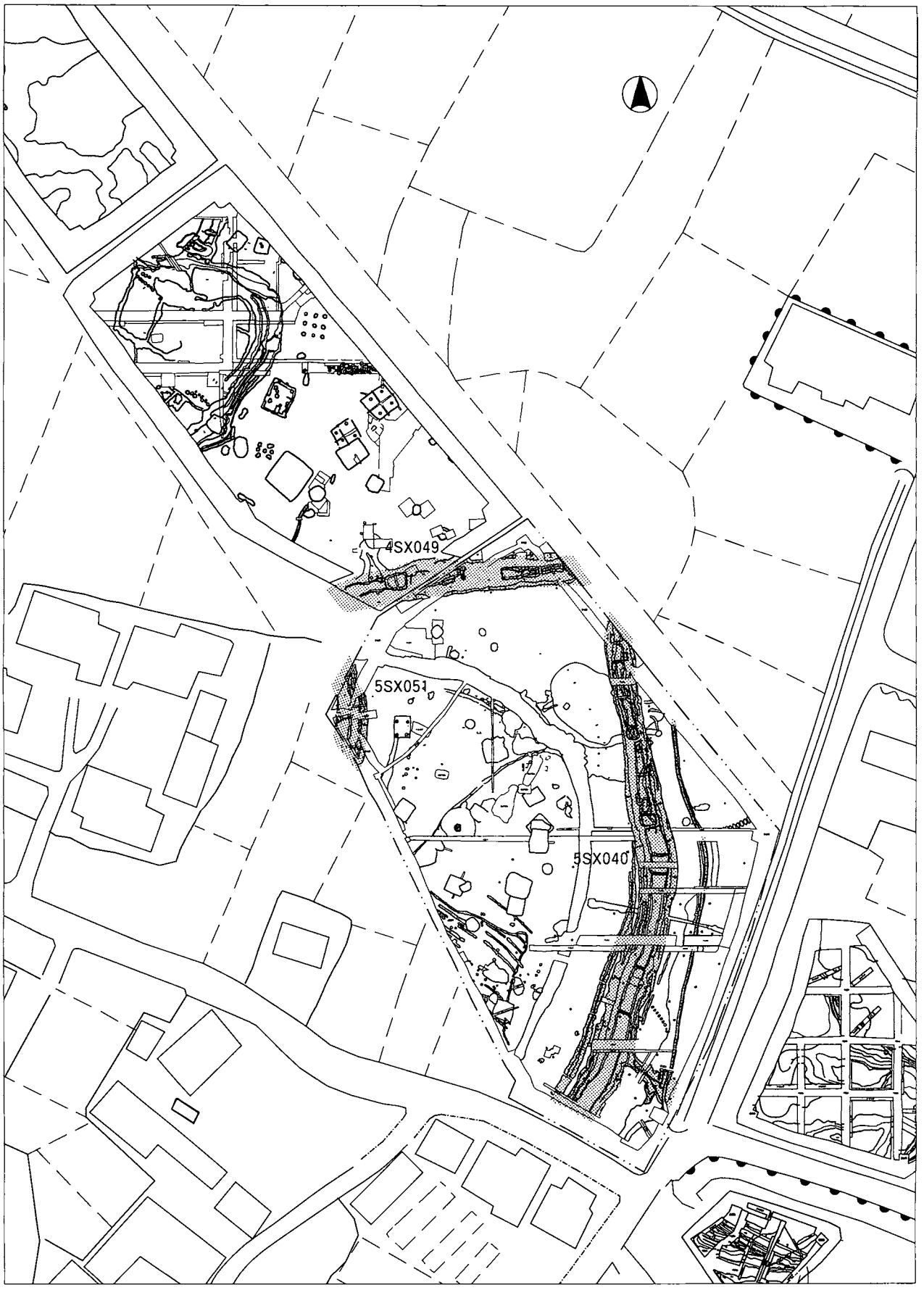
今回報告した調査Ⅶ区・Ⅷ区・Ｘ区の調査では、縄文時代晩期初頭から、この突帯文土器の出現する時期までの間に若干時間的に隙間があり、今回の調査地点以外での生活が展開されていたものと思われる。今回報告した遺物は『柳町遺跡Ⅰ』で報告した遺物と比べ細片化したものが多く、遺構からの出土も少なく、先の調査成果を補うものとはなり得ていないが、一部の層位的な出土状況をつかむことができ、さらに遺構との遺物の関係をとらえることができた。

層位的にとらえたものとして、Ｘ－１区に設定したトレンチの標準層XIII層から出土した45の黒色磨研の鉢形土器と50の赤色顔料塗布の小型壺形土器がある。出土層位は、近接する自然流路６SX049が形成された層よりも古い層から出土し、自然流路出土の遺物との比較が可能である。これらの遺物には突帯文土器は伴っていなかったので、突帯文土器がないのか、たまたま含まれなかったのかは不明である。Ｘ区においては、これらの遺物が出土した標準層XIII層は、アシなどの有機物が残る灰黒色の泥炭層の上面にあたり、この上に徐々に灰白色のシルト層が堆積していく。Ｘ－１区ではほとんどのグリッドでXIII層を確認しているが、トレンチ内での観察に限られ、他のグリッドの同層から全体的に遺物の出土をみたわけではないので、出土した遺物が本来この層に含まれていたのか、他の何らかの遺構の一部からの出土なのかを明確にできてはいない。一方、調査Ⅷ区のⅦ層からはこの層で出土した土器よりも編年的に古い縄文時代晩期初頭の土器が出土している。Ⅷ区のⅦ層とＸ区のXIII層との関係が明確ではないが、Ⅷ区のⅦ層とは地形的に２ｍ近くの比高差がある。Ⅷ区のⅦ層が出土した縄文土器の原包含層とすれば、すでに縄文時代晩期初頭にもかなり大きな微地形の変化がすでにあったことになろう。さらに、Ｘ－１区の東側の調査範囲外に向けた場所でも縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけての遺物が出土しているが、その出土状況でも地形の変化をうかがわせるものがある。この出土場所は６SX049の一部にも当たり、徐々に遺構の肩部になっていくのではあるが、同時期と考える土器片や石器類が同遺構の他の部分での出土位置に比べ、非常にあがっていく傾向がみられた。このこともＸ区の東側に縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけての微高地がすでに存在していた可能性を示すものと考える。

今回報告した調査区内の縄文時代晩期から弥生時代初頭期にかけては、このような遺構と層位的な状況はあったものの、出土遺物量の少なさと、細片のものが多かったため、遺構と遺物の出土状況をふまえた各時期の編年作業を行うことは断念した。今後、玉名平野におけるこの時期の土器編年についてはこの近隣の調査によってより精緻になされることを期待する。『柳町遺跡Ⅰ』で分析対象となった遺物を使用した人々の居住区や生産地などが周囲にあるのは確実であると考えるからである。

この他に遺物としては木製品があげられる。主なものとしては、66の有孔の不明木製品がある。全体形は縦長の半月状を呈し、長方形の４つの孔が開けられている。何らかの部材の一部か、未製品と考えられる。この他には、建築材として利用できそうな長大な木材がある。伐採され、枝打ちまではされているが、それ以上の加工痕は見られなかった。また、堰状遺構６SX054の杭列のうち、矢板状板材には、金属器を使用して先端を尖らせたのではないかと思えるほど、しっかりした加工痕が残っている。

註２　藤尾慎一郎「水稲農耕と突帯文土器」『日本における初期弥生文化の成立』、横山浩一先生退官記念事業会・文献出版、1991



第359図　大溝状遺構位置図

第３節　古墳時代の遺構と遺物

（１）遺構

ここでは顕著な遺構である大溝状遺構・竪穴住居跡・井戸跡類についてまとめる。

①大溝状遺構

調査Ⅶ区とⅧ区において、４SX049、５SX040、５SX051の３条の大溝状遺構を検出した。特に５SX040は、確認しただけでも玉名市の調査区をあわせると100m を超えている。また、その他の溝はわずかな範囲しか調査できなかったものの、特徴的に似通った構造を呈し、出土する遺物もほぼ同時期のものである。ただ、限られた範囲での調査であるため、これらの遺構が同一のものとして、大きく繋がっていき集落の周囲に巡る溝なのかどうかまでは確認できていない。また、これらの大溝状遺構の存続期間は、最終的な遺物の出土状況から時期差がありそうである。最後まで使用されたというより、再利用されたのは４SX049であろう。古墳時代の最末期もしくは古代の初期に新たな施設が加わり、祭祀的な場となった可能性がある。これについては後述する。

これらの遺構の底部には、何箇所もの長方形の窪地が設けてある。またこの掘り込みは何度か掘り換えたような切りあいを確認している。この掘り込みの存在する理由は何か、何のためのものかという問題についても不明のままといわざるを得ない。

この遺構については本文中にも記したが、様々な考え方が示されている。貯木場説、養魚場説、溝掘削時の単位説等である。以下これらの諸説の検討を行いたい。

（ア）貯木場説

この説は、第４次調査で４SX049の一部が検出された際、最下層で木製品や未製品と考えられる木材が多く出土したことにより始まる。同時に底部にみられた方形の掘り込みがちょうど木製品類を貯留しておく場所とみられたことも原因である。このとき方形の掘り込み中からは一木の片踏み鋤がほぼ完形で出土し、杭列や、木を蓄えるように配置した囲いと考えられるものなども検出できた。

（イ）水生（水棲）生物の養い場説

この説は、専門調査員である白木原和美熊本大学名誉教授から御教示を受けたものである。教授によれば、A）水生植物の栽培用、もしくはB）水棲動物の養殖用のどちらかであろうとの想定である。A）の場合、浮遊する植物と想定され、浮遊する植物としては水草のようなものであろうか。民俗事例では中国南部に類似例が存在するとのことである。ただし、特定の種は想定されていない。４SX049と５SX051の埋土中でこの区画内の花粉分析結果からは、ミズアオイ属、ガマ属－ミクリ属などの草本花粉がわずかに検出されている。また、B）の場合は魚類もしくは昆虫が考えられるとのことである。魚類としては生け簀の様なものと想定される。南アジア各地に類例があるとのことである。古代の例では、『万葉集』に鮒を歌った詩がいくつかあり、当時すでに身近な魚類として養殖された可能性がある。また、昆虫、特に水棲昆虫を大量に捕食するのは南アジアの稲作地帯に普通にみられる現象ということである。

ただ、これらの栽培・養殖を行うために大きな溝を掘削し、その中にわざわざ小区画を設けて栽培もしくは養殖することを行う必要があるか疑問が残るし、水の供給源、水量・水質の問題もあるかと考える。

（ウ）溝掘削時の小集団単位説

最後にこの小区画は、溝掘削に当たり小集団で実施したことによる見かけ上の区画で、実は掘削小集団の単位説である。この遺跡で確認した大溝のうち５SX040のような長さ100m、幅８m、深さ２m 弱を超える大規模なものもあり、人力で掘削することを考えると、かなりの労働力が必要である。したがって、その掘削作業にあたり、いくつもの小集団を組織し、単位ごとに掘り進めることで効率的に作業が行われる可能性がある。大枠の溝はそう変わらないが、集団により掘り過ぎたり、掘り足りなかったりと、一様でなかった

ために底面にこのような痕跡が残ったというものであろう。その作業の結果、このような溝底部の小区画が形成されたと考えることができる。実際調査中に、溝の壁や床面の状況を観察すると、小単位の掘削痕がみられ、さらに掘り返しも行われていたような跡がある。これは最初掘削した後に、溝が埋没したための掘り返しか、溝の拡大のため徐々に掘り広げていった跡であろう。そうであるなら、完掘した溝の形状は当初の形態ではないことになる。溝遺構はいずれにしても当初の形態を維持する一方で徐々に形状が大きくなったり、方向が変わったり、埋没すれば深さが変わったりと変化するものである。溝として機能を維持するためにはやはり集団が必要である。集団の単位が少なからず影響しているのが、この遺構に刻まれた痕跡といえるのかもしれない。

このような3説を大まかに上げたが、このうちどれが妥当な説か以下で検討する。

まず、（ア）の説はまだ大溝の全体像が掴めないうちに考えられたもので、実際その後の調査の進展によっても、必ずしも木製品や原木がこの小区画内に貯蔵されたという状況を検出できなかった。しかし、すでに持ち去られたと考えれば、完全に否定するわけにはいかない。ただ、原木らしきものをほとんど検出できていないので、この説は成立しない可能性が高い。

次に（イ）説の証左として、大溝状遺構の底部にある区画をよく観察すると、流れの方向には区画の中央部付近に5㎝内外の窪みを認めることができた。このことは水が、大溝状遺構いっぱいに流れていたのではなく、その区画に満ちるだけの流れがあったと推定できる。その窪みを通じて徐々に水を流し落としていたと想定できるのである。しかし、この大溝状遺構の埋土の分析状況から明確な生物痕跡を確認できなかったので、この説の証明はできない。

次に（ウ）の説である。これは長大な大溝を掘削する方法としては想定可能なもので、実際後世の中世城に巡る壕の掘削に同様の方法が採られたといわれる。弥生時代の環濠の掘削方法については不明であるが、同じような掘削方法を採ったと考えられる。弥生時代からの伝統があり、その方法をこの遺跡でも使用したのではなかろうか。3つの説のうち、ここで一番妥当性があるのはこの説であると考える。大溝掘削時の小人数単位による掘削の結果、底面にこのような小区画が生じたとするものである。小区画が不規則な形状を示したのは、最初の掘り方では一定の深さのみを求めたため統一的には掘削できず、その後の幅だけをある程度合わせたためにこのように面積の狭いもの、長さの細長いものと様々な形状を示し、掘り方の深さも一様ではなくなったのであろう。ただ、それを示す証拠は残念ながら土層断面では確認できなかった。

ところで、この小区画が溝底にそのまま残ったのには何らかの理由が考えられる。通常であれば、底面は広げた段階で平らにしたはずであるし、流水が常にあれば自然とこの小区画は消えていくと考えられるからである。5SX040では、上流部分の調査Ⅷ区付近ではこのような小区画及び拡幅した痕跡が残っていたのに対し、下流側と考えられる玉名市調査部分では、幅や深さが大きくなり、小区画はほとんどなくなっている。このことは流水量の違いよる可能性がある。調査Ⅷ区の同遺構のうち小区画が残っていた付近では流水量が少なく、流れも緩やかであったと考えられる。その流水量の少なさは、小区画のしきり壁の中央部にわずかに窪みが残ることからも分かる。

この大溝状遺構と竪穴住居群との関係について次にまとめる。

大溝状遺構の全体像は調査範囲の制約から掴めていないが、多くの住居跡のある微高地を取り囲む可能性が大きい。この微高地は菊池川の自然堤防上の地形で、現在は民家・畑地・道路などになっている部分である。大溝状遺構がこの一帯でどこまで広がるのか、今後の調査成果による。この大溝状遺構は集落防御のためや集落への水の供給のためというよりも、新たな耕地の開発に関係する遺構と見た方がよいのかもしれない。というのは、5SX040とその東側に広がる水田跡と想定した部分との間に幅5mほどの遺構のない部分が、5SX040に沿って長く検出できたのである。その部分は水田に伴う大畦と考えられる。さらに、その大

畦部分の東側には、水田跡との境界付近に細い溝状遺構を３条ほど検出している。これが水田の上面にかかる用水溝とも考えられるが、この溝状遺構から水田跡への水口は残念ながら確認できなかった。この小溝は大溝の水口から別れてきた可能性がある。水田跡では、残念ながら小畦畔を確認できなかった。５SX040の玉名市側調査区では大溝の一部から支流が分かれており、水口となっていると考えられる。調査Ⅶ区・Ⅷ区・Ⅸ区にあった竪穴住居群を中心とする集落は、調査Ⅰ区で確認した集落に比べ、はるかに密集した状態である。地形的にもかなり安定した土地であることを考え合わせれば、この集落がこの付近の拠点的な集落のひとつであろう。しかも水田耕作を主とした集落として発展したものと考えられる。

大溝状遺構と集落の関係については、弥生時代後期頃から古墳時代初期に造られた、いわゆる「環濠集落」といえる様相を呈している。熊本県内にはこれまで多くの環濠集落が検出された遺跡がある。菊池川流域・白川流域・緑川流域・阿蘇・球磨などで出土しているが、それらのほとんどが台地上に営まれている。白藤遺跡群などは時期的には弥生時代前期～中期とされるが、自然堤防もしくは氾濫平野にあり、本遺跡の状況に類似する。他県に目を向けると、本遺跡のような低地性の平野部に作られた環濠集落として有名なのは福岡県甘木市の「平塚川添遺跡」がある。時期的には弥生時代中期から後期にかけての遺跡（一部古墳時代前期にかかる）で、しかも環濠は複数に巡り、河川の氾濫原につくられているため、断面はＶ字形にならずに緩やかな傾斜をしている。環濠には水がはられていた可能性があるという。この遺跡の湿気の多い土地に作られていることからこの環濠は湿気抜きの役割もしていたといわれる。これら環濠集落遺跡の状況と柳町遺跡における状況を比較する場合、果たして柳町遺跡の大溝状遺構が環濠に当たるかということが第一の課題である。すでに報告中に述べたように３本の大溝状遺構の関係を調査範囲において掴み得ていないため、集落を囲むとは確実に言えない。また、集落についても柳町遺跡Ⅶ区・Ⅷ区の古墳時代の集落のごく一部の状況しか分からない。ただ、溝内から出土した遺物の時期は集落の時期と異ならず、同時期に存在していたのは間違いない。土層や自然科学的分析から見る限り、最下層部には水気があったのは間違いないが、流水が常にあったものではなく、湿地状の溝であったようである。立地は似るが、「平塚川添遺跡」の溝状遺構と同類と完全に同じとは言えないものの近いものとは考えられる。なお、大溝状遺構の断面形態及び底部の状況に似たものとして、山鹿市の蒲生・上の原遺跡で検出された環濠の一部がある。さらにこの掘削単位については報告書では述べてある[註3]。

註３　木崎康弘編『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告第158集、熊本県教育委員会、1996

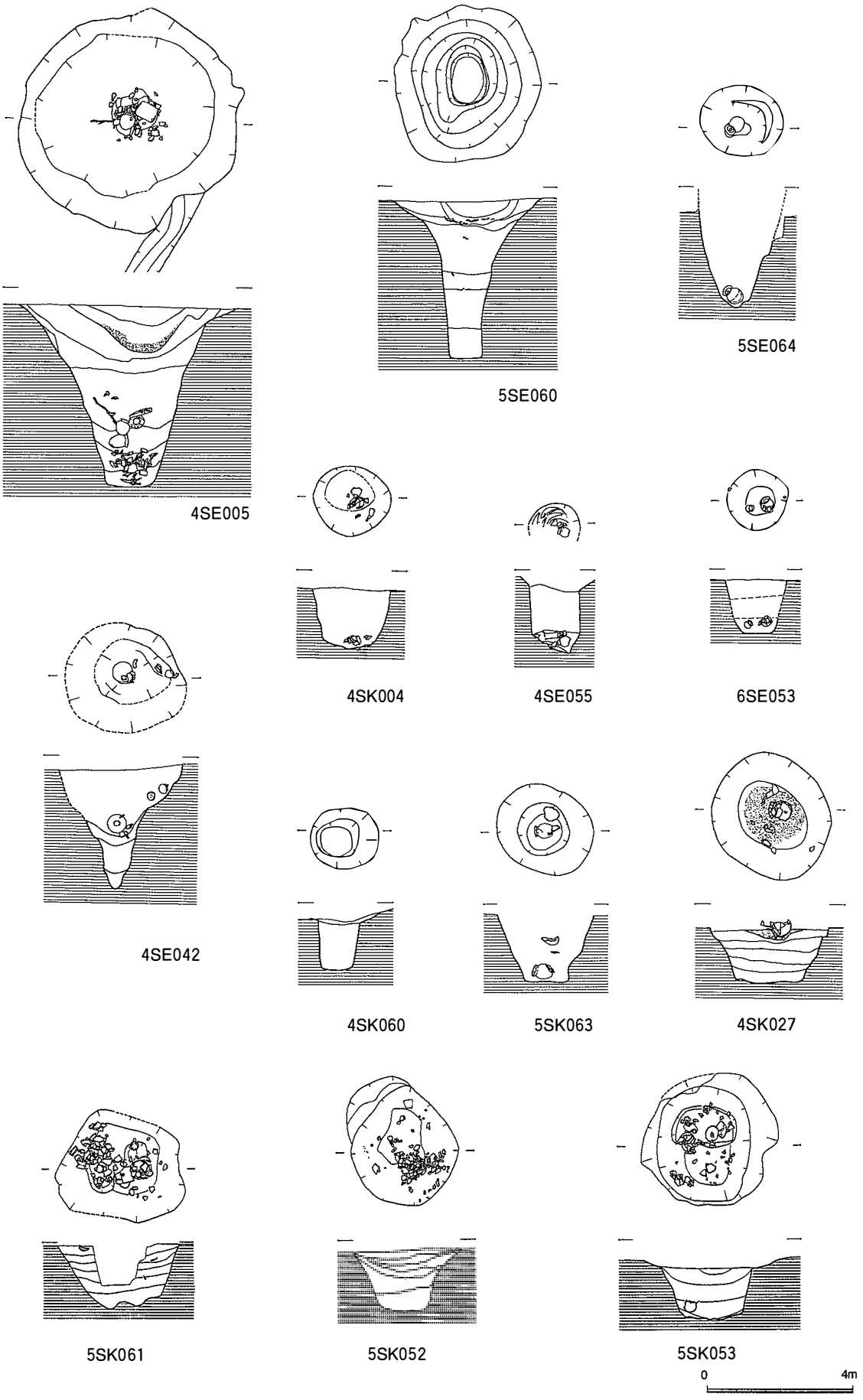
②竪穴住居跡

古墳時代前期の竪穴住居跡としたものは調査Ⅶ区、Ⅷ区で合わせて８棟ある。『柳町遺跡Ⅰ』では７棟を報告している。これまで県で調査したものと玉名市教育委員会で検出したものとを含めると20棟を超える。特にⅧ区・Ⅸ区で確認した住居跡は多く、自然堤防上の微高地一帯にあった。

ここでは、県で調査したⅦ区・Ⅷ区で確認したものについてまとめることとする。

表１　検出住居跡

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	床面積(㎡)	方　位	炉の有無	柱穴数	備　考
4 SI007	6.03	5.33	32.1	N－29°－W	有	4	—
4 SI011	4.65	4.17	19.4	N－54°－W	有	4	
4 SI013	5.45	5.11	27.9	N－50°－E	有	(4)	屋根寄棟
4 SI029	2.90	2.82	8.2	N－30°－W	有	－	
5 SI029	3.54	2.72	9.6	N－58°－W	有	1	
5 SI033	3.10	2.72	8.4	N－52°－E	無	－	
5 SI035	3.58	3.22	11.5	N－33°－W	有	(2)	
5 SI039	4.40	3.12	13.7	N－0°－S	無	(4)	



第360図　古墳時代の井戸跡並びに類似土坑集成図

まず、遺構の平面プランは長方形を主とするが、規模や形態はさまざまである。長軸、短軸とも３ｍ弱のものから長軸６ｍほど、短軸５ｍ強のものまである。最大のものは５SI033である。この遺構は炉を確認できず、柱跡も確認できなかったものの、形態的に他の住居跡との差はなかったので住居跡としたが、特別な目的で使用された可能性もある。その一方、最小のものは５SI039である。ただ、この遺構は規模的に他の住居跡に比べ極端に小さく、床面積も3.16㎡しかないので生活するスペースとしてはかなり窮屈であり、炉の痕跡もないため、果たして住居跡としてよいか疑問が残る。

住居跡をより多く検出したのはⅧ・Ⅸ区の方である。Ⅶ区の方もさらに北側に遺構の広がりがある可能性もあるが、地形的により高位になるのはⅧ区・Ⅸ区の方が住居群の中心であろう。住居群の時期的な組み合わせは残念ながらつかめていないが、住居跡の埋土中の遺物からややⅦ区側のものが時期的に古いようである。ただ、Ⅷ区側は調査区を完全に掘りきってはいないため確実ではないが、一部のトレンチからはさらに下位により古い時期の遺物が出土し、遺構の存在も推定できる。また、遺構の規模もⅦ区側がより大きい傾向があるが、検出した遺構が時期差によって見かけ上そう見えるのかもしれない。

③井戸跡と井戸類似土坑について

この時期の井戸は、調査Ⅶ区、調査Ⅷ区、調査Ｘ－１区のそれぞれで検出した。井戸跡としたのは、４SE005・４SE042・４SE055・５SE060・５SE064・６SE053の６基である。

いずれも素掘りの井戸である。井戸跡で最大規模のものは４SE005である。この井戸は、上部径が3.0m、底面標高が1.8m を測るもので、遺構の中位付近に甕形土器の完形品や木製品の未製品などが埋まっていた。

また、類似遺構としては、ここでは土坑として４SK027・４SK060・５SK052・５SK053・５SK061・５SK063・４SK004の７基がある。このうちのいくつかは井戸との明確な差異は認められず、井戸としてもよいかと考える。

形態的には、すべて素掘りの井戸である。平面形状は円形を主とするが、楕円形や不整形のものもある。規模も大小さまざまであるが、大まかには径2.0m 弱が多い。断面形態はＵ字形が多く、その変形としてのＶ字形やロート状のものもある。最下面の標高を見ると1.5～3.5m までと幅広く、湧水が不十分であると考えられるものや、途中で掘削を放棄して埋め戻したものもあるようである。特に標高３ｍ以上のものは、周囲の浸透水による湧水であろうと思われる。

これらの井戸跡もしくは類似遺構のいくつかでは、廃棄時もしくは廃棄後に行われたと考えられる行為に類似した特徴を示すものがある。それは、最下層はあるいは中位でほぼ完形の甕形土器が検出されることで

表２　井戸跡及び井戸類似遺構

遺構名	平面形状	規　模	底面標高	断面形態	形　態	備　考
４SE005	ほぼ円形	長径3.0m×短径2.7m	1.80m	Ｕ字形	素掘り	
４SE042	不整円形	径1.6m	2.45m	Ｖ字状	素掘り	
４SE055	ほぼ円形	径0.7m	2.10m	Ｕ字形	素掘り	
５SE060	不整円形	径2.5m	1.85m	ロート状	素掘り	
５SE064	楕　円　形	長径2.24m×短径1.8m	3.36m	Ｕ字形	素掘り	
６SE053	円　　形	径1.0m	3.20m	Ｕ字形	素掘り	
４SK004	円　　形	長径1.1m×短径1.0m	3.50m	Ｕ字形	素掘り	
４SK027	不整楕円形	長径1.8m×短径1.5m	3.20m	Ｕ字形	素掘り	
４SK060	楕　円　形	長径0.9m×短径0.8m	1.55m	Ｕ字形	素掘り	下部
５SK052	不　整　形	長径1.7m×短径1.5m	3.42m	Ｕ字形	素掘り	中段有り
５SK053	不　整　形	長径1.8m×短径1.7m	3.40m	Ｕ字形	素掘り	
５SK061	不　定　形	長径1.8m×短径1.7m	3.50m	Ｕ字形	素掘り	
５SK063	円　　形	長径1.3m×短径1.2m	3.30m	Ｕ字形	素掘り	

ある。中にはそれが複数個ある場合がある。この土器の中には頸部に縄を巻いた状態で出土し、釣瓶として利用されたものが廃棄されたと考えられるものがある。その一方で、複数個の甕形土器や小型の甕形土器を入れている場合がある。この行為は明らかにこの井戸乃至土坑が廃棄されたときに行われたものと考えられる。一種の井戸や井戸状の土坑を埋め戻す際に採られた行為とするならば、井戸のような深い穴を埋めるときに行う祭りの一種ではないかと考えられる。一応井戸と井戸類似の土坑が「井戸」ということでまとめられるならば、井戸の埋め戻しに伴う祭祀行為とも考えられる。古代まで遡ると考えられる井戸の神への祭りが古墳時代までさらに遡るのであろうか。または、使用していた釣瓶を捨てることから、祭って遠ざけるためであろうか。今後さらに類似の例が増加すれば、より詳しい状況がつかめるであろう。

（2）遺物

①　古墳時代前期の土器

ア）柳町遺跡の土器分類について

『柳町遺跡Ⅰ』（以下「柳町１」とする。）では調査Ⅰ区、Ⅱ区などで出土した土器をもとに形態分類を行い、さらに弥生時代終末～古墳時代前期に渡る土器の様相を設定している。土器の様相を検討する前に、良好な一括遺物の抽出を行い、口縁部形態、胴部形態、器面調整、底部形態などの組み合わせによる各器種の分類を経て、系統分類へと進む。そのためには、まずこの遺跡内での分類を深め、遺構による組み合わせを検討し、さらに菊池川下流の同時期の遺跡との比較検討を行ったうえで、他地域の成果を生かし、様相の検討が加えられる方向に進めたい。ただ、ここでそこまで検討することはできなかった。とりあえず、今回の報告では、原則的に「柳町１」の分類に基づくことにした。ただ、当該分類の不備や、あらたな知見により若干の修正を加える必要が生じた。ここでは、まず前回の分類をまとめたうえに今回の知見を加えたい。

a　甕の分類

甕は、在地系のA～D類、折衷様式のE類、外体系のF～G類に大別している。

Aは在地系長胴甕で、口径18cmを境としてⅠ・Ⅱ類に分け、胴部形態や口縁部形態からそれぞれをさらにa・bに分けている。この形態は、Ⅷ区で時期の不明確な溝状遺構に伴い出土しているが、その他の出土例と併せて、さらに形態分類可能かもしれないが、類例が少ないのであえて追加することはしない。ただ、「柳町１」でAⅡ－b類の例として第３表にあげられているものは違っており、分類のとおりであれば、「柳町１」の報告書の0755～0758がそれに当たろう。

B類は、台付きの長胴甕でⅠ類（大型）、Ⅱ類（小型）に分ける。今回の報告では全体像を示すものは無く、脚台部のみを数点確認している。

C類は頸基部及び胴部に凸帯を有する大型甕とした。「柳町１」では破片であるため全体像が掴めなかったが、今回報告した中に413があり、山陰系の二重口縁を持つ大型の甕形土器である可能性が高くなった。そうすると、山陰系二重口縁甕Gの一部に含まれる。ただ、C類も一応残しておき、今後の類例を待ちたい。

今回の報告ではD類は、A類より小ぶりの在地系中型甕とする。さらにa・bに分ける。D－a類は、胴部外面にタタキを残す長胴気味の甕。D－b類は、一部外面ハケ目調整で球形胴の甕である。

E類は、在地系長胴甕A類と畿内系精製甕F類との折衷類型で、E－a類・E－b類・E－c類の３類に分けられる。E－a類は、やや長胴丸底気味、胴部最大径を上位に持つ。胴部外器面はタタキ後ハケ目、内器面はハケ目調整。E－b類は、やや長胴気味の丸底、胴部最大径を中位に持つ。外器面にタタキを残す。内器面はヘラ削り。E－c類は、器形はb類に似て、外器面はハケ目、内器面は中位よりやや上までがヘラ削り、上部から口縁部にかけてハケ目調整を施す。

F類は、畿内系精製甕を示し、a類（布留傾向型甕）・b類（布留型甕）・c類（布留退行型甕）・d類（その他の布留型甕）に大別され、器面調整は、外器面ハケ目、内器面ヘラ削りを基本とする。

G類は山陰系の精製甕で、「５の字口縁」と呼ばれる短く外反する頸部と、直立気味に立ち上がる二重口縁の組み合わせが特徴である。口径20cmを境として、以上をⅠ類、以下をⅡ類に分けられ、Ⅰ類はさらに二次口縁接合部外面稜がシャープなa類とあいまいなb類に分けられる。Ⅱ類はやや不明確である。先にC類で述べた大型品は、このG類の大型品と考え、さらにⅢ類を設定しGⅢ類としたい。

これらのうち大型甕C類は、「柳町１」では破片であるため全体像が掴めなかったが、今回報告した中に413があり、山陰系の二重口縁を持つ大型の甕形土器である可能性が高くなった。そうすると、山陰系二重口縁甕Gの大型品Ⅲ類と考え、新たにGⅢ類としたい。

さらに、「柳町１」では、甕の口縁部形の分類がなされている。在地系甕、外来系の布留祖系甕・布留傾向甕などに関し、口縁端部の形態的特徴によって、ア～コの10形式に分類している。

また、胴部形態及び底部形態も分類の基準に使用される。

b　壺の分類

壺は、在地系のA～F類と外来系のG～O類、その他に分類される。A類は、在地系袋状口縁壺の系譜を引く二重口縁壺で、頸部形態の違いからa類とb類に分けられる。B類は、広口壺で頸基部のくびれが強く、やや短い口頸部が大きく開くもので、頸基部に刻み目の入る突帯や刺突文を持つものがある。C類も広口壺で、頸基部のくびれが強く、やや長い口頸部が立ち気味にのびるものである。胴部高の大小によりⅠ・Ⅱ類に分けられる。D類も広口壺で、頸基部が太いもの。E類は、口頸部が短く直立する直口壺である。胴部高の大小によりⅠ・Ⅱ類に分けられる。さらにEⅡ類は形態と外器面の調整によりa・bに分けられる。F類は、球形胴部・底部丸底で寸の詰まった長頸壺である。

G類は畿内系の二重口縁壺で、筒状頸部と外傾する二次口縁を一般的特徴とする。H類は山陰系二重口縁壺とその他の系譜不明の二重口縁壺広口を含み、さらに形態に応じて、a・bに分けられる。I類は、明確に筒状頸部を持つ瀬戸内東部（播磨）系二重口縁壺である。J類は、畿内系広口壺のうち、基部が強くくびれ、やや長く中程度に開く口頸部を持つもので、外器面のタタキの有無、内器面のハケ調整かヘラ削りかでa・bに分けられる。K類は、畿内系広口壺のうち、基部のくびれがやや弱く、短く開きの小さい口頸部をもつもので、胴部の形態によりa・bの２型式に細別される。L類は、畿内系広口壺のうち、基部が強くくびれ、短く、立ち気味に外反する口頸部を持つ一群である。なで肩、下ぶくれの胴部をもつが、底部形態は不明。調整では、外面は全てハケ目であるが、内面はヘラケズリ、ナデ、刷毛目ののちナデと様々である。M類は、中型の広口壺で、基部が強くくびれ、内湾しながら長くのびる口頸部をもつもので、頸基部のくびれの強弱、肩の形態により、a・bの２型式に分かれ、さらに口縁高が胴部高をはるかに越えるc型式に細別している。N類は、頸基部のくびれの弱い小型広口壺を全て含む。胴部形態で２型式に細別され、球形胴のa型式と扁球形の胴部をもつb型式とに分かれる。O類は、在地系以外の系譜が不明で多様な二重口縁壺の各種を含む。

この他に型式設定されていないが、壺N－a類に台を付した台付壺や、底部が平底を呈する小型平底壺がある。その他にも類別不能のものがある。

c　高坏の分類

高坏は、在地系のA・B類と外来系のD～G類、さらに折衷様式で在地外来の区別が付けにくいC類とに大別される。

A類は、浅く、大きく開く坏部と長い脚部をもつ高坏で、在地系のもの。坏部と脚部との形態からa～eの５型式に分類できる。B類は、鉢F類に脚を付けたもので、脚柱部を持たない短脚のa型式と脚柱部を

持ちやや長めの脚であるｂ型式とに細分される。

C類は、折衷様式で在地外来の区別が付けにくい高坏の一群で、坏部口径や形態、脚部の形態からａ～ｄ型式の４型式に分かれる。

D類は、坏部もしくは脚部が有段になるもので、口縁部の形態や脚部形態からａ・ｂの２型式に細別される。E類は、畿内系で庄内系の高坏で、坏受部は平坦で、脚部外面はヘラケズリののちナデ調整を施す。F類は、畿内系と思われる高坏で、坏底部径と口径の比が大きく、坏部は深い。坏部と脚部の形態からａ・ｂの２型式に細分される。G類は、畿内系の低脚坏と思われるが、脚部のみでの分類で脚部の形態からａ・ｂの２型式に細別される。

ｄ　鉢の分類

鉢は在地系の丸底のものがA～H類に、系譜不明の平底がI類に類別される。

A類は、単純口縁の浅鉢で、口縁部の立ち上がりかたによって、ａ～ｅの５形式に分類される。B類は、単純口縁の深鉢で、口縁部は内湾気味に広がり、底部形態からａ・ｂの２型式に分類される。C類は、単純口縁の小型台付鉢。脚形状によりａ～ｃの３型式に分類される。D類は、やや長い屈折口縁を持つ大型の深鉢である。くびれの強弱からａ・ｂの２型式に分かれる。E類は、鉢D類にやや長めの台を付したものである。F類は、屈折口縁の浅鉢で、頸基部のくびれの強弱、口縁形態などにより、ａ～ｃの３形式に分類される。G類は、ごく短い屈折口縁を持つもので、器壁の厚みによりａ・ｂの２型式に分類する。H類は、鉢G類に脚台を付けたものである。

I類は、系譜不明の平底の浅鉢である。口唇部の反りによりａ・ｂの２型式に分類される。

ｅ　甑（有孔鉢）の分類

甑（有孔鉢）は、全て深鉢形の単孔式である。形態からａ～ｃの３型式に分類される。

ｆ　小型丸底土器の分類

A類は、単純口縁の小型丸底土器を一括するもので、口縁部高と胴部高の比率でａ～ｇの７型式に細別される。B類は、小型丸底土器のうち、二重口縁を持つもので、口縁からの屈曲部の形態からａ・ｂの２型式に分かれる。

ｇ　支脚の分類

支脚は１類型のみで、受部が傾斜し、上方先端が嘴状に突出し粗いタタキ調整を施す。

ｈ　器台の分類

器台は、「柳町１」では、在地系のA類と外来系のB類に大別される。

A類は、くびれ部を挟み上半部と下半部に長方形の透かしを持つもので、瀬戸内系器台の影響を受け出現したものと思われる。B類は、畿内系の精製小型器台である。口縁の形状からａ・ｂの２型式に分ける。

今回の報告分では、さらに器台Cを設定する。この分類に入るものとして、691と1023がある。「柳町１」の分類であるA・Bの２類にこの器台は入らないもので、山陰系土器のいわゆる「鼓形器台」の系譜を引くものととらえる。この遺跡では山陰系土器の影響のある、二重口縁壺や甕類が存在しており、「鼓形器台」も存在していると考えられていたもので、それを確認したことになる。ただ、器台全体の点数からすれば非常に少なく、確認したものも完形ではなかった。それ以前の調査でも仔細に観察すればあったのかもしれないが、破片のため二重口縁壺の口縁部と間違えられていた可能性がある。形態上の特徴から、二重口縁甕との関連が考えられ、様相２～様相３に比定されよう。

ｉ　小型土製模造品

「柳町１」では、小型土製模造品をその祖形の形態的特徴から、甕形土製模造品、壺形土製模造品、鉢形土製模造品、坏形土製模造品、高坏形土製模造品。鏡形土製模造品、勾玉形土製模造品などに分類している。

今回の報告でもほぼ大差はないが、出土場所は、土坑や大溝状遺構からである。特に４SK006から多く出土している。

イ）柳町遺跡の土器の変遷について

「柳町１」では、弥生時代終末から古墳時代前期までの編年作業が行われ、様相１から様相７までの変遷を想定されている。今回の報告でも大枠は異ならない。中心は様相２から様相５までの遺構が主である。住居跡の出土遺物は残存度合いから出土遺物も少なく、この変遷にはあまり関係しない。井戸跡からの出土遺物は一括性が高く、遺物からはほぼ様相３・４に入りそうである。大溝状遺構では、かなり時期幅がありそうである。中でも４SX049では、様相７までの遺物が含まれ、一定の部分から古代の遺物が含まれる。５SX051からは６世紀代の須恵器の坏蓋が出土している。これは様相７の段階であろう。

②鏡について

４SX049の底面直上から鏡片が１点出土した。鏡式は、内行花文鏡である。この鏡片は、一応仿製鏡と考えているが、常時水の存在する土中に密閉されていたためか、背面の文様や表面の残りもよく、欠損した断面が見える部分も当時のまま残っている。そのため舶載鏡かと思わせるほどであった。復元直径は5.6cmを測り、熊本県内で出土している内行花文鏡の中では小型鏡になる。大きさは弥生時代の小型仿製鏡と同じであるが、背面の文様構成は、前期古墳から出土する内行花文鏡と類似する特徴を持つ。この鏡の紋様構成は、一の宮町中坂梨の番出１号墳出土鏡や同町長目塚古墳出土鏡と類似する。背面の周縁部はやや匙面気味の平縁で、その内側に平行鋸歯文を配する。その内側の花文は６花文と推定され、その花文の頂点に珠点を１個配している。紐は確認できないが、その外側に二重線の圏線を巡らしている。いわゆる内行花文鏡に特徴的な四葉座紐などのような座紐はない。紋様はややなれがあるもののかなり明瞭である。清水康二氏の古墳時代の倣製内行花文鏡の分類に従えば、Ｂ１式にあたり、古い傾向の鏡群に含まれ、古墳時代前期中葉とされるＢ３式よりも古い形態と考えられる[註4]。

この鏡は造りとしてはかなりしっかりしており、残存状況も良好で材料としても弥生時代の仿製鏡とは異なる可能性があったので、成分分析を行った。その結果、この鏡片に含まれる銅と錫の含有量は中国南部の鏡と類似することが分かった。このような組成成分は古墳時代初期の鏡に多い傾向といわれ、分析者はこの鏡が形態的には仿製としても、材料自体は中国南部の鏡に類似しており、弥生時代の仿製鏡の材料が中国河北産の成分を主とすることとは異なっている。したがって、成分分析からもこの鏡は古墳時代のものと考えられる[註5]。

この鏡が大溝状遺構４SX049の底面から出土していることが何を意味するか、今の時点では不明といわざるをえない。祭祀行為の結果によりそこに落とされたのか、吊るしていた紐が切れてたまたまそこに落下したのか、流されてきたのか等様々な想定が可能である。他の遺物との供伴関係もつかめないので、その性格をつかみ得ないのである。今後の調査事例を待ちたい。

註４　清水康二「倣製内行花文鏡類の編年」『橿原考古学研究所論集十一』吉川弘文館、1994

註５　別府大学文学部　淀川奈緒子他「熊本市玉名市で出土した青銅製品の自然科学的研究」(2004）によれば、提供した本鏡の錆試料を鉛同位体比法の測定値結果から、中国華南産の材料が利用されている可能性が高いとされ、古墳時代の鏡の特徴を示すものであった。

③木製品について

「柳町１」において木製品については、詳細に分類・検討されており、今回報告した遺物の一部もその中で触れられている。出土場所は、井戸跡、井戸類似遺構、大溝状遺構等である。大部分は杭や板材などで、製品を明確に規定できるものは少ない。製品として確認できたものは、鋤や鍬などの農耕土木具や、横槌な

どの工具、木錘などの編具、天秤棒のような運搬具などがある。これらの遺物と遺構との関係が明確なものは少ない。4 SX049から出土した一木平鋤は、この遺構を掘削するのに利用された可能性がある。この他の大溝状遺構から出土した木製品は完形のものはほとんどないが、腐食によって崩れたものだけでなく破損したものが集落から遺棄された品々も多くあると考える。

第4節　古代の遺構と遺物

（1）出土遺構の検討

ここで取り上げるのは、主に古墳時代終末～奈良・平安時代前期までの遺構で、7世紀後半から9世紀末までのものと考えられる遺構を取り上げる。

a　掘立柱建物跡

調査Ⅶ区・Ⅷ区において確認した古代の掘立柱建物跡としたものは第184図、第185図で示したように総数で7棟を数え、その内訳は、2間×4間が約5棟、長辺に庇の付いた2間×4間の建物跡が1棟、1間×2間の建物跡が1棟、その他に間数が不明のものが1棟である。また玉名市側でも2棟ほど検出している。これらの遺構が形成された一帯は黒色の土が（Ⅴ層）地山となり、その上からの掘り込みであった。この層は明確に分類できなかったが、途中から古墳時代の層に変わっていく。調査の過程でⅦ区とⅥ区の境付近に厚く堆積した層の状況から古代と古墳時代の間に薄く間層が入ることを確認している。この掘立柱建物跡はこの古代の包含層のあるところから掘り込まれていた。建物跡には若干の方位の異なりが見られ、また、一部切り合う柱跡もあり、時期差があると考えられる。

これらの建物群の性格について考察を加える。

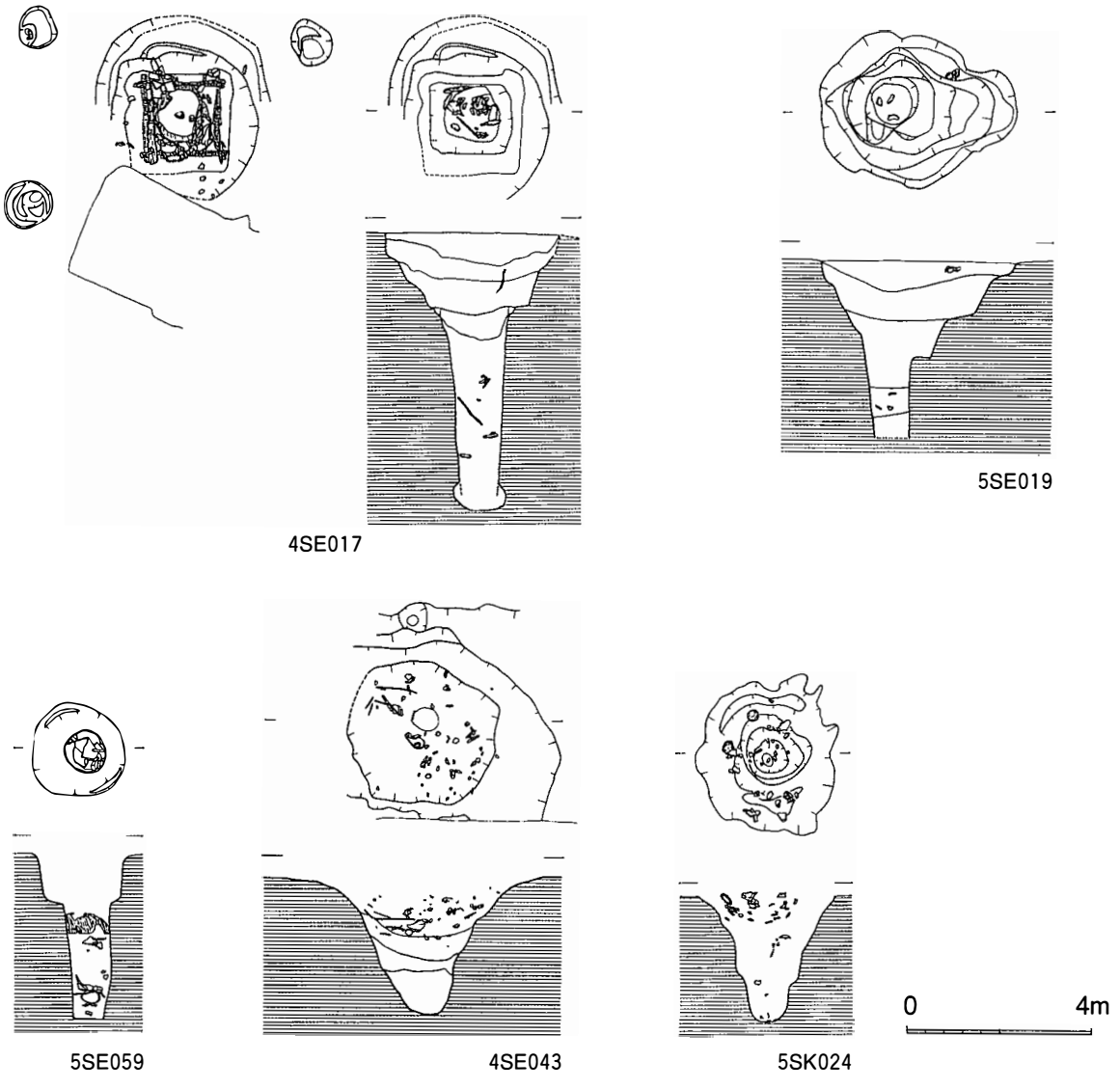
掘立柱建物跡は、全体を俯瞰してみると明らかに規則性をもって並んでいる。ほぼ南北と東西に並び、しかもそれらの建物跡がさらに方形に並ぶように配置されている。時期的な差が考えられるので同時期にこれらの建物跡あったとは言えないが、ある程度見られるように建物跡が配置されていた可能性は高い。

Ⅶ区では、表土下すぐに黒褐色のⅤ層が見られ、周囲の地籍の状況から、これらの遺構の集中する部分が当時はもっと高かったと考えられる。残存している柱根の直径が20cmほどあり、掘り方も玉名市側の調査区から、少なくとも深さは1mほどあったと考えられる。上部構造が不明確なので想定するしかないが、建物跡の方位に沿った並び方と周囲の出土遺物から何らかの役所的な施設の一部と捉えておく。また、1棟だけⅧ区で確認されたが、竪穴住居跡や井戸も周囲にはあり、ここにもいくらかの建物のまとまりがあったと考えられる。特にⅧ区は後世の掘削があったことは確実で、その掘削により他の遺構が失われた可能性がある。

規格の違いは少なく、4間×2間のものを主とし、方向角もほぼ方位に沿ったように建てられている。柱間は若干差があるようである。これが誤差の範囲か、時期差によるものかは不明である。

表3　掘立柱建物跡

遺構名	規　模(m)		間取り	桁行方向	形　態	備　考
	桁行	梁行				
4 SB001	6.4	4.6	（3＋α）間×2間	N－83°－E		柱根残る
4 SB002	6.9	4.4	4間×2間	N－90°－W		柱根残る
4 SB003	6.9	4.4	4間×2間	N－6°－E		柱根残る
4 SB031	6.3	4.5	4間×2間	N－1°－W		
4 SB034	7.6	5.5	4間×2間	N－1°－W	庇付	柱根残る
4 SB036	2.5	2.8	（1）間×2間	N－85°－E		柱根残る
5 SB018	6.1	3.6	3間×2間	N－11°－E		



第361図　古代の井戸跡集成図

b　竪穴住居跡

調査Ⅶ区・Ⅷ区において確認した竪穴住居跡は、３棟である。Ⅶ区で２棟、Ⅷ区で１棟出土した。

調査Ⅶ区で検出した２棟のうち、４SI012は掘立柱建物跡群の一角で確認した。掘立柱建物跡と切り合わないので、同時期に存在していた可能性がある。規模的には３棟のうちで規模的に一番大型のものである。カマド付きの住居跡と考えたが、カマド自体を明確に確認することはできなかった。ただ、焼土等が集中した遺構の北側部分にカマドはあったと推定している。この遺構からは、古墳時代前期の遺物も多く混入していたが、この遺構に伴う古代の遺物としてはかなり少なかった。ただ、包含層中や壁面近くから、鉄製の鋤先や硯の破片が出土している。わずかな遺物は８世紀代のものが多く、掘立柱建物跡の存在時期とほぼ同じと考える。方位的にも長軸をほぼ東西方向に向けており、掘立柱建物跡の規格性に従っているようである。

一方、４SI016は掘立柱建物跡からやや離れた位置にあるが、方位的にはほぼ長軸を南北に向けており、やはり掘立柱建物跡と関連性が想定できる。ただ、出土遺物はほとんどなく、時期の推定は難しい。

5SI031は、Ⅷ区で確認したもので、古墳時代前期の住居跡群の間で検出したもので、前出の2遺構よりも規模が小さく、方位もやや異なる。カマドは痕跡ながら位置ははっきりしている。埋土中の遺物をみれば、8世紀代のものである。遺構数が少なく、これらの遺構の性格を述べるにはかなり無理がある。

表4　竪穴住居跡

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	床面積(㎡)	方　位	柱穴数	備　考
4SI012	5.85	5.65	33.1	N－8°－E	4	カマドは不明確
4SI016	4.94	4.42	21.8	N－91°－W	4	カマドは不明確
5SI031	3.16	2.56	8.1	N－102°－W	2	カマドは痕跡

c　井戸跡と祭祀

古代の井戸跡は調査Ⅶ区・Ⅷ区で5基検出した。このうち、井戸枠などの施設が残るものは2基あり、4SE017と5SE061である。井戸の形態を比較すると大きくは3種類に分けられる。まず、第1類として、井戸側乃至井戸枠を配置し、井戸枠下は均等の径で底部まで直に掘り込まれるものである。第2類は素掘りの井戸で、一定の深さ以下は均等の径で底部まで直に掘り込まれるものである。第3類は素掘りの井戸で、上部は開くものの徐々に窄まり、一定の深さで底部になるものである。

まず第1類としては、4SE017があげられる。この井戸は、井戸枠と井戸側を持ち、上部構造まで推定できるものである。井戸の周囲に3つの柱跡を確認し、井戸の上部構造として上屋などの外部施設を有する可能性が推定できる。また、井戸側と井戸枠を持つ形態の古代の井戸跡の確認は熊本県では初めてである。残存状況は良好で、井戸側の組み合わせは、下から3段目まで確認できるものであった。また中の井戸枠もクスノキの一木刳り貫き造りで1mほどが残っていた。このような井戸形態の類例としては、井戸側だけを見れば、奈良の西隆寺出土のSE130が類似し、形態分類上では、積み上げ式横板組相欠き仕口型とよばれるものである[註6]。ここではこれに井戸枠としてクスノキの一木刳貫井戸枠が組み合わされている。この遺構の時期は、廃棄時もしくはその後埋土、井戸側の埋設土に含まれた遺物から、8世紀半ばほどであろう。

さらに調査Ⅷ区の5SE059でも、同じくクスノキの刳貫井戸枠の一部が残っていた。ただ、これは4SE017と同じ構造であったものが、井戸側のみを撤去された結果、このようなことになったのか、もともと井戸枠のみであったのか不明である。上部の状況と、井戸枠下の状況の類似から考えると、4SE017と同じ形態の井戸であった可能性がある。5SE059の時期は出土遺物が少なく、明確ではない。

次に第2類としては、5SE019がある。上部の平面形は不整円形を呈するが、中位以下は均等な円形で直に底部まで掘り込まれている。中位に段があるので、この井戸も場合によっては井戸側や井戸枠が配置されていた可能性がある。この井戸からは墨などが出土したものの遺物出土総数は少なく、年代の特定は難しい。少ない遺物から8世紀半ばほどであろうか。

第3類としては、4SE043と5SE024がある。形態的には類似する。4SE043は、4SX038との組み合わさり、一つの遺構と考えられる。井戸とそれに連なる流路という組み合わせである。湧水があればそれでよいような感じで明確な井戸枠などは設けられなかったと思われる。さらに、これに周囲のいくつかの遺構が重なっている可能性もある。この遺構からは多くの土器が出土している。須恵器・土師器でそれぞれの器種があるが、出土する遺物には偏りがあり坏類が多く、完形もしくはそれに近いものが多い。これらの遺構と遺物の組み合わせは意味を持つものと考えている。特に先に述べた井戸とそれからの流路は、井戸という人工的な泉とそれから流れる水の流れという組み合わせにつらなり、そこに多くの完形に近い土器の組み合わせは、水辺で執り行われた祭祀の一端を示すものと考えている。4SE043は、4SX038の時期は、出土遺物から7世紀後半まで遡る。

同じ第3類とした5SE024は、形態的には4SE043に同じである。時期的には上位の出土遺物から少なく

とも8世紀初頭ほどに廃絶しており、井戸はそれ以前の所産と考える。検出場所には5SE019・5SE05も近くに位置し、それらとの関係は良くつかめていない。

井戸の廃棄状況はそれぞれで様々であるが、特に廃棄に当たって、祭祀を行ったような形跡は検出できなかった。水辺の祭祀の一端を担ったと考えた4SE043でも同様である。中でも4SE017では廃棄後はゴミ捨て場のように様々な土器片・木片が井戸枠内に見られた。この遺構では、井戸枠材もそのまま残した状態であったことも考慮すれば、遺跡全体の廃絶が一気に進んだのではなかろうか。

註6　鐘方正樹『井戸の考古学』（株）同成社、2003

表5　井戸跡

遺構名	平面形状	規　模	底面標高	断面形態	形　態	備　考
4SE017	円　形	径が2.2m	1.30m	ロート状	積み上げ式横板組相欠き仕口型井戸側、一木刳貫井戸枠	覆屋あり
5SE059	円　形	径が約1m	2.63m	ロート状	一木刳貫井戸枠	
5SE019	不整円形	径が1.6～1.7m	2.44m	ロート状	素掘り	上位段状
4SE043	不整円形	南北径3.1m、東西径3.2m	2.92m	U字形	素掘り	
5SE024	不整円形	長軸が1.6m、短軸が1.4m	3.08m	U字形	素掘り	

（2）遺物

ア）土器の分類について

柳町遺跡では、7世紀後半から10世紀までの土器が出土し、その中心となるのは、7世紀後半から9世紀前半までのものである。多くの土器が出土した4SX038からは7世紀末～8世紀初頭のものが大半である。遺構は溝状の遺構であるため、流れ込み等の混入もあろうが、ある程度一括性あるものと考える。その他では遺構と遺物が確実に伴うものとしては、井戸からの出土品がある。それらを組み合わせることで、この柳町遺跡での土器の状況をつかむこととする。この時期の遺物の中心は須恵器と土師器であるので、まず、その分類を試みる。さらに大まかな柳町遺跡における編年作業を行ってみることにする。

まず、分類作業であるがこれまで大宰府編年をもとに熊本独自の研究が網田龍生氏によって積極的に進められて来た。その成果のなかには玉名の資料も多く利用されて、概観はほぼまとめられてきている。

a　須恵器

須恵器をまず器種ごとに形態によって分類する。

・坏蓋

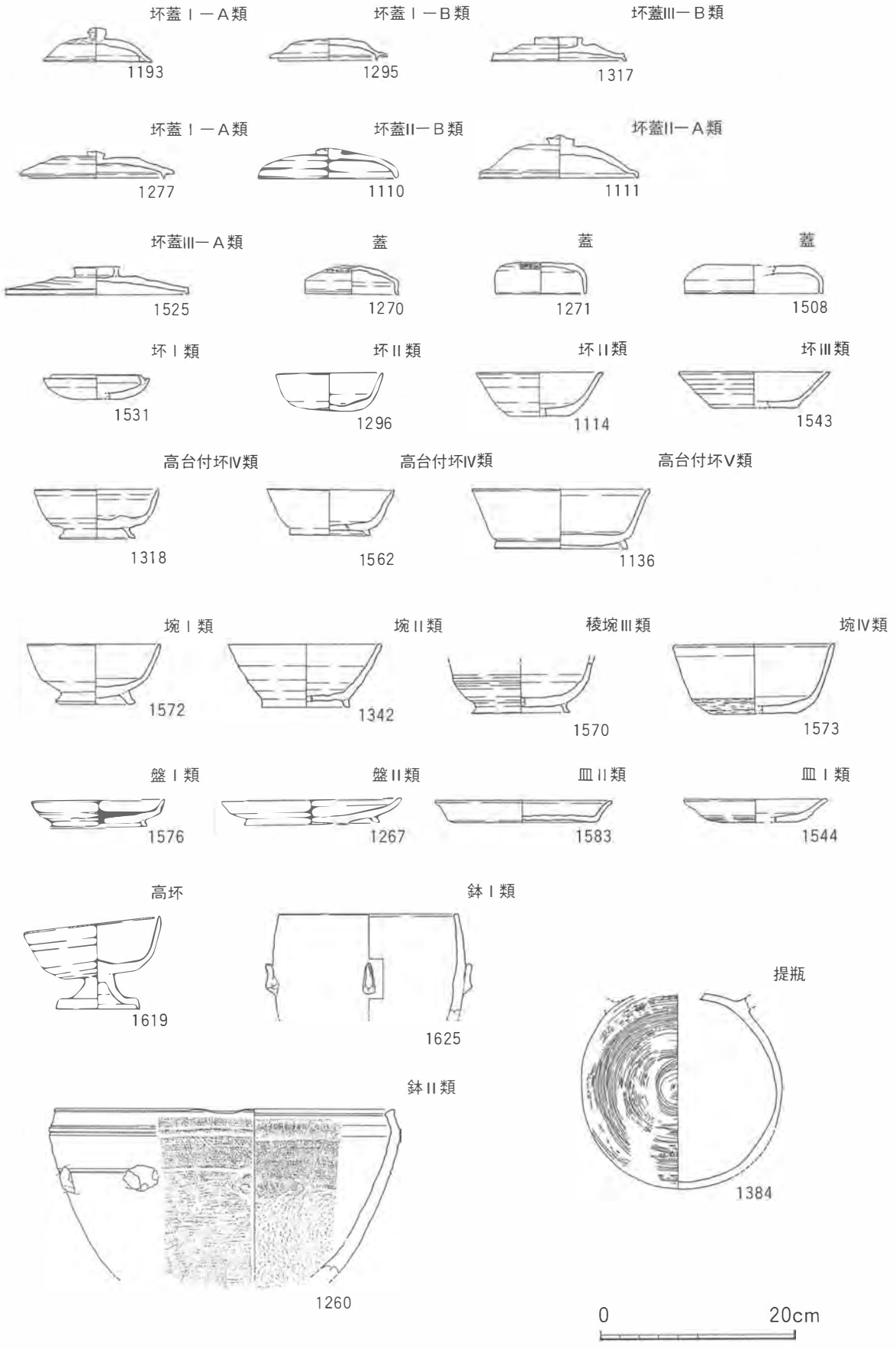
坏蓋は坏身との組み合わせが必要であるが、ここでは確実に供伴関係になるものを特定しがたいので、蓋だけで分類する。返しの付くものをⅠ類とし、つまみのあるもの（Ⅰ－A類）、無いもの（Ⅰ－B類）でさらに分ける。ツマミのあるものも大小があるが、出土数が少なく明確ではないのであえて分けない。次に返しがないものでは、ツマミの形態が宝珠の系統になるものをⅡ類とし、輪状になるものをⅢ類とする。同じ蓋でありながら使用法が異なる可能性があるからである。Ⅱ類では天井の高いものと扁平化の進むものがあり、前者をⅡ－A類、後者をⅡ－B類とする。また、Ⅲ類も径の大小があり、大型をⅢ－A類、小型のものをⅢ－B類とする。口縁端部形状の変化が見られ、明確に返りを作るものからあいまいなものまである。

・壺蓋

壺蓋は出土数が少なく、分類するには難がある。これに組み合わさる壺本体は特定できない。

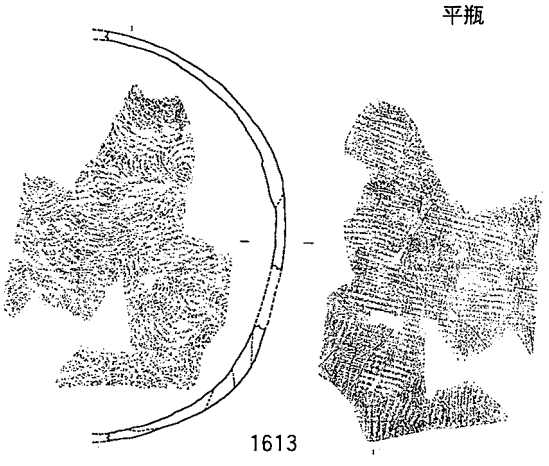
・坏身

先の蓋との関連があるが、確実な組み合わせが不明なので、身単独で分類する。返しの残るものをⅠ類と



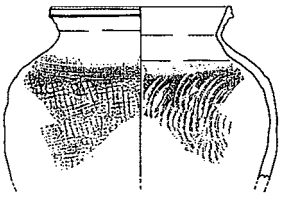
第362図　古代須恵器分類図

平瓶



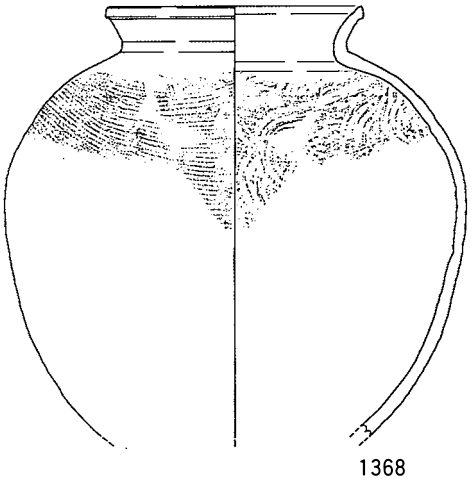
1613

甕



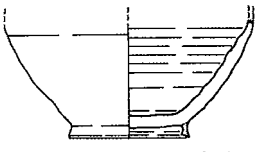
1594

甕



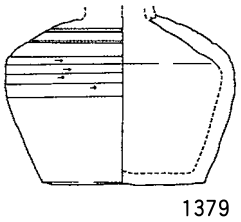
1368

壺Ⅰ類



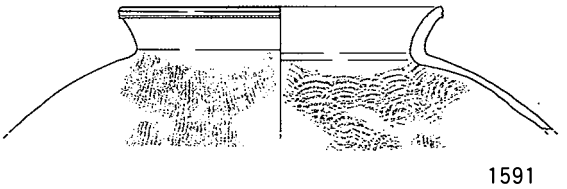
1370

壺Ⅱ類



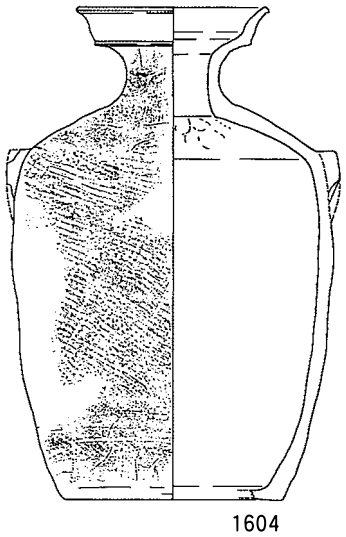
1379

甕



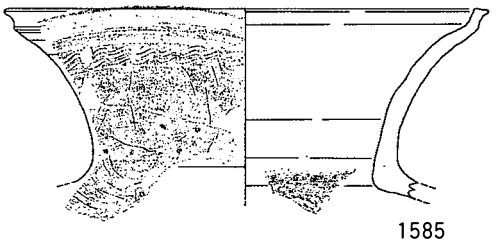
1591

壺Ⅲ類

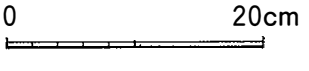


1604

大甕



1585



第363図　古代須恵器分類図

する。底部から体部の立ち上がりが直に近いものをⅡ類とする。底部径に対して器高が低いものをⅢ類とする。次に高台の付くものをⅣ類・Ⅴ類とする。このうちⅣ類は体部形態がⅡ類と類似するとする。Ⅴ類はⅢ類のように底部径に比して器高の低いものである。これには大小があり、大型をⅤ－A 類、小型をⅤ－B 類とする。

・埦

埦も先の蓋との組み合わせを考えられるが、不明確なため単独で分類する。

高台が付き、底部に丸みを持つものをⅠ類とする。高台が付き、体部が底部から直に伸びるものをⅡ類とする。点数は 2 点ほどであったが、高台付きで体部に明確な稜をもつものをⅢ類とする。高台がなく、大型の坏と鉢の中間の大きさのものをⅣ類とする。

・盤・皿

盤は高台のあるものとし、口径の小さいものをⅠ類、口径の大きいものをⅡ類とする。皿は高台の付かないものとし、口径の小さいものをⅠ類、大きいものをⅡ類とする。

・高坏

出土数が少なく、分類するほどではないので分けない。

・鉢

鉢も出土点数は少ないが、様々な形態があり、4 類に分ける。深さのあるもので、体部に耳をもつものをⅠ類とする。口径が大きく片口を有するものをⅡ類とする。いわゆる「鉄鉢型」のものをⅢ類とする。部分的な出土があった底部が厚く、体部が直に立つ、いわゆる「擂鉢」をⅣ類とする。

・提瓶

出土点数は少ない。全体形が分かるものは少なく、分類できない。形態が分かるものでは、胴部の片面が平らで裏面はやや胴が張り出し、肩部に退化した取手を有する。口縁は不明である。

・平瓶

これも出土数は少ないが、胴部の破片だけでは甕との区別が付かないのでまだ点数がある可能性がある。胴部が卵形を呈するもののみを確認しており、分類できない。

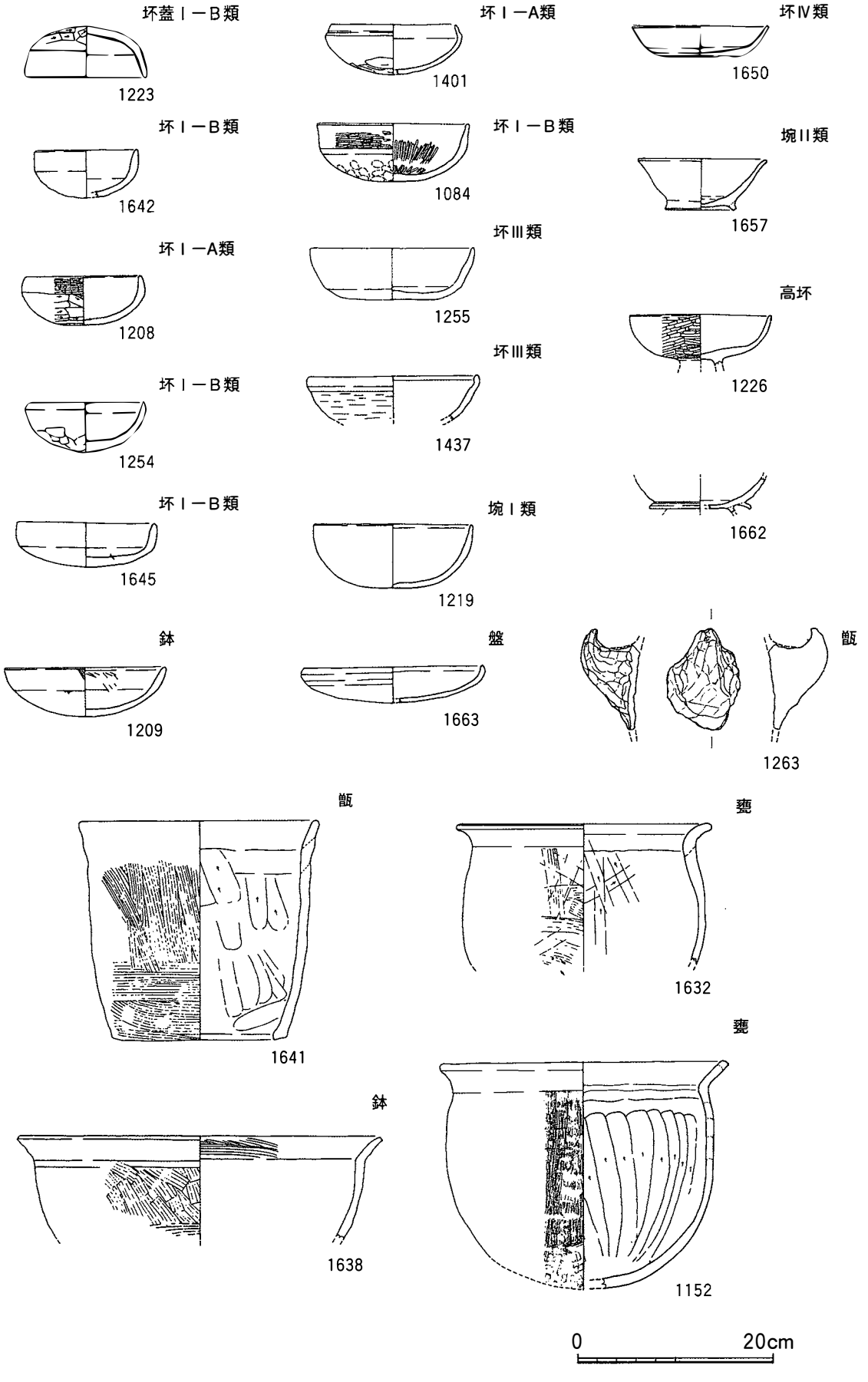
・甕・大甕

甕には大中小とあるが、それぞれで分けるだけの資料を得ていないので分類しない。

・壺

壺の形態には壺蓋の組み合わせが考えられるが、短頸壺につくと考えられるが不明確なため、ここでは触れない。壺の出土数もそう多くはないが、形態的には高台のつくものと付かないものがある。また、胴部高が低いものと高いものがある。さらに頸部の長いものと短いものがある。それらを組み合わせて分類すべきであるが、出土数が不足するので、高台の付くものをⅠ類とし、付かないもので長頸のものをⅡ類、短頸のものをⅢ類としておく。さらに長胴化したものをⅣ類とし、これを瓶とも呼ぶものとする。

以上のように一応分類したが、その時期的な組み合わせによって編年が構築されると考える。しかしながら、この遺跡では一括をいうことのできる遺構はまれである。一括といえる遺構とその遺物について、簡単に述べる。4 SX038の一角で蓋のみが重なって出土した例がある。ほぼ同時期の廃棄物と考えられ、1299・1321・1311である。いずれもツマミを持つものと考えられる。1299は天井が高く、返しの痕跡を有するものである。対して1311と1321は宝珠ツマミを持ち、返しはなく折り返した口縁部を持つが、折り返しの角度がやや異なる。これらの遺物が同時期にあったとすれば、形態変化と実用状況はややずれるのであろう。これらの遺物と1379の壺は出土位置が異なるものの近接し、同じ時期のものと考えられる。この他、4SX049は編年上時期差があるものが同じレベルで出土している。水の流れのある遺構なので上下の移動が考えられる



第364図　古代土師器分類図

が、やや時期の異なる遺物が同時期に使用されていた可能性を示唆する。この他に５SK057は片口鉢・坏蓋・長頸壺がほぼ一括で出土している。これも組み合わせとして重要かと考える。他に井戸の出土遺物があるが、土師器と須恵器の関係を知るうえでは重要である。

これらのことを踏まえ、これまで研究されてきた編年状況を照合すると大まかな流れとしてはそう変わらない状況である。ただ、先に述べたように編年では時期差があると考えられる遺物が一括して出土しているので、そのことの合理的な説明が必要であろう。

b　土師器

土師器をまず器種ごとに形態によって分類する。

・坏

古墳時代からの伝統を引くものをⅠ類とする。この遺物は須恵器の坏身や蓋を模倣したものと考えられ、より古い形態から徐々に変化していく。それぞれ形態の変化を分類すると、身に返しの残るものをⅠ－A類、返しの無いものもしくは蓋の変形と思われるものをⅠ－B類とする。次に底部が平坦で口縁の立ち上がりが急になるものをⅡ類とする。内器面に沈線が入り、口唇部がやや内傾するものをⅢ類とする。これは器壁が丁寧に仕上げられ、赤採されている。器口が低くなり、皿に形状が近くなったものをⅣ類とする。これも赤採するものが多い。この中にはさらに体部の内外面、底部に暗文を施すものがあり、それをⅣ－B類とし、それ以外をⅣ－A類とする。それぞれ微妙な変化はあるが、それ以上分類しない。

・埦

古墳時代からの大型の埦の伝統を引くものをⅠ類とする。鉢の小型にもみえる。須恵器からの影響を受けたと思われる高台を持つ埦をⅡ類とする。これも高台の形態変化や口径・器高の変化があるが、ここでは出土数が少なく、これ以上細分しない。

・高坏

器壁に磨きを施す丁寧な作りのものをⅠ類とする。脚部が短く縦のヘラケズリがはいり、作りがやや雑なものをⅡ類とする。完形になるものが少なく、これ以上分類しない。

・皿・盤

形態的に類似し、器高がやや深く底径・口径ともに小型のものを皿とした。器高に対して口径の大きいものを盤とした。この盤は、丁寧な仕上げのものが多く、赤採されている。

・甑

底部から口縁部までほぼ直に近い形状のもので底部が大きく穿孔されているものがある。甑の把手と考えられるものは多いが、全体の器形がわかるものはまれである。したがって、これ以上分類しない。

・甕・鉢

甕は古墳時代からの流れに従うもので、古い段階では胴部の張りが強いが、徐々に張りが少なくなり、口縁部径が最大でほぼ直に降りてすぼまるようになる。調整も単純なハケと内器面の縦ハケへと変化するようである。また、大きさもそれほど違いがなくなるようで、煮沸具として一定の方向になり消滅するようである。鉢は甕と同様に古墳時代からの伝統を引き継ぐものと考えられ、須恵器との関係から徐々に須恵器に変わっていくようである。出土数も少ない。

以上のように基本的に土師器は古墳時代からの伝統を引きながら、徐々に古代の遺物として変化していく。ただ、古墳時代から古代に至る変化をきちんと分離することは不可能であるが、坏のように古墳時代的なものから明らかに古代律令制の下で作られたものには違いが存在し、古い段階では地域的な傾向が強かったものが、律令制の規範に則ったものへと変化していく様子がうかがえる。その変化を層位的に確認することは

できなかったが、先に述べた須恵器の変化と連動しながら、編年することはできそうである。須恵器でも述べた一括性のある遺構で考えられる。例えば、一般的な編年に従えば、4SX038から出土した須恵器・土師器は7世紀後半から～8世紀前半のものが大部分である。下位は4SX049の古墳時代前期～中期の遺物と混じる。これを詳細に検討すれば、古墳時代から古代に至る土器の変化をつかめよう。ただ、溝状の遺構であるため撹乱が生じているのも事実である。これらの遺構は切りあい関係になる部分があるのを調査過程で確認している。

イ）編年について

出土資料をもとにここで、古墳時代末から平安時代に至る土器編年作業を考えることができそうである。しかしながら、確実な一括的資料が出土した遺構は少なく、柳町遺跡独自の編年案を提示できるような結果が得られなかった。熊本ではこれまで古代の遺物の変遷については研究が重ねられ、大宰府の編年や各地の窯跡調査によって、さらに網田氏の精力的な活動により大枠は固まりつつある[註7]。それらに従う限り柳町遺跡の遺物の傾向も変遷は大差はない。ただ、近年大宰府での遺構と遺物の出土状況の詳細な検討がなされる過程で実年代に対する見直しも図られている。そのとき本遺跡の出土資料の位置づけも変わるものと考える。特に7世紀～8世紀にかけての遺物については、同時期の遺物が出土し、木簡まで出土した鞠智城跡の出土遺物との関連性も指摘されているので、詳細な検討はさらに今後必要となろう。

註7　網田龍生「奈良時代　肥後の土器」『先史学・考古学論究Ⅰ』、1994年、龍田考古会
網田龍生「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ』、2003年、龍田考古会

c　木製品

今回の調査では、この時期の木製品は出土数が少ない。井戸跡と溝状遺構からの出土がほとんどである。

井戸跡からの出土品として目立つものとして、4SE017や5SE059の井戸側材や井戸枠材がある。この他に4SE017や5SE019から出土した横櫛がある。材はすべてイスノキである。この他5SE059から出土した半裁し、中を刳り込まれたヒョウタンと棒状の木製品は組み合わさって柄杓として使用されていた推定した。

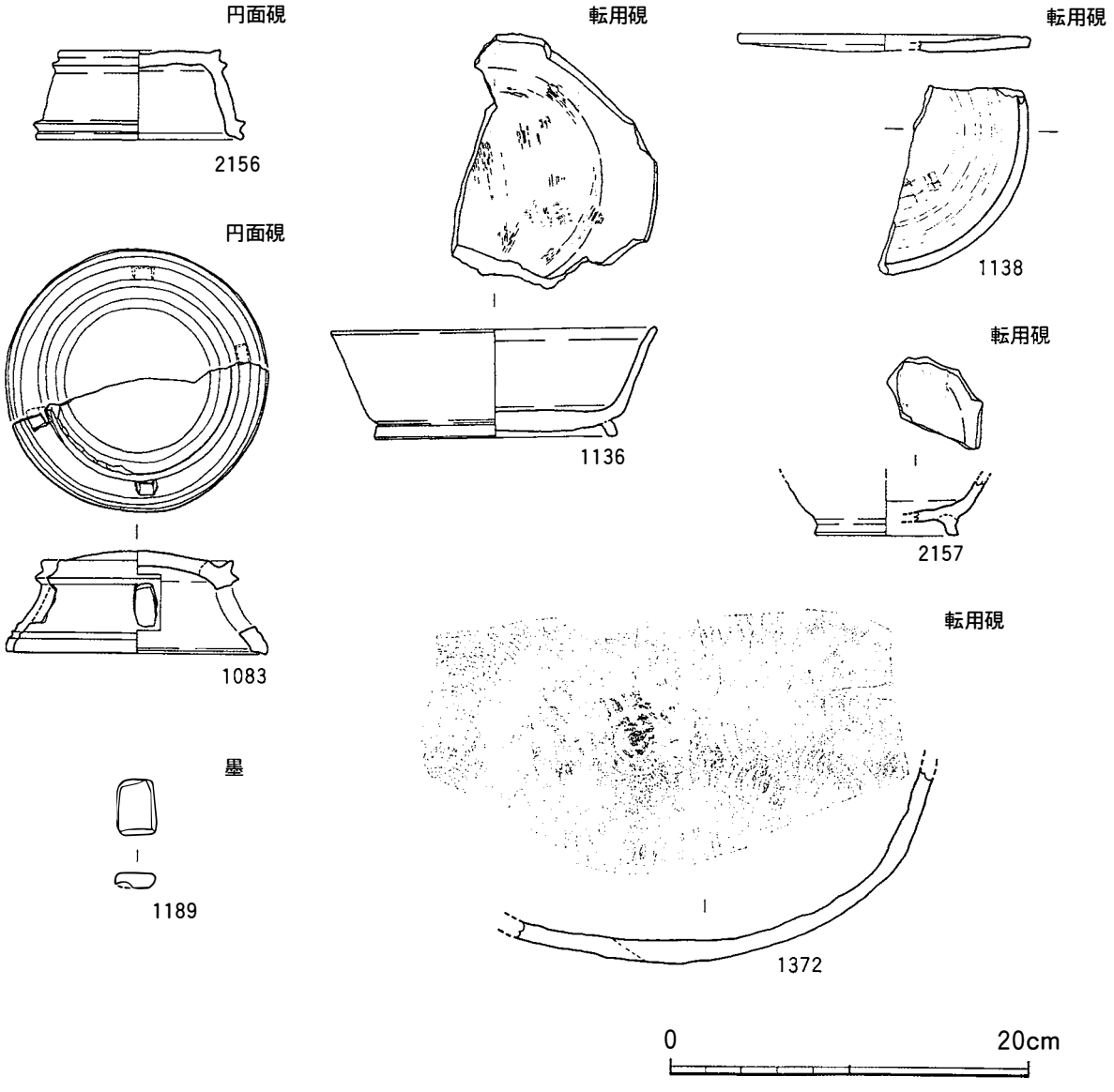
4SX038から出土した1480は、用途不明のものである。糸巻き具に類似するが、一般的に見られる糸巻きとは異なる。一木を加工しているもので、中心に軸穴があり、四本の突起もしくは差し込み部が上下にみられ、他の部品と組合わさって道具となると考えられる。軸があり、しかも円形の穴である点を考慮すれば、この部材は回転を伴う道具と関係する可能性が高い。糸巻き具の他にはロクロの部材と考えられなくもない。この場合のロクロは土器製作に関わるものと木製品に関わるものとがある。ただ、これだけでは何とも不明確であるため、今後の類例を待ちたい。

他に顕著なものとして、掘立柱建物跡の柱跡内から出土した柱木の最下部が残存していた。腐食しているものが多かったが、4SB034から検出した柱材は直径が16cmを測るものがあり、掘り方がほとんど同様であるので柱はこの大きさとそう変わらないと考える。

d　墨・硯・小刀・水滴

これらの遺物は主に調査Ⅶ区・Ⅷ区で出土している。硯は住居跡から、墨は井戸跡から、小刀は住居跡から、水指は井戸跡から出土している。硯は円面硯が2点、転用硯が確認できたもので4点の出土を確認している。転用硯はこの他にも出土している可能性がある。

まず、井戸跡5SE019の底面付近から出土した墨1189について述べる。この墨は、使用されていること、井戸に入り込んだ後の井戸水への溶出、井戸の埋没後の水位の上下などによりかなり摩滅が進んだ可能性があり、本来の形状は不明確である。ただ、使用していたと考えられる下部の摩耗痕がしっかりしているとこ



第365図　硯・転用硯・墨集成図

ろから、現在の状況とそう大きく本来の形状が変化したとも考えられない。現状では縦長3.2cm、横幅2.2cm、厚み0.8cmを測り、やや下部から上部に向かってややカーブしながら狭くなる傾向がみられる。下面は使用により研磨されたようになっている。さらに、下面自体が側面の縦方向に対し、やや斜めとなっており、使用方法が想定できる。

大川原・山路（2003）[註8]によれば、古代の墨の形態は、舟形（A型）、篦形（B型）、筒形（C型）に大きく分けられるという。A型は、身部が張り、端部がすぼまる舟形を呈し、凹部が大きく、深く開く。A1型とA2型に分けられ、A1型がA型でも整ったもの、A2型はA1型が変形したものである。B型は、身部と端部の幅に差がなく篦形を呈し、側面厚もA型よりも薄くなる。凹部が小さく浅くなる。B1型とB2型に分けられ、B1型は形態が凹部を除く表面と裏面が単に平坦であるもの、B2型は端部が反り返るなどB1型が変形したものである。C型は筒形を呈するものである。これらの形態分類は、奈良の正倉院の伝世品や、各地の遺跡出土のものから導き出されてきたものである。この他に各形態の特徴として、A・B型とも外側に張り出し、裏面は平坦である。A型・B2型の縦断面で、端部がやや反る。B型は凹部の押圧以前に、

墨の表面を押圧して形態を扁平にする。端部の平面が丸みを帯びるので、筒形のものを押圧したのであろうとされる。そして、時代的な傾向として、A 型は９世紀以降の伝世・出土事例がないことから、古代の墨は９世紀以降 B 型が主流となるとし、さらに墨の成形過程の手間のかけ方から、C 型→A 型→B 型という変遷が考えられるとしている。

このようなことを踏まえて、本遺跡出土の墨をみてみると、残欠ながら分類的には B 型に含まれる可能性が高い。さらに B 型でも B１型に入れられるようである。供伴すると考えられる遺物は少ないが、外底面に暗文を付けた土師器坏や、外器面にミガキの入る高台付き埦があり、９世紀末のものと考えられる。したがって、この墨もこれらの遺物と供伴すると考えれば、ほぼ想定時期と違いは少ないようである。

次に、この墨の生産地、製作方法、どこで生産されたのか、どのようにして製作されたのか、また誰が使用したのかなどの課題について述べる。

平安京では、延喜式などによれば官営の工房である図書寮工房で生産されているようである。この他、平城の北、木津川の上流で、恭仁京付近の和豆貨（和都香）という場所や播磨国（播磨国衛）の工房などが、正倉院文書に記録されているという。また、九州の大宰府管内でも直営工房があったようで、最澄（伝教大師）帰朝途中に、そこに立ち寄って筑紫墨三丁をもらって上京した記録がある。また、奈良朝末期に始められた事が延喜式の年料別貢物に明記されている。地理的なことや肥後が大宰府管内であることや、本遺跡が官庁の一つという想定を考慮すると、大宰府直営工房の製品で、管内に配布されたものという見方が妥当であろう。

墨の原料は煤と膠である。煤には、菜種油などを燃やしてできる油煙と、松脂などを燃やしてできる松煙がある。当時の煤は掃墨（松煙）であったようである。膠は、動物の皮や骨などに含まれるタンパク質で、普通ゼラチンと呼ばれているものである。膠は、温水によく溶け、接着力もあって、冷やすと固まる性質がある。煤も膠も独特の臭いがあり、練りあわすと少し臭くなるので、この臭いを消すのに現在は香料を入れている。この煤や膠は、漆や絵具と共に絵師や仏像の仕上師などによって使われていた事は、正倉院文書にみられ、百万塔陀羅尼経の印刷にも使われたことも知られているので、すでに奈良時代には墨は造られていたと思われる。今回出土した墨について科学的分析を行っていないため、使用された煤が油煙なのか、松煙なのかは不明である。

この墨が広く使用されるのは、律令体制の整備に伴い、公文書や木簡などにおける文字の使用が広域に必要になってきたこと、紙の普及などに伴い、墨を公的に造られるようになってきて墨の生産量が急激に増えてきたためであろう。熊本では、当時の古文書は残っていないものの、柳町遺跡はもとより多くの古代集落跡から墨書土器という形で、墨が使用された状況を窺うことができる。墨書土器の出土状況、墨書土器の形態により使用開始の時期が推定はできそうである。

次に、墨を使用する際に必要な硯のことについてまとめる。硯には、円面硯・猿面硯、丁字硯などのようにもともと硯として造られたものと、本来は別のものであったものが、硯の不足を補うためか、硯として使用された転用硯に分けられる。

まず、硯として造られたものをみていく。本遺跡では２面の円面硯が出土している。円面硯は、脚台部の形状により獣脚硯・蹄脚硯・圏足硯に分類される。出土した円面硯はいずれも須恵質の圏足硯で、脚台部に方形の透かしを持つ圏足のもの（1083）と透かしを持たない圏足のもの（2156）とに分かれる。透かしは掘孔が長方形を呈する。一応２分類して記したが、２点とも全体の半分もしくはそれ以下の残欠であるため、特に透かしを持たない圏足のものとした2156にも透かしがあった可能性は否定できない。形態的には2156が1083に比べ、小型で、一回り小さい印象を受ける。ただ、1083は圏足に比して高さが低いのに対し、2156は圏足に対しての高さの比は高いのでより締まっている。一般的に奈良時代後半にはいると円面硯は小型化す

るといわれ、2156はその傾向がみられ、時代的には奈良時代後半のものと考えられる。1083はややそれを遡るとは思われるが、形状がやや崩れ、透かしもきっちりしていないので、そう大差のない時期の所産であると考える。

次に転用硯について述べる。本遺跡で転用硯としたのは、1136・1138・2157・1372の4点である。いずれも他の土器を転用したもので、高台付坏もしくは埦が2点、扁平な蓋が1点、平瓶の破片が1点である。この他にも転用硯である可能性があるものがあったが、明らかに転用硯と認められるもののみを取り上げた。特に破片が小さいものや使用期間の短いものは不明確である。1136は、高台付坏の内器面を使用しており、底面がかなり使用により磨研されている。さらにわずかに墨痕がみられる。この土器は本来食器として使用されていたものを上部の破損などがあったため途中から硯に転用したものであろうが、場合によっては、最初から硯として使用したのかもしれない。同じことは2157にも言える。これも小破片のため、全体は不明確であるが、内器面底部に墨痕と磨研がみられる。1136と2157はやや時期差があるようである。1138は扁平な蓋の内器面を使用したもので、裏返しにしようしたものである。やはり使用面は磨研され、墨痕も薄く残る。さらにその面には、墨書もみられる。文字は「田村(カ)…」とあり、村の名とも読めるが、人名とも考えられ、使用した人物の名である可能性もある。以上のものは転用とはいえ、土器の器種による制約から墨が漏れるような状態では使用できないので、坏・埦類にあっては底部と、体部のある程度の残存、蓋にあってはほぼ全体の残存のように、最低使用に耐える確保された部分があることが前提であろう。それに対し、1372のような平瓶や大甕の破片は、一定の大きさと安定性があれば使用できそうである。1372は、使用されているのは全体の一部で、使用部分のみが研磨され、当て具痕が潰れ、薄く墨痕も残る。この土器が使用されたのは、本来の器種がある程度破損し、硯面として確保できる一定の広さのある状態で使用したのであろう。体部上位があった状態では使用しにくいであろう。

これらのことから、転用硯も使用される器種により、大きく坏・埦などのように器種本来の原形がより残っていたものがよいものと、大甕片などのように器種で十分使用できるものとに分けられそうである。今後、転用硯を見分ける際に注目する点ではある。

次に小刀であるが、これは刀子である。この道具はものを切ったり、削ったりするものである。この当時には木簡などの記述内容を訂正するためなどにこの刀子が使用されている。すなわち書き損じた部分を削ることで消去している。本調査区においては、刀子の出土はほとんどなく、刀子に似たものが1点出土した。また、木簡様のものは出土しているが、文字を書いたものはない。貴重品のため出土が少ないか、使用頻度が少なく、必要としなかったかのどちらかであろう。ただ、木簡様の木製品もあるので刀子も使用したと考えられ、ごく一部の部署で使用され、破損しても大事に使用していたために出土数が少ないかもしれない。

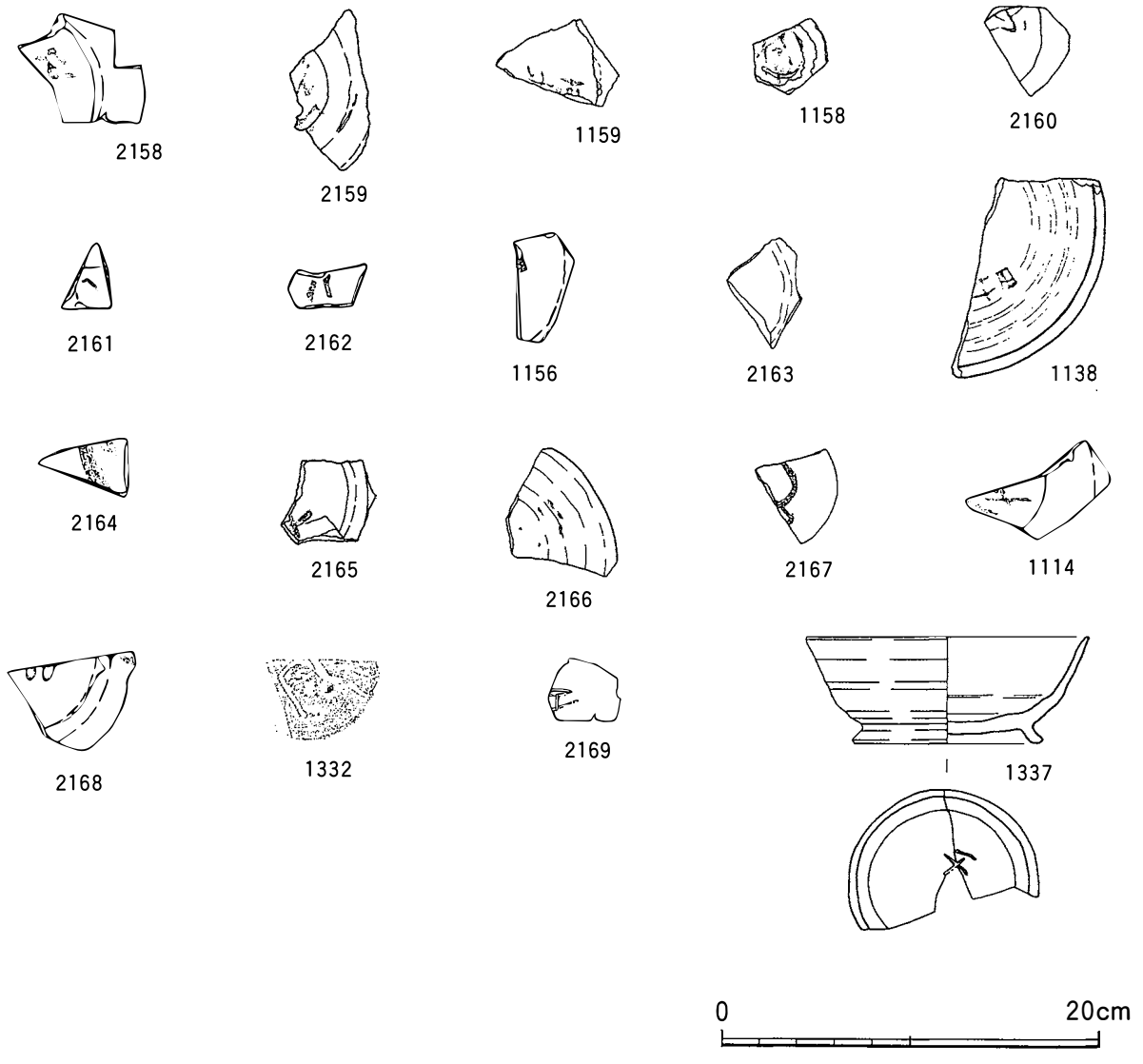
最後に、水滴について述べる。この道具は、硯を使用する際に水の補填をするために使用され、近世には特化した容器が造られている。しかし、水を補うための道具であれば、他の容器のものでも代用できる。一般的に水滴としての役割を担うものとしては、平瓶が上げられる。ただ、ここで敢えてこの道具を取り上げたのは、本遺跡調査Ⅶ区の井戸跡4 SE017の井戸枠内から出土している小型壺1150を取り上げるためである。この遺物は、井戸跡の廃棄後に埋め戻しが行われた際の埋土中から出土したものである。形態的には頸部より上部は欠損しているものの、瓶の小型品のようである。

註8　大川原竜一・山路直充「古代の墨」『古代の陶硯をめぐる諸問題－地方における文書行政をめぐって－』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所、2003

e　墨書土器・刻書土器

先の墨・硯などと関係するのが墨書土器である。

墨書土器と確認したのは16点である。土師器・須恵器の区別なく書かれているが、いずれも小破片が多く、



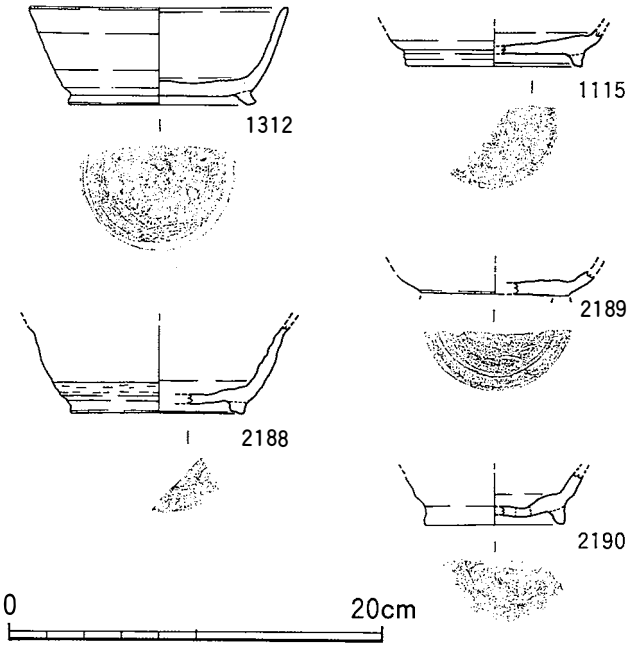
第366図　墨書・刻書土器集成図

文字を明確に読み取れるものはわずかである。その中では、先に述べた1138の「田村」があるが、同じ文字ではないかと考えられるのが1159である。文字列の中央部付近で半分に割れた残欠であるため、確実ではないが、残った部分からそのように見える。これが地名なのか、人名なのか不明であるので一概には言えないが、地名ならこの地域の性格を示すものであろうか。「柳町１」においては、「大園？」と読める墨書も出土しており、人名との見方もあるので、「田村」も人名ともみられる。今後も墨書土器資料の蓄積により、玉名における古代の遺跡の状況をつかむうえで大きく意味をもつと考える。

次に刻書土器である。確認したのは３点のみである。ヘラ状の工具で彫り込まれていたもので明確な文字を確認したのは、1337の「千」である。その他は字画の一部であるのか不明である。これらの刻書は、土器の焼成前に彫りこまれていることから、焼成後に文字を書く墨書を異なる発想で書かれている可能性があるが、それがいかなるものかこの出土例だけでは不明である。

f　「爪形状圧痕」のある土器

ここでいう「爪形状圧痕」というのは、高台付坏身の高台内側にヘラ先または爪で施された圧痕のことである[註9]。これは整理中実測図作成中に気づいたもので、製作時に付けられたもので、一つの特徴を示して



第367図　爪形状圧痕土器集成図

いる。点数は少なく、確認したのは５～６点で、そのうちの４点を図示した。いずれも高台付き坏の外底面、高台内にある。これらの圧痕については、製作技術や工人までを含めた製作集団と関係することが指摘されている。

この遺跡で出土したものはほとんどが、高台に沿って、ヘラ状工具の先端で描かれているようである。大きくは、小刻みに連続して鋸歯文状に描くものと、一つ一つが間延びして弧状に描くものとに分かれるようである。外底面調整され、高台を貼り付けた後で、乾燥以前に施されている。外底面のヘラ切りによって生じた痕跡を切る形で巡る。破片であるので円状に巡るようにみえるが全体は不明である。

ここで出土したうちにどのような関係があるのか今後の課題である。

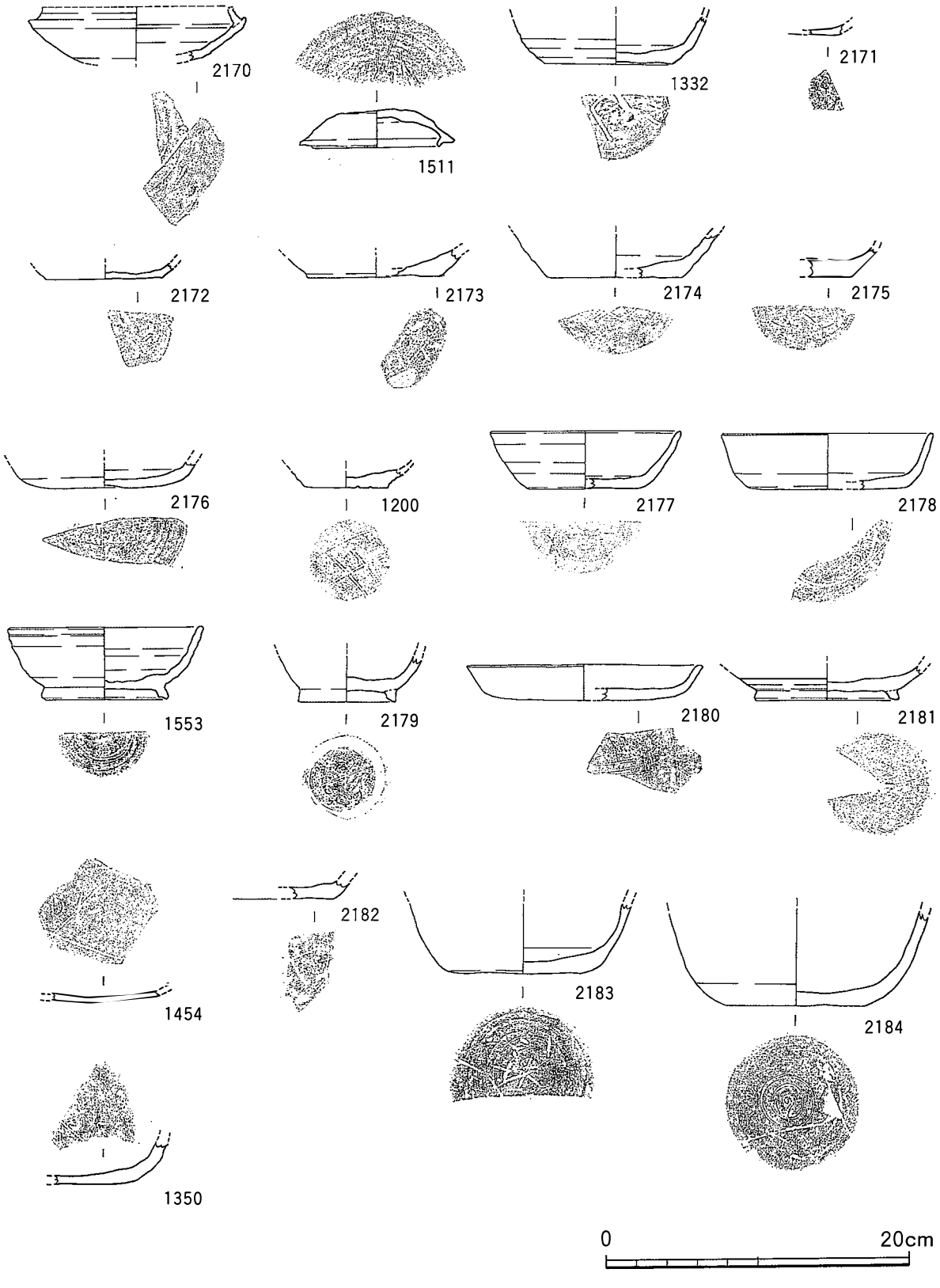
出土数は少なく、この遺跡から出土した須恵器の坏の全体数からみればごくわずかである。もしこれが製作集団の特徴を示すものであれば、非常にまれなものといわざるを言えない。この圧痕がみられた須恵器片は高台形態や全体の器形からさらに分けられそうである。ただ、点数が少なくここでの明確な細分は不可能である。

註９　同志社大学校地学術調査委員会「第４章　考察　第１節いわゆる「爪形状圧痕」について」『マムシ谷窯址発掘調査報告書　－同志社大学田辺校地内所在遺跡の発掘調査Ⅱ－』1983

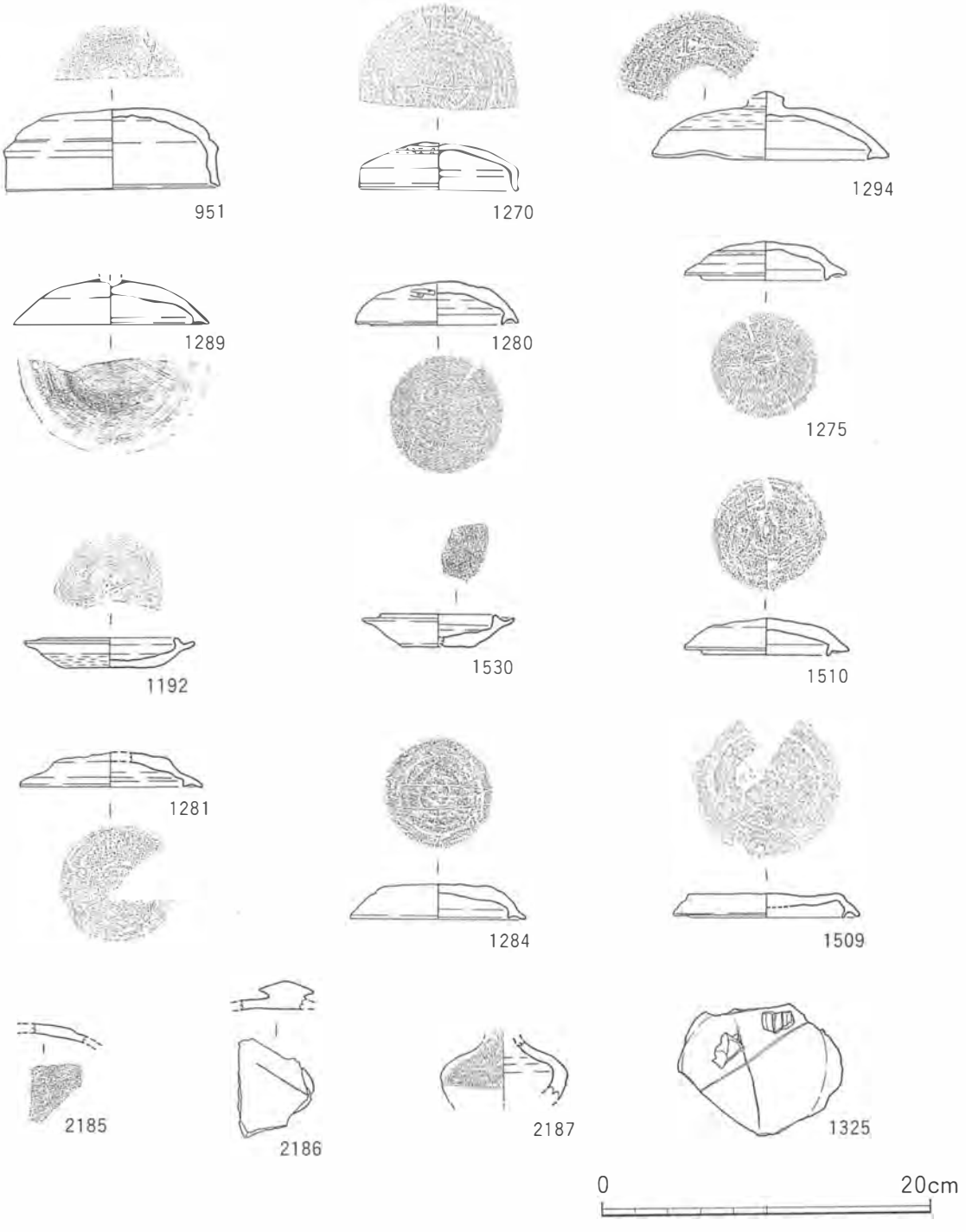
g　ヘラ記号のある土器

この遺跡から出土したヘラ記号のある土器として、16点を確認している。大部分は一角の「一」のようなもの、「×」のようなものが大部分である。ただ、一点に「大」という文字と考えられるものがあった。

ヘラ記号は、内器面にあるものと、外器面にあるものとに大きく分けられ、内器面は内底面、もしくは内天井部分に彫られる。外器面は大部分外底面、外天井部にある。この刻まれ方の意味するものがあるのかは不明である。ただ、上面から見やすいということはあるのかもしれない。焼成前に彫りこまれることを考えれば、窯入れもしくは窯出し後の作業に関係するものかもしれない。点数は少なく、また記号自体に統一性がないので、その性格について言及することはできない。ただ、この記号は誰かに示すために書かれたと考

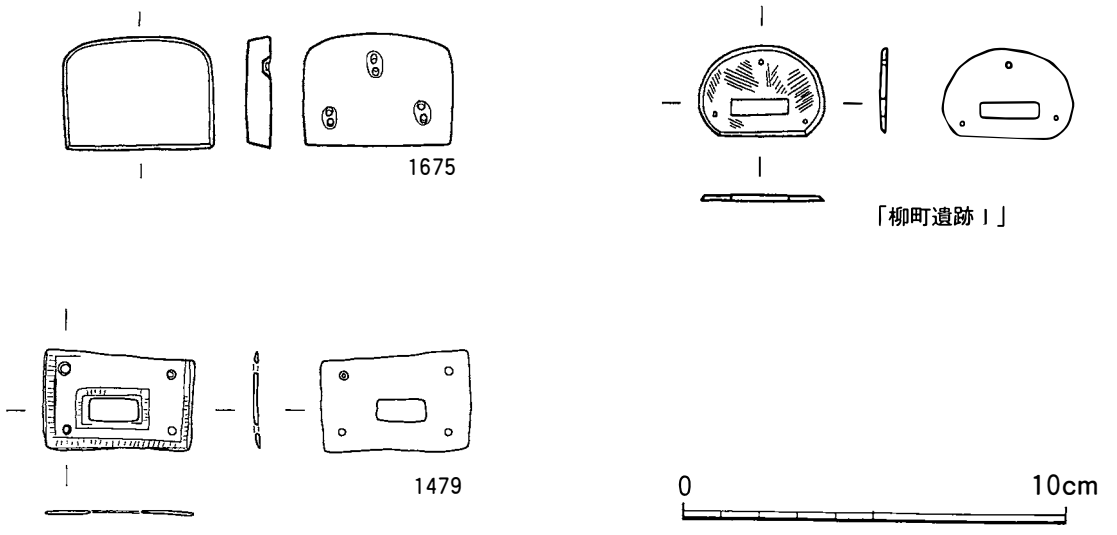


第368図　ヘラ記号土器集成図



第369図　ヘラ記号土器集成図

える。それが窯の主、生産者、使用者などの別を示すためなのか不明であるが、いわゆる消費地における利用法等まで考えられていた可能性はある。



第370図　柳町遺跡出土銙具集成図

h　銙具について

この遺跡からは銙具が３点出土している。「柳町１」ですでに報告済みの銅製の丸鞆が１点、今回報告した調査Ⅶ区出土の石製の山形（1675）、調査Ⅷ区の４SX038の上面で出土した青銅製の方形のもの（1479）の２点である。

『柳町遺跡Ⅰ』で報告した銅製丸鞆は大畦状遺構の形成土中からの出土である。この銙帯は形状から裏金具である。全長2.3cm、横幅3.5cm、最大厚１mm、本体下部の透かし孔は３mm×14mm を測る。表面には浅い条線が走り、漆膜が焼き付け塗布されて黒色となっている。形態は丸鞆である。出土場所は１号大畦の付近である。１号大畦は「敷粗朶工法」「敷葉工法」により構築され、上幅で2.15m、確認長32.0m を確認された。この付近ではこの他にも青銅製耳環や鉄鏃、ほぼ平安時代前期の土器類、墨書土器などが出土している。移動式カマドの破片も出土している。この銙具もこの時期であろう。

1675は石材が凝灰岩の一種と考えられ、横幅が４cm、縦長が３cm、厚みが８mm ほどを測り、形態は山形である。出土層はⅤ層の範疇であるが、Ⅳ層とⅤ層が混じるような状況にあり、洪水の影響を受けている層中であるため、原地点からは移動していると考えられる。遺物の接合状況から洪水の流れを想定すると、Ⅶ区からⅧ区方向の南西から北東へ地形の比較的低い場所を流れてきたものと考えている。したがって想定だけでいえば、Ⅶ区の掘立柱建物跡群に関係する可能性がある。現在熊本県内の石帯の出土数は公表されているものだけで16点あり[註10]、その中に「山形」の出土はないようである。形態的には蛇尾にも似るが、他の出土例から「山形」とした。本体裏側には潜り孔が裏面に２対３カ所空いている。

1479はかなり腐植し、表面の剥離が進み、残存状態は悪いが、表面を詳細に観察すると金箔がわずかに痕跡として残るのが分かる。ただ、長方形であるものの上辺は斜めになっており形が歪み、全体的な作りも雑な印象を受ける。表面に毛彫り線もかなり雑である。厚みは薄い。形状は長辺が４cm、短辺が2.3～2.6cm、厚みが１mm を測る。四隅には鋲孔と考えられる４つの孔があけられている。これまで県内で出土している他の帯金具と比べると、随分と調整や仕様においてやや劣るようにみえる。

この遺物に類似したものとしては、三重県の斎宮遺跡で出土している帯金具がある。この遺物は斎宮跡西部の中垣内地区で行われた第137次調査で出土し、長辺４cm、短辺２cm を測る方形のもので、長方形の透かしがある。表面には鍍金が施されていた。外周縁には二重に線が巡らされ、線と線の間を等間隔の短線で

刻んでいる。また、透かしの周囲にも一重に線が巡らされている。四隅の裏側には、革帯につけるための鋲が4mmほど残っている。調査機関は出土した当初、五位以上の官人の帯飾としていたが、後に馬具の飾り金具としている。ただ、鍍金が施されるので特別の儀式用の礼装に供されたと考えられる。『続日本後紀』承和9年（842）の五月五日の競馬の節会の馬飾りに五位以上には金銀製品を使うことを許すとされており、決して単なる馬飾りということにはならないという[註11]。

柳町遺跡の金具を再度確認すると、上記の三重県出土例に酷似する。形態的にはほぼ同型と考えられ、表面の意匠も毛彫りによるもので、柳町遺跡のものがやや雑な点を除けば、良く似ている。したがって、この柳町遺跡のものも三重県のものと同じく、馬具の金具とした方が良いようである。表面にわずかに金箔が残るのが確実ならば、三重県例と同じものと考えられ、五位以上の官人の乗る馬飾りの可能性が出てくる。

このように柳町遺跡では、官人の用いた腰帯飾り（石帯、銙帯）が出土し、さらに馬飾りの金具も出土している。腰帯等は、出土した土器類が奈良時代から平安時代初期のもので、他の調査例からもこれらの土器類に伴うと考えられる。そこで、奈良時代の官人が用いた腰帯の制度をまずみてみる。

「延喜式衣服令」によれば、腰帯は金銀装と烏油装とにわかれ、前者は文官五位以上、武官の衛門督と佐、兵衛督が締め、後者は文官六位以下、武官の尉・志・兵衛、主帥が締めるという。無位官人は烏油腰帯であった。2種の腰帯はいずれも金属製の銙を革帯にとりつけたいわゆる銙帯であり、前者は銙に金銀を鍍金し、後者は銙に黒漆を塗ったものとされている[註12]。

このような銙帯は、『扶桑略記』慶雲4年（707）の条に「天下始用革帯」とあることに始まり、その後官人の腰帯は一貫して銙帯であったが、延暦15年（796）になって変化した。

『日本後紀』の延暦15年12月辛酉条に、「禁銙帯以支銭也」とあり、『日本後紀』の弘仁元年9月乙丑条に、「又去大同二年八月十九日下弾正台例言、雑石腰帯。画飾太刀…等一切禁断者、臣等商量雑石易得、造売多人、至于著用、亦復難損。銅銙具者、以漆塗成、動易剥落、今難易各異。価直是同、為弊一也。…悉聴用之」とある。すなわち、延暦15年には銅銙を廃して石銙にかえるが、大同2年（807）になって再び銅銙にもどし、弘仁元年にまた石銙（雑石腰帯）に変更したとされる。この改廃の理由としては、平城上皇の復古政策の一環として大同2年に変更され、それが嵯峨天皇によってまた旧に復したとされる。制度上は、延暦15年から弘仁元年の間に銅銙から石銙に変化したとされる。ただ、『日本紀略』延暦4年（795）の「聴参議以上着白玉帯」や、『日本後紀』延暦18年（799）の「勅、玳瑁帯者先聴三位以上著用、自今以後五位得同著」などの記事から、延暦以前から高官貴族の間では、玉や玳瑁で飾る腰帯が流布していたようで、延暦年間の玉石帯への変更は、一般の流行を追認することにあったと考えられていた。すなわち、7世紀初頭に革帯が始まり、それには銅銙が普通装着されていたが、8世紀末になると石銙が付くようになると制度上は考えられるが、実態的にはそれ以前にも石銙の使用があった可能性もあるということである。

ここで、柳町遺跡で出土した銅銙、石銙について主に網田（1999）を参考にみてみる。

柳町遺跡調査で出土した銅銙は裏金具で、漆膜が施されていることから、6位以下の官人が用いた烏油腰帯であろう。裏金具なので異なるものが表金具に付いていた可能性があるが、他の事例からすると同形のものが付いている場合があるので、烏油腰帯の銙とみてよいと考える。この資料について網田氏は、透かし孔が小型で、鋲が細く、器厚が薄いことなどの形態的な特徴からⅡ期（8世紀中葉）のものと想定している。

1675は石帯のうちの「山形」であり、形態上底面は巡方に似ているので、巡方の形態に準じて時期を想定すると、やはり同様の時期を想定できる[註13]。

このような銅銙、石銙の出土は、この遺跡の性格を語るうえで大きな意味を持つと考える。出土状況は包含層や流出土中などからであり、決して良好であるとはいえない。ただ、「柳町1」で報告されたような大畦を形成する古代の遺物を含む層は、調査Ⅶ区の掘立柱建物群を検出した箇所の包含層と共通すると考えら

れる。大畦の造成土がⅦ区からの搬出土とすれば、掘立柱建物が形成された時期もしくはそれ以後に使用されたもので、出土遺物は掘立柱建物群との関連性を考えることができる。したがって、他の出土遺物とも併せ、掘立柱建物群が何らかの官衙的な施設としての証拠の一つとできよう。

註10　網田龍生「熊本県から出土した銙具の集成と考察」『先史学・考古学論究』pp. 187～210、1999年、龍田考古会

註11　斎宮歴史博物館のホームページ（http : //www.pref.mie.jp/saiku/hp/hakkutu/137ji/137ji.htm）による。斎宮跡西部の中垣内地区の第137次調査で、奈良時代前半の竪穴住居や土坑が重なっている部分から、本遺跡出土の金銅製金具と非常に類似したものが出土しているという。

註12　「衣服令」ではつぎのように規定する。

	王・親王	諸臣一位～五位	諸臣六位～初位	衛府督・佐・兵衛督	尉・志・兵衛・主帥	衛士
朝 服	金銀装腰帯	金銀装腰帯	烏油腰帯	金銀装腰帯	烏油腰帯	白布帯
礼 服	条帯		烏油腰帯			
制 服					無位一烏油腰帯	

註13　田中広明「律令時代の身分表象（Ⅰ）－帯飾具の生産と変遷－」『土曜考古第16号』p67～124、1991、土曜考古学研究会

第５節　中世以降の遺構と遺物

（１）遺構

・池状遺構

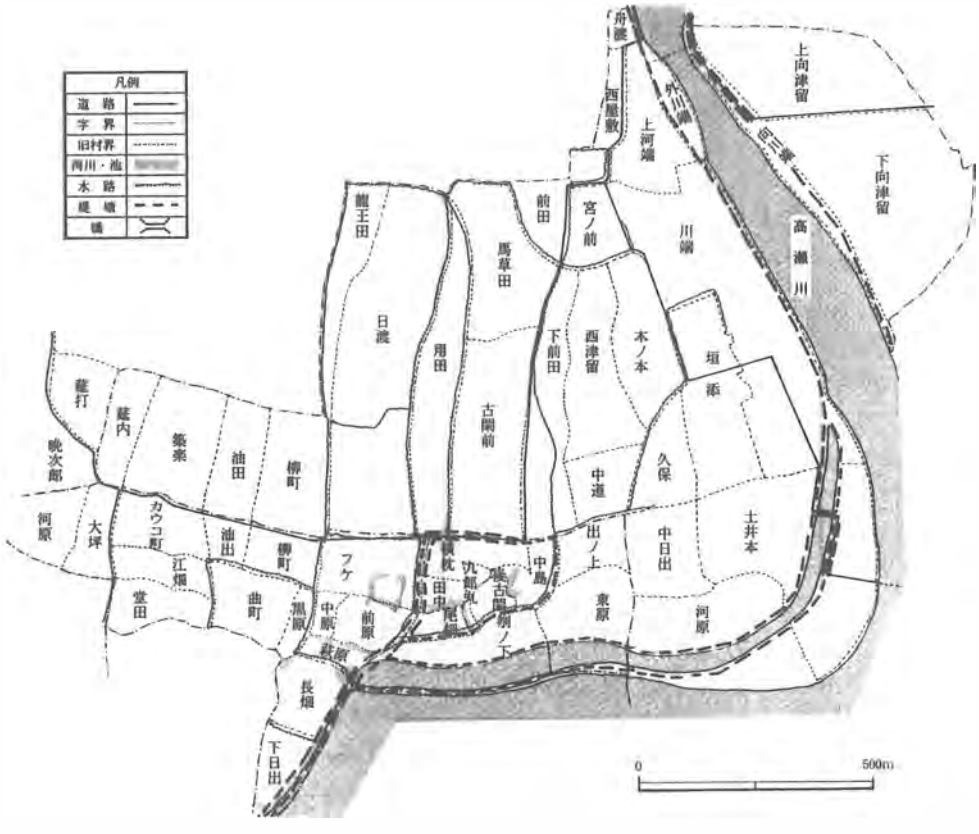
この遺構については第３章の中世以降の遺構のところで述べたように中世まで遡る遺構ととらえている。ただ、歴史的にどの位置に置くかは明確ではない。池状遺構としたが、洪水などの自然の力によって抉れたためにそこに泥が堆積し、深田となっていた場所でもある。

・掘立柱遺構

明確に一棟分としては確認できず、また、遺物の混入もなく、時期の特定も不可能である。検出は近世土を剥いだ面からできたので、中世末ごろのものであろう。

・Ｘ－２区の溝状遺構群

これらの遺構群のうち溝状遺構は、中世末から近世の初頭の遺物を含み、初期の溝はかなり大きいものであったと思われるが、一部を検出したに過ぎない。この初期の溝状遺構である６SX004・６SX005は、相互に平行関係にあり、両遺構とも最下面の出土遺物から少なくとも17世紀初頭には存在したと考えられる。また出土した遺物はその出土状況から調査外の西側方向から落とし込まれたことが読み取れ、その西側部分にそれらの遺物を使用し、廃棄した主体者が居たものと考えられる。そこに屋敷等の施設があった可能性は高い。ちなみにこの場所は現在の小字は「尾畑」であるが、宝暦14年の検地帳類に記載された下げ名「尾屋敷」の変わったものと考えられる。それは現在周囲の小字として残る「田中」・「九郎丸」・「中嶋」などがいずれも「田中屋敷」・「九郎丸屋敷」・「中嶋屋敷」と記されていることから推定できる[註14]。現在の「尾畑」が「尾屋敷」ならば、そこが屋敷跡であった可能性はさらに高くなる。その屋敷の周囲に巡る溝としてこの６SX004・６SX005があったといえよう。さらに出土している遺物の中には、瑞州窯産の大皿や、肥前



第371図　柳町遺跡周辺字図

系の陶磁器も多く、この場所にこれらを使用できた人物もしくは扱うことのできた人物がいたことを示唆しており、居住場所もあったと想定できる。

註14　『玉名市史』資料篇２　地誌、玉名市、1992

（２）遺物

中世の遺物としては、青磁・白磁・中世土器が出土している。大部分は流れ込みと考えられるが、先の遺構からも出土している。集落は遺物の出土量から考え、やや離れたところの可能性がある。

近世になると、先に述べたように中国産の陶磁器や肥前系の陶磁器が出土し、一方で土師質土器や瓦質土器など日常雑貨類も多く出土する。遺物の出土傾向は徐々に人々の居住状況によるものか新たな微高地の形成した場所へと移動・拡散していく。それは集落の発展を示すものかもしれない。

第６節　まとめ

熊本県で調査した玉名バイパスに係る「柳町遺跡」については、本報告書のまとめによって発掘調査は終了となる。６年間の現地調査によって様々な成果があった。縄文時代晩期から近世、さらに現在まで連綿とこの玉名平野で人々の生活が営まれてきたことが分かったことには大きな意義がある。現在の水田となっている土地の下や人々の居住するその下に、当時そこで生活した人々の生活痕跡が、住居跡や遺物という形で現在の我々の前に出現したのである。

ここでは最後に柳町遺跡の調査の意義と課題について箇条書きの形で簡単にまとめる。

（１）熊本県における低湿地もしくは低地性平野部遺跡の調査として代表的なものとなった。柳町遺跡以前に低地遺跡の調査はあったが、面積・期間・予算・調査方法の各方面でその後の同規模・同種の遺跡の基準と見なされた。

（２）低地性遺跡故に有機物の遺物が多量に出土し、熊本県の木製品文化を知る上で貴重な成果を上げた反面、それらの保存処理・維持管理の面で今後に大きな課題を残した。

（３）玉名平野の中で遺跡の形成されていく過程を追うための材料を提供した。縄文時代から近世・現代に及ぶ平野部の利用過程の一端をうかがうことができた。

（４）低地性平野というより沖積平野の調査は、丘陵地や高地性平野部の常識では計れない。考古学的な考え方に加え、自然地理学や地質学的知識、土壌学や生物学など多様な分野の応援が必要であり、今後の調査体制を考える上での課題となった。

（５）今後この地は現在の人々の足跡によって大きく変わり、今後の開発行為はこの遺跡の残された地下遺構に大きな影響を及ぼしていくことになろう。特に有機質の遺物は水位の変化により急激に失われていく可能性がある。それらを今後どう将来に残していくのか、大きな今後の課題である。

遺　物　観　察　表

表1　土器類観察表

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
10	1	Ⅷ区	縄文土器	深鉢	c－31G	－	－	－	－	－	－	－	－	－	沈線（口縁部２条）	17
10	2	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	Z.a－31G	－	－	－	－	－	ミガキ後ナデ	－	ミガキ後ナデ	－	沈線（口縁部）	17
10	3	Ⅷ区	縄文土器	深鉢	b－31G	Ⅴc層	－	－	－	－	－	－	－	－	沈線（口縁部）	17
10	4	Ⅷ区	縄文土器	深鉢	c－31G	－	－	－	－	－	ヨコナデ	－	－	－	沈線（口縁部６条）	17
10	5	Ⅷ区	縄文土器	深鉢	f－34G	－	－	－	－	－	貝殻条痕	－	ナデ	－		
10	6	Ⅹ区	縄文土器	深鉢	6 SX049	－	－	－	－	－	ナデ，条痕	－	ナデ			
10	7	Ⅷ区	縄文土器	深鉢	4 SX049	C層	－	－	(39.0)	－	貝殻条痕	－	－	－		17
10	8	Ⅷ区	縄文土器	深鉢	e－35G	Ⅴc層	－	－	－	－	－	－	－	－		17
10	9	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	Z.a－31G		－	－	－	－	ヨコ方向のミガキ	－	ヨコ方向のミガキ	－		17
10	10	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	5 SX040	－	－	－	(27.0)	－	ナデ	－	ナデ	－		17
10	11	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	c－34G	－	－	－	－	－	－	－	－	－		17
10	12	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	e－35G	Ⅴ層	－	－	－	－	ナデ	－	ナデ	－		17
10	13	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	5 SX040	E層	－	－	－	－	－	－	－	－		17
10	14	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	5 SX040	D層	－	－	－	－	ナデ	－	ナデ	－		17
10	15	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	5 SX040	E層	－	－	－	－	－	－	－	－		17
10	16	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	f－35G		－	－	－	－	ナデ	－	ナデ	－		17
10	17	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	5 SB018	半裁トレンチ	－	－	－	－	ナデ	－	ナデ	－		17
10	18	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢		砂層	－	－	－	－	－	－	－	－		17
10	19	Ⅷ区	縄文土器	甕	5 SX023	最下層	－	－	－	－	－	－	－	－		17
10	20	Ⅷ区	縄文土器	甕	c－31G	Ⅴc層	－	－	－	－	－	－	－	－	刻目文	
10	21	Ⅹ区	縄文土器	甕	6 SX506	床直上層	－	－	－	－	－	－	－	－	刻目文	17
10	22	Ⅷ区	縄文土器	甕	b－33G	－	－	－	－	－	－	－	－	－	刻目文	17
10	23	Ⅷ区	縄文土器	甕	b－33G	－	－	－	－	－	ナデ	－	ナデ	－	刻目突帯文	17
10	24	Ⅷ区	縄文土器	甕	5 SX040	E層E層	－	－	－	－	ナデ	－	－	－	刻目突帯文	
10	25	Ⅶ区	縄文土器	甕	4 SX049	2層	－	－	－	－	－	－	－	－	刻目文	17
10	26	Ⅷ区	縄文土器	壺	b－31G	－	－	－	－	－	ナデ	－	ナデ	－	刻目突帯文	
10	27	Ⅹ区	縄文土器	甕	6 SX049	－	－	－	－	－	ナデ，貝殻条痕	－	貝殻条痕後ナデ		刻目突帯文	17
10	28	Ⅷ区	縄文土器	甕	c－33,34G	Ⅴ層	－	－	－	－	ナデ	－	ナデ	－	刻目突帯文	17
10	29	Ⅷ区	縄文土器	小型甕	c－34G	Ⅴ層	－	－	－	－	－	－	－	－	刻目文	17
10	30	Ⅷ区	縄文土器	甕	5 SK032	－	－	－	－	－	ナデ	－	ナデ	－	刻目突帯文	17
10	31	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	a－32G	－	－	－	－	－	－	－	－	－		
10	32	Ⅹ区	縄文土器	浅鉢	6 SX049	－	－	－	－	－	組織痕	－	－	－		
10	33	Ⅷ区	縄文晩期～弥生前期土器	甕	5 SK036	－	－	－	－	－	ナデ	ナデ	－	－		17
10	34	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	b－32,33G	Ⅳ層	－	－	－	－	－	－	－	－		17
10	35	Ⅷ区	縄文晩期～弥生前期土器	甕	5 SX040	E層	－	－	－	－	－	ナデ	－	－		17
10	36	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	b－32,33G	Ⅳ層	－	－	－	－	ミガキ	ナデ	ナデ	ナデ		17
10	37	Ⅷ区	縄文土器	浅鉢	a－32,b－33G	－	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		17
10	38	Ⅷ区	縄文土器	深鉢	5 SX023	－	－	－	－	(7.3)	－	ナデ	－	ナデ		17
10	39	Ⅷ区	縄文土器	深鉢	d－34G	－	－	－	－	(8.8)	貝殻条痕	ナデ，組織痕	ナデ	ナデ	内器面に煤付着	17
10	40	Ⅷ区	縄文土器	深鉢	5 SX023	最下層，②層	－	－	－	9.3	－	ナデ	－	ナデ		17
10	41	Ⅷ区	弥生土器(前期？)	甕	5 SX023	2層	－	－	－	7.6	ヨコナデ	ナデ	－	ナデ	外底面に木の葉圧痕	
11	42	Ⅹ区	縄文土器	深鉢	6 SX049	3トレンチ	－	－	－	－	ナデ	－	ナデ	－	沈線（口縁帯２条）	
11	43	Ⅹ区	縄文土器	深鉢	6 SX049	3トレンチ	－	－	－	－	ナデ	－	ナデ	－	沈線（口縁帯３条）	

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
11	44	X区	縄文土器	浅鉢	6 SX049	—	—	—	—	—	ヨコ方向のナデ	—	ヨコ方向のナデ	—		
11	45	X区	縄文土器	浅鉢	g—40G	XⅢ層	—	—	(32.9)	—	ヨコ方向のミガキ	—	ヨコ方向のミガキ	ヨコ方向のミガキ		
11	46	X区	縄文土器	浅鉢	6 SX049	3 トレンチー	—	—	—	—	ヨコ方向のミガキ	—	ヨコ方向のミガキ	—		
11	47	X区	縄文土器	甕	6 SX049	—	—	—	—	—	ヨコ方向のケズリ後ナデ	—	ヨコ方向のケズリ後ナデ	—	刻目突帯文	
11	48	X区	縄文土器	甕	6 SX049	1 トレンチー	—	—	—	—	ヨコナデ	—	ヨコ方向のナデ	—	刻目突帯文，炭化物付着	
11	49	X区	縄文土器	甕	j—40G	XⅡ層	—	—	—	—	貝殻条痕	—	ヨコ方向のナデ	—	刻目文	
11	50	X区	縄文土器	壺	g—40G	XⅢ層	—	—	—	—	ミガキ	—	ミガキ	—	赤色顔料	
11	51	X区	縄文土器	甕	6 SX049	3 トレンチ	—	—	—	—	条痕	—	条痕(ヨコ方向のケズリ)	—	刻目突帯文	
11	52	X区	縄文土器	甕	6 SX049	3 トレンチ	—	—	—	—	条痕	—	ナデ	—	刻目突帯文	
11	53	X区	縄文土器	甕	6 SX049	—	—	—	—	—	—	ナデ	—	—		17
11	54	X区	縄文土器	浅鉢	6 SX049	1 トレンチ	—	—	—	—	—	組織痕のちナデ	—	ナデ	刻目文	
13	55	Ⅷ区	弥生土器	甕	5 SK067	—	—	—	—	—	ヨコ方向のナデ	—	ヨコ方向のナデ	—	刻目突帯文	
13	56	Ⅷ区	弥生土器	深鉢	5 SK067	7 層	—	—	—	—	ナデ	—	ナデ	—	刻目突帯文	
13	57	Ⅷ区	弥生土器	壺	5 SK067	7 層	—	—	—	—	ミガキ	—	ミガキ	—	外器面に2条沈線，2条重弧文	
13	58	Ⅷ区	弥生土器	甕	5 SK067	7 層	—	—	—	—	ナデ	—	不明	—		
13	59	Ⅷ区	弥生土器	壺	5 SK067	7 層	—	—	—	(5.2)	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	ナデ	ナデ		
13	60	Ⅷ区	弥生土器	甕	5 SK067	7 層	—	—	—	9.6	ナデ，指押え	ナデ	ナデ	ヨコ方向のナデ		
32	119	Ⅷ区	弥生土器	甕	e—34G	—	—	—	—	—	ナデ	—	ナデ	—	刻目文	
32	120	Ⅷ区	弥生土器？	甕	5 SB018	半裁トレンチ	—	—	—	—	ハケメ	—	ハケメ	—	刻目突帯文	
32	121	Ⅷ区	弥生土器？	甕	5 SX023	1 層	—	—	—	—	—	—	—	—	刻目突帯文	
32	122	Ⅷ区	弥生土器	甕	5 SX040	—	—	—	—	—	—	—	—	—	刻目文	
32	123	Ⅷ区	弥生土器	甕	5 SX040	C 層	—	—	—	—	ナデ	—	ナデ	—	刻目突帯文	
32	124	Ⅷ区	弥生土器	甕	b—31G	—	—	—	—	—	ナデ	—	—	—	刻目突帯文	
32	125	Ⅷ区	弥生土器	甕	5 SX040	E 層	—	—	—	—	—	—	—	—	刻目突帯文	
32	126	Ⅷ区	弥生土器	甕	5 SX050	2 層	—	—	—	—	—	—	—	—	刻目突帯文	
32	127	Ⅷ区	弥生土器？	長頸壺	5 SB018	半裁トレンチ	—	—	—	—	—	—	—	—		
32	128	X区	弥生土器	甕	g—43G	L05層	—	—	(27.2)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	刻目突帯文（2条）	
32	129	Ⅷ区	弥生前期土器	甕	5 SX023	—	—	—	—	—	—	—	—	—	貼付刻目突帯文	
32	130	Ⅷ区	弥生土器	壺	5 SK036	—	—	—	(11.4)	—	—	—	—	—	外器面に煤付着	
32	131	Ⅷ区	弥生土器	甕	a—31G	Ⅳ層	—	—	—	(8.5)	—	不明	—	不明		
32	132	Ⅷ区	弥生前期土器	甕	5 SX040	E 層，DE 層	—	—	—	5.9	—	ナデ	—	ナデ		
32	133	Ⅷ区	弥生土器	甕	Z-32,a—33G	2 c 層	—	—	—	7.9	ナデ，指押え	ナデ	ナデ	ナデ		
32	134	Ⅷ区	弥生土器	甕	5 SX023	1 層	—	—	—	(12.7)	ヨコナデ	ナデ，ヨコナデ	—	不明		
32	135	Ⅷ区	弥生土器	甕	b—30G	—	—	—	—	(7.9)	ナデ，指頭圧痕	ナデ	ナデ	—	意図的な穿孔有(外器面から内器面へ)	
32	136	Ⅷ区	弥生土器	甕	c—30G	—	—	—	—	8.8	ヨコナデ，指頭圧痕	ナデ	—	不明	意図的な穿孔有（1ヶ）	
32	137	Ⅷ区	弥生土器	甕	f—34G	—	—	—	—	8.0	ナデ，指ナデ，ケズリ	ナデ	—	ナデ	意図的な穿孔有（底部）	
33	138	X区	縄文～弥生土器	鉢	g—39G	Ⅷ層	—	(19.7)	(21.0)	—	条痕	—	条痕	—		
33	139	X区	弥生土器	鉢	i—40G	Ⅳ層	—	—	—	—	ヨコナデ	—	ナデ	—	刺突列点文	
33	140	X区	弥生土器	甕	j—40G	Ⅳ層	—	—	(24.4)	—	ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，指頭圧痕	—	刻目突帯文	
33	141	X区	弥生土器	甕	k—40G	Ⅶ層	—	—	—	—	ヨコナデ，ナデ	—	ナデ	—	刻目突帯文，外器面に煤付着	
33	142	X区	弥生土器	甕	6 SX054	2 層	—	(31.6)	(28.6)	—	ヨコナデ	—	指頭圧痕，ナデ	—	刻目突帯文，内外器面に煤付着	
33	143	X区	弥生土器（早期）	椀	i—38G	Ⅲ層	—	—	(14.8)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	丹塗り	
33	144	X区	弥生土器	壺	i—39G	X層	—	—	—	—	ヨコナデ，ナデ，半円模様	—	ナデ	—		
33	145	X区	弥生土器	甕	h-39G,g-40G	Ⅵ層，XⅢ層	—	—	—	(13.2)	ヨコナデ	—	ナデ	—		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
33	146	X区	弥生土器	壺	j−40G	XⅡ層	—	—	—	9.7	ハケメ後ナデ，指頭圧痕	—	ナデ	ナデ	内器面に煤付着	
33	147	X区	弥生土器	壺	h−42G	5トレンチ	—	—	—	—	ハケメ後ナデ	—	ナデ	—	外器面に櫛描波状文	
33	148	X区	弥生土器	甕	6SX049	—	—	—	—	7.4	ケズリ後ナデ	アンギン状圧痕，ナデ	—	—		
34	149	Ⅷ区	弥生土器	甕	V−27G	Vc層，Ⅳ〜Vb層	—	—	(21.8)	—	ナデ	—	ナデ	—		
34	150	Ⅷ区	弥生土器	甕	W−27G	Va層	—	—	—	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		
34	151	Ⅷ区	弥生土器	甕	Z−33G	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
34	152	Ⅷ区	弥生中期土器	甕	4SX049	A層	—	—	(34.1)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		
34	153	X区	弥生土器	甕	6SX506	—	—	—	(24.8)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		
34	154	Ⅷ区	弥生土器	壺	5SX040	—	—	—	(7.7)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ	—	外器面に赤色顔料	
34	155	Ⅷ区	弥生土器	壺	5SX040	—	—	—	(10.4)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	外器面に赤色顔料	
34	156	X区	弥生土器	甕	6SX506	—	—	—	(26.0)	—	ハケメ	—	—	—		
34	157	Ⅷ区	弥生（中期〜後期）土器	壺	e−32,33G	—	—	—	(10.4)	—	—	—	—	—	外器面に赤色顔料	
34	158	Ⅷ区	弥生土器	高坏	5SX055	—	—	—	(19.2)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		17
34	159	Ⅷ区	弥生土器	甕	V−27G	Vc層	—	—	—	(5.1)	—	ナデ	—	—		
34	160	Ⅷ区	弥生土器	甕	5SX023	1層	—	—	—	(5.7)	—	ヨコナデ，ナデ	—	ナデ		
34	161	Ⅷ区	弥生土器	甕	d−34G	—	—	—	—	5.7	—	ハケメ後ヨコナデ，ヨコナデ	—	—		
34	162	Ⅷ区	弥生土器	甕	b.c−31G	—	—	—	—	6.6	—	ヨコナデ，ナデ	—	指ナデ	外底面に黒斑有	
34	163	Ⅷ区	弥生土器	甕	Z−29G	Vb層	—	—	—	(6.8)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ		
34	164	Ⅷ区	弥生土器	甕	Y−28G	V・Ⅵ層	—	—	—	6.4	—	ハケメ後ナデ，ヨコナデ，不明	—	ナデ		
34	165	Ⅷ区	弥生土器	高坏	c−33G	—	—	—	—	—	—	ナデ，ヨコナデ	—	—	貼付突帯	
34	166	Ⅷ区	弥生土器	鉢	4SX049	—	—	—	—	—	ナデ	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		
34	167	X区	弥生土器	器台	6SX504	—	—	—	—	—	ハケメ，ナデ	—	ハケメ，ヘラケズリ	—		
34	168	X区	弥生土器	壺	6SX507	—	—	—	—	(8.0)	ハケメ，ハケメ後ナデ	ヘラナデ痕	ハケメ後ヘラケズリ	多方向ヘラケズリ		
34	169	Ⅷ区	弥生土器	壺	c−34G	—	—	—	—	—	ヨコナデ，ハケメ	—	左上方向ヘラナデ後ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
34	170	Ⅷ区	弥生土器？	脚付鉢	—	—	—	—	—	11.4	ハケメ	ヨコナデ，ナデ	ハケ目	ヘラケズリ		18
42	210	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	24.35	21.4	16.1	—	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ？	ハケメ後ナデ	ヨコナデ，ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	外器面に黒斑有	19
42	211	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	24.7	21.8	16.6	3.0	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ハケメ後ヨコナデ，ケズリ	ケズリ	外器面に黒斑有	19
42	212	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	24.75	21.8	16.5	—	ヨコナデ？，不明，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ？，不明，指頭圧痕	ケズリ		19
42	213	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	22.4	20.1	15.1	—	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ハケメ，ヨコナデ，ケズリ	ケズリ	内器面に煤付着，外器面に黒斑有	19
42	214	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	2層，Vc層	—	—	(17.1)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ，ハケメ後ヨコナデ	—		
42	215	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	20.4	18.2	14.6	—	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ハケメ後ヨコナデ，ナデ，ケズリ	ケズリ	外器面に煤付着	19
42	216	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	2層	—	—	(16.4)	—	ナデ，ハケメ後ナデ	—	ナデ，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	
43	217	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	—	20.0	15.1	—	ヨコナデ，ケズリ	—	ヨコナデ，ケズリ	—		
43	218	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	15.0	14.5	13.0	2.6	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ケズリ後ナデ	外器面に煤付着	19
43	219	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	—	—	—	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
43	220	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	—	(15.7)	—	—	ナデ，ハケメ後ナデ，タタキ後ハケメ	—	ナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ	—		
43	221	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	—	—	14.8	—	ヨコナデ，ハケメ，ナデ	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	粘土巻上げ痕	
43	222	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	—	—	(16.5)	—	—	—	ナデ，ケズリ，指頭圧痕	—		
43	223	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	—	25.4	19.2	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ケズリ後ナデ	—	外器面に黒斑有	
43	224	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	—	—	(23.4)	—	—	—	ヘラケズリ	—		
43	225	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	—	(22.1)	(17.4)	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—	粘土巻上げ痕	
43	226	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	22.7	19.9	(14.6)	—	ハケメ	ハケメ	ケズリ	ケズリ		19
44	227	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	—	—	(28.2)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ハケメ後ナデ，ヘラケズリ	—		
44	228	Ⅶ区	土師器	甕	4SI007	—	—	—	(17.2)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ハケメ後ナデ	—		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
44	229	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI007	—	—	—	(16.0)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ナデ	—		
44	230	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI007	—	—	—	(16.0)	—	ヨコナデ，ナデ	—	—	—		
44	231	Ⅶ区	土師器	壺	4 SI007		—	(28.9)	(18.6)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
44	232	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI007	1層	—	—	(15.2)	—	ヨコナデ，ハケメ後不明	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
44	233	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI007	Ⅳ層	—	—	(10.8)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		
44	234	Ⅶ区	土師器	二重口縁壺	4 SI007	—	—	(31.0)	(25.7)	—	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ，ケズリ後ヨコナデ，ケズリ	—		
44	235	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI007	—	18.0	(15.2)	13.3	—	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ後ナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ，ナデ	指頭圧痕	外器面に煤，黒斑有	24
44	236	Ⅶ区	土師器	壺	4 SI007	—	—	—	(17.1)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ハケメ後ナデ，ケズリ	—		
45	237	Ⅶ区	土師器	二重口縁壺	4 SI007	—	—	—	(22.6)	—	ハケメ後ヨコナデ，ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		
45	238	Ⅶ区	土師器	二重口縁壺	4 SI007	b層	—	—	(22.4)	—	ナデ	—	ヨコナデ，ナデ	—		
45	239	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SI007	—	—	—	—	(13.2)	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ	—	ケズリ	—		
45	240	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SI007	—	—	—	—	11.4	—	ナデ，ヨコナデ，ケズリ	—	—		
45	241	Ⅶ区	土師器	器台	4 SI007	—	—	—	(15.0)	—	ハケメ	ハケメ，ヨコナデ	—	指調整		
45	242	Ⅶ区	土師器	器台	4 SI007	—	—	—	—	(11.2)	—	ナデ	—	不明	外器面に赤色顔料，脚部に穿孔有	
45	243	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SI007	—	—	—	(18.6)	—	指頭圧痕，ハケメ後ナデ	—	指頭圧痕，ヘラケズリ	ヘラケズリ	外器面に意図的な打ち欠き有	28
45	244	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SI007	—	—	—	—	—	ハケメ	—	指による成形痕，ヘラケズリ	—		
45	245	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SI007	2層	—	—	(13.8)	—	ナデ，ミガキ？	—	ナデ	—		
45	246	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SI007	—	—	—	12.5	—	ナデ	—	ナデ	—		28
45	247	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SI007	—	—	—	(15.2)	—	ハケメ	—	ナデ	—		
45	248	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SI007		—	—	(22.6)	—	ナデ，タタキ	—	不明，ヘラケズリ	—		
45	249	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SI007	第1層	—	—	14.2	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ナデ	—		
45	250	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SI007	2層，3層，1層	—	—	16.7	—	ハケメ後ナデ，指頭圧痕，ヨコナデ	—	ヨコナデ，指による成形痕，ナデ	ナデ		28
45	251	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SI007	—	—	—	—	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ケズリ後ナデ	—		
45	252	Ⅶ区	土師器	小型甕	4 SI007	—	6.7	—	11.1	—	—	ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ	ナデ		
45	253	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SI007		6.6	10.0	10.4	—	ハケメ	ハケメ	指頭圧痕，ナデ	指頭圧痕	内器面に煤付着	28
45	254	Ⅶ区	土師器	小型二重口縁壺	4 SI007	—	—	—	—	—	ナデ	—	不明	—		
45	255	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SI007		—	—	(8.4)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—		
45	256	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SI007	—	—	—	—	—	ヘラ調整，ナデ	ケズリ	指による調整，ナデ	指による調整		
45	257	Ⅶ区	土師器	坏	4 SI007	—	3.6	—	13.5	—	ナデ	—	ナデ	—		
46	258	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SI007	—	—	—	(15.2)	—	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ，ナデ	回転ヨコナデ	輪状ツマミ	
46	259	Ⅶ区	須恵器	短頸壺	4 SI007	Vc層	—	—	(14.0)	—	回転ヨコナデ，タタキ	—	回転ヨコナデ	—		
46	260	Ⅶ区	須恵器	長頸壺	4 SI007	—	—	—	—	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	—		
46	261	Ⅶ区	須恵器	大甕	4 SI007	—	—	—	—	—	擬格子タタキ	—	平行タタキ後同心円タタキ	—		
46	262	Ⅶ区	須恵器	壺	4 SI007	—	—	—	—	(9.4)	回転ヨコナデ，ナデ	回転ナデ，ヨコナデ	タタキ後回転ヨコナデ，ナデ	ナデ		
46	263	Ⅶ区	須恵器	高台付埦	4 SI007	—	—	—	—	6.5	回転ヨコナデ	ヘラ切り，回転ヨコナデ	ナデ	ナデ		
50	265	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI013	—	—	—	(15.3)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ハケメ	—	口縁部に一部黒斑有	
50	266	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI013	—	—	—	(17.9)	—	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ	—	ハケメ後ヨコナデ，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	
50	267	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI013	—	—	—	(14.4)	—	ハケメ後ヨコナデ，ナデ	—	ハケメ後ナデ，ヘラケズリ	—		
50	268	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI013	—	—	—	(16.9)	—	ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ	—		
50	269	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI013	—	—	—	(16.0)	—	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	—		
50	270	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI013	—	—	—	—	—	ハケ後ナデ，ナデ	—	ナデ，ケズリ	—		
50	271	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI013	—	—	(14.8)	(12.0)	—	ハケメ後ナデ，ヨコナデ	—	ヨコナデ，ハケメ	—	外器面に黒斑有	
50	272	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SI013	—	—	—	21.6	—	—	不明，ナデ	ナデ？	ナデ？		
50	273	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SI013	—	—	—	—	(12.2)	ヨコナデ	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ハケメ		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
50	274	Ⅶ区	土師器	壺	4 SI013	下層	20.5	19.4	13.4	—	ハケメ	ハケメ	ハケメ，ヘラケズリ	ヘラケズリ		24
50	275	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SI013	上層	—	—	—	(12.4)	ヘラケズリ，ナデ	ナデ，ﾀﾃ放射のﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ，ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	ヘラケズリ，ナデ	ナデ，ヘラケズリ		
50	276	Ⅶ区	土師器	器台	4 SI013	—	—	—	—	—	—	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	—	穿孔有（４ヶ）	
50	277	Ⅶ区	土師器	器台	4 SI013	—	—	—	—	(8.8)	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		
50	278	Ⅶ区	土師器	小型甕	4 SI013	—	7.7	7.9	7.8	—	ハケメ後ナデ，ナデ	ハケメ後ナデ	ナデ，ハケメ後ヨコナデ	ナデ	外器面に黒斑有	
50	279	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SI013	下層	—	—	(11.6)	—	ナデ，ハケメ後ナデ	—	ナデ，ヘラケズリ	—		
50	284	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SI013	—	9.0	—	9.3	—	ハケメ後ナデ，ナデ	ナデ	指頭圧痕，ハケメ後ナデ	指頭圧痕	外器面に黒斑有	
50	285	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SI013	—	(9.5)	—	11.3	—	ナデ	ナデ	ハケメ後ナデ	ケズリ後ナデ		30
50	286	Ⅶ区	土師器	甑	4 SI013	—	—	—	—	—	—	ハケメ	—	ヘラケズリ		
53	290	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI029	1層	17.3	15.2	(12.5)	—	ハケメ	ヘラケズリ	ハケメ，ヘラケズリ	ヘラケズリ		19
53	291	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI029	1層	—	—	(17.6)	—	ハケメ後ヨコナデ	—	ヨコナデ，ケズリ	—		
53	292	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI029	1層	—	—	(16.6)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—		
53	293	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI029	—	—	—	—	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヘラケズリ，指頭圧痕	—		
53	294	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SI029	1層，V層	7.8	(8.8)	(8.4)	—	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	指ナデ	指ナデ		
53	295	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SI029	1層	—	(8.6)	—	—	ハケメ	ハケメ，ナデ	ハケメ	—		
53	296	Ⅶ区	土師器	壺？	4 SI029	1～2層，1層	—	—	(17.2)	—	ヨコナデ	—	ハケメ後ヨコナデ	—		
53	297	Ⅶ区	土師器	壺	4 SI029	1層，2層，V層	—	—	—	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—		
53	298	Ⅶ区	土師器	壺	4 SI029	1層，1～2層，2層	—	(22.0)	(13.6)	—	ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	—	ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ，ﾍﾗｹｽﾞﾘ後指ﾅﾃﾞ	—		
53	299	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SI029	1層	10.3	8.6	(7.1)	—	ヨコナデ，ナデ	ナデ	ナデ，指頭圧痕	指頭圧痕	外器面に黒斑有	30
53	300	Ⅶ区	土師器	鍋	4 SI029	—	—	29.0	(33.6)	—	ハケメ，ナデ	—	ケズリ後ナデ	—		
56	303	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	—	16.7	15.1	13.1	8.5	ナデ，ハケメ	—	ハケメ後ヘラケズリ	—		20
56	304	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	—	17.3	16	12.8	1.8	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	ナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ		20
56	305	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	—	—	(19.1)	(15.5)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
56	306	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	1層，L01層	—	(15.0)	(14.0)	—	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ハケメ，ヘラケズリ	ヘラケズリ，指頭圧痕		20
56	307	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	1層	—	—	(16.2)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ﾊｹﾒ，ﾅﾃﾞ，ﾍﾗｹｽﾞﾘ	—	外器面に黒斑有	
56	308	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	—	—	—	(16.4)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾊｹﾒ，ﾅﾃﾞ，ﾍﾗｹｽﾞﾘ	—		
56	309	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	—	—	20.8	16.3	—	平行タタキ後ハケメ，ナデ	—	ハケメ，ナデ，ヘラケズリ	—	外器面に黒斑，煤付着	20
56	310	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	—	—	—	17.4	—	ヨコナデ，不明	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
56	311	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	—	—	—	(19.8)	—	—	—	ﾖｺﾅﾃﾞ，指頭圧痕，ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	—		19
56	312	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	—	—	(21.6)	(17.6)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	粘土巻上げ痕	
57	313	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029		—	19.9	16.2	—	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾅﾃﾞ，ﾊｹﾒ	—	ヘラケズリ，ハケメ	—		20
57	314	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	—	—	(22.3)	(17.2)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾊｹﾒ，ﾍﾗｹｽﾞﾘ	—		20
57	315	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	1層	—	—	(14.8)	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
57	316	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	—	—	—	14.4	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—		
57	317	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	—	—	(21.0)	(15.0)	—	タタキ，ハケメ	—	ヘラケズリ後ナデ	—	外器面に黒斑有	
57	318	Ⅷ区	土師器	壺	5 SI029	—	—	21.0	14.9	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ﾖｺﾅﾃﾞ，指頭圧痕，ﾍﾗｹｽﾞﾘ	—	内外器面に黒斑有	
57	319	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI029	—	—	(24.2)	—	5.9	ハケメ	ナデ	ハケメ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	外底面に煤付着	
57	320	Ⅷ区	土師器	壺	5 SI029	1層	—	—	16.4	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ﾊｹﾒ，ﾅﾃﾞ，ﾊｹﾒ後ﾍﾗｹｽﾞﾘ	—	粘土巻上げ痕	25
58	321	Ⅷ区	土師器	壺	5 SI029		—	—	14.3	—	ﾅﾃﾞ，ﾊｹﾒ後ﾍﾗﾐｶｷ，ﾖｺﾅﾃﾞ	—	ﾊｹﾒ，ﾅﾃﾞ，指頭圧痕，ﾍﾗｹｽﾞﾘ	—	外器面に黒斑有，粘土巻上げ痕	
58	322	Ⅷ区	土師器	壺	5 SI029	—	—	—	17.9	—	ハケメ，ヨコナデ	—	指頭圧痕，ﾊｹﾒ，ﾊｹﾒ後ﾍﾗｹｽﾞﾘ	—		24
58	323	Ⅷ区	土師器	壺	5 SI029	—	—	29.1	—	—	ハケメ，ナデ，ヨコナデ	ナデ	ﾖｺﾅﾃﾞ，指頭圧痕，ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラケズリ		
58	324	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SI029	—	—	33.8	15.8	—	ヨコナデ	—	ヘラケズリ	—		25
58	325	Ⅷ区	土師器	壺	5 SI029	—	33.2	28.9	18.5	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	24
58	326	Ⅷ区	土師器	二重口縁甕	5 SI029	—	—	33.7	—	—	ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	—	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾊｹﾒ後ﾍﾗｹｽﾞﾘ	—	内外器面に粘土巻上げ痕，内器面に赤色顔料	19

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
59	327	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SI029		—	—	—	4.1	ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—	内外器面に黒斑有	
59	328	Ⅷ区	土師器	脚付鉢	5 SI029	—	7.4	—	13	6.2	ナテ	ヨコナデ	ハケメ	—		29
59	329	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SI029	—	7.9	12.1	12	2.1	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	ヨコナデ，ナデ	ナデ		28
59	330	Ⅷ区	土師器	坏	5 SI029	—	3.2	—	11.7	6.2	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		
59	331	Ⅷ区	土師器	坏	5 SI029	—	3.4	—	(10.7)	(7.2)	ヨコナデ，ナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ナデ	ナデ		
59	332	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SI029	—	—	—	(19.8)	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	
59	333	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SI029	—	(7.1)	—	16.0	—	ヨコナデ，ナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，指ナデ，ナデ	—		28
	334	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SI029	—	5.9	13.1	15.6	2.0	ヨコナデ，ナデ	ハケメ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ナデ	外器面に黒斑有	28
59	335	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SI029	—	8.0	(13.1)	(15.6)	(2.8)	ヨコナデ，ナデ	ナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	外器面に黒斑有	
59	336	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SI029	—	—	10.6	(13.4)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ，ハケメ	ナデ	ヨコナデ，ナデ	ヘラケズリ		28
59	337	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SI029	—	7.4	—	15.1	1.3	ヘラケズリ	ナデ	—	—		
59	338	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SI029	—	7.5	—	15.5	1.5	ハケメ	—	—	—	外器面に黒斑有	28
59	339	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SI029	—	6.4	—	(14.7)	(1.4)	—	—	—	—		
59	340	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SI029	—	6.4	—	13.4	1.2	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	内外器面に黒斑有	28
61	341	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI033	—	24.2	21.5	16.2	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—		20
61	342	Ⅷ区	土師器	壺	5 SI033	—	—	(25.8)	(17.6)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
61	343	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI033	—	—	—	16.4	—	ヨコナデ	—	ヘラケズリ	—		
61	344	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI033	—	—	—	(15.6)	—	タタキ後ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	
61	345	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI033		—	—	(16.0)	—	ハケメ	—	ハケメ，ヘラケズリ	—		
61	346	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SI033		—	—	—	—	ヘラナデ，ハケメ後ヘラケズリ	—	ヘラケズリ	—		
61	347	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SI033		—	(25.6)	—	—	ヨコナデ，ハケメ後ヘラによるキザミ，ヘラナデ，肩部ハケメリ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		25
61	348	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SI033	—	8.2	10.4	(9.4)	2.5	ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ヘラによる圧痕	ヨコナデ	内外器面に黒斑有	30
61	349	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SI033	—	9.7	—	10.9	1.6	ヨコナデ	—	ヨコナデ	指頭圧痕		30
61	350	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SI033	—	9.5	11.5	10.1	2.2	—	—	—	—		30
61	351	Ⅷ区	土師器	壺	5 SI033	—	—	(16.4)	—	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	ナデ，ハケメ	ハケメ後ナデ		
61	352	Ⅷ区	土師器	脚付鉢	5 SI033		12.0	—	18.6	(12.5)	ハケメ	ヘラケズリ，ハケメ，ヨコナデ	ハケメ	—	外器面口縁部に煤，内底面に使用による摩耗痕	27
61	353	Ⅷ区	土師器	脚付鉢	5 SI033	—	—	—	—	(10.6)	ナデ	—	ナデ	ヘラ状の工具ヨコナデ		
63	355	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI035	—	—	—	14.3	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—		
63	356	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI035	—	—	—	(11.6)	—	ハケメ後ナデ	—	ヘラ状工具痕，ヘラケズリ	—		
63	357	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SI035	—	—	—	(15.2)	—	ナデ	—	ハケメ後ナデ，ヘラケズリ	—	粘土貼り付け痕	
63	358	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI035	—	—	—	(15.4)	—	ヨコナデ	—	ハケメ，ナデ，ヘラケズリ	—	口縁部外器面に赤色顔料	
65	361	Ⅷ区	土師器	壺	5 SI039		16.5	14.6	12.6	1.3	ヨコナデ，ハケメ，ナデ	ナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ		24
65	362	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI039	—	—	—	(16.2)	—	—	—	ヘラケズリ	—		
65	363	Ⅷ区	土師器	壺	5 SI039	—	—	—	(11.2)	—	ヨコナデ	—	ヘラケズリ	—		
65	364	Ⅷ区	土師器	甕	5 SI039	—	—	—	(23.0)	—	ヨコナデ，ハケメ，ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
65	365	Ⅷ区	土師器	小型甕	5 SI039	Vc 層	7.6	7.7	7.6	—	ナデ，ケズリ	一部ケズリ	ヘラケズリ	—	手捏	
68	367	Ⅶ区	土師器	甕	4 SE005	—	27.6	23.7	16	4.3	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ，ハケメ，不明	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ，ヨコナデ，ヘラケズリ	ナデ	外器面に煤付着	20
68	368	Ⅶ区	土師器	甕	4 SE005	—	22.1	19.8	15.5	3.4	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ，ヘラケズリ	指頭圧痕	全面に煤付着	21
68	369	Ⅶ区	土師器	甕	4 SE005	—	24.3	20.7	(15.4)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	ハケメ	ヘラケズリ，ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ		20
68	370	Ⅶ区	土師器	甕	4 SE005	7 層	—	22.5	—	—	ハケメ	ハケメ	ヘラケズリ，指頭圧痕	ナデ後指頭圧痕		
68	371	Ⅶ区	土師器	甕	4 SE005	Vb 層	—	—	—	—	ハケメ・タタキ	—	ハケメ，ヘラケズリ	—		
68	372	Ⅶ区	土師器	二重口縁甕	4 SK009，4 SE005	Va 層，Vc 層	41.1	37	32.5	6.3	ハケメ	ナデ	ヨコナデ，タタキ後ヘラケズリ後ナデ	ナデ	外器面に煤付着	21
69	373	Ⅶ区	土師器	甕	4 SE005	4 層	—	—	(15.0)	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
69	374	Ⅶ区	土師器	甕	4 SE005	7 層	—	(21.4)	(15.8)	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
69	375	Ⅷ区	土師器	甕	4 SE005	4層，7層，9層	—	—	—	—	ハケメ	ハケメ	ナデ，ヘラケズリ後指頭圧痕	指ナデ	外器面に煤付着	
69	376	Ⅷ区	土師器	甕	4 SE005	V層	—	(21.0)	(19.0)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
69	377	Ⅷ区	土師器	直口壺	4 SE005	9層	—	—	(14.8)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ	—	内器面に黒斑有	
69	378	Ⅷ区	土師器	直口壺	4 SE005	10層	—	—	(15.8)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		
69	379	Ⅷ区	土師器	壺	4 SE005	4層	—	—	—	—	ナデ，ハケメ後ナデ	—	ハケメ	—	外器面に黒斑有	
69	380	Ⅷ区	土師器	鉢	4 SE005	A層，Vb層	6.1	—	(12.3)	—	ナデ，ハケメ	ナデ	ナデ，ハケメ	ナデ	内外器面に黒斑有	
69	381	Ⅷ区	土師器	鉢	4 SE005	4層	5.6	—	(12.2)	—	板状工具のナデ	ナデ	板状工具のナデ	ナデ	内外器面に黒斑有	
69	382	Ⅷ区	土師器	脚付鉢	4 SE005	7層	—	—	—	—	ハケメ	ナデ	ハケメ，ナデ	ナデ		
69	383	Ⅷ区	土師器	鉢	4 SE005	Vb層	8.5	—	(14.1)	—	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ，ナデ	ハケメ，ヘラケズリ	ナデ，工具痕		
69	384	Ⅷ区	土師器	鉢	4 SE005	7層	9.3	—	(14.4)	5.0	ハケメ，ナデ	ナデ	ハケメ後ナデ	ナデ	外底面に黒斑有	18
69	385	Ⅷ区	土師器	坏	4 SE005	Vb層，4層	2.9	—	9.4	—	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	内外器面に黒斑有	
69	386	Ⅷ区	土師器	坏	4 SE005	Vb層	—	—	(11.0)	—	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	ナデ	外器面に黒斑有	
69	387	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SE005	Vb層	—	—	(12.4)	—	ナデ	—	ナデ	—	脚部に透かし孔有	
69	388	Ⅷ区	土師器	小型鉢	4 SE005	Vb層	—	—	—	—	ナデ	—	ヨコナデ	—		
69	389	Ⅷ区	土師器	小型鉢	4 SE005	3層	—	—	—	—	ナデ	—	ナデ	—		
73	397	Ⅷ区	土師器	壺	4 SE042	—	12.1	11.9	13	—	—	—	—	—	底部に穿孔有（1ヶ）	25
73	398	Ⅷ区	弥生土器？	脚付鉢	4 SE042	—	—	—	6.8	—	ハケメ	ナデ	ハケメ	ハケメ	脚部裏側に還元色有	
73	399	Ⅷ区	土師器	壺	4 SE042	4層	25.1	22.5	13.1	2.0	ハケメ，ヘラナデ	工具ナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ケズリ	外器面に煤付着	25
73	400	Ⅷ区	土師器	器台	4 SE042	—	9.1	—	10.5	10.2	ハケメ後ナデ	ハケメ後ヨコナデ，ハケメ後ナデ	ハケメ	ナデ	穿孔有（4ヶ）	27
73	401	Ⅷ区	土師器	甕	4 SE042	3層	—	19.2	—	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	ハケメ，一部ヘラケズリ	ハケメ後ナデ消し		
74	402	Ⅷ区	土師器	甕	4 SE055	下層	17.8	17.0	13.6	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	ヘラケズリ	ケズリ	外器面に煤付着	21
74	403	Ⅷ区	土師器	壺	4 SE055	下層	—	—	(18.3)	—	ナデ，ハケメ	—	ヨコナデ	—		
74	404	Ⅷ区	土師器	甕	4 SE055	上層	—	—	—	—	ハケメ	—	ハケメ，ヘラケズリ	—	沈線（口縁部）	
77	406	Ⅷ区	土師器	甕	5 SE060	—	21.9	20	15.2	0.8	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ヨコヘラケズリ，タテヘラケズリ	タテヘラケズリ		
77	407	Ⅷ区	土師器	甕	5 SE060	6層	—	—	(18.0)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ	—	内外器面に煤付着	21
77	408	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SE060	—	8.2	—	10.6	1.2	ヨコナデ，ヘラ調整後ナデ	ヘラ調整後ナデ	ヨコナデ，ヘラ調整	ヨコナデ	内外器面に黒斑有	
77	409	Ⅷ区	土師器	甕	5 SE060	—	21.1	20.2	17.3	—	ハケメ，タタキ	ハケメ後ナデ（器形のため詳細不明）	ハケメ，ナデ，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	30
77	410	Ⅷ区	土師器	甕	5 SE060	—	—	19.5	15.3	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ケズリ	—	内外器面に煤付着	21
77	411	Ⅷ区	土師器	甕	5 SE060	—	—	21.1	(17.1)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ハケメ後一部ヨコナデ，ケズリ	—	外器面に煤付着	21
77	412	Ⅷ区	土師器	甕	5 SE060	—	—	—	—	1.3	ナデ，ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	ナデ，ヘラケズリ	指頭圧痕後ヘラケズリ		
77	413	Ⅷ区	土師器	二重口縁大甕	5 SE060	2層	—	(57.4)	(50.0)	—	ハケメ	—	ハケメ，工具ナデ，指頭圧痕	—	外器面に黒斑有，内器面に煤付着，施文	21
78	414	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SE060	—	—	—	14.9	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ハケメ後ヨコナデ，ヨコナデ，ケズリ	—	外器面に黒斑有	
78	415	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SE060	4層，2層	—	(29.3	—	—	ハケメ，ヨコナデ，ナデ	—	指ナデ，ヘラケズリ	—		
78	416	Ⅷ区	土師器	壺	5 SE060	—	24.3	22.4	(17.0)	—	ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ハケメ	—	外底面に黒斑有	
78	417	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SE060	2層	—	—	23.1	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ，ハケメ	—		25
78	418	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SE060	Vd層	—	—	—	—	ヨコナデ，ハケメ，ナデ	—	ナデ，ハケメ	—		
78	419	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SE060	—	—	—	(17.0)	—	ヨコナデ，ナデ	—	ハケメ後ナデ	—		
78	420	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SE060	—	—	—	13.3	—	ヨコナデ，ハケメ，ナデ	—	ナデ，ヨコナデ	—	口縁外器面に赤色顔料	
78	421	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SE060	—	6.6	—	(15.4)	(1.2)	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ハケメ	ヨコナデ		
78	423	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SE060	—	—	—	(13.8)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	外器面に黒斑有	
78	424	Ⅷ区	土師器	壺	5 SE060	—	—	(29.0)	—	—	タタキ	—	ヨコナデ，ハケメ，ナデ	—	外器面に黒斑有	
80	425	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SE064	—	—	—	14.8	—	不明	—	不明	—		
80	426	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SE064	—	—	—	(14.0)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ	—		
80	428	Ⅷ区	土師器	甕	5 SE064	—	24.5	21.1	17.1	3.5	ヨコナデ，ハケメ	不明	ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ	不明		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
80	429	Ⅷ区	土師器	壺	5 SE064	—	—	—	(16.5)	—	ハケメ後ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		
80	430	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SE064	—	—	—	(21.0)	—	ナデ	—	ヨコナデ，ハケメ	—	外器面に赤色顔料	
80	431	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SE064	—	—	—	(21.0)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ	—		
80	432	Ⅷ区	土師器	壺	5 SE064	—	—	—	—	3.7	ハケメ	ハケメ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	外器面に黒斑有	
80	433	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SE064	1層	—	—	—	(10.3)	ヨコナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ナデ	ナデ	脚部に透かし孔有（4ヶ）	
80	434	Ⅷ区	土師器	小型鉢	5 SE064	1層	—	—	(12.2)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		
80	435	Ⅷ区	土師器	小型鉢	5 SE064	—	—	—	(17.8)	—	ヨコナデ，タテハケメ	—	ヨコナデ	—		
80	436	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SE064	—	—	—	(14.2)	(1.8)	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	ハケメ，ナデ，ヨコナデ	—		
80	437	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SE064	1層	—	—	(14.2)	—	ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ，ハケメ，ナデ	ナデ		
80	438	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SE064	—	6.3	—	14.4	2.3	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ナデ	ナデ	外器面に黒斑有	29
80	439	Ⅷ区	土師器	小型甕	5 SE064	—	—	—	12.0	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	外器面に黒斑有	
80	440	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SE064	—	7.1	—	(10.8)	1.3	ナデ，ハケメ	ナデ，ハケメ	ナデ，ハケメ	ナデ，ハケメ		
80	441	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SE064	—	6.4	—	(10.8)	(1.0)	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ハケメ，ナデ	ナデ		
80	442	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SE064	—	8.1	—	12.5	1.5	—	—	—	—		30
81	443	Ⅹ区	土師器	甕	6 SX053	—	16.2	—	13.7	—	ハケメ	ハケメ	ハケメ，ケズリ	ナデ		23
81	444	Ⅹ区	土師器	小型甕	6 SX053	—	8.7	9.2	8.4	—	ヨコナデ，ナデ	ナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ，ナデ	指押え		31
83	445	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK027	2層	—	—	—	—	ナデ，タタキ，ハケメ	—	ヘラケズリ後ナデ	—		
83	446	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK027	1層	—	—	—	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
83	447	Ⅶ区	土師器	壺	4 SK027	2層	—	—	—	—	ヨコナデ，ケズリ後ナデ，竹管文	—	ハケメ後ナデ，ナデ	—		
83	449	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK027	1層	—	26.5	17.7	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	
83	450	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SK027	1層	—	—	—	—	—	ヘラケズリ	—	—		
86	451	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK052	—	25.6	23.3	18.3	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ハケメ後ヨコナデ，ナデかヨコナデ，ケズリ	ケズリ後ナデ(指頭圧痕)	外器面に煤付着	22
86	452	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK052	—	23.6	(21.0)	14.5	5.7	ヨコナデ，ハケメ	—	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	内，外器面に煤付着	22
86	453	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK052	—	28.3	25.1	16.9	5.7	ナデ，ハケメ後ナデ	ナデ	ナデ，ヘラケズリ，ハケメ	ハケメ，ナデ	外器面に煤付着	22
86	454	Ⅷ区	土師器	壺	5 SK052	—	—	—	13.6	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	不明	—	外器面に黒斑有	
86	455	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SK052	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ，ナデ，ハケメ	不明	不明	穿孔有（3ヶ）	
86	456	Ⅷ区	土師器	器台	5 SK052	1層	—	—	—	(10.9)	—	ナデ	—	ナデ		
86	457	Ⅷ区	土師器	脚付鉢	5 SK052	—	—	—	—	(20.0)	ナデ	ナデ，ヨコナデ	ナデ	ナデ，ヨコナデ		
87	459	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK053	—	28.25	23.4	17.4	—	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ，ハケメ，ナデ	—	ヘラケズリ	ナデ，指頭圧痕	外器面に煤付着，黒斑有，沈線（頸部下，2条）	23
87	460	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK053	4層	—	—	—	—	ハケメ	ハケメ	ヘラケズリ	ヘラケズリ後指ナデ	内，外器面に煤付着	
87	461	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK053	Ⅴ層	—	—	—	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ後指押え	外器面に煤付着	
87	462	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK053	—	—	—	—	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	ヘラケズリ，指頭圧痕	ヘラケズリ後指頭圧痕		
87	463	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK053	—	—	—	—	—	ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
87	464	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SK053	—	—	—	—	—	ヨコナデ？不明	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
89	465	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK061	1層	—	21.6	16.8	—	ハケメ，ナデ	—	ハケメ，ヘラケズリ	—	内外器面に黒斑有，煤付着	23
89	466	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK061	ソクミゾ	—	—	(17.6)	—	ナデ	—	ヘラケズリ	—		
89	467	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK061		—	24.8	(17.0)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヘラケズリ	—		
89	468	Ⅷ区	土師器	壺	5 SK061	ソクミゾ	—	25.4	15.8	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ハケメ	—	内外器面に黒斑有，煤付着	26
89	469	Ⅷ区	土師器	大型壺	5 SK061	—	—	—	(27.8)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ハケメ	—		
89	470	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SK061	ソクミゾ	—	(12.3)	—	2.0	—	—	不明，指頭圧痕	指頭圧痕		
89	471	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SK061	—	—	—	(9.4)	—	ナデ	—	ヨコナデ	—		
89	472	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SK061	—	7.2	—	12.4	2.6	ハケメ，ナデ	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	ハケメ，ナデ	外器面に煤付着	29
89	473	Ⅷ区	土師器	壺	5 SK061	4層	30.9	(28.0)	(20.0)	4.2	ナデ，ハケメ	ハケメ後多方向のナデ消し	ナデ，ハケメ後ナデ	指頭圧痕	内器面に煤付着，外器面に黒斑有	
90	474	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK063	—	—	22.7	16.3	—	ヨコナデ，ハケメ，タタキ後ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ，指頭圧痕	—	外器面に煤付着	23

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
90	475	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK063	—	—	—	—	0.8	タタキ，ハケメ	—	ハケメ	ハケメ		
92	476	Ⅷ区	土師器	坏	4 SK004	Vc層	—	—	11.7	—	ヨコナデ，ナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ，ナデ	—	内外器面に黒斑有	
92	477	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK004	下層	—	24.4	18.1	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
94	478	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	4 SK015	1層	—	—	(16.2)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，N316ハケメ後ナデ	—	口縁部外器面に黒斑有	
96	479	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK006	—	28.8	(24.8)	17.8	—	ハケメ後ヨコナデ，ハケメ，不明	—	ヨコナデ？，ケズリ	ケズリ	内外器面に煤，黒斑有	22
96	480	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK006	—	—	27	18.8	—	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ケズリ	—	内，外器面に黒斑，煤付着	
96	481	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK006	—	—	(23.8)	17.2	—	ヨコナデ，ハケメ，ナデ	ナデ	ヨコナデ，ケズリ	ケズリ	内外器面に黒斑有	22
96	482	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK006	Vd層，Vb層	—	(21.2)	(16.6)	—	ヨコナデ，ナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
96	483	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK006	Vc層	—	(18.5)	15.7	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	粘土巻上げ痕	
96	484	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK006	Vb層	—	—	(14.7)	—	ハケメ	—	ハケメ，ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
96	485	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK006	2層，1層	—	—	19.1	—	ハケメ後ナデ	—	ハケメ後ナデ，ヘラケズリ	—		
97	486	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK006	—	—	(21.6)	(15.4)	—	ハケメ	—	ケズリ	—		
97	487	Ⅷ区	土師器	壺	4 SK006	Vb層	—	—	(18.3)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	
97	488	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK006		—	—	(13.2)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
97	489	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	4 SK006	1層	—	—	17.7	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—	外器面に赤色顔料，黒斑有	
97	490	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK006	Vb層，1層	—	—	15.7	—	ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	口縁部外器面に黒斑有	
97	491	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK006	Vb層	—	—	(14.2)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
97	492	Ⅷ区	土師器	甕	4 SK006	1層	—	—	(14.6)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
97	493	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	4 SK006	埋土	—	(20.8)	(12.9)	—	ナデ，ハケメ	—	ヘラケズリ，ナデ	—		
97	494	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	4 SK006	1層	—	—	15.3	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
97	495	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	4 SK006	1層	—	—	21.2	—	不明	—	ハケメ後ナデ，不明	—		
97	496	Ⅷ区	土師器	壺	4 SK006	—	33.2	27.2	(13.3)	—	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ，ナデ，ケズリ	ナデ	外器面に黒斑有	26
98	497	Ⅷ区	土師器	壺	4 SK006	—	35.6	30.3	17.2	—	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ナデ，ケズリ，ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ		26
98	498	Ⅷ区	土師器	壺	4 SK006	—	32.7	(26.9)	(17.5)	—	—	—	ケズリ	ケズリ	外器面に黒斑有	26
98	499	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	4 SK006	—	27.9	(22.8)	(16.8)	—	ハケメ，工具ナデ	—	ヨコナデ，ナデ，ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	内器面に黒斑有	
98	500	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	1層	—	—	—	(11.6)	ナデ，ハケメ	ナデ，ハケメ後ナデ，ヘラケズリ	ナデ	ナデ		
98	501	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	Vb層	12.1	—	17.9	(12.0)	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ，ヘラケズリ		
98	502	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	Vb層	—	—	17.3	—	ナデ	—	ナデ，工具痕	ナデ		
98	503	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	2層，Vb層	—	—	23.8	—	ナデ	—	ナデ	—		27
98	504	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	Vb層，1層	14.8	—	20.4	14.0	ナデ	ナデ，ハケメ後ナデ，ケズリ	ナデ	ナデ		
99	505	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	Vb層	14.1	—	(19.7)	(12.0)	ナデ，ハケメ	暗紋，ナデ，ヘラケズリ	ナデ	ナデ		
99	506	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	Vc層	—	—	16.6	—	不明	不明，ケズリ	ハケメ，タタキ痕？	タタキ痕？		
99	507	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	Vb層	—	—	18.6	—	ナデ	ナデ，ケズリ	ナデ	ナデ		
99	508	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	1層	14.7	—	(17.4)	(12.4)	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ，ヘラケズリ		
99	509	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	Vb層	—	—	(17.5)	—	ハケメ後ナデ，ナデ	—	ナデ	ナデ		
99	510	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	Vb層	—	—	—	11.4	—	ナデ，ヘラケズリ	—	—		
99	511	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	Vb層	—	—	—	12.1	—	ナデ，ヨコナデ，ヘラケズリ	—	—		
99	512	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	1層	12.2	—	(21.0)	(12.8)	ナデ，ハケメ後ナデ	ナデ，ヘラケズリ	ナデ	ナデ		
99	513	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	Vb層	—	—	—	11.9	—	ナデ，ハケメ後ナデ，ヘラケズリ	—	—		
99	514	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	1層	—	—	—	(12.3)	—	ナデ，ハケメ	—	ヘラケズリ，ナデ		
99	515	Ⅷ区	土師器	脚台付甕	4 SK006	—	—	—	—	(17.0)	—	ハケメ後ナデ，指頭圧痕，ナデ	—	ナデ，ハケメ後ナデ，指頭圧痕		
99	516	Ⅷ区	土師器	鉢	4 SK006	Vb層	—	—	(22.0)	—	ハケメ後ナデ	—	ハケメ後ナデ，ケズリ，ナデ	—		
99	517	Ⅷ区	土師器	脚付鉢	4 SK006	Vb層	12.0	—	13.0	(13.0)	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		18
99	518	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SK006	Vb層，Va層	—	—	—	—	—	—	—	—	内外器面に赤色顔料	27

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
99	519	Ⅶ区	土師器	器台	4 SK006	Vb 層	—	—	—	—	—	ナデ	—	ナデ		
99	520	Ⅶ区	土師器	小型甕	4 SK006	5，6 層	—	12.5	(12.5)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヘラケズリ，ヨコナデ	—	外器面に黒斑有	
99	521	Ⅶ区	土師器	小型甕	4 SK006	1 層	—	(12.5)	(11.4)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
99	522	Ⅶ区	土師器	小型甕	4 SK006	Vb 層，Vc 層	—	11.4	(10.1)	—	ナデ，ハケメ	ハケメ	ナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	外器面に黒斑有	
100	523	Ⅶ区	土師器	小型甕	4 SK006	Vb 層	—	—	(10.0)	—	ヨコナデ，不明	—	不明	—		
100	524	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	Vb 層	—	(8.5)	9.2	—	ハケメ後ナデ，ハケメ	—	ケズリ後ナデ，ハケメ後ヨコナデ	—		
100	525	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	第 1 層	9.9	8.8	9.0	—	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，指ナデ	指ナデ		
100	526	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	Vb 層，1 層	—	(8.4)	—	(2.0)	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	ナデ	ナデ		
100	527	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	2 層	9.1	9.2	(10.0)	2.5	ヨコナデ，ハケメ後ナデ，ナデ	ナデ	ヨコナデ，ケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	外器面に黒斑有	
100	528	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	2 層，1 層	—	(7.8)	(8.4)	—	ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ	—		
100	529	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	2 層	9.0	(8.1)	(8.4)	—	ハケメ後ナデ，ナデ	ハケメ後ナデ	ケズリ後ナデ，ナデ	ケズリ後ナデ	底部に黒斑有	
100	530	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	—	—	—	10.8	—	不明	—	不明	—		
100	531	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	1 層	—	8.5	—	1.0	ハケメ後ナデ，ヨコナデ	ナデ	ナデ	指ナデ	外器面に赤色顔料	
100	532	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	Vb 層	—	8.5	—	1.6	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	ナデ	ヨコナデ，指頭圧痕	ヘラケズリ後指ナデ		
100	533	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	—	—	8.1	—	—	ヨコナデ，ナデ	ナデ	ナデ，ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ，指頭圧痕		
100	534	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	1 層	—	(9.0)	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	ナデ，ケズリ	ケズリ		
100	535	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	1 層	—	9.1	—	1.1	ヨコナデ，ナデ	ナデ	指頭圧痕，不明	指ナデ	外器面に意図的な打ち欠き有	
100	536	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK006	Vb 層	—	8.3	—	—	ナデ	ナデ	ナデ，ヘラケズリ後指ナデ	ヘラケズリ後指ナデ	外器面に黒斑有	
100	537	Ⅶ区	土師器	小型鉢	4 SK006	Vb 層	—	—	(11.2)	—	指頭圧痕，指ナデ	ナデ	指頭圧痕，ヘラケズリ	ナデ	外底面に黒斑有	
100	538	Ⅶ区	土師器	小型鉢	4 SK006	Vb 層	6.0	—	(11.8)	2.9	指ナデ，ナデ	ナデ	ナデ，指ナデ	指ナデ	外器面に煤付着	
100	539	Ⅶ区	土師器	小型鉢	4 SK006	1 層	9.1	—	(9.6)	—	ハケメ後ナデ	—	ハケメ後ナデ	—		
100	549	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SK006	Vb 層	—	—	—	(7.8)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ		
100	550	Ⅶ区	土師器	把手	4 SK006											
100	551	Ⅶ区	土師器	甑の把手	4 SK006	1 層	—	—	—	—	指押え	—	ヘラケズリ？	—		
104	556	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK032	—	—	—	14	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		22
104	557	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK032	—	—	—	16.1	—	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ	—	ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ	—	粘土巻上げ痕	
104	558	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK032	—	—	—	12.7	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ，指頭圧痕	—	外器面に黒斑有	
104	559	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK032	3 層	—	—	12.4	—	ヨコナデ，ナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	
104	560	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK032	—	—	—	10.4	—	ハケメ，ナデ	—	ナデ，ヘラケズリ	—		
104	561	Ⅷ区	土師器	壺	5 SK032	—	—	—	(13.8)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
104	562	Ⅷ区	土師器	壺	5 SK032	—	—	—	—	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—		
104	563	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SK032	—	16.0	—	(20.3)	(14.4)	ヨコナデ	ナデ，ハケメ後ナデ，ヘラケズリ	ナデ，ヨコナデ	ヘラケズリ，ナデ		
104	564	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SK032	—	—	—	15.3	—	ハケメ後ヨコナデ	—	ヨコナデ	指押え，ヨコナデ		
104	565	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SK032	3 層	—	—	(16.1)	—	—	—	ハケメ後ナデ，不明	—	外器面口縁部に黒斑有	
104	566	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SK032	—	—	—	—	—	—	—	ナデ	ヘラケズリ		
104	567	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SK032	—	14.0	—	16.2	12.1	ハケメ後ナデ，ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ，ヘラケズリ	ヨコナデ，ナデ	ナデ	意図的な打ち欠き有	27
104	568	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SK032	—	14.3	—	16.1	12.0	ナデ	タテヘラ，ヨコナデ，ナデ	ナデ	ナデ		27
104	569	Ⅷ区	土師器	器台	5 SK032	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ，ナデ	—	ナデ		
104	570	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SK032	—	6.8	11.2	13.1	—	ヨコナデ，ハケメ，不明	不明	ナデ	ナデ		
104	571	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SK032	—	12.1	15.1	16.3	—	ヨコナデ，ハケメ	ナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	外器面に煤付着	
104	572	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SK032		—	—	9.0	—	ナデ，不明	ナデ，不明	ハケメ，ナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	外器面を意図的に打ち欠いた可能性有	28
104	573	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SK032	—	—	—	—	(3.2)	ヨコナデ，ハケメ，不明	—	ナデ，指頭圧痕	指頭圧痕，ナデ		
107	575	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK036		—	—	13.9	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
107	576	Ⅷ区	土師器	壺	5 SK036	2 層	—	—	15.5	—	ヨコナデ，ハケメ，ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ，ハケメ	—		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
107	577	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK036		—	—	17.5	—	ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
107	578	Ⅷ区	土師器	壺	5 SK036	—	—	—	(20.1)	—	ヨコナデ，ナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ナデ	—	貼り付け刻目突帯	
107	579	Ⅷ区	土師器	埦	5 SK036		6.7	—	(15.2)	3.0	ナデ，ヘラケズリ(横，右下)	—	ナデ	—	外器面に黒斑有	
107	580	Ⅷ区	土師器	埦	5 SK036		—	—	(14.8)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	—	ナデ	—	外器面に煤付着	
107	581	Ⅷ区	土師器	坏	5 SK036	—	5.45	12.7	12.5	2.5	ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ	ナデ		29
107	582	Ⅷ区	土師器	坏	5 SK036		5.4	—	(14.2)	(3.2)	ナデ，ヘラ圧痕	ナデ	ナデ	ナデ		29
107	583	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SK036	—	—	—	25.5	—	ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
109	586	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK009	—	—	(24.0)	(15.3)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，指ナデ，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	22
109	587	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK009	1層，Vc層	—	18.8	(15.5)	—	ヨコナデ，ヨコ方向ハケメ，ハケメ後ナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ，ナデ	—	外器面に黒斑有	
109	588	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK009	Vc層	18.9	16.6	14.1	—	ナデ，ハケメ	ハケメ	ナデ，ヘラケズリ	ナデ	外器面に煤付着	22
109	589	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK009	Vc層	—	—	16.1	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ，指頭圧痕	—		
109	590	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK009	Vc層，1層，下層	—	18.4	16.4	—	ヨコナデ，ナデ，タタキ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
109	591	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK009	Vc層	—	—	(13.6)	—	ナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ハケメ，ナデ，ヘラケズリ	—		
109	592	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK009	Vc層	—	—	(15.4)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—		
109	593	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK009	Vc層	—	—	(17.8)	—	ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	—	内器面に黒斑有	
109	594	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK009	Vc層	—	—	11.2	—	ナデ，ケズリ後ナデ	—	ナデ，ケズリ，指頭圧痕	—	内外器面に煤付着	
109	595	Ⅶ区	土師器	直口壺	4 SK009	Vc層	—	—	(9.6)	—	ナデ	—	ナデ	—		
109	596	Ⅶ区	土師器	壺	4 SK009	Vc層	—	(25.1)	—	—	ナデ，ハケメ	—	ヘラケズリ	—		
110	597	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SK009	—	—	—	(20.4)	—	ヨコナデ	ハケメ後ナデ	ヨコナデ	ナデ	口縁部に一部黒斑有	
110	598	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SK009	Vc層	—	—	—	—	—	ナデ，ハケメ後ナデ	—	ナデ	外底面に黒斑有	
110	599	Ⅶ区	土師器	器台	4 SK009	Vc層	—	—	—	10.9	—	ハケメ後ナデ，ヨコナデ	—	ナデ，ヨコナデ	透かし孔有（脚部），外底面に黒斑有	
110	600	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SK009	下層	—	—	—	—	—	ナデ，ヘラケズリ	—	ナデ		
110	601	Ⅶ区	土師器	器台	4 SK009	Vc層	—	—	—	(13.8)	—	ヨコナデ，ナデ	—	ナデ，不明	透かし孔有（脚部），外底面に黒斑有	
110	602	Ⅶ区	土師器	器台	4 SK009	Vc層	—	—	9.8	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ	—	透かし孔有（脚部）	
110	603	Ⅶ区	土師器	器台	4 SK009	Vc層	—	—	—	—	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	穿孔有	
110	604	Ⅶ区	土師器	器台	4 SK009	—	—	—	(18.8)	—	—	ヨコナデ	—	ナデ	透かし孔有（脚部）	
110	605	Ⅶ区	土師器	小型鉢	4 SK009	—	—	(9.4)	(10.0)	—	ナデ	—	ナデ	—		
110	606	Ⅶ区	土師器	小型鉢	4 SK009	Vc層	—	(10.7)	(11.7)	—	—	—	—	—		
110	607	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK009	下層	—	—	(12.3)	—	—	—	—	—		
113	609	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK030	1層	—	—	(14.0)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ハケメ，指頭圧痕，ヘラケズリ	—		
113	610	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK032	V層	—	13.8	11.5	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
113	611	Ⅶ区	土師器	壺	4 SK032	—	—	—	16.3	—	ハケメ後ナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
113	612	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SK030	1層	—	—	18.1	—	ヨコナデ，ナデ，ハケメ後ナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ		
113	613	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK030	1層，Vc層	(8.8)	(8.6)	(7.4)	—	ハケメ後ナデ，ハケメ	ハケメ	ハケメ後ヨコナデ，ヘラケズリ	ケズリ		
113	614	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK032	—	9.1	10.2	10.5	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	外器面に黒斑有	
113	615	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SK032	—	—	—	—	(11.8)	—	ナデ，ハケメ，ケズリ	—	—		
113	616	Ⅶ区	土師器	壺	4 SK032	—	—	(28.0)	—	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
114	618	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK037	—	—	—	—	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—		24
114	619	Ⅶ区	土師器	坏	4 SK037		—	—	(11.5)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	ヨコナデ	—	外器面に黒斑有，赤色顔料	
115	620	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK039	V層	—	19.1	—	—	ハケメ，タタキ	—	タタキ，ケズリ，ハケメ	—		
115	621	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK039	—	—	—	(14.8)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ケズリ，ヨコナデ	—		
115	622	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK039	—	—	—	(13.8)	—	ヨコナデ？	—	ヨコナデ？，ケズリ	—		
115	623	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK039	V層	—	(21.0)	(19.4)	—	ハケメ	—	ケズリ，指ナデ	—		
115	624	Ⅶ区	土師器	壺	4 SK039	V層	—	(23.6)	(14.0)	—	ハケ後ナデ	—	指ナデ，ハケメ？	—	一部外器面に黒斑有	

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
115	625	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SK039	2 層	—	—	—	—	ナデ，ハケメ後ナデ	—	ナデ？	ナデ？		
115	626	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SK039	—	—	—	—	—	—	ナデ，ケズリ	—	ナデ		
115	627	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SK039	—	—	—	—	—	—	ナデ	—	—		
115	628	Ⅶ区	土師器	器台	4 SK039	—	—	—	—	8.1	—	—	—	ナデ		
115	629	Ⅶ区	土師器	器台	4 SK039	—	—	—	—	(9.8)	ハケメ	—	ハケメ	—		
116	630	Ⅶ区	土師器	壺	4 SK022,026	3 層	—	—	(18.2)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	
116	631	Ⅶ区	土師器	甕	4 SK022	1 層	—	—	(16.6)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—		
116	632	Ⅶ区	土師器	壺	4 SK026	2 層	—	—	—	3.6	ナデ	ナデ	—	ナデ，指頭圧痕		
116	633	Ⅶ区	土師器	壺	4 SK026	1 層	—	—	—	5.6	ナデ，ハケメ	ナデ	ハケメ	ハケメ		
116	634	Ⅶ区	土師器	甑	4 SK026	3 層	—	—	(9.7)	(2.3)	ハケメ	—	ハケメ	—	穿孔有（1ヶ）	
118	636	Ⅷ区	土師器	甕	5 SK037	—	—	—	(16.1)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—		
118	637	Ⅷ区	土師器	壺	5 SK037	—	—	—	—	—	—	—	指押え	—		
118	638	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SK037	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
121	639	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	—	—	(23.6)	16.3	—	ハケメ後一部ナデ	—	ハケメ，ヘラケズリ	—		
121	640	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	下層	—	—	(19.2)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—		
121	641	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	下層	—	—	(15.8)	—	ヨコナデ，ハケ後ヨコナデ，不明	—	ハケメ後ヨコナデ，ヘラケズリ	—	外器面に黒色顔料	
121	642	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	下層	—	—	19.6	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラケズリ	—	粘土巻上げ痕	
121	643	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	下層	—	—	(14.8)	—	ハケメ，ヨコナデ	—	不明，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	
121	644	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	—	—	—	(15.0)	—	ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
121	645	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	—	—	—	(14.0)	—	ヨコナデ，ハケ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
121	646	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	B 層，D 層	—	—	15.2	—	ヨコナデ，ヘラケズリ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
121	647	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	—	—	—	(16.0)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ	—		
121	648	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	2 層	—	—	(17.8)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
121	649	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	—	15.85	12.5	11.1	—	ナデ，ハケメ	ナデ	ナデ一部ハケメ，ケズリ，ナデ	指頭圧痕		23
121	650	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	—	18.55	(15.8)	12.7	—	ヨコナデ，ハケ後ヨコナデ，ハケメ	ハケメ後一部ナデ	ハケメ後ヨコナデ，ケズリ	ナデ	外器面に煤付着	24
122	651	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	—	—	(16.3)	(14.0)	—	ヨコナデ，ハケ後ヨコナデ，ハケメ	—	ヘラケズリ後ナデ	—		
122	652	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	B 層，C，D 層	—	—	(16.8)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		
122	653	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	F 層	—	—	(15.0)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ケズリ後ナデ，ヨコナデ，指頭圧後ナデ	—		
122	654	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	—	—	(15.2)	(13.0)	—	不明，ハケメ	—	ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	
122	655	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	—	—	(16.2)	12.8	—	不明，ハケメ	—	ハケメ後ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
122	656	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	—	—	—	(20.8)	—	ナデ，ハケメ後ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ナデ，ハケメ後ナデ，指押え	—		
122	657	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	上層	—	(22.5)	(18.0)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ	—		
122	658	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	上層	—	(26.0)	(18.8)	—	ハケメ後ナデ，ヨコナデ	—	ケズリ，指頭圧痕，ハケメ後ナデ	—	粘土巻上げ痕	
122	659	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	—	13.7	(15.4)	(13.0)	(4.0)	ヨコナデ，ナデ，ハケメ後ナデ	ナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ		
122	660	Ⅶ区	土師器	甕	4 SX049	1 層	—	(24.2)	(16.4)	—	ハケメ後ナデ，不明	—	ヘラケズリ，指頭圧痕，不明	—		
123	661	Ⅶ区	土師器	壺	4 SX049	—	—	—	(14.6)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ，ナデ	—		
123	662	Ⅶ区	土師器	壺	4 SX049	下層	—	—	18.0	—	ヨコナデ後ハケメ，不明	—	ハケメ，ヘラケズリ	—		
123	663	Ⅶ区	土師器	壺	4 SX049	中層，C層，下層	—	(22.0)	(14.9)	—	ナデ，ハケメ	—	ヘラケズリ，不明	—	外器面に黒斑有	
123	664	Ⅶ区	土師器	壺	4 SX049	下層	—	(17.5)	(13.6)	—	ハケメ後ナデ，ハケメ後ヨコナデ	—	ハケメ後ナデ，ケズリ後指ナデ	—	外器面に一部煤付着	26
123	665	Ⅶ区	土師器	壺	4 SX049		—	—	16.5	—	ヨコナデ，ハケ	—	ケズリ，ヨコナデ	—		
123	666	Ⅶ区	土師器	壺	4 SX049	中層	—	25.6	18.3	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ケズリ	—	外器面に黒斑有	
123	667	Ⅶ区	土師器	二重口縁壺	4 SX049	中層	—	22.2	13.2	—	ヨコナデ，ハケ後ヨコナデ，ハケメ	—	ハケメ後ヨコナデ，ケズリ	—		
124	668	Ⅶ区	土師器	壺	4 SX049	中層	—	(15.9)	(11.0)	—	不明	—	ハケ後ヨコナデ，ヘラケズリ，指ナデ	—		
124	669	Ⅶ区	土師器	壺	4 SX049	中層	—	(13.3)	(11.1)	—	不明，ハケメ	—	ハケメ，ヘラケズリ	—		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
124	670	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	F 層	—	—	(18.0)	—	ハケメ後ヨコナデ	—	ハケメ後ヨコナデ	—		
124	671	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	—	—	—	(17.3)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ	—		
124	672	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	—	—	—	16.6	—	—	—	—	—	内外器面に黒斑有	
124	673	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	下層	—	—	(17.3)	—	ナデ	—	ナデ，ハケメ	—		
124	674	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	—	—	—	13.4	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ	—	外器面に黒斑，全体に赤色顔料有	
124	675	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	D 層	15.5	—	15.8	(12.4)	ナデ，ハケメ，ヨコナデ	ナデ	ナデ	ヘラケズリ，ナデ		27
124	676	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	D 層	—	—	—	11.1	ナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ，ナデ	透かし孔有（脚部，4）	27
125	677	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049		—	—	16.8	—	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後ナデ		
125	678	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	下層	—	—	(18.0)	—	ナデ	—	ナデ	—		
125	679	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	—	—	—	17.4	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ	—		
125	680	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	下層	—	—	(20.5)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ	—		
125	681	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	—	—	—	(19.0)	—	ハケメ	ハケメ，ヨコナデ，ナデ	ハケメ	ナデ	外器面に黒斑有	
125	682	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	中層	—	—	17.6	—	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ，ヨコナデ	ナデ	外器面に黒斑有	
125	683	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	2 層	—	—	—	—	—	ナデ	—	ヘラケズリ，ナデ		
125	684	Ⅷ区	土師器	高坏	4 SX049	—	—	—	—	(9.4)	—	ナデ，ヨコナデ	—	ナデ		
125	685	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	—	—	—	—	—	—	ナデ，ヘラケズリ	—	ナデ		
125	686	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	—	—	—	—	(12.5)	—	ナデ，ヘラケズリ	—	—		
125	687	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX049	中層	—	—	—	—	—	ヨコナデ，ナデ，ハケメ後ナデ	—	ヘラケズリ，ヨコナデ		
125	688	Ⅷ区	土師器	器台	4 SX049	C，D 層	—	—	—	—	ヨコナデ，ナデ	ヨコナデ，ナデ	ヨコナデ	ナデ，ヘラケズリ		
125	689	Ⅶ区	土師器	器台	4 SX049	2 層	—	—	—	—	—	ハケメ後ナデ	—	ナデ	透かし孔有（脚部，4）	
125	690	Ⅶ区	土師器	器台	4 SX049	—	—	—	—	(7.0)	ナデ	—	ナデ	—		
125	691	Ⅷ区	土師器	鼓形器台	4 SX049	C，D 層	—	—	—	—	ヨコナデ	—	ナデ，ヘラケズリ	—		
125	692	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX049	2 層	—	—	(12.7)	—	—	—	—	—	外器面に黒斑有	
125	693	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX049	2 層	4.4	—	11.5	—	ナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	板状工具痕	板状工具痕	外器面に黒斑有	
125	694	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX049	—	(5.0)	—	(11.8)	—	—	—	—	—		
125	695	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX049	中層	5.9	—	16.0	—	ハケメ	—	ナデ	—		39
125	696	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX049	中層	5.0	—	(12.2)	—	ヘラケズリ	ケズリ？	ナデ，ヨコナデ	ナデ	外器面に黒斑有	
125	697	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX049	2 層	—	—	(15.0)	—	ナデ，ハケメ	ハケメ	ナデ	ナデ	内外器面に煤付着	
125	698	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX049	上層	—	—	(14.6)	—	—	—	—	—	外器面に煤付着	
125	699	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX049	上層	—	—	(14.0)	—	—	—	—	—		
125	700	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX049	中層	5.0	—	13.8	—	—	—	ハケメ	—		
126	701	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX049	6 層	4.7	—	12.9	—	ヨコナデ，ナデ	ハケメ	ヨコナデ，ナデ	—		
126	702	Ⅷ区	土師器	鉢	4 SX049	—	5.65	—	12.4	—	ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ナデ	ナデ		29
126	703	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX049	—	3.3	—	(13.9)	(6.8)	ヨコナデ，ヘラケズリ？	ヘラケズリ？	ヨコナデ	ヨコナデ	内外器面に赤色顔料	
126	704	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX049	2 層	—	—	(12.5)	—	ヨコナデ後ヘラミガキ，ヘラケズリ後ヘラミガキ	—	ヨコナデ後ヘラミガキ	—		
126	705	Ⅷ区	土師器	鉢	4 SX049	—	6.4	(10.9)	(13.3)	1.8	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ		
126	706	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SX049	下層	—	—	(15.0)	—	ナデ	—	ナデ	—		
126	707	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SX049	下層	—	(11.9)	(13.0)	—	ハケメ	—	ナデ後ハケメ	—		
126	708	Ⅷ区	土師器	甑	4 SX049	C，D 層	—	—	(20.2)	—	ハケメ	—	ハケメ	ハケメ		
126	709	Ⅷ区	土師器	甕	4 SX049	—	—	—	(10.7)	—	ヨコナデ，ナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
126	710	Ⅶ区	土師器	小型二重口縁壺	4 SX049	中層，2 層	—	—	10.3	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	外器面に黒斑有	
126	711	Ⅷ区	土師器	小型甕	4 SX049	D 層	—	—	(10.6)	—	ヨコナデ	—	指頭圧痕，横ナデ	—		
126	712	Ⅶ区	土師器	小型甕	4 SX049	—	—	(12.3)	(11.4)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヘラケズリ，ヨコナデ	—	内器面に黒斑有	
126	713	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SX049	下層	8.5	8.8	9.2	—	ハケメ後ナデ	ハケメ	ハケメ後ヨコナデ	ナデ		30

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
126	714	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	下層	10.1	8.5	—	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ	—	外器面に黒斑有	
126	715	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	—	8.5	(8.2)	(7.0)	—	ナデ，ハケメ後ナデ	ナデ，ハケメ	ナデ，ヘラケズリ	指頭圧痕		30
126	716	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	—	—	7.4	(6.0)	—	ナデ，ハケメ	ナデ	ナデ	ナデ		30
126	717	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	下層	—	9.1	7.9	—	ハケメ後ヨコナデ，ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	—		30
126	718	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	下層	8.8	(7.8)	(5.8)	—	ナデ，ハケメ	ハケメ	ナデ，指ナデ	指ナデ		30
126	719	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	1層	8.9	8.5	8.1	—	ナデ，ハケメ	ハケメ	ナデ	—	外器面に黒斑有	
126	720	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	—	—	8.3	—	—	ヨコナデ，ハケメ	—	指頭圧痕，ヘラ状工具痕	ナデ	外器面に煤付着，黒斑有	
126	721	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	—	9.6	—	7.8	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ		30
126	722	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	2層	—	(7.4)	(7.0)	—	ハケメ	—	ハケメ，ヘラケズリ後指ナデ	—		
126	723	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	上層	—	(8.7)	(10.9)	—	ヨコナデ	—	ナデ，指頭圧痕	—		
126	724	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	中層	—	(8.1)	(10.0)	—	ハケメ	—	ハケメ，ヘラケズリ	—	粘土巻上げ痕	
126	725	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	—	7.0	(6.4)	(8.6)	—	ハケメ後ナデ	ナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ		
127	726	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	—	(8.2)	9.0	—	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ハケメ，ナデ	—	内外器面に黒斑有	
127	727	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	—	—	9.8	8.4	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，指ナデ	指ナデ	外器面に黒斑有	30
127	728	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	—	9.3	11.1	9.1	—	ハケメ後ナデ，ハケメ	ヘラケズリ後指ナデ	ヘラケズリ，ヨコナデ	指ナデ	外器面に黒斑有	30
127	729	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	—	7.5	8.4	(6.5)	—	ハケメ	—	ナデ	ヘラケズリ	外器面に黒斑有	
127	730	Ⅷ区	土師器	小型壺	4 SX049	—	8.1	10.1	(10.9)	(2.8)	ナデ，ハケメ	ハケメ後ナデ	ナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ		
149	798	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040	—	19.0	17.8	15.0	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	内外器面に黒斑有	23
149	799	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040	C層	—	—	18	—	口縁部ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
149	800	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040	—	—	—	(15.6)	—	タタキ	—	ハケメ	—		
149	801	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040		—	—	(16.2)	—	ハケメ，ヨコナデ	—	ヘラケズリ	—	外器面に赤色顔料	
149	802	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040	④区D層	—	(21.0)	(16.8)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
149	803	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040	F層，E層	—	(20.2)	(15.6)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヘラケズリ	—	外器面口縁部に煤付着，内器面に指頭圧痕	
149	804	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040	E層	—	—	(16.4)	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—	口縁部外器面に指整形痕有	
149	805	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040	トレンチ	—	18.0	(15.2)	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—		
149	806	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040		—	(25.2)	(20.2)	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—		
149	807	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040	DE層	—	—	17.0	—	ハケメ後ナデ	—	ヘラケズリ，指頭圧痕	—	外器面に黒斑有	
150	808	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040	—	18.0	16.0	13.4	—	ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	—	ハケメ	—	外器面に黒斑有	23
150	809	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040	D層	—	15.5	13.1	—	ハケメ後ヨコナデ	—	ヘラケズリ，ナデ，不明	—		23
150	810	Ⅷ区	弥生土器	脚台付甕	5 SX040	—	—	—	—	—	ハケメ後ナデ	ナデ	ハケメ	ハケナデ		
150	811	Ⅷ区	土師器	二重口縁甕	5 SX040	—	—	—	(42.7)	—	ハケメ後ヨコナデ	—	ハケメ	—		
150	812	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040	—	—	(19.9)	(14.8)	—	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	
150	813	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX040	DE層	—	—	14.6	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヘラケズリ	—		
150	814	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX040	E層	—	—	(10.0)	—	ヨコナデ	—	ハケメ	—		
150	815	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX040		—	(28.2)	—	—	ハケメ，不明，ヘラケズリ	—	ハケメ後不明，ヘラケズリ	—	外器面に黒斑，粘土巻上げ痕有	
150	816	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX040	E層	—	(22.9)	(11.8)	—	ハケメ，不明	—	指頭圧痕，ケズリ	—	外器面に赤色顔料，煤付着，内器面に黒斑有	
151	817	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SX040	D・E層	—	—	23.6	—	ハケメ後ナデ	—	ヘラケズリ，ハケメ後ナデ	—	外器面に黒斑有	26
151	818	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SX040	E層	—	—	—	—	ハケメ，ナデ，ハケによる紋様	—	ハケメ後ヨコナデ	—		
151	819	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX040	—	—	—	—	—	ヨコナデ，不明	—	ヨコナデ，ケズリ，ハケメ	—	刻み目有，押し型文	
151	820	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX040	—	—	—	—	(5.7)	ハケメ	ナデ	ハケメ	ハケメ後指押え		
151	821	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX040		—	—	—	5.0	ハケメ	葉脈痕	—	ハケメ後ヘラ状工具痕		
151	822	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SX040	E層	—	—	—	—	ハケメ後ヨコナデ	—	ハケメ後ヘラケズリ	—		
151	823	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX040	—	—	(59.8)	—	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ハケメ	—		
152	824	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	DE層	13.0	13.9	9.1	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ，ナデ	—	上下に指頭ケズリ	—		25

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
152	825	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX040	E 層	(13.45)	16.1	7.7	—	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ヘラケズリ，口縁部に指頭圧痕	ヘラケズリ	外器面に黒斑有	
152	826	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX040	E 層，F 層	9.8	12.1	—	—	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	外器面に黒斑有	
152	827	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SX040	—	—	—	(13.5)	—	ヨコナデ，ケズリ	—	ヨコナデ	—		
152	828	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SX040	—	—	—	—	(11.8)	ナデ	ナデ，ハケメ後ヨコナデ，ケズリ	—	ナデ	穿孔有（2ヶ）	
152	829	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SX040	—	—	—	—	(16.0)	—	ナデ，ハケメ後ヨコナデ，ケズリ後ナデ	—	不明	穿孔有（3ヶ）	
152	830	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SX040	E 層	—	—	(17.9)	—	ハケメ後ヨコナデ	ナデ，ヘラケズリ	ヨコナデ，ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ		27
152	831	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SX040	E 層	—	—	—	(10.0)	—	ハケメ後ナデ	—	ナデ	穿孔有（1ヶ）	
152	832	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SX040	E 層	—	—	(18.9)	—	ハケメ後部分的ヨコナデ	—	ハケメ，ミガキ	—	接合痕有	27
152	833	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SX040	—	—	—	(22.4)	—	ハケメ後ヨコナデ	—	不明	—		
152	834	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SX040	D 層	—	—	(15.0)	—	ハケメ	—	不明	—	内外器面に黒斑有	
152	835	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SX040	—	—	—	(13.5)	—	ヨコナデ	—	不明，ヨコナデ，ナデ	—		
152	836	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SX040	6 層	3.9	—	12.3	—	ヨコナデ，指頭圧痕	ハケメ	ヨコナデ後指頭圧痕	ヨコナデ後指頭圧痕後ナデ		29
152	837	Ⅷ区	土師器	小型鉢	5 SX040	C 層	(5.2)	—	—	—	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ	指頭圧痕後ナデ	指頭圧痕後ナデ	外器面に黒斑有	
152	838	Ⅷ区	土師器	小型鉢	5 SX040	E 層，D 層	—	—	(12.5)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ，ケズリ後指ナデ	—		
152	839	Ⅷ区	土師器	小型鉢	5 SX040	C 層	9.7	(12.7)	(13.0)	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	ハケメ，ヨコナデ	ケズリ	外器面に煤付着	
152	840	Ⅷ区	土師器	小型甕	5 SX040	—	11.2	11.9	11.5	—	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ケズリ	ヨコナデ，ケズリ	内器面，内底面に鉄粉付着	
152	841	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	—	8.4	8.4	(9.0)	—	ヨコナデ，ハケメ，ケズリ	ケズリ	ナデ，ヘラケズリ後指頭圧痕	ヘラケズリ後指頭圧痕	外器面に黒斑有	
152	842	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	④D 層	7.5	8.0	9.1	—	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ後指押え		31
152	843	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040		9.3	9.5	9.7	—	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ヘラケズリ，指頭圧痕	ヘラケズリ後指頭圧痕	内外器面に黒斑有	30
152	844	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	D 層	—	—	8.2	—	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ	—	ヨコナデ，ケズリ後指押え	—		
152	845	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	—	8.6	8.4	8.2	—	ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ヘラケズリ，指押え	ヘラケズリ		30
152	846	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	④D 層	7.8	8.6	7.2	—	ヨコナデ，ケズリ	ケズリ	ヨコナデ，ケズリ後指押え	ヘラケズリ後指押え	外器面に黒斑有	31
153	847	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	—	11.7	—	(10.2)	—	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ヘラケズリ後指押え	ヘラケズリ後指押え		31
153	848	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	E 層	—	—	—	—	ヨコナデ，タタキ	タタキ	ヨコナデ，ヘラケズリ後指押え	ヘラケズリ後指押え	胴部側面に意図的打ち欠きと穿孔	
153	849	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	AB 層，B 層	—	(10.0)	—	—	—	—	指ナデ，ケズリ	指ナデ，ケズリ	外器面に黒斑有	
153	850	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
153	851	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	E・F 層	7.4	7.9	8.6	—	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヘラケズリ後指押え	ヘラケズリ後指押え	外器面に黒斑有	30
153	852	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040		7.7	—	8.4	—	ハケメ，ナデ	—	ナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ		
153	853	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	—	—	8.1	—	—	ハケメ	ケズリ	ヘラケズリ後指押え	ヘラケズリ後指押え		
153	854	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX040	E 層	—	—	—	4.7	ケズリ	葉脈痕有	—	ヘラケズリ		
153	855	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	—	—	7.5	—	(3.2)	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ケズリ，指頭圧痕	ケズリ		
153	856	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	—	8.3	—	(11.2)	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	ヨコナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ	ヘラケズリ		
153	857	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX040	B 層	—	—	(6.8)	—	ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ナデ	—		
153	858	Ⅷ区	土師器	小型鉢	5 SX040	D 層	6.8	—	(10.7)	—	ハケメ後ヨコナデ	指押え	ヘラケズリ後指ナデ	ヘラケズリ後指ナデ		
153	859	Ⅷ区	土師器	小型鉢	5 SX040	D 層	6.3	—	9.9	—	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ハケメ後ヨコナデ	ヘラケズリ後指ナデ	外器面に黒斑有	29
153	860	Ⅷ区	土師器	小型鉢	5 SX040	—	7.9	10.2	9.4	—	ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	ミガキ	ハケメ後ヨコナデ	指頭圧痕	外器面に黒斑有	31
153	863	Ⅷ区	土師器	器台	5 SX040	bc 層	—	—	—	7.4	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	ハケメ，ヨコナデ	—	—		
154	880	Ⅷ区	土師器	甑	5 SX040	BC 層，1 層	22.5	—	25.6	—	ハケメ	くりぬいた後整形，ナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ		31
154	881	Ⅷ区	須恵器	蓋	5 SX040	—	—	—	—	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ，ナデ	—		
154	882	Ⅷ区	土師器	坏	5 SX040	E 層	4.5	12.1	11.4	—	不明	不明	不明	不明	外器面に黒斑有	29
162	924	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX051	—	—	—	(19.8)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
162	925	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX051	D 層	—	—	(14.0)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着，粘土巻上げ痕	
162	926	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX051	—	—	—	(14.4)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヨコヘラ，指頭圧痕	—	外器面に黒色顔料塗布	
162	927	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX051	D 層	—	—	(18.2)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ハケメ	—	外器面に煤付着	23

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
162	928	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX051	D1，D2層	—	—	(14.0)	—	ヨコナデ，ナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ，ヘラ圧痕	—	粘土接合痕，外器面に黒斑有	
162	929	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX051	—	—	—	(17.4)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有，粘土接合痕	
162	930	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX051	—	—	—	(13.8)	—	ハケメ後ナデ，ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	外器面に黒斑有	24
162	931	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX051	—	—	—	(14.8)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ハケメ，ナデ，ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
162	932	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX051	—	—	—	18.4	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ナデ，ハケメ，ヨコ指ナデ，ヘラケズリ	—		
163	933	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX051	—	—	—	(22.0)	—	ナデ，ハケメ	—	ナデ，ハケメ，ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
163	934	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	5 SX051	D層	—	—	(12.6)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		26
163	935	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SX051	—	—	—	—	—	ナデ，ヨコナデ	ナデ，ヨコナデ，ヘラケズリ	—	—	外器面に煤付着	
163	936	Ⅷ区	土師器	器台	5 SX051	A～B層	—	—	—	—	—	ナデ，ケズリ	—	ヘラケズリ，ナデ	穿孔有（中央部）	
163	937	Ⅷ区	土師器	甑	5 SX051	—	—	—	(27.4)	—	ハケメ，ナデ，ヨコナデ	—	ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
163	938	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SX051	D層	—	—	9.3	4.2	指頭圧痕，ハケメ後ナデ	—	ハケメ後ナデ，指頭圧痕	指頭圧痕，ナデ	外器面に黒斑有	29
163	939	Ⅷ区	土師器	鉢	5 SX051	—	—	—	(15.2)	(3.2)	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	ヨコナデ，ハケメ	指ナデ	外器面に煤付着	
163	940	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX051	—	8.6	—	10.9	1.0	ハケメ，ナデ	ハケメ	ハケメ，ヨコナデ	ナデ	外器面に黒斑有	30
163	941	Ⅷ区	土師器	小型壺	5 SX051	—	7.7	8.2	7.1	2.0	ヨコナデ，ハケメ	ナデ	ヨコナデ，ナデ，指頭圧痕	指頭圧痕	外器面に黒斑有	31
163	946	Ⅷ区	弥生土器	甕	5 SX051	—	—	—	—	9.6	ハケメ後ナデ，ナデ	ナデ，ヨコナデ	—	ナデ		
163	947	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SX051	—	—	—	—	(9.0)	ハケメ，ナデ，ヘラナデ，ヨコナデ	—	ナデ，ヨコナデ	ナデ	透かし孔有（脚部3ヶ）	
163	948	Ⅷ区	土師器	甕	5 SX051	—	—	—	—	(10.0)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	—		
163	950	Ⅷ区	土師器	甑の把手	5 SX051	—	—	—	—	—	ヘラケズリ	—	指ナデ，ハケメ	—		
163	951	Ⅷ区	須恵器	蓋	5 SX051	D層，Vc層	4.7	—	12.8	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ	—		
169	973	Ⅷ区	土師器	長胴甕	5 SD038	Ⅳ層	—	(22.6)	(14.9)	—	ハケメ後ナデ，ナデ，タタキ	—	ハケメ，ナデ	—		18
169	974	Ⅷ区	土師器	長胴甕	5 SD038	Vc層	—	—	—	1.1	タタキ後ハケメ	—	指頭圧痕	指頭圧痕		
173	975	Ⅷ区	土師器	甕	b—34G	—	—	(20.0)	—	(3.4)	ハケメ	ハケメ後ナデ	ハケメ	ハケメ		
173	976	Ⅷ区	土師器	甕	b—34G	—	—	—	—	3.9	ハケメ後ヘラナデ，指頭圧痕	ヘラナデ	ヘラケズリ	指頭圧痕	外器面に黒斑有	
173	977	Ⅷ区	土師器	器台	b—34G		—	—	(14.8)	—	—	—	ナデ	—		
173	978	Ⅷ区	土師器	甕	b—34G	—	—	(13.9)	(15.4)	—	ハケメ後ナデ	—	ハケメ後ナデ	—		
173	979	Ⅷ区	土師器	鉢	b—34G	—	11	15.5	12.6	2.8	ナデ，タタキ，ハケメ後ナデ	—	ナデ	ナデ	外器面，外底面に黒斑有，内器面に赤色顔料	18
173	980	Ⅷ区	土師器	壺	b—34G	—	—	25.0	—	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ナデ，ヘラナデ	—	粘土巻上げ痕，指頭圧痕	
175	981	Ⅷ区	土師器	長胴甕	c—33G		31.4	(18.9)	(16.4)	—	ナデ後ハケメ，タタキ後ハケメ後ナデ	—	ハケメ	ハケメ		18
175	982	Ⅷ区	土師器	長胴甕	c—33G	—	—	—	(20.5)	—	タタキ	—	ヨコナデ，ハケメ	—		
175	983	Ⅷ区	土師器	長胴甕	c—33G	—	—	—	—	—	タタキ，ハケメ後ナデ	—	ハケメ	—		
175	984	Ⅷ区	土師器	長胴甕	c—33G		—	19.2	17	—	ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ヘラ状工具痕，ヘラケズリ	—		
175	985	Ⅷ区	土師器	甕	c—33G		—	16.5	15.3	—	タタキ	—	ヨコナデ，ハケメ，ケズリ？	—		
175	986	Ⅷ区	土師器	甕	c—33G	—	—	(18.0)	—	1.1	タタキ	—	ハケメ，ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
175	987	Ⅷ区	土師器	甕	c—33G	—	26.1	22.3	(15.3)	—	タタキ，ヘラケズリ	—	ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	—	外器面と黒斑有	
176	988	Ⅷ区	土師器	甕	c—33G	—	13.9	14.8	14.3	2.8	ナデ，ハケメ	ハケメ	ナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ		
176	989	Ⅷ区	土師器	壺	c—33G		—	—	(16.8)	—	ハケメ，ヘラミガキ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	ハケメ，ヘラケズリ	—		
176	990	Ⅷ区	土師器	壺	c—33G	—	—	—	—	—	ヨコナデ	—	ハケメ後ナデ	—		
176	991	Ⅷ区	土師器	高坏	c—33G	—	—	—	—	(15.0)	—	ハケメ後ナデ，指ナデ	—	—		
176	992	Ⅷ区	土師器	壺	c—33G	—	—	—	—	—	ハケメ，ヘラ磨き後ヘラケズリ，ナデ	—	ハケメ，ヘラケズリ，ナデ	—	外器面に黒斑有	
177	993	Ⅷ区	土師器	甕	e—32G	—	19.8	(18.8)	(13.3)	—	ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ，指頭圧痕	—		
177	994	Ⅷ区	土師器	長胴甕	a—33G	—	—	—	(16.9)	—	ヨコナデ，ハケメ，タタキ後ハケメ	—	ヨコナデ，ハケメ	—	内，外器面に煤付着	
177	995	Ⅷ区	土師器	甕	a—34G	Vc層	—	—	(16.5)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
177	996	Ⅷ区	土師器	甕	Z—33G	Vc層	—	(17.5)	—	—	ヨコナデ，タタキ後ハケメ	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—		
177	997	Ⅷ区	土師器	甕	b—34G	—	—	—	(16.9)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ハケメ後ナデ	—	粘土巻上げ痕	

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
177	998	Ⅷ区	土師器	甕	c－34G	－	－	(21.9)	(16.0)	－	ハケメ	－	ヨコナデ，ハケメ，ヘラナデ	－	外器面に黒斑有	
178	999	Ⅷ区	土師器	甕	Z－33G	－	－	－	(15.6)	－	ナデ，タタキ後ハケメ後ナデ	－	ハケメ後ナデ	－	粘土巻き上げ痕	
178	1000	Ⅷ区	土師器	甕	Z－35G	－	－	－	(16.8)	－	ナデ，ハケメ後ナデ	－	ヨコナデ，ヘラケズリ	－		
178	1001	Ⅷ区	土師器	甕	b－34G	－	－	(25.2)	(24.7)	－	タタキ後ナデ	－	ハケメ	－		
178	1002	Ⅷ区	土師器	甕	Y－26G	Vb層	－	23.1	(17)	－	ハケメ，ハケメ後ナデ，ヨコナデ	－	ヘラケズリ，ナデ，ハケメ	－		
178	1003	Ⅷ区	土師器	甕	Y－27G	Va層，Vc層	－	(22.2)	(17.4)	－	ハケメ，ヨコナデ	－	ケズリ，ヨコナデ	－		
178	1004	Ⅷ区	土師器	甕	c－34G	－	－	－	(14.4)	－	ヨコナデ	－	ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ	－		
178	1005	Ⅷ区	土師器	甕	Z－29G	Vc層	－	－	(19.6)	－	ナデ，ハケメ	－	ヘラケズリ，ヨコナデ	－	外器面全体に赤色顔料	
178	1006	Ⅷ区	土師器	甕	c－34G	－	－	－	(15.4)	－	ヨコナデ	－	ヨコナデ，ヘラケズリ	－		
179	1007	Ⅷ区	土師器	壺	e－33G	L03層，Vc層	－	23.7	(13.5)	－	ヨコナデ，ナデ，平行タタキ	－	指押え後ナデ，ハケメ後ナデ	－	外器面に黒斑有	
179	1008	Ⅷ区	土師器	壺	一括	－	－	－	16.7	－	ハケメ，不明	－	不明，ハケメ	－	口縁部と頸部接合痕有	
179	1009	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	b－34G	－	－	－	15.3	－	ナデ	－	ヨコナデ	－		
179	1010	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	V－27G	Vc層	－	－	(26.5)	－	ナデ	－	ナデ	－	櫛描文，竹管文	
179	1011	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	Z－33G	－	－	－	(28.0)	－	ハケメ後ヨコナデ	－	ヨコナデ	－		
179	1012	Ⅷ区	土師器	壺	c－34G	－	－	－	－	5.1	ハケメ，ハケメ後ナデ	ナデ	ハケメ	ハケメ		
179	1013	Ⅷ区	土師器	二重口縁壺	X－29G	Vc層	－	－	－	－	ナデ	－	－	－	刻目文	
179	1014	Ⅷ区	土師器	無頸壺	Y－29G	Vc層	－	－	(16.4)	－	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	－	ヨコナデ，ヘラケズリ	－	外器面の一部に赤色顔料	
179	1015	Ⅷ区	土師器	壺	a－34G	－	－	－	15.6	－	ナデ後ハケメ	－	ハケメ後ナデ，ヘラケズリ後指押え	－		
180	1016	Ⅷ区	土師器	高坏	b－34G	－	－	－	16.35	－	ナデ，ヨコナデ	－	ナデ，ヨコナデ	－		
180	1017	Ⅷ区	土師器	高坏	b－34G	－	－	－	(15.8)	－	－	－	－	－		
180	1018	Ⅷ区	土師器	高坏	Z－29G	Vc層	－	－	(14.1)	－	ヨコナデ	－	ヨコナデ，ナデ	－		
180	1019	Ⅷ区	土師器	高坏	b－34G	－	－	－	－	－	－	ハケメ後ナデ，ナデ，ヘラケズリ	－	－	透かし孔有（脚部4）	
180	1020	Ⅷ区	土師器	高坏	a－34G	－	－	－	－	(13.2)	－	ナデ，ヨコナデ，ヘラケズリ	－	ヘラケズリ	透かし孔有（脚部）	
180	1021	Ⅷ区	土師器	高坏	Y－29G	Vb層	－	－	－	(11.1)	－	ナデ，ヨコナデ，ヘラケズリ	－	－		
180	1022	Ⅷ区	土師器	高坏	b－34G	－	－	－	－	10.8	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	ナデ	ナデ，ヘラケズリ		
180	1023	Ⅷ区	土師器	器台	Y－27G	Va層，Ⅳ層	－	－	－	(14.0)	－	ヨコナデ	－	ナデ，ハケメ	透かし孔有	
180	1024	Ⅷ区	土師器	器台	a－28G	Vb層	－	－	－	－	平行タタキ後ナデ	－	指ナデ，平行タタキ後ナデ	－	外器面にカキメ，方形透かし孔有	
180	1025	Ⅷ区	土師器	器台	b－34G	－	－	－	－	8.8	－	ヨコナデ	ヘラケズリ，ハケメ	－	穿孔有（中央部）	
180	1026	Ⅷ区	土師器	器台	b－34G	－	－	－	－	9.6	－	ナデ，ハケメ，指押え，指頭圧痕	指頭圧痕	－	穿孔有（中央部）	
180	1027	Ⅷ区	土師器	器台	b－34G	－	7.6	－	11.6	9.7	ハケメ	－	－	－		27
180	1028	Ⅷ区	土師器	埦	c－34G	－	5.3	－	15.2	0.8	－	－	－	－		29
180	1029	Ⅷ区	土師器	埦	Y－26G	Vb層	4.7	－	(13.8)	－	ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	－	－	－	外器面に赤色顔料	
180	1030	Ⅷ区	土師器	埦	Y－26G	Vb層	3.7	－	(11.4)	－	－	－	－	－		
180	1031	Ⅷ区	土師器	埦	b－34G	－	(5.0)	－	(16.2)	(7.0)	－	ヘラケズリ	－	－		
180	1032	Ⅷ区	土師器	甑	Y－27G	Vc層	－	－	－	－	タタキ	－	ハケメ後ナデ	－	外器面に黒斑有，穿孔有(底部)	
180	1033	Ⅷ区	土師器	甑	X－26G	Vb層	－	－	－	(3.4)	ハケメ後ナデ	ナデ	ハケメ後ナデ	指押え	穿孔有（底部）	
180	1034	Ⅷ区	土師器	甑	e－32G	Vc層	12.6	(16.8)	(18.4)	－	ハケメ	－	－	－	穿孔有（底部）	
181	1035	Ⅷ区	土師器	鉢	Y－26G	Vc層	－	－	(15.2)	－	ケズリ，ハケメ後ナデ	－	ナデ，ハケメ	－		
181	1036	Ⅷ区	土師器	鉢	b－34G	－	－	－	－	－	－	－	指ナデ	ナデ	外器面に黒斑有	
181	1037	Ⅷ区	土師器	鉢	V－26G	Vc層	－	－	(13.2)	－	ナデ	－	ナデ	－	内外器面に赤色顔料	
181	1038	Ⅷ区	土師器	小型甕	V－27G	Vc層	－	(12.2)	(11.8)	－	ヨコナデ	－	ケズリ，ヨコナデ	－		
181	1039	Ⅷ区	土師器	小型甕	c－34G	－	－	(12.8)	(11.8)	－	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	－	ナデ	－		
181	1040	Ⅷ区	土師器	小型甕	b－34G	－	－	－	(13.0)	－	ヨコナデ，ハケメ，ヨコヘラミガキ後	－	ヨコナデ，ナデ	－		
181	1041	Ⅷ区	土師器	小型甕	c－34G	－	－	(11.7)	(10.4)	－	ヨコナデ，不明，ナデ	－	ナデ	－		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
181	1042	Ⅷ区	土師器	小型甕	b－34G	－	－	(12.6)	－	－	－	－	ナデ、ヘラケズリ	－		
181	1043	Ⅷ区	土師器	小型甕	b－34G	－	－	(12.3)	－	－	－	－	ナデ、指ナデ	－	外器面に赤色顔料	
181	1044	Ⅷ区	土師器	小型鉢	b－34G	－	－	－	(14.2)	－	ナデ	－	ナデ	－	外器面に煤付着	
181	1045	Ⅷ区	土師器	小型鉢	b－34G	－	－	－	－	－	－	－	－	－	外底面に黒斑有	
181	1046	Ⅷ区	土師器	小型壺	Y－26G	Vb層	－	8.6	－	－	ハケメ後ナデ，ヨコナデ	ハケメ後ナデ	ヨコナデ	指ナデ		
181	1047	Ⅷ区	土師器	小型壺	Z－31G	－	5.9	－	(10.0)	(1.8)	ナデ	－	ナデ	－		
181	1048	Ⅶ区	土師器	小型鉢	Y－27G	Vc層，Va層	－	－	(11.7)	－	ヨコナデ，ハケメ	ナデ	ヨコナデ，指ナデ	指ナデ後ヘラケズリ		
181	1049	Ⅶ区	土師器	小型鉢	Y－27G	Ⅳ～Vb層，V層	7.4	－	(14.6)	－	ヨコナデ	ケズリ後ナデ	ナデ，ケズリ	ナデ		
181	1050	Ⅶ区	土師器	注口土器	Y－26G	Vb層	－	－	－	－	ナデ	－	ナデ	－		
181	1051	Ⅶ区	土師器	甑	Y－26G,27G	V層	－	－	－	－	－	－	－	－		
194	1072	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SI012	－	－	－	(11.8)	－	ヨコナデ	ヘラ切り離し	ヨコナデ	ヨコナデ		
194	1073	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SI012	－	－	－	(15.7)	－	ヨコナデ	ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		
194	1074	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SI012	－	－	－	(13.4)	－	ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		
194	1075	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SI012	北ミゾ	3.5	(6.8)	(12.9)	－	ナデ	ヘラ切り離し	ヨコナデ	ナデ		36
194	1076	Ⅶ区	須恵器	高坏	4 SI012		－	－	－	－	－	ヨコナデ	－	ナデ		
194	1077	Ⅶ区	土師器	埦	4 SI012	Va層	－	－	－	(9.8)	ハケメ後ヨコナデ	－	－	ヨコナデ		
194	1078	Ⅶ区	須恵器	鉢	4 SI012	－	－	－	(11.7)	(9.6)	－	－	指頭圧痕	指頭圧痕	外器面に櫛歯刺突文	38
194	1079	Ⅶ区	須恵器	壺	4 SI012	V層	－	－	(9.0)	－	ヨコナデ	－	ヨコナデ	－		
194	1080	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI012		－	－	－	－	ナデ，ハケメ	－	ナデ，ケズリ	－		
194	1081	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI012	1層	－	－	－	－	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	－	ナデ，ヘラケズリ	－		
194	1082	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI012	Vb層	－	－	－	－	ハケメ後ナデ，ヨコナデ	－	ケズリ，ヨコナデ	－		
194	1083	Ⅶ区	須恵器	円面硯	4 SI012	上層	5.7	－	－	14.4	回転ナデ	－	ナデ	－	透孔有（3ヶ）	38
194	1084	Ⅶ区	土師器	坏	4 SI012	北ミゾ，Ⅳ層	(6.0)	－	(15.4)	－	ヨコナデ，ミガキ	ヨコナデ	ミガキ，ヨコナデ	ヨコナデ	内外器面ともに黒色顔料	
195	1086	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI012	1層	－	－	(17.0)	－	ヨコナデ	－	ヨコナデ，ケズリ	－		
195	1087	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI012		－	－	(17.6)	－	ヨコナデ	－	ハケメ，ケズリ	－		
195	1088	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI012	北ミゾ，Vb層	－	－	(14.8)	－	ハケメ後ヨコナデ，ハケメ	－	ハケメ，横方向のヘラケズリ	－		
195	1089	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI012	1～2層	－	－	(19.2)	－	ナデ，指頭圧痕	－	ハケメ後ヨコナデ，ケズリ	－		
195	1090	Ⅶ区	土師器	二重口縁壺	4 SI012	下層	－	－	－	－	ヨコナデ，ハケメ	－	ヨコナデ，不明	－	波状文	
195	1091	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI012	Vb層,1層,1～2層	－	－	－	－	ハケメ	－	ケズリ	－		
195	1092	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI012	Pit 4	－	－	(17.5)	－	ハケメ，ハケメ後ヨコナデ	－	ヘラケズリ，ハケメ後ヨコナデ	－		
195	1093	Ⅶ区	土師器	壺	4 SI012	Pit 4	－	－	(17.1)	－	ハケメ後ナデ	－	ヨコナデ，ヘラケズリ	－		
195	1094	Ⅶ区	土師器	壺	4 SI012	Vb層	－	(24.2)	－	－	ハケメ，ヨコナデ	－	ケズリ後ヨコナデ，ヨコナデ	－		
195	1095	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SI012	－	－	－	(17.1)	－	ハケメ，ハケメのちヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ナデ		
195	1096	Ⅶ区	土師器	壺	4 SI012	－	－	－	－	3.0	タタキ	ナデ	ハケメ	ハケメ		
195	1097	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SI012	1～2層，Vb層	－	－	－	－	ハケメ後ナデ	－	指ナデ	－		
195	1098	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SI012	Pit 3	－	－	－	(13.3)	－	ナデ，ヘラケズリ	－	ナデ		
197	1101	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SI016	Vb層	－	－	－	－	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	－	回転ナデ	－		
197	1102	Ⅶ区	須恵器	高坏	4 SI016	Vb層	－	－	－	－	－	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	－	ナデ	外底面の一部灰釉	
197	1103	Ⅷ区	土師器	小型甕	4 SI016	Vb層	－	－	－	－	ケズリ，ヨコナデ	－	ハケメ，ケズリ，ヨコナデ	－		
197	1104	Ⅶ区	土師器	甕	4 SI016	17層	－	－	(18.4)	－	ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ	－	ヨコナデ，ケズリ	－		
197	1105	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SK006	Vb層	－	－	(15.0)	－	ナデ，ハケメ	－	ナデ後ハケメ	－		
197	1106	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SI016	－	－	－	－	－	ナデ	ナデ	－	ナデ	粘土巻上げ痕	
197	1107	Ⅶ区	土師器	甑	4 SI016	Vb層	－	－	－	－	指ナデ	－	ヘラケズリ	－		
197	1108	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SI016	Vb層	－	－	(8.8)	－	ハケメ後ナデ	－	ハケメ後ナデ，ケズリ後ナデ	－		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
199	1110	Ⅷ区	須恵器	蓋	5 SI031	1層	3.1	—	14.6	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	—	ナデ，回転ヨコナデ	—	天井内器面に粘土巻上げ痕有	34
199	1111	Ⅷ区	須恵器	蓋	5 SI031	サブトレ②	4.4	—	(16.2)	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ	—		
202	1112	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SE017	掘り方	2.7	—	14.7	—	回転ヨコナデ	—	ナデ	—	外器面に自然釉	33
202	1113	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SE017	堀り方	—	—	(13.4)	—	回転ヘラケズリ回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—	天井部外器面に灰付着	
202	1114	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SE017	掘り方最下層	—	—	(13.0)	(6.1)	ケズリ後ナデ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	外底面に墨書	
202	1115	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SE017	掘り方	—	—	—	(9.2)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ナデ	外底面にツメ記号	
202	1116	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SE017	上層掘り方	—	—	—	(7.5)	回転ナデ	ヘラ切り後回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後指ナデ		
202	1117	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SE017	井戸木ワク内下層	—	—	—	(6.0)	回転ナデ	ヘラ切り	—	回転ナデ，指ナデ		
202	1118	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SE017	掘り方	—	—	—	—	回転ナデ	—	回転ナデ	—		
202	1119	Ⅶ区	須恵器	高坏	4 SE017		—	—	—	9.0	不明	不明	—	—	外器面に自然釉	
202	1120	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SE017	上層掘り方	—	—	—	—	回転ナデ	ヘラ切り，回転ナデ	—	—		
202	1121	Ⅶ区	土師器	高台付坏	4 SE017	掘り方最下層	—	—	—	(10.7)	—	ヘラ切り痕	—	回転ナデ，指ナデ	全体に赤色顔料	
202	1122	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SE017	井戸木ワク内括	—	—	—	(9.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ		
202	1123	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SE017	井戸木ワク内	5.65	—	(14.8)	(11.6)	回転ナデ，ヘラケズリ	ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ		
202	1124	Ⅶ区	須恵器	壺	4 SE017	井戸木ワク内	—	—	(11.6)	—	回転ナデ	—	回転ナデ	—		
202	1125	Ⅶ区	須恵器	壺	4 SE017	上層掘り方	—	—	(12.8)	—	回転ナデ	—	回転ナデ	—		
202	1126	Ⅶ区	須恵器	壺	4 SE017	上層掘り方	—	—	—	—	回転ナデ	—	回転ナデ	—		
202	1127	Ⅶ区	須恵器	壺	4 SE017	上層，掘り方	—	—	—	—	ナデ	—	あて具痕	—		
202	1128	Ⅶ区	須恵器	壺	4 SE017	上層掘り方	—	—	—	—	回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰付着，貼付突帯	
202	1129	Ⅶ区	須恵器	壺	4 SE017	—	—	—	—	(11.4)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
202	1130	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	井戸ワク内	—	—	—	(8.8)	回転ナデ	ナデ，ヘラ切離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，回転ヘラ暗紋		
202	1131	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	井戸ワク内	—	—	(13.8)	(9.4)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	内外器面に赤色顔料	
202	1132	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	最下層掘り方	—	—	—	7.4	—	ヘラ切り，回転ナデ	—	回転ナデ	赤色顔料	
202	1133	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	井戸木ワク内下層	—	—	—	(11.6)	—	回転ヨコナデ，回転ヘラ暗紋	—	回転ヨコナデ，回転ヘラ暗紋	内外器面に赤色顔料	
202	1134	Ⅶ区	土師器	高台付坏	4 SE017	掘り方	—	—	—	(11.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	内外器面に赤色顔料	
202	1135	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	最下層掘り方	—	—	—	(9.0)	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	回転ヘラケズリ	回転ヘラミガキ後暗文	回転ヘラミガキのち暗文		
202	1136	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SE017	掘り方	—	—	(18.2)	(13.7)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	ナデ	転用硯，墨痕	35
203	1137	Ⅶ区	土師器	甕	4 SE017	—	—	—	(23.6)	—	ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
203	1138	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SE017	—	—	—	—	—	ケズリ後ナデ，ナデ	—	ナデ	—	天井内器面に墨書，転用硯	38
203	1139	Ⅶ区	土師器	高台付坏	4 SE017	土層	—	—	—	—	回転ナデ	ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ		
203	1140	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	井戸内埋土1	—	—	(12.5)	(7.7)	ヨコナデ	ヨコナデ，ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		
203	1141	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SE017	—	—	—	—	(11.4)	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	—	回転ナデ		
203	1142	Ⅶ区	土師器	甕	4 SE017	Vb層，1層	—	—	—	—	ハケメ，ヨコナデ，ナデ	—	ケズリ後ナデ，ヨコナデ	—		
203	1143	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	北上層，Vc層	—	—	—	(11.3)	ナデ，ヨコナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ナデ	ナデ	内外器面に赤色顔料	
203	1144	Ⅶ区	須恵器	壺	4 SE017	上層	—	—	—	(11.2)	回転ナデ	ヘラケズリ	回転ナデ後指ナデ	回転ナデ，指ナデ		
203	1145	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SE017	上層，南	—	—	(13.5)	—	回転ナデ	—	回転ナデ	—		
203	1146	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SE017	上層，Va層	—	—	(14.6)	—	回転ナデ	—	指ナデ	—	灰付着	
203	1147	Ⅶ区	須恵器	鉢	4 SE017	1層	—	—	(15.0)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
203	1148	Ⅶ区	須恵器	甕	4 SE017	—	—	—	(13.8)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
203	1149	Ⅶ区	土師器	甑(把手)	4 SE017	—	—	—	—	—	ナデ	—	ヘラケズリ	—		
203	1150	Ⅶ区	須恵器	小型壺	4 SE017	南半分	—	6.9	—	5.5	回転ヨコナデ	—	不明	—	外器面に自然釉	38
204	1152	Ⅶ区	土師器	甕	4 SE017	—	—	(27.1)	(29.0)	—	ヨコナデ，ハケメ，格子タタキ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		40
204	1153	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	最下層	—	—	(17.0)	(9.2)	ヨコナデ	回転ヘラケズリ	暗文	暗文		
204	1154	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	最下層	—	—	—	(8.8)	ナデ	指ナデ	回転ナデ後横方向の指ナデ	指ナデ，回転ナデ		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
204	1155	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	—	—	—	(14.5)	(9.8)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ後ナデ	回転ヨコナデ	ナデ後ヘラによる暗文	内外器面に赤色顔料	39
204	1156	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017		—	—	—	—	ヨコナデ	ヘラ切り離し	—	ヨコナデ	外底面に墨書	
204	1157	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	Vc層	—	—	—	6.4	ナデ，ヘラ切り	ヘラ切り	ナデ，ヨコナデ	ナデ		
204	1158	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	最下層	—	—	—	—	—	ヘラ切り	—	ナデ	外底面に墨書	
204	1159	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	最下層	—	—	—	—	ヨコ方向のナデ	ナデ	ヨコ方向のナデ	ハケメ	外底面に墨書	40
204	1160	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SE017	最下層，掘り方	—	—	—	—	ヘラケズリ	—	ナデ	—		
204	1161	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE017	最下層	—	—	—	(8.1)	—	ヘラ切り後ナデ	—	回転ナデ	全体に赤色顔料	
204	1162	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SE017	最下層	—	—	—	—	回転ナデ，ヘラケズリ	—	回転ナデ，ナデ	—		
204	1163	Ⅶ区	須恵器	鉢	4 SE017	—	—	—	—	9.4	回転ヘラケズリ	タタキ後ナデ	ナデ	タタキ		
204	1164	Ⅶ区	土師器	高台付埦	4 SE017	—	—	—	—	(9.5)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ，ヘラ切離し，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
204	1165	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SE017	—	4.0	—	(13.3)	(9.5)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	ナデ		
204	1166	Ⅶ区	須恵器	甕	4 SE017	最下層	—	—	(17.0)	—	タタキ後回転ナデ	—	同心円状のち回転ナデ	—		
204	1167	Ⅶ区	須恵器	横瓶	4 SE017	—	—	—	—	—	格子タタキ	—	同心円文のあて具	—		
207	1178	Ⅶ区	須恵器	大甕	5 SE059	—	—	—	—	—	擬格子タタキ	—	格子タタキ	—		
207	1179	Ⅶ区	須恵器	大甕	5 SE059	—	—	—	—	—	平行タタキ	—	同心円文タタキ	—		
207	1180	Ⅶ区	須恵器	大甕	5 SE059	上層	—	—	—	—	平行タタキ	—	擬格子タタキ	—		
207	1181	Ⅶ区	須恵器	小型壺	5 SE059	埋土	—	—	8.4	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
210	1186	Ⅶ区	須恵器	高台付埦	5 SE019	4層	—	—	—	(7.8)	回転ナデ，横方向のミガキ	回転ナデ，ヨコナデ	回転ナデ，横方向のミガキ	回転ナデ，横方向のミガキ		
210	1187	Ⅶ区	土師器	坏	5 SE019	埋土	—	—	—	(9.8)	—	ヘラケズリ，ナデ	—	ナデ	外器面，外底面に暗文有，穿孔有(1ヶ)	
210	1188	Ⅶ区	土師器	小型壺	5 SE019	1層	7.2	8.1	(7.2)	1	ヨコナデ，ナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，指頭圧痕	指頭圧痕	外器面に黒斑有	
212	1192	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SE043	上層	—	—	(10.2)	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ，回転ナデ	—	回転ヨコナデ，回転ナデ	—	天井部内器面にヘラ記号	
212	1193	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SE043	上層	3.4	—	11.0	—	回転ナデ，ヘラケズリ，ナデ	—	回転ナデ，指ナデ	—		34
212	1194	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SE043	上層	3.1	—	10.4	7.7	回転ナデ，ヘラケズリ	ヘラ切り	回転ナデ	指ナデ，回転ナデ		36
212	1195	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SE043	上層，5A層	3.3	—	11.7	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ後ナデ	回転ヨコナデ，ナデ	ナデ		
212	1196	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SE043	上層	3.0	—	(10.8)	(6.4)	回転ナデ	ヘラ切り後指ナデ	回転ナデ	指ナデ	灰付着	
212	1197	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SE043	4層	—	—	—	6.0	回転ナデ	ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ		
212	1198	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SE043	下層	3.6	—	11.3	7.0	回転ヨコナデ，ヘラケズリ後ヨコナデ	ヘラ切り	回転ヨコナデ	ナデ		36
212	1199	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SE043	上層	4.0	—	(11.0)	6.4	回転ナデ	ヘラ切り	回転ナデ	指ナデ，回転ナデ	火ぶくれ有	
212	1200	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SE043	上層	—	—	—	(5.6)	ナデ，ヘラケズリ	ナデ	—	ナデ	外底面にヘラ記号	
212	1201	Ⅶ区	須恵器	埦	4 SE043	上層，Vc層	—	—	(12.7)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
212	1202	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SE043	—	4.1	—	11.1	6.4	回転ナデ	ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ，指ナデ	外器面全体に煤付着	35
212	1203	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SE043	—	4.2	—	11.9	—	回転ヨコナデ	ヘラケズリ後回転ヨコナデ，ヘラ削り調し後ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ナデ		35
212	1204	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SE043	中層，Vc層	(3.6)	—	(12.4)	8.0	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ヨコナデ	ナデ		
212	1205	Ⅶ区	須恵器	小型壺	4 SE043	上層	—	(9.4)	(6.4)	—	回転ナデ，ヘラケズリ	—	回転ナデ	—		
212	1206	Ⅶ区	須恵器	横瓶	4 SE043	—	—	—	—	—	カキメ	—	同心円タタキ	—		
213	1207	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	上層	4.7	—	13.0	—	ナデ，ヘラケズリ後ミガキ	ヘラケズリ後ミガキ	ナデ，ミガキ	ミガキ	内外器面に赤色顔料	
213	1208	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	上層	5.0	—	12.0	—	ヨコナデ，ミガキ，ケズリ後ナデ？	ケズリ後ナデ？	ヨコナデ，工具ナデ	工具ナデ	全面赤色顔料	
213	1209	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	Vc層，①層	5.1	—	16.45	—	不明	—	不明	—	内底面に赤色顔料，外底面に煤？	
213	1210	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	上層	—	—	(11.9)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ，ハケメ	ハケメ	内器面に暗文，内外器面に黒色顔料	39
213	1211	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	上層	5.1	—	12.2	—	ケズリ後ナデ，ヨコナデ，ケズリ	ヘラケズリ	ミガキ後ヨコナデ	ミガキ	全体に黒色顔料	
213	1212	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	上層	—	—	(16.2)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ後ミガキ	ヘラケズリ後ミガキ	ヨコナデ	ヨコナデ	内外器面に赤色顔料	
213	1213	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	上層	—	—	(10.8)	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		39
213	1214	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	上層	5.2	—	13.9	—	ヘラミガキ	ハケメ	ヨコナデ，工具ナデ後ヘラミガキ	工具ナデ後ヘラミガキ	内外器面に黒斑有	
213	1215	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	上層	—	—	(17.8)	—	ナデ，ヘラケズリ，ミガキ？	—	ミガキ，ナデ	—	内外器面に黒色顔料	

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
213	1216	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	上層	—	—	(11.8)	—	ヨコナデ，ケズリ	—	ナデ	—	内器面に暗文	39
213	1217	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	—	—	—	(15.8)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	ヨコナデ	—		
213	1218	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	中層，Vc 層	—	—	(17.8)	—	ナデ，ヘラケズリ	—	ナデ	—	内外器面に黒色顔料	
213	1219	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	—	(6.5)	—	(16.7)	—	ヨコナデ，不明	不明	不明	不明	外器面一部に赤色顔料	39
213	1220	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	上層	6.9	—	(15.7)	—	ナデ	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	内外器面に赤色顔料	
213	1221	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	上層	(6.6)	—	(16.7)	—	ヘラミガキ，ヨコナデ	ヘラミガキ	ナデ，ヨコナデ	ナデ	外器面に赤色顔料	39
213	1222	Ⅶ区	土師器	坏	4 SE043	上層	—	—	—	—	ケズリ後ナデ，ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	ナデ	ナデ	黒色顔料塗布，内器面に暗文	
213	1223	Ⅶ区	土師器	蓋	4 SE043	上層	5.2	—	12.4	—	ヘラケズリ，ナデ	—	ヨコナデ	ナデ	外器面に赤色顔料	
213	1224	Ⅶ区	土師器	甕	4 SE043	—	—	—	—	—	ナデ	—	ナデ，ヘラケズリ	—		
213	1225	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SE043	上層	—	—	(11.0)	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	全面赤色顔料	
213	1226	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SE043	—	—	—	14.5	—	ヘラミガキ	ケズリ，ヘラミガキ	ヨコナデ	不明	外器面に赤色顔料	
213	1227	Ⅶ区	土師器	盤	4 SE043	—	3.7	—	17.3	—	ナデ，ヘラケズリ後ミガキ	ヘラケズリ後ミガキ	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	全面に赤色顔料	40
213	1228	Ⅶ区	土師器	盤	4 SE043	上層	—	—	(17.0)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	内外器面に赤色顔料	
213	1229	Ⅶ区	土師器	盤	4 SE043	上層	3.5	—	(22.2)	—	ヨコナデ，ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	ヨコナデ	ハケメ後ナデ？		
213	1230	Ⅶ区	土師器	盤	4 SE043	上層	3.4	—	22.6	—	—	—	—	—		40
213	1231	Ⅶ区	土師器	盤	4 SE043	上層	—	—	(20.0)	—	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	ヨコナデ	ナデ	外器面に赤色顔料	
216	1246	Ⅷ区	土師器	坏	5 SE024	—	2.7	—	13.2	9.8	ナデ	ヘラ切り離し	ナデ	ナデ		36
216	1247	Ⅷ区	須恵器	高台付埦	5 SE024	1 層	4.9	—	11.8	6.8	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	ナデ		35
216	1248	Ⅷ区	土師器	甕	5 SE024	1 層	—	—	(26.2)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
218	1249	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SK040	Vc 層	—	—	11.7	—	回転ナデ，ヘラ切り離し	—	回転ナデ	—		
218	1250	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SD051	2 層	—	—	(13.6)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
218	1251	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SD051	V層	—	—	(14.6)	—	ヨコナデ	ヘラ切り離し	ヨコナデ	ナデ		
218	1252	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SD066	6～8 層	3.2	—	(14.7)	—	ナデ，ヘラケズリ後ナデ	—	ナデ，ナデ後指ナデ	—		33
218	1253	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SK040	—	—	—	(14.8)	—	ヨコナデ，ヘラ切り	—	ヨコナデ	—		
218	1254	Ⅶ区	土師器	坏	4 SK040	埋土	4.9	—	11.7	—	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	ナデ，ヨコナデ	ナデ	内外器面を黒色顔料	39
218	1255	Ⅶ区	土師器	坏	4 SK040	埋土	(5.2)	—	(17.1)	(8.8)	ヘラケズリ	ヘラケズリ？	ヨコナデ	ナデ	内外器面に赤色顔料	
218	1256	Ⅶ区	土師器	壺	4 SK040	埋土	—	—	—	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ，指押え後ナデ	—		
218	1257	Ⅶ区	土師器	坏	4 SD051	a 層	—	—	(11.8)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		
218	1258	Ⅶ区	土師器	盤	4 SD051	Vc 層，埋土	—	—	(15.0)	—	ヨコナデ，ヘラミガキ	—	ヨコナデ	—		
218	1259	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SK040	—	—	—	7.6	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ？	—		
220	1260	Ⅷ区	須恵器	片口鉢	5 SK057	—	(16.9)	—	35.0	—	ヨコナデ，タタキ後ヨコナデ，タタキ	—	タタキ後ヨコナデ（スリ消し），タタキ	—		37
220	1261	Ⅷ区	須恵器	坏蓋	5 SK057	—	31.0	—	14.2	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		34
220	1262	Ⅷ区	須恵器	長頸壺	5 SK057	—	—	27.2	—	—	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	タタキ後ヘラケズリ	回転ヨコナデ	ナデ		37
220	1263	Ⅷ区	土師器	甑	5 SK057	—	—	—	—	—	指ナデ	—	—	—		
222	1264	Ⅷ区	須恵器	坏蓋	5 SK058	—	2.7	—	14.1	—	回転ヨコナデ後回転ヘラナデ	—	回転ヨコナデ	—		34
222	1265	Ⅷ区	土師器	坏	5 SK058	—	3.4	—	12.4	8.1	右方向回転ナデ	右方向回転ヘラ切り離し	左方向回転ナデ	左方向回転ナデ		36
222	1266	Ⅷ区	須恵器	盤	5 SK058	—	2.8	—	17.0	13.8	回転ヨコナデ	ヘラオコシ後ヘラケズリ	回転ヨコナデ	ナデ		
222	1267	Ⅷ区	須恵器	盤	5 SK058	—	2.5	—	(18.6)	(14.0)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	ヨコナデ		
226	1268	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	4.0	—	9.2	8.2	ヨコナデ	ヘラ切り離し後ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	赤焼け	33
226	1269	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SX038	1 層	—	—	(12.0)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
226	1270	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SX038	2 層	2.9	—	9.7	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ	—	天井部外器面にヘラ記号	35
226	1271	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SX038	—	3.2	—	9	—	ヨコナデ	ヘラ切り離し後ナデ	ヨコナデ	ナデ		35
226	1272	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	2.1	—	7.9	—	回転ナデ，ヘラケズリ	—	回転ナデ，指ナデ	—		33
226	1273	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	—	—	(10.0)	—	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
226	1274	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	2.2	—	9.9	—	回転ヨコナデ	ヘラ状工具のナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ後ナデ		34
226	1275	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	2.4	—	7.4	—	回転ナデ，ヘラ切り	—	回転ナデ	—	天井部外器面にヘラ記号	35
226	1276	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	—	2.3	—	10.2	—	—	—	ヨコナデ後ナデ	ナデ		33
226	1277	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層，Vd 層	2.8	—	15.7	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	ナデ	ナデ		34
226	1278	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	1 層，Vc 層	(2.9)	—	(9.8)	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
226	1279	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	—	2.9	—	9.5	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	外器面に自然釉	34
226	1280	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	2 層	2.6	—	10.0	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ，ナデ	—	天井部内器面にヘラ記号	34
226	1281	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層，埋土	2.1	—	10.9	—	回転ヨコナデ	ヘラ切り離し後ナデ	ヨコナデ	ナデ	天井部にヘラ記号	
226	1282	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	1 層	1.9	—	10.5	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ後ヨコナデ	ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	ナデ	外器面に自然釉	34
226	1283	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	1 層	—	—	(12.9)	—	回転ヨコナデ，ヘラ切り離し痕跡	—	回転ヨコナデ	—		
226	1284	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	2.1	—	10.7	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—	天井部外器面にヘラ記号	35
226	1285	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	—	—	(12.2)	—	回転ナデ，ヘラケズリ	—	回転ナデ，指ナデ	—		
226	1286	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	—	2.8	—	13.1	—	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	回転ヨコナデ	ナデ		34
226	1287	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	—	2.5	—	12.0	—	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ナデ		34
226	1288	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	3.3	—	13.4	—	回転ヨコナデ	ケズリ後ナデ，回転ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ		34
226	1289	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	2.5	—	(11.7)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—	天井部内器面にヘラ記号	35
226	1290	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	A 層	—	—	(11.0)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ，回転ヨコナデ後ナデ	—		
226	1291	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	埋土，V 層	—	—	(13.3)	—	回転ナデ，ヘラケズリ	—	回転ナデ	—		
226	1292	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	—	3.0	—	13.8	—	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ナデ		34
226	1293	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Va 層，Vc 層	3.9	—	14.1	—	回転ナデ，ヘラケズリ，ナデ	—	指ナデ，回転ナデ	—		33
226	1294	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	4.1	—	14.0	—	回転ナデ，回転ヘラケズリ，ナデ	—	指ナデ，回転ナデ	—	天井外器面にヘラ記号	33
227	1295	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	(2.2)	—	(12.2)	—	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ	ヨコナデ	ナデ		
227	1296	Ⅷ区	須恵器	坏	4 SX038	Vc 層	4.0	—	11.0	6.9	回転ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ヨコナデ	ナデ，回転ヨコナデ		36
227	1297	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	4.6	—	12.2	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	ナデ，回転ヨコナデ		
227	1298	Ⅷ区	須恵器	坏	4 SX038	Vc 層	2.8	—	(10.8)	6.6	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	ヘラ切り後ナデ	回転ヨコナデ	ナデ		
227	1299	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	—	—	—	15.2	—	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ後ナデ潤し，ヨコナデ	回転ヨコナデ	ナデ		34
227	1300	Ⅷ区	須恵器	坏	4 SX038	Vc 層	—	—	(13.7)	(9.4)	回転ヨコナデ	ナデ，ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	外器面胴部に沈線	
227	1301	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	—	—	15.0	—	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ナデ	回転ヨコナデ，ナデ	天井外器面に自然釉	34
227	1302	Ⅷ区	須恵器	坏	4 SX038	—	4.1	—	13.2	—	回転ヨコナデ，ケズリ後ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ヨコナデ	ナデ，回転ヨコナデ		36
227	1303	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	2.8	—	12.2	—	回転ヘラケズリ，回転ナデ	—	指ナデ，回転ナデ	—		33
227	1304	Ⅷ区	須恵器	坏	4 SX038	—	—	—	(11.1)	(7.1)	ヨコナデ	ケズリ後ナデ	ナデ	ナデ		
227	1305	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Va 層，A 層	—	—	(11.4)	—	回転ヨコナデ，ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ	—		
227	1306	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	3.7	—	14.2	—	回転ナデ，回転ヘラケズリ	—	回転ナデ，指ナデ	—		33
227	1307	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	—	—	16.8	—	回転ナデ，回転ヘラケズリ	—	回転ナデ	—		
227	1308	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Va 層，Vc 層	—	—	(18.0)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
227	1309	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	A 層	2.9	—	(13.8)	—	ヘラナデ，回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
227	1310	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	A 層	3.5	—	(15.8)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
227	1311	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	—	3.2	—	15.3	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ後ヨコナデ	回転ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ		34
227	1312	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	4 SX038	Vc 層，V 層，Va 層	(5.1)	—	(13.6)	(10)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ後ナデ	回転ヨコナデ	ナデ	外底面に爪形状圧痕	
227	1313	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Va 層	—	—	—	—	回転ヨコナデ，ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ	—		
227	1314	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	—	—	—	(14.8)	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ	—		
227	1315	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	—	—	—	—	—	回転ヨコナデ，ケズリ後ナデ	—	ナデ，ヨコナデ	—		
227	1316	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	Va 層	—	—	(11.8)	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ	—		
227	1317	Ⅷ区	須恵器	蓋	4 SX038	—	(2.4)	—	13.9	—	回転ヨコナデ	ナデ，回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ナデ	外器面に赤色顔料，黒色顔料	

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
227	1318	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SX038	Vc 層	5.1	—	12.7	7.8	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ，ヘラ切り風	回転ヨコナデ	ナデ，回転ヨコナデ	外器面に自然釉	
227	1319	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	—	—	(18.7)	—	回転ヨコナデ，一部タテナデ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	ナデ		
227	1320	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	—	—	14.5	—	ナデ，ヘラケズリ，回転ナデ	—	回転ナデ，指ナデ	—		33
227	1321	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SX038	—	3.8	—	18.7	—	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	回転ヨコナデ	ヘラ状工具ナデ		34
227	1322	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SX038	Va 層	—	—	—	—	回転ヨコナデ，ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ	—		
227	1323	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層，C 層	3.7	—	(17.0)	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	ナデ		34
227	1324	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SX038	Vc 層，4層	6.2	—	16.0	10.2	回転ヨコナデ，ヘラケズリ後ヨコナデ	回転ヨコナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ヨコナデ	ナデ		36
227	1325	Ⅶ区	須恵器	蓋	4 SX038	Vc 層	—	—	(9.6)	—	回転ナデ，ナデ	—	指ナデ，回転ナデ	—	天井外器面にヘラ記号	
228	1326	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SX038	—	—	—	(11.6)	—	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ	ヨコナデ	ヨコナデ		
228	1327	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SX038	Vc 層	(4.2)	—	(10.8)	—	回転ヨコナデ	ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	不明		
228	1328	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SX038	Va 層，Va 層	2.7	—	(11.8)	(7.2)	回転ナデ，回転ヘラナデ	ヘラ切り離し後ナデ	回転ナデ	回転ナデ		
228	1329	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SX038	Va 層	2.5	—	(10.9)	(8.4)	回転ヨコナデ	回転切り離し後ナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
228	1330	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SX038	A 層	—	—	—	—	回転ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラ切り離し後ナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
228	1331	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SX038	Va 層	3.8	—	(11.2)	—	回転ヨコナデ後回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ナデ		
228	1332	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SX038	Va 層	—	—	—	(7.6)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ	回転ナデ後ハケナデ	回転ナデ後ハケナデ		
228	1333	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SX038	Vc 層	4.1	—	11.8	7.6	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	回転ヨコナデ	ナデ		35
228	1334	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SX038	Va 層	4.7	—	(13.8)	(10.0)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ後ナデ		
228	1335	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SX038	Vc 層	3.7	—	(10.6)	(8.3)	回転ナデ	回転ナデ，回転ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ，指ナデ		
228	1336	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SX038	—	—	—	—	(8.8)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ		
228	1337	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SX038	—	5.7	—	(14.8)	(9.6)	ヨコナデ	ヨコナデ，ヘラ切り離し後ナデ	ヨコナデ	ナデ	外底面に刻書	36
228	1338	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SX038	—	—	—	(8.0)	—	ナデ，ヘラケズリ後ナデ	ケズリ	ナデ	ナデ		
228	1339	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SX038	—	—	—	—	(9.0)	ケズリ後ナデ	回転ヨコナデ	—	ナデ		
228	1340	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SX038	—	—	—	(7.6)	—	回転ヨコナデ	ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
228	1341	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	4 SX038	—	—	—	—	(8.6)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ，ヨコナデ	ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	ナデ		
228	1342	Ⅶ区	須恵器	埦	4 SX038	Va 層，Vc 層	6.4	—	—	(9.0)	回転ヨコナデ	ナデ後ヘラ切り	回転ナデ後回転ハケナデ	回転ナデ後回転ハケナデ		35
228	1343	Ⅶ区	須恵器	埦	4 SX038	Vb 層	5.2	—	14.3	9.0	回転ヨコナデ	ヘラオコシ（ヘラ切り離し）後ナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		36
228	1344	Ⅶ区	須恵器	高台付埦	4 SX038	Va 層	—	—	—	—	回転ヨコナデ後ヘラケズリ	回転ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
228	1345	Ⅶ区	須恵器	高台付埦	4 SX038	Vc 層	—	—	—	8.2	ヨコナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヨコナデ	ナデ		
228	1346	Ⅶ区	須恵器	稜埦	4 SX038	—	—	—	—	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
228	1347	Ⅶ区	須恵器	高台付埦	4 SX038	Vc 層	—	—	—	(9.3)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
228	1348	Ⅶ区	須恵器	高台付盤	4 SX038	A層，Va層，Va層，Vc層	—	—	(19.0)	(13.8)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ナデ		
228	1349	Ⅶ区	須恵器	高台付盤	4 SX038	Va 層	—	—	—	—	—	回転ヘラ切り離し，回転ヨコナデ	—	回転ナデ		
228	1350	Ⅶ区	須恵器	盤	4 SX038	—	—	—	—	(12.8)	ヨコナデ	ナデ	ナデ	ナデ	内底面にヘラ記号	
228	1351	Ⅶ区	須恵器	皿	4 SX038	Va 層，Vc 層	2.1	—	(15.8)	(12.6)	回転ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ヨコナデ	回転ナデ後ハケナデ		
229	1352	Ⅶ区	須恵器	高坏	4 SX038	Vc層，Ⅳ層，C 層，上層	(7.3)	—	(13.3)	9.0	ヨコナデ	ヘラ切り後ヨコナデ，回転ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ		36
229	1353	Ⅶ区	須恵器	高坏	4 SX038	Vc 層	—	—	9.9	—	回転ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヨコナデ	ナデ	外器面に沈線	
229	1354	Ⅶ区	須恵器	高坏	4 SX038	—	—	—	—	(6.2)	—	回転ヨコナデ，不明	不明	不明		
229	1355	Ⅶ区	須恵器	高坏	4 SX038	A 層，Vb 層	—	—	—	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ		
229	1356	Ⅶ区	須恵器	高坏	4 SX038	Vc 層	—	—	17.3	—	回転ヨコナデ	ヨコナデ，ケズリ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	ナデ		
229	1357	Ⅶ区	須恵器	耳付坏	4 SX038	上層	—	—	14.8	—	ナデ	—	回転ヨコナデ	—		
229	1358	Ⅶ区	須恵器	耳付坏	4 SX038	上層	—	—	13.4	—	回転ヨコナデ，回転ヨコナデ後ナデ	—	回転ヨコナデ	—		
229	1359	Ⅶ区	須恵器	鉢	4 SX038	Va 層，Vd 層	—	—	(19.6)	—	平行タタキ（擬格子）	—	回転ヨコナデ，タタキ後回転ヨコナデ	—		
229	1360	Ⅶ区	須恵器	鉢	4 SX038	Va 層，Vc 層	—	—	(18.8)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—	内器面に櫛描き直線文	
229	1361	Ⅶ区	須恵器	甕	4 SX038	Vc 層	—	—	(22.0)	—	回転ヨコナデ，格子タタキ後磨り消し	—	回転ヨコナデ，同心円文，タタキ後ナデ	—	工具痕	

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
229	1362	Ⅷ区	須恵器	甕	4 SX038	Vb 層	—	—	(16.8)	—	ヨコナデ，平行タタキ	—	ヨコナデ，同心円タタキ	—		
229	1363	Ⅷ区	須恵器	甕	4 SX038	—	—	—	(21.8)	—	回転ヨコナデ，格子タタキ	—	回転ヨコナデ，同心円タタキ	—		
229	1364	Ⅷ区	須恵器	大甕	4 SX038	Ⅳ層，Vc 層	—	—	—	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—	櫛描き文	
229	1365	Ⅷ区	須恵器	大甕	4 SX038	—	—	—	—	—	擬格子タタキ	—	平行タタキ	—		
229	1366	Ⅷ区	須恵器	甕	4 SX038	2 層	—	—	—	—	格子タタキ	—	同心円タタキ，指ナデ	—		
230	1367	Ⅷ区	須恵器	甕	4 SX038	—	—	—	(14.5)	—	回転ヨコナデ，平行タタキ	—	回転ヨコナデ，同心円タタキ	—		37
230	1368	Ⅷ区	須恵器	甕	4 SX038	—	—	(36.0)	(19.5)	—	平行タタキ	—	回転ヨコナデ後同心円タタキ，平行タタキ	—		37
230	1369	Ⅷ区	須恵器	短頸壺	4 SX038	上層，北東ソクミゾ	—	—	(6.4)	—	回転ヨコナデ，平行叩き後回転ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ後ナデ，あて具痕有	—		
230	1370	Ⅷ区	須恵器	壺	4 SX038	A 層，Va 層，Vc 層	—	—	—	(9.2)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ナデ後指ナデ		
230	1371	Ⅷ区	須恵器	壺	4 SX038	Va 層，Vc 層	—	17.3	12.6	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ～ナデ	—		
230	1372	Ⅷ区	須恵器	大甕	4 SX038	1 層	—	—	—	—	カキメ，クシ目	—	タタキ	—	硯，転用硯	
230	1373	Ⅷ区	須恵器	壺	4 SX038	—	—	—	(11.0)	—	回転ヨコナデ	—	ナデ	—		
230	1374	Ⅷ区	須恵器	壺	4 SX038	—	—	—	—	(10.0)	回転ヨコナデ，ヘラケズリ	車輪文タタキ	回転ヨコナデ	ナデ後指ナデ		
231	1375	Ⅷ区	須恵器	細頸壺	4 SX038	上層，Va 層	—	—	(5.4)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
231	1376	Ⅷ区	須恵器	長頸壺	4 SX038	Vc 層，Va 層	—	(22.0)	—	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
231	1377	Ⅷ区	須恵器	壺	4 SX038	—	—	—	(8.2)	—	ナデ	—	ナデ	—		
231	1378	Ⅷ区	須恵器	瓶	4 SX038	Ⅳ層，Va 層，Vb 層	—	(18.1)	—	—	タタキ後ヨコナデ，タタキ後ナデ	—	タタキ後ナデ，指頭圧痕，ナデ	—		
231	1379	Ⅷ区	須恵器	長頸壺	4 SX038	—	—	17.8	—	12.6	回転ヨコナデ，ヘラケズリ	ナデ，ケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	2 ヶ所に沈線	
231	1380	Ⅷ区	須恵器	壺	4 SB036	Vc 層	—	—	(15.0)	—	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		
231	1381	Ⅷ区	須恵器	横瓶	4 SX038	2 層	—	—	—	—	ハケメ	—	指ナデ，回転ナデ	—		
231	1382	Ⅷ区	須恵器	壺	4 SX038	—	—	—	(21.5)	—	回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰付着，二条突帯，火ぶくれ有	
231	1383	Ⅷ区	須恵器	壺	4 SX038	—	30.45	(20.9)	(10.6)	(12.0)	平行タタキ，回転ヨコナデ，ヘラケズリ後ヨコナデ	—	指押え，回転ヨコナデ	ナデ		37
232	1384	Ⅷ区	須恵器	提瓶	4 SX038	2層，Ⅳa層，Vc層	—	20.5	—	—	カキメ，カキメ後ナデ	—	ナデ	—		38
233	1386	Ⅷ区	土師器	甕	4 SX038	Vc 層	—	—	19.4	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	外器面に煤付着	
233	1387	Ⅷ区	土師器	甕	4 SX038	Vb 層	—	—	(18.6)	—	ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
233	1388	Ⅷ区	土師器	甕	4 SX038	A 層	—	—	(23.6)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ハケメ，ヘラケズリ	—		
233	1389	Ⅷ区	土師器	甕	4 SX038	—	—	—	(27.0)	—	ヨコナデ，ナデ	—	ヘラケズリ	—		
233	1390	Ⅷ区	土師器	甕	4 SX038	Va 層	—	—	(24.5)	—	ハケメ	—	ヘラケズリ	—		
233	1391	Ⅷ区	土師器	甕	4 SX038	北西ソクミゾ	—	—	(26.6)	—	ハケメ	—	ハケメ後ナデ，ヘラケズリ	—		
233	1392	Ⅷ区	土師器	甕	4 SX038	Vc 層	—	—	(14.0)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
233	1393	Ⅷ区	土師器	甕	4 SX038	1 層	—	(26.5)	—	—	ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	外器面に赤色顔料	
233	1394	Ⅷ区	土師器	甕	4 SX038	上層	—	31.6	—	—	ヨコナデ	—	ヘラケズリ	—	外器面に黒斑有	
233	1395	Ⅷ区	土師器	甕	4 SX038	1 層	—	—	—	—	ハケメ後ナデ	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	外器面に赤色顔料	
234	1396	Ⅷ区	土師器	蓋	4 SX038	Vc 層	(4.8)	—	(12.5)	—	ヨコナデ？	ヘラ切り離し	—	—	粘土巻上げ痕	
234	1397	Ⅷ区	土師器	蓋	4 SX038	—	5.2	—	13.5	—	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	ナデ	ナデ		
234	1398	Ⅷ区	土師器	蓋	4 SX038	—	—	—	(13.4)	—	ヨコナデ後ヘラミガキ，不明	—	ヨコナデ後ヘラミガキ	—		
234	1399	Ⅷ区	土師器	蓋	4 SX038	—	—	—	(13.6)	—	ヨコナデ，ミガキ？	—	ヨコナデ	—		
234	1400	Ⅷ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層	—	—	(12.9)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ？	—	ヨコナデ	—	外器面に黒色顔料	
234	1401	Ⅷ区	土師器	坏	4 SX038	2 層	(5.1)	—	(13.0)	—	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	ナデ？	ナデ？	外器面に煤付着	39
234	1402	Ⅷ区	土師器	坏	4 SX038	—	—	—	(13.9)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	内外器面に黒色顔料	
234	1403	Ⅷ区	土師器	坏	4 SX038	—	—	—	(14.1)	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	内外器面に黒色顔料	39
234	1404	Ⅷ区	土師器	坏	4 SX038	—	—	—	12.6	—	ヨコナデ，ヘラケズリ？	—	ヨコナデ，ミガキ？	—	内器面に黒斑，外器面に煤付着	
234	1405	Ⅷ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層	—	—	(13.1)	—	工具痕？	—	—	—		
234	1406	Ⅷ区	土師器	坏	4 SX038	1 層	—	—	(12.4)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ，ミガキ？	—	ミガキ，ヨコナデ	—	内外器面に黒色顔料	

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
234	1407	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	4 層	4.8	—	(12.4)	—	ミガキ	ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ	ミガキ		
234	1408	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	—	—	—	12.8	—	ミガキ？	—	ミガキ？	—	内外器面に黒色顔料	
234	1409	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層	—	—	(12.7)	—	—	ナデ	—	ナデ	ヘラ記号	
234	1410	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層，1 層	5.6	—	13.2	—	ヨコナデ後ハケメ	—	ヨコナデ後ヨコハケ	ナデ	内器面に赤色顔料	39
234	1411	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	1 層	—	—	12.9	—	ヨコナデ，ヘラケズリ？	—	ヨコナデ？	—	外器面に黒斑有	
234	1412	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	—	—	—	(14.8)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	内外器面に黒色顔料	
234	1413	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	1 層	—	—	(12.2)	—	ナデ，ヘラケズリ？	—	ナデ？	—	全体に黒色顔料	
234	1414	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	C 層	—	—	(10.8)	—	—	—	—	—		
234	1415	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層，EC 層	—	—	(15.4)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	ヨコナデ	—	内器面に黒色顔料	
234	1416	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vb 層	—	—	(16.6)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	—	ヨコナデ，ナデ	—	外器面に赤色顔料	
234	1417	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層	—	—	15.6	—	指頭ナデ後ナデ，ハケメ，ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	内外器面に赤色顔料	
234	1418	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vd 層	—	—	(15.2)	—	—	—	—	—		
234	1419	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層	5.5	—	(14.6)	—	—	—	—	—		
235	1420	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層	(4.2)	—	(12.0)	(3.6)	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	ナデ		
235	1421	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層	(4.4)	—	(14.1)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	ナデ	ヨコナデ，ナデ	ナデ	内外器面に煤付着	
235	1422	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	3・4 層	—	—	—	—	ナデ，ヘラケズリ	—	ミガキ？	—		
235	1423	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	—	5.1	—	11.7	—	ハケメ後ナデ	ケズリ	ヨコナデ	ナデ	外器面に黒斑有	39
235	1424	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	1 層	4.8	—	11.5	—	ヨコナデ，ケズリ	ケズリ	ヨコナデ	ナデ	外器面に煤付着，内器面に暗文	39
235	1425	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	A 層	—	—	13.0	—	ヨコナデ，ケズリ後ヘラミガキ	ケズリ後ヘラミガキ	ヨコナデ，ヘラミガキ	ヘラミガキ		39
235	1426	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vd 層	—	—	(14.2)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	ヨコナデ	—	内外器面に赤色顔料	
235	1427	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層	—	—	(14.6)	—	ナデ，ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	内外器面に赤色顔料	
235	1428	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	—	—	—	(15.2)	—	ナデ，ヘラケズリ	—	ミガキ，ナデ	—		
235	1429	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層	—	—	(13.6)	—	ナデ，ヨコナデ	—	ナデ，ヨコナデ，ケズリ	—		
235	1430	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層	—	—	(15.7)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ？	—	ヨコナデ？	—	内器面に赤色顔料	
235	1431	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層	—	—	(13.6)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ		
235	1432	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	—	(4.0)	—	(13.3)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	赤色顔料の下に白色塗布	
235	1433	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	3A 層，Vc 層	—	—	11.7	—	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		
235	1434	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Va 層	—	—	(12.2)	(10.0)	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	口縁部の内器面に赤色顔料	
235	1435	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	3A 層	—	—	(11.9)	—	ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ？	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		
235	1436	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	—	—	—	(18.3)	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ痕	全体に赤色顔料，内器面に暗文	
235	1437	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	Vc 層	—	—	(17.8)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	—	ヨコナデ	—	内器面に赤色顔料	
235	1438	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	—	—	—	(16.4)	(11.2)	ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ	—	内器面にヘラ描き暗文	
235	1439	Ⅶ区	土師器	坏	4 SX038	—	—	—	(13.8)	(8.0)	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	ナデ	内器面にヘラ描き暗文	39
235	1440	Ⅶ区	土師器	埦	4 SX038	—	—	—	6.8	—	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	ヨコナデ，ナデ		
235	1441	Ⅶ区	土師器	高台付埦	4 SX038	A 層	—	—	—	(9.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ		
235	1442	Ⅶ区	土師器	高台付埦	4 SX038	—	—	—	—	(12.6)	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	内底面に赤色顔料	
236	1443	Ⅶ区	土師器	盤	4 SX038	Vc 層	—	—	(12.3)	—	—	回転ヘラケズリ	ヨコナデ	—		40
236	1444	Ⅶ区	土師器	盤	4 SX038	Vc 層	—	—	17.4	—	ナデ	—	ヨコナデ，ナデ	ナデ	内器面に丹塗	40
236	1445	Ⅶ区	土師器	盤	4 SX038	Vc 層	—	—	(20.0)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヨコナデ	内外器面に赤色顔料	
236	1446	Ⅶ区	土師器	盤	4 SX038	—	3.0	—	(18.0)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヨコナデ	内外器面に赤色顔料	
236	1447	Ⅶ区	土師器	盤	4 SX038	Vc 層	3.4	—	17.2	—	ヨコナデ	ヨコナデ？	ヨコナデ，ナデ	ナデ？	内器面に赤色顔料	
236	1448	Ⅶ区	土師器	盤	4 SX038	Vc 層，Vb 層	—	—	(18.0)	—	ナデ，ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	全体に丹塗	
236	1449	Ⅶ区	土師器	盤	4 SX038	—	2.9	—	18.6	—	—	—	—	—	外器面に赤色顔料	
236	1450	Ⅶ区	土師器	盤	4 SX038	Vc 層	(2.2)	—	(20.0)	—	ヨコナデ	ヘラケズリ後ナデ	ナデ，ヨコナデ	ナデ	内器面に一部赤色顔料	

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
236	1451	Ⅶ区	土師器	盤	4 SX038	上層	—	—	(18.4)	—	ヨコナデ，ヘラミガキ	ナデ	ヨコナデ，ナデ	ナデ		
236	1452	Ⅶ区	土師器	盤	4 SX038	1層	—	—	(19.8)	—	ケズリ後ナデ	—	ミガキ，ナデ	—	内外器面に黒色顔料	
236	1453	Ⅶ区	土師器	高台付盤	4 SX038	Vc層	—	—	(11.1)	—	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ		
236	1454	Ⅶ区	土師器	盤	4 SX038	2層	—	—	—	—	—	ケズリ後ミガキ	—	ナデ	内底面にヘラ記号	
236	1455	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX038	—	—	—	(16.5)	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ナデ		
236	1456	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX038	Vc層	—	—	—	—	—	ハケメ	—	—		
236	1457	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX038	Vc層	—	—	—	10.4	—	ナデ，ヨコナデ	—	ケズリ，ヨコナデ		
236	1458	Ⅶ区	土師器	器台	4 SX038	Vc層	—	—	—	(9.1)	—	ヨコナデ，ナデ	—	—		
236	1459	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX038	Vc層	—	—	(12.8)	—	ナデ	—	ヨコナデ	—	内外器面に赤色顔料	
236	1460	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX038	2層	—	—	—	—	—	ヨコナデ，ケズリ	—	ヨコナデ，ケズリ後ヨコナデ	外底面に赤色顔料	
236	1461	Ⅶ区	土師器	高坏	4 SX038	—	—	—	—	10.5	—	ヘラケズリ後ナデ	—	ナデ？	全面に赤色顔料	
236	1462	Ⅶ区	土師器	器台	4 SX038	—	—	—	—	8.5	—	ケズリ，ハケメ，ナデ	—	ナデ		
236	1463	Ⅶ区	土師器	脚付鉢	Y—29G	Vc層	—	—	—	—	ナデ	ヨコナデ，ナデ	—	ナデ		
236	1464	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SX038	中層	—	(15.7)	(11.0)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ	—		
236	1465	Ⅶ区	土師器	壺	4 SX038	下層，Va層	—	—	(20.3)	—	ハケメ後ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	—	外器面に黒斑有，赤色顔料	40
237	1466	Ⅶ区	土師器	小型甕	4 SX038	2層	—	—	14.0	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヘラケズリ	—		
237	1467	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SX038	D層	11.1	(12.0)	(10.0)	(2.0)	ハケメ，ヨコナデ	—	ヨコナデ	ナデ	外器面に黒斑有	
237	1468	Ⅶ区	土師器	鉢	4 SX038	Va層，Vb層，Vc層	—	—	—	(7.9)	—	—	—	—		
237	1469	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SX038	中層，2層，F層	(8.9)	—	(10.8)	—	ヨコナデ，ハケメ後ナデ	ハケメ？	ハケメ後ナデ	ヘラケズリ		
237	1470	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SX038	—	—	—	(10.2)	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ハケメ，ナデ	—		
237	1471	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SX038	2層	(7.0)	—	(8.5)	—	ハケメ後ヨコナデ	—	ハケメ後ヨコナデ，ケズリ後ハケメ	ケズリ後ハケメ		
237	1472	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SX038	—	8.0	8.8	(7.5)	—	ハケメ，ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	外器面に黒斑有	
237	1473	Ⅶ区	土師器	小型壺	4 SX038	中層	—	10.0	—	—	回転ナデ，ヨコナデ	—	ナデ，指ナデ，ヘラケズリ	—		
237	1474	Ⅶ区	土師器	壺	4 SX038	B層	—	—	—	4.4	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		
238	1476	Ⅶ区	土師器	甑	4 SX038	Vb層	—	—	—	—	指ナデ	—	—	—		
238	1477	Ⅶ区	土師器	甑	4 SX038	A層	—	—	—	—	指ナデ	—	ナデ	—		
238	1478	Ⅶ区	土師器	甑	4 SX038	—	—	—	—	—	指ナデ	—	ヘラケズリ	—		
250	1502	X区	須恵器	蓋	6 SX052	—	—	—	—	—	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	—	回転ナデ	—		
250	1503	X区	瓦器	埦	6 SX002	1層，Va層	—	—	(15.6)	—	回転ヘラミガキ	—	左上がり方向ヘラナデ	—		
252	1505	Ⅶ区	須恵器	蓋	Y—29G	Vc層	(3.3)	—	8.9	—	回転ナデ，ヘラケズリ	—	指ナデ，回転ナデ	—		
252	1506	Ⅶ区	須恵器	蓋	Y—27G	Vb層	(4.0)	—	(12.7)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
252	1507	Ⅶ区	須恵器	蓋	Z—31G	Vc層		—	(14.2)	—	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
252	1508	Ⅶ区	須恵器	蓋	Z—30G	Vb層	—	—	(13.8)	(12.4)	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
252	1509	Ⅶ区	須恵器	蓋	Y—30,Y—29G	Vc層	(1.4)	—	(9.3)	—	回転ヨコナデ，回転ナデ	—	回転ヨコナデ，回転ナデ	—	天井外器面にヘラ記号	35
252	1510	Ⅶ区	須恵器	蓋	Y—29G	Vc層	2.2	—	7.6	—	回転ヘラ切り，回転ナデ	—	指ナデ，回転ナデ	—	天井外器面にヘラ記号	35
252	1511	Ⅶ区	須恵器	蓋	Z—29G	Vc層	2.5	—	8.4	—	回転ナデ，ヘラギリ	—	回転ナデ	—	天井外器面にヘラ記号	33
252	1512	Ⅶ区	須恵器	蓋	Z—29G	Vc上層	—	—	(13.8)	—	回転ヨコナデ，カキ目	—	回転ヨコナデ，ナデ	—		
252	1513	Ⅶ区	須恵器	蓋	Z—29G	—	3.4	—	13.3	—	ヘラケズリ，回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ，ナデ	—		33
252	1514	Ⅶ区	須恵器	蓋	Z—28G	Vc層	—	—	(13.0)	—	ナデ，回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	—	ナデ	—	粘土巻上げ痕	
252	1515	Ⅶ区	須恵器	蓋	a—31G	Ⅳ層，Vc層	(3.2)	—	(17.2)	—	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
252	1516	Ⅶ区	須恵器	蓋	c—30G	Vc層，Va層	2.8	—	(14.2)	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ後ナデ	—	回転ナデ，回転ヨコナデ後ナデ	—		
252	1517	Ⅶ区	須恵器	蓋	Y—27G	Vc層	3.2	—	(14.3)	—	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
252	1518	Ⅶ区	須恵器	蓋	V—26G	Va層	—	—	(17.0)	—	ナデ，ヘラケズリ	—	ナデ，指ナデ	—		
252	1519	Ⅶ区	須恵器	蓋	W—26G	Vb層	—	—	(14.4)	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ	—		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
252	1520	Ⅶ区	須恵器	蓋	Z－29G	Vc層,Vb層,Va層,Ⅴ層ベルト	2.8	－	14.6	－	回転ヘラケズリ,回転ヨコナデ,ナデ,ヘラ記り無し	－	ナデ，回転ヨコナデ	－		33
252	1521	Ⅷ区	須恵器	蓋	c－34G	－	3.8	－	16.8	－	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	－	回転ヨコナデ	－	天井外器面，外器面に自然釉，天井外器面が赤変	33
252	1522	Ⅶ区	須恵器	蓋	Y－26G	Ⅳ層	2.7	－	(14.6)	－	回転ナデ，回転ヘラケズリ，ナデ	－	指ナデ，回転ナデ	－		33
252	1523	Ⅶ区	須恵器	蓋	Y－27G	Vc層	－	－	(14.0)	－	回転ヨコナデ	－	回転ヨコナデ	－		
252	1524	Ⅶ区	須恵器	蓋	W－26G	Ⅳb層	－	－	(14.8)	－	不明	－	回転ヨコナデ	－	粘土巻上げ痕	
252	1525	Ⅶ区	須恵器	蓋	W－26G	Vb層	2.8	－	(18.7)	－	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	－	回転ヨコナデ	－	粘土巻上げ痕	
252	1526	Ⅷ区	須恵器	蓋	a－31G	Vc層	(2.4)	－	(14.8)	－	回転ヨコナデ	－	回転ナデ，回転ヨコナデ	－	天井外器面に灰付着	
252	1527	Ⅷ区	須恵器	蓋	b－29G	－	(2.2)	－	(15.3)	－	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	－	回転ナデ，回転ヨコナデ	－		
252	1528	Ⅶ区	須恵器	蓋	W－27G	Vc層	(1.6)	－	(13.8)	－	ナデ，ヘラケズリ	－	ナデ，指ナデ	－		
252	1529	Ⅶ区	須恵器	蓋	W－26G	Vb層，b層	－	－	13.6	－	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	－	回転ヨコナデ	－	粘土巻上げ痕	33
253	1530	Ⅶ区	須恵器	坏	Y－28G	Ⅳ層	－	－	(9.2)	(4.3)	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ		
253	1531	Ⅶ区	須恵器	坏	W－27G	Vc層	－	－	(8.8)	－	ナデ	－	ナデ	ナデ		
253	1532	Ⅶ区	須恵器	坏	Z－29G	Vc層	3.5	－	(11.8)	(7.6)	回転ヨコナデ	ヘラ切り離し後ナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
253	1533	Ⅶ区	須恵器	坏	Y－28G	Vc層，Ⅳ層	4.5	－	10.4	7.0	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ナデ	粘土巻上げ痕	
253	1534	Ⅶ区	須恵器	坏	W－26G	Vb層，Ⅳb層	4.0	－	(10.8)	(7.0)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ		
253	1535	Ⅶ区	須恵器	坏	Y－29G	Vc層	3.9	－	(13.5)	8.0	回転ナデ	巻き上げ痕後ナデ	回転ナデ	指ナデ		
253	1536	Ⅷ区	須恵器	坏	a－31G	Vc層，Ⅵa層	(4.2)	－	(13.3)	(8.4)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
253	1537	Ⅶ区	須恵器	坏	4 SE043	上層，Vc層	3.5	－	12.0	－	回転ヨコナデ	ヘラ切り離し後ナデ	回転ヨコナデ	ナデ，回転ヨコナデ		36
253	1538	Ⅷ区	須恵器	坏	c－34G	－	3.5	－	(11.2)	3.5	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	ナデ		
253	1539	X区	須恵器	坏	j－39G	－	3.4	－	(14.1)	(8.7)	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	－		
253	1540	Ⅷ区	須恵器	坏	c－34G	L01層	4.2	－	(14.2)	(9.4)	回転ヨコナデ	ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
253	1541	Ⅷ区	須恵器	坏	北西ソクミゾ	－	3.4	－	(13.0)	7.4	回転ヨコナデ	ヘラ切り離し後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	内，外器面に粘土痕	
253	1542	Ⅷ区	須恵器	坏	c－33G	－	(3.4)	－	(12.3)	(7.8)	回転ヨコナデ	回転ヘラオコシ後ナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
253	1543	X区	須恵器	坏	6 SD501	－	3.7	－	(15.3)	(8.7)	ヘラケズリ後回転ナデ	回転ヘラオコシ	回転ナデ	回転ナデ		
253	1544	X区	須恵器	坏	i－37G	Ⅲ層	2.4	－	(14.5)	(9.6)	回転ナデ，回転ヘラケズリ	ヘラ切り落とし(回転)	回転ナデ	回転ナデ		
253	1545	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	Z－29G	Vc層	(4.2)	－	(11.0)	(7.0)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ，ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
253	1546	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	Z－29G	－	3.8	－	13.0	9.4	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	粘土巻上げ痕	
253	1547	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	Y－26G	Vc層	－	－	10.2	7.6	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	ヘラ切り	回転ヨコナデ	－	粘土巻上げ痕	
253	1548	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	X－26G	Vb層	4.4	－	(12.3)	(9.1)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	ナデ	全体に黒斑有，粘土巻上げ痕	
253	1549	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	Z－29G	Vc層	(4.5)	－	(9.7)	(6.2)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ，ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
253	1550	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	b－34G	－	4.5	－	(11.4)	(7.8)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ナデ		
253	1551	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	Z－32G	－	(4.6)	－	(12.6)	(8.4)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ，ナデ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，回転ナデ	回転ナデ		
253	1552	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	a－31G	－	(4.2)	－	(12.2)	(8.0)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ナデ		
253	1553	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	a－35G	－	4.7	－	(13.0)	8.2	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	外底面にヘラ記号有	
253	1554	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	Z－29G	Vc層，Va層	(4.5)	－	(13.8)	(9.2)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ヘラ切り離し	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ		
253	1555	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	a－34G	－	4.4	－	13.7	9.2	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ナデ		35
253	1556	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	c－34G	－	4.3	－	14.0	8.7	回転ヘラケズリ，回転ヘラオコシ，回転ヨコナデ	回転ヘラオコシ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ナデ		35
253	1557	Ⅶ区	須恵器	高台付坏	Y－28G	Vb層，Vc層	(4.3)	－	(13.6)	(9.0)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	ヘラ切り離し，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
253	1558	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	b・c－31G	Va層，Vc層	(5.6)	－	(15.6)	(10.4)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
254	1559	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	c－34G	－	4.8	－	(11.4)	7.0	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
254	1560	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	b－33G	－	4.5	－	(11.4)	6.6	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ナデ	外器面に灰付着	
254	1561	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	北西ソクミゾ	－	－	－	(12.6)	(7.2)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ後ナデ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	ナデ		
254	1562	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	a－31G	Ⅳ層，Va層，Vd層	(4.6)	－	(13.4)	(8.4)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ナデ		
254	1563	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	a－31G	Va層，Ⅳ~Va層，Vc層	(4.4)	－	(13.5)	(8.5)	回転ヨコナデ	回転ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	ナデ	外器面，外底面に自然釉	

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
254	1564	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	Z－29G	Vb層	5.1	—	(15.7)	(10.8)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
254	1565	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	b－34G	—	5.9	—	(16.8)	(10.8)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	ナデ		
254	1566	Ⅷ区	須恵器	埦	Y－26G	Vb層	—	—	(14.8)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
254	1567	Ⅷ区	須恵器	高台付埦	W－26G	Vb層	—	—	—	7.8	回転ヨコナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	指ナデ		
254	1568	Ⅷ区	須恵器	高台付埦	a－31G	Va層，Vc層	(5.2	—	(15.0)	(8.2)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ナデ	ナデ		
254	1569	Ⅷ区	須恵器	高台付埦	a－29G	Ⅳ層	(6.2)	—	(16.2)	(9.0)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
254	1570	Ⅷ区	須恵器	高台付稜埦	b－30，31G	Vc層	—	—	—	(10.0)	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ナデ		
254	1571	Ⅷ区	須恵器	高台付埦	a－31,b－31,bc－31G	Vd層，Vc層	—	—	—	7.3	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り離し，回転ヨコナデ	ヘラケズリ，回転ヨコナデ	ヘラケズリ		
254	1572	Ⅷ区	須恵器	高台付埦	V－26，27G	Vc層，6～8層	6.1	—	(13.5)	6.9	ナデ	回転ヘラケズリ	ナデ	指ナデ		
254	1573	Ⅷ区	須恵器	埦	Z-26G,Z-26G,Y-26G	Vb層，Vc層，Va層	7.0	—	(16.3)	(8.8)	回転ナデ，ヘラケズリ	回転ヘラ切り	回転ナデ	指ナデ		
254	1574	Ⅷ区	緑釉陶器	皿	Z－32G	A層（L01層）	—	—	—	(8.0)	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—	内器面，外器面に緑釉，長門産	38
254	1575	Ⅷ区	須恵器	高台付盤	X－26G	Vc層，Ⅳ	2.8	—	(13.4)	—	回転ヨコナデ	回転ナデ，ヘラオコシ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
254	1576	Ⅷ区	須恵器	高台付盤	c-31,c-31,b-31,cd-31G	Va層，Vc層	(3.0)	—	(14.6)	(9.7)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ナデ		
254	1577	Ⅷ区	青磁	碗	Z－27G	Va，b層	—	—	—	(7.4)	回転ナデ	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	越州窯青磁	38
254	1578	Ⅷ区	須恵器	高台付盤	a－34G	—	3.1	—	(17.6)	(6.0)	回転ヨコナデ	ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
254	1579	Ⅷ区	須恵器	高台付盤	b－31G	—	(3.4)	—	(18.8)	(13.6)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
254	1580	Ⅷ区	須恵器	高台付盤	a－31,b－31G	Ⅳ層，Vc層	3.3	—	(18.0)	(14.0)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
254	1581	Ⅷ区	須恵器	高台付盤	Z－29G	Vc層	(3.0)	—	(17.6)	(12.8)	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
254	1582	Ⅷ区	須恵器	高台付盤	c－34G	—	3.0	—	18.8	13.4	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ナデ	内器面，外器面に自然釉	36
254	1583	Ⅷ区	須恵器	盤	c-34,bc－33,34G	L01層	2.2	—	18.4	15.6	回転ヨコナデ	回転ヘラオコシ，ナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
254	1584	Ⅷ区	須恵器	盤	c－30G	Va～Vc層	2.9	—	(15.8)	(10.8)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラキリ	回転ヨコナデ	回転ナデ		
255	1585	Ⅷ区	須恵器	大甕	c－30,bc－31G	Vc層，北東ソクミゾ	—	—	(36.8)	—	回転ヨコナデ，格子タタキ	—	回転ヨコナデ，同心円タタキ	—	手捏，外器面に櫛描文	
255	1586	Ⅷ区	須恵器	大甕	W－27G	Vc層	—	—	(39.0)	—	ナデ，回転ナデ	—	ナデ，あて具痕	—		
255	1587	Ⅷ区	須恵器	大甕	c.d－34G		—	—	—	—	回転ヨコナデ	—	カキメ，回転ヨコナデ	—	外器面に波状櫛描文	
255	1588	Ⅷ区	須恵器	大甕	a－31,b－31G	Va層，Vd層	—	—	(34.2)	—	回転ヨコナデ，ハケメ	—	回転ヨコナデ，ハケメ	—		
255	1589	Ⅷ区	須恵器	大甕	Y－29G	Vc層	—	—	—	—	ヨコナデ，ジグザグ模様	—	ヨコナデ	—		
255	1590	Ⅷ区	須恵器	甕	X－26G	Ⅳ層	—	—	—	—	ハケメ後ナデ，ナデ，回転カキメ	—	回転ヨコナデ，タタキ（同心円）	—		
255	1591	Ⅷ区	須恵器	甕	b－30G	—	—	—	(24.8)	—	平行叩き，回転ヨコナデ	—	同心円叩き，回転ヨコナデ	—		
255	1592	Ⅷ区	須恵器	甕	c－31,d－31G	—	—	—	(21.1)	—	回転ヨコナデ，格子叩き	—	回転ヨコナデ，同心円タタキ	—		
255	1593	Ⅷ区	須恵器	甕	b－32,ab－32G	Ⅳ層	—	—	(9.6)	—	回転ヨコナデ，平行叩き	—	同心円タタキ，ナデ，回転ヨコナデ	—		
256	1594	Ⅷ区	須恵器	甕	a－29G	Vc上層,Va層,Vd層,Vc層,ソクミゾ	—	(21.2)	(14.0)	—	回転ヨコナデ，格子タタキ	—	回転ヨコナデ，同心円タタキ	—		
256	1595	Ⅷ区	須恵器	甕	c－34G	—	—	—	(12.2)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
256	1596	Ⅷ区	須恵器	短頸壺	W－26G	Vb層	—	—	(10.8)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ，タタキ	—	タタキの痕跡有	
256	1597	Ⅷ区	須恵器	壺	Y-29G,Z-29G	Ⅳ層，Va層，Vc層	—	—	(12.6)	—	不明，回転ヨコナデ	—	同心円タタキ後回転ヨコナデ	—		
256	1598	Ⅷ区	須恵器	短頸壺	Y－27G	Va層	—	—	(11.8)	—	タタキ後ヨコナデ，回転ヨコナデ	—	タタキ後ヨコナデ，回転ヨコナデ	—		
256	1599	Ⅷ区	須恵器	壺	Z-26G,Y-26G,Z-26G	Vb層，Vc層，Ⅳ層，Va層	—	—	—	—	タタキ後ナデ，ヨコナデ	タタキ，ヨコナデ	平行タタキ	平行タタキ		
256	1600	Ⅷ区	須恵器	壺	Y－29G	Vc層	—	—	(10.4)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ，不明	—		
256	1601	Ⅷ区	須恵器	壺	Z－29G	Ⅳ層	—	—	—	—	タタキ	—	車輪文タタキ	—		
256	1602	Ⅷ区	須恵器	壺	Y-28G,Z-29G	Ⅴ層，Va層	—	—	—	(11.8)	平行タタキ後ヘラケズリ，タタキ後ナデ	ナデ	ヨコナデ，タタキ後ヘラケズリ	ナデ		
256	1603	Ⅷ区	須恵器	壺	V－26G	Vc層	—	—	—	(9.3)	ナデ，ヘラケズリ，タタキ（格子）	ナデ	ナデ	ナデ		
256	1604	Ⅷ区	須恵器	双耳壺	4 SX038	—	38.7	(26.0)	(14.6)	17.1	回転ヨコナデ，粘土紐接合ヨコナデ，タタキ後ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ，肩に3条凹線，あて具痕上部にケズリ痕	ケズリ		37
257	1605	Ⅷ区	須恵器	長頸壺	X－26G	Vb層	—	—	(11.5)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
257	1606	Ⅷ区	須恵器	長頸壺	Z－29G	Vb層，Vc層，Ⅳ層	—	(21.0)	—	—	回転ナデ	—	あて具痕後ナデ	—		
257	1607	Ⅷ区	須恵器	長頸壺	Z-26G,Z-26G,Y-29G	Vb層，Va層，Vb層，Vc層，Ⅳ層	—	(23.7)	—	—	回転ナデ	—	ナデ，あて具痕後ナデ	—		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
257	1608	Ⅶ区	須恵器	長頸壺	Y−28G,Y−29G	Vb層、Ⅳ層、Vc層	−	(18.0)	−	10.2	ヨコナデ，ケズリ後ナデ，回転ナデ	ナデ，回転ナデ	ヨコナデ，あて具痕，指ナデ	指ナデ，ヨコナデ		
257	1609	Ⅶ区	須恵器	長頸壺	Z−29G	Vb層	−	−	−	−	タタキ，回転ヨコナデ	−	タタキ後ヨコナデ	−		
257	1610	Ⅶ区	須恵器	長頸壺	Y−28G,W−27G	Ⅳ層，Va層	−	−	−	−	格子タタキ，回転ヨコナデ，不明	−	回転ヨコナデ	−	外器面に自然釉	
257	1611	Ⅶ区	須恵器	壺	Y−29G	Vc層	−	−	−	−	−	ヨコナデ，同心円タタキ	ヨコナデ	ナデ，ヨコナデ		
257	1612	Ⅶ区	須恵器	壺	a−34G	−	−	−	−	(9.8)	格子タタキ後回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ，ヘラオコシ成形	タタキ後回転ヨコナデ	ナデ	自然釉	
257	1613	Ⅶ区	須恵器	横瓶	Y−29G	Va層，Vb層，Ⅳ層，Vc層	−	−	−	−	格子様タタキ	−	同心円，円弧タタキ	−		
258	1614	Ⅶ区	須恵器	高坏	Y−26G	Vb層，ソクミゾ	7.4	−	(8.4)	(5.0)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	外器面に沈線有	36
258	1615	Ⅶ区	須恵器	高坏	V−26G	Vc層	−	−	(13.7)	−	ナデ，ヘラケズリ，回転ナデ	−	回転ナデ	−		
258	1616	Ⅶ区	須恵器	高坏	W−26G	Vb層	−	−	(13.0)	−	回転ナデ，回転ヘラケズリ	粘土巻き上げ痕	回転ナデ，ナデ	ナデ		
258	1617	Ⅶ区	須恵器	高坏	4 SK040	Vc層	−	−	(13.8)	−	ナデ，ヘラケズリ	−	ナデ	指ナデ		
258	1618	Ⅶ区	須恵器	高坏	X−26G	Vb層	−	−	(14.0)	−	回転ヨコナデ	−	回転ヨコナデ	ナデ	粘土巻上げ痕	
258	1619	Ⅶ区	須恵器	高坏	Y−29G	Vc層，1層	9.3	−	14.2	8.7	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，ナデ，ヨコナデ	回転ヨコナデ	ナデ，回転ヨコナデ		36
258	1620	Ⅶ区	須恵器	鉢	Y−28G,Y−29G	Vc層	−	−	(18.0)	−	回転ヨコナデ，カキメ	−	回転ヨコナデ	−		
258	1621	Ⅶ区	須恵器	鉢	Z−29G	Vb層	−	−	(13.2)	−	回転ヨコナデ	−	回転ヨコナデ	−		
258	1622	Ⅶ区	須恵器	鉢	Z−29G	Vb層	−	−	(13.0)	−	回転ヨコナデ，ケズリ後ナデ	−	回転ヨコナデ	−		
258	1623	Ⅶ区	須恵器	耳付鉢	Y−28G,Z−28G	Vc層	−	−	−	−	回転ヨコナデ，平行タタキ	−	回転ヨコナデ	−		
258	1624	Ⅶ区	須恵器	耳付鉢	Z−26G,Z−26G,Y−26G	Vc層，Ⅳb層，Va層，Vb層	−	−	(16.7)	−	回転ヨコナデ	−	回転ヨコナデ	−		
258	1625	Ⅶ区	須恵器	耳付鉢	c−34G	−	−	−	(18.6)	−	回転ヨコナデ	−	同心円タタキ後回転ヨコナデ	−		
258	1626	Ⅶ区	須恵器	鉢	Y−29G,Z−29G	Ⅳ層，Vb層	−	−	(20.0)	−	回転ヨコナデ	−	回転ヨコナデ	−		
258	1627	Ⅶ区	須恵器	鉢	Y−29G	Vc層	−	−	−	−	回転ヨコナデ，ケズリ	−	回転ヨコナデ，当て具の具痕後ナデ	−		
258	1628	Ⅶ区	須恵器	鉢？	c−30G	Ⅳ層	−	−	−	−	ナデ，タタキ	−	ヨコナデ	−		
258	1629	Ⅶ区	須恵器	耳付坏	b−30G	Vc層	−	−	−	−	−	−	回転ヨコナデ	−		
258	1630	Ⅶ区	須恵器	耳付坏	a−30G	Ⅳ層	−	−	15.6	−	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
258	1631	Ⅶ区	須恵器	片口鉢	a−27G	Vc層	−	−	−	−	ヨコナデ	−	ヨコナデ，ナデ	−		
259	1632	Ⅷ区	土師器	甕	c−34G	−	−	−	(25.2)	−	ヨコナデ，ハケメ	−	ヨコナデ，ヘラケズリ	−		
259	1633	Ⅷ区	土師器	甕	b−29G	Va層	−	−	(27.6)	−	ハケメ	−	ヘラケズリ	−		
259	1634	Ⅷ区	土師器	甕	X−26G	Vb層	−	−	(24.2)	−	ハケメ，ヨコナデ	−	ケズリ，ヨコナデ	−		
259	1635	Ⅷ区	土師器	甕	c−33G	−	−	−	(27.0)	−	ヨコナデ，ハケメ	−	ヨコナデ，ヘラケズリ	−		
259	1636	Ⅷ区	土師器	甕	c−34G	−	−	−	(28.6)	−	ヨコナデ，ハケメ	−	ヨコナデ，ヘラケズリ	−		
259	1637	Ⅷ区	土師器	カマド	c−31G	−	−	−	(27.0)	−	ナデ	−	ナデ，ヘラケズリ	−		
259	1638	Ⅷ区	土師器	鉢	北東ソクミゾ	−	−	(34.6)	(37.2)	−	ヨコナデ，ハケメ	−	ハケメ	−		
259	1639	Ⅷ区	土師器	鉢	北西ソクミゾ	−	−	−	−	(11.9)	カキメ，ハケメ後ナデ，ヘラケズリ	ナデ，ヘラケズリ，ヘラ切り離し痕	−	−		
259	1640	Ⅶ区	土師器	甑	W−26G	Vb層	−	−	(29.6)	−	ハケメ後ナデ，ヨコナデ	−	ケズリ，ヨコナデ	−	外器面に黒斑有	
259	1641	Ⅶ区	土師器	甑	a−29G	Vb層,Va層,Sx層,Vc層,ソクミゾ	(22.3)	−	(24.3)	(17.9)	ヨコナデ，ハケメ後ナデ，ハケメ	ヨコナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	−	粘土巻上げ痕	
260	1642	Ⅶ区	土師器	坏	Z−29G	Vc，Vd層ミゾ	−	−	(10.2)	−	−	ヘラケズリ	−	−	内外器面に黒色顔料	
260	1643	Ⅶ区	土師器	坏	Y−29G	Vc層	−	−	(11.2)	−	ヨコナデ	−	ヨコナデ，ヨコナデ後暗文	ヨコナデ後暗文	内外器面に赤色顔料，内器面には暗文	
260	1644	Ⅶ区	土師器	坏	Y−26G	V層	−	−	11.4	−	ナデ，ヨコナデ	ナデ	ナデ，ヨコナデ	ナデ	外器面に黒斑有	
260	1645	Ⅶ区	土師器	坏	Z−29G	Vc層	4.5	−	14.2	−	ナデ	ケズリ後ナデ	ナデ	ナデ	内外器面部分的に黒色顔料	39
260	1646	Ⅷ区	土師器	坏	b.c−33,34G	L01層	3.7	−	(13.4)	(10.0)	ナデ	ナデ	ヨコナデ	−	外器面底部に粘土紐巻上げ痕	
260	1647	Ⅷ区	土師器	坏	c−34G	−	3.9	−	(13.4)	9.7	−	ヘラ切り離し	−	−		
260	1648	Ⅹ区	土師器	坏	i−37G	Ⅱ層	2.95	−	(11.9)	(8.0)	−	板目圧痕	−	−		
260	1649	Ⅷ区	土師器	坏	c−34G	L01層	−	−	(14.8)	(8.9)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	内器面に暗文	
260	1650	Ⅶ区	土師器	坏	Z−29G	Vc層	(3.1)	−	(13.8)	(8.6)	回転ヨコナデ	ヘラ切離し	回転ヨコナデ	ナデ	内外器面部分的に赤色顔料	
260	1651	Ⅷ区	土師器	坏	北東ソクミゾ	−	−	−	(14.2)	(10.2)	−	回転ヘラオコシ後ナデ	−	−		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
260	1652	Ⅷ区	土師器	坏	b−32,33G	Vc 層	3.2	—	(15.1)	(11.0)	回転ヨコナデ，回転ナデ	ナデ	回転ヨコナデ後ハケメ	回転ナデ	内，外器面に赤色顔料	
260	1653	Ⅷ区	土師器	坏	Y−26G	Vb 層	2.9	—	13.5	8.5	回転ナデ	ナデ	回転ヨコナデ	回転ナデ	外器面に赤色顔料	
260	1654	Ⅷ区	土師器	高台付埦	b.c−33,34G	L01層	—	—	—	(6.6)	—	ナデ，回転ヨコナデ	ナデ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	外器面に赤色顔料	
260	1655	Ⅷ区	土師器	高台付埦	c−34G	—	—	—	—	8.2	—	ナデ	—	—		35
260	1656	Ⅷ区	土師器	高台付埦	—	L01層	(6.0)	—	(14.0)	(8.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		
260	1657	Ⅷ区	土師器	高台付埦	Y−26G	Ⅳ層	5.2	—	(13.1)	6.9	ヨコナデ	ヘラ切り離し	ヨコナデ	—	粘土巻上げ痕	
260	1658	Ⅹ区	土師器	埦	k−40G	—	—	—	(17.9)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
260	1659	Ⅹ区	土師器	坏	—	—	—	—	—	(8.6)	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ		
260	1660	Ⅹ区	土師器	高台付坏	k−38G	Ⅳ層	4.0	—	(16.6)	9.1	回転ヨコナデ	ナデ	回転ヨコナデ	ナデ		
260	1661	Ⅷ区	土師器	高台付埦	c−31G	Va 層，Vc 層	—	—	—	6.5	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		
260	1662	Ⅷ区	土師器	高台付埦	—	L01層	—	—	—	—	ナデ	回転ヨコナデ	ナデ	ナデ	内黒土器	
260	1663	Ⅶ区	土師器	盤	Z−29G	Vc 層	(3.6)	—	(18.6)	—	ケズリ後ナデ，ヨコナデ	ケズリ後ナデ	ナデ	ナデ		
260	1664	Ⅶ区	土師器	盤	Y−26G	Vb 層	3.0	—	(19.7)	—	ヘラケズリ後ナデ	—	ナデ	—	内外器面に黒色顔料，沈線有	
261	1665	Ⅷ区	土師器	高坏	Z−29G	Vc 層	—	—	—	—	—	ヘラケズリ，ナデ	—	ナデ	外器面に赤色顔料	
261	1666	Ⅷ区	土師器	甑(把手)	Y−27G	Vc 層	—	—	—	—	指押え後ナデ，板状工具痕	—	ケズリ	—		
261	1667	Ⅷ区	土師器	甑(把手)	Y−27G	Vc 層	—	—	—	—	指ナデ	—	ヘラケズリ	—		
261	1668	Ⅷ区	土師器	甑(把手)	X−26G	Vb 層	—	—	—	—	指ナデ	—	ケズリ	—		
261	1669	Ⅷ区	土師器	甑(把手)	X−26G	Vb 層	—	—	—	—	ユビによる整形後部分的にハケメ	—	ケズリ	—		
261	1670	Ⅷ区	土師器	甑(把手)	X−26G	Vb 層	—	—	—	—	ケズリ，ナデ	—	ケズリ	—		
261	1671	Ⅷ区	土師器	甑(把手)	Y−26G	Vb 層	—	—	—	—	指押え後ナデ	—	ケズリ	—		
261	1672	Ⅷ区	土師器	甑(把手)	Y−27G	Ⅳ層	—	—	—	—	指ナデ	—	—	—		
263	1676	Ⅷ区	瓦	平瓦	Z−28G	Va 層	—	—	—	—	—	—	—	—		
263	1677	Ⅷ区	瓦	丸瓦	Z−30G	Vb 層	—	—	—	—	縄目タタキ	—	—	—		
264	1678	Ⅷ区	須恵器	壺	V−26G	Va 層	—	(10.9)	—	—	回転ナデ	—	回転ナデ	—	外器面に自然釉	
264	1679	Ⅷ区	須恵器	小型壺	a−29G	V層	—	—	(8.3)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—		
264	1680	Ⅷ区	須恵器	短頸壺	Z−29G	Ⅳ層	—	—	(5.2)	—	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ	—		
264	1681	Ⅷ区	須恵器	蓋	Z−29G	Va 層	—	—	—	—	回転ヨコナデ	—	ナデ	—	蓋ツマミ	
264	1682	Ⅷ区	須恵器	不明	Z−29G	Vc 層	—	—	—	—	—	—	—	—	装飾把手	38
270	1704	Ⅷ区	瓦質土器	埦	5 SX022	最下層	—	—	—	—	ナデ	—	ナデ	—	外器面に沈線有，口縁外器面に煤付着	
270	1705	Ⅷ区	土師器	坏	5 SX022	1 層	—	—	—	(7.8)	—	不明，回転糸切り離し	—	不明		
270	1706	Ⅷ区	土師器	坏	5 SX022	—	—	—	—	—	回転ヨコナデ	糸切り底，回転ヨコナデ	ナデ	ナデ	ヘラによる渦巻痕	
270	1707	Ⅷ区	土師器	坏	5 SX022	1 層	2.9	—	(14.3)	(9.1)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ナデ		
272	1713	Ⅷ区	須恵質土器	擂鉢	5 SX023	1 層	—	—	—	—	ナデ	—	ナデ	—		
272	1714	Ⅷ区	須恵質土器	壺	5 SX023	最下層	—	—	—	—	ハケメ，ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	—		
272	1715	Ⅷ区	土師器	甑	5 SX023	—	—	—	—	2.3	ヘラケズリ	ヘラケズリ，ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ，ナデ	穿孔有(1ヶ)，外器面に黒斑有	
272	1716	Ⅷ区	須恵器	蓋	5 SX023	—	—	—	(13.6)	—	回転ヨコナデ，ヘラ切り離し	—	回転ヨコナデ	—		
272	1717	Ⅷ区	須恵器	高台付皿	5 SX023	1 層	—	—	—	(13.4)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ		
272	1718	Ⅷ区	土師器	高坏	5 SX023	3 層	—	—	—	—	ハケメ	ハケメ後ヨコナデ，ハケメ，ケズリ後貼り付	—	指押え		
272	1719	Ⅷ区	土師器	壺	5 SX023	2 層，3 層	—	—	—	(4.7)	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ナデ		
272	1720	Ⅷ区	土師器	二重口縁甕	5 SX023	1 層	—	—	(29.2)	—	ヨコナデ，ナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—		
285	1772	Ⅹ区	瓦質土器	盤	6 SK004	1 層	2.45	—	(31.8)	(29.2)	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		
285	1773	Ⅹ区	土師質土器	鍋	6 SK004	1 層	2.95	—	(18.4)	(13.8)	ナデ	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		
285	1774	Ⅹ区	土師質土器	焙烙鍋	6 SK004	1 層	—	—	(47.2)	—	ヨコナデ，ナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	型押し	
285	1775	Ⅹ区	須恵質土器	浅鉢	6 SK005	1 層	7.15	(15.0)	(14.9)	—	ナデ	無調整	回転ナデ	回転ナデ		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
285	1776	X区	瓦質土器	鉢	6 SK030	—	—	—	(26.0)	—	ヘラナデ	—	ヨコナデ、指頭圧痕	—		
285	1777	X区	瓦質土器	擂鉢	6 SK005	1層	(11.8)	—	(29.0)	(18.0)	ヨコナデ、指頭圧痕	ナデ	ヨコナデ、擂目	擂目痕		
318	2003	X区	瓦質土器	鉢	6 SX503	—	12.4	—	(34.8)	(26.9)	ヨコナデ(押圧痕有)	ナデ	ヨコナデ	ナデ		
318	2004	X区	瓦質土器	浅鉢	6 SX503	—	(7.1)	(16.4)	(15.9)	13.7	ヘラケズリ後ナデ	当て布？痕、貼り付け脚ーナデ	回転ヨコナデ	回転ナデ	外底面に煤付着	41
318	2005	X区	瓦質土器	火鉢	6 SX503	—	—	(48.0)	(45.2)	—	ヨコナデ、右上がり方向ヘラケズリ後ナデ	—	ヨコナデ、型押し後ナデ	—	外器面に連続菊花文、櫛描波状文	
318	2006	X区	瓦質土器	火鉢	6 SX503	—	—	(48.3)	(45.6)	—	型押し後右上がり方向ナデ、ヨコナデ	—	型押し後ナデ、ヨコナデ	—	外器面に菊花文、突帯、刺目突帯文、櫛描波状文	
318	2007	X区	瓦質土器	火鉢	6 SX503	直上層、最下層	37.3	(43.4)	(39.8)	(38.4)	ヨコナデ、押圧痕後ハケナデ	当て布痕、貼り付け脚ーナデ	ヨコナデ、型押し後ナデ	回転ナデ	外器面に二条突帯、菊花文、突帯、櫛描波状文	
319	2008	X区	土師質土器	坏	6 SX504	北側トレンチ	2.65	—	(10.9)	7.1	回転ヨコナデ	回転糸切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		40
319	2009	X区	瓦質土器	擂鉢	6 SX504	—	—	—	(27.0)	—	押圧痕	—	ヨコナデ、櫛描擂目	—		
319	2010	X区	瓦質土器	鉢	6 SX504	1層	12.7	—	(38.0)	(30.0)	回転ヨコナデ、ナデ、ケズリ後ナデ	押圧	回転ヨコナデ	押圧		
319	2011	X区	瓦質土器	片口鉢	6 SX504	1層	(14.3)	—	(37.7)	(27.6)	ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ、回転ヨコナデ	当て布？痕	ヨコナデ	回転ナデ		
319	2012	X区	瓦質土器	擂鉢	6 SX504	最下層	13.9	—	(27.8)	(16.6)	押圧痕、ヨコナデ、ヘラケズリ	当て布？痕	ヨコナデ、回転ヨコナデ後櫛描擂目	櫛描擂目、ヨコナデ		
319	2013	X区	瓦質土器	擂鉢	6 SX504	—	—	—	—	18	押圧痕後ナデ、ヨコナデ	当て布痕？	櫛描擂目	櫛描擂目、ヨコナデ		
319	2014	X区	瓦質土器	浅鉢	6 SX504	—	—	15.8	14.2	13.4	ヨコナデ、ケズリ後ナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ		
319	2015	X区	瓦質土器	鉢	6 SX504	—	(5.2)	(15.7)	(15.6)	(12.6)	ヘラケズリ後ナデ	無調整	ヨコナデ	ナデ	内器面上部～外器面に煤付着、内底面にヘラ記号	
319	2016	X区	瓦器	埦	6 SX504	最下層	6.9	—	(14.5)	(6.6)	ヨコナデ	ナデ	ナデ	ナデ		
319	2017	X区	瓦質土器	鉢	6 SX504	—	—	—	36.4	—	ヨコナデ、ハケメ、押圧、ヘラケズリ	—	ヨコナデ	—		
320	2019	X区	瓦質土器	捏鉢	6 SX504	1層、L01層	12.9	—	(39.8)	(30.3)	ヨコナデ、指頭圧痕、ハケメ後ナデ	ナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	ナデ		
320	2020	X区	瓦質土器	浅鉢	6 SX504	—	13.2	—	(40.2)	(31.3)	ヨコナデ、ヘラケズリ後ヨコナデ、押圧痕	ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ	回転ナデ		
320	2021	X区	土師質土器	捏鉢	6 SX504	—	11.3	—	42.7	27.9	ヨコナデ、押圧痕、当て布痕？	当て布痕？	ヨコナデ、型押し痕	型押痕		
320	2022	X区	土師質土器	捏鉢	6 SX504	北側ー	12.8	—	(42.85)	28	ヨコナデ、押圧痕、ヘラケズリ後ヨコナデ	当て布痕	ヨコナデ、型押し痕	型押痕、ナデ、ヨコナデ		
321	2023	X区	瓦質土器	火鉢	6 SX504	1層	—	—	(45.0)	—	ヨコナデ、ナデ	—	回転ヨコナデ、ハケナデ	—	外器面に菊花文三条突帯、櫛描波状文	
321	2024	X区	瓦質土器	鉢	6 SX504	1層	—	—	—	(27.0)	ナデ	ナデ	ー	回転ナデ	貼付脚部	
321	2025	X区	瓦質土器	火鉢	6 SX504	—	36.7	—	42.5	27.5	ナデ、ハケメ？	ナデ	ナデ	ナデ？		
321	2026	X区	瓦質土器	火鉢	6 SX504	2～3層	—	—	—	(30.2)	ハケメ、ナデ、回転ヨコナデ	—	ヨコナデ、ナデ	—	突帯	
322	2027	X区	土師質土器	甕	6 SX504	—	63.2	—	(76.0)	31	ヨコナデ、タタキ後ナデ	ナデ？	ヨコナデ、指押え後ナデ、ナデ	ナデ	銭1枚付着	
322	2028	X区	瓦質土器	浅鉢	6 SX505	—	—	12.5	11.8	—	ヨコナデ	ナデ	ナデ、ヨコナデ	—		
322	2029	X区	瓦質土器	浅鉢	6 SX505	—	—	(15.5)	(13.0)	—	回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ、布痕	ナデ	回転ナデ	回転ナデ		
322	2030	X区	瓦質土器	坏	6 SX505	—	—	—	(17.2)	—	ナデ	ー	回転ナデ	—		
322	2031	X区	瓦質土器	鉢	6 SX505	—	—	—	—	—	ヨコナデ、ナデ	—	回転ヘラナデ	—		
322	2032	X区	土師質土器	捏鉢	6 SX505	L03層、ソクミゾ、カクラン	11.4	—	40.4	28.8	押圧痕、ヨコナデ	当て布痕？	型押し痕、ヨコナデ	型押し痕		
322	2033	X区	瓦質土器	焙烙鍋	6 SX505	L03層	7.3	32.3	31.5	24	回転ヨコナデ、ヘラケズリ後ヨコナデ、貼り付け脚ナデ	静止ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	外器面全体に煤付着、内器面全体に炭化痕有り、穿孔は焼成後	
323	2034	X区	瓦質土器	浅鉢	6 SX506	—	—	(32.0)	(31.8)	(25.0)	ヨコナデ、ナデ	ナデ	ヨコナデ、回転ナデ	回転ナデ		
323	2035	X区	瓦質土器	浅鉢	g—43G	L03層	12	—	25.2	22.0	—	ナデ	回転ナデ	ナデ		41
323	2036	X区	土師質土器	大甕	6 SX507	直上層	(49.5)	—	(66.0)	—	ヨコナデ、ナデ	—	ヨコナデ、ナデ、指頭痕、工具痕	—		
323	2037	X区	弥生土器	高坏	6 SX507	—	—	—	(30.8)	—	—	—	不明	—		
323	2038	X区	須恵質土器	脚？	6 SX506	—	7.9	—	—	—	ナデ	ー	ナデ	—	手捏ね	
324	2039	Ⅷ区	土師質土器	皿	b—30G	Va層	—	—	—	(9.4)	—	回転ナデ、糸切り痕	—	不明、ナデ		
324	2040	X区	土師質土器	皿	f—43G	—	—	—	—	(7.4)	回転ヨコナデ	回転糸切り離し	ナデ、回転ヨコナデ	ナデ、回転ヨコナデ		
324	2041	X区	土師質土器	皿	—	—	—	—	—	(10.2)	不明	回転糸切り離し	ー	不明		
324	2042	X区	土師質土器	皿	g—43G	L05層	1.4	—	(9.5)	4.6	回転ヨコナデ	回転糸切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
324	2043	X区	土師質土器	皿	g—43G	—	2.15	—	(10.8)	(6.0)	回転ヨコナデ	回転糸切り離し	不明	回転ヨコナデ	不純物付着	
324	2044	X区	土師質土器	皿	6 SX504	—	2.0	—	(10.3)	8.2	ヘラケズリ後ヨコナデ	回転糸切り離し	ヨコナデ	ナデ		
324	2045	X区	土師質土器	皿	g—43G	L05層	2	—	8.0	5.1	回転ヘラケズリ後ナデ	回転糸切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		41

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
324	2046	X区	土師質土器	皿	f-42G・g-43G	L03層・カクラン	1.6	—	(8.7)	(5.0)	ナデ	回転糸切り離し	ナデ	ナデ		
324	2047	X区	土師質土器	皿	6 SX504		2.3	—	(10.6)	7	回転ヨコナデ	回転糸切り離し	回転ヨコナデ	ナデ		
324	2048	X区	土師質土器	皿	g—43G	L05層	1.6	—	7.7	6.0	ヨコナデ	回転糸切り離し	指痕	ナデ		41
324	2049	X区	土師質土器	皿	—	表土ハギ	2.1	—	(9.65)	(7.4)	回転ヨコナデ	回転糸切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
324	2050	X区	土師質土器	皿	g—43G	L05層	(2.2)	—	(9.0)	(7.4)	回転ヨコナデ	回転糸切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
324	2051	X区	土師質土器	皿	f—43G	L03層	1.1	—	(6.4)	(4.7)	回転ヨコナデ	回転糸切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
324	2052	X区	土師質土器	皿	6 SX504	Ⅰ層—	1.35	—	(6.6)	(5.3)	ヨコナデ	回転糸切り離し	ヨコナデ	ナデ		
324	2053	Ⅶ区	瓦器	埦	Z—27G	Vab 層	—	—	—	(9.0)	ナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ		
324	2054	X区	瓦器	埦	j—38G	Ⅲ層	—	—	—	(7.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	—	ナデ		
324	2055	X区	瓦器	埦	i—37G	Ⅱ層	—	—	—	(7.0)	回転ヨコナデ	ナデ	—	ナデ		
324	2056	X区	瓦器	埦	j—38G	Ⅲ層	—	—	—	(6.2)	回転ヨコナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ後ヨコナデ	ナデ	ナデ		
324	2057	X区	瓦器	埦	h—37G	Ⅲ層	—	—	—	(6.6)	ヨコナデ	ナデ	—	ナデ	外底面にヘラ記号？	
324	2058	X区	土師質土器	埦	h—40G	Vb層，V～Ⅵ層	—	—	(14.8)	—	右上り方向のナデ，回転ナデ	—	回転によるヨコナデ	—	外器面に沈線	
325	2059	X区	土師質土器	坏	f—42・43G	L03層，ソクミゾ	3.4	—	15.2	8.6	ヨコナデ	回転糸切り離し	ヨコナデ	ナデ		41
325	2060	X区	土師質土器	盤	f—43G	L03層	3.1	—	(18.3)	(11.1)	回転ヨコナデ	回転糸切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
325	2061	X区	瓦質土器	皿	f—43G		5.0	—	(23.7)	(18.0)	回転ヨコナデ	ナデ	回転ヨコナデ	ナデ	外器面に沈線	
325	2062	X区	土師質土器	把手付焙烙	—	撹乱	(2.9)	—	(15.9)	(13.0)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	ナデ	回転ヨコナデ	—		
325	2063	Ⅷ区	土師質土器	把手付焙烙	カクラン一括	—	3.1	—	15.5	14.8	回転ヨコナデ，ヘラケズリ	布状の圧痕あり	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
326	2064	Ⅶ区	瓦質土器	擂鉢	W—26G	Ⅳb 層	—	—	—	—	ナデ	—	ハケメ	—		
326	2065	X区	瓦質土器	擂鉢	h—40G	Ⅳ層	—	—	(41.2)	—	ヨコナデ	—	櫛描擂目	—		
326	2066	X区	瓦質土器	擂鉢	g—42G	5 トレンチ	—	—	—	—	ヘラケズリ	—	ナデ後櫛描擂目，ハケメ後ナデ	—		
326	2067	X区	瓦質土器	鉢	—	—	—	—	(25.2)	—	ミガキ後ハケメ	—	ヨコナデ，指頭圧痕	—	外器面に波状文	
326	2068	X区	須恵質土器	壺	g—39G	Ⅳ層	—	—	—	—	ナデ，格子文タタキ	—	ヨコナデ，ハケメ	—		
326	2069	Ⅶ区	須恵質土器	擂鉢	Y—28G	Vb 層	—	—	—	—	指ナデ	未調整	櫛描擂目	櫛描擂目	櫛描による擂目単位６本	
326	2070	X区	瓦質土器	浅鉢	6 SX504	—	7.2	(17.2)	(16.0)	(14.0)	ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ，ヘラケズリ	ナデ	ヨコナデ	ナデ		41
326	2071	X区	瓦質土器	浅鉢	g—42・43G	L01層	(6.8)	(17.4)	(16.4)	(15.6)	ヨコナデ後ミガキ？	ナデ	ヨコナデ，指頭圧痕	—	脚部貼り付け	
326	2072	X区	瓦質土器	浅鉢	j—42G	整地①層	—	—	(14.8)	(11.4)	不明	ナデ	ヨコナデ	ナデ	脚部貼り付け	
326	2073	X区	瓦質土器	壺	g—43G	L03層	—	(15.4)	—	(12.8)	ヨコナデ，ミガキ痕	押圧，ナデ	回転ヨコナデ，指頭圧痕，ナデ	回転ヨコナデ，指頭圧痕		
326	2074	X区	瓦質土器	浅鉢	6 SD501	—	—	(20.0)	(15.6)	(14.6)	回転ヨコナデ	押圧痕	回転ヨコナデ，指頭圧痕	回転ナデ	火鉢の可能性有り，脚部貼り付け	
326	2075	Ⅷ区	瓦質土器	鉢	a—31G	A 層	—	—	(16.1)	—	ヨコナデ，ヘラケズリ	—	ヨコナデ	—		41
326	2076	X区	瓦質土器	浅鉢	g—43G	L03層	—	(22.5)	(24.9)	(20.0)	回転ヨコナデ，ヨコナデ	ナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	脚部貼り付け，上部に獣面装飾	
326	2077	X区	瓦質土器	浅鉢	f—43G		—	(27.2)	(26.2)	(22.0)	—	—	回転ヨコナデ	—		
327	2078	X区	瓦質土器	獣面外耳付壺	6 SD501	Ⅳ層	—	—	—	—	ミガキ	—	ナデ	—	獣面	
327	2079	X区	瓦質土器	火鉢	f—42G		—	—	—	—	回転ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	外器面に菱型刻印文	
327	2080	X区	瓦質土器	火鉢	g—39G	Ⅳ層	—	—	(47.0)	—	ヨコナデ，タテ方向凹線模様	—	ヨコナデ，ヘラナデ	—	外器面に印刻文（方形）突帯	
327	2081	X区	瓦質土器	火鉢	6 SX504		—	—	—	—	ヨコナデ，ハケメ	—	ヨコナデ，ナデ	—	外器面に菊花文，突帯	
327	2082	X区	瓦質土器	火鉢	f—43G		—	—	(29.8)	—	ヨコナデ	—	回転ヨコナデ，ハケナデ	—	外器面に菊花文（２ヶ）	
327	2083	X区	瓦質土器	火鉢	f—43G		—	—	—	—	ヨコナデ	—	ナデ	—	外器面に菊花文，櫛描波状文，突帯	
327	2084	X区	瓦質土器	火鉢	6 SX503	直上層	—	—	—	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ，ナデ	—	外器面に菊花文，突帯，波状文	
327	2085	X区	瓦質土器	火鉢	6 SX504		—	—	(47.2)	—	ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，型押し後ハケナデ	—	外器面に二条突帯，櫛描文	
327	2086	X区	土師質土器	捏鉢	6 SX502	L01層，L03層	11.5	—	42.7	27.4	押圧痕	当て布痕	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	全体に煤付着	
327	2087	X区	瓦質土器	捏鉢	—	ピット	10.9	—	(36.6)	(27.0)	ヨコナデ	無調整	ヨコナデ	ヨコナデ		
327	2088	X区	瓦質土器	焙烙鍋	6 SX502	整地Ⅰ層，カクラン，L03層	7.6	(32.0)	(30.6)	24.9	回転ヨコナデ	ヘラケズリ，当て布？痕	回転ヨコナデ	ナデ	欠ふくれ，外器面に煤付着，穿孔１ケ（焼成前），内底面に焦げた跡，スタンプ	
327	2089	X区	瓦質土器	焙烙鍋	g—43,f,h—43G	L03層	6.7	32.0	31.3	26.3	回転ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ（模様か？）	当て布？痕	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	全体に煤付着，穿孔２ケ（焼成前）	

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
327	2090	Ⅶ区	瓦質土器	鍋	Y−26G,27G	Ⅴ層	—	—	—	—	ナデ，ケズリ	—	ナデ	—		
328	2091	Ⅶ区	瓦質土器	不明	Y−28G	Ⅳ層，Ⅴa層	—	—	—	—	ナデ	—	ナデ	—		
328	2092	Ⅹ区	瓦器	火鉢？	f−42G	整地①層	—	—	(60.0)	—	ハケヨコナデ，ハケメ後ナデ	—	ヨコナデ	—		
328	2093	Ⅹ区	瓦質土器	カマド	g−43G	—	—	—	(17.3	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		
328	2094	Ⅹ区	瓦質土器	カマド	6 SD501	A層	—	—	—	—	—	—	ナデ	—	内器面に煤付着，火入れ口が赤く焼けている，半円，花火様模様	
328	2095	Ⅹ区	瓦質土器	火鉢	g−43G	L03層	(14.9)	—	—	18.9	ヨコナデ，ナデ	板目圧痕	ヨコナデ，ナデ	回転ヨコナデ		41
328	2096	Ⅹ区	瓦質土器	火鉢	g−43G	—	—	—	—	(24.6)	ヨコナデ	—	ナデ，ヨコナデ	ヨコナデ	外器面に突帯	
328	2097	Ⅹ区	瓦質土器	火鉢	g−44G	—	—	—	—	(27.2)	ナデ，ヨコナデ	ナデ	型押し痕	—	外器面に突帯，脚部貼り付け	
329	2098	Ⅹ区	瓦質土器	甕	6 SX502	—	—	(42.2)	—	23.3	ナデ，ヨコナデ	当て布痕？	ナデ	ヨコナデ		
329	2099	Ⅹ区	土師質土器	甕	g−43G	L03層	(46.4)	—	55.1	—	ヨコナデ，ナデ	—	ヨコナデ，ナデ，指頭圧痕	—		
330	2100	Ⅹ区	瓦質土器	甕	6 SX502		—	—	(36.7)	—	ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—	外器面に波状文	
330	2101	Ⅹ区	瓦質土器	大甕	6 SD501	3層，2層，L01層	—	(45.6)	(41.6)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ，表面剥離	—		
330	2102	Ⅹ区	瓦質土器	甕	h−37G	—	—	—	(29.0)	—	ヨコナデ（上面）	—	ヨコナデ，ナデ	—		
330	2103	Ⅹ区	土師質土器	大型甕	i−37G	Ⅱ層	—	—	(31.6)	—	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—		
330	2104	Ⅹ区	弥生土器	甕	j−40G	Ⅳ層	—	—	(20.4)	—	—	—	—	—		
331	2156	Ⅶ区	須恵器	転用硯	a−28,a−29G	Ⅴ層，Ⅴa層	4.9	—	—	11.2	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ，使用による顔料	—	回転ヨコナデ	—		
372	2157	Ⅶ区	須恵器	坏	Z−29G	Ⅴa層	—	—	—	(7.9)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	内底面に墨痕	
372	2158	Ⅶ区	土師器	坏	一括	—	(2.8)	—	(14.0)	(9.0)	ヨコナデ	ケズリ	ヨコナデ	ヨコナデ	外底面に墨書	38
372	2159	Ⅶ区	土師器	坏	一括	—	—	—	—	(7.8)	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	—	ナデ	外底面に墨書	
372	2160	Ⅶ区	須恵器	坏	X−26G	Ⅳ層	—	—	—	(10.0)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	外底面に墨書	
372	2161	Ⅶ区	土師器	坏	一括	—	—	—	—	—	—	ヘラケズリ	—	ナデ	外底面に墨書	
372	2162	Ⅶ区	土師器	坏	Y−28G	Ⅳ〜Ⅴ層	—	—	—	—	—	—	—	—	外底面に墨書	
372	2163	Ⅶ区	土師器	坏	一括	—	—	—	—	—	—	ナデ	—	ミガキ？	外底面に墨書	
372	2164	Ⅶ区	土師器	不明	Z−28G	Ⅴa層	—	—	—	—	—	—	—	—	墨書	
372	2165	Ⅶ区	須恵器	坏	一括	—	—	—	—	(5.2)	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	外底面に墨書	40
372	2166	Ⅶ区	須恵器	蓋	Z−29G	Ⅴc層	—	—	(15.0)	—	回転ヘラケズリ，回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—	天井外器面に墨書	
372	2167	Ⅶ区	須恵器	坏	Y−26G	Ⅳ層	—	—	—	—	—	回転ヘラ切り，ナデ	—	指ナデ	墨書	
372	2168	Ⅶ区	須恵器	坏	Z−29G	Ⅳb層	—	—	—	—	—	—	—	—	墨書・刻書	40
372	2169	Ⅶ区	須恵器	坏	Z−27G	Ⅳ−Ⅴb層	—	—	—	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—	外器面に黒色顔料，刻書有	
373	2170	Ⅹ区	須恵器	坏	g−43G	Ⅹ層	—	—	(12.6)	—	回転ヨコナデ	—	回転ヨコナデ	—	外器面にヘラ記号	
373	2171	Ⅶ区	須恵器	坏	Z−29GG	—	—	—	—	—	—	ヘラケズリ後ナデ	—	ナデ	天井部外器面ヘラ記号	
373	2172	Ⅶ区	須恵器	坏	Z−28G	Ⅴa層	—	—	—	(7.7)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ，ヘラ切り離し	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	内底面に粘土巻上げ痕，ヘラ記号	
373	2173	Ⅶ区	須恵器	坏	X−28G	Ⅳb層	—	—	—	(9.2)	ヨコナデ	ナデ	—	不明	外底面にヘラ記号	
373	2174	Ⅶ区	須恵器	坏	Y−28G	Ⅴc層	—	—	—	(8.9)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ナデ		
373	2175	Ⅷ区	須恵器	坏	北西ソクミゾ	—	—	—	—	(7.1)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
373	2176	Ⅶ区	須恵器	坏	Z−38G	Ⅴa層	—	—	—	—	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	天井部外器面ヘラ記号	
373	2177	Ⅷ区	須恵器	坏	b−29,30G	Ⅴa層	(3.6)	—	(12.4)	(7.3)	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ナデ		
373	2178	Ⅶ区	須恵器	坏	X−26G	Ⅴb層	—	—	(13.4)	—	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
373	2179	Ⅷ区	須恵器	高台付坏	c−30G	Ⅳ〜Ⅴb層	—	—	—	6.4	回転ヨコナデ	回転ヘラオコシ，回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ナデ		
373	2180	Ⅶ区	須恵器	高坏？	Z−29G	Ⅴc層	—	—	—	—	回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	—	ヘラ記号	
373	2181	Ⅶ区	須恵器	壺	a−28,Z−29GG	Ⅴb層	—	—	—	9.3	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	ヘラケズリ，回転糸切り，ヨコナデ	—	ナデ	外底面に爪形状圧痕	
373	2182	Ⅶ区	須恵器	壺？	X−28G	Ⅳ層	—	—	—	(16.0)	回転ヨコナデ	回転ナデ	—	回転ナデ	外底面にヘラ記号	
373	2183	Ⅶ区	須恵器	坏	Y−29G	Ⅴc層	—	—	—	(8.1)	ナデ	回転ヘラ切り	回転ナデ	指ナデ	外底面にヘラ記号	
373	2184	Ⅷ区	須恵器	壺	c−31G	Ⅳ層，Ⅴc層	—	—	—	9.0	回転ヘラケズリ	回転ヘラオコシ	回転ヨコナデ	回転ナデ		

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
374	2185	Ⅶ区	須恵器	蓋	28G	Ⅳ層	—	—	—	—	回転ヨコナデ，凹線	—	多方向ヘラナデ	—	天井部内器面ヘラ記号	
374	2186	Ⅶ区	須恵器	蓋	Y—27G	Ⅳ層	—	—	—	—	ナデ	—	指ナデ	—	天井部内器面にヘラ記号	
374	2187	Ⅶ区	須恵器	小型壺	b—29G	—	—	—	—	—	回転ヘラケズリ	—	回転ヨコナデ	—		
375	2188	Ⅶ区	須恵器	高台付埦	a—29G	Vc層	—	—	—	(9.2)	回転ヨコナデ，回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ，回転ナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	爪形状圧痕	
375	2189	Ⅶ区	須恵器	坏	W—26G	Vb層	—	—	(8.0)	—	回転ヘラケズリ	押さえ，高台の剥離した跡	—	ナデ		
375	2190	Ⅶ区	須恵器	不明	a—28G	Va層	—	—	—	(7.3)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	粘土巻上げ痕，爪形状圧痕	
—	2196	Ⅷ区	須恵器	蓋	—	—	—	—	—	—	回転横ナデ	—	—	—	蓋の把手ツマミ	38
—	2197	Ⅷ区	土師質土器	柄付焙烙	—	—	3.1	15.8	15.5	14.8	回転横ナデ，ヘラケズリ	布痕	回転横ナデ	回転横ナデ	把手剥げる	41
—	2198	Ⅷ区	土師質土器	脚付盤？	5 SX016	—	—	—	—	15.0	ナデ	回転横ナデ	回転ナデ	指ナデ	脚部のみ	41

表2　土製模造品

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
50	280	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	4 SI013	—	3.0	—	4.0	—	ナデ	—	ナデ	—	外器面に指紋，黒斑有，手捏	
50	281	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	4 SI013	—	3.1	—	4.5	—	ナデ	—	ナデ	—	外器面に指紋が残る，手捏	
50	282	Ⅶ区	土製模造品	甕形	4 SI013	—	5.8	—	(5.5)	—	指ナデ	—	指ナデ	—		
50	283	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	4 SI013	—	2.7	—	3.9	—	ナデ	—	ナデ	—	内外器面に指紋跡残る，手捏	
53	301	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	4 SI029	1・2層—	—	—	—	—	ナデ	—	ハケメ後ナデ	—		
61	354	Ⅶ区	土製模造品	坏形	5 SI033	—	3.4	—	8.5	1.5	指頭圧痕	指頭圧痕	ナデ	ナデ		
63	359	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	5 SI035	—	3.1	—	3.2	—	指ナデ	指ナデ	指ナデ	指頭圧痕	手捏	
65	366	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	5 SI039	—	3.15	—	—	1.65	ハケメ，指ナデ	ハケメ，指ナデ	指ナデ	指ナデ	手捏	
74	405	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	4 SE055	上層—	3.7	—	6.0	—	ナデ	ナデ	ナデ	指押え	手捏，黒斑有	
78	422	Ⅶ区	土製模造品	坏形	5 SE060	—	3.3	—	8.5	0.7	ナデ	—	ナデ	—	外器面に黒斑有	
80	427	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	5 SE064	—	—	—	—	4.0	指ナデ	指ナデ	指ナデ	指頭圧痕	手捏	
83	448	Ⅶ区	土製模造品	壺形	4 SK027	1層	5.3	—	(3.9)	—	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	手捏，外器面に黒斑有	
86	458	Ⅶ区	土製模造品	高坏形	5 SK052	—	—	—	—	—	指ナデ	指ナデ	指ナデ	指ナデ	手捏	
100	540	Ⅶ区	土製模造品	甕形	4 SK006	第1層，Vb層—，Va層—	5.9	6.0	4.1	—	指頭圧痕，ナデ	ナデ	指頭圧痕，指ナデ	指ナデ		
100	541	Ⅶ区	土製模造品	甕形	4 SK006	—	7.4	7.8	7.2	—	指頭圧痕，指ナデ	ナデ	指頭圧痕，ケズリ，指ナデ	指ナデ	外器面に意図的な打ち欠き有	
100	542	Ⅶ区	土製模造品	甕形	4 SK006	第1層—	6.9	—	7.3	—	ナデ，指頭圧痕	ナデ	指頭圧痕	指頭圧痕	外器面に黒斑有	
100	543	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	4 SK006	第1層	4.2	—	7.3	—	指頭圧痕，ナデ	ナデ	指頭圧痕	指ナデ	外器面に黒斑有	
100	544	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	4 SK006	第1層	2.4	—	3.8	—	指ナデ，ナデ	ナデ	指頭圧痕	指頭圧痕		
100	545	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	4 SK006	第1層	2.5	—	4.2	0.4	指頭圧痕後ナデ，ナデ	ナデ	指頭圧痕後ナデ	指頭圧痕後ナデ	外器面に黒斑有	
100	546	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	4 SK006	Vb層	2.8	—	(3.3)	0.7	ナデ	ナデ	指ナデ	指ナデ		
100	547	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	4 SK006	第1層	2.2	—	4.4	—	ナデ，指頭圧痕	ナデ	指頭圧痕	指頭圧痕		
100	548	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	4 SK006	第1層	2.6	—	(4.9)	—	ナデ	ナデ	ナデ，指頭圧痕	指頭圧痕		
113	617	Ⅶ区	土製模造品	杓子形	4 SK032	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
116	635	Ⅶ区	土製模造品	坏形	4 SK022	—	2.2	—	(8.7)	(5.2)	ナデ	ヘラ切り	ナデ	ナデ	手捏	
127	731	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	4 SX049	—	4.9	—	(8.2)	—	指頭圧痕，不明	ハケメ，不明	指ナデ	ヘラケズリ後指頭圧痕	手捏	
153	861	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	5 SX040	—	—	—	—	—	ケズリ	—	指頭圧痕	—		
153	862	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	5 SX040	C層—	—	—	—	3.35	ケズリ後指頭圧痕	ケズリ後指頭圧痕	ハケメ後指頭圧痕後ナデ	ハケメ後指頭圧痕後ナデ	外器面，外底面に黒斑有	
153	864	Ⅶ区	土製模造品	甕形	5 SX040	C層—，D・E層—	3.8	—	(3.65)	—	ナデ	—	ナデ	—	手捏	
153	865	Ⅶ区	土製模造品	甕形	5 SX040	—	5.5	5.8	5.0	1.6	指押え	指押え	ケズリ，ヨコナデ	ケズリ	手捏	
153	866	Ⅶ区	土製模造品	鉢形	5 SX040	E層	—	—	—	—	指頭圧痕	—	指ナデ	—	手捏	
153	867	Ⅶ区	土製模造品	甕形	5 SX040	C層—，E層—	—	—	—	—	指頭圧痕	指頭圧痕	指頭圧痕	指頭圧痕	手捏，外器面に黒斑有	

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	口径	底径	外器面	外底面	内器面	内底面		
153	868	Ⅷ区	土製模造品	台付甕形	5 SX040	—	4.75	4.7	4.3	3.4	ヨコナデ，ナデ	ナデ	ヨコナデ，ケズリ	ケズリ	手捏	
153	869	Ⅷ区	土製模造品	坏形	5 SX040	E 層	3.75	—	10.5	—	指押え，指紋痕	指押え，指紋痕	指押え，指紋痕	指押え，指紋痕	手捏	
153	870	Ⅷ区	土製模造品	高坏形	5 SX040	—	—	—	—	—	指押え	指押え	指押え	指押え	手捏	
153	871	Ⅷ区	土製模造品	器台形	5 SX040	中・下層—	4.4	—	(5.3)	(4.4)	指頭圧痕	指頭圧痕	指頭圧痕	指頭圧痕	手捏	
153	872	Ⅷ区	土製模造品	坏形	5 SX040	E 層	3.9	—	8.8	—	ハケメ後指ナデ	ハケメ後指ナデ	ハケメ後指ナデ	ハケメ後指ナデ	外器面，外底面に黒斑有，手捏	
153	873	Ⅷ区	土製模造品	壺形	5 SX040	—	—	—	—	—	ハケメ後ナデ	—	指押え，ヘラケズリ	—	手捏	
153	874	Ⅷ区	土製模造品	鉢形	5 SX040	D 層—	5.4	6.6	—	—	指押え	指押え	指押え	指押え	手捏	
153	875	Ⅷ区	土製模造品	鉢形	5 SX040	E 層—	—	—	—	—	指頭圧痕	不明	指頭圧痕	指頭圧痕	手捏，外器面に黒斑有	
153	876	Ⅷ区	土製模造品	鉢形	5 SX040	—	4.25	—	—	—	指押え	指押え	指押え	指押え	手捏	
163	942	Ⅷ区	土製模造品	坏形	5 SX051	—	2.2	—	(6.2)	0.8	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	手捏，外器面に黒斑有	
163	943	Ⅷ区	土製模造品	坏形	5 SX051	A.B 層—	2.4	—	6.3	0.6	ハケメ，ナデ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	指頭圧痕，ナデ	ナデ，指頭圧痕	手捏	
163	944	Ⅷ区	土製模造品	鉢形	5 SX051	—	3.6	—	4.5	—	指ナデ	指ナデ	指ナデ	指ナデ	手捏	
163	945	Ⅷ区	土製模造品	鉢形	5 SX051	A 層—	4.4	6.2	(5.5)	3.1	指頭圧痕後ナデ	ナデ	指頭圧痕後ナデ	指頭圧痕後ナデ	手捏，外器面に黒斑有	
181	1052	Ⅷ区	土製模造品	鉢形	Z—34G	—	—	—	—	—	ハケメ後ナデ	—	ヘラケズリ後指ナデ	—	手捏	
181	1053	Ⅷ区	土製模造品	坏形	b—34G	—	3.0	—	6.6	—	指押え	指押え	指押え	指押え	手捏	
181	1054	Ⅷ区	土製模造品	鉢形	b—34G	—	—	—	(6.7)	—	ナデ，指頭圧痕	—	ナデ，指頭圧痕	—	手捏	
181	1055	Ⅷ区	土製模造品	鉢形	c—34G	L01層	—	—	(7.6)	—	ナデ	—	ナデ	—	手捏	
181	1056	Ⅷ区	土製模造品	坏形	b—32G	Vc 層	2.3	—	6.5	—	指ナデ	指ナデ	指ナデ	指ナデ	手捏	
181	1057	Ⅷ区	土製模造品	鉢形	Y—26G	Vc 層	3.0	—	8.0	—	ナデ	ナデ	ハケメ後ナデ，指押え	—	手捏，外器面に黒斑有	
181	1058	Ⅷ区	土製模造品	鉢形	Y—32G	Vc 層—	(3.4)	—	—	1.9	指ナデ	指ナデ	指ナデ	指ナデ	手捏	
181	1059	Ⅷ区	土製模造品	高坏形	Y—26G,27G	V 層—	(2.8)	—	3.1	(3.2)	指頭圧痕，ユビ押さえ	指押え	指押え	指押え		
181	1060	Ⅷ区	土製模造品	坏形	b—34G	—	3.2	—	12.0	—	ハケメ後ヨコナデ	不明	ヨコナデ	不明	手捏	
181	1061	Ⅷ区	土製模造品	坏形	Y—27G	Vc 層	2.3	—	7.0	—	ナデ	—	ハケメ後ナデ	—	手捏	
181	1062	Ⅷ区	土製模造品	鉢形	b—33G	—	3.1	—	5.8	—	ナデ	ナデ	ヨコナデ	指押え，ナデ	外器面に黒斑有	
195	1099	Ⅷ区	土製模造品	鉢形	4 SI012	—	7.8	—	6.0	—	ナデ	—	ナデ	—	手捏	
197	1109	Ⅷ区	土製模造品	甕形	4 SI016	—	4.9	—	4.8	—	ヨコナデ，ナデ	ナデ	ヨコナデ，指頭圧痕	指頭圧痕	手捏	

玉類

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm/g）				調整	備考	写真図版
					遺構	層位	長さ	最大胴径	穿孔最大径	重さ			
127	733	Ⅵ区	土製模造品	管玉形	4 SX049	A・B 層	2.7	1.76	0.25	6.9	ナデ	黒斑有り	32
107	584	Ⅵ区	土製模造品	勾玉形	5 SX036	—	—	1.4	—	—	ナデ	頭部欠損	32
154	883	Ⅷ区	土製模造品	玉形	5 SX040	—	2.5	3.2	0.45	21.2	ナデ	手捏	32
154	884	Ⅷ区	土製模造品	玉形	5 SX040	E 層	2.7	3.6	0.4	27.0	ナデ	手捏	32
154	885	Ⅷ区	土製模造品	玉形	5 SX040	—	2.0	2.0	0.25	7.0	ナデ	手捏	32
182	1063	Ⅷ区	土製模造品	玉形	e—35G	Ⅴc 層	3.0	3.2	0.3	23.6	ナデ	手捏	32
182	1064	Ⅷ区	土製模造品	勾玉形	—	—	4.5	1.6	0.3	14.9	ナデ	手捏	32
—	2193	Ⅶ区	土製模造品	勾玉形	Y—29G	Ⅳ層	3.7	1.8	0.3	16.6	ナデ	手捏	32
—	2194	Ⅶ区	土製模造品	勾玉形	V—26G	Ⅴc 層	4.6	1.7	0.3	15.2	ナデ	手捏	32
—	2195	Ⅶ区	土製模造品	玉形	ソクミゾ	—	2.0	2.1	0.3	8.3	ナデ		32

鏡形

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm/g）				調整		備考	写真図版
					遺構	層位	鏡面径	鏡面最大厚	紐高	重さ	表面	裏面		
153	877	Ⅷ区	土製模造品	鏡形	5 SX040	—	4.6	0.5	—	11.6	指ナデ	指ナデ	手捏，紐一部欠損	32
163	949	Ⅷ区	土製模造品	鏡形	5 SX051	—	3.5	0.9	0.9	7.0g	指ナデ	指ナデ	手捏	
182	1065	Ⅷ区	土製模造品	鏡形	Z—33G	L01層 y	5.3	0.6	1.3	23.4	指ナデ	指ナデ	手捏	32

粘土塊

挿図番号	番号	区	種別	出土地点		重量（g）	写真図版
				遺構	層位		
53	302	Ⅶ区	粘土塊	4 SI029	1 層	68.0	
261	1673	Ⅶ区	粘土塊	X—26G	Ⅴb 層	30.8	
261	1674	Ⅶ区	粘土塊	X—26G	Ⅴ層	34.9	

土錘

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm/g）				調整		備考	写真図版
					遺構	層位	長さ	最大胴径	最大穿孔径	重量	外器面	内器面		
69	390	Ⅶ区	土製品	土錘	4 SE005	5 層	7.6	3.5	0.8	—	ナデ	—	2穴とも両側より穿孔	32
153	878	Ⅷ区	土製品	土錘	5 SX040	E 層	10.1	4.2	1.7	180.8	ナデ		棒状工具への巻き付け	32
153	879	Ⅷ区	土製品	土錘	5 SX040	—	10.2	3.9	—	(91.4)	ナデ	—	棒状工具への巻き付け	32
237	1475	Ⅷ区	土製品	土錘	4 SX038	B 層	7.4	3.6	0.75	95.7	ナデ	—	2穴とも両側より穿孔	32
265	1686	Ⅷ区	土製品	土錘	北東ソクミゾ	—	7.9	3.9	1.4	127.2	ナデ，摩耗	—	両方向より穿孔	32
265	1687	Ⅷ区	土製品	土錘	W—26G	Ⅴ層	—	3.0	1.2	—	—	—	欠損	32
265	1688	Ⅷ区	土製品	土錘	X—27G	Ⅴ層	—	3.4	0.9	—	—	—	欠損，1穴は両方向より	—
265	1689	Ⅷ区	土製品	土錘	c—29G	Ⅳ層	4.0	1.25	0.4	5.5	ナデ	—	両方向からの穿孔	48
265	1690	Ⅷ区	土製品	土錘	f—35G	Ⅴb 層	3.1	0.95	0.25	2.0	ナデ	—		48
265	1691	Ⅷ区	土製品	土錘	Z—32G	A 層	5.1	1.15	0.2	5.3	ナデ	—		48
265	1692	Ⅷ区	土製品	土錘	Z—32G	A 層	4.4	0.95	0.25	2.8	ナデ	—		48
265	1693	Ⅷ区	土製品	土錘	c—30G	Ⅴ層	3.7	0.8	0.3	2.3	ナデ	—		48
265	1694	Ⅷ区	土製品	土錘	a—34G	—	—	0.8	0.3	—	ナデ	—	欠損	48
265	1695	Ⅷ区	土製品	土錘	a—32G	Ⅳ層	—	0.9	0.3	—	ナデ	—	欠損	48
265	1696	Ⅷ区	土製品	土錘	a—32G	Ⅳ層	—	0.9	0.25	—	ナデ	—	欠損	48
272	1721	Ⅷ区	土製品	土錘	5 SX023	1 層	8.3	4.0	1.5	150.1	ナデ	—	棒状工具への巻き付け	32
272	1722	Ⅷ区	土製品	土錘	5 SX023	1 層	—	1.9	0.25	—	ナデ	—	欠損	48
331	2105	X区	土製品	土錘	—	1 トレンチ	2.9	0.8	0.25	1.7	—	—		
331	2106	X区	土製品	土錘	g—43G	L01層	4.0	0.75	0.2	2.3	—	—		
331	2107	X区	土製品	土錘	i—37G	Ⅱ層	4.0	1.5	—	—	—	—	欠損	
—	2210	Ⅷ区	土製品	土錘	5 SX010	Ⅳ層	3.0	0.9	0.2	1.9	ナデ	—		48
—	2211	Ⅶ区	土製品	土錘	ソクミゾ	—	3.2	1.0	0.3	2.8	ナデ	—		48
—	2212	Ⅷ区	土製品	土錘	5 SX016	1 層	3.75	1.55	—	7.1	ナデ	—	孔は貫通せず	48

その他土製品

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量（cm）				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	穿孔径	重量	外器面	外底面	内器面	内底面		
127	732	Ⅷ区	土製品	不明	4 SX049	—	2.35	3.1	—	15.2	ナデ	ナデ	—	—	頂部に横線と２穴	
261	1672	Ⅶ区	土製品	不明	Y—27G	Ⅳ層	—	—	—	—	指ナデ	—	—	—	把手か？	
265	1697	Ⅶ区	土製品	紡錘車	a—28G	Ⅴ層	1.5	4.7	—	—	ナデ	—	ナデ	—	半欠	48
265	1698	Ⅶ区	土製品	紡錘車	Y—26G	Ⅴ層	1.3	4.4	—	—	ナデ	—	ナデ	—	半欠	48
265	1699	Ⅶ区	土製品	紡錘車	Y—28G	Ⅳ・Ⅴa層	1.0	—	—	—	—	—	—	—	欠損	48
265	1700	Ⅶ区	土製品	紡錘車	c—30G	Ⅳ層	1.6	(5.4)	—	—	ナデ	—	—	—		48
265	1701	Ⅶ区	土製品	円盤状土製品	X—29G	Ⅳ層	0.8	4.0	—	19.1	—	—	—	—	土器の再利用	
331	2108	Ⅶ区	土製品	円盤状土製品	Z—26	Ⅳ層	1.0	3.9	—	15.6	ナデ	—	ナデ	—	土器の再利用	
331	2109	Ⅷ区	土製品	円盤状土製品	Z—33G	—	1.1	4.2	—	27.8	—	—	—	—	土器の再利用	47
331	2110	Ⅷ区	土製品	円盤状土製品	—	Ⅴc層	1.1	4.1	—	18.1	ナデ	—	ナデ	—	土師質土器再利用	47
331	2111	Ⅹ区	土師質土器	円盤状土製品	6 SX506	—	0.7	5.2	—	—	不明	—	—	—	土師質土器再利用	
331	2112	Ⅹ区	土師質土器	円盤状土製品	f—42G	—	1.0	3.6	—	—	(裏面)ハケナデ	—	(表面)ハケナデ	—	土師質土器再利用	
331	2113	Ⅹ区	土師質土器	円盤状土製品	g—43G	L03層	1.3	4.3	—	—	(裏面)ナデ	—	(表面)ハケナデ	—	土師質土器再利用	
331	2114	Ⅹ区	土師質土器	円盤状土製品	g—43G	L03層	1.3	5.5	—	—	(裏面)ヘラケズリ	—	(表面)ヘラミガキ痕	—	土師質土器再利用	
331	2115	Ⅷ区	土製品	人面											型押	
331	2116	Ⅹ区	瓦	丸瓦	g—43G	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠損，一穴の穿孔	
331	2117	Ⅹ区	不明品	脚	f—42G	—	(8.5)	—	—	—	指頭痕	—	—	—	手捏，人形の一部か？	
331	2118	Ⅷ区	白磁製品	童子像											表面彩色	
331	2119	Ⅷ区	土製品	福助人形？												
331	2120	Ⅹ区	土人形	不明	—	—	—	—	—	—	ヘラミガキ，葉脈様	布目痕	指押圧布目痕	布目痕	文様は型押し	
331	2131	Ⅹ区	不明品	不明	f—43G		—	—	—	—	—	—	—	—		
—	2200	Ⅷ区	土人形	不明											人形下半身	48
—	2201	Ⅷ区	土人形	鍾馗											人形下半身	48
—	2202	Ⅷ区	土人形	木葉猿？											猿形	48
—	2203	Ⅷ区	土人形	恵比寿？											鯉，人手，恵比寿像か	48
—	2204	Ⅷ区	土製品	木葉猿											馬形	48
—	2205	Ⅷ区	土製品	木葉猿											馬形	48
—	2206	Ⅷ区	土製品	木葉猿											馬形	48
—	2207	Ⅷ区	土製品	木葉猿											馬形	48
—	2208	Ⅷ区	土製品	木葉猿											猿形	48
—	2209	Ⅷ区	土製品	木葉猿											猿形	48
—	2199	Ⅷ区	土製品	恵比寿像											頭部	47

表3　陶磁器類観察表

No.	挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	部位	残存率	法量 (cm)			色調				備考
												口径	底径	器高	胎土	胎土(notation)	釉薬・染付	釉薬・染付 (notation)	
1	316	1983	染付	瓶	中国,東亜？	16C 末～17C 代？	不明	Ⅷ	―	頸部	4／4	―	―	―	灰白	2.5Y 8／2	明緑灰（染付釉）藍色	7.5GY 7／1（染付釉）3PB3.5／5S	
2	317	1987	白磁	碗	不明	11C 後～12C 後	Ⅴ類	Ⅷ	b―31G	底部	3／4	―	5.8	―	灰白	7.5Y 7／1	灰白	10Y 7／1	内面櫛
3	317	1993	青磁	碗	龍泉窯系	13C 前後～後半	Ⅰ／Ⅱ類	Ⅷ	c―30G	底部	4／4	―	5.6	―	灰白	5Y 7／1	オリーブ灰	10Y 6／2	底部削り出し部に胎土目痕，底部内外面施釉
	270	1702	白磁	皿				Ⅷ	5 SX022			―	―	―					
	270	1703	白磁	皿				Ⅷ	5 SX022			―	―	―					
	272	1711	青磁	陵花皿				Ⅷ	5 SX023			(13.4)	―	―					口縁端部輪花
	272	1712	青磁	皿				Ⅷ	5 SX023			(14.8)	―	―					釉厚め
4			青磁	碗	龍泉窯系	13C 中～14C 初前後	Ⅱ―b	Ⅷ	b―30G	口縁～胴部	1／4以下	不明	―	―	灰白	5Y 7／1	灰オリーブ	5Y 5／3	体部外面に蓮弁文
5			青磁	碗	龍泉窯系	14C 初～後	上田 B―4	Ⅷ	a―33G	口縁～胴部	1／4以下	不明	―	―	灰白	N 7／0	緑灰	7.5GY 6／1	体部外面に略化された蓮弁文
6			青磁	皿	同安窯系	12C 中～後	Ⅰ―2b	Ⅷ	Za―31G	底部	1／4以下	―	推定5.2	―	灰白	5Y 7／1	オリーブ灰	2.5GY 6／1	高台無皿，底部内面に箆による文様とジグザグ状の櫛点描文
7			青磁	碗	龍泉窯系？	14C 後～15C 前	上田 C―2	Ⅷ	5 SX022	口縁部	1／4以下	不明	―	―	灰白	5Y 7／1	明緑灰	7.5GY 7／1	内面文様なし，体部上面外面にラマ文
8			青磁	皿	龍泉窯系	12C 中～後	Ⅰ―1―b	Ⅷ	Z―32G	底部	1／4以下	―	不明	―	灰白	10Y 7／1	オリーブ灰	10Y 5／2	高台無皿，箆による文様
9			青磁	不明	不明	不明	不明	Ⅷ	e―33G	体部	破片	―	―	―	明緑灰	5G 7／1	灰オリーブ	7.5Y 5／2	内外面とも無文
10			青磁	碗	龍泉窯系	不明	不明	Ⅷ	c―30G	体部	1／4以下	―	―	―	灰白	5Y7/1~N7/0	灰オリーブ	5Y 6／2	内外面とも無文，薄く施釉，No.9と同一個体か？
11			青磁	不明	不明	不明	不明	Ⅷ	b―31G	口縁部	破片	不明	―	―	灰白	N 7／0	灰オリーブ	5Y 6／2	No.8と同一個体か？
12			青磁	碗	龍泉窯系？	13C 前後	Ⅱ―b	Ⅷ	b―33G	口縁部	破片	不明	―	―	灰白	5Y 7／1	灰オリーブ	5Y 6／2	内面無文，外面蓮弁文か？
13			青磁	盤	龍泉窯系	13C 中～14C 初	Ⅳ以降	Ⅷ	a―34G	口縁部	破片	不明	―	―	灰白	10Y 7／1	緑灰	7.5GY 6／1	内外面とも無文施釉
14			青磁	碗	龍泉窯系	14C 初～後	Ⅰ―1～4	Ⅷ	b―31G	口縁部	破片	不明	―	―	灰白	7.5Y 7／1	灰オリーブ	5Y 5／3	No.13と同一個体か
15			青磁？	不明	龍泉窯系	不明	Ⅰ―1～4	Ⅷ	b―31G	体部	破片	―	―	―	灰白	7.5Y 7／1	灰オリーブ	5Y 5／3	No.12と同一個体か
16			青磁	碗	龍泉窯系	13C 中～14C 初前後	Ⅱ―b	Ⅷ	a―30G,f―29G	体部		―	―	―	灰	10Y 6／1	灰オリーブ	7.5Y 5／3	No.5,16と同一個体か
17			青磁	碗	龍泉窯系	13C 中～14C 初前後	Ⅱ―b	Ⅷ	a―32G	口縁部	破片	―	―	―	灰	10Y 6／1	灰オリーブ	7.5Y 5／3	No.14,16と同一個体か
18			青磁	碗	龍泉窯系	13C 中～14C 初前後	Ⅱ―b	Ⅷ	f―35G	胴部	破片	―	―	―	灰	10Y 6／1	灰オリーブ	7.5Y 5／3	No.14,15と同一個体か
19			青磁？	不明	龍泉窯系	不明	Ⅰ―1～4	Ⅷ	a―30G	口縁部	破片	―	―	―	灰白	5Y 7／1	灰オリーブ	5Y 6／2	内外面とも無文
20			青磁？	不明	龍泉窯系	不明	Ⅰ―1～4	Ⅷ	b―31G	体部	破片	―	―	―	灰白	5Y 7／1	灰オリーブ	5Y 6／2	内外面とも無文
21			青磁	碗	不明	不明	Ⅱ―b	Ⅷ	Z―32G	口縁部	破片	―	―	―	灰白	7.5Y 7／1	灰オリーブ	5Y 5／3	内外面とも無文か？
22			青磁？	不明	龍泉窯系	不明	Ⅰ―1～4	Ⅷ	c―32G	体部	破片	―	―	―	灰白	5Y 7／1	オリーブ灰	10Y 6／2	内外面とも無文か？
23			青磁	碗	不明	不明	Ⅱ―b	Ⅷ	Z―31,32G	体部	破片	―	―	―	灰白	5Y 7／1	オリーブ灰	5 GY 6／1	外面蓮弁か？内面無文
24			青磁	碗／坏	龍泉窯系	不明	Ⅲ類	Ⅷ	a―30G	体部	破片	―	―	―	灰白	5 GY 8／1	明緑灰	10GY 7／1	
25			青磁	碗	不明	不明	不明	Ⅷ	Z―32G	口縁部	破片	―	―	―	灰白	7.5Y 8／1	明緑灰	7／5 GY 7／1	
26			青磁	碗	龍泉窯系	14C 後	不明	Ⅷ	d―34G	底部	破片	―	―	―	灰白	5Y 8／1	オリーブ灰	10Y 4／2	釉厚め
27			青磁	碗	龍泉窯系	不明	上田 CD―2	Ⅷ	5 SX023	口縁部	破片	―	―	―	灰白	7.5Y 8／1	緑灰	10GY 6／1	釉厚め
28			青磁	皿	龍泉窯系	14C 以降	不明	Ⅷ	5 SX023	口縁部	破片	―	―	―	灰白	7.5Y 8／1	オリーブ灰	10Y 6／2	口縁端部輪花，陵花皿
29			青磁	皿	同安窯系	12C 中～後	Ⅰ―2	Ⅷ	―	口縁部	破片	―	―	―	灰白	5Y 7／2	オリーブ灰	5 GY 6／1	釉薄め
30			青磁	碗	龍泉窯系	不明	上田Ⅳ類	Ⅷ	a―30G	口縁部	破片	―	―	―	灰白	5Y 7／1	オリーブ灰	2.5GY 6／1	No.29と同一個体か
31			青磁	碗	龍泉窯系	不明	上田Ⅳ類	Ⅷ	a―31G	体部	破片	―	―	―	灰白	5Y 7／1	オリーブ灰	2.5GY 6／1	No.28と同一個体か
32			青磁	碗	不明	不明	Ⅱ―b	Ⅷ	f―30G	体部	破片	―	―	―	灰白	7.5Y 8／1	オリーブ灰	10Y 5／2	外面に蓮弁文か
33			青磁	碗	不明	不明	上田B―4以降	Ⅷ	b―31G	体部	破片	―	―	―	灰オリーブ	5Y 6／2	オリーブ灰	10Y 6／2,5／2,4／2	
34			青磁？	不明	龍泉窯系	不明	Ⅰ―1～4	Ⅷ	b―31G	口縁部	破片	―	―	―	灰白	7.5Y 7／1	灰	10Y 6／1	内外面とも無文
35			青磁？	不明	同安窯系	不明	Ⅰ類	Ⅷ	Z―33,Y―34G	口縁部	破片	―	―	―	灰白	5Y 7／1	オリーブ灰	2.5GY 6／1	No.3と同種の釉か
36			青磁？	不明	龍泉窯系	不明	Ⅰ―1～4	Ⅷ	b―31G	口縁部	破片	―	―	―	灰白	7.5Y 7／1	浅黄	2.5Y 7／4	
37			青磁？	不明	不明	元以降で不明	不明	Ⅷ	b―31G	体部	破片	―	―	―	灰白	5Y 7／2	オリーブ灰	10Y 5／2	
38			青磁？	不明	龍泉窯系	不明	Ⅰ―1～4	Ⅷ	a―33G	体部	破片	―	―	―	灰黄	2.5Y 7／2	灰オリーブ	5Y 5／3	火ぶくれ有り

No.	挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	部位	残存率	法量(cm)			色調				備考
												口径	底径	器高	胎土	胎土(notation)	釉薬・染付	釉薬・染付 (notation)	
39			青磁？	不明	龍泉窯系	不明	Ⅰ－1～4	Ⅷ	f－32G	口縁部	破片	－	－	－	灰白	5Y7／1	灰白	7.5Y6／1	
40			青磁？	不明	不明	不明	不明	Ⅷ	5SX041	口縁部	破片	－	－	－	灰黄	2.5Y7／2	明オリーブ	5GY7／1	
41			青磁？	不明	龍泉窯系	不明	Ⅳ類以降	Ⅷ	a－31G	底部？	破片	－	－	－	灰白	2.5Y7／1	明緑灰	10GY7／1	
42			青磁？	不明	龍泉窯系	不明	Ⅰ－1～4	Ⅷ	f－35G	体部	破片	－	－	－	灰黄	2.5Y7／2	にぶい黄	2.5Y6／3	内外面とも無文
43			青磁	碗	不明	不明	Ⅱ－b	Ⅷ	－	口縁部	破片	－	－	－	灰白	2.5Y8／2	にぶい黄	2.5Y6／3	内外面とも無文
44			青磁	碗	龍泉窯系	13C 前後～前	上田B－2	Ⅷ	－	口縁部	破片	－	－	－	灰白	2.5Y7／1	オリーブ灰・灰オリーブ	10Y5／2・5Y5／2	外面に薄く蓮弁文、直口縁
45			青磁	碗	龍泉窯系	13C 前後～前	Ⅱ－b	Ⅷ	－	口縁部	破片	－	－	－	灰白	5Y7／1	オリーブ灰	5GY6／1,5／1	外面に蓮弁文
46			白磁	皿	同安窯系	11C 後～12C 前	Ⅰ－1b	Ⅷ	a－30G	底部	破片	－	推定4.4	－	灰白	10Y7／1	灰白	7.5Y7／2	
47			白磁	碗	不明	12C 代	Ⅴ類？	Ⅷ	5SX022	体部	破片	－	－	－	灰白	10Y8／1	灰白	10Y7／1	内面に短い櫛目文
48			白磁	不明	不明	不明	森田D	Ⅷ	a－30G	体部	破片	－	－	－	灰白	5Y8／2	浅黄橙	10YR8／4	釉薄く、細かい貫入有り、No.47と同一個体か？
49			白磁	不明	不明	不明	森田D	Ⅷ	a－30G	口縁部	破片	－	－	－	灰白	5Y8／2	浅黄橙	10YR8／4	釉薄く、細かい貫入有り、No.46と同一個体か？
50			白磁	坏	不明	不明	森田D	Ⅷ	f－31G	口縁部	破片	－	－	－	灰白	5Y8／1	灰白	5Y8／1	口縁輪花を有すると思われる貫入有り
51			白磁	不明	不明	不明	森田D	Ⅷ	Z,a－33,34G	口縁部	破片	推定7.7	－	－	灰白	2.5Y8／1	浅黄	2.5Y8／3	貫入有り
52			白磁	皿	不明	不明	Ⅸ類？	Ⅷ	Z－30G	体部	破片	－	－	－	灰白	10Y7／1	明緑灰	7.5GY7／1	
53			白磁	碗	不明	不明	Ⅷ類－2？	Ⅷ	f－35G	口縁部	破片	－	－	－	灰白	5Y7／2	灰オリーブ	5Y6／2	貫入有り
54			白磁	碗	不明	不明	森田C?	Ⅷ	a－30G	口縁部	破片	－	－	－	灰白	5Y7／2	灰	7.5Y6／1	口縁部外反
55			白磁	皿	不明	不明	Ⅱ／Ⅲ？	Ⅷ	c－Pit	口縁部	破片	－	－	－	灰白	10Y8／1	明オリーブ灰	5GY7／1	口縁部外反
56			白磁	不明	不明	不明	森田D	Ⅷ	5SX023	口縁部	破片	－	－	－	灰白	2.5Y8／2	灰白	5Y8／2	貫入細かく有り
57			白磁	皿	不明	不明	Ⅸ類	Ⅷ	5SX022	口縁部	破片	推定11.0	－	－	灰白	10Y8／1	灰白	10Y7／1	わずかに外反、口縁部周辺施釉後に釉剥ぎ取り
58			白磁	皿	不明	不明	Ⅸ類	Ⅷ	Z,a－33,34G	口縁部	破片	推定11.0	－	－	灰白	7.5Y8／1	明オリーブ灰	5GY7／1	わずかに外反、口縁部周辺施釉後に釉剥ぎ取り
59			白磁	皿	不明	13C 後～14C 前	Ⅸ－1類	Ⅷ	a－32G	底部	破片	－	推定7.2	－	灰白	7.5Y8／1	明緑灰	7.5GY8／1	
60			白磁	碗	不明	不明	Ⅸ類	Ⅷ	Z－32G	口縁部	破片	推定12.0	－	－	灰白	10Y7／1	明オリーブ灰	5GY7／1	わずかに外反、口縁部周辺施釉後に釉剥ぎ取り
61			白磁	皿	不明	12C 中／13C 後～14C 前	Ⅸ類	Ⅷ	Z－33,Y－34G	底部	1／4	－	推定6.0	－	灰白	2.5Y7／1	明緑灰	7.5GY8／1	
62			白磁	不明	不明	近世？	不明	Ⅷ	c－30G	口縁部	破片	－	－	－	浅黄橙	10YR8／4	にぶい黄	2.5Y6／3	火ぶくれ気味有り、胎土があまいので陶器か？
63			青磁	碗	龍泉窯系	不明	Ⅱ－a類	Ⅷ	－	体部	破片	－	－	－	灰白	2.5Y8／1	にぶい黄	2.5Y6／3	細かい貫入有り
64			青磁	碗	不明	不明	不明	Ⅷ	－	体部	破片	－	－	－	灰白	10Y8／1	灰白	10Y7／1	
65			白磁	壺類	不明	12C 中～後	Ⅱ／Ⅲ	Ⅷ	－	体部	破片	－	－	－	灰白	N7／0	明オリーブ灰	2.5GY7／1	
66			白磁	瓶？	不明	近世？	不明	Ⅷ	5SK005	胴部？	破片	－	－	－	灰黄	2.5Y7／2	灰白	5Y7／2	内面釉無し
67			白磁	碗	不明	不明	Ⅳ	Ⅷ	－	口縁部	破片	－	－	－	灰白	5Y7／2	灰白	7.5Y7／1	五縁口縁粗い貫入
68			白磁	皿	不明	12C 中～後	Ⅴ～Ⅳ類／Ⅷ	Ⅷ	－	口縁部	破片	－	－	－	灰白	5Y7／2	灰白	7.5Y7／1,7／2	
69			白磁	碗	不明	不明	不明	Ⅷ	f－35G	体部	破片	－	－	－	灰白	5Y7／2	灰オリーブ	5Y6／2	釉薄い
70			白磁	碗	不明	不明	不明	Ⅷ	f－31G	体部	破片	－	－	－	灰白	5Y7／2	明オリーブ灰	5GY7／1	釉薄い
71			白磁	碗	不明	不明	不明	Ⅷ	f－31G	体部	破片	－	－	－	浅黄	2.5Y8／3	灰白	5Y7／2	外面途中から釉無し、細かい貫入がある
72			白磁	碗	不明	近世？	不明	Ⅷ	f－31G	口縁部	破片	－	－	－	灰黄	2.5Y7／2	灰黄	2.5Y8／2	釉極めて薄く、胎土があまいので陶器か？
73			染付	碗？	景徳鎮系	16C 前～中葉	小野C?	Ⅷ	e－33G	体部	破片	－	－	－	ｱｲﾎﾘﾎﾜｲﾄ	5Y9.0／1.0	(透明釉) 藍白 (染付釉) 藍色	(透明釉) 5B8.5/2.0 (染付釉) 3PB3.5/5.5	No.74と同種
74			染付	碗	景徳鎮系	16C 前～中葉	小野C?	Ⅷ	－	体部	破片	－	－	－	灰白	5Y8／1	(透明釉) 藍白 (染付釉) 藍色	(透明釉) 5B8.5/2.0 (染付釉) 3PB3.5/5.5	No.73と同種
75			染付	不明	肥前か？	不明	不明	Ⅷ	Z,a－33,34G	口縁部	破片	－	－	－	灰白	N8／	(透明釉) 藍白 (染付釉) 藍色	(透明釉) 5B8.5/2.0 (染付釉) 3PB3.5/5.5	口縁部の内外面に二重圏線
76			染付	不明	不明	不明	不明	Ⅷ	c－29,30G	口縁部	破片	－	－	－	灰白	7.5Y8／1	(透明釉) オイスター (染付釉) 藍色	(透明釉) 5Y7.5/1.0 (染付釉) 3PB3.5/5.5	
77			染付	不明	不明	不明	不明	Ⅷ	5SX000	体部	破片	－	－	－	灰白	10Y8／1	(透明釉) 藍白 (染付釉) 浅はなだ	(透明釉) 5B8.5/2.0 (染付釉) 3PB5.0/5.5	
78			染付	皿	不明	不明	小野B	Ⅷ	f－30G	口縁部	破片	－	－	－	浅黄橙	10YR8／3	(透明釉) サロー (染付釉) 藍色	(透明釉) 5Y7.5/2.0 (染付釉) 3PB3.5/5.5	粗製
79			染付	皿	不明	不明	森田E	Ⅷ	a－31G	底部	破片	－	－	－	灰白	2.5Y8／2	(透明釉) オイスター	(透明釉) 5Y7.5／1.0	底部貼付、染付部分無し
80			青磁	皿	肥前系	17C 中	Ⅲ期	Ⅷ	－	底部	1／4	－	5	－	浅黄	2.5Y7／3	明緑灰	7.5GY7／1	底部内部見込、蛇ノ目釉剥ぎ、内外面施釉、底部外面釉無し
81			陶器	碗	内野山系	17C 後	Ⅲ・Ⅳ期	Ⅷ	－	底部	3／4以下	－	4.4	－	にぶい黄橙	10YR7／3	(透明釉) 灰白 (銅緑釉) ろくしょう	(透明釉) 10YR8/1 (銅緑釉) 3G5.0/5.0	内面透明釉、外面銅緑釉、外底面釉無し

No.	挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	部位	残存率	法量(cm)			色調				備考
												口径	底径	器高	胎土	胎土(notation)	釉薬・染付	釉薬・染付 (notation)	
82			陶器	碗	内野山系	17C 後	Ⅲ・Ⅳ期	Ⅷ	—	底部	1／4以下	10.8	4.6	6.5	にぶい黄橙	10YR 7／3	(透明釉) 灰白 (銅緑釉) スレートグリーン	(透明釉) 10YR 8/1 (銅緑釉) 3G4.0/2.0	内面透明釉、外面銅緑釉. 外底面釉無し
83			陶器	皿	内野山系	不明	不明	Ⅷ	—	底部	4／4	—	—	4.2	灰白	2.5Y 8／2	(透明釉) 浅黄 (銅緑釉) 暗青灰	(透明釉) 5Y 7/3 (銅緑釉) 5B 4/1	内面銅緑釉, 内底面蛇ノ目釉剥ぎ胎土目(2~3ヶ?)外面透明釉, 外底面釉掛し胎土目(3~4ヶ?)
84			陶器	碗	内野山系	不明	不明	Ⅷ	b—34G	口縁部、体部	1／4以下	—	—	—	にぶい黄橙	10YR 7／2	(銅緑釉) 緑灰	(銅緑釉) 7.5GY 6／1	内面透明釉、外面銅緑釉
85			陶器	碗？	内野山系	不明	不明	Ⅷ	a—33G	体部	破片	—	—	—	にぶい黄橙	10YR 7／3	(透明釉) 灰白 (銅緑釉) 緑灰	(透明釉) 2.5Y 8/2 (銅緑釉) 5G 5/1	内面透明釉、外面銅緑釉
86			陶器	碗	内野山系	不明	不明	Ⅷ	—	口縁部	1／4以下	10.6	—	—	灰黄	2.5Y 7／2	(透明釉) 灰白	(透明釉) 7.5Y 8／1	内外面とも透明釉
87			陶器	皿	内野山系	不明	Ⅲ期	Ⅷ	5 SK016	体部	1／4以下	—	—	—	灰白	2.5Y 8／2	(透明釉) 明緑灰 (まれに)	(透明釉) 7. 5GY 7／1 (まれに)	内外面透明釉、内底面蛇ノ目釉剥ぎか、外底面釉無し
88			陶器	皿	内野山系	不明	Ⅲ期	Ⅷ	西側トレンチ	口縁～底部	1／4以下	—	—	3.5	灰白	5Y 7／1	(透明釉) 灰白	(透明釉) 5Y 7／2	内外面透明釉、内底面蛇ノ目釉剥ぎ、外底面釉無し
89			陶器	皿	肥前系	不明	不明	Ⅷ	5 SK016	底部	1／4	—	4.6	—	灰白	2.5Y 8／2	灰白	5Y 7／1	内外面とも透明釉、内底面蛇ノ目釉剥ぎ、外底面釉なし、胎土目痕あり
90			陶器	皿	肥前系	不明	不明	Ⅷ	5 SK016	底部	2／4	—	4.8	—	灰白	10YR 8／2	灰白	N 8／0	内面透明釉、外面口縁部透明釉、内底面蛇ノ目釉剥ぎ、底部内外面胎土目痕か？
91			陶器	皿？	肥前系	不明	不明	Ⅷ	5 SK016	底部	1／4	—	5.2	—	灰黄	2.5Y 7／2	—	—	内外面透明釉、内底面胎土目、外底面釉無し、わずかに兜巾
92			陶器	碗？	肥前系	不明	不明	Ⅷ	5 SK016	底部	1／4	—	4.2	—	灰白	10YR 4／2	—	—	内外面透明釉、外底面釉無し
93			陶器	皿	肥前系	不明	不明	Ⅷ	5 SK016	口縁部	1／4	—	(13.4)	—	灰黄	2.5Y 7／2	—	—	内面施釉、外面口縁のみ施釉

挿図番号	番号	区	種別	器種	出土地点		法量 (cm)				特徴				備考	写真図版
					遺構	層位	器高	最大胴径	穿孔径	重量	外器面	外底面	内器面	内底面		
270	1702	Ⅷ区	白磁	皿	5 SX022	①層一括	—	—	—	—	—	ナデ	—	ナデ		
270	1703	Ⅷ区	白磁	皿	5 SX022	一括	—	—	—	—	ナデ	—	ナデ	—		
272	1711	Ⅷ区	青磁	陵花皿	5 SX023	①層	—	—	(13.4)	—	ナデ？	—	ナデ？	—	口縁端部輪花	
272	1712	Ⅷ区	青磁	皿	5 SX023	②層	—	—	(14.8)	—	ナデ後施釉	—	ナデ後施釉	—	釉厚め	

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量（cm）				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土（notation）	釉薬・染付	釉薬・染付（notation）		
294	1779	陶器	中碗	肥前	1600～1630	—	X－2	6 SX504	—	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	れんが色	4 YR4.0／6.0	（釉）シダーグリーン・パールホワイト	（釉）5 Y2.5／1.5・N8.5	中碗か？	
294	1780	陶器	中碗	肥前	1600～1630	—	X－2	6 SX506	—	(3.5)	—	—	—	—	ナデ	削り出し高台	橿色	10YR4.0／11.0	（釉）シダーグリーン	（釉）5 Y2.5／1.5	中碗か？	
294	1781	陶器・緑釉	中碗？	肥前； 嬉野内野山	17C 後半	Ⅲ	—	—	—	4.6	—	—	—	—	ナデ	削り出し高台	サロー	5 Y7.5／2.0	（釉）オリーブグリーン	（釉）3 GY3.5／5.0	中碗か？	
294	1782	陶器	中碗？	肥前系	1650年以降	—	X－1	—	—	4.6	—	—	—	—	ナデ後施釉	削り出し高台，兜巾，畳付以外施釉	灰白	5 Y 2／1	（灰釉）明オリーブ灰	（灰釉）5 GY 7／1	中碗か？	
294	1783	陶器・緑釉	中碗	肥前； 嬉野内野山	17C 後半	ⅢⅣ	X－2	6 SX502	—	4.4	—	—	—	—	ナデ	削り出し高台	ベージュ	8 YR7.5／2.0	（釉）マラカイトグリーン	（釉）3 G4.0／8.5	中碗か？	
294	1784	陶器・鉄釉	中碗	肥前； 嬉野内野山	17C 末～18C 前	ⅢⅣ	X－2	—	11.3	4.3	6.8	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	ベージュ	8 YR7.5／2.0	（釉）金茶・焦茶	（釉）8 YR5.0／11.0・8 YR 2.5／1.5		
294	1785	陶器・緑釉	中碗	肥前； 嬉野内野山	17C 末～18C 前	ⅢⅣ	X－2	g－43G	(11.5)	4.3	6.9	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	ベージュ	8 YR7.5／2.0	（釉内面）アイボリーホワイト（釉外面）ろくしょう	（釉内面）5 Y9.0／1.0 （釉外面）3 G5.0／5.0		
294	1786	陶器	中碗	肥前	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	6 SX506	(10.1)	4.0	5.3	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	灰汁色	5 Y5.0／1.0	焦茶（化粧土）クリームイエロー	8 YR2.5／1.5 （化粧土）2 Y9.0／6.0		
294	1787	陶器	中碗	不明	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	g－43G	(10.7)	4.4	6.2	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	淡黄・クリームイエロー	2.5Y 8／3・2 Y 9.0／6.0	（釉）浅黄・枯草色（鉄釉）黒褐・黒柿色	（釉）2.5Y 7／4・5 Y7.5／6.0（鉄 釉）7.5YR 3／2・4 R2.0／1.5		
294	1788	陶 器・緑 釉（内野山系）	中碗	肥前； 嬉野内野山	17C 末～18C 前	ⅢⅣ	X－2	6 SX506	10.7	4.6	6.7	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5／1.0	（粕・内面）オリーブドラブ・ムーンライトブルー（粕・外面）油色・ろくしょう	（釉・内 面）5 Y4.5／2.0・3 PB8.0／2.0（釉・外 面）5 Y 6.0／6.0・3 G5.0／5.0		
294	1789	陶器・緑釉	中碗	肥前；伊万里	17C 後半	Ⅲ	X－2	6 SX504	—	(4.5)	—	—	—	—	ナデ	削り出し高台	れんが色	4 YR4.0／6.0	（釉）オリーブグリーン・コバルトブルー	（釉）3 GY3.5／5.0・3 PB 3.5／10.0	中碗か？	
294	1790	陶器	中碗	肥前系？	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	g－43G	9.4	4.0	5.8	—	ナデ	箆削り	ナデ削り	削り出し高台	灰黄・サロー	2.5Y 7／2・5 Y 7.5／2.0	（釉）黄褐・ラセットゴールド	（釉）2.5Y 5／3・2 Y4.0／5.5		
294	1791	陶器	中碗	肥前系	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	6 SX502	(10.1)	(4.4)	6.1	—	ナデ	ナデ	ナデ	箆削り，削り出し高台	淡黄・サロー	2.5Y 8／3・5 Y 7.5／2.0	（釉）にぶい黄橙・香色	（釉）10YR 6／3・4 YR6.0／2.0		
294	1792	陶器	中碗	肥前系	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	f－42G	—	3.9	—	—	ナデ	ナデ	ナデ	箆削り，削り出し高台	にぶい黄橙・サロー	10YR 7／2・5 Y7.5／2.0	（釉）にぶい黄・ラセットゴールド	（釉）2.5Y 6／3・2 Y4.0／5.5	中碗か？	
294	1793	陶器	中碗	肥前系	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	b－42G	10.2	3.9	6.4	—	ナデ	ナデ	ナデ	箆削り，削り出し高台	灰黄・サロー	2.5Y 7／2・5 Y 7.5／2.0	（釉）明青灰・灰オリーブ・ミストグリーン・ムーンライトブルー	（釉）5 PB 7／1・7.5Y 6／2・3 GY7.5／2.0・3 PB 8.0／2.0		
294	1794	陶器	中碗	肥前系	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	g－43G	(11.0)	(4.6)	6.7	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	灰白・オイスター	5 Y 7／2・5 Y 7.5／1.0	（釉）灰オリーブ・ブロンズ	（釉）5 Y 6／2・5 Y4.0／5.5		
294	1795	陶器	大碗	肥後；小代？	18C 代？	Ⅴ	X－2		—	5.1	—	—	—	—	ナデ	削り出し高台	トープ	4 YR3.0／1.0	（釉）露草色・オイスター	（釉）3 PB5.0／10.0・5 Y 7.5／1.0		
294	1796	陶器	中碗	肥後	18C 末～19C 前	Ⅴ	X－2	6 SD501	(10.3)	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	灰白・サロー	2.5Y 8／2・5 Y 7.5／2.0	（釉）オリーブ黄・油色	（釉）5 Y 6／3・5 Y6.0／6.0		
294	1797	陶器	中碗	肥後	18C 末～19C 前	Ⅴ	X－2	6 SD501	(10.8)	4.9	6.0	—	ナデ	ナデ，削り	ナデ	削り出し高台	淡黄・クリームイエロー	2.5Y 8／3・2 Y 9.0／6.0	（釉）浅黄・小麦色	（釉）2.5Y 7／3・8 YR7.0／6.5	碗？	

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量（cm）				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土（notation）	釉薬・染付	釉薬・染付（notation）		
295	1798	陶器・緑釉	小皿	肥前； 嬉野内野山	17C末～18C前	ⅢⅣ	X－2	g－43G	12.2	4.2	3.8	－	ナデ	ナデ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	ベージュ	8YR7.5／2.0	（釉内面）スレートグリーン（釉外面）サロー	（釉内面）3G4.0／2.0 （釉外面）5Y7.5／2.0		
295	1799	陶器・緑釉	小皿	肥前； 嬉野内野山	17C末～18C前	ⅢⅣ	X－2	6SX504	12.4	4.4	3.4	－	ナデ	ナデ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	クリーム色	2Y9.0／2.0	（内面）ろくしょう（外面）オイスター	（内面）3G5.0／5.0 （外面）5Y7.5／1.0		
295	1800	陶器・刷毛目	小皿	肥前	17C後～18C前	ⅢⅣ	X－2	g－43G	11.2	4.3	2.9	－	ナデ	ナデ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	小麦色	8YR7.0／6.5	鳶色（化粧土）ハニースイート	4YR4.0／2.0 （化粧土）2Y7.5／6.0		
295	1801	陶器・灰釉	五寸皿	肥前	17C中	－	X－2	6SX504	(13.9)	4.3	3.4	－	ナデ削り	ナデ	ナデ	削り出し高台	イエローオーカー	8YR6.0／6.5	（釉）オリーブドラブ	（釉）5Y4.5／2.0		44
295	1802	陶器・灰釉	五寸皿	肥前	17C中	－	X－2	6SX504	(14.8)	－	－	－	ナデ，削り	ナデ	－	－	－	－	（釉）ミストグリーン・サロー	（釉）3GY7.5／2.0・8YR5.0／11.0		44
295	1803	陶器	小皿	肥後；小代か？	19C初	－	X－1	－	－	5.0	2.8	－	ナデ後施釉	ナデ後施釉	回転ナデ，見込み中央は露胎	削り出し高台，渦巻き高台(右巴)，土みせ，高台際わずかに削り回線	橙	7.5YR6／6	（釉）にぶい黄色	（釉）2.5Y6／3	瓶焼窯か？口縁部数箇所押さえ輪花状，釉の発色悪い	
295	1804	陶器	小皿	肥前	17C後～18C前	ⅢⅣ	X－2	6SX506	13.1	4.1	3.4	－	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	アンティークブラウン	4YR3.0／6.0	トープ（化粧土）鳥の子色	4YR3.0／1.0 （化粧土）5Y9.0／2.0		
295	1805	陶器	小皿	肥前	17C後～18C前	ⅢⅣ	X－2	g－43G	12.7	4.0	2.5	－	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	アンティークブラウン	4YR3.0／6.0	トープ（染付）オイスター	4YR3.0／1.0 （染付）5Y7.5／1.0		
295	1806	陶器・藁灰	五寸皿	肥前；高取系	17C前	－	X－2	f－42,43G	15.1	5.9	3.6	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	スティールグレイ	3PB3.0／1.0	（釉）ラセットゴールド・浅はなだ・オイスター	（釉）2Y4.0／5.5・3PB5.0／5.5・5Y7.5／1.0	輪花	44
295	1807	陶器	小皿？	肥前系	1600～1630	－	X－2	g－43G	－	4.5	－	－	－	－	ナデ胎土目痕	削り出し高台胎土目痕	灰オリーブ	10Y6／2	（灰釉）灰白	（釉）10Y7／1	兜巾高台か？	
295	1808	陶器	小皿	肥前系	1690～1780	－	X－2	g－43G	－	4.4	－	－	－	－	蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	灰黄	2.5Y7／2	（釉）灰オリーブ・暗褐	（釉）7.5Y6／2・10YR3／3		
295	1809	陶器・刷毛目・象嵌	小皿	肥前	17C前	－	X－2	6SX504	(12.8)	4.4	3.6	－	ナデ，波状のハケメ	ナデ	ナデ，象嵌，砂目	削り出し高台	弁柄色	7R3.5／6.5	（釉）鳶色・クリーム色	（釉）4YR4.0／2.0・2Y9.0／2.0		44
295	1810	陶器	小皿	肥前	1690～1780	－	X－1	－	－	(4.4)	－	－	－	ナデ後施釉	ナデ後施釉蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台，ナデ，無釉	灰白	2.5GY8／1	（釉）灰白	（釉）5Y7／2		
295	1811	陶器・象嵌	小皿	肥後； 小代からも類似品	19C中？	V	X－2	－	(8.8)	3.5	2.8	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オリーブドラブ	5Y4.5／2.0	（釉）ブロンズ(化粧土）白ゆり色	（釉）5Y4.0／5.5 （化粧土）8Y9.0／2.0		
295	1812	陶器・象嵌	小皿	肥後； 小代からも類似品	19C中？	V	X－2	6SD501	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	鳶色	4YR4.0／2.0	（釉）焦茶（化粧土）鳥の子色	（釉）8YR2.5／1.5 （化粧土）5Y9.0／2.0		
296	1813	陶器	五寸皿	肥前； 嬉野内野山南	16末～17C初	－	X－2	6SX504	(13.7)	4.9	4.4	－	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	ナデ	削り出し高台	クリーム色	2Y9.0／2.0	鳥の子色	（釉）5Y9.0／2.0		
296	1814	陶器	小皿	肥前； 嬉野内野山	17C末～18C前	ⅢⅣ	X－2	6SX506	12.0	4.6	3.7	－	ナデ	ナデ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	ヘラケズリ，削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	（釉）油色	（釉）5Y6.0／6.0		
296	1815	陶器	五寸皿？	肥前； 嬉野内野山	17C末～18C前	ⅢⅣ	X－2	f－42,43G	－	4.2	－	－	ナデ	ナデ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	（釉）ブロンズ	（釉）5Y4.0／5.5		
296	1816	陶器・灰釉	中皿？	肥前	17C中	－	X－2	g－43G	－	5.0	－	－	－	－	ナデ	削り出し高台	小麦色	8YR7.0／6.5	（釉）灰汁色	（釉）5Y5.0／1.0		

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量 (cm)				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土 (notation)	釉薬・染付	釉薬・染付 (notation)		
296	1817	陶器・灰釉	中皿	肥前系	1600～1630	—	X－2	—	—	7.9	—	—	—	—	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	(釉) サロー	(釉) 5Y7.5／2.0		
296	1818	陶器	中皿	肥前	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	6 SX502	19.8	8.6	5.7	—	ナデ	ナデ	ナデ、蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	れんが色	4YR4.0／6.0	トーブ (化粧土) オリーブドラブ・クリーム色	4YR3.0／1.0 (化粧土) 5Y 4.5／2.0・2Y9.0／2.0		
296	1819	陶器・緑釉	中皿	肥前； 嬉野内野山	17C 後半	Ⅲ	X－2	6 SX504	—	(7.3)	—	—	ナデ	ナデ	ナデ、蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	(釉内面) オリーブグリーン・露草色 (釉外面) 油色	(釉内面) 3GY3.5／5.0・3PB5.0／10.0 (釉外面) 5Y6.0／6.0		
296	1820	陶器	中皿	肥前； 内野山北系	1610～1650	—	X－1	6 SK038	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	ナデ後施釉	削り出し高台、ナデ後施釉、畳付に胎土目痕有り	灰白	10Y 8／1	(釉) 明緑灰	(釉) 5GY 8／1		
296	1821	陶器	大皿？	不明	1610	—	X－2	6 SX503？	—	9.8	—	—	—	—	ナデ後施釉雑に灰釉	ナデ高台削り無釉、胎土目剥ぎとり痕あり	にぶい橙	7.5YR7／4	(釉) 灰オリーブ (灰釉) 灰白	(釉) 5Y4／2 (灰釉) 5Y8／1		44
296	1822	陶器	大皿	不明		—	X－1	6 SK003	(29.6)	(8.0)	7.6	—	ナデ後施釉	ナデ後口縁～胴部雑に施釉	回転ナデ胎土目痕	ナデ、削り出し高台	にぶい橙	5YR6／4	(釉) 灰黄褐	(釉) 10YR5／2		
296	1823	陶器	大皿	肥前；唐津系	1590～1630	—	X－2	6 SX504	35.5	9.7	9.4	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	ナデ後施釉	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	(釉) 油色	(釉) 5Y6.0／6.0		
297	1824	陶器	大鉢	不明	1750以降	—	X－2	6 SD501	—	12.0	—	—	ナデ後雑に施釉	ナデ後(口縁付近)灰釉後白化粧土で刷毛目波線(胴部)	ナデ、砂目痕	削り出し高台砂目痕ヘラ切り落とし削り込み	灰赤	7.5R4／2	(釉) 黒・オリーブ黒 (化粧土) 暗赤灰 (白化粧土) 灰白	(釉) 7.5YR2／1・5Y3／2,7 (化粧土) 5R3／2 (白化粧土) 7.5Y8／1		
297	1825	陶器	中鉢	不明	1700代	—	X－2	—	(24.4)	10.0	13.0	—	ナデ後(口縁)化粧土(胴部)化粧土後白化粧土で櫛刷毛目横	ナデ後(口縁～胴部)化粧土後白化粧土で櫛刷毛目後露胎釉(底部)ナデ後化粧土後露に露胎	ナデ後白化粧土	ナデ後雑に化粧土、高台削り、砂目痕、削り有り	にぶい橙	2.5YR6／4	(化粧土) 赤灰 (白化粧土) にぶい黄橙 (黒化粧土) 極暗赤褐	(化粧土) 2.5YR4／1 (白化粧土) 10YR7／2 (黒化粧土) 5YR2／3		
297	1826	陶器・二彩	大鉢	肥前；唐津系	1600	—	X－2	6 SX506	37.0	12.8	12.9	—	ナデ後口縁部白化粧土後雑に施釉	(口縁)ナデ後白化粧土で櫛目波線状施に露胎(胴部)ナデ後白化粧土で櫛刷毛目状露胎に施	ナデ後化粧土胎土目痕	削り出し高台	れんが色	4YR4.0／6.0	(櫛) 焦茶・オリーブグリーン・ブロンズ (化粧土) アイボリーホワイト	(釉) 8YR2.5／1.5・3GY 3.5／5.0・5Y4.0／5.5 (化粧土) 5Y9.0／1.0		45
297	1827	陶器	大鉢	不明	1750以降	—	X－2	f－42, g－43G	(42.6)	(14.6)	(13.2)	—	ナデ後化粧土胴毛目横・疎・波状文後口縁のみ雑に露胎	ナデ後口縁のみ施釉	ナデ後化粧土刷毛目 (横・縦)	削り出し高台	灰赤	2.5YR5／2	(白化粧土) 灰白 (釉) オリーブ褐・黒褐・にぶい黄	(白化粧土) 7.5Y8／1 (釉) 2.5Y4／3・3／1・6／3		
298	1828	陶器	小鉢	肥前；高取？	17C 初か？	—	X－2	6 SX504	9.3	3.8	4.6	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	ナデ後施釉	削り出し高台畳付無釉	にぶい褐	7.5YR5／2	(釉) 暗褐・赤黒・灰白・灰・灰オリーブ・瑠璃色	(釉) 7.5YR3／3・10R1.7／1.2・5Y8／1・8／2・5Y6／1・6／2・6PB3.5／10.0	小鉢か？	
298	1829	陶器	小鉢	肥前；高取？	17C 初か？	—	X－2	6 SX507	—	3.6	5.0	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	ナデ後施釉	削りだし高台畳付釉剥ぎとり	黄灰	2.5Y6／1	(釉) 黒・暗赤褐・灰・白・紺青色	(釉) N1.5／0・8／0・5YR3／6・10Y6／1・6PB2.5／9.5	小鉢か？	
298	1830	陶器・緑釉	中鉢	肥前；内野山系		—	X－2	6 SX506	(19.6)	—	—	—	ナデ	ナデ	蛇の目釉剥ぎ	ヘラケズリ	サロー	5Y7.5／2.0	(櫛・内面) オリーブグリーン・露草色 (釉・外面) アイボリーホワイト	(釉・内面) 3GY3.5／5.0・3PB5.0／10.0 (釉・外面) 5Y9.0／1.0		
298	1831	陶器・刷毛目	中鉢	肥前	1780～1860	Ⅴ	X－2	6 SX502	23.0	7.4	7.8	—	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ、蛇の目釉剥ぎ	オリーブドラブ	5Y4.5／2.0	ラセットゴールド (化粧土) 鳥の子色	2Y4.0／5.5 (化粧土) 5Y9.0／2.0		
298	1832	陶器	中鉢	不明		—	X－2	6 SX504	(20.0)	9.8	9.3	(20.8)	あて具痕	叩き痕	回転ヨコナデ	ナデ板目痕	赤黒・明赤褐	2.5YR2／1・5／6	—	—	浅鉢	
298	1833	陶器	中鉢	不明		—	X－2	6 SX504	(21.0)	—	—	—	ナデ？	ナデ？	—	—	にぶい赤褐	2.5YR4／3	—	—		
298	1834	陶器	中鉢	不明		—	X－2	6 SX504・ 6 SX503	(18.0)	(12.2)	12.7	(18.7)	あて具痕	叩き痕	—	—	暗赤灰	10R3／1	—	—		
298	1835	陶器	中鉢	不明		—	X－2	g－42G	19.0	6.0	9.5	—	ナデ後施釉口縁部のみ釉なし	ナデ後施釉口縁部のみ釉なし	ナデ？後施釉	回転ナデ無釉	暗赤褐・赤褐	10R4／1・5／4	(釉) オリーブ黒・灰オリーブ	(釉) 7.5Y3／2・5Y5／3		

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量（cm）				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土（notation）	釉薬・染付	釉薬・染付（notation）		
299	1836	陶器	擂鉢	国内、不明	17C 前～中(不明)	Ⅱ期か？	X－2	g－42G	(38.5)	－	－	－	ナデ、櫛描擂目	回転ヨコナデ	－	－	褐灰	5 YR 4／1	－	－		
299	1837	陶器	擂鉢	国内、不明	17C 前～中(不明)	Ⅱ期か？	X－2	g－43G	(37.1)	－	－	－	回転ヨコナデ後櫛描擂目	回転ヨコナデ	－	－	黒褐	5 YR 2／1	－	－		
299	1838	陶器	擂鉢	国内、不明	17C 前～中(不明)	Ⅱ期か？	X－2	g－43G	(27.0)	－	－	－	回転ヨコナデ後櫛描擂目	回転ヨコナデ	－	－	暗赤灰	7.5R 3／1	－	－		
299	1839	陶器	擂鉢	九州内、不明	17C 前～中(不明)	Ⅱ期か？	X－2	g－43G	－	(12.3)	－	－	櫛描擂目	回転ヨコナデ	櫛描擂目	ナデ	赤橙	10R 6／6	－	－		
299	1840	陶器	擂鉢	国内、不明	17C 中～後(不明)	Ⅲ期か？	X－2	g－43G	(35.0)	－	－	－	回転ヨコナデ後櫛描擂目	回転ヨコナデ	－	－	明赤褐	2.5YR 5／6	(化粧土) にぶい赤褐	(化粧土) 2.5YR 5／3		
299	1841	陶器	擂鉢	国内、不明	17C 中～後(不明)	Ⅲ期か？	X－2	g－43G	(34.8)	－	－	－	回転ヨコナデ後櫛描擂目、沈線	回転ヨコナデ	－	－	赤	10R 4／6	(化粧土) 褐灰	(化粧土) 5 YR 6／1		
299	1842	陶器	擂鉢	肥前系	17C 中～後	Ⅲ期	X－2	f－43G	(35.8)	－	－	－	櫛描擂目凹線模様	回転ナデ	－	－	赤褐	10R 4／3	(釉) 黒褐	(釉) 2.5Y 3／2		
300	1843	陶器	擂鉢	肥前系		－	X－2	6 SX506	(37.0)	(13.0)	11.6	－	回転ヨコナデ、鉄釉	回転ヨコナデ、鉄釉	回転ヨコナデ後櫛描擂目	回転糸切り離し	褐灰	5 YR 5／1	(鉄釉) 黒褐	(鉄釉) 5 YR 3／1		45
300	1844	陶器	擂鉢	九州内	17C 中～後	Ⅲ期	X－2	g－43G	33.9	11.9	14.6	－	回転ヨコナデ後櫛描擂目	回転ナデ、ナデ	櫛描擂目	回転糸切り落とし	にぶい赤	7.5R 4／4	(釉) 極暗褐	(釉) 7.5YR 2／3		
300	1845	陶器	擂鉢	九州内	17C 中～後	Ⅲ期	X－2	g－42G	33.8	13.3	13.7	－	回転ヨコナデ後櫛描擂目	回転ヨコナデ	回転ナデ後櫛描擂目	回転糸切り落とし	赤褐	10R 4／3	(釉) 黒褐	(釉) 2.5Y 3／2		
301	1846	陶器	擂鉢	肥前系		－	X－2	6 SX505、506	(32.4)	－	－	－	回転ヨコナデ後櫛擂目	回転ヨコナデ後櫛擂目	－	－	褐灰	5 YR 5／1	灰赤	2.5YR 4／2	焼締、無釉	
301	1847	陶器	擂鉢	肥前系	18C 中～後	Ⅴ期	X－2	－	34.6	11.6	12.3	－	回転ヨコナデ後櫛描擂目	回転ヨコナデ	櫛描擂目	回転糸切り	灰赤	2.5YR 4／2	(釉) 暗赤褐	(釉) 2.5Y 3／2		
301	1848	陶器	擂鉢	九州内	18C 中～後	Ⅴ期	X－2	6 SD501	(39.5)	17.0	15.9	－	回転ヨコナデ後櫛描擂目	回転ヨコナデ・ヘラ削り後ナデ	櫛描擂目	回転ヘラ削り、高台ヘラ削り、ヘラ切り	明赤褐	2.5YR 5／6	(釉) 暗赤褐	(釉) 2.5YR 3／2		
301	1849	陶器	擂鉢	国内、不明	18C 中～後	Ⅴ期	X－2	－	37.6	11.0	17.15	－	回転ヨコナデ後櫛描擂目後施釉	回転ヨコナデ	櫛描擂目後施釉	回転糸切り離し、ヨコナデ	にぶい赤	7.5R	(釉・外)黒褐(釉・内) にぶい黄橙	(釉・外) 2.5Y 3／2 (釉・内) 10YR 7／2		
302	1850	陶器	壺	肥前	17C 後半	－	X－2	6 SX502	21.6	19.2	31.3	28.4	タタキ、ナデ	タタキ、ナデ、カキメ？	工具ナデ	タタキ、ナデ	れんが色	4 YR4.0／6.0	(釉・外面) 暗赤灰 (釉・内面) 赤褐・暗赤灰	(釉・外面) 10R 4／1 (釉・内面) 10R 4／4・10R 4／1		
302	1851	陶器	甕	肥前	17C 後半	－	X－2	f－42,43G	32.2	－	(25.3)	37.3	ヨコナデ、タタキ、ナデ	ヨコナデ、タタキ、ナデ	－	－	れんが色	4 YR4.0／6.0	(釉・外面) 暗赤灰 (釉・内面) 灰色・赤褐	(釉・外面) 7.5R 3／1 (釉・内面) 10R 4／2・10R 5／4		
302	1852	陶器	甕	肥前	17C 後半	－	X－2	6 SX504	46.7	21.8	45.5	52.4	タタキ、ナデ、ヨコナデ	タタキ、ナデ、カキメ？	－	ナデ	れんが色	4 YR4.0／6.0	(釉・外面) 暗赤灰 (釉・内面) 褐灰	(釉・外面) 2.5R 3／1 (釉・内面) 5 YR 4／1		
303	1853	陶器	甕	肥前；二川焼か弓野窯（福岡）	19C	－	X－2	g－42G	(26.0)	－	－	－	ナデ	ナデ	－	－	にぶい橙	5 YR 6／4	(粕外面) 灰白・オリーブ・黒褐・オリーブ黒 (粕・内面) 灰白・黒褐	(釉外面) 5 Y 7／2・5／4・2／2・2.5Y 3／1 (釉・内面) 2.5Y 8／2・10YR 3／2	松文半胴甕	
303	1854	陶器	甕	九州内		－	X－2	f－43、g－43G	33.0	－	(21.6)	31.2	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	テラコッタ	7 R5.0／6.5	(粕) 鮫茶・コーヒーブラウン・アイボリー・オリーブドラブ (化粧土) アイボリー	(釉) 8 YR2.5／1.5・8 YR3.5／5.0・5 Y9.0／1.0・5 Y4.5／2.0 (化粧土) 5 Y9.0／1.0		

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量（cm）				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土（notation）	釉薬・染付	釉薬・染付（notation）		
303	1855	陶器	甕	肥前	18C～19C	V	X－2	6 SX504	－	14.2	(23.4)	24.4	タタキ、ナデ、ヨコナデ	タタキ、ナデ、ヨコナデ	ナデ	ナデ	トープ	4 YR3.0／1.0	（釉）アンティックブラウン・トープ	（釉）4 YR3.0／6.0・4 YR 3.0／1.0		
303	1856	陶器	壺	肥前系	16末～17前	－	X－2	6 SX504	－	12.8	－	－	ナデ	ナデ	指押さえ	ナデ消し	チャコールグレイ	N3.0	（釉）焦茶・オリーブグリーン	（釉）8 YR2.5／1.0・3 GY 3.5／5.0		
304	1857	陶器・鉄釉	瓶	肥前	1600～1630	－	X－2	6 SX504	－	(8.0)	－	(12.0)	指押さえ	ナデ	－	－	灰汁色	5 Y5.0／1.0	（釉）アンティックブラウン・シダーグリーン	（釉）4 YR3.0／6.0・5 Y 2.5／1.5		45
304	1858	陶器	瓶	不明		－	X－2	6 SX504	－	－	－	10.3	ナデ	ナデ後(腰部)鉄釉(肩～胴部)化粧土刷毛目横線後波状文後縦に各色釉	－	－	にぶい橙・褐灰	7.5YR 6／4・10 YR 6／1	(白化粧土) 灰白 (緩褐色粒) 暗オリーブ・ボルトグリーン (鉄粒) オリーブ黒	(白化粧土) 2.5Y 8／1 (緑褐色粒) 鉄釉) 5 Y 4／3・3 G3.0／4.5 (鉄釉) 5 Y 3／2		
304	1859	陶器	瓶	肥前系	1630～1650	Ⅱ－2	X－2	6 SX504	－	(12.1)	－	(18.0)	(頸部)施釉(肩部)回転ナデ(胴部)格子目タタキ後ナデ	格子目タタキ後ナデ肩部沈線施釉	回転ナデ	胎土目痕	灰黄	2.5YR 6／2	（釉）暗赤褐・赤黒・灰黄・灰黄褐	（釉）5 YR 3／2・2.5YR 1.7／1・2.5Y 6／2・10 YR 5／2		45
304	1860	陶器	瓶（徳利？）	肥後；小代	18C 代？	Ⅳ	X－2	6 SX502、506	－	－	－	(14.6)	指ナデあて具	不明	－	－	トープ	4 YR3.0／1.0	（釉）油色・コーヒーブラウン	（釉）5 Y5.0／6.0・8 YR 3.5／6.0		
304	1861	陶器・二彩	瓶	肥前；唐津系	1650以降	－	X－2	g－43G	－	10.2	－	16.8	ナデ	ナデ後口縁～肩部化粧土で刷毛目肩部・波状文施釉に胎土(胴部～底部)化粧土	ナデ	ナデ後施釉高台畳付釉剥ぎとり	灰褐	7.5YR 5／2	(白化粧土)灰白(鉄釉) 暗褐・ろくしょう (泥釉) 褐灰	(白化粧土) 7.5Y 8／1 (鉄釉) 10YR 3／3・3 G5.0／5.0 (泥釉) 10YR 4／1		45
304	1862	陶器	瓶	不明	17C 末～18C 前	－	X－2	－	－	5.3	－	16.7	ナデ	ナデ後化粧土頸～肩部にかけ白化粧土後雑に鉄釉	？	ナデ後施釉畳付のみ無釉、板目痕あり	灰・灰黄褐	7.5Y 5／1・10 YR 6／2	(化粧土) にぶい赤褐・黒褐(白化粧土)灰白(粒) にぶい黄褐・オリーブ灰	(化 粧 土) 5 YR 4／3・3／1 (白化粧土) N 8／0 (釉) 10YR 4／3・10R 4／2		
304	1863	陶器	瓶	肥前系	17C 末～18前中期	Ⅳ期	X－2	f－43、g－43G	5.1	6.7	21.2	11.9	ナデ、口縁に鉄釉	(口縁～頸部)鉄釉他白化粧土で横線ハケメ	ナデ	ナデ後化粧土畳付釉剥ぎ、砂目痕	にぶい褐色	7.5YR 5／3	（鉄釉）黒（化粧土）灰白	（鉄釉）7.5YR 2／1（化粧土）5 Y 8／2		
304	1864	陶器・陶胎染付	瓶	不明		－	X－2	g－43G	－	－	－	－	ナデ	ナデ	－	－	オリーブドラブ	5 Y4.5／2.0	灰汁色（染付）スプルース	5 Y5.0／1.0 （染付）3 G2.0／0.5		
304	1865	陶器	徳利	肥前か肥後；天草	18C～19C	ⅣV	X－2	g－43G	－	8.8	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	ハニースイート	2 Y7.5／6.0	(釉)枯草色(染付) オリーブグリーン・オリーブドラブ	（釉）5 Y7.5／6.0 （染 付）3 GY3.5／5.0・5 Y4.5／2.0		
305	1866	陶器・緑釉	火入	肥前；伊万里	17C 後半	Ⅲ	X－2	6 SX504	－	4.9	－	－	－	－	ナデ	削り出し高台	れんが色	4 YR4.0／6.0	（釉）オリーブグリーン・サックスブルー	（釉）3 GY3.5／5.0・5 PB 5.5／5.0		
305	1867	陶器	火入	肥前	1655～1690	－	X－2	6 SX506	9.3	5.3	5.7	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	樺色	10R4.0／11.0	（化粧土）トープ	（化粧土）4 YR3.0／1.0		
305	1868	陶器	火入	肥前系？	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	6 SX502	10.8	4.5	5.6	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	灰汁色	5 Y5.0／1.0	（釉）枯草色・焦茶	（釉）8 YR4.5／6.0・8 YR 2.5／1.5		
305	1869	陶器	火入	肥前系	17C末～18C前	ⅢⅣ	X－2	g－43G	(10.0)	(6.0)	5.75	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	灰白・サロー	5 Y 7／2・5 Y 7.5／2.0	（釉）オリーブ黄・油色	（釉）5 Y 6／3・5 Y6.0／6.0		
305	1870	陶胎染付	火入	肥前系	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	g－43G	－	－	－	－	ナデ	ナデ	－	－	褐	7.5YR 4／4	(白土施釉)灰(染付) 緑灰	(白土施釉) 10Y 6／1（染付）7.5GY 5／1		
305	1871	陶器	火入	肥前	1655～1690	－	X－2	g－43G	9.7	4.6	6.1	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	樺色	10R4.0／11.0	（化粧土）焦茶	（化粧土）8 YR2.5／1.5		45
305	1872	陶器	火入	不明	1650～1690	－	X－2	6 SX504	12.4	6.6	7.7	6.5	ナデ後口縁のみ施釉	ナデ後（口縁～胴部のみ）化粧土で刷毛目横線後施釉	ナデ	ナデ	橙	2.5YR 6／6	（白化粧土）灰白・（釉）黒褐・灰黄褐・オリーブ灰	（白化粧土）5 YR 8／1 （釉）10YR 3／1・4／2・5 GY 4／1		
305	1873	陶器	水指	肥後？	不明	－	X－2	6 SX504	－	－	－	－	ナデ	ナデ	－	－	エボニー	5 Y3.0／0.5	（釉）アンティックブラウン・ブロンズ	（釉）4 YR3.0／6.0・5 Y 4.0／5.5		

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量（cm）				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土（notation）	釉薬・染付	釉薬・染付（notation）		
305	1874	陶器	水指	肥後？	不明	—	X－2	f—42G	—	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	エボニー	5Y3.0／0.5	（釉）鹿色・ブロンズ	（釉）4YR4.0／2.0・5Y 4.0／5.5		
305	1875	陶器	水注	肥後；天草	18C 後～19C	—	X－2	g—43G	(6.9)	—	—	9.8	ナデ	ナデ	—	—	イエローオーカー	8YR6.0／6.5	（釉）ミストグリーン	（釉）3GY7.5／2.0		
305	1876	陶器	土瓶	不明	19C 後半か？	—	X－1	6 SK004	—	7.6	—	—	—	—	回転ナデ施釉？	ナデ後白化粧土，煤付着（全面）	にぶい赤褐	2.5YR5／4	（白化粧土）灰白・（釉）褐灰	（白化粧土）10YR8／1 （釉）5YR4／1		
305	1877	陶器	土瓶	不明	19C 後半か？	—	X－1	6 SK004	8.3	—	—	—	ナデ	ナデ後施釉取手のようなものがあるが形成不明	—	—	にぶい赤褐	5YR5／4	（釉）褐	（釉）7.5YR4／6		
305	1878	陶器	油徳利	不明		—	X－2	6 SX505	—	—	—	—	ナデ	ナデ後施釉	回転ナデ	ナデ，砂付着	黒褐	10YR3／1	（外）極暗褐・灰褐（内）明褐（酸化鉄？）・褐灰	（外）7.5YR2／3・5／2 （内）7.5YR5／8・10YR 5／1		
305	1879	陶器	片口	九州内，不明		—	X－2	6 SX506	(22.4)	(7.0)	11.4	—	施釉	ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	ナデ	褐灰	5YR5／1，7.5 YR5／2	（釉）暗赤灰・赤灰・褐灰・にぶい黄橙（無釉）灰褐	（釉）10R4／1・5／1・5YR4／1・10YR6／4 （無釉）7.5YR5／2		
306	1880	陶器	壺	朝鮮？	16C?	—	X－2	6 SX504，503	—	19.5	(28.7)	35.8	タタキ，ナデ	タタキ，ナデ	ナデ	ナデ	灰汁色	5Y5.0／1.0	（釉）モスグリーン	（釉）3GY5.5／5.5		
307	1881	京焼風陶器	碗	肥前系？	17C 末～18C 前	ⅢⅣ	X－2	g—23G	—	5.1	—	—	—	—	ナデ	削り出し高台	クリーム色	2Y9.0／2.0	（釉）浅黄・油色	（釉）5Y7／3・5Y6.0／6.0		
307	1882	京焼風陶器	碗	肥前系？	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2		(11.3)	4.2	4.8	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	鳥の子色	5Y9.0／2.0	（釉）浅黄・枯草色	（釉）2.5Y7／3・5Y7.5／6.0		
307	1883	京焼風陶器	碗	関西系	18C 前	Ⅳ	X－2	g—42G	(8.7)	(3.0)	5.7	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	灰白・鳥の子色	5Y8／2・5Y 9.0／2.0	（釉）浅黄・油色・シダーグリーン	（釉）5Y7／3・5Y6.0／6.0・5Y2.5／1.5		
307	1884	京焼風陶器	碗	関西系	18C 前	Ⅳ	X－2		(9.5)	2.8	5.7	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	淡黄・クリームイエロー	2.5Y8／3・2Y 9.0／6.0	（釉）淡黄・油色	（釉）5Y7／3・5Y6.0／6.0		
307	1885	京焼風陶器	碗	肥前系？	17C 末～18C 前	ⅢⅣ	X－2	g—43G	(11.3)	(4.6)	6.9	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	クリームイエロー	2Y9.0／6.0	（釉）浅黄・ハニースイート	（釉）2.5Y7／4・2Y7.5／6.0		
307	1886	京焼風陶器	碗	肥前	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	g—43G	—	3.7	—	—	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ後削り出し高台	灰白・クリーム色	2.5Y8／2・2Y 9.0／2.0	（釉）浅黄・油色（染付）焦げ茶	（釉）2.5Y7／3・5Y6.0／6.0（染付）8YR2.5／1.5		
307	1887	京焼風陶器	碗	肥前	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	g—43G	9.8	4.0	4.5	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	灰白・ペールベージュ	2.5Y8／2・8 YR9.0／2.0	（釉）浅黄・ハニースイート（染付）ラセットゴールド	（釉）2.5Y7／3・2Y7.5／6.0（染付）2Y9.0／5.5		
307	1888	京焼風陶器	碗	肥前	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	g—43G	(11.1)	4.3	4.6	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	灰白・クリーム色	2.5Y8／2・2Y 9.0／2.0	（釉）淡黄・クリームイエロー（染付）墨色	（釉）2,5Y8／3・2Y9.0／6.0（染付）N1.5		46
307	1889	京焼風陶器	碗	国内		—	X－2	6 SX506	—	4.2	—	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	浅黄	2.5Y7／3	（染付）灰黄（透明釉）浅黄	（染付）2.5Y6／2 （透明釉）2.5Y7／3	印銘「小倉」	46
307	1890	京焼風陶器	碗	肥前	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	g—43G	(12.0)	4.1	4.5	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	灰白・サロー	2.5Y8／2・5Y 7.5／2.0	（釉）浅黄・油色（染付）焦げ茶	（釉）2.5Y7／3・5Y6.0／6.0（染付）8YR2.5／1.5		
307	1891	京焼風陶器	碗	国内		—	X－2	6 SX505	12.2	4.2	4.5	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	浅黄	2.5Y7／3	（染付）灰オリーブ（透明釉）浅黄	（染付）5Y5／3 （透明釉）2.5Y7／4	印銘「小倉」	46
307	1892	京焼風陶器	皿	肥前系	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	6 SX506	(19.7)	12.1	6.1	—	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	クリーム色	2Y9.0／2.0	油色（染付）ボトルグリーン	5Y6.0／6.0 （染付）3G3.0／4.5		

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量（cm）				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土（notation）	釉薬・染付	釉薬・染付（notation）		
307	1893	京焼風陶器	鉢	肥前；志田	17C後～18C前	ⅢⅣ	X－2	g－34G	(19.2)	－	－	－	ナデ	箆削り	ナデ	箆削り、付け高台	オイスター	5Y7.5／1.0	（釉）浅黄・枯草色・モスグリーン	（釉）5Y7／3・5Y7.5／6.0・3GY5.5／5.5		
308	1894	磁器・染付	中碗	肥前系	18C前～中	Ⅳ	X－2	g－43G	(9.4)	－	－	－	ナデ	ナデ	－	－	パールホワイト	N8.5	フロスティグレイ（染付）藍色	3G7.5／1.0（染付）3PB3.5／5.5		
308	1895	磁器・染付	中碗	肥前系	18C前～中	Ⅳ	X－2	－	(9.7)	(4.0)	5.0	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	フロスティグレイ（染付）藍色	3G7.5／1.0（染付）3PB3.5／5.5		
308	1896	磁器・染付	中碗	肥前系	18C前～中	Ⅳ	X－2	6SX502	10.2	4.0	6.1	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	鳥の子色	5Y9.0／2.0	オイスター（染付）ボトルグリーン・オリーブグリーン	5Y7.5／1.0（染付）3G3.0／4.5・3G3.5／5.0		47
308	1897	磁器・染付	中碗	肥前系	18C中～後	Ⅳ	X－2	f－42G	(9.2)	(3.4)	5.0	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）スレートグリーン・くり色	3G7.5／1.0（染付）3G4.0／2.0・4YR2.0／0.5		
308	1898	磁器・染付	中碗	肥前系	18C中～後	Ⅳ	X－2	g－43G	9.9	3.7	5.3	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）浅はなだ・黒緑	3G7.5／1.0（染付）3PB5.0／5.5・3G2.0／1.5		47
308	1899	磁器・染付	中碗	肥前系	18C中～後	Ⅳ	X－2	g－42G	(10.1)	(3.6)	5.2	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	シルバーグレイ（染付）浅はなだ・黒緑	N7.5（染付）3PB5.0／5.5・3G2.0／1.5		
308	1900	磁器・染付	中碗	肥前系	1780頃	ⅣⅤ	X－2	f－42G	(9.7)	3.4	5.1	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	フロスティグレイ（染付）浅はなだ・濃藍	3G7.5／1.0（染付）3PB5.0／5.5・3PB2.0／5.0		
308	1901	磁器・染付	中碗	肥前系	18C中～後	Ⅳ	X－2	ソクミゾ	(10.4)	(3.6)	5.3	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	フロスティグレイ（染付）浅はなだ・濃藍	3G7.5／1.0（染付）3PB5.0／5.5・3PB2.0／5.0		
308	1902	磁器・染付	中碗	肥前系	18C中～後	Ⅳ	X－2	f－42,43G	10.7	4.0	4.5	－	ナデ	ナデ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	香色	4YR6.0／2.0	フロスティグレイ（染付）スレートグリーン・ボトルグリーン	3G7.5／1.0（染付）3G4.0／2.0・3G3.0／4.5		
308	1903	磁器・染付	中碗	肥前系	18C中～後	Ⅳ	X－2	f－42G	(9.7)	4.2	5.2	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	鳥の子色	5Y9.0／2.0	フロスティグレイ（染付）浅はなだ・紺青色	3G7.5／1.0（染付）3PB5.0／5.5・6PB2.5／9.5		
308	1904	磁器・染付	中碗	肥前系	18C中～後	Ⅳ	X－2	g－43G	(9.6)	(3.4)	5.1	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	フロスティグレイ（染付）スレートグリーン・紺青色	3G7.5／1.0（染付）3G4.0／2.0・6PB2.5／9.5		
308	1905	磁器・染付	中碗	肥前系	18C中～後	Ⅳ	X－2	g－43G	(10.3)	(3.7)	5.7	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	フロスティグレイ（染付）浅はなだ	3G7.5／1.0（染付）3PB5.0／5.5		47
308	1906	磁器・染付	中碗？	肥前系	18C中～後	Ⅳ	X－2		－	(4.3)	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	シルバーグレイ（染付）浅はなだ・ボトルグリーン	N7.5（染付）3PB5.0／5.5・3G3.0／4.5		
308	1907	磁器・染付	中碗	肥前系	18C中～後	Ⅳ	X－2	6SX506	10.1	4.2	5.3	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）浅はなだ・濃藍	3G7.5／1.0（染付）3PB5.0／5.5・3PB2.0／5.0		
308	1908	磁器・染付	小碗	肥前系	18C前～中	Ⅳ	X－2	6SX502	8.6	3.4	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	スノウホワイト	N9.5	フロスティグレイ（染付）浅はなだ	3G7.5／1.0（染付）3PB5.0／5.5		
308	1909	磁器・染付	小碗	肥前系	18C中～後	Ⅳ	X－2	－	(8.1)	3.6	5.8	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パウダーブルー	3PB6.5／2.0	ミディアムグレイ（染付）ボトルグリーン	N5.5（染付）3G3.0／4.5		47
308	1910	磁器・染付	小碗	肥前系	18C中～後	Ⅳ	X－2	g－43G	(8.7)	3.7	6.0	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	シルバーグレイ（染付）藍色・鉄色	N7.5（染付）3PB3.5／5.5，5BG2.5／4.5		47
308	1911	磁器・染付	小碗	肥前系	幕末頃	Ⅴ	X－2	－	(5.7)	3.0	5.0	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）浅はなだ・藍色	3G7.5／1.0（染付）3PB5.0／5.5・3PB3.5／5.5	湯飲み	

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量 (cm)				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土 (notation)	釉薬・染付	釉薬・染付 (notation)		
308	1912	磁器・染付	小碗	肥前系	1780～1810	ⅣV	X－2	g－42G	(8.3)	(3.4)	5.3	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	アイボリーホワイト（染付）浅はなだ	5Y9.0／1.0 （染付）3PB5.0／5.5	湯飲み	
308	1913	磁器・染付	小碗	肥前系	1630～1650	Ⅱ2	X－2	g－43G	(9.0)	(4.2)	6.2	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	（釉）裏葉色（染付）藍色	（釉）3G7.0／2.0 （染付）3PB3.5／5.5		
309	1914	磁器・染付赤絵	中碗	肥前系	18C 中～後	Ⅳ	X－2	g－42G	－	2.9	－	－	－	－	ナデ	削り出し高台	アイボリーホワイト	5Y9.0／1.0	オイスター（染付）浅はなだ・紺色・ラッカーレッド	5Y7.5／1.0（染付）3PB5.0／5.5・6PB2.0／5.0・7R 3.5／11.5	湯飲み	
309	1915	磁器・染付	中碗？	肥前系	18C 中～後	Ⅳ	X－2	6SX506、504	－	(5.4)	－	－	ナデ	ナデ	－	－	アイボリーホワイト	5Y9.0／1.0	リリーホワイト（染付）スマルト・紺色	3G9.0／1.0（染付）6PB3.5／5.5・6PB2.0／5.0	鉢かも	
309	1916	磁器・染付	中碗？	肥前	1690年頃か？	－	X－2	6SX503？	－	5.0	－	－	－	－	ナデ	ナデ削り出し高台	灰白	2.5GY 8／1	（染付）瑠璃色	（染付）6PB3.5／10.0		
309	1917	磁器・染付	小碗	肥前系	1780～1810	ⅣV	X－2	g－42G	(6.9)	－	－	－	ナデ	ナデ	－	削り	オイスター	5Y7.5／1.0	リリーホワイト（染付）浅はなだ・ミッドナイトブルー	3G9.0／1.0（染付）3PB5.0／5.5・3PB1.5／1.5	湯飲み	
309	1918	磁器・染付	小碗	肥前系	1780～1810	ⅣV	X－2	g－42G	(7.2)	3.5	5.5	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	スノウホワイト	N9.5	アイボリーホワイト（染付）スレートグリーン・黒緑	5Y9.0／1.0（染付）3G4.0／2.0・3G2.0／1.5	湯飲み	
309	1919	磁器・染付	小碗？	肥前系	1780～1810	ⅣV	X－2	f－42G	6.8	3.3	5.4	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）浅はなだ・ミッドナイトブルー	3G7.5／1.0（染付）3PB5.0／5.5・3PB1.5／1.5	湯飲み	
309	1920	磁器・白磁	中碗？	肥前系	18C 後	Ⅴ	X－2	6SD501	－	5.1	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	リリーホワイト	（釉）3G9.0／1.0		
309	1921	磁器・白磁	中碗	肥前系	18C 後	Ⅴ	X－2	6SD501	(11.1)	－	－	－	ナデ	ナデ	－	－	シルバーグレイ	N7.5	リリーホワイト	（釉）3G9.0／1.0		
309	1922	磁器・染付	中碗	肥前系	18C 後	Ⅴ	X－2	g－43G	9.9	3.6	6.6	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	わさび色・オイスター（染付）パウダーブルー	3G6.5／5.0・5Y7.5／1.0（染付）3PB6.5／2.0		
309	1923	磁器・染付	中碗？	肥前	1640～1650	Ⅱ2	X－2	6SX504	－	4.5	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）墨色・濃藍	3G7.5／1.0 （染付）N1.5・3PB2.0／5.0		
309	1924	磁器・染付	小坏	肥前	17C 中	Ⅱ2 Ⅲ	X－2	g－43G	－	2.2	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	アイボリーホワイト	5Y9.0／1.0	オイスター（染付）ボトルグリーン	5Y7.5／1.0 （染付）3G3.0／4.5		
309	1925	磁器・白磁	小坏	肥前系	17C 中～後	Ⅲ	X－2	f－43G	7.1	2.8	4.9	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	白ゆり色	（釉）8Y9.0／2.0		
310	1926	磁器・染付	中碗？	肥前	17C 中	Ⅱ2 Ⅲ	X－2	6SX503	－	4.4	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）紺色	3G7.5／1.0 （染付）6PB2.0／5.0		
310	1927	磁器・染付	中碗	肥前系	18C 中～後	Ⅳ	X－2	g－42G	9.9	4.0	5.1	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	シルバーグレイ（染付）浅はなだ・スレートグリーン	N7.5（染付）3PB5.0／5.5・3G4.0／2.0		
310	1928	磁器・染付	中碗？	肥前系	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	6SX506	－	－	－	－	ナデ	ナデ	－	－	オイスター	5Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）藤納戸	3G7.5／1.0 （染付）6PB5.0／5.5		
310	1929	磁器・染付	中碗	肥前系	18C 末～19C 前	Ⅴ	X－2	6SD501	(11.6)	4.3	6.3	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	シルバーグレイ（染付）濃藍	N7.5（染付）3PB2.0／5.0		
310	1930	磁器・染付	中碗	肥前系	1780頃	ⅣV	X－2	f－42G	(10.8)	(4.2)	5.6	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	アイボリーホワイト	5Y9.0／1.0	リリーホワイト（染付）浅はなだ・濃藍	3G9.0／1.0（染付）3PB5.0／5.5・3PB2.0／5.0		

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量 (cm)				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土 (notation)	釉薬・染付	釉薬・染付 (notation)		
310	1931	磁器・染付	中碗	肥前系	19C～明治	V	X－2	6 SD501	(10.5)	(3.6)	5.7	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	フロスティグレイ（染付）浅はなだ	3 G7.5／1.0 （染付）3 PB5.0／5.5		
310	1932	磁器・染付	中碗	肥前系	19C～明治	V	X－2	6 SD501	(10.3)	3.8	5.1	－	ナデ	ナデ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	－	－	パールホワイト（染付）紺青色	N8.5（染付） 6 PB2.5／9.5		
310	1933	磁器・染付	中碗	肥前系	19C～明治	V	X－2		10.5	4.6	6.2	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）スマルト	3 G7.5／1.0 （染付）6 PB3.5／5.5		
310	1934	磁器・染付	中碗	不明	19C 代	V	X－2	g－43G	(11.3)	4.0	6.3	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）露草色・ボトルグリーン	3 G7.5／1.0（染付）3 PB5.0／10.0・3 G3.0／4.5		
310	1935	磁器・染付	大碗	肥前系	1630～1640	Ⅱ－2	X－2	6 SX504	(12.0)	(5.0)	－	－	ナデ後施釉	ナデ染付後施釉	ナデ後施釉	削り出し高台後施釉	灰白	N 8／	（釉）明青灰（染付）紺色・藍色	（釉）10BG 7／1 （染付）6 PB2.0／5.0・3 PB 3.5／5.5		47
310	1936	磁器・染付	大碗	肥前系	17C 後？	Ⅲ	X－2	g－43G	(12.4)	5.1	6.8	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	アイボリーホワイト	5 Y9.0／1.0	ライトグレイ（染付）浅はなだ・滅藍	N7.5（染付）3 PB5.0／5.5・3 PB2.0／5.0		
310	1937	磁器・染付	大碗？	肥前	17C 中	Ⅱ2 Ⅲ	X－2	6 SX503	－	5.2	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5／1.0	ライトグレイ（染付）藍色・滅藍	N7.5（染付）3 PB3.5／5.5・3 PB2.0／5.0		
310	1938	磁器・染付	中碗？	肥前	17C 中	Ⅱ2 Ⅲ	X－2	6 SX504	－	(4.4)	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	アイボリーホワイト	5 Y9.0／1.0	ブルーウォッシュ（染付）スマルト	3 PB8.5／1.0 （染付）6 PB3.5／5.5		
310	1939	磁器・染付コンニャク印判	大碗	肥前系	1680～1770	Ⅳ	X－2	g－43G	12.4	4.3	6.2	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5／1.0	シルバーグレイ（染付）浅はなだ	N7.5（染付） 3 PB5.0／5.5		
310	1940	磁器・染付	大碗？	肥前系	18C 中～後	Ⅳ	X－2	g－42, 43G	－	5.4	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）浅はなだ	3 G7.5／1.0 （染付）3 PB5.0／5.5		
311	1941	磁器・染付	小皿	肥前系	18C 中～後	Ⅳ	X－2	g－43G	12.5	3.8	3.8	－	ナデ	ナデ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	ブルーウォッシュ（染付）スレートグリーン・ボトルグリーン	3 PB8.5／1.0（染付）3 G4.0／2.0・3 G3.0／4.5		
311	1942	磁器・染付	小皿	肥前系	18C 中～後	Ⅳ	X－2		(12.7)	4.4	3.9	－	ナデ	ナデ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5／1.0	シルバーグレイ（染付）スレートグリーン	N7.5（染付） 3 G4.0／2.0		
311	1943	磁器・染付	小皿	肥前系	18C 中～後	Ⅳ	X－2	f－42G	12.3	4.4	3.7	－	ナデ	ナデ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	シルバーグレイ	N7.5	フロスティグレイ（染付）納戸色	3 G7.5／1.0（染付） 5 B4.0／5.0		
311	1944	磁器・染付	小皿	肥前系	17C 末～18C 前	Ⅳ	X－2	－	(13.1)	(7.3)	4.8	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5／1.0	シルバーグレイ（染付）スマルト・ミッドナイトブルー	N7.5（染付）6 PB3.5／5.5・3 PB1.5／1.5		
311	1945	磁器・染付	小皿	肥前系	1750～1810	ⅣV	X－2	g－42, 43G	(13.1)	(7.7)	4.2	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	フロスティグレイ（染付）藍色	3 G7.5／1.0（染付）3 PB3.5／5.5		
311	1946	磁器・染付	小皿	肥前系	18C 後～19C 前	V	X－2		(13.2)	4.6	4.4	－	ナデ	ナデ	ナデ，蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	スノウホワイト	N9.5	パールホワイト（染付）さびあさぎ	N8.5（染付） 5 BG4.5／5.0		
311	1947	磁器・染付	小皿	肥前系	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	g－43G	(12.8)	6.6	3.2	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	シルバーグレイ	N7.5	フロスティグレイ（染付）納戸色	3 G7.5／1.0 （染付） 5 B4.0／5.0		
311	1948	磁器・染付	五寸皿	肥前系	17C 後～18C 前	ⅢⅣ	X－2	f－43G	(13.6)	18.4	3.0	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	アイボリーホワイト	5 Y9.0／1.0	リリーホワイト（染付）浅はなだ・スレートグリーン	3 G9.0／1.0（染付）3 PB5.0／5.5・3 G4.0／2.0		
311	1949	磁器・染付	五寸皿	肥前系	1750～1810	ⅣV	X－2		(13.8)	(7.6)	2.9	－	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）浅はなだ	3 G7.5／1.0（染付）3 PB5.0／5.5		

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量 (cm)				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土 (notation)	釉薬・染付	釉薬・染付 (notation)		
312	1950	磁器・白磁	小皿	肥前	17C 前半	Ⅱ1	X−2	6 SX504	13.5	6.2	3.4	−	型打	ヘラケズリ, ナデ	ナデ	削り出し高台	アイボリーホワイト	5 Y9.0/1.0	フロスティグレイ	(釉) 3 G7.5/1.0		
312	1951	磁器・青磁	小皿	肥前；波佐見	1655～1680	Ⅲ	X−2	6 SX504	13.5	4.6	3.8	−	ナデ	ナデ	ナデ, 蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5/1.0	(釉) ろくしょう	(釉) 3 G5.0/5.0		
312	1952	磁器・青磁	五寸皿	肥前；波佐見	1680～1710 (17C 中)	Ⅱ2 Ⅲ	X−2	6 SX504	13.6	4.5	3.8	−	ナデ	ナデ	ナデ, 蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	ろくしょう	(釉) 3 G5.0/5.0		
312	1953	磁器・染付	小皿？	肥前	17C 前	Ⅱ1	X−2	6 SX504	−	5.2	−	−	−	−	ナデ	ナデ, 削り出し高台	パールホワイト	N8.5	フロスティグレイ (染付) 藍色・紺色	3 G7.5/1.0 (染付) 3 PB3.5/5.5・6 PB2.0/5.0		43
312	1954	磁器・染付	中皿？	肥前	17C 前	Ⅱ1	X−2	6 SX504	−	(5.5)	−	−	−	−	ナデ	削り出し高台, ナデ	スノウホワイト	N9.5	藍白 (染付) 浅はなだ・紺色	5 B8.5/2.0 (染付) 3 PB5.0/5.5・6 PB2.0/5.0		43
312	1955	磁器・染付	中皿	肥前系	18C 中～後	ⅣV	X−2	6 SD501	(18.6)	−	−	−	ナデ	ナデ	−	−	アイボリーホワイト	5 Y9.0/1.0	フロスティグレイ (染付) 浅はなだ・濃藍	3 G7.5/1.0 (染付) 3 PB5.0/5.5・3 PB2.0/5.0		
312	1956	磁器・染付	五寸皿	肥前系	18C 後	Ⅴ	X−2	b−43G	−	8.7	−	−	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台 (蛇の目高台)	スノウホワイト	N9.5	リリーホワイト・わさび色 (染付) 露草色・紺色	3 G9.0/1.0・3 G6.5/5.0 (染付) 3 PB5.0/10.0・6 PB2.0/5.0		
312	1957	磁器・染付	小皿	肥前系	18C 前	Ⅳ	X−2	6 SX502	(13.2)	7.5	3.2	−	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	シルバーグレイ (染付) 浅はなだ	N7.5 (染付) 3 PB5.0/5.5		
312	1958	磁器	中皿	肥後；天草	18C 末～19C	Ⅴ	X−2	g−43G	−	−	−	−	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5/1.0	フロスティグレイ (染付) 濃藍・藍色	3 G7.5/1.0 (染付) 3 PB2.0/5.0・3 PB3.5/5.5		
312	1959	磁器・染付	小皿	肥前系	19C 前	Ⅴ	X−2	6 SD501	(9.4)	4.0	2.6	−	ナデ	ナデ	ナデ, 蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5/1.0	オイスター (染付) オリーブグリーン・とくさ色・灰汁色	5 Y7.5/1.0 (染付) 3 GY3.5/5.0・9 G4.5/5.0・5 Y5.0/1.0		
313	1960	磁器・染付	五寸皿	肥前系	17C 中	Ⅱ2 Ⅲ	X−2	6 SX506	(14.7)	(7.2)	3.9	−	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5/1.0	ライトグレイ (染付) 浅はなだ	N7.5 (染付) 3 PB5.0/5.5		46
313	1961	磁器・染付	小皿	肥前系	1820～1860	Ⅴ	X−2		12.5	6.7	3.0	−	ナデ型打成形	ナデ型打成形	ナデ	蛇の目凹型高台畳付無釉	スノウホワイト	N9.5	ブルーウォッシュ (染付) 浅はなだ	3 PB8.5/1.0 (染付) 3 PB5.0/5.5		
313	1962	磁器・染付	小皿	肥前系	17C 末～18C 前	ⅢⅣ	X−2	6 SX506	13.1	7.7	3.4	−	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5/1.0	オイスター (染付) 浅はなだ・濃藍	5 Y7.5/1.0 (染付) 3 PB5.0/5.5・3 PB2.0/5.0		
313	1963	磁器・染付	大皿	肥前；有田長吉谷窯	1660～1680	Ⅲ	X−2		−	(12.8)	−	−	−	−	ナデ	削り出し高台	スノウホワイト	N9.5	パールホワイト (染付) 藤納戸	N8.5 (染付) 6 PB5.0/5.5		
313	1964	磁器・染付	中皿	肥前	1680～1710	ⅢⅣ	X−2	g−43G	18.5	11.6	3.3	−	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5/1.0	オイスター (染付) 鉛色・濃藍	5 Y7.5/1.0 (染付) 3 PB5.0/1.0・3 PB2.0/5.0		
313	1965	磁器・染付	中皿	肥前	1680～1710	ⅢⅣ	X−2	f−42G	19.8	12.8	3.1	−	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5/1.0	オイスター (染付) スティールグレイ	5 Y7.5/1.0 (染付) 3 PB3.0/1.0		
314	1966	磁器・染付	中鉢	肥前系	18C 前	Ⅳ	X−2	g−43G	15.7	−	−	−	ナデ	ナデ	−	−	アイボリーホワイト	5 Y9.0/1.0	フロスティグレイ (染付) 浅はなだ・濃藍	3 G7.5/1.0 (染付) 3 PB5.0/5.5・3 PB2.0/5.0		
314	1967	磁器・染付	鉢	肥前系	幕末頃	Ⅴ	X−2	g−42, 43G	13.1	4.5	6.1	−	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5 Y7.5/1.0	フロスティグレイ (染付) 浅はなだ・鉄紺	3 G7.5/1.0 (染付) 3 PB5.0/5.5・5 B2.5/4.5		
314	1968	磁器・染付	猪口	肥前系	18C 中	Ⅳ	X−2	f−42G	7.4	4.8	6.1	−	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	アイボリーホワイト	5 Y9.0/1.0	オイスター (染付) ねずみ色・墨色	5 Y7.5/1.0 (染付) N5.5・N1.5		

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量（cm）				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土（notation）	釉薬・染付	釉薬・染付（notation）		
314	1969	磁器・染付	火入	肥前系	18C後	V	X−2	f−43G	(9.8)	−	−	−	ナデ	ナデ	−	−	アイボリーホワイト	5Y9.0／1.0	フロスティグレイ（染付）スマルト・紺色	3G7.5／1.0（染付）6PB3.5／5.5・6PB2.0／5.0		
314	1970	磁器・染付	鉢蓋	肥前系	18C後〜19C前	V	X−2	f−42G	(8.6)	−	2.8	(9.6)	ナデ	ナデ	−	−	アイボリーホワイト	5Y9.0／1.0	フロスティグレイ（染付）わすれなぐさ色・鉄紺	3G7.5／1.0（染付）3PB6.5／5.5・5B2.5／4.5		
314	1971	磁器・赤絵	仏飯器	肥前系	18C後〜19C中	V	X−2		(5.6)	3.7	5.7	−	ナデ	ナデヘラケズリ	ナデ	削り出し高台	スノウホワイト	N9.5	フロスティグレイ（染付）スカーレット	3G7.5／1.0（染付）7R5.0／14.0		
314	1972	磁器・白磁	仏飯器	肥前系	18C後〜19C中	V	X−2	g−43G	(7.8)	3.9	5.0	−	ナデ	ナデヘラケズリ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	フロスティグレイ	（釉）3G7.5／1.0		
315	1973	磁器・染付	瓶	肥前系	17C後	Ⅲ	X−2	6SX502	−	7.0	−	−	ナデ	ナデ	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	オイスター（染付）スティールグレイ	5Y7.5／1.0（染付）3PB3.0／1.0		
315	1974	磁器・染付	徳利	肥前系	17C後	ⅢⅣ	X−2	6SX502	(5.6)	(6.2)	24.9	11.5	ナデ，あて具	ナデ	ナデ，あて具	削り出し高台	シルバーグレイ	N7.5	シルバーグレイ（染付）藍色・スレートグリーン・黒緑	N7.5（染付）3PB3.5／5.5・3G4.0／2.0・3G2.0／1.5		
315	1975	磁器・染付	油壺	肥前系	18C前	Ⅳ	X−2	g−42G	2.2	−	−	−	あて具，ナデ	ナデ	−	−	灰褐・エクリュ	7.5YR6／2・8YR7.5／1.0	（釉）香色（染付）オリーブ黒・焦茶	（釉）4YR6.0／2.0（染付）5Y3／2・8YR2.5／1.5		
315	1976	磁器・染付	油壺	肥前系	17C後〜18C前	ⅢⅣ	X−2	g−43G	3.0	−	−	−	ナデ，あて具	ナデ	−	−	スノウホワイト	N9.5	ブルーウォッシュ（染付）浅はなだ・ボトルグリーン	3PB8.5／1.0（染付）3PB5.0／5.5・3G3.0／4.5		
315	1977	磁器・染付	徳利	肥前系	18C後〜19C前	V	X−2	f−43，g−43G	3.7	8.1	30.7	19.0	ナデ，あて具	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	フロスティグレイ（染付）浅はなだ・藍色	3G7.5／1.0（染付）3PB5.0／5.5・3PB3.5／5.5		
315	1978	磁器・染付	瓶	肥前系	18C代	Ⅳ	X−2	6SX502	−	−	−	8.0	ナデ	ナデ	−	−	パールホワイト	N8.5	フロスティグレイ（染付）スマルト	3G7.5／1.0（染付）6PB3.5／5.5		
315	1979	磁器・染付	油壺	肥前系	18C前	Ⅳ	X−2	6SX502	3.1	5.0	9.3	10.5	ナデ，あて具	ナデ	ナデ	削り出し高台	パールホワイト	N8.5	リリーホワイト（染付）浅はなだ・濃藍	3G9.0／1.0（染付）3PB5.0／5.5・3PB2.0／5.0		
316	1980	磁器・染付	碗	景徳鎮	16C後	Ⅰ	X−2	b−43G	−	−	−	−	ナデ	ナデ	−	−	オイスター	5Y7.5／1.0	藍色（染付）浅はなだ	5B8.5／2.0（染付）3PB5.0／5.5		43
316	1981	磁器・染付	碗	景徳鎮	16C後	Ⅰ	X−2	6SX506	(5.2)	−	−	−	−	−	ナデ	削り出し高台	アイボリホワイト	5Y9.0／1.0	藍白（染付）コバルトブルー	5B8.5／2.0（染付）3PB3.5／10.0	小野分類碗E群般頭心型（銘；不明）	43
316	1982	磁器・染付	皿	景徳鎮	16C後	Ⅰ	X−2	6SX504	−	7.6	−	−	−	−	ナデ	削り出し高台	オイスター	5Y7.5／1.0	ライトグレイ（染付）コバルトブルー	N7.5（染付）3PB3.5／10.0	小野分類目Bまたは E群(銘;大明年造か?)底面見込み風景	43
316	1983	磁器・染付	瓶	中国？東亜？	16C末〜17C代？	−	Ⅶ	−	−	−	残存高8.0	−	施釉	施釉	−	−	灰白	2.5Y8／2	明緑灰・藍色	7.5GY7／1・3PB3.5／5.5	頸部のみ残存	43
316	1984	磁器・染付	大皿	福建漳洲窯系	16C末	Ⅰ	X−2	6SX504	−	−	−	−	−	−	−	−	オイスター	5Y7.5／1.0	フロスティグレイ（染付）藍色・ミッドナイトブルー	3G7.5／1.0（染付）3PB3.5／5.5・3PB1.5／1.5		43
317	1985	磁器・白磁	碗	中国	11C後〜12C	Ⅳ	X−1	h−38G	−	−	−	−	ナデ後施釉	ナデ後施釉	−	−	灰白	N8／0	（釉）灰白	（釉）2.5GY8／0	玉縁口縁	
317	1986	磁器・白磁	合子	中国	12C代	−	X−2	f−43G	−	(4.8)	−	−	ナデ後施釉（口縁釉かきとり）	ナデ後施釉（口縁釉かきとり）	ナデ後施釉	ナデ	灰白	10Y8／1	（釉）灰白	（釉）5GY8／1	合子の身	
317	1987	磁器・白磁	碗	中国	11C後〜12C後半	V類	Ⅶ	b−34G	−	5.8	−	−	櫛	施釉後削り	施釉	無釉	灰白	7.5Y7／1	灰白	10Y7／1	削り出し高台	

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量 (cm)				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土 (notation)	釉薬・染付	釉薬・染付 (notation)		
317	1988	磁器・白磁	皿、坏？	不明	不明	森田D群	Ⅶ	X−27G	−	3.5	−	−	−	ナデ、施釉	ナデ	ヘラケズリ、削り出し高台	アイボリホワイト	5Y9.0／1.0	鳥の子色	5Y9.0／2.0	高台裏に墨書？	
317	1989	磁器・青磁		同安窯系	12C中～後	Ⅰ	X−1	−	−	−	−	−	ナデ後細かい縦の櫛目文後施釉	ナデ後櫛目後施釉	−	−	灰白	10Y7／1	(釉) 灰オリーブ	(釉) 5Y5／2		
317	1990	磁器・青磁	碗	龍泉窯系	13中～14C初	Ⅲb	X−2	g−43G	−	−	−	−	ナデ	ナデ篦描き蓮弁文後施釉	−	−	灰白	7.5Y7／1	(釉) 灰オリーブ	(釉) 7.5Y6／2		
317	1991	磁器・青磁	碗	龍泉窯系	13C中～14C初	Ⅱb	X−2	g−43G	−	−	−	−	ナデ	ナデ・篦描蓮弁紋後施釉	−	−	灰白	N7／10	(釉) 明緑灰	(釉) 7.5GY7／1		
317	1992	磁器・青磁	碗？	国外	16Cぐらいか？	−	X−2	6SX504	−	4.0	−	−	−	−	印花後施釉	削り出し高台	灰白	10Y8／1	(釉) オリーブ黄・灰オリーブ	(釉) 7.5Y6／3・6／2	類分け困難	
317	1993	磁器・青磁	碗	龍泉窯系	13C前～後半	Ⅰor Ⅱ類	Ⅶ	c−30G	−	5.6	−	−	−	−	施釉	施釉	灰白	5Y7／1	オリーブ灰	6Y6／2	底部削り出し部に胎土目痕	
317	1994	磁器・青磁	碗	龍泉窯系	13C中～14C初	Ⅰ×Ⅱ	X−1	−	−	5.2	−	−	−	−	ナデ後施釉	削り出し高台	灰白	5Y7／1	(釉) 緑灰	(釉) 7.5GY6／1		
317	1995	磁器・青磁	碗	龍泉窯系	中世	Ⅰor Ⅳ類？	Ⅶ	X−28G	−	5.1	−	−	−	施釉	ナデ、削り	削り出し高台、ナデ	オリーブドラブ	5Y4.5／2.0	ブロンズ	5Y4.0／5.5		
317	1996	磁器・青磁	碗	龍泉窯系	12C前～	Ⅱb	X−2	−	−	5.4	−	−	−	−	ナデ後施釉	削り出し高台	灰白	7.5Y7／1	(釉) 灰オリーブ	(釉) 7.5Y5／2	鎬蓮弁	
317	1997	磁器・青磁	瓶	国内	中世	−	X−2	g−43G	−	5.4	−	−	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ後施釉畳付きの釉剥ぎとり	にぶい黄橙	10YR7／3	(釉) 明緑灰	(釉) 10GY7／1		
317	1998	磁器・青磁	碗	龍泉窯系	中世	Ⅱ類	Ⅶ	Z−26G	−	(5.2)	−	−	−	片刀蓮弁、施釉	ナデ、施釉、削り	削り出し高台、無釉	オイスター・テラコッタ	5Y7.5／1.0・7R5.0／6.5	ろくしょう	3G5.0／5.0		
317	1999	磁器・青磁	碗	龍泉窯系	中世	Ⅰor Ⅳ類？	Ⅶ	−	−	5.8	−	−	ナデ、削り	ナデ	ナデ	削り出し高台、ヘラケズリ	サロー	5Y7.5／2.0	ブロンズ	5Y4.0／5.5		
317	2000	磁器・青磁	碗？	龍泉窯系	中世	上田CⅡ類	Ⅶ	V−25G	−	−	−	−	ナデ	ナデ、片刀り	−	−	パールホワイト	N8.5	ろくしょう	3G5.0／5.0		
317	2001	磁器・青磁	碗	不明	中世	−	Ⅶ	Z−27G	−	−	−	−	ナデ、型	ナデ	−	−	パールホワイト	N8.5	ろくしょう	3G5.0／5.0		
317	2002	磁器・青磁	壺	中国か	16末～17初	Ⅰ	X−2	6SX504、507	−	−	(10.5)	20.4	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	−				43
		陶器	小皿	不明		−	X−2	g−43G	−	4.6	−	−	ナデ	ナデ	姥の目釉剥ぎ	削り出し高台	にぶい褐色	7.5YR6／4	(釉) 灰白・灰褐	(釉) 7.5YR8／1・7.5YR4／2	高台に「丁」の墨書	
		陶器	大鉢	肥前；唐津系	1690～1750	Ⅳ	X−2	g−43G	−	−	−	−	ナデ後口縁部格子目状刷毛目白化粧土で櫛歯状目で波線状に透明釉	ナデ後施釉	−	−	褐灰	10YR4／6	(釉) 黒褐・褐・灰褐・灰白・緑灰・黄褐・黄灰	(釉) 10YR2／3・4／6・4／2・5Y8／1・10GY6／1・2.5Y5／6・5／1		
		陶器	大鉢	肥前	17C～18C	−	X−2	g−43G	−	−	−	−	ナデ	ナデ	−	−	灰	7.5Y6／1	(釉・外面) 灰オリーブ (釉・内面) 灰	(釉・外面) 5Y5／2 (釉・内面) 5Y6／1		
		陶器・青唐津	小皿	肥前；唐津	1580～1594	Ⅰ−1	X−2	6SX504	−	4.2	−	−	ナデ後施釉	ナデ後施釉	ナデ後施釉	削り出し高台	褐灰・にぶい褐・灰	10YR4／1・5／1・7.5YR5／4	(灰釉) オリーブ灰	(釉) 10Y5／2・4／2	丸皿	

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量（cm）				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土（notation）	釉薬・染付	釉薬・染付（notation）		
		陶器・青唐津	小皿	肥前；唐津	1580～1594	I-1	X-2	6SX504	(10.2)	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	—	—	灰	10Y5／1	（灰釉）オリーブ灰	（釉）10Y5／2・4／2	丸皿	
		磁器・白磁	小坏	国外		—	X-2	6SX504	4.5	2.0	3.0	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	ナデ後施釉	削り出し高台	灰白	5Y8／1	（釉）明緑灰	（釉）10GY8／1		
		陶器	大鉢	不明	1690以降	—	X-2	6SX504	—	—	—	—	ナデ後（口縁）化粧土後掛に透明釉（胴部）鉄泥刷毛目	ナデ後（口縁）化粧土で刷毛目後掛に透明釉（胴部）鉄泥	—	—	黄褐	2.5Y5／1.4／1，7.5YR5／3	（白化粧土）灰白（釉）黄・オリーブ灰（無釉）灰褐	（白化粧土）5Y7／2（釉）5Y7／6・10Y4／2・6／2（無釉）7.5YR5／3		
		陶器・天目	中鉢	不明		—	X-2	6SX506	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	—	—	灰黄	2.5Y6／2	（釉）極暗赤褐・黒	（釉）10R2／2・7.5YR1.7／1		
		陶器	大鉢	不明		—	X-2	6SX504	(47.6)	—	—	—	ナデ後（口縁）化粧土で刷毛目後掛に透明釉（胴部）鉄泥	ナデ後鉄泥釉	—	—	褐灰・にぶい赤褐	5YR5／1・5YR5／3	（白化粧土）灰白（鉄泥）黒褐（透明釉）浅黄（緑透明釉）ろくしょう	（白化粧土）2.5GY8／1（鉄泥）7.5YR2／2（透明釉）5Y7／3（緑透明釉）3G5.0/5.0		
		陶器・天目	中鉢	不明		—	X-2	g-43G	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	—	—	灰黄	2.5Y6／2	（釉）極暗赤褐・黒	（釉）10R2／2・7.5YR1.7／1		
		陶器・天目	中鉢	不明		—	X-2	g-43G	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	—	—	灰白	2.5Y8／2	（釉）黒	（釉）7.5YR1.7／1		
		陶器	香炉？	不明		—	X-2	6SX504	—	—	6.0	—	ナデ	ナデ（工具？）	ナデ（刷毛？）	ナデ	暗赤褐・にぶい黄橙	2.5YR3／2・10R3／2・10YR6／4	—	—		
		陶器	壺	肥後；小代	18C～19C	—	X-2	f-43G	—	—	—	—	タタキ	ケズリ後施釉	—	—	暗オリーブ褐・暗赤褐	2.5Y3／3・2.5YR3／3	（釉）赤黒	（釉）2.5YR1.7／1		
		磁器・青磁	鉢	朝鮮半島か		—	X-2	f-43G	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	—	—	灰・にぶい黄橙	5Y6／1・10YR7／3	（釉）灰オリーブ	（釉）5Y6／2		
		磁器・青磁	碗	龍泉窯系	12C前～	IIb	X-2	—	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	—	—	灰白	7.5Y7／1	（釉）灰オリーブ	（釉）7.5Y5／2	鎬蓮弁	
		陶器	鉢	中国か？		—	X-2	—	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後口縁部のみ施釉	—	—	灰黄	2.5Y7／2	（釉）黒・黒褐	（釉）2.5Y2／1・7.5YR3／2		
		磁器・青磁象嵌	鉢？	朝鮮半島か熊本	15C前半か？	—	X-2	—	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後象嵌	—	—	灰	10Y5／1	（白土）灰白（胎土）黒（青磁釉）灰オリーブ	（白土）10Y8／1（胎土）N2／0（青磁釉）7.5Y5／2		
		磁器・青磁	碗？	龍泉窯系	15C後半	上田B-3-4	X-2	—	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉剣先蓮弁	—	—	にぶい黄	2.5Y6／4	（釉）オリーブ灰	（釉）10Y6／2		
		陶器	壺か瓶	不明	1650以降	—	X-2	—	—	—	—	—	—	ナデ後白化粧土で櫛刷毛目（横・波線）後施釉	—	—	灰赤	2.5YR5／2	（白土）灰白（釉）暗オリーブ褐	（白土）5Y7／1（釉）2.5Y3／3		
		磁器・青磁	碗か皿	龍泉窯系		—	X-2	—	—	8.2	—	—	—	—	回転ナデ後施釉	削り出し高台施釉	灰白・にぶい赤褐	7.5Y8／1・2.5Y5／4	（釉）オリーブ灰	（釉）10Y6／2		
		陶器	中碗？	萩？		—	X-2	6SX503？	(10.0)	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	—	—	灰黄褐	10YR6／2	（釉）明オリーブ灰	（釉）2.5GY7／1		
		磁器・青磁	皿	肥前；波佐見か？	17C中頃か？	II2III	X-2	6SX503？	—	4.6	—	—	ナデ	ナデ	ナデ後施釉（蛇の目）	ナデ後施釉削り出し高台（高台無釉）	灰白	10Y8／1	（釉）明オリーブ灰	（釉）5GY7／1		
		陶器	大鉢？	不明		—	X-1	6SK007	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	—	—	灰	10Y5／1	（釉）暗オリーブ褐	（釉）2.5Y3／3		

挿図番号	図番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土区	出土地点	法量（cm）				調整				色調				備考	写真図版
									口径	底径	器高	最大胴径	内面	外面	内底面	外底面	胎土	胎土（notation）	釉薬・染付	釉薬・染付（notation）		
		磁器・青磁	碗	龍泉窯系	13C 以降	—	X－2	h—40G	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	—	—	灰白	5 GY	（釉）暗オリーブ灰・オリーブ灰	（釉）5 GY 7／1・6／1	上限が元	
		磁器・青磁	碗	龍泉窯系	13C 中～14C 初	Ⅰb	X－1	—	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後蓮弁削りだし後施釉	—	—	灰白	2.5GY 8／1	（釉）明緑灰	（釉）10GY 7／1		
		磁器・青磁	碗	龍泉窯系	13C 中～14C 初	Ⅱb	X－1	—	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後蓮弁削りだし後施釉	—	—	灰白	10Y 7／1	（釉）オリーブ灰・緑灰	（釉）5 GY 6／1,7・5 GY 6／1		
		磁器・青磁	碗	龍泉窯系	14C 後以降	—	X－1	i—37G	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後陰刻後施釉	—	—	灰白	7.5Y 8／1	（釉）灰オリーブ	（釉）7.5Y 4／2	明	
		磁器・青磁	碗	同安窯系	12C 中～後	Ⅰ	X－1	—	—	—	—	—	ナデ後施釉	ナデ後施釉	—	—	灰白	7.5Y 7／1	（釉）灰オリーブ	（釉）7.5Y 6／2		
		磁器・染付	大碗？	肥前系	1655～1670	Ⅲ	X－2	6 SX506	—	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	サロー	5 Y7.5／2.0	フロスティグレイ（染付）浅はなだ	3 G7.5／1.0（染付）3 PB5.0／5.5		

表4　石器類観察表

挿図番号	番号	出土地点				法量（cm・g）							種類	石材	備考	写真図版No.	取り上げNo.
		地区	遺構	グリッド	層位	長さ	幅	厚さ	重量	刃部長	刃部幅	刃部角度					
37	200	Ⅷ	—	b—33	Ⅶ層	10.1～	6.25	1.00	82.76	2.60	4.50	25°	打製	緑色片岩	基部を欠損		11668
37	201	Ⅷ	—	f—34	—	5.9～	9.40	1.65	106.66	2.70	9.20	58°	打製	流紋岩質安山岩	基部を欠損		148
37	202	Ⅷ	—	e—34	Va層	5.5～	2.25	1.35	34.18	—	—	—	磨製	石英片岩	刃部を欠損		一括
37	203	Ⅷ	—	f—35	L03層	6.8～	2.55～	1.40	36.33	—	—	—	磨製	頁岩	刃部を欠損		一括
37	207	Ⅶ	—	a—30	Vc層	5.60	3.60	0.95	32.70	0.80	3.60	50°	磨製	粘板岩	小型石斧		—
105	574	Ⅷ	5 SK032	—	—	11.1～	5.9～	4.4～	316.40	—	—	—	磨製	珪質頁岩	刃部を欠損	58	11306
167	972	Ⅷ	5 SX051	—	A～B層	9.00	4.60	1.60	92.14	2.50	3.70	75°	磨製	蛇紋岩		58	7076
192	1071	Ⅷ	5 SB018	—	—	8.3～	5.45	1.00	57.35	—	—	—	打製	緑色片岩	基部		2882
275	1741	Ⅷ	5 SX023	—	1層	9.95～	8.10	1.05	122.41	2.30	6.50	40°	打製	緑色片岩	基部を欠損		4854

石庖丁

挿図番号	番号	実測No.	出土地点				法量（cm・g）							石材	備考	写真図版No.	取り上げNo.
			地区	遺構	グリッド	層位	長さ	幅	厚さ	重量	刃長	刃角度	孔径				
37	199	E001	Ⅷ	—	f—35	Va層	4.2～	4.6～	0.50	11.68	—	55°	—	粘板岩		58	150
37	206	E074	X—1	—	h—40	Ⅶ層	4.70	9.25	0.65	43.11	0.15	65°	1.2	黒雲母片岩		58	1283
159	909	マ061	Ⅷ	5 SX040	—	2層	3.45～	6.5～	0.60	16.00	—	75°	0.8	凝灰岩		58	

砥石

挿図番号	番号	出土地点				法量（cm・g）				石材	備考	写真図版 No.	取り上げ No.
		地区	遺構	グリッド	層位	長さ	幅	厚さ	重量				
36	193	Ⅶ	—	X—28	Ⅳ層一括	4.6	3.1	0.65	11.1	頁岩	砥面２，両側面は擦り切り痕		
36	195	Ⅶ	—	a—29	Ⅴb 層	7.5～	7	5.55	392	砂岩	砥面１		
51	289	Ⅶ	4 SI013	—	—	9.7	8.2	4.1	690.5	石英安山岩	砥面３		
101	552	Ⅶ	4 SK006	—	A—A'間ベルト一括	7.9	4.6	2.6	79	砂岩			
101	554	Ⅶ	4 SK006	—	Ⅴb 層	8.9～	5.4	4.7	269	石英粗面岩	砥面４		
107	585	Ⅷ	5 SK036	—	—	6.6～	3.65	3.15	79.01	石英粗面岩	全面使用		10129
110	608	Ⅶ	4 SK009	—	—	16.4	11.5	3.6	760.3	砂岩	砥面４，敲打部２		
159	911	Ⅷ	5 SX040	—	—	6.8	3.1	2.8	56.47	泥岩	砥面４面		8779
159	912	Ⅷ	5 SX040	—	—	6.45～	10.75	1.6	178.16	砂岩	１面欠損，砥面１面		11163
159	913	Ⅷ	5 SX040	—	４層	6.3	5.6	1.55	67.24	砂岩	摩耗，砥面１面		8919
183	1067	Ⅶ	—	Y—28	Ⅴ—Ⅵ層	7.9～	4.75	2.7	113.8	石英粗面岩			
195	1100	Ⅶ	4 SI012	—	１層	9.95	4.3	3.35	158.2	泥岩	砥面４		
276	1752	Ⅶ	—	Z—29	Ⅳb 層ベルト一括	7.05～	5.85	2.6	121.2	砂岩			
281	1770	Ⅷ	5 SK016	—	１層	11.6	6.9	2.6	268.45	石英粗面岩	煤付着，１面欠損，砥面３面		一括
281	1771	Ⅷ	5 SK016	—	１層	3.6	4.35	2.45	33.63	石英粗面岩	砥面３面		一括
335	2138	X－２	6 SX506	—	直上一括	7.25	1.4	5	64.38	頁岩	両側面は擦り切り痕，砥面２面		一括
335	2139	X－２	6 SX504	—	—	10.45	4.65	2.8	178.57	砂岩	砥面４面		2259
335	2140	X－２	6 SX504	—	１層	8	4.05	2.6	87.86	石英粗面岩	欠損有り，砥面２面		2615
—	—	Ⅷ	5 SK016	b—32	—	10.85	5.3	4.8	214.74	砂岩			一括
—	—	X－２	6 SD501	—	１層	10.7	4.3	4.25	212.5	石英粗面岩	砥面１面，両側面に調整痕		一括
—	—	X－１	6 SK031	—	一括	16.4	9.1	6.5	1418	石英安山岩			一括
—	—	X－１	—	i—38	Ⅲ層	6.9	4.2	1.9	63.22	滑石			915
—	—	X－２	—	f・g—43G	一括	5.2	3.2	2.3	46.6	不明			

石鏃

挿図番号	番号	種別	出土地点				法量（cm・g）							石材	備考	写真図版No.	取り上げNo.
			地区	遺構	グリッド	層位	長さ	幅	厚さ	重量	先端角度	抉り長	抉り幅				
35	171	打製	Ⅷ	—	a—31	Vd層	4.2	2.5	0.5	3.22	60°	0.5	1.6	安山岩	完形	58	538
35	172	打製	Ⅷ	—	e—34	L03層	13.2	2.4	5.5	2.41	52°	0.2	1.1	黒曜石	完形	58	546
35	173	打製	Ⅷ	—	b—31	Va層	2.55	1.7	0.5	1.04	54°	0.3	1.5	安山岩	基部一部欠損	58	541
35	174	打製	Ⅷ	—	e—34	Vc層	3	2.4	0.5	2.52	58°	—	—	黒曜石		58	545
35	175	打製	Ⅷ	—	f—33	Ⅳ層	2.7	1.8	0.55	1.97	53°	0.15	1.5	黒曜石	剥片鏃，完形	58	547
35	176	打製	Ⅷ	—	e—34	Vc層	2.4	1.5	0.5	0.86	55°	0.65	1.1	黒曜石	完形	58	544
35	177	打製	Ⅷ	—	a—31	—	2.7	2.2～	0.7	2.11	73°	0.55	2.2～	黒曜石	基部一部欠損	58	537
35	178	打製	Ⅷ	—	f—34	L03層	2.2	2.25	0.45	1.71	68°	—	—	黒曜石	基部一部欠損	58	285
35	179	打製	Ⅷ	—	b—32	Vc層	2	1.2	0.5	0.62	39°	0.15	0.8	黒曜石		58	542
35	180	打製	Ⅷ	—	b—30	Ⅳb～Va層	2.4	2.6	0.55	2.52	90°	0.2	1	黒曜石		58	一括
35	181	打製	Ⅷ	—	c—30	Va層	2.25	1.8～	0.45	1.37	—	—	—	黒曜石	先端部，基部一部欠損	58	543
35	182	打製	Ⅷ	—	Y—32	Ⅳ層	1.75～	1.75～	0.45	1	75°	0.1～	1.75～	黒曜石	基部先端欠損	58	一括
35	183	打製	Ⅷ	—	c—30	Ⅳ～Vb層	2.7	1.95	0.65	2.69	—	0.1	1.25	黒曜石	先端部欠損	58	164
35	184	打製	Ⅷ	—	f—34	L03層	1.4～	2.0～	0.45	1.32	—	0.1	1.2	黒曜石	基部のみ残存		280
35	185	打製	Ⅷ	—	f—34	VY層	1.75～	1.55～	0.45	0.77	76°	—	—	黒曜石	先端部のみ残存	58	一括
36	188	打製	Ⅶ	—	V—26	Vc下層	1.75	1.6	0.45	0.66	67°	0.2	—	黒曜石	基部一部欠損	58	4543
36	189	打製	Ⅶ	—	W—28	Vc層？	1.95	1.65	0.35	0.71	61°	0.3	—	サヌカイト	基部一部欠損	58	一括
36	190	打製	Ⅶ	—	Y—27	Ⅳ層	2	1.8	0.3	0.74	51°	0.2	1.7	黒曜石	完形	58	一括
36	191	打製	Ⅶ	—	X—29・28	V層(粘土)	3.25	1.85	0.45	1.7	38°	0.3	1.6	サヌカイト	完形	58	一括
37	205	磨製	X—1	—	j—40	Ⅸ層	7.65	1.7	0.3	4.9	60°	—	—	頁岩	磨製凸基有茎鏃，風化	58	1222
139	788	打製	Ⅷ	5 SX049	—	—	3.4	2.15	0.4	2.25	56°	0.9	1.8	黒曜石	剥片鏃	58	553
159	906	打製	Ⅷ	5 SX040	—	E層	2.65～	2.2～	0.8	3.5	73°	—	—	黒曜石	未製品	58	418
159	907	打製	Ⅷ	5 SX040	—	E層	2.45	2.4	0.5	1.91	75°	0.1	0.5	安山岩		58	521
159	908	打製	Ⅷ	5 SX040	—	—	1.9～	1.8～	0.4	0.91	55°	0.4	1.3	黒曜石	先端部と基部の一部欠損	58	551
250	1504	打製	X—1	6 SX050	—	2層	1.7	1.6	0.4	0.58	54°	0.2	1.4	黒曜石		58	—
275	1740	打製	Ⅷ	5 SX023	—	1層	3.2	1.9	0.5	1.62	50°	0.25	1.3～	安山岩	基部	58	550

石皿・台石

挿図番号	番号	出土地点				法量（cm・g）				石材	器種	備考	写真図版 No.	取り上げ No.
		地区	遺構	グリッド	層位	長さ	幅	厚さ	重量					
51	287	Ⅷ	4 SI013	—	—	29.75	34.2	5.65	6500.0	安山岩	台石			184
139	784	Ⅷ	5 SX049	—	D 層	16.4～	16.6～	10.2～	3697.5	安山岩	石皿			—
139	785	Ⅷ	5 SX049	—	—	28.05	18.1	12.6	11000.0	安山岩	石皿			—
139	787	Ⅷ	5 SX049	—	D 層	15.35	13.5	3.9	1329.4	石英安山岩	台石			10291
159	916	Ⅷ	5 SX040	—	—	11.0～	11.1～	2.5	506.61	砂岩	台石			11197
160	919	Ⅷ	5 SX040	—	—	12.95	11.2	5.15	862.9	角閃安山岩	石皿			7238
160	923	Ⅷ	5 SX040	—	—	13.65	13.95	4.9	1534.7	石英安山岩	石皿	皿部に磨面，敲打部		10324
183	1066	Ⅷ	—	b—31	—	15	9.45	2.8	746.6	砂岩	台石			3976

石錘

挿図番号	番号	出土地点				法量（cm・g）				石材	備考	写真図版 No.	取り上げ No.
		地区	遺構	グリッド	層位	長さ	幅	厚さ	重量				
36	194	Ⅶ	—	Z—28	Ⅴc 層	6.15	5.95	3.75	194.6	石英安山岩		58	—
37	204	Ⅷ	—	b—33	Ⅶ層	4.4	11.1	2.7	158.16	砂岩	摩耗		11673
101	553	Ⅶ	4 SK006	—	Ⅴb 層	5.8	7.5	2.2	144.5	角閃安山岩		58	2734
271	1710	Ⅷ	5 SX022	—	1 層	9.3	8.1	6	499.17	安山岩			8523
276	1751	Ⅶ	—	W—27	Ⅴc 層	8.5	6.3	5.7	367.3	砂岩	未完		1038

磨石

挿図番号	番号	出土地点				法量（cm・g）				石材	備考	写真図版 No.	取り上げ No.
		地区	遺構	グリッド	層位	長さ	幅	厚さ	重量				
31	118	X－1	6SX049トレンチNo.1	—	一括	2.95	2.8	2.6	28.15	石英安山岩			—
36	196	Ⅶ	—	Y—26	Ⅳ層一括	11.7	9.7	4.65	922.6	輝石安山岩	磨面２，敲打部２		—
36	197	Ⅶ	—	Y—29	Ⅴc 層	10.6	8	4.8	652	石英安山岩	磨面２，敲打部３		210
51	288	Ⅶ	4 SI013	—	—	9	7.25	5.1	440.4	角閃安山岩	全体に磨痕		5
63	360	Ⅷ	5 SI035	—	—	10.45	9.2	6.4	921.7	石英安山岩	磨面は３		11114
101	555	Ⅶ	4 SK006	—	—	8.05	6.4	4.7	336.3	石英安山岩	全体に磨痕，敲打部１		43
159	914	Ⅷ	5 SX040	—	—	7.55	7.4	6.3	535	石英安山岩	磨面３，敲打部２		10928
159	915	Ⅷ	5 SX040	—	—	8.1	6.8	3.9	259.3	角閃安山岩	磨面が２，敲打部あり		6889
160	917	Ⅷ	5 SX040	—	E 層	12.35～	7.9～	4.1～	363.02	石英安山岩	１／２程度欠損，磨面は２		8056
160	918	Ⅷ	5 SX040	—	—	9	8.95	2.45	304.5	石英安山岩	磨面は３		6715
275	1743	Ⅷ	5 SX023	—	２層	10.7	5.85	3.2	334.59	黒雲母片麻岩	全体に磨痕，敲打部２		

凹石

挿図番号	番号	出土地点				法量（cm・g）				凹部						石材	備考	写真図版 No.	取り上げ No.
		地区	遺構	グリッド	層位	長さ	幅	厚さ	重量	長さ・表	長さ・裏	幅・表	幅・裏	深さ・表	深さ・裏				
70	391	Ⅶ	4 SE005	—	４層	10.6	8	5.6	447.6	4	3.1	3.9～	3.5	1.6	0.4	石英安山岩	井戸		—
139	783	Ⅶ	4 SX049	Y—30	オ下層	6.8	6.6	5.1	329.9	3.2	3.2	3.4	2.9	0.6	0.4	石英安山岩	凹部２，敲打部５	58	—
139	786	Ⅷ	5 SX049	—	—	12	9.65	4.8	1210	3.3	—	2.7	—	0.2	—	石英安山岩			10246
159	910	Ⅷ	5 SX040	—	D 層	10.2	9.75	5.25	653.7	4.2	2.3	3.7	2.6	1	0.45	砂岩	使用面２面に凹部が２，敲打部１		7241
160	920	Ⅷ	5 SX040	—	—	10.2	9.3	4.9	616.3	3.8	3.2	2.9	3.7	1.2	0.1	石英安山岩			8811
275	1745	Ⅷ	5 SX023	—	１層	10.5～	12.15～	5.5～	625	3.2～	—	3.2～	—	0.6	—	石英安山岩	スリ凹部		4845

石核・スクレイパー

挿図番号	番号	出土地点				法量（cm・g）				石材	器種	写真図版 No.	取り上げ No.
		地区	遺構	グリッド	層位	長さ	幅	厚さ	重量				
31	115	X－1	6 SX049	—	一括	2.8	2.65	2.5	18.9	黒曜石	石核		54
31	116	X－1	6 SX049	—	3 層一括	1.7	4.05	1.7	9.12	黒曜石	石核		2
35	187	Ⅷ	—	b－31	Ⅳ層	3	2.35	1.1	6.49	黒曜石	スクレイパー	58	84
35	186	Ⅷ	—	a－30	Ⅳ層	3	1.45	0.5	1.36	黒曜石	石錐の未製品	58	一括
36	192	Ⅶ	—	V－26	Vc 層	2.55	2.65	0.9	5.14	黒曜石	スクレイパー	58	5285
37	198	Ⅷ	—	e－34	—	4.6	5.65	1.6	26.16	安山岩	スクレイパー		一括
139	782	Ⅷ	5 SX049	—	—	5.5	6.05	3.8	122.92	安山岩	石核		9886
271	1709	Ⅷ	5 SX022	—	埋土	3.7	3.05	1.6	16.2	安山岩	石核		一括
—	—	Ⅷ	5 SX040	—	E 層	6.65～	6.5～	0.9～	48.49	不明	石核？		8178

石臼

挿図番号	番号	出土地点				法量（cm・g）				石材	備考	写真図版 No.	取り上げ No.
		地区	遺構	グリッド	層位	高さ	径	芯穴の径	重量				
335	2136	X－2	6 SX504	—	—	13.8	36.2	3.7	30.1kg	安山岩	下臼	59	3301
336	2141	X－2	—	h－40	Ⅳ層	9.0	32.4	3.5	11.1kg	安山岩	下臼	59	2432
336	2142	X－2	—	g－42	L01層	6.8	9.95	1.2	191.85	浮岩	ミニチュア	59	10
336	2143	X－2	—	g－42	L01層	3.5	9.1	1.6	96.66	浮岩	ミニチュア	59	9

敲石

挿図番号	番号	出土地点			法量（cm・g）				石材	備考	写真図版 No.	取り上げ No.
		地区	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	重量				
48	264	Ⅶ	4 SI011	—	13.9	6.2	3.1	430.2	石英安山岩	敲打部 4	58	8
160	921	Ⅷ	5 SX040	—	17	9.05	3.5	749.9	石英安山岩	敲打部 2，磨面有り		8787
160	922	Ⅷ	5 SX040	D 層	14.9	8.2	5	858.6	石英安山岩			7242
275	1742	Ⅷ	5 SX023	1 層	17.4	6.3	4.1	616.3	石英安山岩			4844
275	1744	Ⅷ	5 SX023	1 層	8.9～	7.65	5.3	455.28	安山岩	先端と側面に敲打部		5768
—	—	Ⅷ	5 SI026	—	17.45	7.7	3	676.8	石英安山岩	多用途		11854

その他

挿図番号	番号	出土地点				法量（cm・g）					石材	備考	写真図版 No.	取り上げ No.
		地区	遺構	グリッド	層位	長さ	幅	厚さ	重量	孔径				
31	117	X－1	6 SX049	—	—	3.9	1.7	0.8	2.5	—	黒曜石	剥片		6
37	208	X－1	—	j—40	Ⅴ層	3.1	1.6	0.5	1.66	—	黒曜石	細石刃		38
262	1675	Ⅶ	—	XY—28ベルト	Ⅴ層粘土一括	2.9	3.9	0.65	16.7	—	結晶質石灰岩？	古代，石帯		—
271	1708	Ⅷ	5 SX022	—	1 層	6.55～	12.1	1.9～	207.13	—	滑石	石鍋		—
276	1746	Ⅶ	—	W—28	Ⅳ層一括	3.3～	4.85～	1.3	29.5	—	滑石	中世，石鍋片		—
276	1747	Ⅶ	—	W—28	Ⅴc 層ベルト	5.6	3.6	1.9	46.7	—	滑石	滑石製品再加工品		—
276	1748	Ⅷ	—	Z—32	Ⅳ層	3.2	3.05	1.4	21.23	1.15	滑石	有孔滑石製品	59	一括
276	1749	Ⅷ	—	Y—32	Ⅳ層	3.2	2.55	1.45	17.56	1.1	滑石	有孔滑石製品	59	一括
276	1750	Ⅷ	—	b—33	—	3.2～	2.1～	1.25	7.32	—	滑石	有孔滑石製品	59	一括
286	1778	X－1	6 SK004	—	1 層	14.5～	6.85	1.3	148.3	—	頁岩	石板？		一括
331	2122	X－2	6 SX501	—		—	4.2	0.8	—	—	—	石硯，下端欠損		
335	2137	X－2	6 SX504	—	一括	14.85	4.25	5.45	107.76	1.1	浮岩	岩偶	59	一括
336	2144	X－2	—	調査区内	一括	10.5	5	4.4	61.79	—	浮岩	半分が欠損，石型容器？	59	一括
336	2145	X－1	—	i—38	Ⅲ層	3.1	2.45	1.0	8.5	—	滑石	滑石製分銅？		914
—	2192	Ⅷ区	—	—	—	1.5	0.6	0.3	0.6	0.1	滑石		32	227

石片等一覧表

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値，cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
1	Ⅶ区	4 SI007			○		黒曜石	1.70	1.50	0.70	2.06		自然礫ローム中	
2	Ⅶ区	4 SE017	最下層		○	剥片	黒曜石	2.60	1.60	0.50	1.93			
3	Ⅶ区	4 SX038		6332		剥片	黒曜石	4.50	3.50	1.20	10.92			
4	Ⅶ区	4 SK039		20		剥片	黒曜石	2.70	2.00	0.50	2.21			
5	Ⅶ区	4 SK039		20		剥片	黒曜石	1.70	1.40	0.60	1.17			
6	Ⅶ区	4 SK039			○	剥片	黒曜石	2.30	2.00	0.80	3.07			
7	Ⅶ区	4 SX040				ローム中自然礫	黒曜石	1.60	1.30	1.10	2.58		自然礫ローム中	
8	Ⅶ区	V−26G	Vc下層	4536		使用痕有剥片？	黒曜石	3.20	3.60	1.00	7.99		加工か使用痕有り	
9	Ⅶ区	V−26G	Vc層	4264		剥片	黒曜石	3.00	2.70	0.90	4.79		Core，剥片はぎとり	
10	Ⅶ区	V−26G	Vc層	4265		剥片	黒曜石	2.10	1.60	0.60	1.83			
11	Ⅶ区	V−26G	Vc下層	4534		石鏃	黒曜石	1.75	1.60	0.45	0.66			188
12	Ⅶ区	V−26G	Vc下層	4535		剥片	黒曜石	1.80	1.60	1.20	3.00			
13	Ⅶ区	V−26G	Vc下層	4535		使用痕有剥片	黒曜石	2.80	2.70	1.00	4.09			
14	Ⅶ区	V−26G	Vc下層	4537		使用痕有剥片	黒曜石	2.00	2.50	0.60	1.98			
15	Ⅶ区	V−26G	Vc下層	4538		剥片	黒曜石	2.40	1.40	0.50	1.33			
16	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5156		剥片	黒曜石	3.60	2.00	0.90	4.17			
17	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5282		剥片	黒曜石	4.50	2.90	1.40	15.04			
18	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5283		剥片	黒曜石	3.10	1.60	0.40	1.18			
19	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5283		チップ	黒曜石	2.00	1.90	0.60	2.08			
20	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5283		チップ	黒曜石	1.50	1.00	0.20	0.18			
21	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5284		剥片	黒曜石	3.10	2.30	0.30	1.55			
22	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5284		剥片	黒曜石	1.80	1.30	0.40	0.53			
23	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5285		スクレイパー	黒曜石	2.55	2.65	0.90	5.14	オレ		192
24	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5286		剥片	黒曜石	2.60	3.10	0.90	5.64			
25	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5286		剥片	黒曜石	2.70	1.00	0.40	0.65			
26	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5287		剥片	黒曜石	2.90	1.50	0.90	3.82	オレ		
27	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5288		チップ	黒曜石	1.70	1.40	0.30	0.46			
28	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5289		剥片	黒曜石	3.80	2.70	0.80	4.13			
29	Ⅶ区	V−26G	Vc層	5289		剥片	黒曜石	2.20	0.90	0.40	0.42			
30	Ⅶ区	V−27G	Vc層	2212		剥片	黒曜石	3.10	2.00	0.90	5.16			
31	Ⅶ区	V−27G	Vc層	2190〜2214		チップ	黒曜石	0.90	0.80	0.10	0.04			
32	Ⅶ区	V−27G	Vc層	5166		剥片	黒曜石	2.20	1.40	0.40	0.93			
33	Ⅶ区	V−27G	Vc層	5167		チップ	黒曜石	1.40	1.40	0.30	0.43			
34	Ⅶ区	V−27G	Vc層	5390		剥片	黒曜石	2.80	1.60	0.70	1.84	オレ		
35	Ⅶ区	V−27G	Vc層	5391		使用痕有剥片	黒曜石	2.80	3.10	1.00	5.62			
36	Ⅶ区	V−27G	Vc層	5392		剥片	黒曜石	3.20	3.10	1.00	5.08			
37	Ⅶ区	V−27G	Vc層	6151		剥片	黒曜石	2.40	1.80	1.00	2.44	オレ		

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値，cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
38	Ⅶ区	V−27G	Vc層	6350		剥片	黒曜石	3.30	2.60	1.10	5.78			
39	Ⅶ区	V−27G	Vc層	6350〜6352		チップ	黒曜石	1.30	1.20	0.10	0.12			
40	Ⅶ区	V−27G	Vc層	6351		剥片	黒曜石	2.40	2.60	0.60	2.80	オレ		
41	Ⅶ区	V−27G	Vc層	6352		剥片	黒曜石	2.60	1.80	0.40	1.19			
42	Ⅶ区	V−27G	Vb層		○	剥片	黒曜石	2.60	2.00	0.60	1.85			
43	Ⅶ区	V−27G	Vb層		○	剥片	黒曜石	2.00	1.50	0.70	1.58	オレ		
44	Ⅶ区	V−27G	Vb層		○	剥片	黒曜石	2.10	1.50	0.40	0.99			
45	Ⅶ区	V−27G	Ⅳ層〜V層		○	剥片	黒曜石	2.20	1.40	0.50	1.42			
46	Ⅶ区	V−27G	Ⅳ層〜Vb層		○	剥片	黒曜石	3.20	1.10	0.60	1.68			
47	Ⅶ区	V−27G	Vc層		○	チップ	黒曜石	1.80	1.30	0.50	0.90			
48	Ⅶ区	V−27G	Vc下層		○	剥片	黒曜石	2.90	1.70	0.70	2.50			
49	Ⅶ区	V−27G	Vc下層		○	チップ	黒曜石	2.40	1.40	0.70	1.53			
50	Ⅶ区	V−27G	Vc下層		○	剥片	黒曜石	1.60	1.70	0.50	1.15			
51	Ⅶ区	V−27G	Vc下層		○	剥片	黒曜石	2.10	1.70	0.40	1.08			
52	Ⅶ区	V−27G	Vc下層		○	剥片	黒曜石	2.30	1.80	0.40	1.06			
53	Ⅶ区	V−27G	Vc下層		○	チップ	黒曜石	1.70	1.10	0.30	0.46			
54	Ⅶ区	V−27G	Vc下層		○	チップ	黒曜石	1.60	0.90	0.20	0.24			
55	Ⅶ区	V−27G	Vc下層		○	チップ	黒曜石	2.10	2.00	0.60	1.26			
56	Ⅶ区	V−27G	Vc下層		○	剥片	黒曜石	3.00	2.00	0.90	5.27			
57	Ⅶ区	V−27G	Vc下層		○	剥片	黒曜石	2.60	1.60	0.80	2.61			
58	Ⅶ区	V−27G	Vc下層		○	チップ	黒曜石	2.20	1.40	0.80	1.80			
59	Ⅶ区	V−27G			○	剥片	黒曜石	2.00	1.80	0.40	0.93			
60	Ⅶ区	W−27G	Va層		○	使用痕有剥片？	黒曜石	2.70	1.70	0.50	1.24			
61	Ⅶ区	W−28G	Vc層？			石鏃	サヌカイト	1.95	1.65	0.35	0.71		ベルト上	189
62	Ⅶ区	W−28G	V層		○	ローム中自然礫	黒曜石	2.20	1.70	1.10	4.26	オレ	自然礫ローム中	
63	Ⅶ区	X−27G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.20	2.10	0.60	1.35			
64	Ⅶ区	X−27G	Va層		○	ローム中自然礫	黒曜石	2.60	1.80	1.70	8.43		自然礫ローム中	
65	Ⅶ区	X−28G	Vc層	3823		剥片	黒曜石	4.10	2.30	1.20	6.87			
66	Ⅶ区	X−28G	Vc層	6286		剥片	黒曜石	1.60	2.10	0.50	1.18			
67	Ⅶ区	X−28G	Vc層		○	剥片	黒曜石	2.50	2.40	1.00	5.28			
68	Ⅶ区	X−28G	5層		○	ローム中自然礫	黒曜石	1.90	1.50	0.90	3.47		自然礫ローム中	
69	Ⅶ区	X−29G	Vc層		○	チップ	黒曜石	1.30	1.10	0.30	0.26			
70	Ⅶ区	X−29･X−28ベルト	V層（粘土）		○	石鏃	サヌカイト	3.25	1.85	0.45	1.70			191
71	Ⅶ区	Y−27G	Ⅳ層		○	石鏃	黒曜石	2.00	1.80	0.30	0.74			190
72	Ⅶ区	Y−27G	Va層		○	チップ	黒曜石	1.70	1.20	0.50	1.04			
73	Ⅶ区	Y−27G	試掘トレンチ		○	原石？	黒曜石	3.70	1.90	1.20	9.52			
74	Ⅶ区	Y−28G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.30	1.40	0.50	0.92			
75	Ⅶ区	Y−29G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.20	1.40	0.50	1.45			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値、cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
76	Ⅶ区	Y−29G	Ⅳ層		○	自然礫？	黒曜石	2.70	1.20	0.90	2.31		部分的に剥離有，人為的か不明	
77	Ⅶ区	Z−27G	Ⅳ層～Vb 層		○	使用痕有剥片？	黒曜石	2.20	1.50	0.90	2.42			
78	Ⅶ区	Z−27G	Vab 層		○	ローム中自然礫	黒曜石	2.50	1.80	1.30	5.52		自然礫ローム中	
79	Ⅶ区	Z−28G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.10	1.90	0.80	3.41			
80	Ⅶ区	Z−28G	Va 層		○	ローム中自然礫	黒曜石	3.20	2.00	2.60	9.06		自然礫ローム中	
81	Ⅶ区	Z−28G	Va 層		○	ローム中自然礫	黒曜石	2.10	1.50	1.20	3.47		自然礫ローム中	
82	Ⅶ区	Z−29G	Va 層		○	剥片	黒曜石	4.30	2.30	1.00	8.84		加工痕	
83	Ⅶ区	Z−29G	Vc 層		○	ローム中自然礫	黒曜石	2.00	1.50	1.00	3.70		自然礫ローム中	
84	Ⅶ区	Z−29G	Vc 層		○	使用痕有剥片？	黒曜石	3.10	2.20	0.90	4.90		ガジリ？	
85	Ⅶ区	a−28G	Ⅳ層		○	ローム中自然礫	黒曜石	1.80	1.40	1.00	2.79		自然礫ローム中	
86	Ⅶ区	a−28G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.50	2.30	0.60	3.61		加工有り	
87	Ⅶ区	a−29G	Ⅳ層		○	剥片？自然礫	黒曜石	2.90	1.80	1.10	5.16			
88	Ⅶ区	ソクミゾ				剥片	黒曜石	3.10	2.20	0.50	1.94			
89	Ⅶ区	ソクミゾ				剥片	黒曜石	3.30	1.40	0.40	1.05			
90	Ⅶ区	ソクミゾ				剥片	黒曜石	2.20	1.30	0.60	1.40			
91	Ⅶ区	ソクミゾ				剥片	黒曜石	2.90	1.50	0.50	0.97			
92	Ⅶ区	ソクミゾ				剥片	黒曜石	2.40	1.60	0.60	1.81			
93	Ⅶ区	ソクミゾ				剥片	黒曜石	3.50	1.70	0.60	2.57			
94	Ⅶ区	ソクミゾ				使用痕有剥片	黒曜石	2.10	1.80	0.40	0.97			
95	Ⅶ区	ソクミゾ				剥片	黒曜石	2.50	1.70	0.60	2.94			
96	Ⅶ区	ソクミゾ				使用痕有剥片	黒曜石	1.70	1.30	0.50	1.14			
97	Ⅶ区	ソクミゾ				使用痕有剥片	黒曜石	3.00	2.10	0.70	3.52			
98	Ⅶ区	ソクミゾ				使用痕有剥片	黒曜石	2.10	1.80	0.60	2.08			
99	Ⅷ区	5 SD002	①層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.30	1.50	0.70	2.73			
100	Ⅷ区	5 SK005				原石	黒曜石	2.50	1.80	0.70	3.30			
101	Ⅷ区	5 SD009				石核	黒曜石	2.70	1.70	1.20	4.78			
102	Ⅷ区	5 SX012・013				剥片	黒曜石	2.70	2.10	0.70	2.09			
103	Ⅷ区	5 SD015(溝)	埋土中(北東部)			石核	黒曜石	1.70	2.10	1.20	3.77			
104	Ⅷ区	5 SK016	①層			剥片	黒曜石	2.60	1.70	0.70	2.26			
105	Ⅷ区	5 SB018−P 5				剥片	黒曜石	1.90	1.70	0.60	1.57		半裁トレンチ一括	
106	Ⅷ区	5 SB018−P 5				剥片	黒曜石	2.50	2.20	0.60	2.36		半裁トレンチ一括	
107	Ⅷ区	5 SB018−P 9				使用痕有剥片	黒曜石	2.40	2.50	0.80	3.01		半裁トレンチ一括	
108	Ⅷ区	5 SD021				使用痕有剥片	黒曜石	1.60	1.00	0.50	0.59			
109	Ⅷ区	5 SX022	①層		○	石核	黒曜石	1.70	1.60	1.80	3.22			
110	Ⅷ区	5 SX022	ベルト		○	自然礫	黒曜石	1.60	1.40	1.00	2.13			
111	Ⅷ区	5 SX022	ベルト		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.70	1.80	0.70	2.97			
112	Ⅷ区	5 SX022	ベルト		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.00	1.40	0.50	1.13			
113	Ⅷ区	5 SX023	①層		○	チップ	黒曜石	1.50	1.20	0.30	0.66			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値，cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
114	Ⅷ区	5 SX023	①層		○	チップ	黒曜石	2.00	1.40	0.50	0.93			
115	Ⅷ区	5 SX023	①層		○	チップ	黒曜石	2.00	1.40	0.30	0.67			
116	Ⅷ区	5 SX023	①層		○	剥片	黒曜石	3.30	2.00	0.80	3.62			
117	Ⅷ区	5 SX023	①層		○	剥片	黒曜石	2.70	2.00	0.60	2.45			
118	Ⅷ区	5 SX023	①層		○	残核	黒曜石	3.40	1.60	1.30	5.13			
119	Ⅷ区	5 SX023	①層		○	残核	黒曜石	2.40	2.00	1.50	5.95			
120	Ⅷ区	5 SX023	①層		○	剥片	サヌカイト	3.30	2.30	0.60	5.17		加工有	
121	Ⅷ区	5 SX023	①層		○	自然礫	黒曜石	2.50	2.30	1.50	8.98			
122	Ⅷ区	5 SX023	①層		○	剥片	黒曜石	2.00	2.30	0.50	1.88			
123	Ⅷ区	5 SX023	①層		○	剥片	黒曜石	1.90	1.10	0.20	0.36			
124	Ⅷ区	5 SX023	①層		○	剥片	黒曜石	1.90	1.20	0.40	0.82			
125	Ⅷ区	5 SX023	①層	5560		剥片	黒曜石	5.00	3.60	1.30	19.09		加工有	
126	Ⅷ区	5 SX023	②層	5599		剥片 or 石核	黒曜石	2.90	2.00	1.10	5.23		加工有	
127	Ⅷ区	5 SX023				残核？	針尾系 ob	3.00	2.60	0.90	6.65		加工有	
128	Ⅷ区	5 SX023				使用痕有剥片	黒曜石	2.40	3.30	0.60	2.47			
129	Ⅷ区	5 SX023				石核	黒曜石	2.10	2.50	1.50	8.12			
130	Ⅷ区	5 SX023				剥片	黒曜石	2.50	1.90	0.60	2.23			
131	Ⅷ区	5 SX023				剥片	黒曜石	3.20	2.10	0.60	3.11			
132	Ⅷ区	5 SX023				剥片	黒曜石	2.40	2.10	0.80	2.04			
133	Ⅷ区	5 SX023	最下層		○	剥片	黒曜石	3.40	2.20	0.80	3.61			
134	Ⅷ区	5 SX023	最下層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.60	1.90	0.50	1.38			
135	Ⅷ区	5 SX023	最下層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.90	2.60	1.20	8.68			
136	Ⅷ区	5 SX023	トレンチ		○	石核	黒曜石	4.80	2.80	2.10	29.80			
137	Ⅷ区	5 SX023	①層	15	○	石鏃	安山岩	3.20	1.90	0.50	1.62			1740
138	Ⅷ区	5 SK024	③層		○	剥片	黒曜石	2.10	1.60	0.80	2.23			
139	Ⅷ区	5 SI026			○	剥片	黒曜石	2.80	2.50	0.70	3.39			
140	Ⅷ区	5 SI026			○	剥片	針尾系 ob	2.00	2.50	0.50	2.21			
141	Ⅷ区	5 SI026	上層		○	チップ	黒曜石	1.90	0.80	0.60	0.89			
142	Ⅷ区	5 SI027			○	剥片	黒曜石	4.10	2.00	0.70	4.21			
143	Ⅷ区	5 SI027			○	使用痕有剥片	黒曜石	2.40	2.00	0.50	1.85			
144	Ⅷ区	5 SI027			○	使用痕有剥片	黒曜石	2.60	2.30	0.50	2.32			
145	Ⅷ区	5 SI029		7711		剥片	黒曜石	1.70	1.50	0.50	1.18			
146	Ⅷ区	5 SI029				使用痕有剥片	黒曜石	2.50	1.20	0.30	0.93			
147	Ⅷ区	5 SI029				使用痕有剥片	黒曜石	1.80	1.80	0.50	1.46			
148	Ⅷ区	5 SI031				チップ	黒曜石	1.60	0.90	0.20	0.27			
149	Ⅷ区	5 SI031				剥片	黒曜石	2.70	1.50	0.70	2.48			
150	Ⅷ区	5 SI031				剥片	黒曜石	4.00	2.40	0.80	5.53			
151	Ⅷ区	5 SI031				剥片	黒曜石	2.10	1.40	0.40	1.00			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値，cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
152	Ⅷ区	5 SK032	サブトレンチ①		○	石核	黒曜石	2.30	1.80	1.70	7.66			
153	Ⅷ区	5 SK032			○	剥片	黒曜石	3.60	2.00	0.80	4.06			
154	Ⅷ区	5 SK032			○	剥片	黒曜石	2.30	1.90	0.40	0.97			
155	Ⅷ区	5 SK032		6686		剥片	黒曜石	2.60	1.60	0.40	1.08			
156	Ⅷ区	5 SI033			○	剥片	黒曜石	2.30	2.10	0.60	2.61			
157	Ⅷ区	5 SI033			○	チップ	黒曜石	1.90	1.20	0.30	0.43			
158	Ⅷ区	5 SI033			○	残核	黒曜石	3.00	2.40	1.40	8.42			
159	Ⅷ区	5 SI035			○	スクレイパー	黒曜石	2.60	2.20	0.90	5.01			
160	Ⅷ区	5 SK036			○	剥片	黒曜石	2.60	1.30	0.60	1.91			
161	Ⅷ区	5 SK037		45		剥片	黒曜石	2.40	2.50	0.50	2.31			
162	Ⅷ区	5 SX040①区	A 層		○	チップ	黒曜石	1.20	1.20	0.20	0.35			
163	Ⅷ区	5 SX040①区	A 層		○	チップ	黒曜石	1.50	1.20	0.30	0.48			
164	Ⅷ区	5 SX040①区	C 層		○	剥片	黒曜石	3.20	2.20	0.50	2.45			
165	Ⅷ区	5 SX040①区	①～③層		○	剥片	黒曜石	2.80	1.20	0.50	1.22			
166	Ⅷ区	5 SX040②区	①層		○	石核	黒曜石	3.20	1.80	1.70	8.19			
167	Ⅷ区	5 SX040②③区間	ベルト付近		○	石核	黒曜石	3.10	2.40	1.90	11.88			
168	Ⅷ区	5 SX040③区	A～B 層		○	チップ	黒曜石	1.40	1.40	0.30	0.40			
169	Ⅷ区	5 SX040③区	E 層		○	剥片	黒曜石	2.50	1.50	0.30	0.85			
170	Ⅷ区	5 SX040③区	E 層		○	剥片	黒曜石	2.50	1.20	0.40	0.67			
171	Ⅷ区	5 SX040③区	E 層		○	剥片	黒曜石	2.60	2.20	0.80	3.16			
172	Ⅷ区	5 SX040③区	E 層		○	剥片	黒曜石	2.20	1.60	0.80	2.02			
173	Ⅷ区	5 SX040③区	E 層		○	石核	黒曜石	3.30	3.20	1.80	16.17			
174	Ⅷ区	5 SX040③区	E・F 層		○	剥片	黒曜石	2.70	2.90	0.60	2.96			
175	Ⅷ区	5 SX040③区	F 層		○	剥片	黒曜石	1.90	1.80	0.40	0.92			
176	Ⅷ区	5 SX040③区	F 層		○	剥片	黒曜石	2.90	1.80	0.90	3.72			
177	Ⅷ区	5 SX040③区	E 層		○	石鏃	安山岩	2.45	2.40	0.50	1.91			907
178	Ⅷ区	5 SX040③区	E・F 層		○	剥片	安山岩	3.30	2.90	0.70	5.68		磨石器	
179	Ⅷ区	5 SX040③④区	DE 層		○	剥片	黒曜石	2.50	1.10	0.50	0.98		③④区ベルト	
180	Ⅷ区	5 SX040③④区	DE 層		○	剥片	黒曜石	2.10	1.90	0.70	2.23		③④区ベルト	
181	Ⅷ区	5 SX040③④区	DE 層		○	剥片	黒曜石	2.90	2.20	0.90	5.10		③④区ベルト	
182	Ⅷ区	5 SX040③④区	DE 層		○	残核	黒曜石	3.00	3.40	1.00	10.33		③④区ベルト	
183	Ⅷ区	5 SX040③④区	DE 層		○	残核	黒曜石	3.10	2.10	1.50	8.11		③④区ベルト	
184	Ⅷ区	5 SX040④区	A 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.80	2.20	0.40	1.46			
185	Ⅷ区	5 SX040④区	A 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.30	1.30	0.40	0.99			
186	Ⅷ区	5 SX040④区	A 層		○	石核	黒曜石	2.60	2.20	1.50	7.71			
187	Ⅷ区	5 SX040④区	A～E 層		○	剥片	黒曜石	2.50	1.20	0.60	1.23			
188	Ⅷ区	5 SX040④区	C 層		○	石核	黒曜石	3.00	2.40	1.20	7.75			
189	Ⅷ区	5 SX040④区	C 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.70	2.70	1.00	7.05			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値、cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
190	Ⅷ区	5 SX040④区	C 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.60	2.30	0.60	3.52			
191	Ⅷ区	5 SX040④区	C 層		○	チップ	黒曜石	1.30	1.60	0.40	0.51			
192	Ⅷ区	5 SX040④区	C 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.70	2.50	1.10	5.97			
193	Ⅷ区	5 SX040④区	D 層		○	残核	黒曜石	2.50	2.30	1.40	7.53			
194	Ⅷ区	5 SX040④区	D 層		○	チップ	黒曜石	1.20	1.70	1.00	1.00			
195	Ⅷ区	5 SX040④区	D 層		○	剥片	黒曜石	2.60	2.10	0.90	3.96			
196	Ⅷ区	5 SX040④区	D 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.00	1.90	0.50	1.58			
197	Ⅷ区	5 SX040④区	C 層		○	剥片	黒曜石	2.80	1.50	0.30	1.31			
198	Ⅷ区	5 SX040④区	C 層		○	スクレイパー	安山岩	5.80	3.70	1.30	21.70			
199	Ⅷ区	5 SX040⑤区	C 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	4.60	2.40	1.10	9.51			
200	Ⅷ区	5 SX040⑤区	D・E 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.40	2.00	0.40	1.54			
201	Ⅷ区	5 SX040⑤区	D・E 層		○	剥片	黒曜石	3.40	1.70	0.70	2.38			
202	Ⅷ区	5 SX040⑤区	D・E 層		○	石核	黒曜石	2.70	2.10	1.30	5.08			
203	Ⅷ区	5 SX040⑤区	D・E 層		○	剥片	黒曜石	2.60	2.00	0.40	1.58			
204	Ⅷ区	5 SX040⑤区	D・E 層		○	剥片	黒曜石	1.80	1.60	0.40	0.76			
205	Ⅷ区	5 SX040⑤区	D・E 層		○	剥片	黒曜石	2.10	1.10	0.50	0.58			
206	Ⅷ区	5 SX040⑤区	D・E 層		○	剥片	黒曜石	1.50	1.60	0.30	0.54			
207	Ⅷ区	5 SX040⑤区	E 層		○	剥片	黒曜石	3.50	2.00	0.60	2.57			
208	Ⅷ区	5 SX040⑤区	E 層		○	クサビ状	黒曜石	2.30	2.20	0.70	2.92			
209	Ⅷ区	5 SX040⑤区	E 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.30	2.70	0.90	4.88			
210	Ⅷ区	5 SX040⑤区	E 層		○	石鏃	黒曜石	2.65	2.20	0.80	3.50		未製品	906
211	Ⅷ区	5 SX040⑤区	E 層		○	使用痕有剥片？	黒曜石	2.00	1.60	0.50	0.94			
212	Ⅷ区	5 SX040⑥区	D・E 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.00	2.90	0.70	4.37			
213	Ⅷ区	5 SX040⑥区	D・E 層	10685		チップ	黒曜石	1.30	1.10	0.40	0.56			
214	Ⅷ区	5 SX040⑥区		10681		チップ	安山岩	1.90	1.20	0.30	0.57			
215	Ⅷ区	5 SX040⑥区		10769		スクレイパー	安山岩	4.60	3.20	1.80	24.83			
216	Ⅷ区	5 SX040	中・下層		○	剥片	黒曜石	2.40	2.10	0.50	1.82			
217	Ⅷ区	5 SX040	中・下層		○	剥片	黒曜石	2.40	1.80	0.50	1.89			
218	Ⅷ区	5 SX040	A 層		○	剥片	黒曜石	2.50	1.90	0.80	2.84		加工有	
219	Ⅷ区	5 SX040	A 層		○	剥片	黒曜石	3.00	1.50	0.70	2.15			
220	Ⅷ区	5 SX040	A 層		○	剥片	黒曜石	2.10	2.40	1.00	4.55			
221	Ⅷ区	5 SX040	A 層		○	石核	腰岳 ob	2.60	1.80	1.30	6.80			
222	Ⅷ区	5 SX040	A 層		○	石核	自然礫 ob	2.60	2.10	1.40	5.80			
223	Ⅷ区	5 SX040	A 層		○	剥片	黒曜石	1.70	2.20	0.40	1.29			
224	Ⅷ区	5 SX040	B 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.70	1.60	0.70	1.87			
225	Ⅷ区	5 SX040	E 層	8244		使用痕有剥片	黒曜石	1.40	1.40	0.40	0.85			
226	Ⅷ区	5 SX040	E 層		○	剥片	黒曜石	2.90	1.80	0.70	2.46			
227	Ⅷ区	5 SX040	①層		○	石核	黒曜石	2.30	1.60	1.20	4.12			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値，cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
228	Ⅷ区	5 SX040	①層	7239		剥片	黒曜石	3.80	2.80	1.10	7.50			
229	Ⅷ区	5 SX040	中・下層		○	チップ	安山岩	1.50	1.20	0.30	0.39			
230	Ⅷ区	5 SX040	E層・最下層		○	剥片	安山岩	4.00	2.50	0.80	6.72		磨石器	
231	Ⅷ区	5 SX040	④層	42	○	石鏃	黒曜石	1.90	1.80	0.40	0.91			908
232	Ⅷ区	5 SX048	①層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.50	1.20	0.40	0.81			
233	Ⅷ区	5 SX048	①層		○	剥片	黒曜石	1.50	2.50	0.40	1.31	オレ		
234	Ⅷ区	5 SD049	B層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.60	2.00	0.90	4.16			
235	Ⅷ区	5 SD049			○	自然礫	黒曜石	3.30	2.10	2.20	16.64		自然礫	
236	Ⅷ区	5 SD049	D層	11440		石核	黒曜石	5.10	3.90	3.50	60.12			
237	Ⅷ区	5 SD049	a・b層		○	剥片	黒曜石	2.90	1.70	0.70	3.46		水磨著しい	
238	Ⅷ区	5 SD049	D層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.50	2.00	0.70	3.83			
239	Ⅷ区	5 SD049				石鏃	黒曜石	3.40	2.15	0.40	2.25			788
240	Ⅷ区	5 SX051	A・B層		○	剥片	黒曜石	2.10	2.80	0.40	2.02			
241	Ⅷ区	5 SK053	①層		○	石核	黒曜石	2.00	1.50	1.40	3.75			
242	Ⅷ区	5 SK057	①層		○	石核	黒曜石	3.40	2.20	1.40	6.57			
243	Ⅷ区	5 SE059	③層		○	剥片	黒曜石	2.00	1.80	0.40	1.06	オレ		
244	Ⅷ区	5 SK065				剥片	安山岩	2.70	2.10	0.50	2.02			
245	Ⅷ区	Y−33G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	1.60	1.80	0.40	1.28	オレ		
246	Ⅷ区	Y−33G	Vc層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.80	3.10	1.20	8.28			
247	Ⅷ区	Y・Z・a−32G	Ⅳa〜b層		○	剥片	黒曜石	3.10	1.30	0.60	1.79	オレ		
248	Ⅷ区	Y・Z・a−32G	Ⅳa〜b層		○	剥片	黒曜石	2.10	2.10	0.80	3.60		加工有	
249	Ⅷ区	Z−31G	Ⅳ層		○	剥片？	黒曜石	2.60	1.50	0.80	2.20			
250	Ⅷ区	Z−31G	Ⅳ層		○	チップ	黒曜石	0.70	0.80	0.40	0.57			
251	Ⅷ区	Z−31G	Vc層		○	使用痕有剥片？	黒曜石	2.80	1.80	1.20	5.75			
252	Ⅷ区	Z−32G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	1.90	2.10	0.40	1.48			
253	Ⅷ区	Z−32G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.10	1.60	0.60	2.18			
254	Ⅷ区	Z−32G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	3.90	2.50	0.70	6.78			
255	Ⅷ区	Z−32G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.20	1.10	0.40	0.54			
256	Ⅷ区	Z−33・Y−34G	Ⅳ層		○	自然礫	黒曜石	2.50	2.00	1.80	9.00		自然礫	
257	Ⅷ区	Z−33G	Vc層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.20	1.80	0.60	1.97			
258	Ⅷ区	Z−34・33G	砂層中		○	石核 or クサビ？	黒曜石	3.20	2.70	1.40	10.44			
259	Ⅷ区	Z・a−33G・34G	L01層		○	剥片	黒曜石	1.70	2.10	0.60	2.17		加工有	
260	Ⅷ区	Z・a−33G・34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.40	1.70	0.50	1.54		加工有	
261	Ⅷ区	Z・a−33G・34G	L01層		○	剥片	黒曜石	4.40	2.20	1.00	5.61			
262	Ⅷ区	Z・a−33G・34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.20	1.40	0.40	0.72			
263	Ⅷ区	a−30G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.70	1.50	0.40	1.12		ノッチ	
264	Ⅷ区	a−30G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.50	2.30	0.70	3.44			
265	Ⅷ区	a−30G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.70	1.80	0.70	1.72			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値，cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
266	Ⅷ区	a−30G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.60	2.40	0.80	4.24			
267	Ⅷ区	a−30G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.10	2.70	0.90	8.52			
268	Ⅷ区	a−30G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.00	1.60	0.70	2.67			
269	Ⅷ区	a−30G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.30	2.20	0.60	2.82			
270	Ⅷ区	a−30G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	3.00	1.45	0.50	1.36		加工痕	186
271	Ⅷ区	a−30G	Ⅳb 層		○	剥片	黒曜石	2.80	1.60	0.70	2.46			
272	Ⅷ区	a−30G	Ⅳb 層		○	残核？	安山岩	3.90	3.70	1.40	21.11		加工有	
273	Ⅷ区	a−30G	Ⅴb 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.10	2.10	0.90	4.01			
274	Ⅷ区	a−30G	Ⅴb 層		○	剥片	黒曜石	2.80	2.20	0.60	2.90			
275	Ⅷ区	a−30G	Ⅴc 層		○	剥片	黒曜石	2.30	2.40	0.40	1.80		加工有	
276	Ⅷ区	a−30G	Ⅴc 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.30	2.10	0.50	3.35			
277	Ⅷ区	a−30G	Ⅴc 層		○	剥片	黒曜石	3.20	2.00	0.80	4.47			
278	Ⅷ区	a−30G	Ⅴc 層		○	剥片	黒曜石	2.80	2.20	0.50	2.02			
279	Ⅷ区	a−30G	Ⅴc 層		○	剥片	黒曜石	3.20	2.20	0.70	4.02			
280	Ⅷ区	a−31G	Ⅳ層		○	自然礫	黒曜石	1.90	1.20	1.00	2.04		自然礫	
281	Ⅷ区	a−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片？	黒曜石	1.90	2.00	0.50	1.67			
282	Ⅷ区	a−31G	Ⅴc 層		○	剥片	黒曜石	3.00	2.40	1.20	6.25			
283	Ⅷ区	a−31G	Ⅴc 層		○	石核	黒曜石	3.60	2.30	1.00	7.97			
284	Ⅷ区	a−31G	Ⅴc 層	90	○	石鏃	黒曜石	2.70	2.20	0.70	2.11		未製品	177
285	Ⅷ区	a−31G	Ⅴd 層		○	剥片	黒曜石	2.00	2.20	0.50	1.73			
286	Ⅷ区	a−31G	Ⅴd 層		○	石鏃	サヌカイト	4.20	2.50	0.50	3.22			171
287	Ⅷ区	a−31G	層位不明			石核	黒曜石	2.10	1.90	0.70	2.58			
288	Ⅷ区	a−32G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.50	1.30	0.70	1.35			
289	Ⅷ区	a−32G	Ⅳ層		○	石核	黒曜石	2.60	2.50	1.30	7.69			
290	Ⅷ区	a−32G	Ⅳ層		○	自然礫	黒曜石	2.00	1.90	1.10	4.17		自然礫	
291	Ⅷ区	a−32G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	1.80	1.60	0.70	2.09		加工有	
292	Ⅷ区	a−32G	Ⅳ層		○	石核	黒曜石	2.90	2.50	1.80	9.78			
293	Ⅷ区	a−32G	Ⅳ層		○	原石	黒曜石	3.30	1.70	0.70	4.07			
294	Ⅷ区	a−32G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.40	2.20	0.60	2.49			
295	Ⅷ区	a−32G	Pit64		○	剥片	黒曜石	2.10	1.30	0.70	1.65			
296	Ⅷ区	a−32G	Pit67		○	剥片	黒曜石	3.40	2.20	0.80	5.13			
297	Ⅷ区	a−32G	層位不明			剥片	黒曜石	2.10	1.80	0.50	1.32			
298	Ⅷ区	a−32G	層位不明			剥片	黒曜石	2.80	2.60	0.60	3.13			
299	Ⅷ区	a−32G	層位不明			剥片	安山岩	3.20	1.90	0.30	2.57		ソクミゾ	
300	Ⅷ区	a−33GG	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.50	1.90	0.80	3.68			
301	Ⅷ区	a−33G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.50	1.30	0.30	0.76			
302	Ⅷ区	a−33G	層位不明			石核	黒曜石	1.90	1.40	1.20	3.11		自然礫使用	
303	Ⅷ区	a−33G	Ⅴc 層		○	剥片	黒曜石	1.90	1.40	0.20	0.48			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値，cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
304	Ⅷ区	a−33G	カクラン			剥片	黒曜石	2.70	1.30	0.40	0.76			
305	Ⅷ区	a−32・33G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.20	2.10	0.80	4.52			
306	Ⅷ区	a−34G	Ⅳ層		○	不明	黒曜石	2.10	1.20	1.10	2.85			
307	Ⅷ区	a−34G	4 − 5 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.00	1.70	0.30	1.10			
308	Ⅷ区	a−34G	Vc 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.50	1.50	0.70	1.67			
309	Ⅷ区	a−34G	Vc 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.10	2.00	0.60	2.61			
310	Ⅷ区	a−34G	Vc 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.60	2.30	0.50	1.56			
311	Ⅷ区	a−34G	Vc 層		○	剥片	黒曜石	3.30	3.10	0.70	6.06			
312	Ⅷ区	a−34G	L01層			剥片	黒曜石	2.60	1.80	0.90	2.77			
313	Ⅷ区	a−34G	層位不明			使用痕有剥片？	黒曜石	2.30	1.70	0.70	1.45			
314	Ⅷ区	a・b−32G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.00	2.00	1.20	3.77		加工有	
315	Ⅷ区	a・b−32G, 33G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	1.50	2.30	0.40	0.71			
316	Ⅷ区	a・b−32G, 33G	Ⅳ層		○	剥片	安山岩	2.40	2.00	0.20	1.11			
317	Ⅷ区	a・b−32G, 33G	Ⅳ層		○	剥片	安山岩	3.10	3.00	1.10	5.26			
318	Ⅷ区	a・b−33G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.40	1.30	0.70	1.64			
319	Ⅷ区	a・b−33G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.30	2.20	0.70	3.28		加工有	
320	Ⅷ区	a・b−33G	Ⅳ～Vc 層		○	石核	安山岩	2.60	2.30	1.00	6.05			
321	Ⅷ区	a・b−33G	Vc 層		○	剥片	黒曜石	2.00	1.40	0.50	0.81			
322	Ⅷ区	a・b−33G	Vc 層		○	使用痕有剥片？	黒曜石	2.20	2.80	0.70	3.30			
323	Ⅷ区	a・b−33G	Vc 層		○	剥片	黒曜石	2.80	2.00	0.60	2.49			
324	Ⅷ区	b−30G	Ⅳb～Va 層			石鏃	黒曜石	2.40	2.60	0.55	2.52		未製品	180
325	Ⅷ区	b−30G	Va 層		○	チップ	黒曜石	2.30	1.20	0.80	2.32		破片	
326	Ⅷ区	b−30G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.30	1.20	0.70	1.74			
327	Ⅷ区	b−30G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.00	2.80	0.70	3.18			
328	Ⅷ区	b−30G	Va 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.20	1.00	0.30	0.56			
329	Ⅷ区	b−30G	Va 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.30	1.60	0.70	2.29			
330	Ⅷ区	b−30G	Va 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.90	1.80	0.70	3.50			
331	Ⅷ区	b−30G	Va 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.80	2.40	0.60	2.59			
332	Ⅷ区	b−30G	Va 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.20	2.30	0.90	6.09			
333	Ⅷ区	b−30G	Va 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.40	1.40	0.80	1.40			
334	Ⅷ区	b−30G	Va 層		○	礫	安山岩	4.10	2.70	0.70	10.30		加工有	
335	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	3.20	2.30	1.10	5.80			
336	Ⅷ区	b−31G	4b 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.10	2.10	0.40	1.98			
337	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.20	2.00	1.10	3.54			
338	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.40	1.30	0.80	1.83			
339	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.50	1.30	0.30	0.67			
340	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.80	1.80	0.70	4.04			
341	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.50	1.80	0.80	2.21			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値、cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
342	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.50	1.80	0.60	1.60			
343	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.40	1.60	0.60	2.29			
344	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.20	1.80	0.50	1.64			
345	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	1.60	1.40	0.50	0.88			
346	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	剥片	サヌカイト	2.20	1.70	0.70	1.76			
347	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.00	2.90	0.50	1.99			
348	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	チップ	黒曜石	1.60	1.40	0.30	0.75			
349	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.80	1.70	0.40	0.87			
350	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.10	1.50	0.50	1.28			
351	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.00	1.50	0.90	3.60			
352	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	石核	黒曜石	3.40	2.80	1.10	9.52			
353	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	石核	黒曜石	2.70	2.20	1.10	4.80			
354	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	石核	黒曜石	2.80	2.10	1.10	4.40			
355	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	原石	黒曜石	4.30	3.20	2.20	26.37			
356	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層	113	○	スクレイパー	黒曜石	3.00	2.35	1.10	6.49			187
357	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	原石	黒曜石	3.40	3.00	2.10	20.25			
358	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.10	1.90	0.50	1.97			
359	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.80	1.40	0.50	3.33			
360	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.00	2.30	0.60	1.43			
361	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.50	3.00	0.80	7.93			
362	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	1.70	1.60	0.40	0.97			
363	Ⅷ区	b−31G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.80	1.60	0.40	1.77		加工痕	
364	Ⅷ区	b−31G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.40	1.60	0.50	1.43			
365	Ⅷ区	b−31G	Va層		○	石核	黒曜石	2.20	1.70	1.40	4.65			
366	Ⅷ区	b−31G	Va層		○	石核	黒曜石	2.70	2.20	1.60	5.43			
367	Ⅷ区	b−31G	Va層		○	剥片	黒曜石	3.00	2.50	0.70	4.94			
368	Ⅷ区	b−31G	Va層		○	剥片	黒曜石	3.00	1.70	0.90	3.12			
369	Ⅷ区	b−31G	Va層		○	原石	黒曜石	4.20	4.00	2.90	47.90			
370	Ⅷ区	b−31G	Va層		○	チップ	安山岩	2.00	2.30	0.40	1.81			
371	Ⅷ区	b−31G	Va層		○	剥片	黒曜石	3.40	1.30	0.50	2.12			
372	Ⅷ区	b−31G	Va層	113	○	石鏃	安山岩	2.55	1.70	0.50	1.82			173
373	Ⅷ区	b−31G	Vc層		○	剥片	黒曜石	3.00	2.50	0.80	3.87			
374	Ⅷ区	b−31G	Vc層		○	剥片	黒曜石	2.60	1.90	0.50	1.68			
375	Ⅷ区	b−31G	Vc層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.60	2.40	0.60	2.57			
376	Ⅷ区	b−31G	Vc層		○	剥片	黒曜石	2.80	3.60	0.70	4.52			
377	Ⅷ区	b−31G	Vc層		○	剥片	黒曜石	2.40	1.40	1.00	2.78			
378	Ⅷ区	b−31G	Vc層		○	剥片	黒曜石	3.00	0.50	0.70	0.92			
379	Ⅷ区	b−31G	Vc層		○	剥片	黒曜石	3.20	2.10	0.50	1.77			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値，cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
380	Ⅷ区	b−31G	Vc 層		○	剥片	黒曜石	3.30	2.80	0.70	4.81			
381	Ⅷ区	b−31G	Vc 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.40	2.80	0.70	6.05			
382	Ⅷ区	b−31G	Vc 層		○	剥片	安山岩	3.10	1.90	0.50	2.49			
383	Ⅷ区	b･c−31G	Vd 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.50	1.30	0.40	0.74			
384	Ⅷ区	b−32G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.20	1.60	0.40	0.98			
385	Ⅷ区	b−32G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.90	2.00	0.30	1.16			
386	Ⅷ区	b−32G	Ⅳ層		○	剥片	安山岩	3.40	3.00	1.30	11.30			
387	Ⅷ区	b−32G	Va 層		○	剥片	黒曜石	2.80	2.20	0.50	2.47			
388	Ⅷ区	b−32G	Va 層		○	石核	黒曜石	2.20	2.00	1.00	4.26		ローム自然礫 ob を使用	
389	Ⅷ区	b−32G	Vc 層 L01層			剥片	黒曜石	2.00	1.60	0.50	0.96			
390	Ⅷ区	b−32G	Vc 層		○	剥片	黒曜石	2.30	2.10	0.40	1.89			
391	Ⅷ区	b−32G	Vc 層		○	剥片	黒曜石	2.00	1.30	0.30	0.77			
392	Ⅷ区	b−32G	Vc 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.90	1.40	0.50	0.93			
393	Ⅷ区	b−32G	Vc 層		○	剥片	安山岩	5.40	3.90	0.80	15.22			
394	Ⅷ区	b−32G	Vc 層		○	石鏃	黒曜石	2.00	1.20	0.50	0.62			179
395	Ⅷ区	b−32G･33G	Ⅳ層		○	原石	黒曜石	4.80	3.60	2.10	38.61			
396	Ⅷ区	b−32G･33G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.90	1.90	1.00	2.77			
397	Ⅷ区	b−32G･33G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.10	1.90	0.50	1.51			
398	Ⅷ区	b−32G･33G	Ⅳ層		○	剥片	安山岩	3.20	2.10	0.80	4.88			
399	Ⅷ区	b−32G･33G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	安山岩	3.40	3.40	0.80	7.41			
400	Ⅷ区	b−32G･33G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.20	1.30	0.30	0.56			
401	Ⅷ区	b−32G･33G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.40	1.80	0.80	2.78			
402	Ⅷ区	b−33G	1 層		○	剥片	安山岩	3.00	3.40	0.80	8.20			
403	Ⅷ区	b−33G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片？	黒曜石	3.10	2.10	0.50	2.52			
404	Ⅷ区	b−33G	Ⅳ層		○	チップ	黒曜石	1.70	1.00	0.60	0.72			
405	Ⅷ区	b−33G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.30	1.40	0.50	1.66			1760
406	Ⅷ区	b−33G	Ⅳ層		○	破片 or 石核	黒曜石	1.70	1.50	1.00	1.96			
407	Ⅷ区	b−33G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.10	1.30	0.30	0.86			
408	Ⅷ区	b−33G	Ⅳ層		○	チップ	黒曜石	1.20	1.10	0.40	0.38			
409	Ⅷ区	b−33G	Vc 層		○	剥片	黒曜石	2.40	1.70	0.50	1.30			
410	Ⅷ区	b−33G	Vc 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.80	2.30	0.70	3.54			
411	Ⅷ区	b−33G	Vc 層		○	剥片	黒曜石	1.80	1.20	0.40	0.85			
412	Ⅷ区	b−33G	Vc 層		○	剥片	黒曜石	2.30	1.20	0.70	1.08			
413	Ⅷ区	b−33G	Vc 層		○	剥片	安山岩	2.90	2.60	0.50	3.14	オレ		
414	Ⅷ区	b−33G	Vc 層		○	剥片	安山岩	3.50	1.10	0.50	2.20			
415	Ⅷ区	b−33G	L01層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.20	1.80	0.50	1.97			
416	Ⅷ区	b−33G	褐色層			使用痕有剥片	黒曜石	3.00	2.10	0.80	3.80			
417	Ⅷ区	b−33G	褐色層			使用痕有剥片	黒曜石	1.60	1.40	0.40	0.67			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値，cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
418	Ⅷ区	b—33G	褐色層			チップ	黒曜石	1.70	1.20	0.40	0.28			
419	Ⅷ区	b—33G・34G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.20	1.30	0.40	0.95			
420	Ⅷ区	b—33G・34G	Ⅳ層		○	剥片	安山岩	3.50	2.90	1.20	9.30		加工有	
421	Ⅷ区	b・c—33G	L01層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.90	1.30	0.60	1.29			
422	Ⅷ区	b—34G	Ⅴ層		○	剥片	安山岩	3.00	2.50	0.60	4.32			
423	Ⅷ区	b—34G	L01層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.40	2.00	0.70	2.81			
424	Ⅷ区	b—34G	L01層		○	チップ	黒曜石	1.70	1.50	0.40	0.88			
425	Ⅷ区	b—34G	L01層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.80	3.10	0.70	6.47			
426	Ⅷ区	b—34G	L01層		○	使用痕有剥片？	黒曜石	2.50	1.90	0.60	3.20			
427	Ⅷ区	b—34G	L01層		○	チップ	黒曜石	1.50	0.80	0.40	0.29			
428	Ⅷ区	b—34G	L02層		○	剥片	黒曜石	2.90	1.60	0.50	0.97			
429	Ⅷ区	b—34G	L02層		○	剥片	安山岩	2.60	2.00	0.40	1.40			
430	Ⅷ区	b—34G	L02層		○	使用痕有剥片	安山岩	2.90	1.60	0.80	5.57			
431	Ⅷ区	b—34G	L02層		○	剥片	安山岩	3.20	3.10	1.00	9.62			
432	Ⅷ区	b—34G				剥片	黒曜石	2.10	1.50	0.90	1.89			
433	Ⅷ区	b—34G				石核	黒曜石	2.70	1.40	1.40	5.23			
434	Ⅷ区	b・c—34G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	1.90	1.70	1.00	2.89			
435	Ⅷ区	b・c—32・33G	L01層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.30	0.80	0.30	0.25			
436	Ⅷ区	b・c—33・34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.30	1.40	0.50	1.10			
437	Ⅷ区	b・c—33・34G	L01層			使用痕有剥片	黒曜石	2.10	2.30	0.50	1.53			
438	Ⅷ区	b・c—33・34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.10	1.30	0.70	1.38			198
439	Ⅷ区	b・c—33・34G	L01層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.00	1.60	0.40	0.82			
440	Ⅷ区	b・c—33・34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.20	1.50	0.50	1.12		加工有	
441	Ⅷ区	b・c—33・34G	L01層		○	破片	黒曜石	1.20	1.20	0.70	0.69			
442	Ⅷ区	b・c—33・34G	L01層		○	剥片	黒曜石	3.00	2.10	0.60	0.62			
443	Ⅷ区	b・c—33・34G	L01層		○	石核？	黒曜石	2.40	2.00	1.10	5.03			
444	Ⅷ区	b・c—33・34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.70	3.20	0.60	4.57			
445	Ⅷ区	b・c—34G	L01層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.10	1.20	0.50	0.71			
446	Ⅷ区	b・c—34G	L—02		○	剥片	黒曜石	2.40	1.80	0.40	1.37			
447	Ⅷ区	b・c—34G	L—02		○	剥片	安山岩	4.10	2.80	0.80	7.20			
448	Ⅷ区	c—29～30G	Vc層		○	剥片	黒曜石	2.50	1.80	0.70	3.22	オレ	拡張区	
449	Ⅷ区	c—30G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.30	2.50	0.40	2.30			
450	Ⅷ区	c—30G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.00	1.50	0.50	1.29			
451	Ⅷ区	c—30G	Va～Vc層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.30	1.90	0.80	3.63			
452	Ⅷ区	c—30G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.80	1.60	0.50	1.59			
453	Ⅷ区	c—30G	Va層		○	使用痕有剥片？	黒曜石	2.40	2.00	0.90	3.47			
454	Ⅷ区	c—30G	Va層	126	○	石鏃	黒曜石	2.25	1.80	0.45	1.37			181
455	Ⅷ区	c—30G	Vb層		○	使用痕有剥片	安山岩	4.30	2.10	0.80	5.26			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値，cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
456	Ⅷ区	c−30G	Ⅴ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.70	2.00	0.50	2.66			
457	Ⅷ区	c−30G	Ⅳ～Ⅴb 層			使用痕有剥片	黒曜石	2.40	2.20	0.70	2.50			
458	Ⅷ区	c−30G	Ⅳ～Ⅴb 層	125		石鏃	黒曜石	2.70	1.95	0.65	2.69		未製品	183
459	Ⅷ区	c−30G	Ⅳ～Ⅴb 層		○	スクレイパー？	安山岩	3.80	2.50	0.80	6.73			
460	Ⅷ区	c−30G	Ⅴc 層		○	剥片	黒曜石	2.50	2.10	0.30	1.11			
461	Ⅷ区	c−30G	Ⅴc 層		○	石核？	黒曜石	2.80	1.50	1.10	3.87			
462	Ⅷ区	c−30G	Ⅴc 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.90	1.80	0.60	1.71			
463	Ⅷ区	c−30G	Ⅴc 層		○	チップ	黒曜石	3.20	2.20	0.70	3.61		破片	
464	Ⅷ区	c−31G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	3.00	2.60	0.60	2.00			
465	Ⅷ区	c−31G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	3.10	2.00	0.90	4.64			
466	Ⅷ区	c−31G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.90	1.20	0.50	1.02			
467	Ⅷ区	c−31G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	2.60	1.70	0.40	1.12		1 次加工有	
468	Ⅷ区	c−31G	Ⅴa 層		○	スクレイパー？	安山岩	2.80	2.50	1.00	6.33			
469	Ⅷ区	c−31G	Ⅴc 層		○	剥片	黒曜石	1.80	1.50	0.60	1.00			
470	Ⅷ区	c−31G	Ⅴc 層		○	剥片	黒曜石	2.10	1.20	0.50	0.89			
471	Ⅷ区	c−31G	Ⅴc 層		○	石核	黒曜石	2.40	2.20	1.30	5.64			
472	Ⅷ区	c−31G	Ⅴc 層		○	自然礫	黒曜石	2.60	2.20	1.20	5.97			
473	Ⅷ区	c−33G				剥片	黒曜石	2.90	1.40	0.80	3.55			
474	Ⅷ区	c−33G	Ⅴc 層		○	剥片	黒曜石	2.60	1.90	1.80	2.66			
475	Ⅷ区	c−33・34G	L01層		○	チップ	黒曜石	1.50	1.10	0.20	0.25			
476	Ⅷ区	c−33・34G	L01層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.40	2.80	0.90	6.10			
477	Ⅷ区	c−33・34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.30	1.50	0.60	1.39			
478	Ⅷ区	c−33・34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.40	1.70	0.50	1.44			
479	Ⅷ区	c−33・34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.00	1.70	0.60	1.49			
480	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.90	2.20	0.70	3.13			
481	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	チップ	黒曜石	1.60	1.40	0.50	0.83			
482	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.20	1.90	0.60	1.49			
483	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.40	1.70	0.40	1.00			
484	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.00	2.00	0.70	1.67			
485	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	チップ	黒曜石	1.70	1.20	0.50	0.46			
486	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.60	1.30	0.40	0.69			
487	Ⅷ区	c−34G				剥片	黒曜石	2.80	1.10	0.40	0.93			
488	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.70	2.10	1.30	6.42			
489	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.40	2.90	0.60	2.66			
490	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	剥片	安山岩	2.90	0.80	0.50	0.90	オレ		
491	Ⅷ区	c−34G	L02層		○	チップ	黒曜石	1.20	1.10	0.60	0.80			
492	Ⅷ区	c−34G	カクラン			チップ	黒曜石	1.90	0.70	0.20	0.14			
493	Ⅷ区	c−34G	カクラン			チップ	黒曜石	1.10	1.10	0.20	1.24			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値、cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
494	Ⅷ区	c−34G	カクラン		○	使用痕有剥片	安山岩	4.10	3.50	1.70	20.68			
495	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	剥片	黒曜石	2.70	1.20	0.70	1.27		古代混在層	
496	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	剥片	黒曜石	3.20	2.70	1.20	6.69		古代混在層	
497	Ⅷ区	c−34G	L01層		○	剥片	黒曜石	3.10	2.20	0.70	2.27		古代混在層	
498	Ⅷ区	c・d−31G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.40	1.30	0.50	1.18			
499	Ⅷ区	c・d−31G	Va層		○	剥片	黒曜石	3.10	2.70	0.80	4.36			
500	Ⅷ区	c・d−31G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.10	1.10	0.30	0.62			
501	Ⅷ区	c・d−31G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.30	1.40	0.60	1.10			
502	Ⅷ区	c・d−31G	Va層		○	剥片	安山岩	2.20	1.60	0.30	1.34		輝緑凝灰岩	
503	Ⅷ区	c・d−31G	Va層		○	チャート or 剥片？	安山岩	2.60	2.30	0.60	3.61			
504	Ⅷ区	d−31G	Vc層, L03層			使用痕有剥片？	黒曜石	3.60	2.80	0.90	5.18			
505	Ⅷ区	d−32G	Vc層, L03層			剥片	黒曜石	1.90	1.40	0.20	0.41			
506	Ⅷ区	d−32G	Vc層, L03層			剥片	黒曜石	4.60	2.60	1.10	11.15			
507	Ⅷ区	d−32G	Vc層, L03層			石核	黒曜石	3.00	2.50	1.70	11.33			
508	Ⅷ区	d−33G	Ⅳ層		○	剥片 or 石核	黒曜石	3.10	2.50	1.10	7.48			
509	Ⅷ区	d−33G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	安山岩	5.00	3.20	1.40	15.66			
510	Ⅷ区	d−33G	Ⅳ層		○	剥片	安山岩	5.00	3.40	1.00	14.36		磨石器	
511	Ⅷ区	d−33G	Ⅳ層		○	剥片	安山岩	5.40	3.90	1.50	32.92		磨石器	
512	Ⅷ区	d−33G	Vc層, L03層			使用痕有剥片	黒曜石	1.60	1.20	0.40	0.72			
513	Ⅷ区	d−33G	Vc層, L03層			使用痕有剥片	黒曜石	1.70	1.70	0.60	1.72			
514	Ⅷ区	d−34G	Vc層		○	チップ	黒曜石	1.50	1.50	0.90	1.37			
515	Ⅷ区	d−34G	Vc層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.70	1.70	0.60	2.06			
516	Ⅷ区	d−34G	Vc層		○	剥片	安山岩	3.60	1.80	0.50	3.64		加工有	
517	Ⅷ区	d・e−32G				剥片	黒曜石	3.20	2.20	0.70	3.36		加工有	
518	Ⅷ区	e−32G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	3.50	2.20	1.00	6.39			
519	Ⅷ区	e−32G	Vc層		○	剥片	黒曜石	3.10	3.10	0.70	4.37			
520	Ⅷ区	e−33G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.30	2.00	0.60	1.79			
521	Ⅷ区	e−33G	Ⅳ層		○	石核	黒曜石	3.00	2.80	0.90	5.60			
522	Ⅷ区	e−33G	Ⅳ層		○	チップ	黒曜石	1.90	1.30	0.30	0.40			
523	Ⅷ区	e−33G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.30	2.00	0.40	1.80			
524	Ⅷ区	e−33G	Vc層		○	剥片	黒曜石	2.10	1.70	0.60	1.98			
525	Ⅷ区	e−33G	Vc層		○	チップ	黒曜石	1.90	1.00	0.30	0.56			
526	Ⅷ区	e−33G	Vc層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.40	1.40	0.40	1.46			
527	Ⅷ区	e−33G	Vc層, L03層		○	剥片	黒曜石	2.20	1.60	0.50	1.24			
528	Ⅷ区	e−33G	Vc層, L03層			剥片	黒曜石	3.00	2.30	1.00	7.18			
529	Ⅷ区	e−33G	Vc層		○	残核	黒曜石	2.60	2.40	0.90	4.30		加工有	
530	Ⅷ区	e−33G	Vc層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.00	1.10	0.50	1.18			
531	Ⅷ区	e−33G	Vc層		○	剥片	安山岩	3.70	3.50	0.80	11.49		加工痕	

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値，cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
532	Ⅷ区	e−33G	Vc層		○	剥片	安山岩	2.90	2.30	0.80	5.48			
533	Ⅷ区	e−33G	5Y層		○	剥片	黒曜石	2.00	1.20	0.50	1.26		加工有	
534	Ⅷ区	e−33G	5Y層		○	チップ	黒曜石	1.50	0.90	0.50	0.54			
535	Ⅷ区	e−34G	L03層		○	使用痕有剥片	黒曜石	1.70	1.00	0.80	0.89			
536	Ⅷ区	e−34G	L03層		○	剥片	黒曜石	2.90	1.40	0.60	1.57			
537	Ⅷ区	e−34G	L03層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.00	1.70	0.40	0.75			
538	Ⅷ区	e−34G	L03層		○	剥片	黒曜石	2.00	1.50	0.30	0.88			
539	Ⅷ区	e−34G	L03層		○	石鏃	黒曜石	3.10	2.40	0.50	2.41			172
540	Ⅷ区	e−34G	Va層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.70	1.70	0.60	2.23			
541	Ⅷ区	e−34G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.70	2.00	0.50	1.72			
542	Ⅷ区	e−34G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.20	2.20	0.50	2.31			
543	Ⅷ区	e−34G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.10	1.10	0.30	0.71			
544	Ⅷ区	e−34G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.30	1.60	1.00	4.38		加工有	
545	Ⅷ区	e−34G	Va層		○	石核	黒曜石	2.50	2.20	1.20	5.82			
546	Ⅷ区	e−34G	Va層		○	剥片	黒曜石	2.00	1.80	0.70	2.16			
547	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.10	2.10	0.60	3.09			
548	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.00	1.30	0.60	0.95			
549	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	チップ	黒曜石	2.10	1.30	0.30	0.54			
550	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	破片	黒曜石	3.70	1.80	1.60	7.61			
551	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	剥片	黒曜石	1.90	1.40	0.60	1.08			
552	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	剥片	黒曜石	4.00	2.60	1.70	9.01		針尾系	
553	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	スクレイパー	黒曜石	3.20	3.10	1.10	9.52			
554	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	剥片	黒曜石	2.50	1.20	0.40	0.80			
555	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	チップ	黒曜石	1.80	1.00	0.40	0.55			
556	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	剥片	黒曜石	2.90	2.10	0.50	1.92			
557	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	チップ	黒曜石	1.70	1.30	0.30	0.49			
558	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	石核	黒曜石	3.80	3.20	2.10	15.88			
559	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	石鏃	黒曜石	2.40	1.50	0.50	0.86			176
560	Ⅷ区	e−34G	Vc層		○	石鏃	黒曜石	3.00	2.40	0.50	2.52			174
561	Ⅷ区	e−34G	VY層		○	加工チップ剥片	安山岩	2.70	1.60	0.40	1.31		加工有	
562	Ⅷ区	e・f−33G	Vc層		○	剥片	黒曜石	2.40	2.10	0.60	2.52			
563	Ⅷ区	e・f−33G	Vc層		○	残核	黒曜石	2.80	2.20	1.50	6.99			
564	Ⅷ区	e・f−33G	Vc層		○	残核	黒曜石	3.60	2.10	0.90	4.82			
565	Ⅷ区	e・f−33G	Vc層		○	チップ	黒曜石	1.70	0.90	0.20	0.40			
566	Ⅷ区	e・f−33G	Vc層		○	チップ	黒曜石	1.40	1.10	0.50	0.56			
567	Ⅷ区	e・f−33G・34G	c−03		○	剥片	黒曜石	3.00	2.10	0.80	2.91			
568	Ⅷ区	e・f−33G・34G	c−03		○	剥片	黒曜石	1.60	1.80	0.50	0.96			
569	Ⅷ区	e・f−33G・34G	c−03		○	剥片	黒曜石	1.60	2.20	1.00	2.93			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値、cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
570	Ⅷ区	e･f−33G･34G	c−03		○	チップ	黒曜石	1.90	1.00	0.40	0.43			
571	Ⅷ区	e･f−33G･34G	c−03		○	剥片	黒曜石	3.00	2.20	0.50	2.59			
572	Ⅷ区	e･f−33G･34G	c−03		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.30	2.70	1.00	3.71			
573	Ⅷ区	e・f−34G	Vc 層, L03層			使用痕有剥片	黒曜石	2.40	1.60	0.50	1.57			
574	Ⅷ区	f−33G	Ⅳ層		○	剥片	黒曜石	1.80	2.70	1.10	3.80		破片	
575	Ⅷ区	f−33G	Ⅳ層		○	剥片	安山岩	3.20	3.20	1.10	11.28		加工痕	
576	Ⅷ区	f−33G	Ⅳ層		○	使用痕有剥片	安山岩	5.40	2.30	0.90	7.46			
577	Ⅷ区	f−33G	Ⅳ層		○	剥片	安山岩	4.00	2.30	0.80	7.94			
578	Ⅷ区	f−33G	Ⅳ層		○	自然レキ	安山岩	3.30	2.20	1.80	18.20			
579	Ⅷ区	f−33G	Ⅳ層		○	石鏃	黒曜石	2.70	1.80	0.55	1.97			175
580	Ⅷ区	f−33G	Va 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.70	2.30	0.70	3.27			
581	Ⅷ区	f−33G	Va 層		○	剥片	黒曜石	2.10	2.20	0.80	2.58			
582	Ⅷ区	f−33G	Va 層		○	剥片	黒曜石	1.80	1.20	0.40	0.84		加工有	
583	Ⅷ区	f−33G	Va 層		○	チップ	黒曜石	1.50	1.00	0.20	0.27			
584	Ⅷ区	f−33G	Va 層		○	チップ	黒曜石	2.00	1.20	0.40	0.98			
585	Ⅷ区	f−33G	Va 層		○	石核	黒曜石	2.80	2.10	1.60	9.50			
586	Ⅷ区	f−33G	Va 層		○	石核	黒曜石	2.90	2.90	1.40	5.88			
587	Ⅷ区	f−33G	Va 層		○	チップ	安山岩	1.50	1.10	0.20	0.28			
588	Ⅷ区	f−33G	Va 層		○	剥片	安山岩	3.70	2.80	1.10	10.91			
589	Ⅷ区	f−33G	VY 層		○	剥片	黒曜石	1.80	1.90	0.60	1.56			
590	Ⅷ区	f−33G	VY 層		○	剥片	黒曜石	1.90	1.40	0.60	1.16			
591	Ⅷ区	f−33G	VY 層		○	剥片	黒曜石	2.50	2.10	0.60	3.36		加工有	
592	Ⅷ区	f−33G	L03層		○	剥片	安山岩	3.20	3.20	1.10	8.83			
593	Ⅷ区	f−34G	Va 層		○	石核	黒曜石	2.70	3.00	1.70	10.39			
594	Ⅷ区	f−34G	Va 層		○	剥片	黒曜石	1.80	0.70	0.30	0.45			
595	Ⅷ区	f−34G	Va 層		○	剥片	黒曜石	3.60	2.50	1.00	4.71			
596	Ⅷ区	f−34G	Va 層		○	剥片	黒曜石	2.40	2.10	0.40	2.16			
597	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	チップ	黒曜石	1.70	0.80	0.40	0.33			
598	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	石鏃	黒曜石	1.20	2.00	0.45	1.32			184
599	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	剥片	黒曜石	2.00	2.40	0.70	3.39			
600	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	剥片	黒曜石	3.00	3.00	0.80	4.89			
601	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	剥片	黒曜石	2.50	2.50	0.90	5.00			
602	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	剥片	黒曜石	1.70	1.60	0.40	1.17			
603	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	石鏃	黒曜石	2.20	2.25	0.45	1.71			178
604	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	石核	黒曜石	2.00	1.50	1.10	3.02		再生（?）打面切	
605	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	ノッチ	黒曜石	3.10	2.60	0.90	5.91			
606	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.60	2.80	1.00	4.48			
607	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	剥片	黒曜石	3.20	1.50	0.40	1.65			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値，cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
608	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	剥片	黒曜石	2.90	1.00	0.50	0.93			
609	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.80	1.70	0.70	2.32			
610	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	剥片	黒曜石	3.00	2.10	0.80	4.92			
611	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	剥片	黒曜石	2.50	1.80	0.90	3.82			
612	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	？	黒曜石	1.30	1.00	0.70	0.86			
613	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.00	1.10	0.30	0.67			
614	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.00	2.20	0.70	3.07			
615	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.70	2.30	1.00	4.78			
616	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	剥片	安山岩	3.10	2.60	0.60	3.74			
617	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	剥片	安山岩	3.30	1.50	0.40	1.30			
618	Ⅷ区	f−34G	L03層		○	石核	安山岩	3.90	4.70	2.60	44.03			
619	Ⅷ区	f−34G	L03層			剥片	黒曜石	2.40	1.20	0.70	1.50			
620	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	剥片	黒曜石	2.80	2.20	1.00	6.32		加工有	
621	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	剥片	黒曜石	1.70	2.00	0.60	1.66	オレ		
622	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	チップ	黒曜石	1.50	1.00	0.60	0.68			
623	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層	148	○	石鏃	黒曜石	1.75	1.55	0.45	0.77			185
624	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	剥片	黒曜石	3.20	1.90	0.50	2.01			
625	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	剥片	黒曜石	2.80	1.20	0.50	1.48			
626	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	剥片	黒曜石	2.80	2.00	1.40	5.31			
627	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	剥片	黒曜石	2.60	1.20	0.50	1.14			
628	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	剥片	黒曜石	1.90	1.10	0.30	0.38			
629	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	剥片	黒曜石	1.90	1.70	0.40	1.00			
630	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	5.00	2.00	0.90	5.30			
631	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	剥片	安山岩	5.20	3.10	1.70	18.47			
632	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	チップ	安山岩	2.00	1.00	0.30	0.59			
633	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	剥片	安山岩	2.20	2.30	0.50	2.35			
634	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	剥片	安山岩	2.50	2.50	0.40	2.51			
635	Ⅷ区	f−34G	Ⅴ Y 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.10	2.00	0.80	3.47		加工痕，使用痕有	
636	Ⅷ区	f−35G	Ⅴb 層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.00	1.30	0.30	0.85			
637	Ⅷ区	f−35G	L03層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.20	2.10	1.10	5.36			
638	Ⅷ区	f−35G	L03層		○	使用痕有剥片	黒曜石	3.30	2.10	0.70	1.91			
639	Ⅷ区		表土ハギ			使用痕有剥片	黒曜石	2.90	1.70	0.70	2.46			
640	Ⅷ区		表土ハギ			剥片	黒曜石	3.30	2.20	1.30	4.38			
641	Ⅷ区		L01層		○	石核	黒曜石	3.40	2.00	1.60	8.69			
642	Ⅷ区		Ⅶ層		○	石核	黒曜石	3.00	2.30	1.60	10.67			
643	Ⅷ区					スクレイパー？	黒曜石	2.90	3.00	1.20	9.17		北西ソクミゾ	
644	Ⅷ区					剥片	黒曜石	2.00	1.50	0.80	1.83			
645	Ⅷ区					剥片	黒曜石	3.00	2.10	0.70	3.47			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値、cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
646	Ⅷ区					剥片	黒曜石	4.20	2.10	0.60	5.00		加工有	
647	Ⅷ区					ハラス材	安山岩	2.80	2.20	0.30	3.30		北西ソクミゾ	
648	Ⅷ区		Ⅶ層		○	剥片	安山岩	1.50	0.80	0.20	0.15		加工有	
649	Ⅷ区		Ⅶ層		○	剥片	安山岩	3.10	3.20	1.00	10.36		加工有	
650	Ⅷ区					ドリル？	安山岩	3.70	2.70	0.80	6.68			
651	Ⅷ区	5 SX022	①層		○	剥片	安山岩	5.05	3.40	1.30	19.00		使用痕有	
652	X－1区	6 SX049	1層		○	石核	黒曜石	3.1	3.8	1.2	10.46			
653	X－1区	6 SX049	3層		○	石核	黒曜石	4.1	1.9	1.3	9.13		縄文	
654	X－1区	6 SX049	3層		○	剥片	黒曜石	3.3	1.4	0.6	2.32		縄文	
655	X－1区	6 SX049	3層		○	縦長剥片	黒曜石	2.4	2.0	0.5	2.19		縄文	
656	X－1区	6 SX049	トレンチ No.1		○	剥片	黒曜石	2.5	2.3	0.7	3.13			
657	X－1区	6 SX049		1670		縦長剥片	黒曜石	3.9	1.7	0.8	2.52			
658	X－1区	6 SX049		1671		剥片	安山岩	3.0	1.4	0.5	2.11			
659	X－1区	6 SX049			○	剥片	黒曜石	1.9	1.6	0.6	1.22			
660	X－1区	6 SX049			○	剥片	黒曜石	3.1	2.2	0.7	4.04			
661	X－1区	6 SX049			○	剥片	黒曜石	2.9	2.2	0.7	3.23			
662	X－1区	6 SX049			○	使用痕有剥片	黒曜石	2.9	2.2	0.6	2.67			
663	X－1区	6 SX049			○	剥片	黒曜石	3.1	1.4	0.6	2.11			
664	X－1区	6 SX049			○	剥片	黒曜石	1.7	2.0	0.8	2.27			
665	X－1区	6 SX049			○	剥片	黒曜石	1.8	1.6	0.4	0.49			
666	X－1区	6 SX049			○	剥片	黒曜石	1.4	1.8	0.3	0.81			
667	X－1区	6 SX049			○	剥片	安山岩	2.7	1.4	0.4	1.31			
668	X－1区	g－38G		1663		使用痕有剥片	安山岩	2.7	3.0	0.9	6.24		スクレイパー？	
669	X－1区	g－39G	Ⅳ層	460		使用痕有剥片	黒曜石	2.5	1.9	0.4	2.22			
670	X－1区	g－40G	Vb 層	421		石鏃未製品	黒曜石	2.4	1.8	0.5	2.24			
671	X－1区	h－37G	Ⅳ層	1309		剥片	黒曜石	2.5	2.3	0.7	3.84			
672	X－1区	I－38G	Ⅲ層	925		使用痕有剥片	黒曜石	1.7	2.2	0.7	2.05			
673	X－1区	I－39G	Ⅶ層	1643		剥片	黒曜石	3.3	2.4	0.9	6.10			
674	X－1区	I－40G	Vb 層		○	剥片	黒曜石	1.5	1.5	0.3	0.63			
675	X－1区	j－39G			○	原石	黒曜石	1.6	1.2	0.7	1.31			
676	X－1区	j－40G	Ⅳ層	493		未製品	黒曜石	3.2	2.3	1.0	5.35			
677	X－1区	j－40G	Ⅳ層	1259		剥片	黒曜石	2.5	2.0	0.8	3.40			
678	X－1区	j－40G				剥片	黒曜石	2.9	1.8	0.6	2.27			
679	X－1区	j－40G	Ⅳ層	1260		剥片	黒曜石	2.4	1.6	0.5	1.56			
680	X－1区	j－40G	Ⅳ層	1262		剥片	黒曜石	2.7	2.4	0.7	3.25			
681	X－1区	j－40G	Ⅳ層	1263		剥片	黒曜石	1.8	1.8	0.2	0.60			
682	X－1区	j－40G	Ⅳ層	1268		剥片	黒曜石	1.9	1.2	0.3	0.66			
683	X－1区	j－40G	Va 層	511		剥片	黒曜石	2.1	1.6	0.4	1.60			

No.	調査区	出土地点			一括	種別	石材	法量（最大値、cm・g）				欠損状況	備考	挿図番号
		遺構	層位	取上 No.				長さ	幅	厚さ	重さ			
684	X－1区	j－40G	Ⅴ－A層		○	使用痕有剥片	黒曜石	2.3	2.4	0.5	2.86			
685	X－1区	j－40G	Ⅴb層		○	剥片	黒曜石	2.6	1.6	0.4	0.89			
686	X－1区	j－40G	Ⅶ層		○	チップ	黒曜石	1.2	1.3	0.5	0.76			
687	X－1区	j－40G			○	チップ	黒曜石	1.1	0.6	0.2	0.10			
688	X－1区	j－40G	L105層		○	剥片	黒曜石	2.4	2.0	0.4	1.93			
689	X－1区	j－40G			○	縦長剥片	黒曜石	2.1	1.6	0.4	1.65			
690	X－1区	j－40G			○	剥片	黒曜石	3.2	1.5	0.3	1.23			
691	X－1区	j－40G			○	剥片	黒曜石	1.9	1.8	0.4	1.19			
692	X－1区	j－40G			○	剥片	黒曜石	1.5	1.2	0.2	0.33			
693	X－1区	k－40G	Ⅷ層	1061		石核	黒曜石	3.2	3.1	1.8	13.13			
694	X－1区	k－40G	Ⅸ層		○	剥片	黒曜石	3.2	2.4	0.8	3.73			
695	X－1区	k－40G	トレンチ		○	剥片	黒曜石	2.1	2.5	0.7	2.52			
696	X－1区			910		剥片	安山岩	4.6	3.2	0.9	11.66			
697	X－1区				○	石核	黒曜石	3.6	2.7	1.3	10.63			
698	X－1区				○	原石	黒曜石	2.2	1.7	1.2	5.17			
699	X－1区				○	使用痕有剥片	黒曜石	2.8	1.9	1.1	3.46			
700	X－1区				○	剥片	黒曜石	2.0	1.9	0.6	1.82			
701	X－1区				○	原石	黒曜石	1.6	1.3	0.9	2.23			
702	X－1区				○	剥片	黒曜石	2.5	2.6	0.9	5.71			
703	X－1区				○	使用痕有剥片	黒曜石	2.6	1.0	0.4	0.95			
704	X－1区				○	チップ	黒曜石	0.8	0.4	0.3	0.06			

表5　鉄器一覧表

No.	挿図番号	図番号	登録番号	種類	地区	遺構	層位	取上 No.	一括	法量（cm・g）				備考	写真図版
										長さ	幅	厚さ	重さ		
1			97TYF－001	鉄滓	Ⅶ	X－27G	Ⅴc層	3371							
2			97TYF－003	?	Ⅶ	Y－28G	Ⅳ層		○						
3			97TYF－004	鉄滓	Ⅶ	Y－28G	Ⅴb層	847							
5			97TYF－006		Ⅶ	a－29G	Ⅴa層		○						
6			97TYF－007	鉄滓	Ⅶ	ソクミゾ	ソクミゾ								
7			97TYF－008	?	Ⅶ	a－29G	Ⅴc層	4239							
8			97TYF－009		Ⅶ	4 SE017	北半分		○						
9			97TYF－010		Ⅶ	W－27G	Ⅴa層		○						
10			97TYF－011		Ⅶ	X－27G	Ⅴc層		○						
11			97TYF－012		Ⅶ	Y－26G	Ⅳ層		○						
12			97TYF－013	鉄滓	Ⅶ	Y－27G	Ⅴa層		○						
13			97TYF－014		Ⅶ	Y－29G	Ⅴa層	3664							
14			97TYF－015		Ⅶ	ソクミゾ	ソクミゾ								
15	264	1683	97TYF－016	鉄製品（刀子）	Ⅶ	b－33G			○	6.0	1.4	0.5	7.2		
16			97TYF－017	鉄製品	Ⅶ	W－27G	Ⅴa層		○						
17	264	1685	97TYF－018	鉄製品（鉄刀？）	Ⅶ	X－28G	Ⅳ層		○	7.8	1.7	1.0	17.9		
18	264	1684	97TYF－019	鉄製品（鉄鏃）	Ⅶ	X－28G	Ⅴb層		○						
19			97TYF－020	鉄製品	Ⅶ		ソクミゾ								
20			97TYF－021	鉄製品	Ⅶ		ソクミゾ								
21			97TYF－022	鉄製品	Ⅶ		ソクミゾ								
22	194	1085	97TYF－023	鉄製品（鋤先）	Ⅶ	4 SI012		581		20.3	17.0	0.5	204.7		
23			98TYF－033	鉄滓	Ⅷ	5 SX040	②区D層		○						
24			98TYF－034	鉄滓	Ⅷ	5 SX040	①区A層		○						
25			98TYF－035	鉄滓	Ⅷ	5 SX040	③区F層		○						
26			98TYF－036	鉄滓	Ⅷ	5 SX040	③区D・E層		○						
27			98TYF－037	鉄滓	Ⅷ	5 SX040	③区D・E層		○						
28			98TYF－038	鉄滓	Ⅷ	5 SX040	③区E・F層		○						
29			98TYF－039	鉄滓	Ⅷ	5 SX040	③区F層		○						
30			98TYF－041	鉄滓	Ⅷ	5 SX040	③区F層		○						
31			98TYF－042	鉄滓	Ⅷ	5 SX040	④区D層		○						
32			98TYF－043	鉄滓	Ⅷ	5 SX040	E層	8239							
33			98TYF－044	鉄滓	Ⅷ	5 SX049			○						
34			98TYF－045	鉄滓	Ⅷ	5 SX022	①層		○						

No.	挿図番号	図番号	登録番号	種類	地区	遺構	層位	取上 No.	一括	法量（cm・g）				備考	写真図版
										長さ	幅	厚さ	重さ		
35			98TYF—046	鉄滓	Ⅷ	a—30G	Ⅴc層		○						
36			98TYF—047	鉄滓	Ⅷ	a—31G	Ⅳ層		○						
37			98TYF—048	鉄滓	Ⅷ	a—31G	Ⅴc層		○						
38			98TYF—049	鉄滓	Ⅷ	a—32G	Ⅳ層	1615							
39			98TYF—050	鉄滓	Ⅷ	b—29G	Ⅴa層		○						
40			98TYF—051	鉄滓	Ⅷ	b—29G	Ⅴa層		○						
41			98TYF—052	鉄滓	Ⅷ	b—30G	Ⅴa層		○						
42			98TYF—053	鉄滓	Ⅷ	b—30G	Ⅴa層		○						
43			98TYF—054	鉄滓	Ⅷ	b—30G	Ⅴa層		○						
44			98TYF—055	鉄滓	Ⅷ	b—30G	Ⅴc層		○						
45			98TYF—056	鉄滓	Ⅷ	b—31G	Ⅴc層		○						
46			98TYF—057	鉄滓	Ⅷ	b—31G	Ⅴc層		○						
47			98TYF—058	鉄滓	Ⅷ	b—32・33G	Ⅳ層		○						
48			98TYF—059	鉄滓	Ⅷ	b・c—33・34G			○						
49			98TYF—060	鉄滓	Ⅷ	c—30G	Ⅴa層		○						
50			98TYF—061	鉄滓	Ⅷ	e—34G	Ⅴc層		○						
51			98TYF—062	鉄滓	Ⅷ	f—34G	VY層		○						
52			98TYF—063	鉄滓	Ⅷ	f—35G	水田層		○						
53			98TYF—064	鉄滓	Ⅷ	Z—30G	Ⅳ層		○						
54			98TYF—065	鉄滓	Ⅷ	Z—32G	Ⅴc層		○						
55			98TYF—066	鉄滓	Ⅷ			4483							
56			98TYF—067	鉄滓	Ⅷ			8234							
57			98TYF—068	鉄滓	Ⅷ		L01層		○						
58			98TYF—069	鉄滓	Ⅷ		L01層		○						
59			98TYF—070		Ⅷ	5 SK016			○						
60			98TYF—071	鉄製品	Ⅷ	5 SD009			○						
61			98TYF—072	鉄器（刀子？）	Ⅷ	b—29G	Ⅳb層								
64			99TYF—001	鉄滓	X－1	I—38G		917							
66			99TYF—003	鉄製品	X－1				○						
67			99TYF—004	鉄製品	X－1				○						
68			99TYF—005	鉄製品	X－1				○						
69			99TYF—006	鉄製品	X－1		客土層、側溝		○						
70			99TYF—008	鉄片	X－1				○						
71			99TYF—009	鉄片	X－2	6 SD501	A層		○						

No.	挿図番号	図番号	登録番号	種類	地区	遺構	層位	取上 No.	一括	法量（cm・g）				備考	写真図版
										長さ	幅	厚さ	重さ		
72			99TYF－010	鉄片	X－2	g－43G	L05層		○						
73			99TYF－011	鉄片	X－2		1トレ		○						
74			99TYF－012	鉄片	X－2		調査区内		○						
75			99TYF－013	鉄製品	X－2	6 SD501			○						
76			99TYF－014	鉄製品（釘）	X－2	f・g－43G			○						
77			99TYF－015	鉄製品	X－2	g－43G	L01層								
78			99TYF－016	鉄製品（農具）	X－2	g－43G	L01層		○						
79			99TYF－017	鉄製品	X－2	g－43G	L03層		○						
80			99TYF－018	鉄製品（釘）	X－2	g－43G	L03層		○						
81			99TYF－019	鉄製品	X－2	g－43G	L05層								
82			99TYF－020	鉄製品	X－2	g－43G	L05層		○						
83			99TYF－021	鉄製品	X－2			2255							
84			99TYF－022	鉄製品	X－2		調査区内		○						
85			99TYF－023	鉄製品	X－2				○						
86			99TYF－024	鉄片	X－2	6 SX504		3171							

表6　木製品等観察表

No.	挿図番号	図番号	登録番号	器種	分類	出土地点			法量（cm）			木取り	樹種	写真図版
						地区	遺構	層位	全長	幅・径	厚さ			
208	22	61	◎ 99TY−6003	割材	A	X	6 SX049		55.6	12.2	4.5		ブナ科コナラ属アカガシ亜属	49
212	22	62	99TY−6007	割材	B 1	X	6 SX049		77.7	9.0	0.9			
211	22	63	◎ 99TY−6006	板材	B 1	X	6 SX049		24.3	4.4	1.2	板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
210	22	64	99TY−6005	杭	A	X	6 SX049		20.0	2.7	2.3	芯持ち丸木		
209	22	65	◎ 99TY−6004	木器未製品	A	X	6 SX049		53.2	23.0	8.2	芯去り	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	49
207	22	66	◎ 99TY−6002	有孔薄板	A	X	6 SX049		58.1	16.2	1.4	柾目	ブナ科シイ属	
255	23	67	99TY−6064	割材	A	X	6 SX054		55.2	6.0	6.0	板目材		49
217	23	68	99TY−6026	矢板	A	X	6 SX054		57.6	7.5	2.5	柾目		
243	23	69	99TY−6052	割杭	A	X	6 SX054		77.0	10.5	4.6			
215	23	70	99TY−6024	矢板	A	X	6 SX054		60.9	4.0	3.1	柾目		
219	23	71	99TY−6028	丸杭	A	X	6 SX054		54.6	4.2	4.0	芯持ち丸木		
256	23	72	99TY−6065	矢板	A	X	6 SX054		57.6	7.8	5.8			
220	23	73	99TY−6029	半裁杭	A	X	6 SX054		58.4	5.0	4.6			
223	23	74	99TY−6032	割杭	A	X	6 SX054		72.7	6.5	6.6			
252	24	75	99TY−6061	割杭	A	X	6 SX054		72.5	5.9	6.0		ヤマグワ	
238	24	76	99TY−6047	割材	A	X	6 SX054		73.0	8.0	5.5	柾目		
244	24	77	99TY−6053	割杭	A	X	6 SX054		61.8	4.5	4.5			
249	24	78	◎ 99TY−6058	矢板	A	X	6 SX054		72.5	12.5	5.3	柾目	ブナ科シイ属	49
224	24	79	99TY−6033	半裁杭	A	X	6 SX054		73.3	8.2	9.0			
230	24	80	99TY−6039	矢板	A	X	6 SX054		61.1	6.5	3.4	柾目		
241	25	81	99TY−6050	割杭	A	X	6 SX054		66.4	6.2	4.7			
247	25	82	99TY−6056	割杭	A	X	6 SX054		51.1	6.2	6.3			
250	25	83	99TY−6059	割杭	A	X	6 SX054		66.6	4.1	3.8		ヤマグワ	
232	25	84	99TY−6041	半裁杭	A	X	6 SX054		56.0	7.9	4.8			
240	25	85	99TY−6049	矢板	A	X	6 SX054		94.8	9.0	6.2	柾目		
236	25	86	99TY−6045	矢板	A	X	6 SX054		89.8	9.2	6.0	柾目		
257	25	87	99TY−6066	矢板（割材）	A	X	6 SX054		72.6	6.2	3.4	柾目		
228	26	88	99TY−6037	矢板	A	X	6 SX054		16.3	9.6	4.6	柾目		
216	26	89	◎ 99TY−6025	半裁杭	A	X	6 SX054		56.9	8.2	5.4		ニレ科エノキ属	49
222	26	90	99TY−6031	丸杭	A	X	6 SX504		76.8	4.6	3.6	芯持ち丸木		
218	26	91	◎ 99TY−6027	矢板	A	X	6 SX054		74.7	10.0	2.6	柾目	ブナ科シイ属	

No.	挿図番号	図番号	登録番号	器種	分類	出土地点			法量（cm）			木取り	樹種	写真図版
						地区	遺構	層位	全長	幅・径	厚さ			
214	26	92	◎ 99TY−6023	矢板	A	X	6 SX054		63.6	15.0	3.1	柾目	ブナ科シイ属	49
221	26	93	99TY−6030	丸杭	A	X	6 SX054		73.7	8.7	8.4	芯持ち丸木		
225	26	94	99TY−6034	丸杭	A	X	6 SX054		71.7	9.5	7.1	芯持ち丸木		
258	27	95	99TY−6068	割杭	A	X	6 SX054		41.6	3.8	2.4	柾目	ヤマグワ	
237	27	96	99TY−6046	半裁杭	A	X	6 SX054		69.0	8.0	5.6			
251	27	97	99TY−6060	丸杭	A	X	6 SX054		69.6	6.8	6.2	芯持ち丸木		
245	27	98	99TY−6054	丸杭	A	X	6 SX054		87.3	6.7	6.5	芯持ち丸木	ヤナギ属	
242	27	99	99TY−6051	矢板	A	X	6 SX054		83.8	4.7	5.0	柾目		
248	27	100	99TY−6057	丸杭	A	X	6 SX054		68.7	6.5	7.5	芯持ち丸木		
235	28	101	99TY−6044	割杭	A	X	6 SX054		64.6	9.5	6.2			
233	28	102	◎ 99TY−6042	板材	A	X	6 SX054		30.8	8.5	2.8	板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
246	28	103	99TY−6055	割杭	A	X	6 SX054		46.4	5.2	2.7			
226	28	104	99TY−6035	矢板	A	X	6 SX054		90.4	9.4	4.5	柾目		
239	28	105	99TY−6048	矢板	A	X	6 SX054		82.6	14.6	4.5	柾目		
253	28	106	99TY−6062	割杭	A	X	6 SX054		80.5	7.0	3.5			
234	29	107	99TY−6043	丸杭	A	X	6 SX054		50.4	5.7	5.0	芯持ち丸木		
231	29	108	99TY−6040	割杭	A	X	6 SX054		64.8	5.6	5.4			
229	29	109	99TY−6038	丸杭	A	X	6 SX054		64.0	?	5.5	芯持ち丸木		
227	29	110	99TY−6036	矢板	A	X	6 SX054		55.4	9.6	2.6	柾目		
254	29	111	◎ 99TY−6063	矢板	A	X	6 SX054		63.7	6.2	6.4	柾目	ニレ科エノキ属	49
260	29	112	99TY−6070	矢板	B1	X	6 SX054		29.8	8.5	1.7	柾目		
259	29	113	99TY−6069	材	B1	X	6 SX054		142.5	9.0	10.0	芯持ち丸太		
213	30	114	◎ 99TY−6138	網代	A	X	6 SX049		40.0	40.0	20.0		つる性植物	49
274	38	209	◎ 99TY−6129	鋤	A	X	j−40G		21.8	11.7	2.7	板目	アワブキ科アワブキ属	49
4	71	392	◎ 97TY−4280	縄？	A	Ⅶ	4 SE005		5.7	—	—		植物	
6	71	393	◎ 97TY−4282	タワシ？	A	Ⅶ	4 SE005		9.7	—	—		植物	
5	71	394	◎ 97TY−4281	タワシ？	A	Ⅶ	4 SE005		10.5	—	—		植物	
1	71	395	◎ 97TY−4014	泥よけ	A	Ⅶ	4 SE005	中下層	29.0	22.5	5.0	柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
2	71	396	97TY−4015	木片	B1	Ⅶ	4 SE005	中下層	36.0	2.5	2.5	芯持ち丸木		
160	129	735	◎ 98TY−5210	鍬の泥よけ部	A	Ⅷ	5 SX049		19.5	15.7	1.0	柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	52
36	129	736	◎ 97TY−4108	一木平鋤	A	Ⅶ	4 SX049		93.5	13.9	2.7	柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	53
156	129	737	◎ 98TY−5206	有孔板材	A	Ⅷ	5 SX049		97.6	18.6	2.5	板目	マツ科モミ属	
178	130	738	◎ 98TY−5234	板材	B1	Ⅷ	5 SX049		18.9	6.1	2.0	板目	ブナ科シイ属	

No.	挿図番号	図番号	登録番号	器種	分類	出土地点			法量（cm）			木取り	樹種	写真図版
						地区	遺構	層位	全長	幅・径	厚さ			
175	130	739	◎ 98TY−5227	板材	B1	Ⅷ	5 SX049		33.5	9.0	2.0	板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
165	130	740	◎ 98TY−5215	板材	A	Ⅷ	5 SX049		67.1	10.0	1.8	板目	マツ科モミ属	
159	130	741	◎ 98TY−5209	又鍬	A	Ⅷ	5 SX049		49.6	6.3	1.6	柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	53
170	131	742	◎ 98TY−5220	容器	A	Ⅷ	5 SX049		20.7	5.2	1.8	柾目	ツツジ科スノキ属シャシャンボ	52
158	131	743	◎ 98TY−5208	容器片コブ刳抜	A	Ⅷ	5 SX049		20.2	11.0	1.3	柾目	クスノキ科クスノキ属クスノキ	52
50	131	744	◎ 97TY−4122	両面共整形の板	A	Ⅶ	4 SX049		62.7	10.2	1.3	追い柾目	マツ科モミ属	53
40	131	745	◎ 97TY−4112	建築材転用工作台	A	Ⅶ	4 SX049		65.5	9.0	6.8		ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
180	132	746	◎ 98TY−5236	板材	B1	Ⅷ	5 SX049		36.4	7.0	1.3	板目	ブナ科シイ属	
49	132	747	◎ 97TY−4121	ミカン割杭転用工作台	A	Ⅶ	4 SX049		64.3	16.0	4.4	柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	53
161	133	748	◎ 98TY−5211	木錘	A	Ⅷ	5 SX049		13.8	8.4	7.2	芯持ち丸木	ツバキ科ヒサカキ属	52
39	133	749	◎ 97TY−4111	木錘	A	Ⅶ	4 SX049		14.0	6.3	4.5	芯持ち丸木	ツバキ科ツバキ属	52
45	133	750	◎ 97TY−4117	木錘	A	Ⅶ	4 SX049		16.0	7.8	6.0	芯持ち丸木	モクセイ科イボタノキ属	52
37	133	751	◎ 97TY−4109	動物偶	A	Ⅶ	4 SX049		5.3	3.5	3.3		ニレ科ムクノキ属ムクノキ	52
67	133	752	◎ 97TY−4182	円重形台	A	Ⅶ	4 SX049		6.5	6.5	1.5	柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	52
163	133	753	◎ 98TY−5213	箱の一部？	A	Ⅷ	5 SX049		44.5	12.8	2.0		クスノキ科クスノキ属クスノキ	
162	134	754	◎ 98TY−5212	弓？	A	Ⅷ	5 SX049		54.2	2.0	1.9	芯去り	ウルシ科ウルシ属	53
169	134	755	◎ 98TY−5219	有孔木片	A	Ⅷ	5 SX049		19.7	2.2	1.1	板目	スギ科スギ属スギ	
155	134	756	◎ 98TY−5205	加工材	A	Ⅷ	5 SX049		18.3	8.3	5.8	芯持ち丸木	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
44	134	757	◎ 97TY−4116	建築材	A	Ⅶ	4 SX049		82.8	7.2	5.4	柾目	ブナ科クリ属クリ	
43	134	758	◎ 97TY−4115	建築材	A	Ⅶ	4 SX049		83.0	6.5	9.0	芯無角	ブナ科クリ属クリ	
166	134	759	◎ 98TY−5216	建築材	A	Ⅷ	5 SX049		63.4	4.0	3.5	芯無し	ニレ科ムクノキ属ムクノキ	
181	135	760	98TY−5237	材	B1	Ⅷ	5 SX049		71.2	3.5	3.1	芯持ち丸木		
177	135	761	98TY−5233	加工木片	B1	Ⅷ	5 SX049		29.2	3.7	3.4	芯去り		
38	135	762	◎ 97TY−4110	建築材	A	Ⅶ	4 SX049		52.5	3.1	2.6	芯持ち丸木	クスノキ科クスノキ属クスノキ	53
171	135	763	◎ 98TY−5221	建築材	A	Ⅷ	5 SX049		94.0	8.0	5.6	芯持ち丸木	ブナ科シイ属	
172	135	764	◎ 98TY−5222	建築材	A	Ⅷ	5 SX049		165.7	7.0	4.8	芯持ち丸木	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
42	136	765	97TY−4114	杭	A	Ⅶ	4 SX049		47.5	5.5	4.0	芯持ち丸木		
47	136	766	97TY−4119	丸杭	A	Ⅶ	4 SX049		22.0	8.9	6.0	芯持ち丸木		
46	136	767	97TY−4118	杭	A	Ⅶ	4 SX049		64.0	4.0	4.0	芯持ち丸木		
48	136	768	97TY−4120	杭	A	Ⅶ	4 SX049		45.0	6.0	5.1	芯持ち丸木		
41	136	769	97TY−4113	杭	A	Ⅶ	4 SX049		25.8	5.0	4.4	芯持ち丸木		
51	136	770	97TY−4123	杭	B1	Ⅶ	4 SX049		24.0	3.5	3.5	芯去り		
157	137	771	◎ 98TY−5207	杭	A	Ⅷ	5 SX049		29.3	5.5	5.6	芯持ち丸木	ムクロジ科ムクロジ属ムクロジ	

No.	挿図番号	図番号	登録番号	器種	分類	出土地点			法量（cm）			木取り	樹種	写真図版
						地区	遺構	層位	全長	幅・径	厚さ			
173	137	772	98TY−5223	丸杭？	B1	Ⅷ	5 SX049		20.3	4.6	4.2			
52	137	773	97TY−4124	柱転用材	B1	Ⅶ	4 SX049		19.0	2.9	3.0	柾目		
179	137	774	98TY−5235	材	B1	Ⅷ	5 SX049		67.5	3.0	2.4	芯持ち丸木		
167	137	775	◎ 98TY−5217	建築材	A	Ⅷ	5 SX049		60.8	2.5	2.2	芯無し	ニレ科ムクノキ属ムクノキ	
182	137	776	98TY−5238	丸杭	B1	Ⅷ	5 SX049		42.0	3.4	3.8	芯持ち丸木		
164	138	777	98TY−5214	大型杭	A	Ⅷ	5 SX049		187.0	8.2	9.0	芯持ち丸木		
174	138	778	98TY−5224	丸杭	B1	Ⅷ	5 SX049		18.5	2.4	2.8			
176	138	779	98TY−5231	丸杭	B1	Ⅷ	5 SX049		17.0	2.5	2.5	芯持ち丸木		
66	138	780	97TY−4181	杭？	A	Ⅶ	4 SX049		24.0	3.7	4.8	芯持ち丸木		
168	138	781	98TY−5218	丸杭	A	Ⅷ	5 SX049		40.8	2.7	2.0	芯持ち丸木		
53	789	789	97TY−4139	丸杭	A	Ⅶ	4 SM053		41.0	6.2	6.0	芯持ち丸木		
55	141	790	97TY−4141	丸杭	A	Ⅶ	4 SM053		46.3	4.8	4.4	芯持ち丸木		
57	141	791	◎ 97TY−4143	柄	A	Ⅶ	4 SM053		37.0	2.6	2.2		アワブキ科アワブキ属	
56	141	792	97TY−4142	丸杭	A	Ⅶ	4 SM053		28.5	2.9	2.3	芯持ち丸木		
54	141	793	97TY−4140	丸杭	A	Ⅶ	4 SM053		43.0	5.3	4.9	芯持ち丸木		
58	142	794	97TY−4144	丸杭	A	Ⅶ	4 LA054		29.5	4.3	4.0	芯持ち丸木		
59	142	795	97TY−4145	丸杭	A	Ⅶ	4 LA054		26.0	5.8	5.0	芯持ち丸木		
60	142	796	97TY−4146	丸杭	A	Ⅶ	4 SE055		50.0	4.6	4.0	芯持ち丸木		
61	142	797	97TY−4147	丸杭	A	Ⅶ	4 SE055		34.0	5.7	5.0	芯持ち丸木		
137	155	886	◎ 98TY−5111	又鍬	A	Ⅷ	5 SX040		30.8	5.2	1.6	柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	51
141	155	887	◎ 98TY−5115	横槌	A	Ⅷ	5 SX040		30.5	6.5	6.5	芯持ち丸木	ニレ科ムクノキ属ムクノキ	51
135	155	888	◎ 98TY−5109	脚	A	Ⅷ	5 SX040		54.6	4.9	2.5		クスノキ科シロダモ属	
136	155	889	◎ 98TY−5110	円盤状木製品	A	Ⅷ	5 SX040		11.2	11.1	1.7	柾目	ブナ科シイ属	51
152	156	890	98TY−5126	丸杭？	B1	Ⅷ	5 SX040？		145.1	3.0	3.4			
153	156	891	98TY−5128	丸杭	B1	Ⅷ	5 SX040		23.1	4.0	4.1	芯持ち丸木		
143	156	892	◎ 98TY−5117	弓？	A	Ⅷ	5 SX040		27.7	1.7	1.6	芯去り	ウルシ科ウルシ属	51
134	156	893	◎ 98TY−5108	有孔板材	A	Ⅷ	5 SX040		54.7	16	2.8	板目	クワ科クワ属	
149	157	894	98TY−5123	丸杭	B1	Ⅷ	5 SX040		16.7	4.0	4.0	芯去り		
150	157	895	◎ 98TY−5124	木簡様木片	B1	Ⅷ	5 SX040		15.7	2.6	1.1	板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
146	157	896	98TY−5120	加工木片	B1	Ⅷ	5 SX040		16.4	2.7	1.6	板目		
142	157	897	◎ 98TY−5116	建築材	A	Ⅷ	5 SX040		50.3	2.8	2.9		ニレ科エノキ属	51
144	157	898	98TY−5118	角材	B1	Ⅷ	5 SX040		39.7	6.0	2.9			
147	157	899	98TY−5121	加工木片	B1	Ⅷ	5 SX040		30.7	4.5	1.4	柾目		

No.	挿図番号	図番号	登録番号	器種	分類	出土地点			法量（cm）			木取り	樹種	写真図版
						地区	遺構	層位	全長	幅・径	厚さ			
151	158	900	98TY−5125	柄の一部	B1	Ⅷ	5 SX040		24.5	3.0	2.6	芯持ち丸木		
148	158	901	◎ 98TY−5122	有孔板材	B1	Ⅷ	5 SX040		24.6	5.0	1.1	板目	スギ科スギ属スギ	
138	158	902	◎ 98TY−5112	板材	A	Ⅷ	5 SX040		19.6	4.2	1.3	柾目	ブナ科シイ属	
139	158	903	◎ 98TY−5113	板材	A	Ⅷ	5 SX040		120.1	13.5	2.3	板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
140	158	904	◎ 98TY−5114	二次加工板目板	A	Ⅷ	5 SX040		33.2	11.6	3.0	板目	ブナ科シイ属	51
145	158	905	98TY−5119	板材	B1	Ⅷ	5 SX040		24.4	6.0	1.1	板目		
185	164	952	◎ 98TY−5279	鋤の取手	A	Ⅷ	5 SX051		8.8	8.5	2.3	柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	50
183	164	953	◎ 98TY−5277	鍬破片	A	Ⅷ	5 SX051		20.5	4.3	2.3	柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	50
201	164	954	98TY−5296	有孔木製品	B1	Ⅷ	5 SX051		12.9	2.6	2.4			
184	164	955	◎ 98TY−5278	天秤棒	A	Ⅷ	5 SX051		101.4	4.4	4.3	芯持ち丸木	ツバキ科ツバキ属	50
191	165	956	◎ 98TY−5285	板材	A	Ⅷ	5 SX051		21.1	10.1	1.0	板目	クスノキ科クスノキ属クスノキ	
197	165	957	98TY−5291	加工板材	B1	Ⅷ	5 SX051		13.2	4.7	1.4	板目		
202	165	958	98TY−5297	加工木片（木屑）	B1	Ⅷ	5 SX051		23.1	1.8	1.7			
200	165	959	98TY−5295	木片	B1	Ⅷ	5 SX051		13.7	4.5	3.2	芯持ち材		
198	165	960	98TY−5292	加工木片	B1	Ⅷ	5 SX051		13.3	2.7	2.5	芯持ち丸木		
196	165	961	98TY−5290	加工木片	B1	Ⅷ	5 SX051		11.5	2.2	1.0	柾目		
192	165	962	◎ 98TY−5286	板材	A	Ⅷ	5 SX051		7.2	4.8	1.0	板目	クスノキ科クスノキ属クスノキ	
195	165	963	98TY−5289	建築材	B1	Ⅷ	5 SX051		64.8	4.4	5.2	芯持ち丸木		
189	165	964	◎ 98TY−5283	板材	A	Ⅷ	5 SX051		29.7	5.3	1.2	板目	ブナ科シイ属	
188	165	965	◎ 98TY−5282	加工板材	A	Ⅷ	5 SX051		28.8	7.5	1.4	柾目	ブナ科シイ属	
190	165	966	98TY−5284	丸杭	A	Ⅷ	5 SX051		80.2	3.2	3.5	芯持ち丸木		
194	166	967	98TY−5288	割杭	B1	Ⅷ	5 SX051		26.6	4.7	4.1	柾目		
186	166	968	98TY−5280	丸杭	A	Ⅷ	5 SX051		79.5	3.5	3.4	芯持ち丸木		
193	166	969	98TY−5287	大型丸杭	A	Ⅷ	5 SX051		105.8	8.5	6.5	芯持ち丸木		
199	166	970	98TY−5293	丸杭	B1	Ⅷ	5 SX051		97.3	2.2	2.3	芯持ち丸木		
187	166	971	98TY−5281	建築材？	A	Ⅷ	5 SX051	E層	188.6	4.5	4.0	芯持ち丸木		
7	189	1068	◎ 97TY−4030	柱材	A	Ⅶ	4 SB034		24.5	11.0	10.0	芯持ち丸木	マキ科マキ属イヌマキ	
9	189	1069	97TY−4032	柱材	B1	Ⅶ	4 SB034		37.5	11.1	10.0	芯持ち丸木		
8	189	1070	◎ 97TY−4031	柱材	A	Ⅶ	4 SB034		52.5	13.0	16.3	芯持ち丸木	イチイ科カヤ属カヤ	
89	205	1171	◎ 97TY−4213	櫛	A	Ⅶ	4 SE017	上層	9.1	9.0	0.8	柾目	マンサク科イスノキ属イスノキ	55
91	205	1172	◎ 97TY−4215	蓋材	A	Ⅶ	4 SE017	上層	15.0	14.9	0.5		ブナ科シイ属	55
92	205	1173	◎ 97TY−4216	蓋材	A	Ⅶ	4 SE017	中下層	16.5	16.2	0.5		ブナ科シイ属	55
88	205	1174	◎ 97TY−4212	盤	A	Ⅶ	4 SE017		47.0	19.0	4.2		クスノキ科クスノキ属クスノキ	

No.	挿図番号	図番号	登録番号	器種	分類	出土地点			法量（cm）			木取り	樹種	写真図版
						地区	遺構	層位	全長	幅・径	厚さ			
93	205	1175	◎ 97TY−4217	容器	A	Ⅶ	4 SE017		20.0	5.7	2.7	柾目	クスノキ科クスノキ属クスノキ	
94	205	1176	◎ 97TY−4218	柄付木製品	A	Ⅶ	4 SE017	最下層	32.0	17.5	1.0		クスノキ科クスノキ属クスノキ	
95	205	1177	◎ 97TY−4234	建築部材	A	Ⅶ	4 SE017	最下層	7.3	7.3	5.2	柾目	クスノキ科タブノキ属タブノキ	
204	208	1185	98TY−5338	井戸枠	A	Ⅷ	5 SE059		42.3	30.6	5.0	板目取り	クスノキ科クスノキ属クスノキ	
116	210	1190	◎ 98TY−5378	木簡様木片	B1	Ⅷ	5 SE019	最下層	9.7	1.4	0.6	柾目	マツ科モミ属	
115	210	1191	◎ 98TY−5047	櫛	A	Ⅷ	5 SE019	最下層	7.0	7.0	0.8	柾目	マンサク科イスノキ属イスノキ	55
22	214	1232	◎ 97TY−4071	木簡様木製品	A	Ⅶ	4 SE043	中下層	4.5	2.2	4.0		マツ科モミ属	
30	214	1233	97TY−4079	木片	B1	Ⅶ	4 SE043	中下層	8.8	3.5	0.9	芯去り		
23	214	1234	◎ 97TY−4072	木簡様木製品	A	Ⅶ	4 SE043	中下層	8.3	3.2	5.0	柾目	マツ科モミ属	
29	214	1235	97TY−4078	木片	B1	Ⅶ	4 SE043	中下層	8.0	3.0	0.8	柾目		
27	214	1236	97TY−4076	木片	B1	Ⅶ	4 SE043	中下層	6.3	4.8	0.4	柾目		
31	214	1237	97TY−4080	木片	B1	Ⅶ	4 SE043		11.0	4.2	2.0	芯去り		
24	214	1238	97TY−4073	杭	A	Ⅶ	4 SE043	上層	31.0	2.2	1.5	芯持ち丸木		
19	214	1239	◎ 97TY−4068	紡錘車	A	Ⅶ	4 SE043	上層	4.0	4.7	4.0		マツ科マツ属［二葉松類］	
20	214	1240	◎ 97TY−4069	柄	A	Ⅶ	4 SE043	中下層	13.0	2.7	2.5		ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
28	214	1241	97TY−4077	木片	B1	Ⅶ	4 SE043	中下層	19.0	4.1	1.8	柾目		
26	214	1242	97TY−4075	木片	B1	Ⅶ	4 SE043	中下層	17.5	6.8	1.4	芯去り		
21	214	1243	◎ 97TY−4070	柄	A	Ⅶ	4 SE043	中下層	73.8	2.2	2.1		ニレ科ムクノキ属ムクノキ	
25	214	1244	97TY−4074	半裁丸杭	A	Ⅶ	4 SE043		42.5	4.6	2.5			
18	214	1245	◎ 97TY−4067	槽	A	Ⅶ	4 SE043	中下層	14.0	3.0	6.0		ツツジ科スノキ属シャシャンボ	55
154	240	1480	◎ 98TY−5204	糸巻？	A	Ⅷ	4 SX038		26.8	5.4	8.9		イチイ科カヤ属カヤ	55
16	241	1481	◎ 97TY−4046	建築材	A	Ⅶ	4 SX038		48.0	9.2	6.2		ツツジ科スノキ属シャシャンボ	
17	241	1482	97TY−4274	杭	B1	Ⅶ	4 SX038		53.4	3.5	4.0			
11	241	1483	◎ 97TY−4041	建築材	A	Ⅶ	4 SX038		95.5	9.1	4.6		ブナ科シイ属	
10	241	1484	◎ 97TY−4040	盤転用工作台	A	Ⅶ	4 SX038		48.5	15.5	2.4		クスノキ科クスノキ属クスノキ	
15	242	1485	◎ 97TY−4045	建築材	A	Ⅶ	4 SX038		84.5	10.0	9.4		マツ科マツ属［二葉松類］	
14	242	1486	◎ 97TY−4044	建築材	A	Ⅶ	4 SX038		55.0	6.0	5.0		ツバキ科サカキ属サカキ	
13	242	1487	97TY−4043	鞍型の木製品	B1	Ⅶ	4 SX038		32.7	8.6	2.4			
12	242	1488	97TY−4042	建築材の先端部分	B1	Ⅶ	4 SX038		13.0	5.1	5.0			
62	245	1489	◎ 97TY−4149	コマ形木製品	A	Ⅶ	4 SX056		6.0	5.4	5.2	芯持ち丸木	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ	50
63	245	1490	◎ 97TY−4151	又鍬	A	Ⅶ	4 SX056		63.0	3.0	3.2		ブナ科コナラ属アカガシ亜属	50
65	245	1491	◎ 97TY−4153	板材	A	Ⅶ	4 SX056		101.0	10.8	2.5	板目	ムクロジ科ムクロジ属ムクロジ	50
64	245	1492	◎ 97TY−4152	板材	A	Ⅶ	4 SX056		73.0	10.7	2.0	板目	ブナ科シイ属	

No.	挿図番号	図番号	登録番号	器種	分類	出土地点			法量（cm）			木取り	樹種	写真図版
						地区	遺構	層位	全長	幅・径	厚さ			
72	245	1493	97TY−4157	丸杭	A	Ⅶ	4 SX056		60.0	3.4	3.5	芯持ち丸木		
76	246	1494	97TY−4161	半裁丸杭	A	Ⅶ	4 SX056		34.5	4.1	1.9			
70	246	1495	97TY−4155	丸杭	A	Ⅶ	4 SX056		34.0	2.5	2.5	芯持ち丸木		
69	246	1496	97TY−4154	杭	A	Ⅶ	4 SX056		28.5	3.4	3.0	芯持ち丸木		
71	246	1497	97TY−4156	丸杭	A	Ⅶ	4 SX056		63.0	3.0	3.2	芯持ち丸木		
75	246	1498	97TY−4160	丸杭	A	Ⅶ	4 SX056		50.5	6.5	6.3	芯持ち丸木		
68	247	1499	97TY−4150	杭	A	Ⅶ	4 SX056		60.5	4.4	4.3	芯持ち丸木		
74	247	1500	97TY−4159	丸杭	A	Ⅶ	4 SX056		67.0	6.5	7.8	芯持ち丸木		
73	247	1501	97TY−4158	丸杭	A	Ⅶ	4 SX056		53.3	6.1	6.0	芯持ち丸木		
126	273	1723	◎ 98TY−5073	建築材	A	Ⅷ	5 SX023		12.0	4.7	2.1	柾目	マキ科マキ属イヌマキ	
132	273	1724	98TY−5080	丸杭	B1	Ⅷ	5 SX023		14.8	3.5	3.4			
118	273	1725	◎ 98TY−5065	曲げ物部材？	A	Ⅷ	5 SX023		10.3	3.6	0.5	柾目	イチイ科カヤ属カヤ	
119	273	1726	98TY−5066	丸杭	A	Ⅷ	5 SX023		11.9	2.3	2.4	芯持ち丸木		
117	273	1727	◎ 98TY−5064	研磨器？	A	Ⅷ	5 SX023		9.1	4.1	2.1	板目	マツ科マツ属［二葉松類］	56
130	273	1728	98TY−5078	加工木片	B1	Ⅷ	5 SX023		6.2	3.8	3.8	芯去り		
120	273	1729	◎ 98TY−5067	織具部材？	A	Ⅷ	5 SX023		12.8	1.4	0.8	板目取り	スギ科スギ属スギ	56
125	273	1730	98TY−5072	木片	A	Ⅷ	5 SX023		2.9	0.8	0.9	板目		
127	273	1731	98TY−5074	丸杭	A	Ⅷ	5 SX023		54.3	4.5	4.0	芯持ち丸木		
131	273	1732	98TY−5079	丸杭	B1	Ⅷ	5 SX023		39.5	4.7	4.4	芯持ち丸木		
128	273	1733	98TY−5075	丸杭	A	Ⅷ	5 SX023		44.5	3.5	3.6	芯持ち丸木		
129	274	1734	98TY−5076	加工杭？	A	Ⅷ	5 SX023		29.3	3.1	1.4	柾目		
123	274	1735	98TY−5070	丸杭	A	Ⅷ	5 SX023		21.7	4.1	4.2	芯持ち丸木		
122	274	1736	98TY−5069	丸杭	A	Ⅷ	5 SX023		17.9	3.3	3.3	芯持ち丸木		
121	274	1737	98TY−5068	丸杭	A	Ⅷ	5 SX023		84.3	7.5	8.6	芯持ち丸木		
133	274	1738	98TY−5081	丸杭	B1	Ⅷ	5 SX023		46.3	2.9	3.5			
124	274	1739	98TY−5071	丸杭	A	Ⅷ	5 SX023		39.0	4.2	3.5	芯持ち丸木		
103	278	1753	98TY−5011	板材	A	Ⅷ	5 SK016		25.3	17.6	2.0	板目		
102	278	1754	98TY−5010	曲物底板転用品	A	Ⅷ	5 SK016		23.7	23.7	0.8	柾目		
110	278	1755	98TY−5022	板材	A	Ⅷ	5 SK016	2層	21.0	20.9	0.9	板目		
107	278	1756	98TY−5017	脚付円形盤	A	Ⅷ	5 SK016		33.8	10.4	5.6	縦木取り		
106	279	1757	98TY−5016	下駄	A	Ⅷ	5 SK016		17.4	7.6	3.2			
100	279	1758	98TY−5006	下駄	A	Ⅷ	5 SK016		18.6	6.7	1.3			
112	279	1759	◎ 98TY−5024	漆塗椀	A	Ⅷ	5 SK016		9.2	7.4	7.6		ブナ科ブナ属	

No.	挿図番号	図番号	登録番号	器種	分類	出土地点			法量（cm）			木取り	樹種	写真図版
						地区	遺構	層位	全長	幅・径	厚さ			
114	279	1760	98TY－5381	曲物の柄杓の部材	A	Ⅷ	5 SK016	2層	7.4	2.1	1.0			
113	279	1761	98TY－5032	曲物の柄杓の部材	A	Ⅷ	5 SK016		6.0	2.1	10.0			
98	279	1762	98TY－5004	横槌	A	Ⅷ	5 SK016		25.0	14.0	14.1	芯持ち材		
99	279	1763	98TY－5005	蓋	A	Ⅷ	5 SK016		21.0	20.7	1.8	柾目		
109	280	1764	98TY－5020	脚部（三宝等の）	A	Ⅷ	5 SK016	2層	20.2	2.0	0.9			
101	280	1765	98TY－5008	板状木製品	A	Ⅷ	5 SK016		19.7	19.6	0.8	板目		
108	280	1766	98TY－5018	蓋板	A	Ⅷ	5 SK016	2層	13.0	12.8	0.8	柾目		
105	280	1767	98TY－5013	竪杵	A	Ⅷ	5 SK016		114.6	10.0	10.7	芯持ち材		
104	280	1768	98TY－5012	編み台の脚	A	Ⅷ	5 SK016		35.2	9.5	3.6	芯持ち丸木		
111	280	1769	98TY－5023	紡錘車	A	Ⅷ	5 SK016	2層	7.8	5.3	5.3	紡茎，芯持ち丸木		
276	319	2018	99TY－6136	木製柄付鉄器	A	X	6 SX504		19.5	2.7	1.3			
262	332	2123	99TY－6109	板材	B1	X	6 SX504		17.5	4.5	1.0	板目		
271	332	2124	99TY－6116	容器の部材	B1	X	6 SX507		22.5	2.3	0.5			
268	332	2125	99TY－6115	板材	A	X	6 SX506		28.2	4.4	0.5	板目		
265	333	2126	99TY－6112	容器の蓋	A	X	6 SX505		11.6	11.2	0.6	板目		
266	333	2127	99TY－6113	底板	A	X	6 SX505		11.7	12.4	1.1	柾目		
264	333	2128	99TY－6111	下駄（有孔木製品）	A	X	6 SX505		17.7	5.9	1.2	柾目		
267	333	2129	99TY－6114	板材	B1	X	6 SX505		41.8	10.9	0.8	板目		
263	333	2130	99TY－6110	桶の一部？	A	X	6 SX505		26.3	9.2	1.6	柾目		
269	334	2131	◎ 99TY－6132	漆椀	A	X	6 SX506		11.3	5.9	6.0	横木取り	ブナ科ブナ属	
272	334	2132	◎ 99TY－6133	漆椀	A	X	6 SX507		11.8	11.8	2.8	横木取り	ミズキ科ミズキ属？	
261	334	2133	99TY－6085	椀蓋	A	X	6 SD501		11.6	9.2	1.2			
275	334	2134	99TY－6135	漆椀	A	X	不明		－	4.5	－			
270	334	2135	99TY－6134	漆椀	A	X	6 SX506		0.0	6.5	0.0	横木取り		
78	200	2155	◎ 97TY－4190	せいろ組み井戸枠垂木(東側)	A	Ⅶ	4 SE017		98.0	－	6.0		ブナ科シイ属	54
79	200	2156	◎ 97TY－4191	せいろ組み井戸枠垂木(南側)	A	Ⅶ	4 SE017		100.0	－	7.0		ブナ科シイ属	54
80	200	2157	◎ 97TY－4192	せいろ組み井戸枠垂木(北側)	A	Ⅶ	4 SE017		87.0	－	3.0		ブナ科シイ属	54
81	200	2158	◎ 97TY－4193	せいろ組み井戸枠垂木(西側)	A	Ⅶ	4 SE017		96.0	－	5.0		ブナ科シイ属	54
82	200	2159	◎ 97TY－4194	せいろ組み井戸枠板材(西側2)	A	Ⅶ	4 SE017		80.0	－	2.0		ブナ科シイ属	
83	200	2160	◎ 97TY－4195	せいろ組み井戸枠板材(西側3)	A	Ⅶ	4 SE017		97.0	－	3.0		ブナ科シイ属	54
84	200	2161	◎ 97TY－4196	せいろ組み井戸枠板材(東側2)	A	Ⅶ	4 SE017		134.0	－	0.8		ブナ科シイ属	
85	200	2162	◎ 97TY－4197	せいろ組み井戸枠板材(東側3)	A	Ⅶ	4 SE017		99.0	－	2.7		ブナ科シイ属	54
86	200	2163	◎ 97TY－4198	せいろ組み井戸枠板材(北側2)	A	Ⅶ	4 SE017		95.0	－	3.0		ブナ科シイ属	54

No.	挿図番号	図番号	登録番号	器種	分類	出土地点			法量（cm）			木取り	樹種	写真図版
						地区	遺構	層位	全長	幅・径	厚さ			
87	200	2164	◎ 97TY－4199	せいろ組み井戸枠板材(南側2)	A	Ⅶ	4 SE017		88.0	－	1.5		ブナ科シイ属	54
90	205	1168、1169、1170	◎ 97TY－4214	櫛	A	Ⅶ	4 SE017		2.7 2.6 1.6	2.6 2.5 1.7	0.6 0.7 0.7	柾目	マンサク科イスノキ属イスノキ	55
205	208	1182、1183、1184	98TY－5340	棒状工具	A	Ⅷ	5 SE059		4.0 7.8 18.3	1.2 1.3 1.1	1.9 1.2 0.9	芯去り		
77			97TY－4166	杭	B1	Ⅶ	X－26G		42.0	4.4	4.3	柾目		
96	200	2217	◎ 97TY－4283	くりぬき井戸枠本体部分	A	Ⅶ	4 SE017		76.0	50.0	－	芯抜き丸木	クスノキ科クスノキ属クスノキ	54
97			98TY－5001	下駄	A	Ⅷ	5 SK004		7.8	6.6	3.0			
203			◎ 98TY－5337	井戸枠	A	Ⅷ	5 SE059		19.5	18.2	5.0	板目取り	クスノキ科クスノキ属クスノキ	
273			99TY－6117	大型杭	A	X	h－38G		92.4	4.7	5.0	芯持ち丸木		
32			97TY－4081	板状木片	B2	Ⅶ	SE－43		127.0	18.0		芯去り		
33			97TY－4082	木片	B2	Ⅶ	SE－43		26.5	7.0	0.0	芯去り		
34			97TY－4083	木片	B2	Ⅶ	SE－43		0.0	0.0	0.0	芯去り		
35			97TY－4085	加工木片	B2	Ⅶ	SE－43		0.0	0.0	0.0	芯去り		

表7　古銭観察表

挿図番号	番号	実測番号	出土地点			種別	銭貨名	種類	背文	材質	法量（mm・g）				初鋳年	備考	写真図版
			地区	遺構	層位						外径	穿径	厚さ	重量			
337	2146	岩543	Ⅶ	X−28G	−	渡来銭	治平元寶	−	無	銅	23	6	1.2	1.3	1064年		57
337	2147	岩544	Ⅶ	−	表土剥ぎ中	渡来銭	熙寧元寶	篆書	無	銅	25	6	1.4	3.1	1068年		57
337	2148	マ062	Ⅷ	5 SD012	埋土一括③	渡来銭	元祐通寶	篆書	無	銅	25	7	1.4	2.5	1086年		57
337	2149	マ065	Ⅷ	a−32G	砂層中	渡来銭	紹聖元寶	真	無	銅	23	6	1.4	2.1	1094年		57
337	2150	マ064	Ⅷ	b−31G	4b層一括（砂層）	渡来銭	大定通寶	−	無	銅	26	5.5	1.3	3.6	1178年		57
337	2151	マ063	Ⅷ	e−32G	4層	琉球の貨幣	大世通寶	−	無	銅	24	5	1.3	2.8	1454年頃		57
337	2152	マ055	Ⅷ	z−31G	4層一括	新寛永銭	寛永通寶	伏見手	無	銅	24	6	1.2	2.8	1736年～	江戸時代	57
337	2153	マ001	X−1	6 SD017	⑧	新寛永銭	寛永通寶	秋田小字（隆宝）	無	銅	24	6	1.0	1.5	1738年		57
337	2154	マ002	X−1	−	表採⑩	新寛永銭	寛永通寶	−	無	銅	24	6	1.1	2.7	1740年頃		57
337	2155	岩003	X−2	6 SX506	撹乱中	新寛永銭	寛永通寶	−	無	銅	−	−	−	2.6	−		57
		マ056	Ⅷ	5 SX041	撹乱土坑	小型50銭黄銅貨	五十銭	−	有	銅：600～700、亜鉛：400～300	19	−	1.5	2.2	1948年	昭和	
		−	Ⅷ	b−32G	L−03層	不明	不明	−	−	不明	−	−	−	−	−	小片	

写 真 図 版

Ｘ－１区　j－40グリッドトレンチ内出土状況

Ｘ－１区　j－40グリッド6SX049出土状況

Ｘ－１区　6SX049遺物出土状況（西から）

Ｘ－１区　6SX049内杭列検出状況

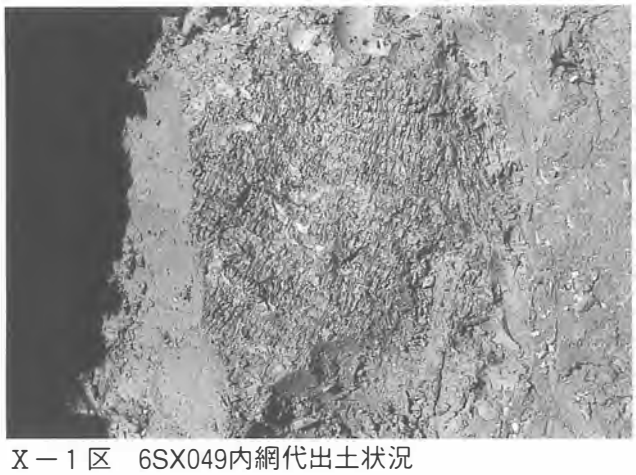
Ｘ－１区　6SX054検出状況（南から）

Ｘ－１区　6SX054矢板列除去後の
樋状木製品出土状況

図版１　調査Ｘ－１区　遺構・遺物出土状況

Ｘ－１区　6SX049トレンチ内木製品出土状況

Ｘ－１区　6SX049内遺物出土状況



Ｘ－１区　6SX049内網代出土状況

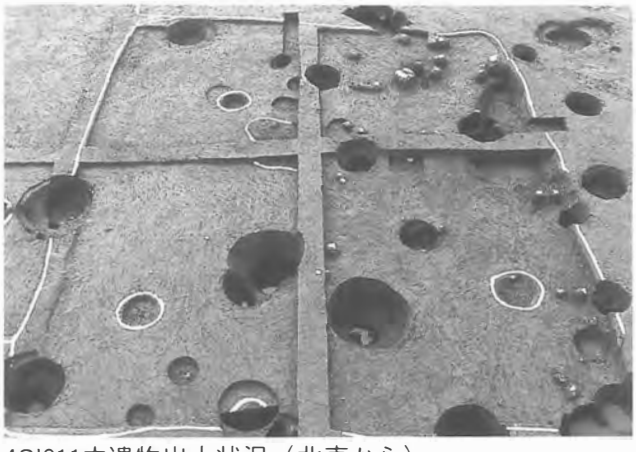
Ｘ－１区　j－40グリッド遺物出土状況

Ｘ－１区　j－40グリッド内磨製石鏃出土状況

Ｘ－１区　h－40グリッド内石庖丁出土状況

図版２　調査Ｘ－１区　遺物出土状況

4SI007完掘状況



4SI011内遺物出土状況（北東から）

4SI013完掘状況（南東から）

4SI029完掘状況（北東から）

5SI029内遺物出土状況（南南東から）

5SI029内遺物出土状況

図版 3　調査Ⅶ・Ⅷ区住居跡検出状況・遺物出土状況

5SI029完掘状況（北から）

5SI035完掘状況（南から）

5SI039完掘状況（北から）

4SE005検出状況（東から）

4SE005内遺物出土状況（東から）

4SE005内出土土器（頸部に縄痕跡）

図版 4　調査Ⅷ区住居跡完掘状況・井戸跡検出・遺物出土状況

4SE042内遺物出土状況

5SE060検出状況

5SE060上層遺物出土状況（南から）

5SE060内遺物出土状況（南西から）

5SE060完掘状況

5SE064完掘状況（南から）

図版 5　調査Ⅶ・Ⅷ区井戸跡検出・遺物出土状況・完掘状況

Ｘ－１区　6SE053検出状況（東から）

Ｘ－１区　6SE053内遺物出土状況（東から）

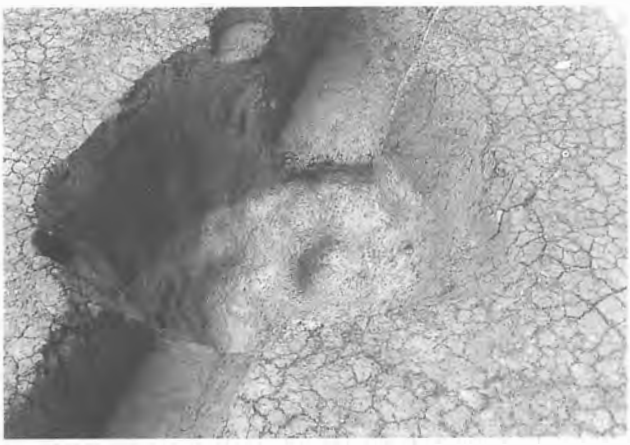
4SK027完掘状況

5SK052完掘状況（北から）

5SK053内遺物出土状況（南西から）

5SK053半裁状況

図版６　調査Ⅶ・Ⅷ・Ｘ－１区井戸跡・土坑検出・遺物出土状況・完掘状況



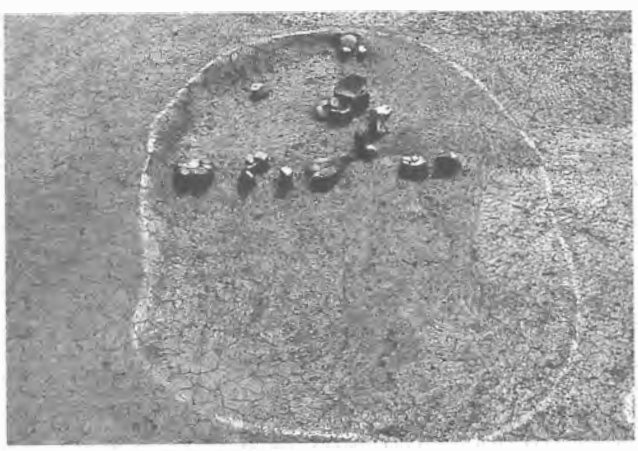
5SK061完掘状況（北から）

5SK063内遺物出土状況（北から）

4SK004土層断面（南西から）

4SK015完掘状況（南から）

4SK006・4SI016遺物出土状況（北東から）



4SK009内遺物出土状況

図版７　調査Ⅶ・Ⅷ区土坑遺物出土状況・完掘状況

4SX049完掘状況（東から）

4SX049内木製品出土状況（北から）

4SX049内遺物出土状況（南から）

4SX049内炭化物検出状況（東から）

4SK059内杭列出土状況

5SX040内礫出土状況

図版 8　調査Ⅶ・Ⅷ区大溝状遺構遺物出土状況・完掘状況

5SX040内遺物出土状況（東から）

5SX040内礫出土状況（東から）

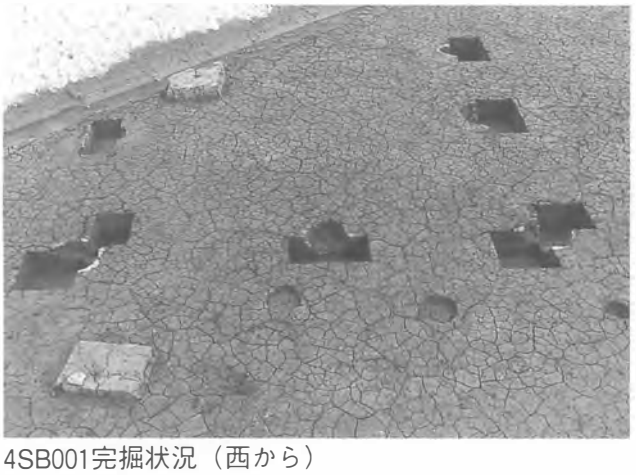
5SX051内遺物出土状況（北西から）

5SX040完掘状況（北から）

水田遺構完掘状況（東から）

5SK050完掘状況（北から）

図版 9　調査Ⅷ区大溝状遺構遺物出土状況・完掘状況
溝遺構・連結土坑完掘状況



4SB001完掘状況（西から）

4SB001柱跡半裁状況

4SB002完掘状況（西から）

4SB031完掘状況（南から）

4SB034完掘状況

4SB034柱跡内円盤状板材出土状況（北から）

図版10　掘立柱建物跡完掘状況・柱検出状況、円盤状板材出土状況

4SB003完掘状況（東から）

5SB018完掘状況

4SI012内円面硯出土状況

4SI012内鋤先出土状況

4SI016完掘状況

5SI031完掘状況（南から）

図版11　掘立柱建物跡完掘状況、竪穴住居跡遺物出土状況・完掘状況

4SE017検出状況（南から）

4SE017井戸側出土状況（南西から）

4SE017井戸側・井戸枠出土状況

4SE017井戸枠土器出土状況（西から）

4SE017井戸側部分（北西から）

4SE017垂木検出状況（南から）

図版12　調査Ⅶ区蒸篭形井戸跡検出状況・井戸枠・遺物出土状況

4SE017井戸枠出土状況（西から）

4SE017垂木検出状況（南から）

4SE017最下層遺物出土状況（南から）

4SE017完掘状況（南から）

5SE059井戸枠出土状況（南東から）

5SE059完掘状況（北西から）

図版13　調査Ⅶ区井形井戸跡井戸枠・部材検出状況、遺物出土状況
井戸跡遺物出土状況・完掘状況

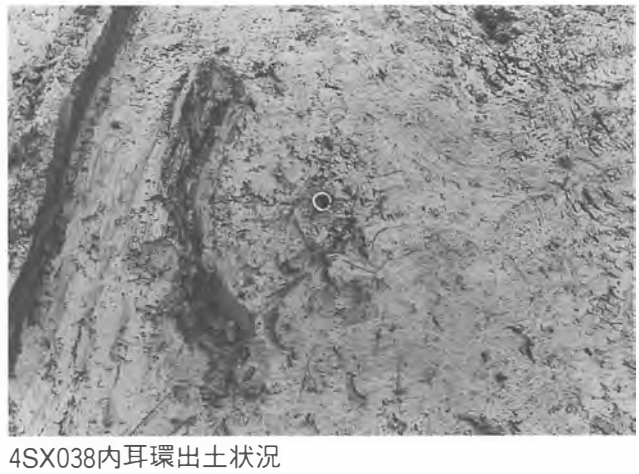
4SX038内遺物出土状況（西から）

4SE043完掘状況（北から）

4SX038内土器出土状況

4SX038内土器出土状況

4SX038内木製品出土状況



4SX038内耳環出土状況

図版14　不明遺構（4SX038）検出・遺物出土状況、井戸跡遺物出土状況（２）

4SX056（堰状遺構）出土状況

5SE024完掘状況（南から）

6SX050・051・052（道路状遺構）完掘状況（北から）

4SD050完掘状況（東から）

5SX023（池状遺構）検出状況（東から）

5SX023完掘状況（東から）

図版15　井戸跡、道路状遺構、池状遺構等完掘状況

X区全景（南から）

X－2区　6SX503内遺物出土状況（東から）

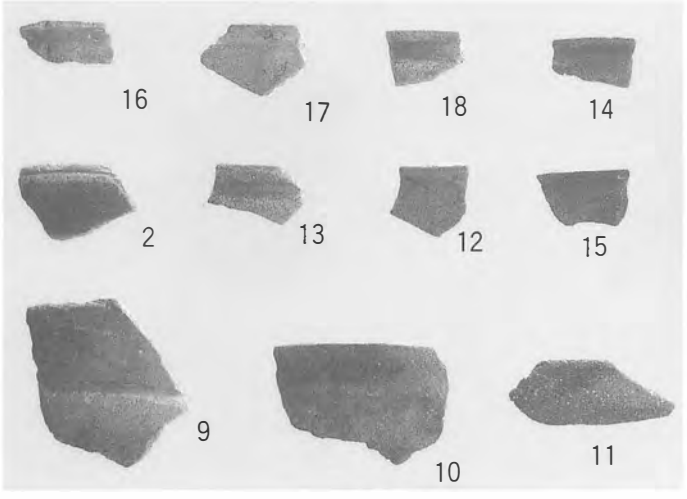
X－2区　6SX506内遺物出土状況（北東から）

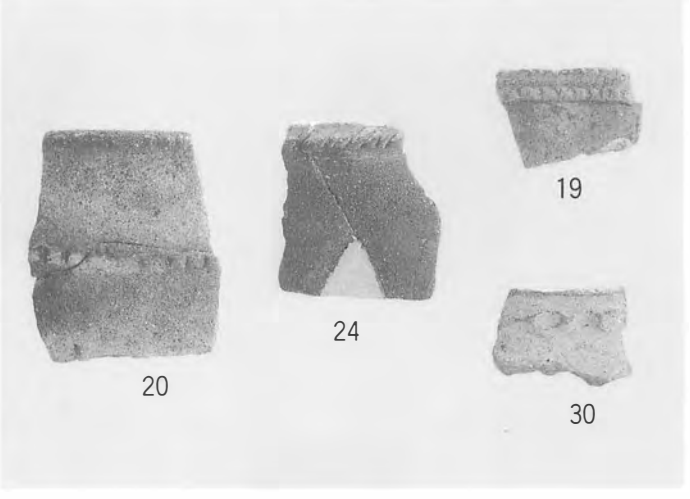
X－2区　6SX504内石積出土状況（東から）

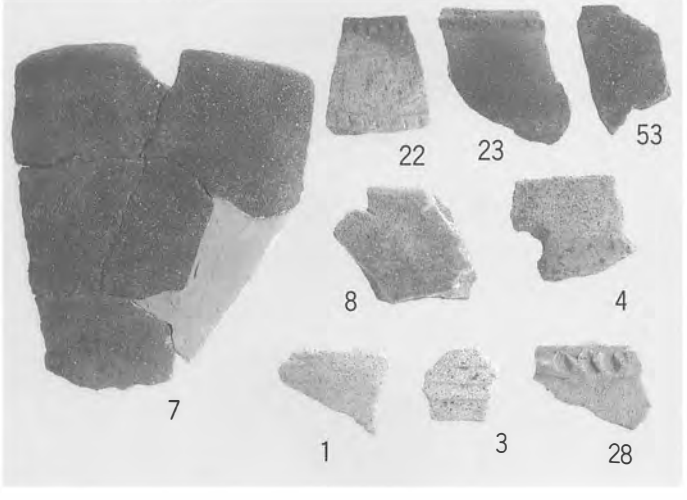
X－2区　6SX504内遺物状況（北から）

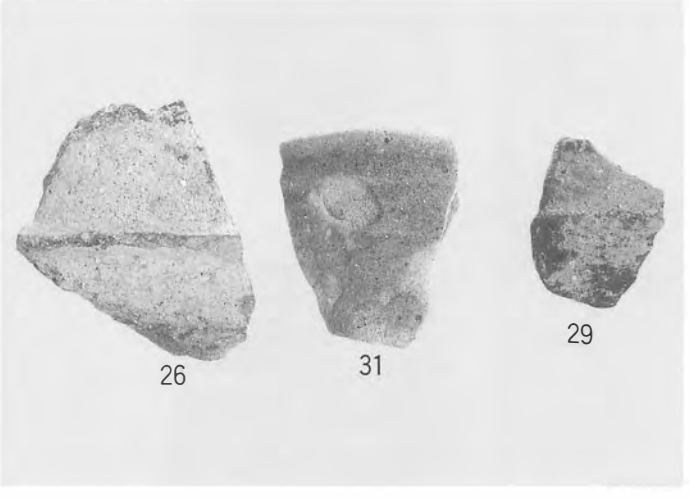
X－2区　6SX505・506・507完掘状況（東から）

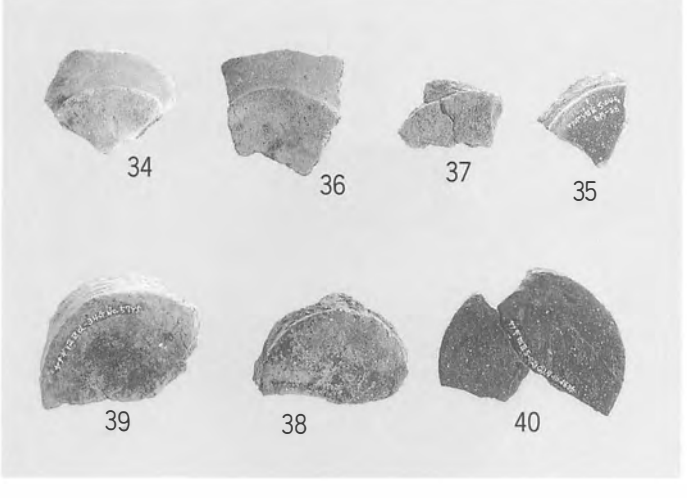
図版16　調査X－2区　遺構検出状況・遺物出土状況・完掘状況











図版17　縄文時代晩期～弥生時代中期土器

979

170

517

973

994

981

384

985

987

図版18　弥生時代後期～古墳時代初期土器

213

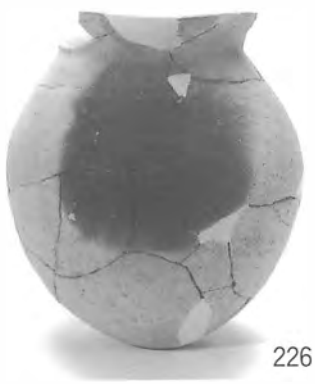
212

215

211

210

311


226

326

218

290

図版19　古墳時代前期土器（１）甕

313

314

304

309

303

306

341

369

367

図版20　古墳時代前期土器（２）甕

368

402

406

410

409

428

372

413

図版21　古墳時代前期土器（３）甕

586

481

479

522

588

556

452

453

451

図版22　古墳時代前期土器（４）甕

459

465

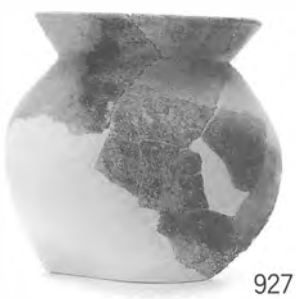
474

798

809

808

840



927

443

649

図版23　古墳時代前期土器（５）甕

988

650

930

618

235

274

361

325

322

図版24　古墳時代前期土器（６）甕・壺

320

324

347

416

824

399

397

図版25　古墳時代前期土器（７）壺

498

497

496

468

934

817

664

図版26　古墳時代前期土器（８）壺

504

568

567

518

830

832

676

675

400

1027

352

図版27　古墳時代前期土器（９）高坏・器台

571

1034

1034

246

253

243

250

338

340

333

329

334

336

図版28　古墳時代前期土器（10）鉢

438

702

2191

472

859

938

862

537

328

582

836

882

581

1028

1061

図版29　古墳時代前期土器（11）鉢・坏

285

299

348

350

349

1205

408

442

718

715

721

713

716

728

717

727

843

845

851

940

図版30　古墳時代前期土器（12）小型壺

847

846

860

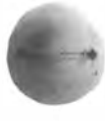
842

444

941

365

541


732

354

872

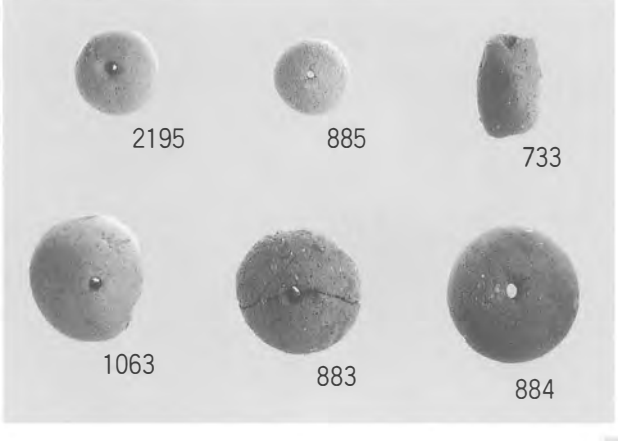
880

図版31　古墳時代前期土器（13）小型壺・土製模造品・甑

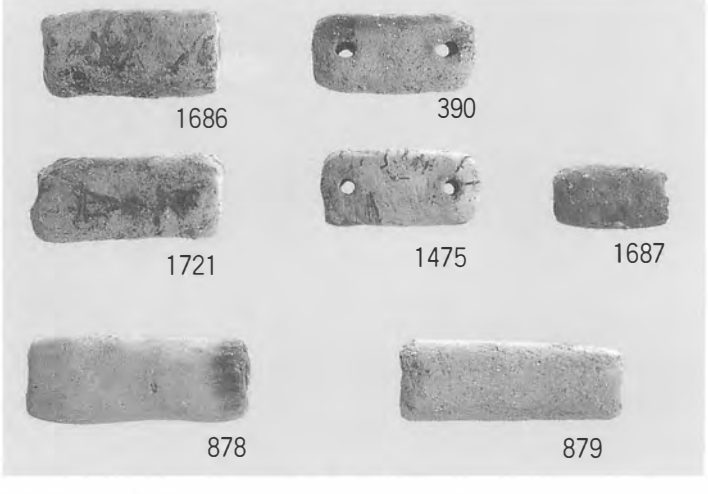
土製模造品

2192

584 2193 2194 1064


2195 885 733 1063 883 884

877 1065


1686 390 1721 1475 1687 878 879

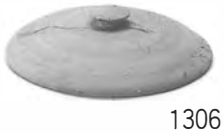
図版32　古墳時代前期土製模造品・土製勾玉・土玉・砥石・土錘

1276

1268

1252

1112


1306

1294

1293

1303

1513

1320

1520

1529

1521

1522

1511

1272

図版33　古墳時代終末～古代須恵器（１）蓋

1110

1261

1264

1193

1321

1287

1323

1286

1311

1277

1292

1299

1301

1288

1279

1274

1282

1280

図版34　古墳時代終末～古代須恵器（２）蓋

1510

1284

1275

1509

1270

1271

1289

1136

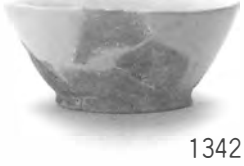
1203

1202

1333

1556

1555


1342

1247

1655

図版35　古墳時代終末～古代須恵器（３）蓋・高台付坏・埦

1324

1337

1075

1198

1537

1194

1296

1302

1265

1343

1246

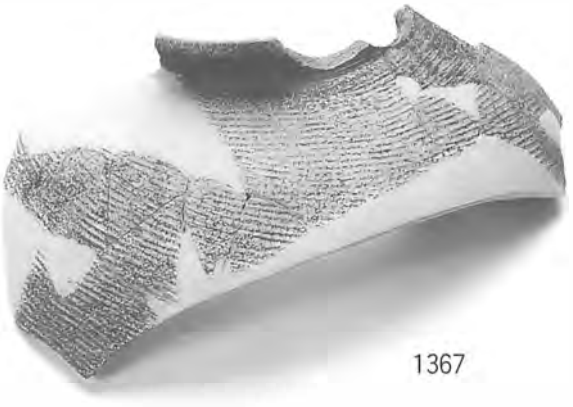
1582

1619

1352

1614

図版36　古墳時代終末～古代須恵器（４）高台付坏・坏・高坏



1367

1260

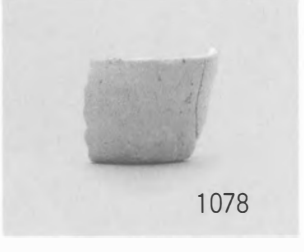
1368

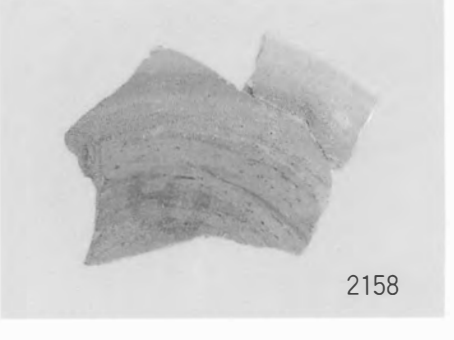
1262

1383

1604

図版37　古墳時代終末～古代須恵器（５）壺・鉢類





図版38　古墳時代終末～古代須恵器（６）堤瓶・小型壺・緑釉陶器・越州窯青磁・硯・墨書等

1401

1403

695

1410

1254

1221

1424

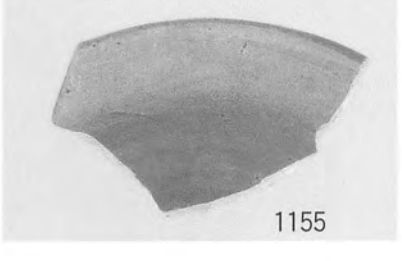
1645

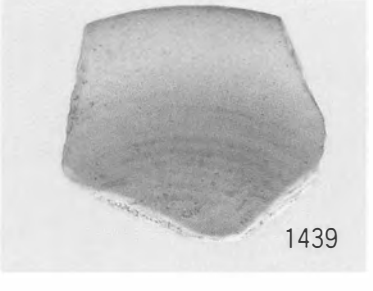
1219

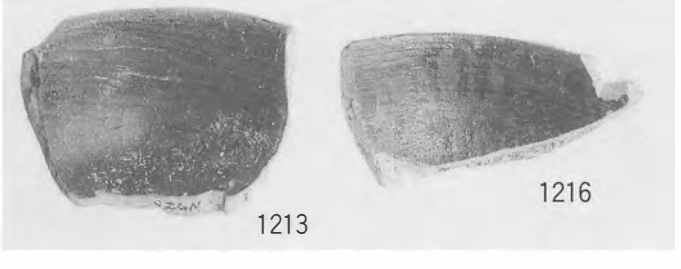
1210

1425

1423


1155


1439


1213

1216

図版39　古墳時代末～古代土師器（１）坏

1227

1443

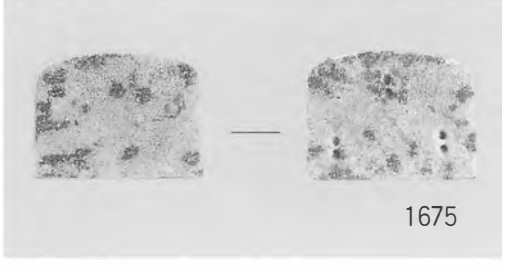
1444

1230

1152

1465

2168



1675

2165

1385

1159

図版40　古墳時代末～古代土師器（２）坏・盤・甕・墨書・石帯・金環

2048

2045

2008

2059

2063

2074

2004

2035

2070

2095

2033

2197

図版41　中世～近世土師器坏・瓦質土器

2088

2011

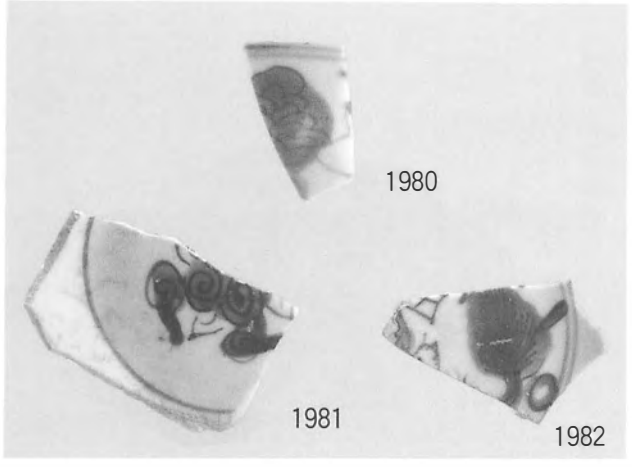
2025

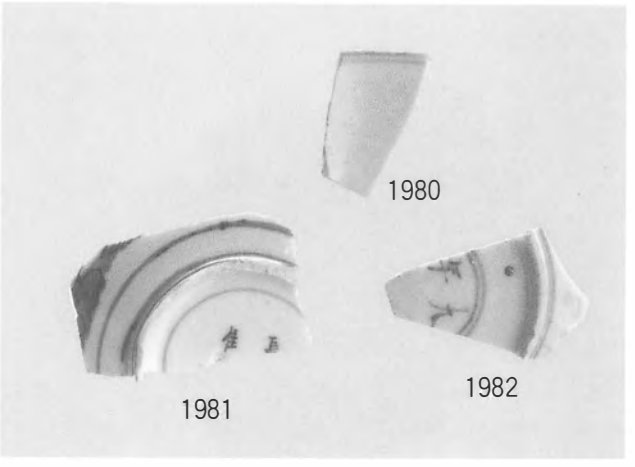
2021

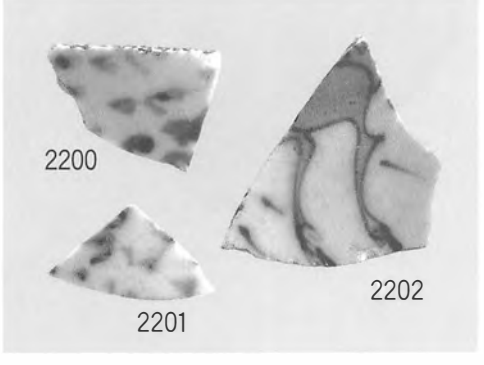
2027

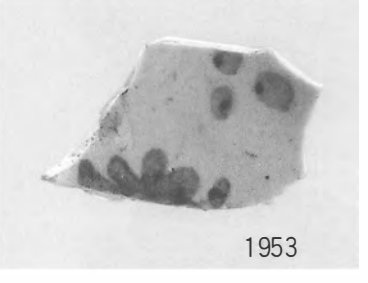
2099

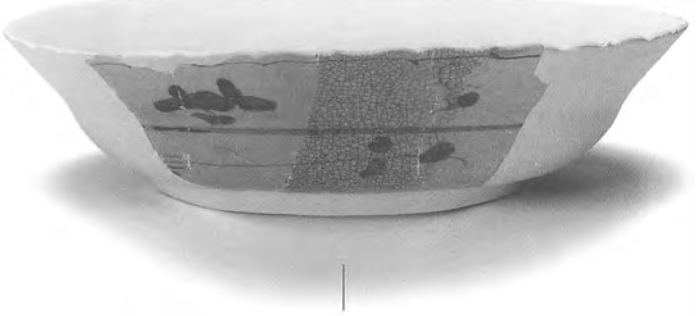
図版42　中世～近世瓦質土器　捏鉢・火鉢・大甕









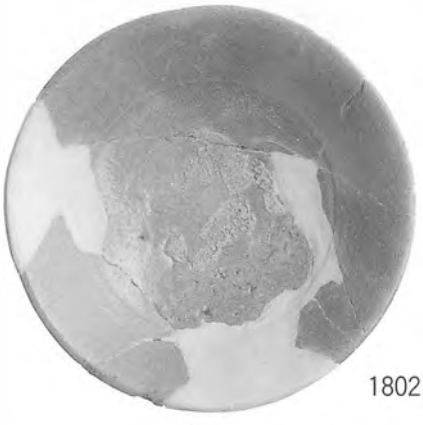


図版43　輸入磁器　皿・鉢・瓶・壺

1801

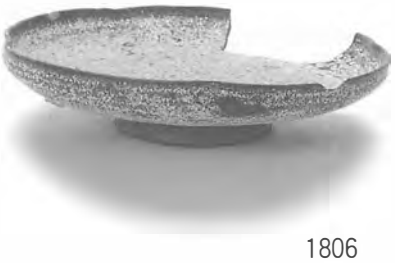
1813

1821



1802

1809



1806

図版44　近世陶器（１）皿

1826

1857

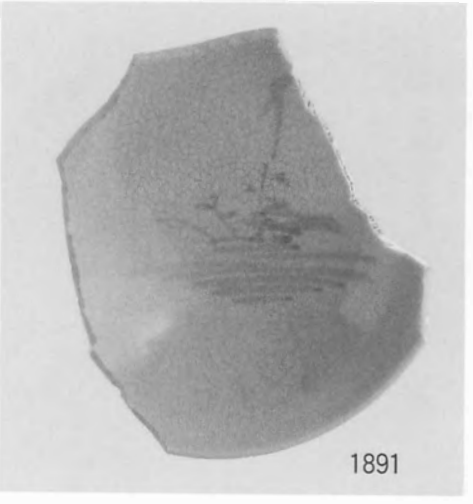
1871

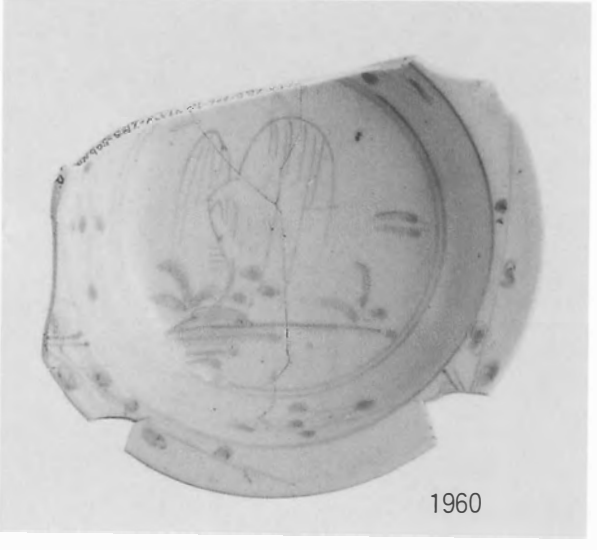
1861

1843

1859

図版45　近世陶器（２）鉢・香炉・瓶・擂鉢





図版46　近世陶器（３）近世磁器（１）

1898

1909

1910

1935

1896

1905

2115

2118

2119

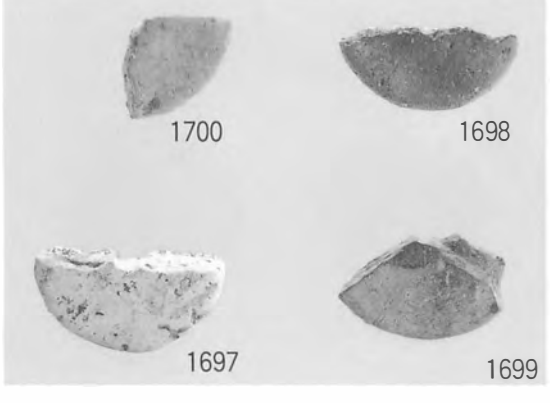
2203

2110

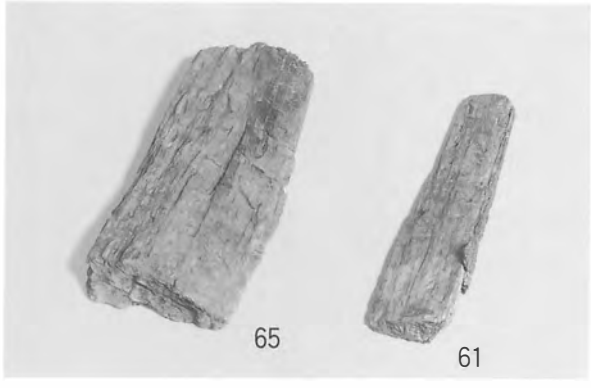
1701

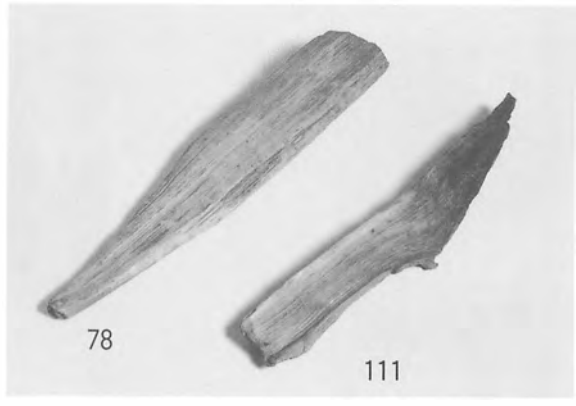
2109

図版47　近世磁器（２）土製人形・土製品類

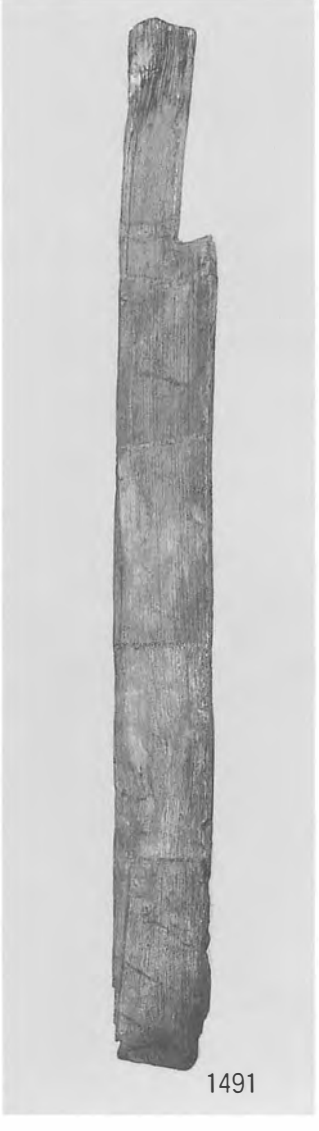


図版48　土製人形・土製品類

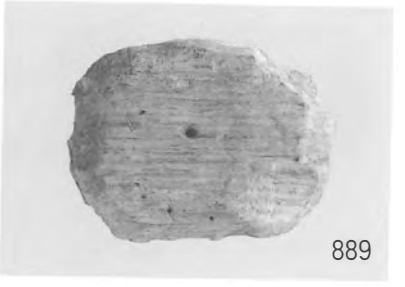




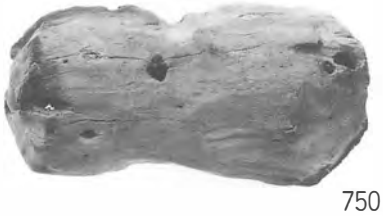
図版49　弥生時代前期木製品・網代



図版50　古墳時代前期木製品（１）



図版51　古墳時代前期木製品（２）



750

749

748

752

751

743

735

742

図版52　古墳時代前期木製品（３）

747

744

762

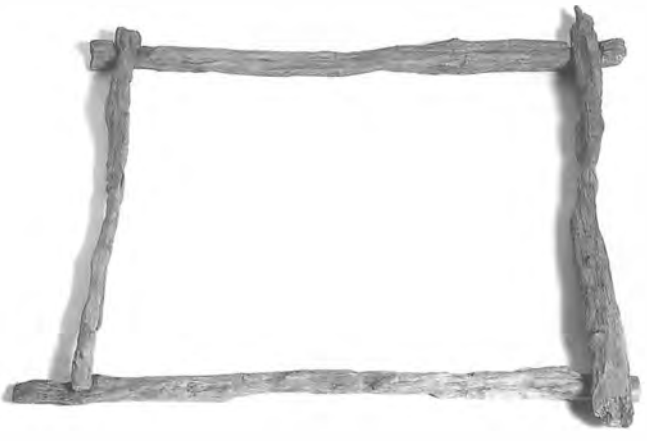
754

741

736

図版53　古墳時代前期木製品（４）

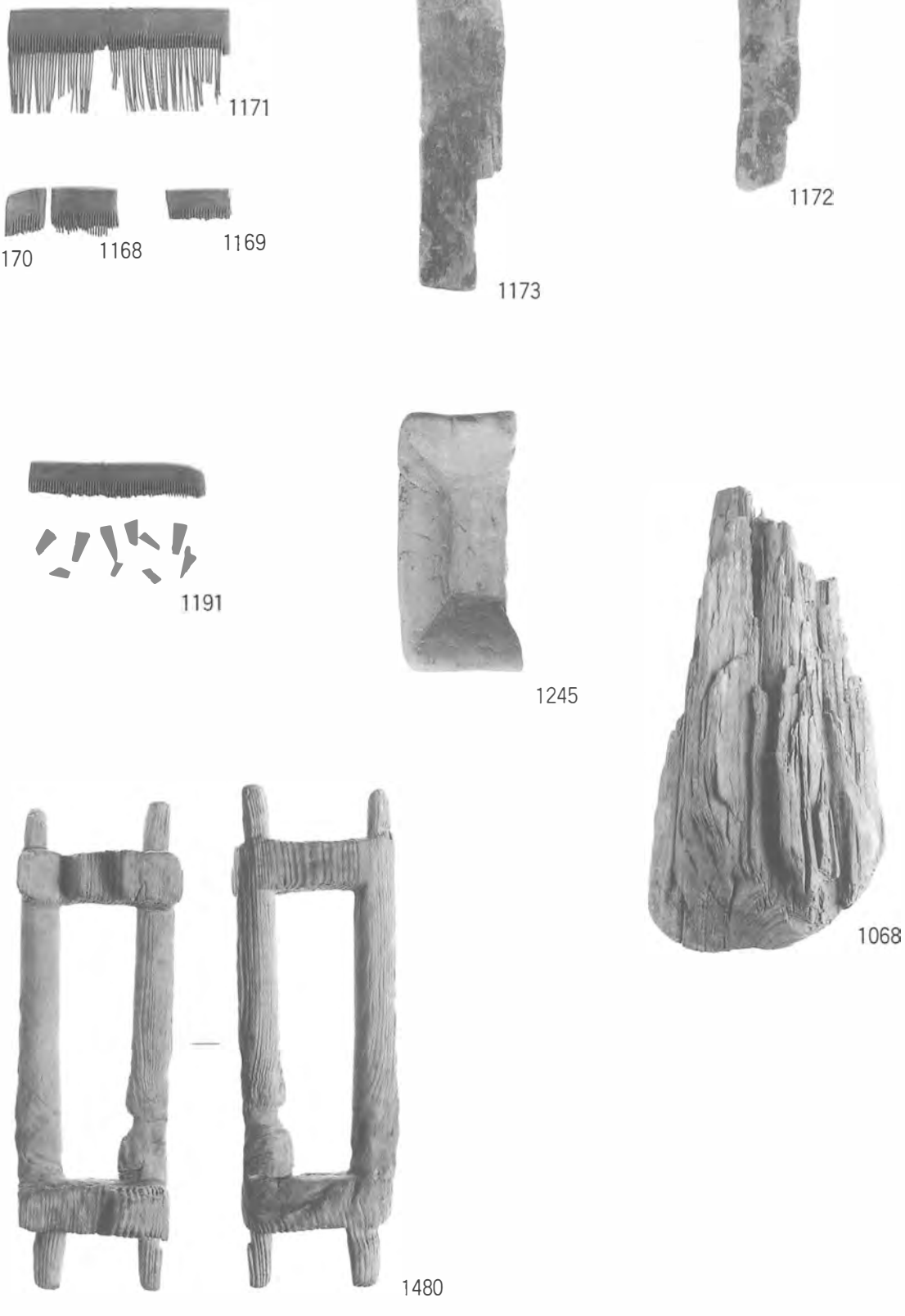
井戸側一部



垂木

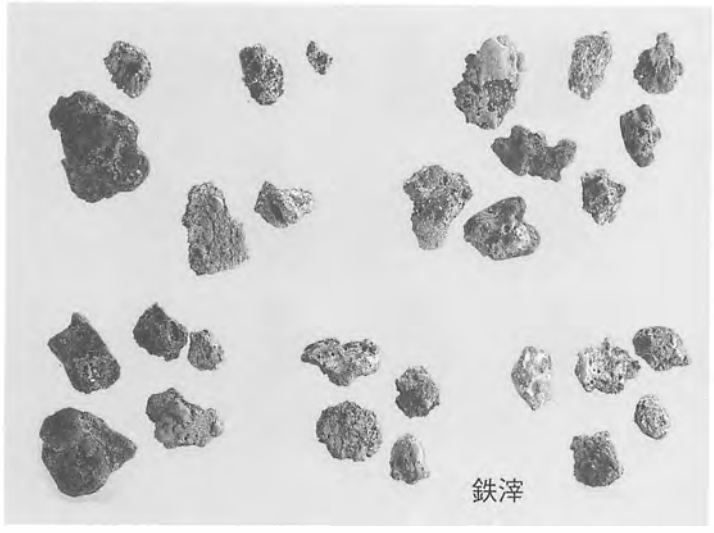
井戸枠

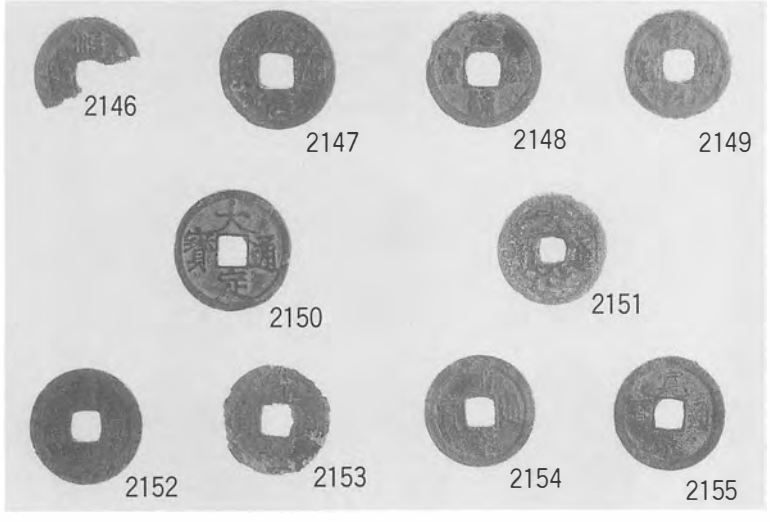
図版54　古代井戸枠・垂木・井戸側

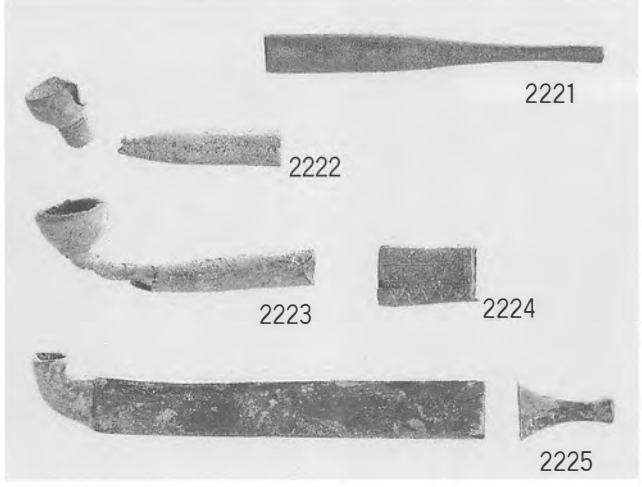


図版55　古代井戸出土木製品・古代不明遺構出土木製品・古代掘立柱建物柱

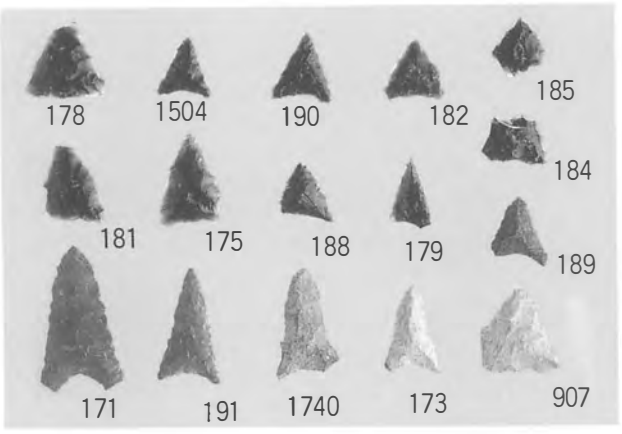
図版56　中世・近世木製品、ウミガメ甲羅

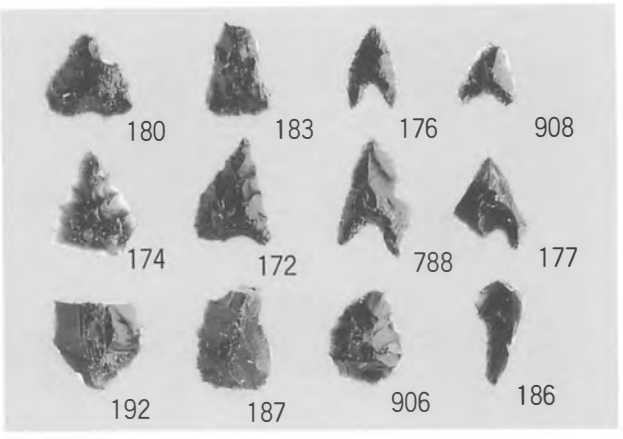


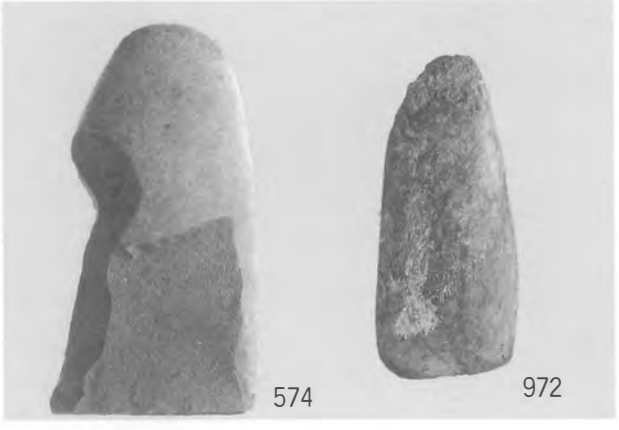


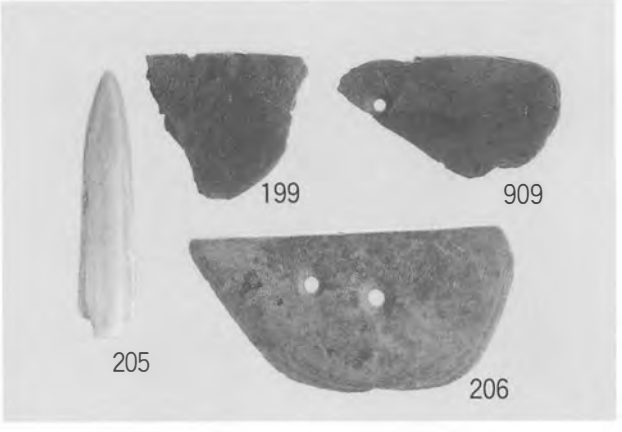


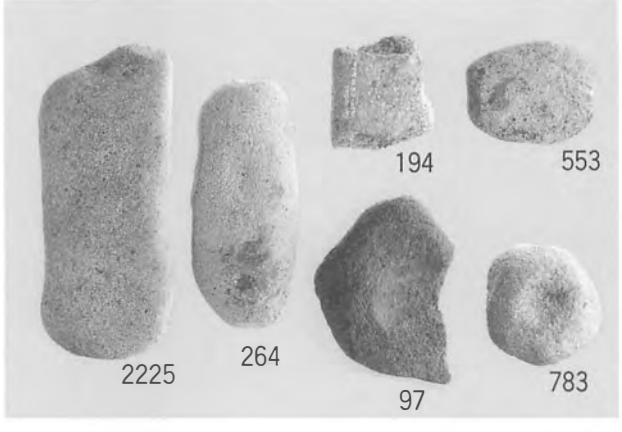
図版57　鉄滓・鉄器（刀子・鋤先）・貨銭・小刀・キセル

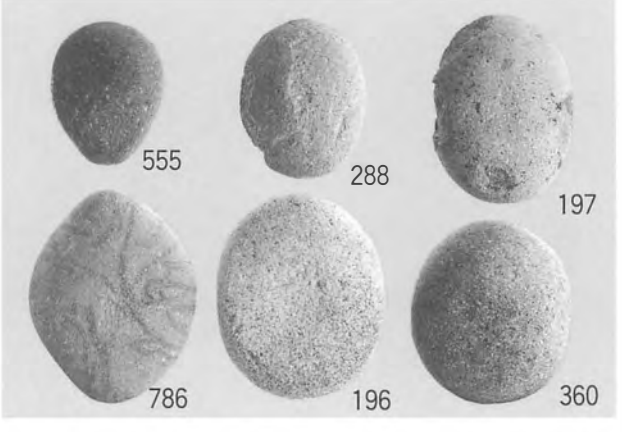




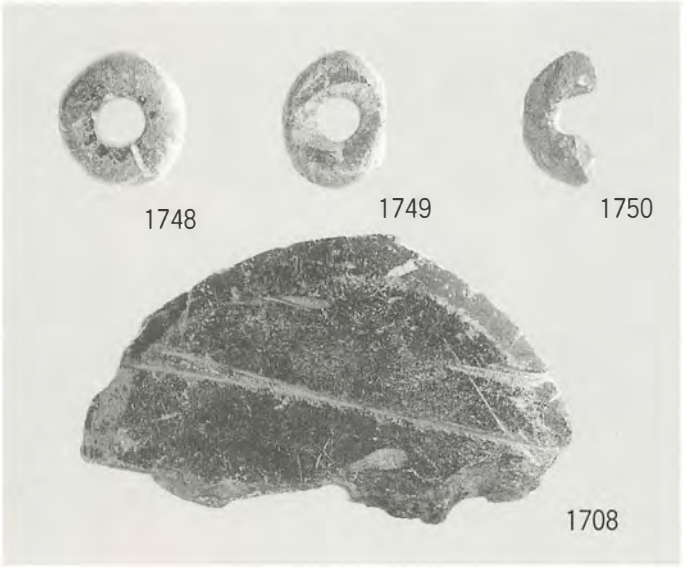


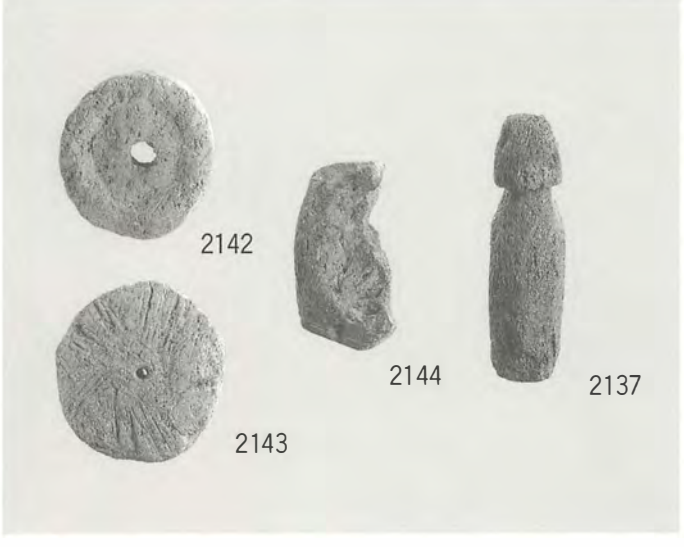






図版58　出土石器　石鏃・石斧・磨石・凹石・磨製石鏃・石庖丁・台石





図版59　石製品　滑石製有孔石製品・石鍋・軽石製模造品・石臼

報 告 書 抄 録

フリガナ	ヤナギマチイセキ　ニ
書名	柳町遺跡Ⅱ
副書名	一般国道208号玉名バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告　第218集
編著者	坂田　和弘
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862－8609　熊本県熊本市水前寺６丁目18番１号
発行年月日	2004年３月31日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ヤナギマチイセキ 柳町遺跡	タマナシ 玉名市 カワサキ 河崎 アザ 字フケ・ タナカ　オ 田中・尾 バタケ 畑	206	482	32° 56’ 12”	130° 34’ 21”	（第４次） 19970714～ 19980331	3,372㎡	一般国道208号玉名バイパス改築事業
				32° 56’ 11”	130° 34’ 22”	（第５次） 19980512～ 19990417	3,300㎡	
				32° 56’ 08”	130° 34’ 25”	（第６次） 19990712～ 20000414	2,700㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柳町遺跡	集落 水田 流路	縄文 弥生 古墳 古代 中世 近世	住居跡　10 掘立柱建物跡　8 大溝状遺構　3 土坑　30	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器 瓦質土器、陶磁器 木製品、石器 鏡片、石帯	突帯文土器 木製品 内行花文鏡 井籠組井戸 墨挺

あ と が き

この報告書の完成にあたり、本調査から報告書の上梓にいたるまで多くの方々の協力とお世話によって、ここまできたということに対して、感謝の念でいっぱいです。本調査の現場では、暑さ、寒さの中ひたすら発掘調査に従事して下さった多くの方々、整理作業では、水洗い、注記、接合、実測、トレースなどの報告書作成の作業にあたられた方々、これらの方々の働きなしにはこの報告書は、完成には至りませんでした。改めて下記の方々に御礼を申し上げます。

現場作業員

荒木冨士子、伊子和来子、伊藤和子、井上チヨ子、植田夏代、岡田キヨ子、岡田トモエ、小山ナツミ、小山奈美、城戸シエ子、五郎丸芙智子、境エミ子、坂崎クニエ、坂崎征子、品川四番男、品川タケノ、磧守タネ子、財部久美子、田上鶴子、田上房子、寺田哲也、寺田トミ子、寺田弥市、寺田八千代、中本フタミ、西川美代子、西川テルヨ、西村幸雄、野田カシ子、畠田トメノ、畠田トヨミ、福田ツヨ子、前川八重子、松島克也、三嶋邦子、源民代、森田繁美、山内恵美子、山崎末子、吉本妙子、吉本タマエ、米岡小雪、畠田アヤ子、松本博幸、吉田政博、大倉千寿、松本憲一、木村剛、吉本喜吉、中川毅人、鍛治真理子、中川藍、田中良一、国武勝代、宇野信子、上杉政光、広瀬弘邦、松島誠、森川絹代、西村ミヨ子、坂崎和仁、植田孝子、甲斐しきみ、戸上弘明、荒木隆宏、植田正美、末永崇、藤江望、新里亮人、石川まどか、亀井菜津子

整理作業員

上野眞由美、黒田良子、村上由佳、藤本久美、一柳朱里、藤井ゆき、村上桂子、山本美枝、西島久美、林正信、平木智子、平川江里子、岩下恵美子、古閑知子、益田久子、川井田久子、戸田紀美子、境美恵子、陶山千鶴子、塩田喜美子、徳永みどり

熊本県文化財調査報告　第218集

柳町遺跡 Ⅱ

一般国道208号玉名バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年３月31日

編集・発行　熊本県教育委員会
熊本市水前寺６丁目18－１
〒862－8609　☎096－383－1111

印刷・製本　株式会社　サンカラー
熊本市御領２丁目19－13
〒862－0935　☎096－380－8131

15 教委 教文
② 0 0 8

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 218 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：柳町遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/